

酒々井町伊篠白幡遺跡

1986

社団法人 千葉県農業開発公社
財団法人 千葉県文化財センター

し す い まち い じの しら はた い せき
酒々井町伊篠白幡遺跡

— 本文編 —

1986

社団法人 千葉県農業開発公社

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県北部に位置する下総台地は、原始・古代の人々が生活した跡である遺跡が数多く所在し、また、現在でも緑や河川などの自然環境に恵まれた地域でもあります。特に印旛沼周辺は、近年の詳細な遺跡分布調査等により、原始・古代の各時期にわたって数多くの遺跡が濃密に分布していることが知られてきた地域であります。

現在、この地域は首都圏のベッドタウンとして、また、県工業団地や鉄道、国・県道などの交通網の整備に伴い各所で開発が進められていますが、農業地帯としても畑作等が県内で最も盛んに行われています。今回、新東京国際空港の建設に伴い、予定地内移転農家のための農業用代替地の造成が計画されました。

このため、千葉県教育委員会では、代替地予定地内に所在する埋蔵文化財について社団法人千葉県農業開発公社をはじめ関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることになり、当センターが調査を実施してまいりました。

このたび、昭和58年度から昭和60年度にかけて調査・整理された成果を「酒々井町伊篠白幡遺跡」として報告書を刊行する運びとなりました。

本書には、先土器時代・縄文時代・古墳時代・歴史時代と各時期にわたる遺構・遺物を多数収録していますが、中でも縄文時代後期掘之内期の集落の検出、歴史時代の坏形土器に「檜前」と墨書された土器の出土は特筆できるものであります。これらの遺構・遺物は原始・古代の下総台地に生活していた人々を解明するうえで貴重な資料となることは言うまでもありません。

この報告書が、学術的な資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史に対する理解を深めるために、広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から報告書刊行までいろいろ御指導をいただいた千葉県教育委員会をはじめ、社団法人千葉県農業開発公社、酒々井町教育委員会、地元関係諸機関各位の御協力に御礼を申し上げますとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和61年3月

財団法人 千葉県文化財センター

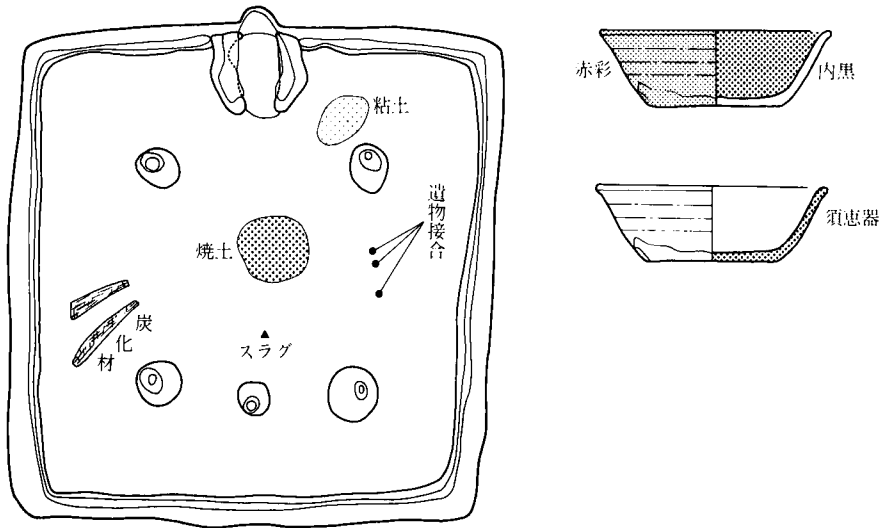
理事長 山本孝也

例 言

1. 本書は印旛郡酒々井町伊篠地区の空港代替地の農地造成事業の実施に伴い事前調査した発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、伊篠白幡遺跡^{いじのしらはた}A・B・C・Dの各地点であるが、各地点は一遺跡として把握できるものである。地籍は下記の通りである。
 - A地点 印旛郡酒々井町伊篠字八木野343他
 - B地点 印旛郡酒々井町伊篠字野田330—8他
 - C地点 印旛郡酒々井町上岩橋新掘作2,266—1他
 - D地点 印旛郡酒々井町伊篠字越徳148—1他
3. 発掘調査の実施は、社団法人千葉県農業開発公社の依頼により、千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行った。
4. 発掘調査は昭和58年8月1日から昭和59年2月29日にわたって実施された。
5. 整理作業は昭和59年4月1日から昭和60年12月31日にわたって実施された。
6. 発掘調査・整理作業の各年度の担当者は序章に記してある。
7. 本書の作成および執筆は、調査部長鈴木道之助、部長補佐岡川宏道の助言をもとに、班長高橋賢一の指導を受け三浦和信が編集した。分担執筆は下記の通りである。
 - 高橋賢一 第5章3節
 - 三浦和信 序章、第1章第1・2節、第3節2の一部と3、第2～4章、第5章第1節3・第2節
 - 宮城孝之 第1章第3節2、第5章第1節1・4
 - 田島 新 第1章第3節1、第5章第1節2
8. 本書に使用した写真は、遺構写真を各調査員が、遺物写真を杉原豊氏に委託した。
9. 石材鑑定は当センター職員澤野弘の協力を得て高橋賢一が行った。
10. 伊篠白幡遺跡A地点の鉙物分析は、川鉄テクノロジー株式会社総合検査・分析センターに委託したものであり、分析報告を掲載した。
11. 報告書作成にあたっては下記の諸氏から御教示を得た。(アイウエオ順)
 - 大原正義、平川南、藤原妃敏、馬目順一、三沢正善、森尚登、綿田弘実
12. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育委員会をはじめ、社団法人千葉県農業開発公社、酒々井町教育委員会、地元関係諸機関各位の御協力をいただいた。
13. 伊篠白幡遺跡の遺跡コードは、行政管理庁指定統計コード酒々井町(322)、千葉県文化財センター遺跡コード(002)を使用し、322-002とした。
14. 遺物実測にあたっては、昭和59年度の調査部第4班の調査員各位の協力があつた。

凡 例

1. 本書中において使用している遺構番号は、現地作業に際して用いた番号を用いており、欠番が生じている。また、伊篠白幡遺跡B・C地点の遺構番号は整理作業の過程において改訂しているため、実物の検索時には注意していただきたい。
2. 遺構の縮尺は、性格、形状によって1/40、1/60、1/80、1/120、1/300、遺物の縮尺は2/3、1/2、1/3、1/5になっているが、その旨を各図に表示してある。
3. 方位はすべて座標北である。
4. 方位は、竪穴住居跡の場合、カマドを有するものについてはカマドを通る住居跡の中軸線をなす角度で示した。掘立柱建物跡の主軸方位は、座標北に対する棟の桁行方向のなす角度で示した。
5. 遺構図中における遺物番号は、遺物実測図、拓本図、図版の番号と一致する。
6. 観察表の()は口径、底径が推定径、器高は現存高を、長さ、幅、厚さは現存を、重量は残存量を表わす。
7. 縄文式土器の群別名称は統一して使用している。群別の基準等は第1章において記述されている。
8. 遺構検出状況図・遺物実測図において使用している記号は下記のようにになっている。



本文目次

序	文
例	言
凡	例
目	次

序章

第1節	発掘調査に至る経過	3
第2節	遺跡の立地と環境	3
第3節	発掘調査の経過	6
第4節	発掘調査の方法	8
第1章	伊篠白幡遺跡A地点の調査	13
第1節	遺跡の位置及び立地	13
第2節	遺跡の概要及び調査の方法	13
第3節	検出された遺構と遺物	14
1.	先土器時代	14
2.	縄文時代	30
3.	古墳・歴史時代	320
第4節	小結	599
第2章	伊篠白幡遺跡B地点の調査	603
第1節	遺跡の位置及び立地	607
第2節	遺跡の概要及び調査の方法	607
第3節	検出された遺構と遺物	608
1.	歴史時代	608
第4節	小結	630
第3章	伊篠白幡遺跡C地点の調査	633
第1節	遺跡の位置及び立地	635
第2節	遺跡の概要及び調査の方法	635

第3節 検出された遺構と遺物	635
1. 歴史時代	635
第4節 小 結	645
第4章 伊篠白幡遺跡D地点の調査	647
第1節 遺跡の位置及び立地	651
第2節 遺跡の概要及び調査の方法	651
第3節 検出された遺構と遺物	651
1. 歴史時代	651
第4節 小 結	655
第5章 調査の成果	657
第1節 縄文時代	659
第2節 古墳・歴史時代	712
第3節 結 語	720

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡 (1/50,000)	4
第2図	伊篠白幡遺跡A地点全測図 (1/1,000)	11
第3図	先土器時代石器群分布図 (1/40)	15
第4図	先土器時代第1ブロック石器群実測図 (2/3) No.1	16
第5図	先土器時代第1ブロック石器群実測図 (2/3) No.2	17
第6図	先土器時代第1ブロック石器群実測図 (2/3) No.3	18
第7図	母岩別資料分布図 (1/40)	21
第8図	剥片別概念分布図 (1/40)	22
第9図	接合資料実測図 (1/2) No.1	23
第10図	接合資料実測図 (1/2) No.2	24
第11図	先土器時代礫群分布図 (1/40)	26
第12図	剥片別長さ・幅累積度数グラフ及び長幅比グラフ	27
第13図	表面採集及びグリッド単独出土石器 (2/3)	28
第14図	第7号住居跡実測図 (1/60)	30
第15図	第7号住居跡出土土器実測図 (1/5)	31
第16図	第7号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No.1	32
第17図	第7号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No.2	33
第18図	第9号住居跡実測図 (1/60)	36
第19図	第9号住居跡出土土器実測図 (1/5)	37
第20図	第9号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No.1	38
第21図	第9号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No.2	39
第22図	第9号住居跡出土石器実測図 (1/3)	40
第23図	第10号住居跡実測図 (1/60)	42
第24図	第10号住居跡出土土器実測図 (1/5)	43
第25図	第10号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No.1	44
第26図	第10号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No.2	45
第27図	第18号住居跡実測図 (1/60)	47
第28図	第18号住居跡出土土器実測図 (1/5)	48
第29図	第18号住居跡出土土器拓影図 (1/3)	49
第30図	第18号住居跡出土石器実測図 (1/3)	50

第31图	第20A号住居跡実测图 (1/60)	53
第32图	第20A号住居跡出土土器実测图 (1/5) No. 1	54
第33图	第20A号住居跡出土土器実测图 (1/5) No. 2	55
第34图	第20A号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 1	56
第35图	第20A号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 2	57
第36图	第20A号住居跡出土土器実测图 (1/3)	59
第37图	第20B号住居跡・第5号土坛実测图 (1/60)	61
第38图	第20B号住居跡出土土器実测图 (1/5)	62
第39图	第20B号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 1	63
第40图	第20B号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 2	64
第41图	第20B号住居跡出土土器実测图 (1/3)	65
第42图	第34号住居跡実测图 (1/60)	66
第43图	第34号住居跡出土土器実测图 (1/5)	67
第44图	第34号住居跡出土土器拓影图 (1/3)	68
第45图	第34号住居跡出土土器実测图 (1/3)	69
第46图	第36号住居跡実测图 (1/60)	71
第47图	第36号住居跡出土土器実测图 (1/5)	72
第48图	第36号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 1	73
第49图	第36号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 2	74
第50图	第36号住居跡出土土器実测图 (1/3)	75
第51图	第57号住居跡実测图 (1/60)	76
第52图	第57号住居跡出土土器実测图 (1/5)	76
第53图	第57号住居跡出土土器拓影图 (1/3)	77
第54图	第86号住居跡実测图 (1/60)	80
第55图	第86号住居跡出土土器実测图 (1/5)	81
第56图	第87A号住居跡実测图 (1/60)	82
第57图	第87A号住居跡出土土器実测图 (1/5)	83
第58图	第87A号住居跡出土土器拓影图 (1/3)	83
第59图	第87A号住居跡出土土器実测图 (1/3)	84
第60图	第87B・C号住居跡実测图 (1/60)	86
第61图	第87B・C号住居跡出土土器実测图 (1/5)	87
第62图	第87B・C号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 1	88
第63图	第87B・C号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 2	89

第64图	第87B·C号住居跡出土石器実測図 (1/3)	89
第65图	第105号住居跡実測図 (1/60)	91
第66图	第105号住居跡出土土器実測図 (1/5)	92
第67图	第105号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 1	93
第68图	第105号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 2	94
第69图	第112号住居跡実測図 (1/60)	97
第70图	第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 1	98
第71图	第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 2	99
第72图	第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 3	100
第73图	第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 4	101
第74图	第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 5	102
第75图	第112号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 1	103
第76图	第112号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 2	104
第77图	第140号住居跡実測図 (1/60)	109
第78图	第140号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 1	111
第79图	第140号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 2	112
第80图	第140号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 3	113
第81图	第140号住居跡出土土器実測図 (1/3) No. 4	114
第82图	第140号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 1	115
第83图	第140号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 2	116
第84图	第140号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 3	117
第85图	第140号住居跡出土石器実測図 (1/3)	117
第86图	第152号住居跡実測図 (1/60)	121
第87图	第152号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 1	123
第88图	第152号住居跡出土土器実測図 (1/5) No. 2	124
第89图	第152号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 1	125
第90图	第152号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 2	126
第91图	第152号住居跡出土石器実測図 (1/3)	128
第92图	第153号住居跡実測図 (1/60)	131
第93图	第153号住居跡出土土器実測図 (1/5)	131
第94图	第153号住居跡出土土器拓影図 (1/3)	132
第95图	第159号住居跡実測図 (1/60)	134
第96图	第159号住居跡出土土器実測図 (1/5)	135

第 97 図	第159号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 1	136
第 98 図	第159号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No. 2	137
第 99 図	第76・124・127・130~132号埋甕実測図 (1/20)	140
第100図	第76・124・127・130号埋甕土器実測図 (1/5)	143
第101図	第130~132号埋甕土器実測図 (1/5)	144
第102図	第16号土坑実測図 (1/60)	146
第103図	第35・55・56・59A・59B (焼土跡) 号土坑実測図 (1/40)	148
第104図	第61・69 (焼土跡)・113・150・151・158号土坑実測図 (1/40)	149
第105図	第5号土坑出土土器実測図 (1/5)	154
第106図	第35・41・55・56・59B・158号土坑出土土器実測図 (1/5)	155
第107図	第16号土坑出土土器拓影図 (1/3)	156
第108図	第41号土坑出土土器拓影図 (1/3)	156
第109図	第55号土坑出土土器拓影図 (1/3)	157
第110図	第56号土坑出土土器拓影図 (1/3)	157
第111図	第59B号土坑出土土器拓影図 (1/3)	158
第112図	第113号土坑出土土器拓影図 (1/3)	158
第113図	第158号土坑出土土器拓影図 (1/3)	159
第114図	第35号土坑出土石器実測図 (1/3)	159
第115図	グリッド出土第I群土器拓影図 (1/3)	163
第116図	グリッド出土第II群土器拓影図 (1/3)	165
第117図	グリッド出土第II群土器拓影図 (1/3)	166
第118図	グリッド出土第II群土器拓影図 (1/3)	167
第119図	グリッド出土第III群土器拓影図 (1/3)	170
第120図	グリッド出土第III群土器拓影図 (1/3)	171
第121図	グリッド出土第III群土器拓影図 (1/3)	172
第122図	第IV群土器器形模式図	175
第123図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	201
第124図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	202
第125図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	203
第126図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	204
第127図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	205
第128図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	206
第129図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	207

第130図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	208
第131図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	209
第132図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	210
第133図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	211
第134図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	212
第135図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	213
第136図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	214
第137図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	215
第138図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	216
第139図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	217
第140図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	218
第141図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	219
第142図	グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)	220
第143図	グリッド出土第IV・V群土器実測図 (1/5)	221
第144図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	222
第145図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	223
第146図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	224
第147図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	225
第148図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	226
第149図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	227
第150図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	228
第151図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	229
第152図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	230
第153図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	231
第154図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	232
第155図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	233
第156図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	234
第157図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	235
第158図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	236
第159図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	237
第160図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	238
第161図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	239
第162図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	240

第163図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	241
第164図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	242
第165図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	243
第166図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	244
第167図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	245
第168図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	246
第169図	グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)	247
第170図	グリッド出土第V群土器拓影図 (1/3)	248
第171図	グリッド出土注口土器実測図 (1/5)	258
第172図	グリッド出土注口土器拓影図 (1/3)	259
第173図	グリッド出土注口土器拓影図 (1/3)	260
第174図	グリッド出土石器 (石鏃1~25、楔形石器26~35) 実測図 (2/3)	265
第175図	グリッド出土石器 (石核) 実測図 (2/3)	266
第176図	グリッド出土石器 (磨製石斧) 実測図 (1/3)	267
第177図	グリッド出土石器 (磨製石斧) 実測図 (1/3)	268
第178図	グリッド出土石器 (磨製石斧) 実測図 (1/3)	269
第179図	グリッド出土石器 (打製石斧) 実測図 (1/3)	270
第180図	グリッド出土石器 (打製石斧) 実測図 (1/3)	271
第181図	グリッド出土石器 (打製石斧) 実測図 (1/3)	272
第182図	グリッド出土石器 (打製石斧109~119、尖頭器120、叩石121) 実測図 (1/3)	273
第183図	グリッド出土石器 (石皿) 実測図 (1/3)	274
第184図	グリッド出土石器 (石皿) 実測図 (1/3)	275
第185図	グリッド出土石器 (石皿) 実測図 (1/3)	276
第186図	グリッド出土石器 (石皿143、凹石144・145、 軽石製品146、石棒・石剣147~153) 実測図 (1/3)	277
第187図	グリッド出土石器 (台石154・155、砥石156~159) 実測図 (1/3)	278
第188図	グリッド出土石器 (磨石・敲石) 実測図 (1/3)	279
第189図	グリッド出土石器 (磨石・敲石) 実測図 (1/3)	280
第190図	グリッド出土石器 (磨石・敲石) 実測図 (1/3)	281
第191図	グリッド出土石器 (磨石・敲石) 実測図 (1/3)	282
第192図	グリッド出土石器 (磨石・敲石) 実測図 (1/3)	283
第193図	グリッド出土石器 (磨石・敲石) 実測図 (1/3)	284
第194図	グリッド出土石器 (磨石・敲石) 実測図 (1/3)	285

第195図	土製蓋実測図（1/3）	299
第196図	土錘実測図（1/2）	301
第197図	土錘実測図（1/2）	302
第198図	土器片円盤実測図（1/2）	304
第199図	有孔土製円盤・土製円盤実測図（1/2）	306
第200図	手捏土器・土製耳飾実測図（1/2）	308
第201図	特殊土製品実測図（1/2）	311
第202図	特殊土製品実測図（1/2）	312
第203図	土偶実測図（1/2）	314
第204図	その他土製品実測図（1/2）	316
第205図	その他土製品実測図（1/2）	317
第206図	その他土製品実測図（1/2）	318
第207図	土器底部網代拓影図（1/3）	319
第208図	第1号住居跡・第4号土壇実測図（1/60）	320
第209図	第1号住居跡カマド実測図（1/40）	321
第210図	第1号住居跡出土遺物実測図（1/4）	322
第211図	第2号住居跡実測図（1/60）	324
第212図	第2号住居跡カマド実測図（1/40）	325
第213図	第2号住居跡出土遺物実測図（1/4）	325
第214図	第3号住居跡実測図（1/60）	326
第215図	第3号住居跡カマド実測図（1/40）	327
第216図	第3号住居跡出土遺物実測図（1/4）	327
第217図	第6号住居跡実測図（1/60）	329
第218図	第6号住居跡カマド実測図（1/40）	330
第219図	第6号住居跡出土遺物実測図（1/4）	330
第220図	第8号住居跡実測図（1/60）	332
第221図	第8号住居跡カマド実測図（1/40）	333
第222図	第8号住居跡出土遺物実測図（1/4）	333
第223図	第11号住居跡実測図（1/60）	335
第224図	第11号住居跡カマド実測図（1/40）	336
第225図	第11号住居跡出土遺物実測図（1/4）	337
第226図	第12号住居跡実測図（1/60）	338
第227図	第12号住居跡カマド実測図（1/40）	339

第228図	第12号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	No.1	340
第229図	第12号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	No.2	341
第230図	第13A号住居跡実測図 (1/60)		343
第231図	第13A号住居跡カマド実測図 (1/40)		344
第232図	第13B号住居跡実測図 (1/60)		345
第233図	第13B号住居跡カマド実測図 (1/40)		346
第234図	第13B号住居跡出土遺物実測図 (1/4)		346
第235図	第14号住居跡実測図 (1/60)		348
第236図	第14号住居跡カマド実測図 (1/40)		349
第237図	第14号住居跡出土遺物実測図 (1/4)		349
第238図	第15号住居跡実測図 (1/60)		351
第239図	第15号住居跡カマド実測図 (1/40)		352
第240図	第15号住居跡出土遺物実測図 (1/4)		352
第241図	第17号住居跡実測図 (1/60)		353
第242図	第17号住居跡カマド実測図 (1/40)		354
第243図	第17号住居跡出土遺物実測図 (1/4)		355
第244図	第19号住居跡実測図 (1/60)		356
第245図	第19号住居跡カマド実測図 (1/40)		357
第246図	第19号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6 1/2)		358
第247図	第21号住居跡実測図 (1/60)		359
第248図	第21号住居跡カマド実測図 (1/40)		360
第249図	第21号住居跡出土遺物実測図 (1/4)		361
第250図	第22A号住居跡実測図 (1/60)		362
第251図	第22A号住居跡カマド実測図 (1/40)		363
第252図	第22A号住居跡出土遺物実測図 (1~14 1/4、15 1/2)		364
第253図	第22B号住居跡実測図 (1/60)		366
第254図	第22B号住居跡カマド実測図 (1/40)		367
第255図	第23号住居跡実測図 (1/60)		368
第256図	第23号住居跡カマド実測図 (1/40)		369
第257図	第23号住居跡出土遺物実測図 (1~9 1/4、13・14 1/2)	No.1	370
第258図	第23号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	No.2	371
第259図	第24号住居跡実測図 (1/60)		373
第260図	第24号住居跡カマド実測図 (1/40)		374

第261図	第24号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	374
第262図	第25号住居跡実測図 (1/60)	376
第263図	第25号住居跡カマド実測図 (1/40)	377
第264図	第25号住居跡出土遺物実測図 (1~4 1/4、5 1/2)	377
第265図	第26号住居跡実測図 (1/60)	379
第266図	第26号住居跡カマド実測図 (1/40)	380
第267図	第26号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	381
第268図	第27号住居跡実測図 (1/60)	382
第269図	第27号住居跡カマド実測図 (1/40)	383
第270図	第27号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	384
第271図	第28号住居跡実測図 (1/60)	386
第272図	第29号住居跡実測図 (1/60)	387
第273図	第29号住居跡カマド実測図 (1/40)	388
第274図	第29号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	389
第275図	第30号住居跡実測図 (1/60)	390
第276図	第30号住居跡カマド実測図 (1/40)	391
第277図	第30号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	391
第278図	第31号住居跡実測図 (1/60)	392
第279図	第31号住居跡カマド実測図 (1/40)	393
第280図	第31号住居跡出土遺物実測図 (1・2 1/4、3 1/2)	394
第281図	第32号住居跡実測図 (1/60)	395
第282図	第32号住居跡カマド実測図 (1/40)	396
第283図	第32号住居跡出土遺物実測図 (1~14 1/4、15~17 1/2)	397
第284図	第33A・B号住居跡実測図 (1/60)	400
第285図	第33A・B号住居跡カマド実測図 (1/40)	401
第286図	第33A号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7 1/2)	402
第287図	第33B号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	403
第288図	第37号住居跡実測図 (1/60)	404
第289図	第37号住居跡カマド実測図 (1/40)	405
第290図	第37号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	406
第291図	第38号住居跡実測図 (1/60)	408
第292図	第38号住居跡カマド実測図 (1/40)	409
第293図	第38号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1	410

第294図	第38号住居跡出土遺物実測図 (13~15 1/4、16~18 1/2) No.2	411
第295図	第39号住居跡実測図 (1/60)	413
第296図	第39号住居跡カマド実測図 (1/40)	414
第297図	第39号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	414
第298図	第40号住居跡・第41号土坑実測図 (1/60)	415
第299図	第40号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	416
第300図	第42号住居跡実測図 (1/60)	417
第301図	第42号住居跡カマド実測図 (1/40)	418
第302図	第42号住居跡出土遺物実測図 (1 1/4、2 1/2)	419
第303図	第43号住居跡実測図 (1/60)	420
第304図	第43号住居跡カマド実測図 (1/40)	421
第305図	第44号住居跡実測図 (1/60)	422
第306図	第44号住居跡カマドA・B実測図 (1/40)	423
第307図	第44号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6~10 1/2)	424
第308図	第45号住居跡実測図 (1/60)	425
第309図	第45号住居跡カマド実測図 (1/40)	426
第310図	第45号住居跡出土遺物実測図 (1~8 1/4、9 1/2)	427
第311図	第46A・B号住居跡実測図 (1/60)	429
第312図	第46A・B号住居跡カマド実測図 (1/40)	430
第313図	第46A号住居跡出土遺物実測図 (1~15 1/4、16 1/2) No.1	431
第314図	第46A号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.2	432
第315図	第46B号住居跡出土遺物実測図 (1・2 1/4、3 1/2)	433
第316図	第47号住居跡実測図 (1/80)	434
第317図	第47号住居跡カマド実測図 (1/40)	435
第318図	第47号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7・8 1/2)	436
第319図	第48号住居跡実測図 (1/60)	437
第320図	第48号住居跡カマド実測図 (1/40)	438
第321図	第48号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	439
第322図	第49号住居跡実測図 (1/80)	441
第323図	第49号住居跡炭化物出土状況図 (1/80)	442
第324図	第49号住居跡カマド実測図 (1/40)	443
第325図	第49号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1	444
第326図	第49号住居跡出土遺物実測図 (18~23 1/4、24・25 1/2) No.2	445

第327図	第50号住居跡実測図 (1/60)	448
第328図	第50号住居跡カマド実測図 (1/40)	449
第329図	第50号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	449
第330図	第51号住居跡実測図 (1/60)	450
第331図	第51号住居跡カマド実測図 (1/40)	451
第332図	第51号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No. 1	452
第333図	第51号住居跡出土遺物実測図 (1/2) No. 2	453
第334図	第52号住居跡実測図 (1/60)	455
第335図	第52号住居跡カマド実測図 (1/40)	456
第336図	第52号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7・8 1/2)	456
第337図	第53号住居跡実測図 (1/60)	458
第338図	第53号住居跡カマド実測図 (1/40)	459
第339図	第53号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	459
第340図	第54号住居跡実測図 (1/60)	460
第341図	第54号住居跡カマド実測図 (1/40)	461
第342図	第54号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	462
第343図	第58号住居跡実測図 (1/60)	463
第344図	第58号住居跡カマド実測図 (1/40)	464
第345図	第58号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	464
第346図	第62号住居跡実測図 (1/60)	465
第347図	第62号住居跡カマド実測図 (1/40)	466
第348図	第62号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)	467
第349図	第82号住居跡実測図 (1/60)	468
第350図	第82号住居跡カマド実測図 (1/40)	469
第351図	第82号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)	470
第352図	第83号住居跡実測図 (1/60)	472
第353図	第83号住居跡カマド実測図 (1/40)	473
第354図	第83号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	473
第355図	第84号住居跡実測図 (1/60)	474
第356図	第84号住居跡カマド実測図 (1/40)	475
第357図	第84号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	475
第358図	第85号住居跡実測図 (1/60)	476
第359図	第85号住居跡カマド実測図 (1/40)	477

第360図	第85号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	477
第361図	第88・89号住居跡実測図 (1/60)	478
第362図	第88・89号住居跡カマド実測図 (1/40)	479
第363図	第88号住居跡出土遺物実測図 (1～5 1/4、6・7 1/2)	480
第364図	第89号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	481
第365図	第90号住居跡実測図 (1/60)	482
第366図	第90号住居跡カマド実測図 (1/40)	483
第367図	第90号住居跡出土遺物実測図 (1～3 1/4、4 1/2)	483
第368図	第91号住居跡実測図 (1/60)	484
第369図	第91号住居跡カマド実測図 (1/40)	485
第370図	第92号住居跡実測図 (1/60)	486
第371図	第92号住居跡カマド実測図 (1/40)	487
第372図	第92号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	488
第373図	第93号住居跡実測図 (1/60)	490
第374図	第93号住居跡カマド実測図 (1/40)	491
第375図	第93号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1	492
第376図	第93号住居跡出土遺物実測図 (8 1/4、9～11 1/2) No.2	493
第377図	第94号住居跡実測図 (1/60)	495
第378図	第94号住居跡カマド実測図 (1/40)	496
第379図	第94号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	496
第380図	第97号住居跡実測図 (1/60)	497
第381図	第97号住居跡カマド実測図 (1/40)	498
第382図	第97号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	498
第383図	第98・99号住居跡実測図 (1/60)	500
第384図	第98・99号住居跡カマド実測図 (1/40)	501
第385図	第98号住居跡出土遺物実測図 (1～6 1/4、7 1/2)	502
第386図	第99号住居跡出土遺物実測図 (1～3 1/4、4 1/2)	503
第387図	第100号住居跡実測図 (1/60)	504
第388図	第100号住居跡カマド実測図 (1/40)	505
第389図	第100号住居跡出土遺物実測図 (1～5 1/4、6・7 1/2)	505
第390図	第102号住居跡実測図 (1/60)	507
第391図	第102号住居跡カマド実測図 (1/40)	508
第392図	第102号住居跡出土遺物実測図 (1～5 1/4、6・7 1/2)	508

第393図	第103号住居跡実測図 (1/60)	510
第394図	第103号住居跡カマド実測図 (1/40)	510
第395図	第103号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7 1/2)	511
第396図	第104号住居跡実測図 (1/60)	512
第397図	第104号住居跡カマド実測図 (1/40)	513
第398図	第104号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7 1/2)	514
第399図	第106号住居跡実測図 (1/60)	515
第400図	第106号住居跡カマド実測図 (1/40)	516
第401図	第106号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	517
第402図	第108号住居跡実測図 (1/60)	518
第403図	第108号住居跡カマド実測図 (1/40)	519
第404図	第108号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	519
第405図	第109号住居跡実測図 (1/60)	521
第406図	第109号住居跡カマド実測図 (1/40)	522
第407図	第109号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	522
第408図	第110号住居跡実測図 (1/60)	523
第409図	第110号住居跡カマド実測図 (1/40)	524
第410図	第110号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	525
第411図	第111号住居跡実測図 (1/60)	526
第412図	第111号住居跡カマド実測図 (1/40)	527
第413図	第111号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	527
第414図	第114号住居跡実測図 (1/60)	529
第415図	第114号住居跡カマド実測図 (1/40)	530
第416図	第114号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	530
第417図	第115号住居跡実測図 (1/60)	531
第418図	第115号住居跡カマド実測図 (1/40)	532
第419図	第115号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1	533
第420図	第115号住居跡出土遺物実測図 (24~28 1/4、29 1/2) No.2	534
第421図	第116号住居跡実測図 (1/60)	537
第422図	第116号住居跡出土遺物実測図 (1・2 1/4、3 1/2)	538
第423図	第117号住居跡実測図 (1/60)	539
第424図	第117号住居跡カマド実測図 (1/40)	540
第425図	第117号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	540

第426図	第123号住居跡実測図 (1/60)	541
第427図	第123号住居跡カマド実測図 (1/40)	542
第428図	第123号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6 1/2)	543
第429図	第133号住居跡実測図 (1/60)	544
第430図	第133号住居跡カマド実測図 (1/40)	545
第431図	第133号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	545
第432図	第137号住居跡実測図 (1/60)	546
第433図	第149号住居跡実測図 (1/60)	547
第434図	第149号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)	548
第435図	第154号住居跡実測図 (1/60)	549
第436図	第154号住居跡カマド実測図 (1/40)	550
第437図	第154号住居跡出土遺物実測図 (1 1/4、2 1/2)	551
第438図	第155号住居跡実測図 (1/60)	552
第439図	第155号住居跡カマド実測図 (1/40)	553
第440図	第155号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4・5 1/2)	553
第441図	第156号住居跡実測図 (1/60)	555
第442図	第156号住居跡カマド実測図 (1/40)	556
第443図	第156号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)	557
第444図	第167号住居跡実測図 (1/60)	558
第445図	第167号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	559
第446図	第60号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	560
第447図	第70号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	561
第448図	第71・72号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	563
第449図	第73号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	564
第450図	第74A・B号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	565
第451図	第75号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	566
第452図	第77号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	567
第453図	第78号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	568
第454図	第79号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	569
第455図	第80号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	570
第456図	第95号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	572
第457図	第107号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	573
第458図	第119号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	574

第459図	第120号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	575
第460図	第120号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/4)	575
第461図	第121号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	576
第462図	第122号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	577
第463図	第136号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	578
第464図	第138号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	579
第465図	第141号掘立柱建物跡・第144号土壇実測図 (1/60)	580
第466図	第142号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	581
第467図	第157号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	582
第468図	第101・144号土壇実測図 (1/40)	583
第469図	第101号土壇出土遺物実測図 (1・2 1/4、3 1/2)	584
第470図	第144号土壇出土遺物実測図 (1/4)	585
第471図	第63～66号土壇実測図 (1/40)	586
第472図	第67・68・143・168・169号土壇実測図 (1/40)	588
第473図	第81・96・135・139・147・148・166号溝状遺構配置図 (1/600)	590
第474図	第81・96・135・147号溝状遺構土層断面図 (1/40)	591
第475図	グリッド出土遺物実測図 (1/4) No.1	592
第476図	グリッド出土遺物実測図 (1/4) No.2	593
第477図	グリッド出土遺物実測図 (1/4) No.3	594
第478図	グリッド出土遺物実測図 (1/2) No.4	595
第479図	グリッド出土遺物実測図 (1/2) No.5	596
第480図	伊篠白幡遺跡B・C地点全測図 (1/1,000)	605
第481図	第4号住居跡実測図 (1/80)	608
第482図	第4号住居跡カマド実測図 (1/40)	609
第483図	第4号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	610
第484図	第5号住居跡実測図 (1/60)	611
第485図	第5号住居跡カマド実測図 (1/40)	612
第486図	第5号住居跡出土遺物実測図 (1～7 1/4、8・9 1/2)	613
第487図	第6号住居跡実測図 (1/60)	615
第488図	第6号住居跡カマド実測図 (1/40)	615
第489図	第6号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	616
第490図	第7号住居跡実測図 (1/60)	618
第491図	第8号住居跡実測図 (1/60)	619

第492図	第8号住居跡カマド実測図 (1/40)	620
第493図	第9・10号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	621
第494図	第11号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	622
第495図	第12・13号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	623
第496図	第21号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	624
第497図	Aピット群実測図 (1/60)	625
第498図	Aピット群P ₁ 出土遺物実測図 (1/4)	626
第499図	Bピット群実測図 (1/80)	627
第500図	Cピット群実測図 (1/80)	628
第501図	グリッド出土遺物実測図 (1~17 1/4、18・19 1/2)	629
第502図	第1号住居跡実測図 (1/60)	636
第503図	第1号住居跡カマド実測図 (1/40)	637
第504図	第1号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	638
第505図	第2A・B号住居跡実測図 (1/60)	639
第506図	第2A・B号住居跡カマド実測図 (1/40)	640
第507図	第2A号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	640
第508図	第2B号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	641
第509図	第3号住居跡実測図 (1/60)	642
第510図	第3号住居跡カマド実測図 (1/40)	643
第511図	第3号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	643
第512図	馬土手実測図 (平面図 1/300、土層図 1/120)	644
第513図	伊篠白幡遺跡D地点全測図 (1/1,000)	649
第514図	第1号住居跡実測図 (1/60)	652
第515図	第1号住居跡カマド実測図 (1/40)	653
第516図	第1号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	654
第517図	第2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	654
第518図	時期別土器出土分布図 No.1	660
第519図	時期別土器出土分布図 No.2	662
第520図	施文工具の時期変遷	672
第521図	第IV群土器法量模式図 (1/10) No.1	674
第522図	第IV群土器法量模式図 (1/10、㊸のみ 1/5) No.2	675
第523図	土器使用痕模式図 (1/8) No.1	677
第524図	土器使用痕模式図 (1/8) No.2	678

第525図	磨製石斧及び打製石斧遺存状態模式図	683
第526図	器種別廃棄領域概念図	684
第527図	石皿・磨石・凹石分布状況図	693
第528図	礫分布状況図	701
第529図	住居跡出入口方位	705
第530図	集落変遷模式図 No. 1	708
第531図	集落変遷模式図 No. 2	709
第532図	古墳時代出土土器集成図 No. 1	715
第533図	古墳時代出土土器集成図 No. 2	716
第534図	歴史時代出土土器集成図	720

付図1 伊篠白幡遺跡周辺地形図 (1/2,500)

付図2 伊篠白幡遺跡A地点遺構配置図 (1/400)

付図3 伊篠白幡遺跡A地点縄文時代遺構配置図 (1/400)

付図4 伊篠白幡遺跡A地点古墳・歴史時代遺構配置図 (1/400)

付図5 堀之内式土器集成図

図版目次

A 地点

- | | | | |
|------|----------------------|------|-------------------------------------|
| 図版1 | 航空写真（北から） | 図版16 | 1. 第16号土壇全景 |
| 図版2 | 航空写真（西から） | 図版17 | 2. 第35号土壇全景 |
| 図版3 | 1. 東側斜面小礫群出土状況 | 図版18 | 第41、55、56号土壇全景 |
| | 2. 同上 | 図版19 | 第7、9、10号住居跡出土土器 |
| 図版4 | 1. 遺跡近景（東から） | 図版20 | 第18、20A号住居跡出土土器 |
| | 2. 同上（東から） | 図版21 | 第20B、34、36、57、87A号住居跡出土土器 |
| 図版5 | 1. 第7号住居跡全景 | 図版22 | 第86、87B・C、105号住居跡出土土器 |
| | 2. 第9号住居跡全景 | 図版23 | 第112号住居跡出土土器 |
| 図版6 | 1. 第10号住居跡全景 | 図版24 | 第112号住居跡出土土器 |
| | 2. 第18号住居跡全景 | 図版25 | 第140号住居跡出土土器 |
| 図版7 | 1. 第20A・B号住居跡全景 | 図版26 | 第140、152号住居跡出土土器 |
| | 2. 第20A号住居跡遺物出土状況 | 図版27 | 第153、159号住居跡、第76、124、127、130号埋甕出土土器 |
| 図版8 | 1. 第34号住居跡全景 | 図版28 | 第130、131、132号埋甕 |
| | 2. 第36号住居跡全景 | 図版29 | 第5、35、55、59B、158号土壇出土土器 |
| 図版9 | 1. 第57号住居跡全景 | 図版30 | 第7号住居跡出土土器 |
| | 2. 第86、87A・B・C号住居跡全景 | 図版31 | 第9号住居跡出土土器 |
| 図版10 | 1. 第105号住居跡全景 | 図版32 | 第10号住居跡出土土器(1) |
| | 2. 第112号住居跡全景 | 図版33 | 第10号住居跡出土土器(2) |
| 図版11 | 第140号住居跡全景 | 図版34 | 第18号住居跡出土土器 |
| 図版12 | 1. 第152号住居跡全景 | | 第20A号住居跡出土土器(1) |
| | 2. 第152号住居跡遺物出土状況 | | 第20A号住居跡出土土器(2) |
| 図版13 | 1. 第153号住居跡全景 | | 第20B号住居跡出土土器(1) |
| | 2. 第159号住居跡全景 | | 第20B号住居跡出土土器(2) |
| 図版14 | 1. 第76号埋甕 | | 第20B号住居跡出土土器(1) |
| | 2. 第124号埋甕 | | 第20B号住居跡出土土器(2) |
| | 3. 第127号埋甕 | | 第34号住居跡出土土器 |
| 図版15 | 1. 第130号埋甕 | | 第36号住居跡出土土器(1) |
| | 2. 第131号埋甕 | | 第36号住居跡出土土器(2) |

- | | | | |
|------|-------------------|------|-----------------------------------|
| 図版35 | 第57号住居跡出土土器 | 図版56 | グリッド出土土器(20)第IV群 |
| | 第87A号住居跡出土土器 | 図版57 | グリッド出土土器(21)第IV群 |
| 図版36 | 第87B・C号住居跡出土土器 | 図版58 | グリッド出土土器(22)第IV群 |
| | 第105号住居跡出土土器(1) | 図版59 | グリッド出土土器(23)第IV群 |
| 図版37 | 第105号住居跡出土土器(2) | 図版60 | グリッド出土土器(24)第IV群 |
| | 第112号住居跡出土土器(1) | 図版61 | グリッド出土土器(25)第IV群 |
| 図版38 | 第112号住居跡出土土器(2) | 図版62 | グリッド出土土器(26)第IV群 |
| | 第140号住居跡出土土器(1) | 図版63 | グリッド出土土器(27)第IV群 |
| 図版39 | 第140号住居跡出土土器(2) | 図版64 | グリッド出土土器(28)第IV群 |
| | 第152号住居跡出土土器(1) | 図版65 | グリッド出土土器(29)第IV群 |
| 図版40 | 第152号住居跡出土土器(2) | | グリッド出土土器(30)第V群 |
| | 第153号住居跡出土土器 | 図版66 | グリッド出土注口土器 |
| 図版41 | 第159号住居跡出土土器(1) | 図版67 | 土錘、土器片、円盤 |
| | 第159号住居跡出土土器(2) | 図版68 | 土製蓋、土偶、特殊土製品、その他の土製品 |
| 図版42 | グリッド出土土器(1)第IV群 | 図版69 | 遺構出土石器(第9、18、20A、20B、34、36号住居跡出土) |
| 図版43 | グリッド出土土器(2)第IV群 | 図版70 | 遺構出土石器(第87B・C、152号住居跡出土) |
| 図版44 | グリッド出土土器(3)第IV群 | 図版71 | グリッド出土石器(石鏃、楔形石器) |
| 図版45 | グリッド出土土器(4)第IV群 | 図版72 | グリッド出土石器(磨製石斧) |
| 図版46 | グリッド出土土器(5)第IV群 | 図版73 | グリッド出土石器(磨製石斧、打製石斧) |
| 図版47 | グリッド出土土器(6)第IV群 | 図版74 | グリッド出土石器(打製石斧) |
| 図版48 | グリッド出土土器(7)第IV群 | 図版75 | グリッド出土石器(石皿の表) |
| 図版49 | グリッド出土土器(8)第IV群 | 図版76 | グリッド出土石器(石皿の裏) |
| 図版50 | グリッド出土土器(9)第I群 | 図版77 | グリッド出土石器(石皿・凹石の表) |
| | グリッド出土土器(10)第II群 | 図版78 | グリッド出土石器(石皿・凹石の裏) |
| 図版51 | グリッド出土土器(11)第II群 | 図版79 | グリッド出土石器(石剣・石棒・砥石・台石) |
| | グリッド出土土器(12)第II群 | | |
| 図版52 | グリッド出土土器(13)第III群 | | |
| | グリッド出土土器(14)第III群 | | |
| 図版53 | グリッド出土土器(15)第III群 | | |
| | グリッド出土土器(16)第III群 | | |
| 図版54 | グリッド出土土器(17)第III群 | | |
| | グリッド出土土器(18)第IV群 | | |
| 図版55 | グリッド出土土器(19)第IV群 | | |

図版80	グリッド出土石器（磨石）	図版99	1. 第30号住居跡全景
図版81	グリッド出土石器（磨石）		2. 第31号住居跡全景
図版82	グリッド出土石器（磨石）	図版100	1. 第33A・B号住居跡付近遺構 検出状況
図版83	遺跡近景		2. 第33A号住居跡全景
図版84	1. 第1号住居跡全景 2. 第1号住居跡遺物出土状況 3. 同左	図版101	1. 第37号住居跡全景 2. 第37号住居跡遺物出土状況
図版85	1. 第2号住居跡全景 2. 第3号住居跡全景	図版102	1. 第37号住居跡遺物出土状況 2. 同上
図版86	1. 第6号住居跡全景 2. 第8号住居跡全景		3. 同上
図版87	1. 第11号住居跡全景 2. 第11号住居跡カマド	図版103	1. 第38号住居跡全景 2. 第38号住居跡カマド近景
図版88	1. 第12号住居跡全景 2. 第12号住居跡遺物出土状況	図版104	1. 第38号住居跡遺物出土状況 2. 同上 3. 同上
図版89	1. 第13A・B号住居跡全景 2. 第15号住居跡全景	図版105	1. 第39号住居跡全景 2. 第40号住居跡全景
図版90	1. 第17号住居跡全景 2. 第17号住居跡遺物出土状況	図版106	1. 第42号住居跡全景 2. 第42号住居跡炭化物出土状況
図版91	1. 第19号住居跡全景 2. 第21号住居跡全景	図版107	1. 第45号住居跡全景 2. 第46A号住居跡全景
図版92	1. 第23号住居跡全景 2. 第23号住居跡遺物出土状況	図版108	1. 第46A号住居跡遺物出土状況 2. 同上
図版93	1～4 第23号住居跡遺物出土状況	図版109	1. 第46A号住居跡遺物出土状況 2. 同上
図版94	1. 第24号住居跡全景 2. 第24号住居跡遺物出土状況	図版110	1. 第46B号住居跡全景 2. 第46B号住居跡カマド土層断面
図版95	第24、25号住居跡全景		
図版96	1. 第26、27号住居跡全景 2. 第27号住居跡遺物出土状況	図版111	1. 第46B号住居跡遺物出土状況 2. 同上
図版97	1. 第27号住居跡遺物出土状況 2. 同上	図版112	1. 第48号住居跡全景 2. 第48号住居跡遺物出土状況
図版98	第29号住居跡全景	図版113	第49号住居跡全景

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|--|
| 図版114 | 第49号住居跡遺物出土状況 | | 2. 第109号住居跡全景 |
| 図版115 | 1. 第49号住居跡炭化物出土状況
2. 同上 | 図版132 | 1. 第114号住居跡全景
2. 第115号住居跡全景 |
| 図版116 | 1. 第49号住居跡炭化物出土状況
2. 同上 | 図版133 | 第116、123号住居跡全景 |
| 図版117 | 第50号住居跡全景 | 図版134 | 第117号住居跡全景 |
| 図版118 | 1. 第51号住居跡全景
2. 第51号住居跡遺物出土状況 | 図版135 | 1. 第133号住居跡全景
2. 第149号住居跡全景 |
| 図版119 | 1. 第52号住居跡遺物出土状況
2. 同上 | 図版136 | 1. 第154~156号住居跡全景
2. 第167号住居跡全景 |
| 図版120 | 1. 第53号住居跡全景
2. 第53号住居跡遺物出土状況 | 図版137 | 1. 第60号掘立柱建物跡全景
2. 第71号掘立柱建物跡全景 |
| 図版121 | 1. 第58号住居跡全景
2. 第62号住居跡全景 | 図版138 | 1. 第72号掘立柱建物跡全景
2. 第73号掘立柱建物跡全景 |
| 図版122 | 1. 第82号住居跡全景
2. 第83、84号住居跡全景 | 図版139 | 1. 第74A・B号掘立柱建物跡全景
2. 第75号掘立柱建物跡全景 |
| 図版123 | 1. 第88、89号住居跡全景
2. 第90号住居跡全景 | 図版140 | 1. 第79、119、120、121号掘立柱建物跡全景
2. 第95号掘立柱建物跡全景 |
| 図版124 | 1. 第92、93号住居跡全景
2. 第93号住居跡遺物出土状況 | 図版141 | 1. 第107号掘立柱建物跡全景
2. 第136、138号掘立柱建物跡全景 |
| 図版125 | 1. 第93号住居跡遺物出土状況
2. 同上 | 図版142 | 1. 第141号掘立柱建物跡全景
2. 第157号掘立柱建物跡全景 |
| 図版126 | 1. 第94号住居跡全景
2. 第97号住居跡全景 | 図版143 | 1. 第64号土壇全景
2. 第65号土壇全景
3. 第66号土壇全景 |
| 図版127 | 1. 第98号住居跡全景
2. 第98号住居跡遺物出土状況 | 図版144 | 第12号住居跡出土土器 |
| 図版128 | 1. 第100号住居跡全景
2. 第102号住居跡全景 | 図版145 | 第22A号住居跡出土土器 |
| 図版129 | 1. 第103号住居跡全景
2. 第104号住居跡全景 | 図版146 | 第23号住居跡出土土器 |
| 図版130 | 1. 第106号住居跡全景
2. 第106号住居跡遺物出土状況 | 図版147 | 第26号住居跡出土土器 |
| 図版131 | 1. 第108号住居跡全景 | 図版148 | 第27号住居跡出土土器(1) |
| | | 図版149 | 第27号住居跡出土土器(2) |

図版150 第37号住居跡出土土器
図版151 第38号住居跡出土土器
図版152 第46A号住居跡出土土器
図版153 第48号住居跡出土土器
図版154 第49号住居跡出土土器
図版155 第51号住居跡出土土器
図版156 第84、85、88、89号住居跡出土土器

図版157 第93号住居跡出土土器(1)
図版158 第93号住居跡出土土器(2)
図版159 第100、103、104、110、111号住居跡出土土器
図版160 第115号住居跡出土土器
図版161 石製品
図版162 鉄製品

B 地点

図版163 1. 調査区近景(北から)
2. 同上(南から)
図版164 1. 第4号住居跡全景
2. 第5号住居跡全景
図版165 1. 第6号住居跡全景
2. 第7号住居跡全景
図版166 1. 第8号住居跡全景
2. 第9、10号掘立柱建物跡全景
図版167 1. 第11号掘立柱建物跡全景
2. 第12、13号掘立柱建物跡全景
図版168 1. ピット群A全景
2. 調査風景
図版169 1. 西側拡張区(東から)
2. 東側拡張区(西から)
図版170 第4～6住居跡出土土器

C 地点

図版171 1. 第1号住居跡全景
2. 第2A・B号住居跡全景
図版172 1. 馬土手全景
2. 第3号住居跡全景
図版173 1. 第1、2A・B、3号住居跡出土土器

D 地点

図版174 遺跡全景
図版175 1. 第1号住居跡全景
2. 第2号住居跡全景

その他

図版176 A地点出土墨書土器
図版177 A、B、C地点出土墨書土器
図版178 科学分析(1)
図版179 科学分析(2)

序 章

序 章

第1節 調査に至る経過

千葉県北総地域においては、新東京国際空港の建設に伴い各種の地域整備事業が進められていると同時に、農業地帯としても県内で最も盛んに畑作等が行われている。この地域の印旛郡酒々井町に、社団法人千葉県農業開発公社は、農業用代替地の造成を計画した。

これに伴い、社団法人千葉県農業開発公社より、千葉県教育委員会へ事業地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて照会があった。そこで、千葉県教育委員会は現地踏査を実施したところ、遺跡の所在が確認されたため、その旨を社団法人千葉県農業開発公社へ回答し遺跡の取り扱いについて慎重に協議を重ねた。その結果、事業計画の変更が困難であるということで、やむなく記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターを調査機関として指定した。

これに基づき、昭和58年8月に社団法人千葉県農業開発公社と財団法人千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託が契約され調査の運びとなった。

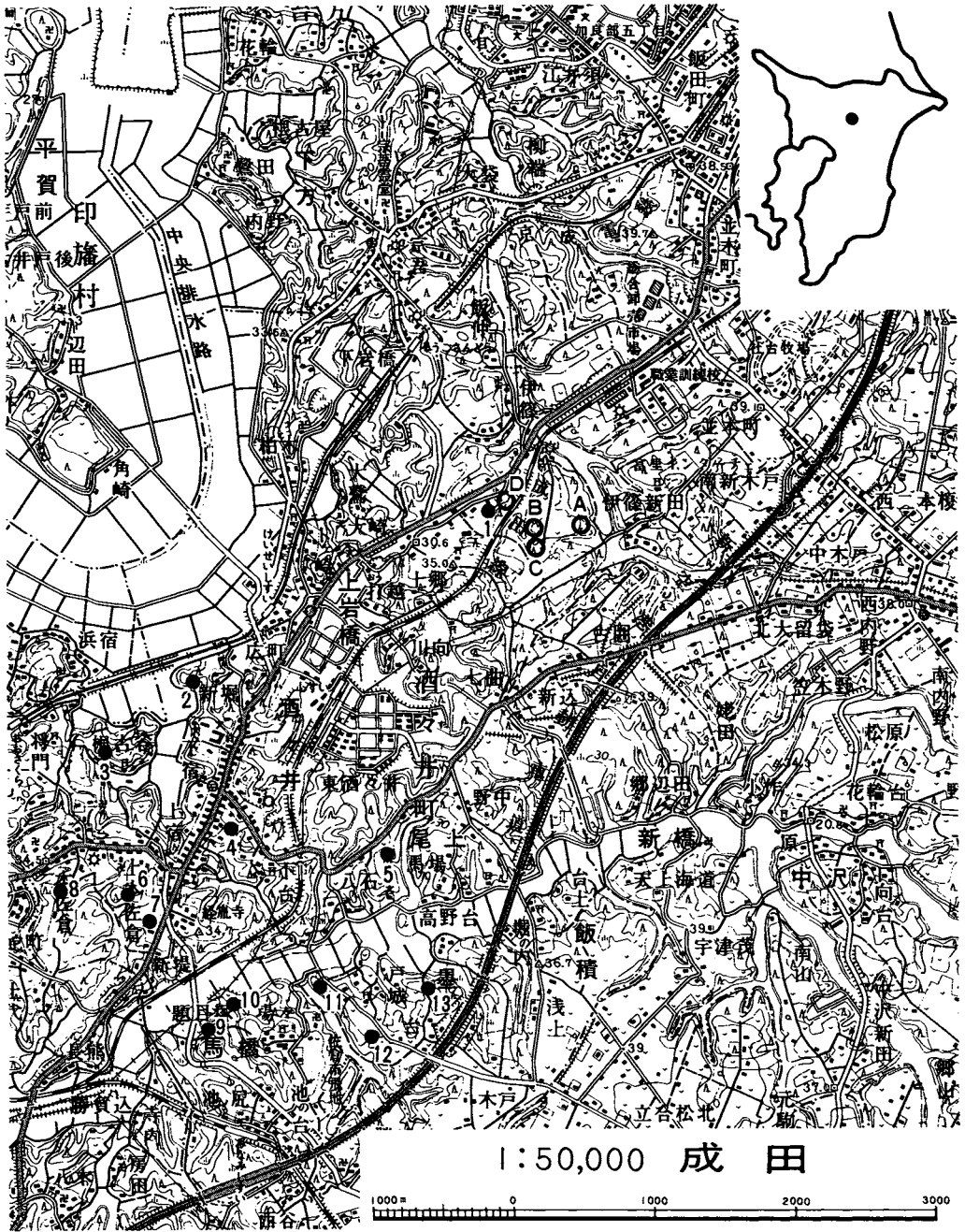
千葉県教育委員会の指導を受け、発掘調査の方法としては、調査対象地に確認調査を実施しその結果をもとに、本調査を実施するという基本方針がとられることとなった。

第2節 遺跡の立地と環境 (第1図)

伊篠白幡遺跡の位置する下総台地は、標高20～40m前後の起伏の非常に少ない洪積台地として知られている。この下総台地は、長期間の侵食作用によってできた樹枝状の谷によって開析されている。現在、この台地の中央北側に位置する印旛沼周辺は、利根川水系の一部をなしているが、江戸幕府により流路を変更される以前は、特に平安時代まで鬼怒川流路としてつながり、霞ヶ浦、北浦と一帯となって太平洋に注ぐ一大水系になっていたことが知られている。この水系の印旛沼に注ぐ江川によって樹枝状の谷によって開析された台地のひとつに、本遺跡群が立地している。A地点は東側より、B・C地点は西側より、またD地点も東側よりそれぞれ江川の支流によって樹枝状の谷によって開析され、台地の標高は約35m前後である。

先土器時代の遺物はA地点で少量出土したのみであった。

縄文時代の遺構・遺物の出土はA地点において多量にみられた。早期田戸下層・上層式の土器片が少量ではあるが出土した。この時期の遺物は県内において、徐々に報告例が多くなってきている。沈線文期の遺跡は県内で262ヶ所が報告されており、集中ヶ所として現在の利根川水系と太平洋水系の分水嶺、利根川本流域、印旛沼東側が指摘されている。本例も、印旛沼東側



- | | | | |
|-------------|-------------|------------|---------------|
| A 伊篠白幡遺跡A地点 | 1 伊篠越徳遺跡 | 6 上本佐倉上宿遺跡 | 10 馬橋鷲尾余II遺跡 |
| B // B地点 | 2 カンカンムロ横穴群 | 7 本佐倉外宿遺跡 | 11 墨馬場遺跡 |
| C // C地点 | 3 本佐倉城跡 | 8 本佐倉北大堀遺跡 | 12 墨広畑(花ノ木)遺跡 |
| D // D地点 | 4 狐塚古墳 | 9 馬橋鷲尾I遺跡 | 13 墨古沢遺跡 |
| | 5 墨総合公園内遺跡 | | |

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/50,000)

に位置し、少量の遺物が出土しており、類例の1例となるであろう。茅山期の子母口式と条痕文系土器が少量出土しており、この条痕文期は飛躍的に遺跡数の増加する時期である。遺跡数は618遺跡が確認され集落跡も数多く検出されている。印旛沼周辺でも佐倉市上座貝塚（麻生 1957）同市飯重新畑遺跡（桑原他 1974）、成田市 Loc. 4 遺跡（玉口他 1975）などがあり、炉穴の検出された遺跡としては、上座貝塚、印旛郡印旛村吉高家老地遺跡（三浦他 1976）など数多くある。また、遺物散布のみの遺跡も多く、本遺跡もこの例である。前期黒浜期の遺跡数は435遺跡が確認されているが、集中ヶ所は江戸川流域である。印旛沼水系の鹿島川、新川上流域も多く見られるが、本遺跡は比較的印旛沼に近く立地する例である。諸磯・浮島期は、混在地帯として江戸川流域と手賀沼周辺が指摘され、印旛沼周辺は浮島式の分布が濃密であるが、本遺跡は共伴事例としてこの地域では貴重な存在である。中期では下小野・五領ヶ台式が共伴し、希薄な分布に貴重な位置を占めている。阿玉台式は、印旛沼・手賀沼周辺以東に濃密に分布し、本例もこの1例である。加曽利E期は県内全域で1,194ヶ所あり、最も濃密に分布し、集落跡や遺物散布地など数多く発見され、活発な動きを示す時期である。佐倉市吉見台遺跡、同市生谷境堀遺跡（桑原他 1978）などの集落跡が発見され、特に八千代市・佐倉市西部は遺跡の超密集地と言っても過言ではない地域（八千代市教委 1983）（佐倉市教委 1984）である。しかし、印旛沼東側は比較的分布密度が薄くなっている地域であり、本遺跡はこの地域の遺物散布地の1遺跡である。本遺跡の縄文時代の主体を占めるのは、堀之内期である。この時期の県内の遺跡数は528ヶ所が確認され、遺跡の集中地域は、奥東京湾や現東京湾に面する台地に占地する様になるが、印旛・手賀沼周辺地域は遺跡数が加曽利E期と比較すれば、激減になる。この時期の特徴としては、鹿島川や新川の中流域にある程度の分布が認められるが、多くは無い。また、堀之内I・II式の分布としては、江戸川流域の所謂奥東京湾沿いに、I・II式の分布が認められ、印旛沼以東では比較的II式の分布が希薄であることが指摘されている。本遺跡でも、このことが指摘でき、堀之内II式の遺物は全体の0.2%前後を占めるだけであった。酒々井町では、その他の堀之内期の遺跡が4ヶ所報告されているが、全て堀之内I式である。加曽利B式は県内で687遺跡確認されているが、その多くは印旛沼を中心とした分布を示し、加曽利E期の県内全域の分布とは大きな相違を示しており、それぞれの時期的、生活条件の変化を示すものであろう。この加曽利B期には、印旛沼地域でもヤマトシジミを主体とした貝塚が認められ、石神台貝塚（古内・三浦 1984）などが知られている。これらの貝塚は、小規模なものが多い。安行式の土器片が少量出土しており、この時期をもって本遺跡からは縄文時代の遺物は出土していない。

弥生時代には、印旛沼周辺でも佐倉市大崎台遺跡の様な大集落が営まれる様になる。本遺跡の周辺では、馬橋鷺尾余遺跡（渋谷 1980）が後期中葉から後葉にかけて30軒検出され、その他に調査された3遺跡からは土器片が少量検出されている。

古墳時代では、狐塚古墳・カンカンムロ横穴群の他に、集落跡として墨馬々遺跡（田川 1982）・伊篠越徳遺跡（永瀬 1983）において鬼高期の住居跡が検出されているが、報告例は少ない。今回調査された本遺跡からは、当時期の住居跡が多数検出されたことにより、ようやくこの時期の解明のための好資料を提供することができた。

歴史時代では数多くの遺跡が調査され、伊篠越徳遺跡・鷲尾余遺跡・北押出し遺跡（村田 1984）などでは集落跡が検出されている。なかでも、北押出し遺跡では、掘立柱建物跡が17棟も検出され、相当の規模をもつ集落であったことが窺われる。

参 考 文 献

- 麻生 優 1957 「千葉県佐倉市上座貝塚」 『日本考古学年報10』
- 石田 広美 1985 『主要地方道成田安食線通路改良工事（住宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 桑原 護他 1974 「飯重新畑遺跡」 『飯重』 佐倉市教育委員会
- 桑原 護他 1978 「生谷境堀遺跡」 『飯重』 佐倉市教育委員会
- 阪田 正一 1985 『八千代市北海道遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 佐倉市教委 1984 『千葉県佐倉市埋蔵文化財分布地図』 佐倉市教育委員会
- 渋谷興平他 1980 『馬橋鷲尾余遺跡』 馬橋鷲尾余遺跡調査会
- 田川 良他 1982 「馬場遺跡」 『北総線』 東京電力北総線遺跡調査会
- 玉口時雄他 1975 「Loc. 4 遺跡」 『公津原』 千葉県都市公社
- 永瀬 真平 1983 『伊篠越徳遺跡』 山武考古学研究所
- 古内茂・三浦和信 1984 『石神台・戸ノ内貝塚』 印旛村教育委員会
- 三浦和信他 1976 『吉高家老地』 吉高家老地遺跡調査会
- 三浦 和信 1980 『印旛村の古代文化』 印旛村教育委員会
- 三浦 和信 1984 「狩猟・採集・漁撈時代の印旛」 『印旛村史 通史1』 印旛村史編さん委員会
- 三浦 和信 1985 「遺跡分布と集落」 『房総考古学ライブラリー2 縄文時代（1）』（財）千葉県文化財センター
- 村田一男他 1984 『北押出し遺跡』 酒々井町教育委員会
- 八千代市教委 1983 『八千代の遺跡』 八千代教育委員会

第3節 発掘調査の経過

伊篠白幡遺跡の発掘調査及び整理作業、報告書刊行は、昭和58年8月1日より昭和61年3月31日まで断続的に実施された。その組織、概要等を年度毎に記述する。

昭和59年度

組織

調査部長 白石竹雄
部長補佐 根本 弘
班 長 西山太郎
主任調査研究員 田坂 浩
調査研究員 岸本雅人
調査研究員 小畑 巖

発掘調査期間

昭和58年 8月 1日～昭和59年 2月29日

発掘調査面積

13,000m²

概要

確認調査は昭和58年 8月 1日～同年同月 5日まで実施された。確認調査成果をもとに本調査が実施されたが、遺構検出数が多く一部変更して昭和59年 2月29日まで調査が実施された。遺跡はA～Dの4地点からなり、各地点は1遺跡として把握できるものであった。

昭和59年度

組織

調査部長 鈴木道之助
部長補佐 根本 弘
班 長 田坂 浩
調査研究員 岸本 雅人

整理期間

昭和59年 4月 1日～昭和60年 3月31日

概要

整理は全遺物の水洗・注記作業と遺構図面・写真整理を実施した。また、遺物の復元・接合・実測・トレースは先土器時代と縄文時代までとし、挿図・図版作成については、遺構分の全てを実施し、レイアウトを行った。

昭和60年度

組織

調査部長 鈴木道之助

部長補佐 岡川 宏道

班 長 高橋 賢一

主任調査研究員 三浦 和信 (60. 12. 31まで)

調査研究員 鳴田 浩司 (60. 6. 1～7. 31)

調査研究員 宮城 孝之 (60. 10. 31まで)

整理期間

昭和60年 4月1日～同年12月31日

報告書印刷刊行

昭和61年 1月1日～同年 3月31日

概要

昭和59年度に引続き整理作業を実施した。古墳時代以降の遺物復元・接合・実測・トレース・挿図作成を行った。全遺物の写真撮影は委託し、図版作成は各調査員が行った。原稿執筆もこの期間に行い、昭和59年度作業の一部については、原稿執筆の進捗に伴い一部修正があった。報告書印刷刊行は1月から3月の3ヶ月間で実施した。

第4節 発掘調査の方法

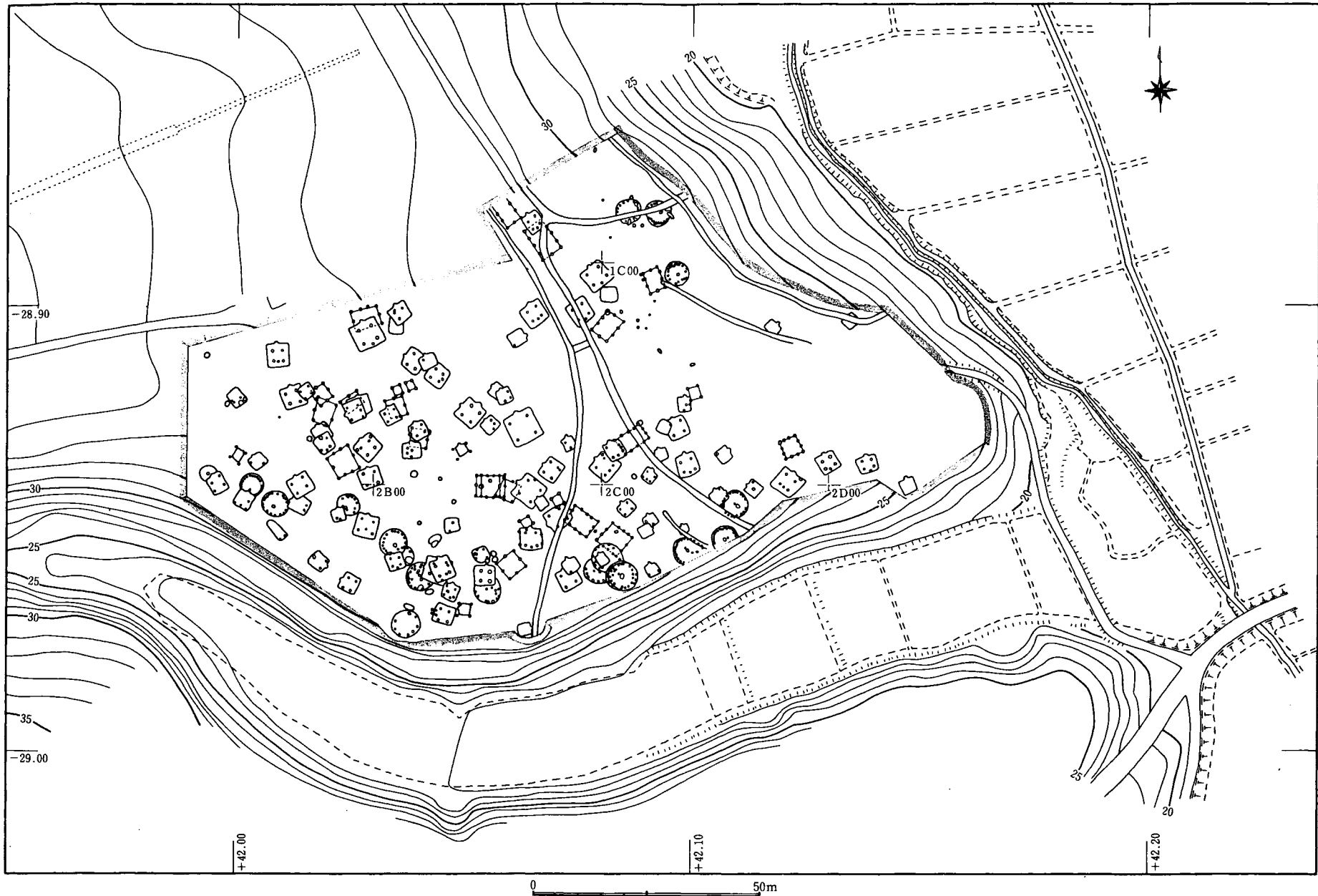
伊篠白幡遺跡は4地点に別れ、調査対象地に対して確認調査を実施した後に本調査範囲を決定し、本調査を実施することにした。

発掘調査の方法は、公共座標を用いて発掘区を設置した。A地点については、50m方眼の大グリッドを設定し、東西方向をA～Cのアルファベットで、南北方向は0～3の数字で表現し、この大グリッドを1Aとか1Bと呼称した。更に大グリッドを5m方眼の小グリッドで100分割し、北西コーナーを1A00、南東コーナーを1A99と表記した。B～D地点については、道路予定地内の路線中央線を中心に小グリッドを設定した。本調査範囲は最終的には予定地内のほぼ全域を調査した。

確認調査方法は上層10%、下層4%を原則とし、確認調査用のグリッドは、東西2m、南北2mの4㎡とした。下層は上層確認の後に上層遺構が検出されなかったグリッドを主に調査した。

第 1 章

伊篠白幡遺跡 A 地点の調査



第2図 伊豫白幡遺跡A地点全測図 (1/1,000)

第1章 伊篠白幡遺跡A地点の調査

第1節 遺跡の位置及び立地 (第2図)

今回調査を実施した伊篠白幡遺跡は、酒々井町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書(酒々井町教委 1984)によれば「遺跡番号22 伊篠白幡遺跡 酒々井町伊篠字白幡」と記載されている。この報告書に記載されている伊篠白幡遺跡は、標高約35m、東西450m、南北600mの広大な台地を一遺跡として把握されている。調査されたA～C地点はこの遺跡分布範囲に含まれ、D地点は谷を隔てた別の台地に立地している。

A地点は、印旛郡酒々井町伊篠字八木野343他に位置し、伊篠白幡遺跡の広大な台地の東側に所在する。この遺跡の所在する台地は、印旛沼に注ぐ江川によって樹枝状に開析された広大な台地であるが詳細に検討するならば、江川の小支流によって更に樹枝状に開析されている。A地点は、このような小支流によって開析された東側の一台地に所在し標高約32m、東西約200m、南北約100m、水田面との比高差約10mであった。このことから、明らかに地形の上からもA地点は制約を受けていることが指摘され、また、調査の結果からも同様なことが指摘できた。特に、縄文時代後期掘之内期の集落跡における住居配置状況が、このことを端的に物語っていた。

第2節 遺跡の概要及び調査の方法

伊篠白幡遺跡A地点において検出された遺構と遺物は次のとおりである。先土器時代のブロックが1ヶ所で検出された。層序はIIc～III層(ソフトローム)からの出土であり、削器3点、剝片40点、折断剝片3点の計46点が出土している。縄文時代の遺構は住居跡20軒、埋甕6基、土壇11基、焼土跡2基であった。住居跡は、入口施設をもつ所謂柄鏡形住居跡が2軒、他は円形の平面形を呈し、壁沿い柱穴列をもつ掘之内期の典型的なものであった。土壇は形態的な規則性をもつものは無かった。遺物としては、土器整理箱(54×33×15cm)300箱以上あり、各時期にわたって出土した。早期(田戸下・上層式、子母口式、条痕文系土器)、前期(黒浜式、諸磯式、浮島式、興津式)、中期(五領ヶ台式、阿玉台式、勝坂式、中峠式、加曾利E式)、後期(堀之内I・II式、加曾利B式、安行式)である。特に堀之内I式が最も多く99%以上を占める程であった。土製品としては、土器片錘、土製錘、有孔土製円盤、土製円盤、土器片円盤、手握土器、土製耳飾、土偶、特殊土製品等が出土し、種類が多くまた数量も多い。これらの殆どは、堀之内I式に伴うものである。石製品としては、石鏃、楔形石器、磨製石斧、打製石斧、石皿、石棒、石剣、砥石、磨石、凹石、礫等多数出土しているが、土製品同様掘之内期に属するものである。古墳歴史時代の遺構、遺物も多く整理箱(54×33×15cm)100箱以上が出土している。

古墳時代の遺構としては住居跡36軒が検出されている。歴史時代の遺構としては住居跡44軒、土壇2基等である。その他として掘立柱建物跡23棟が検出されているが、時期の明確化が困難であった。また、他の遺構として時期決定できなかったものとして、土壇10基、溝7条がある。遺物としては各種土器の他に雲母片岩が多く出土しており、形状を止どめない程ボロボロであったが、支脚としての機能も一応想定された。またスラグも検出されており、特に第46A号住居跡の覆土上層から出土の坏からは、流出スラグも坏内に流入した状態で出土している。このことから、本遺跡の歴史時代の一時期が製鉄関連遺跡の一部とも想定されている。

調査の方法は、序章第4節に述べた通りである。調査対象面積に対して上層10%、下層4%を原則として確認調査を実施し、下層については、上層遺構が検出されなかった所を主に任意に実施した。本調査範囲は確認調査の結果をもとに実施した。

第3節 検出された遺構と遺物

1. 先土器時代

1) 第1ブロックの石器群 (第4～6・12図)

第1ブロックの石器群は、遺跡のほぼ中央、2B05グリッドを中心にIIc層～III層にかけて出土しており、IIc層とIII層の明瞭な区分は困難であった(註1)。石器組成は、削器3点、剥片40点、折断剥片3点からなる。母岩は砂岩24点、玄武岩A6点、玄武岩B16点の3種類に識別される。また、接合資料は5例認められる。

1～46(10・19・26・32・40を除く)は剥片である。

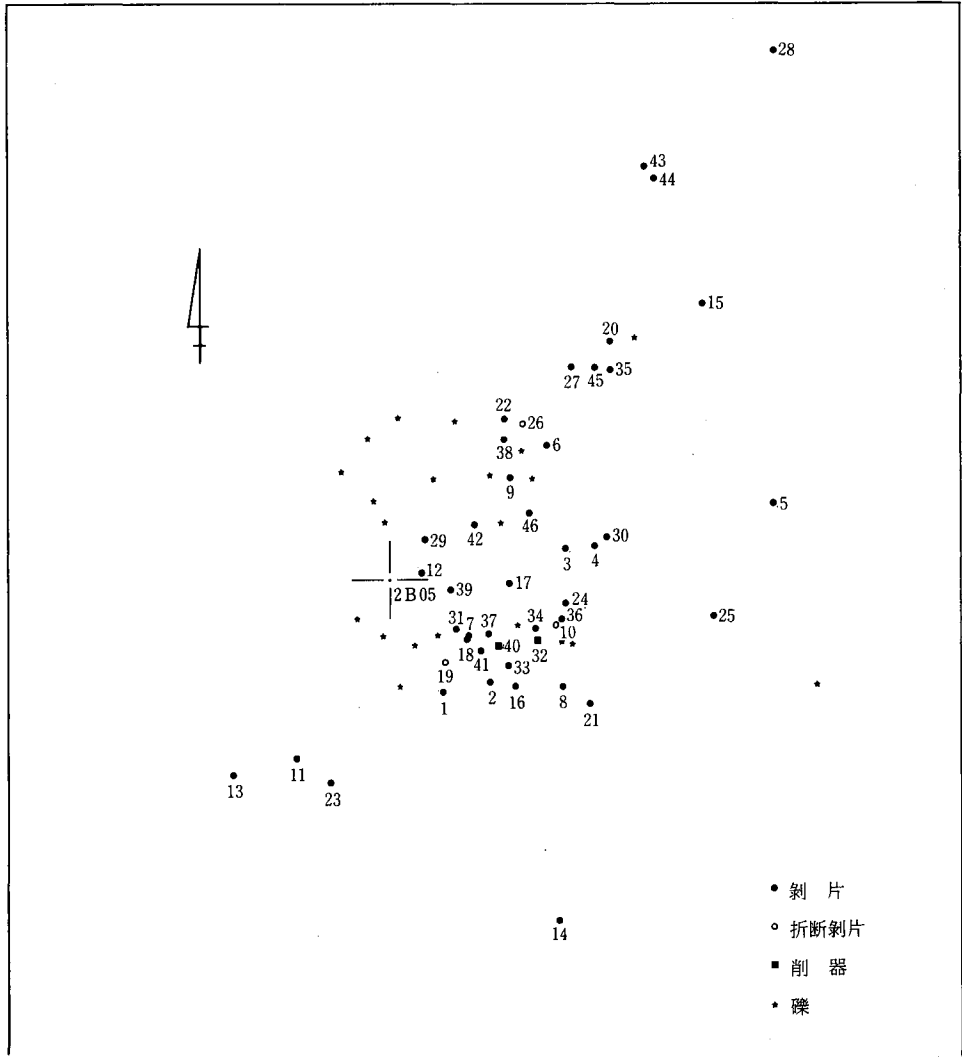
1～9は小形で自然面を全くあるいはほとんど残さず、打面も欠損するか点状打面が多い。これをIa類とする(また、小形で表面全体に自然面を残すものをIb類とする。46が該当する)。また、1・2は表面に複数の小剥離痕を残しており、他の一群とは多少異なる性格をもつ。

10～12は比較的小形で自然面を全くあるいはほとんど残さない。これをIIa類とする。表面の剥離痕も1～9に比べると1面ないし2面の大きなものである。10は下部を表→裏の衝撃により折断される。

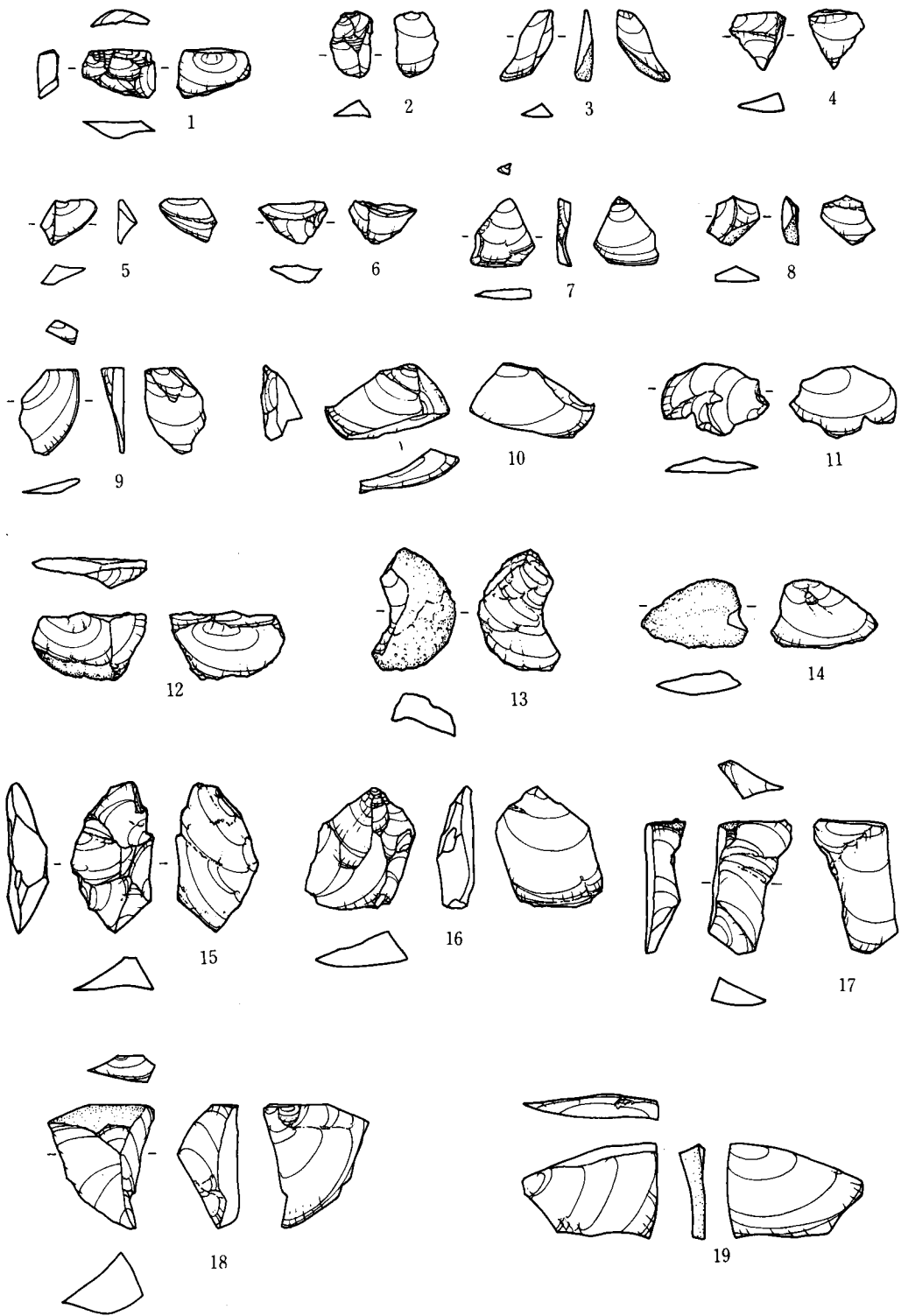
13・14は比較的小形で表面全体に自然面を残す。これをIIb類とする。

15～21は中形で自然面を全くあるいはほとんど残さない。これをIIIa類とする。15・16は複数の3方向ないし4方向からの剥離痕を表面にもち、断面三角形を呈することから、石核調整剥片あるいは打面転位後の剥片と思われる。20は表面に細かい調整剥離が施され、扇形を呈す。19は上部を表→裏の衝撃により折断される。

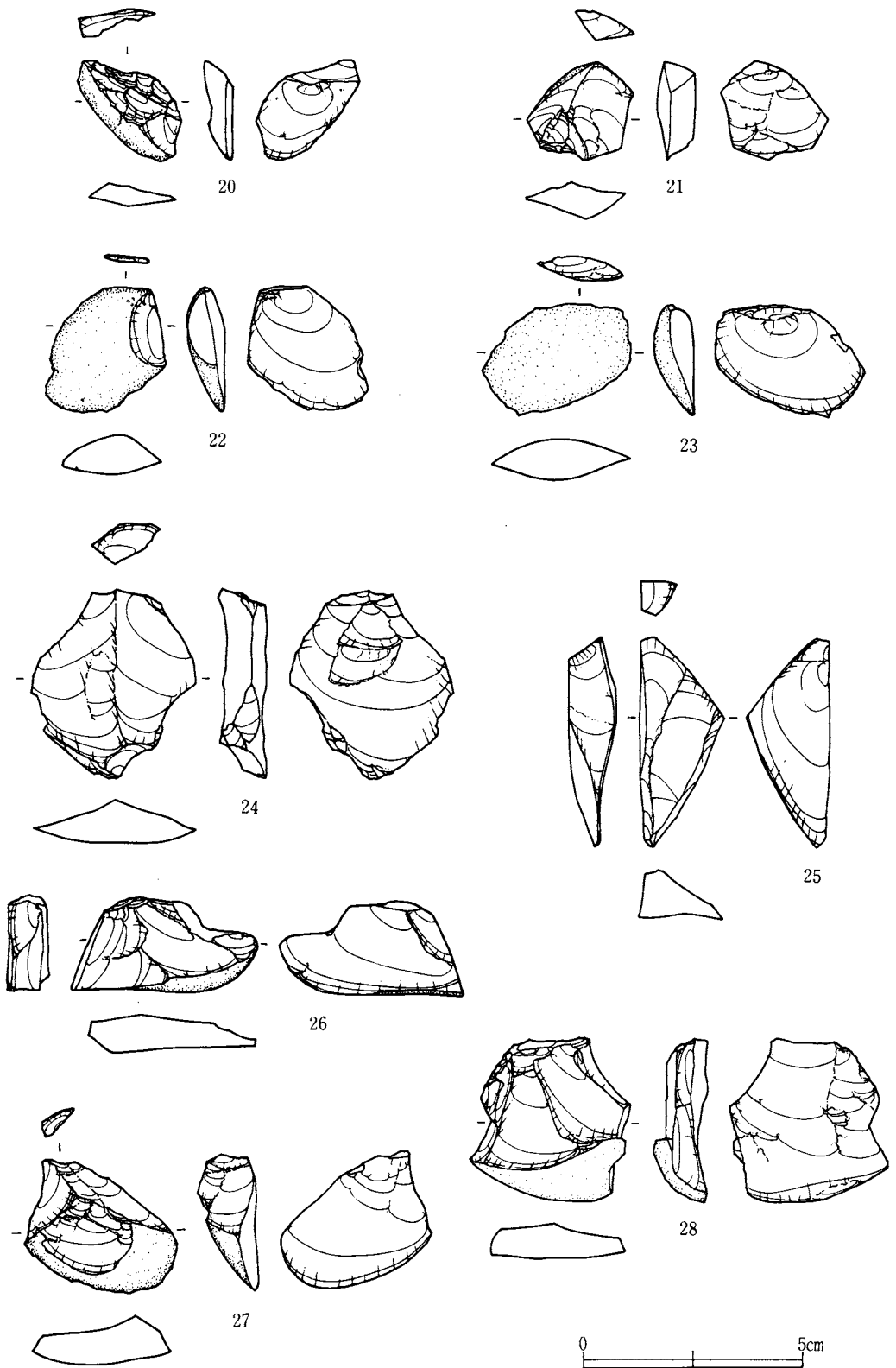
22・23は中形で表面全体に自然面を残す。これをIIIb類とする。



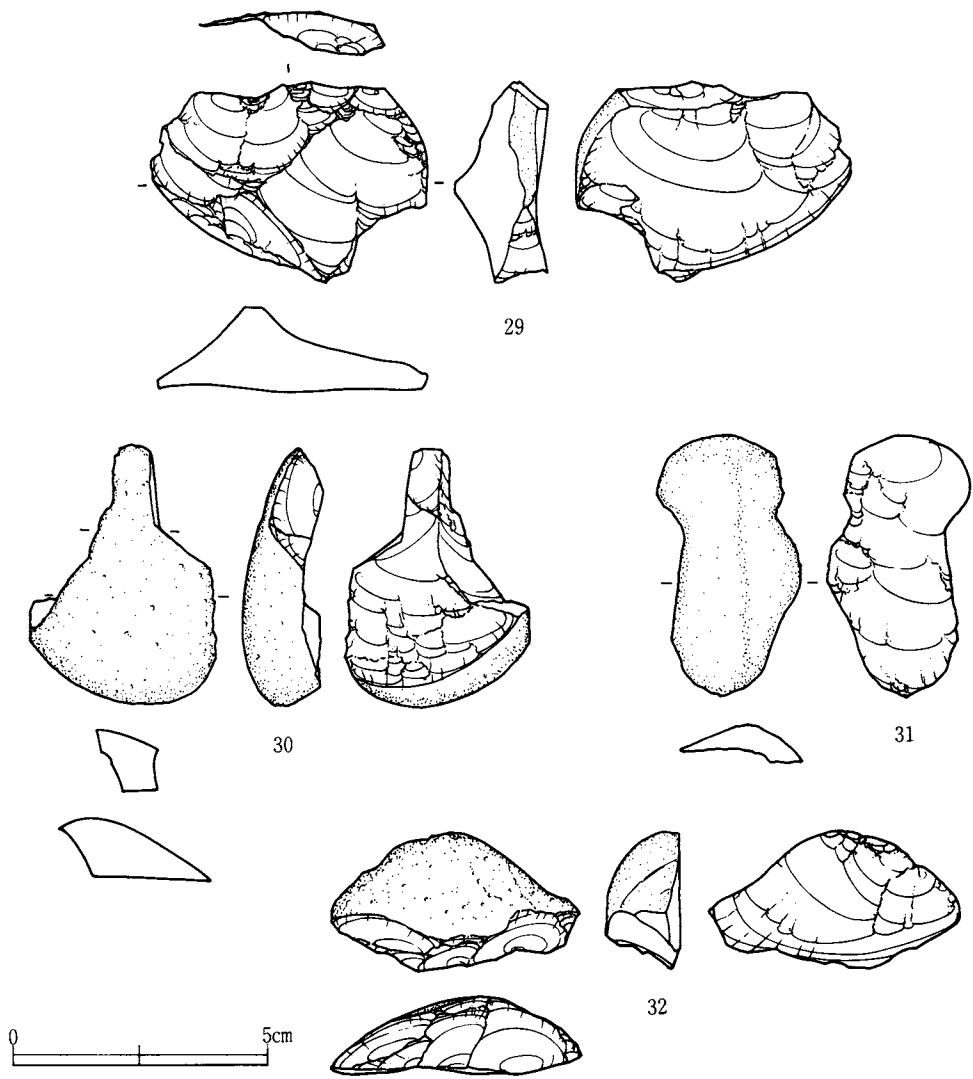
第3図 先土器時代石器群分布図 (1/40)



第4図 先土器時代第1ブロック石器群実測図(2/3) No.1



第5図 先土器時代第1ブロック石器群実測図(2/3) No.2



第6図 先土器時代第1ブロック石器群実測図 (2/3) No 3

第1ブロック出土石器計測表

挿図 番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備 考	遺物 番号	
1	剥片 I _a 類	1.1	1.7	0.5	0.8	砂 岩	剝離面打面。	P1-7	
2	剥片 I _a 類	1.5	1.0	0.4	0.4	玄武岩B	打面欠損。	P1-14	
3	剥片 I _a 類	1.6	1.2	0.4	0.4	砂 岩	打面欠損。右側縁下部に自然面を残す。	P1-26	
4	剥片 I _a 類	1.3	1.3	0.4	0.4	玄武岩A	剝離面打面。	P1-27	
5	剥片 I _a 類	1.0	1.3	0.4	0.3	砂 岩	打面欠損。	P1-31	
6	剥片 I _a 類	1.0	1.5	0.5	0.5	玄武岩A	打面欠損。	P1-40	
7	剥片 I _a 類	1.6	1.5	0.3	0.7	砂 岩	点状打面。	P1-42	
8	剥片 I _a 類	1.1	1.2	0.4	0.4	砂 岩	打面欠損。右側縁下部に自然面を残す。	P1-67	
9	剥片 I _a 類	1.9	1.4	0.5	1.1	砂 岩	剝離面打面。	P1-2	
10	折断剥片 II _a 類	(1.7)	(2.8)	(0.9)	(2.6)	砂 岩	点状打面。下部折断。	P1-23	
11	剥片 II _a 類	1.6	2.4	0.3	0.7	玄武岩B	打面欠損。	P1-53	
12	剥片 II _a 類	1.5	2.6	0.6	1.7	玄武岩A	複剝離面打面。下端部に自然面を残す。	P1-44	
13	剥片 II _a 類	2.7	1.9	1.2	5.1	玄武岩B	複剝離面打面。表面全体に自然面を残す。	P1-1	
14	剥片 II _a 類	1.5	2.4	0.5	1.8	玄武岩B	原面打面。表面全体に自然面を残す。	P1-70	
15	剥片 III _a 類	3.3	1.9	0.9	3.7	玄武岩B	剝離面打面。	P1-35	
16	剥片 III _a 類	2.7	2.5	0.8	4.3	砂 岩	点状打面。	P1-64	
17	剥片 III _a 類	3.0	1.9	0.9	3.2	砂 岩	剝離面打面。上端部に自然面を残す。	P1-22	
18	剥片 III _a 類	2.8	2.4	1.4	5.6	砂 岩	剝離面打面。上端部に自然面を残す。	P1-12	
19	折断剥片 III _a 類	(2.1)	(3.1)	(0.6)	(3.7)	砂 岩	上部折断。右側縁に自然面を残す。	P1-8	
20	剥片 III _a 類	2.3	2.4	0.7	2.3	玄武岩A	剝離面打面。左側縁に自然面を残す。	P1-37	
21	剥片 III _a 類	2.2	2.4	0.9	4.1	砂 岩	剝離面打面。	P1-72	
22	剥片 III _a 類	2.8	2.7	0.9	6.3	玄武岩B	剝離面打面。表面全体に自然面を残す。	P1-57	
23	剥片 III _a 類	2.5	3.4	0.9	7.2	玄武岩B	剝離面打面。	P1-3	
24	剥片 IV _a 類	4.3	3.7	1.0	12.9	砂 岩	剝離面打面。	P1-25	
25	剥片 IV _a 類	4.7	1.9	1.1	7.4	砂 岩	剝離面打面。	P1-30	
26	折断剥片 IV _a 類	(2.2)	4.2	(1.0)	(9.4)	玄武岩B	打面不明。左側縁折断。下端部に自然面を残す。	P1-56	
27	剥片 IV _a 類	3.1	3.5	1.3	9.1	玄武岩B	剝離面打面。下端部に自然面を残す。	P1-39	
28	剥片 IV _a 類	3.6	3.7	1.2	16.0	玄武岩B	打面欠損。下端部に自然面を残す。	P1-32	
29	剥片 IV _a 類	4.0	5.5	1.9	28.9	玄武岩A	剝離面打面。右側縁上部に自然面を残す。	P1-47	
30	剥片 IV _a 類	5.0	3.7	1.6	23.8	玄武岩B	打面欠損。表面全体に自然面を残す。	P1-28	
31	剥片 IV _a 類	5.1	2.8	1.3	11.0	玄武岩B	原面打面。表面全体に自然面を残す。	P1-11	
32	削 器	2.7	5.0	1.5	16.6	玄武岩A	原面打面。表面全体に自然面を残す。	P1-19	
33	剥片 IV _a 類	3.4	4.8	2.3	34.0	砂 岩	剝離面打面。表面全体に自然面を残す。	} 接合No 1	P1-15
34	剥片 IV _a 類	3.1	3.7	2.1	17.4	砂 岩	原面打面。表面全体に自然面を残す。		P1-18
35	剥片 IV _a 類	4.4	3.6	2.0	24.9	砂 岩	剝離面打面。表面に自然面を残す。		P1-62
36	剥片 IV _a 類	4.5	2.9	1.4	13.4	砂 岩	剝離面打面。下端部に自然面を残す。		P1-41
37	削 器 ?	3.8	4.1	1.2	14.6	砂 岩	剝離面打面。右側縁上部に自然面を残す。		P1-63
38	剥片 I _a 類	1.2	1.1	0.5	0.4	砂 岩	点状打面。	P1-54	
39	剥片 II _a 類	1.7	2.5	0.6	2.1	砂 岩	剝離面打面。刃部作出調整剥片。	} 接合No 2	P1-21
40	削 器	4.2	3.8	1.7	27.3	砂 岩	剝離面打面。表面に自然面を残す。		P1-16
41	剥片 III _a 類	2.5	2.4	1.0	4.3	砂 岩	剝離面打面。	} 接合No 3	P1-13
42	剥片 II _a 類	1.7	2.5	0.6	2.1	砂 岩	剝離面打面。		P1-46
43	剥片 IV _a 類	4.8	3.0	1.8	27.8	玄武岩B	打面欠損。表面全体に自然面を残す。	} 接合No 4	P1-33
44	剥片 II _a 類	3.0	1.9	0.8	3.6	玄武岩B	打面欠損。下端部に自然面を残す。		P1-34
45	剥片 IV _a 類	3.6	2.5	1.2	11.7	玄武岩B	剝離面打面。表面全体に自然面を残す。	} 接合No 5	P1-38
46	剥片 I _a 類	1.2	1.1	0.3	0.5	玄武岩B	剝離面打面。表面全体に自然面を残す。		P1-69

24～29は大形で自然面を全くあるいはほとんど残さない。これをIV a類とする。表面には90度あるいは180度異なる比較的大きな剝離痕を残す。26は左側縁を表→裏の衝撃により折断される。

30・31は大形で表面全体に自然面を残す。これをIV b類とする。

32は横長剝片の下端部に4回の粗い調整により刃部に仕上げた削器である。

ここで、90%以上を占める本ブロックにおける剝片・折断剝片の性格について簡単にふれておきたいと思う。

I a類～IV b類に分類された剝片類は、第12図 剝片別長さ・幅累積度数グラフ(註2)より1.5cm～1.9cm、2.5cm～2.9cm、3.5cm～の3つのピークがみとめられ、これらはそれぞれ小形(I類)、中形(III類)、大形(IV類)の一群に対比される。そして第12図 長幅比グラフをみると同様にほぼ3群に区別されよう。さらに、このグラフからは比較的小形(II類)の横長剝片の一群が区別される。これらのことから、本ブロックには大きく4種類の剝片が残されていることが理解されよう。しかも、これらの剝片類は接合資料1から類推する限り、剝片剝離の諸段階を表現している可能性が高い(註3)。また、このことを裏付けることとして、より小形化するに従い自然面を残さずに、形態的にも定形化する傾向がみられる。また、本ブロックでは石核が検出されていないにもかかわらず、II類・III類に石核の調整剝片の可能性のあるものも検出されている。さらに、接合資料2の39のように削器等の石器製作に伴う剝片も存在することから、II類・III類中の複数の剝離痕を残す剝片類については、他の一群とは区別すべきものかもしれない(註4)。剝片剝離技術については接合資料の観察を経ることにより、正確に把握することが可能である。従ってここでは、本ブロックには大きく4種類の剝片類がそれぞれ剝片剝離の諸段階を表現している可能性があることを指摘するにとどめる。

第1ブロックの接合資料(第9図～第10図)

接合資料No 1

○→33+34→○→○→○→○→○→35→○→○→36→37+38

角柱状の比較的大形の礫を素材とし、中央部の浅くV字状にくぼんだ部分を打面として上位からの加撃により33+34を剝離する。その後、33+34は主要剝離面の中央を加撃して2つに分割している。また、残された石核より5回程、剝片剝離を行なった後、その最終的な剝離面を打面として上位からの加撃により35を剝離する。さらに90度打面転位して2回程左位からの加撃により剝片剝離を行なった後、36が左上位からの加撃により剝離される。続いて37+38が35を剝離したと同じ剝離面を打面として上位からの加撃により剝離される。そして、最後に37の表面の上部左側に上位からの加撃により38を剝離する。37における最終的な剝離は、削器の刃部作出の調整剝離の可能性があり、だとすれば37は削器の未製品となろう。

接合資料No. 2

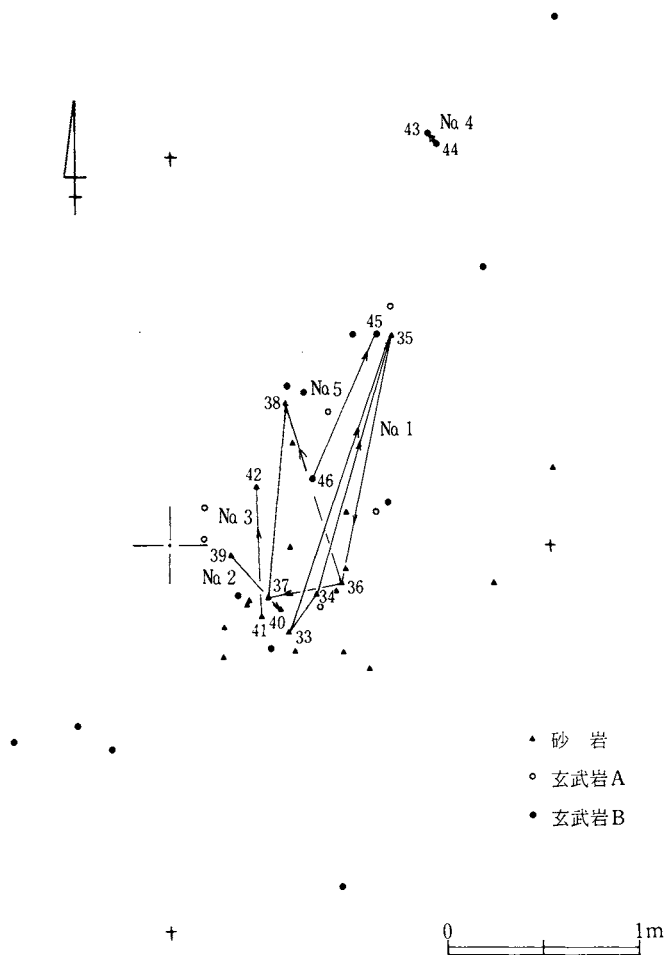
削器と刃部作出の調整剥片との接合資料である。裏面左側縁下部を加撃して39を剥離する。その後も、表面の右側縁中央に粗い調整を施し刃部を作出している。

接合資料No. 3

剥片 2 点の接合資料である。41+42の表面には 3 方向からの剥離痕がみられ、最終的な剥離面を打面として左位からの加撃により42を剥離する。続いて41を剥離する。

接合資料No. 4

剥片 2 点の接合資料である。中形の礫の表皮を 3 回程剥離した後、右側縁中央を打面として44を剥離する。続いて43を剥離する。

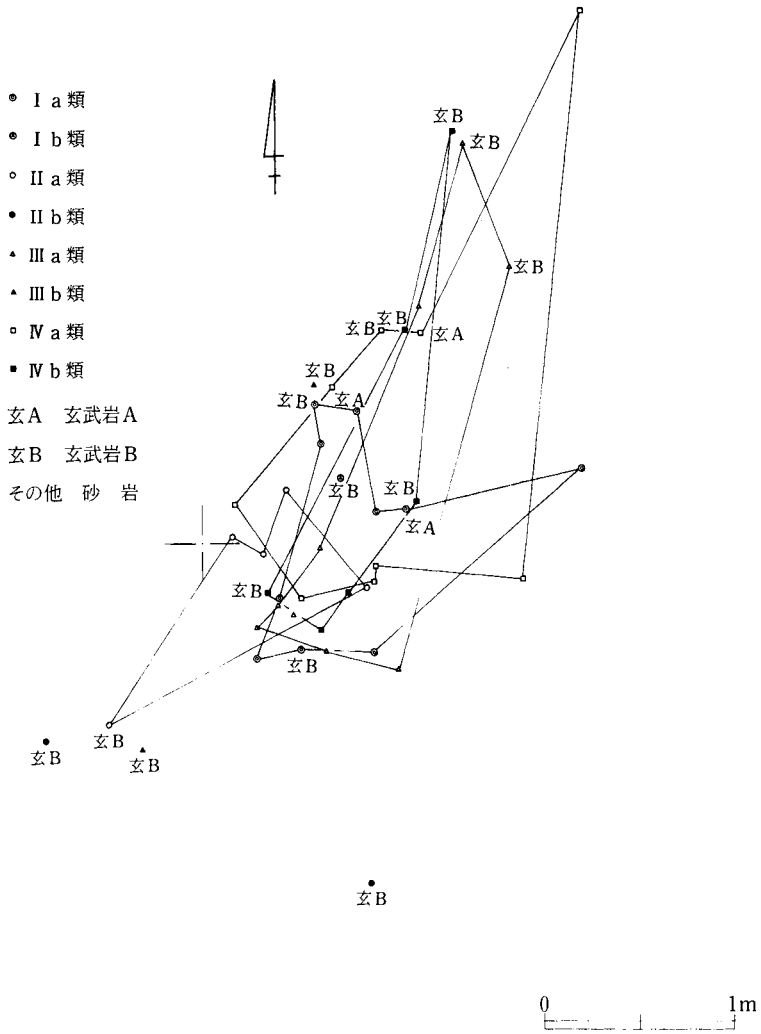


第7図 母岩別資料分布図 (1/40)

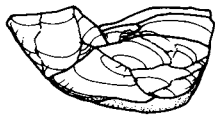
接合資料No.5

剥片2点の接合資料である。中形の礫の上面に打面を作出し、46を剥離する。続いて45を剥離する。

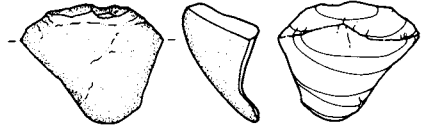
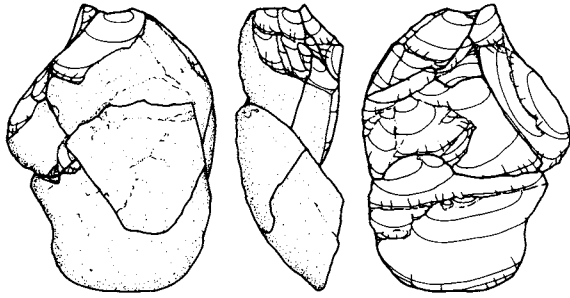
以上、接合資料からは、中形～比較的大形の角礫を素材とし、打面調整はほとんどあるいは全く行わずに先行する剥離面を打面として剥片剥離を行なう一群と比較的丁寧に石核調整を行なう一群がみられる(註5)。さらに、両者ともほぼ90度の打面転位を行なっている。また、前者については、厳密な意味では本ブロックに残された剥片類が目的剥片か石核の調整剥片なのか判断するのは困難である。なぜなら接合資料1の33+34のように初期の段階で剥離され、



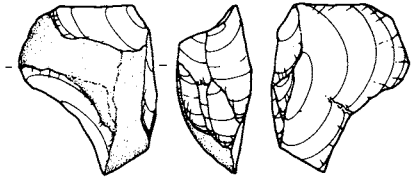
第8図 剥片別概念分布図 (1/40)



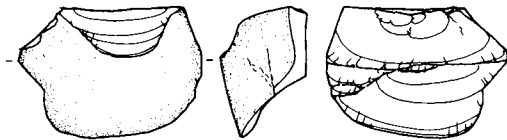
接合資料 No 1
(33+34+35+36+37+38)



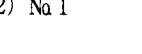
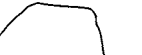
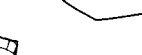
34



35



33

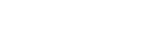
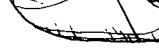
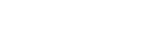
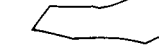


36

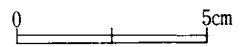
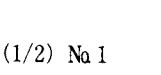
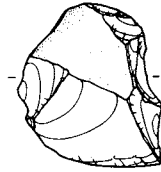
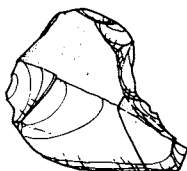
36

39

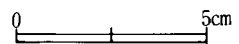
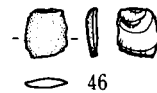
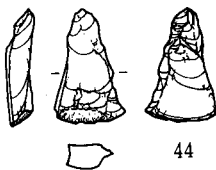
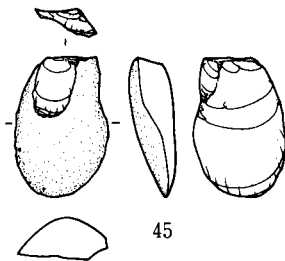
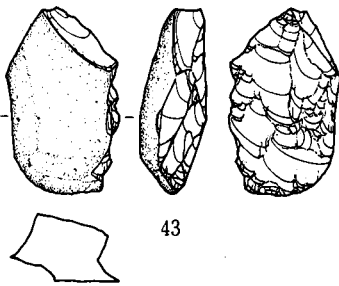
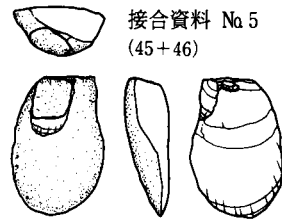
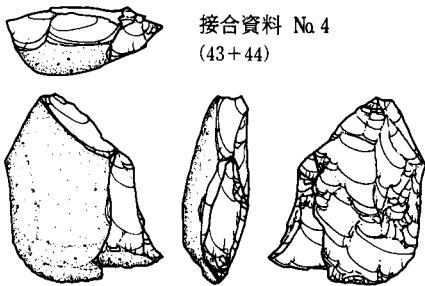
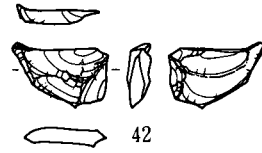
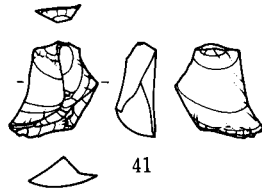
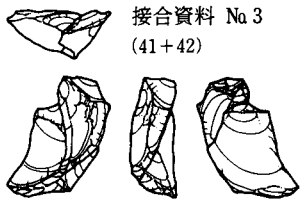
40



接合資料 No 2
(39+40)



第9图 接合資料実測图 (1/2) No 1



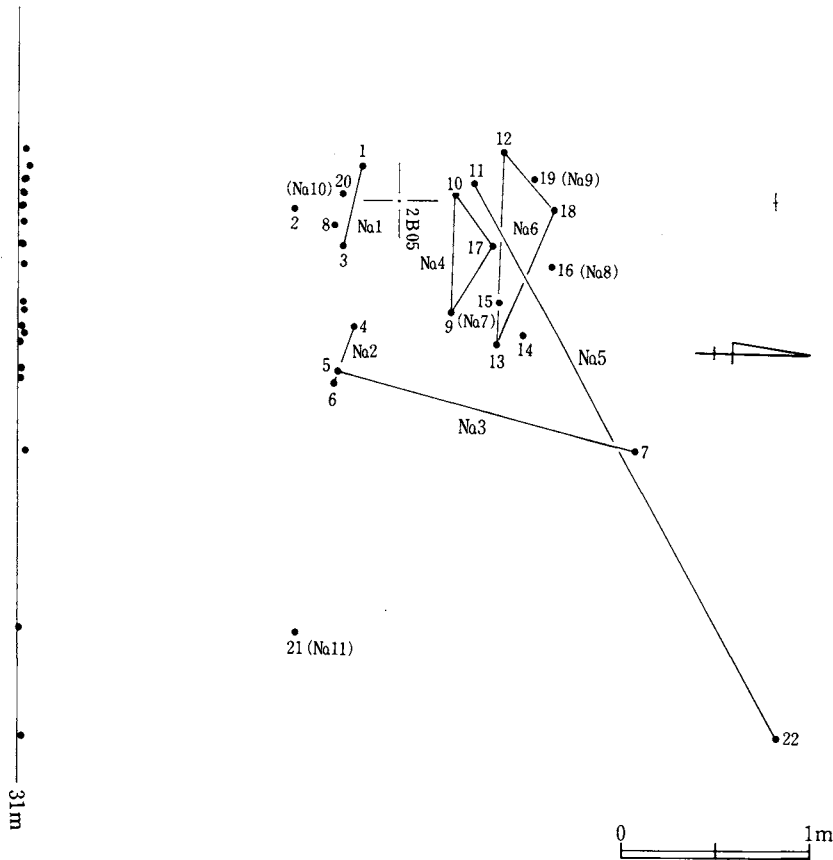
第10図 接合資料実測図 (1/2) No 2

石核の調整剥片的な性格をもつ剥片がさらに2つに分割されたり、32、40のように削器の素材として利用されているからである。逆に言えば、目的的剥片と調整剥片が明確に区別することができないことが、前者の一群を特徴づけることかもしれない。このことは、剥片の形状にも反映され、中形・大形の剥片の長幅比のばらつきは、小形の一群と比較すると大きいものであり、多種多様な剥片が剥離されているといえよう。

以上、剥片、接合資料等の観察を通じて本ブロックにおける剥片剥離技術について概観したわけであるが、本ブロックには石核等が検出されていないことなど、不完全な様相を呈している。これらの資料のみからブロック自体の性格、編年的位置づけを行なうことは避けたいと思う。

第1ブロックの石器群の分布(第3・7・8・11図)

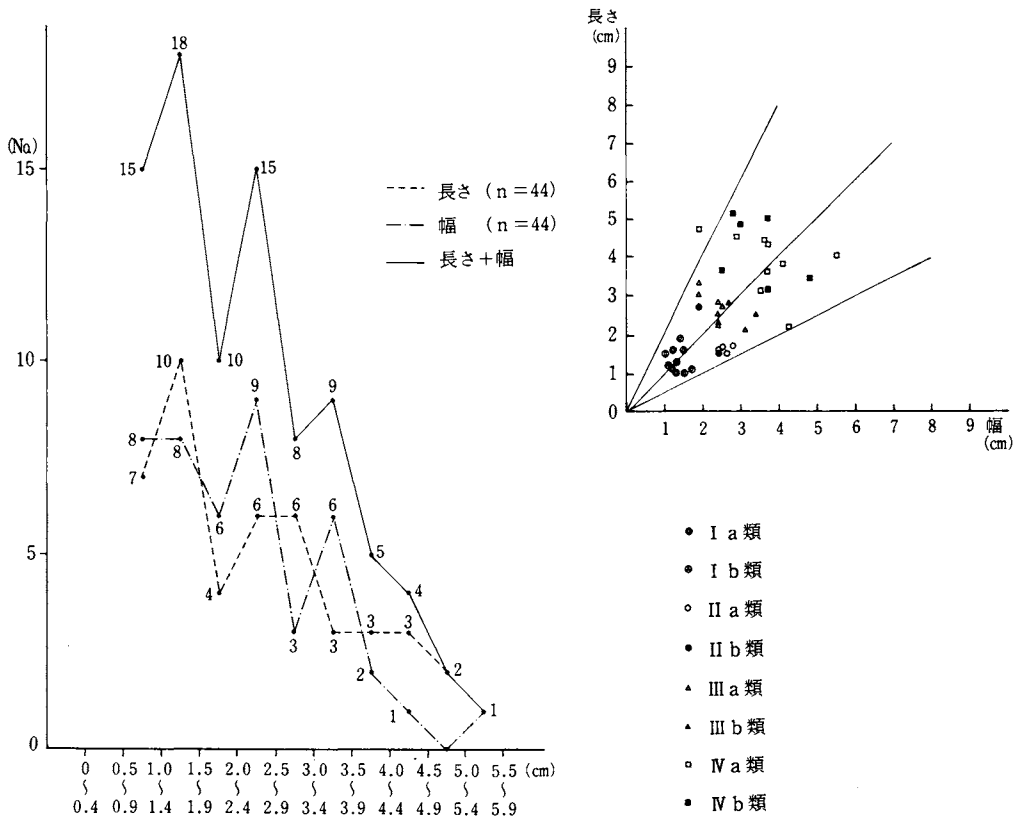
これらの石器群は、南北4m×東西3mの範囲で南北に細長く分布する。器種的には、32・37・40の削器がブロックの南端に分布する。特に40は、刃部作出の調整剥片39との接合資料であり、39で刃部を作出し削器に仕上げられたものが40に移動したことが想定される。さらに、未製品の可能性のある37も北側の38で調整剥片を剥離し、37に移動したと考えられる(註6)。これらのことから、削器の場合、北→南という接合関係がみられ、南側に偏在する傾向がみられる。次に接合資料を中心に剥片の動きをみると、削器同様すべて北⇄南という接合関係がみられる(註7)。さらに、I a～IV b類の剥片の分布をみてみよう。第10図 剥片別概念分布図をみると、I a・I b、II a・II bという小形ないし比較的小形の一群は南側に偏在するのに対し、III a・III b、IV a・IV bという中形ないし大形の一群はほぼブロック全体に分布しているのがわかる。しかも、後者のIII a・III b・IV a類において母岩別分布を考慮すると、玄武岩A・Bが北側に偏在するのに対し、砂岩では南側に偏在する。一方、IV b類では砂岩は同様に南側に偏在するが、玄武岩については偏在性がみられない。これらのことから、剥片についてもI・II類の玄武岩の剥片・I～IV類の砂岩の剥片が南側に偏在し、III・IV類の玄武岩の剥片が北側に偏在する傾向性が理解されよう。本稿では、北⇄南の動きと偏在性が本ブロックには存在し、作出された剥片、石核が別の場所へ搬出されていることを確認するにとどめておきたい。また、礫群との関係であるが、礫群は石器群の西側の外縁に位置し、視覚的にも接合関係においても南北に区分される。また、垂直分布をみると、礫群の出土レベルは石器群の出土レベルとほぼ同一か若干上回る。これらのことから、礫群の形成もこれらの石器群とほぼ同時期と考えてよいであろう。



第11図 先土器時代礫群分布図 (1/40)

第1ブロック礫計測表

個体別資料No	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺存状態	備考	遺物番号
1	(4.7)	(3.7)	(2.6)	(50.8)	流紋岩	1/6	一部赤化。1・3接合。	P1-4・P1-9
2	(4.8)	(3.7)	(1.6)	(30.7)	流紋岩	1/6	ひび割れあり。4・6接合。	P1-17・P1-24
3	(4.2)	(2.6)	(2.1)	(23.1)	流紋岩	1/6	一部赤化、黒色付着物あり。5・7接合。	P1-20・P1-36
4	(10.3)	(8.0)	(4.7)	(250.0)	流紋岩	2/6	一部赤化、黒色付着物あり。9・10・17接合(6点あり)。	P1-45・P1-48 P1-59
5	(6.8)	(4.4)	(6.1)	(220.5)	流紋岩	2/6	一部赤化、黒色付着物あり。11・71接合(17点あり)。	P1-49・P1-71
6	(8.9)	(5.0)	(4.6)	(180.5)	流紋岩	2/6	一部赤化、黒色付着物あり。12・13・14・18接合。	P1-50・P1-51 P1-52・P1-60
7	(5.7)	(4.6)	(6.8)	(944.4)	流紋岩	1/6	一部赤化。15のみ。	P1-55
8	(4.0)	(5.7)	(5.9)	(103.8)	流紋岩	1/6	一部赤化。16のみ。	P1-58
9	(4.1)	(4.6)	(5.2)	(111.9)	流紋岩	1/6	一部赤化、ひび割れあり。19のみ。	P1-61
10	(5.6)	(3.2)	(2.3)	(38.6)	流紋岩	1/6	一部赤化、黒色付着物あり。20のみ。	P1-65
11	(4.1)	(2.5)	(2.0)	(16.7)	ホルンフェルス	1/6	21のみ。	P1-68
不明	(1.3)	(0.8)	(1.0)	(1.0)	流紋岩	1/6	一部赤化。2のみ。	P1-5
不明	(2.2)	(1.8)	(0.5)	(2.7)	流紋岩	1/6	一部赤化。8のみ。	P1-43



第12図 剥片別長さ・幅累積度数グラフ及び長幅比グラフ

註

註1 垂直分布では、遺物は標高31.0m (IV～V層上部) 付近に集中するが、調査所見によると遺物出土層位はIIc～III層となっている。型式学的研究による石器群の編年の位置づけも困難であり、本稿では調査所見を尊重しIIc～III層とした。

註2 表の見方は、破線が長さの度数分布、一点破線が幅の度数分布、実線はこれら長さとの度数を階級毎に累積したものを表す。

註3 接合資料1にはII類・III類はみられないが、同一母岩の接合資料3にIIa類・IIIa類がみられることから、それぞれ類型化された剥片類が剥片剥離過程の諸段階を表現したものと考えてよいのではない。

註4 一般的に表面全体が自然面におおわれた剥片は、石核の最初の調整剥片とみなされようが、本ブロックにおける剥片の性格については本文で後述する。

註5 あるいはこれらの2群も段階的なもので、接合資料1のように自然面を取り去る石核の側面調整の最初の段階のものと、接合資料3のようにかなり調整の進んだ段階のものであるかもしれない。そ

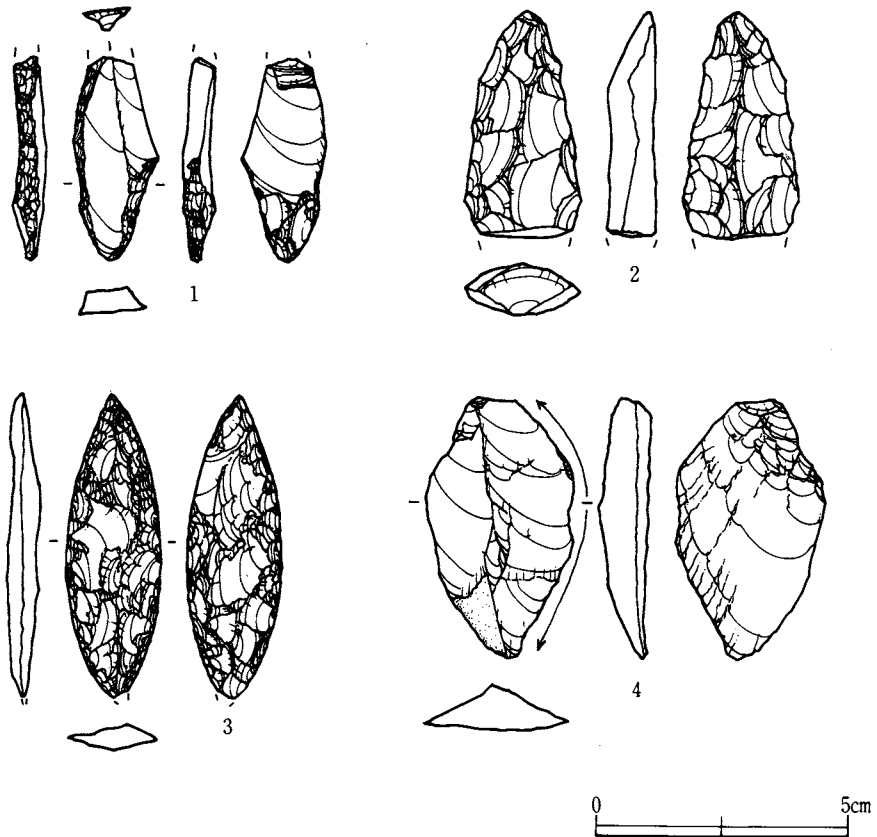
の場合、本ブロックで最初に調整された石核が別の場所に搬出され、そこである程度剥片剥離が行なわれた後、再度本ブロックに搬入される。そこでさらに石核調整が施された後、石核は他の剥片類と一緒に他の場所に搬出したと考えられる。本来、厳密な意味で目的剥片と石核の調整剥片とを区別するには、1文化層全体の剥片剥離技術を明らかにして、遺跡毎のあり方を意義づけることが必要である。本稿では、後述するが接合資料1のあり方と接合資料3のあり方、剥片間の差異、石核調整的な剥片の削器の素材としての利用等から二群に分けた。

註6 逆を想定した場合、刃部作出の調整剥片をわざわざ移動したことになり、使用に耐えない小形の剥片を移動することの意味を説明するのは、未製品の移動の説明に比較してより困難であろう。

註7 接合資料1で東→西(36→37)があるが、これも36の剥離後、石核を38へ移動して37+38、38の順で剥離後、37を移動したと考える方が妥当であろう。理由については註6に同じ。

2) 表面採集・グリッド単独出土石器 (第13図)

1は縦長剥片を素材とし、2側縁に調整加工を施したナイフ形石器である。欠損するが鋭い先端部をもち、裏面基部加工が顕著である。



第13図 表面採集及びグリッド単独出土石器 (2/3)

遺構・グリッド単独出土石器計測表

挿図 番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備 考	遺物番号
1	ナイフ形石器	(3.9)	1.7	0.7	(13.9)	頁 岩	先端部欠損。	141- 4
2	尖 頭 器	(4.4)	2.3	1.0	(10.7)	凝灰岩	下半部欠損。	1B95- 2
3	尖 頭 器	(5.9)	1.9	0.6	(6.3)	玄武岩	基部欠損。	1A87- 3
4	U - f ℓ	5.1	3.0	1.0	11.6	玄武岩	右側縁に微細な剝離痕あり。	2B47- 3

2は両面に非常に丁寧な調整加工を施した柳葉形の尖頭器である。特に周縁に細かい調整がみられる。

3は比較的粗い階段状剝離の施された両面加工の尖頭器である。

4は縦長剝片の右側縁に微細な剝離痕のみられる石器である。

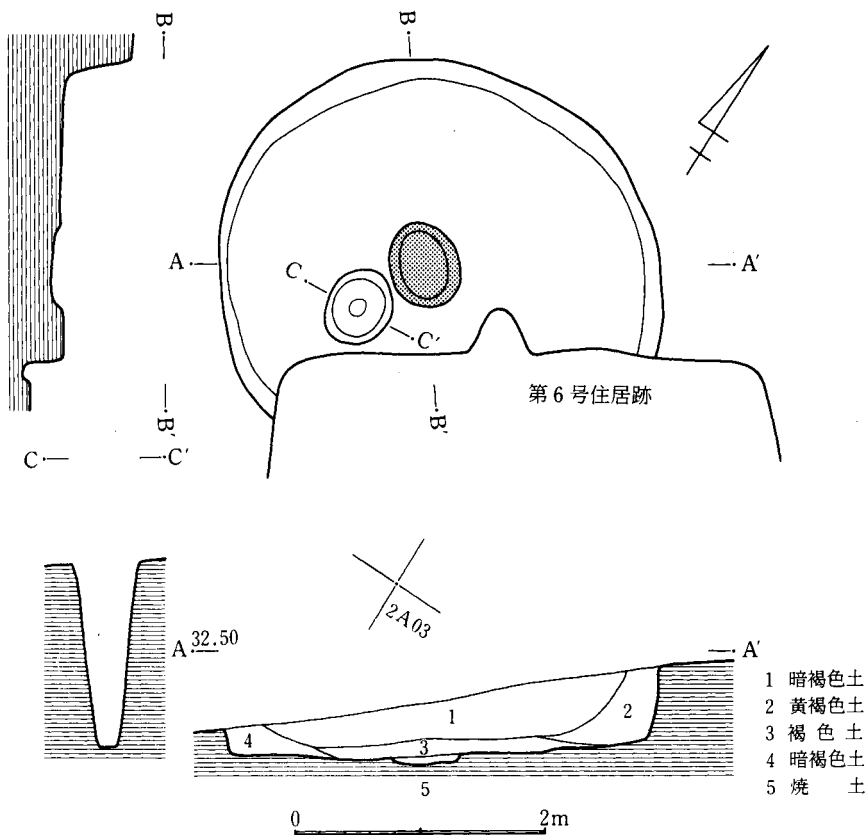
2. 縄文時代

1) 住居跡

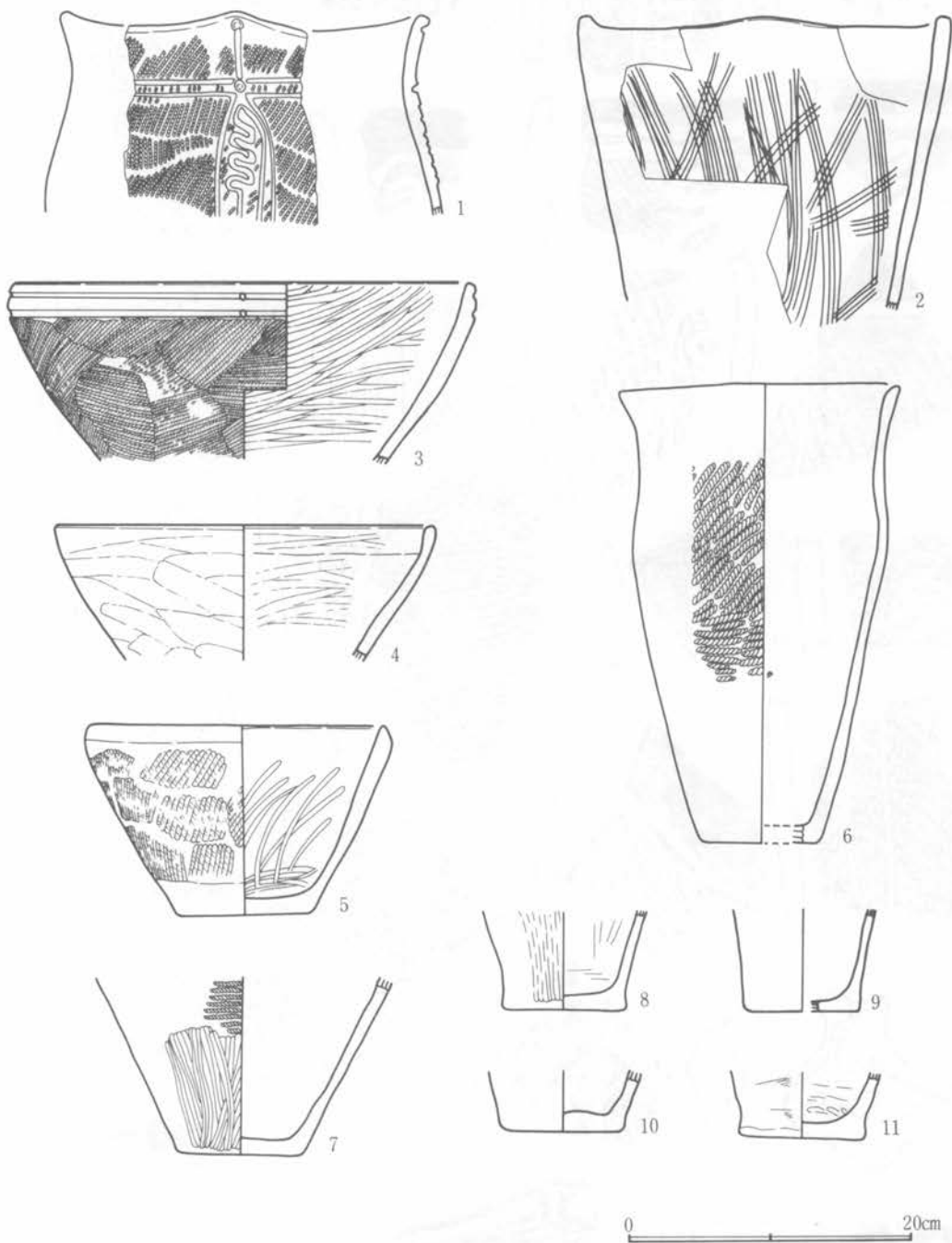
第7号住居跡 (第14図 図版5・18・19)

1 A92グリッドを主体に検出された。調査区の最西端にあって、南西に向かうやや急な斜面に位置している。東方約5 m離れて第9号住居跡が位置している。

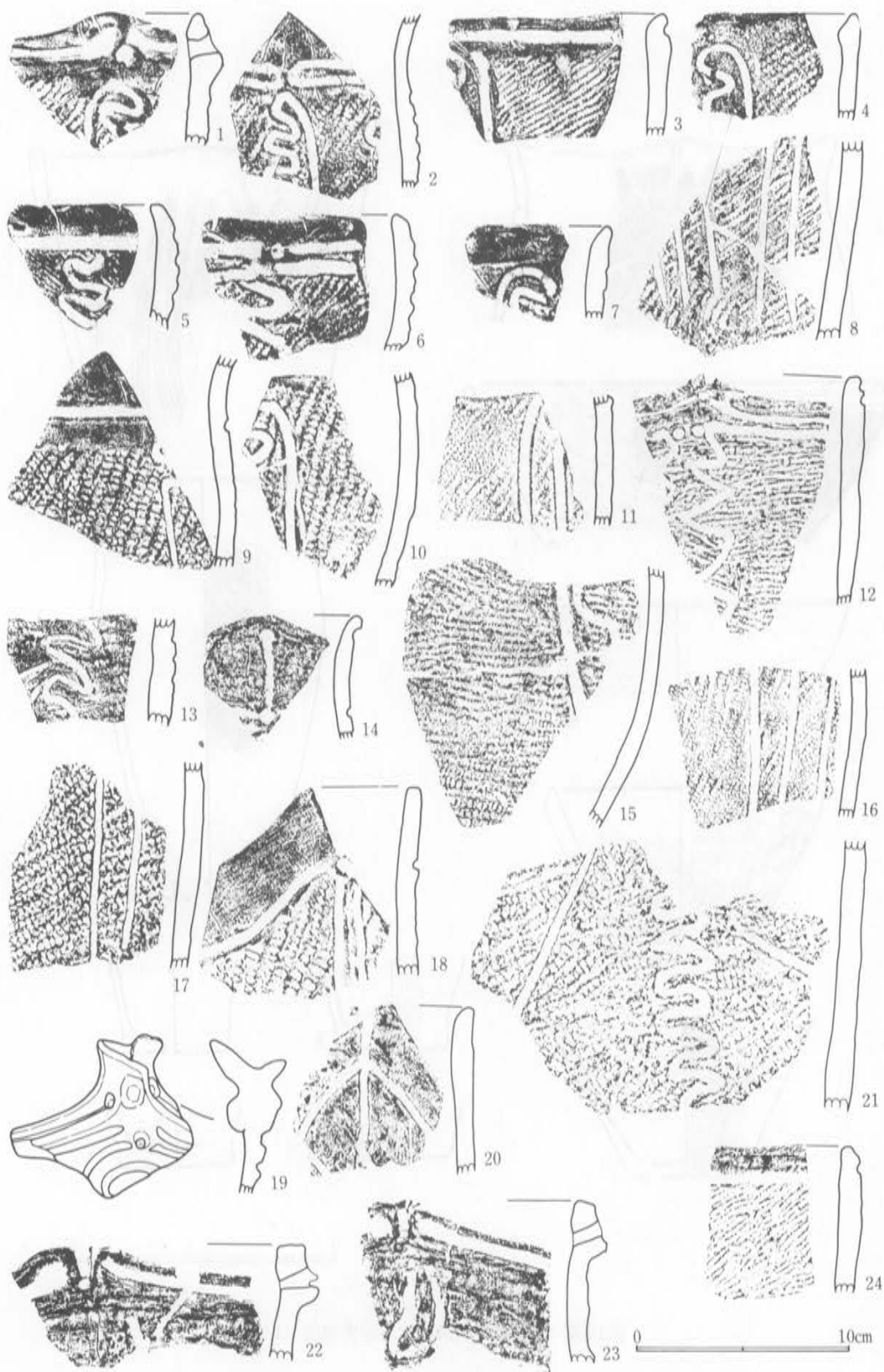
遺構 南東側約 $\frac{1}{4}$ は、カマドをもつ第6号住居跡によって切られ消失している。プランは、直径3.50mの円形と推定され、検出された縄文時代後期の住居跡群のうち最も小規模な住居跡である。炉はほぼ中央に位置しており、長軸66cm、短軸54cmの楕円形を呈する。炉の掘り込みは床面から9 cmと浅く、平らな炉底は全体に焼土化し、著しく硬化している。床面は軟らかく、硬化した部分は認められない。また床面の北と南で比高差8 cmを計り、南へ向かい若干傾斜している。壁は床面からゆるく立ち上がり、床面と壁の境界は不明瞭である。残存する壁高は北壁で66cm、西壁で36cm、南壁で14cmである。床面精査後、炉に近接して直径60cm、深さ142 cm



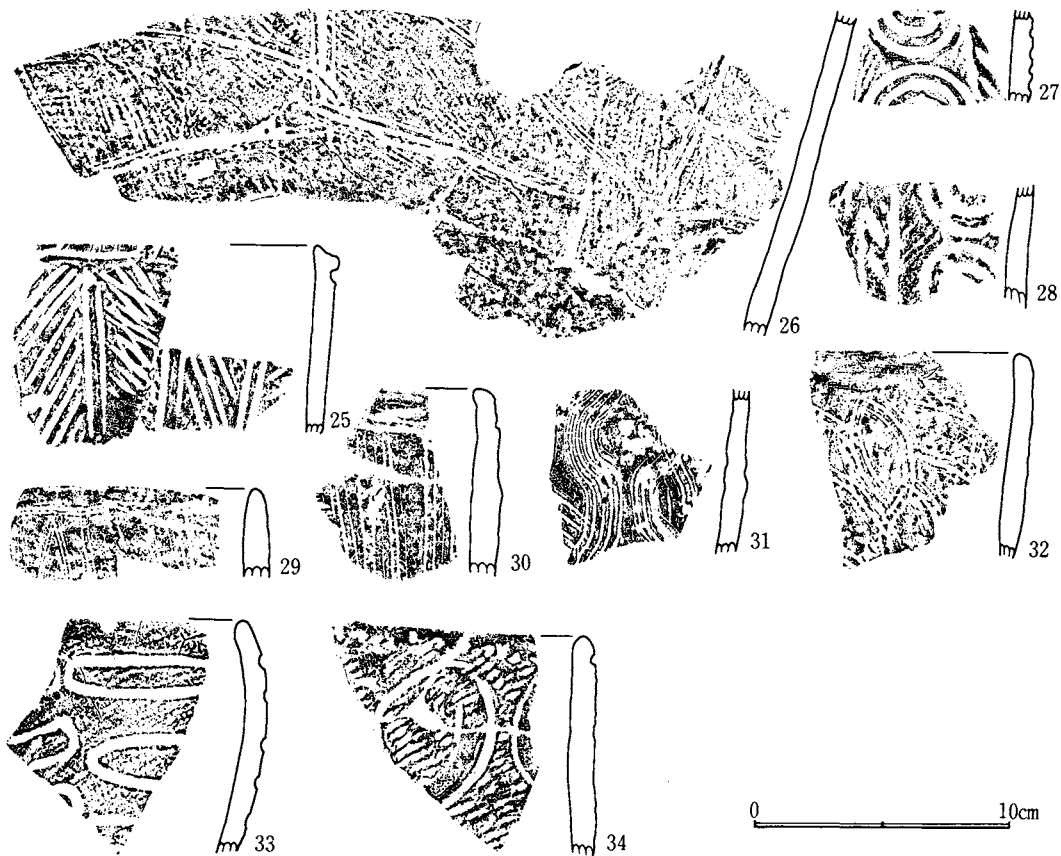
第14図 第7号住居跡実測図 (1/60)



第15图 第7号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第16图 第7号住居跡出土土器拓影图(1/3) No 1



第17図 第7号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No 2

の円形ピットが検出された。このほかにピットが検出されていないことから、炉に近いとはいえ、このピットを柱穴と判断してもよからう。ピットは垂直に掘り込まれており、極めて深いものである。推定される床面積は9.66㎡である。

遺物出土状況 遺物の出土量は住居跡の規模に対応してあまり多くない。土器はすべて覆土中から出土している。土器の遺存は悪く大半が小破片である。唯一第15図6の深鉢が完形に近い状態で出土しており、他に鉢が4点出土している。また、破片で土製円盤1点が覆土中から出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第1期に属すると考えられる。

遺物 土器は蕨手文の施されたものが主体を占めており、全体に古い様相を示している。

第15図1は口縁部近くに頸部をもつ深鉢である。頸部には横走沈線を2本めぐらせ、胴部に弧線を伴う蕨手文を施している。地文はLR単節縄文。第IV群1類b種。同図2は器厚の厚い小波状口縁の深鉢である。櫛状工具によって弧状の条線文を施している。第IV群7類b種。同図3は口縁部に2本の沈線をめぐらせ、沈線内に刺突を施している。下段の沈縁以下はL無節

第7号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
7-1	深鉢 A II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(26.1) 底径 — 器高(14.2)	口縁(4) 胴部(4)	竹	LR	頸部に沈線がめぐる。蕨手文の左右に弧線を施す。	覆土	第IV群 1類b種
7-2	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(26.2) 底径 — 器高(20.6)	口縁(4) 胴部 1	櫛	—	単位を構成しない条線文を施す。	覆土	第IV群 7類b種
7-3	鉢 B	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(32.0) 底径 — 器高(12.7)	口縁 平 胴部 1	竹	L	口縁部に2本の沈線がめぐる。沈線内に刺突文を施す。	覆土	第IV群 8類b種
7-4	鉢 B	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(26.7) 底径 — 器高(9.4)	口縁 平 胴部 1	—	—	無文。へら状工具による粗い器面調整。	覆土	第IV群 9類
7-5	鉢 A	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 完	口径 20.7 底径 9.1 器高 13.0	口縁 平 胴部 1	—	L	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
7-6	深鉢 A III	口縁 3/4 胴部 完 底部 1/4	口径 19.9 底径 (7.0) 器高 32.1	口縁 平 胴部 1	—	LR	地文のみ。胴部中位のみ縄文施文。	覆土	第IV群 8類a種
7-7	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 2/3	口径 — 底径 (8.7) 器高(12.5)	口縁 1 胴部 1	—	LR		覆土	第IV群
7-8	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 完	口径 — 底径 10.0 器高 (7.0)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
7-9	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/2	口径 — 底径 (8.0) 器高 (7.3)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
7-10	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 完	口径 — 底径 8.7 器高 (4.3)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
7-11	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 完	口径 — 底径 9.0 器高 (4.6)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群

縄文を全面に施している。内面は平滑で調整痕を明瞭に残す。胎土・焼成ともに良好。第IV群8類b種。同図4は無文で外面はへら状工具で粗い調整を行っている。内面の調整は比較的良い。胎土は粗い。第IV群9類。同図5は比較的遺存のよい鉢である。外面にはL無節縄文が施されているが摩耗が著しく不明瞭である。第IV群8類a種。同図6はほぼ完存する深鉢である。緩くくびれる頸部をもつ。縄文は太いLR単節縄文で頸部から胴部中段にかけて斜位に施文されている。胎土は砂粒を含み粗い。第IV群8類a種。同図7～11は深鉢の底部である。8～11は小型の深鉢であろう。

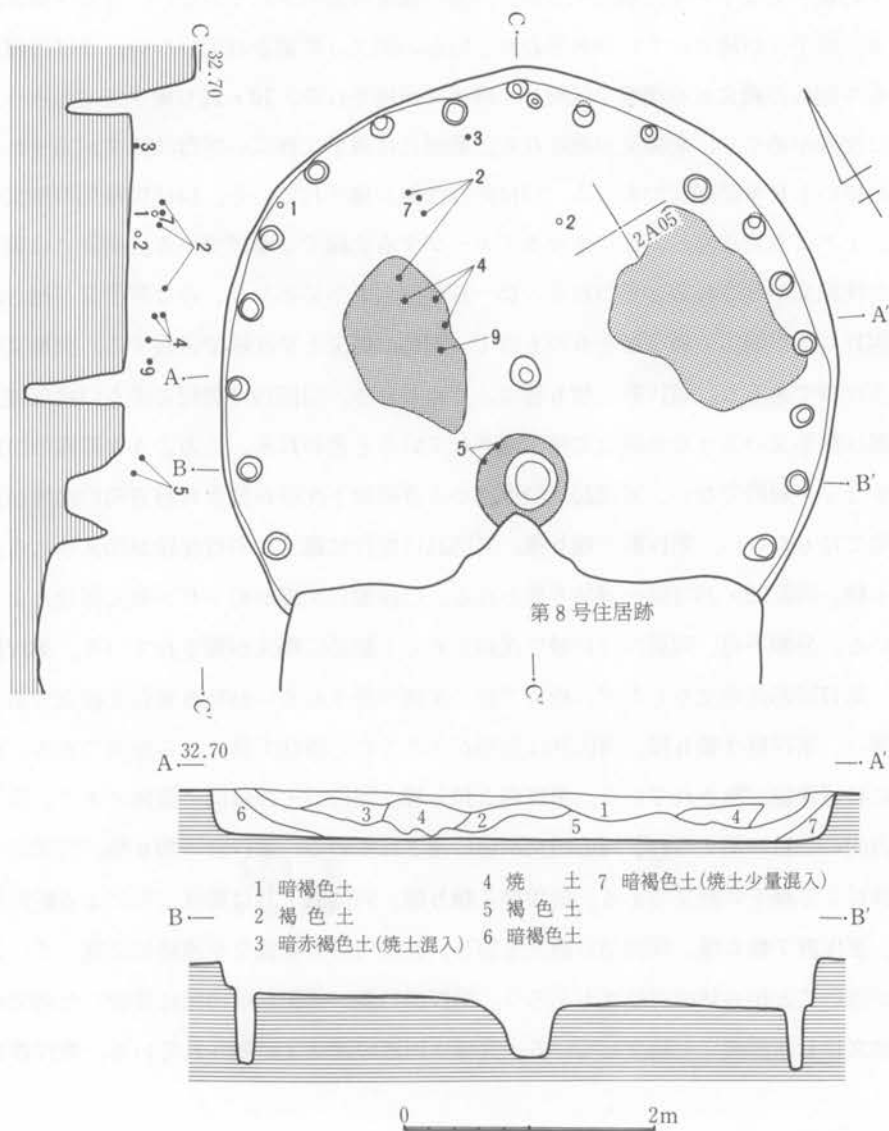
第16図1～4は蕨手文を施し、文様内部の縄文を磨消している。みな第IV群1類a種に属する。1は口縁部に沈線がめぐり、波頂下は刺突文及び蕨手文が施される。2は口縁から頸部にかけて無文帯をもち、くびれに2本の沈線がめぐる。胴部には単純な蕨手文を施している。3は口縁部に沈線がめぐり、蕨手文と思われる文様を施して内部の縄文を磨消す。4は単純な蕨手文である。口縁部が肥厚している。同図5～17は蕨手文や蛇行沈線文など比較的単純な文様を施すもので、文様内部の縄文を磨消さない例である。第IV群1類b種に分類される。5・6はともに口縁部に若干の無文帯をもち、胴部の縄文とを沈線で区画している。胴部には蛇行沈

線を施す。7の蕨手文は1・4に類以するが、内部の縄文は磨消されていない。8は深鉢の胴部下半である。蕨手文が施されていると思われ、内部の縄文は磨消されていない。9は口縁部に無文帯をもち胴部の縄文とを沈線で区画し、蕨手文が施される。10・11も蕨手文であろう。12は口縁部に沈線がめぐり、刺突文が施される。胴部には蕨手文類似の蛇行沈線文が施される。地文の縄文は細いLR単節縄文であろう。13は蛇行沈線が施されている。14は口縁部の無文帯部分である。上下に刺突を施し、それをゆるくカーブする沈線でつなげている。胴部には蕨手文乃至単純な沈線文が施されると思われる。15～17は胴部下半にあたり、みな蕨手文が施されている。同図18はやや幅広の無文帯をもつもので、胴部の縄文とを沈線で区画する。胴部文様は単純な垂下沈線であろう。第IV群1類b種にふくめられる。同図19は突起を伴う口縁部破片である。胴部は蕨手文のような単純な文様が施されていると思われる。このような形態の口縁部は量的に少なく一般的でない。同図20は口縁部から直接垂下沈線が施され斜方向の沈線が加えられる。地文はもたない。第IV群5類b種。同図21は蛇行沈線文に斜行沈線が加えられる。第IV群3類b種。同図22・23は同一個体と思われる。口縁部に沈線がめぐり、無文部分はよく研磨されている。分類不可。同図24は口縁に沈線がめぐり胴部に縄文が施されている。第IV群8類b種か。第17図25は地文をもたず、極めて密に沈線が施されるいわゆる集合沈線文である。器厚はやや薄い。第IV群3類h種。同図26は先端がささくれた棒状工具による施文である。垂下沈線の上に斜行沈線が施されている。第IV群3類b種。同図27・28は同一個体である。垂下隆帯上に斜方向の刻目が加えられ、同心円文が密に施されている。第IV群6類a種。同図29・30は櫛状工具による垂下条線文である。第IV群7類b種。同図31・32は櫛状工具による蛇行条線文である。第IV群7類c種。同図33は縄文を施し、長楕円形の沈線文を連続的に施している。断面の彎曲が強いことから鉢の可能性もあろう。第IV群11類。同図34は口縁に連続した刺突が施される。地文はL無節縄文を施文している。文様は円形の沈線文が施されている。第IV群11類。

第9号住居跡（第18図 図版5・18・29・69）

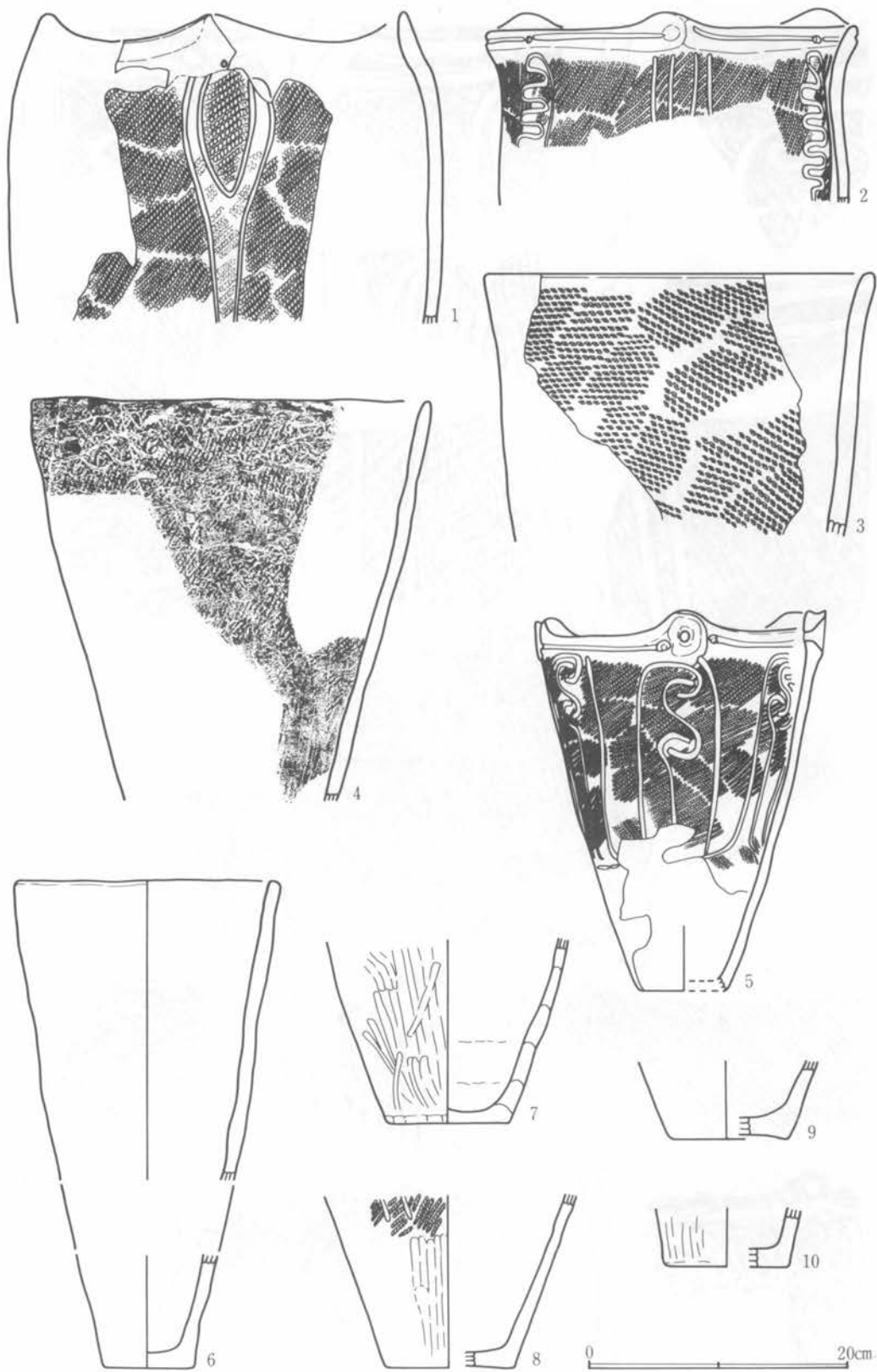
2A04グリッドを主体に検出された。第7号住居跡同様南西に向かう斜面に位置している。南東約1.2m離れて第10号住居跡が隣接する。

遺構 南西側約 $\frac{1}{2}$ は、カマドをもつ第8号住居跡によって切られ消失している。炉は第8号住居跡のカマド煙道部に若干壊されているが、ほぼ完存する状態である。プランは直径5.00mの円形と推定される。炉は中央からやや南西に寄った位置にあり、円形を呈する。直径70cm、深さ41cmを計る。炉の中央はピット状に深く掘り込まれており、炉の断面は途中から急激に落ち込んだ状態となっている。このピット状の深い掘り込み部分は、まったく焼土化していないにもかかわらず周囲はドーナツ状に著しく焼土化していた。このことから、炉の中央には間断

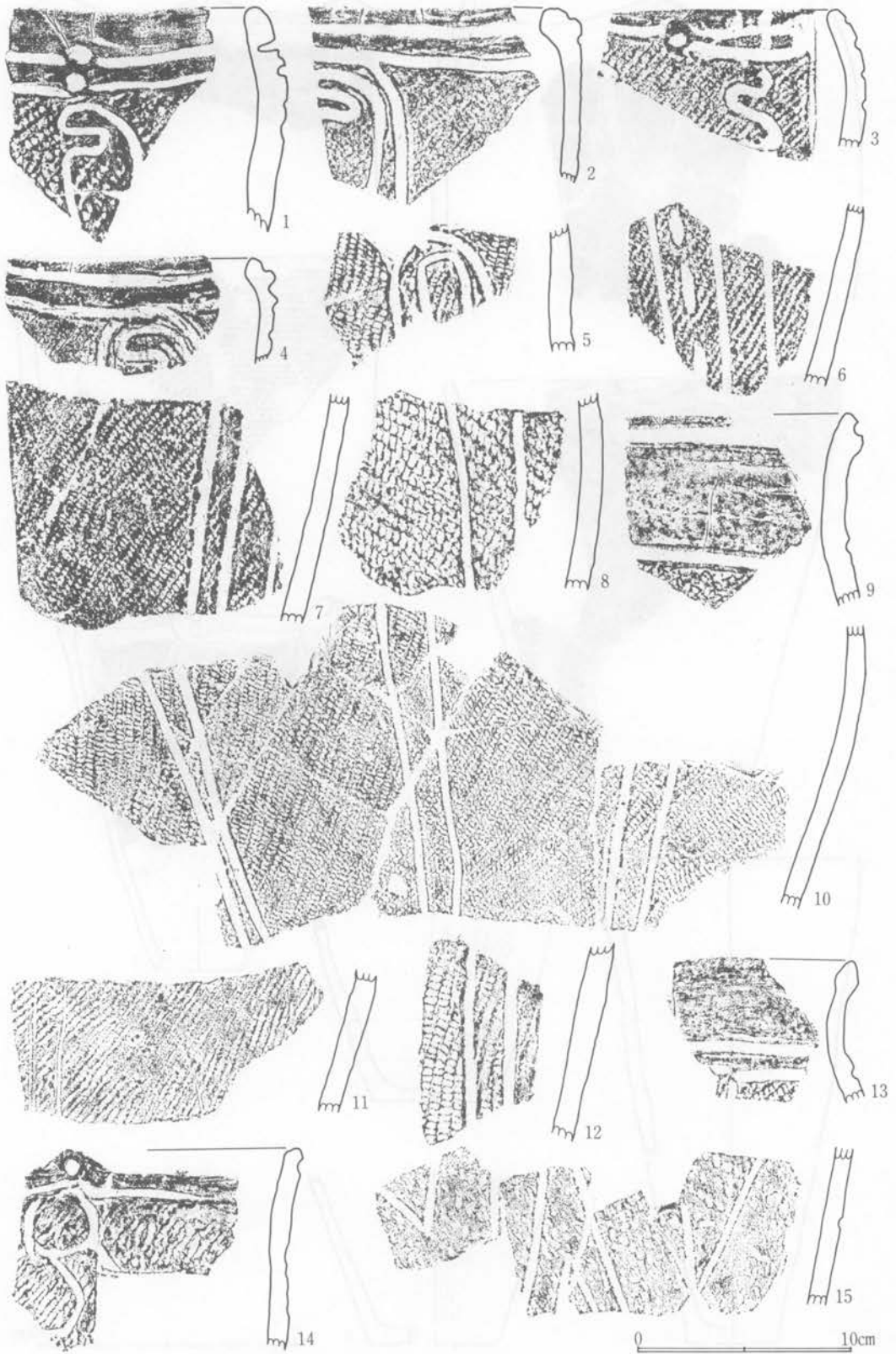


第18図 第9号住居跡実測図 (1/60)

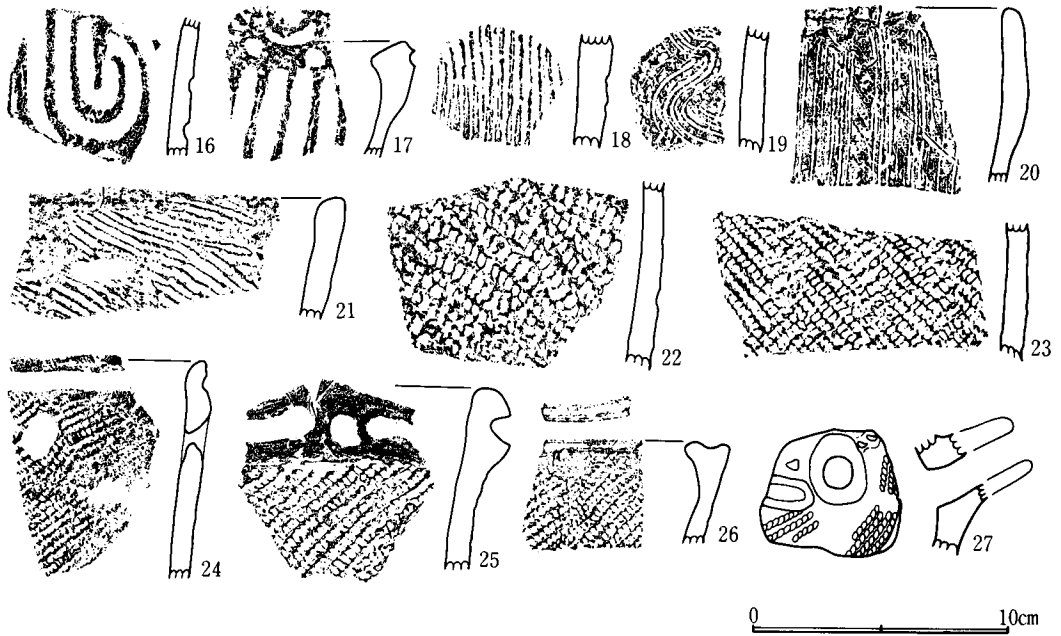
なく土器が据え置かれていた可能性が高く、そのために炉の中央をのぞく他の部分が著しく焼土化したものと考えられる。床面は平坦で全体に硬質である。壁は北東部でやや傾斜するほかはほぼ垂直に立ち上がる。残存する壁高は北壁で52cm、東壁で39cm、西壁で15cmである。ピットは中央に1ヶ所、壁沿いに18ヶ所の合計19ヶ所検出された。中央のピットは直径24cm、深さ72cmで垂直に掘り込まれている。壁沿いのピットの深さは16cm～60cmを計り、平均42cmである。間隔は60cm～65cmとほぼ等間隔に配置されている。住居中央に向かい若干内傾するピットは5ヶ所で認められ、他は垂直に掘り込まれている。覆土中位から図示したように焼土が検出され



第19图 第9号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第20图 第9号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 1



第21図 第9号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No 2

第9号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
9-1	深鉢 B I	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(27.7) 底径 — 器高(24.3)	口縁(4) 胴部(4)	棒	L R	口縁内傾部に無文帯をもつ。鉤状J字状文を施文し、内部の縄文を磨消す。	覆土	第IV群 1類a種
9-2	深鉢 A III	口縁 2/3 胴部 1/2 底部 1	口径 28.3 底径 — 器高(14.8)	口縁 3 胴部 3	竹	L R	口縁部に沈線がめぐる。4本の垂下沈線の間には蕨手文を施す。	覆土	第IV群 2類a種
9-3	深鉢 A III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(29.7) 底径 — 器高(20.0)	口縁 平 胴部 1	—	RLR	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
9-4	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(30.8) 底径 — 器高(30.3)	口縁 平 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
9-5	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(21.9) 底径(6.8) 器高 28.8	口縁 3 胴部 6	竹	L R	口縁に沈線がめぐる。蕨手文類似の沈線文を施文。	覆土	第IV群 1類b種
9-6	深鉢 B IV	口縁 2/3 胴部 1/2 底部 完	口径 20.5 底径 7.1 器高(37.1)	口縁 平 胴部 1	—	—	無文。	覆土	第IV群 9類
9-7	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/2	口径 — 底径 9.5 器高(14.0)	口縁 — 胴部 1	—	—	—	覆土	第IV群
9-8	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/2	口径 — 底径 10.2 器高(13.1)	口縁 — 胴部 ?	竹	R L	—	覆土	第IV群
9-9	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/2	口径 — 底径(9.2) 器高(6.0)	口縁 — 胴部 1	—	—	—	覆土	第IV群
9-10	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/2	口径 — 底径(9.8) 器高(4.5)	口縁 — 胴部 1	—	—	—	覆土	第IV群

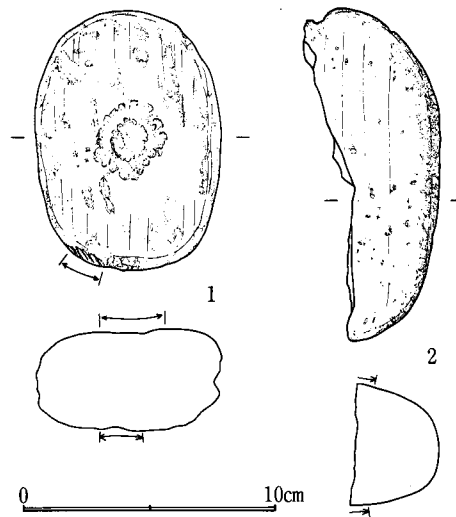
ているが、床面から15cm以上浮いた位置にあり、住居の廃絶に直接関連する火災を原因とした焼土とは思われない。したがって、住居廃絶後覆土形成途中に何らかの原因で焼土が堆積したものと考えられる。推定される床面積は19.74 m²である。

遺物出土状況 遺物の出土量はあまり多くない。土器は覆土中に堆積した焼土の部分から上下して出土しており、床面で確認されたものはほとんどない。土器は深鉢に限られ、鉢や浅鉢は1点も出土していない。他の遺物では注口土器の破片1点と土製蓋1点が覆土中から出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第1期に属すると考えられる。石器は磨石2点が出土し、1は北西壁際から、2は床面よりやや浮いた状態の出土であった。

遺物 出土した土器は第7号住居跡の土器の様相と同じく、文様に蕨手文や疑以的な蕨手文、鉤状J字状文などが施され、堀之内I式でも古い段階のものが主体を占めており、第7号住居跡と同様に堀之内I式期の住居群中最も古い時期の住居跡と考えられる。

第19図1は本遺跡出土土器の中で唯一鉤状J字状文を伴う例である。口縁部にやや幅の広い



第22図 第9号住居跡出土石器実測図 (1/3)

第9号住居跡出土石器観察表

遺物番号	器種	法量 cm, g				石材	調整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	磨石	10.1	7.4	4.0	451	多孔質安山岩	楕円形を呈し、側面調整されやや稜をもつ。全面磨耗、裏面に1ヶ所づつ浅い凹あり、下端一部敲打痕あり。	9-35
2	磨石	12.9	(5.4)	4.7	393	安山岩	楕円形を呈し、側面調整されやや稜をもつ。全面磨耗、裏面に1ヶ所浅い凹あり、一部側面付近磨耗著しい。	9-34

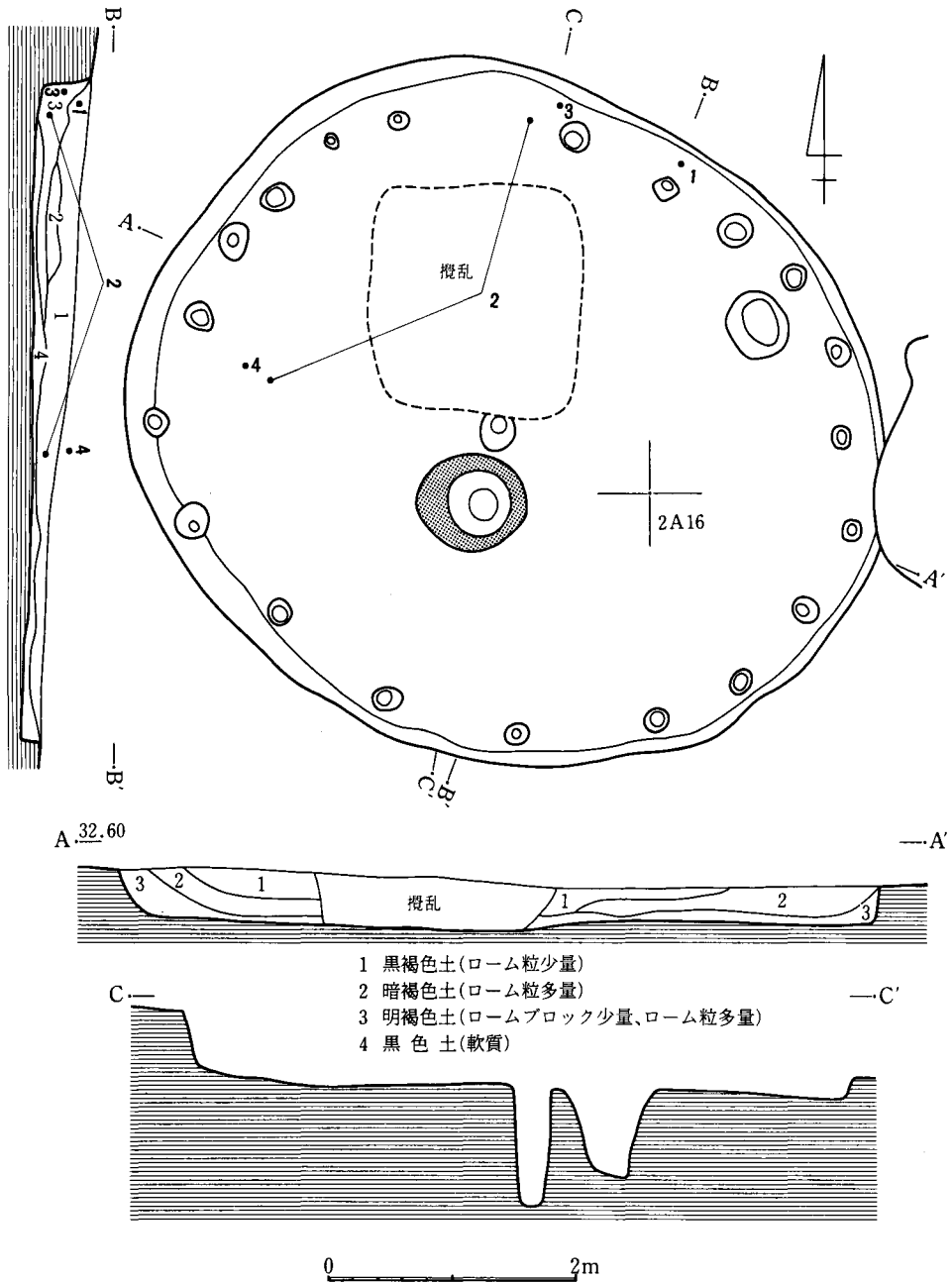
無文帯をもつ。縄文を施文したのち、沈線で文様を描出し、文様内部を磨消している。文様内部を丁寧に磨消してはいるが、原体を強く転がしているため、若干縄文が消えずに残っている。器形は口縁の無文帯がやや内傾し、胴部上半が最大径となる。文様と器形の点で東北地方の影響が極めて強い土器である。同図2は3単位波状口縁の深鉢である。垂下する沈線を単位文様とし、単位文様として蕨手文を施している。第IV群2類a種。同図3はR L R複節縄文を地文とする。器厚は厚い。同図4は底部から直線的に開く深鉢である。L R単節縄文を地文とする。3・4はともに第IV群8類a種。同図5は波状口縁の波頂部に貫通孔を伴う。胴部には比較的単純な蕨手文が施されている。第IV群1類b種。同図6は胴部中位を欠損している。文様はなく、外面は縦位の調整、内面は口縁近くで横位それ以下は縦位の調整が行なわれている。第IV群9類。同図7～10は深鉢の底部破片である。

第20図1～14は第IV群1類b種に分類される。1～4は口縁部破片である。文様は類以しているが、別個体である。みな口縁部が内彎し、2本の沈線によって口縁部無文帯と胴部文様とを区画している。蕨手文や蛇行沈線文の単純な文様を施している。同図5・7・8・10・12はみな蕨手文であろう。文様内部は磨消されていない。同図6は垂下沈線の間列点文を施している。同図9・13はくびれ部に沈線を施し、胴部文様と無文帯とを区画している。無文帯は丁寧に器面調整されている。胴部には蕨手文などの単純な沈線文が施されていると思われる。同図11は半截竹管状工具による沈線文である。同図14は口縁に沈線をめぐらせ、胴部に蛇行沈線文を施している。同図15は胴部下半の破片であるため文様構成はよくわからないが、単位文様の間に斜行沈線を伴うものであろう。第IV群3類b種に分類されよう。第21図16・17は同一個体である。地文に縄文を施さず、太い沈線で文様を描出している。第IV群4類か。同図18～20は櫛状工具による条線文が施されている。18・20は垂下条線文が密に施され、第IV群7類b種に、19は蛇行条線文が疎に施されており第IV群c種に分類される。同図21はR無節縄文が施されている。同図22・23はR L単節縄文である。同図21～23は第IV群8類a種に分類される。同図24～26は口縁に沈線がめぐり以下L R単節縄文が施されている。第IV群8類b種。同図27は注口土器破片である。地文にL R単節縄文を施文し、沈線と刺突を加えている。摩耗が著しい。

第10号住居跡（第23図 図版6・18・30）

2A05グリッドを主体に検出された。南西に向かう斜面に位置しており、第9号住居跡が北西に隣接している。

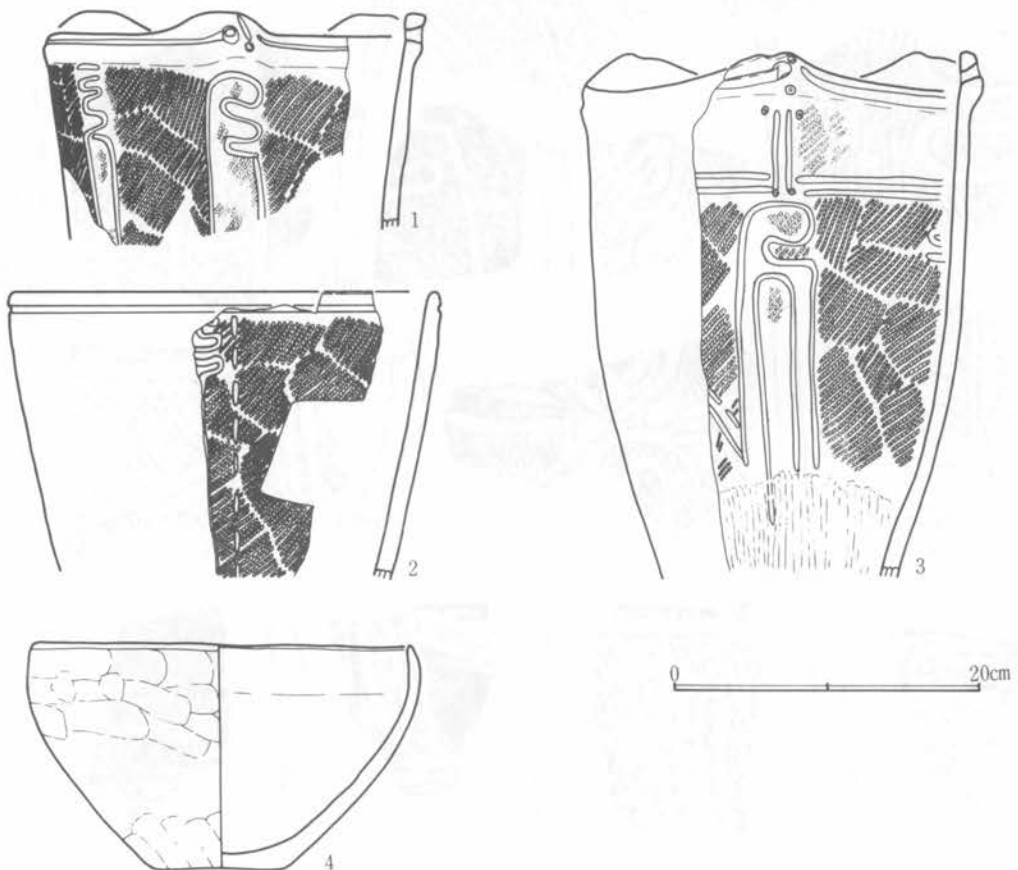
遺構 カマドをもつ第12号住居跡のコーナーが南側の壁をわずかに切るほか、床面には160cm×180cmの方形の攪乱が認められる。プランは楕円形に近く、長軸6.10m、短軸5.25mである。炉は中央からやや南に寄った位置に設けられている。直径80cmを計る円形を呈し、内部にはひと回り小さなピットが検出された。第9号住居跡の炉と同様ドーナツ状に焼土が認められ、



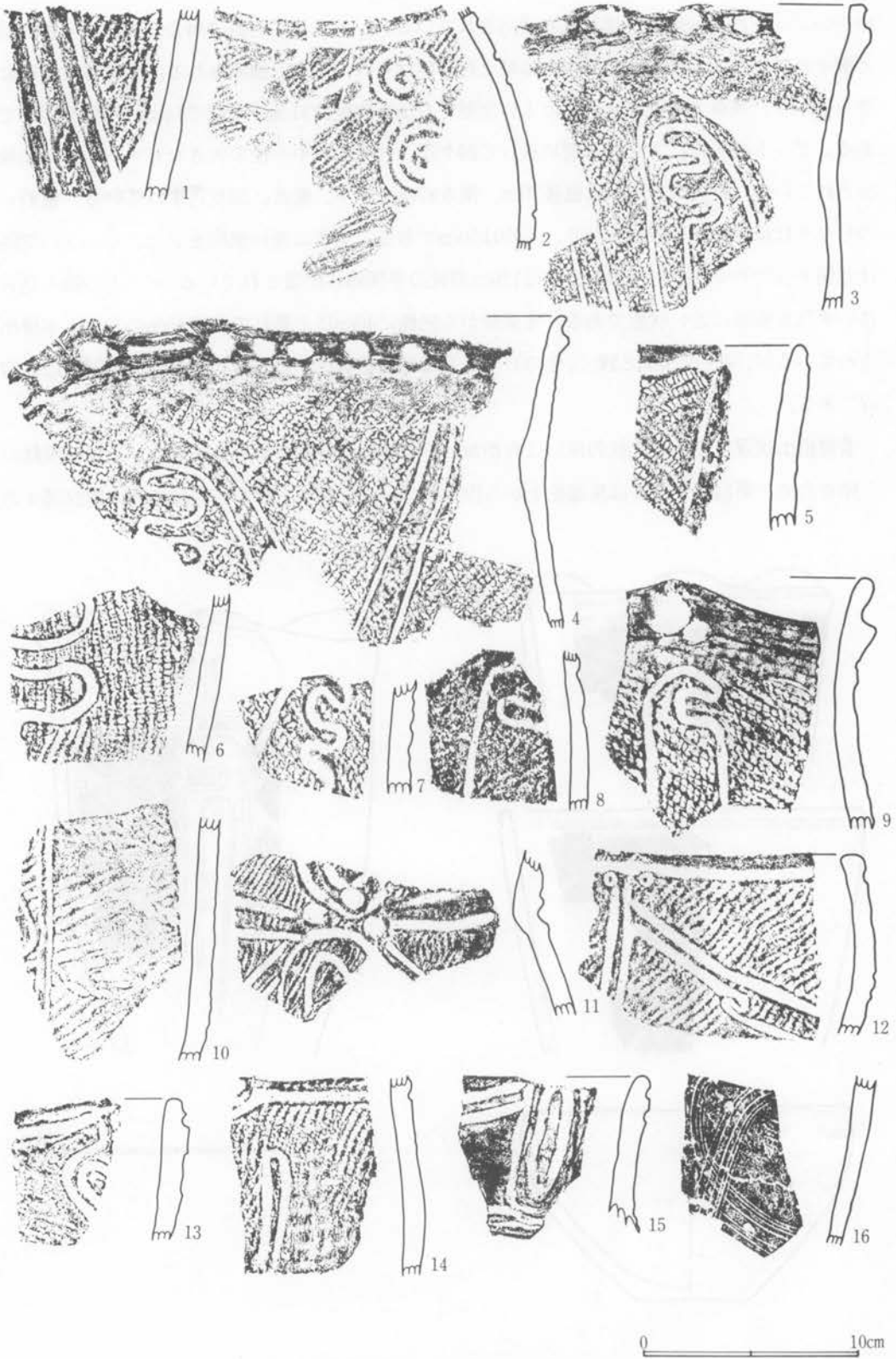
第23図 第10号住居跡実測図 (1/60)

中央のピット内には焼土がほとんど検出されていない。第9号住居跡の場合と同様に土器が据え置かれていたことによって、中央の焼土化が妨げられたものと推測される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は遺存のよい北壁で47cm、東壁で31cm、南壁で14cm、西壁で30cmである。ピットは中央に1ヶ所と壁に沿って20ヶ所、北東部にやや径の大きなピットが1ヶ所検出されている。中央のピットは直径30cm、深さ87cmを計り、垂直に掘り込まれている。壁沿いのピットは深さ28cm～67cmを計り、平均は50cmである。全体に深い傾向を示し、ピットの間隔は北側半分やや密だが南側半分では120cm前後の等間隔に配置されている。ピットの掘り込みはいずれも垂直に近い状態である。北東壁から内側に40cmほど離れて直径47cmのピットが検出されているが、深さが20cmと浅く、他のピットとは性格を異にすると考えられる。床面積は25.77㎡である。

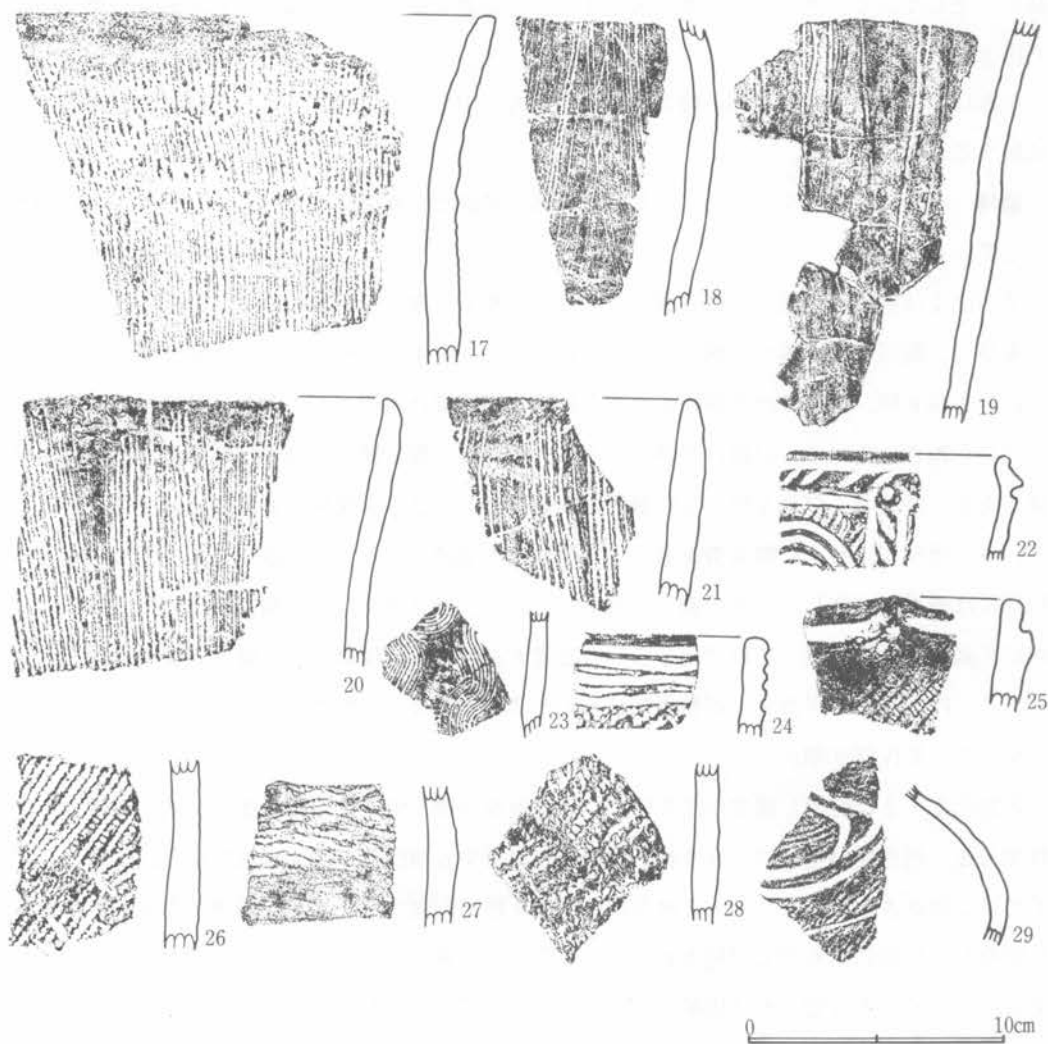
遺物出土状況 堅穴が比較的深いにもかかわらず遺物の量はあまり多くない。土器は深鉢が主体を占め、第24図1～3は床面直上から出土している。覆土上層から完形に近い第24図4の



第24図 第10号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第25图 第10号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 1



第26図 第10号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No 2

第10号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
10-1	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 —	口径(24.3) 底径 — 器高(15.0)	口縁 3 胴部 6	半竹	L R	口縁部に沈線がめぐり、幅の狭い無文帯となる。廠手文内部の縄文を磨消す。	床面直上	第IV群 1類 a種
10-2	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 —	口径(27.8) 底径 — 器高(18.6)	口縁(平) 胴部 ?	棒	L R	口縁部に沈線がめぐる。垂下点文の間に蛇行沈線を施す。	床面直上	第IV群 1類 b種
10-3	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 —	口径(26.3) 底径 — 器高(33.6)	口縁(3) 胴部(6)	竹	L R	口縁部に沈線がめぐる。地文を磨消し幅広の無文帯をつくる。廠手文内部の縄文を磨消す。	床面直上	第IV群 1類 a種
10-4	鉢 C	口縁 1/2 胴部 3/4 底部 完	口径 24.7 底径 8.0 器高 14.5	口縁 平 胴部 —	—	—	丁寧な器面調整。無文	覆土	第IV群 9類

鉢が出土している。他に注口土器の破片1点、土製蓋1点、手捏土器1点がそれぞれ覆土中から出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内Ⅰ式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第1期に属すると考えられる。

遺物 土器は蕨手文を主体としており、全体に単純な文様構成をもつものが多く古い様相を示している。

第24図1は胎土・焼成ともに良好で、内面の調整も丁寧に行われている。口縁は3単位の波状を呈し、胴部には6単位の蕨手文が施されている。蕨手文内部の縄文を丁寧に磨消している。第Ⅳ群1類a種。同図2は小破片のため全体の文様構成は不明だが、胴部には蛇行沈線と垂下点文が施されている。口縁は平線であろう。第Ⅳ群1類b種。同図3は3単位波状口縁の深鉢である。頸部のくびれを伴わない器形だが胴部上位に2本の沈線をめぐらせ無文帯を形成している。頸部を伴わずに無文帯を形成する深鉢は本遺跡からはこの土器以外に出土していない。胴部には蕨手文を施し、内部の縄文を磨消している。無文帯には当初縄文を施文しており、沈線で区画したのち磨消して無文化していると考えられる。第Ⅳ群Ⅰ類a種。同図4は無文の鉢である。内外面とも平滑で、調整痕はほとんど認められない。胎土はやや粗く、色調は暗褐色を呈する。第Ⅳ群9類。

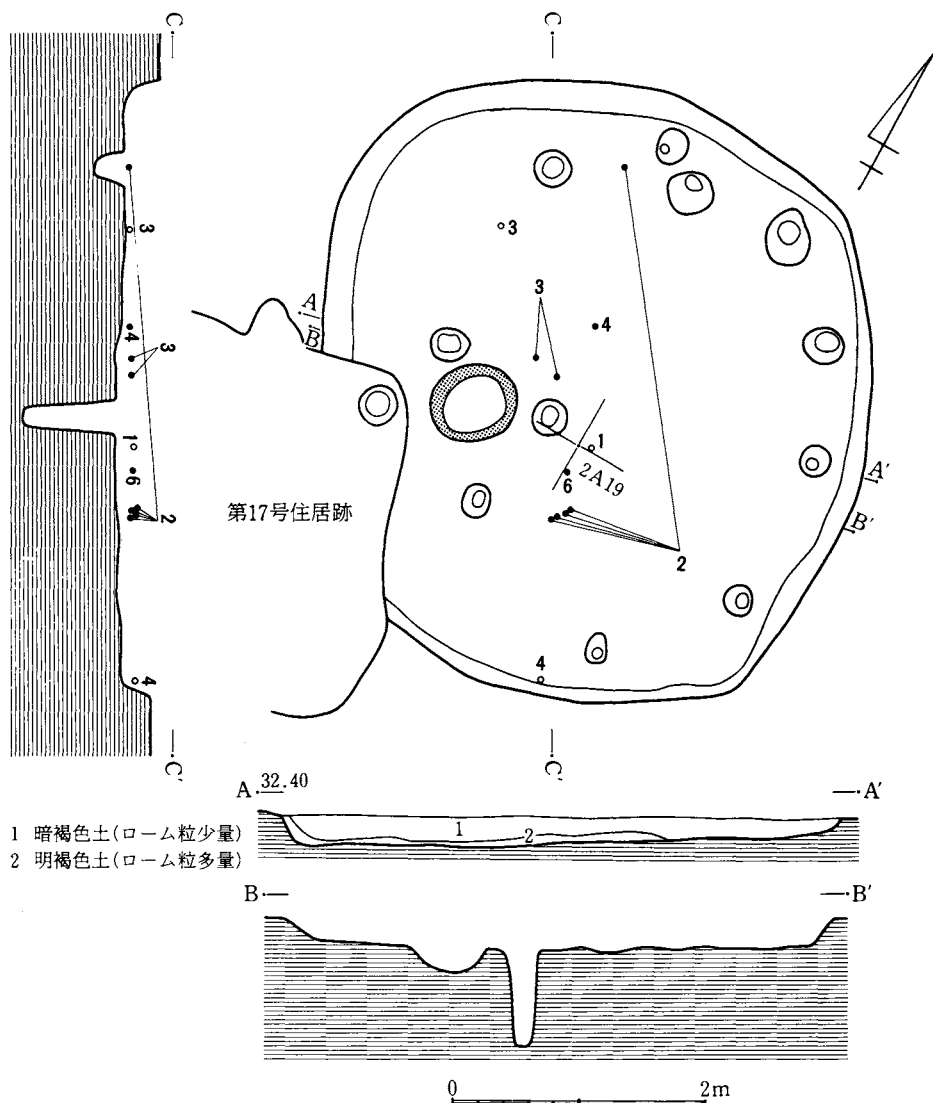
第25図1・2は磨消し縄文手法を伴う。2は器厚が薄く焼成は若干あまい。強く内彎する深鉢である。渦巻文が連続的に施され、その間に斜行する楕円文が加えられている。楕円文の内部だけが磨消されている。1・2は第Ⅳ群1類a種。同図3・4は同一個体である。口縁がやや肥厚し、指頭による凹文が施されている。胴部には蕨手文が施され、その間に斜行沈線が加えられている。内外面ともに黒褐色を呈し、内面は丁寧に調整されている。この土器のような口縁に連続する凹文を伴う例は千葉県内ではほとんど見ることができない。第Ⅳ群3類b種。同図5～10は単純な蕨手文が施されている。内部の縄文は磨消されない。みな第Ⅳ群1類b種に分類される。同図11は深鉢の頸部である。くびれに2本の横走沈線をめぐらせ上下に沈線文を施している。第Ⅳ群3類b種か。同図12は斜行する沈線文の下方がクランク状を呈する。第Ⅳ群3類c種に含められよう。同図13・14は沈線による文様が描かれているが文様構成は不明。分類不可。同図15は深鉢の口縁部である。地文はなくU字状の沈線文が施されている。分類不可。同図16、第26図17～21・23は櫛状工具及び棒状工具によって条線が施されている。16・23は曲線及び蛇行する条線で第Ⅳ群7類c種に分類される。17～21は第Ⅳ群7類b種。同図22は口縁部に隆帯がめぐり、胴部にも隆帯が貼付けられる。隆帯には斜行する刻目が施される。胴部はLR単節縄文を地文とし沈線文が施される。第Ⅳ群6類a種か。同図24は鉢の口縁部と思われる。横走する沈線が施され、その下に縄文を施文している。同図25～28は縄文のみである。25は第Ⅳ群8類b種、他は第Ⅳ群8類a種に含まれよう。同図29は注口土器の胴部破片である。

器厚は薄く、内面の調整は良い。縄文を施し、曲線状の沈線文を描出している。

第18号住居跡 (第27図 図版6・19・31・69)

2 A08グリッドを主体に検出された。南東に向かう緩斜面に位置しており、周囲に堀之内期の住居は検出されていない。

遺構 カマドをもつ第17号住居跡によって南西側がわずかに切られ消失している。プランは若干ゆがみのある楕円形を呈し、長軸4.80m、短軸4.35mである。炉は西に寄った位置で検出され、長軸72cm、短軸58cmの楕円形を呈する。炉の内部には、焼土化したロームブロックがド



第27図 第18号住居跡実測図 (1/60)

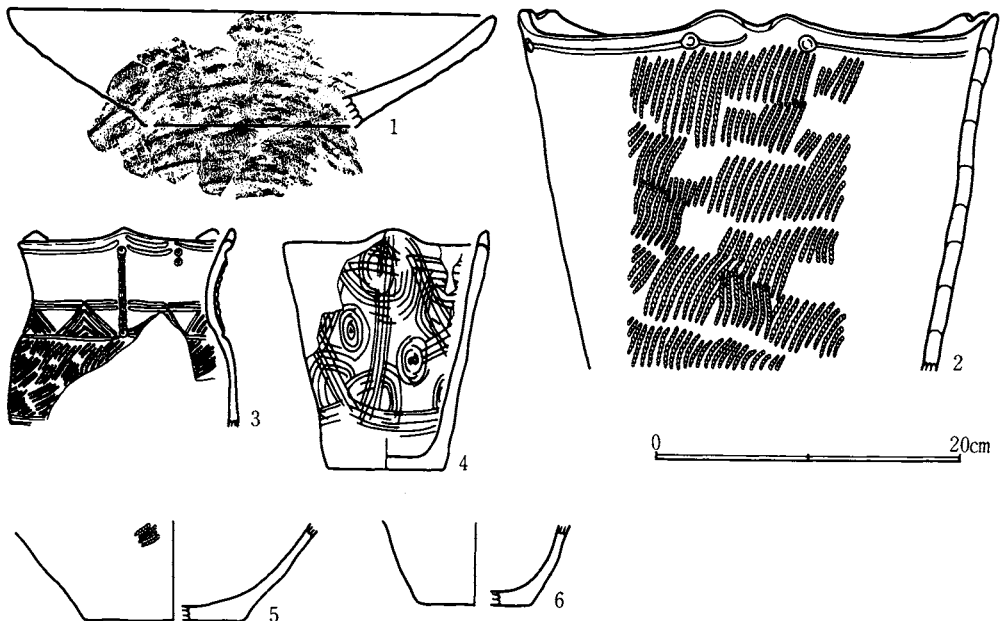
一ナツ状に堆積していた。炉底は丸底を呈する。床面は若干凹凸があるものの全体に硬質である。壁の立ち上がりはゆるく、床面との境界は不明瞭である。残存する壁高は北壁で17cm、東壁で20cm、南壁で21cm、西壁で19cmである。ピットは炉の周囲に3ヶ所、壁に沿って8ヶ所、また第17号住居跡の床面下に1ヶ所検出された。中央に位置するピットの深さは72cm、炉の北西側ピットは9cm、炉の南東側ピットは20cmの深さをそれぞれ計る。壁沿いのピットの深さは19cm～88cmで、平均は57cmである。間隔は90cm～110cmとやや不規則に位置されている。床面積は17.59㎡である。

遺物出土状況 竪穴が浅く覆土量がいたって少ないこともあって遺物は極めて少量である。遺存のよい土器は少なく、ほとんどが小破片である。深鉢が主体を占め、1点だが浅鉢が出土している。他に手捏土器が1点覆土中から出土している。

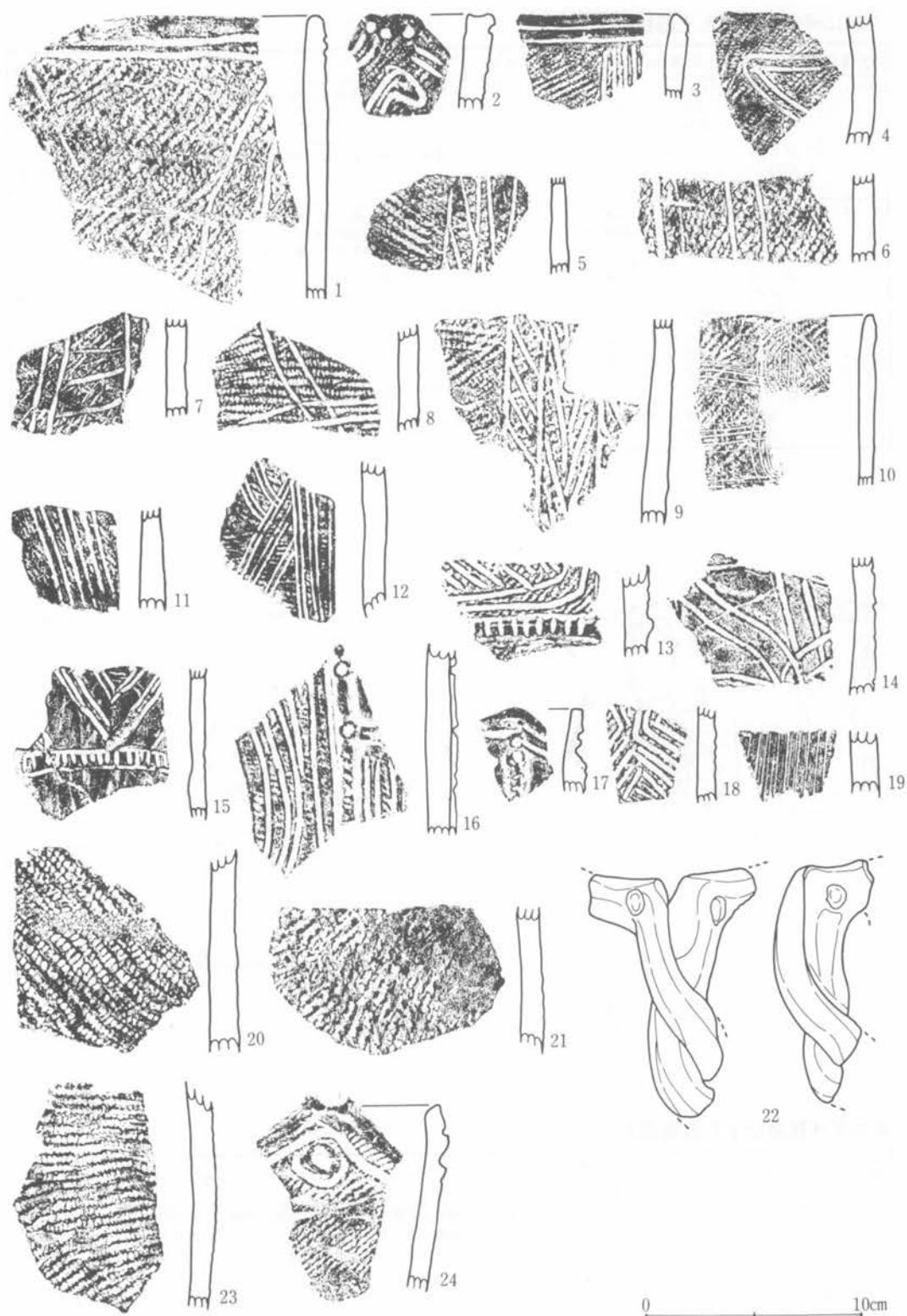
土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。土器量が少ないため時期を決定しにくい、本住居跡は堀之内第3期にふくめることができよう。石器は打製石斧1点、磨石3点が出土し、1は住居跡中央の覆土中より、3はやや北西寄りの床面直上から、4は南壁際からの出土であった。2は覆土中からである。

遺物 土器の大半は多条化した沈線文をもつものであり、単純な文様のものはほとんどない。全体に極めて新しい傾向を示している。

第28図1は皿に近い浅鉢である。手捏様の指頭痕を明瞭に残している。内外面ともにほとん



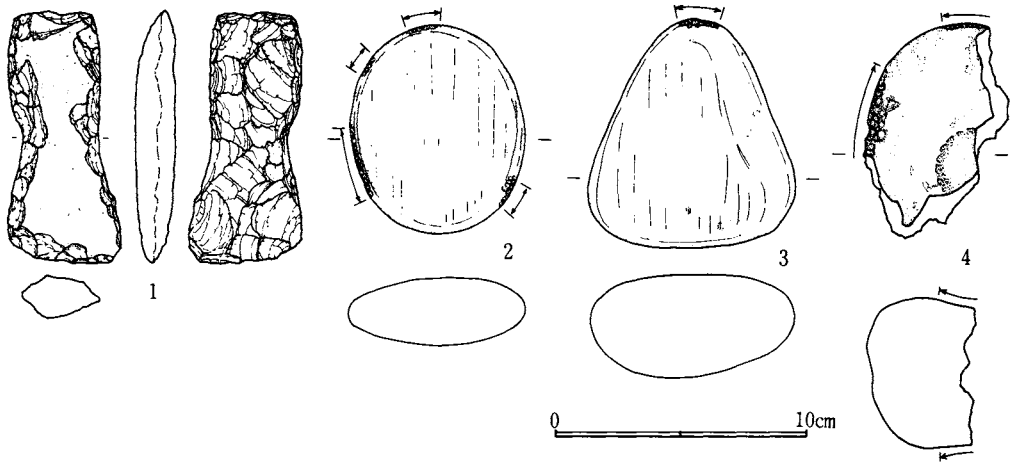
第28図 第18号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第29图 第18号住居跡出土土器拓影图 (1/3)

第18号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
18-1	鉢 B	口縁 ¼ 胴部 ¼ 底部 一	口径(32.1) 底径(14.0) 器高 7.3	口縁 平 胴部 一	—	—	手捏ね様の指痕を残す。極めて粗い器面調整。	覆土	第IV群 9類
18-2	深鉢 A III	口縁 ¾ 胴部 ¼ 底部 一	口径(31.9) 底径 — 器高(23.2)	口縁 4 胴部 一	竹	LR	口縁部に沈線がめぐり。他は縄文のみ。	覆土	第IV群 8類b種
18-3	深鉢 A IV	口縁 ¼ 胴部 ¼ 底部 一	口径(14.2) 底径 — 器高(12.6)	口縁(3) 胴部(9)	半竹	LR	口縁部に沈線がめぐり、幅広の無文帯に垂下陰帯が付く。頸部に沈線がめぐり、山形に沈線を施文。胴部下半に沈線を施し、縄文帯をつくる。	覆土	第IV群 11類
18-4	深鉢 B IV	口縁 ¼ 胴部 ¼ 底部 ¼	口径(13.5) 底径 7.6 器高(15.4)	口縁(2) 胴部 ?	椀	—	条線による垂下、斜行、同心円状文を施す。	覆土	第IV群 7類c種
18-5	鉢	口縁 一 胴部 一 底部 ¼	口径 — 底径(10.4) 器高(6.2)	口縁 一 胴部 一	—	LR		覆土	第IV群
18-6	深鉢	口縁 一 胴部 一 底部 ¼	口径 — 底径(7.5) 器高(5.1)	口縁 一 胴部 一	—	—		覆土	第IV群



第30図 第18号住居跡出土石器実測図 (1/3)

第18号住居跡出土石器観察表

遺物番号	器種	法量 cm、g				石材	調整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	打製石斧	9.8	4.4	1.6	88	泥質片岩	分銅形の打製石斧である。表面は周縁に、裏面は全面に調整剥離がなされる。刃部は偏刃、上部部は直線をなす。磨耗痕は表面は上端を除く周縁に、裏面は挟りの部分・刃部にみられる。	18-19
2	磨石	8.1	7.0	2.6	220	砂岩	転石を利用、側面をやや調整、表裏面磨耗しそれぞれ凸面状をなす。	18-3
3	磨石	9.0	8.2	4.0	417	安山岩	転石を利用、表面磨耗、上端敲打痕あり。	18-36
4	磨石	(8.2)	(5.5)	5.9	(309)	安山岩	形状不明、側面調整あり、全面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ浅い凹面あり、上部敲打痕あり。	18-30

ど器面調整されていない。胎土は粗い。第IV群9類。同図2は2つの小突起を対とする3単位波状口縁の深鉢である。小突起下に凹文を施し、凹文を起点に沈線を施している。胴部はLR単節縄文のみ。第IV群8類b種。同図3は3段の文様帯をもつ深鉢である。頸部及び胴部上位と胴部下位に沈線を施し、文様帯を区画している。口縁から頸部は研磨され無文、頸部から胴部上位には重三角文、それ以下には細い原体のLR単節縄文が施されている。器厚は薄く、内面は平滑。口縁部に縦列の貫通孔を伴う。第IV群11類。同図4は2単位小波状口縁の小型深鉢である。櫛状工具による乱雑な条線文が施されれている。第IV群7類c種。同図5は鉢と思われる。LR単節縄文を伴う。同図6は深鉢の底部である。

第29図1・2は蕨手文であろう。この2点以外にそれらしい例は出土していない。1は平縁の深鉢、2は波状口縁の深鉢と思われる。第IV群1類b種。同図3～9は小片のため分類困難なものである。3・4は半截竹管状工具による沈線文、5・9は斜行沈線を伴う垂下沈線文が施されている。5・9は同一個体であろう。6は地文縄文に斜行沈線を施している。同図10はLR単節縄文を地文とし、櫛状工具によって団子状の条線文を描出し、さらに横走る条線を加えている。第IV群7類a種。同図11は半截竹管状工具による斜行沈線である。分類不可。同図12は半截竹管状工具による沈線文である。第IV群3類b種か。同図13は胴部文様の下端を区画する隆帯である。刻目を伴う。棒状工具によって沈線文が密に施されている。第IV群6類a種。同図14は地文をもたず、半截竹管状工具によって曲線文を描出している。第IV群4類か。同図15は地文をもたず、胴部文様の下端を沈線で区画している。胴部には重菱形文?を施す。器厚は薄く、内外面ともに平滑。第IV群6類d種。同図16は梯子状の隆帯を貼付けている。地文にRL単節縄文が施され、沈線が密に施文される。第IV群6類b種。同図17は刻目のある垂下隆帯を貼付けている。第IV群6類a種。同図18は地文が意味をなさないほど沈線が密に施されている。文様構成は不明だが第IV群3類h種に分類されようか。同図19は密な条線文である。第IV群7類b種。同図20・21・23・24は縄文のみである。20はRL単節縄文、21はL無節縄文、23・24はLR単節縄文である。24は第IV群8類b種、他は第IV群8類a種に分類される。同図22は口縁部に伴う把手である。2本の太い粘土紐をゆるく巻いている。胎土・焼成ともに良好。堀之内I式にはめずらしい把手である。

第20A号住居跡及び第20B号住居跡

2B31グリッド付近から切り合う2軒の住居跡を検出したが、カマドをもつ第21号住居跡が2軒の切り合う部分に位置するため、確かな新旧関係をとらえることができなかった。また、第20B号住居跡は第21号住居跡によって $\frac{2}{3}$ 近くを失っているうえ、残存する床面には第5号土壇が検出されており、住居に本来伴うと判断し得る遺物は少ない。第20A号及び第20B号住居跡の床面にはレベル差がなく、切り合いの新旧を、床面の高低差や貼床の有無から判断するこ

とができなかった。出土した土器には大きな時期差があるとは思われないが、第20B号住居跡の方が若干新しいのではないかと考えられる。第20B号住居跡と第5号土壇の関係は、土壇にあたる部分に明瞭な貼床が認められなかったため、どちらが新しいかは判断しにくい。出土した土器から、住居跡の方が新しいと考えられる。2軒の住居跡と土壇には極端な時期差はないようだが、新旧の関係をまとめると、第5号土壇→第20A号住居跡→第20B号住居跡となる。土壇と第20A号住居跡とは切り合っていないが、土器の上からは土壇の方がやや古いのではないかと判断される。

第20A号住居跡 (第31図 図版7・19・31・32・69)

2B20グリッドを主体に検出された。南に向かう緩斜面に位置している。

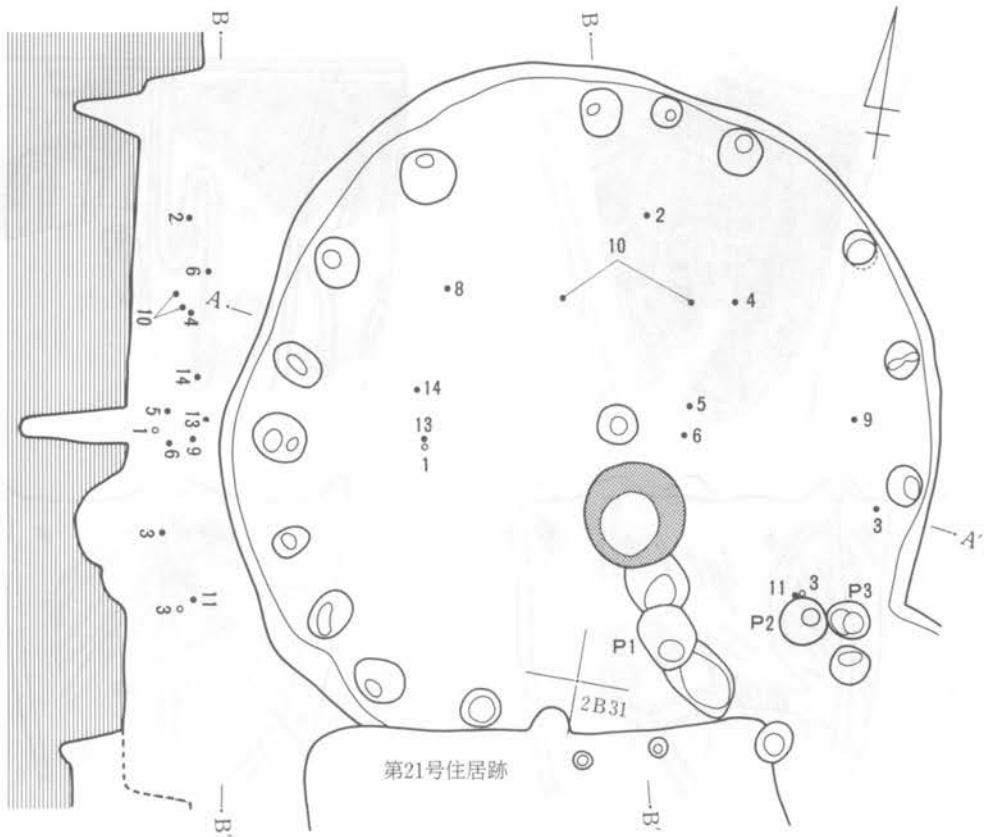
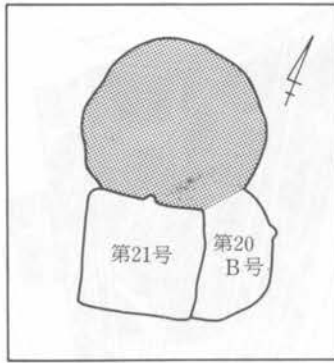
遺構 カマドをもつ第21号住居跡によって南側の一部を切られ壁及びピットが消失している。また、南東の一部が第20B号住居跡と切り合っており、壁は検出できなかった。プランは直径5.70mを計る円形である。炉は中央からやや南東に寄った位置に検出され、直径78cmの円形を呈する。第18号住居跡などの炉と同様に炉内部は焼土がドーナツ状に堆積していた。掘り込みは深く39cmを計り丸底である。床面はほぼ全面にわたり硬質である。壁の立ち上がりはゆるく、床面との境界は一部分不明瞭である。残存する壁高は北壁で36cm、東壁で32cm、西壁で39cmを計り、全体に深く、堅穴の遺存は比較的よい。ピットは全部で23ヶ所検出されたが、P1～P3は第20B号住居跡に関連したものと考えられる。また、ピット2ヶ所は第21号住居跡の床面下にかろうじて検出することができた。中央のピットは深さが84cmあり、検出されたピットの内で最も深く垂直に掘り込まれている。壁沿いのピットは31cm～65cmの深さを計り、平均52cmで全体に似かよった深度をもち、ほぼ垂直に掘り込まれたものが多い。間隔は70cm～120cmとややばらついてはいるが極端な疎密をもつわけではない。推定される床面積は26.01㎡である。

遺物出土状況 遺物の出土量は多かったがすべて覆土中から出土している。土器は深鉢を主体とし、比較的遺存のよい個体がある。1点だが全形を知り得る浅鉢が出土している。他に有孔土製円盤1点、土偶の脚部1点、手捏土器の破片1点、動物を模したと思われる土製品1点がやはり覆土中から出土している。

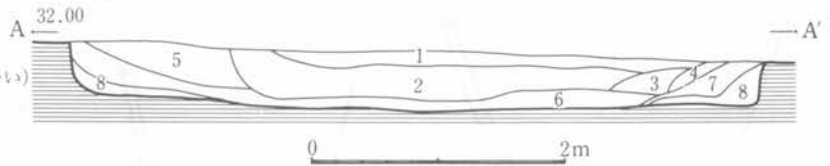
土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第3期に属すると考えられる。石器は台石1点、打製石斧2点が出土し、1は住居跡西側床面より若干浮いた状態で、3は覆土最上層からの出土であった。2は覆土中からである。

遺物 土器は多条化した沈線文をもつものがほとんどで施文工具には半截竹管状工具が多用されている。堀之内I式の新しい様相を示す。

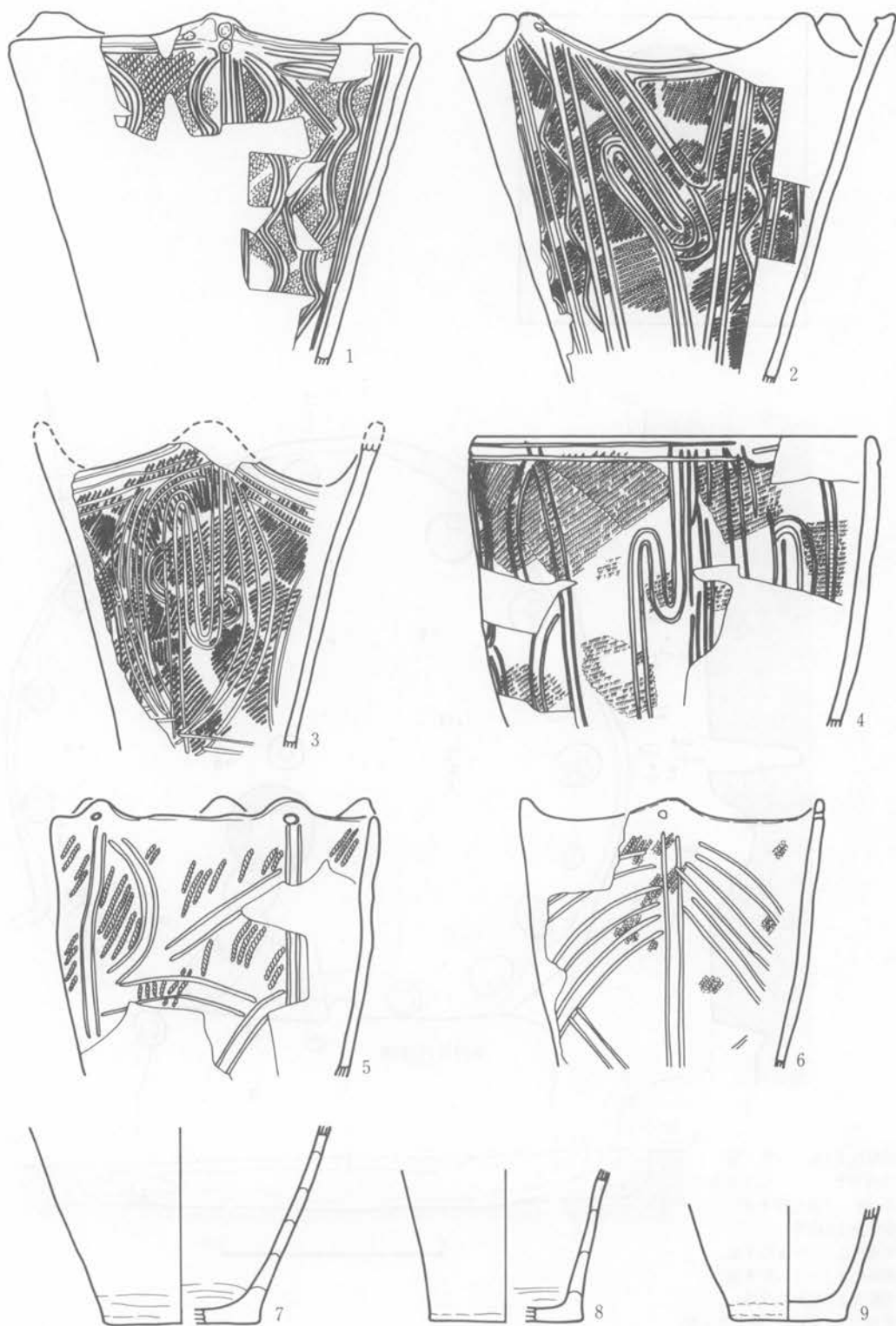
第32図1は直線的に開く深鉢である。垂下沈線の左右に連弧状の沈線を加え単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線文を加えている。地文の押捺は弱い。第IV群3類e種。同図2



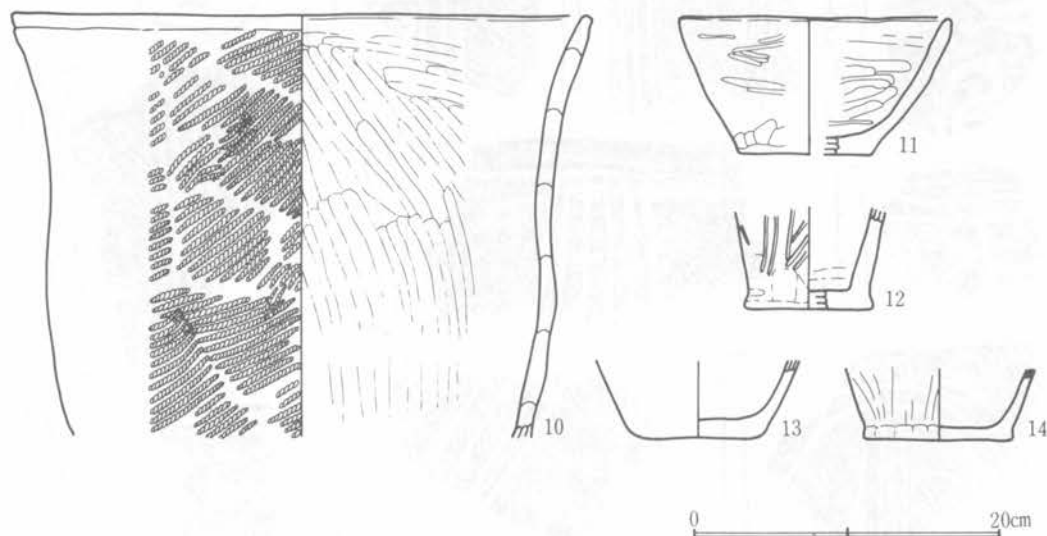
- 1 暗褐色土(ローム粒少量)
- 2 暗褐色土(ローム粒やや多い)
- 3 黒色土(炭化粒多量)
- 4 暗褐色土(粘質)
- 5 明褐色土(ローム粒多量)
- 6 明褐色土(ローム粒多量)
- 7 明褐色土(粘土粒少量)
- 8 黒褐色土(炭化粒、焼土粒少量)



第31図 第20A号住居跡実測図 (1/60)



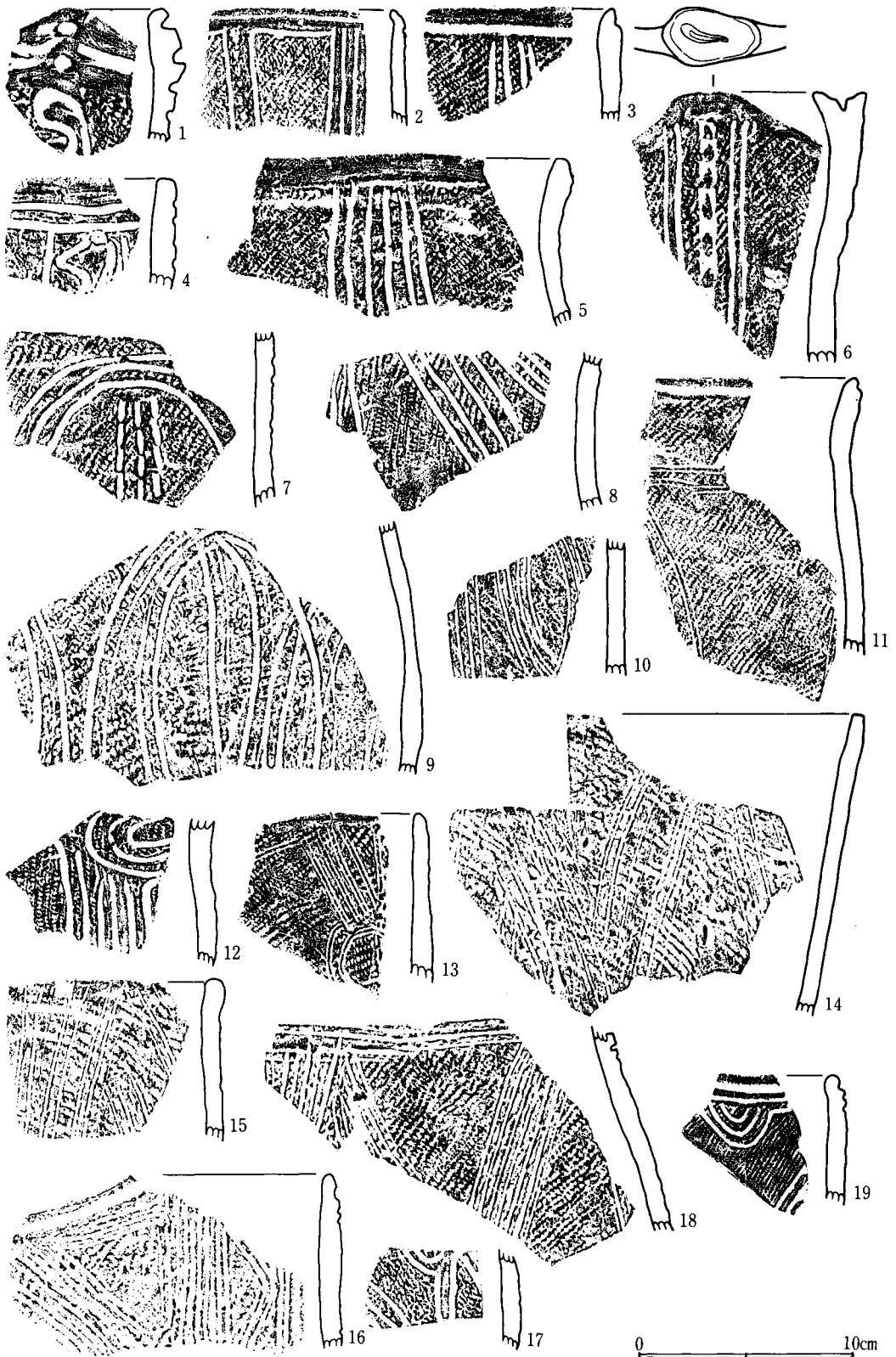
第32图 第20A号住居跡出土土器実測図 (1/5) No.1



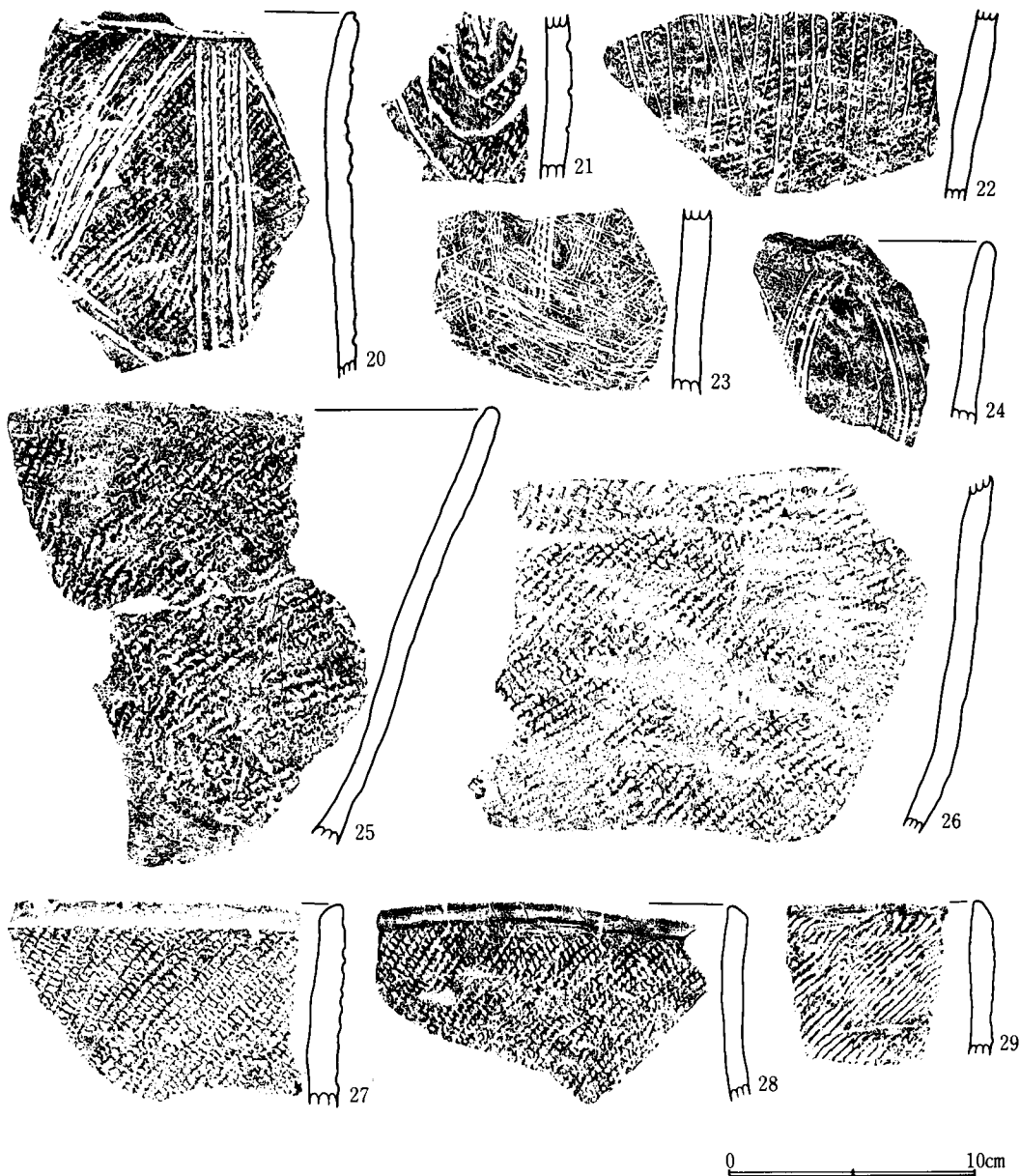
第33図 第20A号住居跡出土土器実測図 (1/5) No 2

も1と同じく直線的に開く深鉢である。破片のため胴部の文様単位から口縁の波状単位を割り出したが、4単位の可能性もある。4単位の波状口縁であればかなりの歪をもつ。文様は波頂下に蛇行文を伴う垂下沈線文を単位文様とし、単位文様間にクランク状の沈線文を施している。地文はLR単節縄文。第IV群3類c種。同図3は大波状口縁の深鉢である。波頂下にクランク状の沈線文を施し、左右に重層する弧線を加えている。下端に横走沈線を伴うが、明確に文様帯の下端を区画しているのかははっきりしない。地文は細いLR単節縄文。第IV群2類a種に分類しておく。同図4は太い半截竹管状工具によって単位を構成しない垂下沈線を施している。胴部文様を施文してから口縁に沈線を横走させている。地文はL無節縄文。第IV群11類。同図5は歪があり4単位の波状口縁かもしれない。波頂部には貫通孔をもつ。太い半截竹管状工具によって垂下沈線を施し、その間に斜行沈線を加えている。地文の押捺は弱い。第IV群3類b種。同図6は器面の摩耗が著しく、地文はほとんど残っていない。あるいは故意に磨消したもののか。垂下沈線を単位文様とし、その間に斜行沈線を施している。第IV群3類b種。同図7・8は大型の深鉢の底部である。同図9、第33図12~14も同様に深鉢の底部である。同図10は緩いくびれの頸部をもつ大型の深鉢である。全面にLR単節縄文が施されている。内面は丁寧に調整されている。第IV群8類a種。同図11は無文の浅鉢である。内外面ともによく研磨されている。第IV群9類。

第34図1・4は蕨手文が施されている。文様内部の縄文は磨消されていると思われる。第IV群1類a種。同図2は列点文を伴う垂下沈線文を単位文様とし、間に垂下沈線を施している。小型の深鉢と思われる。第IV群3類a種。同図3・5も2と同様の文様構成であろう。同図6



第34图 第20A号住居迹出土土器拓影图 (1/3) No.1



第35図 第20A号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No.2

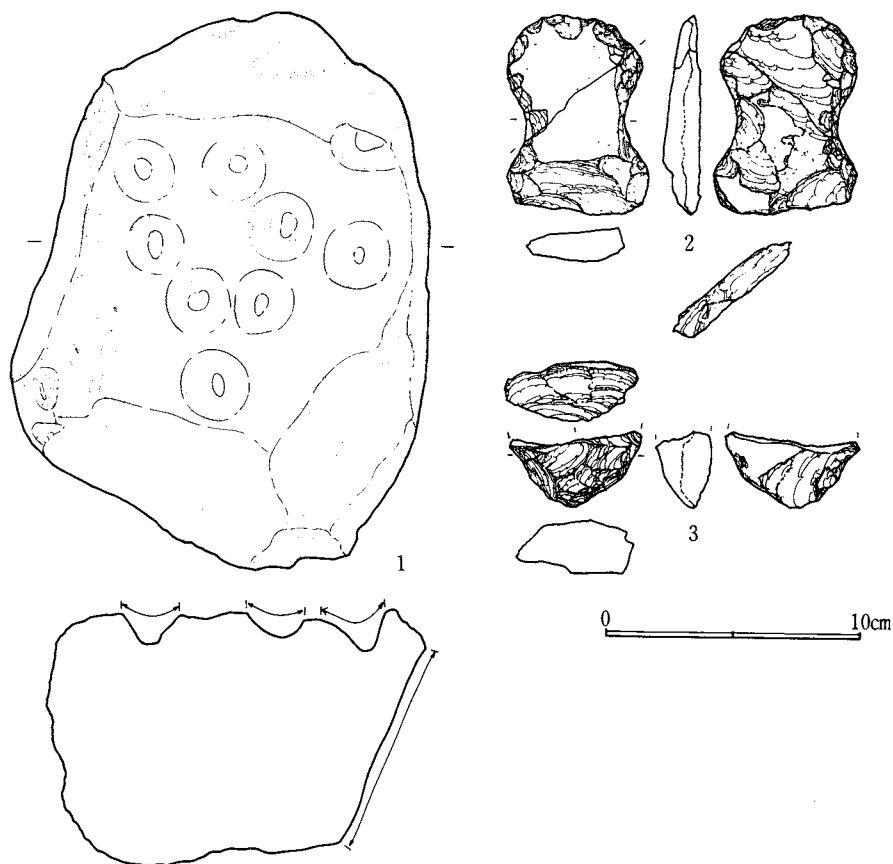
は垂下沈線の間に半截竹管状工具による押引きの刺突文が施されている。この様な単位文様の例はほとんど見られない。口縁波頂部分が肥厚し、凹みをもつ。第IV群1類b種。同図7は垂下する3条の列点文を挟む弧線が施される。第IV群2類a種。同図8は垂下沈線の間ジグザグ状の沈線文が施されているものであろう。第IV群3類a種か。同図9は乱雑に弧線を重ね合わせている。単位は構成しないであろう。第IV群11類。同図10・11は半截竹管状工具によって沈線文を施している。10の工具の方が若干太い。11は緩くくびれる深鉢である。ともに第IV群

第20A号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
20A-1	深鉢 B IV	口縁 1/2 胸部 1/4 底部 —	口径(30.8) 底径 — 器高(26.6)	口縁 3 胸部 6	半竹	L R	口縁に沈線がめぐる。垂下沈線の左右に連弧状の沈線を施し単位文様とする。単位文様間にジグザグ状の沈線を施す。	覆土	第IV群 3類 e種
20A-2	深鉢 B IV	口縁 1/4 胸部 1/2 底部 —	口径(32.0) 底径 — 器高(28.1)	口縁 5 胸部 5	半竹	L R	口縁に沈線がめぐる。4本の垂下沈線の間にジグザグ状の沈線を施し単位文様とする。単位文様の間にクランク状の沈線文を施す。	覆土	第IV群 3類 c種
20A-3	深鉢 B V	口縁 1/4 胸部 1/2 底部 —	口径(26.5) 底径 — 器高(23.9)	口縁 4 胸部 4	棒	L R	口縁に沈線を施す。垂下するクランク状の沈線文の左右に重層する弧線文を施す。	覆土	第IV群 2類 a種
20A-4	深鉢 B III	口縁 1/2 胸部 1/2 底部 —	口径(29.8) 底径 — 器高(21.6)	口縁 平 胸部 ?	半竹	L	口縁部に2本の沈線を施す。垂下する沈線及びクランク状の沈線を胸部に施文。	覆土	第IV群 11類
20A-5	深鉢 B III	口縁 1/2 胸部 1/2 底部 —	口径(24.7) 底径 — 器高(20.4)	口縁 5 胸部 5	半竹	L R	地文の残存はやや悪い。垂下する沈線文の間に斜行沈線を施す。	覆土	第IV群 3類 b種
20A-6	深鉢 B III	口縁 1/2 胸部 1/2 底部 —	口径(22.6) 底径 — 器高(20.0)	口縁(4) 胸部(4)	半竹	L R	地文の縄文がわずかに認められる。全面磨消されたものか。垂下する沈線を単位文様とし、その間に斜行沈線を施す。	覆土	第IV群 3類 b種
20A-7	深鉢	口縁 — 胸部 1/2 底部 1/3	口径 — 底径(11.9) 器高(14.6)	口縁 — 胸部 —	—	—		覆土	第IV群
20A-8	深鉢	口縁 — 胸部 — 底部 1/2	口径 — 底径(11.9) 器高(11.4)	口縁 — 胸部 —	—	—		覆土	第IV群
20A-9	深鉢	口縁 — 胸部 — 底部 完	口径 — 底径 8.8 器高(8.5)	口縁 — 胸部 —	—	—		覆土	第IV群
20A-10	深鉢 A III	口縁 3/4 胸部 3/4 底部 —	口径 38.4 底径 — 器高(27.6)	口縁 平 胸部 —	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類 a種
20A-11	浅鉢 A	口縁 1/2 胸部 1/2 底部 1/2	口径(17.8) 底径(8.8) 器高 8.9	口縁(平) 胸部 —	—	—	無文。器面は全面平滑。	覆土	第IV群 9類
20A-12	深鉢	口縁 — 胸部 — 底部 1/2	口径 — 底径(8.4) 器高(6.6)	口縁 — 胸部 —	半竹	—		覆土	第IV群
20A-13	深鉢	口縁 — 胸部 — 底部 完	口径 — 底径(8.7) 器高(5.0)	口縁 — 胸部 —	—	—		覆土	第IV群
20A-14	深鉢	口縁 — 胸部 — 底部 1/2	口径 — 底径(9.8) 器高(4.5)	口縁 — 胸部 —	—	—		覆土	第IV群

2類 a種に分類されよう。同図12は楕円文に垂下沈線を施すものであるが文様構成は不明。同図13は半截竹管状工具による円形文に斜行沈線が施される小型の深鉢である。12・13は分類不可。同図14・15は同一個体である。多条の弧線文を施している。地文はR無節縄文である。第IV群2類 c種。同図16は第32図2と似通った文様構成と思われる。地文はほとんど意味を持たない程に多条化している。第IV群3類 e種か。第34図17は単位文様間に斜行沈線を施したものである。第IV群3類 b種。同図18は頸部のくびれが強い深鉢である。半截竹管状工具による多条化した沈線文が施される。第IV群3類 b種か。同図19は小型の深鉢である。細いLR単節縄文を地文とし沈線文が施される。分類不可。第35図20は垂下沈線を単位文様とし、その間にX字状の沈線文を施している。太い半截竹管状工具を使用している。第IV群3類 f種。同図21は同心円文が施されている。やや彎曲しており注口土器の破片かもしれない。分類不可。同図

22は縄文を施したのち、半截竹管状工具で条線を施している。第IV群7類a種。同図23・24は櫛状工具による条線である。第IV群7類c種。同図25～29はLR単節縄文のみが施されている。26は明瞭な輪積痕を残す。みな第IV群8類a種に分類される。



第36図 第20A号住居跡出土石器実測図(1/3)

第20A号住居跡出土石器観察表

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	凹 石	21.6	16.1	10.0	4,720	花崗岩	自然石を利用、凹はほぼ全面にあり、計22個をかぞえる。深さはそれぞれ約1cmある。右側面に微妙な凹面状を呈する磨耗があり、台石として利用か？	20A-22
2	打製石斧	7.7	5.6	1.4	67	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。A面の刃部への調整が顕著で、他は周縁加工である。B面はほとんど全面、調整剝離が施される。刃部は偏刃、上端部は円形をなす。破損は表面からの衝撃により斜めに2つに割れる。上半部は20A-3から下半部は20B-2から出土し接合する。磨耗痕は、表面が左側縁・刃部、裏面が両側縁・刃部にみられる。	20A-3 20B-2
3	打製石斧	(2.9)	(5.3)	(2.2)	(25)	安山岩質凝灰岩	刃部破片。裏面に自然面を残し、円刃に仕上げている。表面からの衝撃により破損する。	20A-71

第20B号住居跡（第37図 図版7・20・32・33・69）

2 B31グリッドを主体に検出された。南に向かう緩斜面に位置している。南東約1m離れて第34号住居跡が位置する。

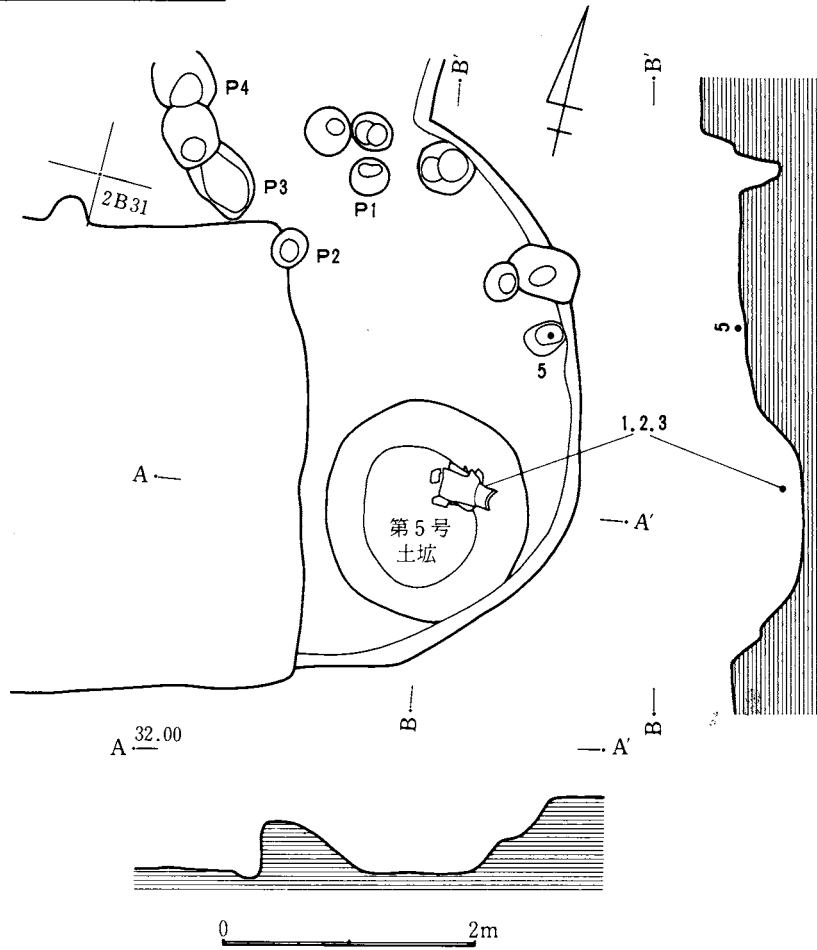
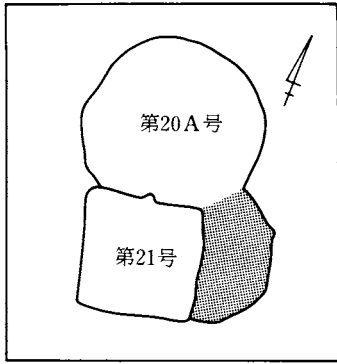
遺構 第21号住居跡によって近くを切られているため住居跡の規模は明確にとらえることができないが約4.5mの円形住居と推定される。炉はまったく遺存していない。残存する壁の立ち上がりは垂直に近く、北壁で28cm、東壁で33cmの壁高である。ピットは壁ぎわに不規則に検出され、第20A号住居跡床面にも本住居跡に関連するピットが検出されている。P1～P4は第20A号住居跡のピットと考えられる。検出されたピットの深さは15cm～60cmである。床面は第20A号住居跡の床面同様硬質で凹凸がなくほぼ同じレベルである。床面の南半分には第5号土壇が検出されたが、土壇上に貼床されているかは判断がつかなかった。明らかに土壇出土と判断できる土器が3個体あり、住居跡出土の土器との比較では、住居跡の方が新しいと考えられる。推定される床面積は15.98 m²である。

遺物出土状況 堅穴の遺存は悪いが遺物の出土量は比較的多い。土器は第38図5が床面から出土し、第38図1がほぼ完存して覆土中から出土している。また浅鉢が1点だが覆土から出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第3期に属すると考えられる。石器は石皿2点、磨石1点が出土し、それぞれ覆土中からの出土であった。

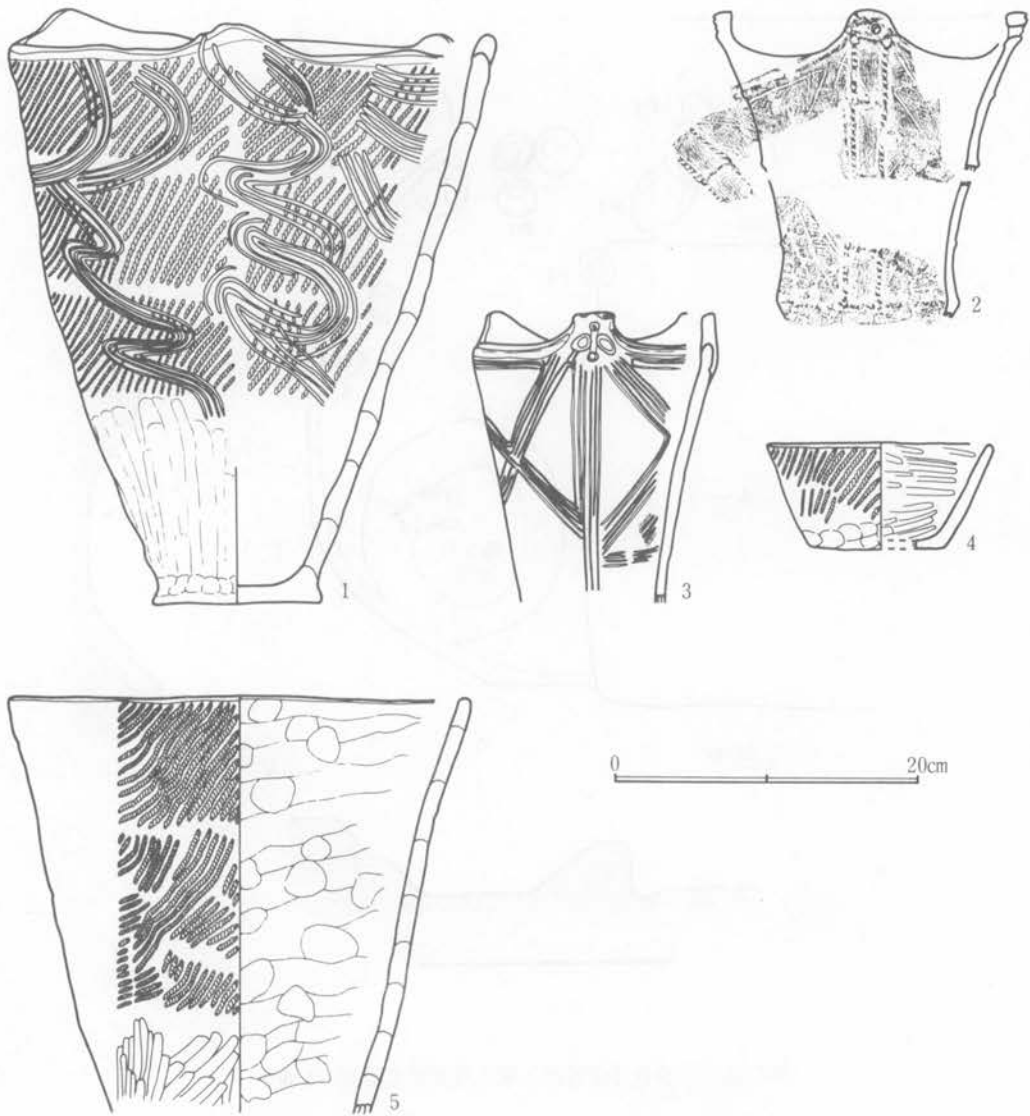
遺物 多条化した沈線文をもつ土器が主体を占め、他に縄文及び条線文の土器がふくまれている。堀之内I式でも極めて新しい様相を示している。第38図1は完形の深鉢である。LR単節縄文を地文とし、半截竹管状工具によって単位を構成しない蛇行沈線文が施されている。一般にこの形態の土器は縄文のみのものが多く、これに沈線文が施される例は比較的少ない。同図2は梯子状の隆帯文が貼付けられる例で磨消し手法を伴う。器形は底部から胴部下半にかけて開き、いったん内折してふたたび口縁部にかけて外反する器形である。器厚は薄い。隆帯文を単位文様とし、X字状の沈線文を間に施し文様帯下端を隆帯で区画している。地文はLR単節縄文である。縄文を磨消す箇所が一定しておらず、沈線の間を磨消したり、沈線で区画された三角形の部分の部分を磨消したりしている。第IV群6類c種。同図3は器面が平滑で地文の縄文が下端に若干認められる。器面の乾燥が進んでから縄文を施したために縄文が押擦されにくかったというよりも、施文後、全面的に磨消している可能性が高い。垂下沈線を単位文様とし、単位文様間にX字状の沈線文を施す。半截竹管状工具を使用しており、沈線は多条化している。下端を区画する沈線を一部に施している。

拓影図は縄文のみの例をのぞき、文様をもつものはすべて半截竹管状工具による施文である。第39図1は垂下沈線の左右に弧線を施したものを単位文様とし、単位文様間に垂下沈線を施し

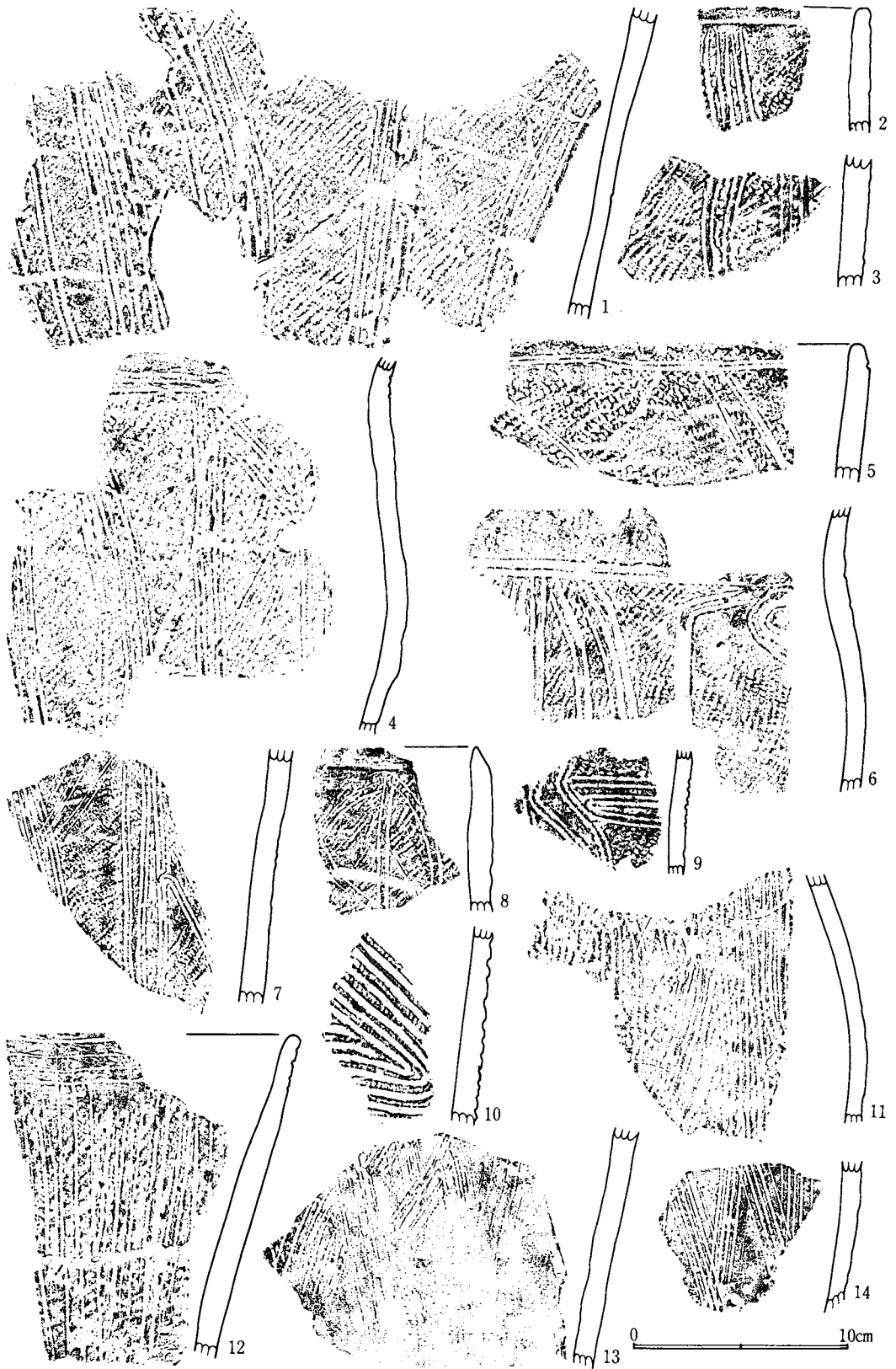


第37图 第20B号住居跡・第5号土坑実測図 (1/60)

ている。半截竹管状工具によって、沈線は著しく多条化している。第IV群3類a種。同図2・3も同様に多条化しており、1と同じような文様構成をもつと考えられる。同図4は頸部がくびれる深鉢である。1と同じ単位文様をもち、ジグザグ状文を間に挟む垂下沈線文が単位文様間に施されている。第IV群3類a種。同図5は口縁に沈線がめぐり、斜行沈線文が等間隔に施される。分類不可。同図6は頸部のくびれる深鉢である。くびれ部に沈線がめぐり、口縁部の無文帯と胴部文様とを区画している。垂下沈線の左右に弧線を施したものを単位文様とし、単位文様間に沈線文が施される。第IV群3類a種。同図7は垂下沈線を単位文様とし、単位文様間に斜行沈線が施されるものと思われる。第IV群3類b種。同図8は団子状に沈線文が描かれ

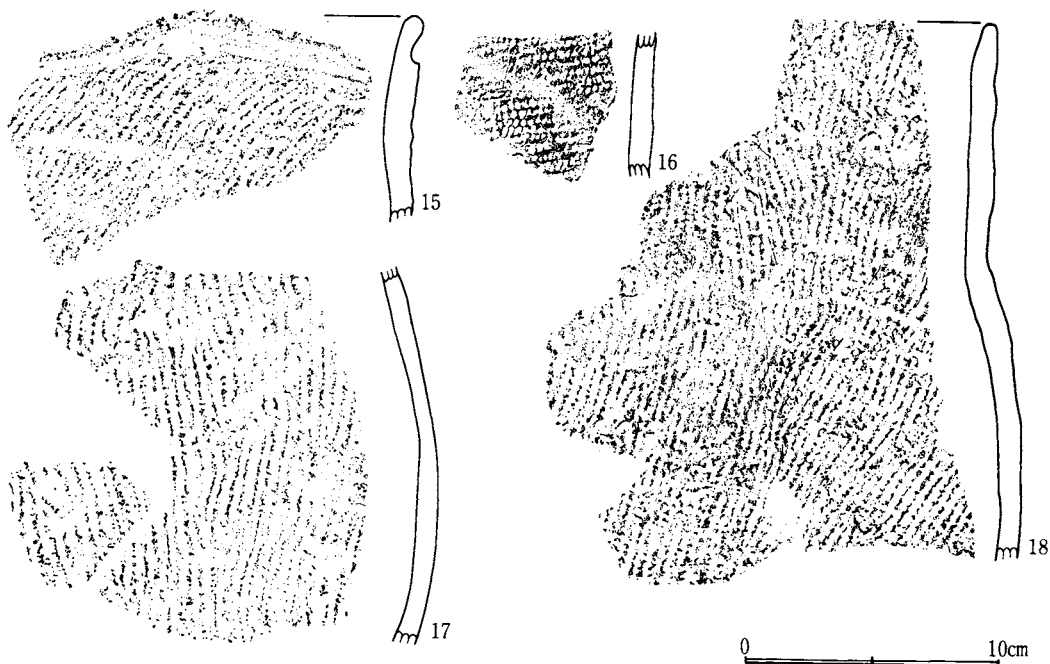


第38図 第20B号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第39图 第20B号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 1

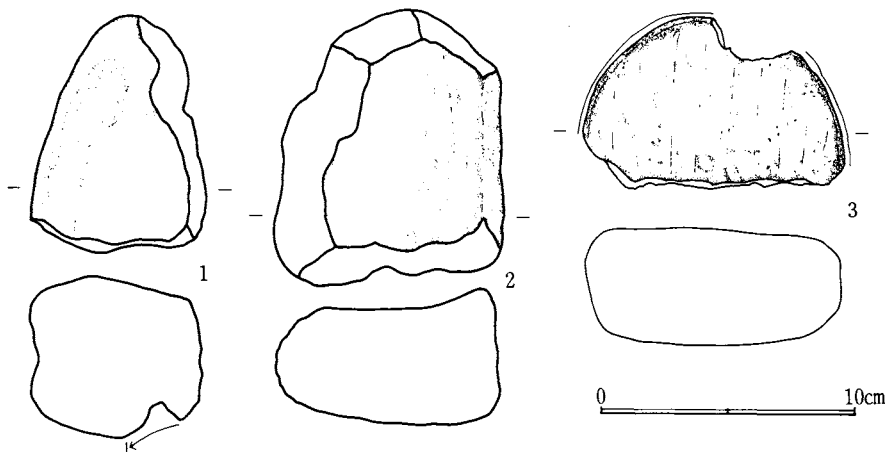
るものであろう。第IV群2類c種。同図9は垂下沈線の左右に連弧状に沈線文が施されたものを単位文様とし、その間に斜行沈線を描出する例である。第IV群3類b種。同図10は多条化したクランク状文である。地文の縄文がほとんど消えてしまうほど密に沈線が施されている。第IV群3類c種。同図11は条線文ではなく、単位文様と付属的な文様が連続的に施され、地文が判断できないほど密に沈線が施されている。いわゆる集合沈線文である。第IV群3類h種。同図12は半截竹管状工具による垂下条線である。口縁部に横走る4本の沈線を描出している。



第40図 第20B号住居跡出土土器拓影図 (1/3) Na 2

第20B号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施的工具	地文	文様	出土位置	分類
20B-1	深鉢 B IV	口縁完 胴部完 底部完	口径 31.8 底径 10.9 器高 38.5	口縁 3 胴部 一	半竹	LR	蛇行する垂下条線文。	覆土	第IV群 7類a種
20B-2	深鉢 B VI	口縁 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部一	口径(22.7) 底径 一 器高(19.6)	口縁 4 胴部 4	棒	LR	梯子状の垂下隆帯文。胴部下半の屈曲部分に文様帯下端を区画する隆帯をつける。X字状の区画文の内部及び外部を磨消す。器厚うすい。	覆土	第IV群 6類c種
20B-3	深鉢 B IV	口縁完 胴部一 底部一	口径 15.9 底径 一 器高(18.6)	口縁 3 胴部 3	半竹	LR	地文の縄文を施文後、全面磨消したもののか。縄文が若干残存。器面は粗い。条線状の垂下沈線の間にX字状の沈線を施す。	覆土	第IV群 3類f種
20B-4	浅鉢 A	口縁 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口径(14.9) 底径(9.0) 器高 6.8	口縁平 胴部一	一	LR	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
20B-5	深鉢 B IV	口縁 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{2}{3}$ 底部一	口径 30.4 底径 一 器高(26.7)	口縁平 胴部一	一	LR	地文のみ。	床面直上	第IV群 8類a種



第41図 第20B号住居跡出土石器実測図 (1/3)

第20B号住居跡出土石器観察表

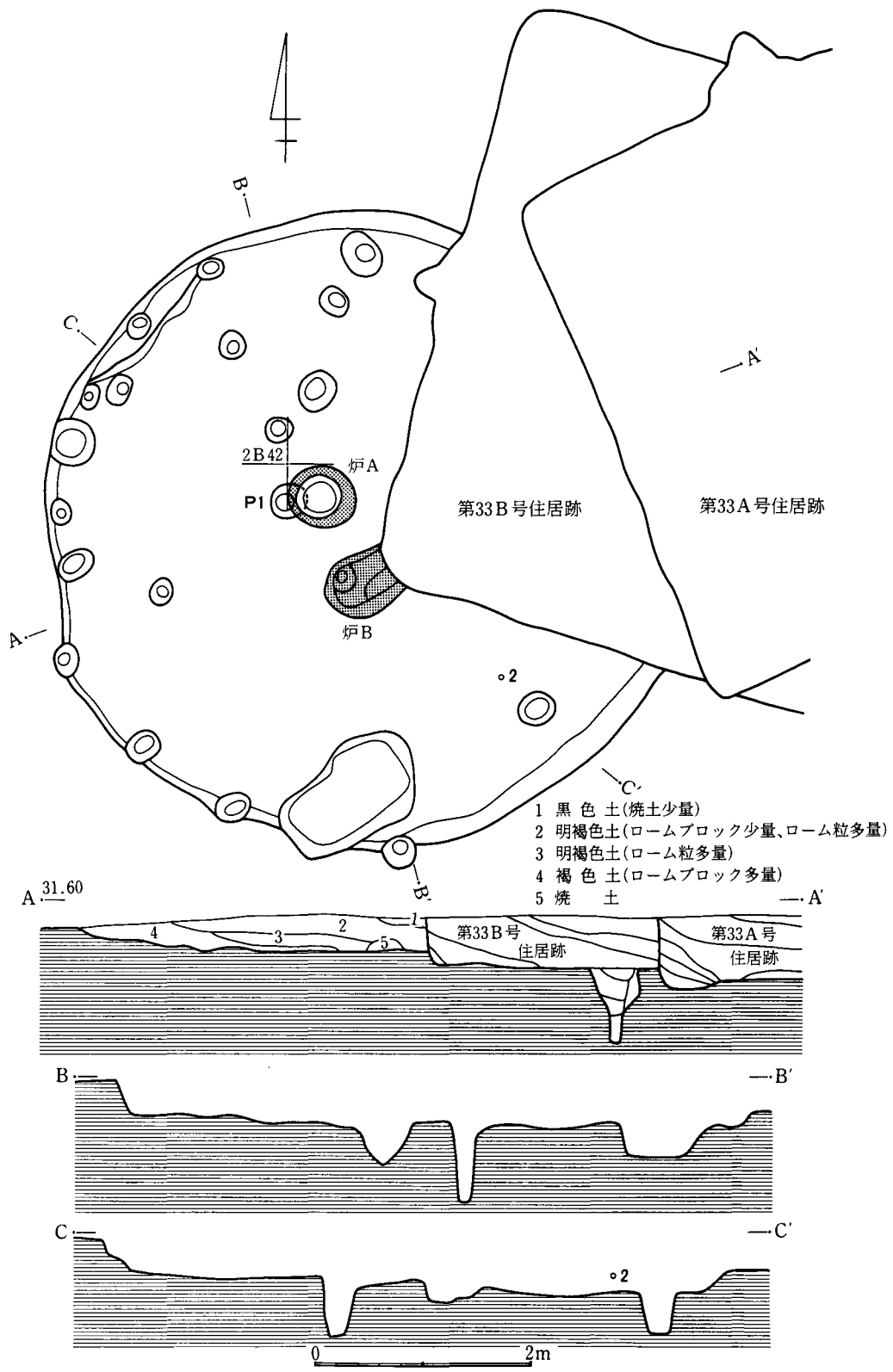
遺物番号	器種	法量 cm, g				石材	調	整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ				
1	石 皿	(9.2)	(6.8)	6.1	431	多孔質 安山岩	楕円形を呈し、深さ20cmを計る。凹は表に1個、裏に2個あり深さ約1.0cmある。		20B-3
2	石 皿	(11.0)	(8.8)	5.2	625	安山岩	方形を呈し、深さ0.8cmを計り、側縁に稜をもつ。底面は平坦で安定が良い。凹は底面に1個あり深さ1cmである。		20B-1
3	磨石	(6.7)	10.0	4.6	374	安山岩	形状不明、側面一部調整あり、表裏面磨耗し、表面平坦、欠損の後欠損部敲打痕明瞭、台石の可能性あり。		20B-1

地文はL無節縄文か。第IV群7類a種。同図13・14は別個体であるが、ともに櫛状工具によって交叉する斜行条線を施している。器面は平滑で、焼成もよく硬質である。第IV群7類b種。第40図15~18はLR単節縄文の深鉢破片である。15は第IV群8類b種。16~18は第IV群8類a種に分類される。

第34号住居跡 (第42図 図版8・20・33・69)

2B42グリッドを主体に検出された。南に向かう斜面に位置し、第20B号住居跡に近接している。

遺構 北東部分 $\frac{1}{4}$ はカマドをもつ第33B号住居跡によって切られ消失している。また、南側の床面から壁にかけて時期不明の土壇状のピットが検出されている。プランは直径5.80mの円形と考えられる。炉は2ヶ所で検出され、焼土の堆積状況から同時使用ではないと判断される。炉Aは遺存状態がよく、直径60cmの円形を呈し、掘り込みの深さは35cmである。内部には焼土ブロックがドーナツ状に厚く堆積し、焼土の下にP1が検出されている。炉Bは第33B号住居跡のコーナーに若干壊されているため、原形は不明確だが、炉Aとほぼ同じ規模と推定される。掘り込みは22cmを計り、内部には少量の焼土が検出されたにとどまる。炉底には直径10cmのピ



第42図 第34号住居跡実測図 (1/60)

ットが検出された。炉Bは炉Aに認められる顕著な焼土堆積が認められないことから、炉A以前に使用され、廃棄されたと推測される。P 1 及び炉Bの底部に検出されたピットは床面から49cmと68cmの深さがあり柱穴と考えられることから、炉Bの使用時にP 1 が柱穴として機能し、後に建て直され、中央の柱と炉のみが移動したのではないかと考えられる。壁の遺存は悪く、立ち上がりも不明瞭である。残存する壁高は北壁で21cm、西壁で30cm、南壁で5cmである。北西の壁に沿って溝状の浅い落込みが認められるが周溝とはならないであろう。ピットは18ヶ所検出され、みな垂直に掘り込まれている。深さは28cm～55cmで、平均は41cmである。ピットの配置は不規則で南側の4ヶ所は壁にかかる。推定される床面積は26.81㎡である。

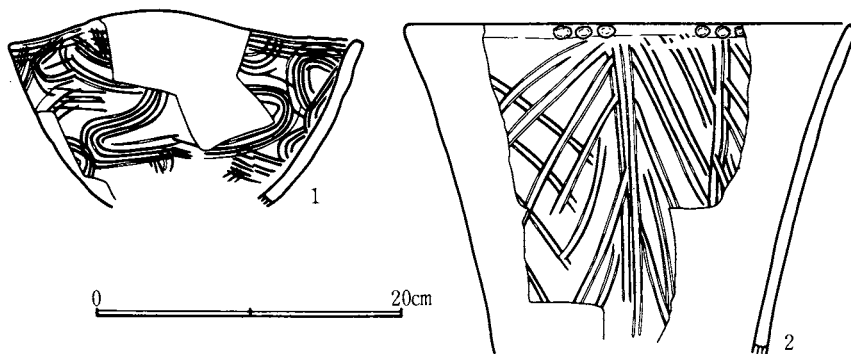
遺物出土状況 竪穴が浅く覆土の量が少ないため、遺物量もそれに相応している。土器の遺存は極めて悪く、すべて覆土中から破片で出土している。第43図1が唯一全形を知り得るものである。小破片だが注口土器が1点出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。土器量が少なく、時期を決定しにくいが堀之内第2期に属すると考えられる。石器は石皿1点、打製石斧1点、磨製石斧1点が出土し、2は床面よりやや浮いた状態で出土した。他は覇土中からである。

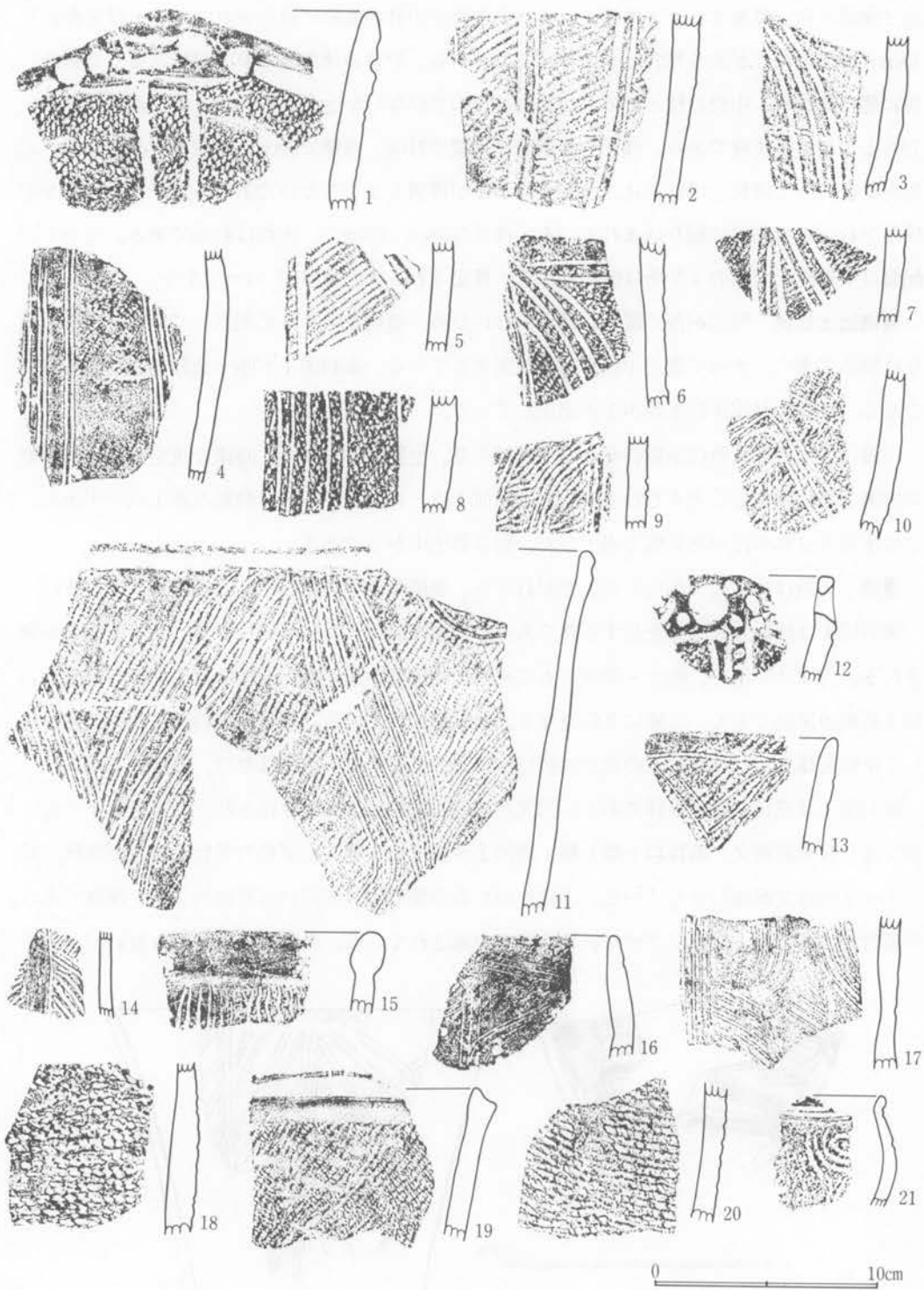
遺物 土器は沈線の多条化した文様が目立ち、単純な単位文様を伴う土器は僅少である。

第43図1は緩い波状口縁を呈する鉢である。ほぼ全面にわたって楯状工具による条線文が施される。内面は平滑で、胎土・焼成ともに良好。第IV群7類c種。同図2は底部から朝顔形に開く器形の深鉢である。口縁に3個連なる凹文が施されている。垂下沈線の間に斜行沈線を施して単位文様とし、さらにその左右に斜行沈線を加えている。地文はない。第IV群4類。

第44図1は波状口縁の深鉢である。凹文が波頂の両脇に2個ずつ施され、沈線が垂下する。地文はLR単節縄文。第IV群1類b種。同図2～10は地文縄文に半截竹管状工具及び棒状工具によって沈線文が描出されている。小破片のため分類不可。同図11は直線的に開く深鉢である。半截竹管状工具によってジグザグ状の沈線文が施されている。単位文様が見当たらないが、ある



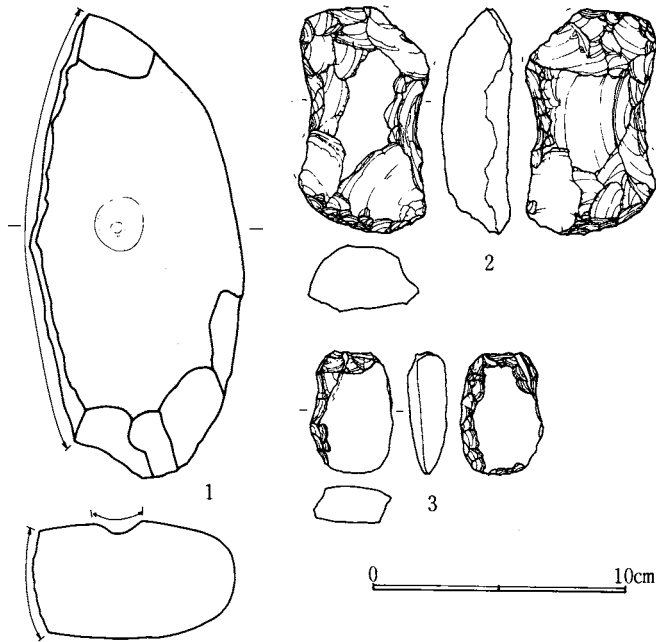
第43図 第34号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第44图 第34号住居跡出土土器拓影图 (1/3)

第34号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
34-1	鉢 B	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(23.0) 底径 — 器高(12.7)	口縁? 胴部?	櫛	—	単位を構成しない条線文。	覆土	第IV群 7類c種
34-2	深鉢 B V	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(29.3) 底径 — 器高(21.4)	口縁 平 胴部 ?	半竹	—	垂下する沈線に綾杉状の斜行沈線を施す。	覆土	第IV群 4類



第45図 第34号住居跡出土石器実測図 (1/3)

第34号住居跡出土石器観察表

遺物番号	器種	法量 cm、g				石材	調整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	石皿	(18.0)	(8.3)	4.6	(880)	砂岩	円形を呈し、磨面が微妙に凹面状を呈す。凹は表面に1個、裏面に1個あり深さ0.6cmある。欠損後、敲石として使用。	34-2
2	打製石斧	8.7	(5.2)	2.7	(159)	安山岩質 凝灰岩	分銅形の打製石斧である。表面に自然面を残す。表面は階段状剥離、裏面を平坦に加工して断面三角形に仕上げる。刃部は偏刃をなす。左側縁下部は下端から、右側縁上部は上端からの衝撃により破損する。	34-4
3	磨製石斧	4.7	3.3	1.6	(37)	蛇紋岩	不定形磨製石斧である。表裏とも左側縁に敲打痕を残す。刃部は円刃で刃こぼれもみられる。断面は平行四辺形をなす。	34-3

いはこのジグザグ文のみで文様を構成しているかもしれない。地文はLR単節縄文である。第IV群3類c種。同図12は貫通孔を伴い、隆帯が垂下する。第IV群6類a種か。同図13は口縁部に横走する沈線を施し、異方向の斜行沈線を加えている。重三角文ではなかろう。分類不可。同図14は小型の深鉢である。器厚は薄く、地文はない。沈線が密に施されている。第IV群4類。同図15は口縁が肥厚している。櫛状工具によって蛇行条線が施されている。同図16は地文があるようだが判別できない。条線が疎に施される。同図17は内外面平滑で黒褐色を呈する。比較的密に条線文が施されている。15・17は第IV群7類c種。16は第IV群7類b種。同図18～20は縄文のみである。18はRL複節縄文、19はLR単節縄文、20はL無節縄文である。みな第IV群8類a種に分類されよう。同図21は注口土器であろう。器厚は薄い。内外面ともに摩耗が著しい。胴部は丸く、上半で若干くびれて再び開く器形である。文様はくびれ部に沈線がめぐり、同心円文が施される。

第36号住居跡（第46図 図版8・20・34・69）

2 B61グリッドを主体に検出された。調査区南端の斜面に位置しており、住居跡の南側は谷に向かう急な斜面となる。

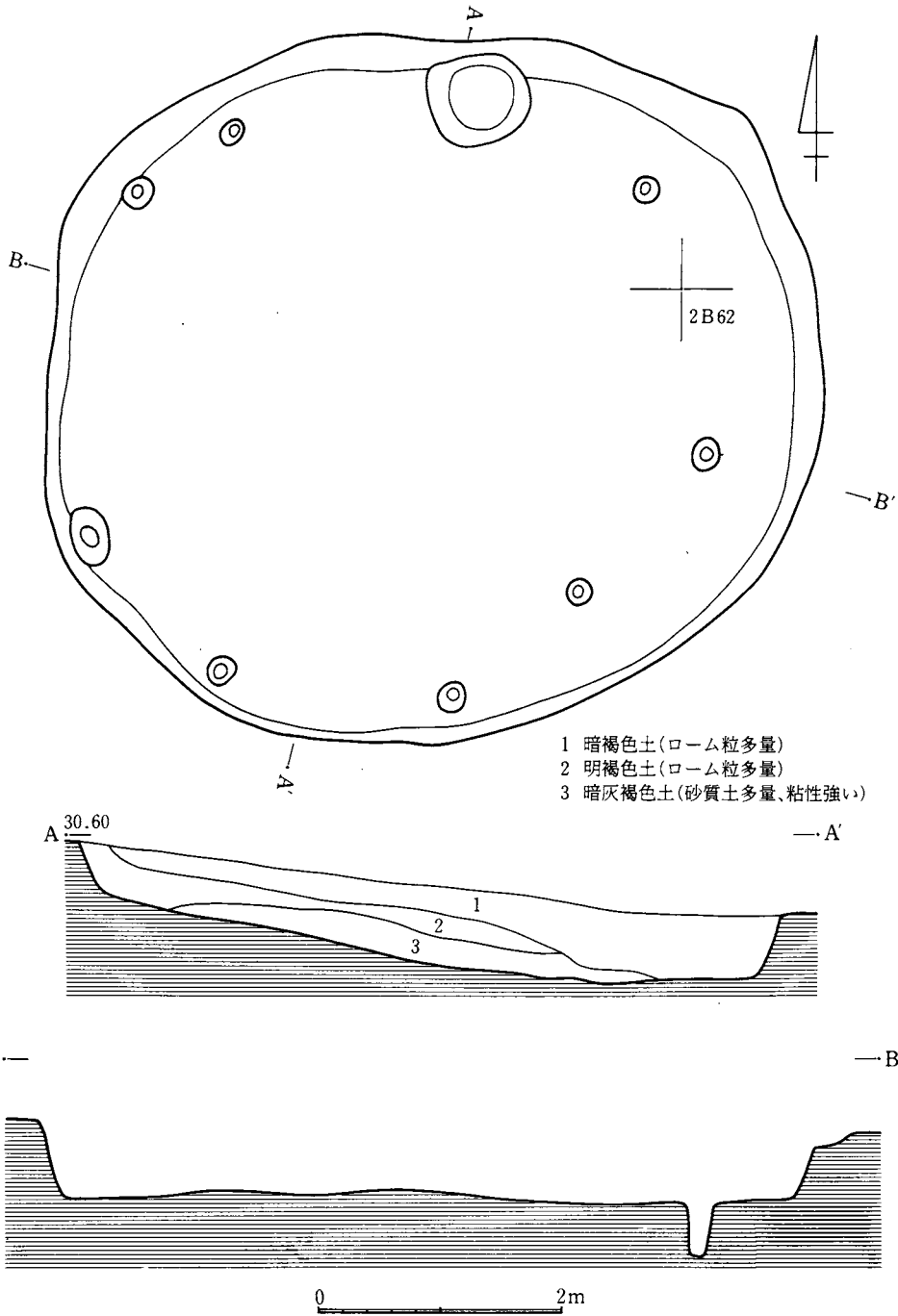
遺構 南壁を除き、竪穴の遺存はよい。プランは直径5.80mの円形を呈する。炉は検出されおらず、床面上に火を使用した痕跡は認められなかった。床面は平坦で全体に軟弱で硬質部分は認められない。壁の立ち上りはゆるく、残存する壁高は北壁で51cm、東壁で46cm、西壁で53cm、南壁の遺存は悪く15cmである。ピットは9ヶ所で検出されたにとどまる。深さは30cm～60cmを計り、平均は40cmである。ピットの間隔は一定していない。みな垂直に近い状態で掘り込まれている。床面積は29.95 m²である。

遺物出土状況 遺物の出土量はあまり多くなく、土器の大半は小破片である。土器はすべて覆土中から出土している。深鉢を主体とするが、浅鉢が3点出土しており、第47図3の浅鉢は唯一完形で出土している。また、土器片錘4点が覆土中から出土しており、縄文時代住居跡のうち土器片錘を出土した住居跡は本住居跡に限られている。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第1期に属すると考えられる。石器は磨石1点が出土し、覆土中からであった。

遺物 土器は古い文様をもつものと新しい文様をもつものが混在しており時期判断に苦しむが、全体としては蕨手文など古手の文様が過半数を占めている。

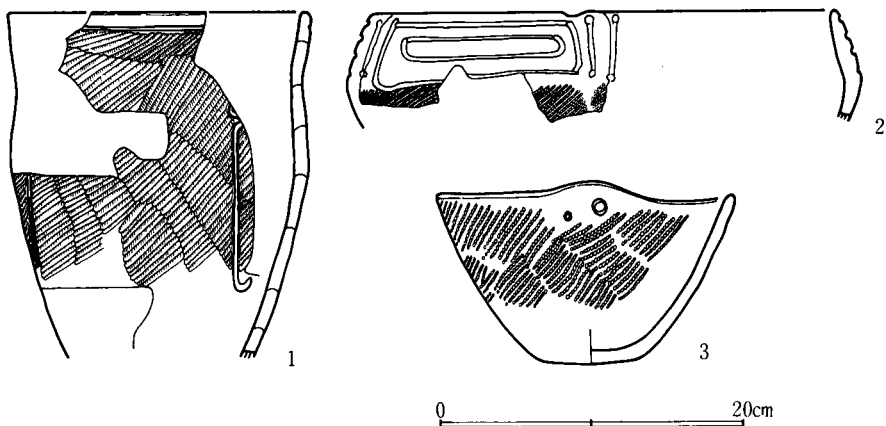
第47図1は緩くくびれる深鉢である。胎土に砂粒を含むが焼成は良く内面の調整は丁寧に行われている。L無節縄文を地文とし、蕨手文と思われる単純な沈線文を施している。第IV群1類b種。同図2は口縁が内傾する鉢である。内傾部分の外面には長方形区画の沈線文が施され、胴部にはLR単節縄文を施文する。内傾部分の内外面はよく研磨されている。第IV群8類b種。



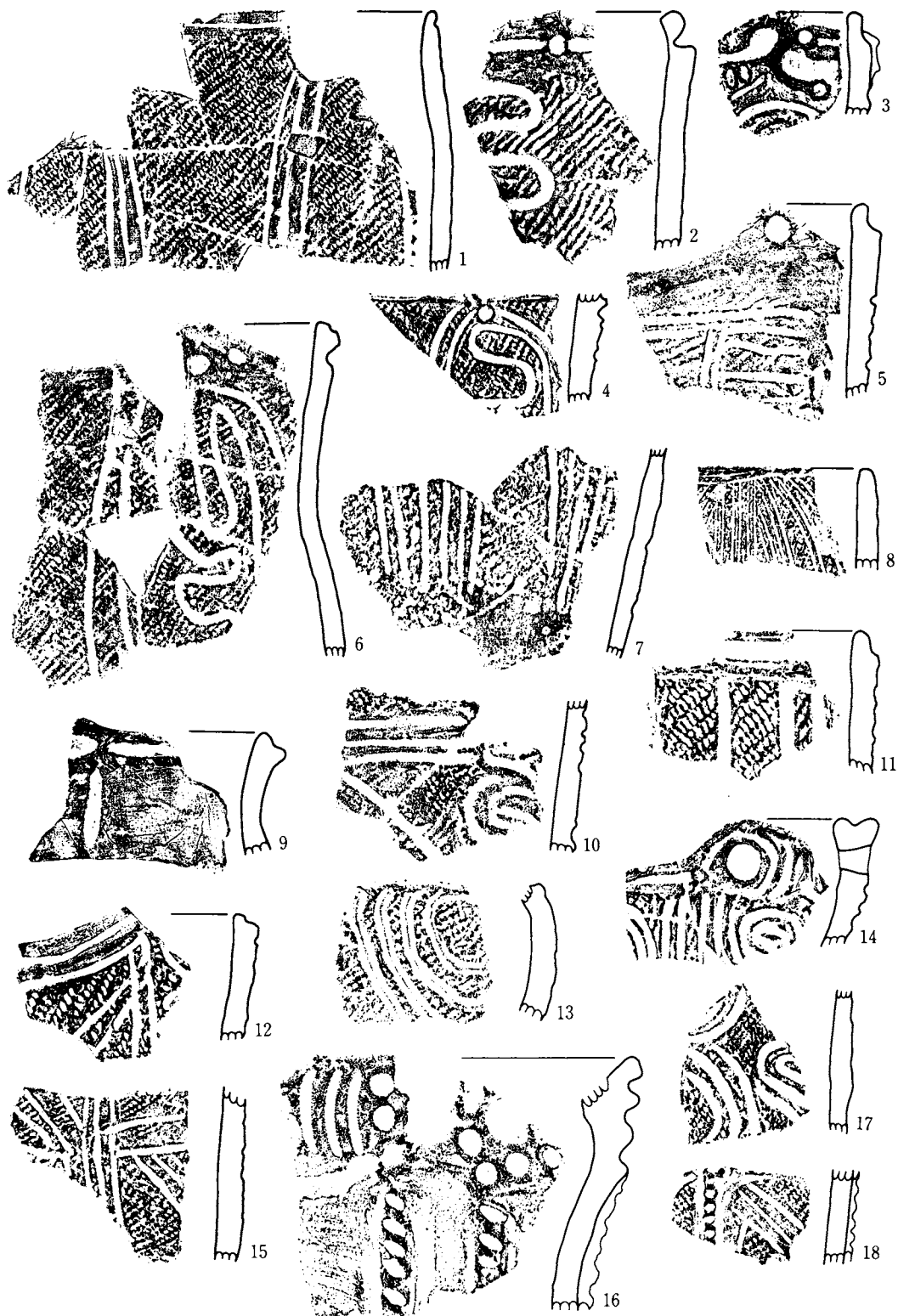
第46図 第36号住居跡実測図 (1/60)

同図3は完形の浅鉢である。2単位波状口縁で片方の波頂下に大小2個の貫通孔を伴う。地文はLR単節縄文である。第IV群8類a種。

第48図1は胴部のやや脹らむ深鉢である。LR単節縄文を地文とし、弧線文を施して内部の縄文を磨消している。頸部をもたない深鉢で磨消し縄文を伴う弧線文が施される例はほとんどみられない。第IV群1類a種。同図2～6は蕨手文が施されている。内部は磨消されない。3はC字状の貼付文を波頂下に伴う。4～6は蕨手文の左右に弧線を伴う。2・3は第IV群1類b種。4～6は第IV群2類a種。同図7は蕨手文と思われる単純な沈線文であろう。分類不可。同図8は半截竹管状工具による多条化した沈線文である。垂下沈線に弧線を伴うものであろう。第IV群2類a種。同図9は頸部がくびれる深鉢の口縁部である。よく研磨されており、沈線が1本垂下する。同図10は連続する渦巻文を単位文様とし、単位文様間に斜行沈線を施す。第IV群3類b種。同図11は太めのLR単節縄文を地文とし、沈線を垂下させている。分類不可。同図12・13・15はLR単節縄文に沈線文が施されている。分類不可。同図14は波頂部に貫通孔を伴う。地文が判別できないほど密に沈線が施されている。第IV群3類h種。同図16は頸部のくびれる大型の深鉢である。内外面ともによく研磨され、刻目を伴う隆帯が貼付けられる。分類不可。同図17は同心円状の単位文様にクランク状の沈線文が加えられている。第IV群3類c種。同図18は刻目を伴う隆帯が垂下する。文様構成は不明だが第IV群6類a種に分類される。第49図19～22は条線文である。第IV群7類b種に分類される。19は縦横に条線が施される。22は綾杉状の条線文である。同図23～28は地文の縄文のみである。23はLR無節縄文、24・25・27・28はLR単節縄文、26はR無節縄文である。28は明瞭な輪積痕を残す。みな第IV群8類a種に分類される。同図29は無文の浅鉢であろうか。内外面ともに平滑である。第IV群9類。同図30・31は鉢である。30は波状口縁であろう。全面にLR単節縄文を施し、沈線で上半に文様を描出している。内面は平滑。31は口縁部に楕円形の沈線文を施し、胴部にLR単節縄文を施文している。内面は平滑。30・31は第IV群8類b種に分類されよう。

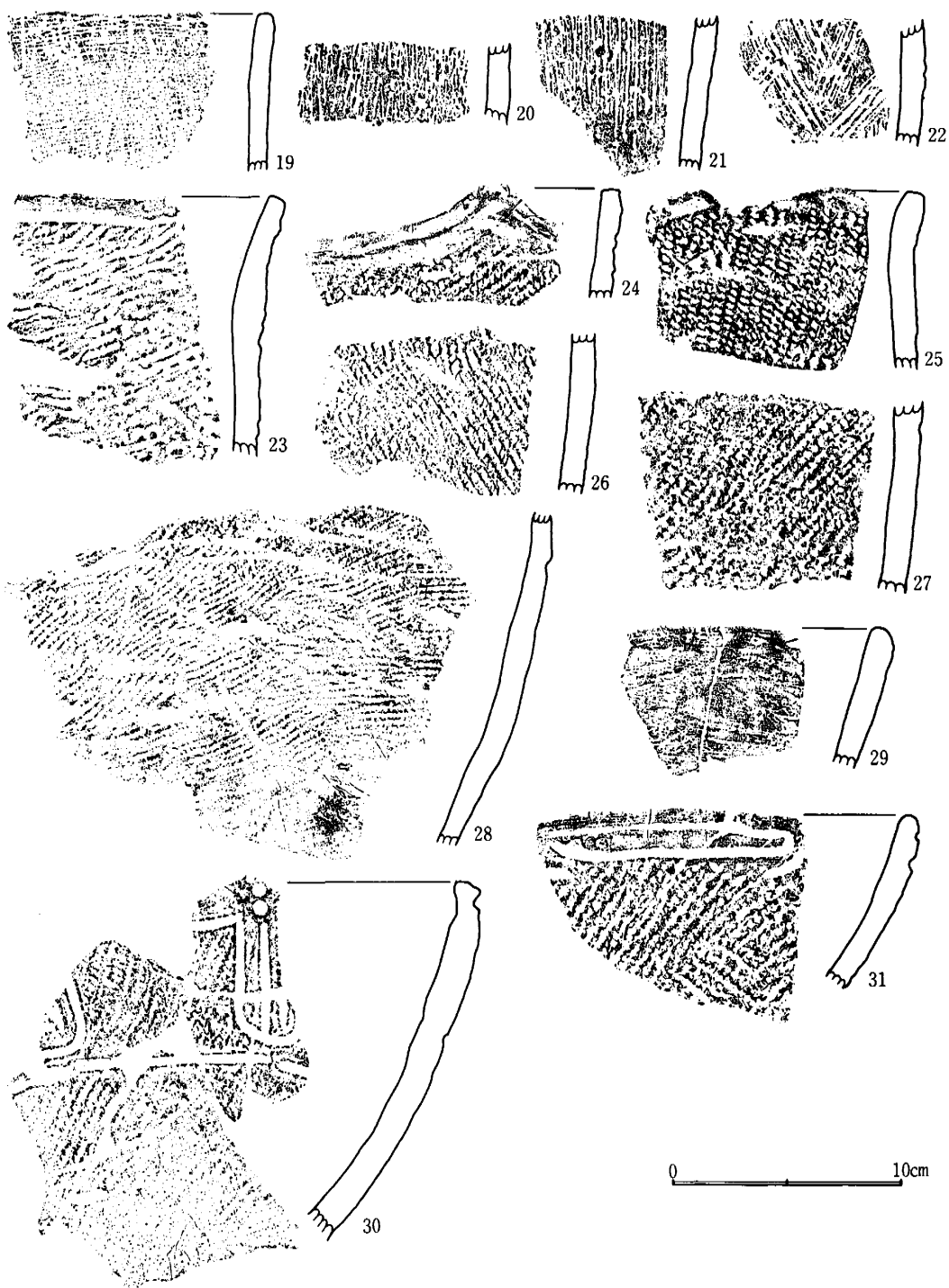


第47図 第36号住居跡出土土器実測図 (1/5)



0 10cm

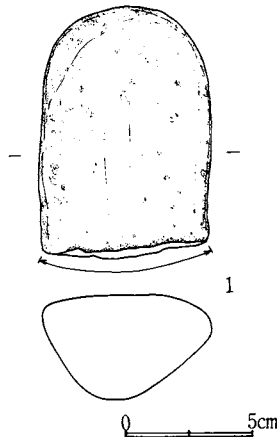
第48图 第36号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 1



第49图 第36号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 2

第36号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
36-1	深鉢 A II	口縁 1/4 胴部 1/4 底部 1	口径(19.9) 底径 — 器高(22.0)	口縁(平) 胴部 4	棒	L	口縁部に沈線がめぐる。灰手文と思われる沈線文が施される。	覆土	第IV群 7類b種
36-2	鉢 D	口縁 1/4 胴部 1 底部 1	口径(30.5) 底径 — 器高(7.3)	口縁 平 胴部(8)	棒	L R	口縁内傾部分に長方形の重層区画文を施す。	覆土	第IV群 8類b種
36-3	浅鉢 A	口縁 完 胴部 完 底部 完	口径 19.6 底径 7.0 器高 11.7	口縁 2 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種



第50図 第36号住居跡出土土器実測図 (1/3)

第36号住居跡出土石器観察表

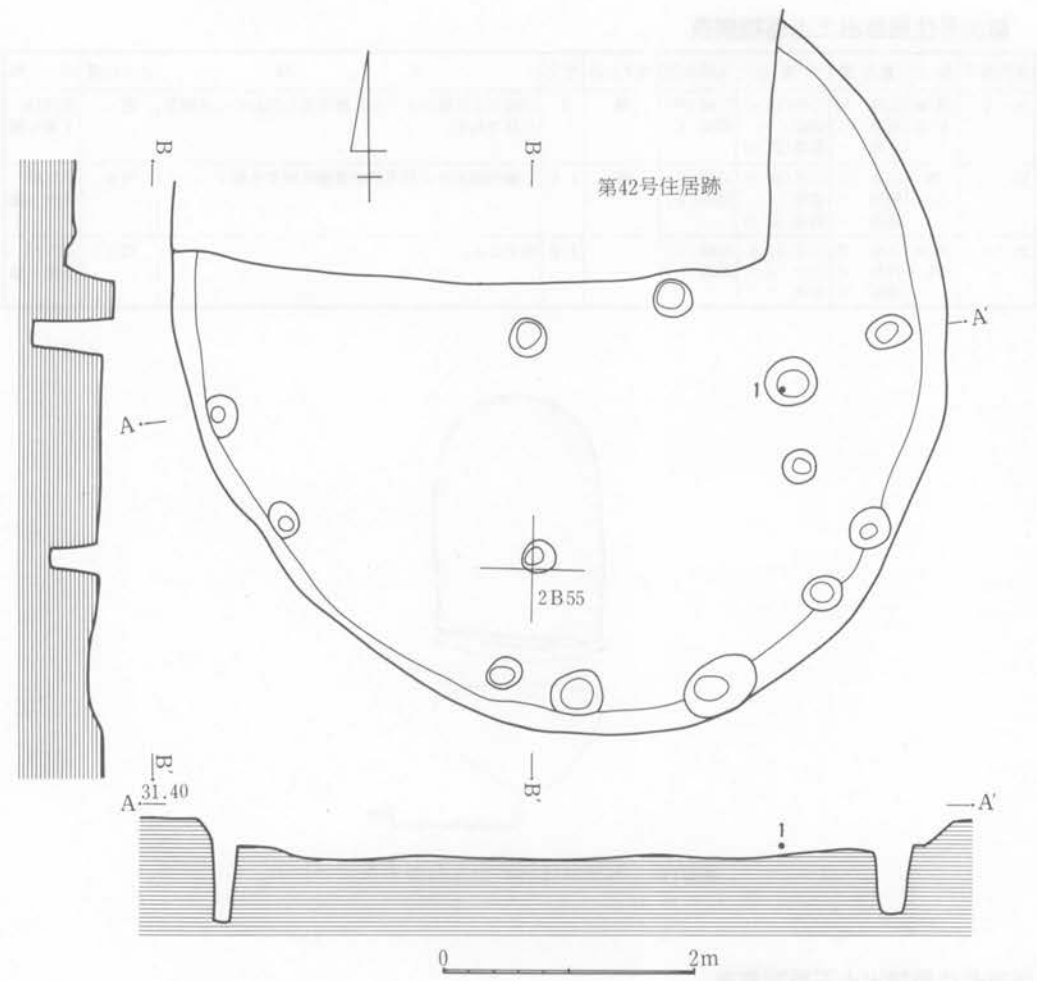
遺物番号	器種	法量 cm, g				石材	調整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	磨石	9.7	6.8	4.1	447	安山岩	転石を利用、表裏面磨耗、欠損部敲打痕明瞭。	36-2

第57号住居跡 (第51図 図版9・20・35)

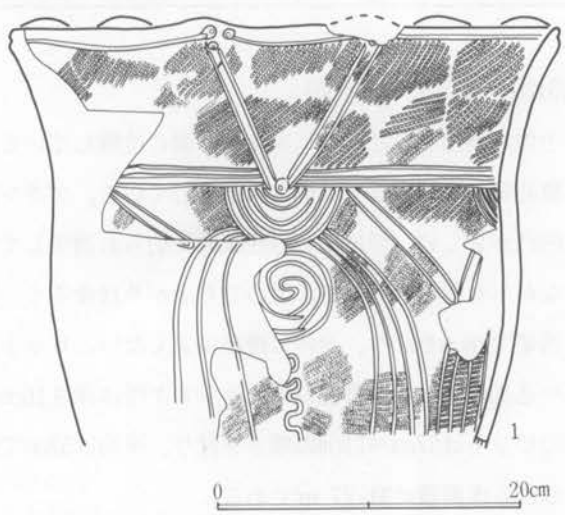
2 B45グリッドを主体に検出された。南に向かう斜面に位置している。

遺構 北側約1/4を第42号住居跡によって切られ消失している。プランは直径6.10mの円形と考えられる。床面は凹凸が著しい。炉は第42号住居跡に切られ消失していると思われるが、本住居跡には本来炉がなかった可能性もある。壁の立ち上がりはゆるく、残存する壁高は東壁で17cm、南壁で5cm、西壁で28cmを計り、全体に遺存はよくない。ピットは全部で18ヶ所検出され、すべて垂直に掘り込まれている。壁沿いのピット8ヶ所は深さ16cm~65cmで、平均は40cmである。残る5ヶ所のピットは37cm~71cmの深さを計り、平均は52cmで壁沿いのピットに比べ10cm程度深い。推定される床面積は31.27 m²である。

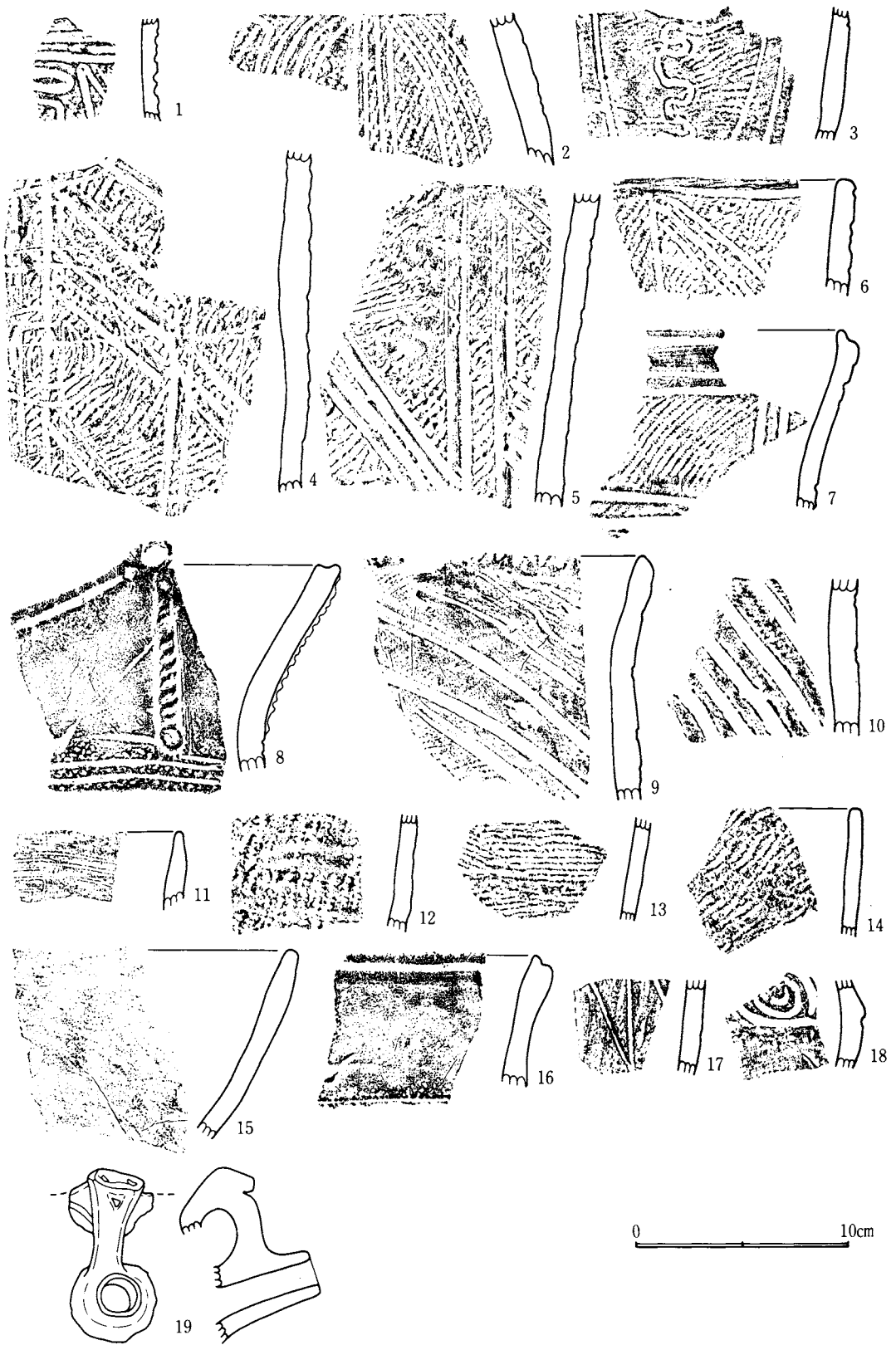
遺物出土状況 遺物の出土量は極めて少ない。土器は第52図1が比較的遺存のよいものだが、



第51图 第57号住居跡实测图 (1/60)



第52图 第57号住居跡出土土器实测图 (1/5)



第53图 第57号住居跡出土土器拓影图 (1/3)

第57号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
57-1	深鉢 A III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 -	口径 36.9 底径 - 器高(27.4)	口縁 3 胴部 6	竹	LR	口縁部及び頸部に沈線がめぐり、口縁からくびれ部にかかるV字状の沈線文。重層する半弧状文の下に渦巻文及び弧線文を施す。間に斜行する長楕円文を施文。	ピット内	第IV群 3類b種

それ以外はすべて覆土中から小破片で出土している。また破片だが注口土器の注口部と胴部が各1点覆土中から出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。土器量が少なく時期を決定しにくいだが堀之内第3期に属すると考えられる。

遺物 土器は古手ものがほとんどなく、全体的に新しい傾向を示している。

第52図1は頸部が緩くくびれる大型の深鉢である。頸部には3本の沈線がめぐり、口縁から頸部にV字状の沈線文が施される。胴部は重層する半円文とそこからのびる弧線によって単位文様が形成され、内部に渦巻文と垂下する蛇行沈線を伴う。単位文様間には斜行沈線文が加えられている。縄文の施文はほぼ全面に行われているが、押捺は弱く疎である。第IV群3類b種。

第53図1は蕨手文と思われれば、住居跡内からの蕨手文は唯一この例のみである。蕨手文の左右に弧線が伴うと思われる。第IV群2類a種か。同図2は多条化した沈線文で、垂下する4本の沈線文の左右に弧線を施している。第IV群2類a種。同図3は第52図1の破片である。単位文様内部の渦巻文から連続的に蛇行沈線がのびている。第53図4・5は同一個体である。太い半截竹管状工具によって垂下沈線を施し、その間に斜行沈線を加えている。地文はL無節縄文である。第IV群3類b種。同図6は4・5と同種に分類されよう。垂下する沈線文に斜行沈線を伴う。同図7は頸部をもつ深鉢である。口縁が若干肥厚する。分類不可。同図8・16は同一個体である。口縁から頸部にかけて研磨され無文帯を形成し、波頂下に刻目を伴う隆帯が垂下する。分類不可。同図9・10は同一個体である。地文は不明確だがLR単節縄文であろう。へらに近い半截竹管状工具によって斜行沈線を粗く施している。口唇に刻目を伴う。第IV群5類a種。同図11は地文がなく、半截竹管状工具による沈線のみである。器面は内外面ともに平滑。第IV群5類b種。同図12~14は縄文のみである。みなLR単節縄文である。第IV群8類a種。同図15は無文の浅鉢である。内外面ともに平滑。第IV群9類。同図17は地文を伴わず、棒状工具によって鋸歯状の沈線文が施されている。第IV群5類b種。同図18・19は注口土器である。18は胴部破片で胴部下半は無文となろう。19は注口の突出は小さく口縁と橋状把手で接続されている。

第86・87A・87B・87C号住居跡

2 C 30グリッドを中心に4軒の重複した住居群が検出された。南に向かう斜面に位置するため第86号及び第87B号、第87C号の各住居跡の南側の壁は流失しており、検出できなかった。4軒の住居跡のうち最も古いと考えられるのは第86号住居跡で他の3軒によって切られ竪穴は約 $\frac{1}{2}$ が残存しているにすぎない。第87A号住居跡は第87B号及び第87C住居跡によって切られており、第86号→第87A号→第87B号及び第87C号の順に新しくなるものと考えられる。第87B号及び第87C号住居跡の新旧関係は不明である。以下各住居跡について詳述する。

第86号住居跡（第54図 図版9・21）

2 B 49グリッドを主体に検出された。

遺構 第87A号・第87B号・第87C号の各住居跡によって切られ、残存するのは南東側約 $\frac{1}{2}$ のみである。また南側壁の一部は流失しており検出できなかった。プランは直径約5.50mの円形と推定される。炉はやや南側に寄った位置で検出された。長径75cm、短径62cmの不整形で、掘り込みは浅く丸底を呈する。床面は若干凹凸をもつが全体に硬質である。壁の立ち上がりはゆるく、残存する壁高は北壁で25cm、西壁で9cmである。ピットは炉に近接して1ヶ所と壁沿いに6ヶ所検出され、第87A号住居跡の床面にも関連したピットが検出されている。ピットの深さは17cm～47cmで、平均は34cmである。ピットの掘り込みは1ヶ所で傾くほかはほぼ垂直に掘り込まれている。壁沿いのピットの間隔は1m前後と一定している。推定される床面積は28.26㎡である。

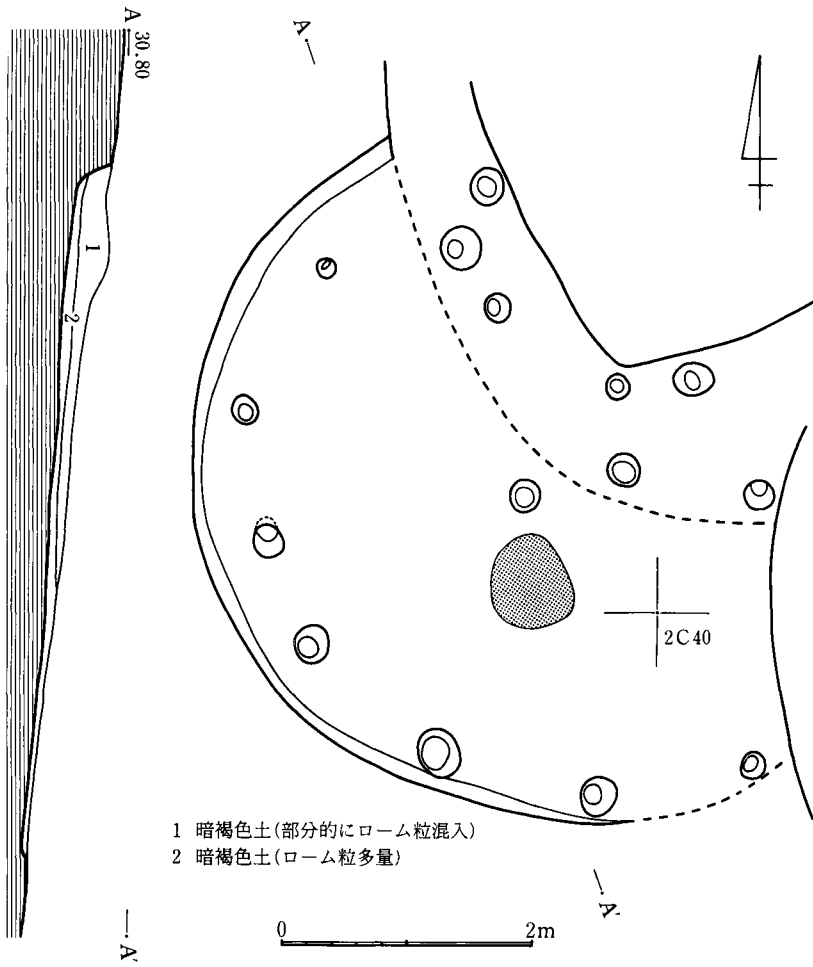
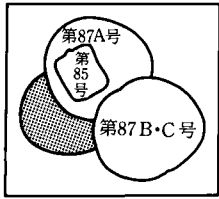
遺物出土状況 竪穴の遺存が悪く、覆土量が極めて少ないことから、遺物はほとんど出土していない。第55図1を除いて、出土した土器片は拓影も取ることができないものである。第55図1は床面直上から出土している。また、土製蓋が1点完形で覆土中から出土している。

第55図1は縄文時代後期の堀之内I式であり、この土器から本住居跡は堀之内第2期に属すると考えられる。

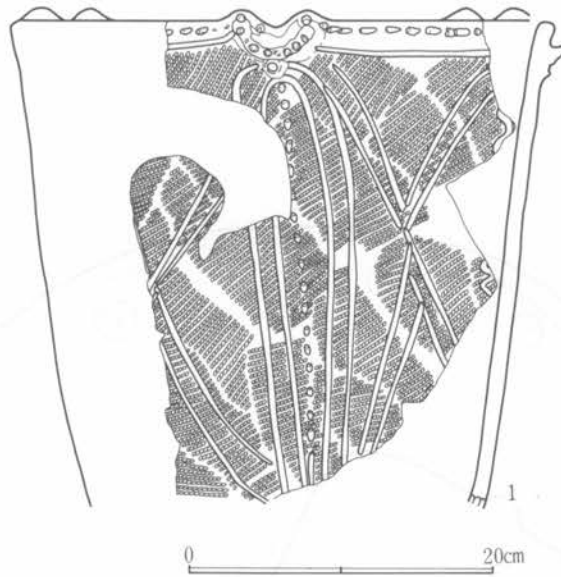
遺物 第55図1は3単位小波状口縁の深鉢である。波頂下にU字状の突起を伴い、口縁部には連続する刺突が施される。突起の下には列点を伴う沈線文が施され単位文様をなす。単位文様間にはX字状の沈線文が施され、さらに蛇行沈線が付け加えられている。地文のLR単節縄文は極めて明瞭に押捺されている。口縁部及び内面の調整はよく、器面は内外面ともに黒褐色を呈する。第IV群3類f種。

第86号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
86-1	深鉢 B III	口縁 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部 一	口径 35.7 底径 一 器高 (32.2)	口縁(3) 胴部(3)	竹	LR	口縁部にU字状の突起を付ける。垂下する沈線の間に列点文を施し単位文様とする。単位文様間にX字状の沈線を施す。	床面直上	第IV群 3類f種



第54図 第86号住居跡実測図 (1/60)



第55図 第86号住居跡出土土器実測図 (1/5)

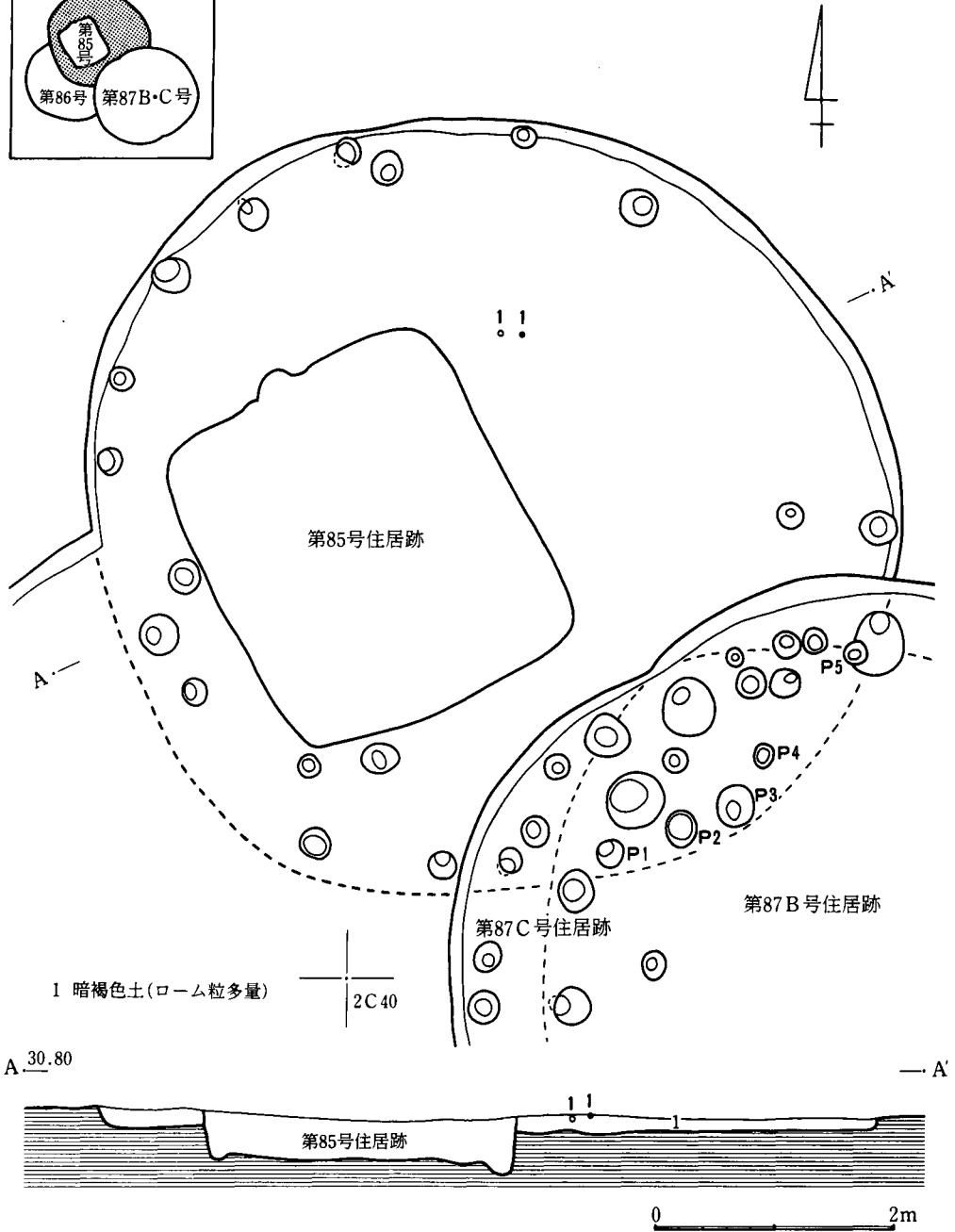
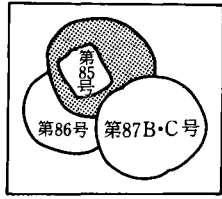
第87A号住居跡 (第56図 図版9・20・35・70)

2C30グリッドを主体に検出された。

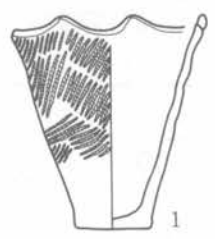
遺構 第86号住居跡が床面の西側半分に位置している。炉が存在したとすれば第86号住居跡によって切られた部分にあたると思われる。覆土の土層断面から第86号住居跡を切っていることを確認したが、重複部分の壁は確実にとらえることができなかった。また南西側は第87B号及び第87C号住居跡によって切られ壁は消失していたが、壁沿いのピットは第87B号及び第87C号住居跡の床面上に検出することができた。P1～P5がそれにあたると思われる。プランは直径約6.70mの円形と推定され、検出された縄文時代の住居群のうち最も規模の大きな住居跡である。床面上で検出したピットは28cm～78cmの深さで平均は49cmである。ピットの間隔は一定していない。ピットの掘り込みは3ヶ所で傾くほかは垂直に掘り込まれている。床面は凹凸が著しい。壁の遺存は悪く、北壁で16cmの残存高を計るにとどまる。推定される床面積は35.13㎡である。

遺物出土状況 竪穴がいたって浅く、第85号住居跡によって中央を大きく切られているため、遺物の出土量は極めて少ない。土器は第57図1が床面からほぼ完形の状態で出土しており、大半の土器は小さな破片で覆土から出土している。

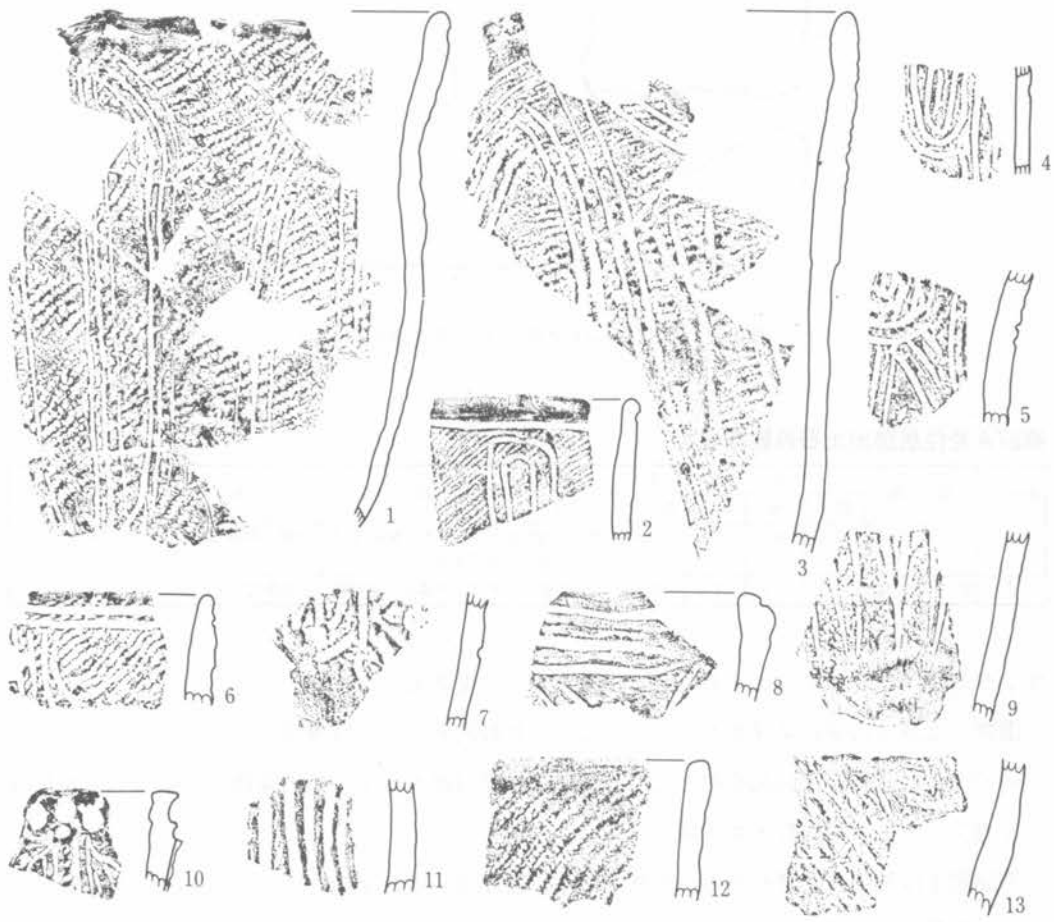
土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。土器量が少ないため時期の判別に苦しむが、本住居跡は堀之内第2期に属すると思われる。石器は石皿1点、磨石1点が出土し、1は床



第56図 第87A号住居跡実測図 (1/60)



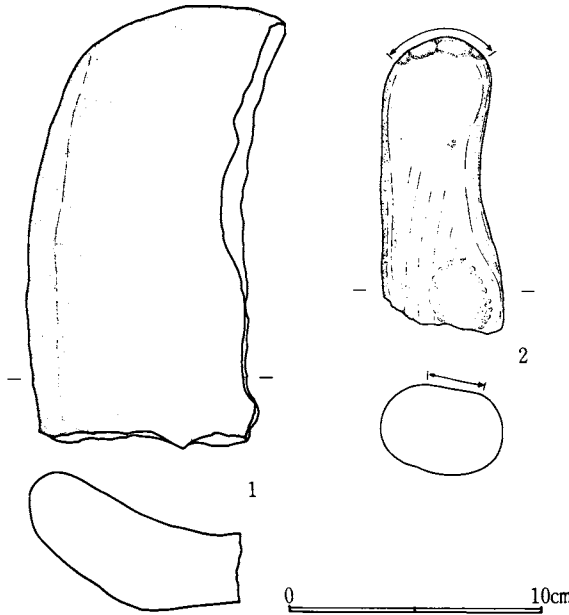
第57图 第87A号住居迹出土土器实测图 (1/5)



第58图 第87A号住居迹出土土器拓影图 (1/3)

第87A号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
87A-1	深鉢 B IV	口縁 ¾ 胴部 完 底部 完	口径 12.5 底径 5.1 器高 14.0	口縁 2 胴部 一	—	LR	地文のみ。	床面直上	第IV群 8類a種



第59図 第87A号住居跡出土石器実測図 (1/3)

第87A号住居跡出土石器観察表

遺物番号	器種	法量 cm, g				石材	調整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	石	皿 (17.2)	(8.8)	5.5	1,140	多孔質 安山岩	方形を呈し、深さ2.5cmを計り、側縁に微妙な稜がある。底面は平坦で安定が良い。	87-3
2	磨石	(11.5)	4.8	3.4	309	砂岩	転石を利用。表裏面一部磨耗、上端敲打痕あり。	87-1

面よりやや浮いた状態で出土した。2は覆土中からである。

遺物 土器は古手の文様をもつものではなく、比較的新しい文様構成のものが多い。

第57図1は2個の小突起を対として2単位の波状口縁をなす小型の深鉢である。LR単節縄文を地文とする。第IV群8類a種。

第58図1は若干のくびれをもつ深鉢である。器厚は一定せず粗いつくりである。半截竹管状工具で垂下する沈線を施し、左右に弧線を加えている。第IV群2類a種。同図2は小型の深鉢と思われ、細いLR単節縄文を地文とし、沈線文を施している。分類不可。同図3は1と同じく器厚の一定しない深鉢である。半截竹管状工具で沈線文を粗く施文している。単位は構成しないようである。第IV群5類a種。同図4は沈線の多条化したクランク状文である。第IV群3

類c種。同図5～9・11は小破片のため文様構成は不明。みな分類不可である。8・11は地文をもたない。同図10は垂下する隆帯を貼付けている。文様構成は不明だが第IV群6類a種に分類されようか。同図12・13は地文のみである。12はLR単節縄文、13は押捺が弱く原体は不明である。第IV群8類a種。

第87B号・第87C号住居跡（第60図 図版9・21・36・70）

2C41グリッドを主体に検出された。調査区南端の斜面に位置している。

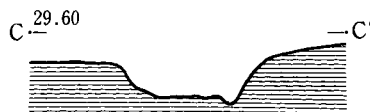
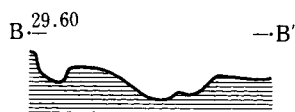
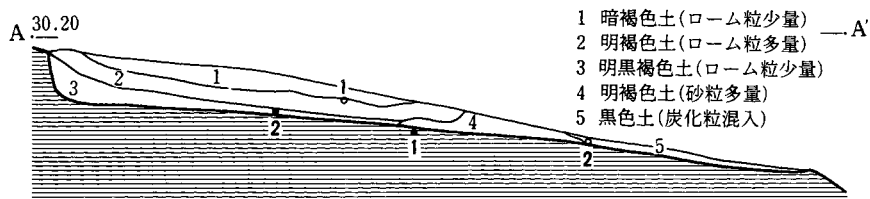
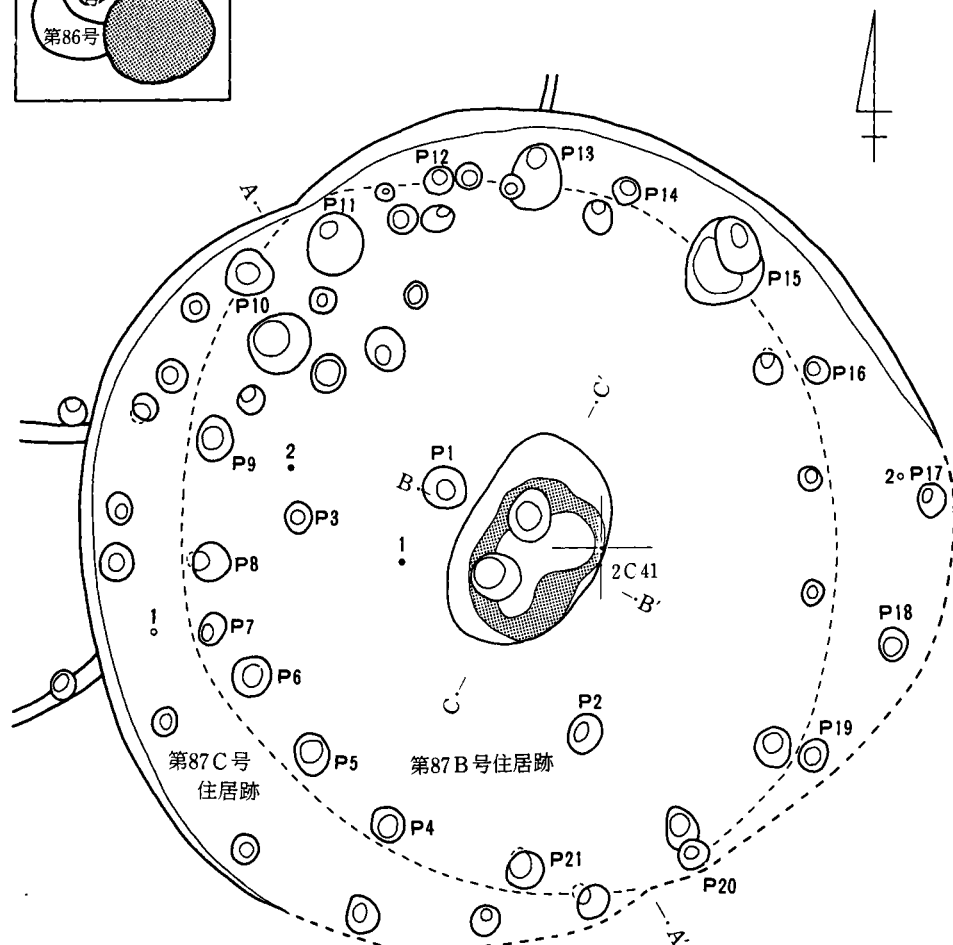
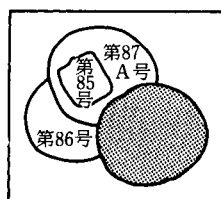
遺構 斜面にあるため、床面の南側半分は硬質部分を失い、壁も南側では検出できなかった。壁沿いのピットはかろうじて検出することができ、住居の規模をとらえることは可能である。調査を開始した時点では1軒と思われたが、完掘後ピットの配列から2軒と判明した。土層断面からは2軒の新旧関係はとらえにくく、中央に検出された炉においても、重複すると考えられるが明確な切り合いの状況を認めることはできなかった。検出した炉は長径167cm、短径110cmの不整形を呈し、内部にはドーナツ状に焼土が堆積していた。炉底には2つの浅いピットが認められる。壁は最も遺存のよい北壁で41cmを計り、南にいくにしたがい漸次残存する壁は低くなる。ピットは48ヶ所検出され、円形に並ぶピットの列が約50cmずれた状態で検出された。ピットの配列から拡張などが行われたのではなく、別個に2軒の住居が営まれたものと考えられるが、炉の状況から短期間のうちにほぼ連続して住居が建てられたと推測される。東側を第87B号、西側を第87C号とする。ともに直径6.00mの円形プランと考えられる。第87B号住居跡に伴うピットはP4～P21の18ヶ所と思われる。深さ22cm～80cmを計り平均は53cmである。ピットの間隔は70cm前後と一定している。また第87C号住居跡に伴うピットは21cm～64cmを計り、平均40cmで、第87B号住居跡のピットに比べ若干浅い。中央のP1～P3はそれぞれ102cm、52cm、44cmの深さを持ち、いずれも柱穴と考えられるが、中心に位置するのはP1以外に見当たらないことから、あるいはP1が2軒に共通し、柱穴として使用された可能性もあろう。床面積は2軒ともほぼ同じで28.88㎡と推定される。

遺物出土状況 斜面にあって堅穴の遺存が悪いことから遺物の出土量もそれに相応している。第61図1はほぼ完形に復元することができたもので、炉の南側約40cm離れた床面から潰れた状態で出土している。他はほとんどが小破片で出土しており、主に覆土からである。

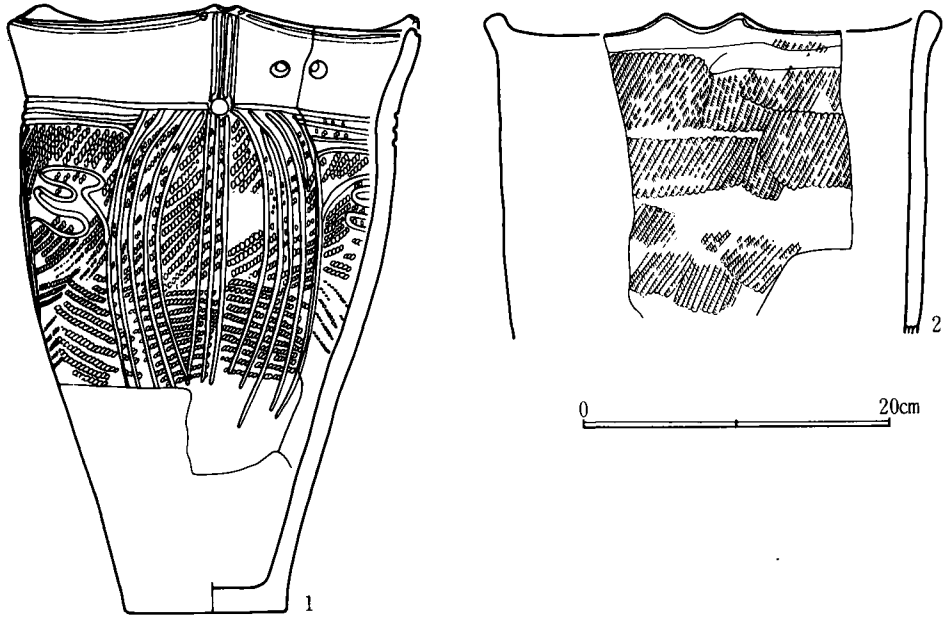
土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第3期に属すると考えられる。石器は磨製石斧1点、磨石3点が出土し、1は第87C号住居跡覆土中から、2は第87B号住居跡床面上からの出土であった。3・4は明確にし得なかったが覆土中からのものであった。

遺物 土器は古手のものが破片で出土しているが、全体的に新しい傾向を示している。

第61図1はほぼ完存する深鉢である。頸部の横走沈線によって無文帯と胴部文様とを区画し



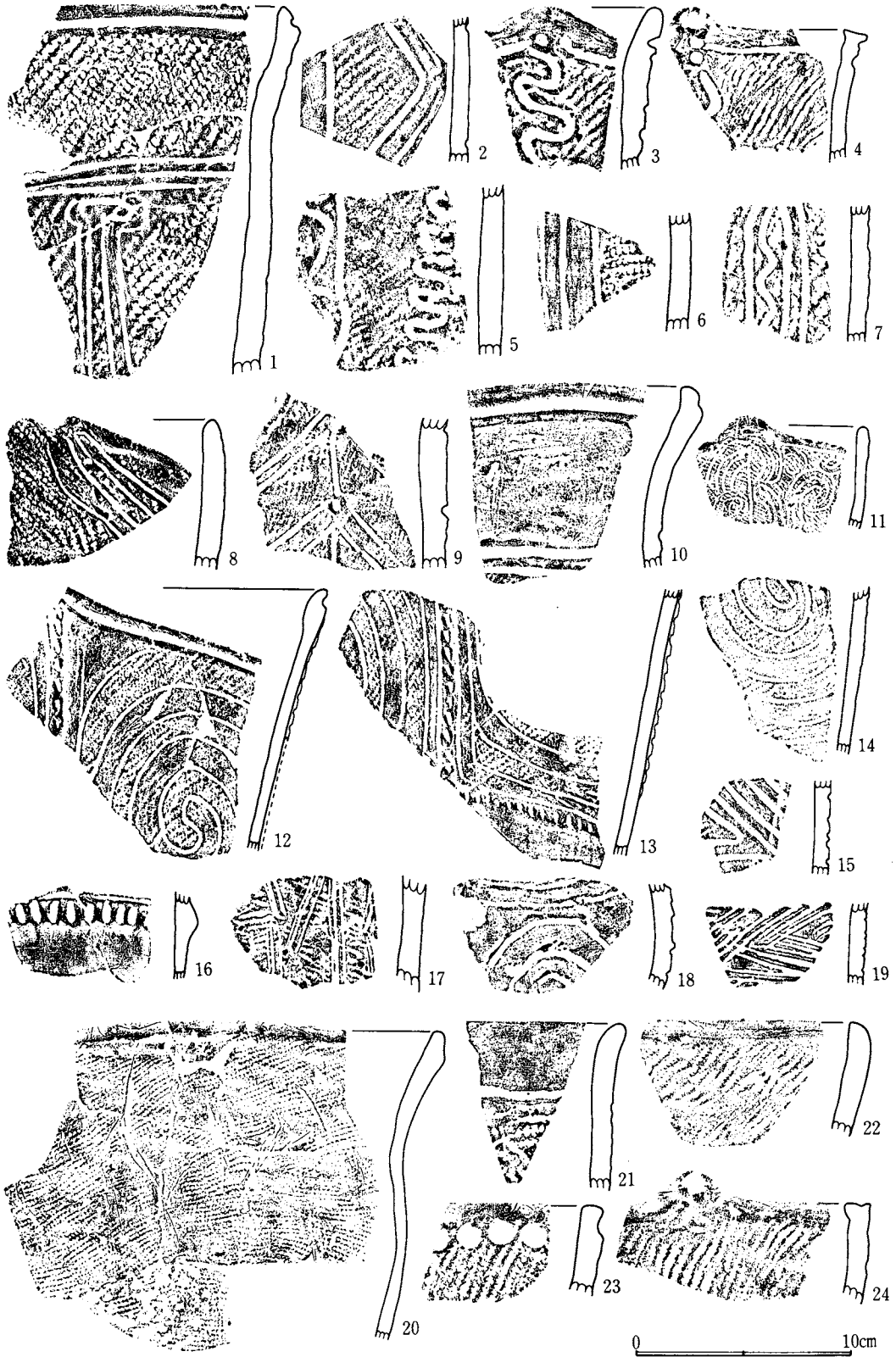
第60図 第87B・C号住居跡実測図 (1/60)



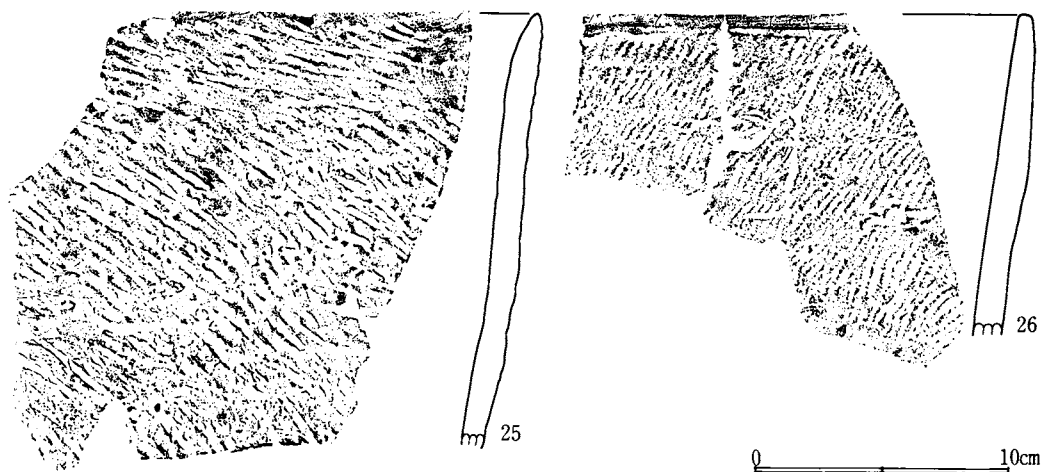
第61図 第87B・C号住居跡出土土器実測図(1/5)

ている。口縁は3単位の小波状で、口唇にやや深めの沈線がめぐる。上半の無文帯はよく研磨されている。胴部には重層する弧線を伴った単位文様を施し、単位文様間に曲線文を加えている。無文帯に補修孔と思われる2つの貫通孔があり、孔の間に新しいとは思われないひび割れが認められる。地文は太めのLR単節縄文である。第IV群3類g種。同図2はL無節縄文を地文とする。口縁は小突起を対とする波状口縁である。第IV群8類a種。

第62図1・2・6は磨消し手法を伴い、第IV群1類a種に分類される。1は頸部がわずかにくびれる深鉢である。頸部の横走沈線の間を磨消す特異な例である。2・6は同一個体かもしれない。沈線の間を丁寧に磨消している。同図3・4は単純な蕨手文が施されている。第IV群1類b種。同図5は蕨手文と蕨手文の間に蛇行沈線が施されている。第IV群3類a種。同図7は蛇行沈線の左右に弧線が施されている。第IV群2類a種か。同図8は地文にRL単節縄文をもつ口縁部破片である。分類不可。同図9は垂下沈線上に一定の間隔で刺突を施し、刺突から左右に斜行沈線を加えている。地文はLR単節縄文のようだが極めて不明瞭である。分類不可。同図10は頸部のくびれが強い深鉢で、口縁から頸部にかけてよく研磨されている。分類不可。同図11は小型の深鉢である。地文は細いRL原体による縄文で垂下沈線に重層する弧線を施し単位文様としている。単位文様間には渦巻状の沈線文を施している。第IV群3類g種。同図12~14は同一個体である。押し引きの刺突を伴う垂下隆帯を貼付け、胴部文様の下端を刻目のある隆帯によって区画している。胴部の隆帯と隆帯の間にはLR単節縄文が施され、その上に大きな渦巻文が沈線によって描出される。沈線間の縄文は交互に磨消されている。器厚は薄く



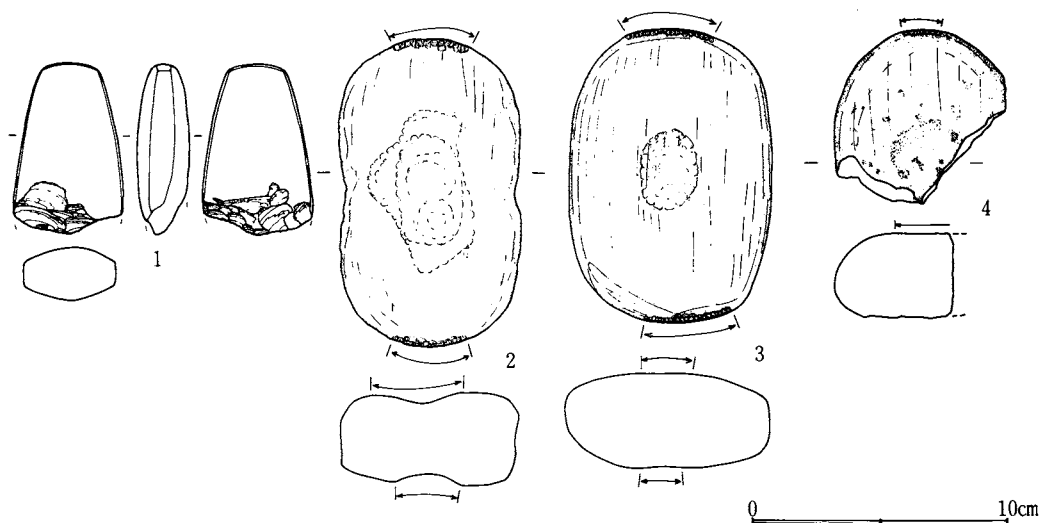
第62图 第87B·C号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 1



第63図 第87B・C号住居跡出土土器拓影図 (1/3) Na 2

第87B・C号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
87B・C-1	深鉢 A III	口縁 完 胴部 $\frac{3}{4}$ 底部 完	口径 26.0 底径 10.5 器高 39.5	口縁 3 胴部 3	竹	L R	口縁に沈線を施す。垂下する沈線の左右に重畳する弧線を施し、単位文様とする。単位文様の間に藤手文状の曲線文を施す。	床面直上	第IV群 3類 8種
87B・C-2	深鉢 B III	口縁 $\frac{1}{6}$ 胴部 $\frac{1}{6}$ 底部 一	口径(29.8) 底径 一 器高(21.0)	口縁(4) 胴部 一	—	L	地文のみ。	床面直上	第IV群 8類 a種



第64図 第87B・C号住居跡出土石器実測図 (1/3)

第87B・C号住居跡出土石器観察表

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	磨製石斧	5.8	4.1	2.0	(86)	砂 岩	定角式磨製石斧である。全体を丁寧に研磨し、頭部に稜がみられる。刃部は下端からの衝撃によりV字状に破損する。断面は隅丸長方形をなす。	87C-4
2	磨石	11.9	7.1	3.6	333	多孔質安山岩	長楕円形を呈し、側面調整され稜が明瞭。表裏面磨耗。表裏両側面に1ヶ所づつ約3mmの凹あり、上下端敲打痕あり、2次火熱を受ける。	87B-16
3	磨石	11.3	8.0	3.7	610	輝石安山岩	楕円形を呈し、側面調整され、稜がやや明瞭。全面磨耗、側面付近の一部の磨耗著しい。表裏面に1ヶ所づつ微妙な凹あり。上下端敲打痕あり。	87B-31
4	磨石	(6.7)	(6.6)	(3.2)	219	多孔質安山岩	楕円形を呈す。全面磨耗され、特に上端付近の磨耗著しい。上端敲打痕あり。	87B-1

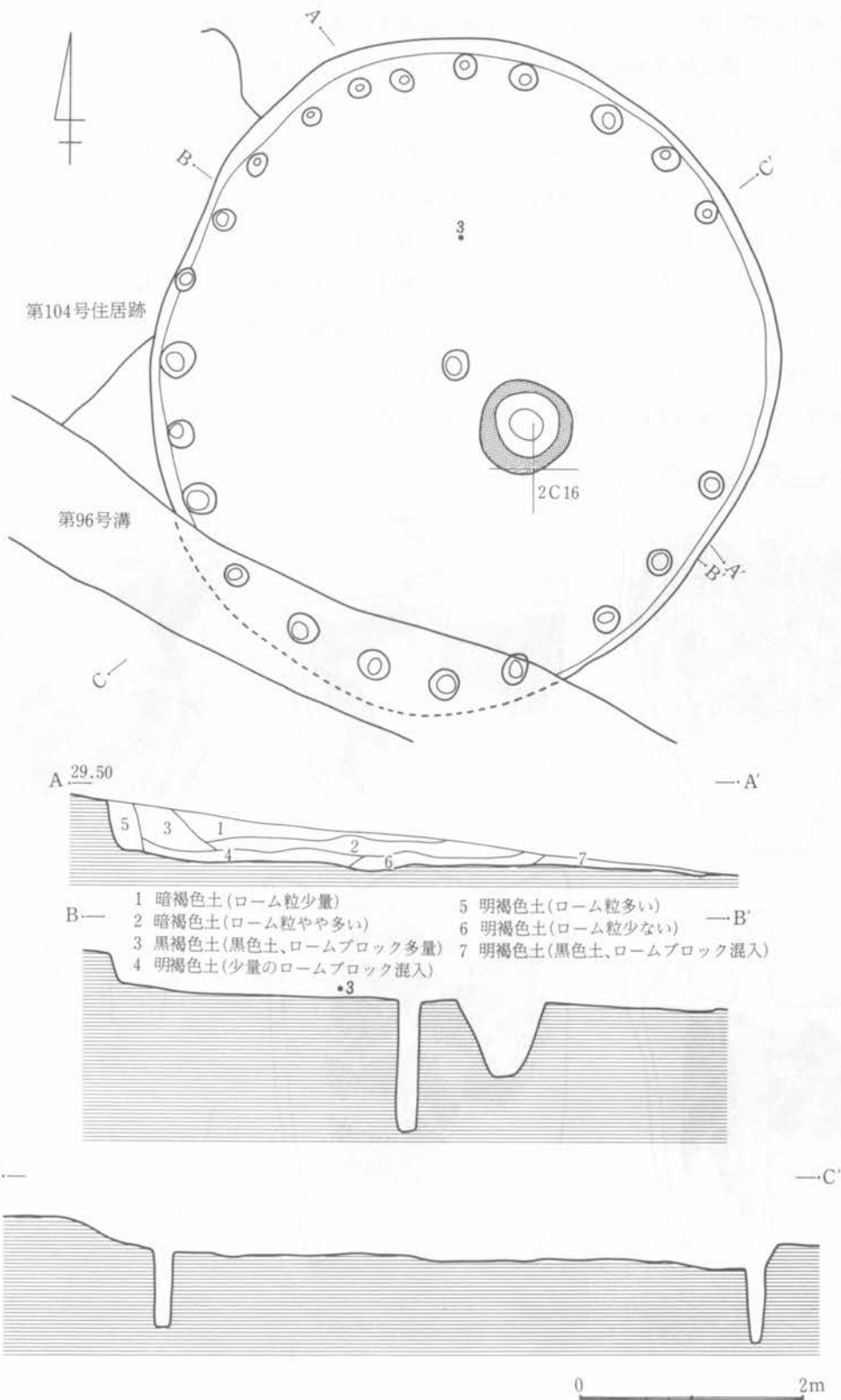
内面の調整も丁寧に行為れ焼成も良好。このような隆帯に磨消し手法を伴う例は少なく、本例を含め調査によって出土したのは3個体程度であり、本遺跡においては稀少な存在である。第IV群6類c種。同図16は文様帯の下端を区画する隆帯である。内外面の調整は極めて良い。第IV群6類a種か。同図17は半截竹管状工具によって短い沈線が雑に施されている。第IV群11類。同図18は地文をもたず渦巻文が沈線によって描出されている。注口土器の破片かもしれない。分類不可。同図19は地文を伴わず沈線で綾杉文を描出している。分類不可。同図20・22~24、第63図25・26は地文のみである。第IV群8類a種に分類される。20は頸部のくびれが大きい深鉢で、この器形は8類の中ではあまり多くはみられない。20・22・24・26はLR単節縄文、25はR無節縄文である。第62図21は口縁部に幅の狭い無文帯を伴う深鉢である。地文はLR単節縄文。第IV群8類c種。同図23は凹文を伴う。地文はLR単節縄文。第IV群8類b種。

第105号住居跡 (第65図 図版10・21・36・37)

2C05グリッドを主体に検出された。縄文時代住居跡群の最東端にあつて、南東に向かう斜面に位置している。

遺構 竪穴の遺存は悪く、南東部分はピットを検出したにとどまる。また、北西方向にはしる溝によって南側の一部が切られ消失しており、溝が浅いためかろうじてピットを検出することができた。プランは直径5.70mの円形を呈する。炉は中央からやや南東に寄った位置に検出され、直径83cmの円形を呈する。掘り込みは深く45cmを計る。内部には焼土がドーナツ状に堆積していた。床面は若干凹凸がある。残存する壁の立ち上がりは垂直に近く、壁高は北壁で44cm、西壁で27cmである。ピットは中央に1ヶ所、壁沿いに22ヶ所検出された。中央のピットは深さが116cmあり極めて深く、垂直に掘り込まれている。壁に沿うピットの深さは41cm~82cmを計り、平均は60cmである。ピットの間隔は70cm前後ではほぼ等間隔に配置されているが東側の一部にはピットが検出されておらず出入口に関連する部分かとも考えられる。検出されたピットはみな垂直に掘り込まれている。推定される床面積は26.06㎡である。

遺物出土状況 斜面にあつて南東側の覆土を流出しているため遺物量はあまり多くない。土



第65図 第105号住居跡実測図 (1/60)

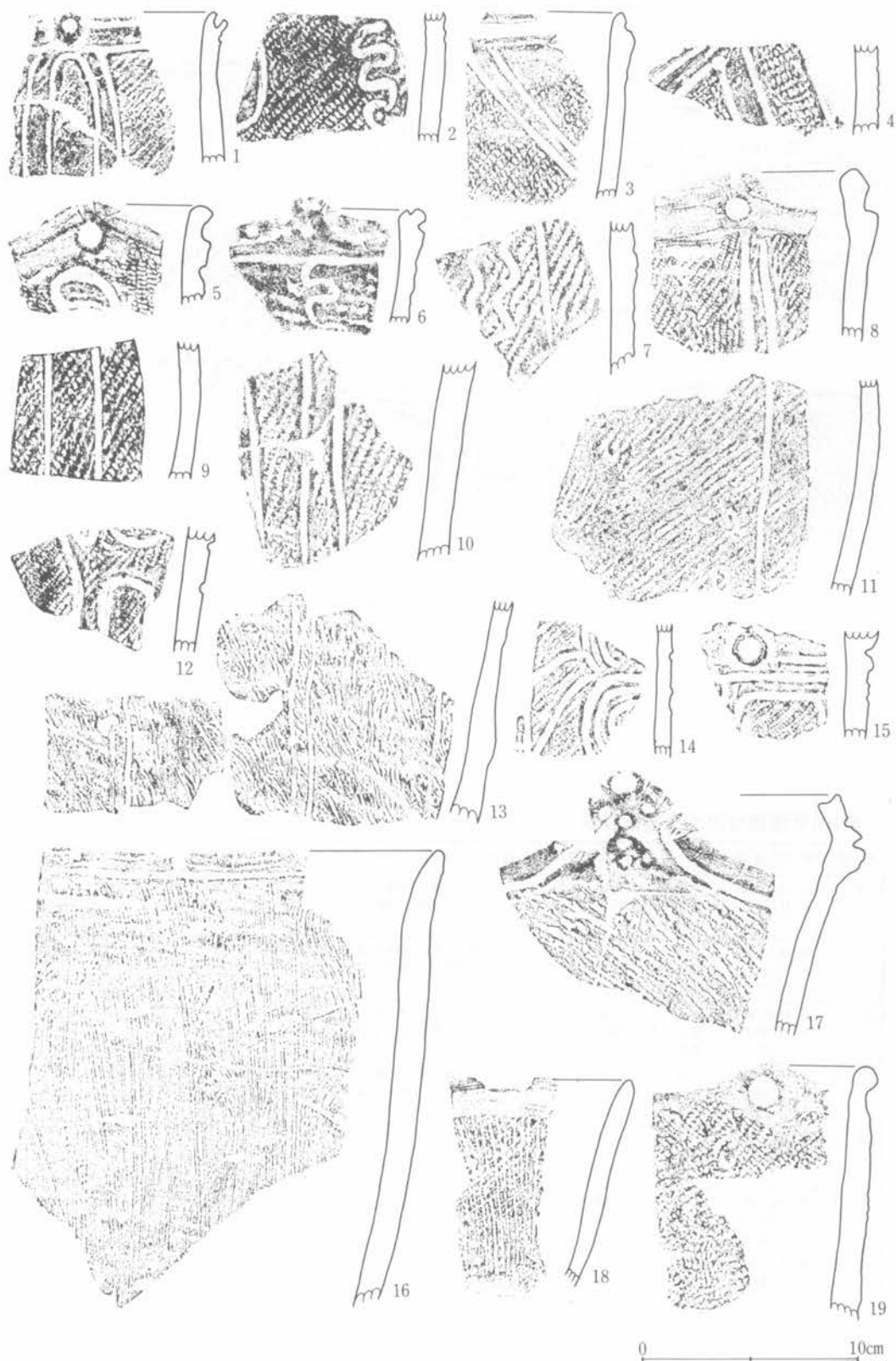
器片の多くが覆土中から出土しており、第66図の実測個体もすべて覆土中から出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第1期に属すると考えられる。

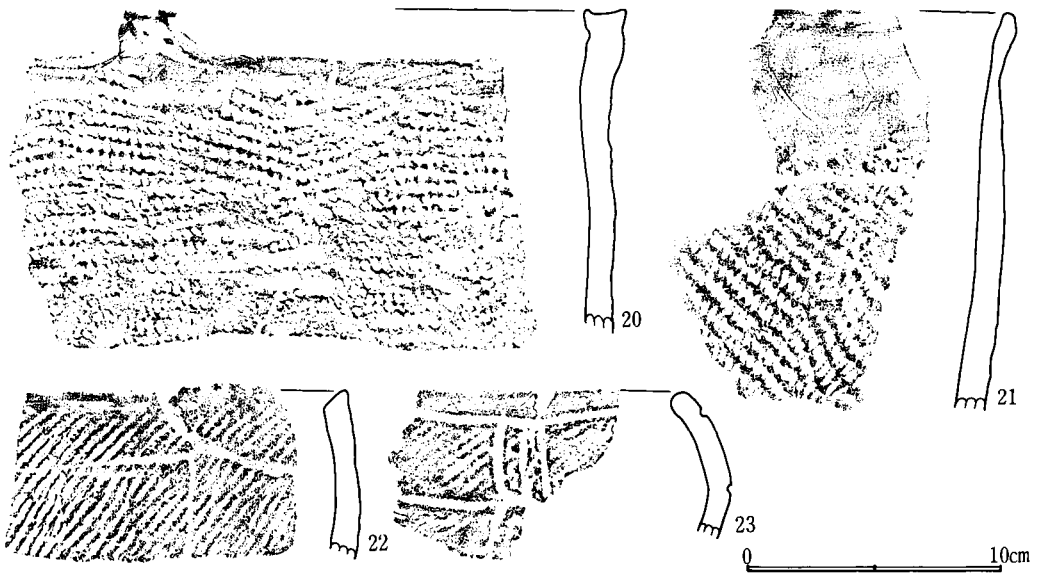
遺物 土器は総じて単純な文様構成のものに限られており、第9・10号住居跡とはほぼ同様の傾向を示している。第66図1はH字状の沈線文を伴う唯一の例である。口径と胴部最大径がほぼ同じで、胴部上半にゆるいくびれをもつ。口縁は3単位小波状で肥厚している。深い沈線がめぐり、波頂部の左右に深い刺突が施される。胴部には太い沈線によってH字状文が描出され、2個の刺突文が付け加えられている。このH字状文が単位文様となり、単位文様間にクラック状の沈線文が施されている。一般に口縁の波頂下に単位文様は施されるが、この土器は口縁の波状と胴部文様がずれるめずらしい例である。胎土・焼成ともに良好で、器厚はやや薄い。



第66図 第105号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第67图 第105号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 1



第68図 第105号住居跡出土土器拓影図 (1/3) No.2

第105号住居址出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
105-1	深鉢 A II	口縁 1/2 胴部 2/3 底部 1/2	口径(20.0) 底径(6.8) 器高 28.5	口縁 3 胴部 4	竹	LR	口縁に沈線を施す。H字状の沈線文を単位文様とし、単位文様の間に垂下するクランク状文を施す。	覆土	第IV群 3類c種
105-2	深鉢 B III	口縁 1/3 胴部 1/2 底部 —	口径(21.3) 底径 — 器高(16.5)	口縁(4) 胴部(8)	竹	LR	口縁に沈線を施す。胴部に蕨手文を施す。蕨手文内部は磨消さない。	覆土	第IV群 1類b種
105-3	深鉢 A III	口縁 1/2 胴部 2/3 底部 —	口径 17.2 底径 — 器高(20.4)	口縁 平 胴部 4	棒	RL	8の字浮文の下に垂下沈線を施す。内部を磨消す。口縁部に上下を沈線区画する帯状文様がつけられ、内部に列点文を施す。	覆土	第IV群 1類a種
105-4	深鉢 A III	口縁 1/4 胴部 2/3 底部 —	口径 19.3 底径 — 器高(21.6)	口縁 3 胴部 3	竹	LR	垂下する沈線の間に蛇行沈線を施し、単位文様とする。単位文様から2段の斜行沈線を施す。	覆土	第IV群 3類b種
105-5	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 —	口径(22.3) 底径 — 器高(29.2)	口縁 3 胴部 —	—	RL	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
105-6	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 完	口径 — 底径 7.6 器高(6.4)	口縁 — 胴部 —	—	—	—	覆土	第IV群
105-7	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 完	口径 — 底径(9.7) 器高(8.5)	口縁 — 胴部 —	—	—	—	覆土	第IV群

色調は赤褐色を呈し、この土器だけ極めて特異であり、他地域からの搬入品である可能性もある。第IV群3類c種。同図2は胴部に単純な蕨手文が施されている。地文はLR単節縄文だが、横位に施文したのち、一定の間隔をおいて縦位に施文しているため、一見羽状を呈する。第IV群1類b種。同図3は口縁部に深い2本の沈線を施して間を隆帯状に浮きたたせ、押し引き刺突文を加えている。8の字浮文が貼り付けられ、浮文の直下に垂下沈線を施して、内部の縄文を磨消している。口縁部に押し引きの刺突文が施される例は他に第86号住居跡出土の深鉢しかなく、きわめて稀な存在である。第IV群1類a種。同図4は口縁に3単位の小突起を伴う。胴部は2本の垂下沈線の間を蛇行沈線を施して単位文様とし、単位文様の左右に斜行するU字状文を加えている。地文はLR単節縄文である。なお、このような口縁の小突起は破片でわずかに出土しているのみで、図化し得たのは、この個体のみである。第IV群3類b種。同図5は波状口縁の深鉢である。地文はRL単節縄文である。第IV群8類a種。

第67図1～4は第IV群1類a種に分類される。1は口縁に深い刺突を加え、胴部にU字状の沈線文を施して内部を磨消している。2はU字状文と蕨手文が施されていると思われ、ともに内部を磨消している。3・4は文様構成は不明だが、沈線の間を磨消している。同図5～13は第IV群1類b種に分類される。5は口縁波頂下に凹文を施し、胴部には蕨手文を施している。6は小突起の付いた口縁である。突起には刺突が施され、胴部には蛇行沈線が垂下する。地文の縄文は判別できない。7は胴部下半の破片で蕨手文が施されていると思われる。8は凹文の直下に2本の垂下沈線を施しただけの単純な文様構成である。9～11・13も8と同様の単純な文様構成をとるものであろう。なお13の地文はRR反撚縄文と思われる。12は胴部中位の破片である。H字状文に近似した文様と思われる。同図14は団子状に連なる同心円文を単位文様とし、さらに斜行沈線が施されるものである。第IV群3類b種。同図15はリング状に浮文が貼り付けられている。文様構成は不明。分類不可。同図16は器厚の厚い深鉢である。垂下する条線が極めて密に施されており、蛇行する条線もわずかに認められる。第IV群7類b種。同図17は口縁部に瘤状の突起を伴い刺突が施されている。胴部は地文のみである。地文はRR反撚縄文であろう。第IV群8類b種。同図18は浅鉢の破片である。半截竹管状工具によって垂下及び斜行する条線が施されている。第IV群7類b種。同図19は口縁部に凹文を伴う。地文はLR単節縄文。第IV群8類b種。第68図20は小突起を伴う口縁部破片である。地文はRL単節縄文。第IV群8類a種。同図21は幅の狭い無文帯を伴う。胴部はRL単節縄文で、この破片には無文帯と縄文帯とを区画する沈線が施されていない。第IV群8類c種。同図22・23は鉢の口縁部破片である。22はLR単節縄文のみ。第IV群8類a種。23は強く内彎する口縁で、内彎する部分にのみ文様が施されていると思われる。小破片のため縄文が沈線の間にもみ施されているのかははっきりしない。分類不可。

第112号住居跡 (第69図 図版10・22・23・37・38)

2 C23グリッドを主体に検出された。調査区南端の斜面に位置しており、住居跡の南側は谷へ向かう急斜面となっている。東側約2m離れ第159号住居跡が近接している。

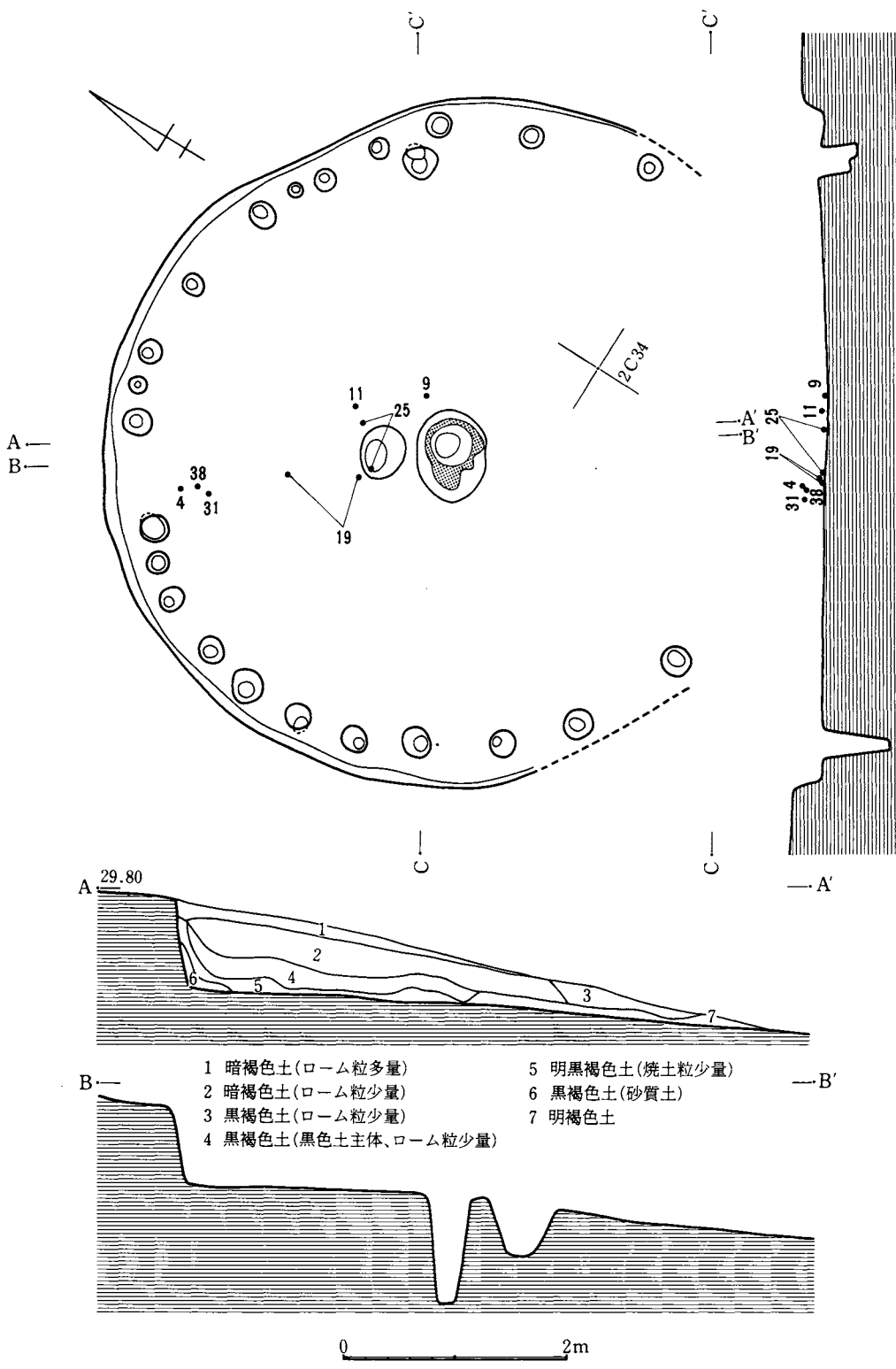
遺構 急斜面に移行する端部に位置するため住居跡の南東側は流失しており、壁及びピットは一部分検出できなかった。プランは直径4.20mの円形と推定される。炉は住居跡のほぼ中央に位置し長径80cm、短径62cmの楕円形を呈する。掘り込みは深く52cmを計り、内部には焼土ブロックがドーナツ状に堆積していた。床面は硬質であるが、炉の南側は流失し硬化した面は検出できなかった。壁は垂直に近い状態で立ち上がり、残存壁高は遺存のよい北壁で42cm、東壁で35cm、西壁で16cmである。ピットは中央に1ヶ所、壁沿いに23ヶ所検出された。中央のピットは炉に近接し、直径45cm、深さ88cmを計り、垂直に掘り込まれている。壁沿いのピットは17cm～63cmの深さを持ち、平均は41cmである。ピットの間隔は30cm前後と比較的に配置されている。掘り込みはほとんどが垂直に近く、3ヶ所で若干中央に傾く程度である。推定される床面積は29.84㎡である。

遺物出土状況 斜面にあつて南東側の覆土の流出が多いにもかかわらず、遺存する部分の掘り込みが深いため、この部分から多量に土器が出土している。堀之内期の住居跡群中最も土器の出土量が多い。全形を知り得る実測個体は約30個体あり、深鉢のほか大型の鉢や浅鉢などが含まれる。第71図9は炉に近接する床面から出土し、同図11・第72図19・第73図25は中央ピットの周囲床面からかたまって出土している。また、第70図4・第73図31・第74図38は北西の壁に近接する覆土下位からやはりかたまって出土している。残る実測個体はみな覆土中からである。遺存する個体が多く、すべてが本住居跡に本来伴うものとは思われないが、時期的にまとまりをもっている。他に土器片円盤が1点覆土から出土している。

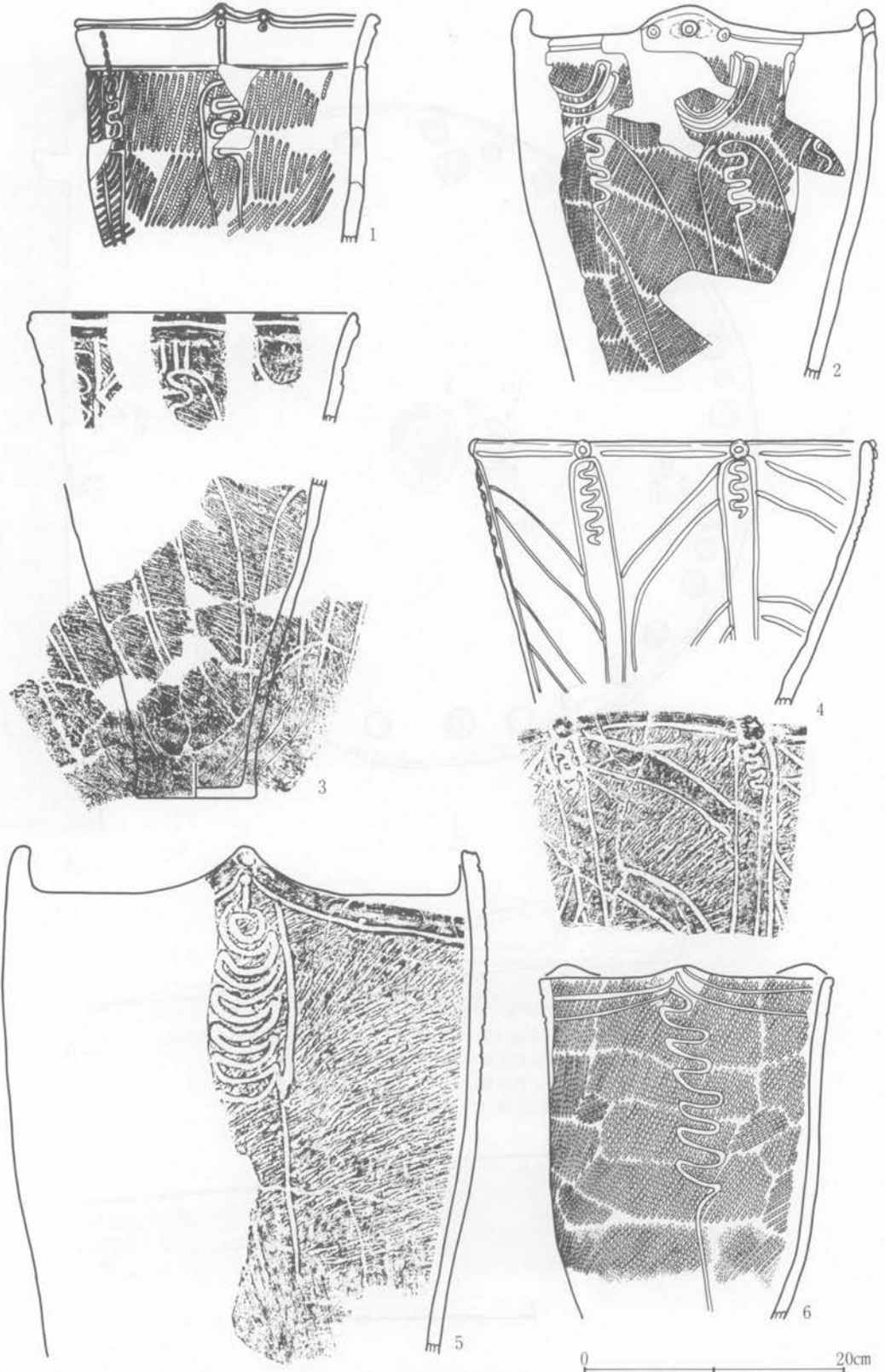
土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第1期に属すると考えられる。

遺物 土器は全体に古い様相を示している。胴部文様では蕨手文のほかに比較的単純な文様構成をとるものが多い。また、口縁部に幅の狭い無文帯を持ち、その部分が外傾する器形の深鉢が5個体出土しており、本住居跡に特定されている。土器に施文される地文で特筆されるのはLL反燃縄文があることで、4個体の深鉢に認められる。

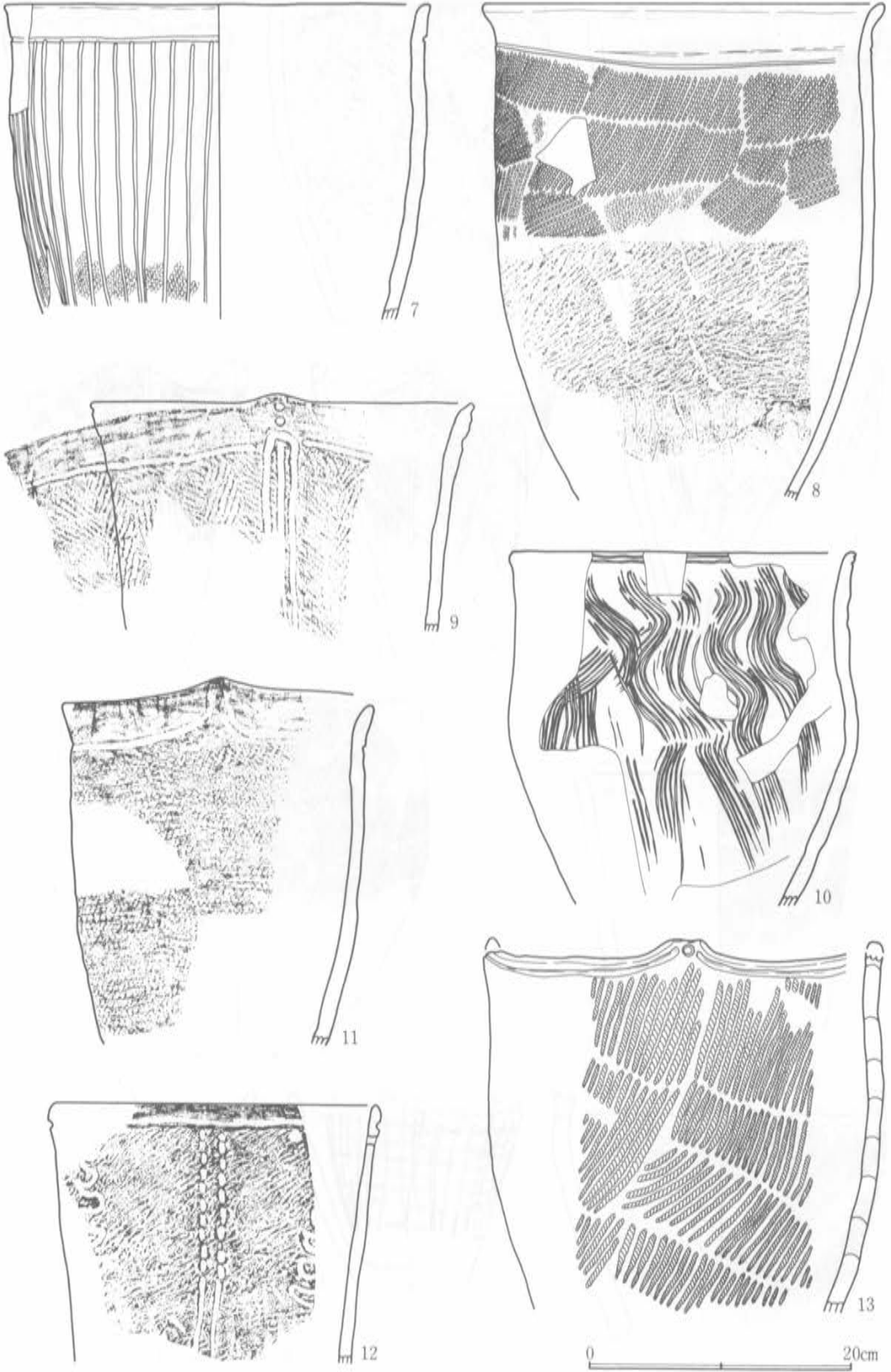
第70図1は無文帯部分が外傾する深鉢である。口縁は大小の突起を対とする3単位の波状口縁であろう。無文帯は胴部の文様と沈線によって区画されている。胴部は単純な蕨手文が施され、内部は磨消されない。第IV群1類b種。同図2は波状口縁の波頂下に貫通孔を伴い、その左右に刺突を施している。胴部上位にU字状の沈線文を施し、その下に斜行する蕨手文が付け加えられている。この器形には稀な文様構成である。第IV群1類b種。同図3は口縁部破片が3片にすぎず、全体の器形及び文様構成は不明確である。胴部文様との関連から、若干斜行す



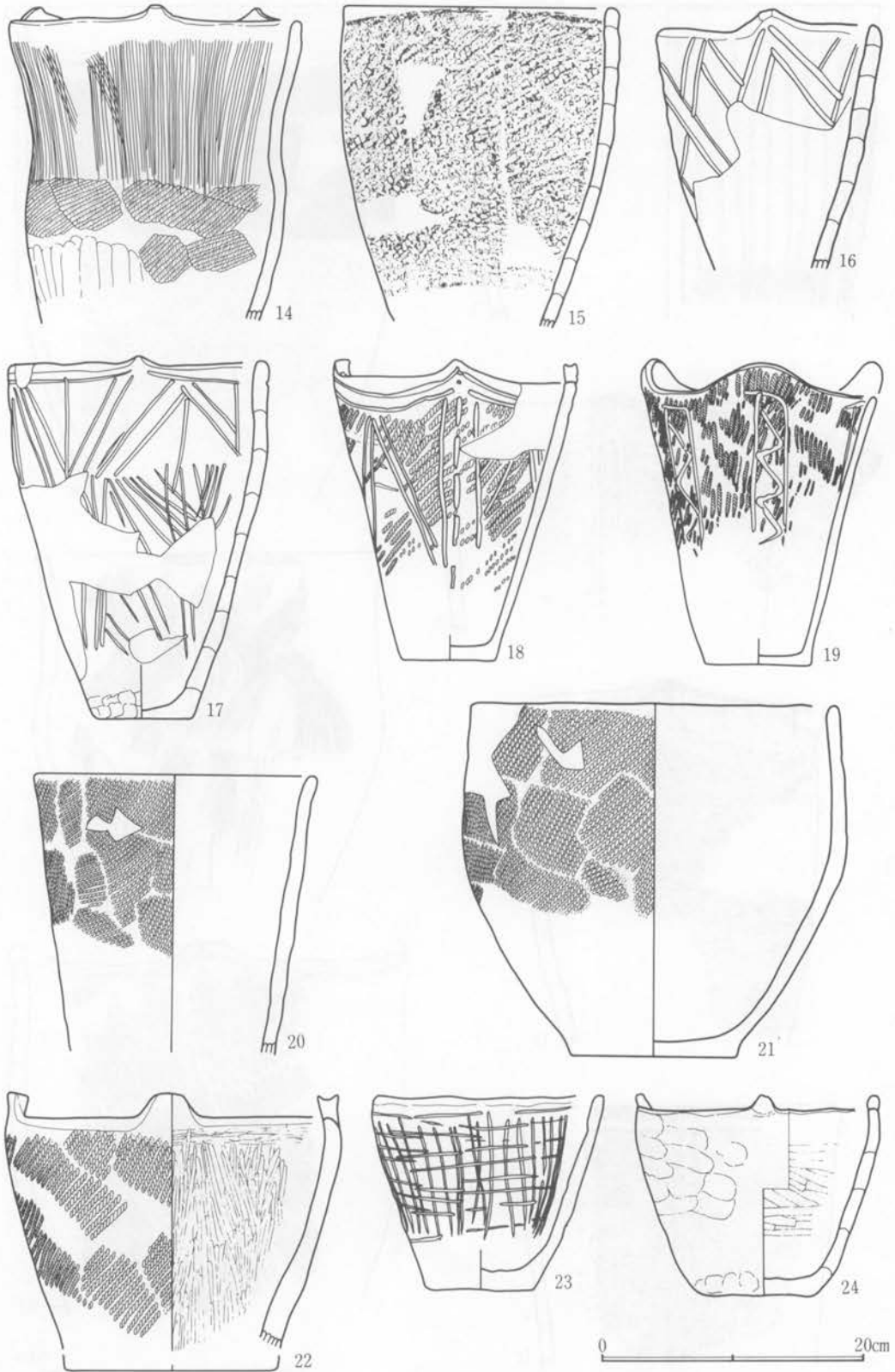
第69図 第112号住居跡実測図 (1/60)



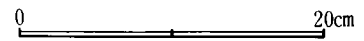
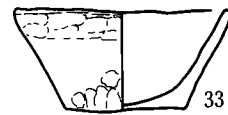
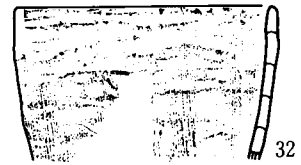
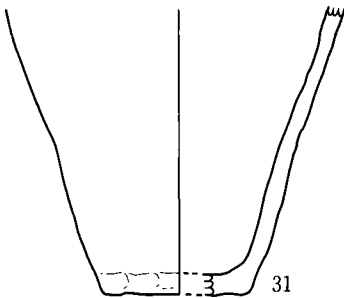
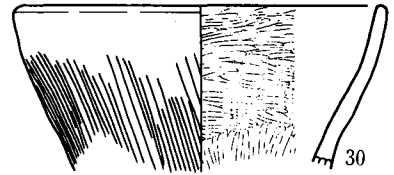
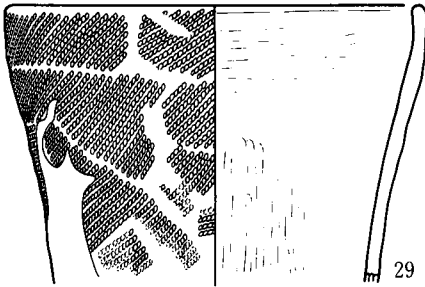
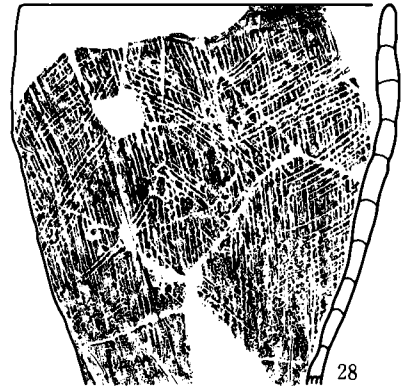
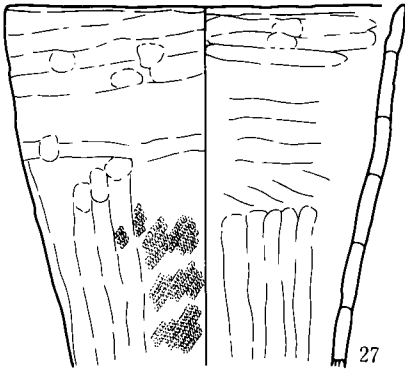
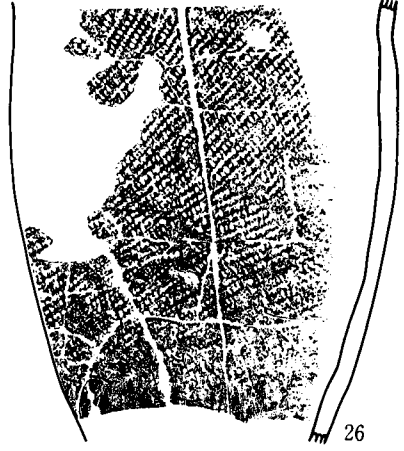
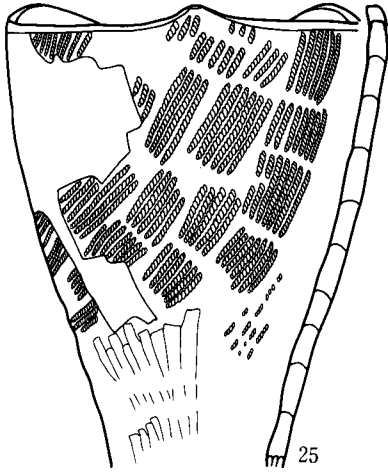
第70图 第112号住居跡出土土器実測图 (1/5) No.1



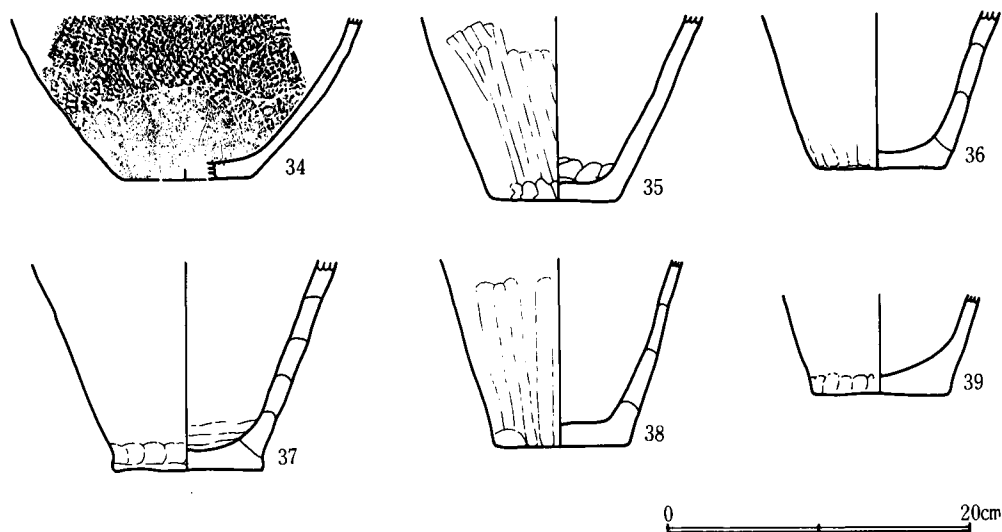
第71図 第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No.2



第72图 第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No.3

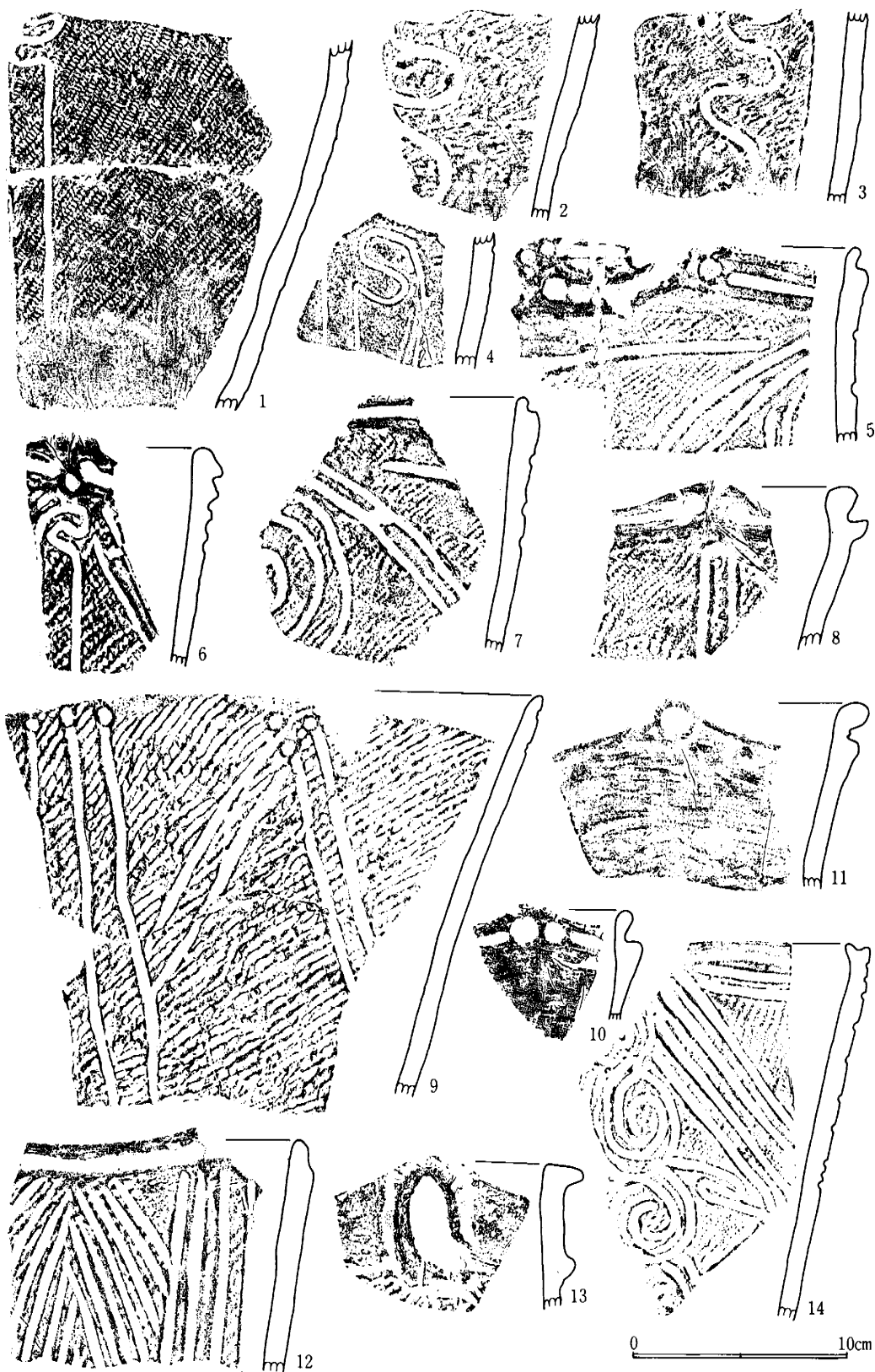


第73图 第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No 4

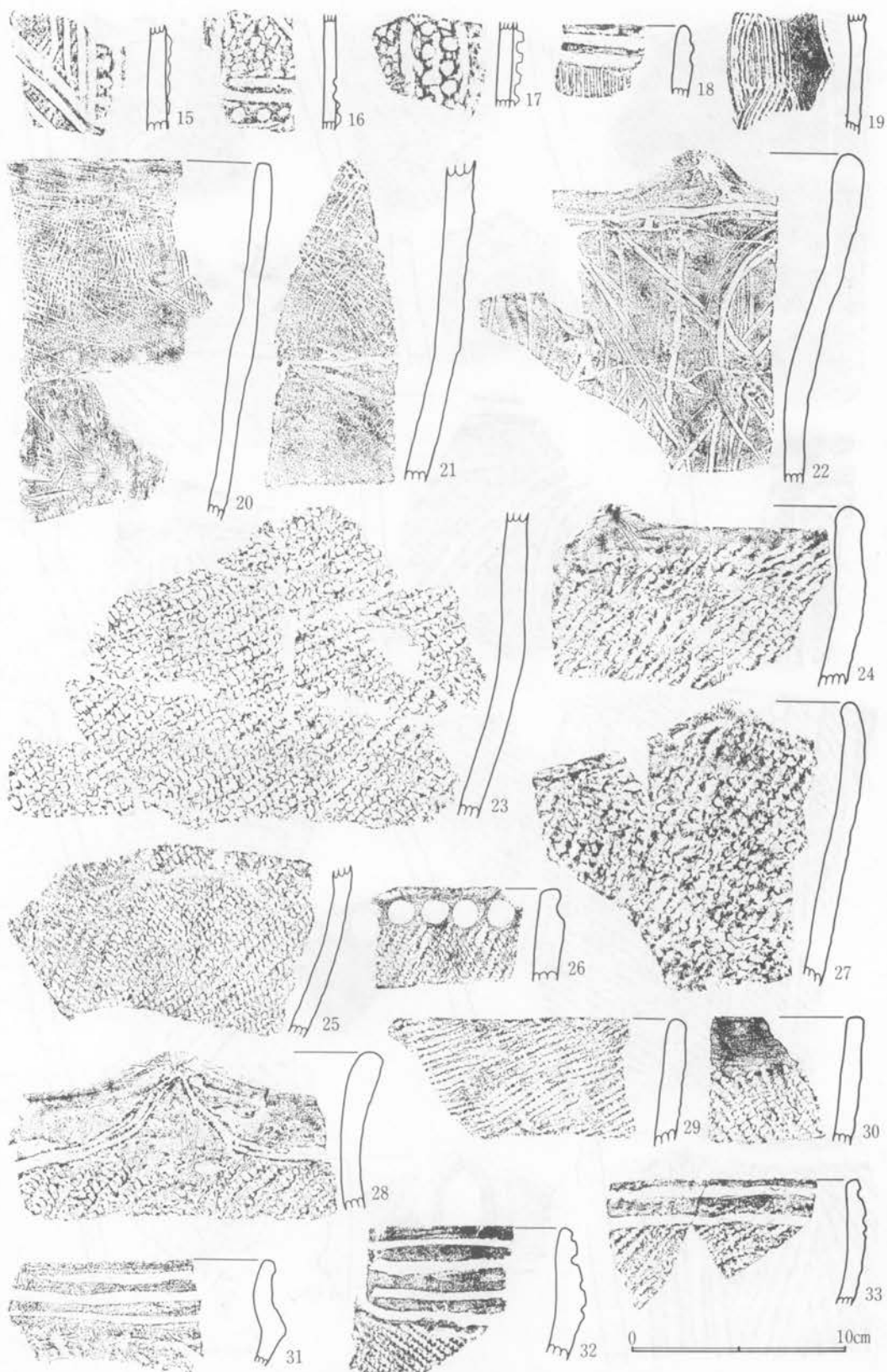


第74図 第112号住居跡出土土器実測図 (1/5) No 5

る単純な蕨手文と考えられる。地文は縦位のL無節縄文か。第IV群1類b種。同図4は口縁にボタン状の突起を貼付け、その下に蛇行沈線を伴う垂下沈線文を施している。沈線文と沈線文の間には斜行する2本の沈線を上下二段に施し、内部の縄文を磨消している。地文はLL反撚縄文である。ボタン状突起は7個付けられており、めずらしい単位構成である。第IV群1類a種。同図5は4単位波状口縁と思われる大型の深鉢である。波頂下に2個の刺突と短い沈線、さらに疑似的な蕨手文が施される。地文はLL反撚縄文である。第IV群1類b種。同図6は3単位小波状口縁で口縁部に2本の沈線がめぐる。波頂下には蛇行沈線文が垂下する。第IV群1類b種。第71図7は口縁部の無文帯が外傾する大型の深鉢である。胴部文様と無文帯とは沈線で区画されている。胴部にはほぼ等間隔に垂下沈線が施される。地文の痕跡が胴部下半にわずかながら認められるが極端に器面が摩耗していないことから縄文を施したのち、全面的に磨消しているとも考えられる。第IV群5類a種。同図8は7と同様に口縁部無文帯が外傾する深鉢である。胴部文様と無文帯とを浅い沈線によって区画している。胴部には上半にLR単節縄文を施したのち、下半にLL反撚縄文を施文している。第IV群8類c種。同図9は7・8と同様に口縁部が無文帯となり、3単位小波状口縁をなすと思われる。波頂下に3本の垂下沈線を施す。地文は横位のR無節縄文に加えて縦位にも施文し、一見羽状を呈している。第IV群1類b種。同図10は口縁に沈線をめぐらせ、胴部には櫛状工具による蛇行条線を雑に施している。第IV群7類c種。同図11は口縁無文帯が外傾する深鉢である。胴部文様と無文帯とを沈線によって区画している。縄文は太くてゆるいLR単節縄文であろう。第IV群8類c種。同図12は口縁部がやや肥厚し、沈線がめぐる。列点文が途中から沈線にかわる文様と蛇行沈線とを交互に施



第75图 第112号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 1



第76图 第112号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 2

第112号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
112-1	深鉢 B II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(23.4) 底径 — 器高(18.6)	口縁 3 胴部 6	竹	L R	口縁部に沈線がめぐる。幅広の無文帯をつくる。無文帯に垂下する沈線と連続刺突文を施す。厥手文の内部は磨消さない。	覆土	第IV群 1類 b種
112-2	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径 28.0 底径 — 器高(28.2)	口縁(4) 胴部(8)	棒	L R	口縁部に沈線がめぐる。胴部上半に半弧状沈線を施文。半弧状文の下に厥手状の文様を施す。	覆土	第IV群 1類 b種
112-3	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 完	口径(25.6) 底径 9.9 器高(23.9)	口縁 1 胴部(6)	竹	L ?	口縁部に沈線がめぐる。垂下する短い沈線下にやや斜行する厥手文。	覆土	第IV群 1類 b種
112-4	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径 30.3 底径 — 器高(19.0)	口縁 平 胴部 7	竹	L L	口縁部に沈線がめぐり、ボタン状突起がつく。厥手状の沈線文の間に斜行する沈線を施す。斜行沈線間を磨消している。	覆土	第IV群 1類 a種
112-5	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(35.7) 底径 — 器高(37.5)	口縁(4) 胴部(4)	竹	L L	口縁部に沈線がめぐる。波頂下に厥手状の沈線文を施す。	覆土	第IV群 1類 b種
112-6	深鉢 A II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(22.7) 底径 — 器高(26.7)	口縁 3 胴部 3	竹	L R	口縁部に2本の沈線がめぐる。波頂下に蛇行沈線を施す。	覆土	第IV群 1類 b種
112-7	深鉢 B II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(32.5) 底径 — 器高(24.0)	口縁 平 胴部 1	へら	L	口縁部に無文帯を持ち下端に沈線がめぐる。地文の縄文は施文後、全面磨消したものか胴部下端にわずかに残るのみ。胴部に垂下沈線を施文。	覆土	第IV群 5類 a種
112-8	深鉢 B II	口縁 完 胴部 1/2 底部 1	口径 29.2 底径 — 器高(37.8)	口縁 平 胴部 1	—	L R L L	口縁外傾部に無文帯。下端に沈線がめぐる。胴部上半に L R を施文した後、L L を施文。	覆土	第IV群 8類 c種
112-9	深鉢 B II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(29.1) 底径 — 器高(17.4)	口縁(3) 胴部(3)	竹	R	口縁外傾部に無文帯。横走縄文を施文した後、縦に間隔をおいて縄文を施文。一見羽状にみえる。	床面直上	第IV群 1類 b種
112-10	深鉢 A II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(26.2) 底径 — 器高(26.5)	口縁 平 胴部 1	櫛	—	蛇行条線文。	覆土	第IV群 7類 c種
112-11	深鉢 B II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(23.7) 底径 — 器高(25.5)	口縁(3) 胴部 1	半竹	L R ?	口縁外傾部に無文帯。下端に沈線がめぐる。胴部にはゆるい L R の縄文を施文。	床面直上	第IV群 8類 c種
112-12	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(25.0) 底径 — 器高(19.7)	口縁 平 胴部 ?	竹	L L ?	口縁部に沈線がめぐる。平行する垂下点文。蛇行沈線。地文は、L L の結節縄文と思われる。	覆土	第IV群 3類 a種
112-13	深鉢 A II	口縁 完 胴部 完 底部 1	口径 30.7 底径 — 器高(27.8)	口縁 4 胴部 1	竹	L R	口縁に沈線がめぐる。胴部は縄文のみ。	覆土	第IV群 8類 b種
112-14	深鉢 A III	口縁 完 胴部 1/2 底部 1	口径 22.2 底径 — 器高(23.8)	口縁 3 胴部 1	櫛	L	胴部上半は条線文。下半は無節 L を施文。条線文を先に施文。	覆土	第IV群 7類 d種
112-15	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(21.2) 底径 — 器高(24.5)	口縁 平 胴部 1	—	L R	ゆるく、太い L R 原体による施文と思われる。	覆土	第IV群 8類 a種
112-16	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(17.3) 底径 — 器高(19.9)	口縁(3) 胴部(8)	竹	—	綾杉状の沈線文を施文。	覆土	第IV群 5類 b種
112-17	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 完	口径(19.6) 底径 7.2 器高 27.1	口縁 3 胴部 1	棒	—	口縁部に沈線がめぐる。明瞭な単位を構成しない。縄文は施文されていない。	覆土	第IV群 5類 b種
112-18	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 完 底部 完	口径 19.8 底径 7.1 器高 22.6	口縁 4 胴部 4	竹	L R	口縁部に2本の沈線がめぐる。垂下する2本の沈線の間に点文。単位文様間に逆V字状の沈線文を施す。	覆土	第IV群 3類 d種
112-19	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 完 底部 完	口径 17.5 底径 8.2 器高 22.8	口縁 3 胴部 6	棒	L R	単純な厥手様の単位文様を施文。	床面直上	第IV群 1類 b種
112-20	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(21.6) 底径 — 器高(20.7)	口縁 平 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類 a種
112-21	鉢 E	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径 28.4 底径 13.0 器高 26.4	口縁 平 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類 a種

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文 様	出土位置	分 類
112-22	鉢 C	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(25.1) 底径 — 器高(19.1)	口縁 4 胴部 —	—	L R	地文のみ。内面の器面調整がていねいに行われている。	覆土	第IV群 8類a種
112-23	浅鉢 C	口縁 完 胴部 完 底部 完	口径 17.3 底径 8.3 器高 14.8	口縁 平 胴部 —	棒	—	地文として縄文を施さず、格子状に沈線を施文。縦を先に施し、後から横を施文。	覆土	第IV群 5類b種
112-24	浅鉢 C	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 完	口径 18.6 底径 8.7 器高 15.1	口縁(3) 胴部 —	—	—	無文。	覆土	第IV群 9類
112-25	深鉢 B III	口縁 2/3 胴部 2/3 底部 1	口径 24.8 底径 — 器高(30.1)	口縁 3 胴部 —	—	L R	地文のみ。	床面直上	第IV群 8類a種
112-26	深鉢 A III	口縁 — 胴部 1/4 底部 1	口径 — 底径 — 器高(40.2)	口縁 — 胴部(4)	棒	L R	垂下する沈線。	覆土	第IV群 1類b種 ?
112-27	深鉢 B IV	口縁 2/3 胴部 2/3 底部 1	口径(26.0) 底径 — 器高(23.2)	口縁 平 胴部 —	—	L R	地文の縄文を施文した後、ほぼ全面にわたり、縄文を磨消している。器面は極めて粗い。	覆土	第IV群 8類a種
112-28	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 2/3 底部 1	口径(24.3) 底径 — 器高(24.4)	口縁 — 胴部(5)?	櫛	—	地文として条線を施し、さらにハの字状に斜行する条線を間隔をおいて施文。	覆土	第IV群 7類b種
112-29	深鉢 B III	口縁 1/3 胴部 1/4 底部 1	口径(27.2) 底径 — 器高(17.9)	口縁(平) 胴部 —	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
112-30	深鉢 A III	口縁 2/3 胴部 1/3 底部 1	口径 24.1 底径 — 器高(10.5)	口縁 平 胴部 —	櫛	—	垂下する条線のみ。内面の調整がていねいに行われている。	覆土	第IV群 7類b種
112-31	深鉢	口縁 — 胴部 1/4 底部 1/3	口径 — 底径(9.5) 器高(18.5)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群
112-32	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/3 底部 1	口径(17.2) 底径 — 器高(9.8)	口縁(平) 胴部 —	櫛	—	垂下する条線のみ。	覆土	第IV群 7類b種
112-33	浅鉢 A	口縁 2/3 胴部 2/3 底部 完	口径 14.0 底径 7.7 器高 6.6	口縁 平 胴部 —	—	—	無文。器面は平滑。	覆土	第IV群 9類
112-34	鉢?	口縁 — 胴部 — 底部 2/3	口径 — 底径(8.7) 器高(10.5)	口縁 — 胴部 —	—	L R		覆土	第IV群
112-35	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 完	口径 — 底径 8.5 器高(12.0)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群
112-36	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 完	口径 — 底径 8.4 器高(10.2)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群
112-37	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 完	口径 — 底径 9.9 器高(13.4)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群
112-38	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 完	口径 — 底径 8.9 器高(12.1)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群
112-39	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 完	口径 — 底径 9.0 器高(6.4)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群

文している。地文はL R反撚縄文と思われる。口縁部をめぐる沈線の近くに補修孔と思われる貫通孔がある。第IV群3類a種。同図13は4単位波状口縁の深鉢である。波頂下に刺突が施され、口縁に沈線がめぐる。胴部はL R単節縄文を施文している。第IV群8類b種。第72図14は胴部の上下で文様が異なる。上半は櫛状工具による垂下条線、下半はL無節縄文を施す。条線と縄文が別々に施される土器は他に1点も出土していない。第IV群7類d種。同図15は口縁が

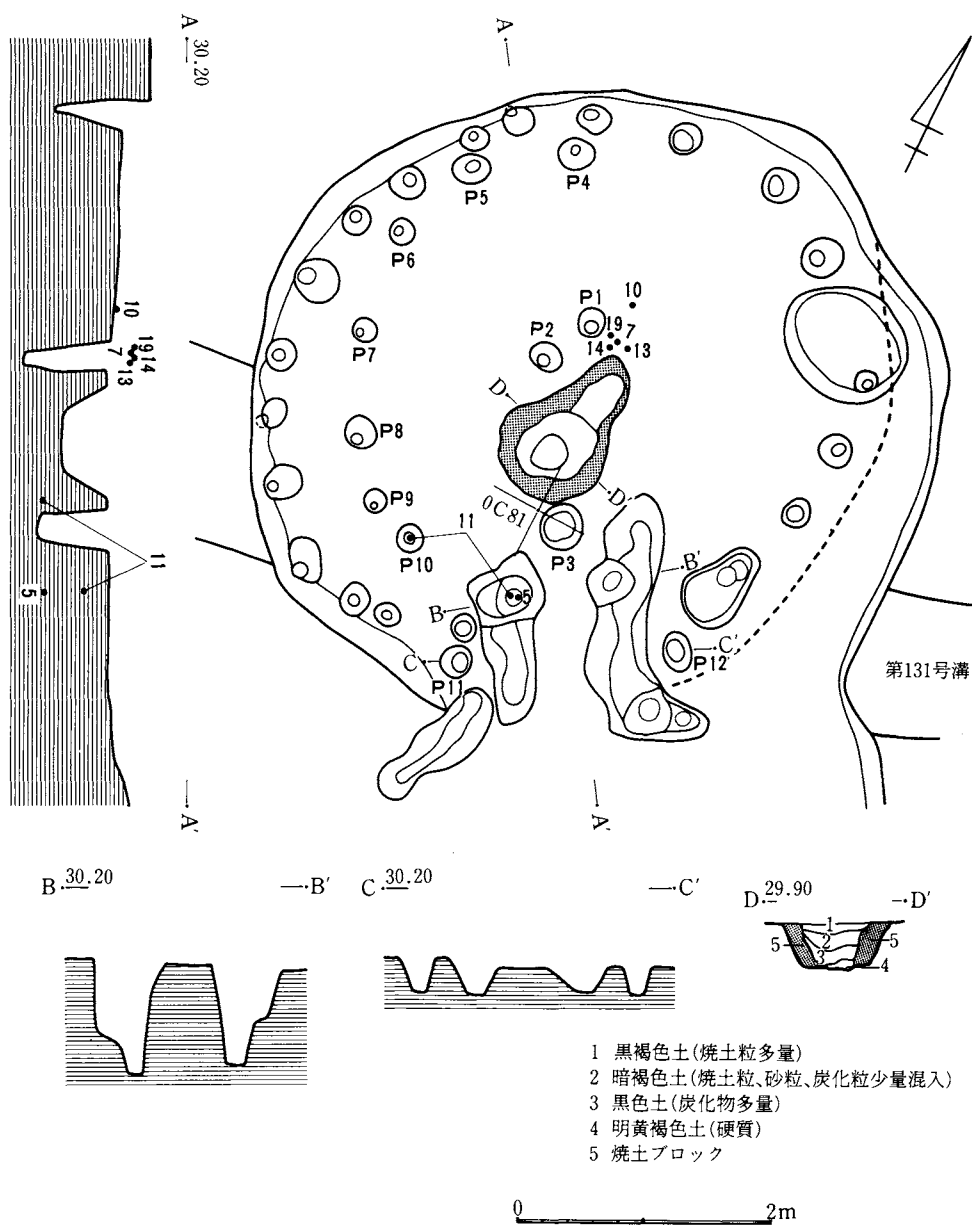
若干肥厚する深鉢である。地文は太くてゆるいLR単節縄文と思われる。第IV群8類a種・同図16は3単位小波状口縁と思われる小型の深鉢である。単位文様をもたず、異方向の斜行沈線が綾杉状に施文される。地文をもたない。第IV群5類b種。同図17も16と似た文様構成である。地文をもたない。斜行沈線によって雑に文様を施している。第IV群5類b種。同図18は直線的に開く小型の深鉢である。口縁部に2段の沈線がめぐる。4単位小波状口縁の波頂下に垂下する列点文と沈線が施され単位文様をなす。単位文様間には逆U字状の沈線文が施される。地文は太いLR単節縄文である。第IV群3類d種。同図19は器厚がやや薄く、内外面の調整が丁寧に行われている。口縁は3単位で胴部には疑似的な蕨手文が施され、6単位を構成している。第IV群1類b種。同図20は胴部上半にのみLR単節縄文が施されている。第IV群8類a種。同図21は大型の鉢である。内外面ともに平滑で丁寧な調整が行われている。文様は地文のLR単節縄文のみで、底部近くは器面調整され縄文が磨消されている。第IV群8類a種。同図22は4単位波状口縁の鉢である。縄文をやや疎に施文している。内面の調整は極めて丁寧に行われている。第IV群8類a種。同図23は完形の浅鉢である。格子状に沈線を施している。沈線は縦→横の順に施文している。内外面ともに器面は粗い。第IV群5類b種。同図24は無文の浅鉢である。内外面に指によるなでの痕跡が残る。第IV群9類。第73図25は3単位小波状口縁の深鉢である。地文はLR単節縄文。第IV群8類a種。同図26は器面に輪積痕を残す。垂下沈線が施されているが文様構成は不明である。地文はLR単節縄文。第IV群1類b種か。同図27は縄文を施したのち、全面指によって粗くなでて地文を磨消している。わずかながら胴部下半に地文が認められる。第IV群8類a種に分類されるが文様の描出方法は極めて特殊である。同図28は櫛状工具によって垂下条線を密に施し、さらに異方向の斜行条線をハの字状に加えている。第IV群7類b種。同図29はLR単節縄文のみである。第IV群8類a種。同図30は櫛状工具によってやや疎に条線を施している。内面の調整痕を明瞭に残す。第IV群7類b種。同図32は小型の深鉢である。櫛状工具による垂下条線を地文とする。第IV群7類b種。同図33は無文で、内外面ともに平滑な浅鉢である。第IV群9類。同図31、第74図35～39は深鉢の底部である。同図34は鉢の底部であろう。第75図1～4は第IV群1類b種に分類される。1はLR単節縄文を地文とし、単純な蕨手文を施している。2・3は同一個体である。地文はLL反撚縄文であろう。蛇行沈線が施されている。4は極めて単純だが、特徴的な蕨手文である。地文の縄文は摩耗が著しいため不明。同図5・7は同一個体である。渦巻状の沈線文を単位文様とし、単位文様間に斜行沈線が施される。第IV群3類b種。同図6は4と同様の蕨手文である。斜行沈線が施されており、このように蕨手文に斜行沈線を伴う例はあまり多くない。第IV群3類b種。同図8は垂下する3本の沈線が施される単純な文様である。第IV群1類b種。同図9は直線的に開く深鉢である。3本の垂下沈線を単位文様とし、単位文様間に逆U字状の沈線文を施している。地文はLR単節縄文である。第IV群3類d種。同図10・11は頸部が強くくびれる深鉢の口縁部破片

である。口縁から頸部にかけての無文部分であろう。器面は丁寧に調整されている。分類不可。同図12は地文がわからないほど密に沈線を施している。地文はL R単節縄文か。小片のため文様構成は不明だが第IV群3類h種に分類されよう。同図13は逆U字状に隆帯の貼付けられた口縁部破片である。分類不可。同図14は渦巻文が縦に連続した文様を単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線文を施している。また単位文様とジグザグ文の間には単純なクランク状文が施される。分類は第IV群3類e種にふくめておく。第76図15～17同一個体である。刺突を加えて隆帯が縦位に貼付けられ、文様帯下端も同様の隆帯によって区画される。地文はR L単節縄文である。第IV群6類a種。同図18は口縁部に2本の沈線がめぐり、沈線直下から垂下条線が施される。第IV群7類b種。同図19は櫛状工具によって連弧状の条線文が施されている。第IV群7類c種。同図20・21は同一個体である。櫛状工具によって乱雑に条線が施される。第IV群7類b種。同図22は先端がさきくれた施文工具によって単位を構成しない沈線文が施される。第IV群11類。同図23はL R L複節縄文、同図24・25・27・29はL R単節縄文を地文とする。第IV群8類a種。同図26は口縁に連続する凹文を施す。地文はL R単節縄文。第IV群8類b種。同図28・30は口縁部に幅のせまい無文帯を伴う。28は沈線によって胴部の縄文とを区画している。地文はL R単節縄文である。30は無文帯と縄文とを沈線で区画していない。地文はR L単節縄文と思われる。28・30は第IV群8類c種。同図31～33は鉢の口縁部破片で、みな別個体である。31は地文をもたないであろう。器形は口縁部近くでいったん内折し、再び開く。文様は太い横走沈線のみである。この器形は極めて少ない。32はR L単節縄文を地文とする。口縁部近くが、やや内傾する。太い沈線で長方形に区画し、内部に2本の横走沈線を施している。33はゆるやかにふくらむ器形であろう。地文はL R単節縄文である。口縁部には横走する沈線が施される。31～33は第IV群8類b種に分類されよう。

第140号住居跡（第77図 図版11・24・25・38・39）

0 C 71グリッドを主体に検出された調査区北端の平坦な面に位置している。東側50cm離れて第152号住居跡が、また南西に4 m離れて第130号埋甕、北西4 m離れて第132号埋甕が隣接している。

遺構 東西に走る第139号溝によって住居跡中央を切られているが、溝の掘り込みが浅いため、床面までは達しておらず比較的堅穴の遺存はよい。住居跡の東壁は調査中明確に検出できず、完掘した時点でピットの配列から壁を壊していることが明らかとなった。本住居跡は直径4.80mの円形プランに張り出し部を伴う柄鏡形住居である。出入口施設と考えられる張り出しはハの字状に開く溝状のピットからなり、内部には小ピットが認められる。最深部で西側78cm、東側で77cmを計る。炉はほぼ中央にあって不定形を呈し、長径125cm、掘り込みは35cmである。内部には硬化した焼土がドーナツ状に検出されたが、使用の結果堆積した焼土ではなく、炉を



第77図 第140号住居跡実測図 (1/60)

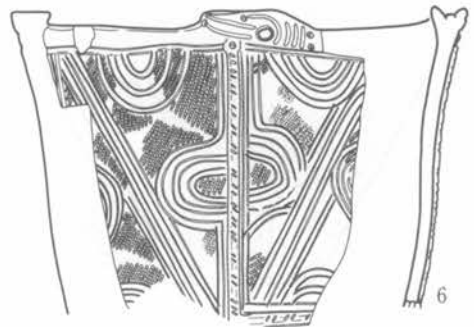
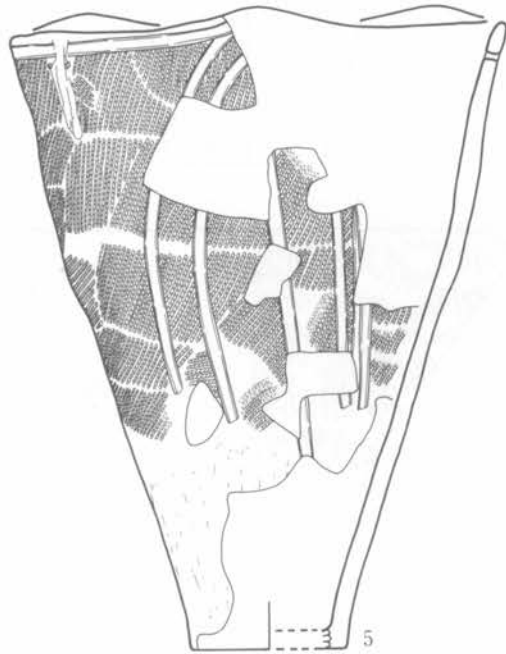
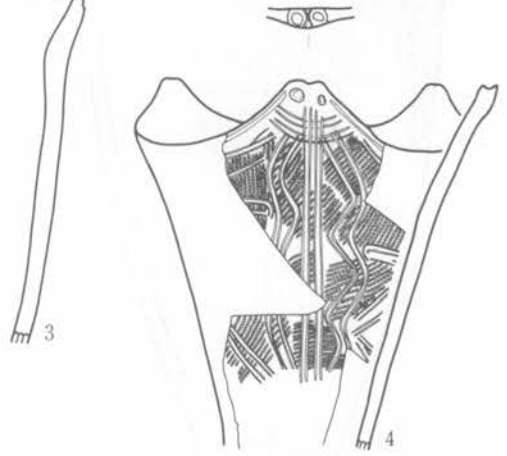
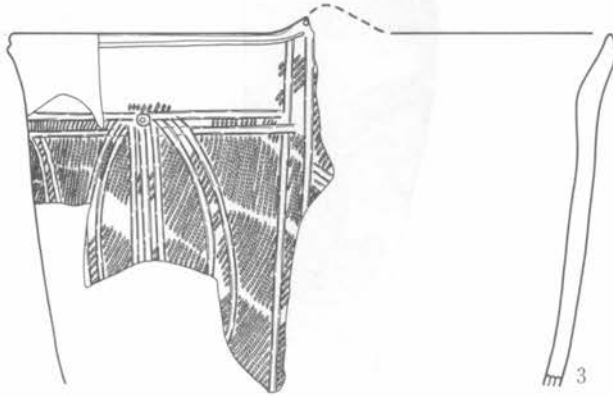
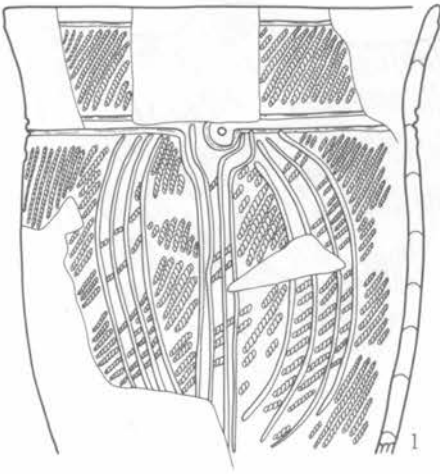
設ける際、土器を安定させるためロームまたは粘土でドーナツ状の土手をめぐらせたものが焼土化したものと考えられる。ピットは炉の周囲に3ヶ所、張り出し部のピットをのぞき29ヶ所検出された。中央のP1～P3の深さはそれぞれ51cm、66cm、55cmと平均して深く、垂直に掘り込まれている。P1～P3をのぞくピットは21cm～76cmの深さで、平均は50cmである。おしなべて中央に若干傾くものが多い。ピットの配列から本住居跡は拡張され建て直されたものと推測される。覆土の土層断面には2軒の住居が切り合う状況が認められないことから、P4～P10及び北東壁沿いのピットを柱穴とする小規模な住居がはじめ存在し、その後ひと回り規模の大きな住居に建て直されたものと考えられる。P4～P10を柱穴とする住居の規模は直径4.20m前後の円形プランと思われる、中央の柱穴としてはP1が使用されていたであろうと推測される。この時、張り出し部はつくられていなかったと考えられる。その理由として検出された張り出し部左右の溝状ピットの中心線はP1及び小住居の軸を通っていないことがあげられよう。従って住居は建て直された段階で新たに出入口施設が設けられたと考えられる。また中央の柱穴はP1からP2に移されたと推測され、炉についても若干移動したのではないと思われる。残存する壁の立ち上がりは垂直に近く、残存する壁高は北壁で20cm、西壁で40cmである。床面積は拡張される以前で約15.36㎡、拡張後では19.55㎡となり、約1.3倍に床面積が拡大している。

遺物出土状況 遺物の出土量は多い。土器は遺存のよいものが比較的多く、深鉢のほかには鉢、浅鉢、注口土器が出土している。注口土器の遺存は比較的よく唯一器形を知り得るものである。実測個体はすべて覆土から出土しており、床面からのものは極めて少ない。

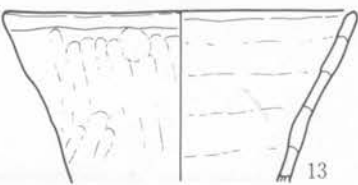
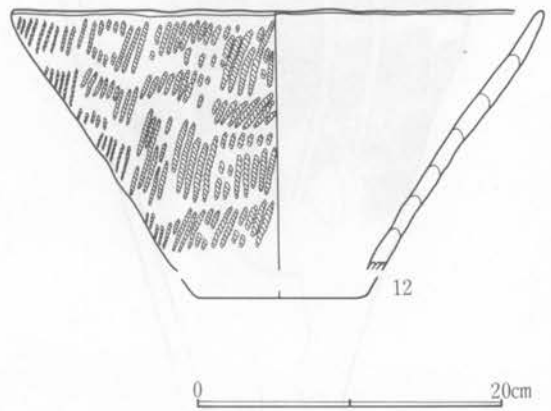
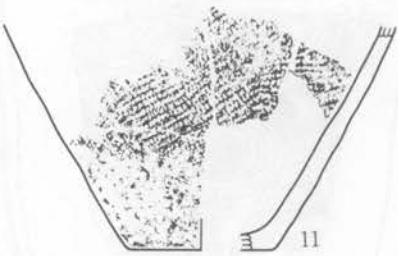
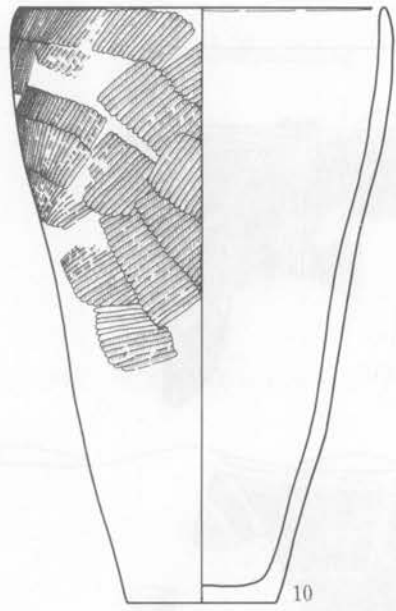
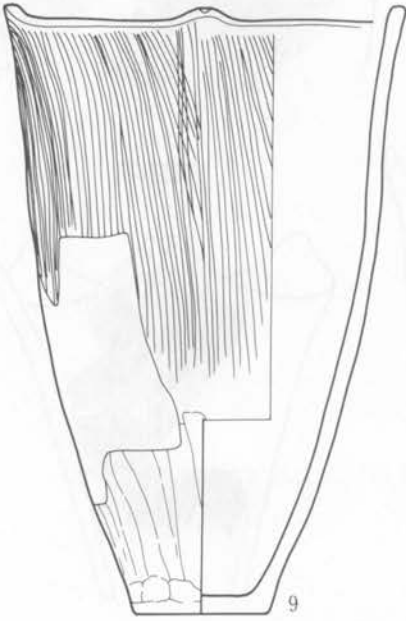
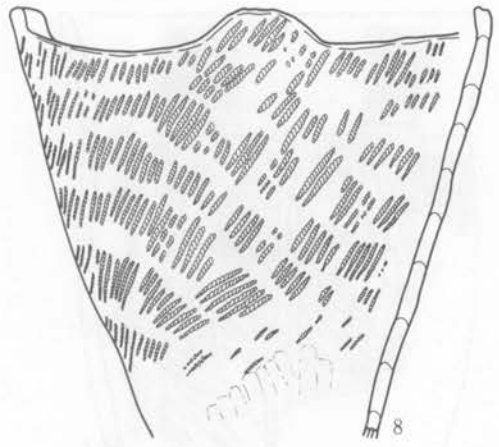
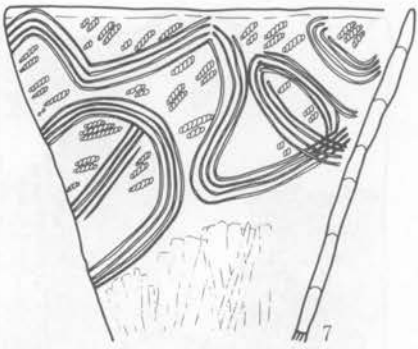
土器は注口土器を除いて、すべて堀之内Ⅰ式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第3期に属すると考えられる。石器は磨製石斧1点、磨石2点が出土しているが、それぞれ覆土中からのものであった。

遺物 本住居跡から出土した土器は、検出された住居跡群中最も新しい様相を示している。

第78図1は平縁として実測図を復元した深鉢であるが、波状口縁の可能性もある。頸部に2本の沈線をめぐらせ、胴部には3単位の単位文様が施されている。単位文様は頸部に加えた刺突を目安に、垂下する4本の沈線を施し、左右に重層する弧線を付け加えている。地文はLR単節縄文で、全体に施されている。同図2は4単位波状口縁の深鉢である。半截竹管状工具によって波頂下に2～3本の垂下沈線を施して単位文様とし、単位文様間に団子状の沈線文を施している。地文は縦位のL無節縄文か。器面は内外面ともに黒褐色を呈し、胎土は粗い。同図3は外傾する口縁部無文帯をもつ深鉢である。第112号住居跡において特徴的に出土しているが、第112号住居跡の諸例と比べ胴部文様が半截竹管状工具の使用によって複雑化している点や、構成される文様要素に大きな違いをもっている。破片のため波状口縁の単位は不明であるが、3単位ではないかと思われる。単位文様は左右に2本の沈線を施し、その間に斜行沈線乃

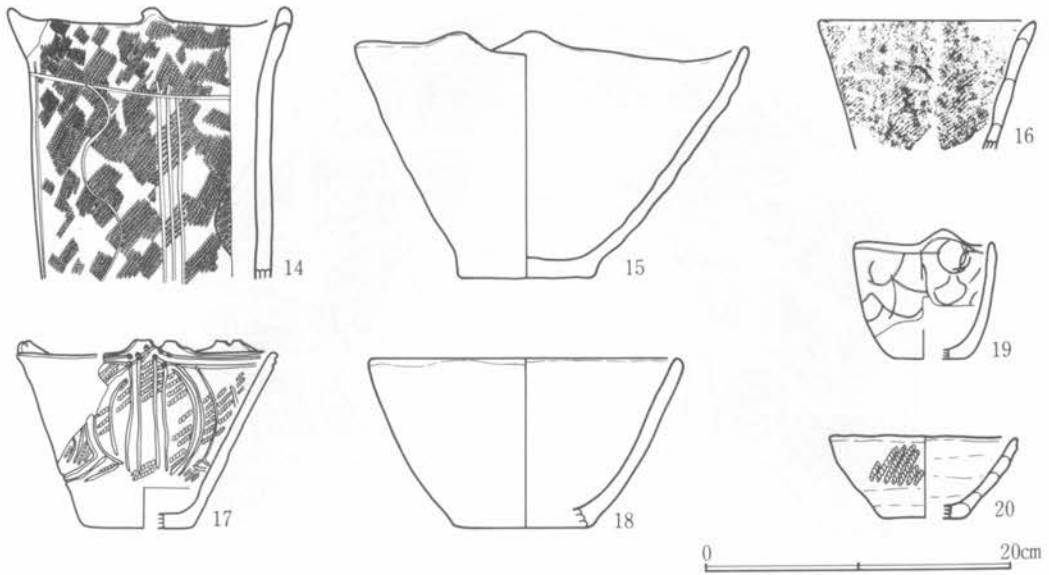


第78图 第140号住居跡出土土器実測図 (1/5) No.1



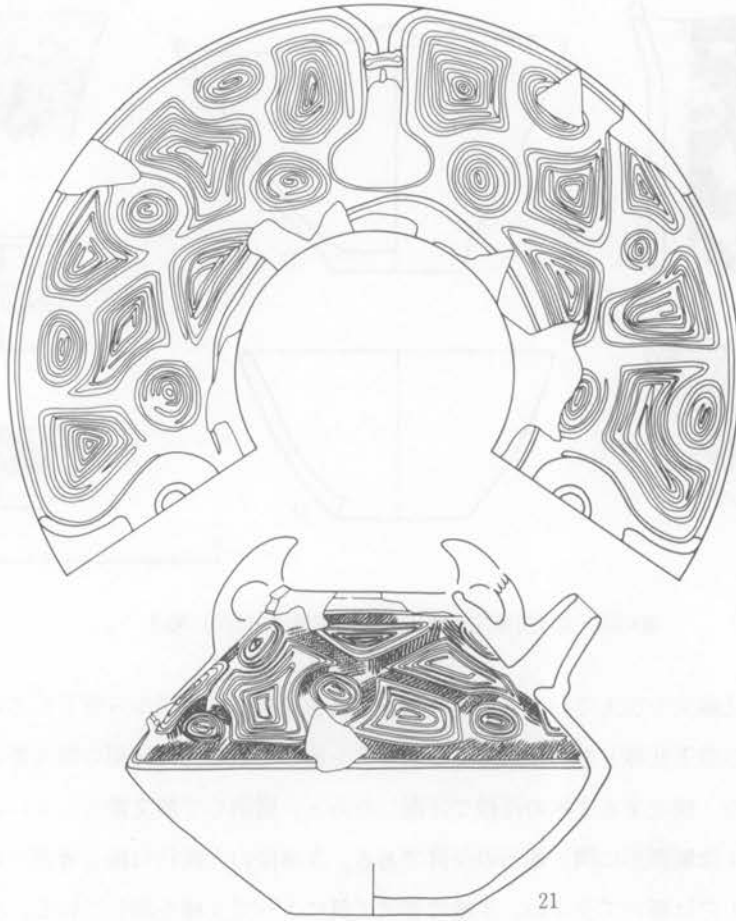
0 20cm

第79图 第140号住居跡出土土器実測図 (1/5) No 2



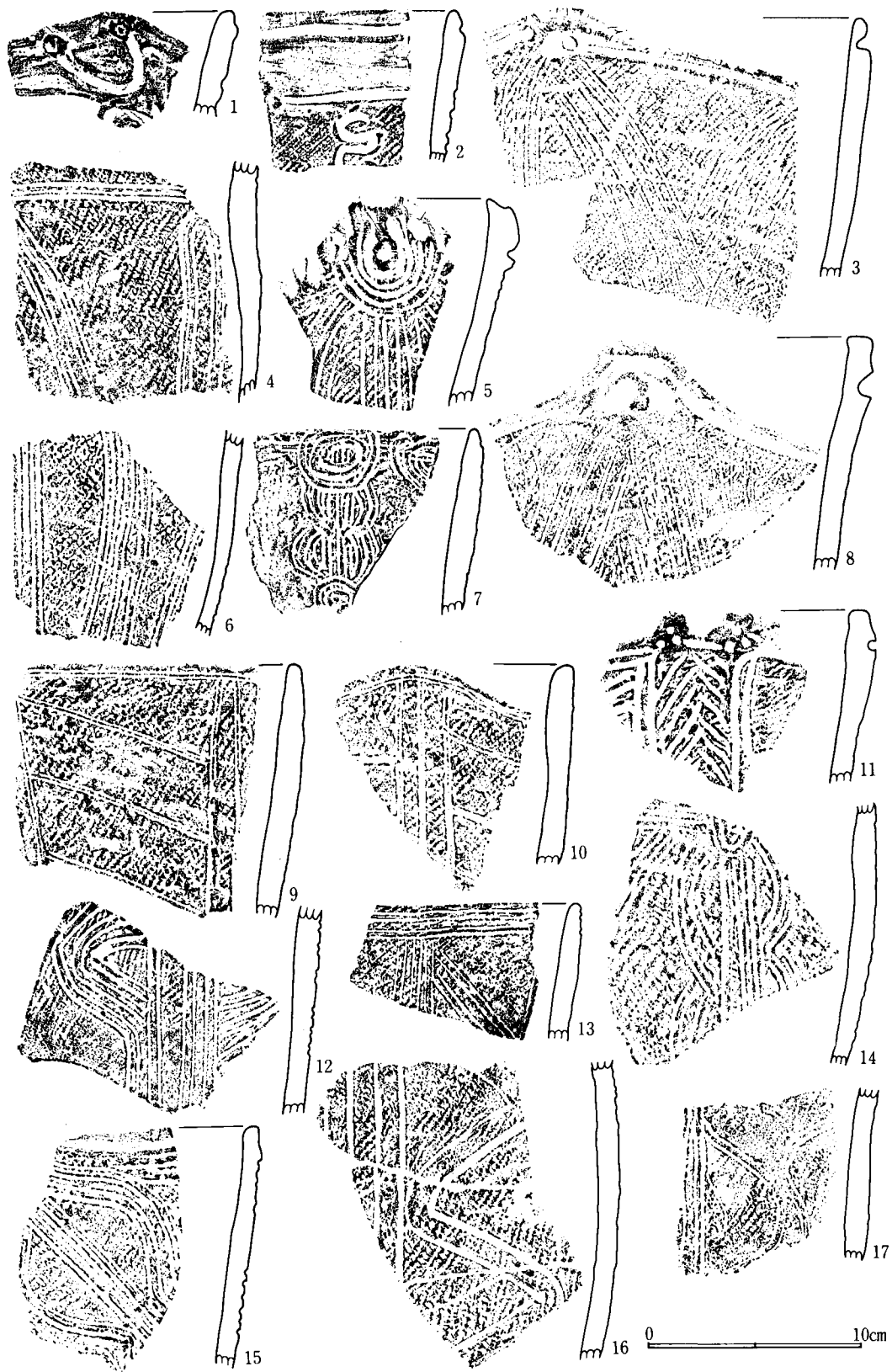
第80図 第140号住居跡出土土器実測図 (1/5) No.3

至ジグザグ状の沈線文を加えていると思われ、無文帯を無視して口縁から垂下している。単位文様間には3本の垂下沈線と左右に重層する弧線文を施している。口縁部の無文帯には最初縄文が施されており、横走る2本の沈線で区画したあと、磨消して無文帯としている。第IV群3類a種。同図4は朝顔形に開く器形の深鉢である。3単位の大波状口縁と考えられ、この器形で図化し得るものは極めて少ない。半截竹管状工具によって文様を施している。波頂下の単位文様は、垂下する沈線の左右に連弧状の沈線を加えたもので、単位文様間にはジグザグ状の沈線文を施している。地文はLR単節縄文。第IV群3類e種。同図5は若干胴部のふくらむ深鉢である。口縁は3単位小波状口縁で、波頂下にはへら状工具による沈線文が施される。地文はLR単節縄文で、胴部下方は縄文が磨消されている。第IV群2類a種。同図6は文様帯の下端が隆帯によって区画される深鉢である。刻目を伴う隆帯が垂下し、隆帯間には半截竹管状工具による沈線文が煩雑に施される。地文はLR単節縄文。第IV群6類a種。第79図7はLR単節縄文を地文とし、4本の櫛状工具によって乱雑な条線文が施されている。器面は粗く摩耗している。第IV群11類。同図8はゆがみのある深鉢である。4単位波状口縁でLR単節縄文を地文とする。第IV群8類a種。同図9は4単位小波状口縁の深鉢である。櫛状工具による条線を地文とする。第IV群7類b種。同図10はL無節縄文を地文とする。器面は内外面ともに粗い。第IV群8類a種。同図11は大型の深鉢の底部である。地文はLR単節縄文である。分類不可。同図12は大型の鉢である。底部近くまでLR単節縄文が施されている。第IV群8類a種。同図13は無文の深鉢である。外面は指によって粗く調整されている。内面は輪積痕が認められる。第IV群9類。第80図14は極めて特殊な器形で、欠損する胴部下半の形態は推定しにくい。胴部

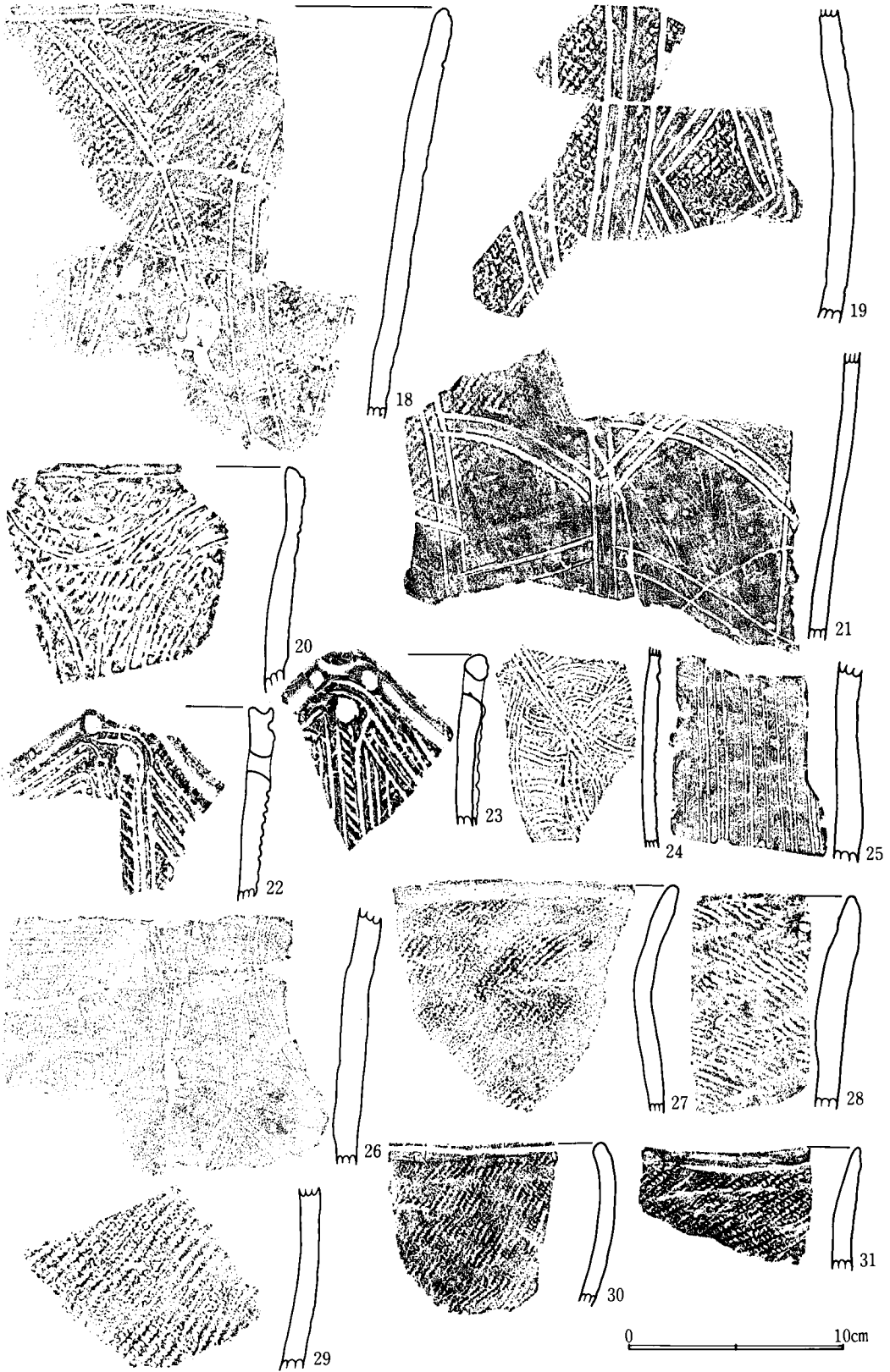


第81図 第140号住居跡出土土器実測図 (1/3) No 4

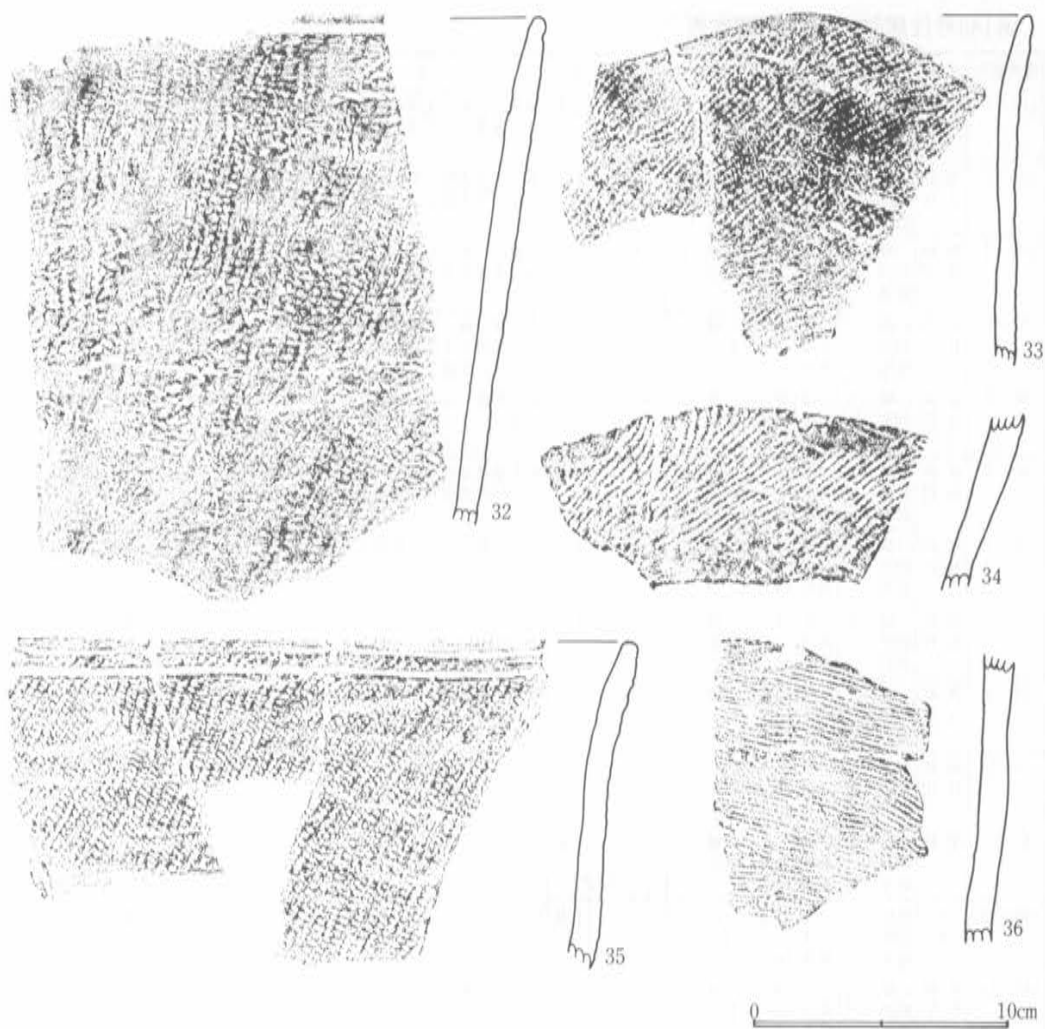
は円筒状を呈し、口縁部近くで大きく開いている。地文はLR単節縄文である。胴部文様は3本の垂下沈線を単位文様とし、この間に蛇行沈線が施される。第IV群3類a種。同図15は無文の鉢である。内外面ともに平滑である。口縁部の遺存が悪くはっきりしないが、3単位の小波状口縁と思われる。第IV群9類。同図16は小型の深鉢である。地文は細いLR単節縄文である。同図17は3単位波状口縁の浅鉢である。波頂下に刺突を加え、それを起点として沈線が施される。垂下する4本の沈線の左右には重層する弧線文が施される。地文はLR単位縄文である。第IV群2類a種。同図18は内外面ともに平滑な浅鉢である。極めて丁寧な調整が行なわれている。浅鉢は第20号住居跡などからも出土してしており、比較的目につくものの個体数は少なく、一般的な浅鉢の用途とは違った用途をもつものであろうか。第IV群9類。同図19は2単位波状口縁の土器である。器面は内外面ともに平滑で、棒状工具によって曲線的な沈線文が施される。



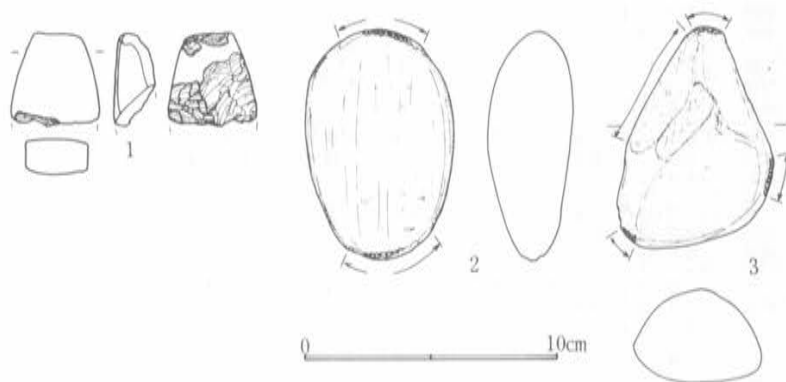
第82图 第140号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 1



第83图 第140号住居迹出土土器拓影图 (1/3) № 2



第84图 第140号住居跡出土石器拓影图 (1/3) No. 3



第85图 第140号住居跡出土石器実測图 (1/3)

第140号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文 様	出土位置	分 類
140-1	深鉢 A III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(28.5) 底径 — 器高(29.0)	口縁(平) 胴部 3	棒	L R	頸部に2本の沈線をめぐらす。垂下する沈線の左右に重層する弧線文を施す。	覆土	第IV群 2類a種
140-2	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(26.9) 底径 — 器高(29.8)	口縁(4) 胴部(4)	半竹	L?	垂下する沈線を単位文様とし、単位文様間に垂下する沈線を施し、さらに曲線状の沈線を施して、四角状の文様を描出する。	覆土	第IV群 3類g種
140-3	深鉢 B II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(39.4) 底径 — 器高(22.9)	口縁(3) 胴部(3)	半竹	L R	口縁部に地文を磨消した無文帯をもつ。無文帯下端に沈線をめぐらす。垂下する沈線に弧線を施す。	覆土	第IV群 3類a種
140-4	深鉢 B V	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(25.6) 底径 — 器高(23.2)	口縁 3 胴部 3	半竹	L R	大波状口縁。口縁に沈線を施す。垂下沈線に連弧状の沈線文を施し単位文様とする。その間にジグザグ状の沈線文を施す。	覆土	第IV群 3類e種
140-5	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(32.3) 底径 10.2 器高 41.0	口縁 3 胴部 3	へら	L R	垂下沈線の左右に弧線文を施す。口縁部に補修孔ではない2つの孔を伴う。	覆土	第IV群 2類a種
140-6	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径 29.7 底径 — 器高(19.4)	口縁 4 胴部 4	半竹	L R	垂下隆帯及び文様帯下端を区画する隆帯をつける。半弧状の沈線文及び斜行沈線文を施す。	覆土	第IV群 6類a種
140-7	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(26.7) 底径 — 器高(21.7)	口縁 平 胴部 1	櫛	L R	単位を構成しない曲線文を施す。	覆土	第IV群 11類
140-8	深鉢 B IV	口縁 完 胴部 完 底部 1	口径 31.5 底径 — 器高(28.3)	口縁 4 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
140-9	深鉢 A III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 完	口径(26.4) 底径 8.8 器高(38.7)	口縁 4 胴部 1	櫛	—	垂下する条線文。	覆土	第IV群 7類b種
140-10	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径 24.3 底径 9.8 器高 38.0	口縁 平 胴部 1	—	L	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
140-11	深鉢	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径 — 底径 (9.5) 器高(14.5)	口縁 1 胴部 1	—	L R		覆土	第IV群
140-12	鉢 A	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径 35.2 底径 — 器高(16.7)	口縁 平 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
140-13	深鉢 B V	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径 23.1 底径 — 器高(11.0)	口縁 平 胴部 1	—	—	無文。器面の調整は粗い。	覆土	第IV群 9類
140-14	深鉢 A III	口縁 完 胴部 1/2 底部 1	口径 17.6 底径 — 器高(18.1)	口縁 4 胴部 4	半竹	L R	円筒状の特殊器形。頸部に沈線がめぐる。垂下沈線の間に蛇行沈線を施す。	覆土	第IV群 3類a種
140-15	鉢 A	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(25.8) 底径 9.1 器高 16.0	口縁(3) 胴部 1	—	—	無文。	覆土	第IV群 9類
140-16	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1	口径(14.2) 底径 — 器高(8.5)	口縁 平 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
140-17	浅鉢 C	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径 16.8 底径 7.2 器高 12.1	口縁 3 胴部 3	棒	L R	口縁に沈線がめぐる。垂下沈線の左右に弧線を施し単位文様をなす。単位文様の間に斜行沈線を施す。	覆土	第IV群 2類a種
140-18	浅鉢 A	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(19.8) 底径 (9.0) 器高 10.8	口縁 平 胴部 1	—	—	無文。器面は平滑。	覆土	第IV群 9類
140-19	浅鉢 C	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径 (9.1) 底径 (4.7) 器高 8.4	口縁(2) 胴部 1	棒	—	器面は全面平滑。単位を構成しない曲線文。	覆土	第IV群 5類b種
140-20	浅鉢 A	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径 12.4 底径 (5.4) 器高 5.1	口縁 平 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
140-21	注土器	口縁 1/2 胴部 完 底部 完	口径 9.9 底径 6.9 器高(13.4)	口縁 1 胴部 1	棒	L R	沈線による同心円文、重三角文などの重層文を施文。間に縄文を充填。下半は無文。	覆土	

第140号住居跡出土石器観察表

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	磨製石斧	3.4	3.3	1.5	(27)	蛇紋岩	定角式磨製石斧である。全体を丁寧に研磨し、わずかに頭部の稜がみられる。頭部に上端からの剝離痕、下半部を下端からの衝撃により破損する。断面は隅丸長方形をなす。	140-12
2	磨石	8.8	5.9	3.3	275	流紋岩	転石を利用。表面のみ磨耗、ソリのある凸面状をなす。上下端敲打痕あり。	140-1
3	磨石	8.5	6.0	3.6	214	砂岩	転石を利用。側面一部磨耗、裏面に1ヶ所微妙な凹あり、上下端に敲打痕あり。	140-1

第IV群5類b種。同図20はLR単節縄文を地文にもつ浅鉢である。輪積痕を内外面に残す。第IV群8類a種。第81図21は調査区内から唯一完形に近い状態で出土した注口土器である。口縁部の一部と把手を欠損している。器形は算盤玉状を呈し、上半に文様が集中している。細い棒状工具によって同心円文、重三角文などの重層する沈線文を施している。不定形の文様があることから、最初に同心円文や重三角文が施され、その後に関を埋める不定形の沈線文を施したものである。これらの沈線文を施した後、細いLR単節縄文を充填している。器厚は薄く、大きさの割に軽量である。

実測図以外の土器片のうち、第82図1・2のような単純な文様構成をとるものは極めて少なく、9割以上が棒状工具や半截竹管状工具による多条の沈線文を伴っている。

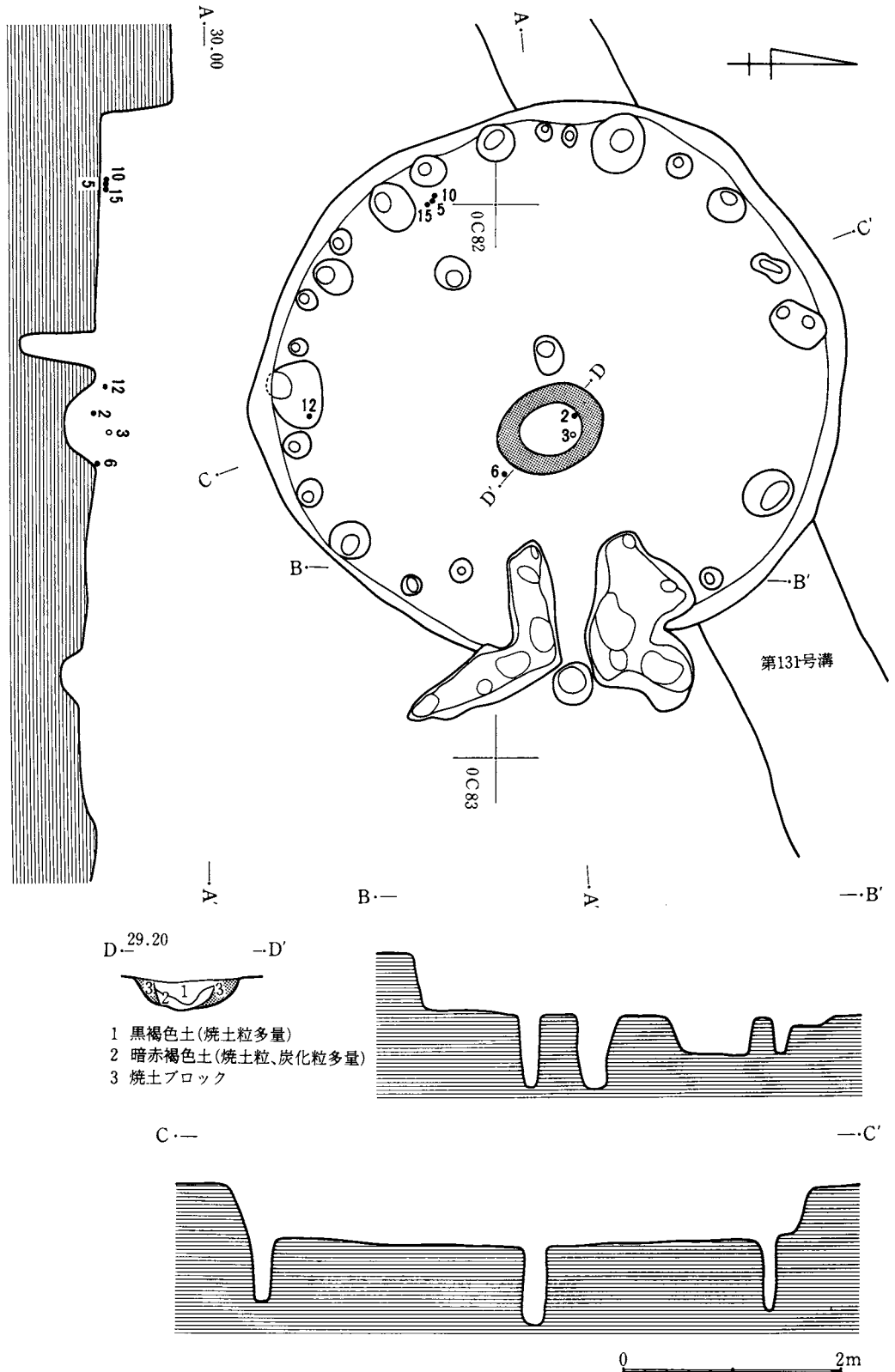
第82図1は口縁部に歪んだU字状の沈線文が施されており、堀之内I式の古い時期にみられる口縁部文様である。胴部には単純な蕨手文が施されると思われる。同図2は幅の狭い口縁部無文帯をもち、胴部文様とを沈線で区画している。胴部には蛇行沈線が施されている。1・2は第IV群1類b種に分類できよう。同図3・8は重層する弧線を単位文様とする。同図4～6も重層する弧線が施されるが、中心に垂下沈線が加えられている。3～6・8は第IV群2類a種である。同図7は口縁から沈線を垂下させ、連続的に同心円文を施し、団子状の文様を描出している。地文の縄文は不明瞭である。第IV群2類b種。同図9・10は同一個体である。波状口縁と思われ、波頂下に3本の沈線を垂下させ、その間に斜行沈線を施している。第IV群3類c種。同図11は2つの小突起を対とすると波状口縁の深鉢である。垂下沈線の間に綾杉文が施され単位文様をなす。単位文様間には斜行沈線が施されるようである。第IV群3類b種か。同図12は第78図6の胴部文様とよく似ているが、隆帯を伴っていないため別個体と思われる。垂下沈線の左右に半円状の沈線文を施している。第IV群6類a種か。第82図13は口縁部に横走る沈線文がめぐり、胴部には垂下及び斜行する沈線が施される。第IV群3類b種。同図14は頸部をもつ深鉢と思われ、破片の上端に横走る沈線が認められる。垂下沈線の左右に連弧状の沈線が施され、単位文様をなしている。単位文様間にはジグザグ状の沈線文が施されると思われる。第IV群3類e種。同図15は波状口縁と思われるがはっきりしない。斜行沈線の上下に連弧状の沈線文が施されている。連弧状の沈線文が単位文様以外に施される例は極めて稀であり、

この破片以外に出土例はない。同図16は垂下する数条の沈線を単位文様とし、ジグザグ状の沈線文が間に施される。施文具は太い半截竹管状工具である。第IV群3類e種。同図17は文様構成がはっきりしないが、単位文様となる垂下沈線に曲線状の沈線文が施されているようである。第IV群3類g種か。第83図18は口縁に沈線をめぐらせ、重層する弧線文を単位文様としている。単位文様間にはX字状の沈線文が施される。地文はLR単節縄文である。第IV群3類f種。同図19は磨消し縄文を伴う深鉢の胴部破片である。重層する弧線を単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線文を施して、文様の内部を磨消している。文様構成が比較的複雑であるが、単位文様自体は新しい要素ではない。磨消し手法を伴うことから、本住居跡で出土した他の土器に比べ時期的には古いものと考えられる。第IV群1類a種。同図20は弧線を組み合わせた文様である。小破片のため文様構成は不明だが、同図18のように単位文様の間に施される文様であろう。分類不可。同図21は地文をもたない深鉢の胴部下半である。太い半截竹管状工具によって数条の沈線を垂下させその間に斜行沈線を施している。第IV群4類。同図22・23は同一個体である。刻目を伴う垂下隆帯が貼付けられ、沈線が密に施される。地文は沈線によって判別しにくいだがLR単節縄文と思われる。第78図4と同じ大波状口縁となる深鉢であろう。第83図24はLR単節縄文が施されているが、3本の櫛状工具によって斜行及び曲線状の沈線が密に施されているため地文の比重は極めて低い。文様構成は不明だが第IV群3類h種にふくめられよう。同図25は半截竹管状工具による垂下条沈線を地文とする。第IV群7類b種。同図26は大型の深鉢と思われる。地文はない。櫛状工具によって単位を構成しない曲線文を施している。第IV群7類c種。同図27～31、第84図32～36は地文のみである。わずかに30・31・32・35が口縁部に沈線を伴う。27・29～36はLR単節縄文を地文とする。36は縦位の施文であろう。28はRL単節縄文を地文とする。33は縄文のみの深鉢の中では数少ない波状口縁である。27～29・33・34・36は第IV群8類a種に、残る30～32・35は第IV群8類b種に分類されよう。

第152号住居跡（第86図 図版12・25・39・40・70）

0C72グリッドを主体に検出された。調査区北端のほぼ平坦な面に位置している。第140号住居跡が西側に隣接する。

遺構 第140号住居跡と同様に第139号溝によって切られているが、溝が浅く住居跡の床面まで達していないため比較的堅穴の遺存はよい。直径5.20mの円形プランに張り出し部を伴う柄鏡形住居である。出入口施設と考えられる張り出しは第140号住居跡と同じくハの字状に開く溝状のピットからなる。深さは一定せず、ピットが連続的に並び溝状を呈する。最深部で北側58cm、南側で66cmである。溝状のピットに挟まれ深さ20cmのピットが検出されたが、柱穴とは性格の異なるピットと考えられる。炉は中央からやや出入口に近い位置にあり、長径100cm、短径80cmの楕円形を呈する。掘り込みの深さは29cmで内部には硬化した焼土がドーナツ状に検出



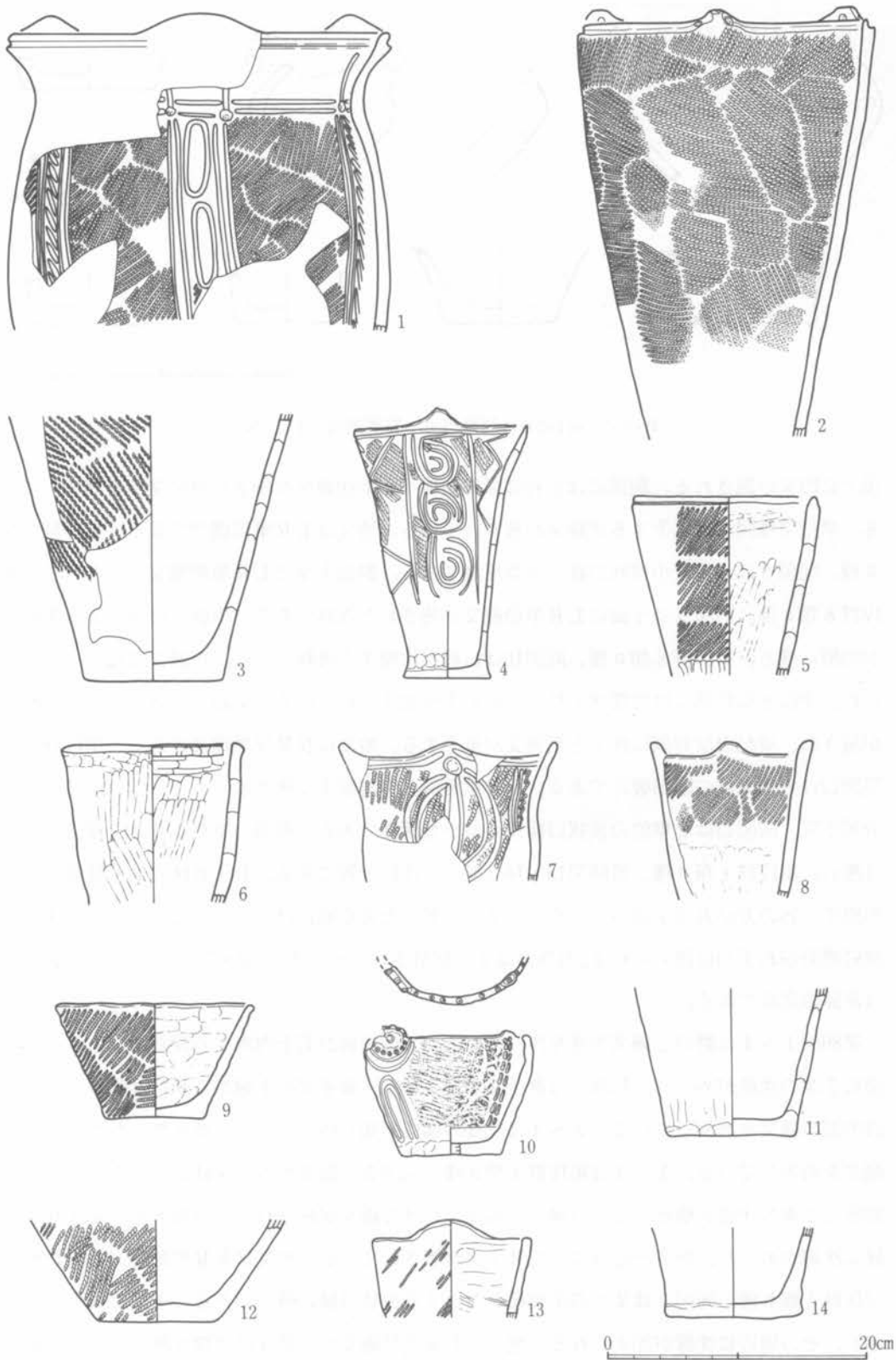
第86図 第152号住居跡実測図 (1/60)

された。第140号住居跡の炉と同様に炉を設ける際に、粘土あるいはロームでドーナツ状の土堤を作り、土器を安定させるようにしたものではないかと考えられる。使用の結果焼土化し著しく硬化したと考えられる。床面はほぼ全面にわたって硬質である。壁の立ち上がりは垂直に近く、残存する壁高は北壁で54cm、西壁で68cm、南壁で45cmである。ピットは張り出し部を除いて24ヶ所検出された。中央のピットは深さ68cmを計り垂直に掘り込まれている。壁沿いのピットは29cm～81cmの深さをもち、平均は57cmで全体に深く、3ヶ所のピットはやや中央に向かい傾くほかは垂直に掘り込まれている。ピットには径の大小が認められ、径の大きなピットの間には径の小さなピットが1乃至2ヶ所配置されているが、深さは径の大小に関係がないようである。しかし、ピットの大小は上屋の支持に若干の違いがあるのではないかと考えられる。張り出し部を除く円形の主体部の面積は21.09㎡である。

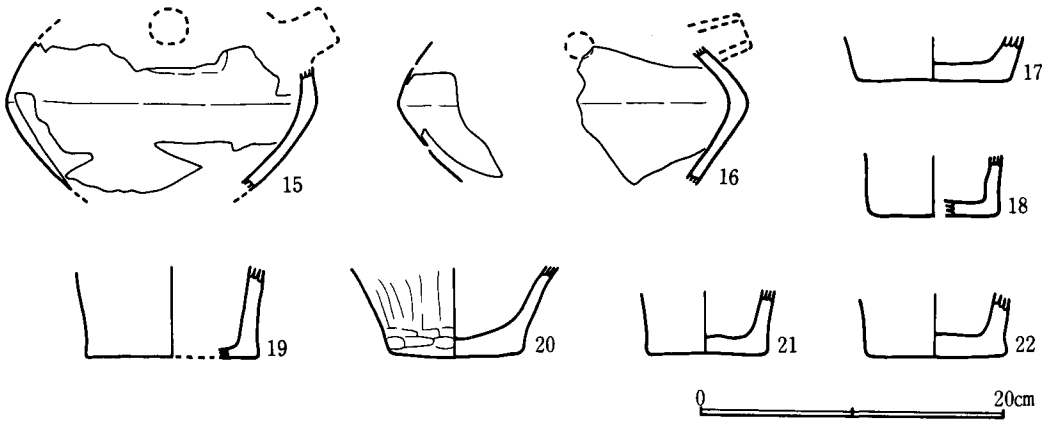
遺物出土状況 堅穴の遺存がよく覆土量も多いことから遺物も相応して多量に出土している。土器は深鉢、浅鉢、注口土器などが出土しており、ほとんどが覆土中からである。深鉢は小型のものが破片を含め7点出土している。注口土器は3点出土したがみな遺存はよくない。手捏土器が2点、球状の土製品が1点それぞれ覆土中から出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内Ⅰ式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第2期に属すると考えられる。石器は磨製石斧2点、磨石2点、浮子1点が出土している。3は住居跡中央の覆土中からの出土であった。他は覆土中からのものであった。

遺物 土器は古手の文様構成をもつものと比較的新しい文様構成をもつものが半々位に出土している。第87図1は頸部のくびれが強い大型の深鉢である。口縁は肥厚し、深い沈線がめぐり、頸部には胴部の文様と口縁部無文帯とを区画する2本の沈線が施される。無文帯は縄文の痕跡を残さないことから、はじめから縄文が施されなかったものと思われる。胴部の単位文様は垂下する沈線の間楕円文が施されたものである。磨消し縄文手法を伴うのかははっきりしない。単位文様間に斜行沈線を伴う垂下沈線文が施されている。第Ⅳ群3類a種の好例である。地文はLR単節縄文である。同図2は底部から直線的に開く深鉢である。口縁部の一部と底部を欠く。口縁は3単位の小波状口縁で、突起状の波頂部両脇には刺突が施されている。胴部はLR単節縄文が施され、底部近くの縄文は磨消されている。第Ⅳ群8類b種。同図3は深鉢の胴部下半である。地文はRLR複節縄文で、沈線文を伴うのかは不明である。第Ⅳ群8類に分類されようか。同図4は小型の深鉢の完形品である。朝顔形にゆるく開く器形で、器厚は薄い。口縁は2単位の波状口縁で、胴部には垂下沈線の間3個の同心円文を施した単位文様が描かれる。単位文様間にはジグザグ状の沈線が施される。地文はR無節縄文である。第Ⅳ群3類e種。同図5は口縁に浅い沈線がめぐり、胴部はLR単節縄文のみである。底部から直線的に開く器形であろう。第Ⅳ群8類b種。同図6は無文の小型深鉢である。内外面の調整痕が明瞭に残る。第Ⅳ群9類。同図7は4単位波状口縁の小型深鉢である。口縁に沈線がめぐり、口縁波



第87图 第152号住居跡出土土器実測図 (1/5) No 1



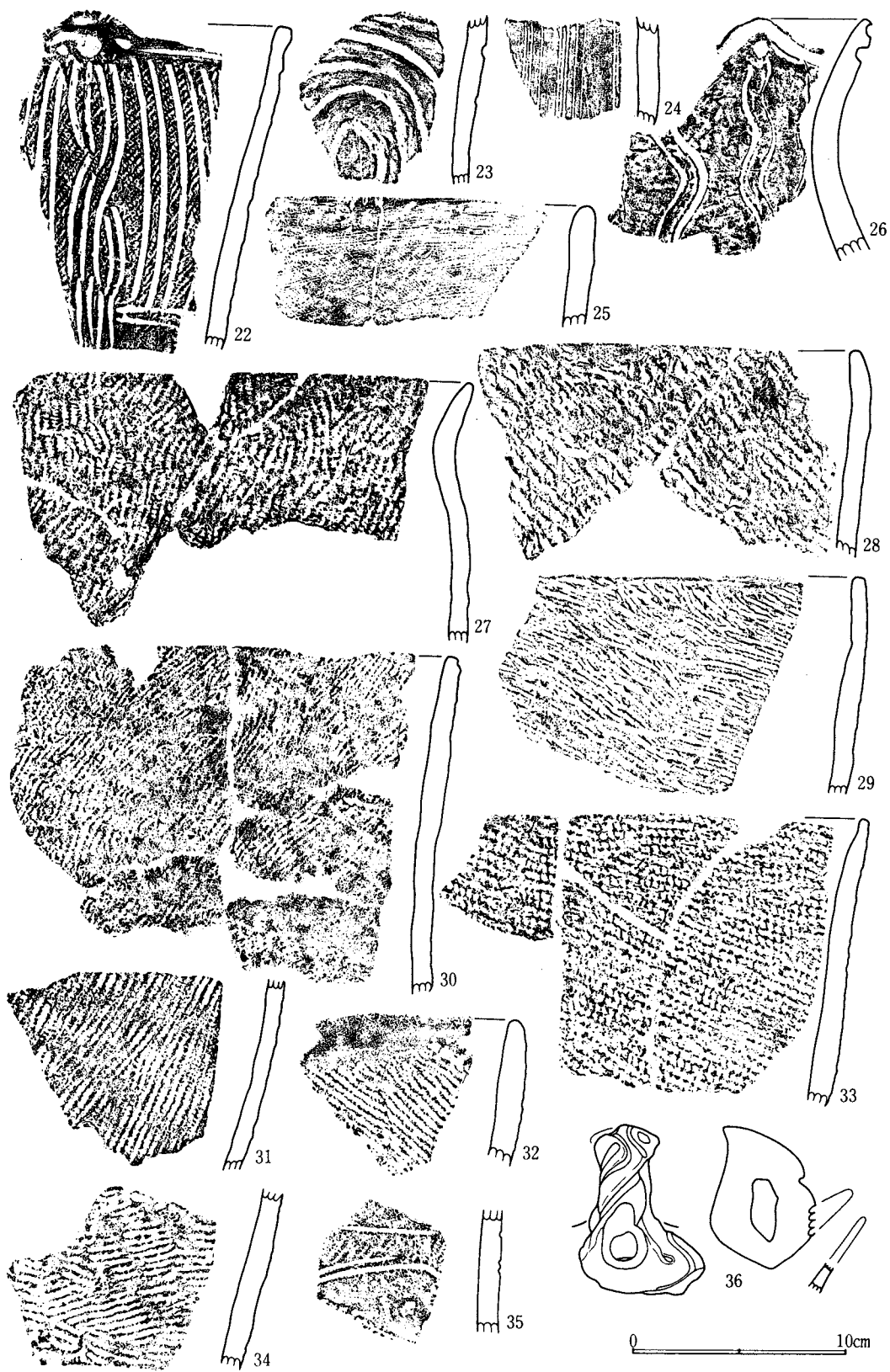
第88図 第152号住居跡出土土器実測図 (1/5) No 2

頂下に凹文が施される。胴部には左右に弧線を伴う垂下沈線文が施され単位文様を構成している。単位文様間には垂下する沈線文が施されている。地文はLR単節縄文である。第IV群3類a種。同図8は4単位小波状口縁の小型深鉢である。胴部上半にLR単節縄文が施される。第IV群8類a種。同図9は全面にLR単節縄文が施された浅鉢である。内面には指による調整痕が明瞭に残る。第IV群8類a種。同図10は口縁が内彎する浅鉢である。口縁に突起が1つ付けられ、突起と口唇部には竹管状工具による刺突が加えられている。突起下には逆U字状の沈線が施され、突起の反対側に押し引き刺突文が垂下する。地文はRR反撚縄文である。第IV群11類。同図12は大型深鉢の底部破片である。LR単節縄文が底部まで施されるめずらしい例である。分類不可。同図13は2単位の波状口縁をもつ小型深鉢である。器面の摩耗が著しく縄文の残りは悪い。第IV群8類a種。第88図15・16は無文の注口土器である。若干丸味のある算盤玉状の形態で、15の方が丸味が強い。2点とも遺存が悪いため形態ははっきりしない。ともに注口の接続部分がわずかに認められる。内外面はよく研磨され平滑である。第87図11・14、第88図17～22は深鉢の底部である。

第89図1～4は磨消し縄文手法を伴っている。1は口縁が若干内彎する深鉢であろう。口縁部に2本の沈線がめぐり、胴部には蕨手文が施される。蕨手文の上端から斜行沈線がのび、沈線内部の縄文を磨消している。2～4は文様の構成を知り得ないが、沈線を施した後、内部の縄文を磨消している。1～4は第IV群1類a種。同図5は頸部をもつ深鉢の口縁部破片である。頸部に2本の沈線が横走する。口縁から頸部にかけて縄文が施される。分類不可。同図6は口縁に沈線がめぐり、刺突を起点にして蕨手文が施されている。地文はRR反撚縄文と思われる。第IV群1類b種。同図7は2つの小突起を対とする波状口縁の破片である。中央に蕨手文が施され、その周辺に沈線が加えられる。地文はLR単節縄文か。第IV群2類a種。同図8は縄文地文に数条の沈線が垂下する。第IV群1類b種か。同図9は第87図1と同一個体かもしれない。



第89图 第152号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No 1

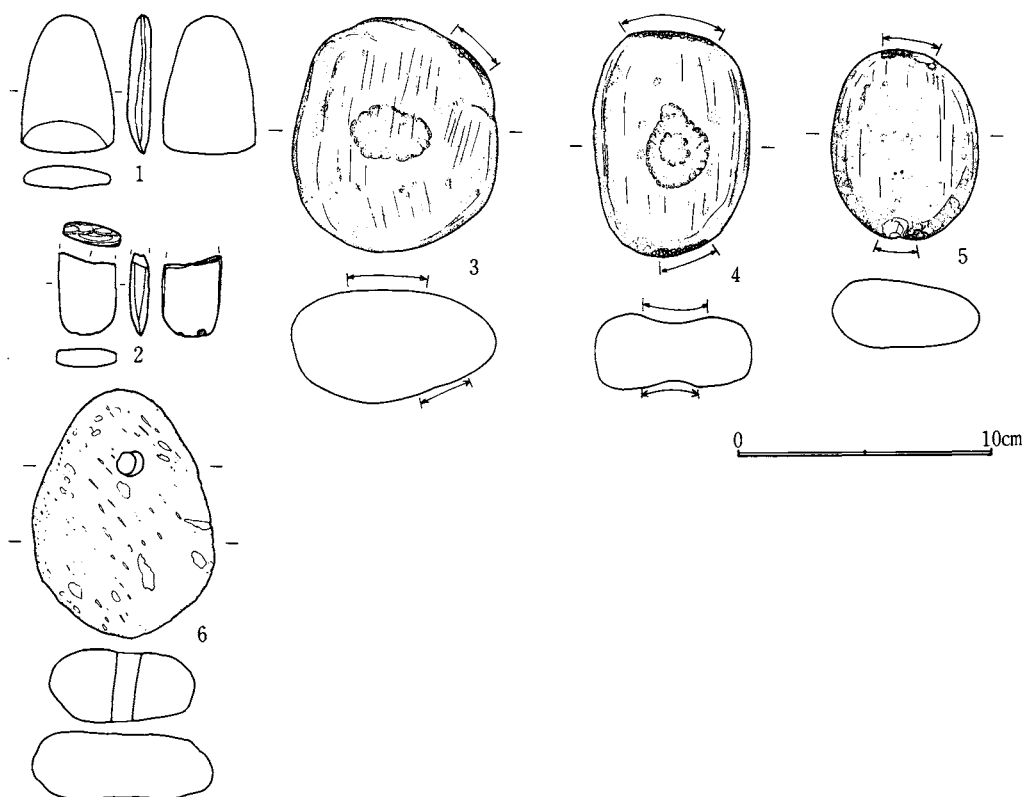


第90图 第152号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 2

第152号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
152-1	深鉢 A I	口縁 1/4 胴部 1/4 底部 1	口径(29.0) 底径 1 器高(23.0)	口縁(3) 胴部(3)	竹	L R	口縁に沈線がめぐる。幅広の無文帯下端に沈線がめぐる。垂下沈線の間に楕円文を施し、単位文様としている。	覆土	第IV群 3類 a種
152-2	深鉢 B IV	口縁 1/4 胴部 完 底部 1	口径 22.0 底径 1 器高(32.5)	口縁 3 胴部 1	竹	L R	口縁に沈線を施す。	炉覆土	第IV群 8類 b種
152-3	深鉢	口縁 1 胴部 1/4 底部 完	口径 1 底径 10.8 器高(20.1)	口縁 1 胴部 1	—	RLR		覆土	第IV群
152-4	深鉢 B V	口縁 完 胴部 完 底部 完	口径 13.5 底径 6.5 器高 20.4	口縁 2 胴部 2	棒	R	口縁部に沈線がめぐる。垂下沈線の間に同心円文を施し単位文様をなす。単位文様の間にジグザグ状の沈線を施す。	覆土	第IV群 3類 e種
152-5	深鉢 B IV	口縁 完 胴部 1 底部 1	口径 14.0 底径 1 器高 13.5	口縁 平 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類 b種
152-6	深鉢 B III	口縁 完 胴部 1/4 底部 1	口径 14.1 底径 1 器高(12.0)	口縁 平 胴部 1	—	—	無文。	覆土	第IV群 9類
152-7	深鉢 A III	口縁 1/4 胴部 1/4 底部 1	口径(15.4) 底径 1 器高(10.5)	口縁 4 胴部 4	竹	L R	口縁部に沈線がめぐる。垂下沈線の左右に弧線文を施す。	覆土	第IV群 3類 a種
152-8	深鉢 B IV	口縁 1/4 胴部 1/4 底部 1	口径(12.4) 底径 1 器高(11.8)	口縁(4) 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類 a種
152-9	浅鉢 A	口縁 1/4 胴部 1/4 底部 完	口径(15.2) 底径 7.5 器高 8.5	口縁 平 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類 a種
152-10	浅鉢 B	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(12.3) 底径(7.5) 器高 10.1	口縁 ? 胴部 ?	竹	R R	口唇部に刺突を加える。口縁に突起を1つもつ。逆U字状沈線、垂下点文を施す。	覆土	第IV群 11類
152-11	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 完	口径 1 底径 10.0 器高(11.1)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
152-12	浅鉢	口縁 1 胴部 1 底部 完	口径 1 底径 9.3 器高(7.8)	口縁 1 胴部 1	—	L R		覆土	第IV群
152-13	深鉢 B IV	口縁 完 胴部 1/4 底部 1	口径 12.3 底径 1 器高(7.4)	口縁 2 胴部 1	—	L R	地文のみ。	覆土	第IV群 8類 a種
152-14	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 完	口径 1 底径 10.0 器高(6.9)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
152-15	注土器	口縁 1 胴部 1/4 底部 1	口径 1 底径 1 器高(8.0)	口縁 1 胴部 1	—	—	無文。	覆土	第IV群
152-16	注土器	口縁 1 胴部 1/4 底部 1	口径 1 底径 1 器高(9.2)	口縁 1 胴部 1	—	—	無文。	覆土	第IV群
152-17	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/2	口径 1 底径(10.1) 器高(2.8)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
152-18	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/4	口径 1 底径(8.6) 器高(4.0)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
152-19	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/4	口径 1 底径(11.3) 器高(5.9)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
152-20	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/4	口径 1 底径 8.8 器高(5.9)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群
152-21	深鉢	口縁 1 胴部 1 底部 1/4	口径 1 底径(7.9) 器高(4.1)	口縁 1 胴部 1	—	—		覆土	第IV群

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
152-22	深鉢	口縁— 胴部— 底部完	口径— 底径 9.2 器高 (4.1)	口縁— 胴部—	—	—		覆土	第IV群



第91図 第152号住居跡出土石器実測図 (1/3)

第152号住居跡出土石器観察表

遺物番号	器種	法量 cm, g				石材	調整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	磨製石斧	5.4	3.6	0.9	30	細粒砂岩	定角式磨製石斧である。鑿を作出するような研磨が施され、刃部は片刃・円刃をなす。小形の石斧である。断面は隅丸長方形をなす。	152-1
2	磨製石斧	(3.2)	2.3	0.8	(11)	蛇紋岩	定角式磨製石斧である。刃部は蛤刃・円刃をなす。上半部を裏面からの衝撃により破損する。小形の石斧である。断面は隅丸長方形をなす。	152-1
3	磨石	9.1	8.1	4.3	443	砂岩	転石を利用。表裏面・側面一部磨耗、表裏面に1ヶ所づつ微妙な凹あり、側面に一部敲打痕あり。	152-4
4	磨石	8.8	6.2	2.8	273	角閃石輝石安山岩	楕円形を呈し、側面調整され稜をもつ。表裏面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ約3mmの凹をもつ。上下端敲打痕あり。	152-1
5	磨石	7.3	5.8	2.6	168	流紋岩	転石を利用。表裏面磨耗、上下端敲打痕剝削明瞭。	152-1
6	浮子	9.6	7.0	2.8		浮岩	孔径 0.9×0.8	152-1

単位文様間に施される付属文様の部分であろう。この文様はグリッドから出土した第146図41のように単位文様として使われることもある。単位文様となる文様は比較的限られており、付属的な文様としても使われている例はあまり多くないと思われる。第IV群3類a種。第89図10は上端に横走する沈線を伴っていることから、頸部をもつ深鉢と思われる。重層するU字状の沈線文の下に数条の沈線を垂下させ、さらに弧線を加えている。単位文様としてはめずらしい文様である。第IV群2類a種か。同図11は波状口縁の深鉢である。波頂部分から横走する沈線がのび、胴部には沈線が垂下する。分類不可。同図12は縦に渦巻文が連なるものであろう。文様構成が不明のため分類不可。同図13～15は第87図1と同様に口縁から頸部にかけて無文帯となる深鉢である。みな別個体である。13は波状口縁で、波頂下に2個の刺突を加え、刺突を起点に沈線が垂下する。器面調整は粗い。同図14は胴部文様とを区画する沈線が頸部に施されている。無文部の調整は丁寧に行われている。同図15は14と同様に頸部に沈線が施されるほか、口縁にも沈線がめぐり、無文帯の調整は丁寧に行われている。13～15は分類不可。同図16は同心円文にジグザグ状の沈線文が施されている。第IV群3類e種。同図17は棒状工具によって密に沈線を施している。地文の縄文原体は不明。第IV群3類h種であろう。同図18は数条の沈線を垂下させ単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線を施し、さらに十字に沈線を加えている。器形は底部から直線的に開く深鉢で、地文には横位・斜位のLR単節縄文を施している。第IV群3類e種。同図19は単位文様間に施される付属文様と思われるが、X字状となるのかジグザグ状となるのかははっきりしない。第IV群3類f種に分類しておく。同図20は垂下する隆帯に連続的に指頭圧を加え、連続凹文をつくり出している。小片のため文様構成は不明。このような隆帯はあまりみられない。第IV群6類a種か。同図21は刻目を施した隆帯を垂下させている。口縁部には半截竹管状工具による沈線が横走する。第IV群6類a種。第90図22はやや小型の深鉢である。波状口縁をなし、波頂下に大きめの凹文を施している。胴部には垂下する曲線文の左右に同心円状に広がる弧線を施している。下端に横走する2本の沈線が認められるが、文様帯の下端を区画する沈線であるのかは不明である。第IV群3類h種に分類されよう。同図23は地文をもたず、太い沈線によって同心円文を描出している。器面の調整は粗い。第IV群4類。同図24は櫛状工具による垂下条線文である。同図25は細い櫛状工具によって乱雑な条線文が施されている。ともに第IV群7類b種。同図26は口縁に太い沈線がめぐり、波状口縁の波頂下に刺突を施している。地文はなく、半截竹管状工具によって蛇行沈線を施している。胎土・焼成はともに良好。第IV群5類b種。同図27～34は縄文のみである。すべて第IV群8類a種に分類される。27は口縁部近くに若干のくびれをもつ深鉢である。地文はLR単節縄文。28はR無節縄文、29はRR反撚縄文、30～32・34はLR単節縄文、33はRL単節縄文である。同図35は沈線で区画した内部に縄文を充填している。摩耗が著しく縄文の原体は不明。この1点は本住居跡から出土した他の土器に比べ明らかに新しい時期の土器片である。第IV群12類b種に分

類されよう。同図36は注口土器である。粘土紐をねじって橋状把手にしている。器形は小型で丸味のある器形であろう。胎土・焼成ともに良好である。

第153号住居跡（第92図 図版13・26・40）

1 C 03グリッドを主体に検出された。調査区北東部の平坦な面に位置している。

遺構 東側に攪乱があり壁及び床面の一部が壊されているほかはほぼ全景をとどめている。プランは直径5.10mの円形を呈する。炉は検出されなかった。床面は全体に軟弱で、硬質部分は認められない。残存する壁高は南東壁で32cmを計る以外は10cm前後と遺存はあまりよくない。ピットは27ヶ所検出されている。中央のピットは深さ38cmでほぼ垂直に掘り込まれている。残る26ヶ所のピットは16cm～53cmの深さをもち深度にややばらつきがある。平均は36cmである。ピットの間隔は一定せず不規則に並んでおり、壁から若干離れた位置にそのほとんどが検出されている。床面積は21.57 m²である。

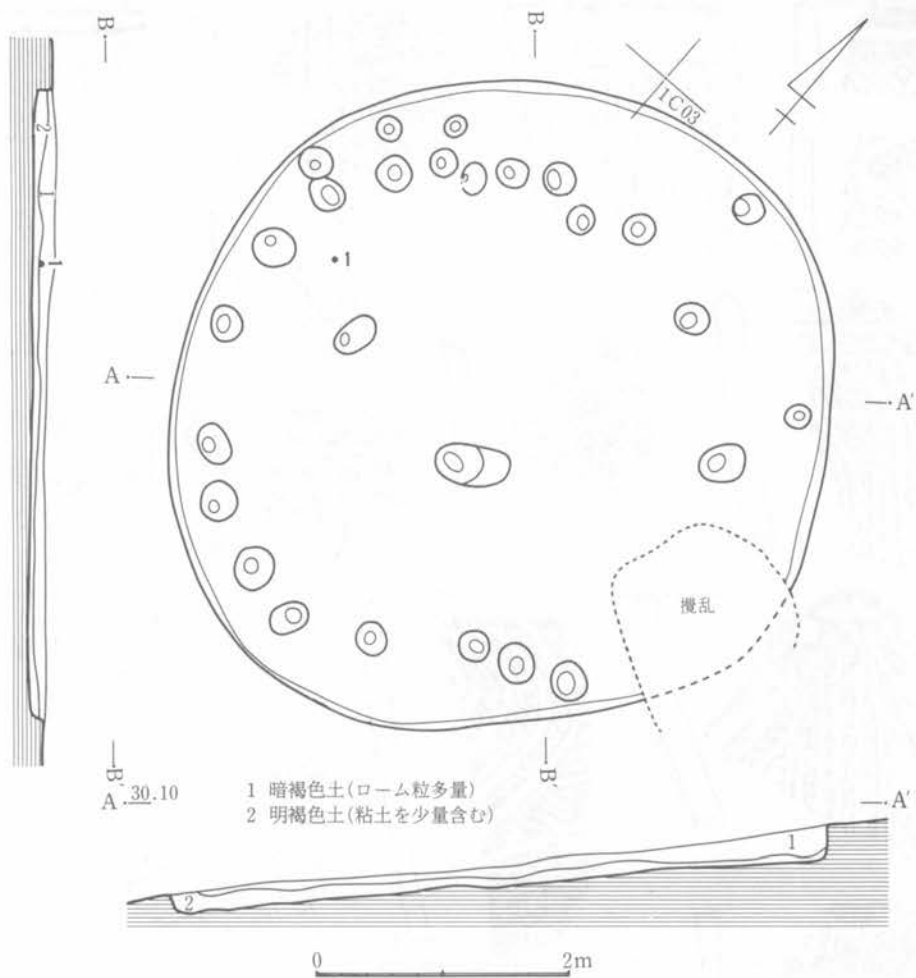
遺物出土状況 堅穴はいたって浅く、遺物量は極めて少ない。第93図1の深鉢が最も遺存がよく、他はすべて小破片である。第93図1は北壁から南に約80cm離れた床面から出土している。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。土器量は少なく、時期は決定しにくいが堀之内第2期に含めることができよう。

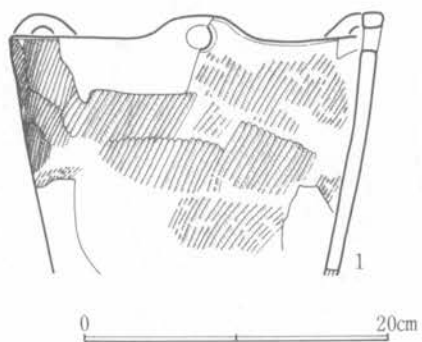
遺物 土器量が少ないため、全体の傾向はつかみにくい。やや古い要素と新しい要素が混在しているが、他の住居跡に比べ、文様等に新しい要素が多い点を指摘し得る。

第93図1は3単位小波状口縁の深鉢である。波頂下に大きな貫通孔を伴う。地文はL無節縄文を施している。器面は摩耗が著しい。第IV群8類a種。

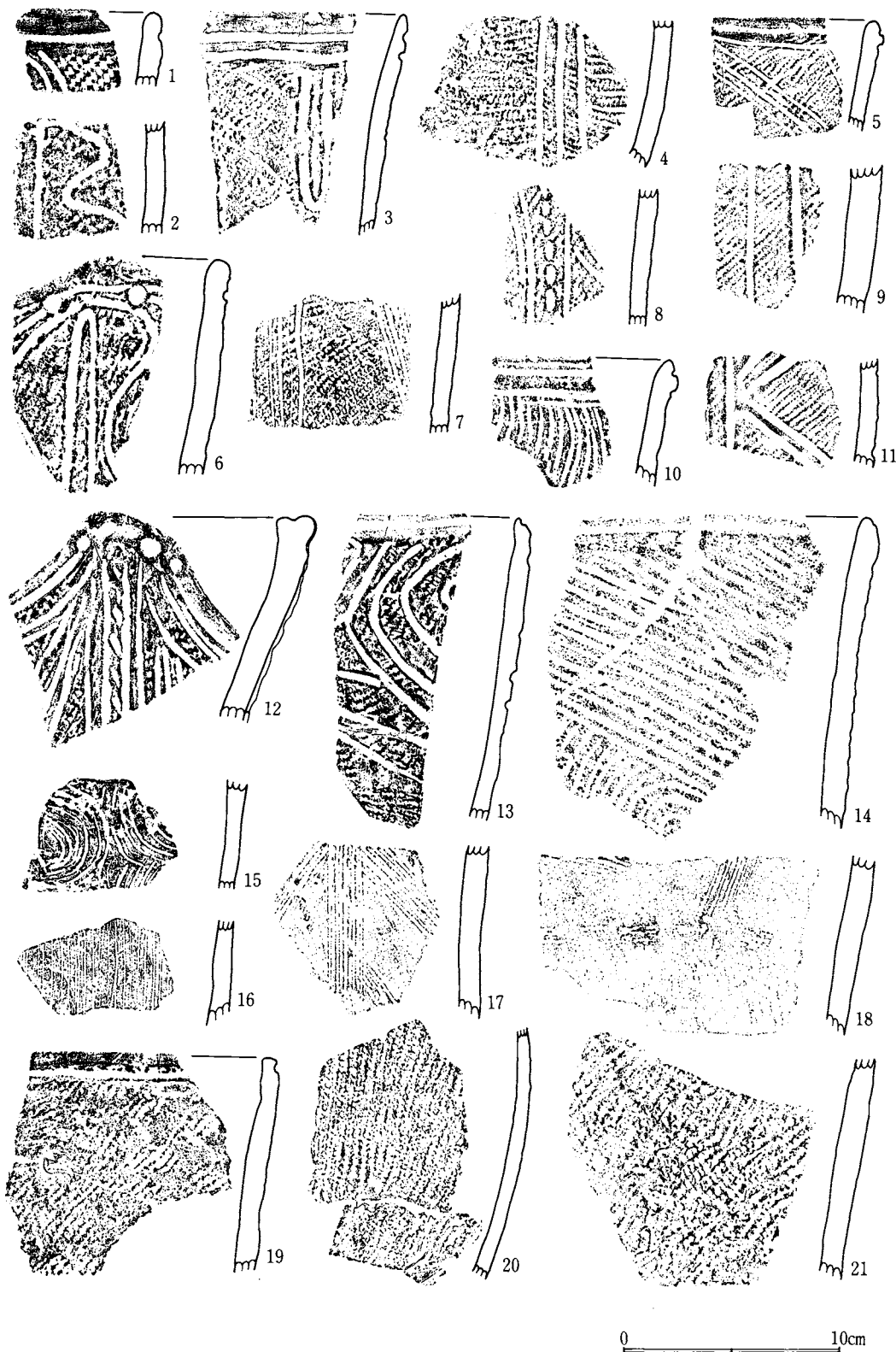
第94図1～4・6は第IV群1類b種に分類される。1は蕨手文であろう。2・6は同一個体である。小波状口縁の深鉢と思われる。垂下沈線に蛇行沈線を加えて蕨手文を描出している。地文はLR単節縄文か。3は口縁に2本の沈線がめぐり、U字状の沈線文を施している。4は単純な沈線文が施されていると思われる。地文は付加条縄文と考えられるが、摩耗しており、原体ははっきりしない。同図5は口縁部の小破片であるため文様構成は不明である。3本の斜行沈線が施されており、第IV群3類b種かと思われる。同図7は垂下沈線に斜行沈線が加えられている。第IV群3類b種。同図8は2本の垂下沈線の間之列点文が施される。分類不可。9はLR単節縄文を地文とし、垂下沈線文が施されている。分類不可。同図10は口縁部に2本の深い沈線が施しているため、沈線の間が隆帯状に浮き出ている。地文の有無は不明。弧状に沈線が施されている。第IV群4類か。同図11図は垂下する沈線文を単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線文が施されるものであろう。地文はLR単節縄文である。第IV群3類e種。同図12は刻目を施した垂下隆帯を貼付けている。地文はLR単節縄文か。第IV群6類a種。同図13は重層する曲線文を施している。単位を構成しないと思われる。地文はLR単節縄文であ



第92図 第153号住居跡実測図 (1/60)



第93図 第153号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第94图 第153号住居跡出土土器拓影图 (1/3)

第153号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
153-1	深鉢 B IV	口縁 胸部 底部	1/2 1/4 —	口径(24.0) 底径 — 器高(16.6)	口縁 3 胴部 —	—	L 地文のみ。	床面直上	第IV群 8類a種

る。第IV群5類a種。同図14は沈線が密に施されいわゆる集合沈線文である。摩耗が著しいため縄文の有無は不明だが、縄文があったとしてもほとんど沈線によって消されているであろう。とりえず第IV群3類h種に分類する。同図15は地文を持たず、半截竹管状工具によって同心円状の文様を描出している。内外面ともに平滑である。第IV群5類b種。同図16は櫛状工具による垂下条線である。第IV群7類b種。同図17・18は同一個体である。垂下する条線の左右に異方向に傾斜する条線を施している。地文を持たず内外面ともに平滑である。第IV群7類b種。同図19～21は第IV群8類a種に分類される。3点ともLR単節縄文を地文とする深鉢である。

第159号住居跡 (第95図 図版13・26・41)

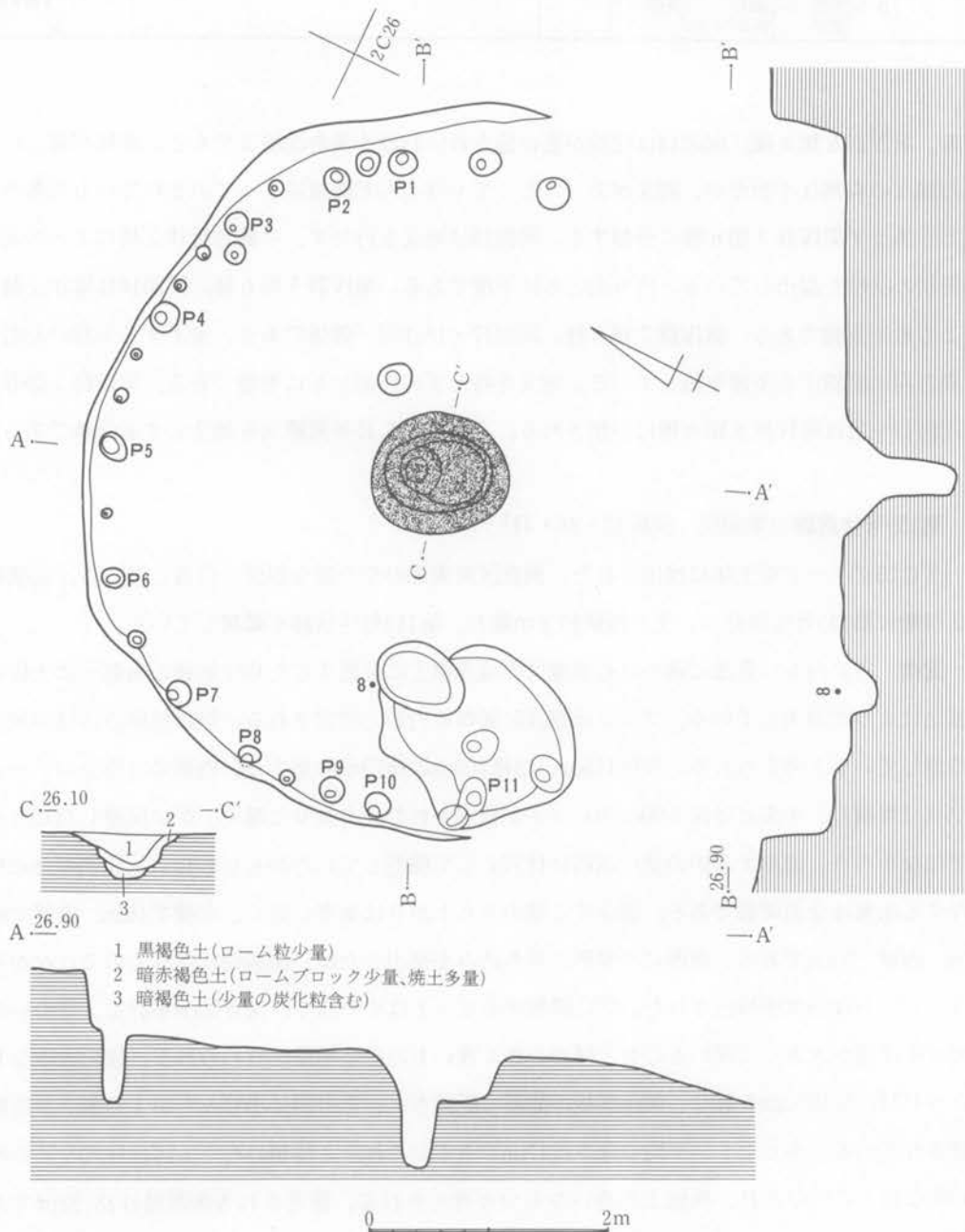
2C25グリッドを主体に検出された。調査区南東部のやや急な斜面に位置している。北側約2m離れ第105号住居跡が、また西側約2m離れ、第112号住居跡が隣接している。

遺構 谷に向かい急激に落ち込む調査区の境界線上に位置するため住居跡の南側1/3は土砂の流出によって消失している。プランは直径5.90mの円形と推定される。炉は住居のほぼ中央に位置していると考えられる。長径115cm、短径100cmの楕円形を呈する。内部には焼土がドーナツ状に堆積し、中央には深さ90cmのピットが検出された。あまりに深く、炉に関連したピットではなかろう。遺存する炉の使用以前に柱穴として機能していたかもしれない。北側半分に残存する床面は全面硬質である。遺存する壁の立ち上がりは垂直に近く、北壁で46cm、東壁で60cm、西壁で53cmである。南西に不整形の落ち込みを検出したが、住居跡に伴うものではなかろう。ピットは28ヶ所検出された。炉に隣接するピットはやや浅く、深さ20cmを計る。壁沿いのピットは径が大きくて深いものと、径が小さく浅いものの2種類が認められる。径の大きなP1～P11は平均52cmを計り、90cm前後の間隔に配置され、その間に小ピットが1乃至2ヶ所配置されている。小ピットの平均の深さは17cmである。これら2種類のピット群は柱穴とその補助的な杭とに分けられ、機能上の違いをもつと考えられる。推定される床面積は28.92㎡である。

遺物出土状況 斜面にあつて堅穴が半分近く流失しているものの、遺物量は比較的多い。土器のほとんどは覆土中から出土している。深鉢が主体で鉢が1点含まれている。

土器はすべて縄文時代後期の堀之内I式である。出土した土器から本住居跡は堀之内第2期に属すると考えられる。

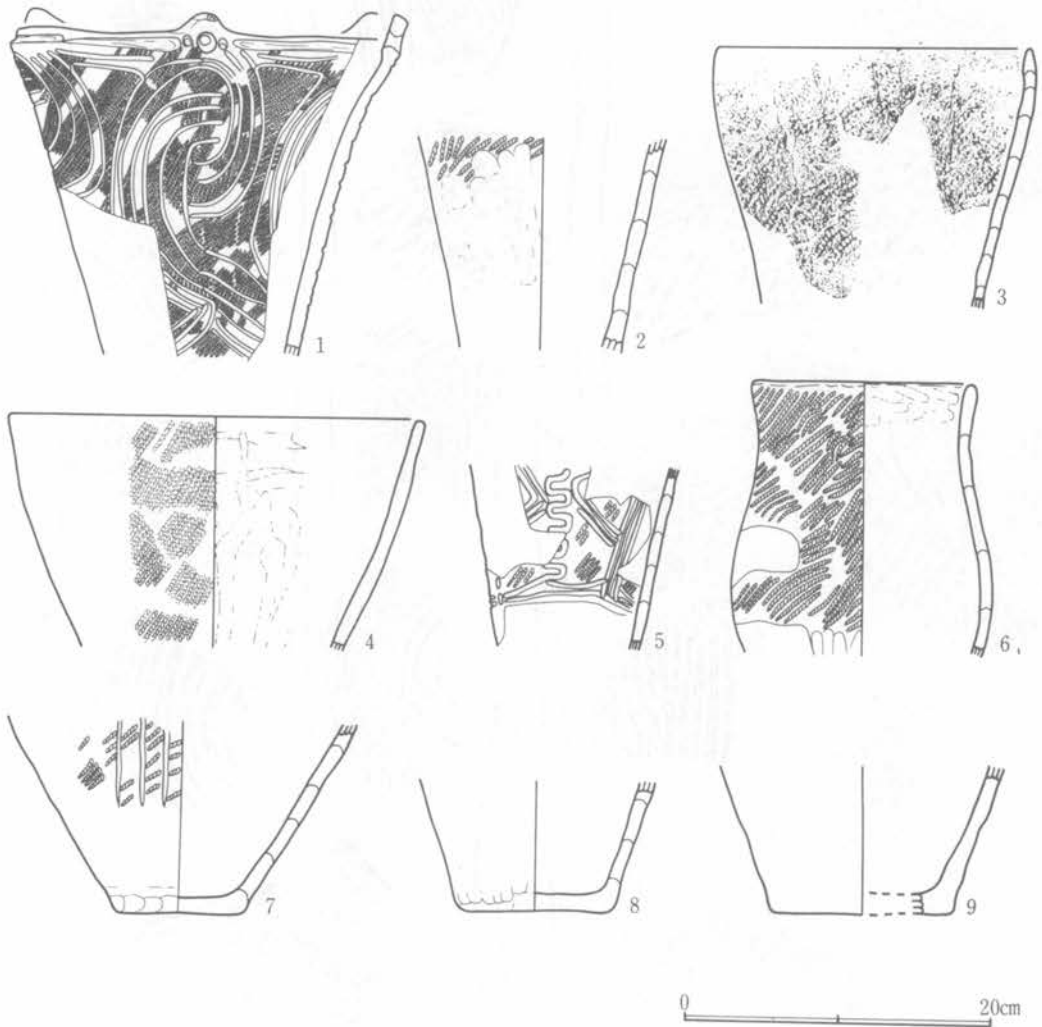
第95図 第159号住居跡実測図 (1/60)



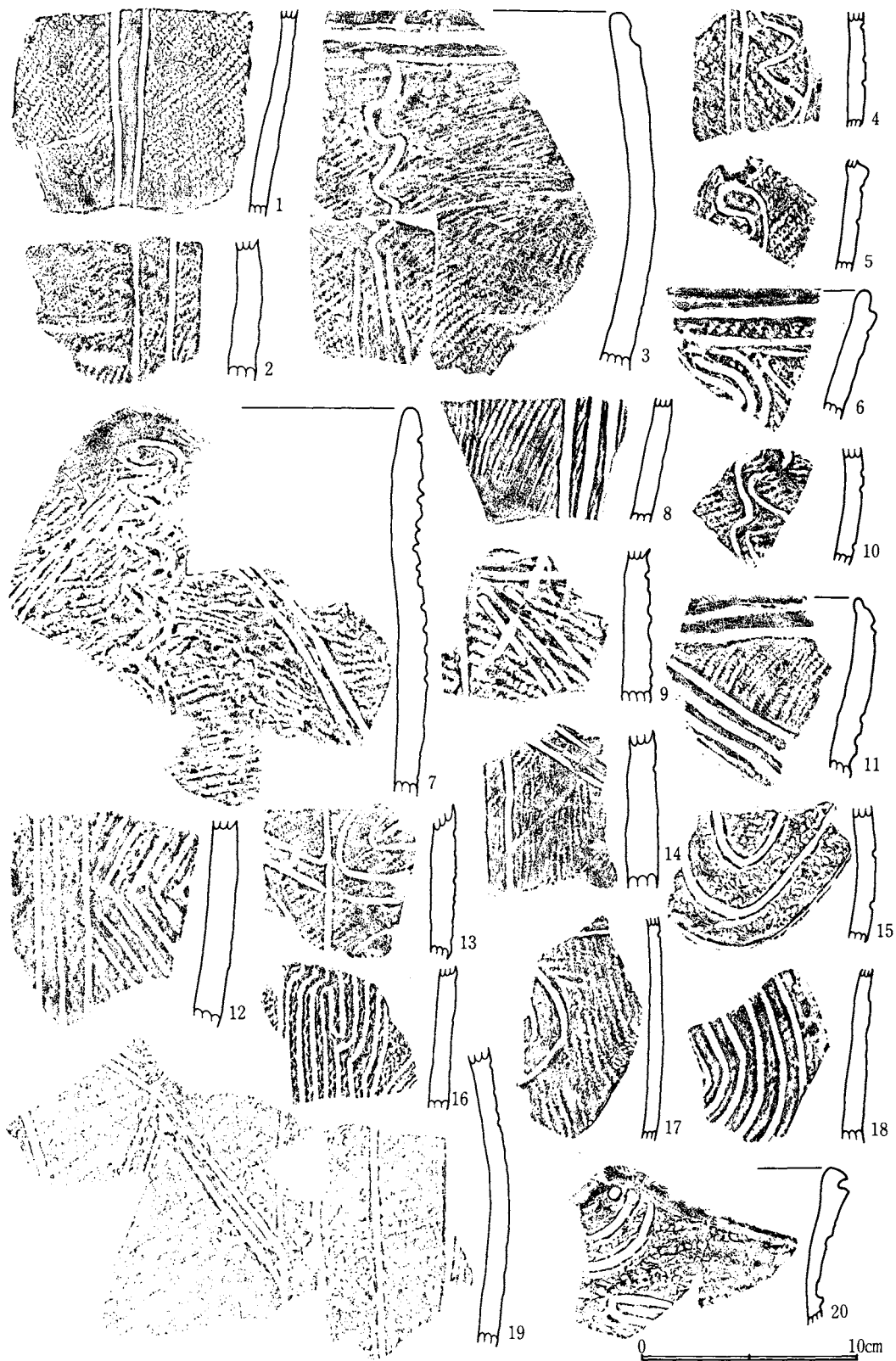
第95図 第159号住居跡実測図 (1/60)

遺物 土器は比較的古手の文様要素をもつものが認められるが、第9号及び第10号住居跡出土土器に比べ全体に新しい傾向をもつ。

第96図1は3単位小波状口縁をもつ深鉢で朝顔形に開く器形である。波頂下に貫通孔を伴う。口縁にはやや太めの沈線がめぐる。胴部文様は交互にかさなり合う弧線文で、クランク状の文様が重層化したものと考えられる。文様は6単位を構成している。地文の縄文は細かいLR単節縄文である。器形・文様ともに新しい様相を示している。第IV群2類a種。同図2は胴部下半にあたり、LR単節縄文のみが認められる。同図3は口縁部がやや内彎する器形の深鉢である。地文はLR単節縄文である。第IV群8類a種。同図4は器厚がやや厚く、口縁の開きが大きいことから鉢と考えられる。文様は地文のみでLR単節縄文が施されている。内面は平滑で調整痕を明瞭に残す。第IV群8類a種。同図5は千葉県内ではあまり多くはみられない文様で



第96図 第159号住居跡出土土器実測図 (1/5)



第97图 第159号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No. 1



第98图 第159号住居跡出土土器拓影图 (1/3) No.2

第159号住居跡出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
159-1	深鉢 B V	口縁 1/4 胴部 1/4 底部 1	口径 24.4 底径 — 器高(22.0)	口縁 3 胴部 6	竹	LR	口縁に沈線がめぐる。クランク状の重層する沈線文を施す。	覆土	第IV群 2類d種
159-2	深鉢	口縁 — 胴部 1/4 底部 1	口径 — 底径 — 器高(13.5)	口縁 — 胴部 —	—	LR		覆土	第IV群
159-3	深鉢 B III	口縁 1/4 胴部 1/4 底部 1	口径(20.4) 底径 — 器高(16.1)	口縁 平 胴部 —	—	LR	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
159-4	鉢 B	口縁 1/4? 胴部 1/4? 底部 1	口径(27.1) 底径 — 器高(14.9)	口縁 平 胴部 —	—	LR	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
159-5	深鉢 B IV	口縁 — 胴部 1/4 底部 1	口径 — 底径 — 器高(11.8)	口縁 — 胴部 —	竹	LR	蛇行沈線文及び垂下沈線を施し、間にジグザグ状の沈線文を施す。文様帯下端を区画する沈線を施文。	覆土	第IV群 6類d種
159-6	深鉢 A IV	口縁 1/4 胴部 1/4 底部 1	口径(14.8) 底径 — 器高(17.5)	口縁 平 胴部 —	—	LR	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
159-7	深鉢	口縁 — 胴部 1/4 底部 1/4	口径 — 底径(8.3) 器高(12.5)	口縁 — 胴部 ?	樺	LR		覆土	第IV群
159-8	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 1/4	口径 — 底径 10.0 器高(8.5)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群
159-9	深鉢	口縁 — 胴部 — 底部 1/4	口径 — 底径(11.7) 器高(9.5)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群

ある。文様自体の要素は福島県などの東北方面にみられるもので、文様帯下端を区画する沈線が伴っている。時期的には網取II式の古い段階にあたりと考えられる。分類は文様帯の下端を沈線で区画していることから第IV群6類d種に含められるが、6類d種のおもな土器は堀之内I式の最も新しい時期であり、5は例外的なものとして取扱うことにする。同図6は胴部が最大径となり、頸部のくびれがゆるい深鉢である。LR単節縄文が全面に施される。第IV群8類a種。同図7は大型の深鉢の底部である。LR単節縄文と3本の垂下沈線をかろうじて認めることができる。同図8・9も同じく深鉢の底部である。

第97図1・2は垂下する2本の沈線の間を磨消している。蕨手文などの単純な文様の下半と思われる。第IV群1類a種。同図3は胴部が最大径となる深鉢である。平縁で口縁部に沈線がめぐる。胴部には雑な蛇行沈線が垂下する。第IV群1類b種。同図4～6は蕨手文を伴っている。4は蕨手文の左右に弧線を施す。5は単純な蕨手文、6は太めの沈線による蕨手文であろう。4～6は第IV群1類b種。同図7は波状口縁の深鉢である。波頂下に蛇行沈線文を施し、上方から左右に斜行する沈線文がのびる。第IV群3類a種。同図8・10は小片のためはつきりしないが、蕨手文が施されていると思われる。第IV群1類b種。同図9・11・14は単位文様間に施される斜行沈線と思われる。第IV群3類b種に分類されよう。同図12は垂下する沈線文を単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線文が施されている。第IV群3類e種。同図13は単位を構成しない沈線文である。第IV群11類。同図15・17・18は同心円状の沈線文が施されて

いる。小片のため単位を構成しているかは不明。同図16は単位文様間に施されるクランク状の沈線文である。沈線が密に施されているため地文の縄文はほとんど意味をなさない。第IV群3類c種。同図19は垂下する数条の沈線を単位文様とし、単位文様間にX字状の沈線文を加えている。縄文の押捺は弱く、LR単節縄文を地文とする。第IV群3類f種。同図20は波状口縁の破片である。文様は単位を構成していない。第IV群11類。第98図21は櫛状工具による条線文である。第IV群7類b種。同図22は刻目を伴う隆帯が垂下する。隆帯と隆帯の間は曲線状の沈線文が密に施され、地文の縄文はあまり意味をもたなくなっている。内外面ともに丁寧に調整され平滑であることから縄文→沈線の順で施文したあとほぼ全面にわたって調整しなおしていると思われる。そのため縄文は極めて判別しにくくなっている。縄文はLR単節縄文である。第IV群6類a種。同図23は胴部下半のためどんな文様かはよくわからない。沈線文が切れる部位からは極めて丁寧な調整が行われ平滑である。焼成はよく、胎土は良好。地文はLR単節縄文である。分類不可。同図24～27は縄文のみで他の文様は施されていない。第IV群8類a種に分類される。24はRLR複節縄文を横位に施文したのち、間隔をおいて縦位に縄文を転がしている。一見、羽状を呈する。25～27はLR単節縄文を地文とする。なお24・27は小波状口縁の深鉢と思われる。

2) 埋甕

第76号埋甕 (第99図 図版14・26)

1A76グリッドから検出された。正位の状態で見られ、口縁部をのぞいてほぼ完存している。検出時、口縁部は割れて大きく開いた状態であったが胴部から底部にかけてはほとんど原形のまま遺存していた。底部には穿孔などの二次的な加工の痕跡はなく、完形で埋設されたものと考えられる。付近には他に埋甕は見られおらず、単独で検出されている。

第100図1が埋設された土器である。2単位の波状口縁で、口縁部には紐線文が貼付けられ内面には沈線が施される。胴部はLR単節縄文が施されているが、縄文の押捺は弱く器面の乾燥が進んでから施文されたものと考えられる。そのためか何度か縄文原体を転がしなおした部分が認められる。焼成はよく、硬質で内外面の調整は丁寧に行われている。器形は底部から直線的に開く朝顔形を呈する。時期的には堀之内式期の最も新しい段階に位置付けられるが、文様、器形、焼成等においては加曽利B1式の古い段階に属する粗製土器とほとんどかわりはない。この埋甕は堀之内第3期に属すると考えられる。

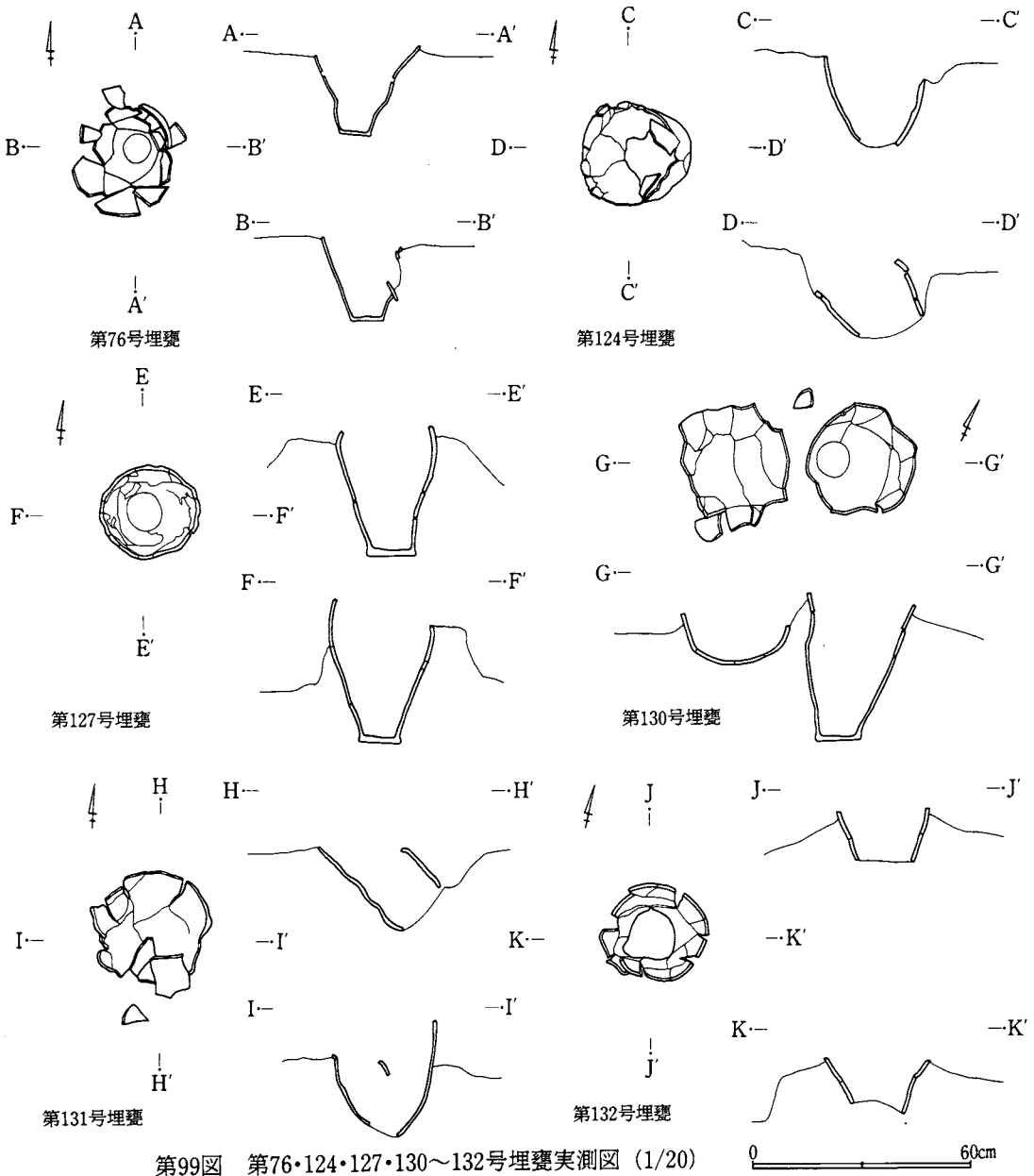
第76号埋甕観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
76-1	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 完	口径 一 底径 9.6 器高(29.0)	口縁 2 胴部 一	竹	LR	口縁部に紐線文がめぐる。内外面は黒味が強く器厚はうすい。焼成はよく硬質。縄文は重複して施文。	1A76	第IV群 10類

第124号埋甕 (第99図 図版14・26)

1 C31グリッドから検出され、隣接して第127号埋甕及び第131号埋甕が発見されている。口縁部を上にしてやや西に傾いた状態で埋設されている。土器の遺存は悪く、口縁部が $\frac{1}{2}$ 、胴部上半が $\frac{2}{3}$ 、胴部下半はまったく遺存していない。煮沸用として使用していた土器を転用していると考えられるが、破損したため使用できなくなり埋甕としたものか、あるいは埋甕として使う際あえて胴部下半を打ち欠いたものかは判断がつかない。

第100図2が埋設された土器である。3単位波状口縁の深鉢であるが、口縁部の波頂下に単位文様が施されていない点で特異な文様構成である。口縁の波底部に単位文様が施される。単位文様



第99図 第76・124・127・130~132号埋甕実測図 (1/20)

は垂下沈線の間連続するハの字状の沈線文を施しており、単位文様間にはジグザク状の沈線文が雑に施される。地文は縦位のL無節縄文である。第IV群3類e種に分類され、堀之内第3期に属すると考えられる。

第124号埋甕観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
124-2	深鉢 B IV	口縁 1/2 胸部 1/2 底部 1	口径 27.2 底径 1 器高 (21.5)	口縁 3 胸部 3	棒	L	単位を構成するの疑問。垂下沈線に稜杉状沈線を施したものが単位文様か。2本のジグザク状沈線を連続的に施文。	1C31	第IV群 3類e種

第127号埋甕 (第99図 図版14・26)

1C22グリッドから検出され、第124号埋甕及び第131号埋甕に挟まれた位置にある。口縁部をのぞき完存している。正位の状態で埋設されており、ほぼ原形のまま遺存していた。穿孔などの二次的な加工の痕跡は認められない。欠損部位は摩耗し、丸味をおびている。

第100図3が埋設された土器である。口縁から頸部にかけて無文帯となる深鉢である。頸部には3本の横走沈線が施され、無文帯と胸部文様とを区画している。胸部は4本の垂下沈線を単位文様とし、単位文様間にクランク状の沈線文が施される。胸部文様は6単位であることから口縁は3単位の波状口縁となる可能性が高い。地文はLR単節縄文である。第IV群3類c種に分類され、堀之内第2期に属すると考えられる。

第127号埋甕観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
127-3	深鉢 A I	口縁 1 胸部 完 底部 完	口径 1 底径 10.5 器高 (37.1)	口縁 1 胸部 6	竹	LR	口縁から頸部にかけて無文帯と思われる。4本の垂下沈線を単位文様とし、単位文様間に垂下するクランク状文を施す。	1C22	第IV群 3類c種

第130号埋甕 (第99図 図版15・26・27)

0C90グリッドから検出され、第140号住居跡及び第131号埋甕に隣接している。2個体の土器が同時に検出されたが、正位の状態で埋設されている土器を第130号埋甕として扱い、横転した状態で検出された土器は埋甕としてではなく、第130号埋甕に共伴する可能性のあるものとして取り扱う。第130号埋甕は口縁部が若干割れていた以外には、ほぼ完形の状態で埋設されていた。二次的な加工の痕跡は認められない。胸部内外面には煮炊きで使用された結果生じたと思われる黒変が認められることから、煮沸用として使用されていたものが、破損を待たずして埋甕に転用されたと考えられる。一方第130号埋甕の西隣に横転した状態で土器が検出されている。極めて接近していることから共伴する可能性は高いが、横転した状態で埋設されることがあるのかは疑問の残るところであり、この土器を埋甕として扱うことは避けておきたい。なお、

検出時にこの土器の上半分は遺存していなかった。

第100図4が第130号埋甕である。口径が最大径となり、頸部のくびれがゆるい深鉢である。口縁は4単位の波状口縁で頸部には横走する2本の沈線がめぐり、胴部に施される垂下沈線は棒状工具とへら状工具を交互に使用している。地文はLR単節縄文で、ほぼ全面にわたる。第IV群1類b種に分類される。

第101図5は近接して出土した土器である。3単位の波状口縁で、頸部のくびれはゆるい。口縁波頂下に凹文を施し、その下に重層する弧線文が描かれる。この弧線文が単位文様となり、この間に弧線を伴う蕨手文が施される。地文の押捺は弱く、縦位のRL単節縄文である。第IV群3類a種に分類される。この2個体は大きな時期差をもつものではなく、ほぼ同時期と判断される。ともに堀之内第2期に属すると考えられる。

第130号埋甕観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
130-4	深鉢 A III	口縁 1/2 胴部 完 底部 完	口径 31.0 底径 10.5 器高 40.2	口縁 4 胴部 4	へら 棒	LR	くびれ部に沈線がめぐり、胴部に4本の垂下沈線を施す。	0C90	第IV群 1類b種
130-5	深鉢 A II	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(25.7) 底径 — 器高(33.4)	口縁 3 胴部 6	竹 へら	RL	口縁波頂下に重層する弧線を施し、単位文様とする。単位文様の間に左右に弧線をともなう蕨手文を施す。	0C90	第IV群 2類a種

第131号埋甕 (第99図 図版15・27)

1C21グリッドから検出され、南東約3m離れて第127号埋甕が発見されている。口縁部を上にし、北に傾いた状態で埋設されており、検出時の状態は口縁部が割れて一部が散乱していた。底部を欠損する以外には土器の遺存は比較的よい。

第101図6が埋設された土器である。底部から直線的に開く深鉢である。口縁部に幅の狭い無文帯をもち、2本の横走する沈線によって胴部の文様帯とを区画している。4単位波状口縁の波頂下に刺突を加え、そこから短い沈線を垂下させている。胴部には渦巻状の沈線文を施して単位文様とし、単位文様の間に2段の単純なクランク状の沈線文を施している。地文はL無節縄文である。器形的には遺存する胴部下端からほどなく底部に至ると考えられる。土器の遺存が比較的よいにもかかわらず、底部を欠いていることから意図的に底部を打ち欠いて埋設しているとも考えられる。第IV群3類c種に分類され、堀之内第1期に属すると考えられる。

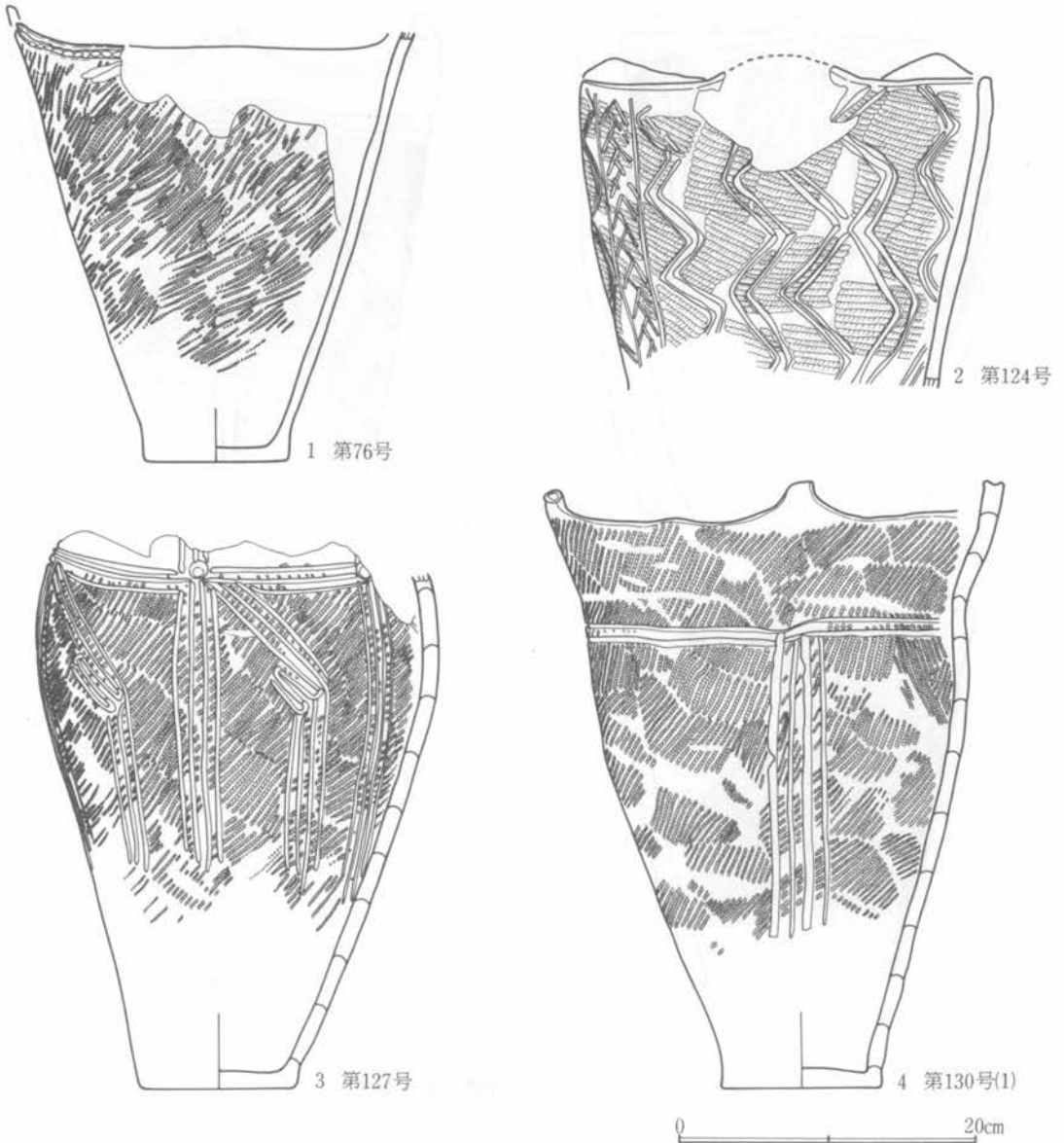
第131号埋甕観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
131-6	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 完 底部 1/2	口径 27.0 底径 — 器高(34.0)	口縁 4 胴部 4	竹	L	口縁部に無文帯を持ち無文帯下帯に沈線を施す。口縁波頂下に渦巻状の沈線文を施し単位文様とする。単位文様間に斜行クランク状文を施す。	1C12	第IV群 3類c種

第132号埋壺 (第99図 図版27)

0 B79グリッドから検出された。正位の状態で埋設されているが、土器の遺存は悪く、底部を欠損するほか、口縁部、胴部の遺存もあまりよくない。口縁部は小片に割れて、開いた状態で検出された。

第101図7が埋設された土器である。平縁で底部から直線的に開く器形であろう。LR単節縄文を地文とし、他に文様は施されていない。底部に近い部分はへら状工具で地文を磨消している。第IV群8類a種に分類される。地文のみのため時期は判断しにくいが掘之内第2期に属するのではないかとと思われる。



第100図 第76・124・127・130号埋壺土器実測図 (1/5)

第132号埋甕観察表

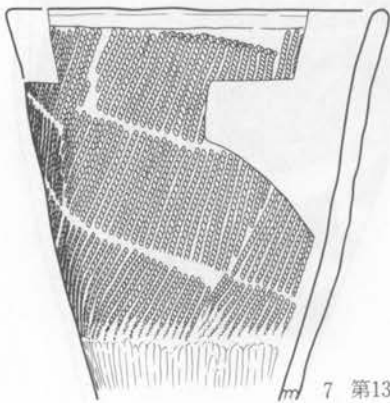
遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
132-7	深鉢 B IV	口縁 $\frac{1}{4}$ 胴部 $\frac{2}{5}$ 底部 —	口径 25.2 底径 — 器高(25.0)	口縁 平 胴部 —	—	L R	地文のみ。	0B79	第IV群 8類a種



5 第130号(2)



6 第131号



7 第132号



第101図 第130~132号埋甕土器実測図 (1/5)

3) 土壇

第5号土壇 (第37図 図版7・28)

台地中央の南側斜面に位置し、第20B号住居跡の床面下に検出された。グリッドは2B31である。

遺構 長軸1.74m、短軸1.56mの楕円形を呈する土壇である。面積は、2.14㎡である。第20A号住居跡の床面からの深さは45cmを計る。床面は平坦である。

遺物出土状況 土器量は多く、遺存のよいものが覆土中から3個体出土している。第20A号及び第20B号住居跡との切り合い関係からは本土壇が最も古いものであるが、出土した土器は堀之内I式でも比較的新しい段階のもので占められている。出土した土器から本土壇は堀之内第3期に属すると考えられる。

遺物 第105図1は頸部のくびれが強い深鉢である。全面LR単節縄文が施される。胎土はやや粗い。口縁が薄く、口端はやや尖る。第IV群8類a種。同図2は器厚の薄い深鉢である。3単位小波状口縁を呈し、波頂下に凹文をもつ。3本の垂下沈線を単位文様とし、単位文様間に垂下沈線と斜行沈線が施される。地文はLR単節縄文。第IV群3類b種。同図3は3単位小波状口縁を呈する小型の深鉢である。波頂部両端に刺突を伴い、3本の沈線が垂下する。地文はLR単節縄文。第IV群1類b種。

第16号土壇 (第102図 図版16)

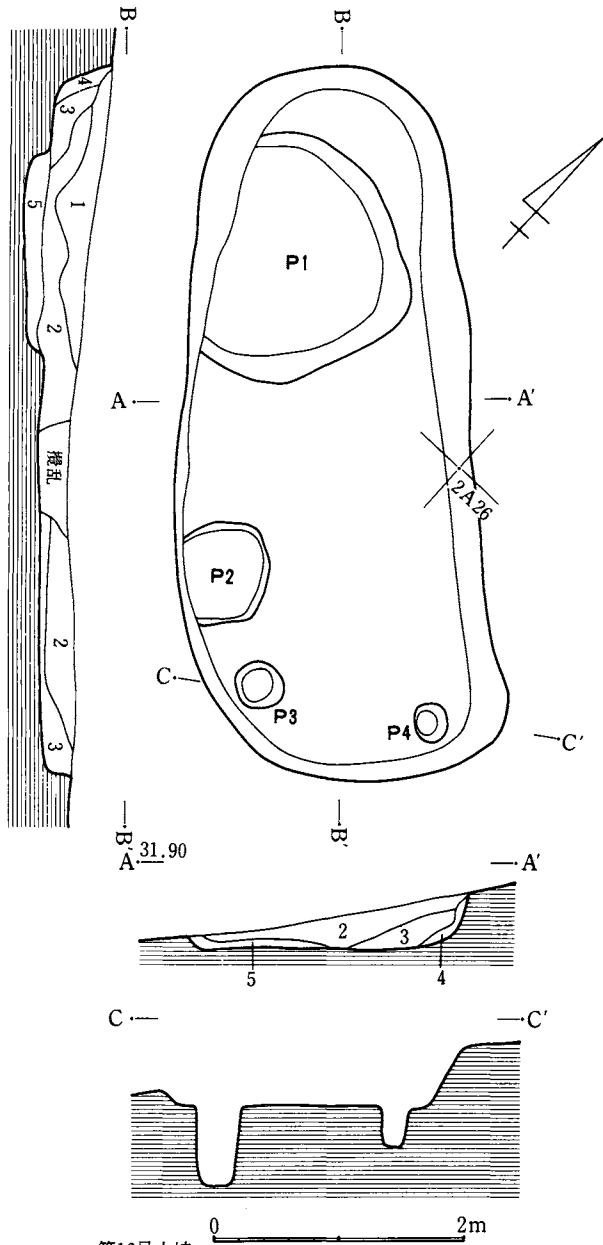
台地南西斜面、調査区西側に位置し、グリッドは2A26他である。

遺構 長軸5.55m、短軸2.45mあり面積11.72㎡で長楕円形の平面形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より東壁が約45cm、南壁が約10cmをそれぞれ計る。床面はほぼ平坦である。さらに、P₁は径2.00×1.60mの不整円形の平面形を呈し、深さ約15cmを計る。P₂は径0.75×0.75mの不整円形の平面形を呈し、深さ約20cmを計る。P₁・P₂ともに皿状を呈する。P₃・P₄は南東壁近くにあり、柱穴と推定される。

遺物出土状況 土層は一部に攪乱が認められるが、レンズ状の自然堆積を示している。遺物は覆土中より土器片がやや多く出土している。拓本として掲げた土器片が文様の判断できるもののほとんどである。小破片ばかりで時期を判断する決め手を欠くが、全体に古い土器片が目立つことから堀之内第1期に属すると思われる。

性格 一応土壇としたが性格は不明である。

遺物 第107図1～3は蕨手文が施されている。1・3は単純な蕨手文だが、2は蕨手文の左右に弧線が施され、さらに斜行沈線を伴っている。1・3は第IV群1類b種。2は第IV群3類b種。同図4は沈線の内部が磨消されており、第IV群1類a種に分類される。同図5・6は同



第16号土坑

- 1 黒褐色土 (ローム粒少量混入、しまりはない)
- 2 明黒褐色土 (ローム粒多量混入、焼土粒若干混入)
- 3 黒色土 (ローム粒(小粒)散在的に混入、しまり悪い)
- 4 褐色土 (ローム粒+ロームブロック大粒で構成される)
- 5 暗褐色土 (ロームブロック若干混入、ローム粒が集中混入、しまりは良い)

第102図 第16号土坑実測図 (1/60)

一個体である。楕円文が縦に連続する。単位は構成しないであろう。第IV群11類。同図7は刻目を施した垂下隆帯を伴う。第IV群6類a種。同図8はL無節縄文、同図9・10はLR単節縄文である。8～10は第IV群8類a種に分類される。同図11・12は口縁に沈線がめぐり、地文はともにLR単節縄文である。第IV群8類b種。同図13は口縁部に長楕円の沈線文が施されることから鉢の口縁部破片と思われる。沈線文の下にはRL単節縄文が施されている。第IV群8類b種。

第35号土坑（第103図 図版16・28）

台地南側斜面、調査区南側の第36号住居跡と近接し、グリッドは2 B51である。

遺構 長軸2.75m、短軸1.10mあり、面積2.48m²で長楕円形の平面形を呈する土坑である。深さは1.20m程ある。床面は凹面を呈し、壁は緩傾斜をもって立ち上がる。土層の堆積状態からは一部攪乱が認められるが、自然堆積である。

遺物出土状況 遺物は覆土中より大形破片が出土している。出土した土器片は少量で第106図1に示した土器を除き、すべて小破片である。出土した土器から本土坑は堀之内第1期に属すると思われる。石器は磨石1点が出土し、覆土中からのものであった。

遺物 第106図1は底部から直線的に開く深鉢である。蕨手文を伴う深鉢の器形としては極めてめずらしいものである。口縁は4単位波状口縁と思われ、波状部分に3個の凹文が施される。口縁には深い沈線がめぐり、胴部に施された蕨手文は単純で8単位と推定される。地文はRL単節縄文。

第41号土坑（第298図 図版17）

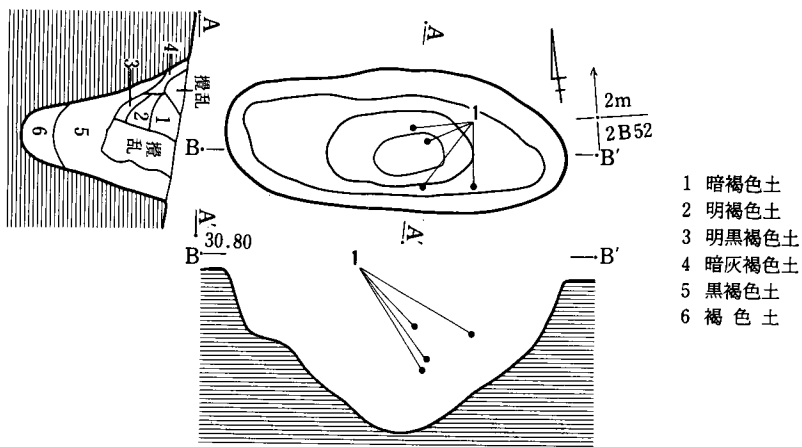
台地中央南側平坦部、調査区南側に位置し、グリッドは2 B35である。第40号住居跡（工房跡）とは重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 長軸1.12m、短軸0.95mの楕円形の平面形を呈する土坑である。面積は0.90m²である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり確認面から深さ0.90mを計る。床面はほぼ平坦である。

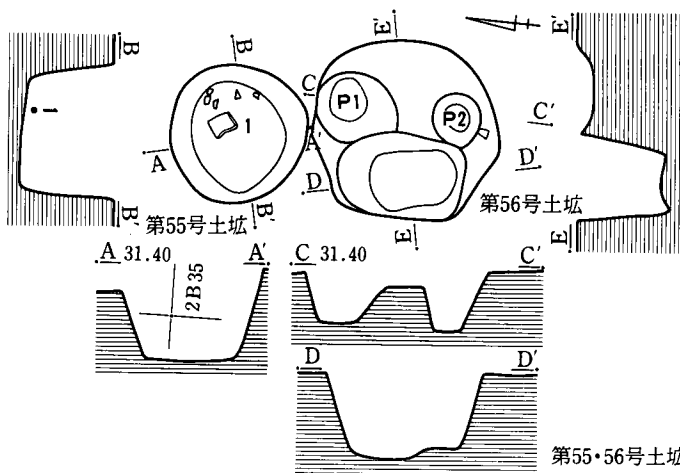
遺物出土状況 出土した土器片は少量で、すべて覆土中から出土している。文様が判断できるのは第108図に示したわずかな量である。土器片には半截竹管状工具を多用した文様が多く、これらから本土坑は堀之内第3期に属すると考えられる。

遺物 第106図2は口縁部に3単位の橋状把手を伴う特異な形態である。胴部は欠損しているため形態は不明。口縁部は直立し無文帯となる。無文帯はよく研磨され平滑。橋状把手は口縁よりも若干高く、粘土を板状にして口縁から無文帯下端までわたしている。わずかに残る胴部文様には半截竹管状工具による沈線文が施されているが、文様構成が不明のため分類不可。

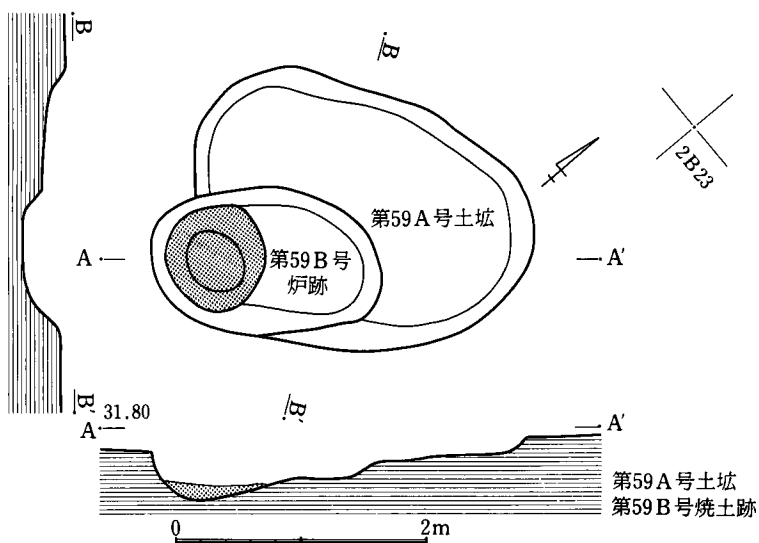
第108図1は波状口縁の破片である。蛇行沈線を垂下させ、左右に沈線を施している。第IV群



第35号土坛

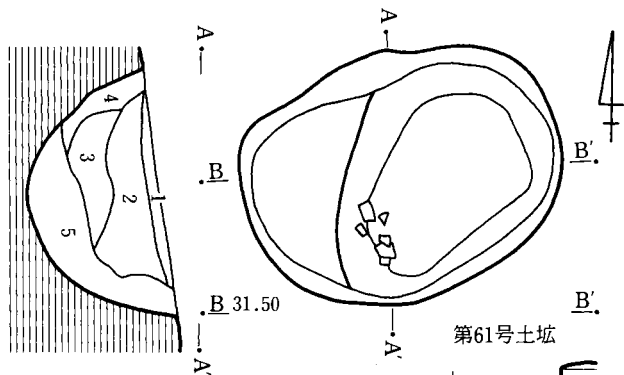


第55·56号土坛



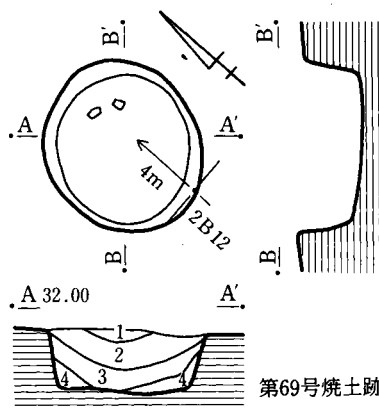
第59A号土坛
第59B号烧土迹

第103图 第35·55·56·59A·59B(烧土迹)号土坛实测图 (1/40)



第61号土坑

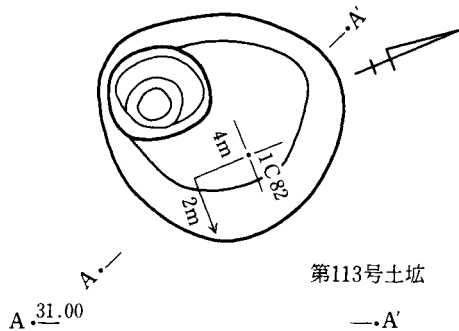
- 1 明黒褐色土 (若干のローム粒を散在的に含み、固くしまっている)
- 2 明褐色土 (大粒のローム粒とロームブロックを多量混入、しまらない)
- 3 暗褐色土 (若干の砂質粘土を含み、弱粘性を示す、遺物多量出土)
- 4 明褐色土 (2層に比しロームブロック混入量が多量)
- 5 黄褐色土 (ハードロームの間に暗褐色土が混入したもの)



第69号焼土跡

第69号炉跡

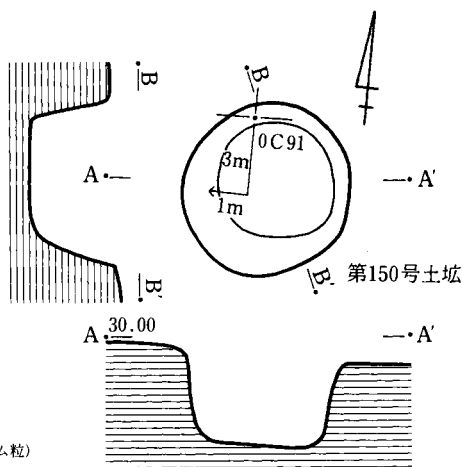
- 1 暗褐色土 (固くしまっている)
- 2 赤褐色土 (焼土+粘土)
- 3 明黒褐色土 (若干の炭化粒を含む)
- 4 明褐色土 (ロームが焼土化したものを若干含む)



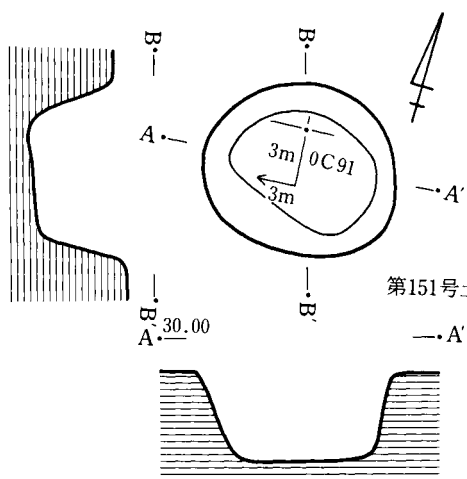
第113号土坑

第113号土坑

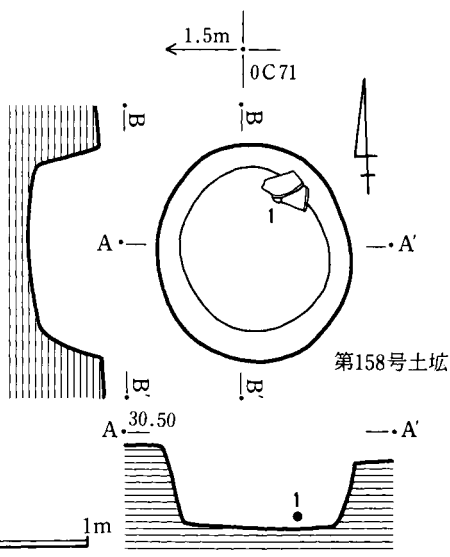
- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 (褐色土)
- 3 暗褐色土 (褐色土、ローム粒)
- 4 褐色土 (黄褐色土)



第150号土坑



第151号土坑



第158号土坑

第104図 第61・69(焼土)・113・150・151・158号土坑実測図 (1/40)

1類b種か。同図2は垂下沈線の左右に連弧状の沈線を施して単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線及び垂下沈線を施している。施文工具は半載竹管状工具である。同図3は垂下沈線を単位文様とし、さらにジグザグ状の沈線文を施していると思われる。2・3は第IV群3類e種。同図4は半載竹管状工具による斜行沈線が施されている。分類不可。同図5は器厚が薄く、同心円文が施されており、地文は摩滅してはっきりしないがLR単節縄文と思われる。第IV群3類g種か。同図6は地文をもたず、太い半載竹管状工具による沈線が施されている。第IV群5種か。同図7は刻目を施した垂下隆帯が貼付けられ、左右に沈線が密に施される。第IV群6類a種。同図8～10にはそれぞれ横走る沈線が施される。分類不可。同図11・12は櫛状工具によって曲線及び蛇行条線が施される。第IV群7類c種。同図13・14はLR単節縄文を地文とする。第IV群8類a種か。

第55号土壇（第103図 図版17・28）

台地南側平坦部、調査区南側の第40号住居跡に近接し、グリッドは2 B35である。

遺構 径1.10×1.08mあり、面積0.93m²で円形の平面形を呈する土壇である。深さ0.75mを計り、壁は緩傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦である。

遺物出土状況 出土した土器片は少なく、ほとんどが小破片であるが、1点だけ比較的遺存のよい小型土器が出土している。条線文の土器片が若干認められ、これらから本土壇は堀之内第3期に属すると思われる。

遺物 第106図3は指による粗い調整痕を内外面に残す手捏様の土器である。文様はなく胎土はやや粗い。第IV群9類。第109図1は棒状工具、2は半載竹管状工具によって垂下沈線が施されている。分類不可。同図3～5は同一個体である。地文はなく櫛状工具によって垂下条線や弧状の条線が施されている。第IV群7類c種。同図6はクランク状の文様であろう。地文はLR単節縄文か。第IV群3類c種。同図7は半載竹管状工具、同図9は棒状工具による沈線文が施されている。分類不可。同図9は口縁に沈線がめぐるとともに地文のLR単節縄文のみである。第IV群8類b種か。同図10は地文のLR単節縄文のみである。第IV群8類a種。

第56号土壇（第103図 図版17）

台地南側平坦部、調査区南側の第40号住居跡に近接し、第55号土壇はほとんど接する様に位置し、グリッドは2 B35である。

遺構 長軸1.00m、短軸0.65mあり面積は1.67m²で隅丸長方形の平面形を呈する土壇である。深さは約70cmを計り、壁は緩傾斜をもって立ち上がる。床面はやや凹凸が激しい。P₁とP₂は本跡と重複関係にあるが時期は不明である。

遺物出土状況 出土した土器片は少なく、すべて覆土中から出土している。文様の判断可能

な個体はわずかである。そのため土坑の時期は確定しにくい、およそ堀之内第3期にふくめられよう。

遺物 第106図4・5は深鉢の底部である。4には上端に若干の半截竹管状工具による沈線文が認められる。同図6は無文の鉢である。遺存は悪く一部分が短冊状に残るだけで、図はかなり複元的に実測している。内外面ともに丁寧な調整が行われ、平滑である。第IV群9類。

第110図1は蕨手文であろう。貫通孔を伴う。第IV群1類a種。同図2・3・6は垂下する沈線が施されている。分類不可。同図4は垂下沈線の左右に連弧状の沈線を施して、単位文様としている。単位文様間にはジグザグ状の沈線を施していると思われる。第IV群3類e種。同図5は刻目を伴う垂下隆帯が貼付けられている。第IV群6類a種。同図7はLR単節縄文を地文とし、沈線で重三角形文が描かれていると思われる。第IV群12類a種か。同図8は深鉢の胴部下半と思われ、横走する隆帯が貼付けられている。隆帯には刻目を伴う。第IV群6類a種か。同図9は口縁に沈線が施される以外はLR単節縄文のみである。第IV群8類b種。10は小型の注口土器破片である。注口部を欠き把手のみが遺存している。文様は施されていない。胎土は良好。

第59A号土坑（第103図）

台地中央南側平坦部、調査区南側の第43号住居跡に近接し、グリッドは2B22である。第59B号焼土跡とは重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 長軸2.80m、短軸2.05mで面積4.65㎡あり、長楕円形の平面形を呈する土坑である。深さ約10cmあり、壁は緩傾斜をもって立ち上がる。床面はやや傾斜をもっている。

遺物出土状況 覆土中から堀之内I式と思われる土器片が少量出土しているが、みな小片のため、拓影図として挙げられるものはない。

第61号土坑（第104図）

台地中央南側緩斜面、調査区南側の第34号住居跡に近接し、グリッドは2B42である。

遺構 長軸1.70m、短軸1.30mあり面積1.79㎡で長楕円形の平面形を呈する土坑である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より東側の坑底が0.65m、西側の坑底が0.25mをそれぞれ計る。床面は2段になっており、下段がやや擂鉢状を、中段が傾斜している。遺物は覆土中から小破片が出土しているが採拓できなかった。土器片は堀之内I式である。

第113号土坑（第104図）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1C72にある。第95号掘立柱建物跡とは重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 径1.28×1.18mあり、面積1.16㎡のほぼ円形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より深さ70cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴で1ヶ所検出されているのは、第95号掘立柱建物跡の柱穴である。

遺物出土状況 遺物は覆土中から出土している。土器量は少なく第112図に掲げたものがそのほとんどである。

遺物 第112図1・2は沈線文の内部を磨消している。1の文様は蕨手文であろう。第IV群1類a種。同図3は半截竹管状工具を使用した垂下条線であろう。地文にLR単節縄文が施されている。第IV群7類a種。同図4は垂下沈線文が単位文様となり、その間に渦巻状の沈線文が施されている。第IV群3類g種。同図5は棒状工具による沈線文である。分類不可。同図6・8～11は地文にLR単節縄文が施されている。8・10・11は口縁部に沈線を伴い第IV群8類b種に、6・9は第IV群8類a種に分類される。同図7は文様帯下端を区画する隆帯が貼付けられる。第IV群6類a種。同図12は注口土器の注口部である。胴部との貼付け部位で破損しており、注口は極めて短い。胎土は良好。

第150号土壇（第104図 図版12）

台地北東側緩斜面、調査区北側に位置し、グリッドは0 C81である。第140号住居跡に近接する。

遺構 直径90cm、面積0.62㎡で円形の平面形を呈する土壇である。壁はやや緩傾斜をもって立ち上がり確認面から約50cmを計る。床面はほぼ平坦である。覆土中から堀之内I式の土器片が少量出土していたが、小片のため採拓できなかった。

第151号土壇（第104図 図版12）

台地北東側緩斜面、調査区北側に位置しグリッドは0 C81である。第140号住居跡に近接する。

遺構 径1.05×0.90mあり面積0.73㎡で楕円の平面形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、深さは確認面から約50cmを計る。床面はほぼ平坦である。覆土中から堀之内I式の土器片が少量出土しているが、採拓できなかった。

第158号土壇（第104図 図版28）

台地北東側緩斜面、調査区北側に位置し、グリッドは0 C71である。第140号住居跡に近接する。

遺構 径1.15×1.00mあり面積0.88㎡で円形の平面形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり確認面から約40cmを計る。床面はほぼ平坦である。

遺物出土状況 比較的遺存のよい土器が覆土中から出土しているが、全体の出土量は多くない。蕨手文などの単純な文様をもつもので占められており、堀之内Ⅰ式の古い段階に位置づけられよう。本土壇は堀之内第Ⅰ期に属すると考えられる。

遺物 第106図9の鉢は口縁部に刺突文をめぐらせ、刺突文以下にLR単節縄文を施している。口縁部に1ヶ所貫通孔を伴う。第Ⅳ群8類b種。同図10は遺存が悪く波状口縁の単位ははっきりしないが4単位と推定される。L無節縄文を地文とし、他に文様は施文されない。胴部下半は縦方向の調整痕を明瞭に残している。焼成・胎土ともに良好。第Ⅳ群8類a種。

第113図1・5・6は磨消し縄文手法を伴い第Ⅳ群1類a種に分類される。1は単純な蕨手文を施し、内部の縄文を磨消している。5は垂下沈線の間列点文を伴い、内部の縄文を磨消している。6は波状口縁の深鉢破片である。胴部文様はU字状の沈線文と思われ、内部の縄文を磨消している。同図2・3は蕨手文が施されているが内部の縄文は磨消されていない。第Ⅳ群1類b種。同図4・8・9は沈線による単純な文様が描かれていると思われる。第Ⅳ群1類a種に分類されようか。同図7は第106図9と類似した文様をもつが、刺突文の下に沈線が施されている。第Ⅳ群8類b種。10はL無節縄文を地文とする。第Ⅳ群8類a種。

4) 焼土跡

第59B号焼土跡 (第103図 図版28)

台地中央南側平坦部、調査区南側の第43号住居跡と近接し、グリッドは2B22である。第59A号土壇とは重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 長軸1.70m、短軸1.15mあり面積1.65m²の長楕円形の平面形を呈し、南西寄りに焼土が見られる焼土跡である。深さは浅い所で約10cm、焼土の所で約30cmを計り、壁は緩傾斜をもって立ち上がる。南西側の焼土部は一段と深く掘り込まれている。焼土がブロック状に厚く堆積している。

遺物出土状況 土器量は少なく、小破片が大半を占めるが、覆土から遺存のよい深鉢が出土している。出土した土器片の多くが半截竹管状工具による沈線文を主体としており、これらから本土壇は堀之内第Ⅲ期に属すると考えられる。

遺物 第106図7はわずかにくびれる頸部をもつ深鉢である。対をなす小突起が3単位を構成する波状口縁で突起にはそれぞれ刺突が施されている。胴部には単位を構成しない条線文が施される。地文はRL単節縄文である。胎土は粗く砂粒を多く含む。第Ⅳ群7類c種。同図8は深鉢の胴部下半である。器面の摩滅が著しく、縄文など文様はまったく認められない。

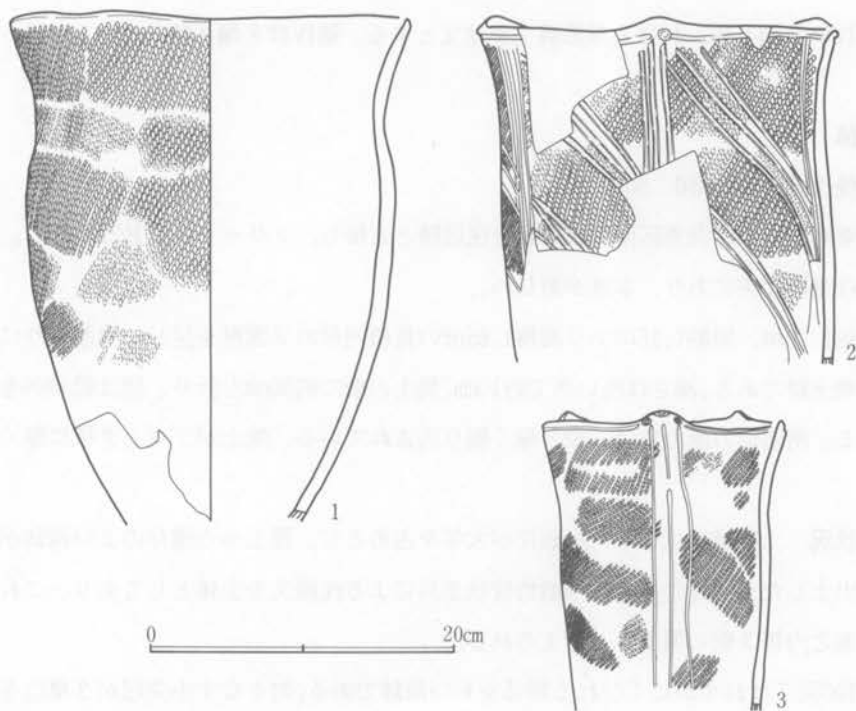
第111図1～3は半截竹管状工具による沈線文が施されている。地文はみなLR単節縄文。分類不可。同図4は地文をもたず楯状工具による条線が施文される。第Ⅳ群7類b種。同図5は無文の口縁部破片である。器面は粗く調整されている。第Ⅳ群9類。同図6は大型の深鉢破片

である。地文はLR単節縄文。口縁部に沈線がめぐる。第IV群8類b種。同図7はLR単節縄文のみである。第IV群8類a種。同図8は波頂部に凹文を伴い、地文にLR単節縄文を施している。第IV群8類b種。

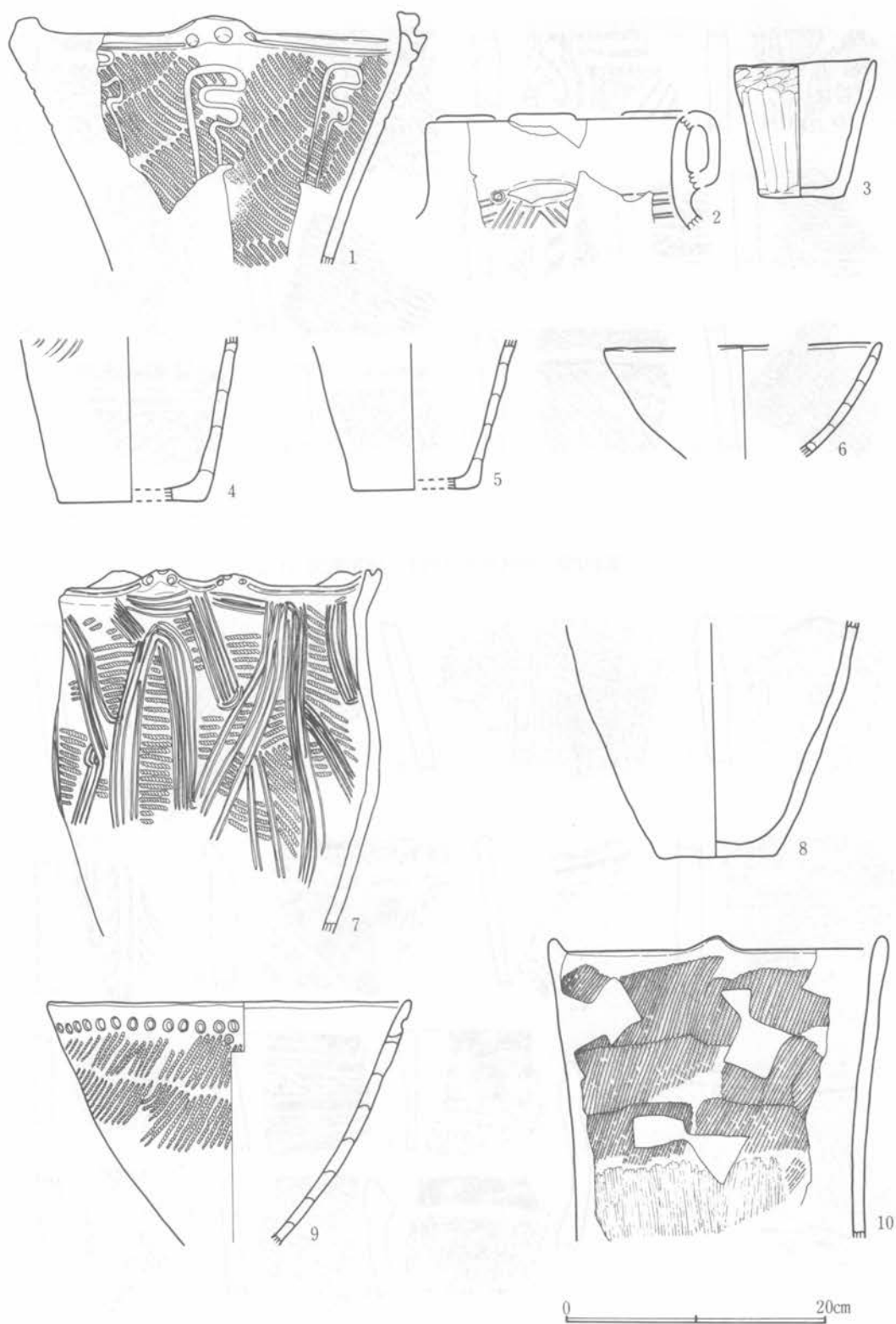
第69号焼土跡（第104図）

台地中央平坦部、調査区中央に位置しグリッドは2 B12他である。

遺構 径0.83×0.90mあり面積0.60m²で円形の平面形を呈する焼土跡である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり確認面からの深さは30cmを計る。床面はほぼ平坦で皿状を呈する。土層の2の中に粘土が含まれていた。

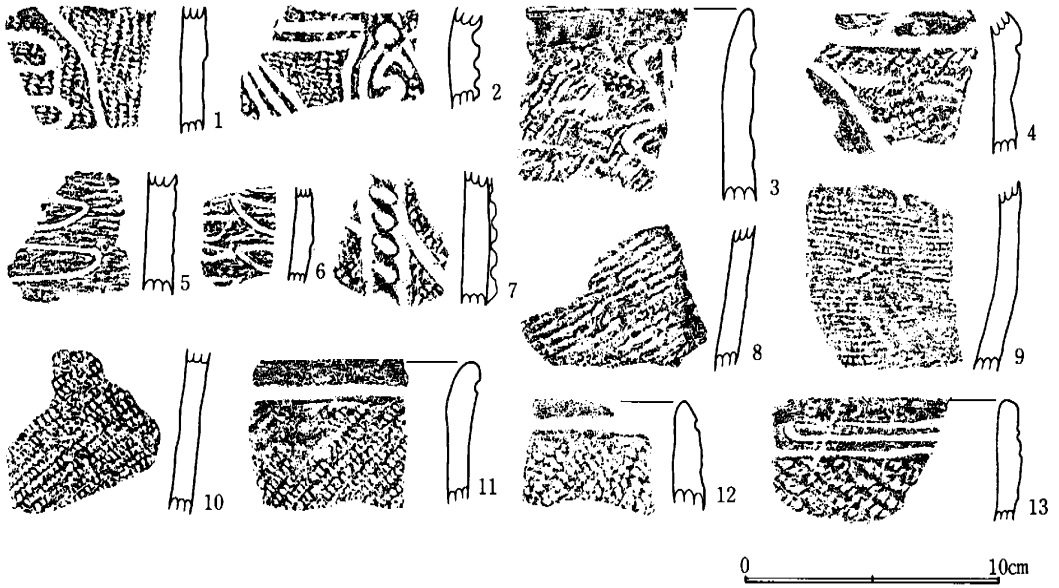


第105図 第5号土壇出土土器実測図（1/5）

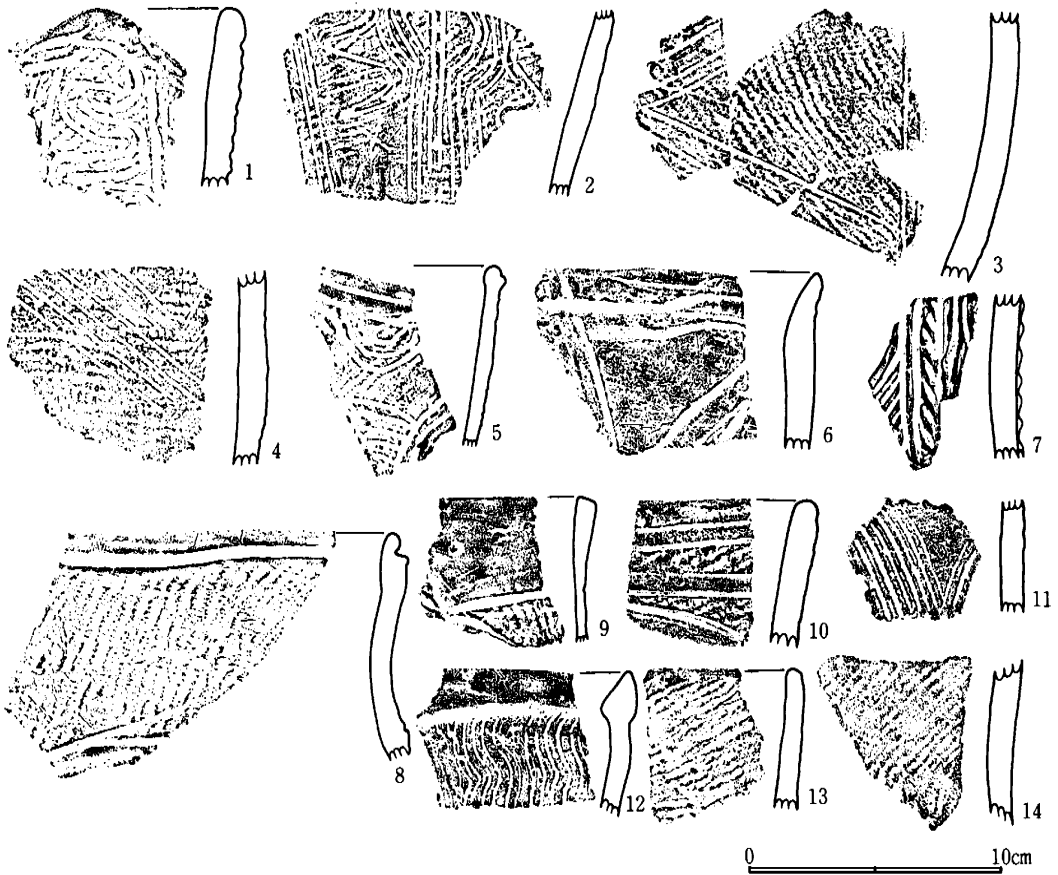


第106图 第35·41·55·56·59 B·158号土坛出土土器实测图 (1/5)

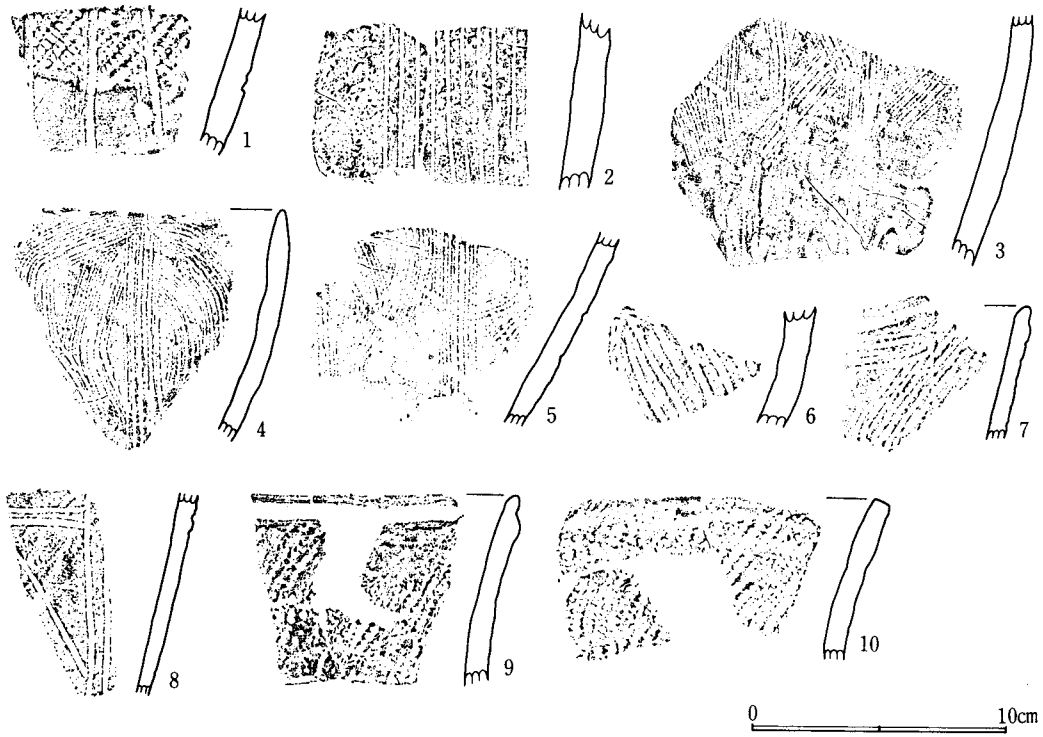
第35号土坛(1)、第41号土坛(2)、第55号土坛(3)、第56号土坛(4~6)、第59 B土坛(7·8)、第158号土坛(9·10)



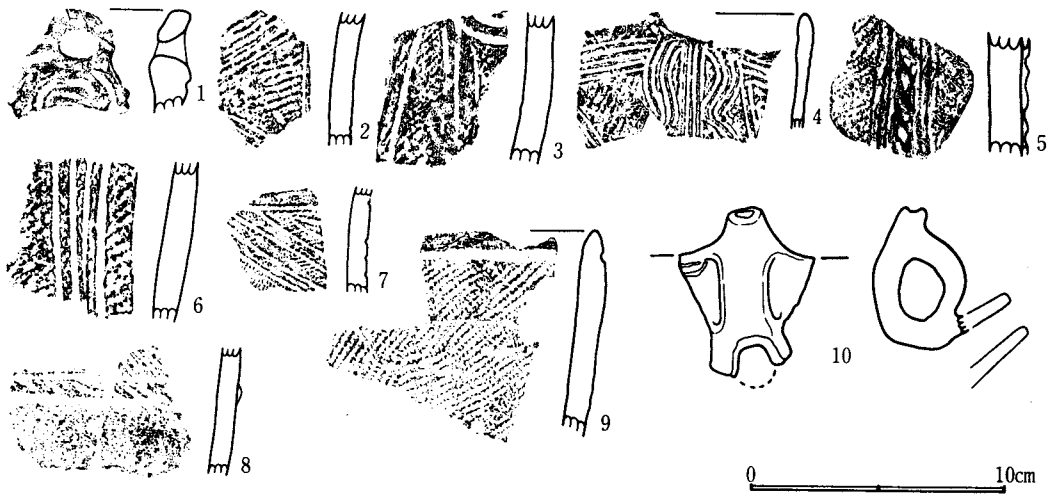
第107图 第16号土坛出土土器拓影图 (1/3)



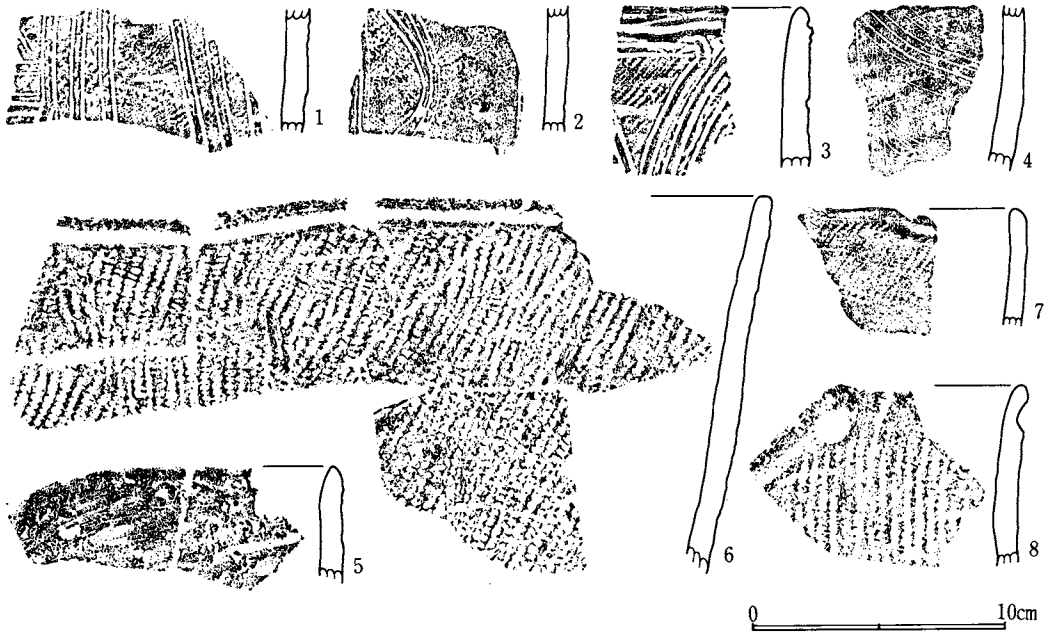
第108图 第41号土坛出土土器拓影图 (1/3)



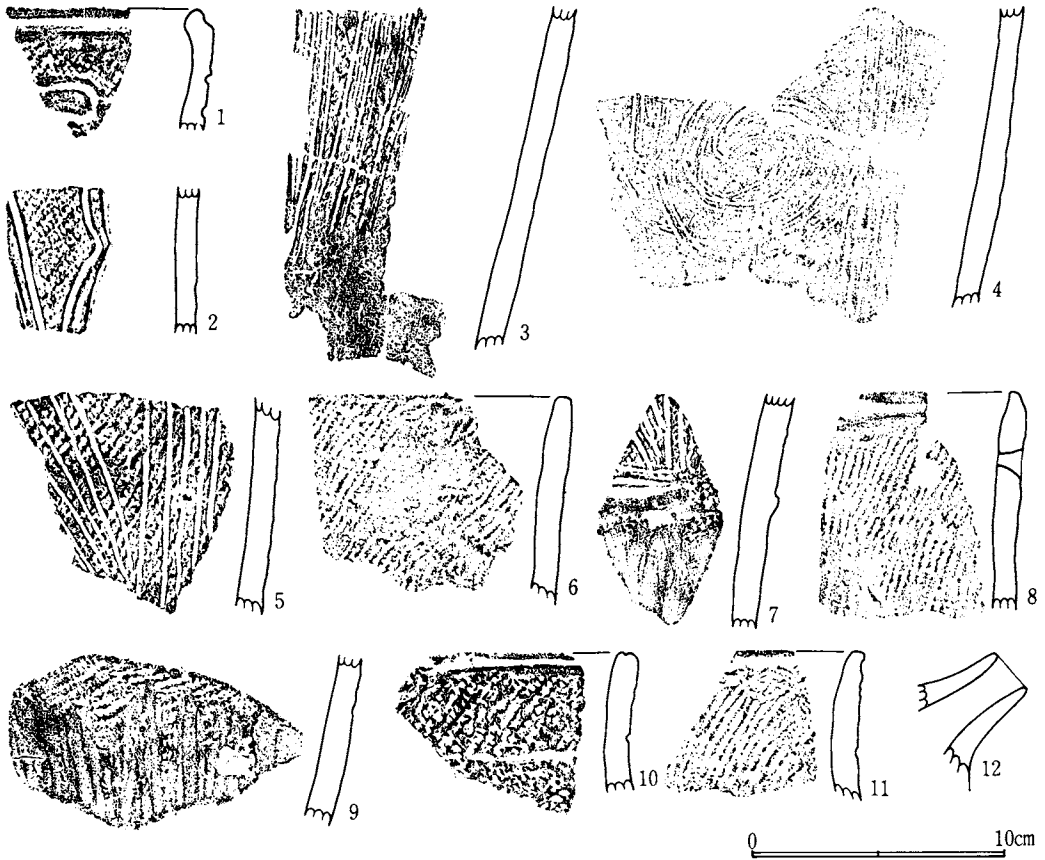
第109图 第55号土坛出土土器拓影图 (1/3)



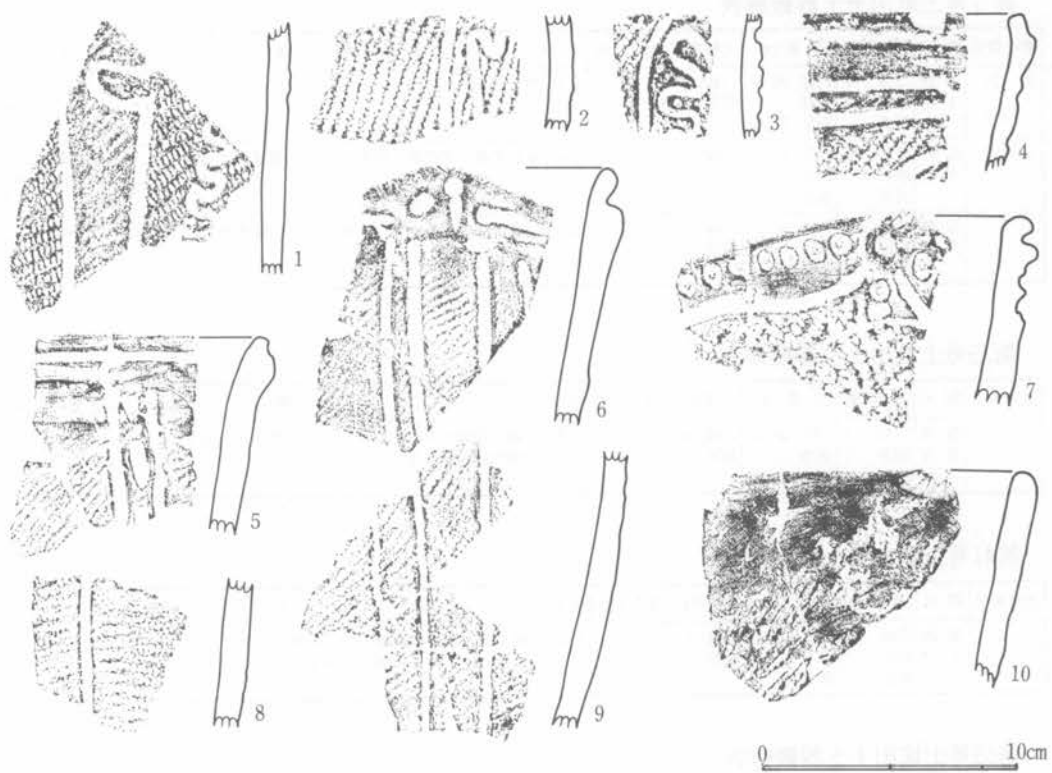
第110图 第56号土坛出土土器拓影图 (1/3)



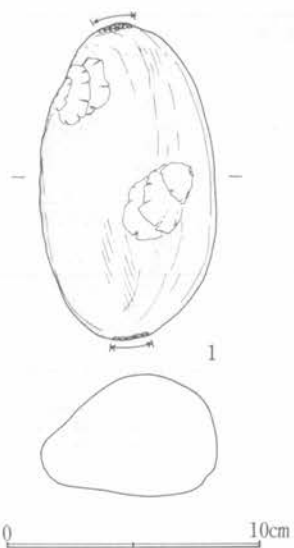
第111图 第59B号土坑出土土器拓影图 (1/3)



第112图 第113号土坑出土土器拓影图 (1/3)



第113图 第158号土坛出土石器拓影图 (1/3)



第114图 第35号土坛出土石器实测图 (1/3)

第5号土坑出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
5-1	深鉢 A III	口縁完 胴部完 底部一	口径 26.8 底径 — 器高(32.6)	口縁平 胴部 —	—	LR	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種
5-2	深鉢 A III	口縁 $\frac{3}{4}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部一	口径 24.1 底径 — 器高(22.0)	口縁 3 胴部 6	半竹	LR	垂下沈線の間に斜行沈線を施す。器厚うすい。	覆土	第IV群 3類b種
5-3	深鉢 A III	口縁完 胴部完 底部一	口径 16.2 底径 — 器高(19.1)	口縁 3 胴部 3	棒	LR	口縁に沈線がめぐる。3本の垂下沈線を施文。	覆土	第IV群 1類b種

第35号土坑出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
35-1	深鉢 B IV	口縁 $\frac{1}{4}$ 胴部 $\frac{1}{4}$ 底部一	口径(30.5) 底径 — 器高(19.5)	口縁 4 胴部 8	竹	RL	口縁に沈線がめぐる。やや大柄な蕨手文を施す。文様内は磨消さない。	覆土	第IV群 1類b種

第41号土坑出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
41-2	深鉢 A V	口縁 $\frac{1}{2}$ 胴部— 底部一	口径(19.0) 底径 — 器高(9.0)	口縁 3 胴部 —	半竹	LR	口縁が直立する特殊器形。同形態の土器は出土していない。口縁に3個の把手がつく。	覆土	第IV群

第55号土坑出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
55-3	浅鉢 C	口縁 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{3}{4}$	口径10.75 底径 6.6 器高 10.6	口縁平 胴部 —	—	—	無文。粗い器面調整。コップ状の小型品である。	覆土	第IV群 9類

第56号土坑出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
56-4	深鉢	口縁— 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口径 — 底径(11.4) 器高(12.5)	口縁— 胴部 ?	半竹	—		覆土	第IV群
56-5	深鉢	口縁— 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口径 — 底径(9.9) 器高(11.1)	口縁— 胴部 —	—	—		覆土	第IV群
56-6	鉢 B	口縁 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部一	口径(21.4) 底径 — 器高(8.6)	口縁(平) 胴部 —	—	—	無文。器面平滑。	覆土	第IV群 9類

第59B号土坑出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
59B-7	深鉢 A II	口縁 $\frac{3}{4}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部一	口径 24.3 底径 — 器高(28.0)	口縁 3 胴部 —	半竹	RL	口縁に沈線がめぐる。単位を構成しない条線状の沈線文を施す。	覆土	第IV群 7類a種
59B-8	深鉢	口縁— 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部完	口径 — 底径 9.3 器高(17.8)	口縁 — 胴部 —	—	—		覆土	第IV群

第35号土坑出土石器観察表

遺物番号	器種	法量 cm, g				石材	調整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
1	磨石	12.1	5.9	4.8	469	安山岩	転石を利用、表裏一部磨耗し、上下端敲打痕あり。	35-2

第158号土坑出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
158-9	鉢 B	口縁 ¼ 胴部 ¼ 底部 一	口径(28.1) 底径 一 器高(18.5)	口縁平 胴部 一	棒?	L R	口縁部に横走する連続刺突文を施す。	覆土	第IV群 8類b種
158-10	深鉢 B IV	口縁 ¼ 胴部 ¼ 底部 一	口径(26.0) 底径 一 器高(23.1)	口縁(4) 胴部 一	—	L	地文のみ。	覆土	第IV群 8類a種

4) グリッド出土遺物

i 土器

縄文土器

本遺跡から出土した縄文土器は、早期中葉から後期後葉までの長期にわたるが、土器量のおよそ99%以上の圧倒的な量が堀之内式土器で占められている。堀之内式土器を除けば、他の時期の縄文土器は極めて断片的な出土量であり、生活の痕跡もまたほとんど確認することはできなかった。

分類にあたっては、出土した縄文土器をできるだけ網羅するようつとめ、それらを大きく4群に分け、さらに各群ごとに類別を行った。各群の内容は以下の通りである。

第I群土器 縄文時代早期の土器群

(田戸下層式、田戸上層式、子母口式、条痕文系土器などが本群に含まれる。)

第II群土器 縄文時代前期の土器群

(黒浜式、諸磯式、浮島式、興津式などが本群に含まれる。)

第III群土器 縄文時代中期の土器群

(五領ヶ台式、阿玉台式、中峠式、勝坂式、加曾利E式などが本群に含まれる。)

第IV群土器 縄文時代後期前葉の土器群

(堀之内I・II式を本群とする。)

第V群土器 縄文時代後期中葉から後葉の土器群

(加曾利B式、安行式が本群に含まれる。)

なお、第IV群の堀之内式土器は、器形及び文様構成の判別可能な実測個体が約260点にもおよびことから、これらの実測個体を分類の目安として細分を行い、さらに多量に出土した破片を補足して可能な限り文様の構成要素を抽出するようつとめた。

第1群土器

縄文時代早期の沈線文系及び条痕文系の土器を一括する。

第1類 田戸下層式土器 (第115図1～11 図版50)

破片で10点出土している。個体数では6個体前後と思われる。主として1Bグリッドから出土しているが、集中してはいない。胎土中に微量の繊維を含有するものとそうでないものがある。

1～5は胎土に微量の繊維を含有する。焼成は良好で色調は明赤褐色を呈する。1～3は同一個体かもしれない。口縁部に太い沈線をめぐらせ、半截竹管状工具によって連続刺突文を施している。刺突文の下位にはフネガイ科に属する貝の腹縁が押捺されている。5は縦方向にも刺突文が施される。6は鋭角な尖底部である。3本の横走沈線が施され、沈線以下はよく研磨されている。胎土には繊維を含まず焼成は良好。7・8はやや開きのある尖底部で、繊維を含有する。砂粒が若干含まれる。9・10は同一個体である。沈線によって幾何学的な文様を描き、沈線文の内部に貝殻の腹縁を押捺している。胎土には砂粒を含み、若干の繊維を混入している。11は胎土に若干の繊維を含有する。貝殻の腹縁をやや間隔をおいて弱く押捺している。

第2類 田戸上層式土器 (第115図12・13 図版50)

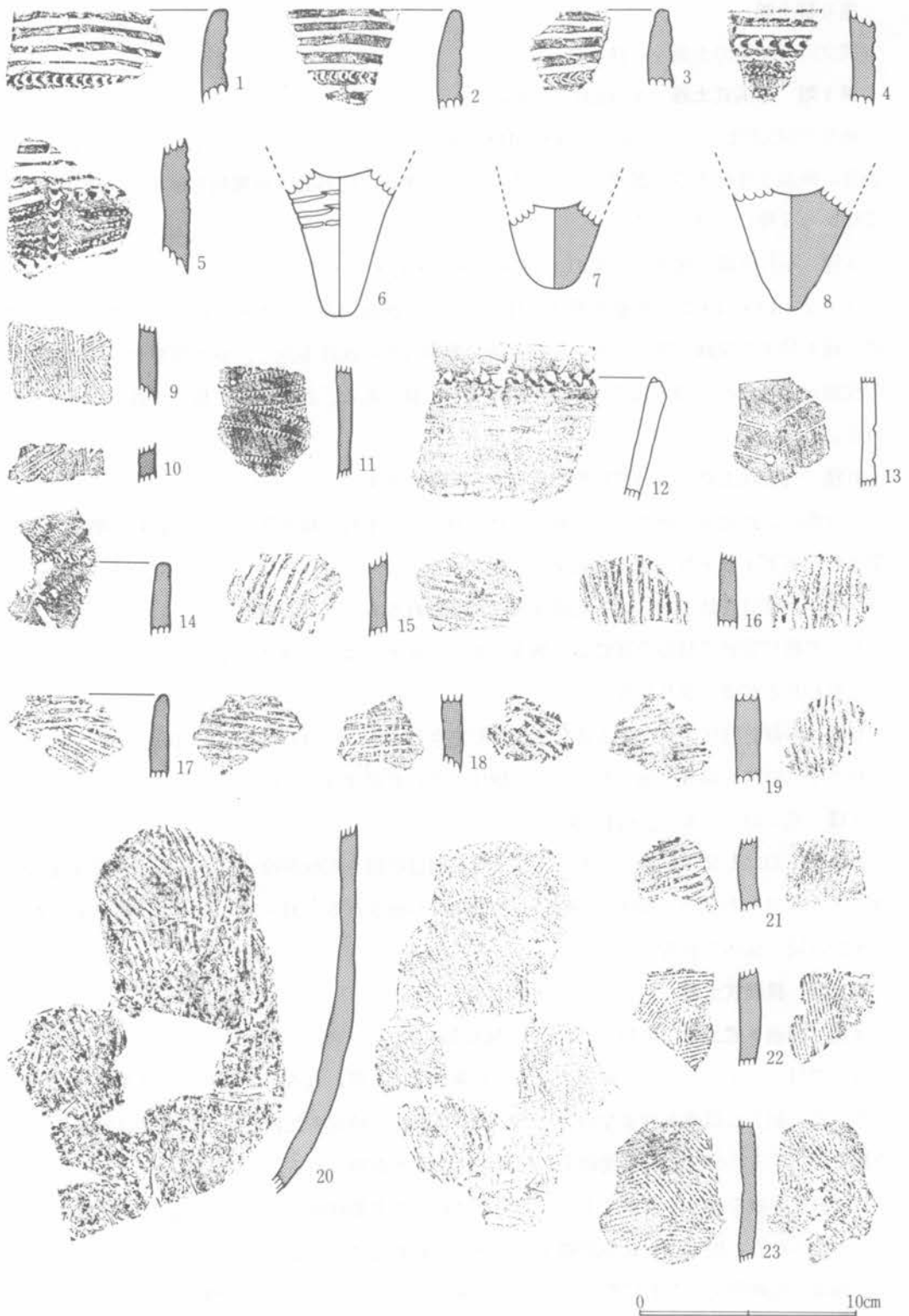
1Bグリッドから出土している。破片でわずか3点である。個体数では2個体と思われる。12は内外面に横位の調整が行われている。胎土には繊維を含まず、砂粒は微量。口唇には先端の鋭い工具で刻目が施されている。13は器厚がやや薄く、内外面の調整は良好。胎土には繊維を含まず、砂粒は混入していない。

第3類 子母口式土器 (第115図14 図版50)

1点のみである。グリッド1D63から出土している。胎土には繊維を少量含有し、色調は黒褐色を呈する。口唇部及び内外面に絡条体圧痕文が施されている。

第4類 条痕文系土器 (第115図15～23 図版50)

破片で15点出土している。個体数にして4乃至5個体と思われる。1Dグリッドを主体に出土している。貝殻腹縁による表裏条痕のみで占められている。胎土には微量の繊維を含有する。器厚は一定しない。焼成は比較的良好だが、内外面の色調は黒褐色を呈する。施されている条痕は概して浅いものである。17の口縁部破片は外面が横位と斜位、内面が横位の条痕である。22・23は表裏ともに多方向の条痕が施されている。残りはみな表裏に斜位の条痕が施されている。



第115図 グリッド出土第I群土器拓影図 (1/3)

第II群土器

縄文時代前期の土器を一括する。

第1類 黒浜式土器 (第116図 図版50)

破片で145点出土している。1 B・2 B・1 Dグリッドから主として出土している。胎土には多量の繊維を含有する。器厚の一定しないものが多い。内外面は黒褐色を呈する。施文される文様から5種に分けられる。

a種 平行沈線が施されるもの。(1・2・13・14・15・20)

1・2・13・14・15は半截竹管状工具による平行沈線である。1・2は同一個体である。波状口縁を呈する深鉢と思われる。口縁直下に数条の平行沈線を施し、やや間をおいて同様の平行沈線が施される。14・15は太めの半截竹管状工具である。20は棒状工具で沈線を垂下させている。

b種 竹管状工具によって円形の刺突文が施されるもの。(3・4)

3は横位に刺突文が施され、半截竹管状工具による平行沈線を伴う。4はR L単節縄文を地文とし、垂下する平行沈線上に刺突文が施される。

c種 半截竹管状工具による有節沈線文が施されるもの。(5~10)

5は半截竹管状工具の凸部による施文である。6・8は同一個体と思われる。9の地文は撚糸と思われるがはっきりしない。

d種 半截竹管状工具による波状沈線文が施されるもの。(11・12・16~19)

11は密に波状沈線文が施されている。18は上下に有節沈線文を伴う。

e種 縄文のみのもの。(21~36)

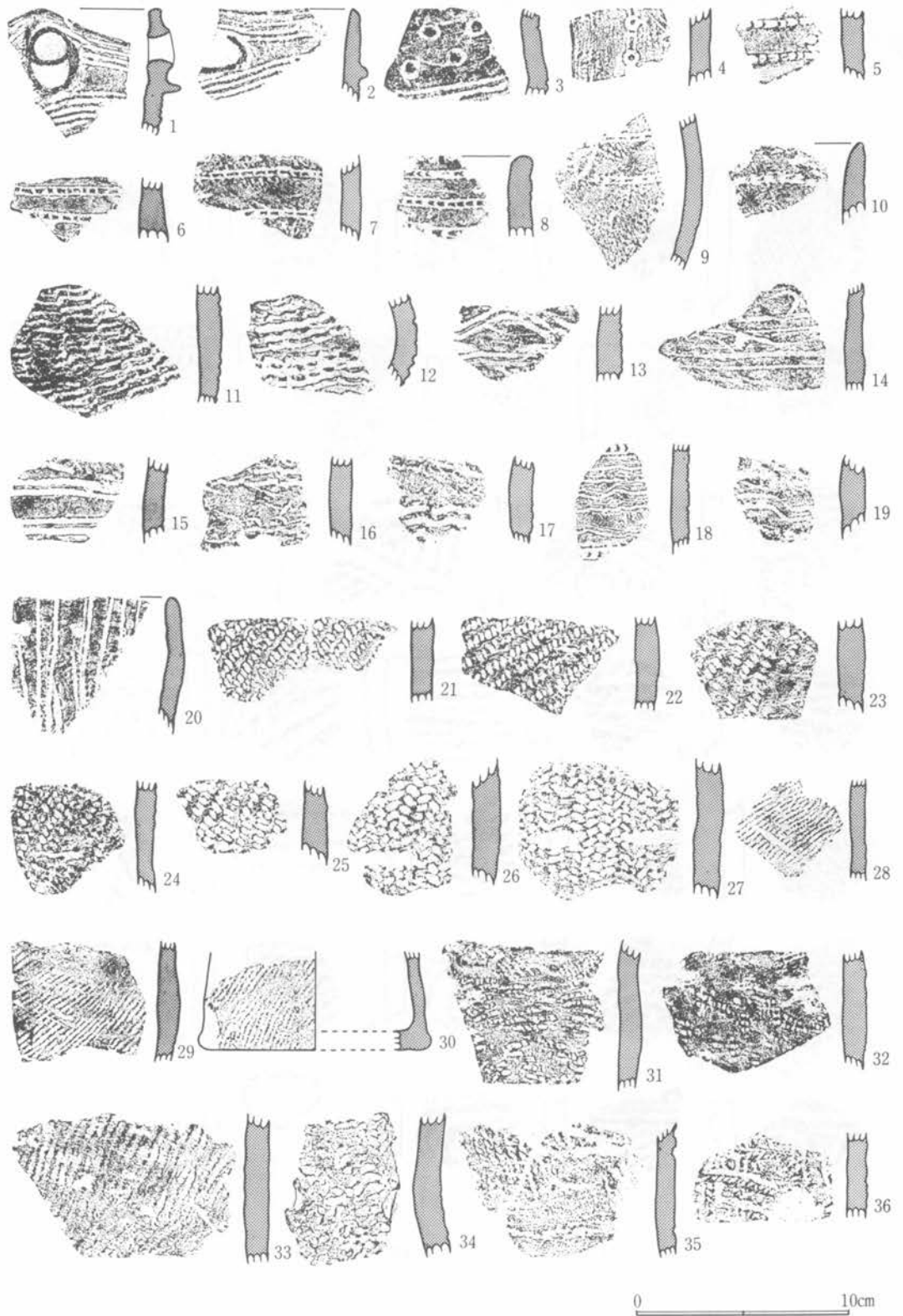
21~25・33はL R単節縄文である。26・27・34は組紐を回転押捺している。26・27は同一個体である。28~30は同一個体で、細いL無節縄文が施される。31・32・35・36は撚糸文である。31・32は同一個体である。

第2類 諸磯式土器

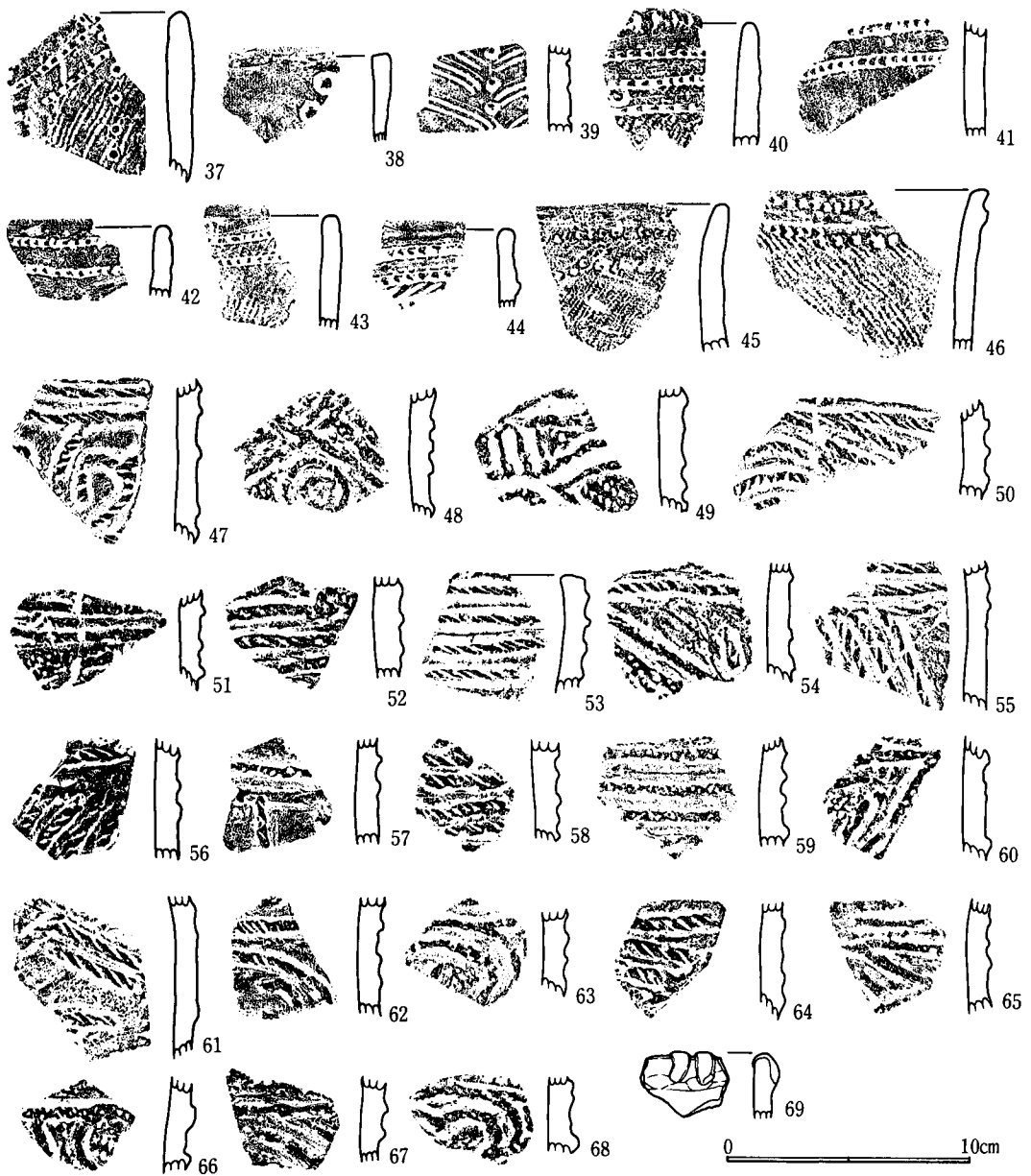
a種 諸磯a式土器 (第117図37~46 図版51)

破片で11点出土している。個体数にして8個体程度と思われる。2 Bグリッドを主体に出土している。胎土に繊維を含まない。内面の調整は良く、焼成も比較的良い。色調は明褐色から赤褐色を呈する。文様は有節沈線文、円形刺突文などが施される。

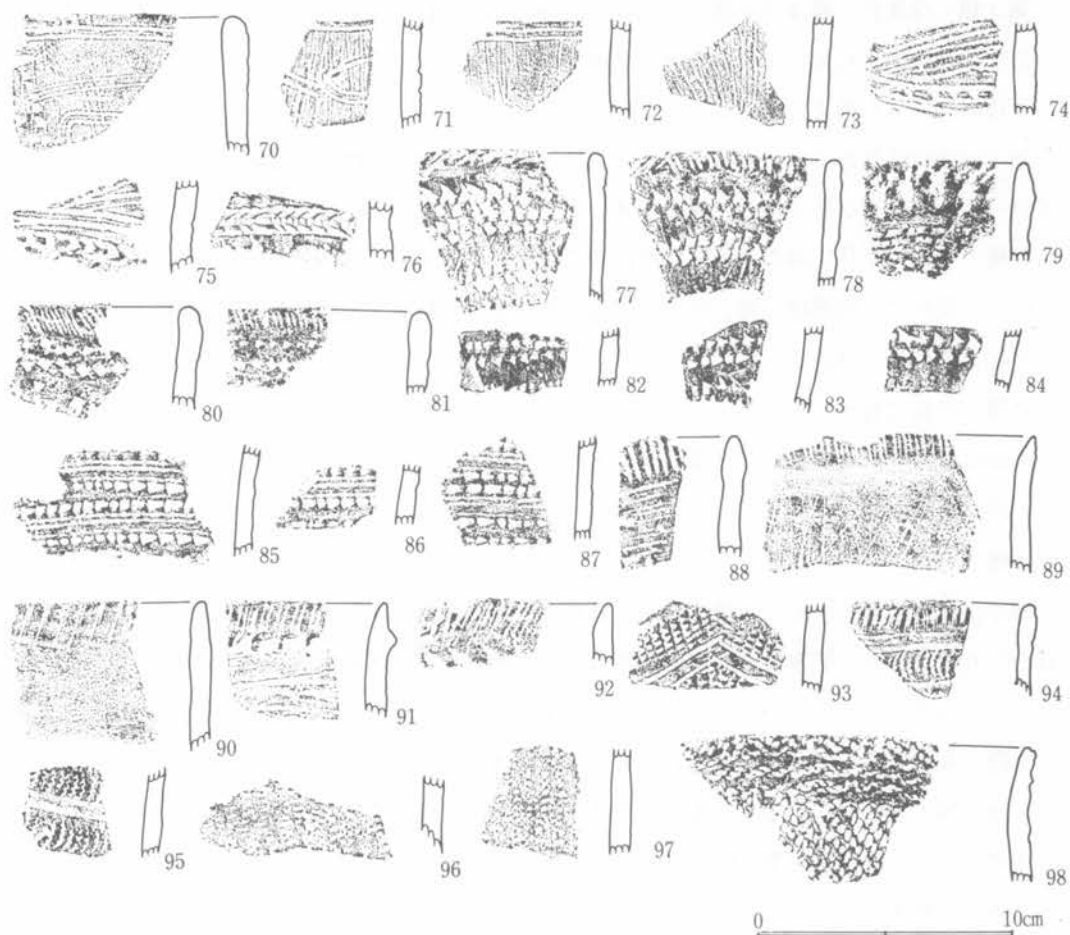
37は波状口縁を呈する深鉢であろう。口縁に沿って有節沈線文がめぐり、波頂下に縦列の刺突文が施される。地文はL R単節縄文か。38は円形刺突文のみ施されている。口唇部は平である。39は円形刺突文の左右に斜行する平行沈線が施されている。40は口唇部に先端の鋭い工具で連続した刻目が施される。3本の有節沈線文が横走し、その直下にL R単節縄文が施されている。43も40に類似するが口唇部に刻目を伴わない。44は2本の有節沈線文の下にソウメン状



第116図 グリッド出土第II群土器拓影図 (1/3)



第117図 グリッド出土第II群土器拓影図 (1/3)



第118図 グリッド出土第Ⅱ群土器拓影図 (1/3)

の粘土紐が貼付けられ、斜めの刻目が施される。45・46は口縁部に2列の刺突文、それ以下に縄文が施されている。45は付加条の縄文である。

b種 諸磯b式土器 (第117図47~68 図版51)

破片で45点出土している。個体数にして3個体程度と思われる。1A・2Aグリッドから出土し、特に1A96・97の各グリッドから20点集中して出土した。胎土には長石の粒子を多く含み、器面は粗い。色調は明褐色を呈する。文様はソウメン状の粘土紐を貼付けて描出される。粘土紐に施される刻目は先端の鋭い工具によるものと先端の丸い工具によるものの2種類がある。粘土紐によって描出される文様には渦巻文や曲線文などが認められる。17は唯一の口縁部破片である。若干内彎し、口唇は平で横位に粘土紐が貼付けられている。

c種 諸磯c式土器 (第117図69 図版51)

1点のみである。2B31グリッドから出土した。器厚は薄く、胎土は良い。口縁に2本の粘土紐が貼付けられる。

第3類 浮島式、興津式土器 (第118図70~97 図版51)

破片で35点出土している。調査区の全域からまんべんなく出土した。

a種 撚糸文を地文とするもの。(70~73)

胎土は比較的良好で、内面は平滑。色調は淡褐色を呈する。撚糸の間隔は広い。半截竹管状工具による沈線文が施される。浮島I式。

b種 半截竹管状工具によって有節沈線文が施されるもの。(74・75)

胎土は良好で、内面は平滑。色調は明褐色を呈する。斜行する沈線を施したのち、有節沈線文を加えている。浮島II式か。

c種 半截竹管状工具によって変形爪形文が施されるもの。(76)

上端に認められる痕跡から2段の変形爪形文が施されている。他に微細片が数点出土している。浮島III式。

d種 三角文が施されるもの。(77~87)

器厚は比較的薄く、胎土・焼成ともに良好。色調は淡褐色を呈するものが多い。77・79は口縁が折り返され若干肥厚する。口唇に深い刻目が施される。浮島III式。78・80・81は口縁に斜行する条線帯を伴う。85~87は三角文の間に横走する沈線が加えられる。興津式。

e種 条線文及び凹凸文が施されるもの。(88~92)

口縁が薄く尖るものが多く、条線帯を伴う。また、口縁がやや外反するものもある。器面は若干粗い。91は条線帯の下に凹凸文を加え、さらに条線文を施している。89・90の条線文は極めて浅い。興津式。

f種 フネガイ科の貝殻腹縁文が施されるもの。(93~97)

胎土に若干の砂粒を含む。色調は黒褐色を呈する。93~95は半截竹管状工具による沈線文の内部に貝殻腹縁文を施している。96・97は大きめの貝殻による腹縁文である。興津式。

第4類 前期末葉の土器 (第118図98 図版51)

1点のみである。2 B49及び2 B59グリッドから出土した破片が接合したものである。口縁部が外反する深鉢と思われる。胎土は良好。内外面ともに黒褐色を呈する。RL原体を使い口唇に原体を転がして縄文を施し、口縁部には原体を2段に押圧している。胴部は横位に原体を転がして縄文を施文している。

第Ⅲ群土器

縄文時代中期の土器を一括する。

第1類 前期末から中期初頭の土器群 (第119図1～9 図版52)

破片で9点出土しており、すべて掲げた。2Bグリッドを主体に出土した。暗褐色を呈し、胎土は比較的良い。文様は横位回転の結節縄文が施されたものに限られている。1・5・9を除き、細く整った結節縄文が施されている。

第2類 五領ヶ台式土器 (第119図10～18 図版52)

破片で10点出土しており、調査区の全域から散漫に出土している。10～13は長石の粒子を多量に含み、内面は平滑。10は口縁部が内彎し、波状を呈する深鉢であろう。口唇に刻目が施される。沈線と鋸歯文がめぐる。11は口縁に刻目が施される。12は口唇に沈線がめぐる。14～17は同一個体である。器厚は薄く、小型の深鉢と思われる。沈線に沿って三角陰刻文が施される。18は深い陰刻文が施され、口唇に刻目を伴う。

第3類 阿玉台式土器 (第119図19～43・第120図44～77・第121図82～104 図版52～54)

破片で115点出土しており、2Bグリッドが主体となるが調査区のほぼ全域から出土している。本類には阿玉台式直前のものも含まれる。雲母を含有するものもあるが数は少ない。

a種 縄文地文を伴うもの。(19～22・25～28)

19～22は雲母を含有し、胎土はやや粗いが焼成は良い。19・22は暗赤褐色、20・21は暗褐色を呈する。19は口縁部が外傾し、口端に刻目が施される。口縁内面は明瞭な段をもつ。21は隆帯を伴う。22は波状口縁を呈し大きく口縁が開く深鉢であろう。波頂部の内面は渦巻状の隆帯が貼付けられ、その下に三叉状の陰刻文が施される。19～22は阿玉台式直前型式であろう。25・26は口縁部が若干外反する。山形の角押文の下に微隆帯を伴い、竹管状工具による円形刺突文が窓枠状に施される。27は隆帯が垂下する。28は窓枠状に隆帯を貼付け、内部に角押文が施されている。隆帯の上下には縄文が施されている。25～28は阿玉台I a式と考えられる。

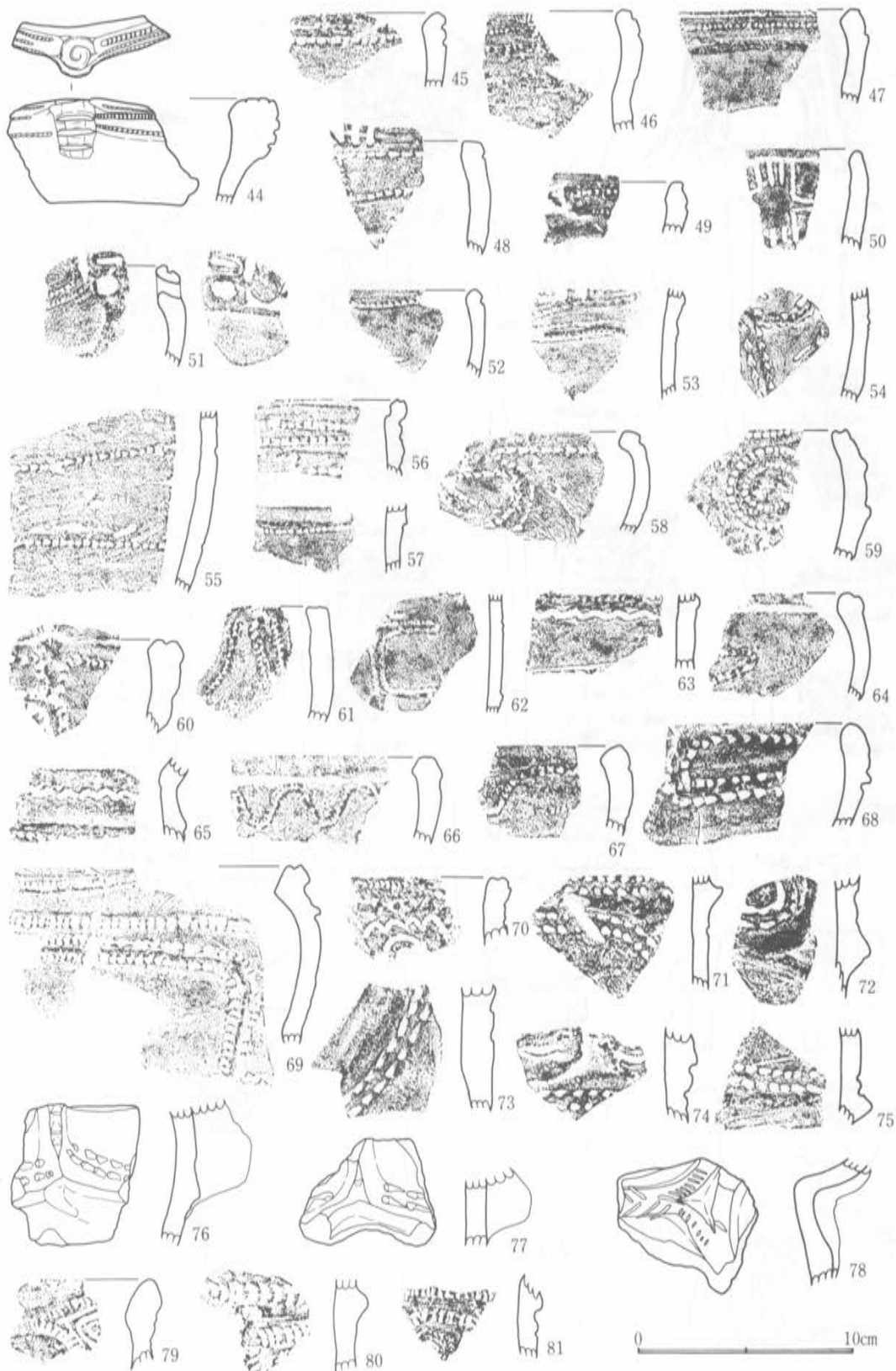
b種 角押文が施されるもの。(23・24・29・31～49・51～77)

第Ⅲ群の中では多く出土している。ほとんどを図示した。本種には阿玉台I a～II式にかけてが含まれている。胎土には長石の粒子を含むものが多い。雲母を含有するものもあるが数は少ない。

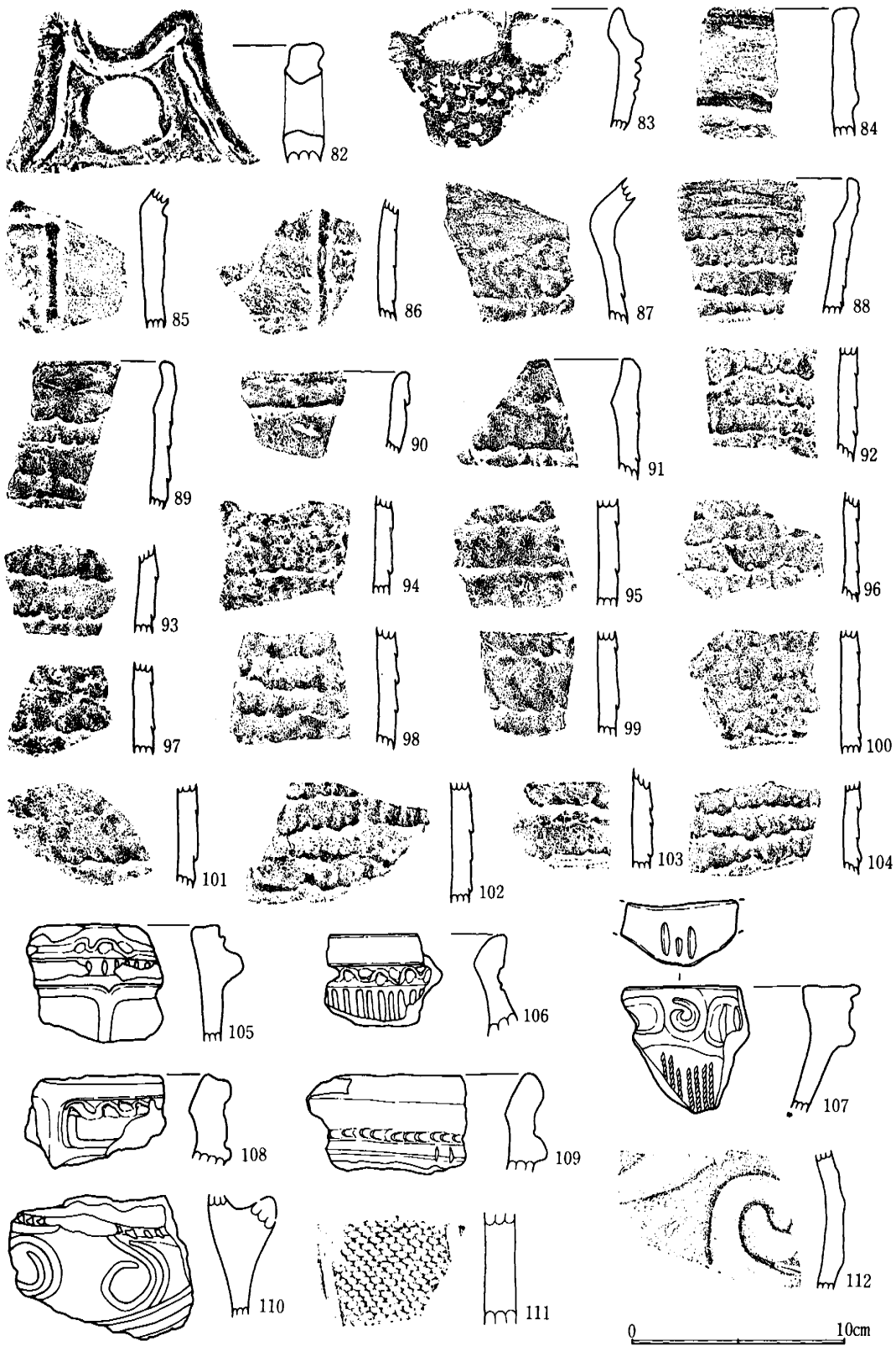
23・24は同一個体である。口縁と屈曲部に角押文が施され、その間に山形の角押文が付け加えられる。29は口縁が外傾し、内面に三叉状の陰刻文が施されている。31～33は瘤状の突起を伴う。一列の角押文が口縁と突起周囲に施される。31は内面に陰刻文を伴う。34・35は縦列の角押文である。波状口縁を呈し、波頂部に刻目が施される。36・37は曲線状の角押文である。39・41は口唇にも文様が施される。39～41は小型の深鉢であろう。42は微隆帯で区画文を施し、隆帯に沿って角押文が付け加えられる。44は瘤状の突起に沈線を伴い、上端に渦巻状の隆帯が



第119図 グリッド出土第Ⅲ群土器拓影図 (1/3)



第120図 グリッド出土第Ⅲ群土器拓影図 (1/3)



第121図 グリッド出土第Ⅲ群土器拓影図 (1/3)

貼付けられる。内外面ともに平滑で、胎土は良好。45～49・51～53・56・57は口縁部に2本の角押文が施される。51は貫通孔を伴い内面に陰刻文が施される。54・58・59は微隆帯の左右に角押文が付け加えられる。58・59は渦巻状を呈する。55は深鉢の胴部破片である。間隔をおいて角押文が横走する。胎土はやや悪く、器面は粗い。60・68・69は隆帯の左右に角押文が加えられる。69は大型の深鉢である。61～67・69～77は胎土に雲母を含有し、長石の粒子も少量含まれる。焼成はよく褐色乃至赤褐色を呈する。61は波状口縁にあたり、縁辺に沿って角押文が加えられる。62・64・66・67は曲線及び波状の角押文である。63・65・70は、波状沈線文が隆帯で区画された内部に施される。71～77は複列の角押文を施した阿玉台II式である。太い隆帯が貼付けられ、隆帯に沿って2列の角押文が施される。

c種 無文でひだ状の輪積痕を残すもの。(84～104)

破片で29点出土しているが、個体数にして5個体程度と思われる。1B・2Bグリッドを主体に分布する。胎土は比較的良いが、微量の砂粒を含有する。焼成は良く、淡褐色を呈するものが多い。外面はやや粗いが、内面は丁寧に調整されている。阿玉台I a乃至I b式と思われる。84・88～91は口縁部である。84は隆帯を伴う。88・89・91は内面に段をもつ。90は折り返し口縁をもつもので、この1点は中期初頭から阿玉台式直前にあたるものかもしれない。85・86は垂下隆帯を貼付けており、85は口縁部が大きく開く器形の深鉢と思われる。

d種 その他の土器 (82・83)

82は大型の把手である。胎土は良好。淡褐色を呈する。中央に大きな孔をもち、縁辺に沿って沈線を施している。83は雲母を含有する。色調は暗赤褐色を呈し、器面は粗い。口縁の内彎が強いことから鉢とも考えられる。口縁外面に大きな凹みを伴い、半截竹管状工具による刺突が施される。

第4類 勝坂式、中峠式土器 (第120図78～81、第121図105・106・108～110 図版54)

破片で9点出土し、すべて掲げた。調査区内から散漫に出土している。78～81は雲母を含有する。砂粒を少量含み胎土はやや悪い。78は頸部にあたり、貼付けた隆帯に先端の鋭い工具で刻目を施している。79・81はへら状工具によるキャタピラ文、80は半截竹管状工具による爪髯文である。105は刻目を伴う隆帯が貼付けられ、口縁との間に交互刺突文が施される。106は交互刺突文を施し、その下に沈線が垂下する。108は隆帯による長方形の区画文を伴い、内部に沈線と交互刺突文を施している。109は刻目を伴う隆帯を貼付け、口縁との間に半截竹管状工具による押しきの刺突文を施している。110は砂粒を混入する。段をもち先端部に刻目を施している。沈線で向かいあう渦巻文が施されている。

第5類 加曾利E式土器 (第121図107・111・112 図版54)

破片で3点に過ぎない。3点とも図示した。107は口唇が平の浅鉢と思われる。胎土はやや粗い。突出部に沈線で渦巻文を施し、胴部にはLの擦糸を転がしている。加曾利E II式か。111は

胎土・焼成ともに良好。キャリパー形の深鉢の胴部破片と思われる。LR単節縄文が縦位施文されている。加曾利EⅡ式か。112は胎土・焼成ともに良く、赤褐色を呈し、内外面の調整は丁寧に行われている。微隆帯によって渦巻文が施されている。器厚は薄い。加曾利EⅣ～後期初頭にかけてみられる特異な土器と思われる。

第Ⅳ群土器

縄文時代後期前葉の堀之内Ⅰ式及びⅡ式を一括する。

本遺跡から出土した縄文土器は、その99%以上が本群の土器によって占められている。主体となるのは堀之内Ⅰ式であり、堀之内Ⅱ式とされるものは極めて少量であった。遺構とグリッドの包含層から出土した土器のうち、全体の器形と文様構成を知り得る実測個体は262点にのぼった。これらの実測個体には深鉢・鉢・浅鉢などが含まれ、それぞれの器種に形態のバリエーションを看取することができる。深鉢は頸部の有無によって大別され、さらに全体形によって11形態に分けられる。また、鉢と浅鉢はその全体形から6形態と5形態に分けられる。文様の分類は、文様構成の明らかな実測個体を中心に行い、破片を補足して、おもに胴部文様を対象として進めることにした。分類は大きく12類に分けられ、各類別でさらにいくつかに分けられる。おおよそ第1類から第5類は堀之内Ⅰ式、第6類から第11類は堀之内Ⅰ式およびⅡ式の一部、第12類は堀之内Ⅱ式に比定される。なお、器種及び器形については各類別の中で、それぞれふれることにする。

器種及び器形（第122図）

深鉢 実測個体中に占める深鉢の割合は82%であるが、実際にはそれをさらに上回る割合であろう。頸部の有無によって2種類に大別される。

A形 頸部のくびれをもつもの

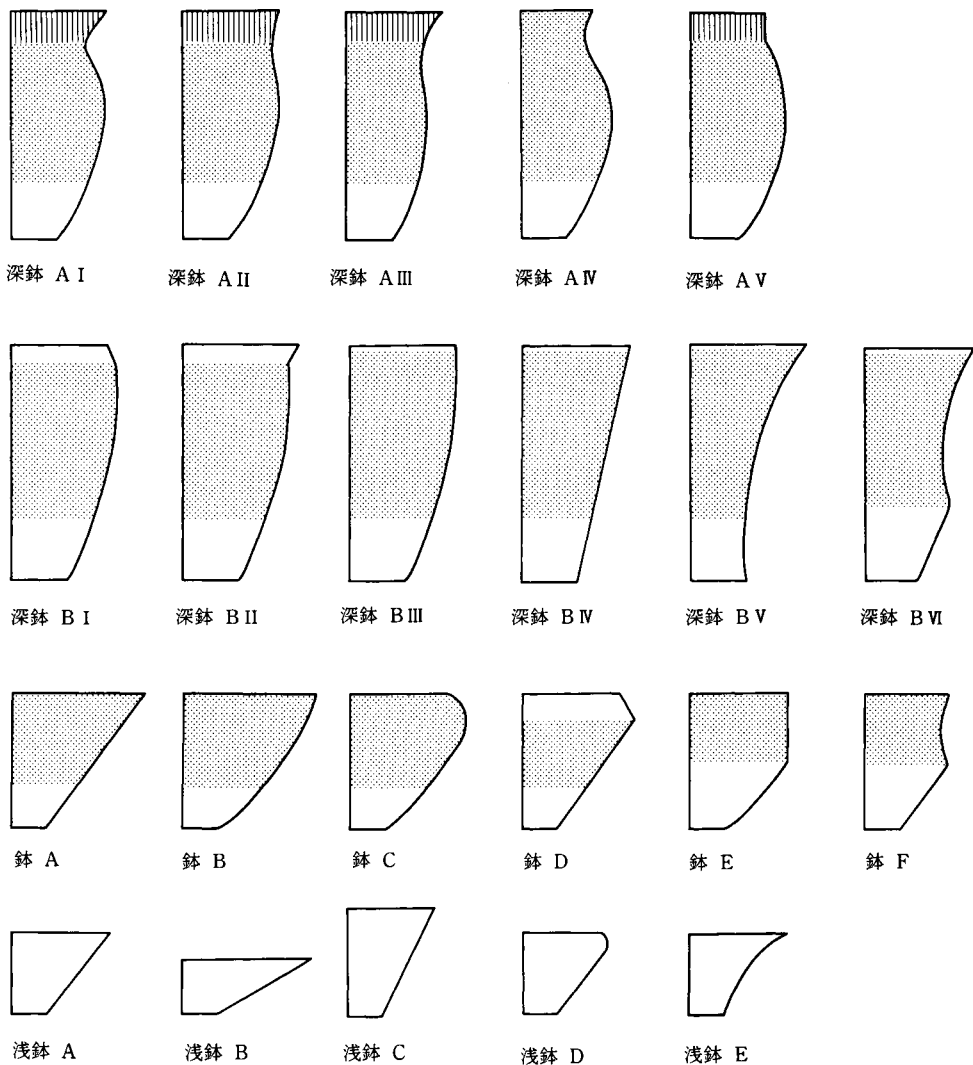
B形 頸部のくびれをもたないもの

両者の実測個体中に占める割合はA形が33%、B形が67%である。B形はA形の約2倍にも達しており、破片をふくめても概ねその傾向はかわらないものと思われる。口縁部、頸部、胴部のそれぞれの形態からさらに11器形に分けられる。

A形 頸部のくびれをもつもの

AⅠ形 口径と胴部最大径がほぼ同じで、頸部のくびれが顕著なもの。

文様は頸部に施される沈線によって、口縁から頸部にかけての上部文様帯と胴部の文様帯とに分けられる。上部文様帯は地文に縄文を施すものと研磨し無文とするものの2種類があり、両者ともにほぼ同じくらいの割合であろう。上部文様帯には垂下する隆帯が貼付けられるものがあり、単純に垂下するものやU字状を呈するものなどがある。口縁の形態は平縁と3単位乃



第122図 第IV群土器器形模式図

至4単位の波状口縁を呈するものがあり、波状口縁の方が多く認められる。A I形の深鉢は量的にはあまり多くなく、堀之内I式の後葉には減る傾向にあると思われる。

A II形 口径と同部最大径がほぼ同じで、頸部のくびれがごくわずかなもの。

文様は頸部の沈線によって上部文様帯と胴部の文様帯とに分かれるものと、口縁から胴部にかけて一連の文様が施されるものがあり、前者の方が量的には多い。A I形と同様に上部文様帯には隆帯を貼付けるものがあるが、あまり多くはない。口縁の形態は波状口縁を呈するものが多い。A II形の深鉢は量的にA I形とあまりかわらないが、堀之内I式全般にわたり認められる。

A III形 口径が最大径となり、頸部から大きく開くもの。

文様はA I形やA II形と同様に頸部に施される沈線によって上部文様帯と胴部の文様帯とに分かれるものと、口縁から胴部にかけて一連の文様が施されるものがあり、前者の方が圧倒的に多い。上部文様帯には縄文を施す例と無文とする例とがあり、縄文を施すものが多い。口縁の形態は平縁と波状口縁の両者が同じ程度に認められる。A III形の深鉢はA形の中では最も多く、堀之内I式全般にわたって認められる。

A IV形 胴部径が最大径となり、頸部から口縁にかけての開きが大きくならないもの。

文様は口縁から胴部にかけて一連の文様を施すものに限られ、実測個体では1例しか見出し得なかった。口縁の形態は平縁と波状口縁の両者があると思われる。A IV形は量的に極めて限られている。

A V形 胴部径が最大径となり、頸部でくびれて口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの。この器形はB形に含めてもよいかもしれない。

文様は口縁部が無文帯となるものとならないものがある。本遺跡の出土例は口縁が平縁となるものに限られている。本遺跡の場合A V形は量的には微量であり、堀之内I式の後葉に限られている。千葉県下の例をみる限りではA V形は堀之内I式の前葉にも認められる器形である。

B形 頸部のくびれをもたないもの。

B I形 底部からゆるやかに開き胴部が脹らむもので、口縁部が内傾するもの。

文様は内傾する口縁部が無文帯となり、胴部の文様とを沈線で区画する。口縁の形態は波状口縁を呈する。実測個体は1例しかなく、破片では他に1点も検出されていない。堀之内I式の最も古い段階に位置付けられる。

B II形 底部からゆるやかに開き胴部が脹らむもので、口縁部が外傾するもの。

文様は外傾する口縁部に、縄文と沈線文を施すもの、研磨され無文となるものの2種類がある。口縁の形態は平縁と波状口縁とがほぼ同じ割合で存在する。B II形は量的には限られており、堀之内I式前葉にしかみられない器形と考えられる。

B III形 底部からゆるやかに開き胴部が脹らむもの。

文様は通常、口縁から胴部にかけて連続的に施される。例外的に口縁から胴部上段にかけて無文となるものもある。口縁の形態は平縁と波状口縁があり、同じくらいの割合で存在する。B III形はB IV形に次いで多く、堀之内I式全般にわたって認められる。

B IV形 底部から直線的に開くもの。

文様はB III形と同じく、口縁から胴部にかけて連続的に施されるが、胴部の下段で文様を区画するものも認められる。しかし量的にはあまり多くない。口縁の形態は平縁と波状口縁の両者があり、同じくらいの割合で存在する。B IV形が深鉢の器形では最も多い。堀之内I式及びII式の全般にわたって認められる。

B V形 底部から外反し開くもの。

文様は通常、胴部文様の下端が隆帯や沈線によって区画される。口縁の形態は平縁と波状口縁が同じくらいの割合で存在する。B V形は量的には少ない。堀之内 I 式の後葉から堀之内 II 式にわたって認められる。

B VI形 胴部下段でいったん内折し、再び口縁にかけて外反し開くもの。

文様は隆帯を伴い、内折する部分で胴部文様が区画される。実測個体は 1 例しかなく、破片においても他には検出されていない。堀之内 I 式の後葉から堀之内 II 式にかけて存在する器形と思われる。

鉢 実測個体中に占める鉢の割合は 8 % という高い割合を示しているが、破片を含めれば実際にはこれを下回ると考えられる。量的にはそれほど多くないことから器形と文様の諸相はとらえにくい。およそ 6 器形に分けられる。浅鉢との明らかな形態の相違を抽出しにくいことから、口径を基準にして 20cm 以上の口径をもつものを鉢とし、20cm 未満のものを浅鉢として区別することにした。この区分はあくまでも便宜的なものである。鉢の口縁は平縁となるものが圧倒的に多く、波状口縁はわずかである。

A形 底部から直線的に開くもの。

B形 底部から緩く脹らんで口縁に至るもの。

C形 口縁部が内彎するもの。

D形 口縁部が内傾するもの。

E形 底部から直線的に開き、胴部中位から垂直に立ち上がるもの。

F形 胴部中位でいったん内折し、再び口縁にかけて外反するもの。B IV形の深鉢がつまった器形である。

なお、A形～E形は堀之内 I 式全般にわたって認められるが、F形は堀之内 I 式末から同 II 式にあたると考えられる。

浅鉢 実測個体中に占める浅鉢の割合は 10 % であるが、鉢と同じく実際にはそれを下回る割合であろう。口縁は平縁と波状口縁を呈するが、波状口縁のものは極めて少ない。5 器形に分けられる。

A形 底部からほぼ直線的に開くもの。

B形 器高が低く、皿状に大きく開くもの。

C形 底部からほぼ直線的に開くもので、底部からの立ち上がりの強いもの。

D形 口縁部が内彎するもの。

E形 底部から外反し開くもの。

なお、A形～D形は堀之内 I 式全般にわたって認められ、E形は堀之内 II 式に特定されるようである。

文様

第1類 縄文を地文とし、沈線で単純な単位文様を施すもの。

単位文様とは胴部文様を縦に数分割する主文様をさす。単位文様は蕨手文、J字状文、U字状文、弧線文など単一の要素からなり、3単位乃至4単位を構成するものである。本類は施される文様の要素から堀之内I式の前葉に位置付けられる。磨消し縄文手法の有無によって本類はさらに2種に分けられる。磨消し縄文手法が限られた文様要素のみに選択的に使用される傾向はなく、先に挙げた単位文様にはおしなべてこの手法が認められる。磨消し縄文手法を伴う土器の量は少なく、この手法が用いられるのは堀之内I式の古い段階においても比較的限定されたものと考えられる。器種は深鉢のみである。器形はA I形・A II形・A III形・B I形・B II形・B III形・B IV形など多様であるが、B I形は本類のみで、B II形は本類に主体的に認められる。第IV群の実測個体中に占める本類の割合は13%であるが、本類に含まれる破片の量からすればこの割合を上回ると考えられる。

a種 縄文を地文とし、単位文様内の縄文を磨消すもの。(第123図1・3・5、第144図1～6・9～13 図版42・54)

磨消し縄文手法を伴うものは先述したように量的には少なく、グリッド出土土器よりも住居跡出土土器にその主体がある。磨消し縄文手法を伴う単位文様には蕨手文、J字状文、U字状文、弧線文、単純な垂下沈線文などがあり、蕨手文の占める割合が比較的高いが、この手法を伴わない蕨手文の量に比べればその量は極めて少ない。

第123図1は4単位波状口縁のB II形の深鉢である。外傾する口縁部は研磨され無文帯となり、胴部文様とを沈線で区画している。波頂下には上下に刺突を施した短い沈線文が描かれる。胴部はJ字状文とU字状文を施して、内部の縄文を磨消している。地文はL無節縄文。器厚は薄く、胎土はやや粗い。同図3は大型の深鉢である。口縁から頸部にかけて研磨され無文帯となり、波頂下に短い沈線が垂下する。胴部には3本の向い合う弧線が施され、弧線間の縄文が磨消される。地文はLR単節縄文。同図5はLR単節縄文を地文とし、単位文様を施したのち、内部の縄文を丁寧に磨消している。第144図1は第123図3と類似した文様である。向い合う弧線の内部を丁寧に磨消している。第144図2は単純な垂下沈線の間を磨消している。同図4～6は蕨手文の内部を磨消すが、同図3は蕨手文と弧線の間を磨消している。同図9～13は蕨手文の内部を若干磨消している。9は蕨手文の間に施された斜行沈線の内部も磨消している。13は口縁から頸部にかけての狭い部分に蕨手文が施される特殊な例である。

住居跡出土例に典型的なものが認められ、第9号住居跡の深鉢(第19図1)の鉤状J字状文や、第10号住居跡の深鉢(第24図1・3)の蕨手文などがあげられようか。第9号住居跡の1に施される鉤状J字状文は本遺跡からはこの他には出土していない。単位文様以外の部分に磨消し縄文手法を伴う例はわずかだが認められる。第112号住居跡の深鉢(第70図4)はその例で

ある。

b種 縄文を地文とし、単位文様内部の縄文を磨消さないもの。(第123図6・7、第124図8・9・11～13、第125図14～18、第144図7・8・14～20、第145図、第146図 図版42・43・54・55)

本種に含まれる土器の単位文様はa種とあまりかわらないが、J字状やU字状文などはほとんど認められない。基本的には蕨手文が単位文様となるものと弧線文や単純な垂下沈線文などが単位文様となるものに大きく分けられ、後者の方がより新しい要素と考えられる。

第123図6は波頂下に縦列に刺突が加えられ、蕨手文が胴部に施される。地文はLR単節縄文。同図7は単純な単位文様が施されている。第124図8は口縁部に沈線がめぐり、波頂下に刻目を伴う2本の隆帯が貼付けられる。頸部には2本の沈線が施され、上部の無文帯と胴部文様とが区画されている。無文帯はいったん縄文を施したのち研磨して無文としている。胴部には隆帯下に刺突を伴う貼付文を施し、弧線を加えた蕨手文が垂下する。地文はL無節縄文。胎土はやや粗いが焼成はよく明赤褐色を呈する。第1類の中で口縁から頸部にかけての隆帯を伴う例はあまりみられない。同図9は波頂下に蕨手文のみが施される。同図11は垂下列点文が単位文様となるめずらしい例である。同図12は口縁部が外傾するBⅡ形を呈する。全面に縄文が施され、胴部には単純な沈線が垂下する。同図13は波頂下に瘤状の突起が貼付けられる、中央に刺突が施される。胴部は突起から沈線が垂下する。地文はRL単節縄文。第125図14～16は小型の深鉢である。14は4単位波状口縁を呈し、櫛状工具で条線を施して単位文様としている。15は蕨手文の片側に弧線を施す。16は垂下沈線の上に3条の短い沈線を施している。同図17・18はともに蕨手文であろう。17の地文はL無節縄文。第144図7・8は口縁部に三日月状の隆帯を貼付け下端に刺突を施している。同図14～20はみな蕨手文である。口縁に沈線や凹文を伴う。第145図はすべて蕨手文である。棒状工具によるものが多いが25や36のように半截竹管状工具の例もある。30は波頂部が部厚く突起状を呈し、口縁に沈線がめぐり。34は口縁から頸部にかけて縄文が施されるが、35はその部分が研磨され無文となり、刻目を伴う隆帯が貼付けられる。第146図は蕨手文以外の例である。37は蕨手文の変形であろう。38は弧線が単位文様となる。39は連続する渦巻文が施されている。40～50は垂下沈線を主体とする単位文様である。垂下沈線の間にはジグザグ状の沈線や斜行沈線、列点文などが加えられる。これらの文様は新しい要素と考えられる。

第2類 縄文を地文とし、沈線で単位文様を施すもので、第1類の単純な単位文様に比べ、沈線がやや煩雑に施されるものを本類とする。主として単位文様自体が重層化するものが含まれる。単位文様から3種に分けられる。

本類は第1類に比べ明らかに新しい様相を呈するものである。第1類において最も多く認められた蕨手文はほとんど含まれていない。本類には沈線が著しく重層化するものも認められる

ことから、かなりの時間幅をもつものと考えられる。

本類の器種はほぼ深鉢に限られるが、稀に浅鉢もある。深鉢の形態には頸部のくびれをもつ A II形・A III形・頸部をもたない B III形・B IV形・B V形などがあり、どちらかといえば頸部のくびれをもつ A形が主体となろう。口縁の形態には平縁、3単位乃至4単位の波状口縁を呈するものがあるが、波状口縁を呈するものの方が量的には多いと思われる。

本類の出土量はあまり多くない。第IV群の実測個体中に占める割合は6%と低いが、破片の量をみる限りにおいては、もう少し高い割合ではないかと思われる。

a種 弧線が重層的に施されるもの。(第124図10、第125図22、第126図24・26~28、第147図、第148図64~67 図版55)

第124図10は3単位波状口縁の深鉢である。頸部に沈線がめぐり、単位文様は3本の垂下沈線の左右に弧線を伴うもので、胴部に6単位施される。地文はLR単節縄文が全面に施される。第125図22は深鉢の胴部下半である。重層する弧線が施される。地文はLR単節縄文である。第126図24は4単位波状口縁で波頂部に大きな凹文を伴う。凹文からは列点文が垂下し、弧線及び蛇行沈線が施される。地文はLR単節縄文で全面に施される。同図26は3単位波状口縁の深鉢である。地文は太い撚紐にL無節縄文を巻いた原体を回転押捺していると思われる。口縁から頸部にかけて刻目を伴うV字状の隆帯が貼付けられ、波底部にも同様に刻目を伴う隆帯が垂下する。隆帯の周囲には半截竹管状工具により沈線が施される。胴部には垂下する沈線の左右に弧線が施され、全体に著しく多条化している。堀之内I式の新しい様相を示している。同図27もまた垂下沈線の左右に弧線を伴う。地文はR無節縄文である。同図28は口縁部に縦長の8の字浮文が貼付けられ、周囲に沈線が施される。8の字浮文の下には重層する弧線が施される。地文はR無節縄文。26~27は半截竹管状工具によって多条化の著しい効果をあげている。第147図51~63は55を除いてすべて半截竹管状工具によって沈線文が施されている。51は口縁部に4本の沈線が横走し、重層する弧線が施される。52は垂下沈線の左右に弧線が施されるものであろう。53は頸部のくびれが緩い深鉢であろう。口縁から頸部にかけて沈線が垂下し、重層する弧線が胴部に施される。54は口縁から頸部にかけて無文となり、頸部の横走沈線によって胴部の文様とを区画している。胴部には重層する弧線が施される。55は棒状工具によって弧線が施される。56は全面に縄文が施され、頸部に沈線がめぐり、胴部に弧線が施される。57・58・62は波状口縁の深鉢で、ともに波頂部から垂下する沈線の左右に重層する弧線を伴う。59・60・63もまた同様に垂下沈線の左右に重層する弧線を伴う。61は波状口縁を呈し、波頂部に凹文を伴う。U字状の沈線文を施し、そこから沈線が横走する。胴部には垂下沈線及び弧線が施される。第148図64は蕨手文を伴う波状口縁の深鉢である。波頂下に蕨手文を施し、左右に重層する弧線を加えている。波頂部に貫通孔を伴う。65・66は口縁から沈線を垂下させ、左右に弧線を施している。65の地文はLRL複節縄文。67は波状口縁を呈する深鉢で波頂下に凹文を伴う。

胴部には重層する弧線が施される。

b種 連弧状の沈線文が重層的に施されるもの。(第125図19・23、第126図25 図版43)

連弧状の沈線文のみで単位文様を構成するものは少ない。第3類に含まれるような付属文様を伴う連弧状の沈線文は比較的多く認められる。本類に含まれる連弧状の沈線文は著しく重層化したものに限られている。なお、垂下沈線に同心円文が施され、団子状を呈する単位文様があり、連弧状の沈線文の変形と考えられ、これらも本類に含まれる。

第125図19は波状口縁を呈する小型の深鉢である。波頂下に垂下沈線を施し、左右に連弧状の沈線を加えている。地文はR L単節縄文。同図23は頸部のくびれをもつ深鉢である。垂下沈線の左右に著しく重層化した連弧状の沈線文が施される。半截竹管状工具による沈線である。地文はL R単節縄文。第126図25は頸部に8の字浮文が貼付けられる。胴部には23と類似した単位文様が施される。地文はR L単節縄文。

c種 その他のもの。(第125図20・21)

a種やb種のように垂下沈線の左右に施される沈線が重層化するものではなく、単一の文様要素自体が重層化するものなどが含まれる。量的には少なく、第159号住居跡から出土した1の深鉢などが典型となろう。

第125図20は重層化した単位文様ではないが本種に含めることにした。波頂部から垂下する沈線の間にはクランク状の沈線文を伴う。地文はL R単節縄文。同図21は頸部のくびれをもつ平縁の深鉢である。多条化した垂下沈線を単位文様とする。地文はL R単節縄文。

第3類 縄文を地文とし、沈線で単位文様を施し、さらに単位文様と単位文様の間を付屬的な文様でうめるもの。

本類は単位文様間に施される付屬文様によって8種に分けられる。本来ならば単位文様と付屬文様の相互の関連から分類を行わねばならないが、より顕著な変化を示すのは単位文様ではなく付屬文様であると考えられる。本類には堀之内I式の主要な文様要素の多くが含まれ、特に堀之内I式中葉以降がその主体となっている。第IV群の実測個体中に占める本類の割合は22%であるが、破片の量からすればさらに高い割合を占めると思われる。器種は深鉢に限られ、器形はA I形・A II形・A III形・A V形・B II形・B III形・B IV形・B V形など多様である。主体はA III形・B III形・B IV形である。A形の深鉢には頸部に施される沈線によって、口縁から頸部にかけての上部文様帯と胴部の文様とに区別されるものが多い。上部文様帯は研磨され無文となるものと地文縄文を施すものがあり、その量的な関係をとらえることは難しい。第IV群の分類は胴部文様を主体に行っているため、上部文様帯の破片は分類の対象とし得ないものが多かった。これらについては本類の説明の最後で若干ふれることにしたい。文様については、単沈線で構成されるものは少なく、全体に多条化した沈線で構成されるものが多い。文様要素

よりも沈線の疎密に時間差があらわれていると考えられる。特に堀之内 I 式後葉には半截竹管状工具が多用され、著しい多条化の傾向を示している。

a種 単位文様間に、単位文様とは接続しない独立した付属文様が施されるもの。(第126図29・30、第127図31・32、第148図68～73 図版43・55・56)

本種の単位文様と付属文様はともに単純である。量的には多くない。

第126図29は平縁の深鉢であろう。口縁部に浅く幅の広い沈線がめぐり、垂下する連弧状の沈線文を単位文様とし、単位文様間に3本の垂下沈線を施す。地文はLR単節縄文。同図30は3単位小波状口縁の深鉢で、口径が最大径となるAIII形である。波頂下に刺突が施され、浅い沈線が口縁部にめぐり、また、刺突から沈線が垂下し単位文様をなしている。頸部をもつ深鉢で、口縁から単位文様が垂下し胴部まで連続的に施される例は極めて少ない。頸部には単位文様を施したあとで沈線が施される。単位文様間には垂下沈線が加えられる。地文はLR単節縄文。第127図31は口縁を欠損している。たぶん口縁から沈線文が垂下すると思われる。蛇行沈線の左右に4本の沈線を施して単位文様とし、単位文様間には第126図30の単位文様と類似した垂下沈線文を施していると思われる。第127図32は3単位波状口縁の小型の深鉢である。波頂下に単位文様が施されない珍しい例で、蛇行沈線と垂下沈線が別個に施される。地文はLR単節縄文。第148図68は付属文様となる垂下沈線であろう。太い半截竹管状工具を使用している。縦位のLR単節縄文を地文とする。同図69は頸部をもつ深鉢であろう。68と同じく半截竹管状工具によって、重層するU字状の沈線文と垂下沈線が連続的に施され単位文様を構成する。単位文様間に沈線が垂下する。同図70・71は同一個体である。波状口縁を呈する深鉢で、波頂下に貫通孔を伴う。口縁に沈線がめぐり、胴部には渦巻文から連続して蛇行沈線となる単位文様が施され、さらに単位文様間に垂下する列点文が施される。単位文様からのびる横走沈線は文様帯の下端を区画しているかもしれない。竹管状工具による施文である。同図72は頸部をもたないが、横走する沈線が施される。垂下沈線の左右に連弧状の沈線文を加え単位文様とする。単位文様間には垂下沈線が施される。地文はLR単節縄文。同図73は緩いくびれをもつ深鉢である。頸部に沈線がめぐり、口縁部にU字状の沈線文が施され、下端に同心円文が接続して単位文様をなしている。単位文様間には垂下沈線が施される。

b種 単位文様間に斜行沈線を施すもの。(第127図33～38、第132図58、第149図 図版43・56)

本種は比較的多く認められ、単位文様間に施される斜行沈線のほかに他の文様を加えられる場合も多い。

第127図33は3単位波状口縁の小型の深鉢である。波頂下に疑似的な蕨手文を施して単位文様とし、間に斜行沈線を加えている。同図34は口縁が波状を呈するが欠損しており形態は不明。胴部文様から口縁は4単位の波状と推定される。波頂下に沈線が垂下し、左右に弧線が施され、弧線の下端から斜行沈線がのびる。これが単位文様となり、垂下及び斜行する沈線が単位文様

間に施される。半截竹管状工具による多条化した沈線文である。同図35は外反する器形の深鉢である。波頂下にU字状の沈線文が施される。この文様の下端に単位文様が施されるが、欠損のため不明。単位文様間に斜行沈線が施される。同図36は口縁部が垂直に立ち上がるA V形の深鉢である。深い沈線が口縁部にめぐる。間に蛇行沈線を加えた垂下沈線文を単位文様とし、単位文様間に斜行する沈線が施される。同図37は4単位の波状口縁と思われる深鉢である。波頂部にU字状の沈線を伴い、3本の沈線を垂下させ単位文様とする。単位文様間には斜行する沈線が施される。地文はL R単節縄文。胎土は砂粒を多量に含む。同図38は34と類似した単位文様を構成するが施文具は棒状工具である。単位文様間に斜行沈線を施す。地文はL R単節縄文。第132図58は著しく摩耗しており、文様は部分的にしか判別できない。地文はL R単節縄文。3本の沈線を単位文様とし、左右に異方向の斜行沈線を加えている。

第149図74・75は蛇行沈線を単位文様とし、単位文様間に斜行沈線が施される。同図76は平縁の深鉢である。口縁に凹文を加え、その下に蕨手文を施す。蕨手文の上端から左右に斜行沈線がのびる。このような蕨手文を単位文様とする例は本類には僅かである。同図77は波状口縁の深鉢で波頂部に刺突を伴う。列点文を加えた垂下沈線文を単位文様とし、単位文様間に蛇行沈線と斜行沈線が施される。同図78は頸部のくびれをもつ深鉢である。頸部に沈線がめぐり、同心円文が施され、その下に蛇行沈線文が付け加えられて単位文様をなす。単位文様間には類似した蛇行沈線と斜行沈線が施される。同図79は強く内彎する深鉢である。疑似的な蕨手文を単位文様とし、左右に斜行沈線を施す。同図80は太い半截竹管状工具による施文である。垂下沈線を単位文様とし、左右に斜行沈線を施している。同図81は地文の押捺が弱い。波頂下に垂下沈線を施し、左右に斜行沈線を加えている。同図82～86も類似した文様構成である。86は半截竹管状工具で著しく多条化した沈線文を施している。

c種 単位文様間にクランク状の沈線文が施されるもの。(第128図、第129図41・42、第150図 図版43・44・56)

量的には極端に多くないが、堀之内I式の付属文様としては多用される文様であり、単純なものから著しく多条化したものまで多様な変化を示す。

第128図39は3単位波状口縁の大型の深鉢である。口縁から著しく突出した波頂部を伴い、口縁には深い沈線がめぐる。頸部は強くくびれ、沈線がめぐる。波頂下に垂下沈線が施され、単位文様をなし、単位文様間には垂下するクランク状の沈線文が施される。地文は明瞭で、L R単節縄文が底部近くまで施されている。内面は平滑である。胎土に砂粒を含む。同図40は緩い頸部をもつ大型の深鉢である。口縁は3単位の小波状を呈する。頸部に2本の沈線がめぐり、口縁から頸部にかけて研磨され無文となる。口縁には沈線を伴わず、口唇は丸味をもつ。波頂下にV字状の重層する沈線文が施され、下端に凹文を伴う。凹文の下に重層する曲線文が垂下して単位文様を構成し、単位文様間に単純なクランク状の沈線文が施される。地文はL無節縄

文。内面は平滑。第129図41は4単位小波状口縁の深鉢である。口径が最大径となるA III形を呈する。地文はLR単節縄文で、ほぼ全面に施される。頸部には2本の沈線が横走し、口縁から頸部にかけて曲線的な沈線文が施される。胴部に施される単位文様はクランク状を呈し、間に沈線が密に充填される。クランク状の沈線文が単位文様となる例は極めてめずらしい。単位文様間にもクランク状の沈線文が施される。同図42は底部から直線的に開くBIV形の深鉢である。3単位波状口縁を呈する。半截竹管状工具によって多条化した文様が施される。波頂下に沈線を垂下させ単位文様とし、単位文様間にクランク状の沈線文を施している。

第150図87～90は半截竹管状工具により多条化したクランク状文である。87は波状口縁を呈する大型の深鉢で、単位文様となる垂下沈線に比べ付属文様であるクランク状文の方が強調されている。同図91・92は同一個体である。頸部のくびれをもつ深鉢で、口縁から頸部にかけて隆帯が貼付けられ、その下に単位文様となる渦巻文が施される。単位文様間にクランク状の沈線文が加えられる。同図93～96も多条化したクランク状の沈線文である。

d種 単位文様間にV字状または逆V字状の斜行沈線を施すもの。(第151図97～99 図版57)

本種は全体的に多条化した傾向のものが多い。第3類に占める割合は低い。単純にV字状や逆V字状の沈線のみで付属文様が構成される場合は少ない。

第151図97は外反するBV形の深鉢である。垂下沈線を単位文様とし、単位文様間に逆V字状の沈線文を施している。半截竹管状工具によって沈線は全体に多条化している。同図98は波頂部に2つの凹文を伴う。97と同じく多条化し、単位文様間に逆V字状の沈線文が施される。同図99は、単位文様となる垂下沈線の左右に弧線を伴う。単位文様間にV字状の沈線文が施される。

e種 単位文様間にジグザグ状の沈線文を施すもの。(第129図43、第130図45～50、第131図51～54、第151図100～109、第152図110～113 図版44・57)

本種に含まれる土器の量は多く、沈線の多条化したものの割合が高い。単位文様には垂下沈線の左右に連弧状の沈線文を加えたものも多く、この単位文様とジグザグ状文との組み合わせが多く認められる。沈線の施文工具には半截竹管状工具を用いる割合が高く、多条化の傾向を強く示している。

第129図43は胴部を欠損しているため詳細は不明だが、下端の文様から本種に含まれるであろう。底部から直線的に開く深鉢で、3単位波状口縁を呈する。口縁部に沈線がめぐり、波頂下に凹文と斜行沈線が施される。第130図45は垂下沈線の左右に弧線を伴う単位文様が施され、単位文様間にジグザグ状の沈線文が施される。地文はLR単節縄文。同図46は3単位小波状口縁の深鉢である。垂下沈線に連弧状の沈線文を伴う単位文様が施され、単位文様間にジグザグ状の沈線文を加えている。地文はLR単節縄文。波頂部近くに貫通孔を伴う。補修孔であろうか。同図47・48は46と同様の単位文様を施している。47は単位文様間に垂下沈線とジグザグ状の沈

線文を施している。48は単位文様間にジグザグ状の沈線文を施し、その他の部分にも沈線文を加えている。地文はLR単節縄文だがほとんど残っていない。同図49は連弧状の沈線文を単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線文を伴うと思われる。口縁は4単位小波状を呈する。同図50は垂下沈線を単位文様とし、単位文様間にジグザグ状の沈線文を施す。地文はRLR複節縄文。第131図51は波状口縁の深鉢である。頸部に沈線がめぐり、口縁から頸部にかけてV字状の重層する沈線文が施される。単位文様は垂下沈線の左右に弧線を伴うもので、単位文様間にジグザグ状の沈線文が施される。地文はLLL複節縄文か。全体に著しく多条化している。同図52は本類の典型例である。平縁で口径が最大径となるAⅢ形を呈する。口縁部に沈線がめぐり、垂下沈線を単位文様とする。単位文様間にジグザグ状の沈線文が施される。地文の押捺は弱く、L無節縄文と思われる。同図53は多条の垂下沈線を単位文様とし、単位文様間に多条化したジグザグ状の沈線文が施され、さらに横走沈線が加えられる。同図54も類似した文様構成をもつ。

第151図100～107は単位文様として連弧状の沈線文が施され、単位文様間にジグザグ状の沈線文が施される。同図108の単位文様は垂下沈線である。同図109は蕨手文かもしれない。第152図110・112は垂下沈線の中に曲線文を加えた単位文様をもち、著しく多条化したジグザグ状の沈線文が施される。同図111・113はジグザグ状の沈線の屈曲部分に横走する沈線が施される。

f種 単位文様間にX字状の沈線文を施すもの。(第131図55・56、第132図57、第152図114～116 図版45・57)

第3類に占める本種の割合はあまり高くない。全体に多条化の傾向を強く示すものが多く、単にX字状の沈線文だけで付属文様が構成される例は少ない。構成が判然としないものもある。

第131図55は平縁の深鉢である。垂下沈線の中のジグザグ状の沈線文を加えて単位文様とし、単位文様間にX字状の沈線文を施す。地文はLR単節縄文。内面は平滑で焼成は良好。同図56は大小の突起を対とする波状口縁の深鉢である。左右に弧線を伴う垂下沈線文を単位文様とする。単位文様間にX字状の沈線文を施し、さらに弧線を加えている。地文はLR単節縄文だが、器面が摩耗しているためほとんど判別できない。第132図57は頸部が強くくびれる大型の深鉢である。蛇行沈線を伴う弧線文を単位文様とし、単位文様間にX字状の沈線文を施す。X字状の交叉部分に凹文が施され、左右に横位の沈線文が施される。地文はLR単節縄文。

第152図114はX字状に交叉する部分に四つ葉状?の沈線文が施される。同図115・116はともにX字状に沈線が交叉し、116は交叉部分に8の字状の沈線文が施される。ともに半截竹管状工具による施文である。

g種 単位文様間に曲線的な沈線文を施すもの。(第132図59・60、第153図 図版45・58)

第3類に占める割合はあまり高くないが、堀之内I式後葉にはこのような文様構成のものが多くなると考えられる。単位文様自体は明確に存在するが、付属文様はくずれたものが多く雑

に施される場合が多い。極端な集合沈線となるものは本種には含めない。

第132図59は平縁のA I形の深鉢である。頸部に沈線がめぐり、沈線で区画された上部文様帯には弧線文が施される。単位文様はU字状の沈線と外に開く弧線からなり、単位文様の間には曲線文が施される。各付属文様はそれぞれ構成が異なる。同図60の単位文様は垂下沈線の間には蛇行沈線を加えたもので、単位文様間には雑な曲線文が施される。器面は粗く、地文の残りは悪い。第153図117は第132図60と類似した単位文様をもち、単位文様間には雑な沈線文が施されている。第153図118～120の付属文様は曲線的な沈線文からなる。同図122・123も類似した付属文様であろう。同図124・125はジグザグ状の沈線文かもしれない。同図126は斜行沈線と弧線が施される付属文様である。同図128・129は第132図60の破片と思われる。

h種 単位文様と付属文様が連続的に施され、両者の区別が判然としないもの。いわゆる集合沈線文を本種とする。(第132図61・62、第154図 図版45・58)

第3類に占める割合は低いが、第4類に含めた縄文を伴わない集合沈線文の量に比べれば本種の方が多い。本種には単位文様を喪失したものが一部含まれる。

第132図61は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、胴部が最大径となるAV形の深鉢である。口縁部が研磨され無文となる。頸部に沈線がめぐり、8の字浮文が貼付けられる。胴部の単位文様は重層化したU字状の沈線文に外反する弧線が付くもので、単位文様間には垂下沈線が施され、単位文様との間にくの字状の沈線文が重層的に加えられる。器面は内外面ともに平滑で、地文の遺存は悪い。故意に磨消されたものか、器面の乾燥が進んでからの施文によるためなのかははっきりしない。胎土・焼成ともに良好で、内外面ともに暗褐色を呈する。同図62は櫛状工具による条線文であるが、単位文様を描出していることから本種に含めた。単位文様は61に類似する。単位文様間は曲線的な条線文によって満たしている。地文はLR複節縄文である。

第154図130・131は同一個体である。口縁が若干内彎する深鉢であろう。地文はLR単節縄文だが、沈線が密に施されるため地文はほとんど意味をもたない。同図132は波状口縁を呈し、波頂部に凹文を伴う。縄文原体は不明。同図133・134は同一個体である。波状口縁を呈し、波頂部に深い刺突を施しているため内面に歪をもつ。単位文様は認められない。交叉する斜行沈線の間には弧線が極めて密に施される。地文はLR単節縄文か。同図135も単位文様を喪失していると思われる。縄文原体は不明。同図136の単位文様は垂下沈線の間には綾杉状の沈線文を加えたもので、単位文様の左右には密な斜行沈線が施される。地文はLR単節縄文。同図137～139の縄文原体は不明。沈線が密に施されている。

第3類を主体とし、頸部のくびれをもつA形の深鉢には上部文様帯を無文とするものと縄文を施すものの2種類がある。第156図と第157図は上部文様帯の破片である。胴部文様を欠くため、明確には分類し得ないものであり、第3類のほかに第1類と第2類が含まれるようである。

第156図148～156は地文をもたず、沈線や刺突が施されるもの（1）、同図157～164は地文をもたず、隆帯が付されるもの（2）、第157図は地文を伴い、隆帯が付されるもの（3）である。

（1）～（3）の他に地文を伴い、沈線や刺突が施される例（4）もあるが量的には少なく、この（4）は第3類に特定されよう。最も多いのは（3）の縄文地文に隆帯を伴う例で、（4）と同じくほぼ第3類に限られるようである。隆帯の周囲に施される沈線は密なものが多く堀之内I式後半を主体とすると考えられる。（1）、（2）は第1類や第2類の上部文様帯にも認められ、類を特定し得ない。たぶん第1類b種、第2類a種、同類b種、同類c種などのほか第3類が含まれると思われる。いづれにしても（1）～（4）の上部文様は長期にわたって認められることから、時期を判断する決め手とはなり得ないと考えられる。

第4類 第3類の文様をもつもので、地文の縄文を施さないもの。（第133図63～65、第155図140～146 図版45・59）

おもに第3類のd種～h種の文様構成に地文をもたないものがある。本類は第3類の量に比べれば極めて少なく、関東東部のあり方を如実に示しているとともに、関東南西部とは好対照をなしている。第IV群の実測個体中に占める割合はわずか1%である。第3類と同様に器種は深鉢に限られており、AII形・BIII形・BIV形などがある。

第133図63は頸部のくびれをもつAII形の深鉢と思われる。頸部には横走る沈線がめぐり、垂下する沈線文が単位文様となる。単位文様間には垂下沈線とジグザグ状の沈線を施している。器面は粗くザラザラしている。地文があれば第3類e種に分類される。同図64は3単位波状口縁の小型の深鉢である。櫛状工具によって波頂下に垂下条線が施され、単位文様をなす。単位文様間には曲線状の条線を施している。胴部下位に横走る条線が施されるが、全周するのは不明。器面は平滑。同図65は3単位波状口縁の深鉢である。底部から直線的に開くBIV形である。器面はやや粗い。波頂下に垂下沈線を施し、左右にジグザグ状の沈線文を加え単位文様としている。ジグザグ状の沈線は、第2類b種の連弧状の沈線文の変形したものと考えられる。単位文様間にも類似したジグザグ状の沈線文が施される。

第155図140は大型の深鉢である。太い沈線で文様が描かれる。口縁部に沈線がめぐり、垂下沈線やジグザグ状の沈線文が施される。器面はやや粗い。同図141は波状口縁を呈する深鉢である。波頂下に垂下沈線を施し、左右に連弧状の沈線文を加え、単位文様としている。器面は平滑。同図142は半截竹管状工具によって垂下沈線及び同心円文が施される。器面は平滑。同図143は胎土・焼成ともに良好で沈線が密に施される。同図144は内外面ともによく研磨されている。半截竹管状工具で交互に入組んだ弧線が施される。同図145は半截竹管状工具、同図146は棒状工具による密な沈線文が施されている。

第5類 単位文様をもたず、比較的太い沈線によって文様を施すもの。地文の有無によって2種に分けられる。

本類は量的に少なく、住居跡から出土したものが主体となる。第IV群の実測個体中に占める割合はわずか3%である。器種は深鉢・浅鉢などがある。深鉢は頸部のくびれをもつA形はなく、B II形、B III形に限られるようである。浅鉢はC形がある。口縁の形態は、深鉢においては波状口縁と平縁の両者があり、浅鉢は平縁である。文様の特徴は比較的太い沈線からなるもので、単位を構成しない単純な文様構成である。堀之内I式においては特異な存在である。

a種 地文に縄文をもつもの。

第112号住居跡から出土した深鉢(第71図7)のみである。口縁部の無文帯が外傾するB II形を呈し、胴部には太い沈線が全面に垂下する。地文は器面の摩耗が著しく、ほとんど残存しない。

b種 地文に縄文をもたないもの。(第142図132、第155図147 図版49・59)

第112号住居跡から出土した深鉢や浅鉢(第72図16・17・23)、第140号住居跡から出土した鉢(第80図19)などのほか、グリッド出土の第142図132、第155図147など少量である。第112号住居跡の16は本類の典型例である。胴部に太い沈線で綾杉状の沈線文が描かれる。同住居跡の17も類似した沈線文を伴う。同住居跡23の浅鉢はC形を呈する。格子状に沈線が施される。施文順序は縦→横の順に沈線を施している。第140号住居跡の19は小型の浅鉢である。内外面ともに平滑で、先の鋭い棒状工具で単位を構成しない沈線が施される。第142図132の浅鉢はC形を呈する。棒状工具による曲線文が雑に施される。第155図147は小型の深鉢であろう。口縁部に横走沈線がめぐり、胴部に山形の沈線文が施される。

第6類 胴部に隆帯が貼付けられるものを本類とする。本類は隆帯が貼付けられる以外に胴部文様の下端が隆帯乃至沈線で区画される特徴をもつ。従って単に沈線で胴部の下端を区画するものも本類に含め分類することにした。

第IV群の実測個体中に占める本類の割合はわずか3%であるが、破片の量からすればその割合はもう少し高いのではないと思われる。

本類は深鉢のみで占められ、しかも頸部をもつ深鉢のA形は含まれない。器形はB III形・B IV形・B V形・B VI形に限られる。第1類から第3類に属するA形の深鉢には隆帯を伴う例が存在するが、例外なく口縁から頸部にかけての上部文様帯に貼付けられるだけの隆帯であり、本類には含まれない。

胴部の文様は隆帯を単位文様とし、単位文様間に密に沈線が施される場合が一般的である。縄文を地文として施すものと施さないものの2種類があり、縄文を地文とする例が圧倒的に多い。縄文を地文とするものには磨消し縄文手法を伴う例が少量あり、本遺跡から出土した堀之内I式においては極めて稀な客体的存在である。これは堀之内I式の最も新しい段階に位置付け

られよう。

分類は隆帯の形状や文様帯下端の区画によって4種に分けられる。

a種 単位文様として単純な垂下隆帯が貼付けられるもの。(第130図44、第133図67・68、第158図 図版45・60)

本種には縄文を施すものと施さないものの2種類があるが、縄文を施さないものは少なく、縄文地文のものが圧倒的に多い。

第130図44は4単位波状口縁を呈するBV形の深鉢である。波頂部から垂下する隆帯が貼付けられ、刻目が施される。隆帯の左右には連弧状の沈線文が加えられ単位文様をなしている。波底部にあたる単位文様間には同じく垂下する連弧状の沈線文が施され、間にジグザグ状の沈線文が加えられる。連弧状の沈線文が施される深鉢で隆帯を伴う例はほとんどみられない。第133図67は3単位の波状口縁であろう。波頂部から隆帯が垂下する。口縁には円形浮文が貼付けられ、そこから逆V字状の沈線文がのびる。地文はなく器面は丁寧に調整されている。同図68は大型の深鉢で、外反し開くBV形を呈する。4単位波状口縁で波頂部から刻目を伴う隆帯が垂下し、胴部文様の下端を区画する隆帯が貼付けられる。文様の施文行程は最初に地文の縄文を施し、隆帯を貼付けたのち沈線文を描出しており、下端を区画する隆帯の下には縄文が磨消されずに残っている。隆帯間に施される沈線文は同心円文に斜行沈線を加えたものである。地文はLR単節縄文。第158図181は単位文様となる隆帯が細く、単位文様の意味をほとんどもたない。隆帯間に施される同心円文は密で、地文の縄文は判別できないほどである。同図182・184は同一個体である。LR単節縄文を地文とし、棒状工具によって同心円文や斜行沈線が施される。同図183は波状口縁を呈する深鉢で波頂部に貫通孔を伴う。胴部には3本の隆帯が垂下し、隆帯間には密に沈線が施される。縄文は施されない。同図185は8の字浮文を伴う。同図186・188・189は胴部の文様帯下端を刻目を伴う隆帯によって区画している。188は隆帯の下方に縄文が磨消されずに残っている。同図190～193は地文を伴わない例である。193は内外面ともに平滑。

b種 単位文様として梯子状の隆帯が貼付けられるもの。(第159図194～199 図版60)

本類には梯子状の隆帯のほかにH字状を呈する隆帯もある。量的には少なく、全体形を知り得るものはない。隆帯間に施される文様は密な沈線文が主体で、地文に縄文を施すものと施さないものの2種類がある。

第159図194・197は同一個体である。刻目を伴う3本の垂下隆帯が付され単位文様を構成している。単位文様間には棒状工具による垂下沈線や斜行沈線などが密に施される。地文はLR単節縄文か。同図195は梯子状の隆帯が付され、隆帯内部には文様が施されない。隆帯以外の部分にはハの字状に沈線文が縦列に施され、その外側に沈線が垂下する。地文の有無は不明。196もまた梯子状の隆帯が付されるもので横位の隆帯との接続部分に刺突が加えられる。198は梯子状

の隆帯がつまったような隆帯が貼付けられている。曲線的な沈線文が施されている。器面の摩耗が著しく地文が磨消されているのかは不明。同図199は地文をもたない。刻目を伴う隆帯を貼付け、隆帯間には極めて密な沈線文が施される。

c種 隆帯が貼付けられるもので、磨消し縄文手法を伴うもの。(第159図200～209 図版60)
量的には僅少で、全体形を知り得るものは第20B号住居跡から出土した深鉢(第38図2)のみである。付される隆帯は多様だが、隆帯間に施される沈線文はa種やb種にみられるほどの密な沈線文ではなく、磨消し縄文の効果을あげるためか、逆にそれほど密な沈線文は施されない。器面に施される文様の施文行程は縄文→隆帯→沈線文の順で行い、最後に沈線間の縄文を磨消している。

第159図200は刻目を伴わない隆帯を貼付け、隆帯間に同心円文と斜行沈線を施して沈線内部の縄文を磨消している。同図201・203・204は同一個体である。同心円文の間を交互に磨消している。同図202・206も同一個体である。深い刻目を伴う隆帯が付され、口縁にも隆帯がめぐる。連結する渦巻文が施され、渦巻文内部の縄文はすべて磨消されている。同図205は斜行する沈線文の内部を磨消している。同図207はほとんど縄文が磨消されている。同図208は小型の深鉢である。同心円文内部の縄文を磨消している。同図209も同様に小型の深鉢である。沈線が密に施され、全面を磨消しているためほとんど縄文は残っていない。

d種 胴部文様の下端が沈線によって区画されるもの。(第133図66 図版45)

胴部文様を区画する意味においては隆帯とかわらないが、隆帯を単位文様とする土器に比べ、沈線文はあまり密でない。量的にはわずかである。破片でみるべきものではなく、全体形を知り得るものは第133図66のみである。3単位波状口縁を呈し、波頂下の刺突が加えられる。単位文様は垂下沈線の間にはハの字状の沈線文を伴うもので、単位文様間には刺突と垂下沈線が施される。下端は2本の沈線によって区画されている。地文は不明瞭で、器面の乾燥が進んでから施されたものか。器形は底部から直線的に開くBIV形である。

第7類 櫛状工具または半截竹管状工具によって条線文を施すもので、文様の単位を構成しないものを本類とする。縄文を地文とし、条線文を加えるものも本類に含めることにした。

第IV群の実測個体中に占める本類の割合は8%程度と少量ではあるが、堀之内I式のほぼ全期間を通じて認められる。器種には深鉢と鉢があるが、鉢で条線を伴うものはわずかである。形態はA I形・A II形・A III形・B III形・B IV形の深鉢があり、鉢にはA形・B形などがある。深鉢で最も多いのはB III形・B IV形などの頸部をもたないものである。

条線文の種類は多く、いろいろな形状の施文工具が使われたと考えられる。主として4～6本が束となった櫛状工具が多いようである。条線文は垂下及び斜行するものが多く、一般に雑な施文が行われる。条線文のみによって器面が満たされるものが多いが、口縁部に凹文などが

施されるものもわずかながら存在する。本類は4種に分けられる。

a種 縄文を地文として施したのち、条線文を施すもの。(第134図69、第135図77、第161図233)

量的には極めて少ない。第134図69はLR単節縄文を地文とし、櫛状工具で斜行条線文を施している。器面は摩耗が著しく地文の残りは極めて悪い。第135図77はAI形を呈する大型の深鉢である。LR単節縄文を地文とし、櫛状工具によって雑な条線文が施される。第161図233はLR単節縄文を地文とし、連続的に曲線状の条線文を施している。

b種 垂下及び斜行する条線文を施すもの。(第134図70～76、第142図130、第160図210～224・227 図版45・61)

第7類のうち本種が最も多い。第134図70は歪が著しく、器厚も一定してない。口縁に条線がめぐり、胴部には雑な垂下条線を施している。同図71は器面の剝落が著しい。櫛状工具によって浅い条線が施される。同図72は3単位波状口縁を呈するBIV形の深鉢である。半截竹管状工具によって斜行条線が施される。同図73は太い半截竹管状工具によって垂下条線が施される。同図74は半截竹管状工具、同図75は櫛状工具である。同図76は73と同様に太めの半截竹管状工具による垂下条線である。器面の剝落が著しい。第142図130の鉢は半截竹管状工具による斜行条線である。

第160図210～226のうち213・216・220のように沈線や凹文を施す例は少ない。同図227のように垂下条線と斜行条線の両方が施されるものもあるが、垂下乃至は斜行のどちらか一方に限られるのが普通である。223や224のように条線で文様を描出するものもあるが単位は構成しないであろう。

c種 蛇行あるいは曲線的な条線文を施すもの。(第160図225・226、第161図228～232・234・235 図版61)

b種に次いで多い。乱雑に櫛状工具を器面に走らせるものがほとんどである。第160図225・226は条線文が入組文のように施される。第161図228は大型の深鉢であろう。4本を束とする櫛状工具で蛇行条線が施される。同図230は口縁に条線がめぐり、同図231は著しく蛇行した条線文である。同図235は条線で同心円文を描出している。

d種 その他のもの

本種に含まれる土器は第112号住居跡から出土した深鉢(第72図14)の1点のみである。胴部上半に垂下条線を施し、下半にLR無節縄文を施している。極めて例外的な存在である。

第8類 縄文のみのもの。本類には口縁部に若干の文様が施されるものも含まれる。

本類は第IV群の実測個体中に占める割合が28%と極めて高く、堀之内I式全般にわたって認められる。器種は深鉢・鉢・浅鉢がある。鉢・浅鉢に占める本類の割合は44%にも達している。

深鉢の形態はA I形・A II形・A III形・B II形・B III形・B IV・B V形などが認められ多様ではあるが、圧倒的にB III形・B IV形の量が多く、次いでA III形が比較的多く認められる。時期的にはB形は堀之内I式全般にわたって存在すると思われるが、A形については後出的な形態ではないかと考えられる。鉢は全器形がそろっており、浅鉢はA形・C形・D形などがある。

口縁の形態は、深鉢においては平縁となるものが最も多く、次いで3単位乃至4単位のもの認められる。A形の深鉢には波状口縁となるものが多い。鉢や浅鉢についてはほとんどが平縁となるもので占められている。

施文される縄文はLR単節縄文が圧倒的に多く、RL単節縄文やLRL・RLRなどの複節縄文は僅かな量である。さらに無節縄文に至っては、ほとんど認められない。施文は横位、斜位に原体を転がす場合が一般的である。本類は3種に分けられる。

a種 全面に縄文のみ施されるもの。(第135図78～82、第136図、第137図、第138図96～100、第142図124・126～129・131、第143図137、第162図、第163図、第164図253 図版46・49・62)

第8類のうち、本種が圧倒的に多い。第135図78・79は口縁部が外傾するB II形の深鉢である。B II形は第1類において特徴的な器形であり、堀之内I式の古い段階に位置付けられることからこれらも堀之内I式の古手のものである。縄文の押捺は強く明瞭である。同図80・81は頸部のくびれが強く、形態からすれば沈線文を伴うのが普通であろう。しかし、沈線文を伴う深鉢であれば80のように口縁が薄くなることはほとんどないといってよい。A形の深鉢の中で強いくびれをもつA I形については第5号土坑出土の例(第105図1)から堀之内I式の後半になってから現れる器形ではないかと思われる。同図82は歪がありB III形乃至B IV形に含まれる。第136図83はB III形の典型例である。縄文は強く押捺されている。同図84は口縁の波状部分が1つしかないめずらしい例である。口縁が若干欠損しているが明かに製作時に1つしか波状が作られなかったものである。千葉県下では類例を知らない。同図85は口縁部の縄文を若干磨消している。同図86は鉢かもしれない。底部から直線的に開く器形である。同図88は頸部のくびれが強いA I形を呈し、縄文はLL反撚縄文。第137図90はRL単節縄文を地文とする。胎土・焼成ともに良好で、内面の研磨が著しい。同図91はやや口縁が内彎する。90と同様に内面の研磨が著しい。同図92は貫通孔を伴う。同図94・95は胴部下半が細く長い形態である。94のような形態のものはあまりみられない。第138図96～100は小型の深鉢である。96は剝落が著しい。

第162図236・239は同一個体である。239のように結節が認められる例もわずかながら存在する。第163図244は口縁に小突起が付けられている。同図249は頸部をもち、第135図80と同じく口縁が薄くなる。第164図253はRLR複節縄文が施されている。

鉢・浅鉢には第142図126のように口縁に小突起を付けるものはほとんどなく、平縁が主体であり、口縁から底部にかけてほぼ全面に縄文が施される。同図124は口縁部が内彎する大形の鉢である。口縁部が内彎する器形は、鉢にも浅鉢にも量的には少ない。同図131の丸底の浅鉢は極

めてめずらしい。堀之内Ⅱ式と考えられる。第143図137は胴部中位でいったん内折し、再び外反するF形の鉢である。堀之内Ⅱ式と考えられる。内折部位から底部にかけても縄文が施される。

b種 全面に縄文が施されるが、口縁部に凹文や若干の沈線文などが施されるもの。(第138図101～104、第142図125、第164図254～259 図版47・62)

個体数はあまり多くない。深鉢ではAⅡ形・AⅢ形・BⅣ形・BⅤ形などに限られている。鉢はB形・C形・D形の形態があり、浅鉢については口縁部に文様を伴う例はない。

第138図101は口縁部に沈線がめぐり、波頂部に凹文が施される。同図102は底部から直線的に開くBⅣ形を呈し、波頂部に凹文と弧線、口縁に沈線が施される。胎土・焼成は良好で、暗赤褐色を呈する。内面は平滑。同図103・104も波頂部に凹文を伴う。104はa種に含めてもよいかもしれない。第164図255は平縁で凹文を伴う。関東南西部においては地文をもたず沈線文のみで口縁に凹文を伴う例は多いが、本遺跡から出土した土器には凹文を伴うもの自体僅少であり、さらに地文縄文をもつ点において関東東部の地域性を強く感じさせる。第142図125の鉢は口縁の内彎する部分に刺突文と沈線文が施されている。第164図258・259も鉢であろう。沈線と刺突文がめぐり。

c種 全面に縄文が施されるが、口縁部に、幅の狭い無文帯をもつもの。口縁部の無文帯と胴部の縄文とは沈線で区画される。

第112号住居跡出土の深鉢(第71図8・11)が本種に含まれ、量的には少ない。グリッドから出土した例はほとんどなく、鉢や浅鉢については本種に含まれる例はない。堀之内Ⅰ式の古い段階に特徴的に存在すると考えられることから他種に含めず1種として分類した。第112号住居跡の深鉢(第71図9)は本種に含めてもよいかもしれない。

第9類 無文のものを本類とする。(第140図108、第142図133・134 図版48)

個体数は少なく、第Ⅳ群の実測個体中に占める割合は6%程度である。住居跡から出土したものが比較的目立つ。器種は深鉢・鉢・浅鉢があるが、主体は鉢や浅鉢である。深鉢の器形はBⅢ形・BⅣ形・BⅤ形などで、頸部のくびれをもつA形にはまったく存在しない。鉢の器形はA形・B形・C形などである。浅鉢はA形・B形・C形の器形が認められる。口縁の形態は、深鉢においては、平縁と波状口縁があり、鉢・浅鉢には平縁となるものが多い。全体的に深鉢の器面調整は粗く、平滑にするために研磨などを行う例はなく、鉢・浅鉢の器面調整の仕方とは大きな相違を示している。鉢や浅鉢は内外面ともに研磨されるものが多く、特に浅鉢には著しく研磨されたものが多い。また、胎土においても浅鉢の精製度は高いようである。

第140図108はBⅢ形を呈する波状口縁の深鉢である。内外面の調整は粗く、ザラザラしている。胎土はやや粗い。第9号住居跡の深鉢(第19図6)も108と同様に器面調整は粗い。第142

図133は内外面ともによく研磨されている。胎土は良好。同図134は輪積痕を残し、内外面はほとんど調整されていない。胎土は粗い。

第10類 紐線文のあるものを一括する。(第139図 図版47・48)

胴部に施される文様からは他類に含められるが、紐線文が描出される时期的な様相を勘案し、紐線文のみによって分類した。第12類d種は本類に含まれない。出土量は微量だが、加曾利B1式の紐線文の土器とは明らかに異なる一群である。时期的には堀之内I式の最も新しい段階から堀之内II式にあたりと考えられ、本類が主として堀之内II式のいわゆる粗製土器にあたるのではないと思われる。

第139図105は本遺跡から出土した最も大型の深鉢である。4単位波状口縁を呈し、口縁が最大径となるAIII形である。口縁部及び頸部に紐線文が貼付けられ、波頂部からも紐線文が垂下する。地文はLR単節縄文でほぼ全面に施され、さらに半截竹管状工具によって沈線文が加えられる。頸部から口縁にかけては重四角文、胴部には、垂下する紐線文を目安として重層するU字状の沈線文と向い合う重弧線文からなる単位文様が施される。単位文様と単位文様の間は沈線が密に施され重菱形文を呈する部分もある。いわゆる集合沈線文と言い得るが、胴部に施される単位文様は依然明確である。内面は平滑で口縁に浅い沈線がめぐる。堀之内I式末から同II式にあたりと思われる。同図106は底部から直線的に開くBIV形である。口縁部に紐線文が貼付けられ、内面には明瞭な沈線がめぐる。胴部は全面にLR単節縄文が施される。胎土はやや粗い。堀之内II式と思われる。同図107は平縁で外反するBV形の深鉢である。口縁部に紐線文が貼付けられ、内面に深い沈線がめぐる。地文はLR単節縄文で、半截竹管状工具による沈線文が施される。垂下する沈線で胴部を縦に4単位乃至5単位に分割している。垂下沈線の間には斜行沈線が施され、胴部下位にも横走する沈線が施される。垂下する沈線は単位文様と見なすことが出来るが、堀之内II式に含められよう。

第11類 第1類から第10類の中に含まれないものを本類とし、おもに文様の単位を構成しないものである。堀之内I式及びII式を含む。(第140図109～114、第165図 図版48・63)

第IV群の実測個体中に占める本類の割合は4%弱である。深鉢の形態はAII形・AIII形・AIV形・BIII形・BIV形などがある。鉢はC形、浅鉢はB形がある。

第140図109は胎土・焼成ともに良好で明赤褐色を呈する。胴部には半截竹管状工具によって矢羽状の沈線文の帯が上下二段に施され、その間に多条化したクランク状の沈線文が施文される。堀之内式土器には極めて異質な文様構成であり、類例を知らない。あるいは堀之内式以外の型式かもしれない。とりあえず本類に含めておく。同図110は底部から直線的に開く器形だが歪をもつ。口縁部に貼付け文を伴い、その下に刻目を施した隆帯がめぐる。口縁の内面に沈線

を施す。胴部は櫛状工具による乱雑な条線文が施されている。縄文は施されていない。器面は丁寧に調整されている。堀之内II式に含まれよう。同図111は半截竹管状工具で口縁部に沈線をめぐらせ、異方向の斜行沈線を胴部下半で交叉させている。単位を構成するのは不明。地文はLR単節縄文である。堀之内I式。同図112は底部から外反し開くBV形の深鉢である。LR単節縄文を地文とし、重三角文に類似した沈線文が施される。堀之内I式末に位置付けられよう。同図113は口縁部が極端に開く小型の深鉢である。口縁は3単位を呈し、波頂部に3本の隆帯が貼付けられる。波頂部からは刻目を伴う隆帯が垂下し、周囲に沈線が施される。頸部には沈線がめぐり、胴部の縄文とを区画している。同図114は頸部をもつ深鉢であろう。口縁に段をもち、連続する貫通孔の部分が一段高くなる。地文はL無節縄文で、棒状工具による区画文などが施される。胎土に砂粒を多く含み、器面の剝落が著しい。千葉県内には類例は認められない。堀之内I式か。第165図260～268は地文に縄文を施し、棒状工具や半截竹管状工具で単位を構成しない乱雑な沈線文が描出される。このような乱雑な沈線文の深鉢は量的には少なく、極端に沈線の多条化したものもないことから堀之内I式に属すると考えられる。

第165図269～272は同一個体かと思われる。口縁部の破片しか検出されなかった。棒状工具で単位を構成しない沈線文を施し、沈線の間刻目を施している。地文はLR単節縄文である。この特徴的な沈線文を伴う土器は類例に乏しいが、神奈川県伊勢原市下北原遺跡から出土した第6群第1類G型の土器と極めて類似している。ただ、下北原遺跡の例は隆帯に刻目を伴う点や地文縄文を伴わないなどの点において、本遺跡例とは異なる。下北原遺跡例が地文を伴わないのは地域性を反映したものと考えられる。本例は堀之内I式であろう。

第12類 堀之内II式とされるものを一括する。文様のモチーフと施文方法から5種に分けられる。

文様構成上の大きな特徴は、胴部の文様を縦に数分割する単位文様が失われ、横位に連続する幾何学的な文様を主体とする点である。堀之内I式の末葉には単位文様と付属文様との区分が不明瞭となるが、完全に単位文様が払拭されるには至らない。

本類の器形は限られており、深鉢においては、底部から直線的に開くBIV形と底部から外反して開くBV形が主体となる。頸部のくびれをもつA形の深鉢は認められない。鉢については、胴部中段でいったん内折し、再び口縁にかけて外反し開くF形が特徴的である。浅鉢はB形・E形が出土している。鉢のF形は第8類にも認められるが、この器形については堀之内II式に限定される器形と考えられる。口縁の形態は平縁となるものが多く、3単位乃至4単位のものもある。

第12類の施文方法で特筆されるのは縄文充填手法である。本遺跡から出土した堀之内I式には全般を通じてこの手法は用いられない。また、充填される縄文は堀之内I式に比べてかなり

細かく、原体に使用する繊維に大きな違いが認められる。原体の種類はLR単節縄文が最も多く、RL単節縄文は少量である。

総じて器面はよく研磨され、内外ともに平滑である。胎土は良好で、堀之内I式に比べれば全体に精製度はよい。

本類は口縁内面に沈線を伴うものが一般的で、深鉢の中には口縁が内屈するものもある。口縁内面の沈線は堀之内I式の末にはわずかながら認められるようになる。

本類の出土量は堀之内I式の出土量に比べれば極端に少なく、実測図及び拓影図として挙げたものがそのほとんどである。第IV群の実測個体中に占める割合はわずか5%にも満たない。

a種 縄文を地文とし、三角形や菱形といった幾何学的な文様を施すもの。(第141図116・120・121、第166図273～280 図版48・63)

第141図116は外反する器形の深鉢である。沈線で上下を区画し、中段に施した波状の沈線を目安に上下に重菱形文を施している。地文はLR単節縄文が疎に施される。口縁内面には明瞭な沈線がめぐり、同図120は中段でいったん内折し、口縁にかけて外反するF形の鉢である。LR単節縄文を地文とし、重三角文を施している。口縁内面には細い沈線がめぐり、胎土には砂粒を多く含む。同図121も同じF形の鉢であろう。LR単節縄文を地文とし、沈線文が施される。

第166図273・274は同一個体である。外反する器形の深鉢で、口縁内面に沈線を伴う。上下で文様帯を区画し、重三角文を連続的に描出する。地文はLR単節縄文か。内外面ともに平滑。同図275は若干彎曲する。地文にLR単節縄文を施し、棒状工具で重菱形文を施す。同図276は第141図116と同様に連続的に重菱形文が施されていると思われる。地文はLR単節縄文。第166図277は重三角文が施されている。同図278はL無節縄文を地文とし、太い沈線で重三角文を施している。同図279の地文はRL単節縄文である。重三角文が施される。同図280はLR単節縄文を地文とする。半截竹管状工具によって密な重三角文が施される。口縁内面に沈線を伴う。

b種 沈線によって渦巻文などの曲線的な区画文を施し、区画内に縄文を充填するもの。(第141図118・122、第166図282～293 図版48・63)

第141図118は外反する器形の深鉢である。文様帯の上下を沈線で区画したのち、渦巻状の区画文を施して内部に縄文を充填している。内外面ともに平滑で器面は暗褐色を呈する。胎土は良好。同図122はF形を呈する大型の鉢と思われる。口縁から蛇行沈線が垂下し、沈線文の内部にLR単節縄文を充填している。内外面ともに平滑で器面は暗褐色を呈する。胎土は良好。

第166図282は波状口縁を呈し、口縁内面に浅い沈線を伴う。波頂部に8の字浮文が貼付けられていたと思われるが、剥落している。沈線で渦巻状の区画文を施し、内部にLR単節縄文を充填する。同図283は太い棒状工具で沈線文を施し、LR単節縄文を充填する。口縁内面に明瞭な沈線が施される。同図284はRL単節縄文を充填している。同図285・288・289はLR単節縄

文を充填している。289は他の2点とは充填部位が逆になっている。同図286・287・290～292は渦巻状の区画文であろう。LR単節縄文を充填する。同図293はO字状の区画文と斜行及び横走る沈線を施し、内部にLR単節縄文を充填する。同図294は胴部下半から底部にかけての破片である。区画文の中にLR単節縄文を充填する。胴部文様が不明のためとりあえず本種に含めた。同図295はRL、296はLR単節縄文を充填している。

c種 沈線によって、三角形や菱形といった幾何学的な区画文を施し、区画内に縄文を充填するもの。(第141図117、第143図138、第166図281、第167図 図版48・63・64)

第141図117は外反する器形の深鉢である。口縁には幅の狭い無文帯を形成している。沈線で重菱形文や重三角文を区画し、内部にLR単節縄文を充填している。口縁内面には沈線が施される。第143図138はB形の浅鉢である。沈線で重三角文を施し、内部に縄文を充填している。内面はよく研磨されている。

第166図281は刺突を伴う特殊な例だが本種に含めた。頸部にくびれをもつが器形ははっきりしない。沈線で重三角文?を区画して刺突を充填し、重三角文以外の部分に縄文を施している。他に同一個体の破片が2点ほど出土している。第167図297は口縁内面に沈線を伴う。LR単節縄文を充填する。同図298・299は同一個体である。半截竹管状工具によって重三角文?を施し、LR単節縄文を充填する。同図300は強く外反する器形で、口縁内面に深い沈線が施される。X字状に区画した沈線文の内部にLR単節縄文を充填し、区画文の上下に沈線を施して重三角文を描出している。同図301・302は類似した重三角文を施しているが、充填される縄文は301がRL、302がLR単節縄文である。ともに内面には浅い沈線が施される。同図303は重三角文の数区画にわたって縄文が充填される。内面の沈線は深い。同図304は強く外反し、口縁が内屈する。同図305は重三角文の外側に縄文が充填される。同図306は300と似た文様構成だが、X字状の区画文の左右が重三角文となる。同図309も類似した文様をもつ。同図307・308・310は重三角文である。同図311は区画の外に縄文が食み出しているが、磨消されずに残っている。同図312・313は同一個体である。平縁を呈すると思われる。口縁部に8の字浮文が貼付けられる。内面の沈線は深い。同図314は298・299と同一個体であろう。同図315・316は同一個体と思われる。波状口縁を呈し、波頂部に凹みを伴う。

d種 文様のモチーフや施文方法はa種からc種に含まれるが、口縁部に隆帯が貼付けられるものを本種とする。(第141図115・119、第168図317～330 図版48・64)

第141図115は底部から直線的に開く器形の深鉢である。隆帯から口縁にかけては研磨され無文となる。隆帯には8の字浮文が貼付けられる。胴部はLR単節縄文を地文とし、文様の下端を区画してから重三角文を描出している。胎土はやや粗いが、内面は平滑。口縁内面に浅い沈線を伴う。同図119は口縁部に貼付けた隆帯に竹管状工具による刺突文を施し、8の字浮文を貼付けている。胴部は沈線で文様を区画し、内部にRL単節縄文を充填している。口縁内面に深

い沈線を伴う。

第168図317・321は同一個体である。小波状の口縁を呈すると思われ、刻目を伴う隆帯に8の字浮文が貼付けられる。部分的に沈線が重層的に施され、重菱形文を描出している。同図318～320も類似した文様構成をとる。同図322の沈線の区画はやや雑である。口縁内面の沈線は深い。同図323はやや太い隆帯が貼付けられる。同図324は縦位にも隆帯が貼付けられ、区画内にはRL単節縄文が充填される。同図325は刺突を伴う隆帯である。縄文は施されない。同図326・327は同一個体である。刻目を伴う隆帯が上下二段に貼付けられ、短い縦の隆帯で上下の隆帯を接続させている。胴部は沈線で区画した文様の内部に細かいLR単節縄文を充填している。同図329も類似しているが、口縁が著しく内屈する。同図330の隆帯には縦長の刻目が施される。同図328は口縁が内屈する。

e種 縄文地文や充填縄文手法をとらず、沈線のみによって三角形などの幾何学的な文様を描出するもの。口縁内面に沈線などで文様が施されるものも本種に含まれる。(第142図135、第143図136・139、第168図331～335、第169図 図版49・64・65)

第142図135は外反する器形の浅鉢で、E形の唯一の例である。内外面ともに平滑で、胎土は良好。沈線で文様帯の上下を区画し、内部に重三角文を施している。第143図136は胴部中位でいったん内折し再び開くF形の鉢である。内折する部分から口縁にかけて先端の鋭い棒状工具で重三角文が描出される。胎土はやや粗いが、焼成は良好で内外面の調整も丁寧に行われている。同図139は櫛状工具によって重三角文に類似した文様が施される。浅鉢のB形である。

第168図331～334は同一個体である。波状口縁を呈し外反する器形の深鉢である。波頂部内面に刺突文と弧線が施される。また、波頂下に8の字浮文が貼付けられる。胴部には矢羽状の沈線文が描出される。同図335は外反する器形の深鉢である。半截竹管状工具によって重三角文が施される。器面は粗く、沈線は不明瞭である。口縁内面に沈線を伴わない。第169図336～345は内外面ともによく研磨され、黒褐色を呈する。内面には沈線と刺突文が施される。337は波頂部にあたり、内面に渦巻文が施されている。343は口端が窪み、内面に渦巻が施される。同図346～348は口縁部に付けられる突起である。346～347は内面に沈線が施される。347は貫通孔を伴う。346～348は堀之内II式～加曾利B I式の過渡期の様相を示しており、加曾利B 1式としてもよからう。量的には極めて少なく、すべて図示した。

第V群土器

縄文時代後期中葉から後葉の土器を一括する。

第1類 加曾利B式土器 精製土器と粗製土器の2種に分けられる。粗製土器には紐線文を伴うものが含まれており、第IV群10類と一応は区別されるが、堀之内II式と加曾利B 1式との区分は極めて不明瞭であって本類には堀之内II式から加曾利B 1式にかけてのものも含まれて

いる。

a種 加曾利B式の精製土器を本類とする。(第143図140～142 図版49)

わずか3点にすぎない。小型の深鉢が1点と浅鉢が2点である。第143図140は口縁部に4cm前後の紐線文が3単位前後貼付けられている。器面にはゆるいLR単節縄文が施される。内面は平滑で、胎土・焼成ともに良好。加曾利B1式。同図142は横走る浅い沈線によって口縁部に無文帯を形成し、沈線下にLR単節縄文を施文している。口縁内面に浅い沈線がめぐり、内面は丁寧に調整されている。加曾利B1式。同図141は5単位の波状口縁を呈し、頸部に無文帯をもつ。口縁部の文様帯には比較的粗いLR単節縄文が施されており、無文帯はよく研磨されている。頸部には2本の沈線がめぐり、間に刻目を加えている。胴部には斜行する沈線が密に施される。内面は丁寧に調整され、色調は内外面ともに黒褐色を呈する。胎土は良好。加曾利B2式。

b種 粗製土器を本類とする。(第143図143、第170図1～12 図版49・65)

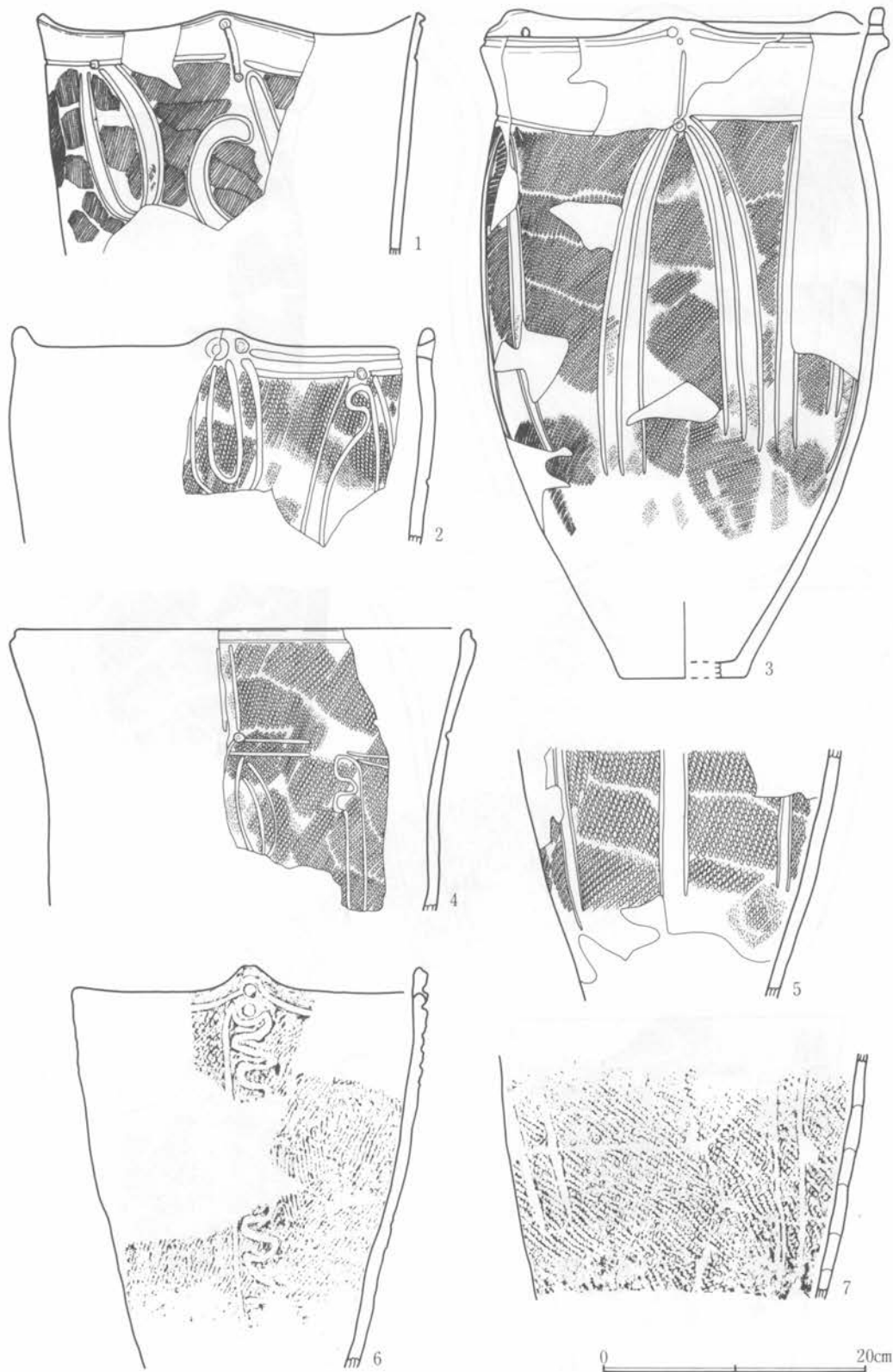
出土点数は13点と少なくすべて破片である。1Aグリッド及び1Bグリッドから出土している。

第143図143は紐線文を伴わない粗製土器である。胎土に若干の砂粒を含むが、焼成は良好で、硬質。色調は内外面ともに黒色を呈する。地文はLR単節縄文だが器面の乾燥が進んでからの施文と思われ、縄文の押捺は弱い。口縁内面に明瞭な横走沈線が施されている。加曾利B1式。

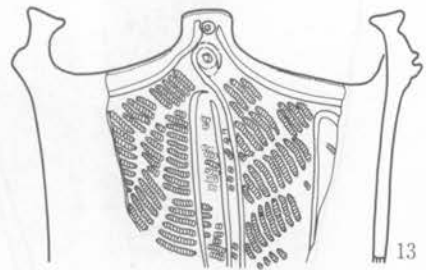
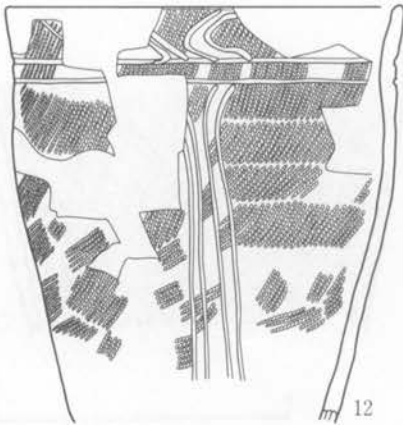
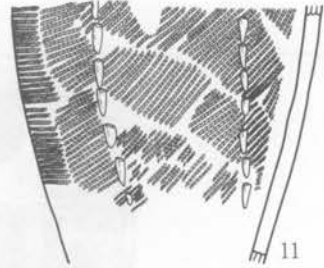
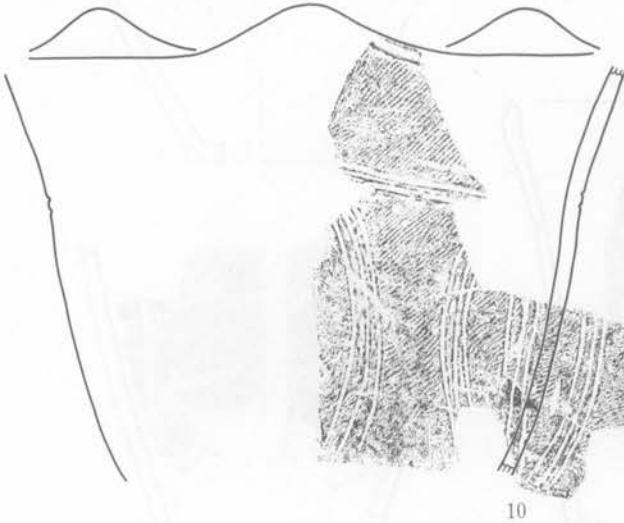
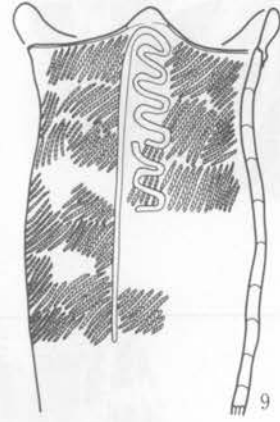
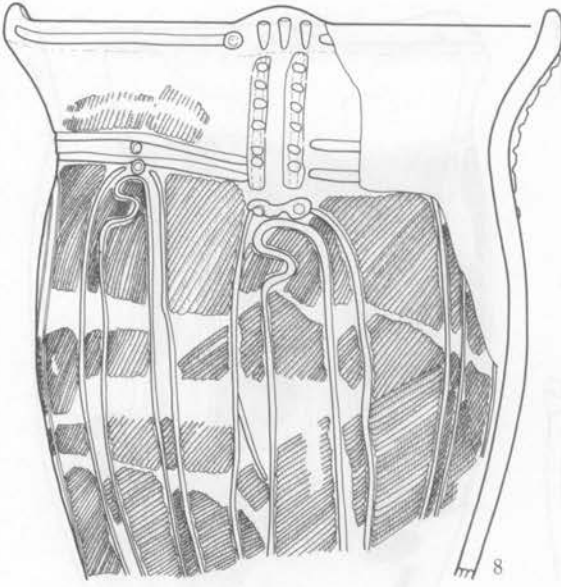
第170図1～12は紐線文を伴う例である。この中には堀之内II式に属するものも若干含まれている。1は口唇部に小突起を伴い、やや太めの紐線文が貼付けられている。地文はLR単節縄文で、太い半截竹管状工具によって斜行沈線が施される。2は縦位施文の地文縄文で、半截竹管状工具による沈線を伴う。口縁内面には先の鋭い棒状工具によって横走沈線が施される。3はゆるやかな波状口縁と思われ、波頂下に1対の8の字浮文が貼付けられる。口縁部には紐線文がめぐり、胴部には櫛状工具による単位を構成しない条線文が施される。地文はもたない。4は頸部に貼付けられた紐線文だろう。縄文地文に横走る沈線が施される。5・6は口縁部の内面に横走沈線を伴わない例である。7は縄文を地文とし、半截竹管状工具による斜行沈線が施される。8は縄文の押捺が弱く、器面の乾燥が進んでから施文されたと思われる。地文はLR単節縄文である。9は地文をもち、櫛状工具による条線が施される。口縁部には途中から刻目の方向が変わる隆帯を伴う。10は紐線文の下端に横走沈線を伴う。胴部文様は半截竹管状工具による弧線文と思われ、堀之内II式に含まれよう。11・12は数本の紐線文が貼付けられている。11は3本の紐線文が貼付けられ、縦位に連結している。胎土はやや粗く砂粒を含むが、焼成は良好。胴部には半截竹管状工具による沈線文が施される。地文の縄文原体は不明。口縁内面に細い沈線がめぐり、11・12は堀之内II式の最も新しい段階にあたると思われる。

第2類 安行Ⅱ式土器 (第170図13)

1点のみである。13は深鉢の口縁部破片であろう。左右に分かれた突起にはそれぞれ3本の沈線が施され、中央に凹文が付される。胎土・焼成ともに良好で、器面は淡赤褐色を呈する。内面は丁寧に調整されている。

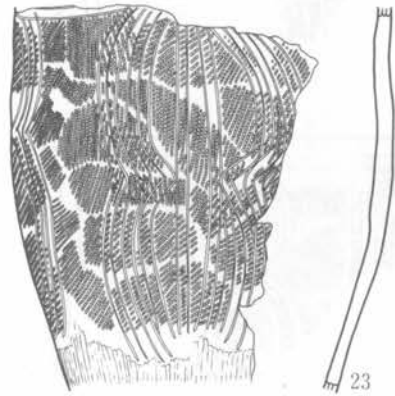
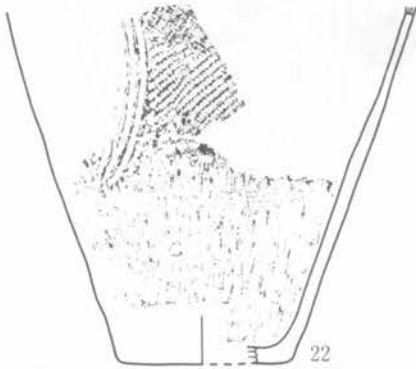
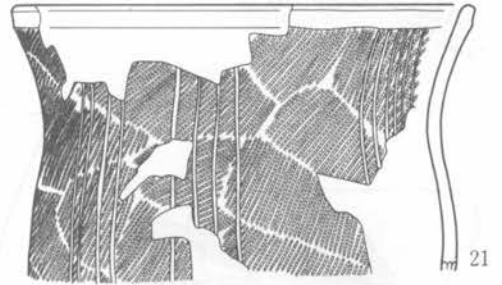
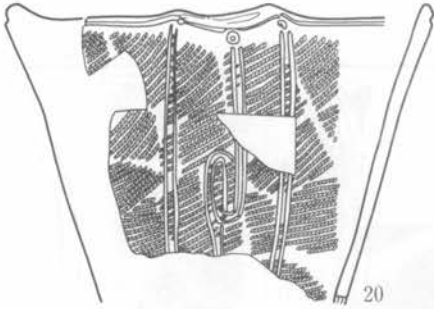
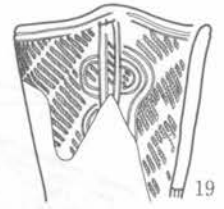
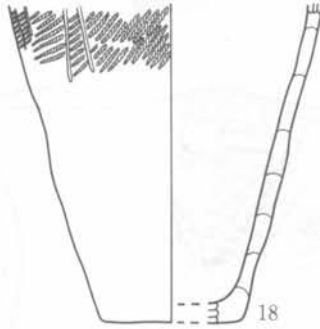
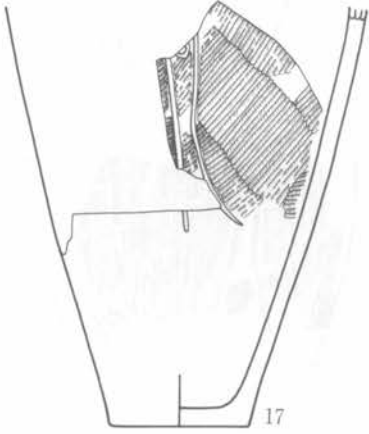
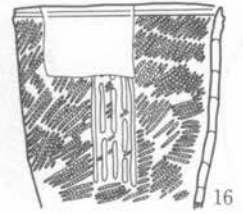
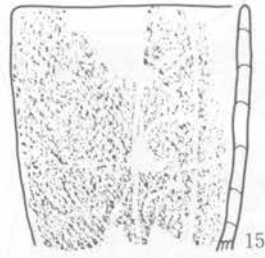
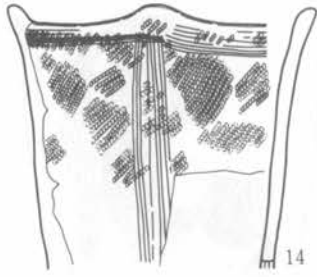


第123図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



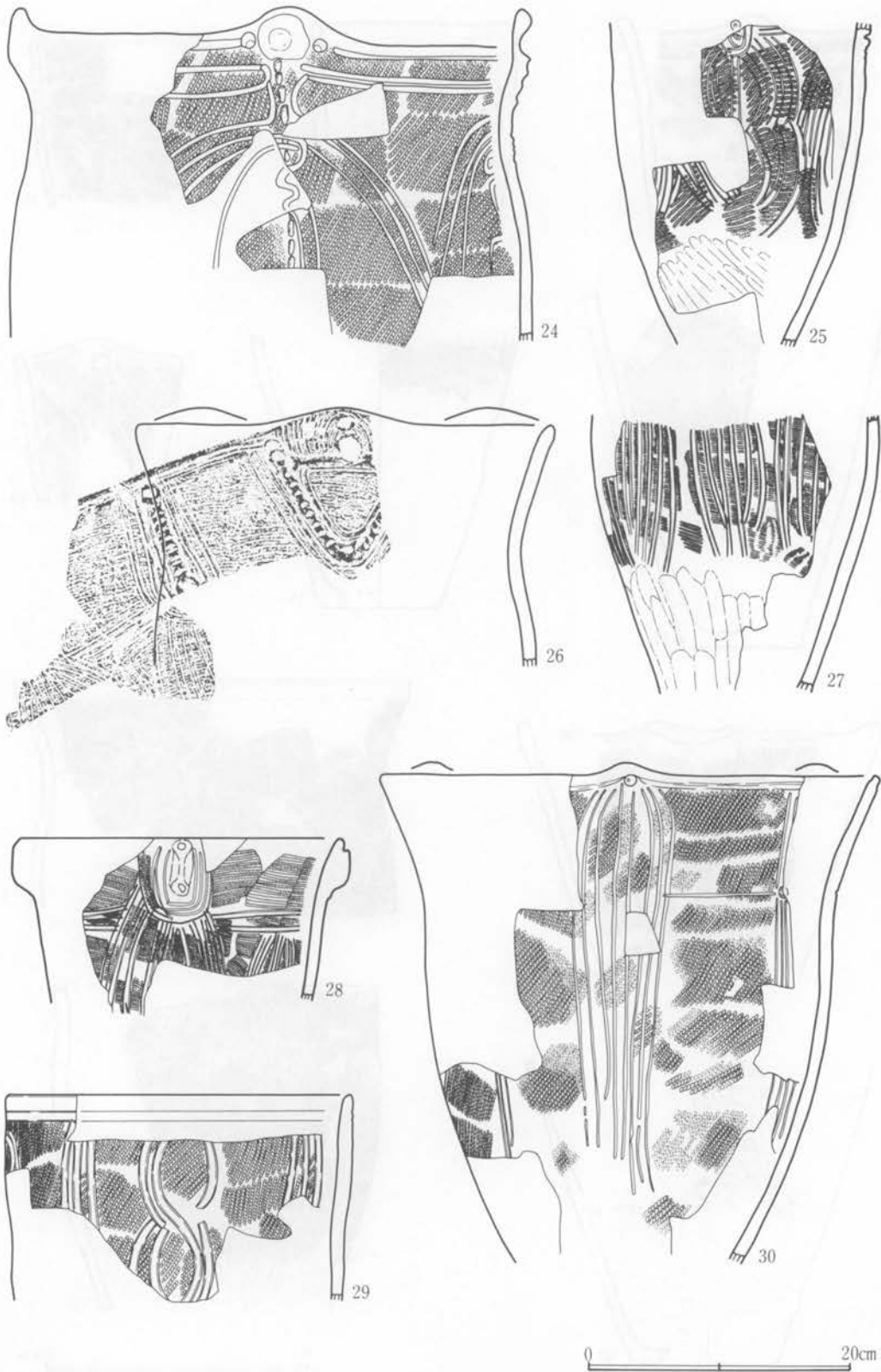
0 20cm

第124図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)

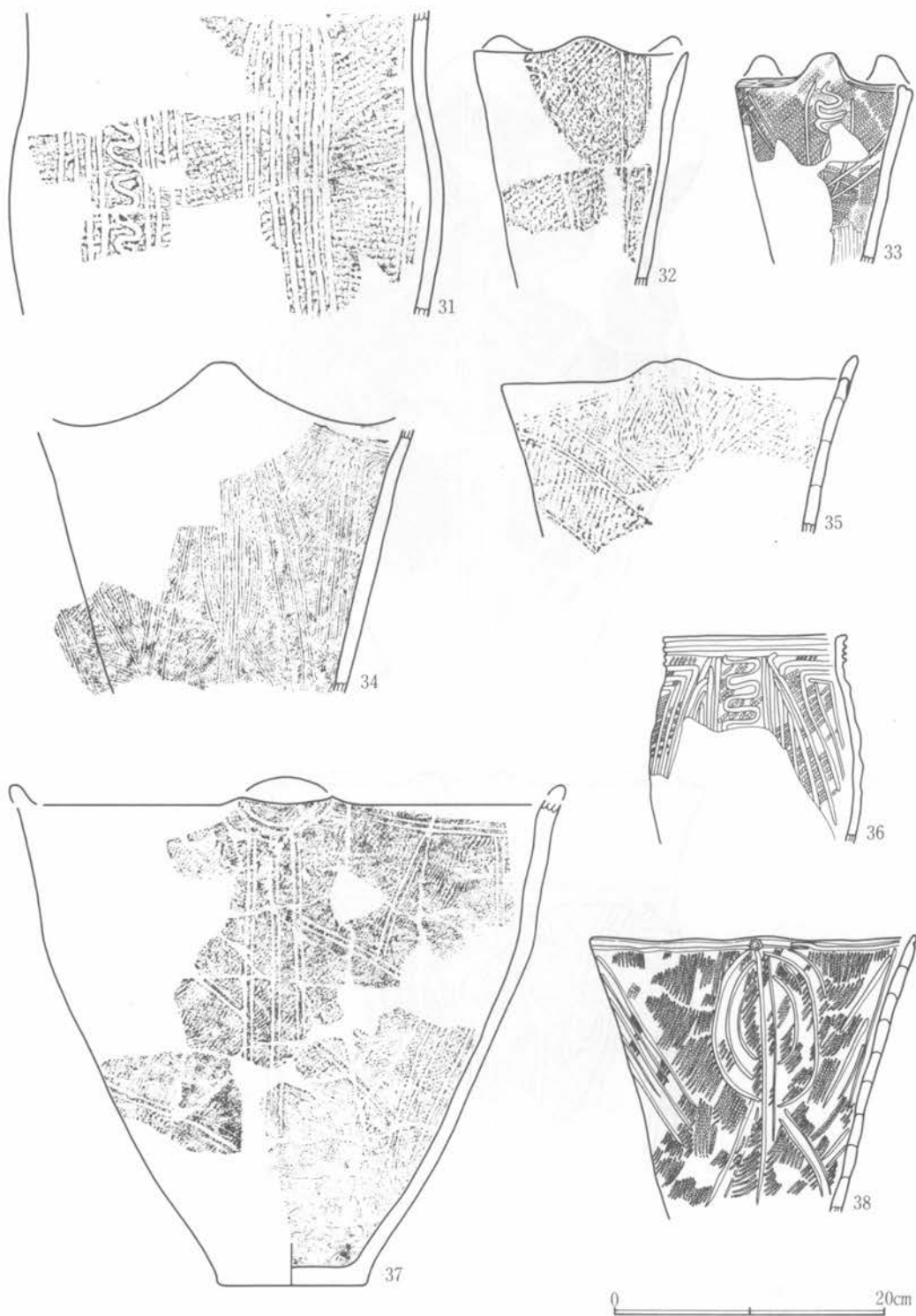


0 20cm

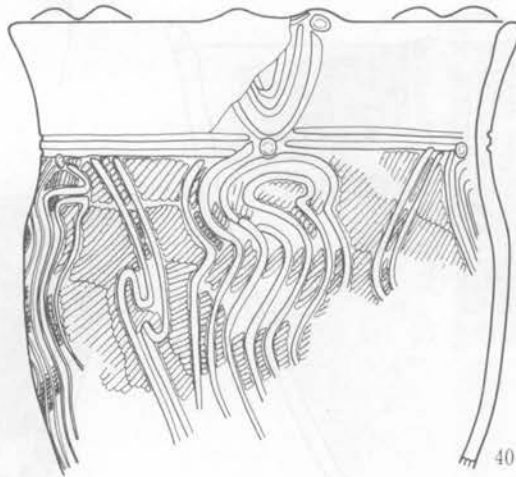
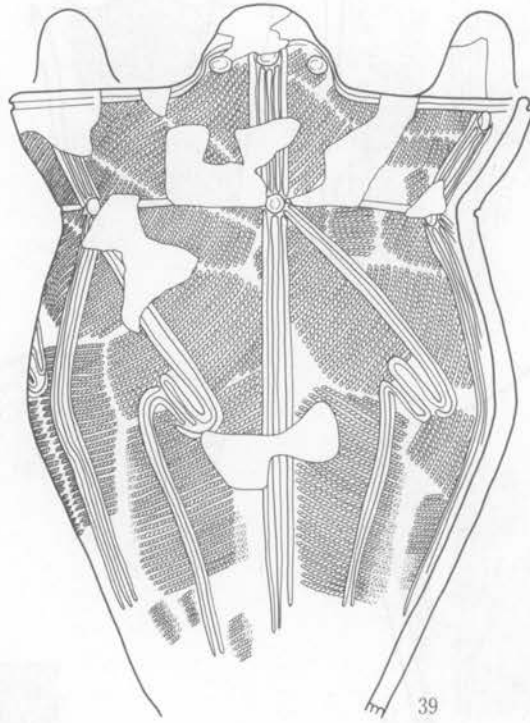
第125図 グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)



第126図 グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)

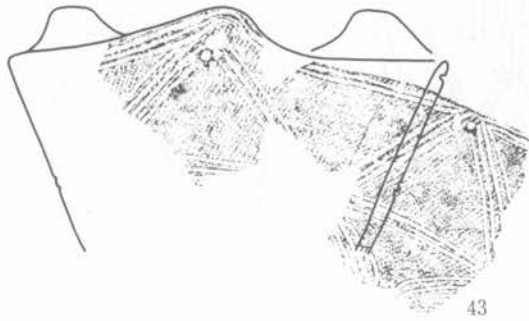
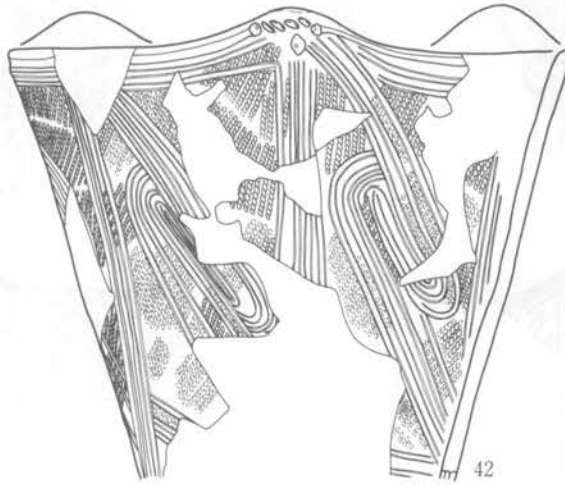
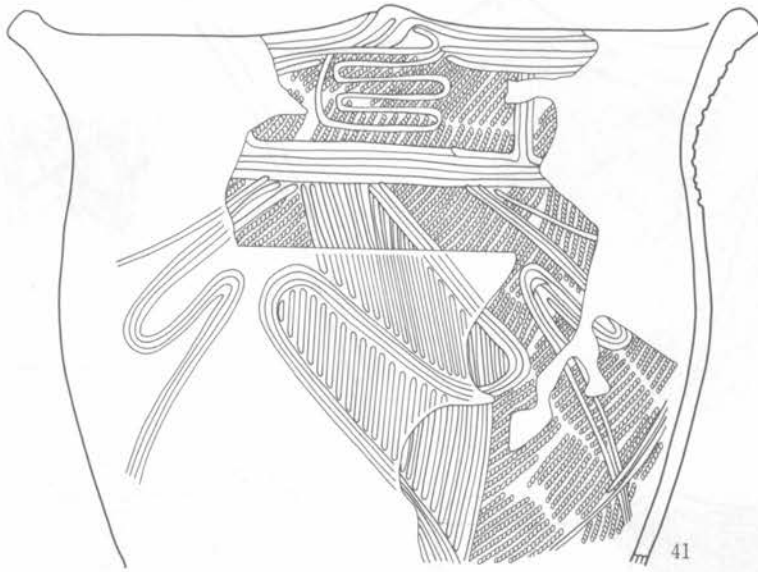


第127図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



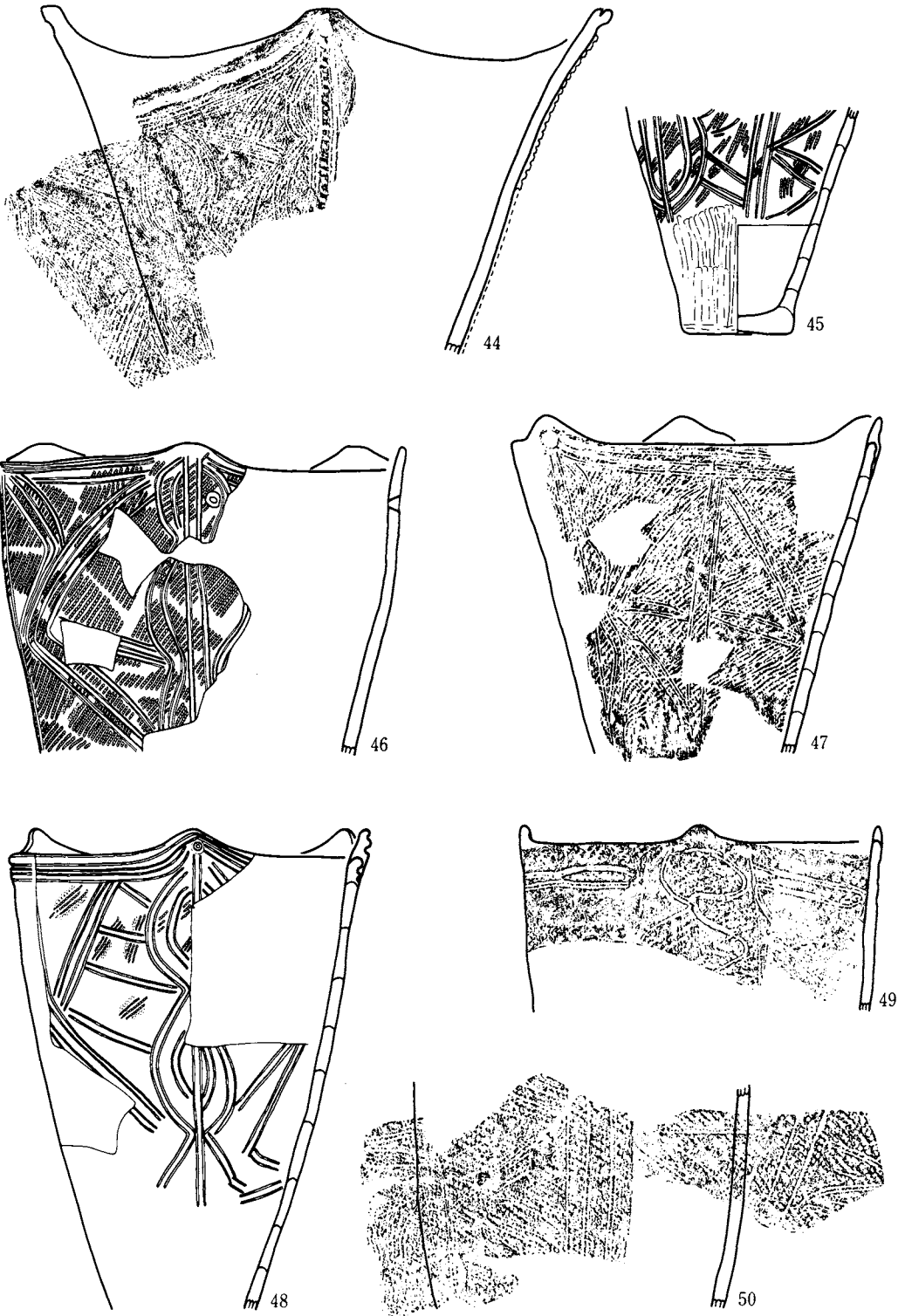
0 ————— 20cm

第128図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)

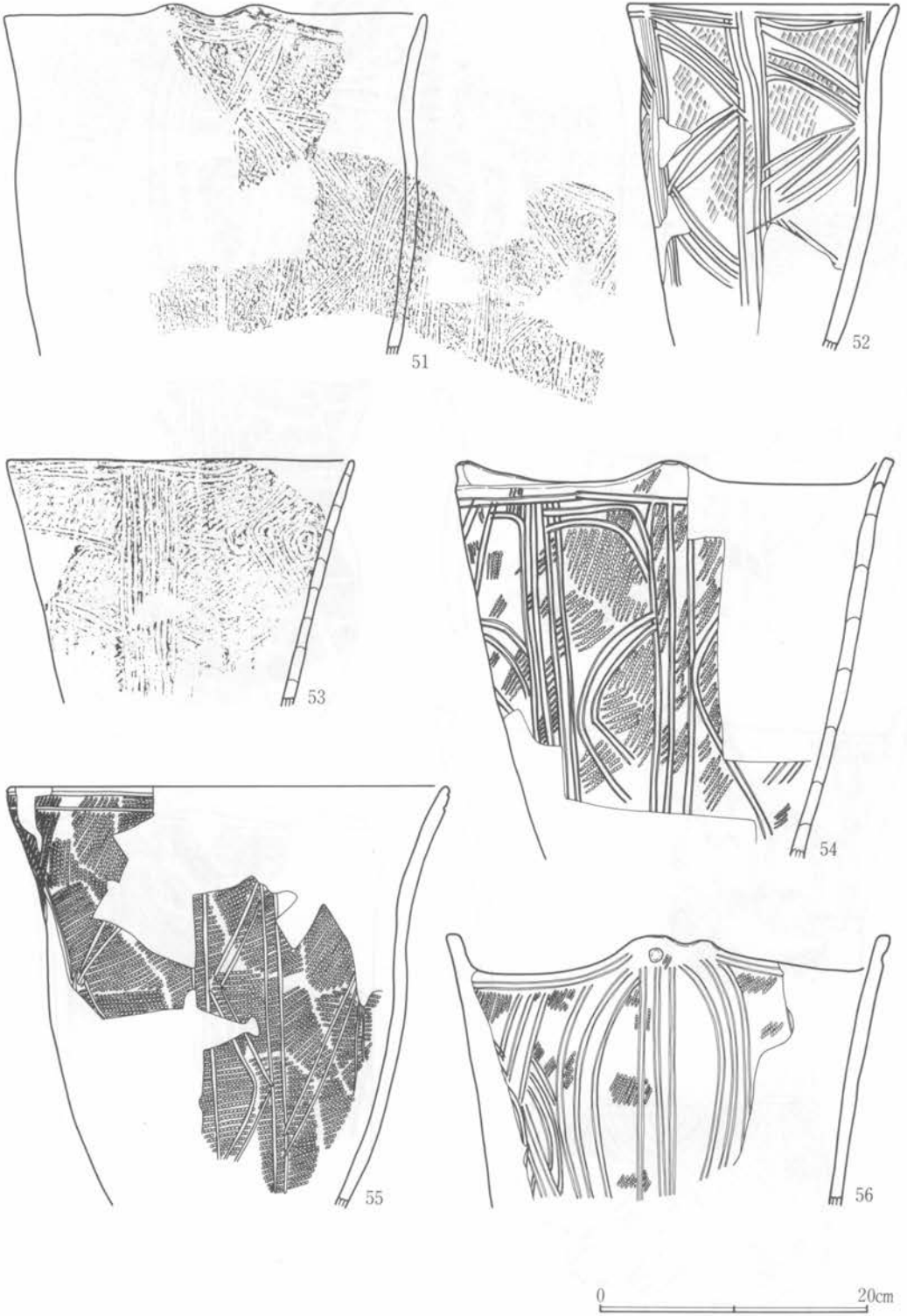


0 20cm

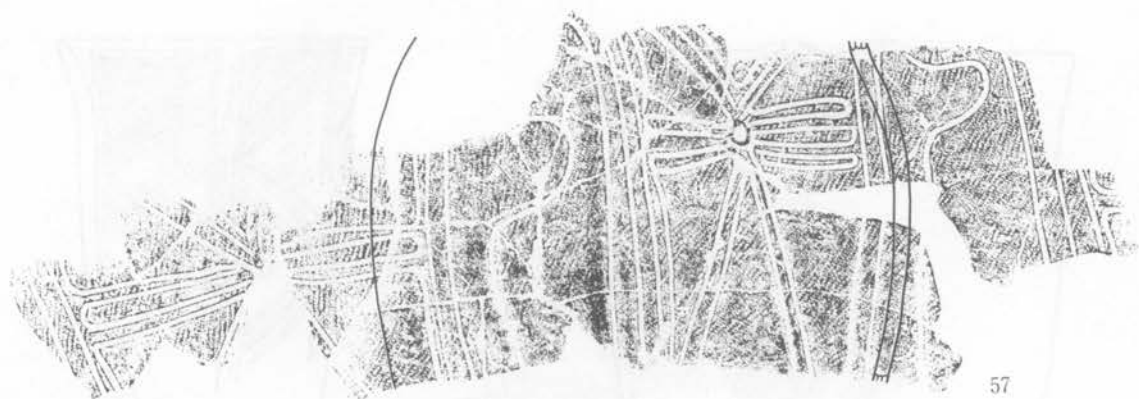
第129図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



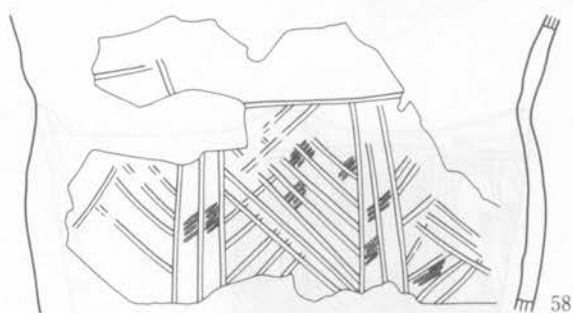
第130図 グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)



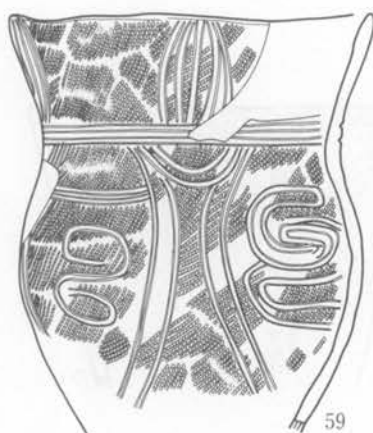
第131図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



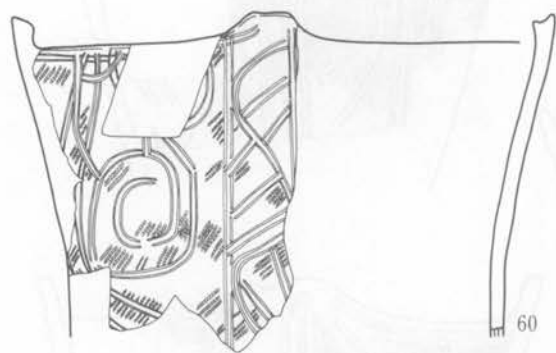
57



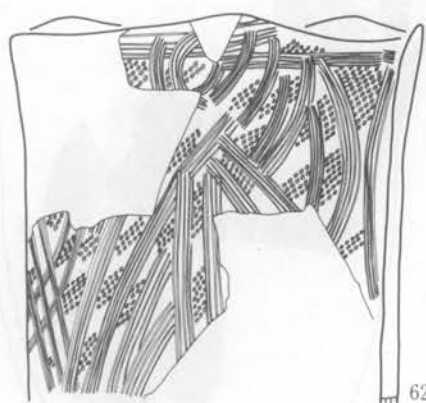
58



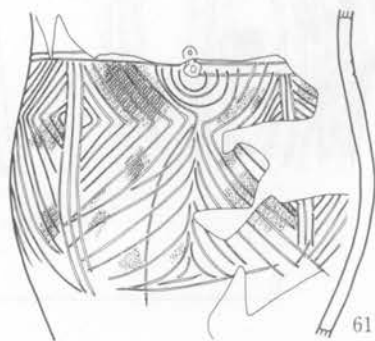
59



60



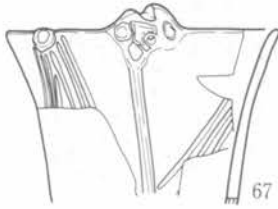
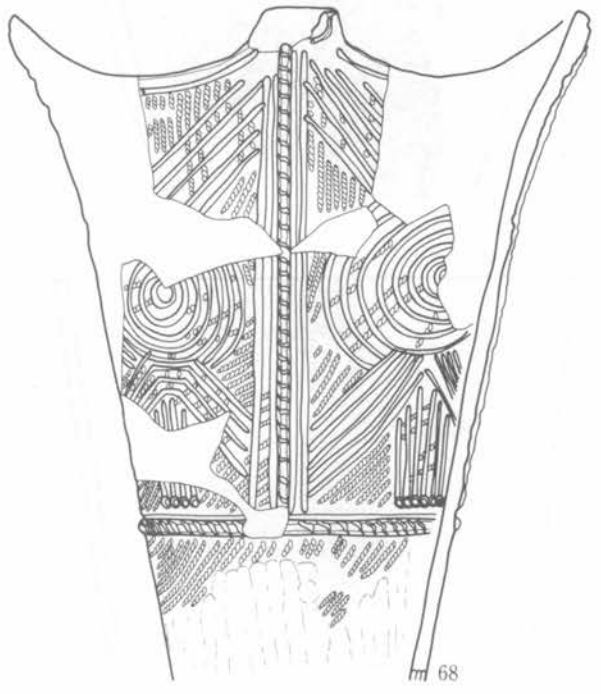
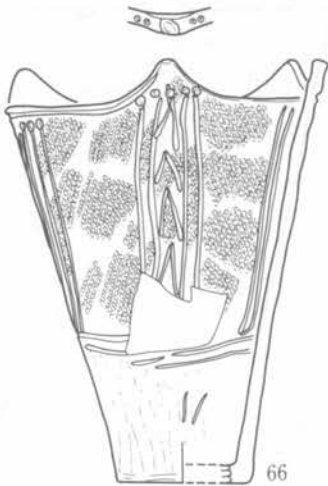
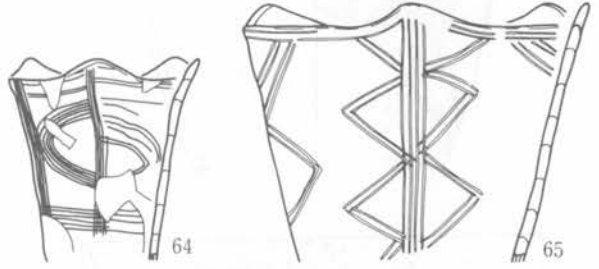
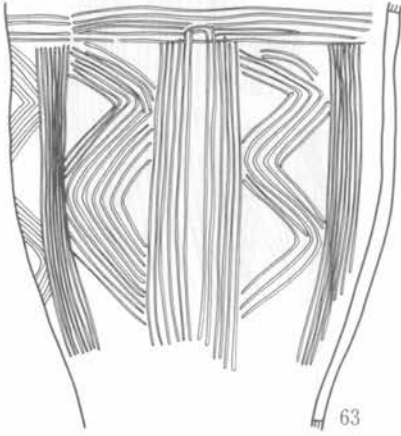
62



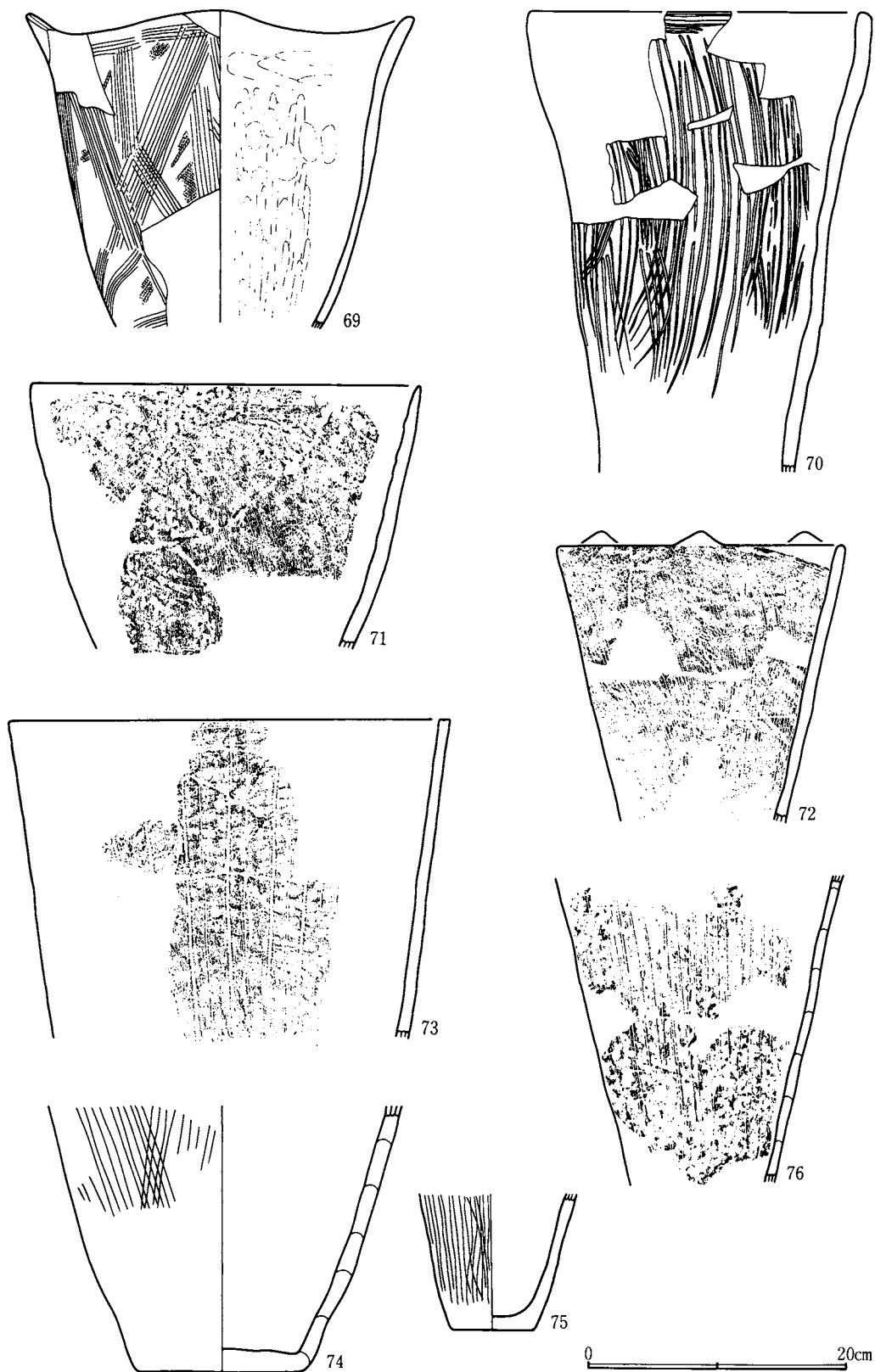
61

0 20cm

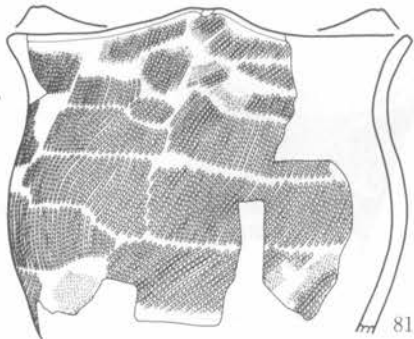
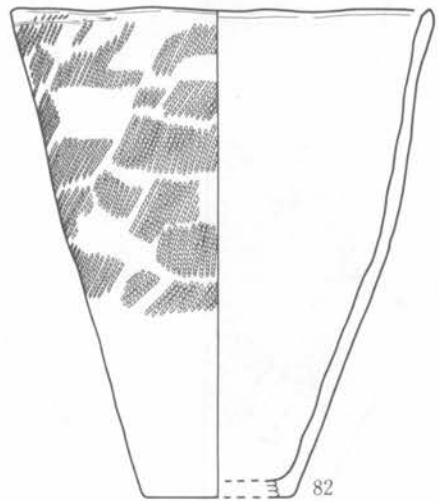
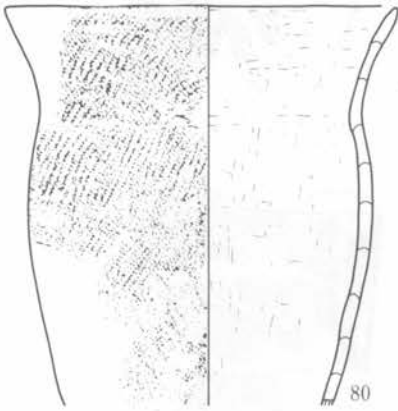
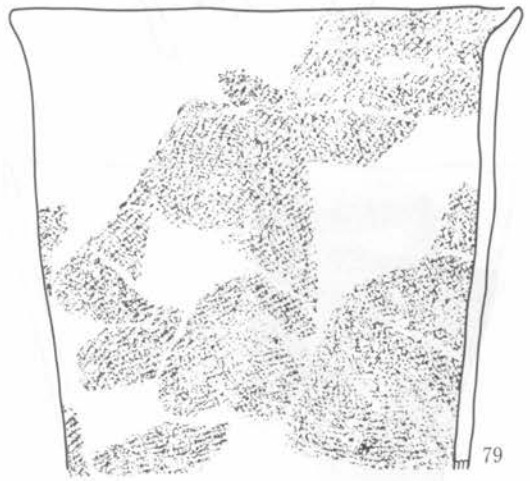
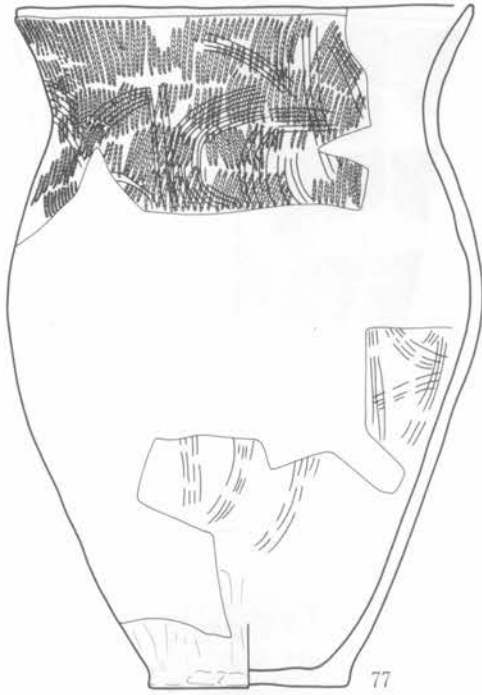
第132図 グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)



第133図 グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)

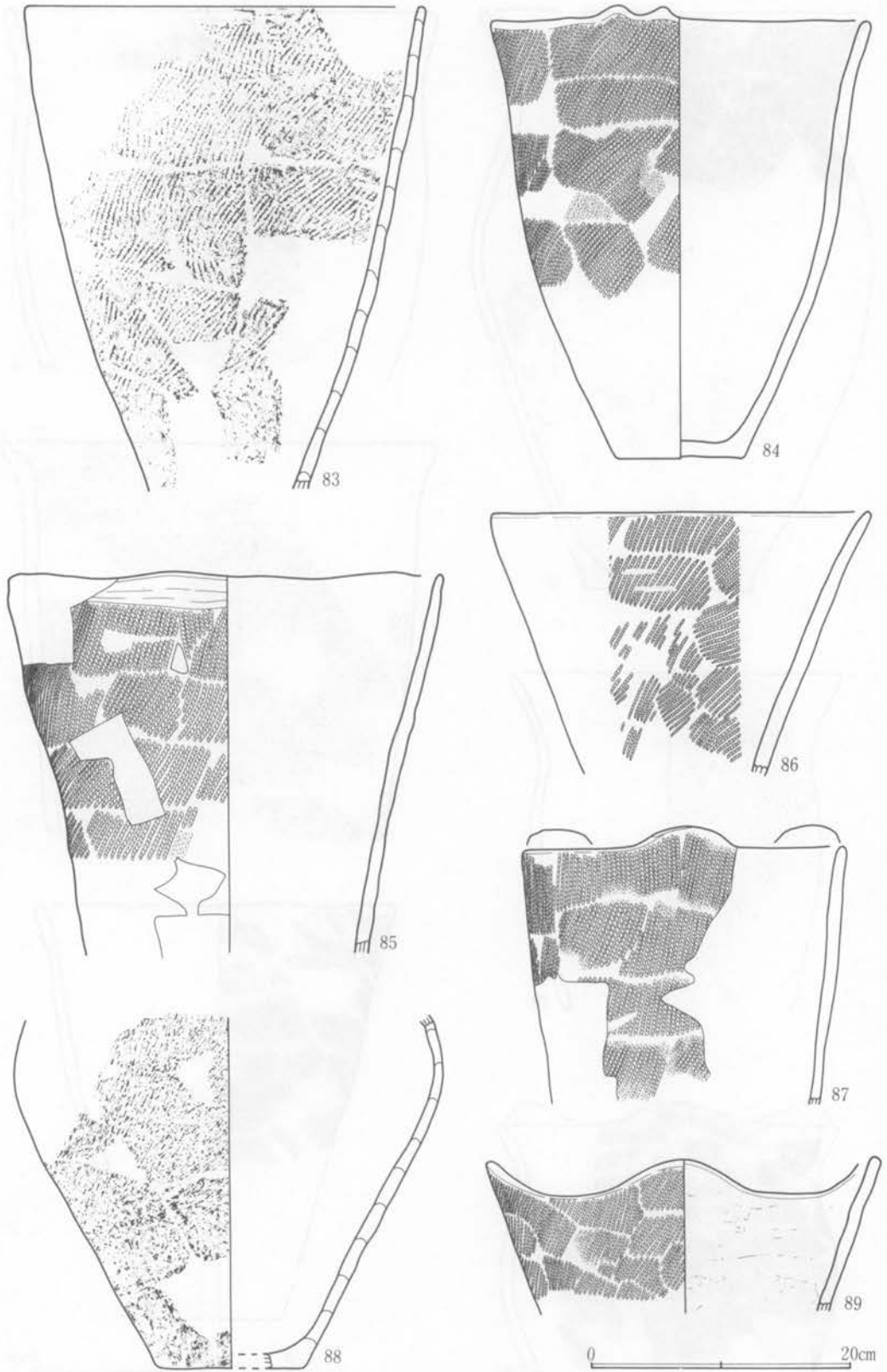


第134図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)

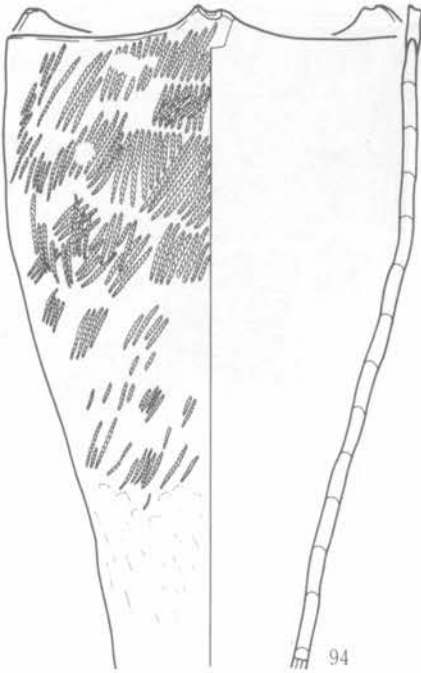
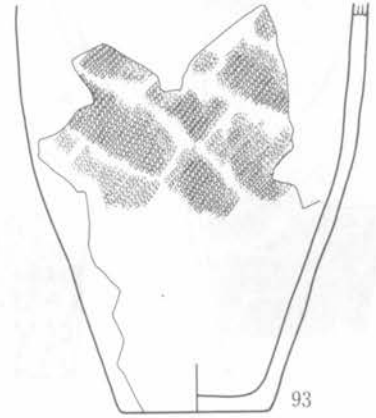
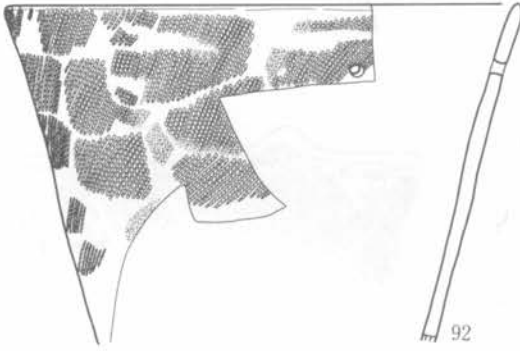
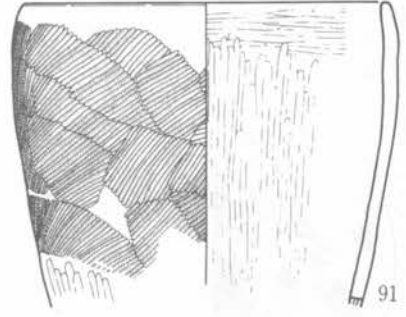
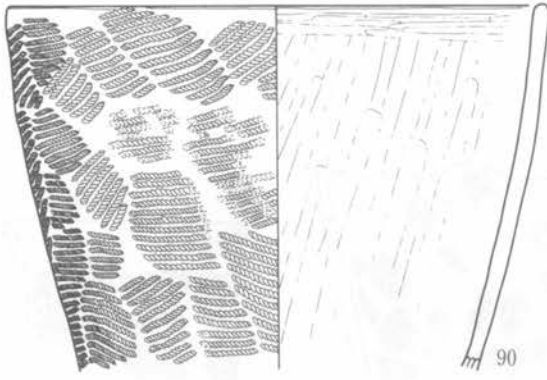


0 20cm

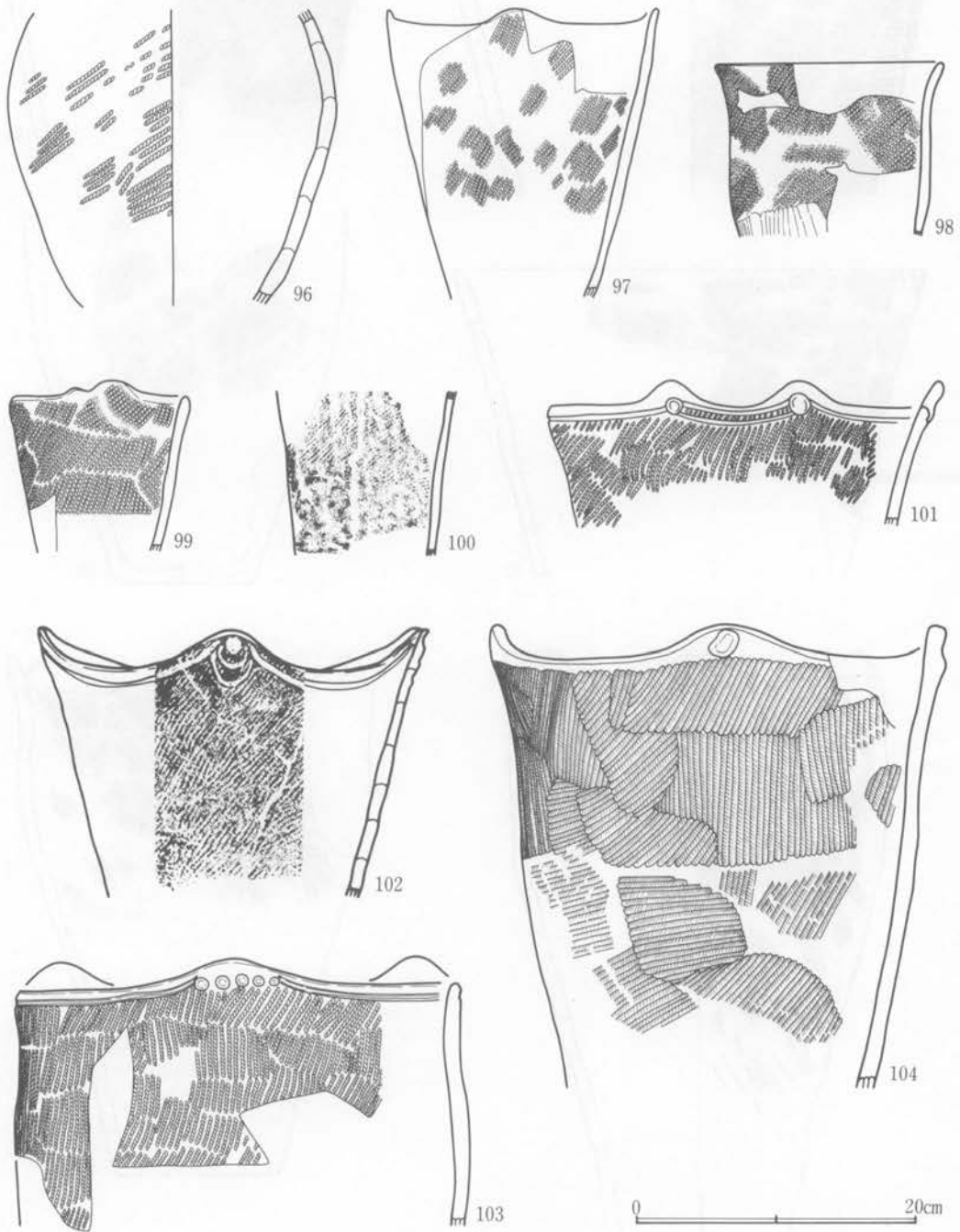
第135図 グリッド出土第IV群土器実測図 (1/5)



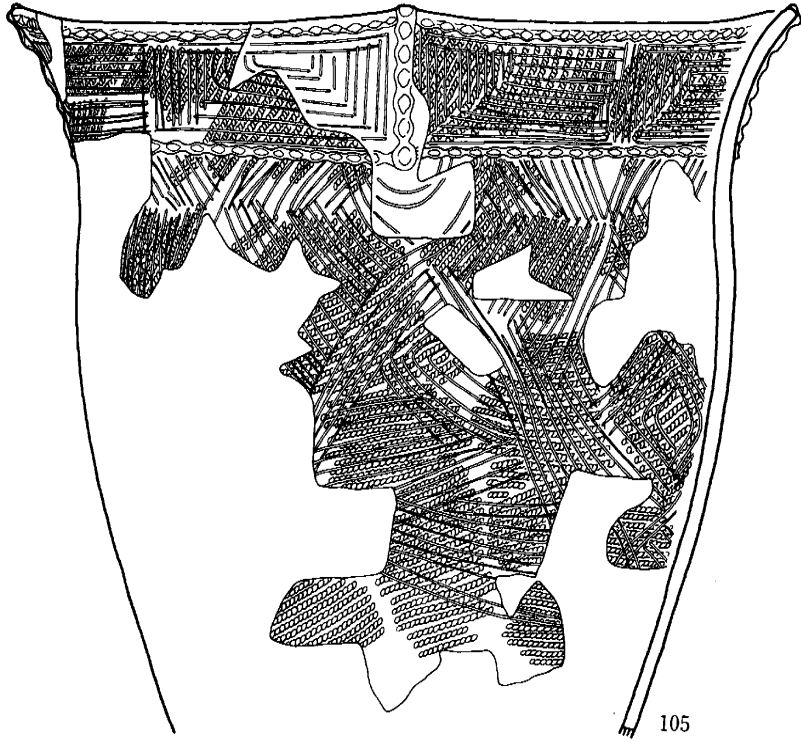
第136図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



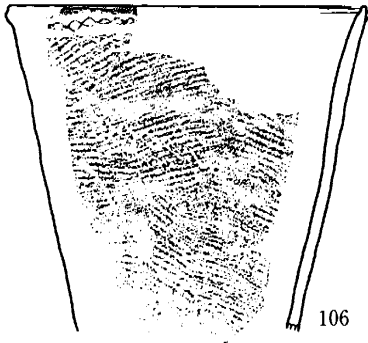
第137図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



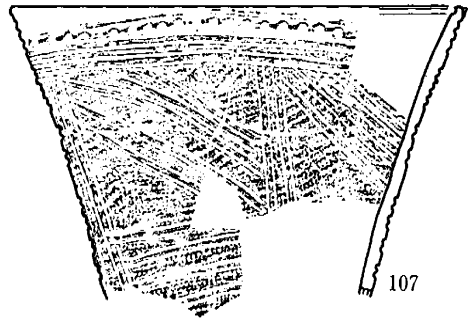
第138図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



105



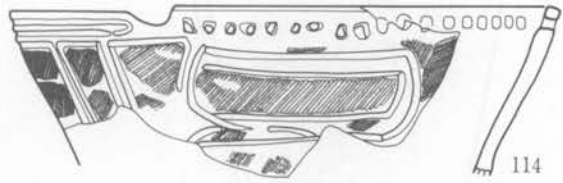
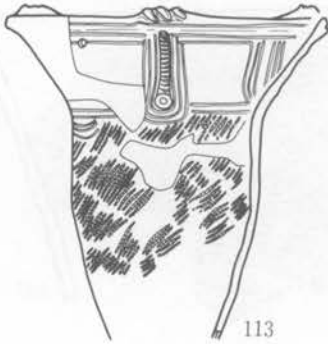
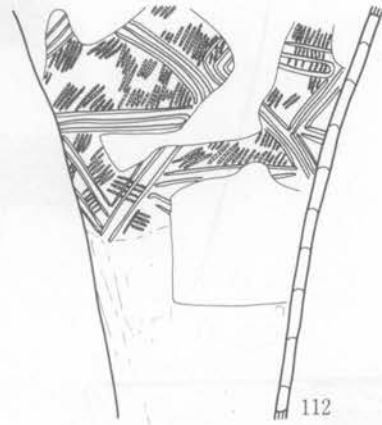
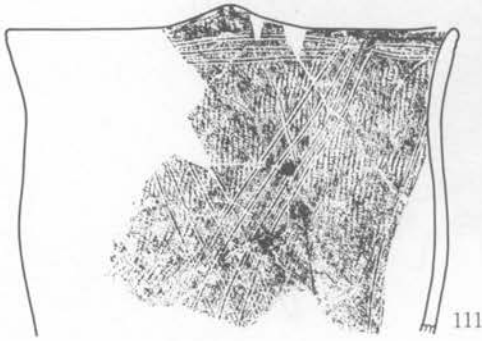
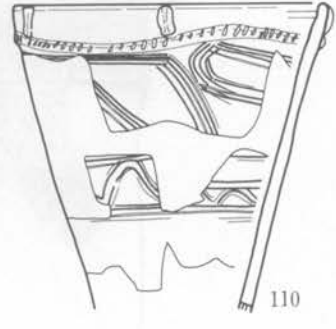
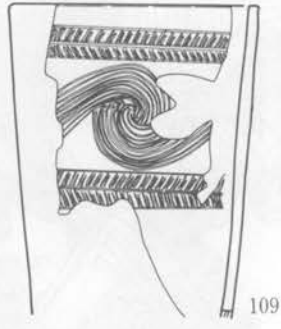
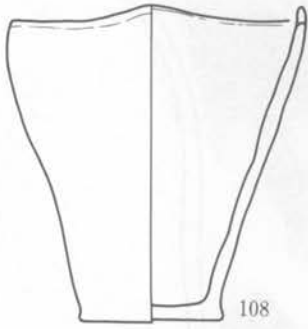
106



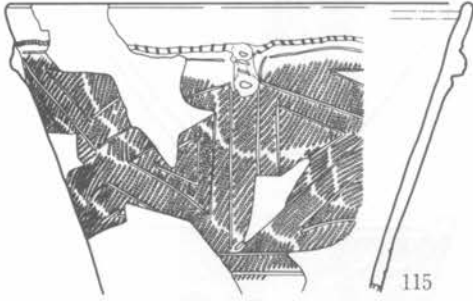
107

0 20cm

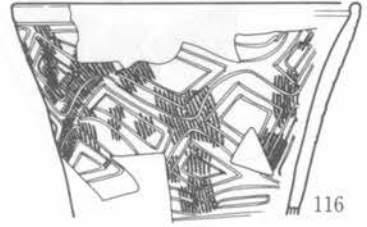
第139図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



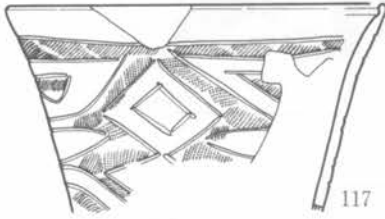
第140図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



115



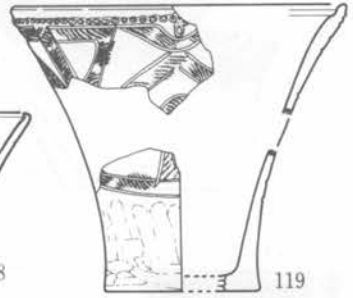
116



117



118



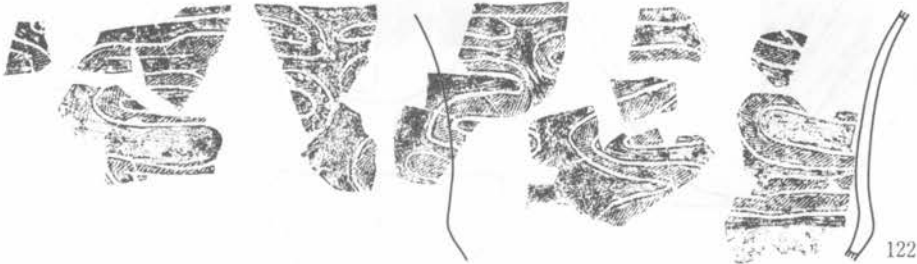
119



120



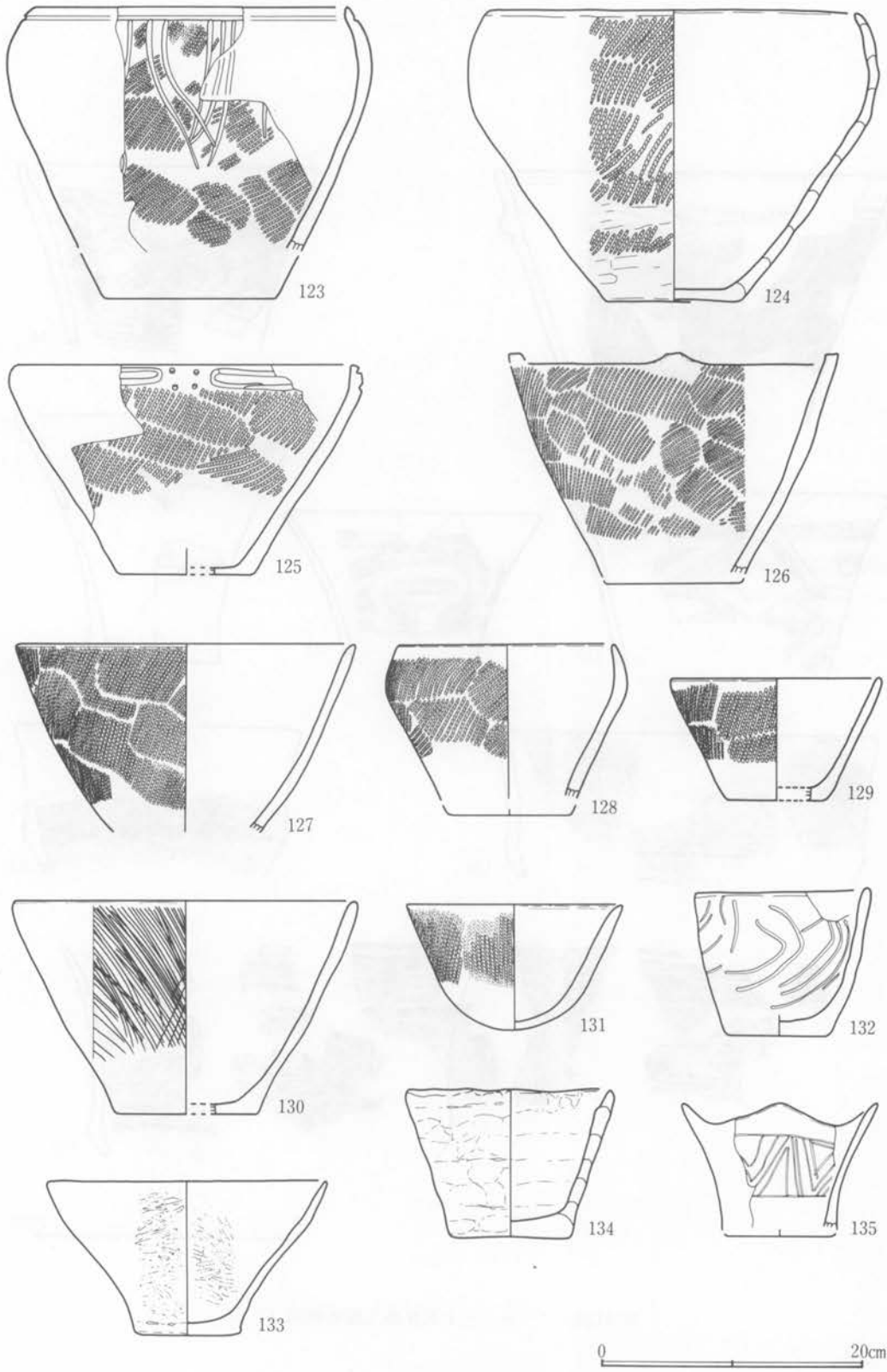
121



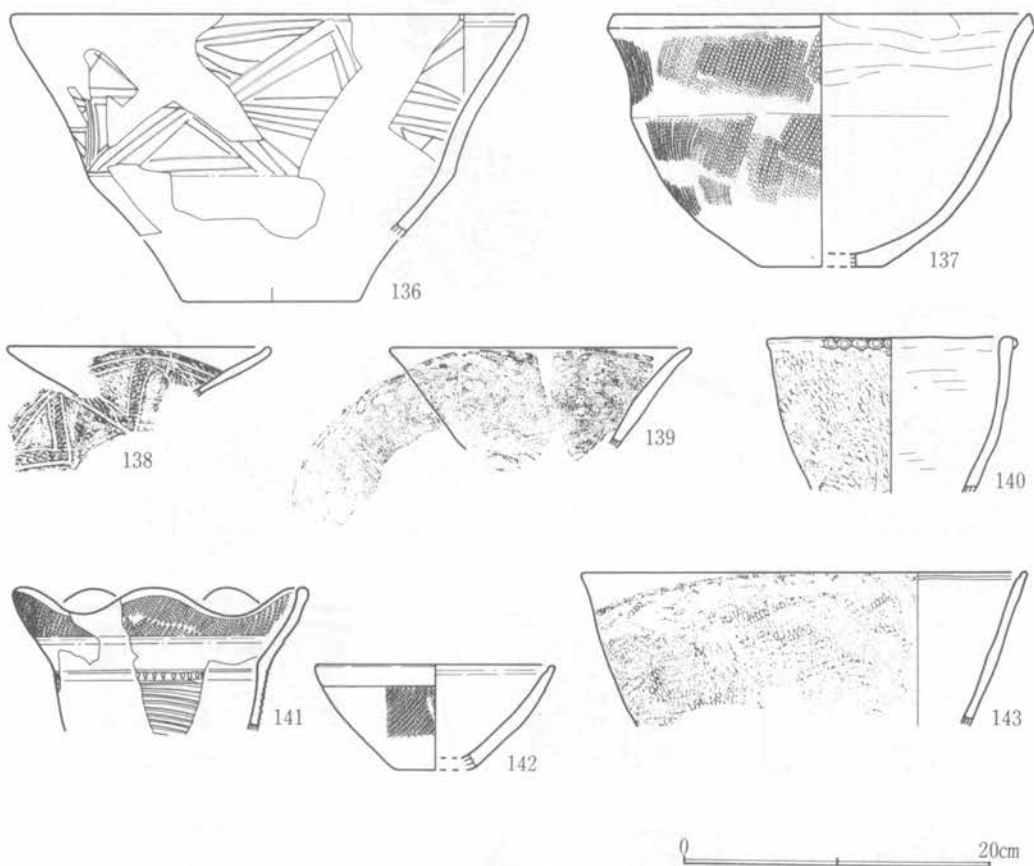
122



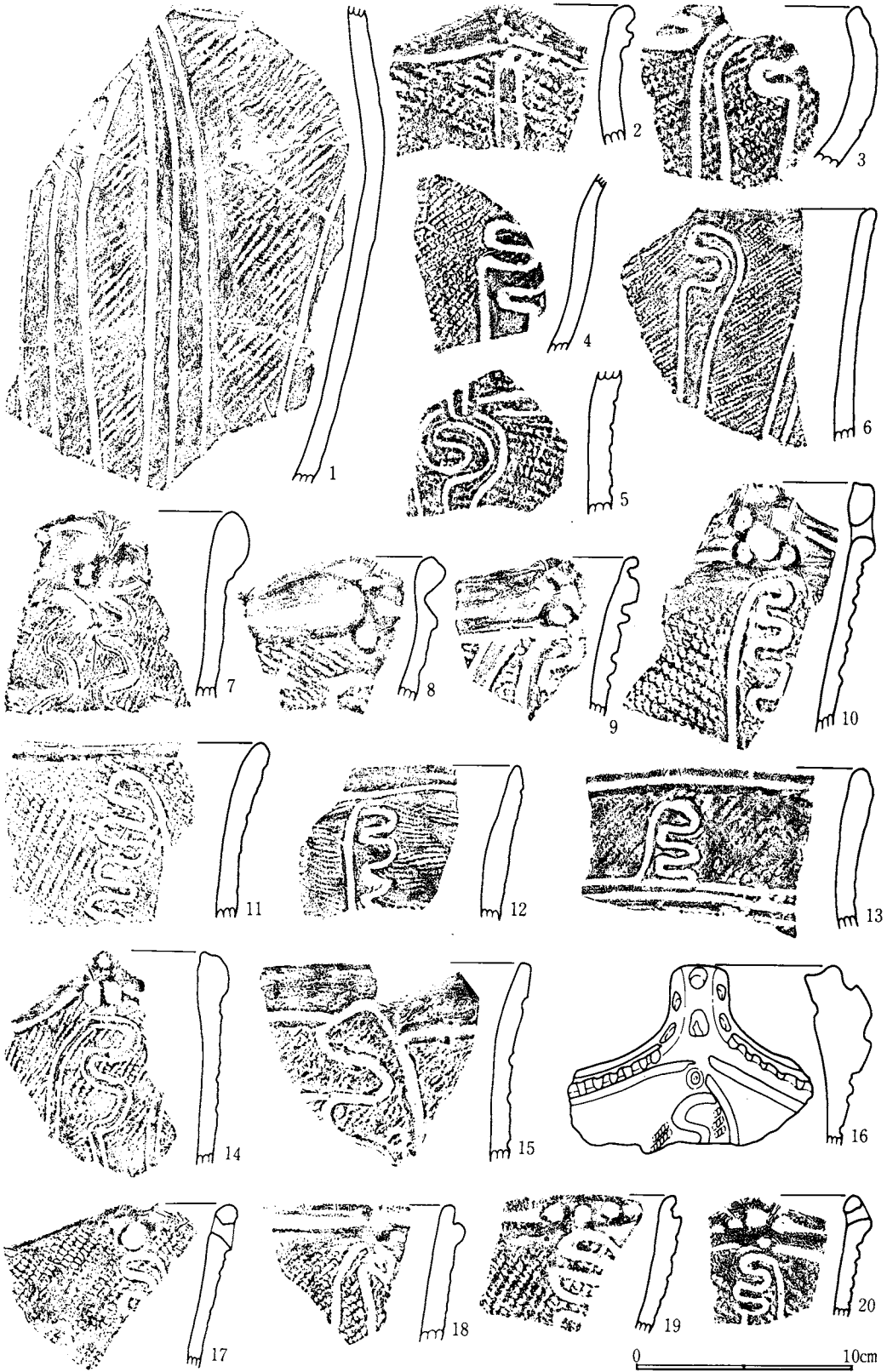
第141図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



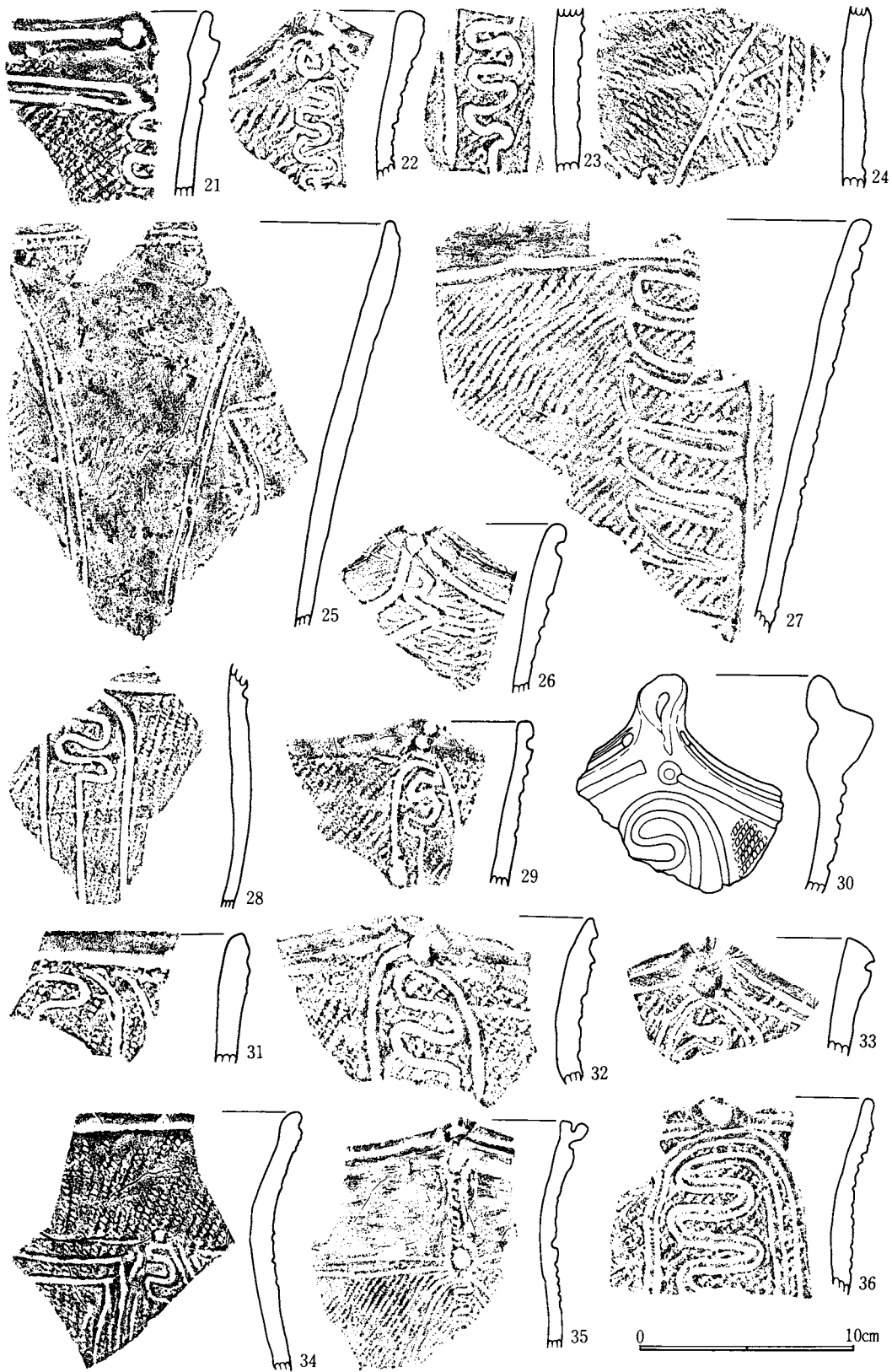
第142図 グリッド出土第Ⅳ群土器実測図 (1/5)



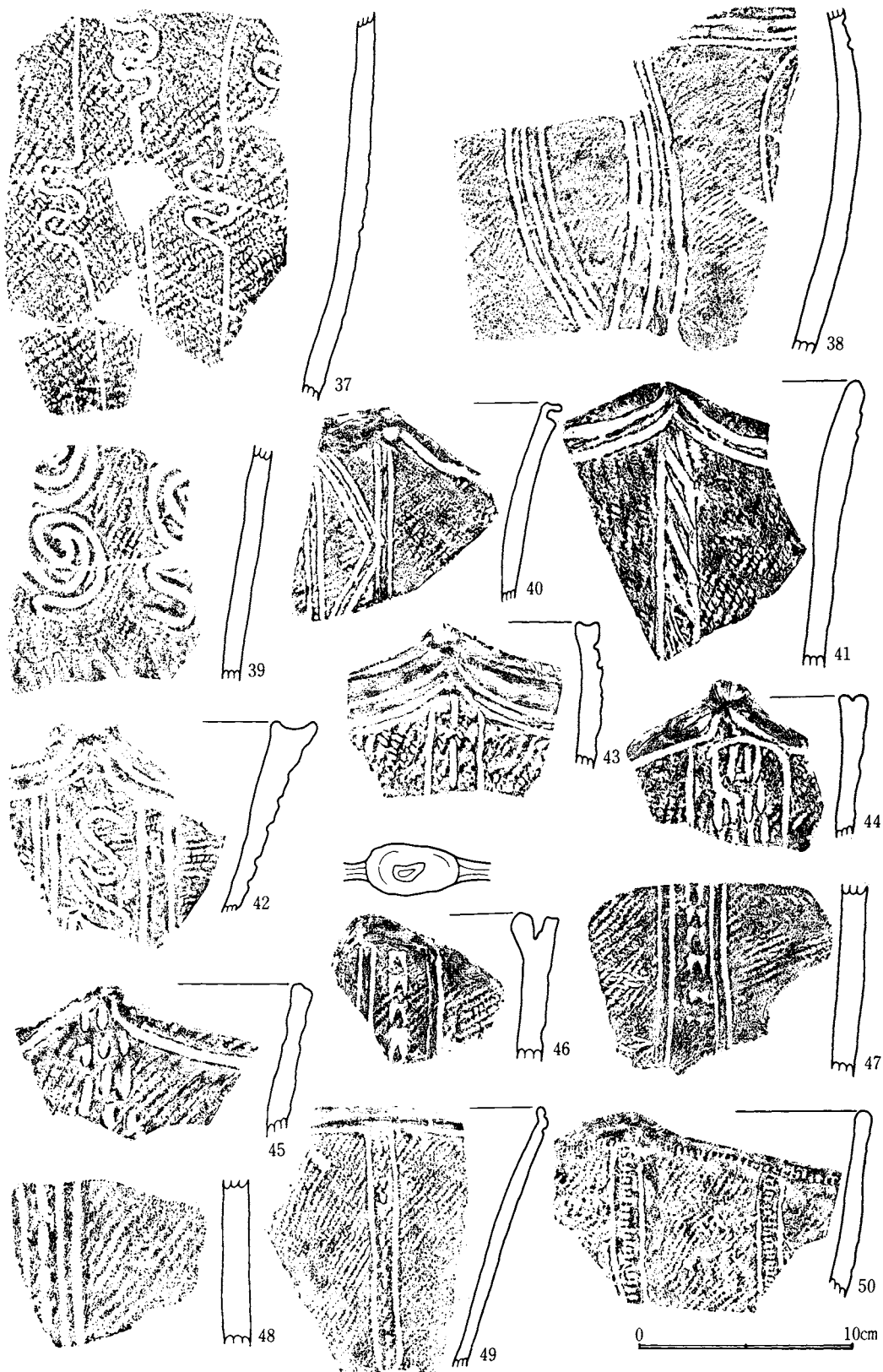
第143図 グリッド出土第Ⅳ・Ⅴ群土器実測図 (1/5)



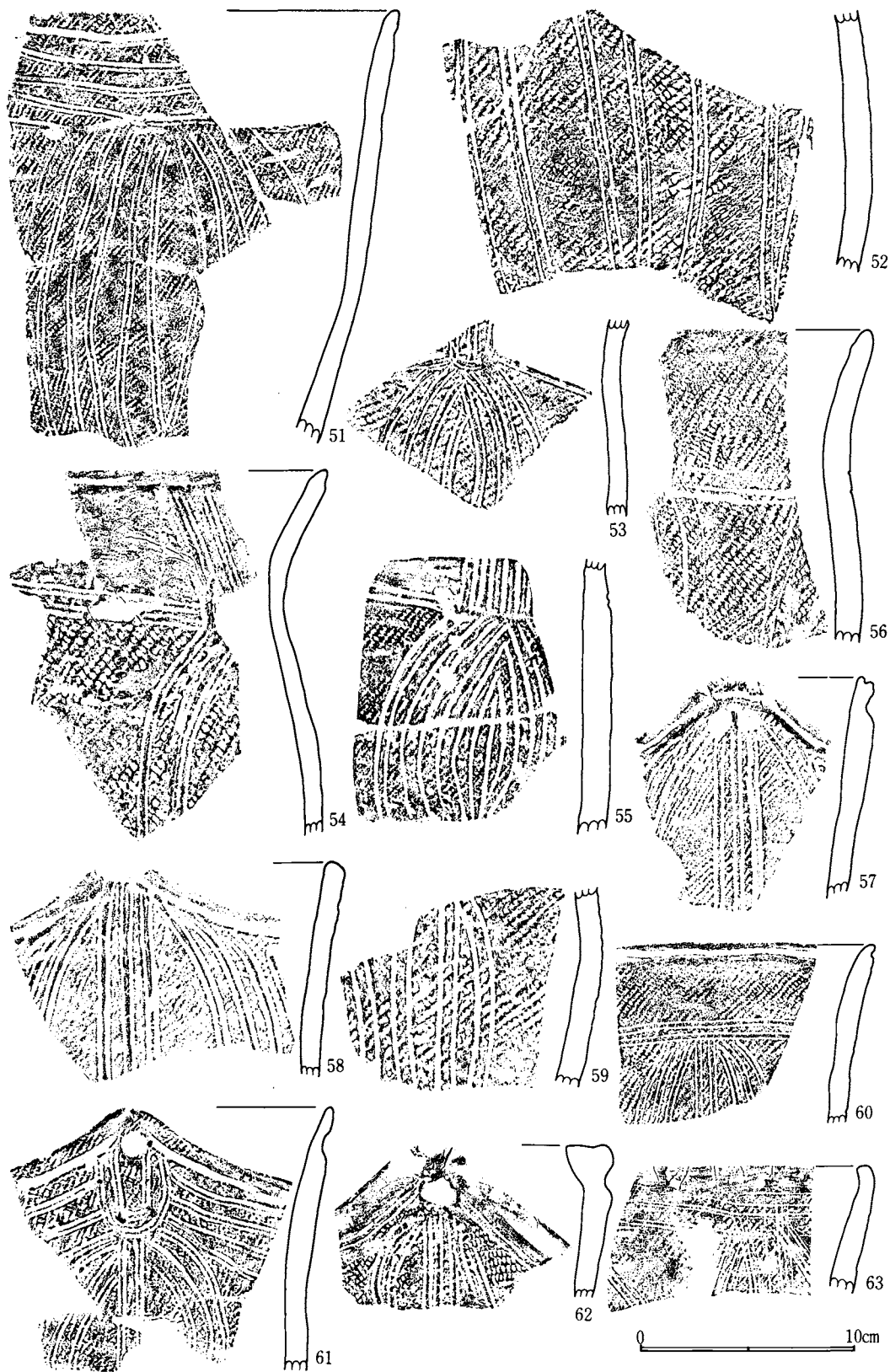
第144図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



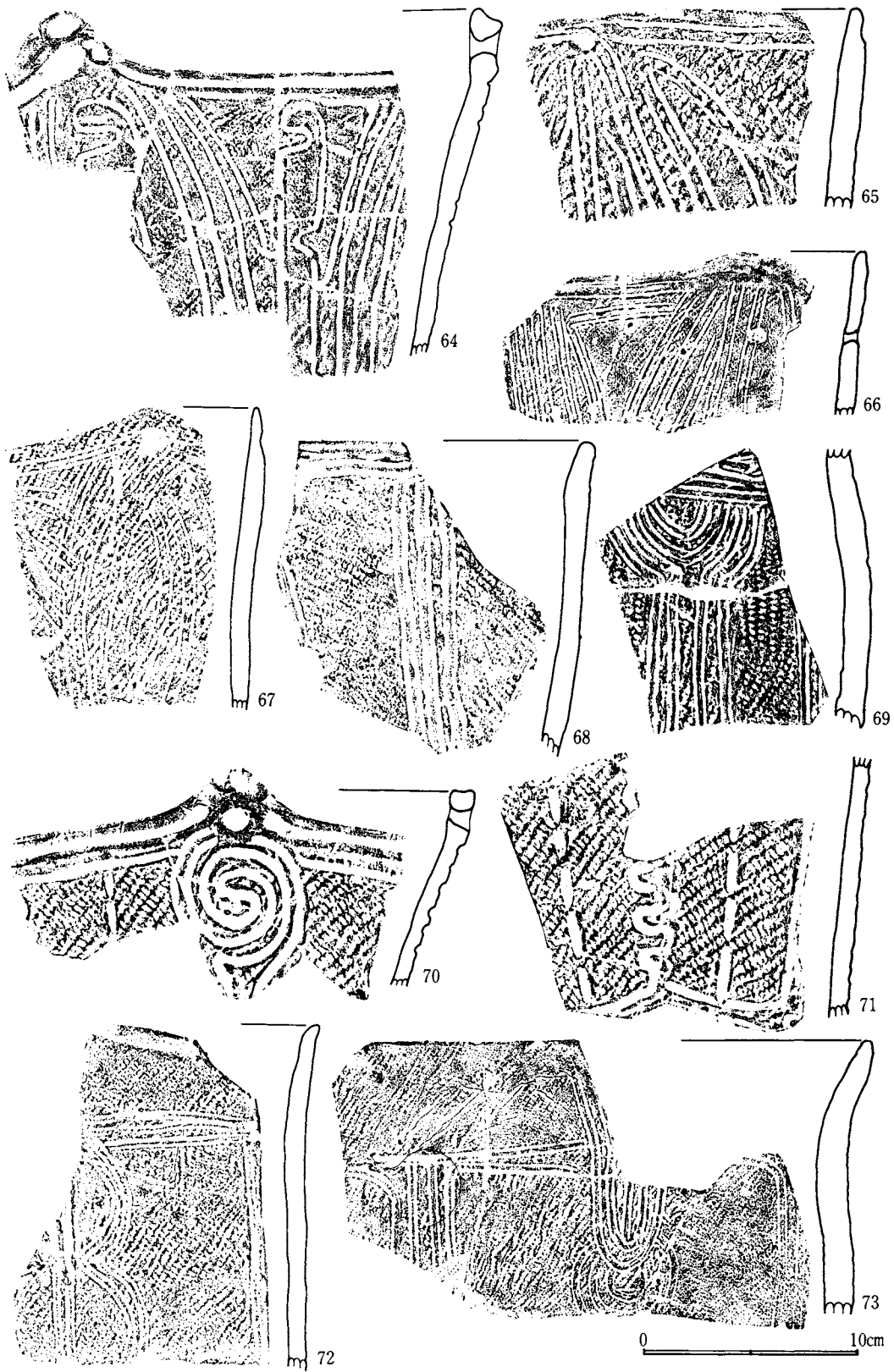
第145図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



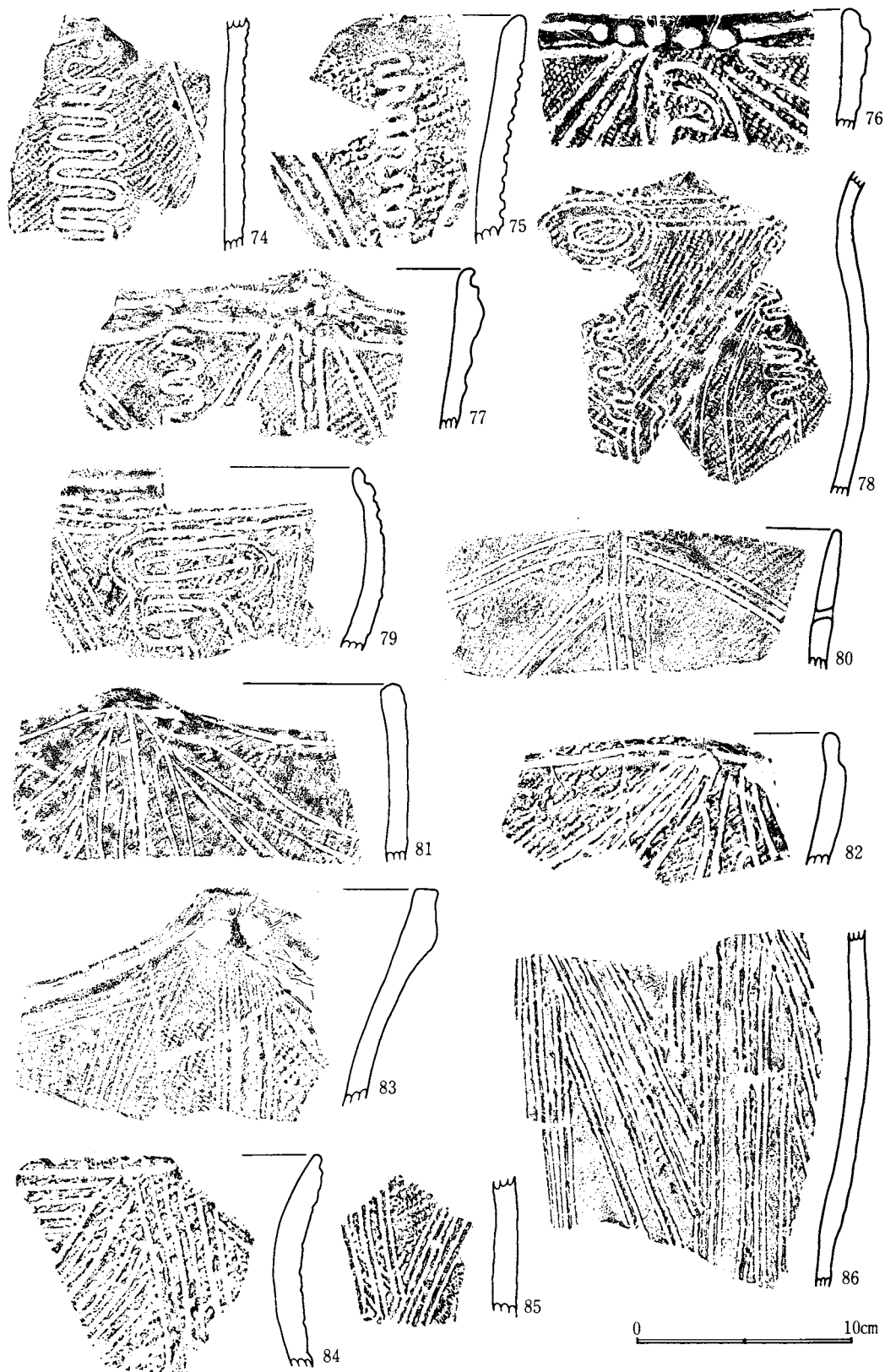
第146図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



第147図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



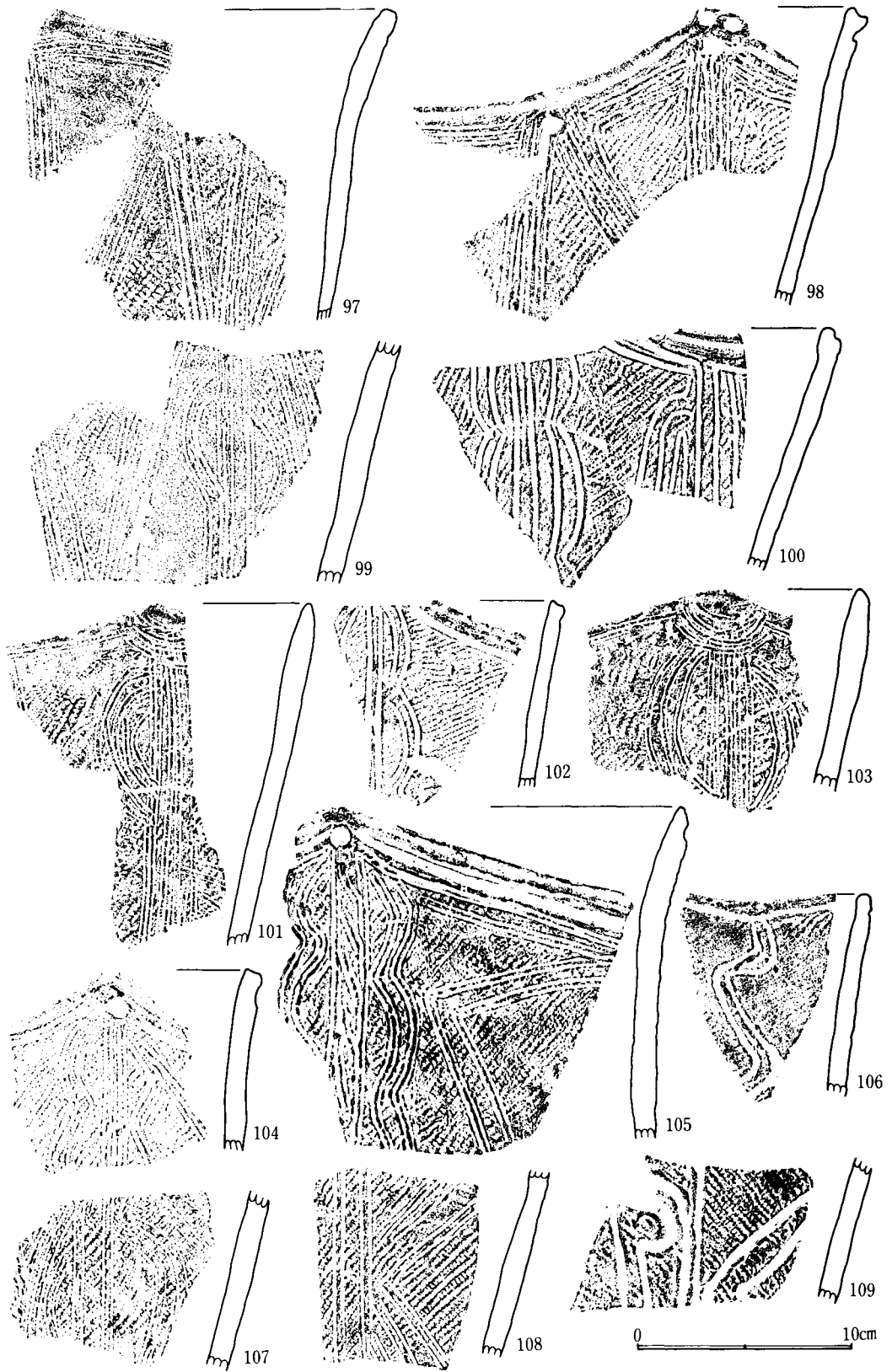
第148図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



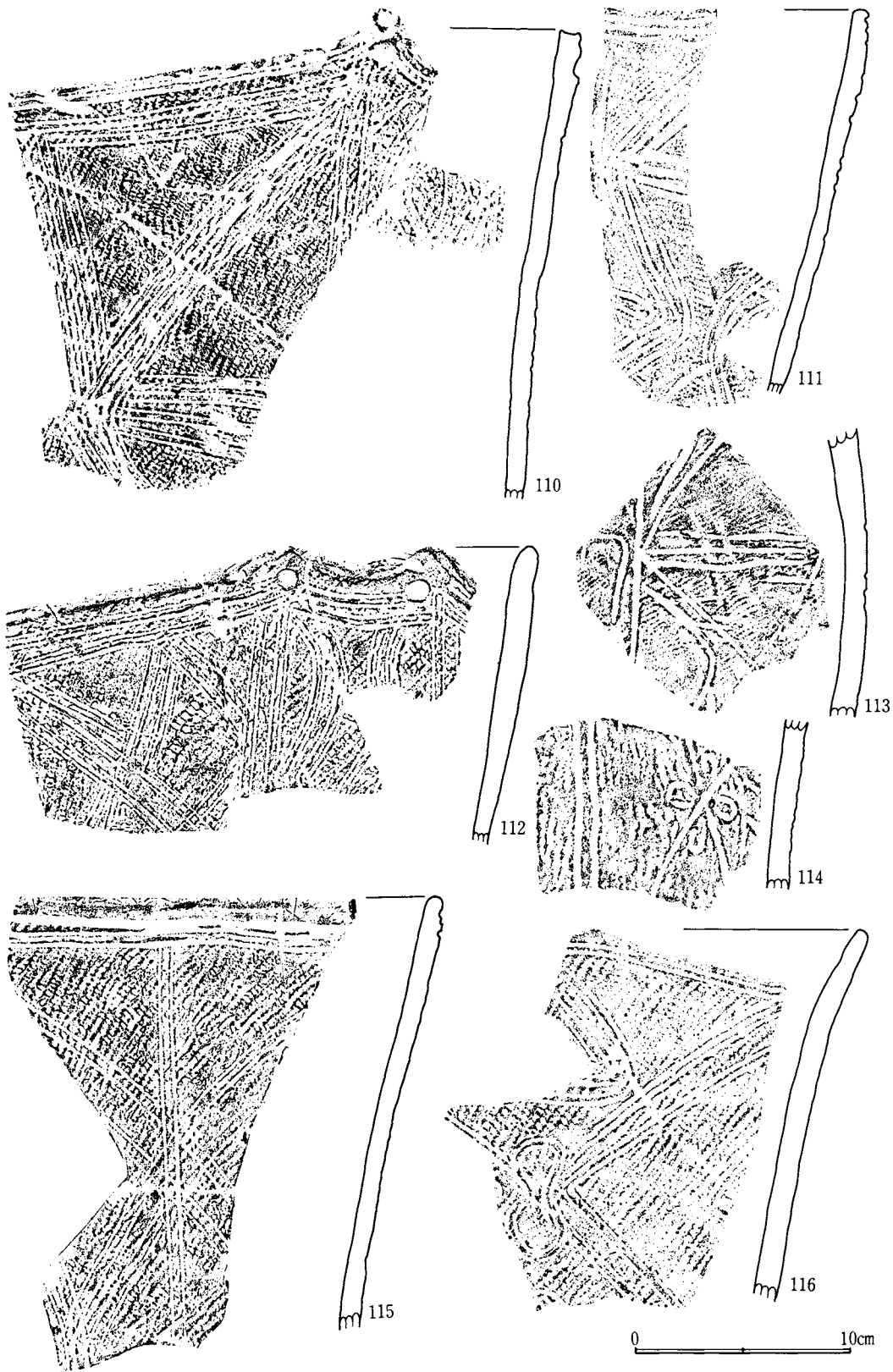
第149図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



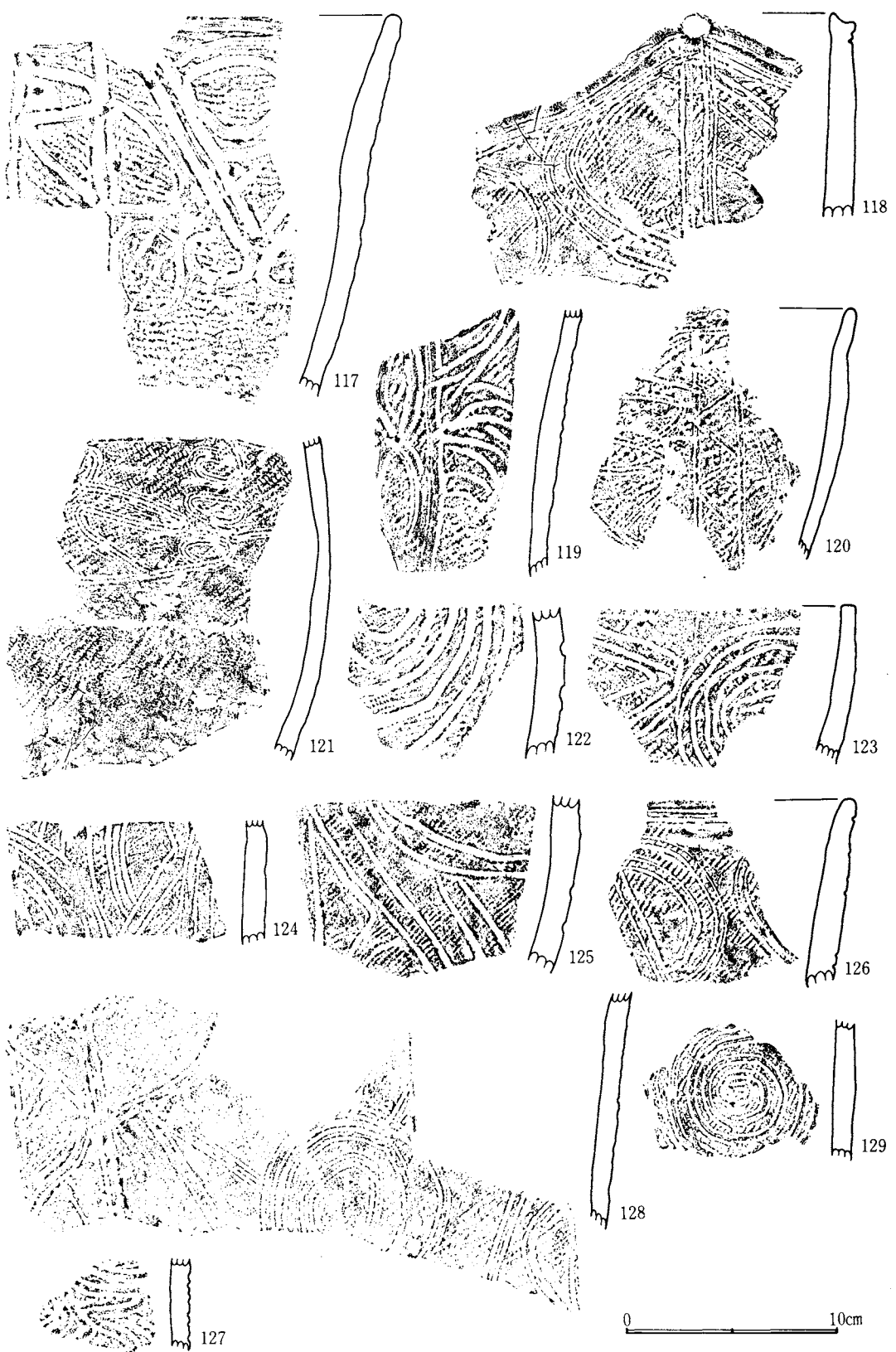
第150図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



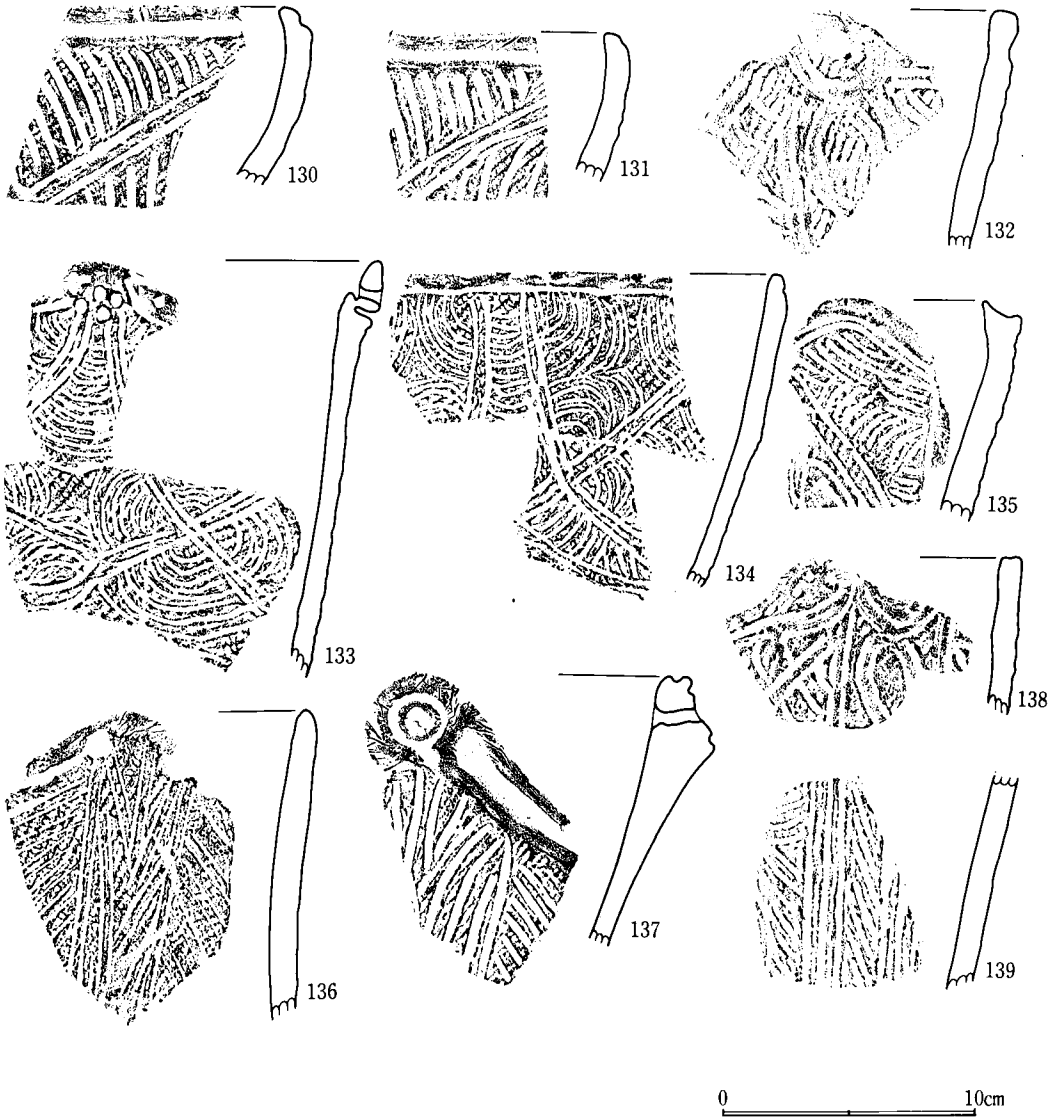
第151図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



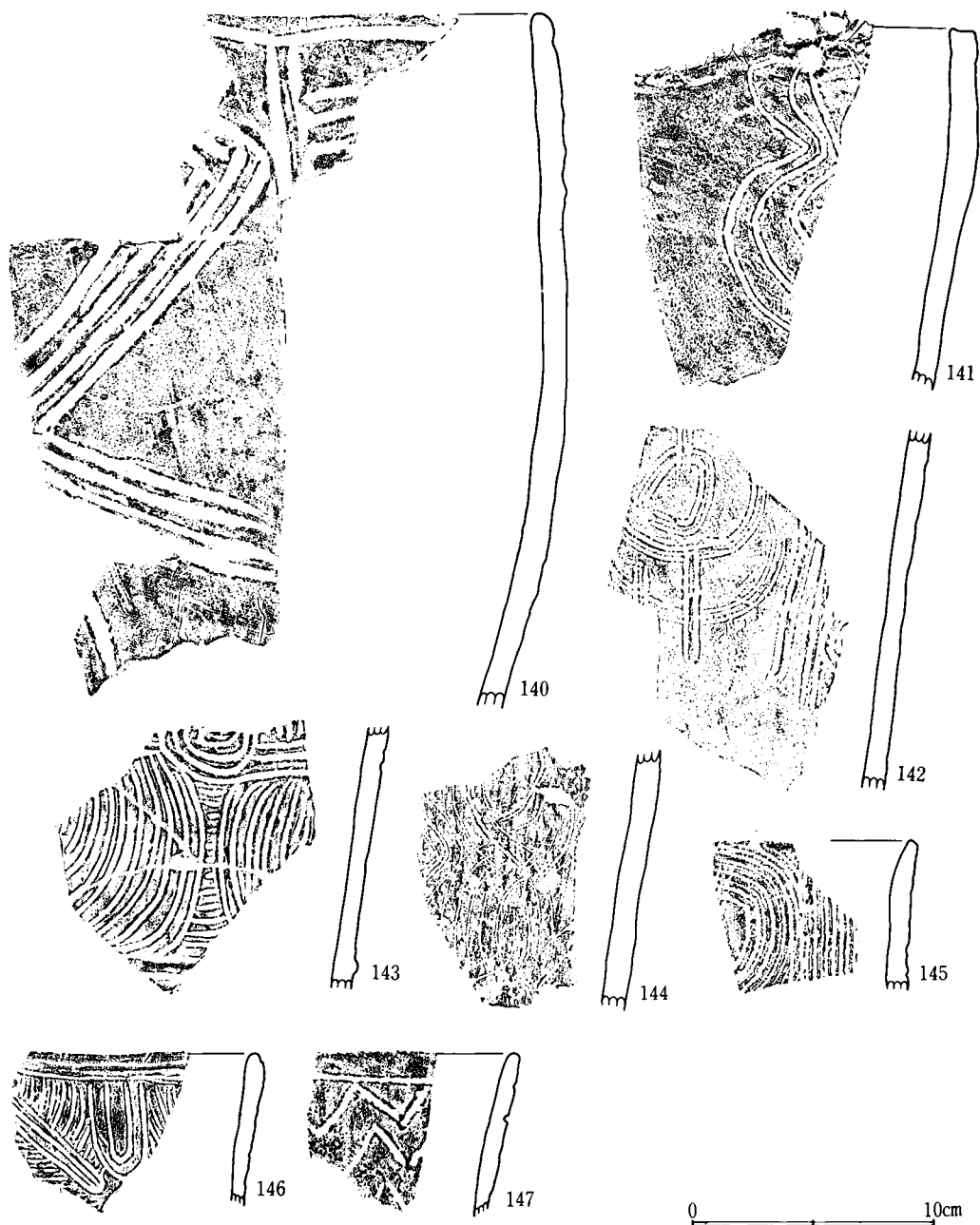
第152図 グリッド出土第Ⅳ群土器拓影図 (1/3)



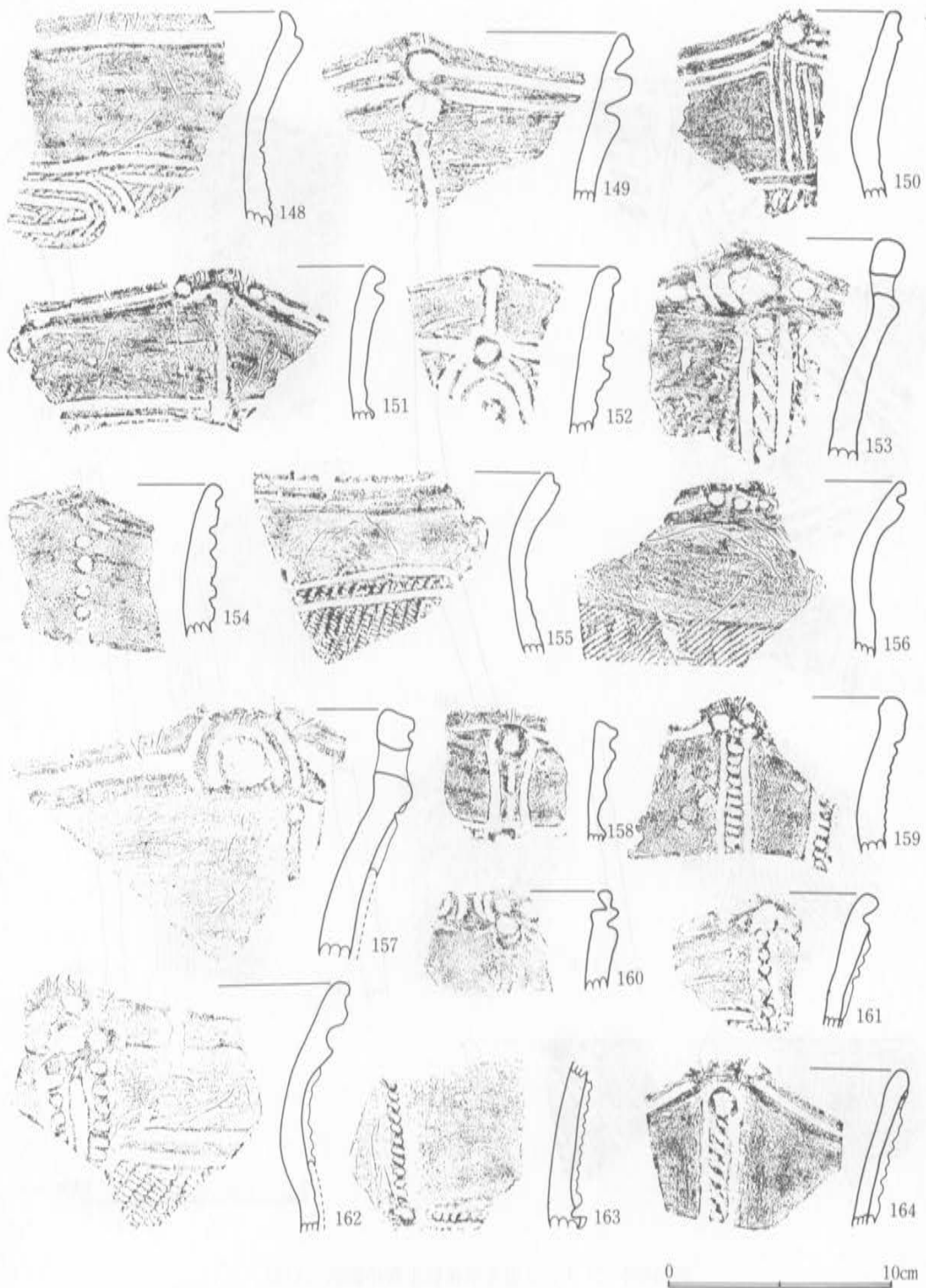
第153図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



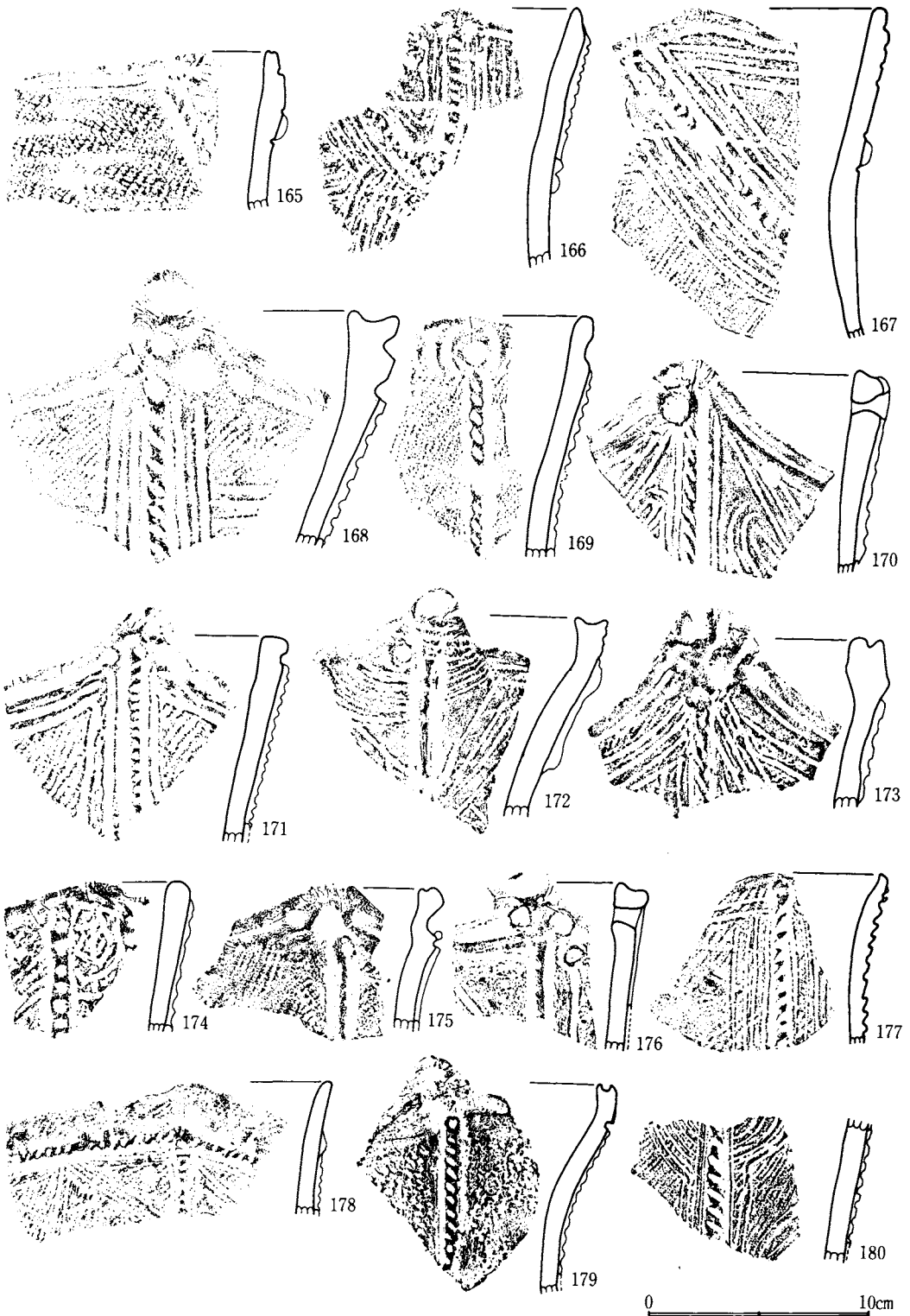
第154図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



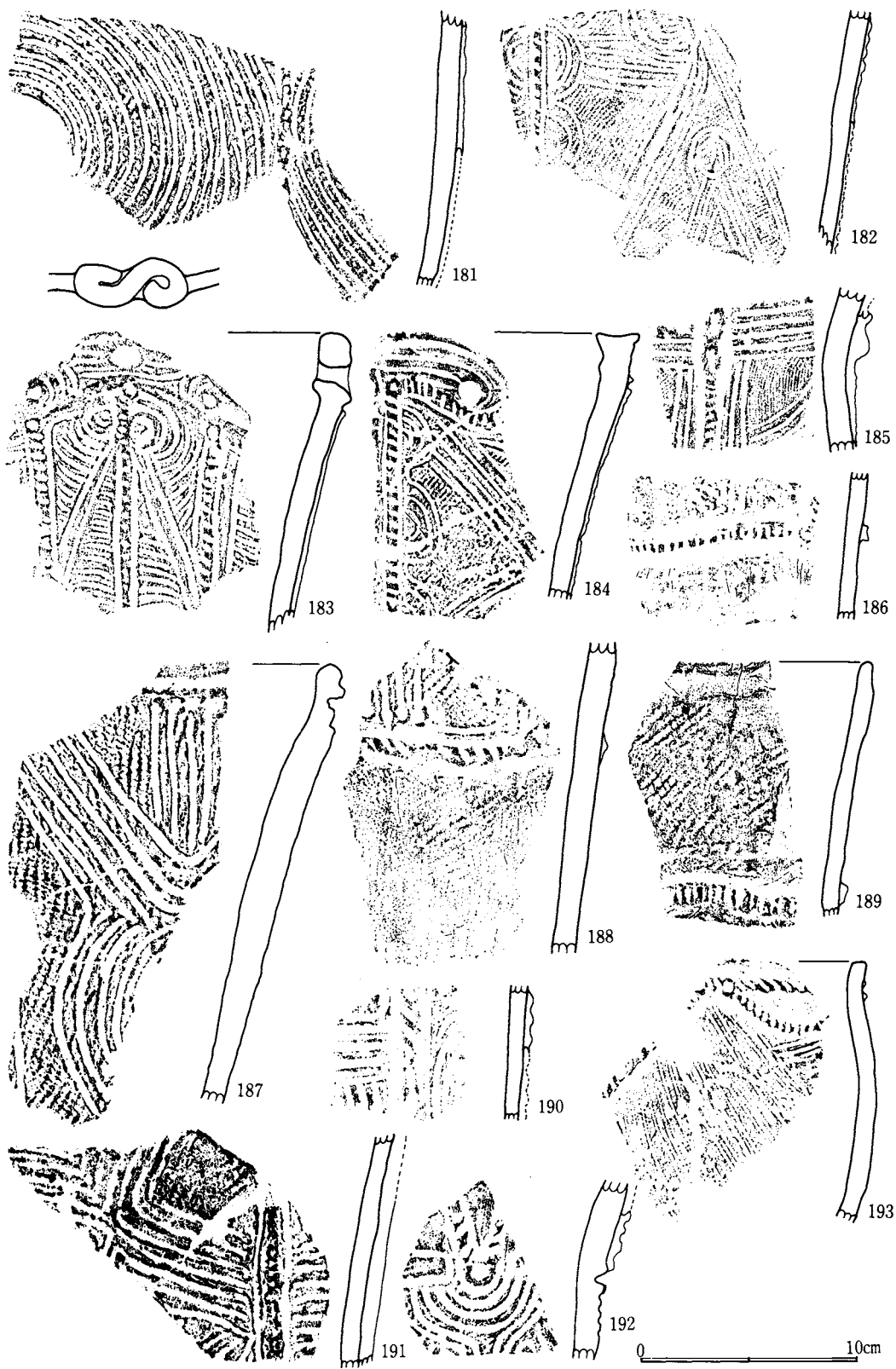
第155図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



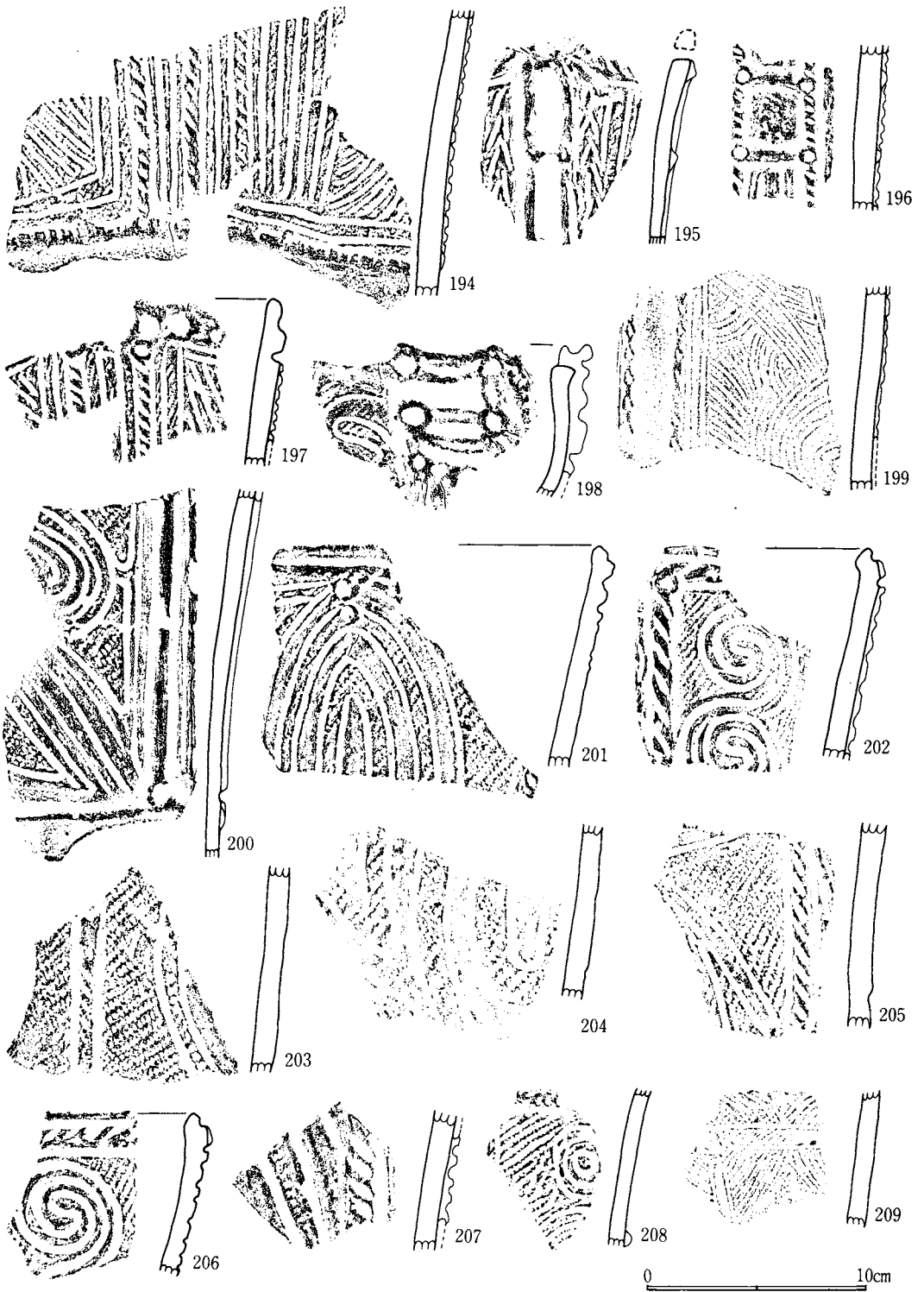
第156図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



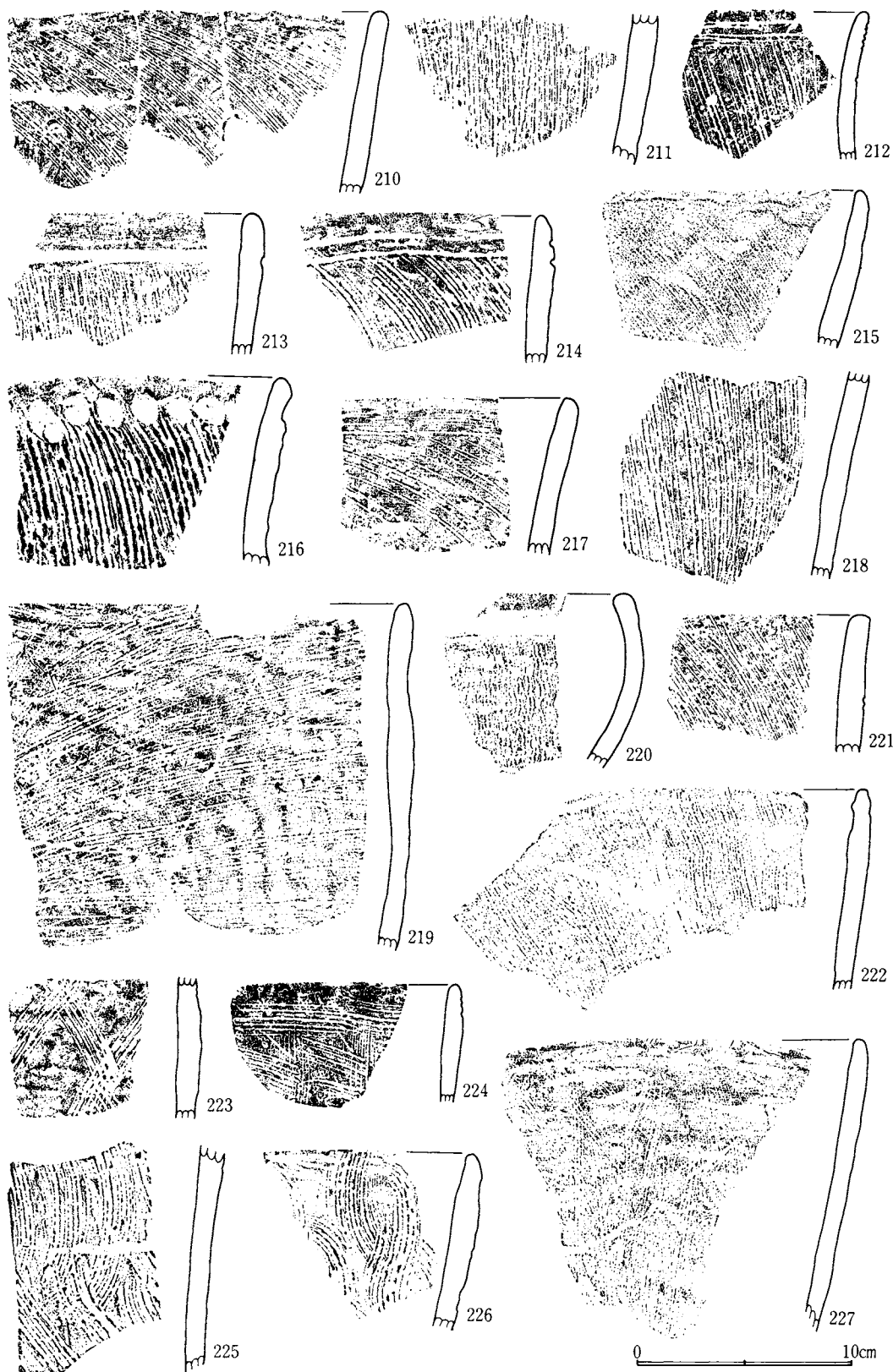
第157図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



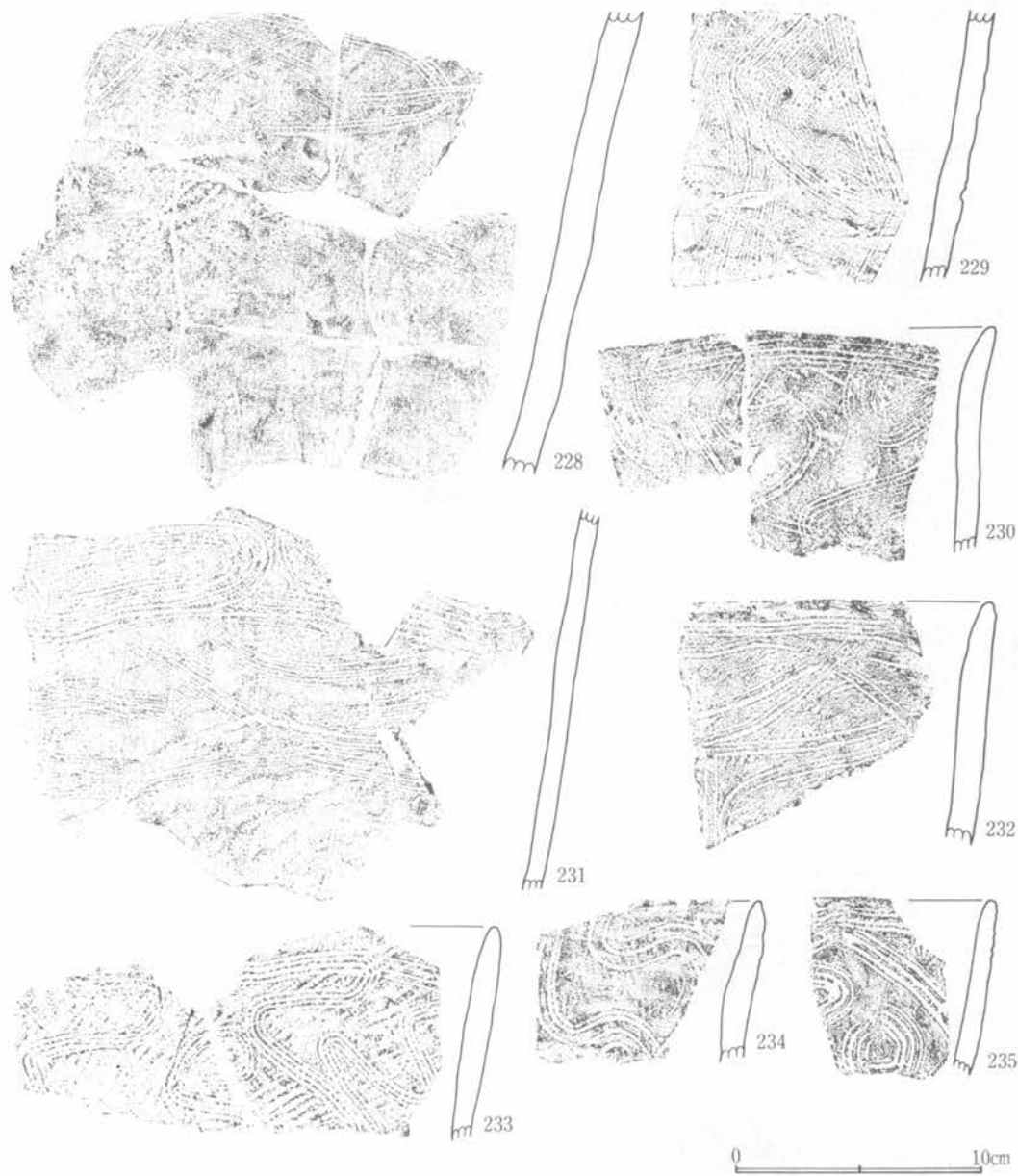
第158図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



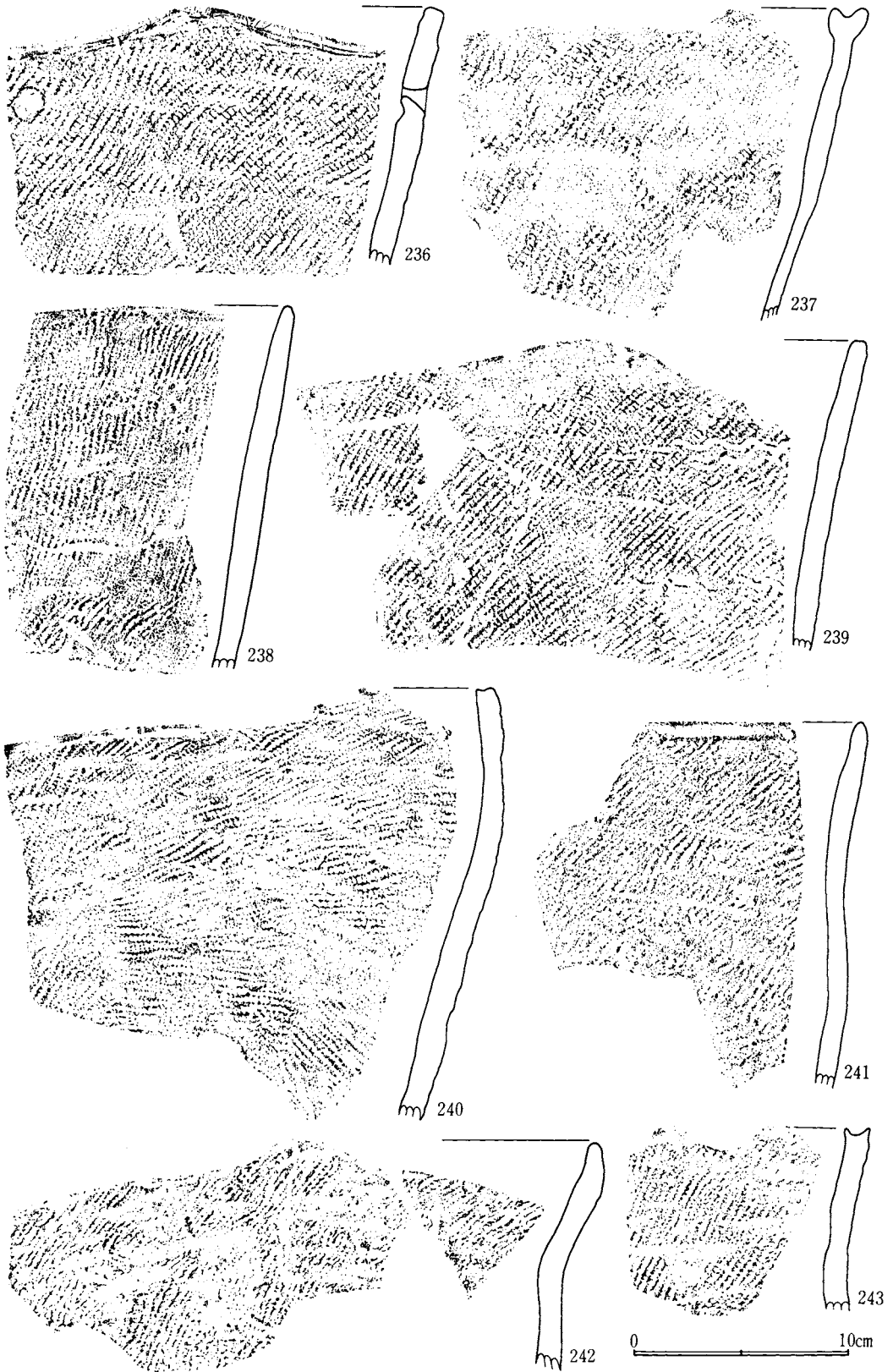
第159図 グリッド出土第IV群土器拓影図・(1/3)



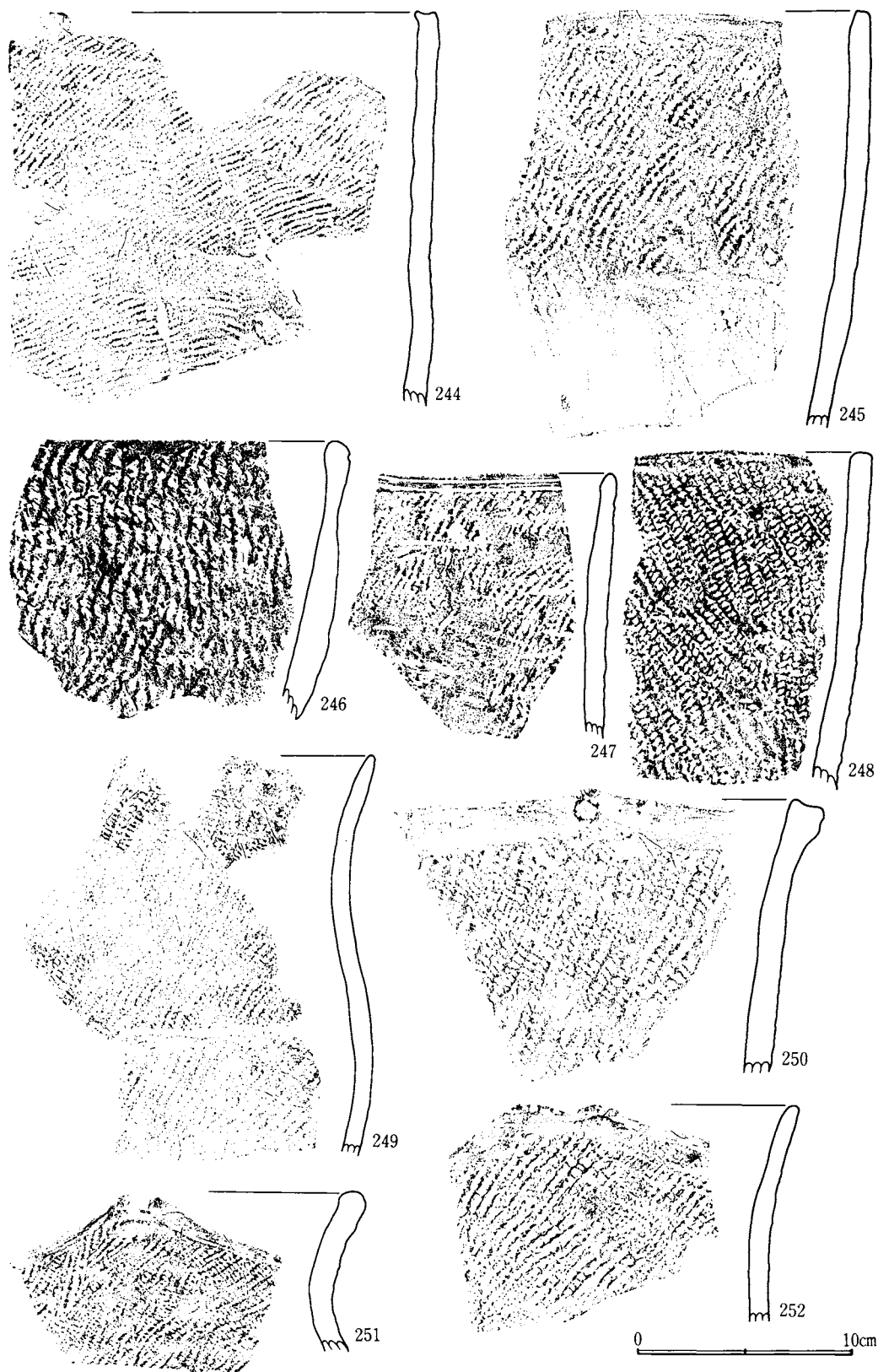
第160図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



第161図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



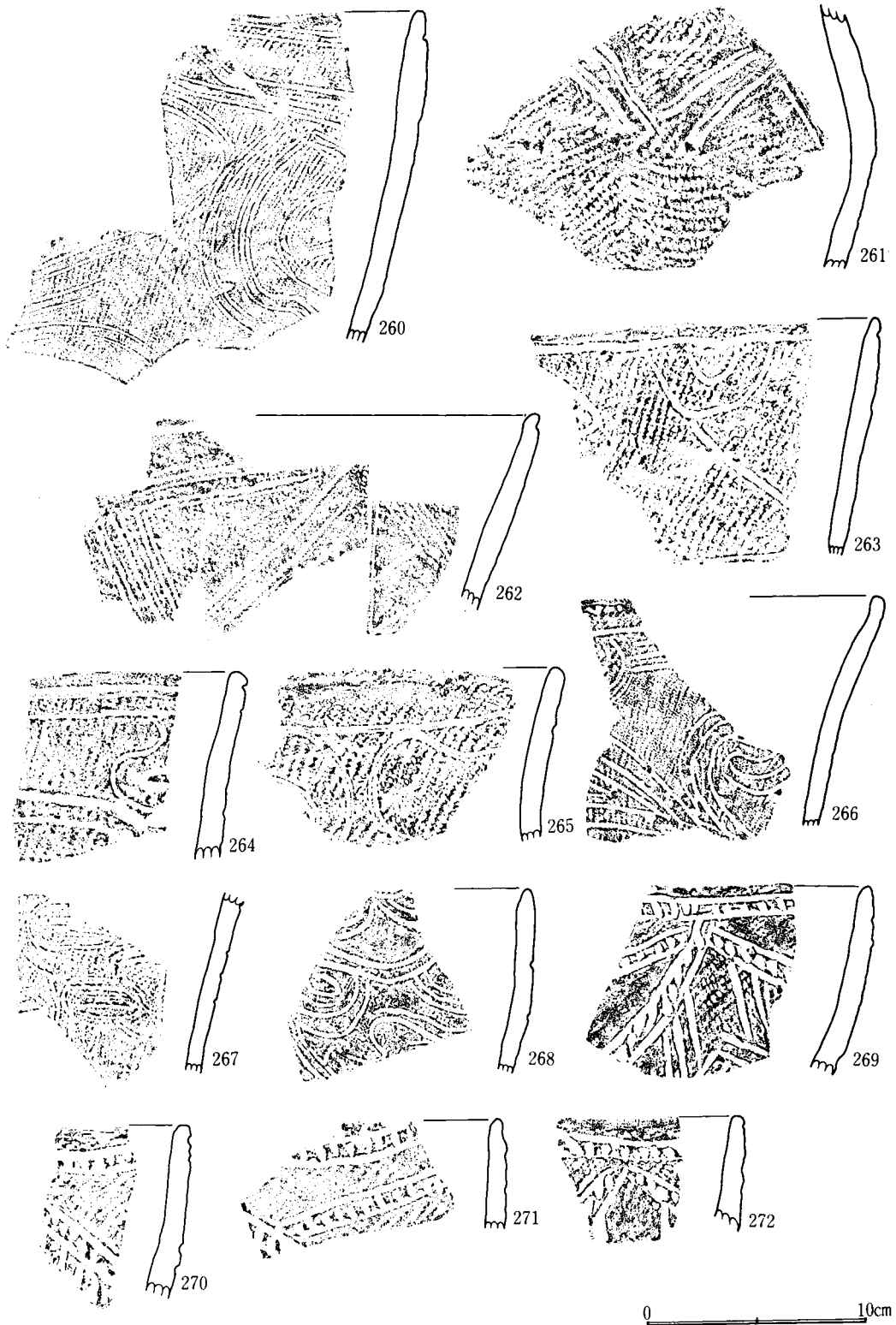
第162図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



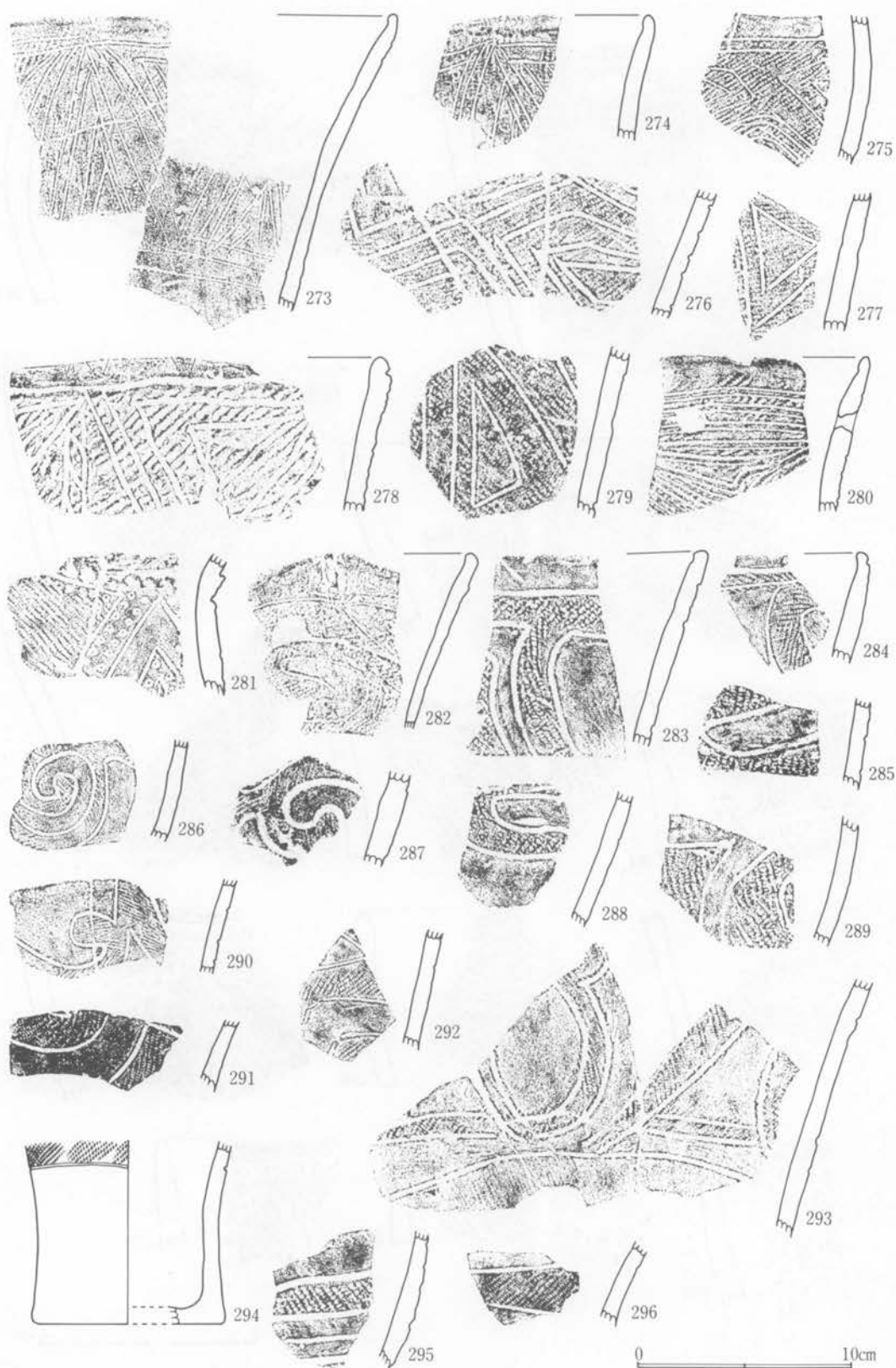
第163図 グリッド出土第Ⅳ群土器拓影図 (1/3)



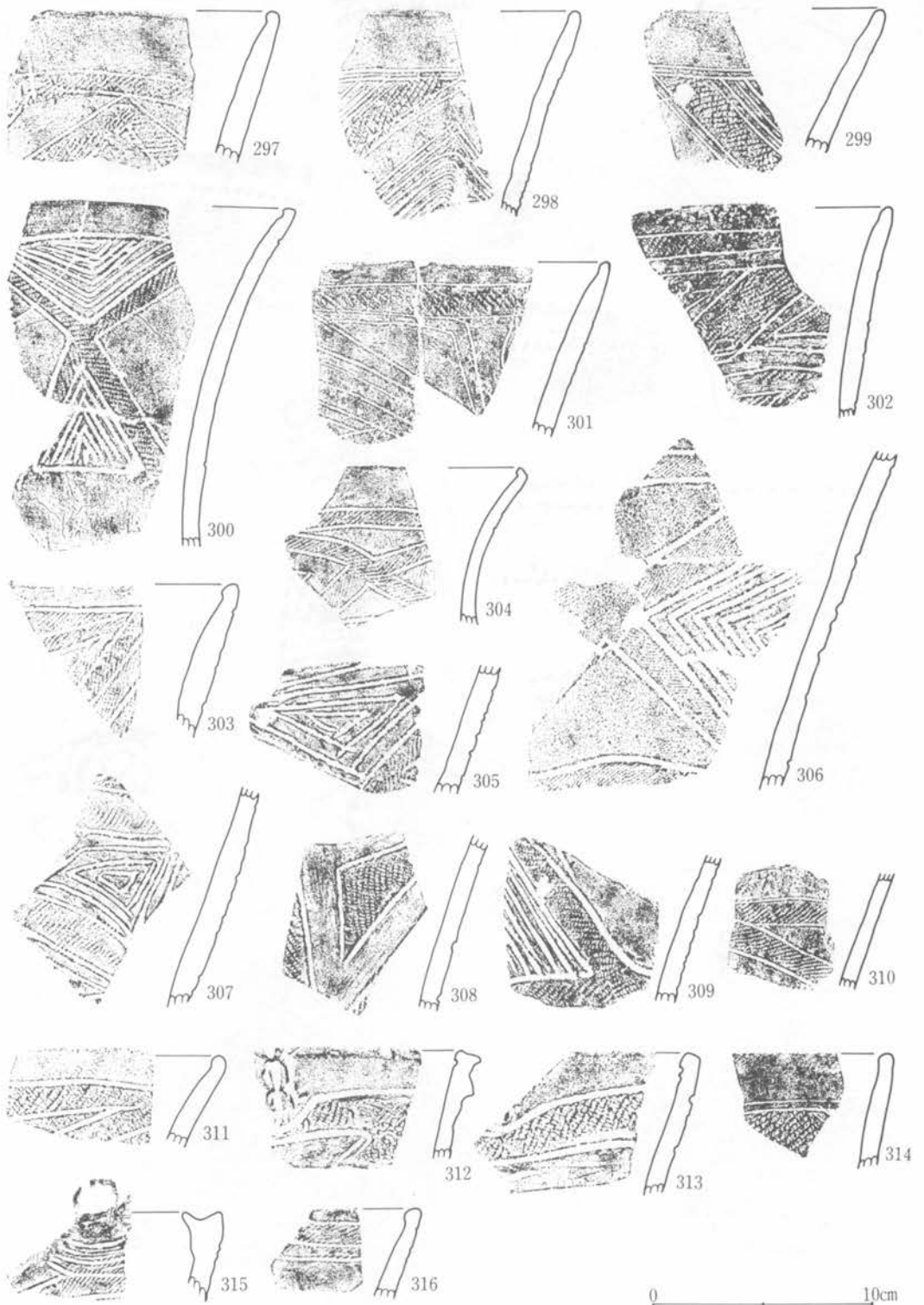
第164図 グリッド出土第Ⅳ群土器拓影図 (1/3)



第165図 グリッド出土第Ⅳ群土器拓影図 (1/3)



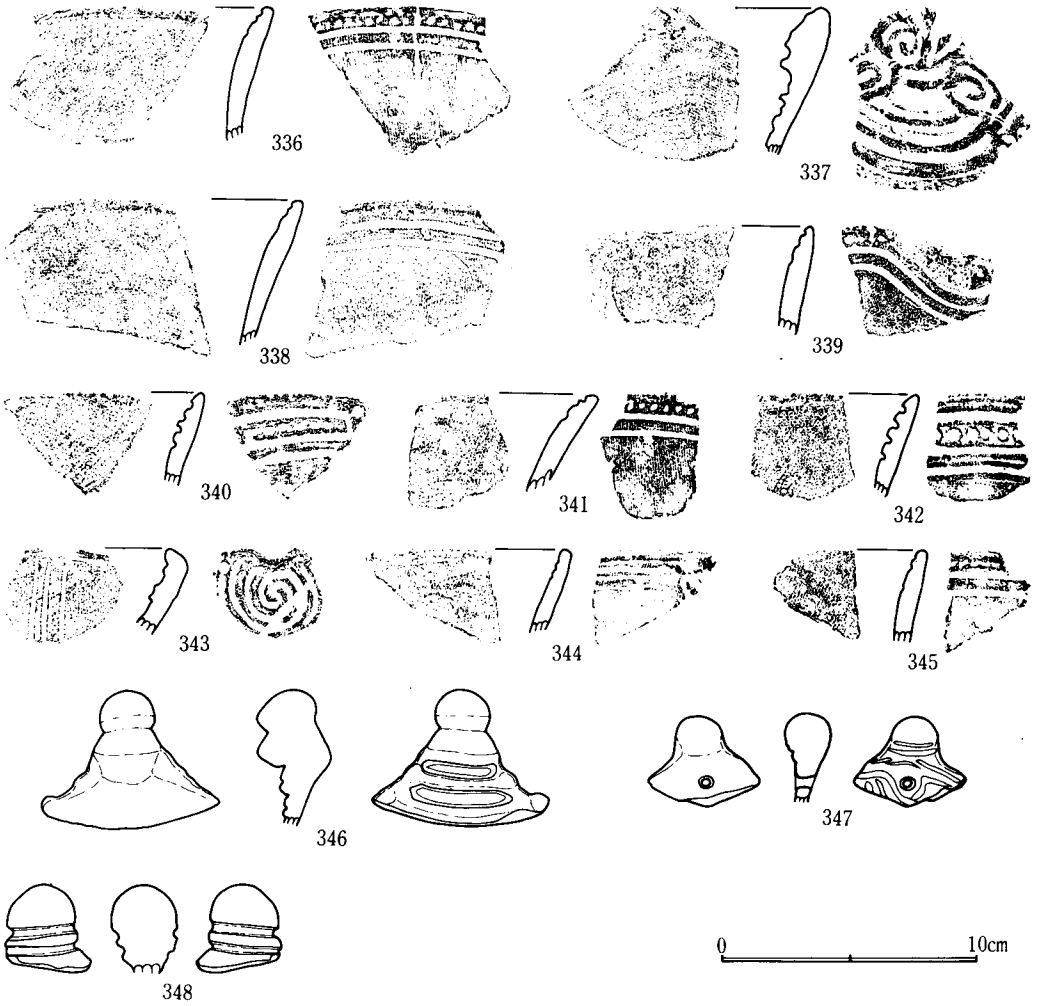
第166図 グリッド出土第Ⅳ群土器拓影図 (1/3)



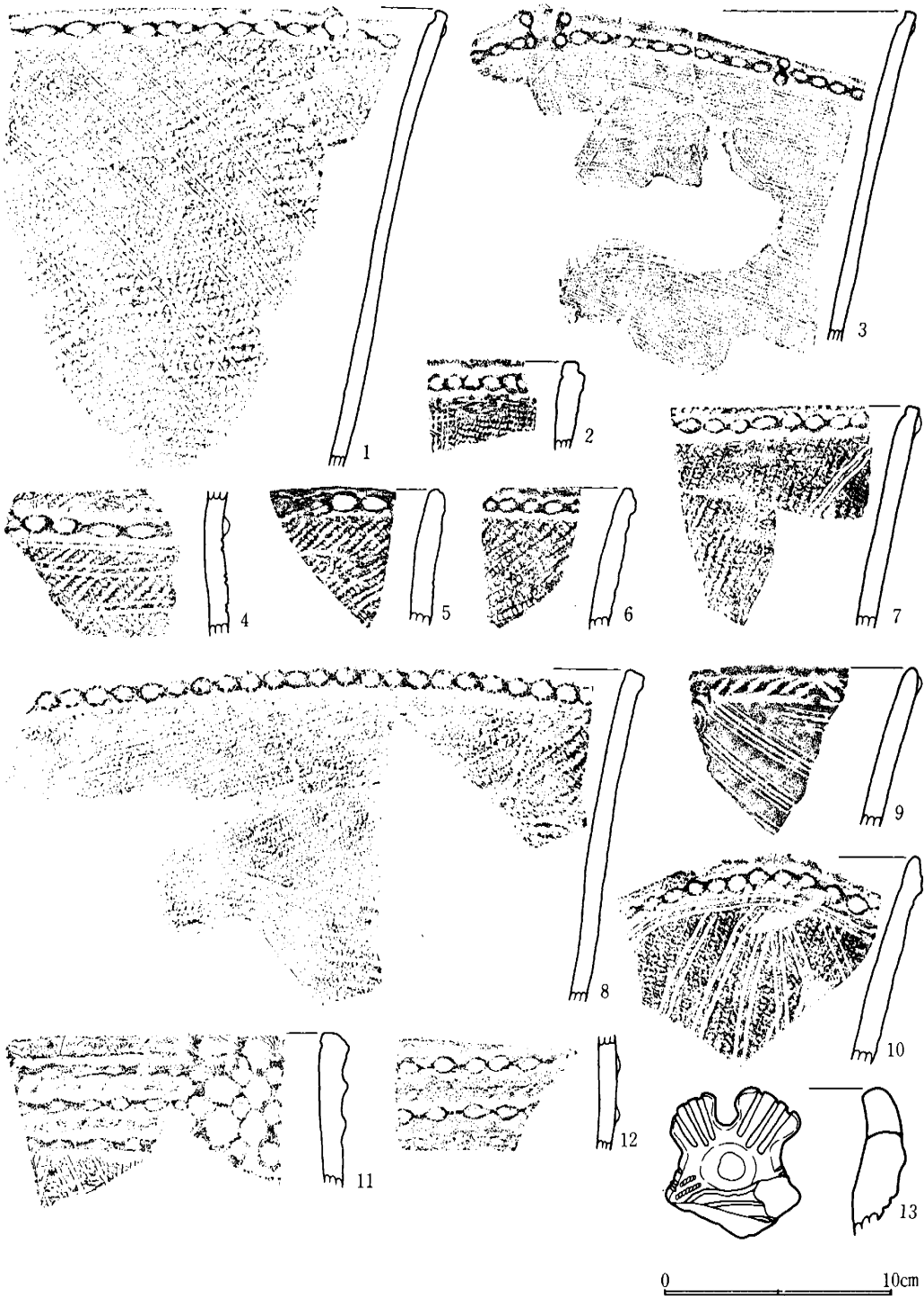
第167図 グリッド出土第IV群土器拓影図 (1/3)



第168図 グリッド出土第Ⅳ群土器拓影図 (1/3)



第169図 グリッド出土第Ⅳ群土器拓影図 (1/3)



第170図 グリッド出土第V群土器拓影図 (1/3)

グリッド出土土器観察表

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類	
グー1	深鉢 B II	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(29.2) 底径 — 器高(18.5)	口縁 4 胴部(8)	竹	L	口縁部に無文帯。無文帯下端に沈線がめぐる。J字状及びU字状文を施し、内部の縄文を磨消す。	2B64 2B65	第IV群 1類 a 種
グー2	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(31.6) 底径 — 器高(16.0)	口縁(4) 胴部(4)	竹	LR	口縁部に2本の沈線がめぐる。U字状文と蕨手文を施す。文様内は磨消さない。器面全体が若干摩耗。	0C61	第IV群 3類 a 種
グー3	深鉢 A I	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 1/4	口径 29.0 底径(9.4) 器高 50.1	口縁 3 胴部 6	竹	LR	口縁に沈線を施す。無文帯下端に沈線がめぐる。弧線を施し、その間の縄文を磨消す。	1A94 2A04	第IV群 1類 a 種
グー4	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(34.4) 底径 — 器高(21.0)	口縁 平 胴部(4)	竹	LR	頸部に2本の沈線がめぐる。単位文様はU字状文か。単位文様間に単純な蕨手文を施す。文様内は磨消さない。	2A04	第IV群 3類 a 種
グー5	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	— 1/4 —	口径 — 底径 — 器高(19.4)	口縁 — 胴部 8	竹	LR	垂下する沈線の間を磨消す。	1A82	第IV群 1類 a 種
グー6	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(26.4) 底径 — 器高(30.1)	口縁 3 胴部 3	竹	L	口縁部に沈線を施す。波頂下に蕨手文を施す。内部は磨消さない。	2B47	第IV群 1類 b 種
グー7	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	— 1/4 —	口径 — 底径 — 器高(18.3)	口縁 — 胴部(4)	竹	RLR	垂下する沈線を施す。間の縄文は磨消さない。	2B47	第IV群 1類 b 種
グー8	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(36.4) 底径 — 器高(37.2)	口縁 4 胴部 8	竹	L	口縁部に沈線がめぐる。無文帯に垂下隆帯2本を付ける。くびれ部に2本の沈線がめぐる。胴部に単純な蕨手文を施す。	1A83	第IV群 1類 b 種
グー9	深鉢 A I	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径 15.6 底径 — 器高(26.5)	口縁(3) 胴部(6)	竹	LR	口縁波頂下に蕨手文を施す。内部は若干磨消されている。	0C93	第IV群 1類 b 種
グー10	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	— 1/4 —	口径 — 底径 — 器高(26.1)	口縁(3) 胴部(6)	竹	LR	頸部に2本の沈線がめぐる。垂下沈線の左右に弧線を施す。	2A06 2A07 2A17	第IV群 1類 b 種
グー11	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	— 1/4 —	口径 — 底径 — 器高(16.4)	口縁 — 胴部 6	竹	LR	垂下点文。	1A73	第IV群 1類 b 種
グー12	深鉢 B II	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(25.9) 底径 — 器高(26.8)	口縁(平) 胴部 4	竹	LR	くびれ部に2本の沈線がめぐる。胴部に垂下沈線を施す。内部は磨消さない。	2A17	第IV群 1類 b 種
グー13	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(24.8) 底径 — 器高(16.3)	口縁(4) 胴部(4)	棒	RL	大波状口縁。口縁部に沈線を施す。波頂下に小突起を付す。胴部垂下沈線。	2B54	第IV群 1類 b 種
グー14	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(20.0) 底径 — 器高(17.3)	口縁(4) 胴部(4)	櫛	LR	口縁部に条線がめぐる。胴部垂下条線。	2A06	第IV群 1類 b 種
グー15	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 —	口径(15.7) 底径 — 器高(15.8)	口縁 平 胴部 ?	へら	RLR	垂下沈線の間に蛇行沈線を施す。	2A18	第IV群 1類 b 種
グー16	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(13.5) 底径 — 器高(13.4)	口縁 平 胴部(2)	竹	LR	口縁に沈線がめぐる。垂下沈線の間に短い沈線を施す。	0C61	第IV群 1類 b 種
グー17	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	— 1/4 完	口径 — 底径 9.0 器高(27.1)	口縁 — 胴部(3)	竹	L	蕨手文を施す。内部は磨消さない。	2A02 2A03	第IV群 1類 b 種
グー18	深鉢	口縁 胴部 底部	— 1/4 1/2	口径 — 底径(9.3) 器高(20.5)	口縁 — 胴部 ?	竹	LR	蕨手文を施文か。内部は磨消さない。	2A04	第IV群 1類 b 種
グー19	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径 12.9 底径 — 器高(12.7)	口縁(2) 胴部(2)	半竹	RL	口縁に浅い沈線がめぐる。垂下沈線の左右に半弧状沈線を施す。団子状の文様を呈する。	1C21 1C31	第IV群 2類 c 種
グー20	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(26.7) 底径 — 器高(19.0)	口縁(4) 胴部(4)	棒	LR	口縁に沈線がめぐる。垂下沈線の間に垂下するクランク状の沈線文を施す。	1C31	第IV群 2類 d 種
グー21	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(29.5) 底径 — 器高(17.9)	口縁 平 胴部(9)	竹	LR	口縁に細い無文帯をもつ。胴部には単純な垂下沈線を施す。	0C51 0C60 0C61 0C72	第IV群 2類 d 種

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
グー22	深鉢	口縁 胴部 底部	— — — 1/2 1/2	口径 — 底径 (11.5) 器高 (22.9)	口縁 — 胴部 ?	竹	LR 重層する弧線文か。	2B38	第IV群 2類 a種 ?
グー23	深鉢 A II	口縁 胴部 底部	— — — 1/2 1/2	口径 — 底径 — 器高 (25.0)	口縁 — 胴部 (4)	半竹	LR 垂下する沈線の左右に重層する連弧状の沈線を施す。	2B11	第IV群 2類 b種
グー24	深鉢 A II	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (38.7) 底径 — 器高 (25.5)	口縁 (4) 胴部 (4)	竹	LR 口縁部に沈線がめぐる。葎手状の文様に重層する弧線を施す。	1C35	第IV群 2類 a種
グー25	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	— — — 1/2 1/2	口径 — 底径 — 器高 (24.7)	口縁 — 胴部 3	半竹	LR 8の字浮文の下に垂下沈線を施し、左右に重層する連弧状沈線を施す。	1A58 1A76 1A84 1A86 1A88	第IV群 2類 b種
グー26	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (32.1) 底径 — 器高 (19.5)	口縁 3 胴部 ?	半竹	? V字状及び垂下する隆帯を付す。胴部に重層する弧線を施す。地文は、太い撚紐に原体Lを巻いた原体による施文か。	2A18 2A19	第IV群 2類 a種
グー27	深鉢	口縁 胴部 底部	— — — 1/2 1/2	口径 — 底径 — 器高 (20.7)	口縁 — 胴部 (8)	半竹	R 垂下沈線の左右に重層する弧線を施す。	2B23	第IV群 2類 a種
グー28	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (25.1) 底径 — 器高 (12.1)	口縁 平 胴部 (4)	半竹	R 8の字浮文の周囲に沈線を施す。胴部は重層する弧線文を施す。	2A13	第IV群 2類 a種
グー29	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (26.0) 底径 — 器高 (15.7)	口縁 平 胴部 (3)	へら	LR 竹管を1/2分割したへら状工具を使用。口縁部に沈線がめぐる。垂下する連弧状の沈線を単位文様とする。間に垂下沈線を施文。	1C61	第IV群 3類 a種
グー30	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (32.3) 底径 — 器高 (38.4)	口縁 (3) 胴部 (3)	棒	LR 口縁に沈線がめぐる。口縁から頸部くびれの横走沈線を貫く垂下沈線及び弧線を施す。間に垂下沈線を施す。	2B00	第IV群 3類 a種
グー31	深鉢 A II	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 — 底径 — 器高 (22.0)	口縁 (4) 胴部 (4)	竹	LR 数条の垂下沈線の間に蛇行沈線を施し、単位文様とする。単位文様の間に弧線状の垂下沈線を施す。	2A19	第IV群 3類 a種
グー32	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (16.0) 底径 — 器高 (18.5)	口縁 (3) 胴部 (3)	へら	LR 蛇行沈線文の間に2本の垂下沈線を施す。	2A08 2A29	第IV群 3類 a種
グー33	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (13.0) 底径 — 器高 (15.3)	口縁 (3) 胴部 (3)	へら	LR 口縁に沈線がめぐる。垂下沈線の間に蛇行沈線文を施し、単位文様とする。単位文様の間に斜行沈線を施す。	1C02	第IV群 3類 b種
グー34	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 — 底径 — 器高 (19.1)	口縁 (4) 胴部 (4)	半竹	LR 多条の垂下沈線の左右に弧線を施し、単位文様とする。単位文様の間に垂下沈線及び斜行沈線を施す。	2C31	第IV群 3類 b種
グー35	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 — — 1/2	口径 (25.7) 底径 — 器高 (12.8)	口縁 3 胴部 ?	半竹	LR 口縁波頂下に重層するU字状沈線文。斜行沈線を施す。	2B22 2B35	第IV群 3類 b種
グー36	深鉢 A V	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (13.6) 底径 — 器高 (15.4)	口縁 平 胴部 2	竹	LR 口縁部に2本の深い沈線がめぐる。垂下沈線の間に蛇行沈線を施し、単位文様とする。単位文様の間に斜行沈線を施す。	1C26	第IV群 3類 b種
グー37	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (40.0) 底径 11.6 器高 ?	口縁 (4) 胴部 (4)	半竹	LR 口縁部に沈線がめぐる。3本の垂下沈線を単位文様とし、単位文様の間に斜行沈線を施す。	2A17 2A19	第IV群 3類 b種
グー38	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (24.2) 底径 — 器高 (20.1)	口縁 平 胴部 3	棒	LR 口縁に沈線がめぐる。垂下沈線の左右に弧線を施し、弧線の下端に斜行する沈線を施す。間に斜行沈線を施す。	2B31	第IV群 3類 b種
グー39	深鉢 A I	口縁 胴部 底部	1/2 完 — 1/2	口径 33.5 底径 — 器高 (45.9)	口縁 4 胴部 6	棒	LR 口縁に沈線がめぐる。頸部のくびれに沈線がめぐる。垂下沈線を単位文様とし、単位文様の間にクランク状の沈線文を施す。	1C01	第IV群 3類 c種
グー40	深鉢 A I	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (33.4) 底径 — 器高 (29.9)	口縁 3 胴部 6	竹	L 無文帯に重層するV字状の沈線文を施す。重層する曲線文(疑似蕨手文か)を単位文様とし、その間にクランク状の沈線文を施す。	1A83	第IV群 3類 c種
グー41	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (49.4) 底径 — 器高 (18.1)	口縁 (4) 胴部 (4)	竹	LR 口縁及び頸部に沈線がめぐる。大柄なクランク状沈線文を施し、間を沈線でうめ単位文様とする。単位文様の間にクランク状沈線文を施す。	1C01	第IV群 3類 c種
グー42	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 — 1/2	口径 (36.8) 底径 — 器高 (30.1)	口縁 3 胴部 6	半竹	LR 口縁部に沈線がめぐる。垂下沈線を単位文様とし、間にクランク状沈線文を施す。	1C12 1C21	第IV群 3類 c種

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類	
グー43	深鉢 B IV	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(28.6) 底径— 器高(15.7)	口縁(3) 胸部?	竹	LR	口縁部に沈線がめぐる。逆V字状に沈線を施し、胸部中に沈線がめぐる。波状の口縁に特徴がある。	0C61 0C62	第IV群 3類e種
グー44	深鉢 B V	口縁 胸部 底部	1/4 1/5 —	口径(42.5) 底径— 器高(25.9)	口縁(4) 胸部(8)	半竹	LR	口縁部に沈線がめぐる。キザミのある垂下隆帯の左右に連弧状の沈線文を施し、単位文様とする。単位文様の間にジグザグ状の沈線文を施す。	2B32	第IV群 6類a種
グー45	深鉢 底部	口縁 胸部 底部	— 1/4 完	口径— 底径 8.2 器高(16.9)	口縁— 胸部?	竹	LR	垂下沈線の左右に弧線を施し、単位文様とする。単位文様の間に垂下沈線を施し、さらにジグザグ状の沈線文を施す。	2A26 2A37	第IV群 3類e種
グー46	深鉢 B III	口縁 胸部 底部	1/4 1/5 —	口径(30.4) 底径— 器高(22.7)	口縁(3) 胸部(3)	半竹	LR	口縁に沈線がめぐる。垂下沈線の左右に連弧状の沈線文を施し、単位文様とする。単位文様の間にジグザグ状沈線文を施す。	2B10	第IV群 3類e種
グー47	深鉢 B IV	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(27.5) 底径— 器高(24.7)	口縁3 胸部3	半竹	LR	口縁に沈線がめぐる。垂下沈線の左右に連弧状の沈線文を施し、単位文様とする。単位文様と垂下沈線の間にジグザグ状沈線文を施す。	2A05 2A09 2A14 2A15	第IV群 3類e種
グー48	深鉢 B III	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(26.5) 底径— 器高(35.5)	口縁3 胸部3	半竹	LR	口縁部に沈線がめぐる。垂下沈線の左右に連弧状の沈線文を施し、単位文様とする。単位文様の間にジグザグ状の沈線文を施す。	2A17 2A26 2A27	第IV群 3類e種
グー49	深鉢 B III	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(27.3) 底径— 器高(13.8)	口縁(4) 胸部(4)	半竹	LR	連弧状の沈線文を単位文様とする。単位文様の間にジグザグ状の沈線文を施す。	0C90	第IV群 3類e種
グー50	深鉢 B III	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径— 底径— 器高(16.6)	口縁— 胸部?	半竹	RLR	垂下沈線を単位文様とし、単位文様の間にジグザグ状の沈線文を施す。	2B01 2B11 2B12	第IV群 3類e種
グー51	深鉢 A II	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(31.5) 底径— 器高(25.1)	口縁(3) 胸部(3)	半竹	LRL ?	口縁及びくびれ部に沈線がめぐる。口縁からV字状の沈線文が施される。胸部には垂下沈線の左右に弧線が施され、間にジグザグ状の沈線文を施す。	2B35	第IV群 3類e種
グー52	深鉢 A III	口縁 胸部 底部	1/4 1/3 —	口径(20.4) 底径— 器高(25.5)	口縁平 胸部6	半竹	L	縄文は器面の乾燥がすすんでからの施文か、極めて不明瞭。垂下沈線の間にジグザグ状の沈線文を施し、最後に口縁部に横走沈線文を施す。	1C31 1C41	第IV群 3類e種
グー53	深鉢 B IV	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(26.0) 底径— 器高(18.0)	口縁平 胸部?	棒	LR	垂下する多条沈線の間にジグザグ状の沈線及び斜行沈線を施す。	0B68 0B69	第IV群 3類e種
グー54	深鉢 B III	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(32.1) 底径— 器高(29.3)	口縁4 胸部4	半竹	LR	垂下沈線の間にジグザグ状の沈線文を施す。最後に口縁部に横走する沈線文を施す。	1A66,1A68 1A75,1A76 1A85,1A86 1A87	第IV群 3類e種
グー55	深鉢 A III	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(32.7) 底径— 器高(30.5)	口縁平 胸部(3)	竹	LR	垂下する2本ずつの沈線の間にジグザグ状の沈線文を施し単位文様とする。単位文様の間にX字状の沈線文を施す。	2A07,2A09 2A17,2A18 2A27,2A28	第IV群 3類f種
グー56	深鉢 B IV	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(32.9) 底径— 器高(20.0)	口縁(4) 胸部(4)	半竹	LR	縄文は磨消されたとも考えられる。口縁部に沈線がめぐる。垂下沈線の左右に弧線を施し、単位文様とし、その間にX字状の沈線及び弧線を施す。	2B21 2B32	第IV群 3類f種
グー57	深鉢 A I ?	口縁 胸部 底部	— 1/4 —	口径— 底径— 器高(22.4)	口縁? 胸部(3)	竹	LR	蛇行沈線の左右に弧線を施し、単位文様とする。単位文様の間にX字状の沈線文を施す。X字状の交叉部分に特徴的な沈線文を施す。	1A72	第IV群 3類f種
グー58	深鉢 A III	口縁 胸部 底部	— 1/4 —	口径— 底径— 器高(19.3)	口縁— 胸部?	半竹	LR	くびれ部に沈線がめぐる。垂下沈線の間に方向のちがう斜行沈線を施す。(器面の剝落著しい)	1C31	第IV群 3類b種
グー59	深鉢 A I	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(23.9) 底径— 器高(26.5)	口縁平 胸部5	半竹	LR	口縁からくびれ部に弧線が施され、くびれ部に沈線がめぐる。U字状の沈線文下に外に開く弧線を施し単位文様とする。単位文様の間に曲線状の沈線文を施す。	1B85 1B94 2B03	第IV群 3類g種
グー60	深鉢 A III	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(35.4) 底径— 器高(20.8)	口縁4 胸部—	半竹	LR	垂下沈線の間にジグザグ状の沈線文を施し、単位文様とする。単位文様の間に曲線状の沈線文を施す。	0C90 0C91 0C92	第IV群 3類g種
グー61	深鉢 A II	口縁 胸部 底部	— 1/4 —	口径— 底径— 器高(21.2)	口縁— 胸部4	棒	LR	口縁から頸部にかけて無文と思われる。8の字浮文が付けられ、直下にU字状の沈線文を施し、左右に外に開く弧線を施す。その後、垂下沈線を施し、余白にくの字状の沈線文を施す。	1C61	第IV群 3類h種
グー62	深鉢 A III	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(27.0) 底径— 器高(25.0)	口縁3 胸部3	櫛	LRL	口縁部に条線がめぐる。口縁波頂下にU字状に条線を施し、直下に垂下条線を施し、その左右に弧線状の条線を施す。	1A78,1A87 1A88,1A89 1A96,1A97 1A98	第IV群 3類h種
グー63	深鉢 A II	口縁 胸部 底部	— 1/4 —	口径— 底径— 器高(27.8)	口縁— 胸部4	半竹	—	口縁部は無文帯と思われる。器面は極めて粗い調整。頸部に沈線がめぐる。垂下する多条の沈線を単位文様とする。単位文様間にジグザグ状の多条の沈線文を施す。	1C21	第IV群 4類

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類	
グー64	深鉢 B V	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 —	口径 12.1 底径 — 器高(12.9)	口縁 2 胴部 5 ?	櫛	—	垂下する条線を単位文様とし、間に曲線状の条線文を施す。文様帯下端を区画する条線がめぐる。	2B12 2B13	第IV群 4類
グー65	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	3/4 1/4 —	口径(22.0) 底径 — 器高(16.6)	口縁 3 胴部 3	半竹	—	口縁部に沈線がめぐる。垂下沈線の左右にジグザグ状の沈線を施し、単位文様の間にジグザグ状の沈線を施す。	0B79	第IV群 4類
グー66	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 3/4 1/4	口径 20.3 底径 8.7 器高 27.0	口縁 3 胴部 3	竹	L R	器面の乾燥が進んでから、縄文を施したのか。口縁部に沈線がめぐる。垂下沈線の間にハの字状沈線を施し単位文様とする。文様帯下端を区画する条線がめぐる。	0C61	第IV群 6類 d種
グー67	深鉢 B V	口縁 胴部 底部	1/4 — —	口径(17.0) 底径 — 器高(13.6)	口縁(3) 胴部 —	棒	—	垂下する隆帯の間にハの字状の沈線を施す。内面はていねいに調整。	2B48	第IV群 6類 a種
グー68	深鉢 B V	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(38.6) 底径 — 器高(43.2)	口縁 4 胴部 4	竹	L R	キザミを施した垂下隆帯を単位文様とし、文様帯下端を区画する隆帯を付す。単位文様間は渦巻状沈線を施し、放射状に沈線をくわえる。	0B78	第IV群 6類 a種
グー69	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(30.1) 底径 — 器高(24.2)	口縁 4 胴部 —	櫛	L R	地文の縄文をわずかにとどめる。口縁部に条線がめぐる。単位を構成しない斜行条線を疎に施す。	2B12 2B13	第IV群 7類 a種
グー70	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/4 3/4 —	口径(26.5) 底径 — 器高(35.4)	口縁 平 胴部 —	櫛	—	口縁部に条線がめぐる。単位を構成しない垂下条線を全面に施す。	1C22	第IV群 7類 b種
グー71	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(29.8) 底径 — 器高(19.9)	口縁 平 胴部 —	櫛	—	単位を構成しない曲線の条線を全面に施す。	2A17 2A18 2A25 2A36	第IV群 7類 c種
グー72	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/4 1/2 —	口径 22.3 底径 — 器高(22.0)	口縁 3 胴部 —	櫛	—	口縁部に条線がめぐる。単位を構成しない垂下条線を全面に施す。	1A64 1A73 1A83 1A93	第IV群 7類 b種
グー73	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(34.4) 底径 — 器高(24.0)	口縁(平) 胴部 —	半竹	—	口縁部に2本の沈線がめぐる。間隔をおいて垂下条線を全面に施す。	0C81	第IV群 7類 b種
グー74	深鉢	口縁 胴部 底部	— 1/4 3/4	口径 — 底径(12.8) 器高(20.2)	口縁 — 胴部 ?	半竹	—	斜行条線を施す。	1C21	第IV群 7類 b種 ?
グー75	深鉢	口縁 胴部 底部	— 1/4 1/4	口径 — 底径 16.5 器高(10.3)	口縁 — 胴部 —	櫛	—	垂下条線を施す。	2A14	第IV群 7類 b種 ?
グー76	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	— 1/4 —	口径 — 底径 — 器高(23.3)	口縁 — 胴部 —	半竹	—	条線と言える密な垂下沈線を施す。	2B10	第IV群 7類 b種
グー77	深鉢 A I	口縁 胴部 底部	3/4 1/2 3/4	口径(29.9) 底径(12.9) 器高(44.3)	口縁 平 胴部 ?	半竹	L R	地文の縄文を全面に施した後、粗く条線を施す。	1B66, 1B91 1B92, 1B93 2B13, 2B22	第IV群 7類 a種
グー78	深鉢 B II	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(33.1) 底径 — 器高(28.2)	口縁(平) 胴部 —	—	L R	地文のみ。	0B68 0B78	第IV群 8類 a種
グー79	深鉢 B II	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(33.4) 底径 — 器高(29.9)	口縁(平) 胴部 —	—	L R	地文のみ。	0C61	第IV群 8類 a種
グー80	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(25.7) 底径 — 器高(25.7)	口縁 ? 胴部 —	—	L R	地文のみ。	2B43	第IV群 8類 a種
グー81	深鉢 A I	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(24.7) 底径 — 器高(26.2)	口縁(3) 胴部 —	—	L R	地文のみ。	2B00	第IV群 8類 a種
グー82	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	3/4 3/4 1/4	口径 27.6 底径(9.8) 器高 31.3	口縁 平 胴部 —	—	L R	地文のみ。	2A05	第IV群 8類 a種
グー83	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/4 1/4 —	口径(31.0) 底径 — 器高(37.1)	口縁(平) 胴部 —	—	L R	地文のみ。	2B10	第IV群 8類 a種
グー84	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	3/4 完 完	口径 29.4 底径 9.8 器高 35.0	口縁 1 胴部 —	—	L R	地文のみ。	2A17	第IV群 8類 a種

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施工工具	地文	文様	出土位置	分類
グー85	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(33.6) 底径— 器高(28.8)	口縁平 胴部—	—	LR 地文のみ。	2B22 2B32	第IV群 8類a種
グー86	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(29.1) 底径— 器高(20.0)	口縁平 胴部—	—	LR 地文のみ。	1C60	第IV群 8類a種
グー87	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(24.9) 底径— 器高(21.3)	口縁(3) 胴部—	—	LR 地文のみ。	1C42	第IV群 8類a種
グー88	深鉢 A I ?	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径— 底径11.4 器高(26.4)	口縁— 胴部—	—	LL 地文のみ。	2A05 2A07	第IV群 8類?
グー89	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(30.4) 底径— 器高(11.8)	口縁4 胴部—	—	LR 地文のみ。	1C21	第IV群 8類a種
グー90	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(35.1) 底径— 器高(24.0)	口縁平 胴部—	—	RL 地文のみ。	2A16	第IV群 8類a種
グー91	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(23.8) 底径— 器高(19.9)	口縁平 胴部—	—	L 地文のみ。	2B11	第IV群 8類a種
グー92	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(33.4) 底径— 器高(21.9)	口縁平 胴部—	—	LR 地文のみ。	2B22	第IV群 8類a種
グー93	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径— 底径9.7 器高(26.5)	口縁— 胴部—	—	LR 地文のみ。	1A73	第IV群 8類?
グー94	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(26.4) 底径— 器高(42.7)	口縁3 胴部—	—	LR 地文のみ。	2B35	第IV群 8類a種
グー95	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(25.4) 底径(11.6) 器高36.5	口縁3 胴部—	—	LR 地文のみ。	2B35	第IV群 8類a種
グー96	深鉢 A I ?	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径— 底径— 器高(20.9)	口縁— 胴部—	—	LR 地文のみ。	1C31	第IV群 8類a種?
グー97	深鉢 B III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(19.5) 底径— 器高(20.4)	口縁3 胴部—	—	LR 地文のみ。	2B01 2B02	第IV群 8類a種
グー98	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(16.6) 底径— 器高(15.1)	口縁(平) 胴部—	—	LR 地文のみ。	2B13	第IV群 8類a種
グー99	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(12.0) 底径— 器高(12.1)	口縁? 胴部—	—	LR 地文のみ。	2B31	第IV群 8類a種
グー100	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径— 底径— 器高(11.5)	口縁— 胴部—	—	LR 地文のみ。	0B68 0B69	第IV群 8類a種
グー101	深鉢 B V	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(27.8) 底径— 器高(10.2)	口縁(3) 胴部—	竹	LR 地文のみ。	0C70 0C80 0C81	第IV群 8類b種
グー102	深鉢 B IV	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径23.0 底径— 器高(18.8)	口縁4 胴部—	竹	LR 地文のみ。	1A77	第IV群 8類b種
グー103	深鉢 A II	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(31.0) 底径— 器高(19.0)	口縁3 胴部—	竹	LR 口縁部に沈線がめぐる。口縁波頂下に凹文を施す。	1C33 1C35 1C44 1C45	第IV群 8類b種
グー104	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(32.3) 底径— 器高(32.1)	口縁4 胴部—	—	L 口縁波頂下に凹文を施す。全面無節縄文を施文する。	1A83	第IV群 8類b種
グー105	深鉢 A III	口縁 胴部 底部	1/2 1/2 1/2	口径51.0 底径— 器高(47.0)	口縁4 胴部4	半竹	LR 口縁部及び頸部に紐線文を付す。口縁波頂下から垂下する紐線文を付す。単位文様はU字状沈線に弧状沈線を施したものである。他を斜行沈線であらわす。	1A81,1A85 1A86,1A87 1A96,1A97	第IV群 10類

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
グー106	深鉢 B IV	口縁 1/8 胴部 1/8 底部 1/8	口径(23.0) 底径 — 器高(20.8)	口縁(平) 胴部 —	—	L R	口縁部に紐線文がめぐる。口縁内側に浅い沈線がめぐる。胴部は全面縄文。	1A76	第IV群 10類
グー107	深鉢 B V	口縁 3/8 胴部 1/8 底部 1/8	口径(29.8) 底径 — 器高(18.7)	口縁(平) 胴部(5)	半竹	L R	口縁部に紐線文がめぐる。口縁内側に沈線がめぐる。垂下沈線を単位文様とし、単位文様の間に斜行沈線を施す。さらに横走する沈線が施される。	1A31 1A33 1A41 1A42	第IV群 10類
グー108	深鉢 B III	口縁 1/2 胴部 3/4 底部 3/4	口径 19.3 底径 9.5 器高 20.2	口縁(2) 胴部 —	—	—	無文。器面は極めて粗い調整。	1B93	第IV群 9類
グー109	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径 16.7 底径 — 器高(20.0)	口縁 平 胴部(3)	半竹	—	上下に文様帯をつくり、内部に矢羽状の沈線を施す。文様帯の間に多条の沈線によるクラック状文を施す。器面は平滑。	1A75 1A85 1A86 1A96	第IV群 11類
グー110	深鉢 B IV	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(20.9) 底径 — 器高(20.0)	口縁 平 胴部 —	棒	—	口縁部にキザミのある隆帯がめくり、小突起が付される。胴部は単位を構成しない条線文が施される。文様帯下端を区画する条線がめぐる。	1A87 1A96 1A97 2A05 2A06	第IV群 11類
グー111	深鉢 A II	口縁 1/4 胴部 1/8 底部 1/8	口径(29.4) 底径 — 器高(21.1)	口縁 ? 胴部 ?	半竹	L R	口縁部に沈線がめぐる。交叉する斜行沈線を施す。内面の調整は良好。	2A05 2A18	第IV群 11類
グー112	深鉢 B IV	口縁 — 胴部 1/2 底部 1/2	口径 — 底径 — 器高(26.4)	口縁 — 胴部 ?	竹	L R	文様帯を縦に区画する単位文様がなく、多条の沈線による曲線文を施す。曲線文は重三角形文に近似する。	0C62 0C63	第IV群 11類
グー113	深鉢 A III	口縁 1/2 胴部 — 底部 1/2	口径(20.7) 底径 — 器高(21.3)	口縁 3 胴部 3	半竹	L R	口縁から頸部にかけて無文帯をもつ。波頂下に密にキザミを施した隆帯が付される。周囲に沈線を施す。頸部以下は縄文のみ。	2B00	第IV群 11類
グー114	深鉢 A III	口縁 1/8 胴部 — 底部 1/8	口径(35.9) 底径 — 器高(11.0)	口縁 ? 胴部 —	棒	L	平縁だが段差をもつ。口縁部に連続した貫通孔が施される。施文された文様は単位を構成していない。	1C72	第IV群 11類
グー115	深鉢 B IV	口縁 3/8 胴部 1/2 底部 1/2	口径(30.4) 底径 — 器高(18.8)	口縁 平 胴部 4	棒	L R	口縁部に微隆帯がめくりキザミが施され、8の字浮文が付付けられる。縄文を施文後、沈線で重三角文を施す。	1C31 1C42 1C71	第IV群 12類 d 種
グー116	深鉢 B V	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(22.5) 底径 — 器高(14.0)	口縁 平 胴部 —	棒	L R	縄文の施文は密でない。縄文施文後、胴部中に波状沈線を施し、波頂と谷を利用して、横に連続する重菱形文を描出する。	1C22 1C23 1C25 1C32 1C40	第IV群 12類 a 種
グー117	深鉢 B V	口縁 1/8 胴部 1/8 底部 1/8	口径(24.8) 底径 — 器高(13.4)	口縁 平 胴部 ?	棒	L R	沈線で重三角文と重菱形文を交互に施した後、区画内に細かい縄文を充填する。	2A07 2A17	第IV群 12類 c 種
グー118	深鉢 B V	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(19.9) 底径 — 器高(11.0)	口縁 平 胴部 ?	棒	L R	沈線で渦巻状の区画文を施した後、区画内に細かい縄文を充填する。	2B31	第IV群 12類 b 種
グー119	深鉢 B V	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(21.8) 底径(10.1) 器高(18.5)	口縁 平 胴部 ?	竹	R L	口縁部に微隆帯を付け、刺突を加える。8の字浮文を貼付ける。沈線で重三角文に近い区画文を施し、区画内に細かい縄文を充填する。	0C81 1C60 96号溝	第IV群 12類 d 種
グー120	鉢 F	口縁 1/8 胴部 — 底部 1/8	口径(29.1) 底径 — 器高(12.4)	口縁 平 胴部 —	棒	L R	口縁から内折部分に縄文を施した後、沈線で重三角文を描出し、区画内の縄文を磨消す。	0C93 1C00 1C01 1C10	第IV群 12類 a 種
グー121	鉢 F	口縁 — 胴部 1/8 底部 1/8	口径 — 底径 — 器高(5.6)	口縁 — 胴部 —	半竹	L R	口縁から内折部分に縄文を施した後、沈線で三角形状の文様を施したもののか。	0C81 0C83	第IV群 12類 a 種
グー122	鉢 F	口縁 — 胴部 1/8 底部 1/8	口径 — 底径 — 器高(16.1)	口縁 — 胴部 ?	棒	L R	口縁から内折部分に垂下する蛇行沈線文を施した後、沈線間に縄文を充填する。	2B11, 2B12 2B13, 2B21 2B22, 2B32 2B33	第IV群 12類 b 種
グー123	鉢 C	口縁 1/8 胴部 1/8 底部 1/8	口径(23.7) 底径 — 器高(19.1)	口縁 平 胴部 ?	竹	L R	口縁部に沈線がめぐる。胴部に垂下沈線を施す。	1C14	第IV群 11類
グー124	鉢 C	口縁 1/8 胴部 1/2 底部 完	口径(28.3) 底径 10.1 器高 22.4	口縁 平 胴部 —	—	L R	地文のみ。	2B47	第IV群 8類 a 種
グー125	鉢 C	口縁 1/8 胴部 1/8 底部 1/8	口径(26.3) 底径(10.1) 器高 15.8	口縁(平) 胴部 —	竹	L R	口縁部に長楕円の沈線文を施し、間に刺突文を施文する。	2B51	第IV群 8類 b 種
グー126	鉢 A	口縁 1/2 胴部 1/2 底部 1/2	口径(25.4) 底径 — 器高(16.4)	口縁 4 胴部 —	—	L R	地文のみ。	1C10	第IV群 8類 a 種

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	文様単位	施文工具	地文	文様	出土位置	分類
グー127	鉢 B	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 —	口径(25.8) 底径 — 器高(14.2)	口縁平 胸部 —	—	LR 地文のみ。	2B01 2B12 2B22	第IV群 8類a種
グー128	浅鉢 D	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 —	口径(16.7) 底径 — 器高(11.6)	口縁平 胸部 —	—	LR 地文のみ。	1C25	第IV群 8類a種
グー129	浅鉢 A	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 1/4	口径(17.4) 底径 — 器高 9.9	口縁平 胸部 —	—	LR 地文のみ。	2B10	第IV群 8類a種
グー130	鉢 A	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(26.1) 底径(10.6) 器高 16.2	口縁平 胸部 —	半竹	— 全面に斜行条線を施す。	2B10	第IV群 7類b種
グー131	浅鉢 (丸底) D	口縁 胸部 底部	1/2 1/4 1/2	口径(16.5) 底径 — 器高 (9.5)	口縁(平) 胸部 —	—	LR 地文のみ。	1B41	第IV群 8類a種
グー132	浅鉢 C	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 完	口径 13.3 底径 8.2 器高 11.3	口縁平 胸部 —	棒	— 単位を構成しない沈線を施す。	1A85	第IV群 5類b種
グー133	鉢 A	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 完	口径(21.3) 底径 8.2 器高 11.3	口縁(平) 胸部 —	—	— 無文。器面は全面平滑	0B68 0B69	第IV群 9類
グー134	浅鉢 C	口縁 胸部 底部	— — 完	口径(15.7) 底径 9.3 器高 11.0	口縁 — 胸部 —	—	— 無文。器面は粗く、輪積痕を残す。	2A15 2A16	第IV群 9類
グー135	浅鉢 E	口縁 胸部 底部	1/4 1/4 —	口径(15.1) 底径 — 器高 (9.9)	口縁(4) 胸部 ?	棒	— 器面は平滑。浅い沈線で上下を区画し連続的な重三角文を施す。	1B79	第IV群 12類e種
グー136	鉢 F	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 —	口径(33.0) 底径 — 器高(14.4)	口縁平 胸部 ?	棒	— 先の鋭い棒状工具によって深くて細い沈線が施される。やや形のくずれた重三角文が連続的に施される。	2B11 2B12 2B13 2B22	第IV群 12類e種
グー137	鉢 F	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 1/2	口径(27.1) 底径 (7.9) 器高(16.4)	口縁(平) 胸部 —	—	LR 地文のみ。	2B31	第IV群 8類a種
グー138	浅鉢 B	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 —	口径(17.4) 底径 — 器高 (3.3)	口縁平 胸部(8)	棒	RL 沈線によって三角形の区画文を施し、区画内に縄文を充填する。	1A86 1A96	第IV群 12類c種
グー139	浅鉢 B	口縁 胸部 底部	1/2 1/4 —	口径(20.0) 底径 — 器高 (6.4)	口縁平 胸部 —	櫛	— 単位を構成しない条線を施す。	0B79 0C81 0C82	第IV群 12類e種
グー140	浅鉢	口縁 胸部 底部	3/2 1/2 —	口径(16.0) 底径 — 器高(10.0)	口縁平 胸部 —	—	RL 口縁に紐線文を貼付ける。紐線文の長さは4cm前後で、2~4本が口縁に貼付けられる。	1C79	第V群
グー141	深鉢	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 —	口径 19.1 底径 — 器高 (9.5)	口縁 5 胸部 —	竹	LR 頸部無文帯をもつ。口縁部に縄文施文。無文帯下端に沈線を施す。	1C57 1C58	第V群
グー142	浅鉢	口縁 胸部 底部	1/2 1/2 —	口径(15.1) 底径 — 器高 6.7	口縁平 胸部 —	—	LR 中位に帯状に縄文を施す。口縁内側に浅い沈線がめぐる。	2A08	第V群
グー143	深鉢	口縁 胸部 底部	1/4 — —	口径(28.9) 底径 — 器高 (9.9)	口縁(平) 胸部 —	—	LR 地文のみ。口縁内側に沈線がめぐる。器厚はうすく、焼成は良好で硬質。器面の乾燥が進んでから縄文を施文か。	1B52	第V群

注口土器（第171図、第172図、第173図、図版49・66）

注口土器は、住居跡・土坑・グリッドの包含層からそれぞれ出土しており、小破片を含め全部で150点を数える。内訳は堀之内式期住居跡から8点、土坑から2点、グリッドの包含層から140点となっている。時期的には堀之内Ⅰ式及びⅡ式に限られる。

すでに各遺構出土例については説明を終えているため、ここではグリッド出土例を主体に分類を行うことにする。なお、分類は完形個体がほとんどなく器形の全容を把握しにくいことから、文様の描出方法によって行うことにした。

第1類 口縁部に幅の狭い無文帯をもち、胴部に縄文が施されるもの。本類は堀之内Ⅰ式の注口土器群中最も古い文様構成をとるものである。

第171図2・3が本類に含まれる。ともに口縁部は研磨され無文帯を形成する。無文帯の下端は段状の隆帯によって胴部の縄文とを区画している。隆帯には刺突が施される。2は半截竹管状工具、3は棒状工具による刺突である。胴部の縄文はLR単節縄文で、橋状把手の外面にも施されている。胴部下半の形態は欠損しているためはっきりしないが、ゆるく屈曲し底部にいたと思われる。器厚は2点とも厚く、胎土には砂粒が多く含まれる。

第2類 ほぼ全面に文様が施されるもの。

器形は丸味が強い。本類は胴部の中段から上に文様が集中して施される一群とは区別され、堀之内Ⅰ式の比較的古手の段階に位置付けられると思われる。

第172図1・2が本類に含まれる。1は竹管状工具によって短い沈線を密に施している。注口は短く把手と一体になっている。2は地文に縄文が施され棒状工具によって渦巻文などが施文される。

第3類 縄文を施した後、沈線で文様を描出するもの。胴部下半は無文となる。

第171図1が本類に含まれる。器形は丸味が強く、胴部中位からやや下に隆帯が付される。上半の文様はLR単節縄文を地文とし、半截竹管状工具で大きく蛇行する沈線文を施している。本類は堀之内Ⅰ式に属する。

第4類 地文縄文を伴わず、沈線によって文様を描出されるもの。胴部下半は無文となる。

第172図6～8・11・14・16・21・22、第173図25～27・31が本類に含まれる。6・7はよく研磨された器面に棒状工具で沈線文が描出される。8は沈線で区画された内部に刺突を施している。16は口縁部に二段の隆帯が貼付けられ、研磨された器面に同心円文が描出されている。

6・14は屈曲のゆるい丸味のある器形で、残りは算盤玉状の器形と思われる。本類は堀之内Ⅰ式に属する。

第5類 無文のもの。

第172図3・4が本類に含まれるが、第152号住居跡から出土した2個体（第88図15・16）の方が比較的遺存がよく器形もおおよそ知ることができる。3は注口土器の典型的な把手である。

4は大小の橋状把手が連結し、さらに注口と接続している。本類は無文のため時期の判断は難しいが、第152号住居跡の例から堀之内I式に比定されるであろう。しかし堀之内II式においてその系譜をたどり得るかは、本資料からは判断し得ない。

第6類 隆帯によって文様が描出されるもの。

第172図12・15、第173図34が本類に含まれる。12は小破片のためどのような文様となるかはつきりしないが、渦巻状に隆帯が貼付けられていると思われる。器面はよく研磨されている。15は屈曲部に貼付けられた微隆帯が縦位にも貼付けられ、沈線文が若干施される。34は刻目を施した微隆帯により文様を描出している。微隆帯の連結部分に8の字浮文が貼付けられる。

第7類 縄文を施した後、沈線で文様を描出し縄文の一部を磨消すもの。胴部下半は無文となる。

第172図5・9・10・19、第173図28・29が本類に含まれよう。5はLR単節縄文を地文とし、棒状工具で同心円文を描出して内部の縄文を磨消している。9は屈曲部に隆帯が付され、楕円形の刺突文が施されている。下半の無文部はよく研磨されている。10は9と類似した沈線文が描かれ、沈線間の縄文が磨消されている。屈曲部には微隆帯が付され、下半はよく研磨されている。19も同様に同心円文の内部が磨消される。28・29は同一個体である。口縁部は受け口状を呈する。縄文を地文とし、重層する弧線文を描出して沈線間の縄文を磨消している。

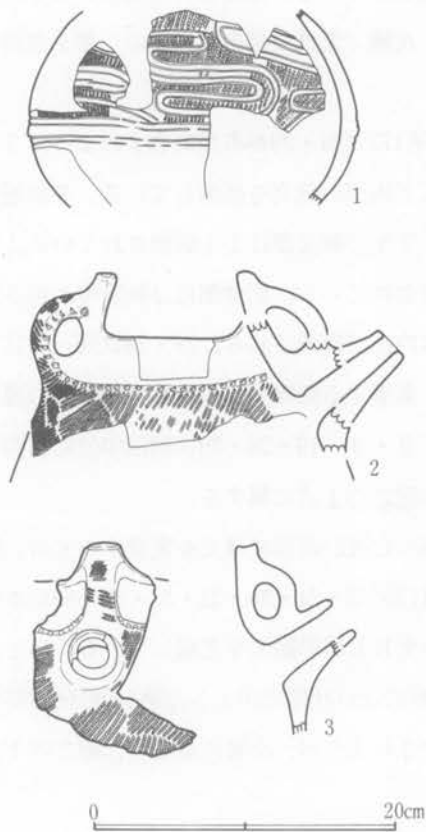
器形は10が算盤玉に近く、5・9・19・28・29は胴部中に屈曲を伴うものの、比較的丸味のある器形となろう。本類は堀之内I式に属する。

第8類 沈線で区画文を施した後、内部に縄文を充填するもの。胴部下半は無文となる。

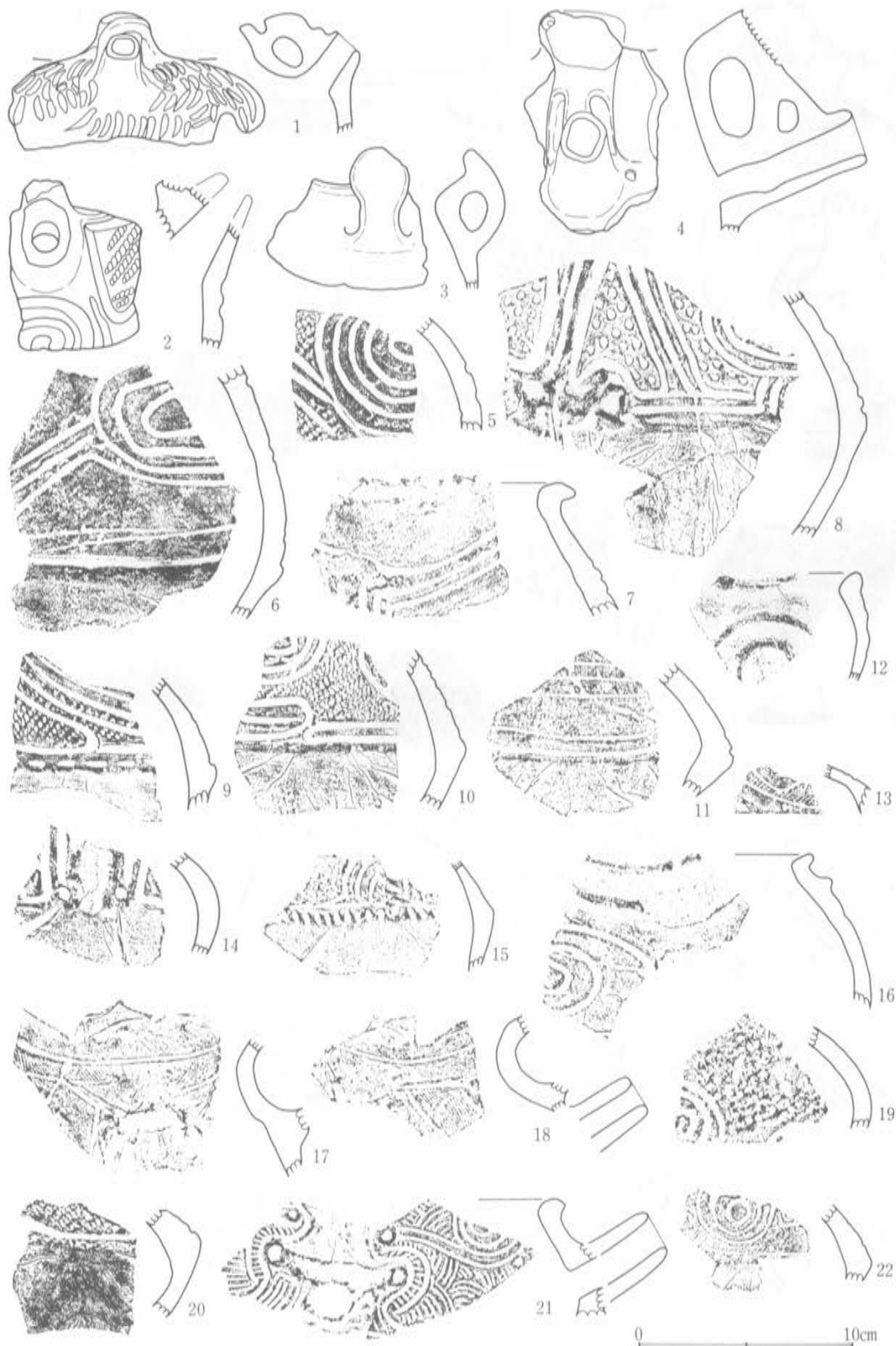
第172図13・17・18・20第173図23・24・30・32・33・35～39が本類に含まれる。みな沈線で区画した文様の内部にLR乃至RL単節縄文を充填している。ほとんどが算盤玉状を呈する器形と思われる。なお、唯一完形に近い状態で出土した第140号住居跡の注口土器は本類に含まれる。本類は堀之内II式に比定されようが、小破片が多く、堀之内I式の注口土器が含まれているかもしれない。

以上、文様の描出方法から8類に分類してみた。大半が破片のため文様と器形の関係を明確にし得なかったが、堀之内式期の注口土器にみられる文様のあり方について概ね抽出することができたと思う。

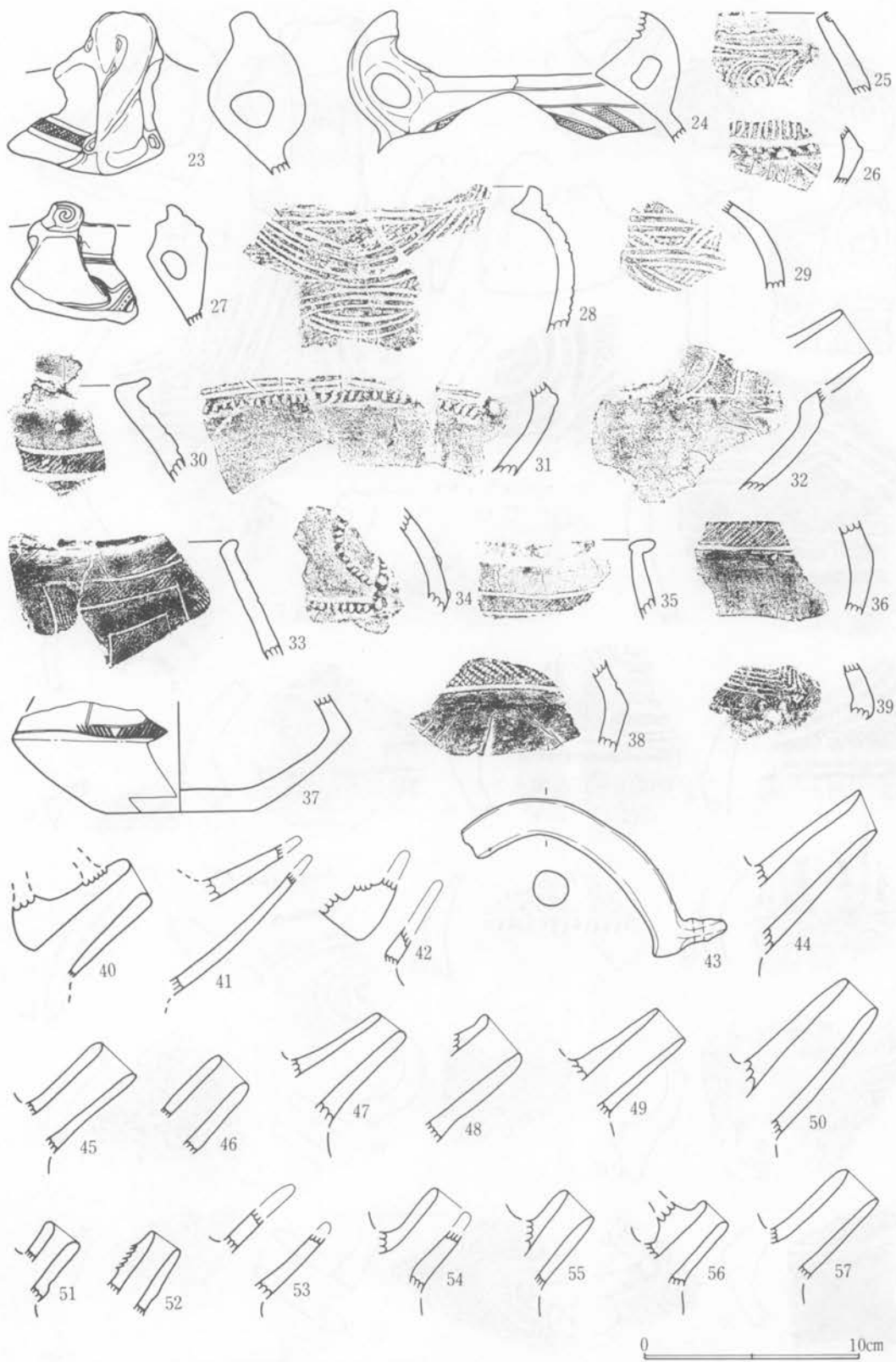
8類に分けられた注口土器のうち第1類は口縁部無文帯をもち、胴部の縄文とを区画する段状の隆帯を伴う点において他の注口土器とは極めて異質である。このような文様構成をもつ注口土器は関東東部の堀之内I式にはほとんどなく、綱取I式との関連を強く感じさせるものである。



第171図 グリッド出土注口土器実測図 (1/5)



第172図 グリッド出土注口土器拓影図 (1/3)



第173図 グリッド出土注口土器拓影図 (1/3)

グリッド出土石器

本遺跡からは、多数の石器が出土している。石器や石製品、そしてまた、一部に微妙な使用痕が認められる礫等を加えると、その数は非常に多いものと推定される。しかし、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石皿等の様に定形化した石器が出土総量に占める割合は少ないものと思われる。一部の微妙な使用痕が認められる礫を含めた。また除外した出土総量に対する各種石器の割合については、再検討を要するものと考えられる。

ここでは、包含層出土の石器について概略を記述することとし、各種石器の詳細な分類と分布については、「第5章、調査の成果」を参照していただきたい。石器の種類としては、石鏃、楔形石器、石核、磨製石斧、打製石斧、礫器、直刃式片刃石斧、尖頭器、叩石、石皿、凹石、浮子、石剣・石棒、台石、磨石がある。

石鏃（第174図 図版71）

包含層より出土したものは1～25の25点であり、遺構内より出土したものは無い。形態的には無茎鏃に属し、縦長の二等辺三角形をなすものが多い。基部の抉り等により更に細分される。18～21、23～25は未製品であろうか。石材は、黒曜石、チャートが多数を占め、頁岩が若干見られる程度である。

楔形石器（第174図 図版71）

包含層より出土したものは26～35の10点であり、遺構内からは出土していない。上下両端に剝離痕が認められるものが多く、左右両端にも剝離痕が認められるものもある。石材としては、石鏃と同様に、黒曜石、チャートが多く、稀に玄武岩がみられる。

石核（第175図）

包含層より出土したものは36～46までの11点が出土している。これらは比較的小形のものが多い。石材はチャート、黒曜石が主体を占め、玉髓、石英岩もみられる。

磨製石斧（第176～178図 図版72・73）

包含層より出土したものは47～81までの35点あり、遺構内より出土した5点より圧倒的に多い。磨製石斧は形態的に、不定形、乳棒状、定角式に分類され、圧倒的に定角式が多いことが指摘できる。また、47～76の丁寧に整形されたもの、77～81までの自然礫を素材としたものに分かれ、更に大小により細分される。石材は砂岩、蛇紋岩が多数を占め、自然礫を素材としたものは砂岩と緑色片岩の2種類であった。

打製石斧（第179～182図 図版73・74）

包含層よりの出土は82～116までの35点、遺構内からは4点出土している。包含層よりの出土が圧倒的に多いことが指摘できる。形態的には分銅形、短冊形、撥形に分類できるが、その殆どは分銅形である。特に96は長さ17.5cm、幅6.7cm、重さ725gと大形の分銅形打製石斧である。機能的に他の石斧とは若干異なるかもしれない。石材は安山岩質凝灰岩が主体を占めるが、96は泥質片岩であった。その他にチャート、砂岩等が若干ある。

礫器（第182図）

包含層より出土したのは117・118の2点である。一応礫器として取り扱うが打製石斧の可能性もある。石材は砂質片岩と砂岩であった。

直刃式片刃石斧（第182図）

包含層より出土したのは119の1点のみであった。石材は玄武岩であり、打製石斧には見られないものであった。

尖頭器（第182図）

包含層より出土したのは120の1点のみである。断面形は三角形を呈し、基部が平坦であった。石材は砂質ホルンフェルスである。

叩石（第182図）

包含層より出土したのは121の1点である。古墳時代の第49号住居跡覆土中からの出土であり、接合の結果、上下端に明瞭な敲打痕が認められたが、表面は風化のため磨耗痕は観察できなかった。石材は砂岩である。

石皿（第183～186図 図版75～77）

包含層より出土したのは122～143の22点、遺構内より出土したものは4点である。この他に小破片のため図示しなかったものが包含層中より12点出土している。総計38点であるが、122を3点とするならば40点となる。全て破片として出土している。形態的には円形もしくは楕円形、方形に分類され、円形もしくは楕円形については磨面の形態および素材により更に細分が可能であった。石皿に伴う凹は円錐状を呈し、深さ1cm前後あり、明らかに磨石のくぼみとは機能的な相違が指摘できる。石皿片には、破損後に再利用され、122の2 B 14は敲打痕が明瞭にみとれた。石材は多孔質安山岩と安山岩が主体を占め、輝石安山岩が若干みられる程度である。

凹石（第186図 図版77・78）

包含層より出土したのは144・145の2点であり、遺構内より1点出土している。ここで取り扱う凹石は石皿以外にみられる円錐状の深い凹をもつものであり、磨石の浅いくぼみとは明確に機能を異にしている。単純な凹石は144の1点のみで、他の凹石は磨耗面をもっている。これらの凹石の大きな特徴は、大型で重量が約1600g以上あり、側面にも凹をもつことであろう。このことは同じ凹でも石皿に伴う凹と機能面に若干の相異があるのかもしれない。石材は、緑色片岩、砂岩であり、20A-1は花崗岩であることから一定では無い。

浮子（第186図）

包含層より出土したのは146の1点、遺構内覆土より1点であり、量的には非常に少ない。石材は浮岩であり、それぞれ有孔である。

石剣・石棒（第186図 図版79）

包含層より出土したのは147～153の7点であり、小破片のため図示しなかったものを含めると8点である。152・153は同一個体であろう。これらの断面形は円形もしくは楕円形を呈し、147・148は楕円形を呈するが若干稜が認められることから石剣の可能性はある。147・148の断面形から推定すれば径12～13cmとなり、相当大型の石棒になると推定される。石材は緑色片岩、雲母片岩、石墨片岩であり、石材の色がやや限定され、152・153は安山岩であった。

台石（第187図 図版79）

包含層より出土したのは154の1点である。154は長さ15.0cm、幅10.6cm、厚さ3.0cmと小さく、また、表裏面に磨耗と微妙なくぼみがみられた。石皿とするには小さく、磨石とするには磨耗面が一定ではないので、一応台石としたが、機能的には敲打痕もあることから叩石の用途もある。また、砥石の機能も十分考えられる。石材は安山岩質凝灰岩である。

砥石（第187図 図版79）

包含層より出土したのは155～159の5点である。155は断面が三角形を呈しているが、表面に若干の溝状の磨耗が認められる。156～159も数条の縦長の溝状磨耗面が認められ、156・159は敲打痕がみられる。石材は全て砂岩である。

磨石（第188～194図 図版80～82）

包含層から出土したもので図示したのは160～246の87点、遺構内より出土したものは16点であった。前述した様に、礫の一部に微かな磨耗痕がみられたものは、図示しておらず、礫の一

部に含まれている。磨石は磨耗痕のあるものとし、従来から言われている敲石、浅いくぼみのある凹石が含まれている。これらの機能を敢て磨石と区別して行うことは困難であり、また、これらの石器には磨耗面が観察されたことから、全て磨石として把握した。

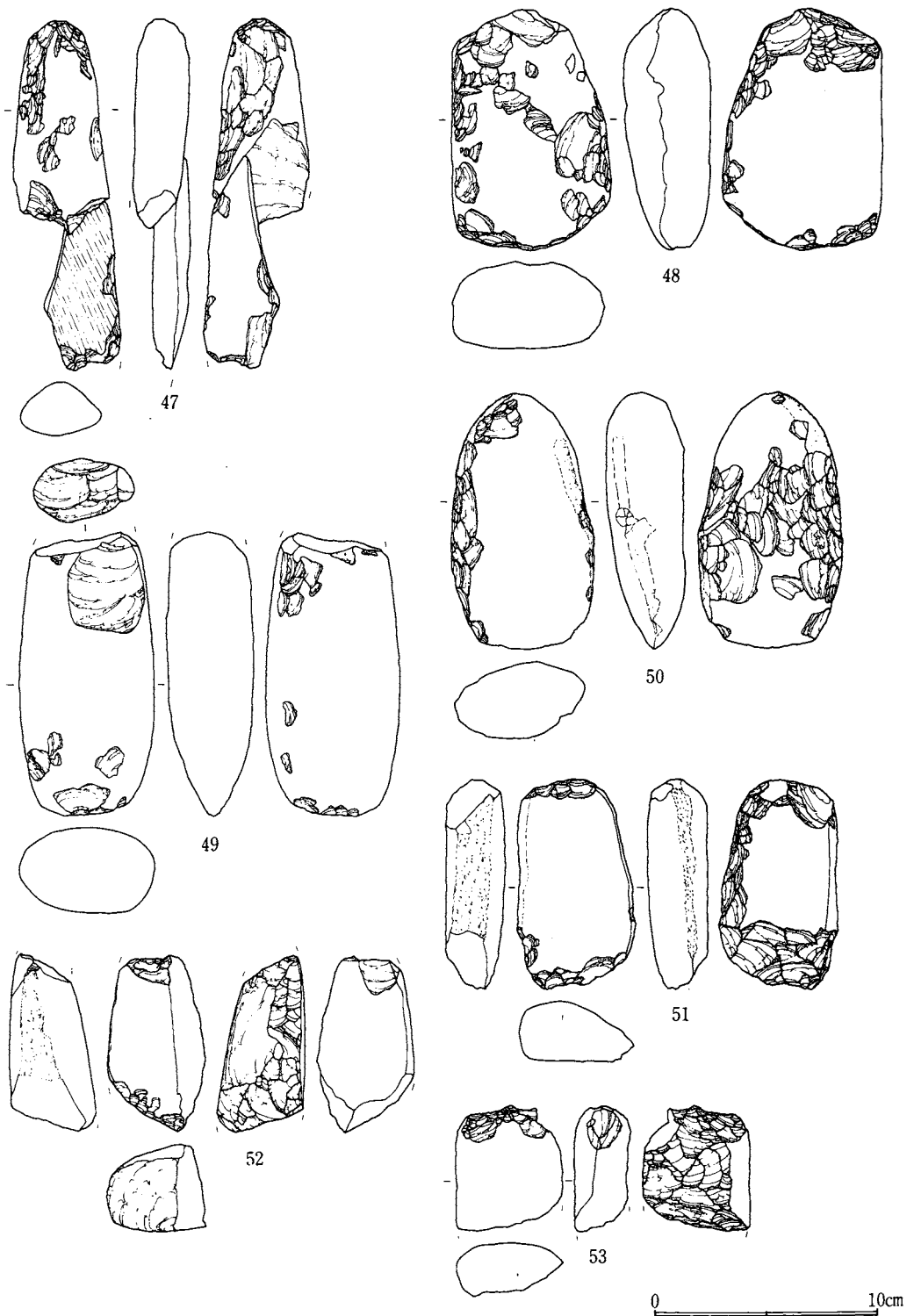
磨石は整形が施されたものと、転石（礫）を利用したものに2大別され、更にくぼみの有無、敲打痕の有無により細分が可能である。これらについては、「第5章、調査の成果」を参照されたい。石材としては、他の石器と異なり多種にわたって利用されている。しかし、整形が施されている磨石の160～195は安山岩が圧倒的に多く、砂岩が少し見られる程度である。ところが転石を利用した磨石の196～246の石材は安山岩が他の石材より若干多いものの、砂岩、石英斑岩、流紋岩などがみられ、大きな相違を表わしている。



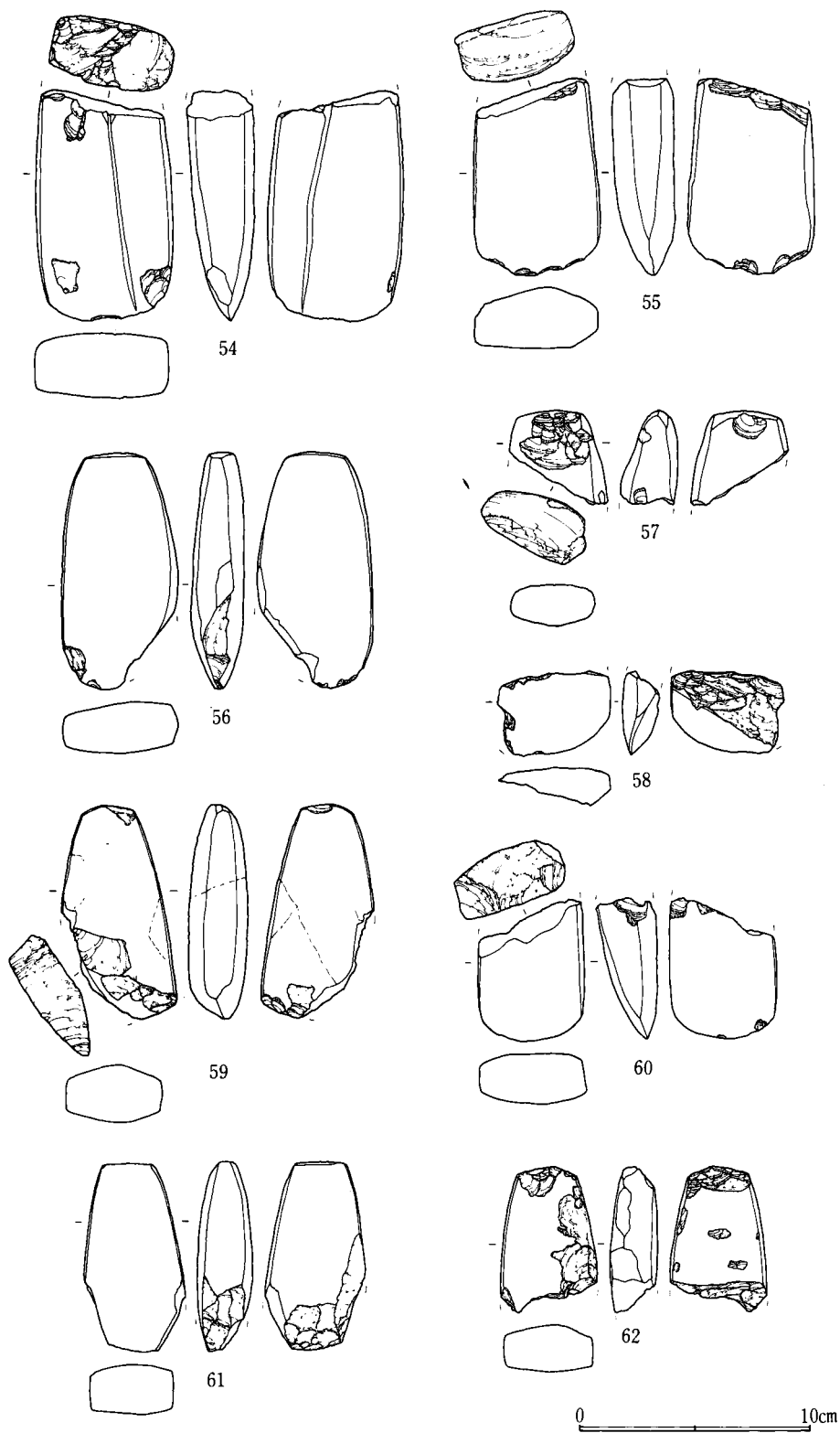
第174図 グリッド出土石器(石鏃1~25、楔形石器26~35)実測図(2/3)



第175図 グリッド出土石器(石核)実測図 (2/3)



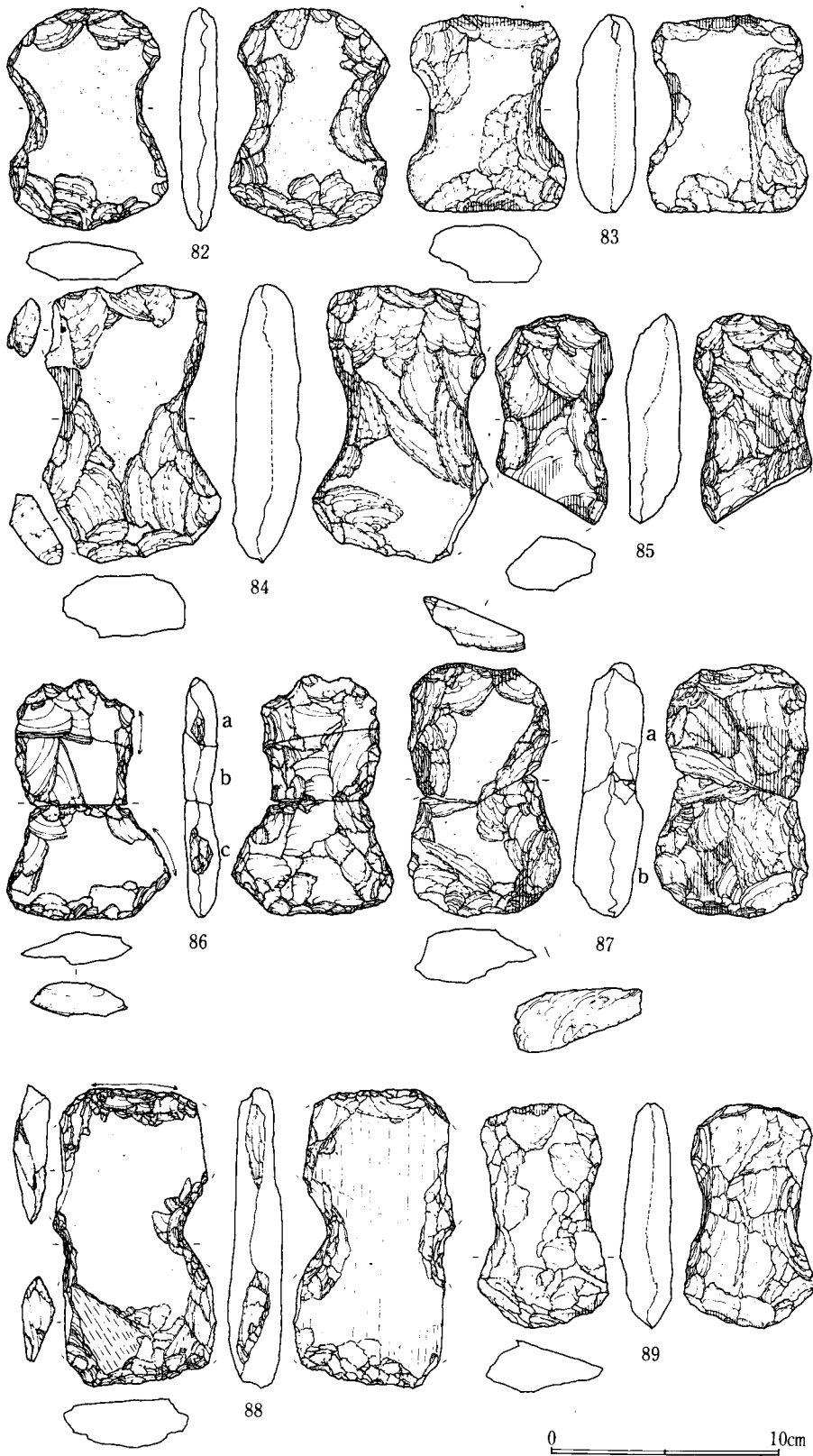
第176図 グリッド出土石器(磨製石斧)実測図 (1/3)



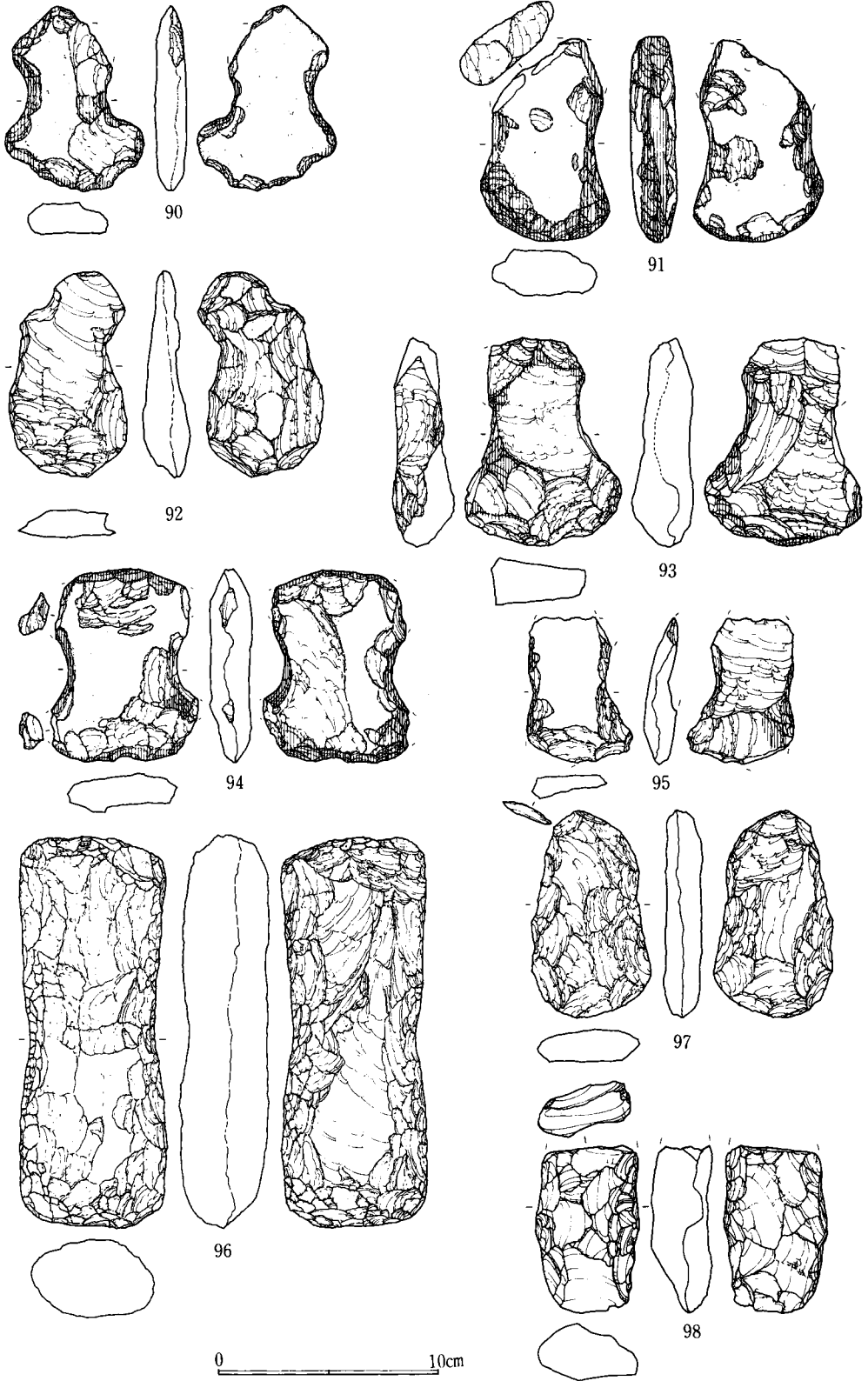
第177図 グリッド出土石器(磨製石斧)実測図 (1/3)



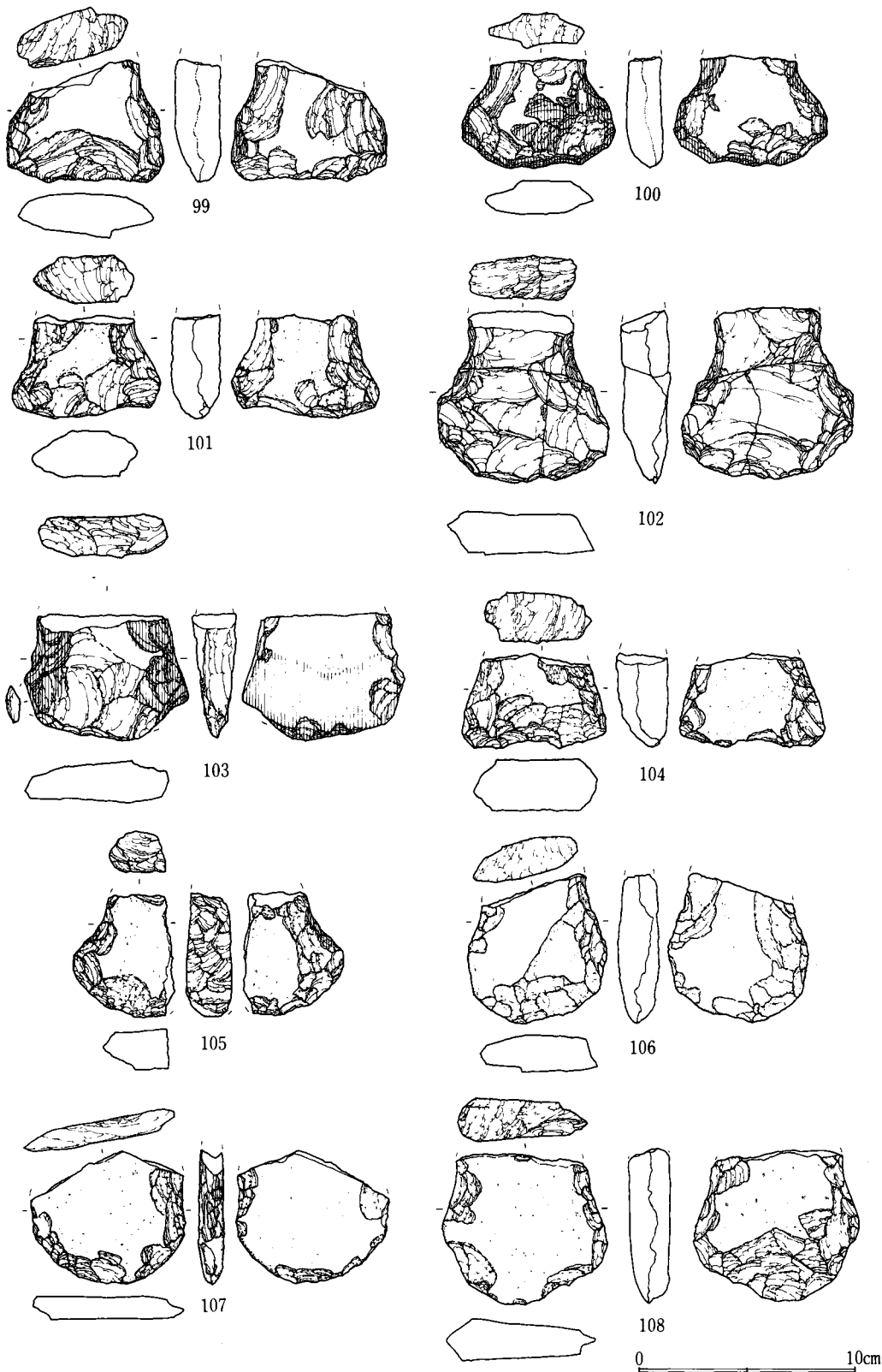
第178図 グリッド出土石器(磨製石斧)実測図 (1/3)



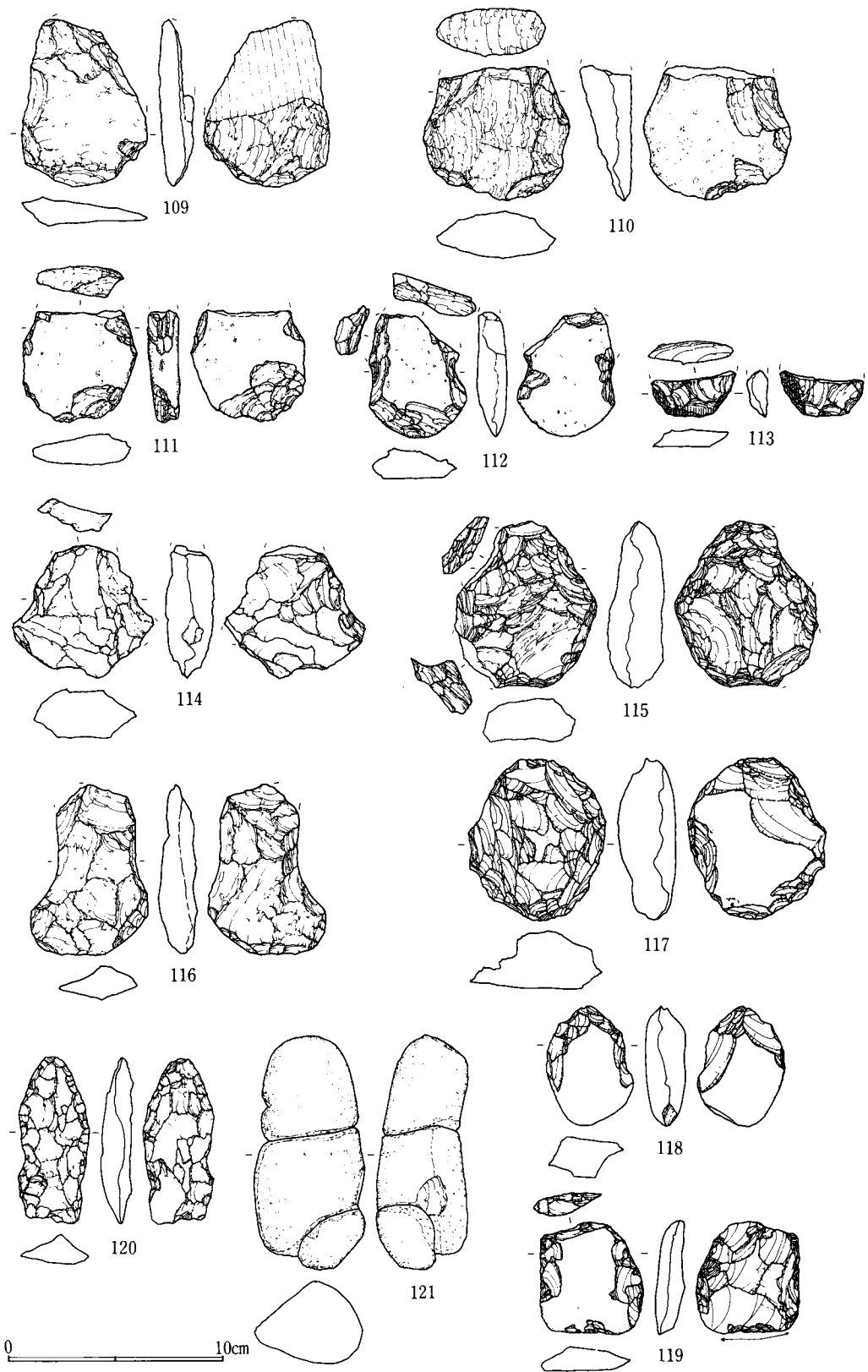
第179図 グリッド出土石器(打製石斧)実測図(1/3)



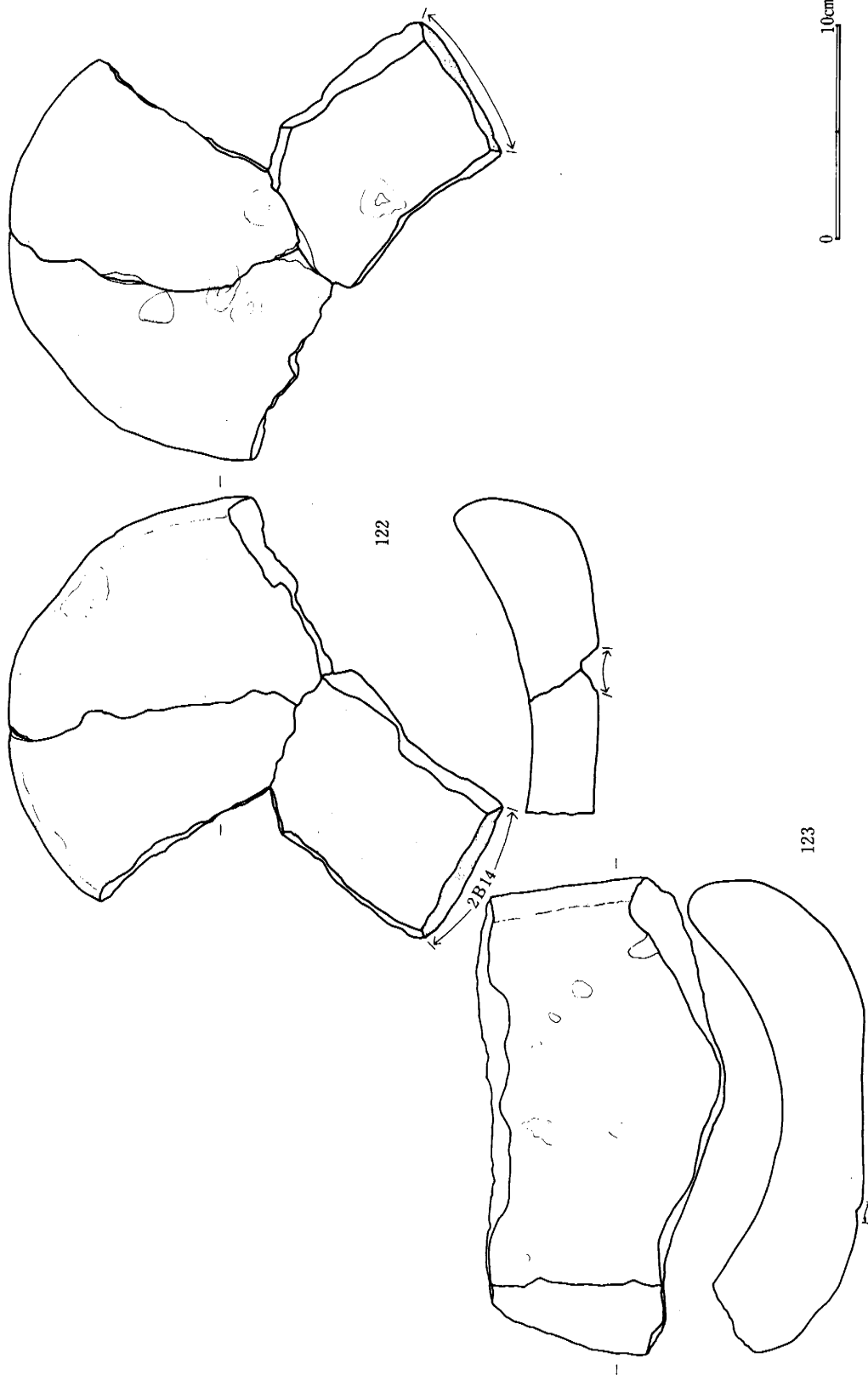
第180図 グリッド出土石器(打製石斧)実測図 (1/3)



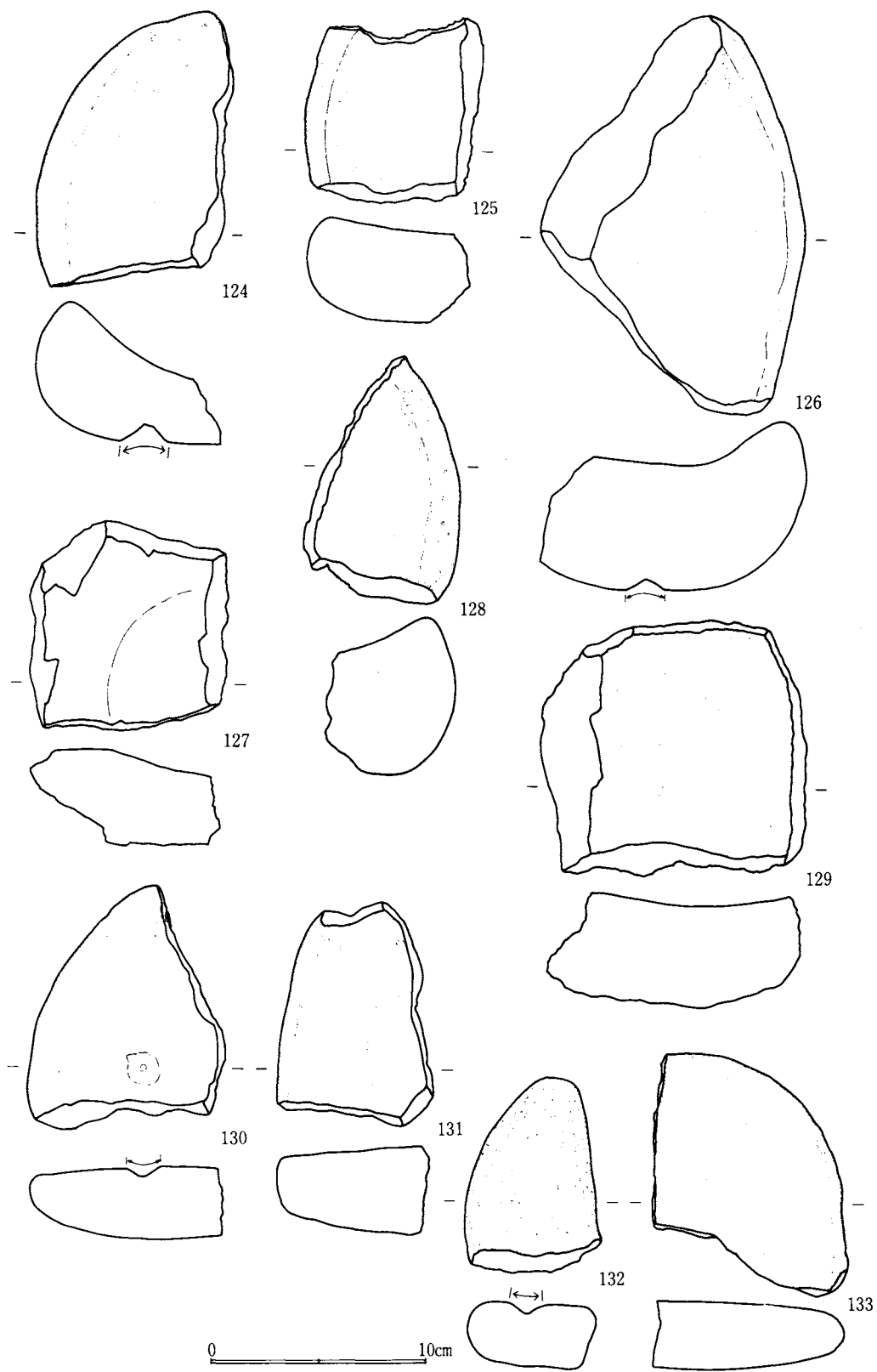
第181図 グリッド出土石器(打製石斧)実測図 (1/3)



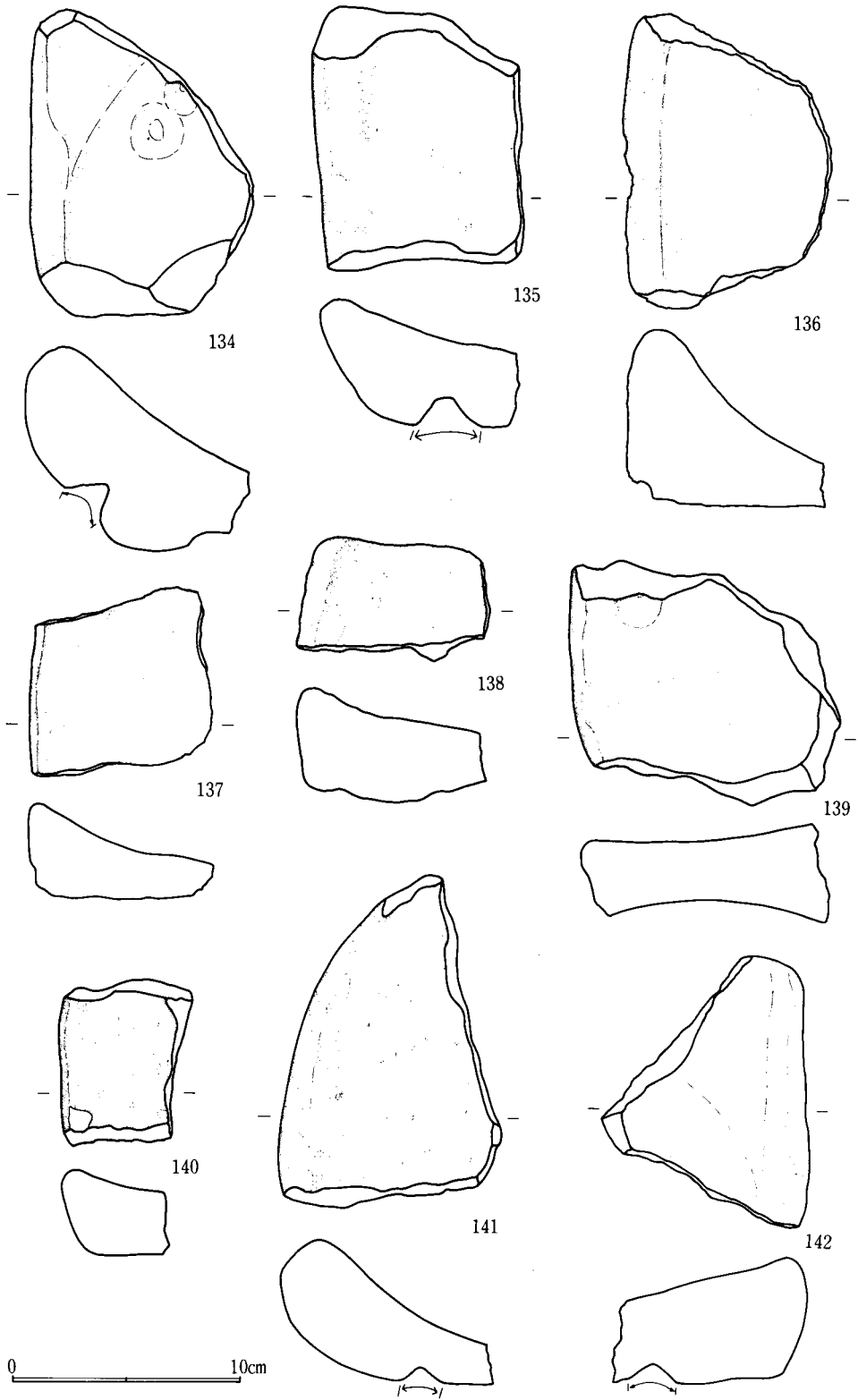
第182図 グリッド出土石器(打製石斧109~119、尖頭器120、叩石121)実測図 (1/3)



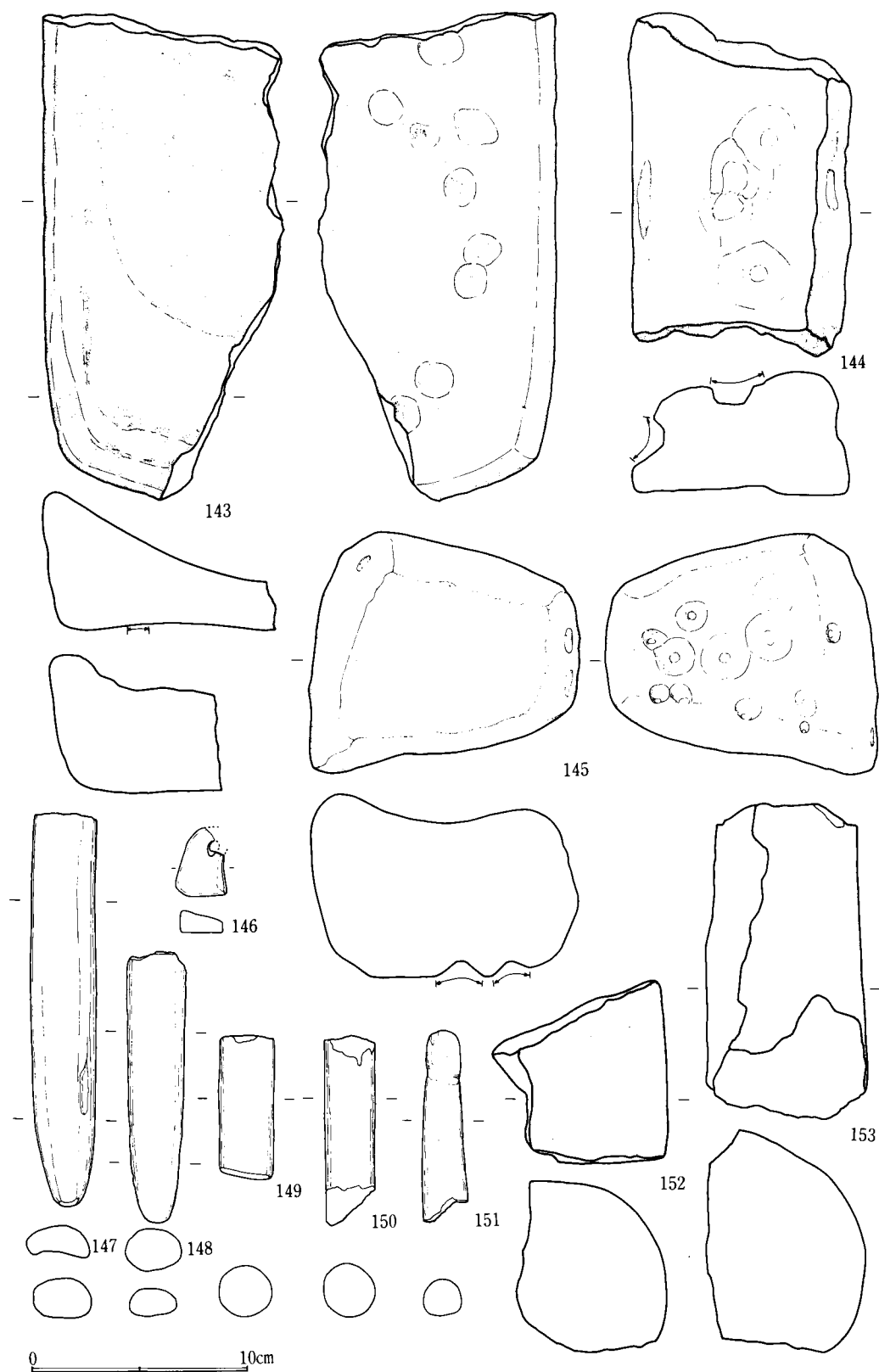
第183図 グリッド出土石器(石皿)実測図(1/3)



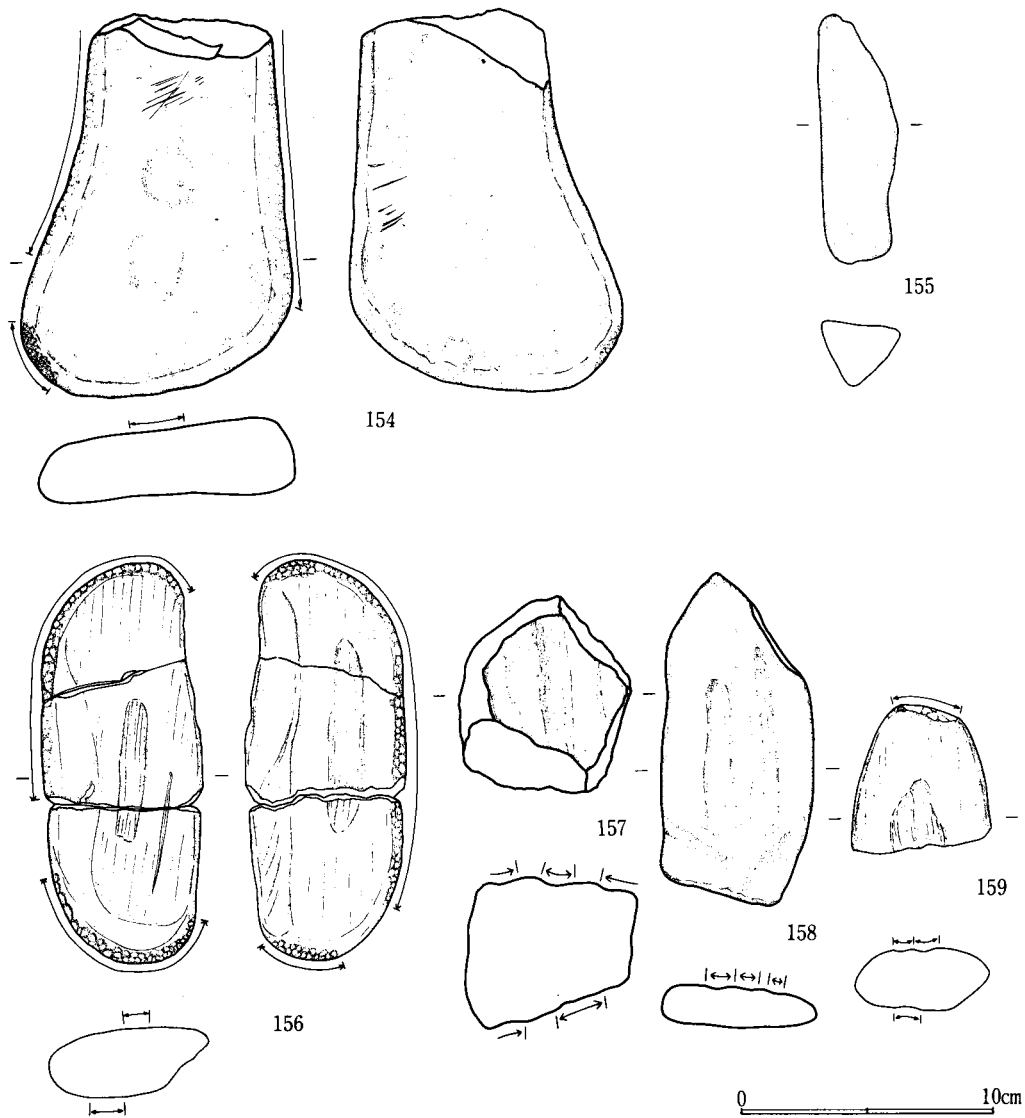
第184図 グリッド出土石器(石皿)実測図 (1/3)



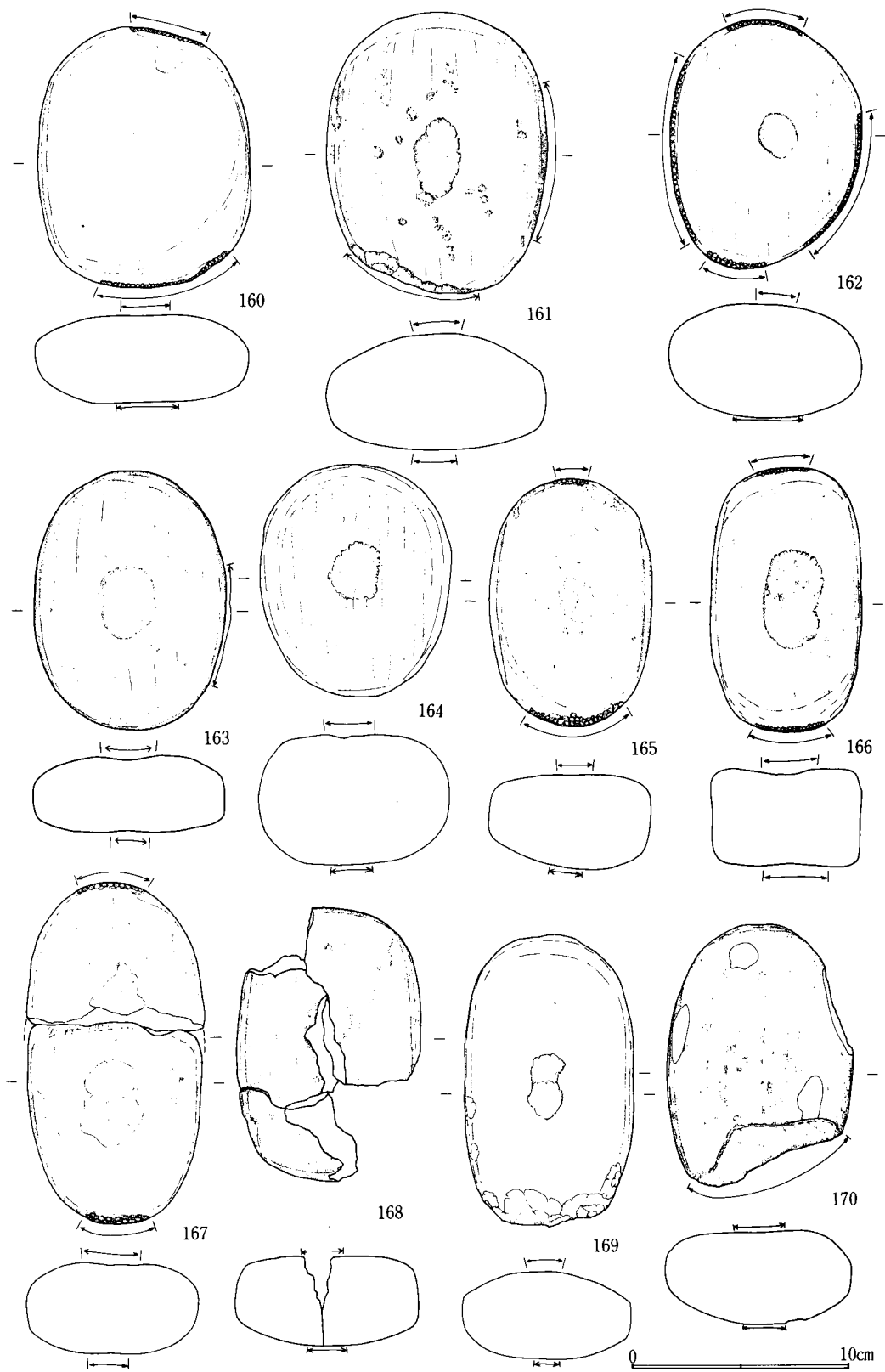
第185図 グリッド出土石器(石皿)実測図 (1/3)



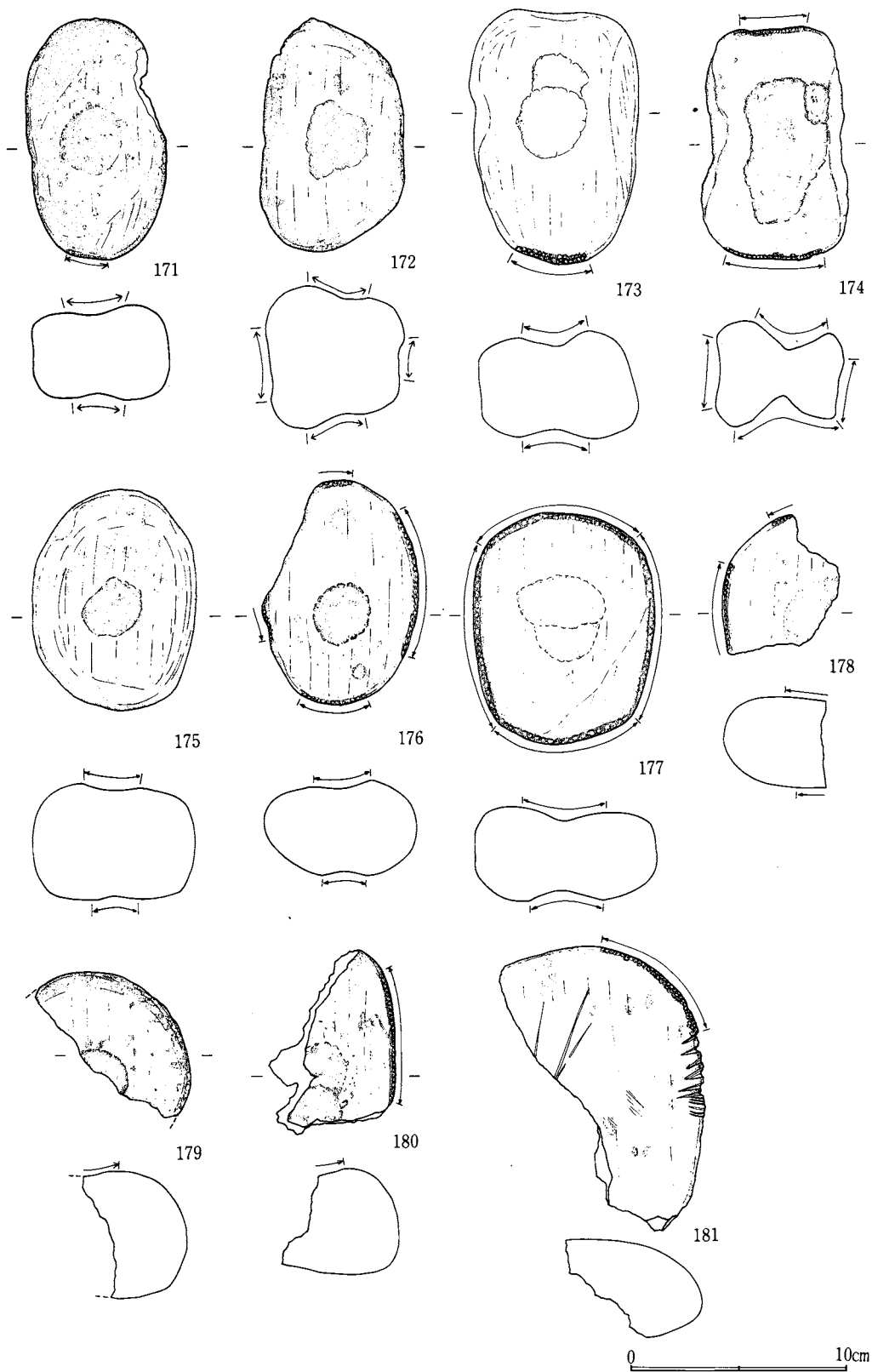
第186図 グリッド出土石器(石皿143、凹石144・145、軽石製品146、石棒・石剣147～153)実測図 (1/3)



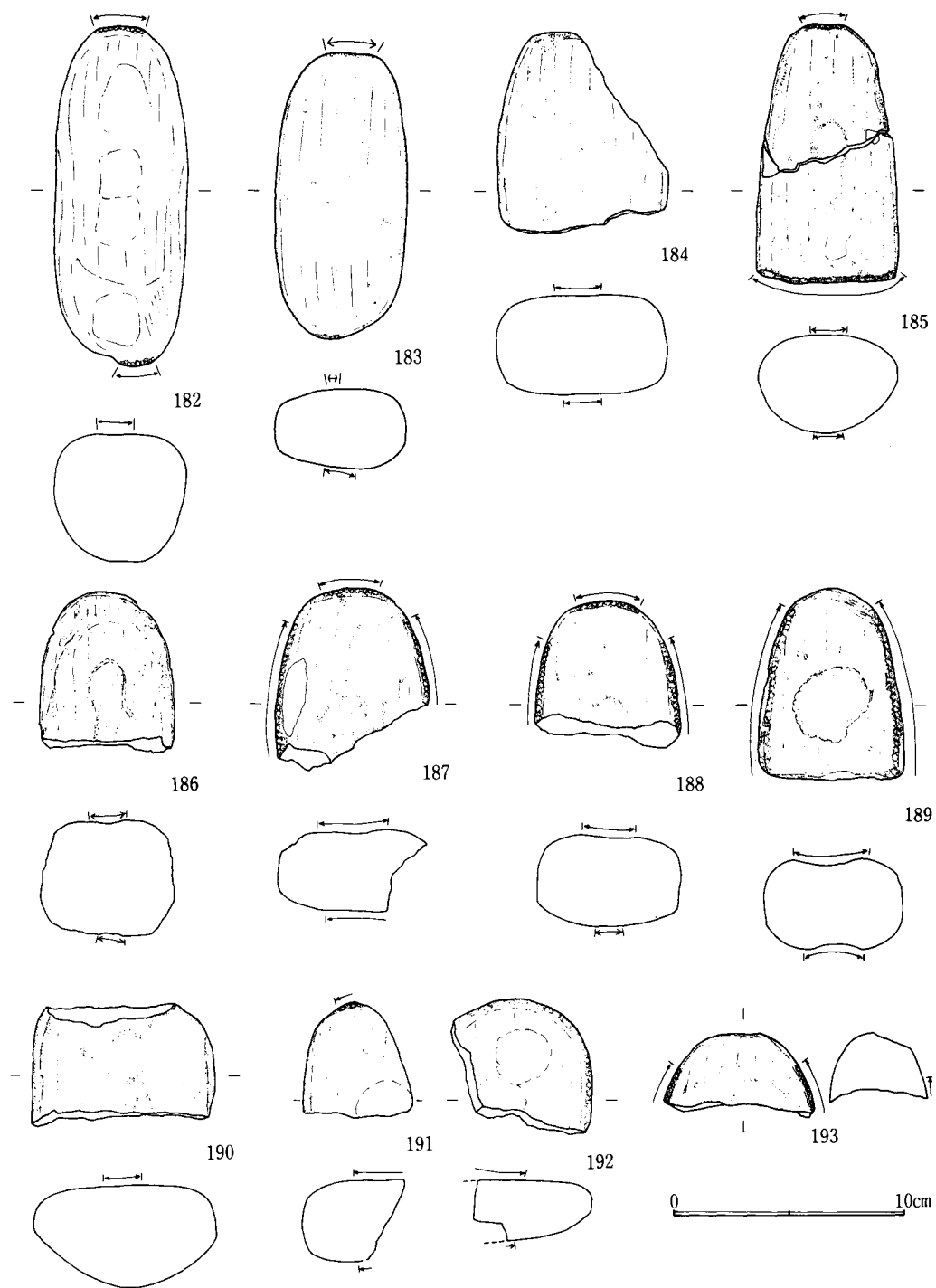
第187図 グリッド出土石器(台石154・155、砥石156~159)実測図 (1/3)



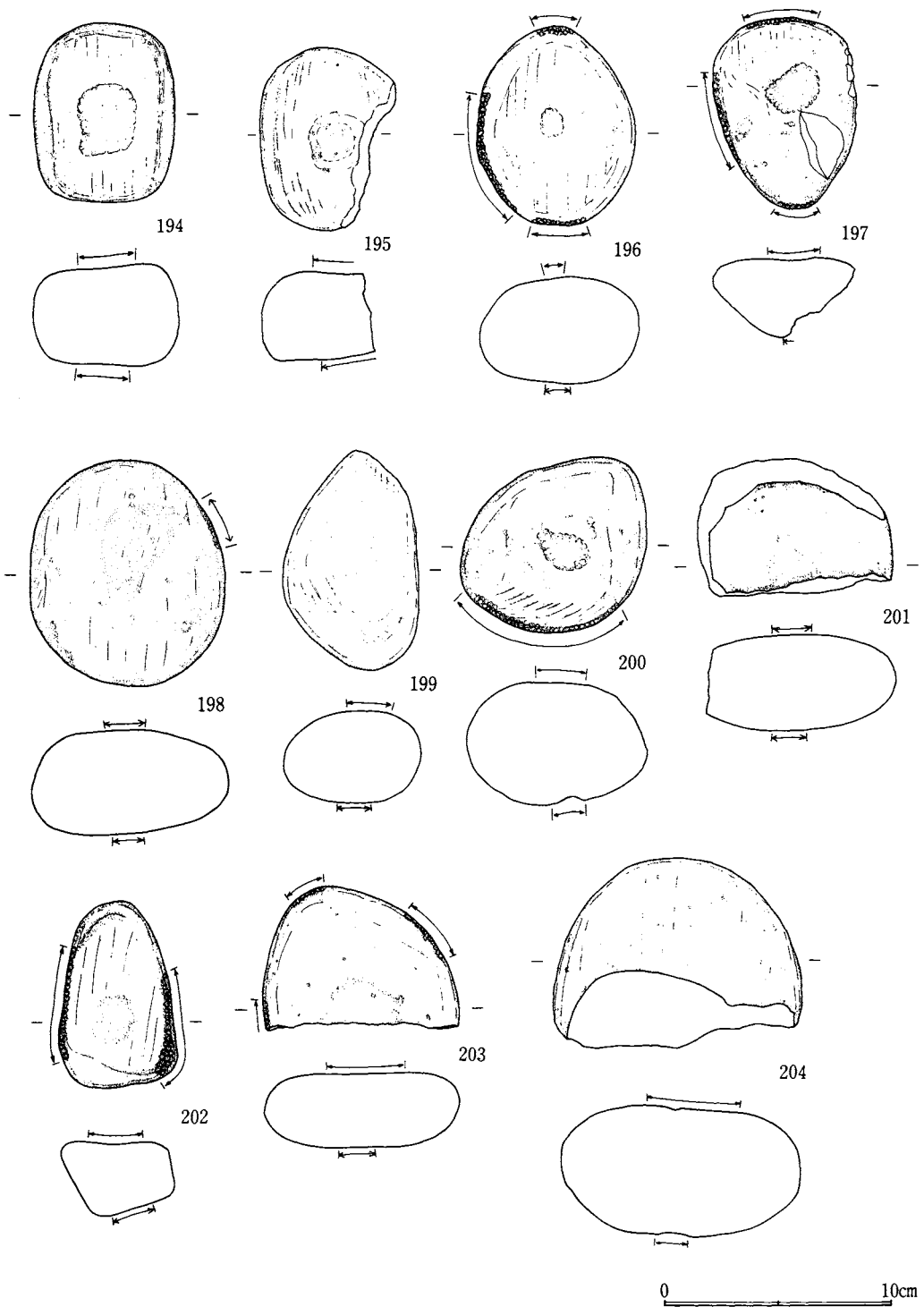
第188図 グリッド出土石器(磨石・敲石)実測図 (1/3)



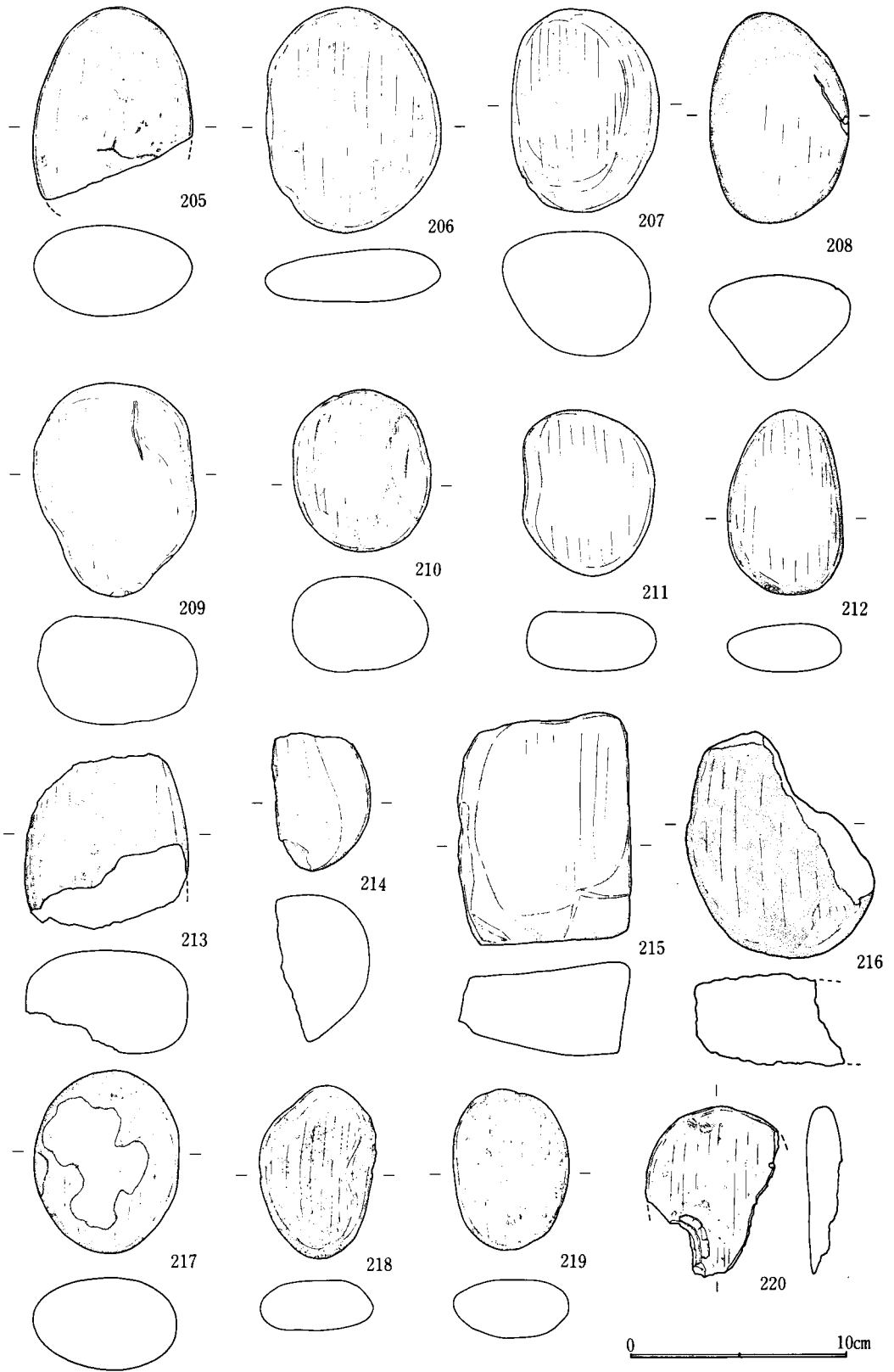
第189図 グリッド出土石器(磨石・敲石)実測図 (1/3)



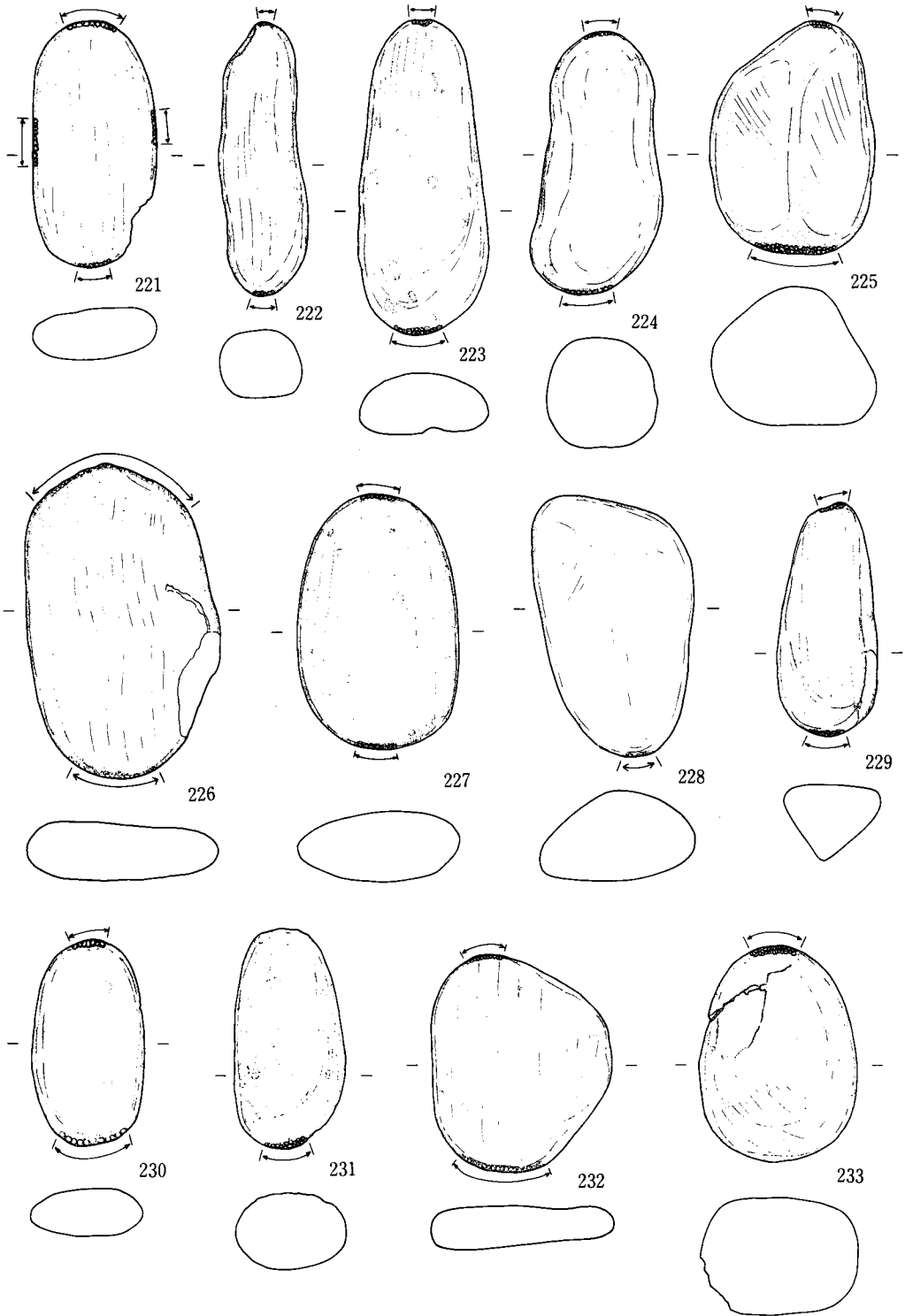
第190図 グリッド出土石器(磨石・敲石)実測図 (1/3)



第191図 グリッド出土石器(磨石・敲石)実測図 (1/3)

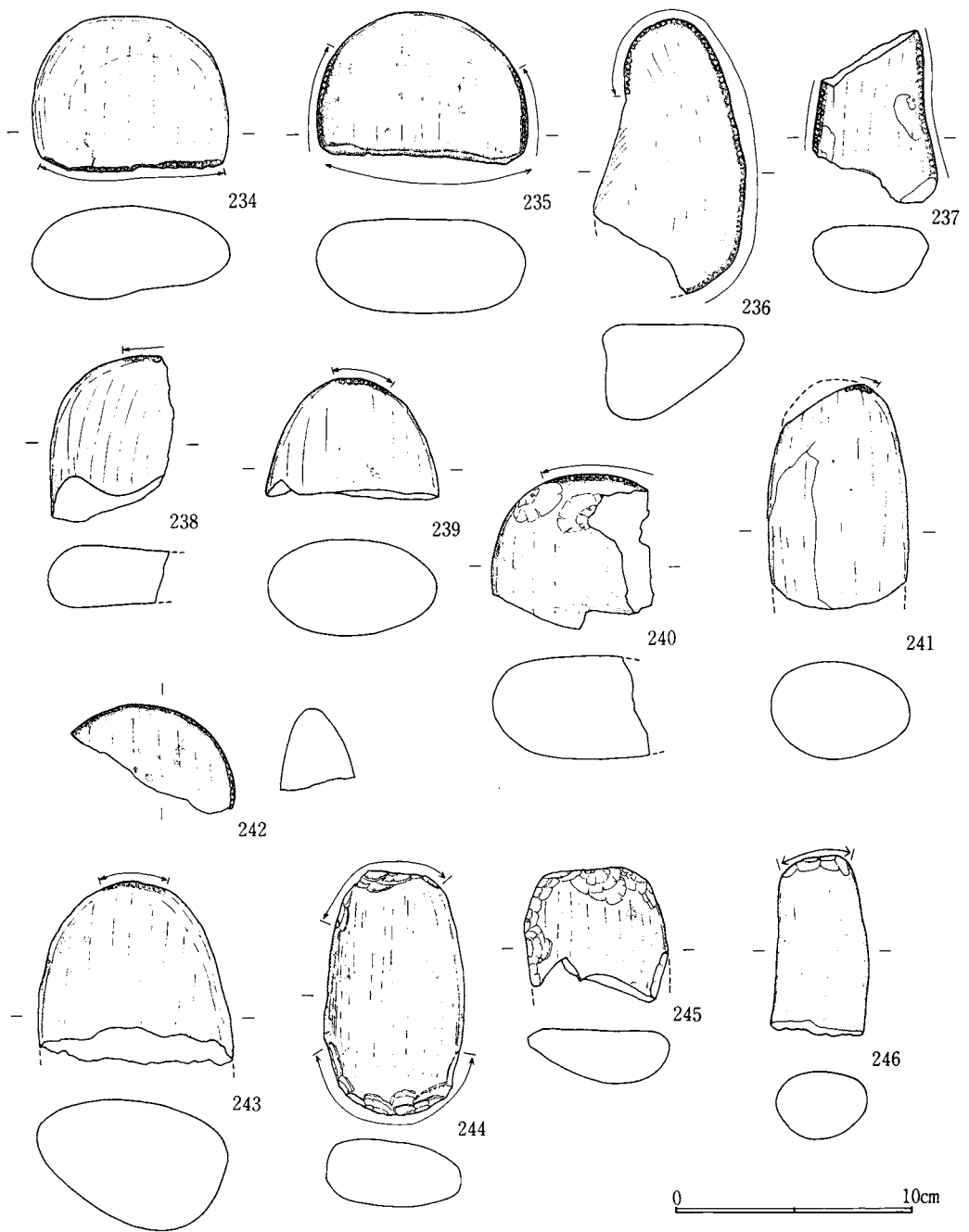


第192図 グリッド出土石器(磨石・敲石)実測図 (1/3)



0 10cm

第193図 グリッド出土石器(磨石・敲石)実測図 (1/3)



第194図 グリッド出土石器(磨石・敲石)実測図 (1/3)

グリッド出土石器観察表

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー1	石 鏃	2.4	1.9	0.3	1.0	チャート	挟りが小さく、二等辺三角形を呈す。最終的な調整は、図上左側（以下A面とする）の両側縁に集中する。	102号住居跡
グー2	石 鏃	(2.5)	(1.9)	0.4	(1.3)	チャート	挟りはそれほど大きくないが返しを意識した調整がなされている。さらに製作中、図上右側（以下B面とする）の先端部がファシット状に破損したが、その後も製作を続行している。最終的な調整痕は、A B両面ほぼ同数みられる。基部及び先端部の一部を欠損する。	99号住居跡
グー3	石 鏃	2.2	(1.6)	0.3	(0.8)	チャート	挟りが小さく、二等辺三角形を呈す。B面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。基部欠。	46号住居跡
グー4	石 鏃	2.1	1.6	0.6	1.7	チャート	挟りが小さく、二等辺三角形を呈す。A面に一部表皮を残し、最終的な調整は、A面の両側縁に集中する。	1B83
グー5	石 鏃	2.3	1.6	0.3	0.8	チャート	挟りが小さく、二等辺三角形を呈す。最終的な調整痕は、両面にほぼ同数みられる。	1A79
グー6	石 鏃	(1.5)	(1.3)	0.2	(0.4)	黒曜石	挟りが小さく、正三角形を呈す。最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。基部欠。	1B70
グー7	石 鏃	1.8	(1.6)	0.4	(0.7)	頁 岩	挟りが小さく、正三角形を呈す。風化が激しく、剥離痕の観察が困難である。基部欠。	2B00
グー8	石 鏃	2.6	2.0	0.6	2.1	チャート	挟りが大きく、二等辺三角形を呈す。最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。また、側縁形状は鋸歯状を呈す。	2C11
グー9	石 鏃	2.4	(2.0)	0.5	(1.5)	チャート	挟りが大きく、二等辺三角形を呈す。最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。基部欠。	2A24
グー10	石 鏃	2.8	1.7	0.4	1.3	頁 岩	挟りが大きく、二等辺三角形を呈す。B面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。	2B25
グー11	石 鏃	2.3	(1.3)	0.3	(0.6)	玄武岩	挟りが大きく、二等辺三角形を呈す。B面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。基部欠。	1A96
グー12	石 鏃	(2.1)	(1.3)	0.4	(0.7)	チャート	挟りが大きく、二等辺三角形を呈す。B面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、両面の右側縁に集中する。基部を欠損するが、大きさはグー11に近い。基部欠。	1A96
グー13	石 鏃	(1.8)	1.8	0.5	(1.0)	黒曜石	挟りが大きく、正三角形を呈す。最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。基部欠。	1B93
グー14	石 鏃	(2.0)	1.8	0.5	(1.0)	黒曜石	挟りが小さく、正三角形を呈し、基部の形状は丸い。B面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。基部欠。	2B15
グー15	石 鏃	2.4	2.0	0.7	2.4	頁 岩	挟りが大きく、五角形を呈す。A面に一部表皮、B面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。	1B59
グー16	石 鏃	(1.4)	(1.8)	0.4	(0.7)	黒曜石	挟りが大きく、正三角形を呈す。B面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。基部欠。	89号住居跡
グー17	石 鏃	(2.0)	1.7	0.5	(1.0)	黒曜石	挟りが小さく、正三角形を呈し、基部の形状は丸い。B面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、A面の両側縁に集中する。先端部がファシット状に欠損する。	0B68
グー18	石 鏃	2.1	2.0	0.5	2.1	頁 岩	挟りがほとんどなく、正三角形を呈す。A面に主要剥離面を残し、最終的な調整は、両面の左側縁に集中する。未製品の可能性もある。	133号住居跡
グー19	石 鏃	(2.3)	1.6	0.4	(1.5)	頁 岩	未製品である。A面の周縁に微細な調整が施されている。先端部欠。	1B08
グー20	石 鏃	2.4	1.9	0.6	2.9	チャート	未製品である。A面の右側縁の一部に調整が施され、左側縁には表皮を残す。U-flの可能性もある。	93号住居跡
グー21	石 鏃	2.1	1.4	0.3	0.7	チャート	未製品である。両側縁の基部に微細な調整が施されている。基部欠。	83号住居跡
グー22	石 鏃	(1.6)	1.6	0.4	(0.7)	黒曜石	下端部を欠損した石鏃の一部である。形態は不明。	表採
グー23	石 鏃	3.0	1.7	0.7	3.6	チャート	未製品である。A面の左側縁に調整が施され、折断剥片を素材としている。削器の可能性もある。	2B55
グー24	石 鏃	2.2	2.8	0.8	4.7	チャート	未製品である。A面の基部を除く両側縁に細かい調整が施されている。削器の可能性もある。	2A38
グー25	石 鏃	2.7	2.3	0.8	4.4	頁 岩	未製品である。A面の基部を除く両側縁に細かい調整が施されている。素材の用い方が異なる点を除いてグー24と同様の調整を行なっている。	89号住居跡
グー26	楔形石器	5.1	1.6	1.6	16.0	玄武岩	細長い礫の右側面及びB面に1回の打撃による大きな剥離痕を残す。断面をもつ楔形石器である。	2B41

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー27	楔形石器	4.0	1.2	1.2	6.6	チャート	角柱状を呈し、右側面が剪断面にあたる。グー26に類似した形状を呈す。	2B13
グー28	楔形石器	2.1	1.5	0.5	1.8	チャート	A面に自然面を残し、上下両端に細かい剥離痕がみられる。形態は四辺形を呈す。	1D59
グー29	楔形石器	(1.1)	(2.0)	(0.7)	(1.2)	チャート	楔形石器の一部で、両側縁に自然面を残す。	1D51
グー30	楔形石器	2.3	2.1	1.0	4.8	チャート	上下両端に交錯する剥離痕がみられる。形態は四辺形を呈す。	1A96
グー31	楔形石器	2.8	3.1	0.7	7.1	チャート	上下両端に微細な剥離痕がみられ、A面に自然面を残す。形態は三角形を呈す。	表採
グー32	楔形石器	(1.4)	1.4	0.5	(0.8)	黒曜石	左右両端に細かい剥離痕がみられ、上下を欠損する。形態は四辺形を呈す。石鏃の未製品の可能性もある。	表採
グー33	楔形石器	1.0	1.5	0.9	1.6	黒曜石	上下左右に交錯する剥離痕がみられる。角柱状を呈す。	表採
グー34	楔形石器	3.0	2.2	0.6	5.0	チャート	上下両端に細かい剥離痕がみられ、左側面に自然面を残す。形態は四辺形を呈す。	2B61
グー35	楔形石器	3.1	2.7	0.5	4.3	チャート	A面に自然面を残し、上下左右に細かい剥離痕がみられる。形態は四辺形を呈す。	1D59
グー36	石 核	2.3	2.6	1.3	5.7	チャート	先行する剥離面を打面として、ほぼ90度転位して剥片剥離を行なっている。形態は楔状を呈す。	82号住居跡
グー37	石 核	2.4	2.9	1.7	11.7	黒曜石	石材が悪質な為、まとまった剥片は作出されていない。多数の小さな剥離面によって構成されており、形態は角柱状を呈す。	2B34
グー38	石 核	2.8	2.4	1.3	7.3	黒曜石	先行する剥離面を打面として、ほぼ90度転位して剥片剥離を行なっている。形態は楔状を呈す。	102号住居跡
グー39	石 核	2.1	2.1	1.7	8.2	チャート	先行する剥離面を打面とし、最終的な剥片剥離は上端からの打撃によるものである。形態は楔状を呈す。	2B44
グー40	石 核	2.7	4.0	1.2	12.0	チャート	A面で4方向、裏面で3方向より剥離が行なわれており、ルヴァロフ型石核に類似した形態を呈す。剥離された剥片は、ほぼ同じ大きさの横長のものである。	表採
グー41	石 核	2.3	2.4	1.5	5.4	黒曜石	先行する剥離面を打面として、ほぼ90度転位して剥片剥離を行なっている。形態は楔状を呈す。なお、左側縁の下端部より上端部にかけて両側縁より微細な剥離痕がみられる。また、最終的な剥離面は上面で、そこから剥離された剥片は小さく、打面を意識したような調整がみられることから、上面を打面とし、左側縁を刃部とする楔形石器のブランクとも考えられる。	2B00
グー42	石 核	2.2	2.5	1.7	7.1	玉 髓	自然面及び先行する剥離面を打面とし、下端と右方向より剥離が行なわれている。形態は楔状を呈す。	31号住居跡
グー43	石 核	3.3	3.1	1.4	11.0	石 英 岩	A面に positive な面を残しており、横長の大型の剥片を素材とし上端と右方向より剥離が行なわれている。形態は亀甲状を呈す。	1号住居跡
グー44	石 核	2.1	2.5	1.9	10.1	黒曜石	先行する上面の剥離面に打面調整を施し、上端より小形の縦長剥片を剥離する。A面の右側に大きな下端からの剥離痕をもつことから、前段階では上下両方からの剥片剥離が行なわれていたことがうかがわれる。形態は厚めの楔状を呈す。	2A29
グー45	石 核	2.4	3.1	2.6	21.8	黒曜石	上面に positive な面を残し、そこを打面として上端より、さらに先行する剥離面を打面として右方向より剥離が行なわれている。形態は厚めの楔状を呈し、残核としては本遺跡では比較的大形のものである。	2A20
グー46	石 核	2.8	3.3	2.5	21.9	チャート	右側面に positive な面を残し、A面に横長の剥離痕がみられる。形態は三角柱状を呈し、グー44同様比較的大形のものである。また、上面の一部に頭部調整が施されていることから、剥片剥離を続けようとしていた可能性もある。	2B46
グー47	磨製石斧	(15.6)	4.8	2.7	(182)	緑色片岩	不定形磨製石斧である。両面に敲打痕を残すが、ほぼ全体を研磨しており、特に刃部は丁寧に研磨されている。破損のあり方は下端からの強い衝撃により、ほぼ真ん中で斜めに破損している。また、A面は下半部を節理面で破損している。断面は変形D字状をなす。接合品。	2B16

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー48	磨製石斧	(10.7)	7.2	4.0	(484)	砂 岩	不定形磨製石斧である。両面に敲打痕を残すが、ほぼ全体を研磨している。ただし、刃部の剥離痕は使用によるものであり、刃部形態も蛤刃・円刃と思われる。断面は四辺形をなす。	2A06
グー49	磨製石斧	(12.5)	6.1	3.9	(519)	緑色片岩	本遺跡では唯一の典型的な乳棒状磨製石斧である。全体を丁寧に研磨している。上部及びA面の右上部で破損しているが、その後も研磨して使用している。また、刃部には使用によると思われる剥離痕がみられる。刃部形態は蛤刃・直刃と思われる。断面は楕円形をなす。	1C33
グー50	磨製石斧	11.3	6.5	3.5	374	砂 岩	不定形磨製石斧である。両面に敲打痕、さらに右側縁・左側縁上部に自然面を残し研磨している。刃部形態は蛤刃・円刃をなす。断面は楕円形をなす。	2B46
グー51	磨製石斧	(9.3)	5.3	2.7	(200)	砂 岩	不定形磨製石斧である。上端及び右側縁に剥離痕がみられ、両側縁に自然面を残し研磨している。刃部には下端からの衝撃による剥離痕がみられる。断面は三角形をなす。	0C91
グー52	磨製石斧	(7.8)	(4.4)	(3.7)	(190)	蛇紋岩	不定形磨製石斧である。左側縁に自然面、両面に敲打痕を残し研磨している。破損のあり方は下部が右方向より、右側面が上端及び右方向よりの衝撃により破損している。	0C93
グー53	磨製石斧	(5.6)	(4.8)	(2.6)	(107)	緑色片岩	乳棒状磨製石斧である。全体を丁寧に研磨している。上端に一部敲打痕を残す。破損のあり方は縦に割れており、上端からの衝撃による。また、下部は表面より衝撃が加わっている。	2A39
グー54	磨製石斧	(9.9)	(6.0)	3.0	(329)	蛇紋岩	定角式磨製石斧である。A面に一部敲打痕を残し研磨している。上半部を左方向の衝撃により破損している。破損後、ほぼ上端中央より下端にかけて斜めに擦切り溝が両面に作出されており、擦切り技法の存在が想定される。さらに、右側縁に4つ、左側縁に3つの稜をもつ。通常の研磨によるズレか擦切り溝を研磨しきれなかったために生じた稜であるのか不明である。刃部に一部剥離痕がみられるが、蛤刃・円刃をなす。断面は隅丸長方形をなす。	2C10
グー55	磨製石斧	(8.5)	5.5	2.7	(197)	砂 岩	定角式磨製石斧である。全体を丁寧に研磨している。上半部を裏面側の衝撃により破損している。また、破損面に一部剥離痕がみられるが、その縁辺をつぶすような研磨が施されている。刃部に一部剥離痕がみられるが、蛤刃・円刃をなす。断面は隅丸長方形をなす。	2B46
グー56	磨製石斧	(9.9)	5.0	2.3	(185)	砂 岩	定角式磨製石斧である。主に両面及び頭部が丁寧に研磨されている。また、鑄状の研磨ズレが刃部にみられる。破損のあり方は下端及び裏面側の衝撃により刃部右側を破損している。断面は隅丸長方形をなす。	2B00
グー57	磨製石斧	(4.0)	(4.3)	(2.5)	(38)	砂 岩	定角式磨製石斧である。両面に敲打痕を残し、頭部作出のための研磨は施されていない。また、両面の研磨が顕著である。破損のあり方はB面側の衝撃により頭部のみ遺存する。断面は隅丸長方形をなす。	0C91
グー58	磨製石斧	(3.5)	(4.9)	(1.6)	(31)	蛇紋岩	定角式磨製石斧である。全体に非常に丁寧に研磨している。破損のあり方は上面からの衝撃により刃部の半分のみ遺存する。刃部は蛤刃・円刃をなす。	2B00
グー59	磨製石斧	(9.0)	5.0	2.6	(156)	安山岩	定角式磨製石斧である。両面に敲打痕を残し、頭部作出のための研磨は施されていない。破損のあり方は下端からの衝撃により刃部左側を破損している。また、遺存する刃部も磨耗している。断面は隅丸長方形をなす。被熱の為の赤化及びびび割れがみられる。	2B23
グー60	磨製石斧	(6.0)	(4.7)	2.5	(93)	砂 岩	定角式磨製石斧である。全体を丁寧に研磨している。上半部を左右両方向の衝撃により破損している。刃部に一部小剥離痕がみられるが、蛤刃・円刃をなす。断面は隅丸長方形をなす。	2B00
グー61	磨製石斧	(8.0)	(4.4)	2.4	(144)	砂 岩	定角式磨製石斧である。全体を丁寧に研磨しているが、頭部の一部に敲打痕を残す。破損のあり方は下端からの衝撃により刃部両側縁、B面中央部を破損している。断面は隅丸長方形をなす。	1A54
グー62	磨製石斧	(6.2)	(4.2)	(2.1)	(86)	蛇紋岩	定角式磨製石斧である。全体を非常に丁寧に研磨している。下半部をA面からの衝撃により破損している。また、頭部には上端からの剥離痕がみられる。断面は隅丸長方形をなす。	2B26

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー63	磨製石斧	(9.9)	(4.8)	2.6	(198)	砂 岩	定角式磨製石斧である。全体を非常に丁寧に研磨しており、頭部に稜もみられる。刃部右側をB面からの、左側を下端からの衝撃により破損している。断面は隅丸長方形をなす。	2B35
グー64	磨製石斧	(7.5)	(4.2)	2.3	(104)	蛇 紋 岩	定角式磨製石斧である。全体を非常に丁寧に研磨しており、頭部に稜もみられる。刃部右側を四方向からの、左側を下端からの衝撃により破損している。断面は隅丸長方形をなす。	2C33
グー65	磨製石斧	(8.7)	4.1	1.7	(85)	石墨片岩	定角式磨製石斧である。全体を丁寧に研磨している。両面両側縁に研磨ズレがみられる。刃部左側を下端からの衝撃により破損している。また、A面の頭部に上端からの剝離痕がみられる。断面は隅丸長方形をなす。	2B13
グー66	磨製石斧	(5.6)	3.7	1.7	(57)	緑色片岩	定角式磨製石斧である。比較的小形の石斧であり、全体を丁寧に研磨している。頭部の稜もみられる。刃部は下端からの衝撃により水平に破損している。断面は隅丸長方形をなす。	2A13
グー67	磨製石斧	(4.0)	3.5	1.4	(33)	頁 岩	定角式磨製石斧である。上半部をA面からの衝撃により欠損するが、丁寧に研磨された比較的小形の石斧と思われる。刃部に一部剝離痕がみられる。断面は隅丸長方形をなす。	0C91
グー68	磨製石斧	(4.4)	3.8	2.0	(50)	蛇 紋 岩	定角式磨製石斧である。上半部をB面からの衝撃により欠損するが、丁寧に研磨された比較的小形の石斧と思われる。刃部に微細な剝離痕がみられる。断面は隅丸長方形をなす。刃部は蛤刃・円刃をなす。	1B64
グー69	磨製石斧	(5.8)	(3.7)	(1.1)	(34)	蛇 紋 岩	定角式磨製石斧である。両面に敲打痕を残し、研磨ズレにより生じたと思われる稜が両側縁に複数みられる。B面の刃部より中間部にかけて節理に沿って破損している。さらに頭部に上端からの剝離痕がみられる。B面に一部刃部が遺存しており、蛤刃・円刃をなすものと思われる。断面は薄く隅丸六角形をなし、比較的小形の石斧と思われる。	0C80
グー70	磨製石斧	(4.3)	(2.8)	1.1	(23)	砂 岩	定角式磨製石斧である。全体を研磨している。上半部をB面からの衝撃により破損している。また、刃部に下端からの剝離痕がみられる。刃部は片凸刃・円刃をなすものと思われる。断面は不整四辺形をなし、比較的小形の石斧と思われる。頭部破片の再利用か？	2B41
グー71	磨製石斧	6.9	2.8	1.2	33	砂 岩	定角式磨製石斧である。全体を研磨しているが、側縁に明瞭な稜をもたない。ただし、頭部の稜は比較的是っきりしている。刃部は蛤刃・円刃をなし、微細な剝離痕がみられる。断面は隅丸長方形をなし、比較的小形の石斧である。	100号住居跡
グー72	磨製石斧	(3.1)	(2.4)	0.9	(10)	玄 武 岩	定角式磨製石斧である。全体を研磨している。上半部をB面からの衝撃により破損している。また、刃部に微細な剝離痕がみられる。刃部は蛤刃・円刃をなす。断面は隅丸長方形をなし、小形の石斧である。	1C01
グー73	磨製石斧	4.2	2.2	0.8	12	蛇 紋 岩	定角式磨製石斧である。全体を丁寧に研磨している。A面及び両側縁に研磨ズレがみられる。A面の頭部に上端からの剝離痕がみられる。刃部はA面に鑄をもち、片刃・直刃をなしており、微細な剝離痕がみられる。断面は隅丸長方形をなし、小形の石斧である。	1A96
グー74	磨製石斧	(1.6)	(1.8)	(1.0)	(5)	蛇 紋 岩	定角式磨製石斧である。頭部に一部敲打痕を残す以外は丁寧に研磨されている。B面からの衝撃により頭部のみ遺存する。断面は隅丸長方形をなし、小形の石斧である。	1A64
グー75	磨製石斧	(3.6)	(2.5)	(1.3)	(12)	蛇 紋 岩	定角式磨製石斧である。非常に丁寧に研磨している。A面は上端から、B面は下端からの衝撃により中間部で縦に破損している。	2B42
グー76	磨製石斧	(3.2)	(3.9)	(1.2)	(14)	蛇 紋 岩	定角式磨製石斧の刃部破片と思われる。主に上端からの剝離痕がみられる。	1C02
グー77	局部磨製石斧	8.4	3.8	1.0	54	砂 岩	刃部の両面から研磨している。また頭部も水平に研磨されている。断面は不整楕円形をなす。刃部は蛤刃・円刃をなす。	2B12
グー78	局部磨製石斧	(2.8)	(4.0)	(1.1)	(15)	砂 岩	刃部を両面から研磨している。B面からの衝撃により刃部のみを遺存する。刃部は蛤刃・円刃をなし、剝離痕がみられる。断面は不整楕円をなす。	42号住居跡
グー79	局部磨製石斧	(8.6)	3.9	2.0	(81)	砂 岩	不定形な自然礫を素材とし、B面の刃部に下端及び左右両側からの剝離痕がみられる。B面に一部研磨した部分が見られることから、片面のみを研磨したものと思われる。断面は三角形をなし、刃部は蛤刃・円刃と思われる。	2C22

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー80	局部磨製石斧	(6.5)	3.9	1.5	(53)	緑色片岩	自然礫の上端と下端に剝離痕がみられ、特に下端部は磨耗している。局部磨製石斧の一種と思われるが、明瞭な研磨痕はみられない。あるいは楔形石器の一種かもしれない。	1C02
グー81	局部磨製石斧	(4.8)	3.2	1.0	(26)	緑色片岩	偏平な自然礫の下端部をA面からの衝撃により破損している。両面に極く一部、刃部を研磨した面がみられる。断面は不整形円をなす。	2B51
グー82	打製石斧	9.7	7.1	1.6	141	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残し、周縁全体に調整を施している。特に上端部と刃部の調整は比較的深い為、円刃をなす。	1C12
グー83	打製石斧	8.7	7.0	2.6	184	凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。調整は周縁全体に及ぶが、A面での左上方・右下方及び上端部・刃部、B面での右側縁及び上端部・刃部の剝離は深く、顕著なものである。刃部は直刃をなし、両側縁及び上下両端に磨耗痕がみられる。	3A25
グー84	打製石斧	12.0	(7.8)	3.0	(324)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。調整は周縁全体に施されるが、A面刃部及びB面上端部の剝離は面的で深いものである。刃部は偏刃をなす。左側縁上部はB面からの、同下部は下端からの衝撃により破損している。また、両側縁に磨耗痕がみられる。	1A96
グー85	打製石斧	(9.0)	5.2	2.5	(146)	泥質片岩	分銅形の打製石斧である。両面とも調整剝離が全面に施されている。刃部形態は不明だが、上端は円形をなす。A面からの衝撃により、下半部を破損する。また、A面の右側縁及び両面の中央部に磨耗痕がみられる。	1A62
グー86	打製石斧	10.3	(7.2)	1.7	(123)	チャート	分銅形の打製石斧である。A面に自然面を残す。調整はA面では周縁に施され、B面では全面に施される。特にA面の刃部及びB面の刃部・両側縁には丁寧な調整剝離が施されている。刃部は直刃をなす。破損はa：上半部、b：中間部、c：下半部の3つに分かれ、接合する。a・b間の破損面の観察は不可能であったが、b・c間の破損はA面からの衝撃による。さらに、cは破損面に両面から調整を施している。また、a・cの右側縁は破損後、調整を施して搔器状に加工しており、磨耗している。	2B31
グー87	打製石斧	10.9	6.8	3.1	251	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。A面に自然面を残す。調整はA面では左側縁及び右側縁下部にあらい階段状剝離を施し、周縁全体に及ぶ。B面では全面に施されるが、右側縁中間部は鍋底状に決るような調整が施され、横断面の右側縁はV字状を呈す。B面からの衝撃により中間部で破損し、上半部は1C90、下半部は0C90で出土したが接合する。なお、刃部・上端部の調整は比較的丁寧な調整が施されており、円刃をなす。磨耗痕はA面の刃部・上端部・左側縁上部、B面の刃部・中間部・右側縁にみられる。	1C10 0C90
グー88	打製石斧	12.9	(7.1)	2.3	(265)	片岩チャート	分銅形の打製石斧である。A面に自然面、B面に節理面を残す。調整はA面では刃部・上端部・右側縁に比較的丁寧な調整が施され、周縁全体に及ぶ。B面では周縁全体に比較的丁寧な調整が施されている。破損はB面からの衝撃により両側縁の上部・下部に生じている。刃部・上端部は直縁をなす。また、磨耗痕はA面の左側縁の挟りの部分にみられる。	3号住居跡
グー89	打製石斧	9.6	5.8	2.2	138	泥質片岩	分銅形の打製石斧である。A面に自然面を残す。刃部・左側縁に階段状剝離がみられ、比較的丁寧に周縁全体に調整が施されている。B面では全面に施される。刃部・上端部ともへ字状をなす。磨耗痕は両面とも両側縁・刃部・上端部にみられる。	0B78
グー90	打製石斧	8.4	(6.3)	1.4	(82)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。A面は周縁加工であるが、特に右側縁の調整が顕著である。B面は刃部・挟りの部分に簡単な調整を施しただけである。刃部は偏刃をなす。破損はA面からの衝撃により右側縁上部に生じている。磨耗痕はA面で両側縁・刃部・上端部、B面で両側縁の挟りの部分・刃部にみられる。	1C10
グー91	打製石斧	9.2	(5.9)	2.0	(139)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に大きく自然面を残す。周縁に簡単な調整を施している。刃部は円刃をなす。右側縁上部は下端からの、左側縁上部は上端からの衝撃により破損している。磨耗は非常に激しく、両面とも全周にみられる。挟りの部分・刃部とも稜をなせず、面となっている。	1A97

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー92	打製石斧	9.2	5.5	2.1	94	砂質片岩	不定形な分銅形の打製石斧である。B面に一部自然面を残す以外は両面とも面的な調整剥離を施している。A面に主要剥離面と思われる面を残す。刃部への調整は比較的丁寧で、ほぼ円刃をなす。	2B21
グー93	打製石斧	9.2	(7.1)	2.7	(182)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。B面に主要剥離面と思われる面を残し、A面にも大きなnegativeな剥離面がみられる。調整はA面の刃部・上端部に丁寧に施されている。特に刃部への調整は片凸刃を意識するかのように行なわれ、円刃をなす。下端からの衝撃により右側縁上部を破損する。磨耗痕はA面で左側縁、B面で刃部・左側縁にみられる。	2B10
グー94	打製石斧	8.6	(6.7)	1.8	137	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。表面は刃部・上端部への調整が顕著。裏面は左側縁に面的な大きな剥離痕がみられる。左側縁は表面からの、右側縁は裏面からの衝撃により破損する。刃部・上端部とも円形をなし、両面とも周縁に磨耗痕がみられる。なお、本土坑は床面直上から刀子が出土しており、縄文時代に帰属する可能性は低い。	101号土坑
グー95	打製石斧	(6.5)	(4.8)	(1.5)	(44)	砂 岩	分銅形の打製石斧である。A面に自然面を残す。挟りの部分への調整は細かくそれほど顕著ではなく、刃部への調整も面的な簡単なものである。上端からの衝撃により縦に破損する。また、左側縁下部はB面からの衝撃により破損していることから刃部形態は不明である。磨耗痕はA面の左側縁、B面の右側縁にみられる。	2A28
グー96	打製石斧	17.5	6.7	3.9	725	泥質片岩	分銅形の大形打製石斧である。A面に自然面、B面に主要剥離面と思われる面を残す。調整はほぼ全面に施され、特に周縁全体に丁寧な調整剥離が施されている。刃部は直刃をなす。	10号住居跡
グー97	打製石斧	9.2	5.4	1.7	108	雲母砂質片岩	撥形の打製石斧である。石材の関係上、剥離の観察は困難であるが、B面に主要剥離面と思われる面を残す。全面に調整剥離が施され、刃部は偏刃をなす。	2B38
グー98	打製石斧	(7.5)	4.8	2.7	(131)	砂質片岩	短冊形の打製石斧と思われる。両面とも面的な調整剥離が施され、刃部には既設剥離面をそのまま残している。刃部は円型刃をなす。B面からの衝撃により上半部を破損する。	118号住居跡
グー99	打製石斧	(5.7)	7.2	2.1	(116)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。A面の刃部への調整はあらい階段状剥離を施している。遺存部については周縁全体に調整が施される。上半部を左方向からの衝撃により破損する。刃部は直刃をなし、磨耗痕はA面の全周、B面の両側縁にみられる。	0C82
グー100	打製石斧	(5.1)	7.1	1.7	(77)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。A面は左側縁・刃部への階段状剥離が顕著で、しかも深い為、自然面をほとんど残さない。B面は周縁に丁寧な調整剥離が施されている。刃部は円刃をなす。上半部を右方向からの衝撃により破損する。磨耗痕は両面の周縁にみられる。	1C00
グー101	打製石斧	(4.7)	6.8	2.2	(101)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。刃部への調整はA面に顕著な剥離がみられる。また、側縁への調整は両面とも深く施されている。刃部は直刃をなす。上半部を右方向からの衝撃により破損する。	2C31
グー102	打製石斧	(7.8)	8.0	2.2	(175)	粘板岩質ホルンフェルス	分銅形の打製石斧である。A面に一部自然面、B面に主要剥離面と思われる面を残す。調整は面的な調整剥離を施した後、挟りの部分と刃部に比較的丁寧な調整を施している。刃部は偏刃をなす。破損のあり方は、B面からの衝撃により上半部を破損し、遺存部については、a：中間部、b：下半部左側、c：同右側の3つに破損し接合する。衝撃方向は不明。なお、aは2B32、b・cは2B22で出土している。	2B22 2B32
グー103	打製石斧	(6.7)	(7.2)	2.0	(98)	砂 岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。A面の調整は顕著でほとんど自然面を残さない。一方B面は周縁に簡単な調整が施されている。刃部は偏刃をなすものと思われる。破損のあり方は、A面右側縁がA面からの、左側縁がB面からの衝撃により破損した後、上半部をA面からの衝撃により破損する。右側縁と上部については破損面の切合い関係が観察される。磨耗痕は刃部より中央にかけて面的にみられる。	91号住居跡

遺物番号	器 種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー104	打製石斧	(4.2)	6.7	2.4	(81)	安山岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。A面では両側縁・刃部への調整が顕著なに対し、B面では刃部への調整はほとんどみられない。その為、刃部は直刃をなし、刃部縦断面はD字状をなす。左方向からの衝撃により上半部を破損する。	2B32
グー105	打製石斧	(5.6)	(4.6)	2.2	(76)	安山岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残し、周縁にほぼ均等にゆるい階段状剥離が施される。上半部と縦に真ん中で破損するが、前者はB面からの、後者は上端からの衝撃による。磨耗痕はA面の左側縁、B面の右側縁にみられる。	2B35
グー106	打製石斧	(6.8)	6.5	1.8	(101)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残すが、両面とも右側縁及び刃部への調整は顕著である。刃部は偏刃をなす。A面からの衝撃により上半部を破損する。	2A17
グー107	打製石斧	(6.0)	(7.1)	1.2	(72)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を大きく残り、周縁に簡単な調整を施している。刃部は円刃をなす。B面からの衝撃により上半部を破損する。	2A38
グー108	打製石斧	(7.0)	7.7	2.0	(136)	安山岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を残す。B面の調整は顕著で刃部は原石の厚さの1/2程度に減じている。A面は刃部にはほとんど施さず、両側縁への調整が目立つ。刃部は偏刃をなす。右方向及びA面からの衝撃により上半部を破損する。磨耗痕はA面の左側縁、B面の右側縁にみられる。	2B35
グー109	打製石斧	(7.9)	5.9	(1.6)	(68)	雲母砂質片岩	楕円形の打製石斧である。風化が激しく剥離痕の観察が困難であるが、A面に大きな剥離面、B面に節理面を残す。刃部・上端部の調整が比較的顕著である。刃部は偏刃をなす。B面上半部を節理面に沿って破損する。	2B29
グー110	打製石斧	(6.4)	6.9	2.3	(104)	安山岩	分銅形の打製石斧である。B面に自然面を残す。A面は全面、調整剥離が施される。B面は刃部の一部、両側縁の一部に簡単な調整が施される。刃部は偏刃をなす。右方向からの衝撃により上半部を破損する。	2B41
グー111	打製石斧	(5.2)	5.3	1.5	(44)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を大きく残す。刃部は右下の方向からの調整によって両面とも作出され、挟りの部分に簡単な調整が施されている。刃部は偏刃をなす。A面からの衝撃により上半部を破損する。	1A52
グー112	打製石斧	(5.7)	(4.6)	1.4	(45)	安山岩質凝灰岩	分銅形の打製石斧である。両面に自然面を大きく残す。A面は、周縁全体に調整が施され、B面は挟りの部分に調整が施されるのみである。刃部は円刃をなす。左側縁上部はB面からの、上半部はA面からの衝撃により破損する。磨耗痕はA面の左側縁の挟りの部分・刃部、B面の両側縁の挟りの部分にみられる。	1D31
グー113	打製石斧	(2.0)	(3.9)	(1.0)	(8)	砂質片岩	刃部破片である。両面とも丁寧調整されている。刃部は偏刃をなす。A面からの衝撃により刃部のみを遺存する。磨耗痕はA面の刃縁、B面のほぼ全面にみられる。	0C83
グー114	打製石斧	(6.1)	6.6	2.3	(90)	砂質片岩	分銅形の打製石斧と思われる。両面とも面的ならい調整が施されており、挟りの部分は極端に細くなってしまうことから、グー115・グー116同様、礫器状の不整形の打製石斧の可能性はある。刃部は偏刃をなす。上半部及び右側縁下部はB面からの衝撃により破損している。	2B32
グー115	打製石斧	7.7	(6.6)	2.6	(160)	砂質片岩	楕円形ないし不整形を呈する打製石斧である。比較的丁寧な両面に調整が施されている。刃部は偏刃をなす。右側縁をB面からの衝撃により破損する。	1C61
グー116	打製石斧	7.8	(5.5)	1.7	(70)	砂質ホルンフェルス	不定形な分銅形の打製石斧である。両面とも全面に調整が施されている。刃部は偏刃をなす。B面からの衝撃により右側縁上部を破損する。形態・調整のあり方からグー92に類似する。	2B62
グー117	礫 器	7.5	6.5	2.7	140	砂質片岩	ほぼ円形を呈し、A面はあらい階段状剥離を全面に施されB面は周縁に階段状剥離が施され、自然面を残す。礫器あるいは打製石斧と考えられる。グー114・115・116の一群は、116が自然面をもつことを除いて、形態・調整のあり方等類似する。	1A50
グー118	礫 器	5.5	5.1	1.8	50	砂 岩	小形の自然礫の先端を尖らせるように両面から、あらい階段状剥離が施される。この石器も小形の礫器あるいは打製石斧と考えられる。	2A17

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー119	直刃式 片刃石斧	5.2	4.9	1.3	43	玄武岩	A面は自然面を大きく残し両側縁・上部に調整が施され、B面は刃部に主要剥離面を大きく残して、全面調整剥離が施される。刃部には使用によると思われる細かい剥離痕がみられる。直刃式片刃石斧は本遺跡では一例だけであり、石材も他の打製石斧類とは明らかに異なる。	1C27
グー120	尖頭器	7.5	3.3	1.4	38	砂質ホルンフェルス	A面をゆるい階段状剥離、B面を平坦に加工して断面三角形を呈し、基部は平坦である。	0B99
グー121	叩石	10.7	5.2	4.3	304	砂岩	両端に敲打痕を有し、3つに割れたものが接合する。	49号住居跡
グー122	石皿	(22.5)	(20.5)	6.6	1,870	多孔質安山岩	楕円形を呈し深さ3.6cmを計る。凹は表に2個裏に5個あり深さ約1cmである。底面は平坦で安定が良い。2B14は敲石として再利用されている。	1C10 2B14 2B42
グー123	石皿	(11.0)	(21.5)	8.0	1,845	多孔質安山岩	楕円形を呈し、深さ4.3cmを計る。凹は裏に2個あり深さ約1cmである。底部は平坦で安定が良い。	0C62
グー124	石皿	(13.0)	(8.8)	6.5	520	多孔質安山岩	楕円形を呈し、深さ3.5cmを計り、側縁に稜をもつ、底面は凹面状を呈する。凹は底面に2個あり深さ約1cmを計る。	2C30
グー125	石皿	(8.5)	(7.5)	4.8	456	多孔質安山岩	楕円形を呈し、深さ0.7cmを計り側縁に微妙な稜をもつ、底面は凹面状を呈す。凹は底面に1個あり、深さ1cmある。	0C91
グー126	石皿	(18.5)	(12.5)	7.5	1,615	安山岩	楕円形を呈し、深さ2.5cmを計り、側縁に稜をもつ、底面はやや凸状を呈す。凹は裏に2個あり、深さ約0.8cmある。	1C42
グー127	石皿	(9.5)	(9.0)	(4.3)	710	安山岩	形状不明(円形?) 深さ約1.0cmを計る。	1C11
グー128	石皿	(11.2)	(7.2)	7.2	635	安山岩	楕円形を呈し、深さ約1.7cmを計る。底面は平坦である。	0B79
グー129	石皿	(11.5)	(12.3)	(5.2)	915	安山岩	形状不明(円形?) 深さ約0.5cmを計る。	2B85
グー130	石皿	(11.5)	(9.0)	3.3	324	安山岩	楕円形を呈し、平坦である。凹は表に1個あり深さ0.5cmである。底面はやや凸状をなす。	2A00
グー131	石皿	(10.5)	(7.0)	4.0	378	安山岩	楕円形を呈し、平坦である。底面はやや凸状をなす。凹は裏に1個あり深さ0.5cmである。	0C93
グー132	石皿	(9.0)	(6.1)	3.0	216	多孔質安山岩	楕円形を呈し、平坦である。凹は裏に1個あり、深さ約0.5cmを計る。右側面は敲石として再利用されている。	1A82
グー133	石皿	(11.0)	(8.8)	3.1	459	安山岩	楕円形を呈し、平坦である。底面は微妙な凸面状をなす。	2B30
グー134	石皿	(13.5)	(9.8)	8.9	835	輝石安山岩	方形を呈し、深さ約5.5cmを計り非常に深い、底面は平坦で安定が良い。凹は裏に2個、裏に6個あり深さ約1.5cmある。	2B22
グー135	石皿	(11.8)	(9.4)	5.5	590	多孔質安山岩	方形を呈し、深さ約2.3cmを計る。側縁と磨部の境に側溝状稜線をもち、底面は平坦で安定が良い。凹は裏に4個あり深さ1.3cmある。	1C32
グー136	石皿	(13.0)	(8.7)	7.7	790	多孔質安山岩	方形を呈し、深さ5.7cmを計り、側縁に稜をもつ、底面は平坦で安定が良い。	2B02
グー137	石皿	(8.3)	(8.2)	4.0	212	多孔質安山岩	方形を呈し、深さ2.5cmを計り、側縁に稜をもつ、底面は平坦で安定が良い、凹は底面に1個あり深さ約1cmある。	50号住居跡
グー138	石皿	(4.5)	(8.5)	4.5	226	安山岩	方形を呈し、深さ約1.5cmを計る。底面は平坦で安定が良い。	1A86
グー139	石皿	(10.5)	(12.0)	(4.4)	795	安山岩	方形を呈し、裏面欠損の後に表面を再度石皿として利用、表面の深さ約0.5cmを計る。凹は表面に1個あり、深さ約1cmある。	2B42
グー140	石皿	(7.0)	(5.8)	3.7	140	安山岩	方形を呈し、深さ約0.9cmを計る。底面は平坦で安定が良い。	0C81
グー141	石皿	(14.5)	(9.8)	6.2	650	安山岩	楕円形を呈し、深さ4.5cmを計る。底面は凹面状を呈する。凹は底面に5個あり深さ約0.7cmある。	128-1
グー142	石皿	(11.7)	(9.3)	5.5	504	安山岩	方形を呈し、深さ約1.5cmを計り、側縁に稜をもつ、底面は平坦で安定が良い。凹は底面に2個あり深さ0.8cmである。	1A96
グー143	石皿	(22.5)	(11.1)	6.3	1,615	安山岩	方形を呈し、稜が丁寧につられ、側縁と磨面の境に側溝状の稜がある。磨面の中央が凹面状を呈し、深さ1.6cmを計る。裏面石皿として利用され凹面状を呈し、周囲を円形状に凹9個がめぐる。凹の深さは約1cmある。	2C30
グー144	凹石	15.5	10.0	5.7	1,665	緑色片岩	転石を利用、凹はほぼ全面に12個あり、深さは約1cmをそれぞれ計る。	1A89
グー145	石皿(台・凹石)	11.0	12.5	8.4	1,625	砂岩	転石を利用している。表面を磨面として利用し、深さ1.4cmを計る。凹は左側面3個、右側面2個、裏面12個と多く、深さはそれぞれ1cm前後ある。	2B22
グー146	浮子?	(3.1)	(2.4)	1.0	1.2	浮岩	欠損品である。孔は径5mmを計る。裏面は平坦で、外側が肥厚し、1.0cm、内側が0.5cmをそれぞれ計る。	23号住居跡-1
グー147	石剣(棒)	(18.0)	3.0	1.8	190	緑色片岩	断面は中央部が扁平、下端が楕円形を呈す。	0B69
グー148	石剣(棒)	(12.4)	2.6	1.9	102	雲母片岩	断面は楕円形を呈す。	1A64

遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー149	石 棒	(6.8)	2.5	2.3	72	雲母片岩	断面は円形を呈す。	0C81
グー150	石 棒	(8.6)	2.4	2.4	83	雲母片岩	断面は円形を呈す。	2A18
グー151	石 棒	(8.7)	1.8	1.7	50	石墨片岩	断面は円形を呈す。頭部との境に溝が一条めぐる。	2B51
グー152	石 棒	(8.0)	(7.0)	(7.5)	635	安山岩	表面を丁寧に磨耗し、大型石棒と推定される。グー151と同一体接合せず。	1A88
グー153	石 棒	(14.4)	(7.3)	(10.0)	1,475	安山岩	表面を丁寧に磨耗し、大型石棒と推定される。グー150と同一体接合せず。	1C42
グー154	台 石	15.0	10.6	3.0	795	安山岩質 凝灰岩	転石を利用した台石、表、裏面磨耗し、表面に、痕あり、両側面も磨耗し、砥石として利用した可能性あり、表面に2個、裏面に1個微妙な凹があり、敲打痕も見られる。	37号住居跡
グー155	台 石	10.0	3.1	2.5	90	砂 岩	転石を利用、表面に微妙な凹面状を呈する磨耗痕あり。	1A72
グー156	砥 石	15.5	6.3	2.7	417	砂 岩	転石を利用、表面に溝状の磨耗が1条、裏面にも1条あり、表・裏面に磨耗痕あり。磨石としても利用か？	1A65 1A75 1A88
グー157	砥 石	(7.5)	(6.8)	5.5	331	砂 岩	形状不明、溝状の磨耗痕が表面に3条、裏面に2条あり。	112号住居跡
グー158	砥 石	13.0	6.1	1.7	185	砂 岩	転石を利用、表面に溝状の磨耗痕4条あり。	2B12
グー159	砥 石	(5.8)	5.6	2.5	105	砂 岩	転石を利用、溝状の磨耗痕が表面に2条、裏面に1条あり、全面に磨耗痕があることから磨石としても利用か、上端に敲打痕あり。	0C72
グー160	磨 石	12.2	9.8	4.0	845	石英斑石	やや楕円形を呈し、側面が整形され、やや稜をもつ、表裏ともに全面磨耗・下端に敲打痕あり、表に1ヶ所、裏に1ヶ所微妙な凹あり、一部側面付近磨耗が著しい。	1B91
グー161	磨 石	13.0	10.3	5.2	1,065	安山岩	やや楕円形を呈し、側面が整形され稜をもつ、表裏ともに全面磨耗、表・裏に各1ヶ所微妙な凹あり、一部側面付近磨耗の著しい部分あり。	2B30
グー162	磨 石	11.6	8.9	5.1	805	安山岩	卵形を呈し、側面を整形す、表裏ともに全面磨耗、表裏に各1ヶ所微妙な凹あり。	0C90
グー163	磨 石	11.7	8.8	3.3	565	砂 岩	楕円形を呈し、側面が整形され稜をもつ。表裏ともに全面磨耗、表裏ともに全面磨耗、表に1ヶ所裏に2ヶ所微妙な凹あり、一部側面付近磨耗の著しい部分あり。	1C31
グー164	磨 石	10.6	8.8	5.8	865	輝石安山岩	楕円形を呈し、側面が整形されやや稜をなす。表裏ともに磨耗、表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり。	2A28
グー165	磨 石	11.3	7.6	4.3	585	角閃石	長楕円形を呈し、側面が整形され稜をなす。表裏と両側面の一部が磨耗、表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり、上・下端敲打痕あり、一部側面付近磨耗が著しい。	0C71
グー166	磨 石	12.0	7.0	4.3	745	輝石安山岩	長楕円形を呈し、側面が丁寧に整形され稜をなす。表裏・両側面ともに磨耗、表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり、上・下端敲打痕あり、一部側面付近磨耗が著しい。	2B47
グー167	磨 石	15.6	8.2	4.1	845	安山岩	良好な接合資料である。Aは長楕円形を呈し、側面が整形され稜をなす。表裏と側面の一部が磨耗、上端に敲打痕あり、表面に微妙な凹あり、欠損の後廃棄、Bは欠損の後、再度整形されるが一回り小さくなり、欠損部と下端に敲打痕あり、表裏には再度位置を移して、微妙な凹を作る。	1C20 2B31
グー168	磨 石	12.5	8.5	4.0	537	安山岩	長楕円形を呈し、側面が丁寧に整形され稜をなす。表裏磨耗し、一部側面付近磨耗著しい。表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり、5点以上に割れ、その後廃棄。	34号住居跡 1A87 2A29
グー169	磨 石	13.4	7.9	3.9	675	安山岩	長楕円形を呈し、側面が丁寧に整形され稜をなすが上・下端は磨耗のため稜が認められない、磨耗は全面に及ぶが、側面の一部が特に著しい。表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり、下端敲打による破損あり。	2A28
グー170	磨 石	12.0	8.6	4.2	625	安山岩	長楕円形を呈し、側面が整形され稜をなすが、上端は磨耗により稜が不明瞭、磨耗は全面に及び表面が平坦であるが、裏面は凸面状をなす。表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり、下端欠損部は敲打による磨耗明瞭。	1B47
グー171	磨 石	11.1	6.3	4.2	461	安山岩	長楕円形を呈し、側面が整形され稜をなす。上・下端は著しい磨耗のため稜は不明瞭、表裏磨耗する。表裏1ヶ所づつ凹があり、深さ3mmと比較的深い。	1C44
グー172	磨 石	10.7	6.6	6.5	635	安山岩	不整形楕円形を呈し、側面不明瞭ながら稜をなす。表裏・上・下端磨耗、凹は表裏・両側面の計4ヶ所あり、深さ3mm前後と比較的深い。	2C30

遺物番号	器種	法 量 cm. g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー173	磨 石	11.8	7.9	4.9	665	凝灰質砂岩	不整楕円形を呈し、側面不明瞭ながら稜をなす。表裏・左側面の計3ヶ所あり、深さ5mm前後と最も深い。下端に敲打痕あり。	2B52
グー174	磨 石	10.8	6.8	4.7	376	安山岩	不整形を呈し、側面を荒く整形し、やや稜をなす。表面は凸面状に、裏面は平坦にそれぞれ磨耗する。凹は表裏・両側面の計4ヶ所あり深さ1cmをそれぞれ計る。この凹は凹石とするよりもやはり磨石の部類に入っているものである。上・下端は敲打痕明瞭、2次火熱を受ける。	2A28
グー175	磨 石	10.0	7.5	5.3	655	安山岩	楕円形を呈し、側面整形され不明瞭な稜をなす。表裏面磨耗し、裏面は平坦、表裏に浅い凹2ヶ所あり。	1B65
グー176	磨 石	10.2	7.2	4.3	457	石英斑岩	楕円形を呈する転石を利用し、側面に、整形を施す、表面のみ磨耗、表裏に浅い凹1ヶ所づつあり、上下端に敲打痕あり。	46B号住居跡-5
グー177	磨 石	10.5	8.3	4.2	680	安山岩	楕円形を呈し、側面が調整されやや稜をなす。表裏磨耗し、側面付近の一部の磨耗が著しい。表裏に1ヶ所づつ深さ約5mmの凹あり、上・下端敲打痕あり。	24号住居跡-6
グー178	磨 石	(6.0)	(5.3)	4.2	190	石英岩	転石を利用。側面に調整痕あり、表裏磨耗、表裏に微妙な凹あり。	0C91
グー179	磨 石	(6.7)	(7.3)	5.8	247	輝石安山岩	形状不明(円?)側面調整されやや稜をなす。表裏磨耗、表面に1ヶ所の浅い凹あり。	1C36
グー180	磨 石	(8.5)	(5.4)	4.8	276	安山岩	形状不明(楕円形?)側面調整されやや稜をなす。表裏磨耗し、裏面は平坦、一部側面付近磨耗が著しい。表面に浅い凹2ヶ所あり。	2C21
グー181	磨 石	(12.3)	(10.0)	(4.5)	504	安山岩	楕円形を呈し、側面は稜をもたない。表裏ともに磨耗、側面と表面に金属器によると推定される。溝と擦痕あり、大形の磨石であり両手使用のものか、凹は残存部からは認められない。	2B46
グー182	磨 石	14.6	5.7	5.5	760	安山岩	長楕円形を呈し、断面円形をなす。全面磨耗し、上・下端に敲打痕あり、表面に微妙な凹4ヶ所あり。	0B68
グー183	磨 石	12.4	5.8	3.4	423	安山岩	長楕円形を呈し、側面調整され稜をなす。表裏磨耗、表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり、上・下端に敲打痕あり。	0C90
グー184	磨 石	(8.8)	7.5	4.2	393	砂 岩	長楕円形を呈し、側面・上端調整され稜をなす。表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり。	2C21
グー185	磨 石	11.2	6.1	4.2	460	安山岩	欠損品、長楕円形を呈していたものと推定される。欠損部と上端は敲打痕明瞭、ソリがあり上面のみ磨耗され凸面状をなす。表面に微妙な凹3ヶ所あり。	1A29 1A63
グー186	磨 石	(6.8)	5.8	4.7	279	多孔質安山岩	長楕円形を呈するものと推定され、側面調整のためやや稜をなす。表裏磨耗、表裏に微妙な凹1ヶ所づつあり。	1A65
グー187	磨 石	(7.9)	(6.4)	3.3	256	安山岩	長楕円形を呈するものと推定され、側面調整のためやや稜をなす。表裏面磨耗し、一部側面磨耗著しい、表裏に1ヶ所づつ浅い凹あり、上端に敲打痕あり。	1B80
グー188	磨 石	(6.3)	6.2	3.8	226	安山岩	長楕円形を呈するものと推定され、側面調整のために稜をなす。表裏面磨耗し、一部側面磨耗著しい。表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり、上端敲打痕明瞭	8号住居跡-10
グー189	磨石(敲石)	8.2	6.0	3.8	321	安山岩	長楕円形を呈するものと推定されるが、欠損の後敲石の機能大、側面は調整され稜をなす。表裏面磨耗、表裏に1ヶ所づつ約3mmの凹あり、この凹は、敲石用として再度つくられたもの。	2C05
グー190	磨 石	(4.8)	7.9	4.4	281	安山岩	形状不明、側面調整され稜をなす。表裏面磨耗し、表面が平坦、裏面が凸面状を呈す。表面に1ヶ所微妙な凹あり。	2B35
グー191	磨 石	(5.0)	(4.8)	3.5	89	砂 岩	形状不明(長楕円形?)側面丁寧に調整されやや稜をなす、表裏面磨耗、表裏にやや深い凹1ヶ所づつあり、上端に敲打痕あり。	表採
グー192	磨 石	(5.5)	(5.2)	2.6	151	流紋岩	形状不明(長楕円形?)側面調整されやや稜をなす。表裏面磨耗し、表面平坦、裏面がやや凸面状を、表裏に浅い凹があるが、位置的にはやや異なる。	2A09
グー193	磨 石	(3.1)	(6.5)	4.1	109	砂 岩	形状不明。側面調整されている。全面磨耗、表面に1ヶ所微妙な凹あり。	19号住居跡-1
グー194	磨 石	7.9	6.2	4.4	395	安山岩	楕円形を呈し、側面・上・下端丁寧に調整され稜をなす。全面磨耗、表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり。	1C42
グー195	磨 石	8.1	(5.9)	3.8	279	安山岩	楕円形を呈し、側面が調整されやや稜をなす。表裏面磨耗し、裏面やや自然面を残す。表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり。	115号住居跡-19

遺物番号	器種	法 量 cm、g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グー196	磨石	8.8	7.0	4.5	416	石英斑岩	転石を利用、楕円形を呈し、側面に少し調整あり、表裏に1ヶ所づつ非常に微妙な凹あり、上・下端に敲打痕あり。	2B44
グー197	磨石	8.5	6.2	3.4	200	安山岩	転石を利用、卵形を呈し、側面に微妙な調整あり、表面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ浅い凹あり、上下端に敲打痕あり、2次火熱を受ける。	48号住居跡-3
グー198	磨石	9.8	8.6	4.6	585	安山岩	転石を利用、楕円形を呈し、側面に調整あり、表裏面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ微妙な凹あり。	1C20
グー199	磨石	9.5	6.0	4.1	326	砂岩	転石を利用、不整楕円形を呈し、側面に一部調整あり、表裏面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ微妙な凹あり。	2C13
グー200	磨石	7.5	8.2	5.3	535	角閃石輝石安山岩	転石を利用、不整楕円形を呈す。表裏面と側面の一部が磨耗、表裏面に1ヶ所づつ浅い凹あり。	0B78
グー201	磨石	(5.9)	(8.5)	4.1	341	砂岩	転石を利用か、形状不明、側面に調整あり、表裏面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ微妙な凹あり、欠損の後敲石として利用。	1C31
グー202	磨石	8.1	5.2	3.3	187	砂岩	転石を利用。不整楕円形、側面を一部調整、表裏面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ、微妙な凹あり。	2C30
グー203	磨石	(6.0)	8.2	3.2	251	アップライト	転石を利用、形状不明（不整楕円形？）表裏面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ微妙な凹あり。	1B92
グー204	磨石	(8.2)	10.5	5.5	670	輝石安山岩	転石を利用、形状不明（楕円形？）側面に調整あり、表裏面磨耗し表面やや平坦、表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり。	21号住居跡-5
グー205	磨石	(9.0)	7.3	4.2	360	石英玢岩	転石を利用、長楕円形、表裏面磨耗。	2B30
グー206	磨石	10.5	8.1	2.3	186	多孔質安山岩	転石を利用、楕円形を呈す。表面磨耗し、やや凸面状をなす。	2A17
グー207	磨石	9.4	6.8	5.7	518	砂岩	転石を利用。不整楕円形を呈す。表裏・側面の一部磨耗。	1A54
グー208	磨石	10.2	6.0	5.8	482	安山岩	転石を利用。不整楕円形を呈し、側面に一部調整、表裏・右側面磨耗。	46A号住居跡-13
グー209	磨石	9.7	7.4	4.8	527	石英玢岩	転石を利用。不整楕円形を呈す。表面磨耗し平坦。	111号住居跡-2
グー210	磨石	7.4	6.4	4.3	317	砂岩	転石を利用、側面を調整、表裏面磨耗	1B27
グー211	磨石	7.5	6.1	2.7	189	砂岩	転石を利用、表裏面磨耗し、表面が平坦	46A号住居跡-2
グー212	磨石	8.5	5.3	2.2	155	砂岩	転石を利用、表裏面磨耗し、表面が凸面状をなす。	2B24
グー213	磨石	8.0	7.5	4.7	341	安山岩	形状不明（楕円形か？）側面が整形されやや稜をなす。表裏、側面磨耗	0B99
グー214	磨石	(6.5)	(4.5)	(6.7)	249	砂岩	転石を利用、表面磨耗のため光沢あり、欠損の後に敲石として再利用	1A83
グー215	磨石	10.4	8.0	4.2	570	砂岩	転石を利用、表面のみ磨耗、2次火熱を受ける。	2A07
グー216	磨石	(10.0)	(8.1)	4.2	435	安山岩	楕円形を呈し、側面を調整、表裏磨耗	0C91
グー217	磨石	8.3	6.6	4.3	330	安山岩	転石を利用、楕円形を呈す、表裏磨耗、表裏面にベンガラ付着	1C11
グー218	磨石	7.9	5.3	2.3	150	石英玢岩	転石を利用、表面のみ磨耗	2B10
グー219	磨石	7.3	5.4	2.7	158	安山岩	転石を利用、表面のみ磨耗	1B92
グー220	磨石	7.7	(6.0)	1.6	87	安山岩	転石を利用、側面一部調整、表裏面磨耗	52号住居跡-1
グー221	磨石（敲石）	11.0	5.5	2.3	231	砂岩	転石を利用、側面一部調整、表裏面磨耗、上下端敲打痕あり。	2B06
グー222	磨石（敲石）	12.2	3.6	3.0	236	砂岩	転石を利用、表裏面磨耗、上下端敲打痕あり。	2B29
グー223	磨石（敲石）	14.0	5.9	2.7	281	流紋岩	転石を利用、表面磨耗し、凸面状をなす。上下端敲打痕あり。	2B00
グー224	磨石（敲石）	11.7	6.0	4.8	455	流紋岩	転石を利用、表面一部磨耗、上下端敲打痕あり。	1B68
グー225	磨石（敲石）	10.5	7.4	6.1	665	安山岩	転石を利用、表裏、側面一部磨耗、上下端敲打痕あり	2B36
グー226	磨石（敲石）	13.6	8.6	2.5	446	砂岩	転石を利用、表面磨耗し、台石の万能性もあり、上下端敲打痕あり、(砥石?)	2C20
グー227	磨石（敲石）	11.1	7.2	3.1	419	安山岩	転石を利用、表裏磨耗、上下端敲打痕あり。	17号住居跡-3
グー228	磨石（敲石）	11.5	7.3	4.0	499	泥岩	転石を利用、表面一部磨耗、下端敲打痕あり。	1C20
グー229	磨石（敲石）	10.1	4.5	3.3	195	砂岩	転石を利用、表面磨耗、上下端敲打痕あり。	2B12
グー230	磨石（敲石）	9.0	5.1	2.1	155	ホルンフェルス	転石を利用、表面一部磨耗、上下端敲打痕あり	2A16

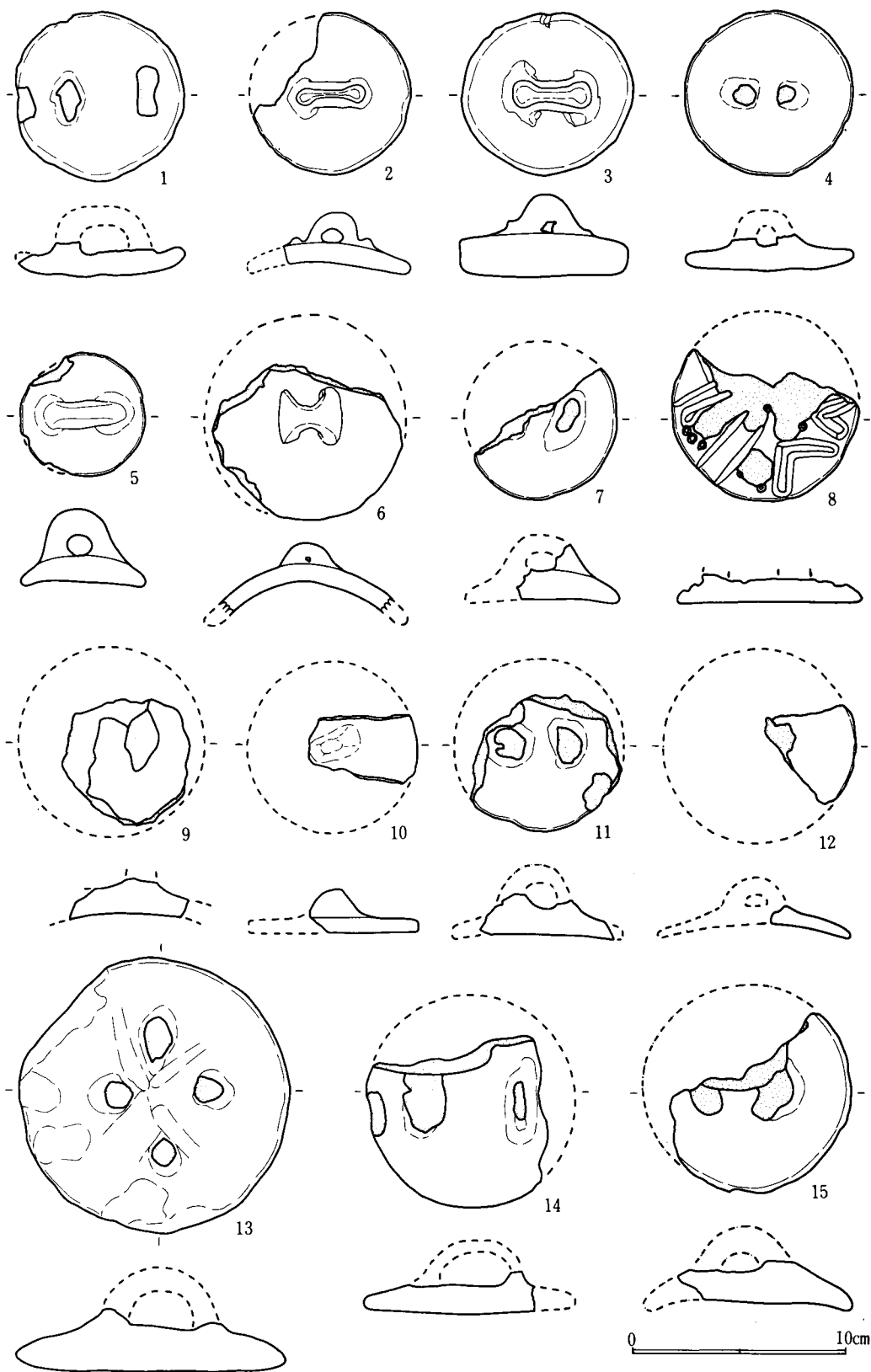
遺物番号	器種	法 量 cm, g				石 材	調 整	出土位置
		長さ	幅	厚さ	重さ			
グ-231	磨石 (敲石)	9.7	5.0	3.3	282	石英斑岩	転石を利用、表面一部磨耗、上下端敲打痕あり。	54号住居跡 -3
グ-232	磨石 (敲石)	9.5	8.2	1.8	221	安山岩	転石を利用、表裏磨耗するが、台石の可能性もあり、上下端敲打痕あり。	1A86
グ-233	磨石 (敲石)	9.5	7.1	5.1	549	安山岩	楕円形を呈し、側面調整され不明瞭ながら稜をなす。表裏面磨耗、表裏面に1ヶ所づつ微妙な凹あり、上端敲打痕あり。	0B68
グ-234	磨石 (敲石)	6.1	9.0	4.0	327	アップライト	転石を利用、表裏磨耗、欠損の後に敲石として再利用、欠損部、敲打痕明瞭。	1A78
グ-235	磨石 (敲石)	6.7	8.2	3.8	256	安山岩	楕円形を呈し、側面調整されているが稜は不明瞭、表裏磨耗、欠損の後敲石として再利用、この時点で表裏に1ヶ所づつ微妙な凹あり、欠損部の磨耗著しい。	2A09
グ-236	磨石 (敲石)	11.6	6.3	4.0	263	砂岩	転石を利用、表面磨耗し、平坦台石の可能性あり、2次火熱を受ける。	2B47
グ-237	磨石 (敲石)	7.4	5.0	2.8	231	砂岩	転石を利用?、側面調整あり、表面磨耗し平坦	1A85
グ-238	磨石 (敲石)	(6.7)	(5.0)	2.5	160	砂岩	形状不明、表裏磨耗痕あり、台石として利用の可能性あり、表採上端敲打痕あり。	表採
グ-239	磨石	(4.8)	7.2	4.0	180	安山岩	長楕円形?、全面磨耗、上端敲打痕あり	2B35
グ-240	磨石	(6.5)	(7.0)	4.3	258	砂岩	転石を利用、表裏面磨耗、上端敲打痕あり	2B05
グ-241	磨石	(9.2)	5.9	4.0	316	砂岩	転石を利用、全面磨耗、上端敲打痕あり	2C10
グ-242	磨石	(4.5)	(6.9)	(3.2)	93	安山岩	形状不明、側面調整あり、表裏面磨耗	1B99
グ-243	磨石	(7.6)	8.2	5.4	464	安山岩	長楕円形を呈し、表裏面磨耗、上端敲打痕あり	2B35
グ-244	磨石 (敲石)	10.0	5.7	2.7	286	安山岩	長楕円形を呈す。側面調整あり、表裏磨耗し、表面ソリをもつ凸面状を呈す。上下端敲打痕剝離著しい	2B13
グ-245	磨石 (敲石)	(5.5)	6.0	2.2	99	安山岩	形状不明、側面調整あり、表裏面磨耗し、表面平坦、裏面凸面状をなす、上端敲打痕剝離著しい	2A29
グ-246	磨石 (敲石)	(7.4)	3.8	2.8	142	安山岩	形状不明、表裏面磨耗、上端敲打痕剝離著しい。	1C31

土製蓋（第195図 1～15 図版68）

全部で15点出土している。すべて縄文時代後期の堀之内式期に属すると考えられる。

1は把手を欠損している。断面形は上に向かって彎曲する特殊な形態で、厚みは一定していない。把手の付けられる外面の方が内面に比べ粗く調整されている。2はやや彎曲する。内外面ともに丁寧な調整が行われ、把手の上面には沈線が施されている。3は分厚く、平板な形態である。胎土に多量の砂粒を含む。2と同様に把手の上面に沈線を伴う。4は縁片がやや薄く、厚みは一定しない。把手のみ欠損している。内外面の調整は良好。5は小型の蓋で、若干彎曲する。内外面の調整は良好。6は強く彎曲し、甲高である。橋状の把手は小さく、わずかに貫通している。内外面の調整は良好。7は若干彎曲する。内外面の調整は良好。8は唯一外面に文様が施されたものである。竹管状工具によって刺突文と「く」の字状の沈線文が施されている。内面は平らで、表面の調整は丁寧に行われている。9は欠損が著しく径は推定し得ない。若干彎曲するものと思われる。10は厚みの一定した平板なつくりで、中央に小さなつまみが付けられている。内外面の調整は良好。11も欠損が著しい。縁辺にやや歪をもつ。12は中央につまみをもつものであろう。内外面ともに平滑で放射状の調整痕が明瞭に残る。薄く、若干彎曲する。13は十字に把手が付けられていたと思われる大型品である。重いため、通常の把手では破損のおそれがあることから十字に把手が付けられたのであろう。内外面の調整は良好で、外面には指頭痕が残る。14は比較的大きな把手が付けられていたと思われる。平板で、厚みは一定しない。内外面の調整は良好。15は中央が平らで縁辺が若干彎曲する。内外面の調整は良好。

以上15点のうち、9を除く残り14点の平均の直径（推定値を含む）は8.5cmである。深鉢や鉢、浅鉢などに口径8.5cm前後の小さなものは少なく、これらの蓋として機能することは難しい。既存の器種の中でこれらの蓋の径に対応する器種としては注口土器が最も妥当であろう。しかし、堀之内式期の注口土器にみられる口縁部形態は明確な受け口構造とならないものが多く、注口土器の蓋として機能したとしても密閉度は極めて低いと考えられる。



第195図 土製蓋実測図 (1/3)

土製蓋

() は推定値

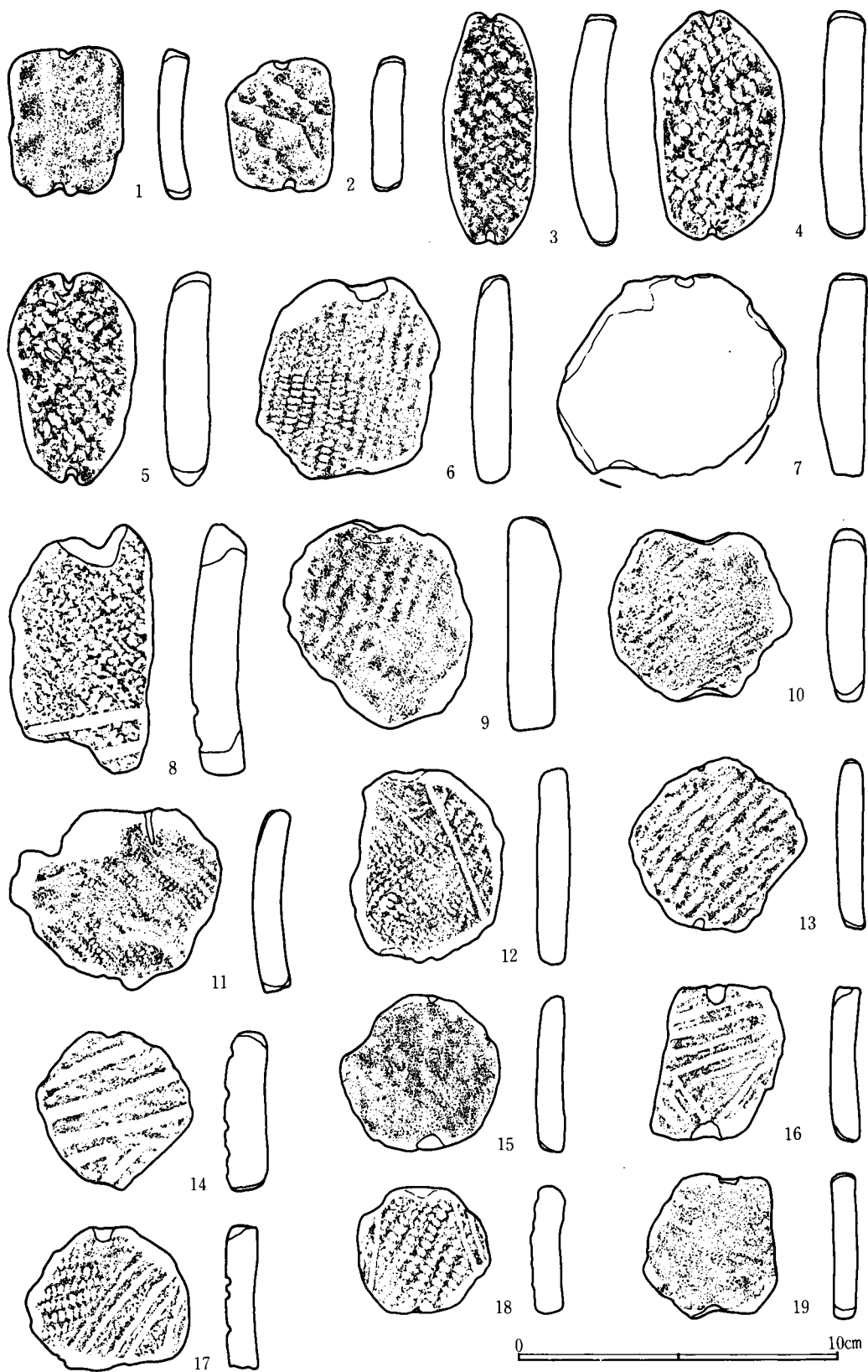
遺物番号	出土位置	直径(cm)	遺存度
1	1 C72	7.9	把手欠損
2	第10号住居跡	7.5	$\frac{3}{4}$
3	第86号住居跡	8.0	完形
4	2 A27	7.8	把手欠損
5	1 C15	5.8	ほぼ完形
6	2 A04	(9.4)	$\frac{1}{2}$
7	第9号住居跡	7.2	$\frac{1}{2}$
8	2 C20	8.6	$\frac{2}{3}$
9	1 C04	—	$\frac{1}{3}$
10	1 A96	(7.9)	$\frac{1}{4}$
11	1 C31	(7.9)	$\frac{2}{3}$
12	2 A09	(8.9)	$\frac{1}{4}$
13	1 A52	12.6	把手欠損
14	2 B35	(9.8)	$\frac{2}{3}$ 把手欠損
15	1 A82	9.6	$\frac{1}{2}$ 把手欠損

ii 土製品

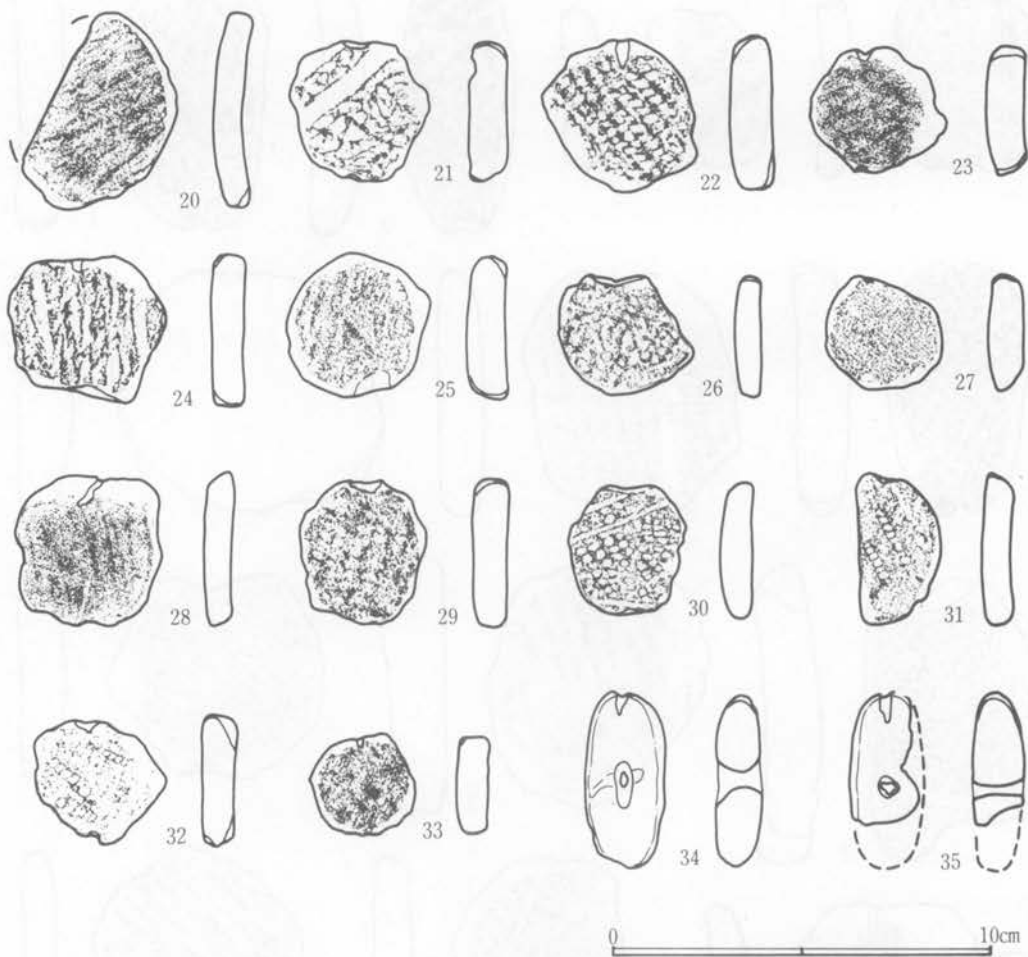
土器片錘 (第196図1～19、第197図20～33 図版67)

全部で33点出土している。時期的には縄文時代中期の阿玉台式期2点、後期の堀之内式期30点、時期不明1点である。出土地点は堀之内I式期の第36号住居跡の覆土から4点出土しているほかはグリッドの包含層からの出土である。なお、縄文時代以外の住居跡から出土したものはグリッド出土遺物として扱うことにした。

1・2は阿玉台式土器の胴部にあたり、ひだ状の指圧痕が認められる。胎土・焼成が類似しており、同一個体から製作されたものと考えられる。ともに切込みは深い。堀之内式期の土器片錘に比べ形態は長方形に近く規格性が高い。3～5は同一個体からつくられたものであろう。縄文が粗く、ゆるいことから堀之内式土器を加工していると思われる。1・2とは対照的な形態をもち、長軸と短軸の比率が極めて高い。切込みは明瞭で深い。同時期と考えられる6～33との形態差は明らかであることから用途に若干の違いがあるのではないと思われる。7は底部を加工しており時期は不明である。7を除く6～33は胴部の破片を加工したものである。形態は不整円形を呈するものが大半を占め規格性に乏しい。また、整形は雑に行われている。切込みは浅く不明瞭なものが多い。切込みは両端にあるものがほとんどだが、片方にわずかに認められる例もある。堀之内式期の土錘30点の平均的な大きさは5cm×4cmとやや楕円形に近い例が多く、重量の平均は24gである。



第196图 土錘実測図 (1/2)



第197図 土錘実測図 (1/2)

土器錘 (第197図34・35 図版67)

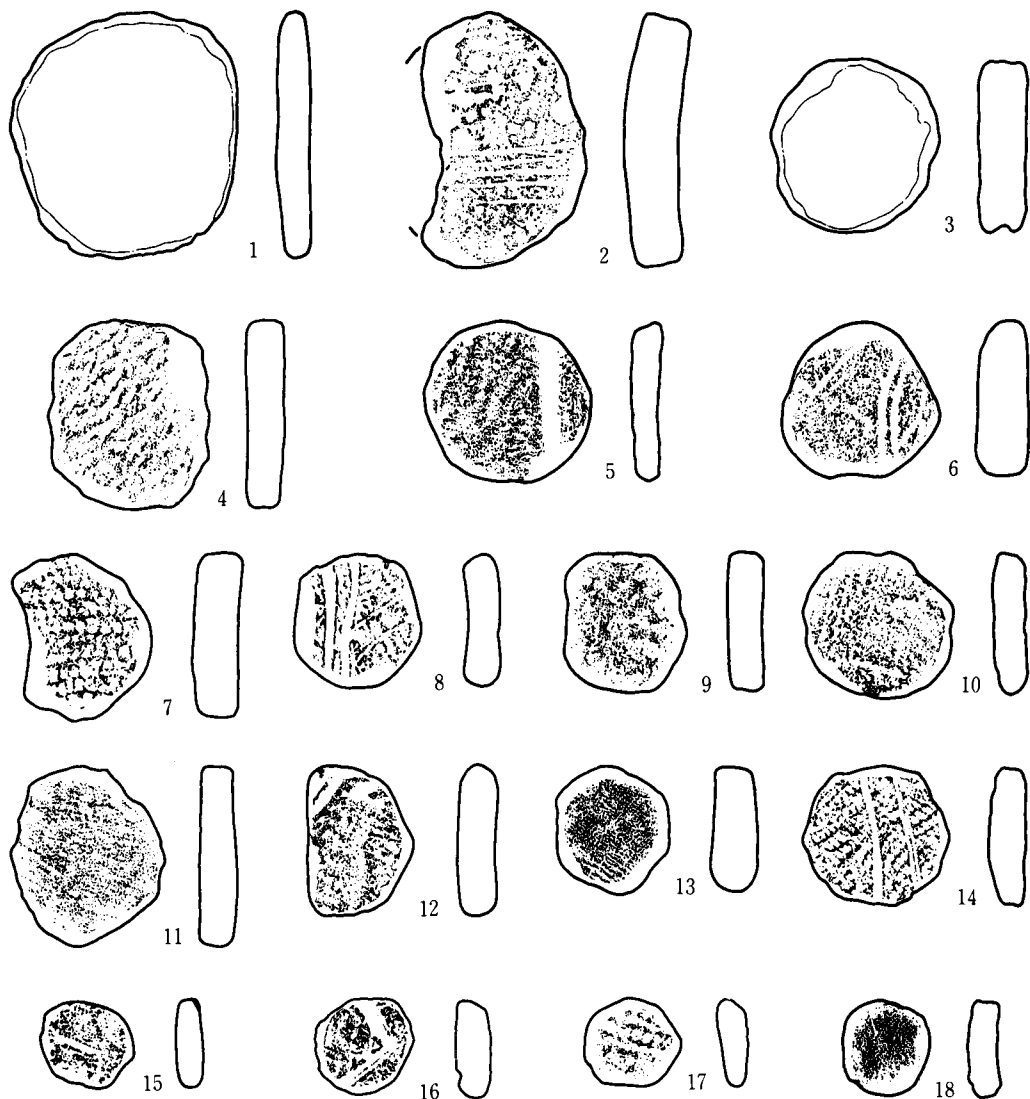
土製の錘は2点出土している。34はほぼ完形で長軸4.5cm、短軸2.2cmである。35も完形であれば同様の大きさであろう。2点とも粗雑な作りである。胎土に砂粒を混入し、表面は黒褐色を呈する。34は片側をわずかに欠損しているが切込みの痕跡が認められ、長軸両端に切込みをもつと思われる。焼成以前に切込みを入れていたかははっきりしない。2点とも中央に貫通孔を伴う。隣接するグリッドの包含層から出土しており、時期は不明である。

土錘

遺物番号	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時期
1	1 B85	4.6	3.5	0.8	19.0	阿玉台
2	1 B85	4.0	3.4	1.0	17.6	阿玉台
3	1 B40	7.7	2.9	1.2	32.2	堀之内
4	第36号住居跡	7.0	4.0	1.2	44.4	堀之内
5	第36号住居跡	6.9	3.7	1.2	38.9	堀之内
6	1 B27	6.4	5.6	1.2	44.5	堀之内
7	2 A19	7.2	6.3	1.6	70.1	不明
8	第36号住居跡	7.7	4.4	1.3	50.5	堀之内
9	2 A03	6.5	5.6	1.4	63.9	堀之内?
10	1 C10	5.6	5.5	1.0	35.3	堀之内?
11	1 B60	6.4	5.6	0.9	35.0	堀之内
12	1 A96	5.9	4.7	1.0	35.3	堀之内
13	2 B65	5.2	4.8	0.8	25.0	堀之内
14	0 C93	4.8	4.5	1.1	27.2	堀之内
15	1 C95	4.8	4.6	0.8	23.1	堀之内?
16	1 C20	5.0	3.6	0.9	20.4	堀之内
17	1 B40	4.9	4.4	1.0	27.6	堀之内
18	2 C20	4.1	3.9	1.0	18.2	堀之内
19	2 A39	4.3	4.0	0.8	17.3	堀之内?
20	2 A18	5.1	3.7	0.8	15.9	堀之内?
21	2 B10	3.6	3.5	1.0	14.9	堀之内
22	第36号住居跡	4.6	3.6	1.1	20.2	堀之内
23	2 A03	3.4	3.2	0.9	12.2	堀之内?
24	2 A07	4.1	3.6	0.8	16.5	堀之内
25	1 B81	3.6	3.4	1.1	15.6	堀之内?
26	1 A87	3.7	3.0	0.7	8.3	堀之内
27	2 B06	3.1	2.6	1.0	17.6	堀之内?
28	1 A86	4.5	4.0	0.8	14.5	堀之内?
29	1 A84	3.7	3.3	1.0	15.2	堀之内?
30	2 A26	3.3	3.1	0.8	10.1	堀之内
31	2 B06	3.7	2.2	0.8	8.3	堀之内
32	1 A76	3.4	2.8	1.0	10.7	堀之内
33	1 A75	2.6	2.6	0.8	7.3	堀之内?
34	1 A81	4.5	2.2	1.3	14.7	不明
35	1 A82	3.3	1.8	1.4	7.2	不明

土器片円盤 (第198図 図版67)

土器の底部及び胴部を円盤状に加工したものである。粘土を円盤状にし焼成した土製円盤と分けるため土器片円盤と呼ぶことにする。土器の文様が摩耗しているため時期判断に苦しむものもあるが、ほとんどが縄文時代後期の堀之内式期に属すると考えられる。1・3は底部を加工した例である。残る16点は胴部破片からつくられている。大きさは直径6.4cm～2.3cmで、平均は3.9cmである。4～14がおおよそ平均的な大きさをもつものであろう。



0 10cm

第198図 土器片円盤実測図 (1/2)

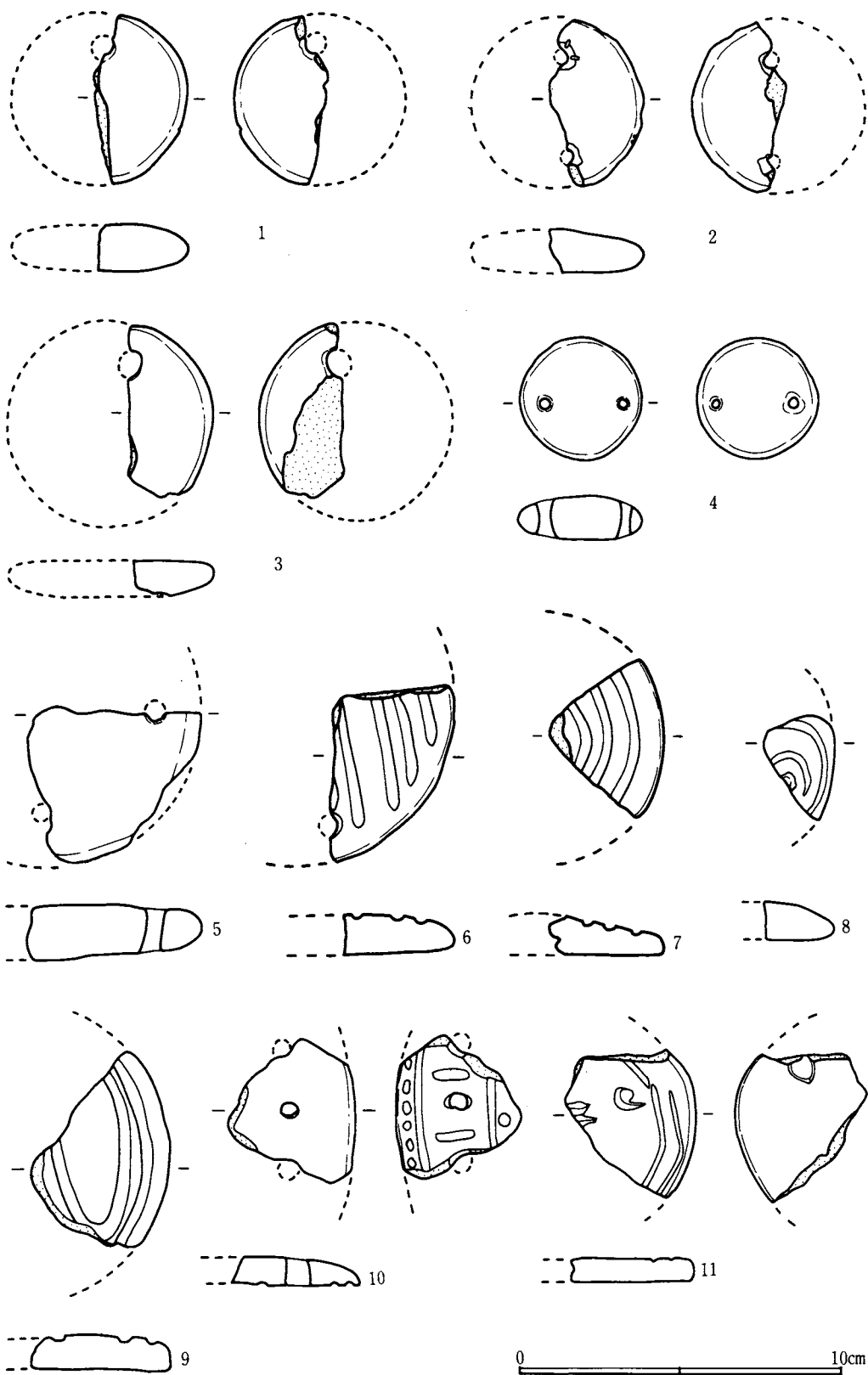
土器片円盤

遺物番号	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時期
1	2 B35	6.4	6.0	0.8	40.9	後期
2	1 C32	6.6	4.3	1.3	45.3	堀之内
3	1 A88	4.4	4.1	1.3	31.0	後期
4	1 B69	4.8	4.1	1.0	26.3	堀之内
5	1 B91	4.4	4.0	0.7	18.1	堀之内
6	1 C36	4.0	3.9	1.3	22.7	堀之内
7	第112号住居跡	4.1	3.3	1.3	19.5	堀之内
8	0 C90	3.3	3.1	0.8	12.2	堀之内
9	2 A06	3.8	3.2	0.9	13.2	後期
10	2 A06	3.9	3.6	0.8	13.4	後期
11	1 A89	4.5	4.0	1.0	19.8	後期
12	1 A86	3.7	2.7	1.1	13.0	後期
13	1 A71	3.3	3.0	1.1	12.0	不明
14	1 B20	3.8	3.4	1.0	15.3	堀之内
15	2 B26	2.4	2.1	0.7	4.1	後期
16	0 C70	2.6	2.4	0.8	6.2	後期
17	2 A06	2.5	2.3	0.7	4.9	後期
18	1 A61	2.3	2.2	0.8	6.2	不明

有孔土製円盤及び土製円盤 (第199図)

全部で11点出土している。完形品は1点しかなく、他は $\frac{1}{2}$ 以下の破片である。堀之内I式期の第7号住居跡及び第20A号住居跡の覆土から各1点ずつ出土している以外はグリッドの包含層からである。

1～3は4の完形品と同じく2つの孔をもつと思われる。胎土には砂粒を含まない。表裏ともに文様はなく、表面は丁寧に調整されている。2の片側の孔には細い棒状工具でわずかな刺突が加えられている。4は2つの孔をもつ完形品で、胎土・調整は1～3に似通っている。5は $\frac{1}{4}$ しか残存しない。破損部分に2つの孔が認められ、完形であれば十字方向に4つの孔が穿たれていたと思われる。表裏にはともに文様はなく、表面は粗く、胎土には少量の砂粒を含む。断面は平板で厚い。6～11は遺存が悪く、原形を推定しにくい、みな円形を呈すると思われる。片面が平らなものもあり、蓋である可能性もある。6は破損部分に孔の痕跡が認められ、



第199图 有孔土製円盤・土製円盤実測図 (1/2)

片面は棒状工具によって数条の沈線が施されている。胎土・焼成ともに良好。7は棒状工具で渦巻文かあるいは同心円文が施されている。縁辺から中央にかけて次第に厚くなり、片面は平らである。胎土・焼成ともに良好。8は棒状工具で曲線状の沈線文が描かれている。胎土に若干の砂粒が混入する。9はわずかに彎曲している。棒状工具による曲線状の沈線文が施されている。胎土には砂粒が少量混入する。10は約2cmの間隔で孔が穿たれている。片面は無文で平らな面に文様が施されている。胎土・焼成ともに良好。11は表裏ともに平らで、厚みは一定している。半截竹管状工具によって沈線などが施されている。胎土は良好。

6～11はみな縄文時代後期に属すると考えられる。

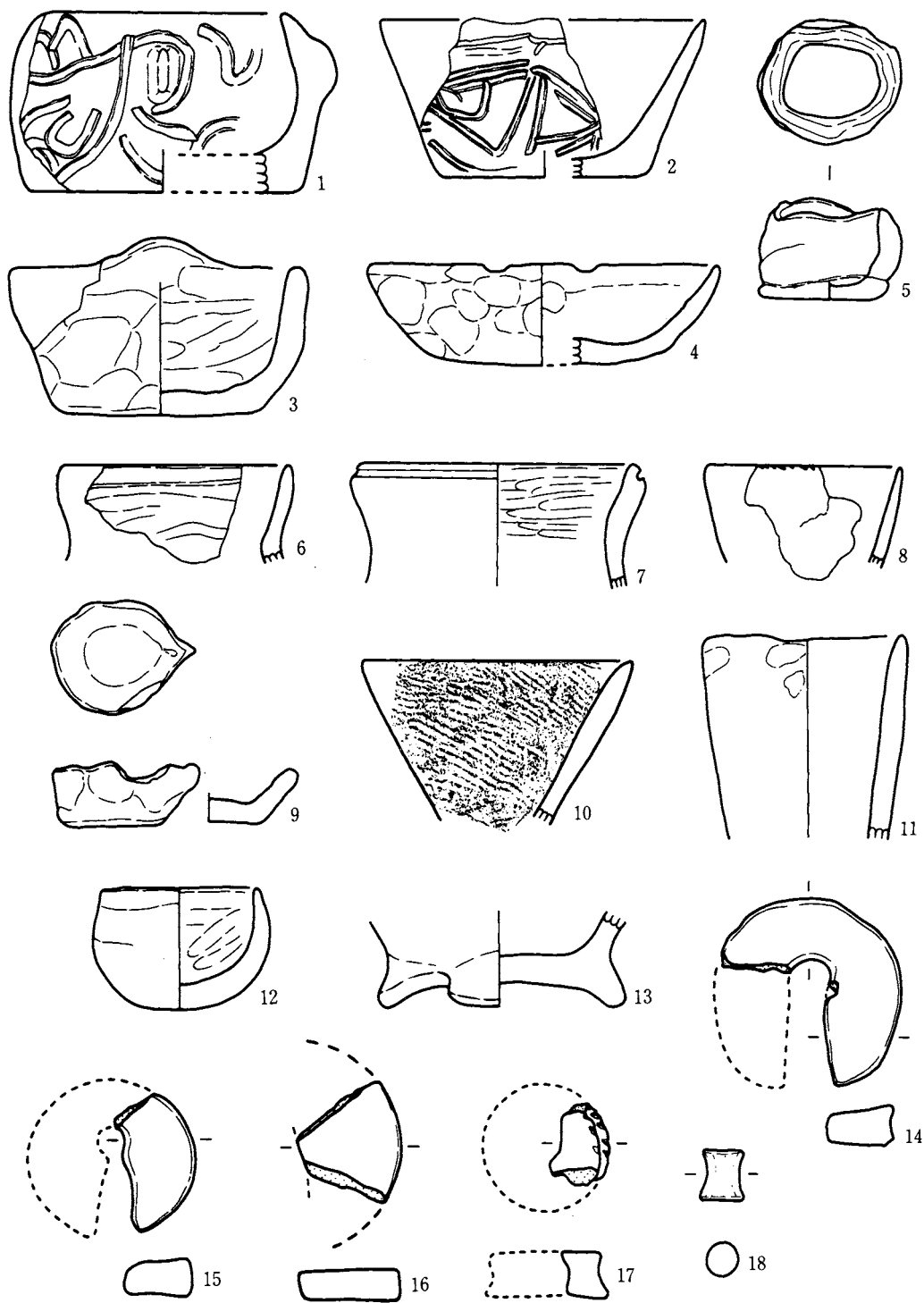
有孔土製円盤、土製円盤

() は推定値

遺物番号	出土位置	直径(cm)	厚さ(cm)	遺度
1	2 B58	(5.4)	1.5	½
2	2 C21	(5.3)	1.3	½
3	第20A号住居跡	(6.2)	1.1	⅓
4	1 A59	3.7	1.3	完形
5	1 A93	(9.6)	1.6	¼
6	2 B58	(9.9)	1.2	¼
7	2 A19	(7.7)	1.2	¼
8	1 A89	—	1.1	—
9	第7号住居跡	(9.2)	1.0	¼
10	1 B27	—	0.8	—
11	2 A39	—	0.8	—

手捏土器 (第200図1～13)

全部で12点出土している。このうち5点が堀之内I式期の住居跡覆土から出土している。1は瘤状の突起が付けられている。破片のため突起は1つしか残存しないが、完形であれば3個乃至4個の突起が付くと思われる。口縁がやや内彎する形態で、文様は細い半截竹管状工具によって乱雑な沈線文が施されている。縄文時代後期に属すると思われる。2は1と同様に細い半截竹管状工具によって重三角文に類似した沈線文を施している。時期は堀之内I式期であろう。3はほぼ全形をとどめ、2単位の波状口縁を呈する。指による粗い調整痕が内外面に残る。時期は不明。4は焼成がよく赤褐色を呈する。外面には指によるおさえの跡が残る。時期は不明。5は完形品である。形は整っておらず粗雑なつくりである。時期は不明。6は口縁部の破片である。若干のくびれをもち、外面には浅く沈線が施されている。時期は不明。7は焼成がよく明赤褐色を呈する。内外面ともによく研磨されている。時期は堀之内I式期であろう。8は口唇に細かな刻目を伴う。器厚は薄く、胎土は良好。時期は堀之内I式期であろう。9は片口を呈し、口縁をわずかに欠損する。時期は不明。10は直線的に開く形態で、底部を欠損している。外面



0 10cm

第200図 手捏土器・土製耳飾実測図 (1/2)

には細いR無節縄文を全面に施す。時期は堀之内I式期であろう。11はへらの様な工具で縦に粗い調整を行っている。時期は堀之内I式期であろう。12は丸底を呈する。内外面の調整は丁寧にされている。時期は堀之内I式期であろう。13は3足の高台がつく底部破片である。内外面の調整はよく、胎土・焼成ともに良好で赤褐色を呈する。この様な底部はめずらしく、手捏土器の範疇には含まれない特殊な土製品であるかもしれない。時期は縄文時代後期に属すると思われる。

手捏土器

() は推定値

遺物番号	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度
1	1 C11	7.2	(7.9)	5.3	½
2	1 B84	(9.7)	(5.1)	4.7	¼
3	1 A78	(8.8)	6.0	5.2	¾
4	2 A08	10.5	(5.5)	3.0	¼
5	2 B17	3.1	—	2.2	完形
6	表採	6.9	—	—	⅛
7	第152号住居跡	8.2	—	—	⅓
8	第20A号住居跡	5.9	—	—	⅓
9	1 C01	4.2	2.9	1.8	完形
10	第18号住居跡	—	—	—	—
11	第10号住居跡	(6.2)	—	—	—
12	第152号住居跡	4.7	—	3.5	⅔
13	1 C57	—	7.4	—	—

土製耳飾 (第200図14~18)

全部で5点出土している。14~16は土製の球状耳飾である。3点とも胎土・焼成は良好で色調は淡赤褐色を呈する。表面は丁寧に調整されている。時期は縄文時代前期後半に属すると考えられる。14は1 A89グリッド、15は1 B97グリッド、16は2 A16グリッドからそれぞれ出土している。17は約¼しか残存していない。円形を呈すると思われ、推定直径は約3.8cmである。縁辺には斜方向の刻目が施される。遺存する部分が少ないため、中央に貫通孔を持つか否かは不明。胎土は良好。1 B64グリッドから出土している。18は鼓状を呈する小型の耳飾である。高さ1.4cm、最小径は1.0cmを計る。貫通孔はない。胎土は良好。1 A86グリッドから出土している。17・18は時期は不明である。

特殊土製品（第201図、第202図 図版68）

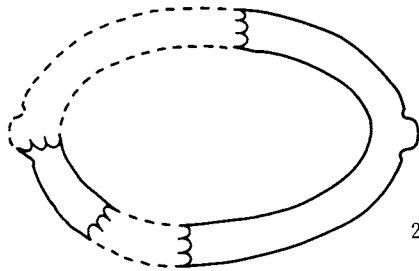
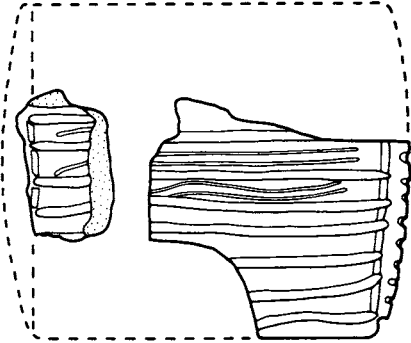
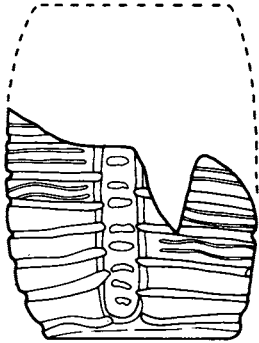
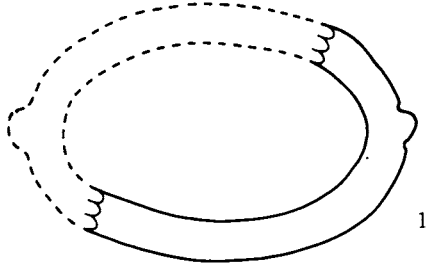
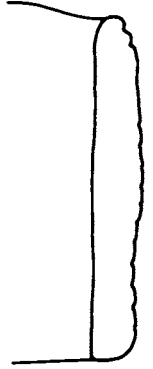
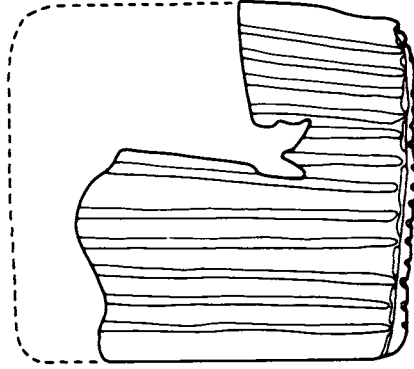
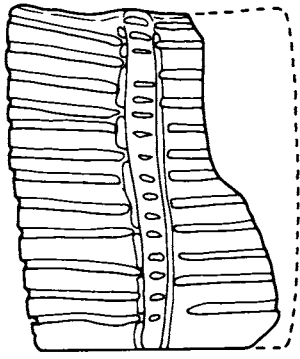
出土した土製品の中に極めて特異な形態と文様をもつ土製品が含まれていた。類例に乏しく、特定の名称は与えられていないようである。全部で11点出土している。

形態は円筒状を呈するが、断面は楕円形で長軸の両端に隆帯が貼付けられるものが多い。外面に施される文様はもっぱら横走沈線に限られている。また内面は無文で、若干の調整が行われる程度である。胎土に砂粒を含むものが多い。焼成はよく、色調は淡褐色乃至淡赤褐色を呈する。時期は胎土及び文様の施文方法から縄文時代後期に属すると考えられる。すべてグリッドの包含層から出土しており、特殊な出土状況を示すものはない。

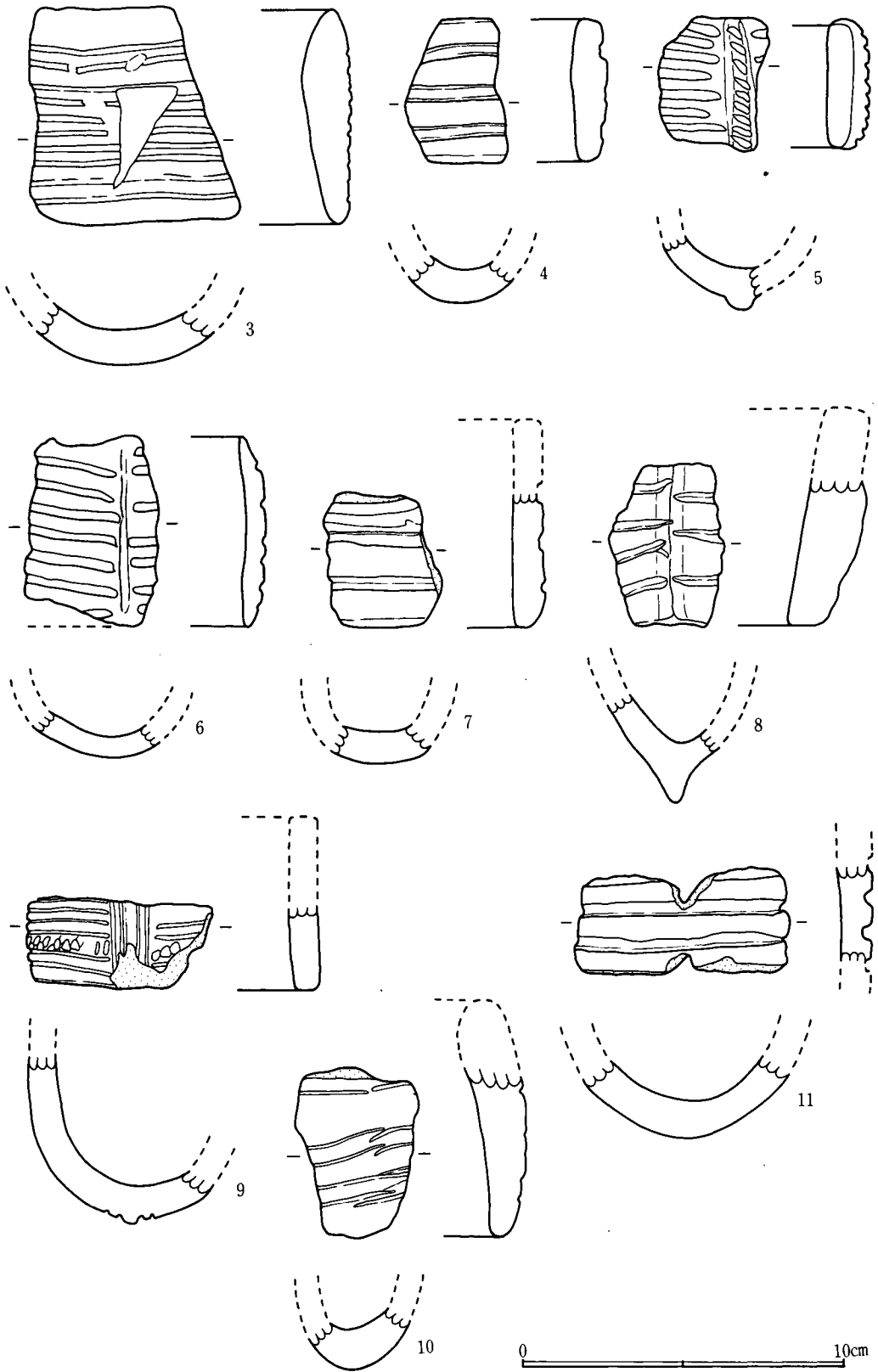
1・2は最も遺存のよい例で、胎土・焼成・施文方法が極めて似通っている。図のように置いた場合が最も安定して置くことが出来、下端は平らになっている。1は約 $\frac{1}{2}$ が残存している。刻目を伴う隆帯が貼付けられ、両脇に沈線が施されている。外面の沈線はほぼ等間隔に横走する。施文工具は太い半截竹管状工具を使用し、沈線は比較的深いものである。残存する部分の高さは10.6cmである。2は1に比べ遺存はよくないが、長軸両端の破片があり、おおよその形態を推定し得る。長軸の長さは約11cm、短軸は約6.7cmを計る。施文の工具及び横走沈線は1と同様だが、2には太い沈線の間細い半截竹管状工具による沈線が施されている。実測図の下端は1と同じく平になる。

3～11はみな小破片で全形を知り得るものはない。3は太い半截竹管状工具によって平行沈線が施される。厚みは一定しない。高さは6.8cm。4は $\frac{1}{3}$ 分割に近い半截竹管状工具による浅い沈線である。高さは4.6cm。5は垂下する隆帯に斜めの刻目が施される。横走する沈線は太い。高さは4.2cm。6は隆帯のかわりに浅い垂下沈線が施されている。横走沈線は竹管状工具によるものである。高さは5.9cm。7は棒状工具による沈線である。8は隆帯状に粘土をつまみあげている。沈線は先端のやや尖った棒状工具による。9は長軸端をふくむやや遺存のよい個体である。LR単節縄文が施されているようだがはっきりしない。沈線は半截竹管状工具によって施されている。10は長軸端の破片と思われるが隆帯も垂下沈線も施されていない。横走する沈線は半截竹管状工具による。11は円形を呈するかもしれない。竹管状工具によって太い横走沈線が施されている。

以上の11点ははじめに記したように、外面に施される文様は横走沈線にほぼ限られており、決して装飾性の高い土製品ではない。施文工具の種類には選択性はないが、文様構成には強い規制がはたらいていると思われ、この土製品の用途に大きく関与していると思われる。類例は乏しく、千葉県佐倉市吉見台遺跡で1点（山岸 1983）、福島県双葉郡大熊町越巻遺跡（大熊町史編纂委員会 1984）で1点類似した土製品が出土している。



第201図 特殊土製品実測図 (1/2)



第202图 特殊土製品実測図 (1/2)

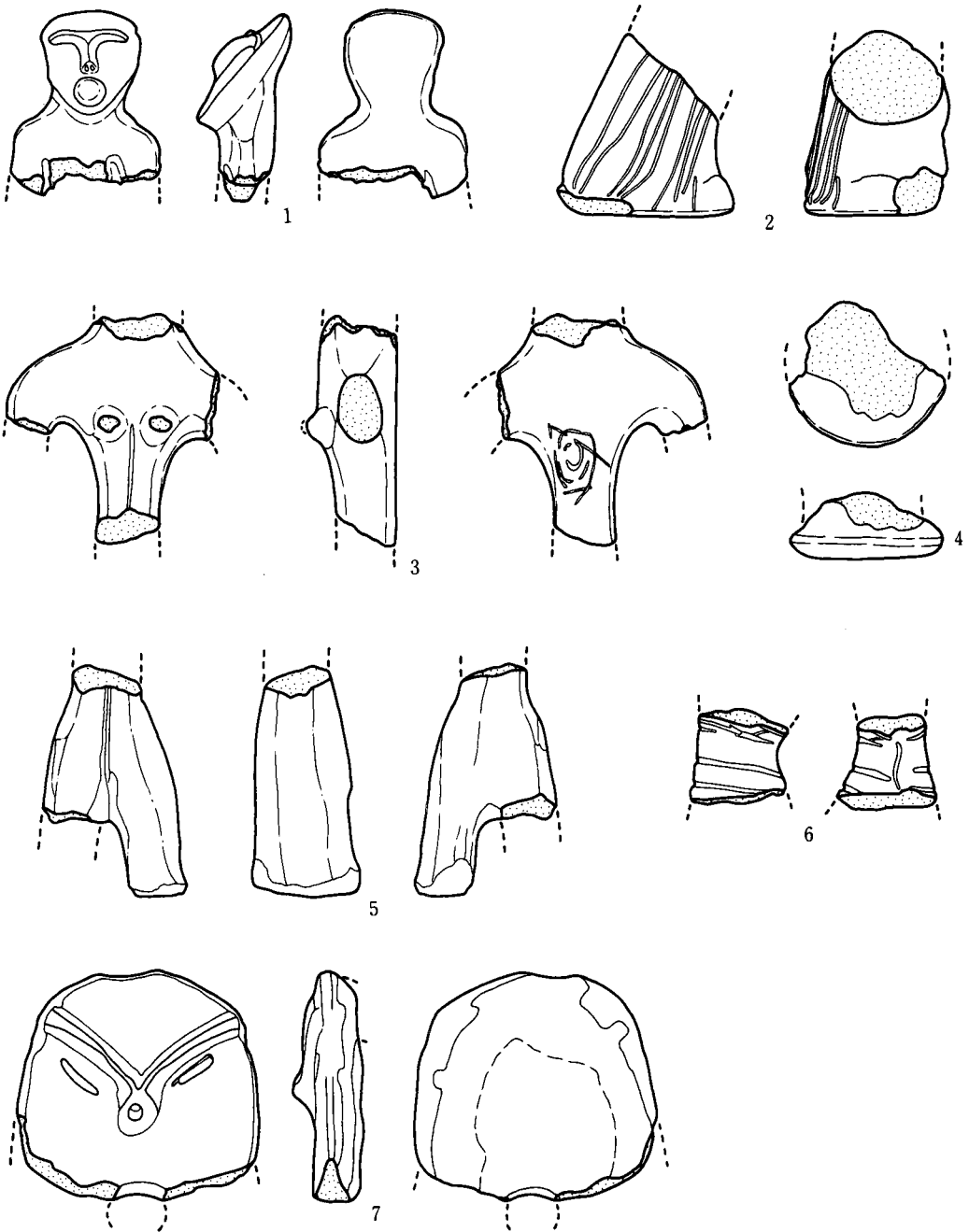
特殊土製品

遺物番号	出土位置	施文工具	文様
1	0 B79・78・71	半截竹管状工具	平行沈線
2	0 B78・79・98・99	半截竹管状工具	平行沈線
3	2 A26	半截竹管状工具	平行沈線
4	2 A08	半截竹管状工具	平行沈線
5	1 C21	棒状工具	平行沈線
6	1 C20	竹管状工具	平行沈線
7	1 A72	竹管状工具	平行沈線
8	1 C03	棒状工具	平行沈線
9	0 B68、1 C00・11	半截竹管状工具	縄文地文? 平行沈線
10	1 C04	半截竹管状工具	平行沈線
11	1 C04	竹管状工具	平行沈線

土偶 (第203図 1～7 図版68)

全部で7点出土している。完形で出土したものはなく、いずれも欠損している。2を除いて、グリッドの包含層から出土しており、特異な出土状況が認められた例はなかった。すべて縄文時代後期の堀之内式期に属すると考えられる。

1は頭部から胸部にかけて遺存している。顔面は平板で、上方を向いている。目と鼻をT字状の隆帯で抽象的に表現しているが、鼻孔だけは小さな刺突によってわざわざ表現している。口は浅い凹みによって表わされている。胎土は比較的良好。1 C20グリッドから出土している。2は大型土偶の右足であろう。重量感に富み、足のうらは平である。細い棒状工具で数条の沈線を施している。表面は粗く、胎土には砂粒が目立つ。第20A号住居跡の覆土から出土している。3は胴部のみ遺存し、わずかに右腕の一部が残存している。また左右の乳房の先端が若干摩滅している。左右の乳房の中間から浅い沈線が垂下し、背面には細い棒状工具による浅い沈線文が施されている。胎土・焼成ともに良好。0 C71グリッドから出土している。4は足の破片である。左右のどちらであるかは不明。胎土には若干の砂粒が含まれる。2 B04グリッドから出土している。5は胴部及び脚部である。右足を欠いている。へら状工具で粗く削って形を整えている。中心に浅い沈線が施される以外に文様はない。胎土・焼成ともに良好。1 C92グリッドから出土している。6は脚部と思われるが、左右のどちらであるのかは不明。半截竹管状工具で沈線を施している。胎土は良好。2 B12グリッドから出土している。7は立体観に欠ける平板な顔面で、眉毛と鼻がV字状の隆帯によって表現されている。目は沈線で描かれ、隆帯に沿って吊り上がっており、口はV字状の隆帯の先端に施した刺突によって表わされている。後頭部は粘土紐が逆U字状に貼り付けられていたと思われるが、剥落している。遺存部分の下端には貫通孔が伴うと思われる。胎土・焼成ともに良好。1 C21グリッドから出土している。



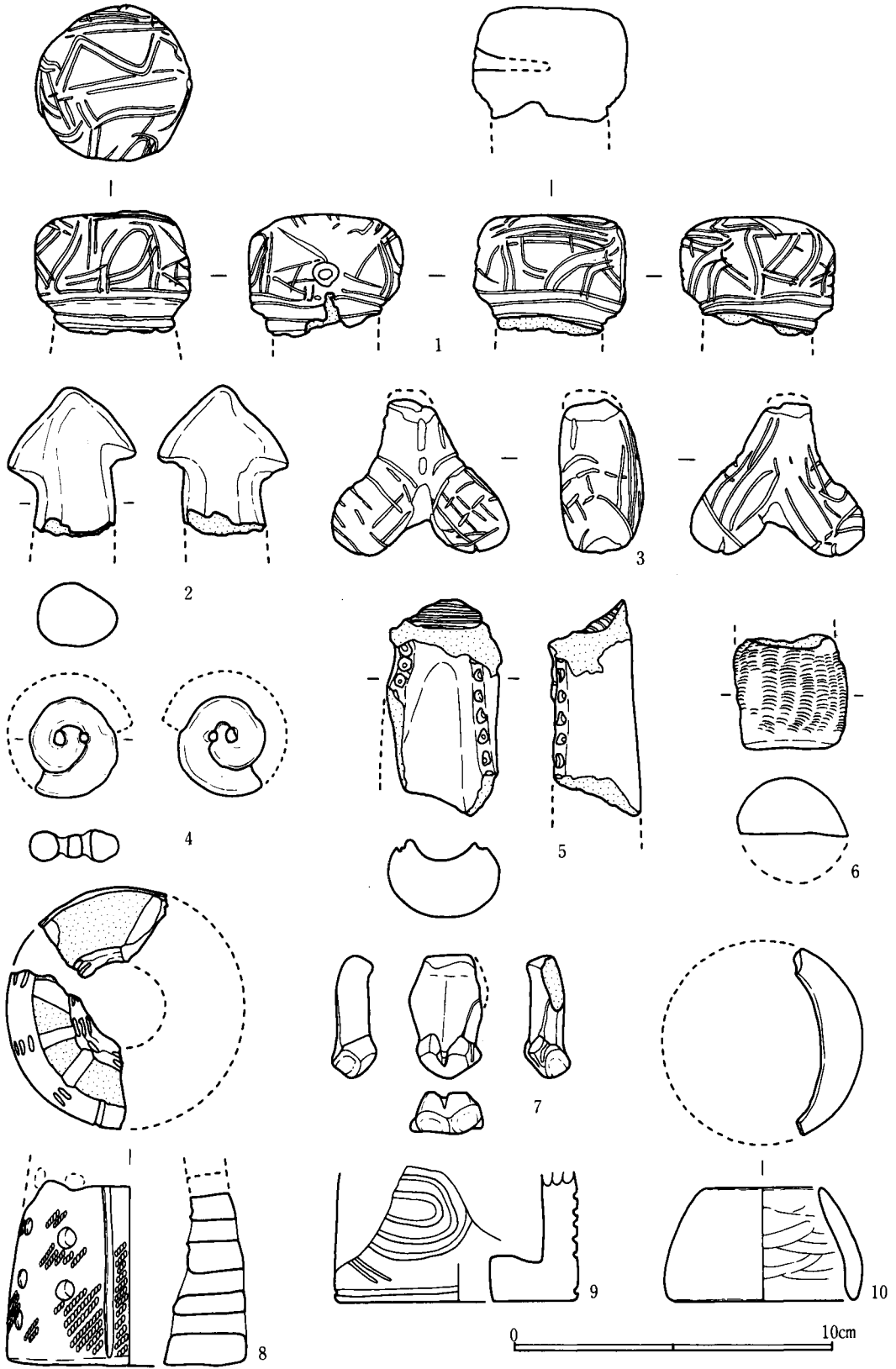
0 10cm

第203图 土偶实测图 (1/2)

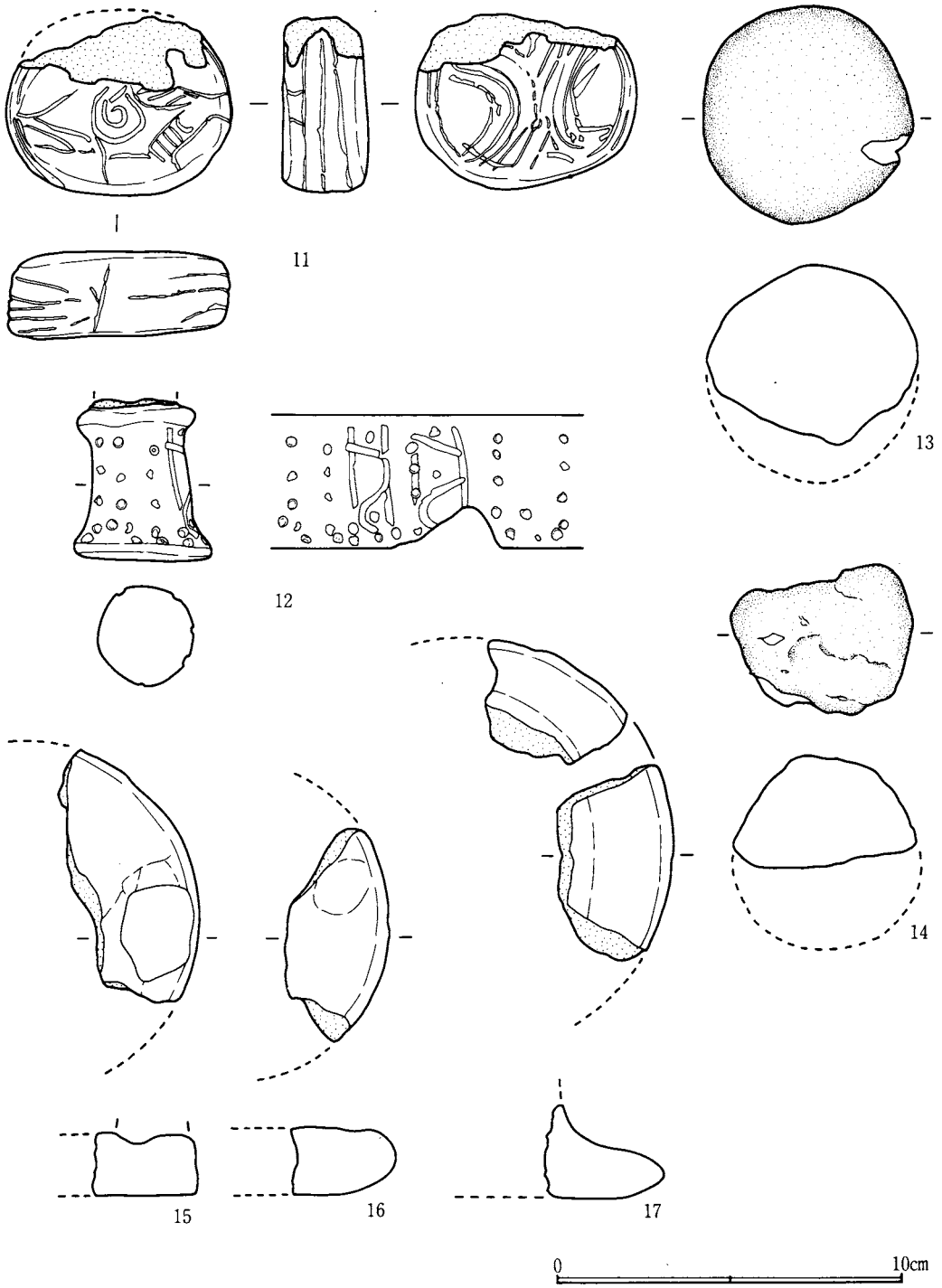
その他の土製品（第204図、第205図、第206図 図版68）

全部で19点出土している。

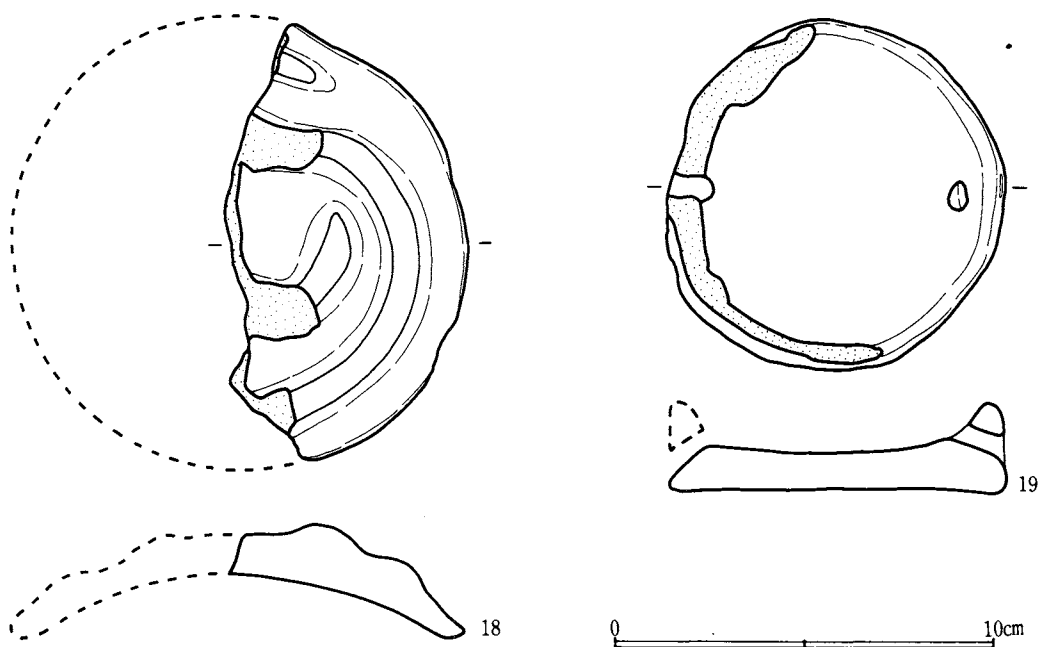
1は石棒状の土製品である。全面に半截竹管状工具による沈線文が施される。文様は単位を構成しない乱雑なもので曲線やジグザグ状の文様を主体とする。側面に貫通しない小孔が穿たれている。胎土・焼成ともに良好。時期は上端の文様から堀之内I式期と考えられる。2 C12グリッドから出土している。2は蛇の頭部を思わせる土製品である。あるいは男根のデフォルメされたものかもしれない。表面は若干研磨され、文様はまったく施されていない。胎土に砂粒を若干含み、全体に黒褐色を呈する。時期は不明。2 C50グリッドから出土している。3は三叉状の土製品である。男性の陰囊を模したものととも考えられる。実測図の上端をわずかに欠損している。細い棒状工具で格子状に沈線を施している。胎土・焼成ともに良好。時期は縄文時代後期と思われる。1 C34グリッドから出土している。4は粘土紐を渦巻状にした土製品である。欠損の状態から点線の部分まで粘土紐が巻かれていたと思われる。中心に2つの貫通孔がある。胎土・焼成ともに良好。時期は不明。0 B79グリッドから出土している。5は動物の下顎骨のような土製品である。実測図の上端に細く浅い沈線が5本施されている。左右の稜線上には竹管状工具による連続した刺突が加えられ、あたかも歯列のような観を呈する。表面は研磨され滑らかである。下端は末広がりになるようだがどの様な形状となるかは不明である。胎土・焼成ともに良好。時期は不明。1 C18グリッドから出土している。6は円柱状土製品である。上端から上がどのような形態かは不明。表面には爪の先で縦方向に連続した爪形文が施されている。胎土は比較的よいが焼成はあまりよくない。時期は不明。1 C00グリッドから出土している。7は何らかの動物を模した土製品である。全体に若干摩耗している。頭部は三角形を呈し、中央に切れ込みがある。尾部がわずかにそり上っている。胎土は良好。第20A号住居跡の覆土から出土している。8は中空の円筒状土製品である。破片で2点あるが接合しない。底径は約7.5cmで上に行くに従って径が小さくなる。底面は平で安定している。直径6mmの貫通孔が縦列に並び、地文としてLR単節縄文が施されている。1ヶ所沈線が垂下する。胎土・焼成ともに良く、器面は褐色を呈する。時期は縄文時代後期と思われる。1 C22グリッドから出土している。9は8に類似した円筒状土製品である。底部の $\frac{1}{2}$ 程度が残存する。棒状工具と半截竹管状工具の二種類を使い沈線文を施している。底部からやや上に沈線がめぐり、内外面ともに丁寧に調整されている。胎土・焼成は良好。時期は堀之内式期と思われる。0 C90グリッドから出土している。10はリング状の土製品である。 $\frac{2}{3}$ が欠損しており、上部の直径が約3.8cm、下部の直径が約6cmと推定される。外面の調整は良く、滑らかであるが、内面は細いへら状の工具で粗い調整を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良好。時期は不明。0 C84グリッドから出土している。11は土版であろう。一部欠損しているが形は楕円形と思われる。表裏ともに中央がややへこんでいる。文様は細い棒状工具で浅く施した沈線文である。ほ



第204図 その他土製品実測図 (1/2)



第205図 その他土製品実測図 (1/2)



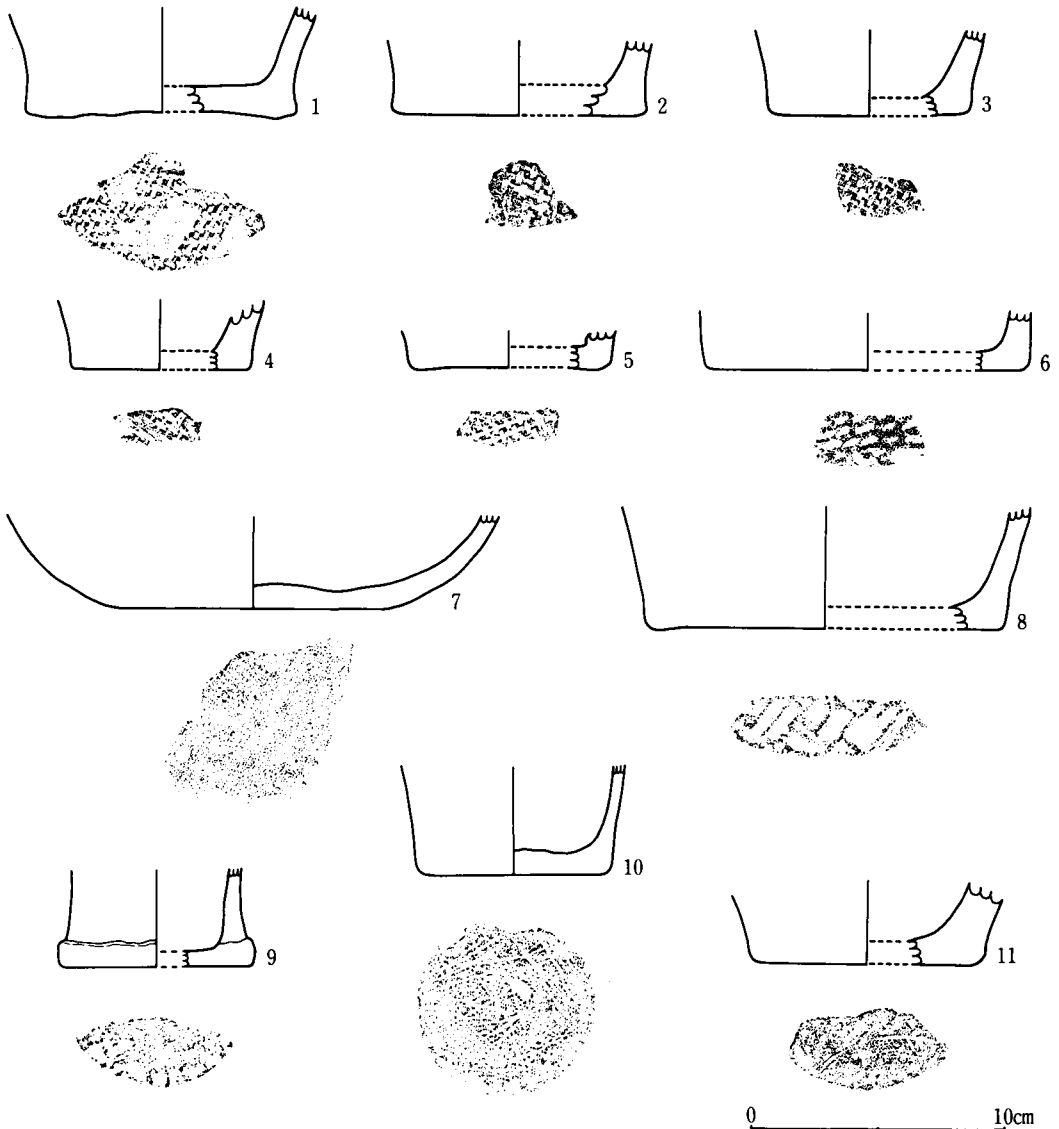
第206図 その他土製品実測図 (1/2)

ほ全面に施文されている。胎土・焼成は良好。時期は縄文時代晩期か。2 B01グリッドから出土している。12は糸巻状の土製品であるが上端は欠損しどのような形態となるのかは不明。沈線文を施したのち、縦列に刺突を加えている。胎土・焼成は良好。時期は縄文時代後期と思われる。2 C00グリッドから出土している。13・14は球状土製品である。粘土を球状にして焼成したもので、2点とも胎土はやや粗く、焼成があまりよくない。表面の調整は雑で滑らかな球状を呈するわけではない。表面は黒褐色を呈する。時期は堀之内式期と思われる。13は第152号住居跡の覆土から、14は0 C32グリッドから出土している。15～17は円盤状を呈すると思われる。土製円盤とは趣を異にする。3点は厚みがあり、表面の調整は粗い。胎土・焼成は比較的良い。時期は不明。15は1 B26グリッドから、16は1 A88グリッドから、17は2 A14グリッドからそれぞれ出土している。18は強く彎曲する蓋状の土製品である。形態は円形を呈するようだが若干ゆがんでおり、まったくの円形ではなかろう。全面よく研磨され、上面は太い隆帯が渦巻状に貼付けられている。土製蓋とは異なり、縁辺は薄く、把手が存在した痕跡はない。胎土・焼成は良好。時期は堀之内式期と思われる。2 B51グリッドから出土している。19は土器の底部を加工したものである。一部欠損している。直径5mmの孔が斜めに穿孔されている。蓋として使用されたものか。時期は堀之内式期と思われる。2 B20グリッドから出土している。

網代痕 (第207図)

底部に網代の痕跡をとどめる土器はわずか9点である。すべて破片で出土している。堀之内I式に属するものであろう。多量に堀之内I式土器を出土したにもかかわらず、これほど網代痕をとどめる土器が少ないことは、特徴的である。

1～5・7は経が「1本越え、2本潜り、1本送り」、緯が「2本越え、2本潜り、1本送り」に編まれている。6は経・緯ともに「1本越え、1本潜り、1本送り」と思われる。8は経・緯ともに「2本越え、2本潜り、1本送り」に編まれている。9は極めて遺存が悪いが6と同様の編み方であろう。10は網代ではなく、先端の鋭い工具で乱雑な沈線が施されている。11は木葉痕であるが不明瞭である。



第207図 土器底部網代拓影図 (1/3)

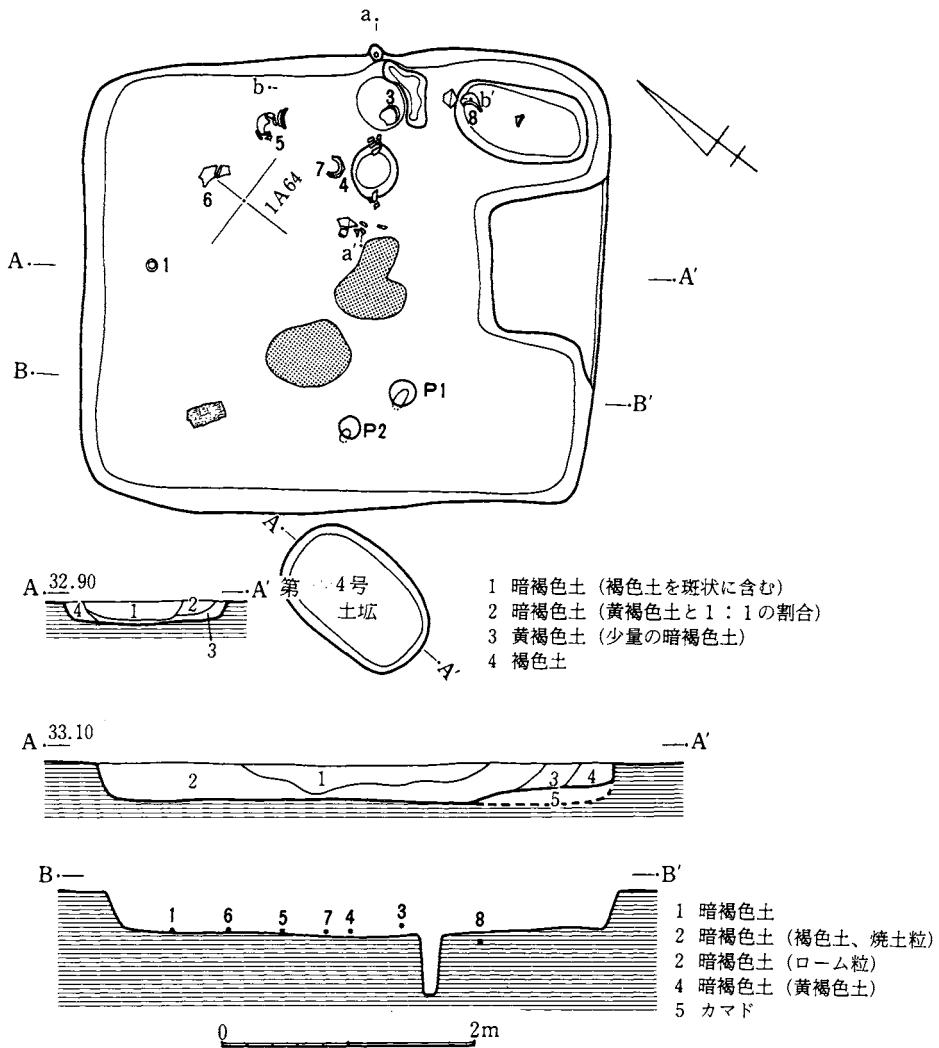
3. 古墳・歴史時代

1) 住居跡

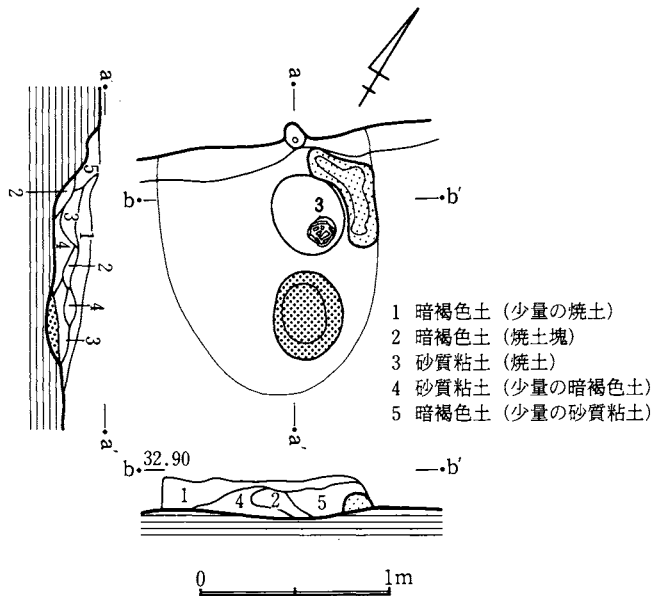
第1号住居跡 (第208~210図 図版84)

台地平坦部西側、調査区の最西端に位置し、グリッドは1 A 64他である。

遺構 北西壁3.38m、北東壁4.13mあり、面積14.08m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁中央に位置しN56°Eである。壁は四辺ともやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面よりの壁高は30cmである。南東壁に巾1.20m、長さ0.98mのスロープ状のものがあ



第208図 第1号住居跡・第4号土坑実測図 (1/60)

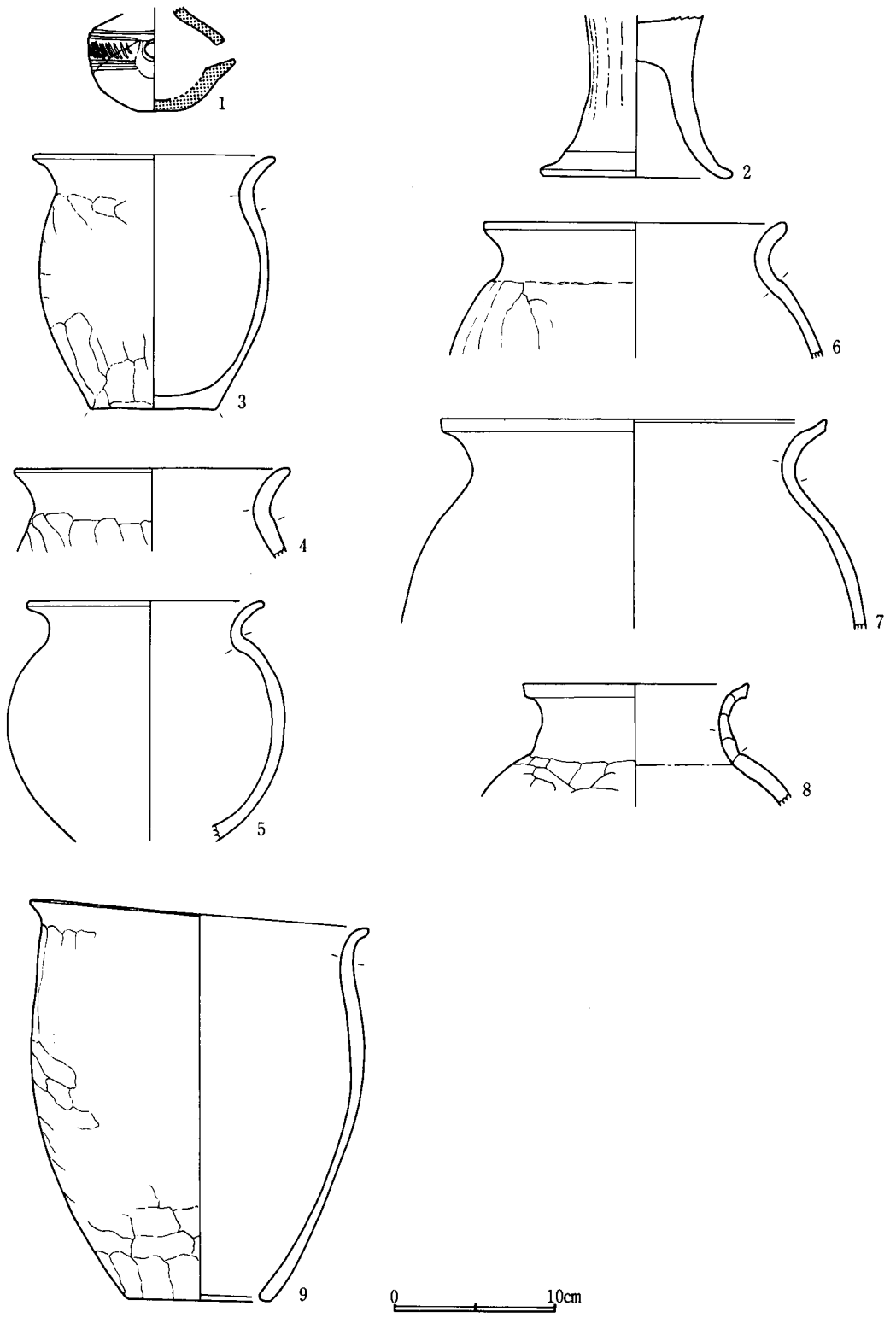


第209図 第1号住居跡カマド実測図 (1/40)

り、これはロームと暗褐色土を床面に厚さ約10cm程貼ったものであった。床面が固いことから住居構築後、ある程度の期間を経た後に構築されたものと推定され、用途としては出入口でもあろうか。壁溝は検出されなかった。床面は比較的小さな凹凸が激しく、壁前30cm前後は軟弱で中央部分は固かった。柱穴は2個検出され、位置的にはカマドの対面にある。P₁は深さ0.46m、P₂は深さ0.22mありやや傾斜をもっている。貯蔵穴は、東コーナーにあり、1.08×0.60mの隅丸長方形を呈し、深さ0.28mである。中からは8の甕の破片が出土している。

カマド 北東壁中央のカマドは、壁に約10cm程の浅い掘り込みが見られ、袖は砂質粘土をもって構築し、火床部は径約40cm程の浅い播鉢状を呈する。右袖のみが検出された。中から3の甕が出土している。

遺物出土状況 土層堆積状況は典型的なレンズ状を示す。焼土・炭化物がやや中央よりに床面直上に検出された。遺物は、甕、高坏、甕、甕が出土している。3はカマド内、8は貯蔵穴、他は床直上である。1は甕で頸部より上が欠損しているが、体部はニカワによりヒビ割れの補修が認められる。3は底部の大部分が欠損しているが完形に近い。9は覆土内である。他は破片である。



第210图 第1号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第1号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
1-1	礎	胴部のみ	—	— (6.5) 胴最大径 8.3	—	—	注口12.3ミリ仰角20° 部下半回転ヘラ削り	胴部欠損接合にニカフ 使用 胴部上面自然釉
1-2	高 坏	脚部のみ	—	— (9.8) 裾径 12.0	暗褐色-褐色 砂粒多 良好	小	脚部縦位ヘラ削り 裾部内 外面横ナデ 坏内面丁寧な ミガキ	
1-3	甕	完 完 %	—	15.0 7.6 15.5	赤褐色-黒褐色 小砂粒少 良好	—	口縁部横ナデされ胴上半斜 位、中央横位、下半幅広横 位ヘラ削り 底部ヘラ削り 内面ナデ	胴部上半以下2次火熱 により剥離激しい 外 面全面スス付着
1-4	甕	% — —	—	(17.0) — (5.0)	褐色-褐色 粒少 良好	小砂	口縁部横ナデ 外面縦位、 斜位ヘラ削り	
1-5	甕	完 — 完	—	14.6 — (14.1)	暗褐色-褐色 砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ 胴上半~下 半斜位ヘラ削り不明瞭 内 面ナデ	外面剥離状を呈す
1-6	甕	% — —	—	(19.0) — (8.2)	褐色-褐色 粒少 良好	小砂	胴部外面縦位ヘラ削り後口 縁部横ナデ	ヘラ削り痕不明瞭
1-7	甕	% — —	—	(24.0) — (7.5)	褐色-褐色 粒少 良好	小砂	口唇をつまんで口縁部横ナ デ 胴部内外面ナデ	
1-8	甕	% — —	—	15.0 — (6.7)	赤褐色-赤褐色 小砂粒少 良好	—	口唇部をつまんで口縁部横 ナデ 頸部部分的に肥厚 外面上端縦位、上半斜位横 位ヘラ削り 内面ナデ	口縁~頸部に接合痕明 瞭に認められる
1-9	甗	% % %	—	(20.7) 8.6 23.4	暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好	—	口縁部横ナデ後胴部外面上 半縦位、下半斜位ヘラ削り 内面丁寧なナデ	
1-10	支 脚		長さ 径	(14.2) 6.6	褐色 小砂粒多 良好	—	上端のみ	

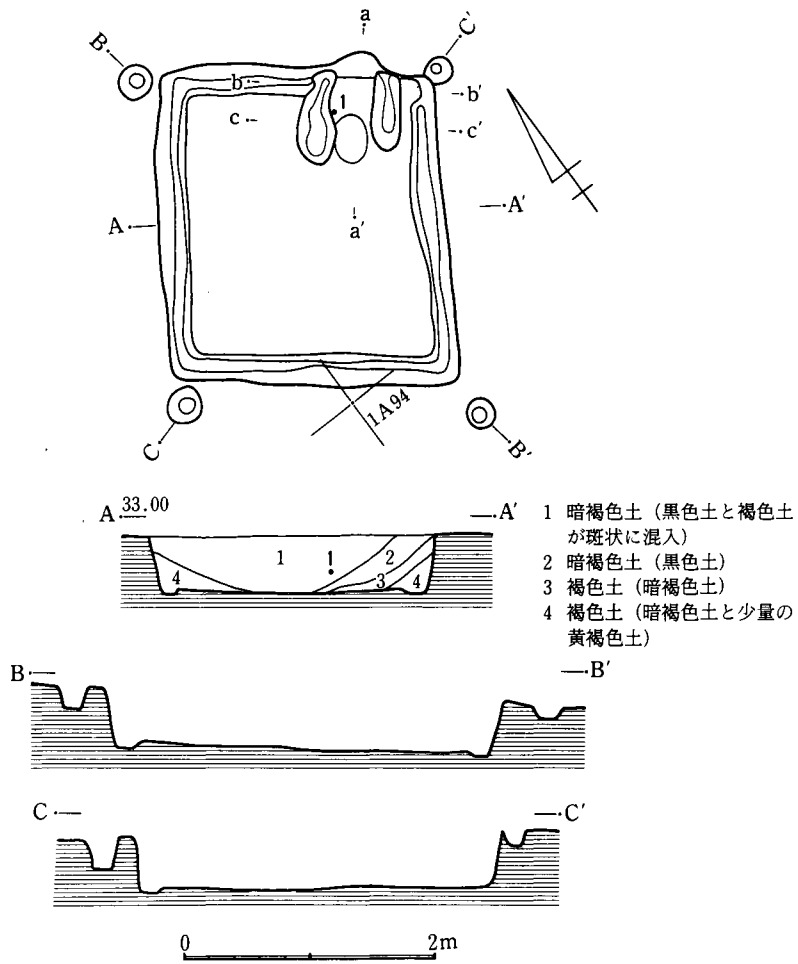
第2号住居跡 (第211~213区 図版85)

台地平坦部の南西斜面寄り、調査区の西端に位置し、グリッドは1A84他である。

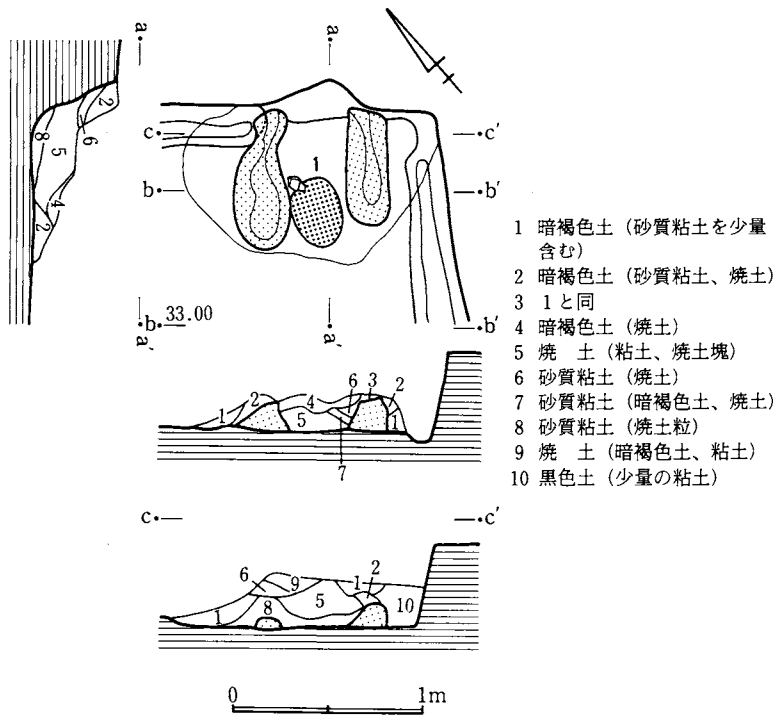
遺構 北西壁2.45m、北東壁2.18mあり、面積5.61㎡で、方形の平面形を呈し四隅にピットをもつ竪穴住居跡である。カマドは北東壁右寄りに位置し、N34°Eである。壁は四辺ともほぼ垂直に立ち上がり、0.45mを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約8cm前後である。床面は小さな凹が少し見られる程度でほぼ平坦である。柱穴は住居外の四隅に検出され、径約25cm、深さ約20cm前後を計る。柱穴の配置、規模等から本住居跡に伴うものである。貯蔵穴は検出されていない。

カマド 北東壁右寄りに位置し遺存状態は良好であった。壁に約20cm程の浅い掘り込みが見られ、袖は砂質粘土をもって構築し、火床部は径40×26cm程の浅い播鉢状を呈する。煙道はほぼ垂直に立ち上がる。カマド内より完形品に近い坏1が出土している。

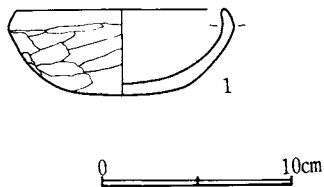
遺物出土状況 土層堆積状況は典型的なレンズ状を示す。遺物は坏が出土している。1はカマド内である。他に土製支脚の小片も出土している。



第211図 第2号住居跡実測図 (1/60)



第212図 第2号住居跡カマド実測図 (1/40)



第213図 第2号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

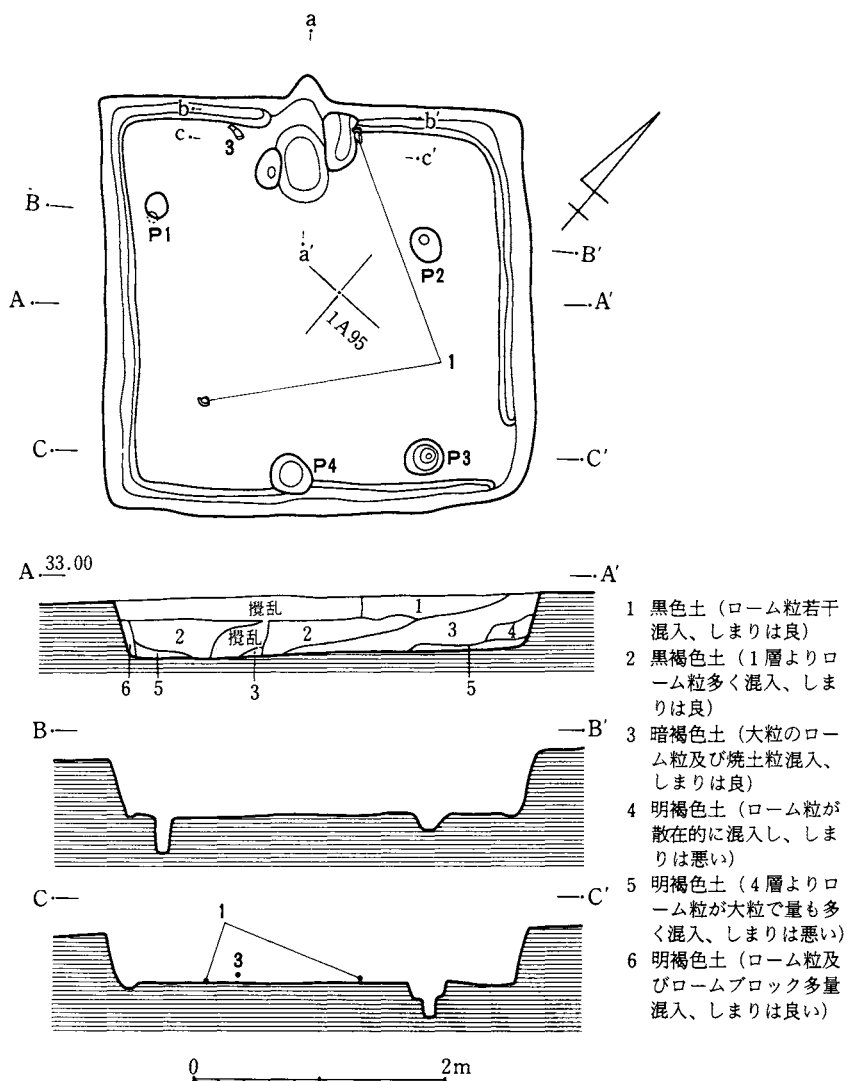
第2号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□ 底 体	法 量 cm ()は推定	□ 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
2-1	坏		4/5 5/5 4/5		10.8 — 4.4 横径 11.8	灰褐色-暗褐色 小砂粒少 好	やや良	口縁部内外面横ナデ 外面横位ヘラ削り 面ミガキ 体部 体部内	

第3号住居跡 (第214~216図 図版85)

台地平坦部西側、調査区西端に位置し、グリッドは1 A 95他である。

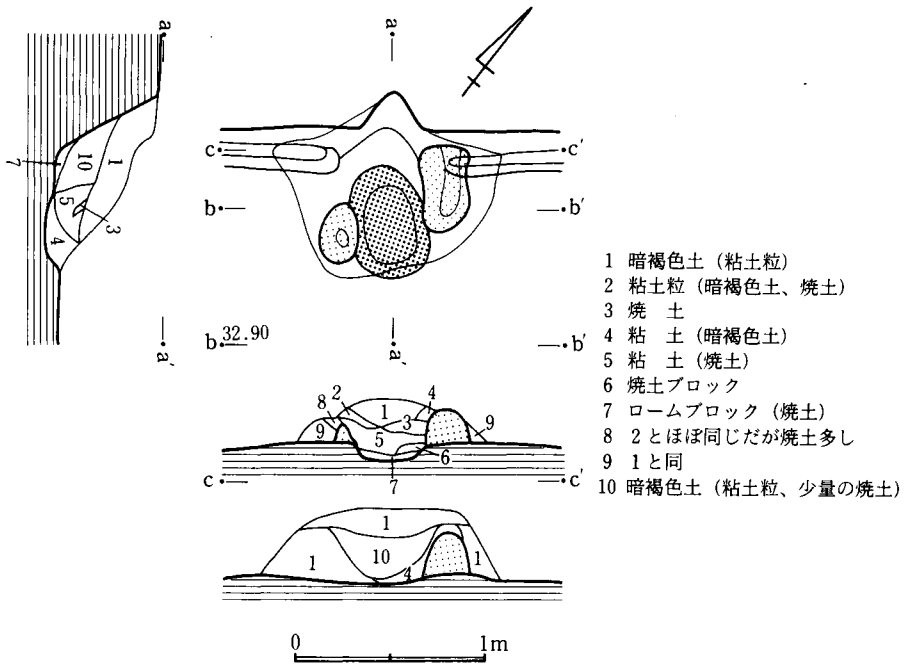
遺構 南西壁3.20m、北西壁3.35mあり、面積10.74㎡で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁の中央に位置しN40°Wである。壁は四辺ともやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面よりの壁高は約45cmである。壁溝はカマドおよび東隅を除いて全周し、巾約15cm、深さ約5cmとほぼ一定している。柱穴は4個検出され、P₁~P₃は南隅を除いて各コーナーにあり、P₄はカマドの対面にある。床面は非常に堅緻である。



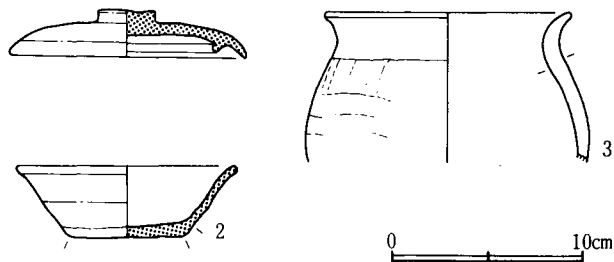
第214図 第3号住居跡実測図 (1/60)

カマド 北西壁中央のカマドは、壁に約20cmほど掘り込みが認められ、袖は砂質粘土をもって構築し、火床部は60×40cm程の浅い楕円状を呈する。煙道部は緩傾斜をもって立ち上がる。カマドは壁溝を掘った後に構築されたことが袖部の調査から判明した。

遺物出土状況 土層堆積状況は攪乱が相当認められるが、典型的なレンズ状の自然堆積である。遺物は須恵器蓋、坏と甕である。1・3はほぼ床直である。1はカマド袖部と床面との接合でほぼ完形になる。



第215図 第3号住居跡カマド実測図 (1/40)



第216図 第3号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第3号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm	口 径 底 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
3-1	蓋		完 — 完		12.5 — 2.4 9.2	青灰色—青灰色 小砂粒含む	良好	頂部に偏平紐が付くヘラ 削り痕なし	須恵器
3-2	坏		1/6 完 1/6		(11.6) 6.0 3.7	青灰色—青灰色 小砂粒多	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	須恵器
3-3	甕		3/6 — —		13.0 — (7.5)	赤褐色—黒褐色 小砂粒少	良好	胴部上半縦位後横位ヘラ削り 後口縁部横ナデ	内外面共に剝離激しく ヘラ削り痕不明瞭

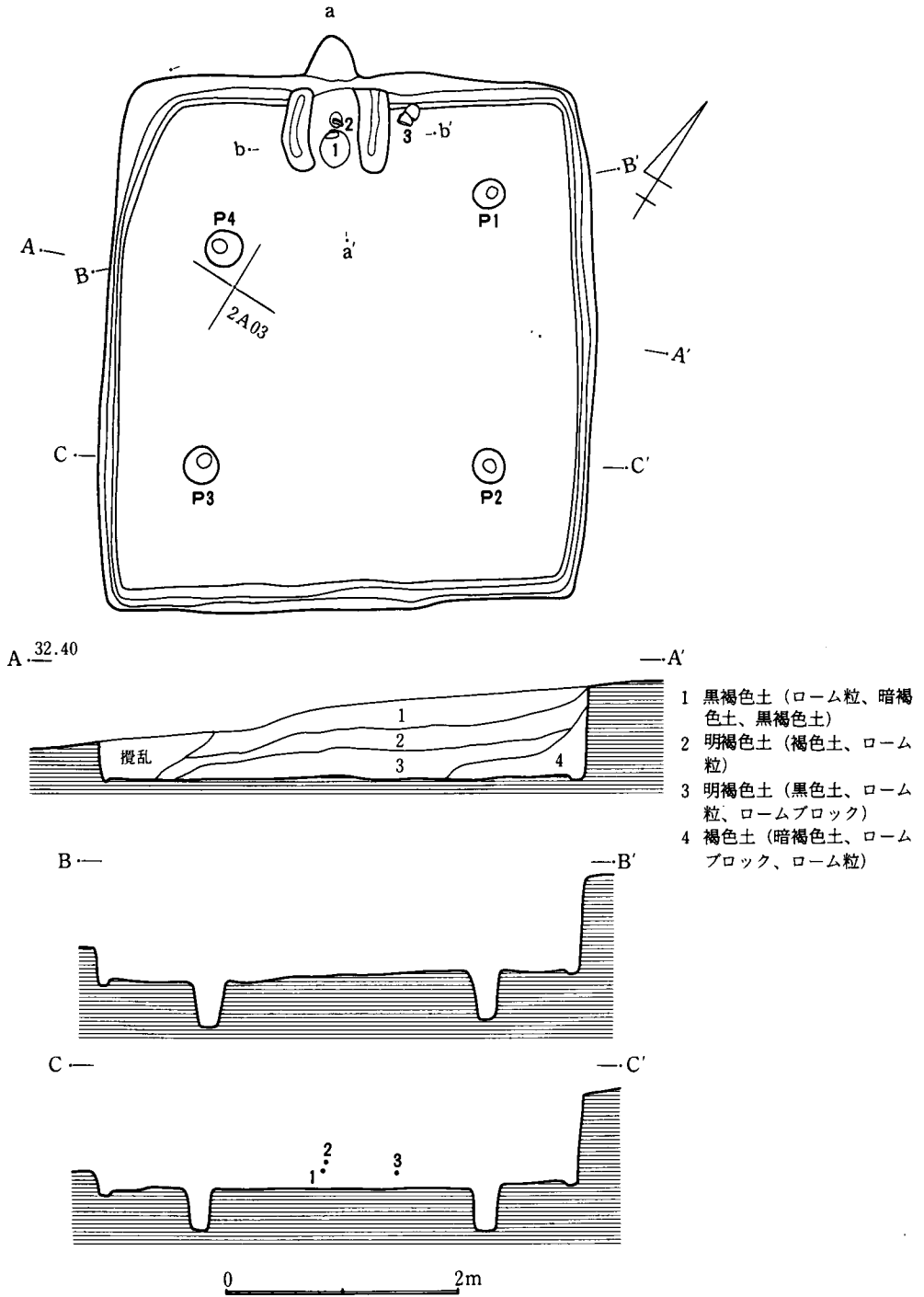
第6号住居跡（第217～219図 図版86）

台地南西端の緩傾斜面、調査区西端に位置し、グリッドは2 A.03他である。第7号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。

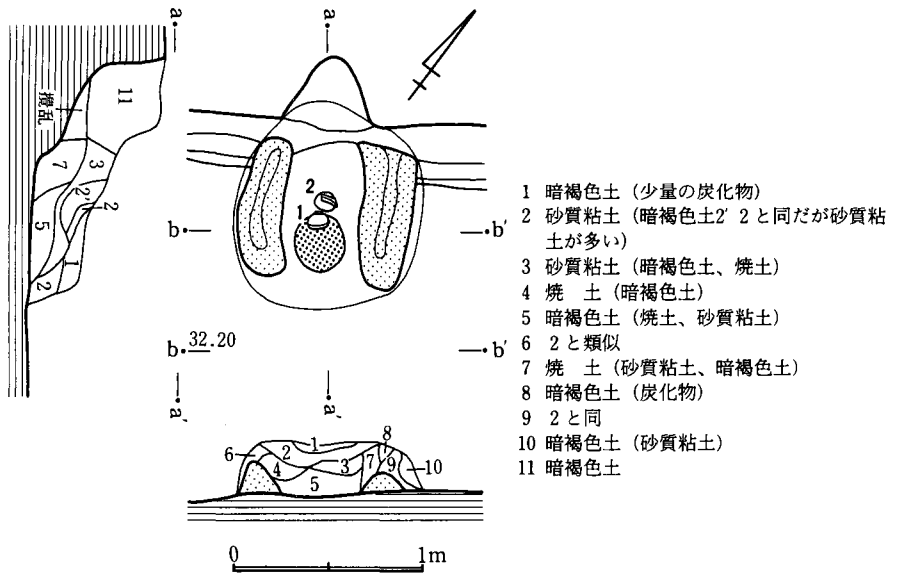
遺構 南西壁4.55m、北西壁3.95mあり、面積18.61m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN30°Wである。壁は四辺とも垂直に立ち上がり、確認面から北西壁83cm、北東壁72cm、南東壁34cm、南西壁12cmあり斜面上の立地を良く表わしている。壁溝は、巾約10cm、深さ約5cmあり、カマドを除いて全周するが、西コーナーがやや内側を回る。床面は、平坦で全体的に堅緻である。柱穴は4個検出され、それぞれ対角線上に位置するが、P₄のみはやや不規則であった。

カマド 北西壁中央のカマドは、壁に約30cm程の掘り込みが見られ、袖は砂質粘土をもって構築し、火床部は径30cm程の浅い播鉢状を呈する。カマド内より1・2が出土している。

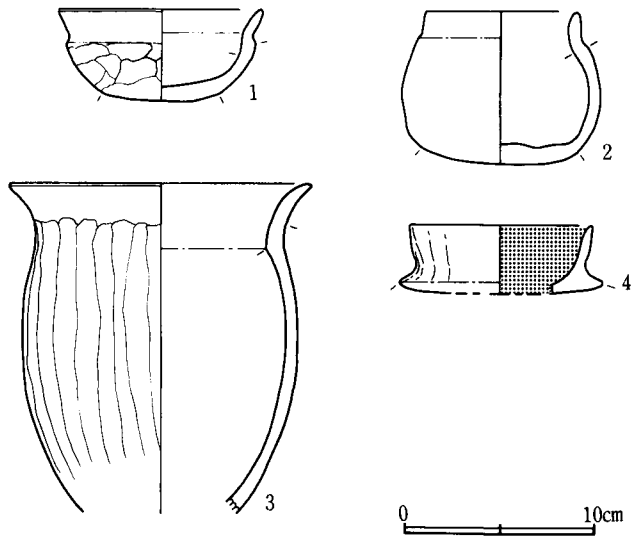
遺物出土状況 土層堆積は一部攪乱されているがレンズ状を示す自然堆積である。遺物は坏、埴、甕、異形土器であるが、1の坏、2の埴は完形でカマド内よりの出土である。3は覆土中からの出土である。また、覆土中から軽石1点も出土している。



第217図 第6号住居跡実測図 (1/60)



第218図 第6号住居跡カマド実測図 (1/40)



第219図 第6号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第6号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体() は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
6-1	坏	完 完 完			10.8 6.1 4.6	灰褐色-褐色 砂粒少	小 良好	体部横位ヘラ削り後口縁部 横ナデ 底部ヘラ削り 体 部内面ナデ	体部外面剝離激しい
6-2	埴	完 完 完	胴最大径		7.9 8.0 10.3	褐色-褐色 粒少	小砂 良好	口縁部横ナデ 体部底部ヘ ラ削り後外面ナデ 内面体 部横ナデ底部ナデ	
6-3	甕	完 一 %	胴最大径		16.0 — (16.9) 14.5	褐色-褐色 粒少	小砂 良好	胴最大径を中央にもち外面 縦位ヘラ削り後口縁部横ナ デ 胴下半外面ナデ 内面 ナデ	胴部内面やや剝離痕あり
6-4	異形土器	1/ 2/ %			(9.6) (10.6) 3.6	内黒-灰褐色 砂粒少	小 良好	体部縦位ヘラ削り後ナデ 底部丁寧なナデ 内面丁寧 にミガキ	内黒

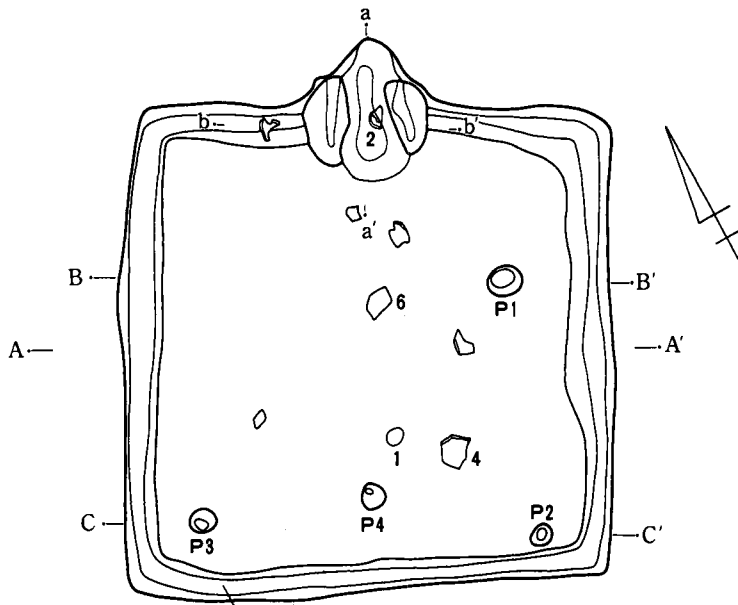
第8号住居跡（第220～222図 図版86）

台地南西端の緩傾斜面、調査区西側に位置し、グリッドは1 A13他である。第9号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。

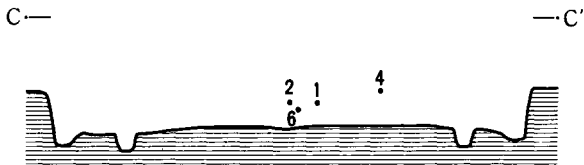
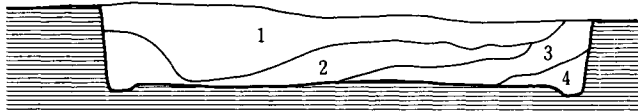
遺構 北西壁3.88m、北東壁3.82mあり、面積14.81㎡で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁中央に位置しN28°Eである。壁は四辺ともに垂直に立ち上がり、確認面から北東壁57cm、南東壁65cm、南西壁17cm、北西壁67cmあり斜面上の立地を良く表わしている。壁溝は巾約25cm、深さ約10cmあり比較的広い。床面は平坦で中央とカマド前付近が固く、周辺部は比較的軟弱である。柱穴は4個検出され、P₁～P₃はほぼ対角線上にあるが、北隅には検出されなかった。P₄はカマドの対面にある。柱穴は浅い。

カマド 北東壁中央のカマドは遺存状態が良好である。カマド構築方法としては、壁外へやや方形の掘り込みを行い、その後に煙道部を掘り込んでいく。壁外へは約50cm程の掘り込みになる。袖は方形に掘り込まれた部分から砂質粘土の袖が始まる。カマド内からほぼ完形の2の坏が出土している。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積である。遺物としては、坏、皿、甕、甑が出土している。2はカマド内より、他は覆土中からのものである。また、不明鉄製品の小破片も覆土中より出土している。



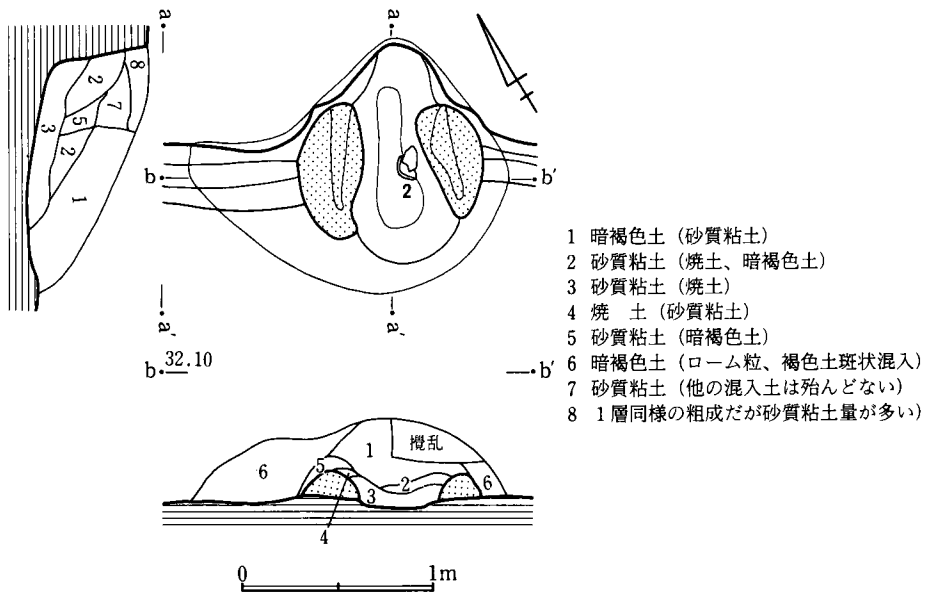
A. 32.20



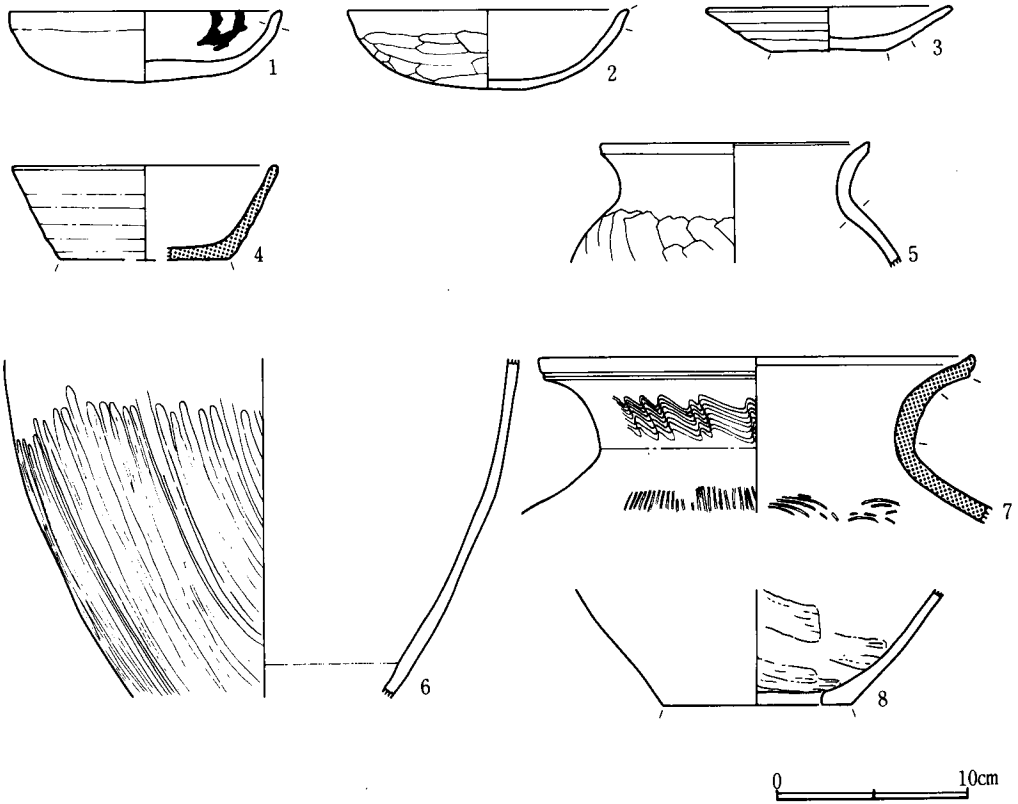
- 1 暗褐色土と褐色土斑状混入
(ローム粒)
- 2 褐色土(ローム粒、少量の
ロームブロック)
- 3 暗褐色土と褐色土斑状混入
(1層と類似するが褐色土
の量が多くロームブロッ
クが点在する)
- 4 暗褐色土

0 2m

第220図 第8号住居跡実測図 (1/60)



第221図 第8号住居跡カマド実測図 (1/40)



第222図 第8号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第8号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	胎土 器高	色調 内-外 胎土 焼成	成形・調整	備考
8-1	坏	完 完 完	14.3 — 3.6	14.3 — 3.6	暗褐色 暗褐色 小砂粒少 良好	口縁部内外面横ナデ 内外 面丁寧なナデ	内面スス付着 油煙1 ヶ所あり、口唇部破損 多い
8-2	坏	% % %	14.9 — 4.1	14.9 — 4.1	明褐色-褐色 小 砂粒少 良好	口縁部外面横ナデ 体部内 面丁寧なミガキ 外面横位 ヘラ削り後ナデ	体部外面ヘラ削りは相 当乾燥した後に施され たものか
8-3	皿	% % %	13.0 6.1 2.3	13.0 6.1 2.3	褐色-褐色 小砂 粒微量精選 良好	体部下端回転ヘラ削り 底 部回転ヘラ削り 内面丁寧 なミガキ	
8-4	坏	1/2 % 1/2	(14.0) (8.8) 4.8	(14.0) (8.8) 4.8	灰色-灰色 小砂 粒少 やや不良	底部ヘラ削り	須恵器
8-5	甕	% — —	(14.1) — (6.1)	(14.1) — (6.1)	赤褐色-赤褐色 小砂粒多 良好	口唇を微妙につまんで横 ナデ後胴部外面斜位ヘラ削り	
8-6	甕	— — %	— — (17.5)	— — (17.5)	灰褐色-灰褐色 小砂粒少 良好	胴部下半縦位ヘラナデ 内 面ナデ	
8-7	甕	% — —	(23.0) — —	(23.0) — —	青灰色-青灰色 小砂粒多い 良好	口縁部内面横ナデ 体部内 面タタキじめ(青海波文) 口縁部外面ヘラナデ後櫛 描波状文 体部外面タタキ じめ(平行タタキ目文)	須恵器
8-8	甗	— % —	— 9.8 7.0	— 9.8 7.0	暗黄褐色-暗黄褐 色 小砂粒少 良 好	胴部下半ナデ 内面ナデ 底部ヘラ削り 焼成後底部 を穿孔して甗とする。	甗を甗に転用

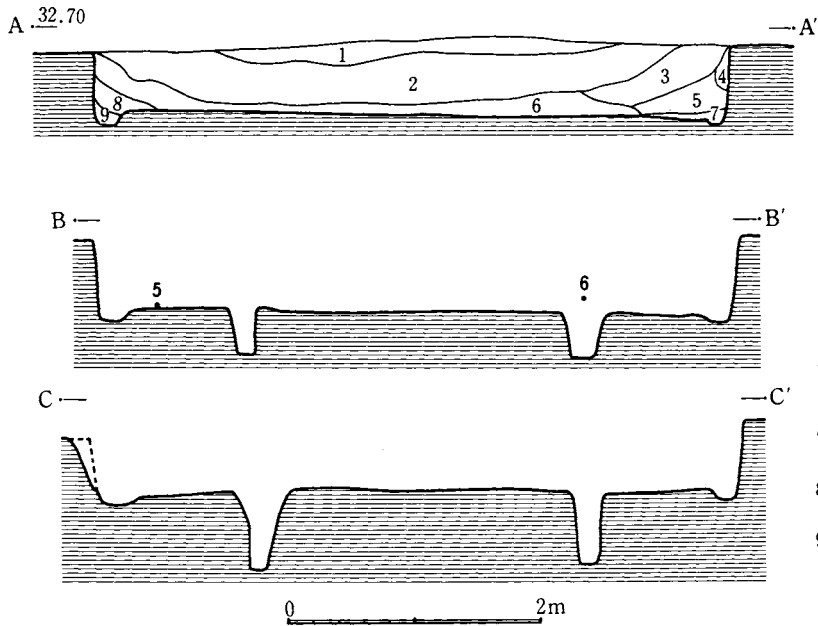
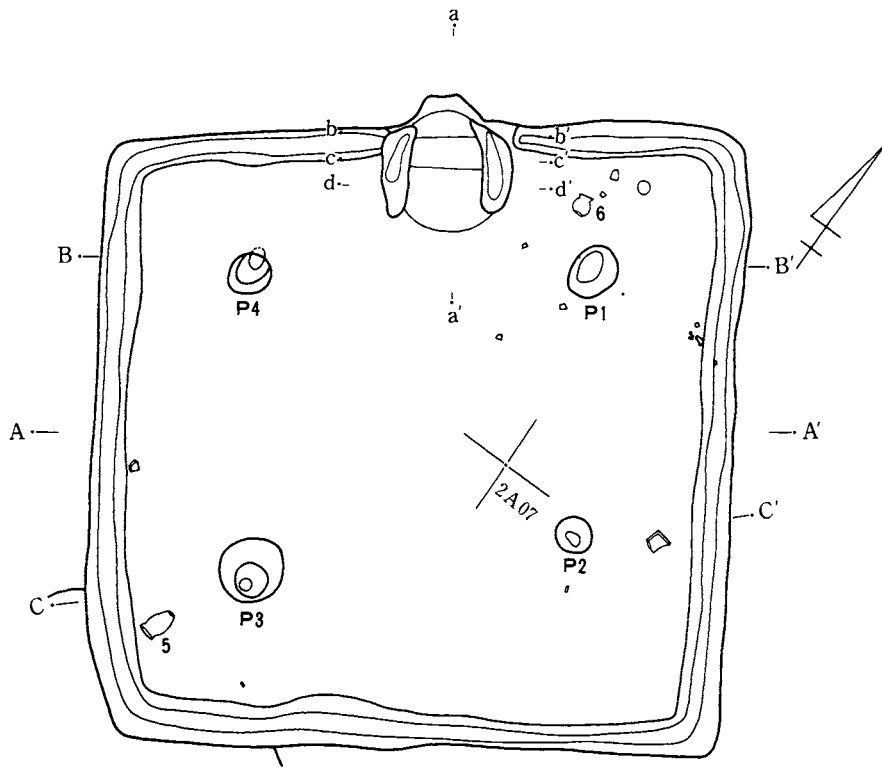
第11号住居跡 (第223~225図 図版87)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは2 A03他である。第12号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 南西壁4.72m、北西壁5.08mあり、面積24.31m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN33°Wである。壁は四辺ともに垂直に立ち上がり、確認面より約60cmを計る比較的深い住居跡である。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面はほとんど凹凸がなく平坦であった。柱穴は4個検出され、それぞれ対角線上にあり比較的しっかりした掘り込みである。

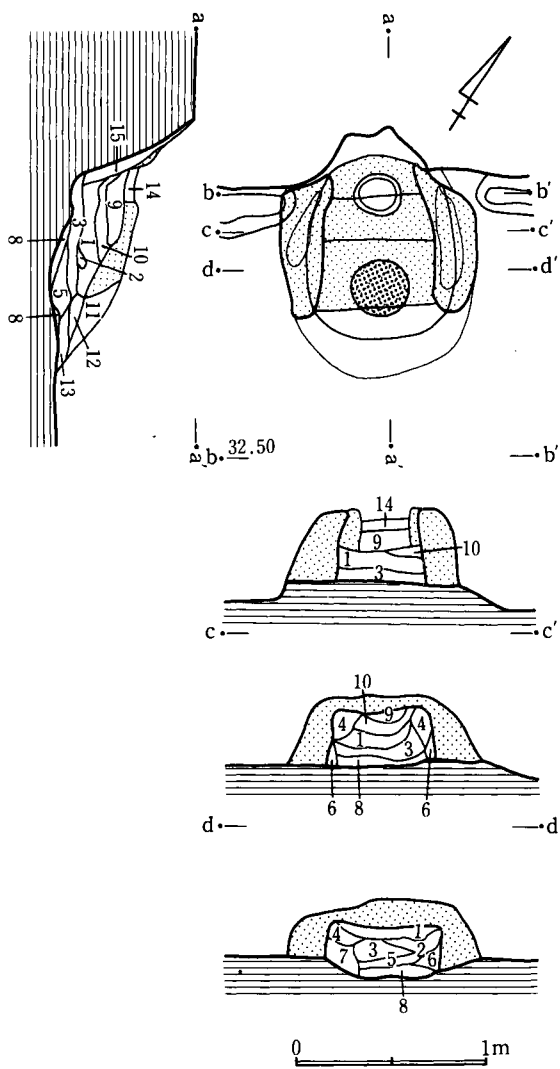
カマド 北西壁中央のカマドの遺存状態は良好で原形をとどめるものであった。天井部の良好な遺存より掛け口も確認された。壁への掘り込みは約20cmである。カマド構築には砂質粘土に比較的多くの小石を含んでいた。火床部は径30cm程の浅い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積状況を示していた。遺物としては、坏、甕が出土している。甕の5は南隅の床直から底部のみが欠損した状態で、また、6はほぼ完形の状態でカマド付近の北隅の床直から出土している。他は覆土中である。また、不明鉄製品の小破片も覆土中から出土している。



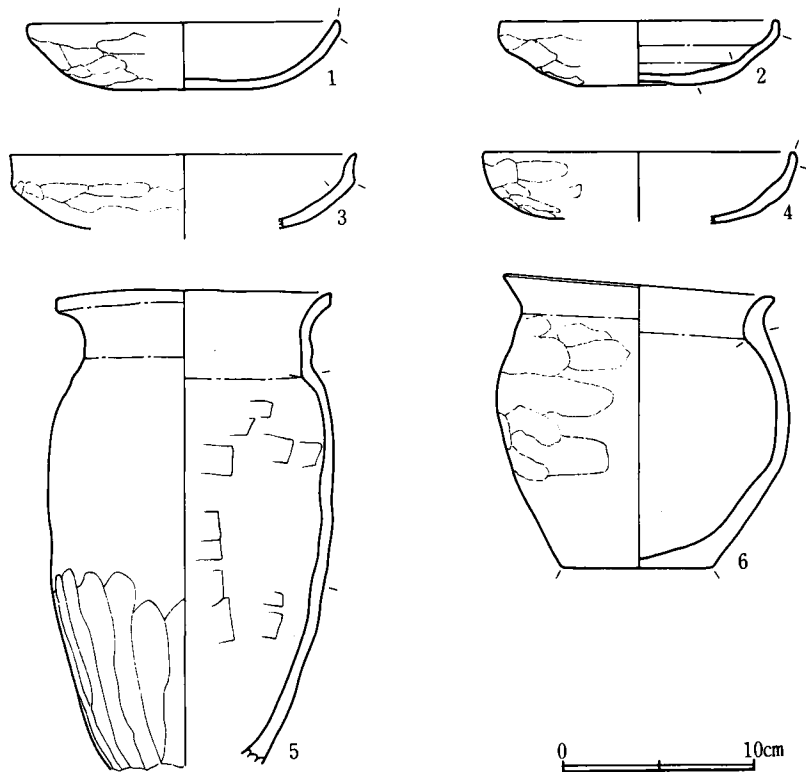
- 1 黒褐色土（ローム粒を散在的に混入）
- 2 暗褐色土（ローム粒を散在的に混入）
- 3 黒色土（ローム粒はブロック状を呈し若干の焼土と混じる）
- 4 暗褐色土（ロームブロックが散在的に多量含む）
- 5 明褐色土（4層に比しロームの混入が多くなる）
- 6 明黒褐色土（ローム粒は含まず、炭化材を部分的に含む）
- 7 明褐色土（ローム粒+黒色土で構成される）
- 8 明褐色土（ローム粒が散在的に混入）
- 9 明褐色土（ローム粒が集中的に混入）

第223図 第11号住居跡実測図 (1/60)



- 1 暗赤褐色土 (焼土ブロック+砂質粘土)
- 2 暗褐色土 (炭化粒+焼土粒少量)
- 3 暗灰褐色土 (砂質粘土+焼土ブロック少量)
- 4 赤褐色土 (焼土塊)
- 5 暗赤褐色土 (焼土粒を中心にブロック粘土粒が混入)
- 6 暗灰白色土 (白色粘土+炭化粒多量)
- 7 暗褐色土 (粘土+炭化粒少量+焼土粒多量)
- 8 明褐色土 (大粒のロームブロックを中心に炭化物が混入)
- 9 明黒褐色土 (若干の焼土を含みしまりは全くない)
- 10 明灰褐色土 (砂質粘土が火を受けて変化したもの)
- 11 暗褐色土 (若干の砂質粘土を含む、しまりは良い)
- 12 黒色土 (ボソボソしてしまりはない)
- 13 暗褐色土 (炭化物を若干含み、ローム粒多量混入)
- 14 灰黒色土 (炭化物多量、砂質粘土少量混入)
- 15 黒褐色土 (焼土少量、炭化物多量混入)

第224図 第11号住居跡カマド実測図 (1/40)



第225図 第11号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

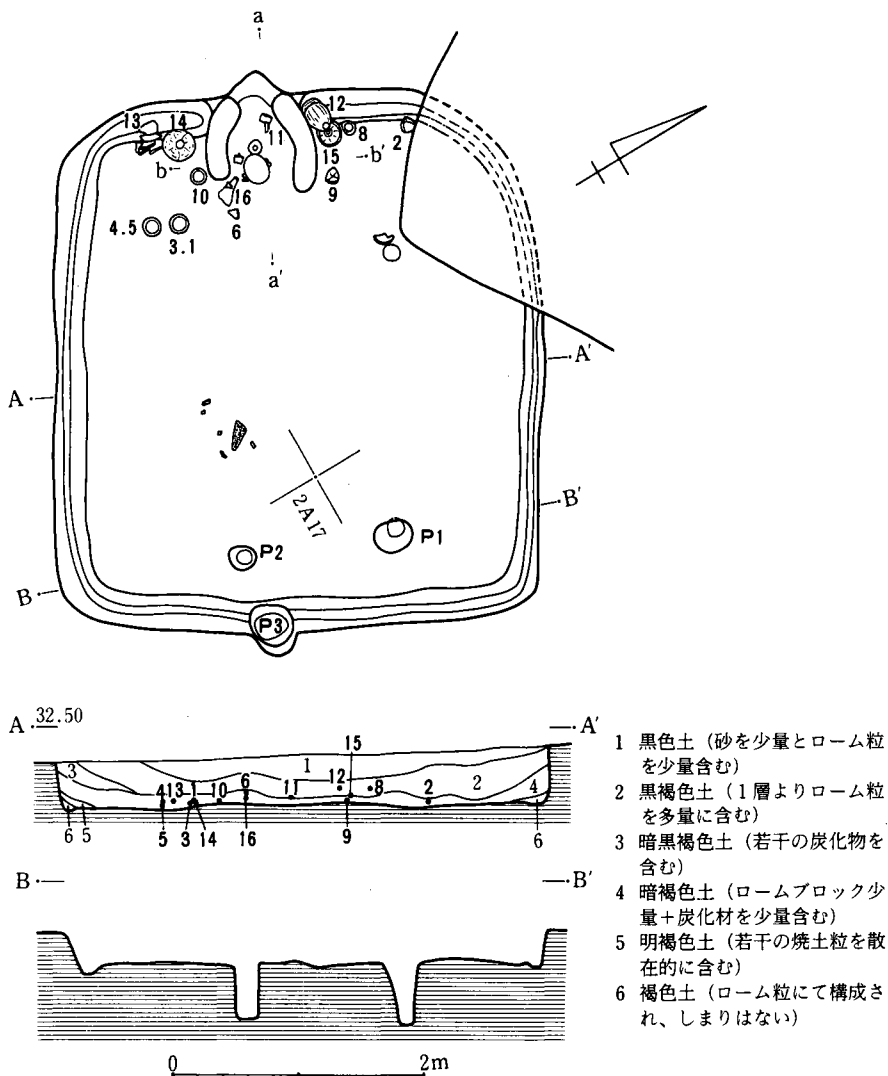
第11号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底体 cm ()は推定	法量 cm 器高	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
11-1	坏	2/3	(16.3)	—	黄褐色—褐色 小砂粒微 良好	—	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 内面丁寧なナデ	口唇部欠損あり	
11-2	坏	3/3	(14.6)	—	褐色—褐色 粒微 不良	—	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ		
11-3	坏	2/3	(18.2)	—	黄褐色—黄褐色 小砂粒微 良好	—	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ		
11-4	坏	2/3	16.4	—	黄褐色—黄褐色 小砂粒微 良好	—	口縁部外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面丁寧なナデ	口唇部欠損あり	
11-5	甕	4/4 完	14.5	—	暗褐色—暗黄褐色 小砂粒少 良好	—	口唇をつまんで口縁横ナデ 胴部外面縦位へラ削り後ナデ 内面ナデ	外面口辺～体部大部分スス付着 内面剝離激しい	
11-6	甕	3/4	14.0	7.8 15.3 胴最大径 15.4	褐色—褐色 粒少 良好	—	口縁部横ナデ 胴部外面横位へラ削り後ナデ 底部へラ削り	胴部中央以下内外面共剝離激しい	

第12号住居跡 (第226~229 図版88・144)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは2 A 17他である。第11号住居跡とは重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 南西壁4.05m、南東壁3.82mあり、面積(15.33) m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁の中央よりやや西側に位置しN62°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約45cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周するものと推定されるが、北隅が第11号住居跡によって切られているために不明である。巾約15cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は凹凸が少し認められるがほぼ平坦である。柱穴は3個検出され、それぞれ

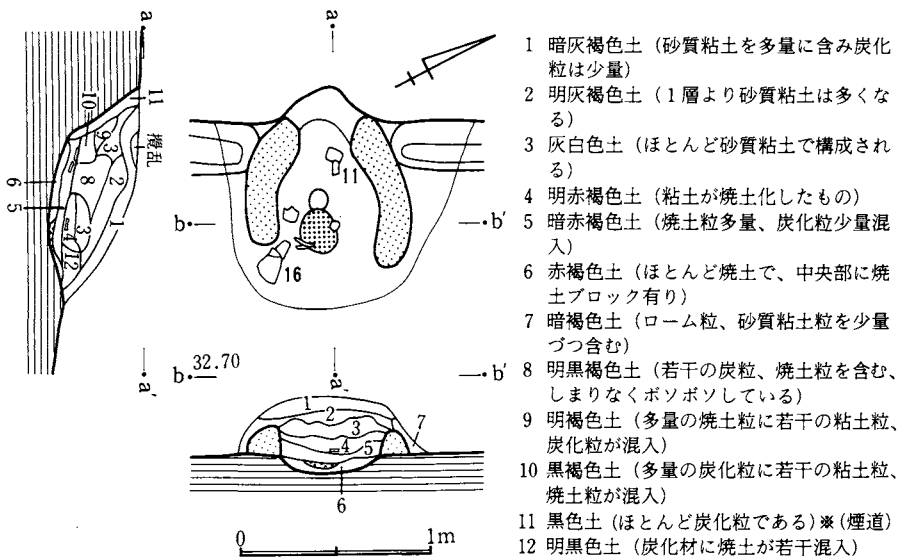


第226図 第12号住居跡実測図 (1/60)

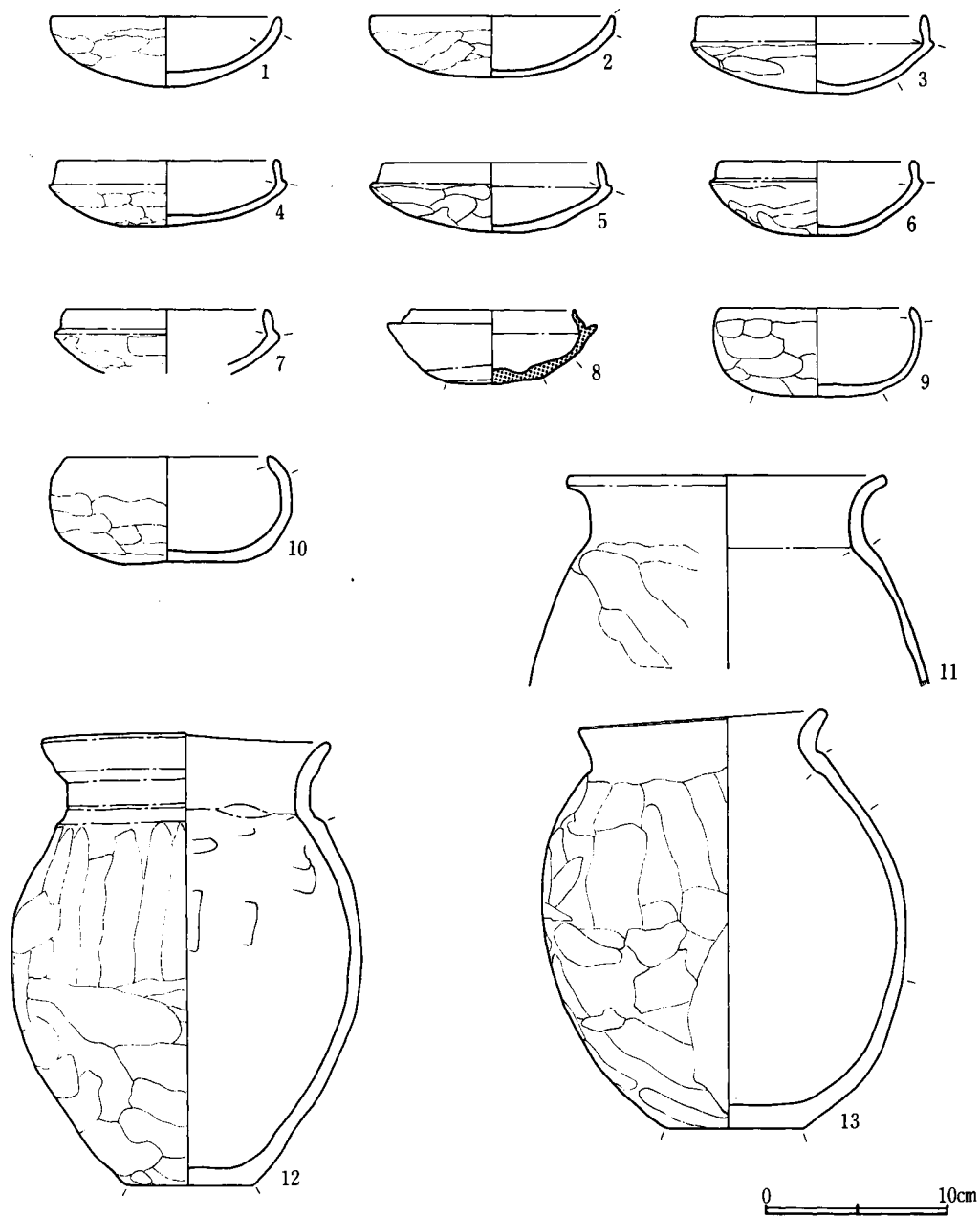
カマドの対面にあり、P₃は深さ、壁の確認面より53cm、床面より23cmを計る。

カマド 北西壁の中央よりやや西側にあり遺存状態はやや良好であった。壁への掘り込みは、約20cm程で周溝はカマドの袖部までであった。カマドの構築は砂質粘土を使用している。火床部は径約20cm程であるが、やや深い播鉢状を呈していた。また、火床部付近には支脚を立てた跡と思われる小ピットが検出されている。カマド内からは11の甕の破片、16の土製支脚が出土している。

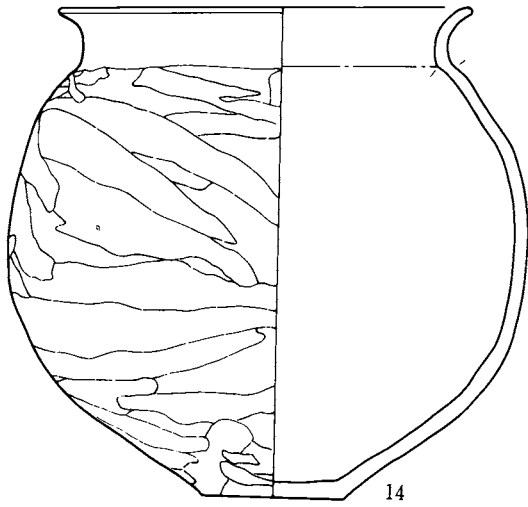
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積状況を示し、床直上で若干の炭化材が出土している。遺物としては、坏、碗、甕、甌、土製支脚があり、カマド内とその周辺床直からの出土である。遺物のほとんどは完形もしくは完形に近いものであった。カマド左袖付近からは、1・3、4・5の坏が重なって、13の甕は土圧によって押し潰された状態で、右袖付近からは、12の甕と15の甌などが出土し、一括の好資料である。



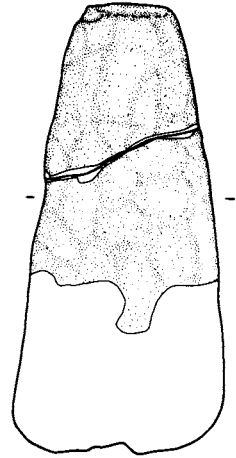
第227図 第12号住居跡カマド実測図 (1/40)



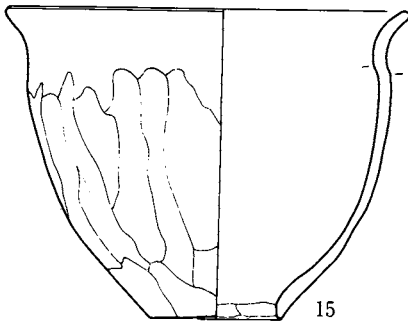
第228图 第12号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1



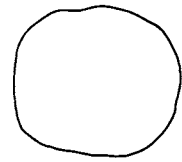
14



16



15



0 10cm

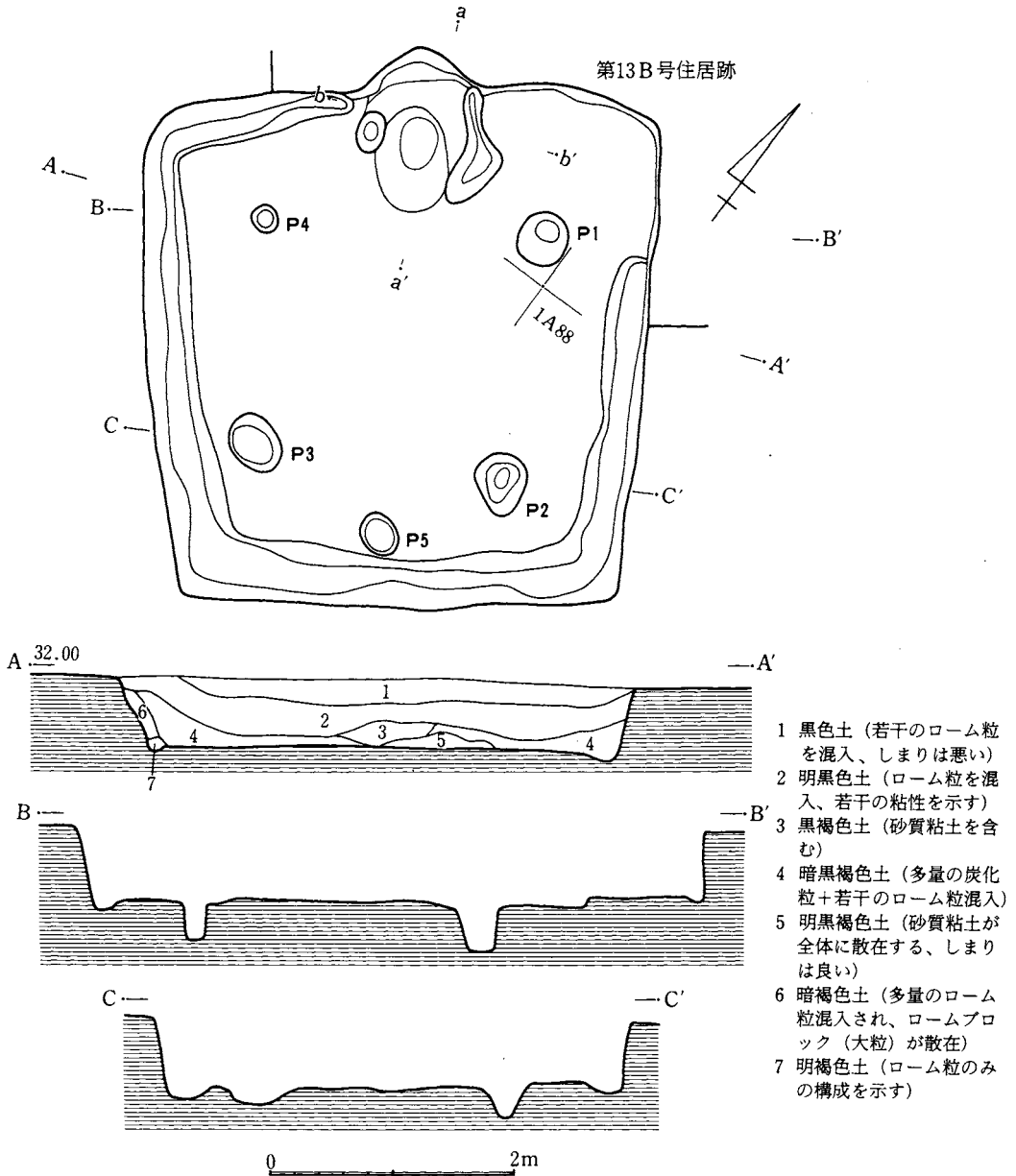
第229図 第12号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.2

第12号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
12-1	坏	完 完	完 完	— —	12.6 — 3.8	黄褐色—黄褐色 小砂粒微 良好		口縁部横ナデ 体部外面へ ラ削り後ナデ 内面横ナデ	内外面上位スス付着
12-2	坏(蓋)	完 完	完 完	— —	13.6 — 2.4	内黒—暗褐色 小 砂粒微 良好		口縁部外面横ナデ 体部外 面横位斜位へラ削り 内面 丁寧なナデ	内黒 口唇部内側微妙 な摩耗痕あり
12-3	坏	完 完	完 完	— —	12.8 — 4.3 蓋受径 13.4	暗褐色—暗褐色 小砂粒少 良好		口縁部横ナデ 体部へラ削 り後ナデ 内面ミガキ	口唇部上端に摩耗痕あ り
12-4	坏	完 完	完 完	— —	12.1 — 3.5 蓋受径 13.1	暗褐色—暗褐色 小砂粒少 良好		口縁部横ナデ 体部へラ削 り 内面丁寧なナデ	
12-5	坏	完 完	完 完	— —	12.1 — 3.7 蓋受径 13.5	内黒—暗褐色 小 砂粒少 良好		口縁部横ナデ 体部へラ削 り 内面ナデ	内黒 口唇部上端に摩 耗痕あり
12-6	坏	完 完	完 完	— —	10.8 — 4.0 蓋受径 13.5	黄褐色—黄褐色 小砂粒少 良好		口縁部横ナデ 体部へラ削 り後ナデ 内面丁寧なナデ	口唇部上端に摩耗痕あ り
12-7	坏	完 完	完 完	— —	11.2 — (3.8) 蓋受径 12.4	暗褐色—褐色 小 砂粒少 良好		口縁部横ナデ 体部へラ削 り 内面丁寧なナデ	口唇部上端内側に摩耗 痕あり
12-8	坏(蓋)	完 完	完 完	— —	9.2 — 4.0 身受径 11.9	黒灰色—黒灰色 小砂粒多 良好		外面上部回転へラ削り 他 は横ナデ	須恵器
12-9	埴	完 完	完 完	— —	10.8 6.6 4.8	黒色—黄褐色 小 砂粒少 やや不良		口縁部内外面横ナデ 体部 へラ削り 内面やや雑なナ デ	
12-10	埴	完 完	完 完	— —	11.3 7.2 5.7	黒褐色—黄褐色 小砂粒少 やや不 良		口縁部横ナデ 体部～底部 へラ削り 内面ナデ	
12-11	甕	完 完	完 完	— —	14.6 — —	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 良好		口縁部内外面横ナデ 体部 斜位へラ削り 内面丁寧な ナデ	
12-12	甕	完 完	完 完	— —	16.0 7.0 24.0 胴最大径 18.3	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 良好		口縁部～頸部横ナデ 胴部 上半縦位下半斜位へラ削り 底部へラ削り 内面ナデ	外面全体にススの付着 がみられる
12-13	甕	完 完	完 完	— —	12.8 7.5 22.3 胴最大径 20.0	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 良好		口縁部横ナデ後胴部外面上 半縦位、下半斜位へラ削り 後ナデ 底部へラ削り 内 面ナデ	
12-14	甕	完 完	完 完	— —	22.1 7.3 25.7 胴最大径 27.2	黄褐色—黒褐色 小砂粒多 良好		口縁部横ナデ後外面最上部 縦位他斜位へラ削り 底部 へラ削り 内面ナデ	
12-15	甗	完 完	完 完	— —	20.6 6.7 16.0	黄褐色—黄褐色 小砂粒少 良好		口縁部内外面横ナデ 体部 縦位下端斜位へラ削り 内 面ナデ 体部下端へラ削り	
12-16	支脚	完	完	長さ 径	23.0 7.8×8.8	褐色 小砂粒多 良好		表面に指頭痕明瞭	基部火熱による剥離激 しい

第13A号住居跡 (第230・231図 図版89)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A88他である。第13B号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。

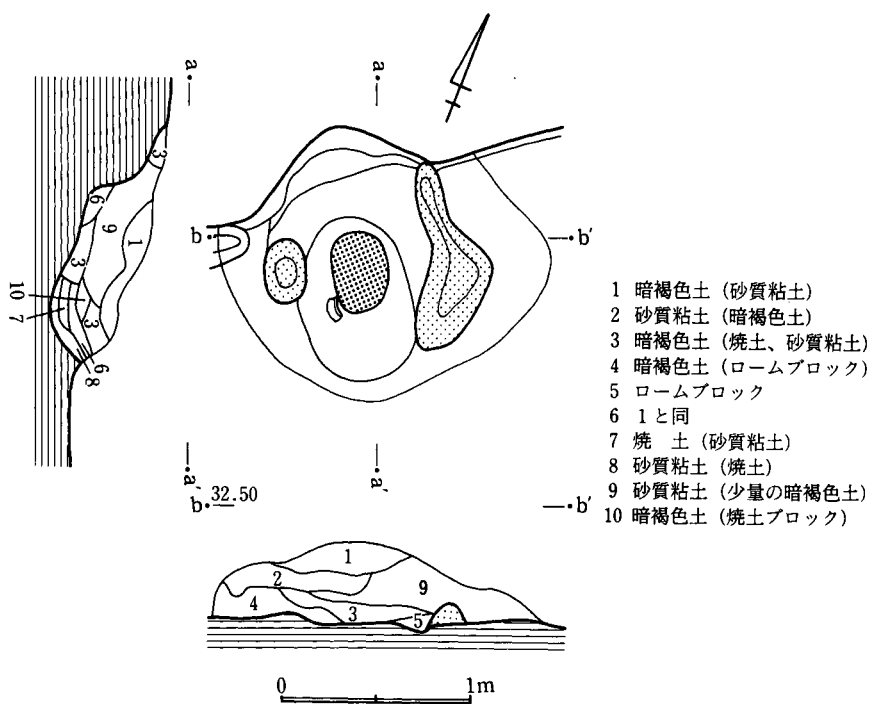


第230図 第13A号住居跡実測図 (1/60)

遺構 南西壁4.11m、北西壁4.20mあり、面積16.79m²でやや台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN35°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約55cmを計る。壁溝はカマドと北隅を除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計り広く浅い。床面は固く平坦であるが、南西壁付近の一部で貼床が施されている。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に位置するが、P₃は他と比較して浅い。P₅はカマドの対面にあり、約5cmと浅い。

カマド 北西壁の中央にあり左袖部の検出は一部のみであった。壁への掘り込みは約30cm程と推定されるが第13B号住居跡覆土のため明確にはできなかった。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部の径は約40×30cm程ありやや浅い挿鉢状を呈す。

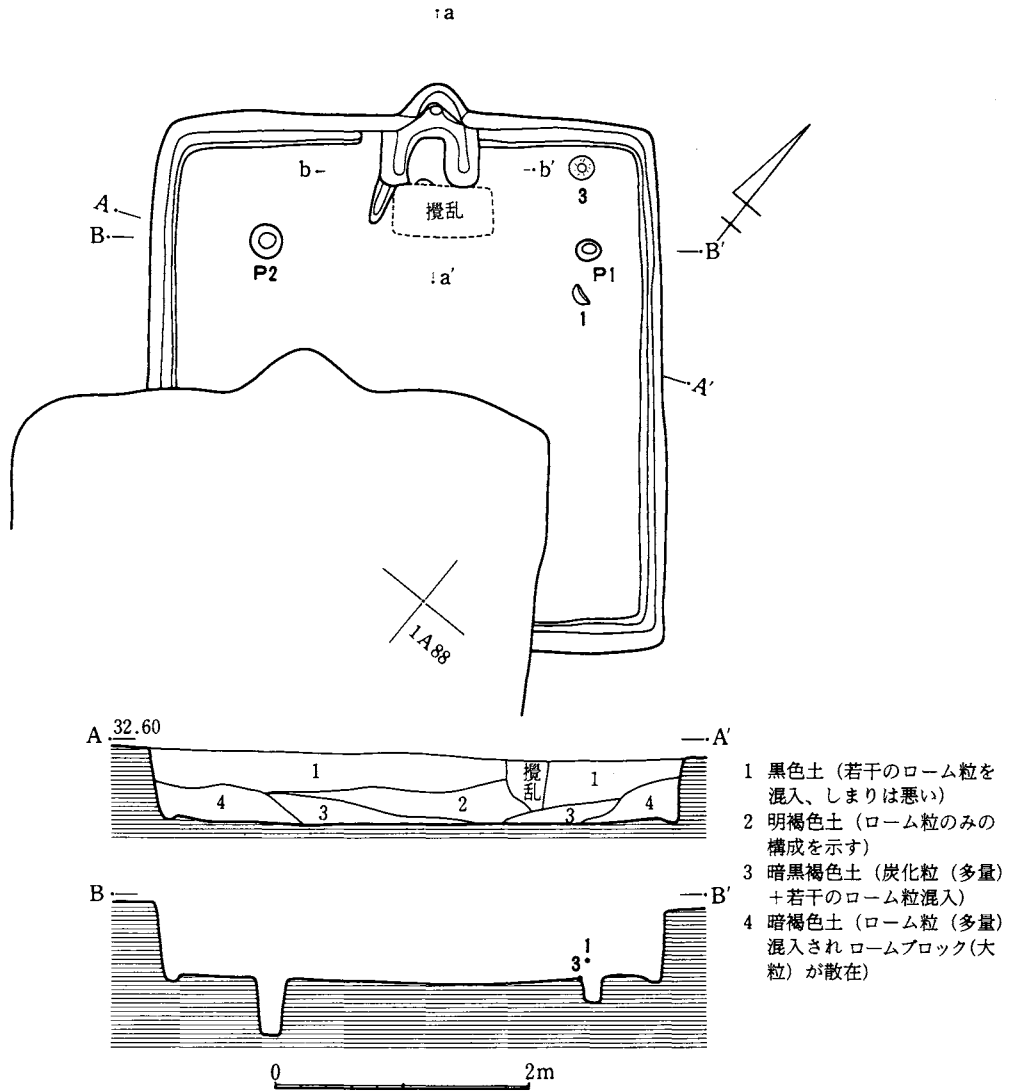
遺物出土状況 土層は第13B号住居跡とともに覆土中にローム粒、ロームブロックの混入が著しいことから人為的な投棄が推定される。遺物は小破片のみがカマド内と覆土中から出土しているが、復元実測できるものは無かった。



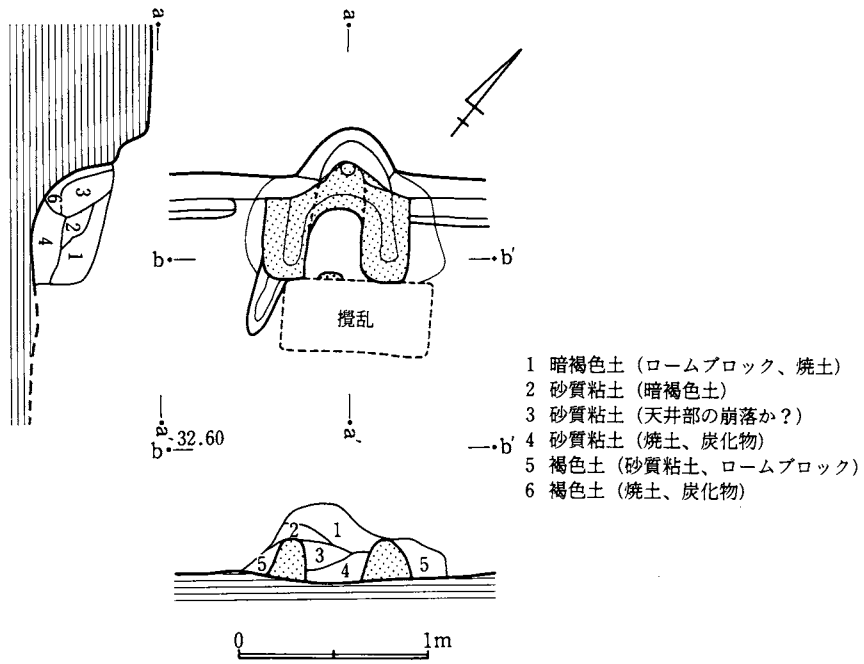
第231図 第13A号住居跡カマド実測図 (1/40)

第13B号住居跡 (第232~234図 図版89)

台地西側の平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A77他である。第13A号住居跡とは重複関係にあり、本跡が古い。

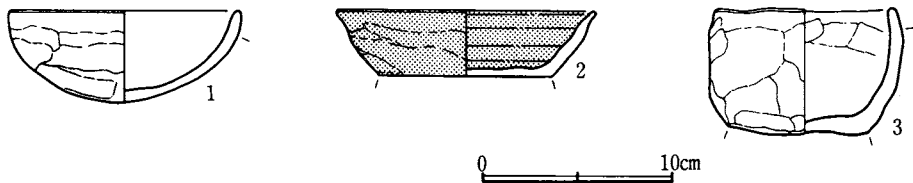


第232図 第13B号住居跡実測図 (1/60)



- 1 暗褐色土 (ロームブロック、焼土)
- 2 砂質粘土 (暗褐色土)
- 3 砂質粘土 (天井部の崩落か?)
- 4 砂質粘土 (焼土、炭化物)
- 5 褐色土 (砂質粘土、ロームブロック)
- 6 褐色土 (焼土、炭化物)

第233図 第13B号住居跡カマド実測図 (1/40)



第234図 第13B号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第13B号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体	法 量 cm ()は推定	口 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
13B-1	坏 (蓋)		$\frac{3}{8}$ — $\frac{3}{8}$		12.2 — 4.8	暗褐色—暗褐色 小砂粒微	良好	口縁部～体部内面横ナデ 体部外面斜位ヘラ削り後ナ デ	口唇部内側に摩耗痕あ り
13B-2	坏		$\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$		(13.8) (9.2) 3.4	赤彩—赤彩 粒微	小砂 良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部静止糸切り後周縁ヘラ 削り	内外面赤彩 口唇部欠 損多し
13B-3	碗		$\frac{5}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{5}{8}$		9.5 7.3 6.5	褐色—褐色 粒多	小砂 良好	口縁部外面横ナデ 体部内 外面ヘラ削り 底部ヘラ削 り	

遺構 北西壁3.94m、北東壁4.05mあり、面積(16.75) m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁の中央からやや北寄りに位置しN41°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約55cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周するものと推定され、巾約15cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面はカマド両脇を除いて固く全体的に平坦ではあるが、中央部分が微妙な凹面を呈す。柱穴は2個検出され、他のコーナーからは第13A号住居跡との重複関係もあり検出されなかった。

カマド 北西壁の中央からやや北寄りにあり、一部攪乱を受けているが良好な遺存状態であった。両袖の他に天井部も検出された。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。火床部は攪乱のため一部分のみが検出された。

遺物出土状況 土層は第13A号住居跡同様、覆土中よりローム粒、ロームブロックの混入が著しく人為的な投棄が推定される。遺物は坏・壺が出土し、3の壺はほぼ完形であり床直からの出土である。また、覆土中からスラグ1点も出土している。

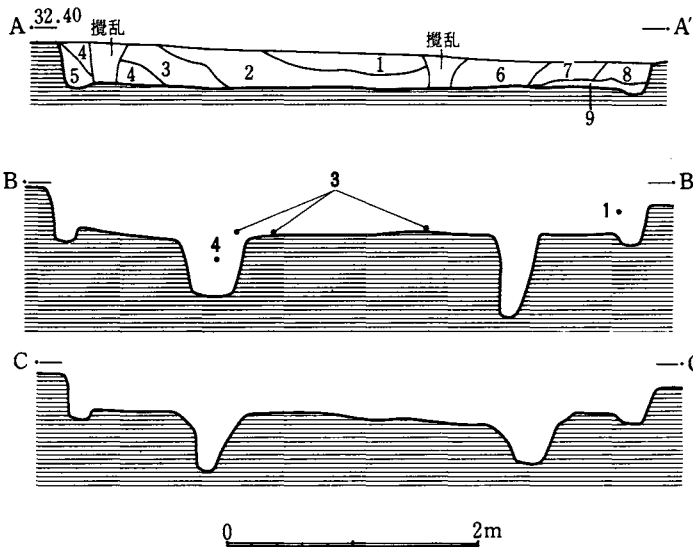
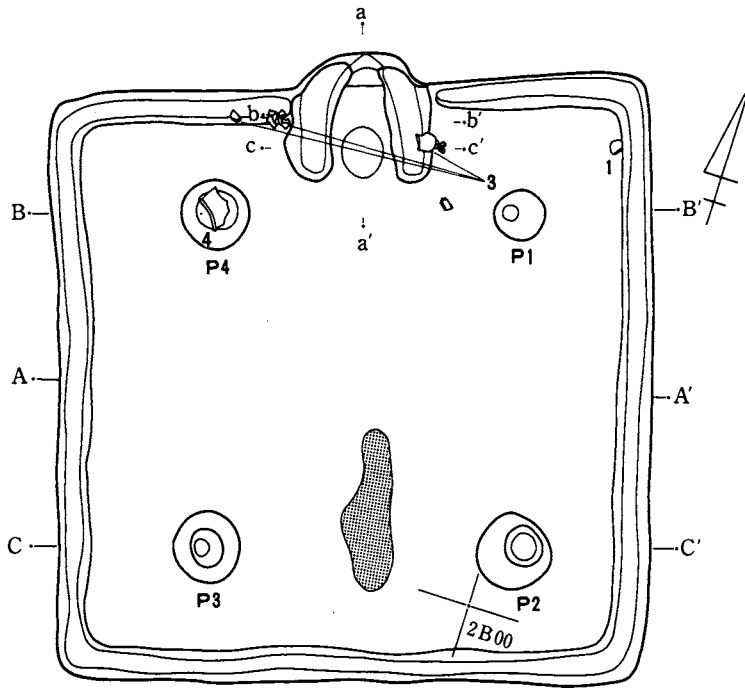
第14号住居跡 (第235～237図)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1A99他である。

遺構 西壁4.58m、北壁4.68mあり、面積22.07m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN17°Wである。壁は四辺ともにやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約25cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約10cmと比較的しっかりしている。床面は平坦である。柱穴は4個検出されそれぞれ対角線上に位置している。

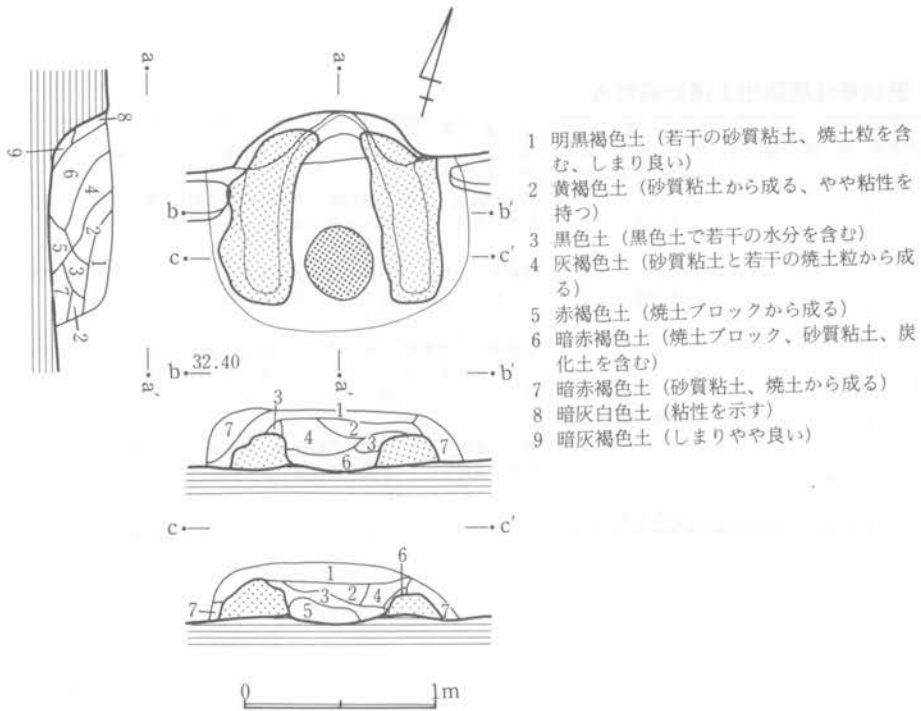
カマド 北壁中央に位置し比較的良好な遺存状態であった。壁への掘り込みは約25cm程である。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径40×40cmの浅い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層は一部攪乱があるがレンズ状堆積を示す。覆土中にはローム粒・ロームブロックが含まれている。焼土が床面から検出されている。遺物は坏、甕が出土しており、3の甕はカマド両袖からのものが接合しほぼ完形になる。4はP₄からの甕の大形破片である。また、覆土中から不明鉄製品の小破片が出土している。

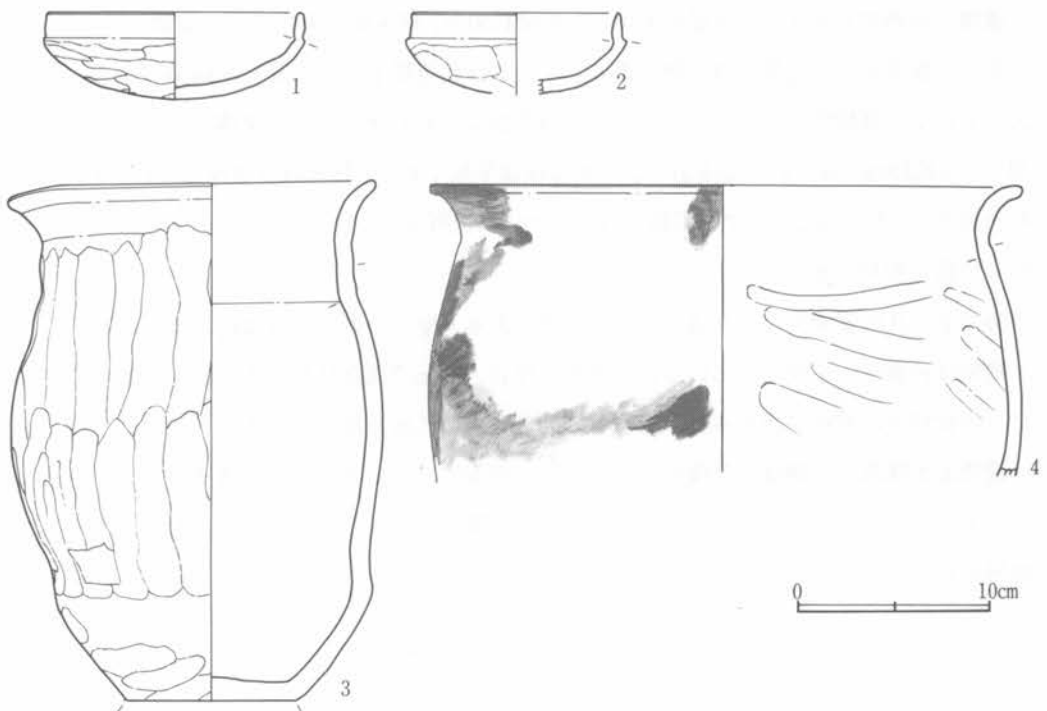


- 1 明黒褐色土 (ロームブロックを含み、しまり良くない)
- 2 明黒褐色土 (1層よりロームを多く含み、しまり良い)
- 3 黒褐色土 (ロームブロック、ローム粒を含む)
- 4 暗黒褐色土 (ローム粒を若干含む)
- 5 黒褐色土 (ローム粒を4層より多く含む)
- 6 暗黄褐色土 (微粒子のロームが多量に含まれる)
- 7 黒褐色土 (細かいローム粒の混入見られる)
- 8 暗黒褐色土 (ローム粒の混入若干あり)
- 9 暗黄褐色土 (黒色土中にロームブロックが混入している。しまりやや良い)

第235図 第14号住居跡実測図 (1/60)



第236図 第14号住居跡カマド実測図 (1/40)



第237図 第14号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第14号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm 底 径 器 高	口 径 底 径 器 高	色 調 内-外 胎 土 焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
14-1	坏		3/4 — 3/4	蓋受径 (13.6) (13.7) 4.6	(13.6) (13.7) 4.6	褐色—褐色 小砂 粒微 良好	口縁部横ナデ 体部外面斜 位へら削り後ナデ 内面丁 寧なナデ	口唇部内側摩耗痕あり
14-2	坏		3/4 — 3/4	蓋受径 11.1 11.7 (4.2)	11.1 11.7 (4.2)	暗褐色—暗褐色 小砂粒少 良好	口縁部横ナデ 体部外面斜 位へら削り後ナデ 内面丁 寧なナデ	口唇部内側一部摩耗あり
14-3	甕		3/4 5/4 5/4	胴最大径 19.2 8.8 26.7 19.5	19.2 8.8 26.7 19.5	暗黒褐色—暗黒褐 色 小砂粒多 良 好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位へら削り 内面ナデ 底 部へら削り	胴部下端成形時重量に よりイビツか?
14-4	甕		3/4 — 1/4	胴最大径 31.1 — — 31.1	31.1 — — 31.1	褐色—褐色 小砂 粒多 良好	胴部外面斜位へら削り後ナ デ後口縁部横ナデ 胴部内 面ナデ	外面多量にスス付着

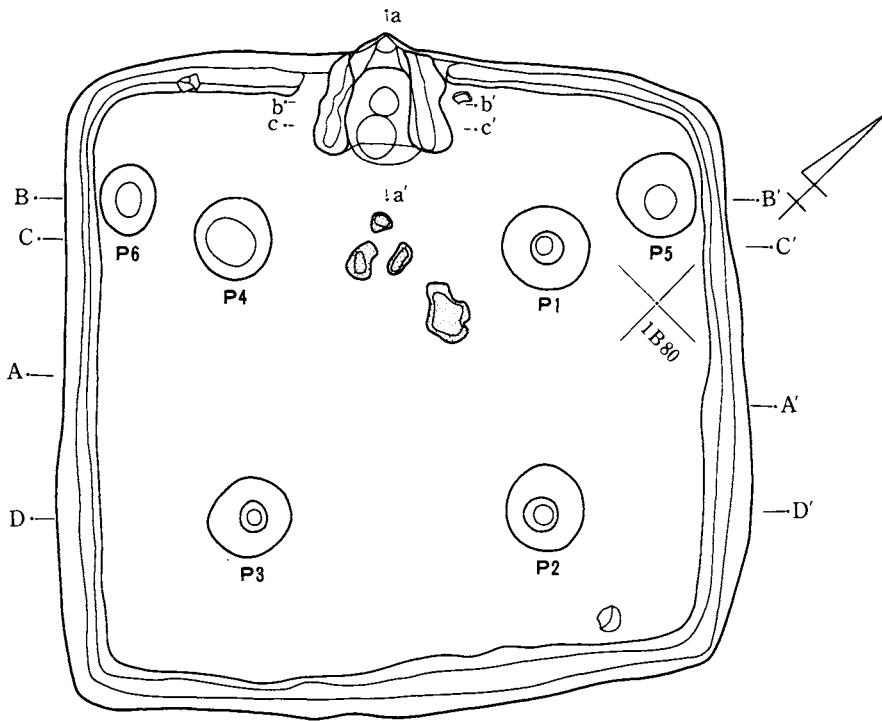
第15号住居跡 (第238~240図 図版89)

台地西側平坦地、調査区西側に位置し、グリッドは1 B80他である。

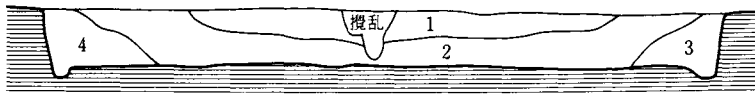
遺構 南西壁4.90m、北西壁4.90m、北東壁4.30m、南東壁4.95mあり、面積26.34㎡でやや台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN44°Wである。壁は四辺ともにやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約40cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約15cm、深さ約5cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は6個検出され、P₁~P₄は対角線上に、P₅とP₆はカマド両脇の各コーナーに位置する。P₅とP₆は他の4個よりも浅く形状も位置も相対する。

カマド 北西壁中央にあり遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約10cm程である。カマド構築は砂質粘土を使用している。火床部は径40×30cmで播鉢状を呈する。カマドの前の床面には砂質粘土の散布が認められ、カマドの砂質粘土の流出と推定される。

遺物出土状況 土層は一部攪乱されているが典型的なレンズ状の自然堆積である。遺物は坏が出土しているが、ほとんど小破片であり、1は覆土中からのものである。また、覆土中から雲母片岩の小破片1点が出土している。



A 32.40 —A'

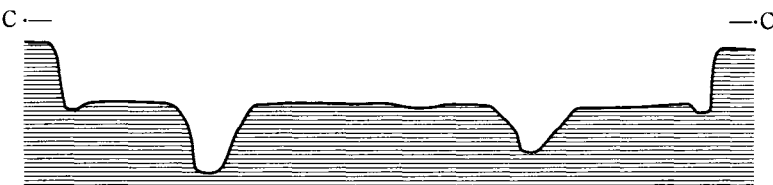


1 黒褐色土 (若干のロームブロックを含む、しまりよい)

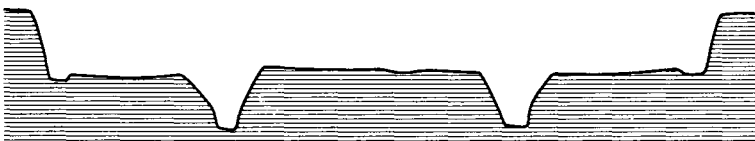
2 暗黄褐色土 (ロームブロック、ローム粒を含む、しまり良い)

3 黒褐色土 (ローム粒を含み、しまりよくない)

4 黄褐色土 (2層より多くのロームブロック、ローム粒を含む)

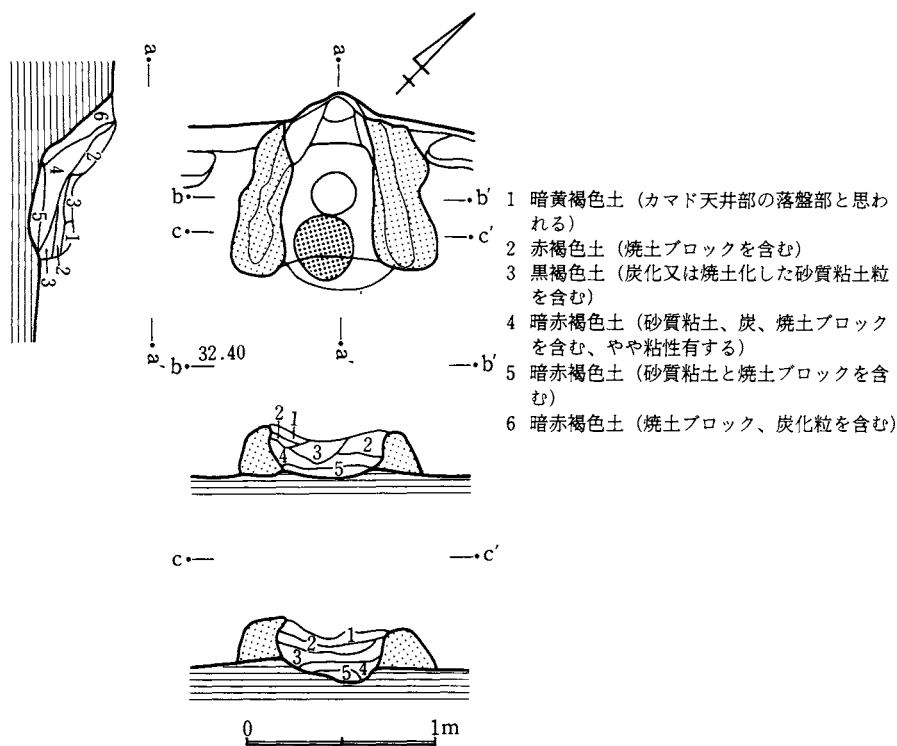


D —D'

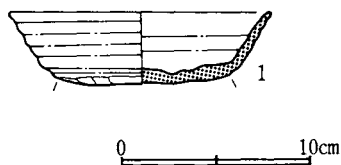


0 2m

第238図 第15号住居跡実測図 (1/60)



第239図 第15号住居跡カマド実測図 (1/40)



第240図 第15号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

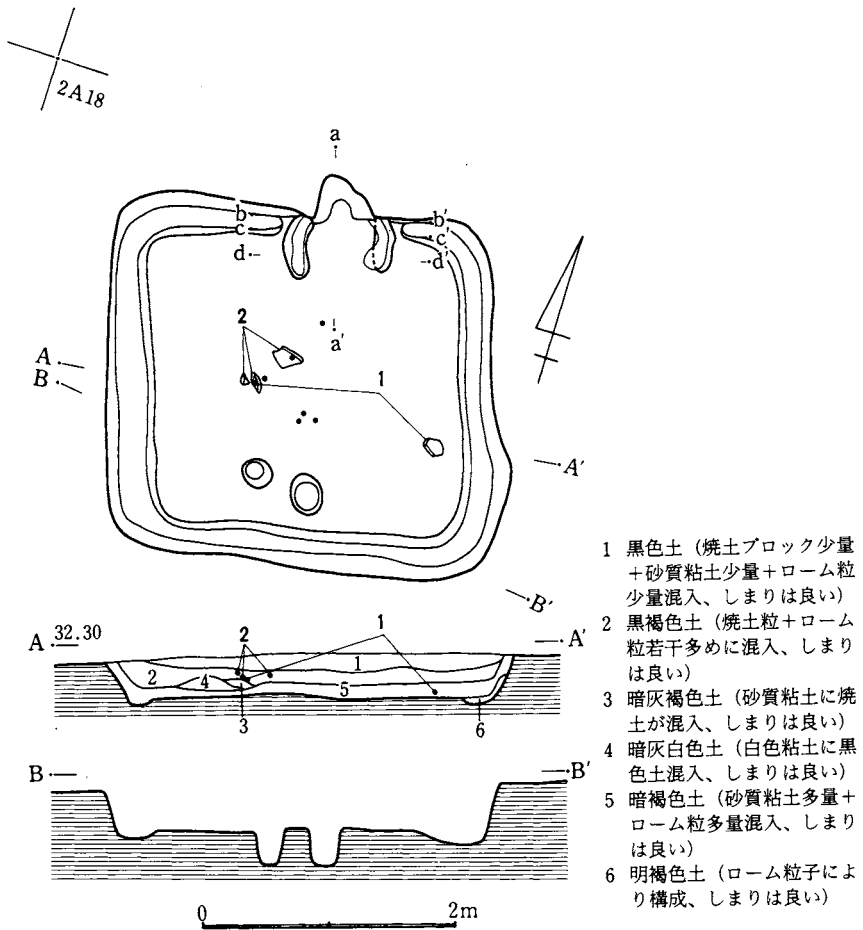
第15号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
15-1	坏	3/4 完 3/4			13.9 9.2 3.8	灰白色-灰白色 小砂粒微	良好	底部一方向へラ削り後周縁 手持ちへラ削り	須恵器

第17号住居跡 (第241~243図 図版90)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは2 A18他である。第18号住居跡とは重複関係にあり、本跡は新しい。

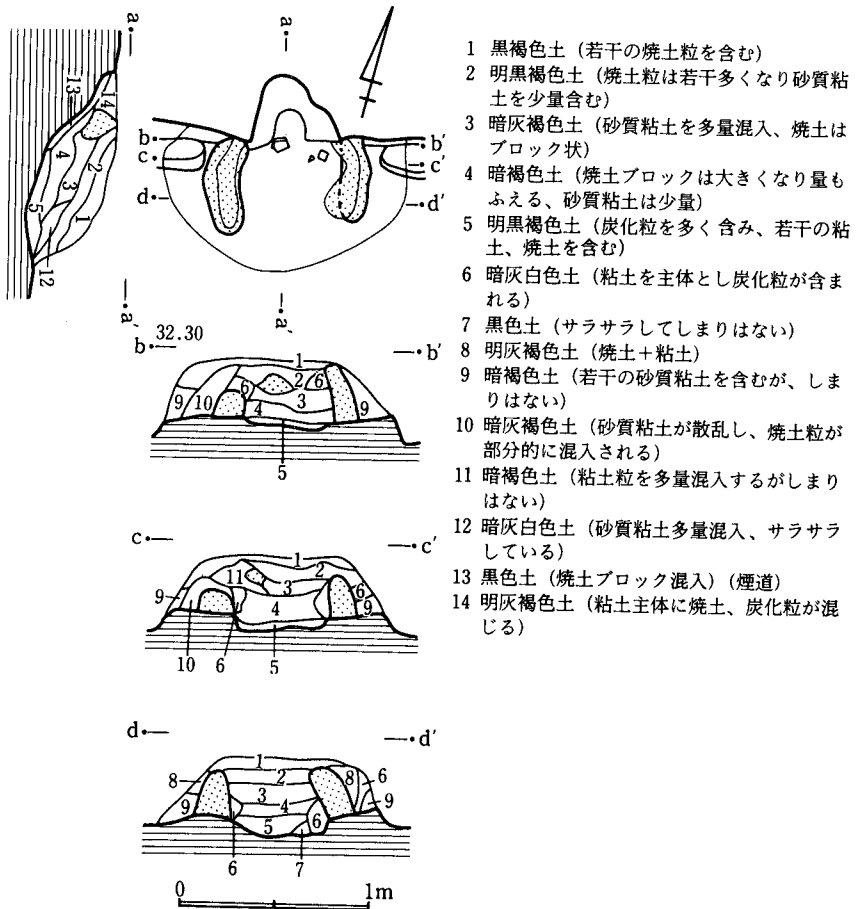
遺構 西壁2.50m、北壁2.80mあり、面積8.47m²でやや菱形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央よりやや東側に位置しN14°Wである。壁は四辺ともに緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約35cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約25cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は若干の凹凸がみられるが全体的に固く平坦である。柱穴は2個検出されカマドの対面にあり、掘り方もしっかりしている。



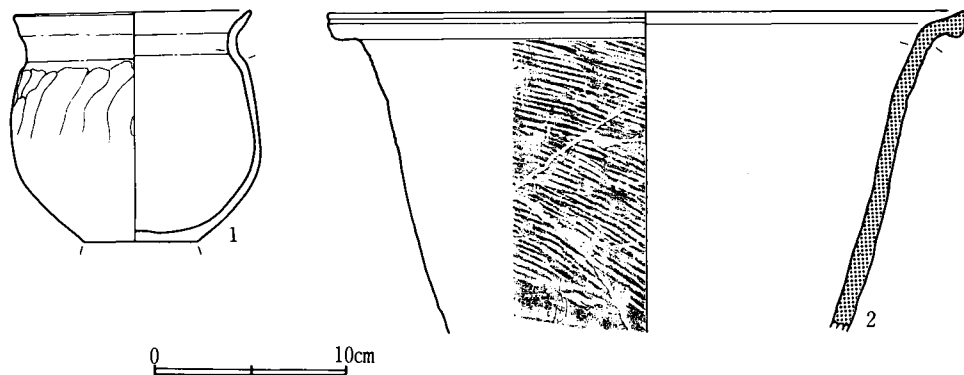
第241図 第17号住居跡実測図 (1/60)

カマド 北壁の中央やや東寄りにあり遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約25cm程であった。火床部は全般的に浅い挿鉢状であった。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。火床部は全体的に浅い挿鉢状を呈する。カマド内の遺物は小破片のみであった。

遺物出土状況 土層はレンズ状を示す自然堆積であった。遺物は甕・甑が出土している。1の甕は住居跡中央の床よりやや浮いた破片と東壁の破片が接合し完形になり、2の甑は大形破片であった。



第242図 第17号住居跡カマド実測図 (1/40)



第243図 第17号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

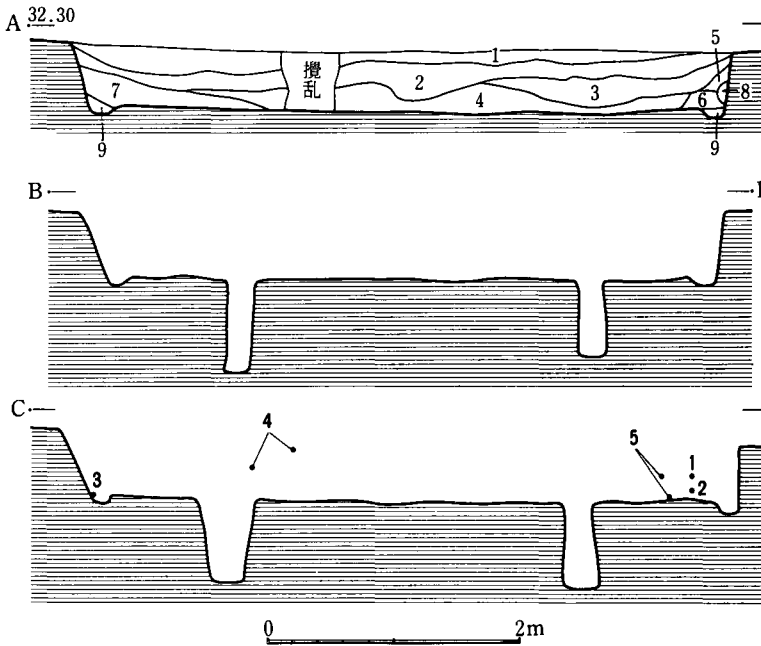
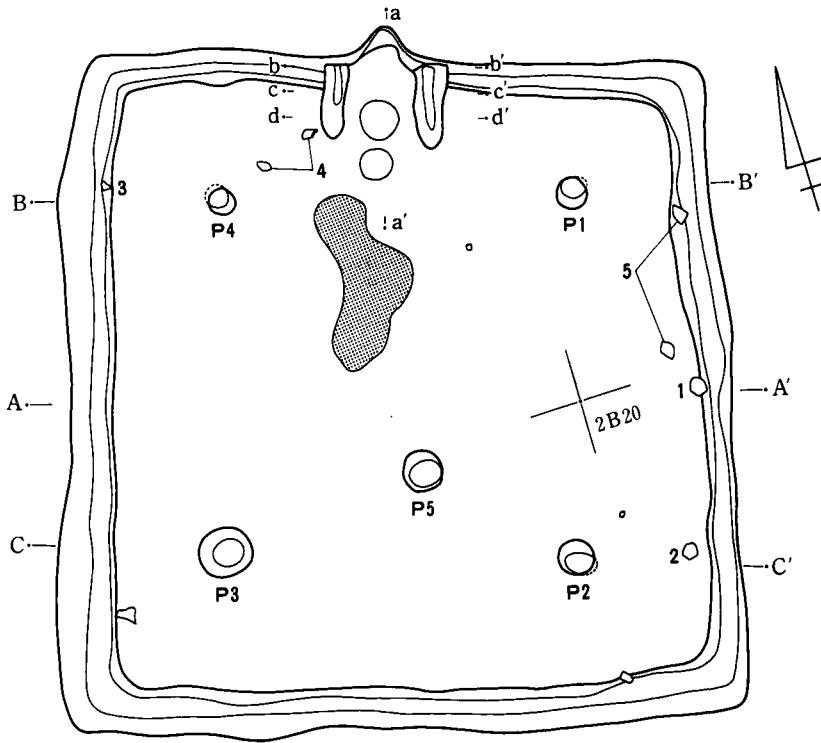
第17号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm 器高	口 徑 底 徑 器高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
17-1	甕	完 完 完			12.2 5.7 12.2	赤褐色-黒褐色 小砂粒少	良好	口縁部横ナデ後胴部上半縦 位下半横位ヘラ削り 底部 一方向ヘラ削り後周縁ヘラ 削り	
17-2	甌	$\frac{3}{6}$ — $\frac{1}{6}$		(33.8)	— —	灰白色-灰白色 大砂粒少	やや不 良	口縁部横ナデ 内面ナデ 外面タタキしめ	須恵器

第19号住居跡 (第244~246図 図版91・162)

台地南西側平坦地、調査区西側に位置し、グリッドは2 B20他である。

遺構 西壁5.25m、北壁4.80m、東壁5.00m、南壁5.25mあり、面積27.54㎡で北・東壁がやや短い不正方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN15°Eである。壁は北・東が垂直に、西・南が緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約50cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面は凹凸が若干みられるがほとんど平坦である。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に位置し掘り込みも非常に深い。P₅はカマドの対面にあり深さ37cmを計るが、一般的には四隅柱穴の外側に位置するが、内側にある特殊例と推定される。

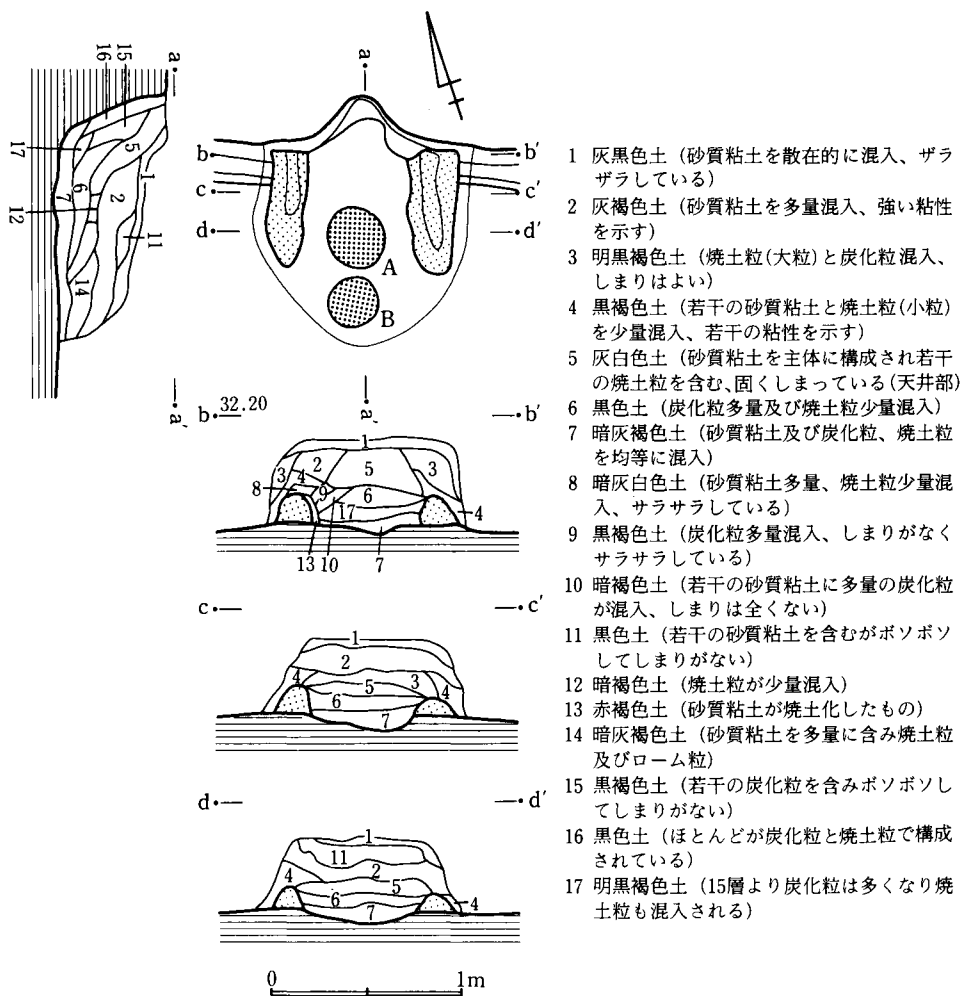


- 1 黒色土 (ローム粒 (小粒) 散在的に混入)
- 2 暗褐色土 (ローム粒を主体に構成され黒色土を混入)
- 3 黒褐色土 (ロームブロック少量、炭化粒を主体的に混入)
- 4 暗黒褐色土 (ロームブロック少量、ローム粒を散在的に混入)
- 5 明褐色土 (ローム粒により構成される)
- 6 赤褐色土 (焼土粒により構成される)
- 7 明褐色土 (ソフトロームに黒色土 (少量) 混入)
- 8 褐色土 (ロームブロック)
- 9 明褐色土 (若干の焼土粒を混入)

第244図 第19号住居跡実測図 (1/60)

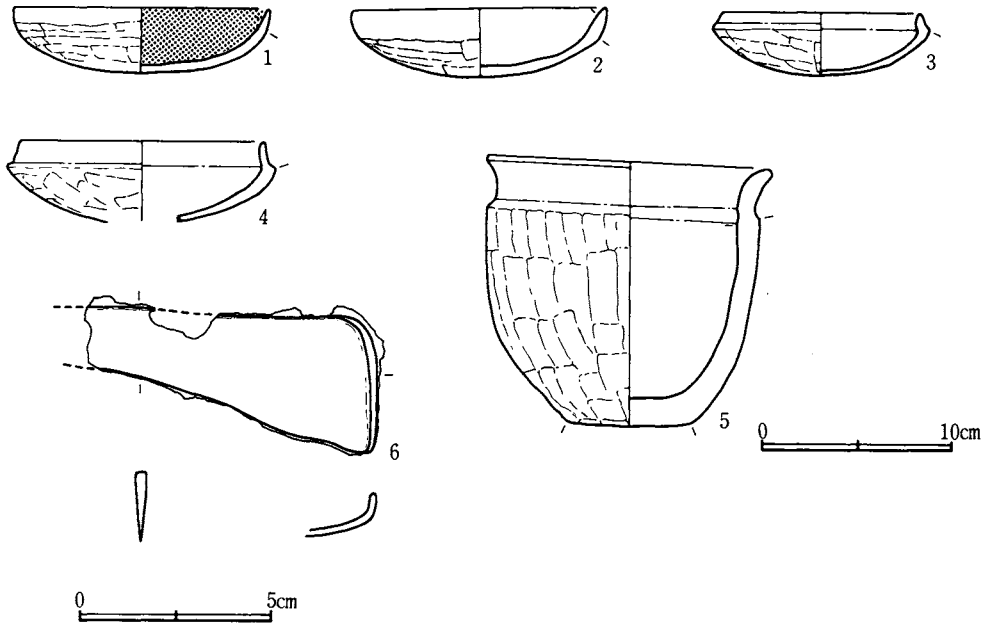
カマド 北壁中央にあって遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約25cmを計る。カマドの周溝を切って構築されたものと推定され、構築に砂質粘土を使用している。カマド内に焼土の堆積が2ヶ所認められたがAが火床部であり、Bは焼土・炭化粒が多量に見られた部分である。火床部は径30×30cmで浅い楕円状を呈する。

遺物出土状況 土層は一部攪乱を受けているがレンズ状に示す自然堆積である。床面からは、焼土・炭化材が散在していた。遺物は坏・鉢・鎌が出土している。5の鉢の破片は2地点から出土し、一部は床直上であり接合したところほぼ完形になった。2もやや床直に近いが、他の遺物は覆土中である。



- 1 灰黒色土（砂質粘土を散在的に混入、サラサラしている）
- 2 灰褐色土（砂質粘土を多量混入、強い粘性を示す）
- 3 明黒褐色土（焼土粒（大粒）と炭化粒混入、しまりはよい）
- 4 黒褐色土（若干の砂質粘土と焼土粒（小粒）を少量混入、若干の粘性を示す）
- 5 灰白色土（砂質粘土を主体に構成され若干の焼土粒を含む、固くしまっている（天井部））
- 6 黒色土（炭化粒多量及び焼土粒少量混入）
- 7 暗灰褐色土（砂質粘土及び炭化粒、焼土粒を均等に混入）
- 8 暗灰白色土（砂質粘土多量、焼土粒少量混入、サラサラしている）
- 9 黒褐色土（炭化粒多量混入、しまりがなくサラサラしている）
- 10 暗褐色土（若干の砂質粘土に多量の炭化粒が混入、しまりは全くない）
- 11 黒色土（若干の砂質粘土を含むがボソボソしてしまりが無い）
- 12 暗褐色土（焼土粒が少量混入）
- 13 赤褐色土（砂質粘土が焼土化したもの）
- 14 暗灰褐色土（砂質粘土を多量に含み焼土粒及びピローム粒）
- 15 黒褐色土（若干の炭化粒を含みボソボソしてしまりが無い）
- 16 黒色土（ほとんどが炭化粒と焼土粒で構成されている）
- 17 明黒褐色土（15層より炭化粒は多くなり焼土粒も混入される）

第245図 第19号住居跡カマド実測図 (1/40)



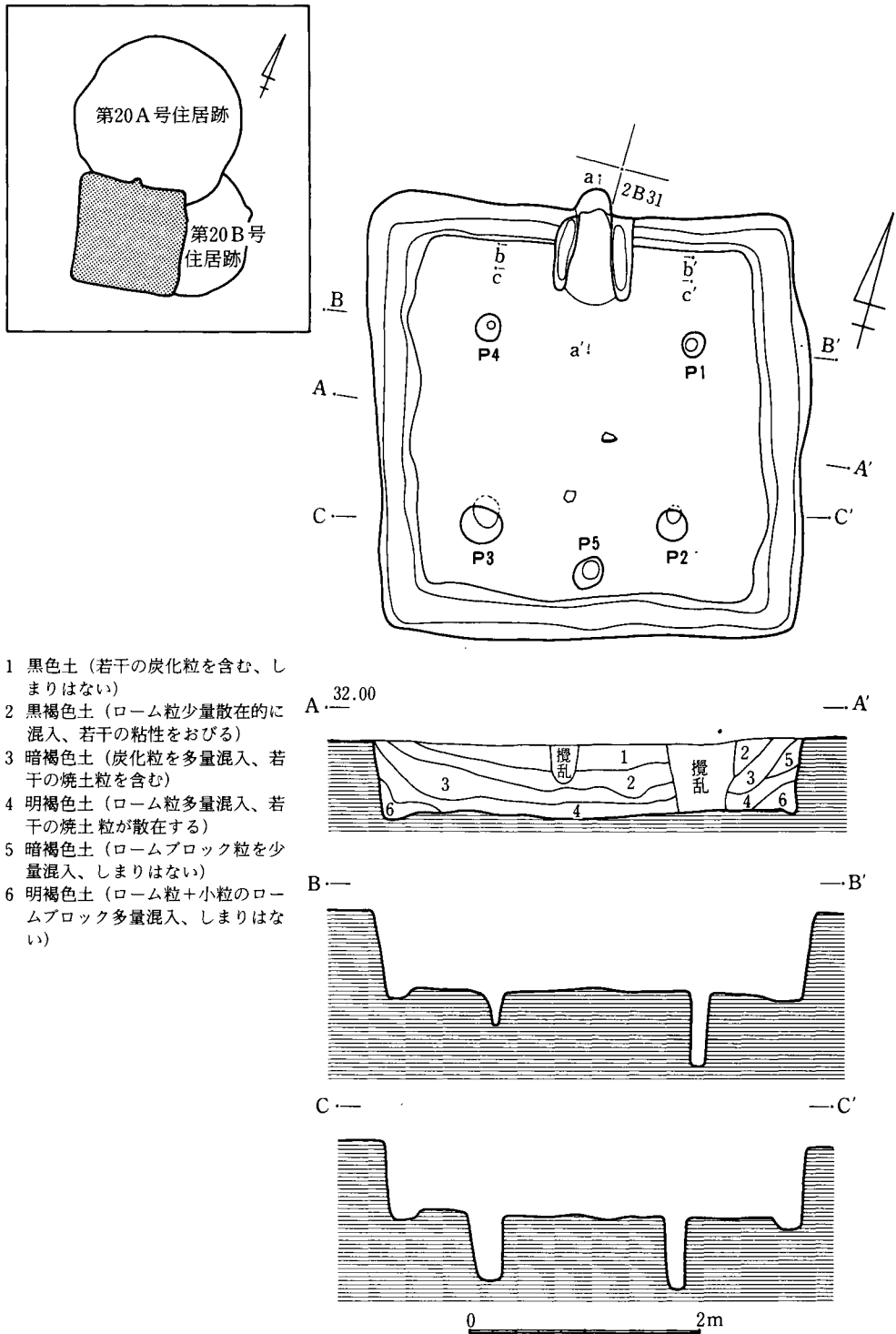
第246図 第19号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6 1/2)

第19号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
19-1	坏	完 完 —			13.8 — 3.5	内黒-赤褐色 小砂粒少 良好	小	□縁部横ナデ 体部外面横 位ヘラ削り後弱いナデ 内 面ミガキ	内黒
19-2	坏	3/6 3/6 —			13.4 — 3.4	暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好		□縁部横ナデ 体部外面ヘ ラ削り 内面丁寧なナデ	□唇部内側摩耗痕あり
19-3	坏	3/6 3/6 —			10.4 — 3.4 蓋受径 11.4	暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好		□縁部~体部内面ミガキ様 強いナデ 体部外面ヘラ削 り	□唇部上端摩耗著しい
19-4	坏	5/6 5/6 5/6			12.8 — (4.2) 器受径 14.2	暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好		□縁部~体部内面ミガキ 体部外面不定方向ヘラ削り	□唇部上端摩耗・欠損 あり
19-5	鉢	5/6 3/6 5/6			15.2 6.4 13.7	赤褐色-暗赤褐色 小砂粒やや多量 良好		胴部外面縦位ヘラ削り後□ 縁部内外面横ナデ下端横位 ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部外面ヘラ削り 内面ナ デ	胴部内面ヘラ痕残り、 外面一部黒変 剝離激 しい
19-6	鎌	1/2		長さ	7.5	鉄製			

第21号住居跡 (第247~249図 図版91)

台地南西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは2 B31他である。第20A・B号住居跡



- 1 黒色土 (若干の炭化粒を含む、し
まりはない)
- 2 黒褐色土 (ローム粒少量散在的に
混入、若干の粘性をおびる)
- 3 暗褐色土 (炭化粒を多量混入、若
干の焼土粒を含む)
- 4 明褐色土 (ローム粒多量混入、若
干の焼土粒が散在する)
- 5 暗褐色土 (ロームブロック粒を少
量混入、しまりはない)
- 6 明褐色土 (ローム粒+小粒のロ
ームブロック多量混入、しまりはない)

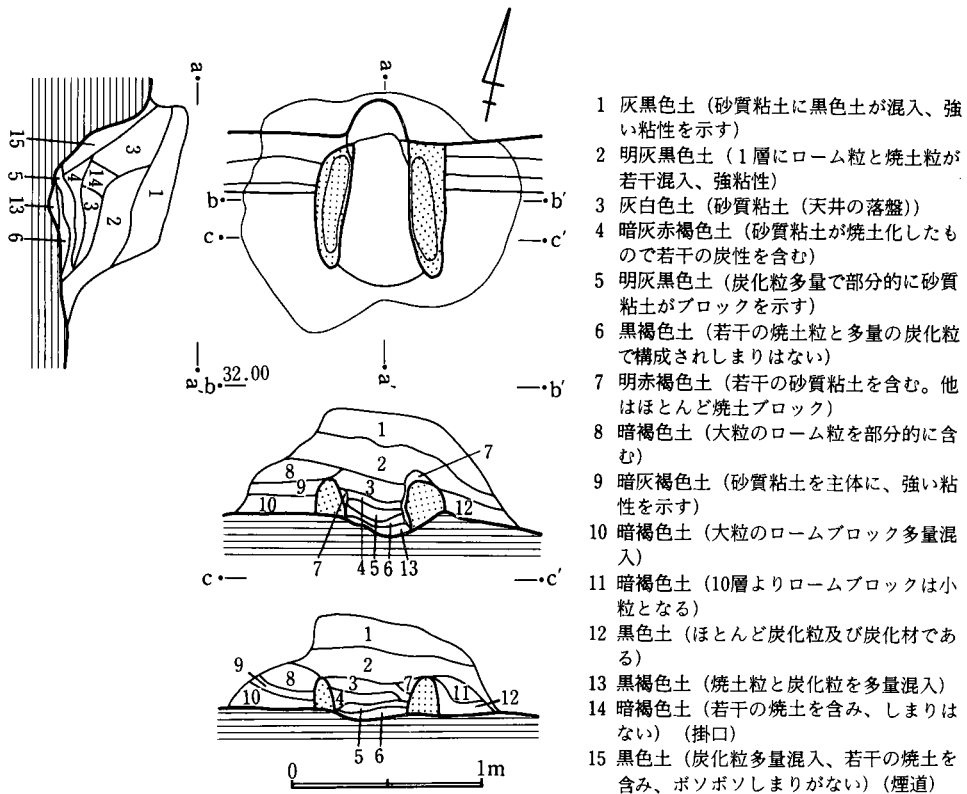
第247図 第21号住居跡実測図 (1/60)

とは重複関係にあり、本跡が新しい。

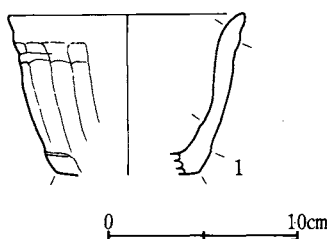
遺構 西壁3.60m、北壁3.60mあり、面積13.50㎡で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央にありN12°Wである。壁は4辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約25cm、深さ約10cmをそれぞれ計り、壁溝巾は広めでしっかり掘られている。床面は凹凸が若干見られる程度で平坦である。柱穴は5個検出されP₁~P₄は対角線上に位置し、P₅はカマドの対面にある。P₅は深さ10cm程で他の柱穴よりは非常に浅い。

カマド 北壁中央にあり遺存状態は良好である。壁への掘り込みは、約20cm程であり、壁溝は袖部外側で消える。火床部は全体的に浅い楕円状を呈するが、焼土粒は少ない。カマドの構築は砂質粘土を使用している。

遺物出土状況 土層は一部攪乱を受けているがレンズ状の自然堆積を示している。3層中に炭・焼土粒が含まれるが、一部には多量に含まれており、住居廃棄後に一括して投棄された可能性がある。遺物は鉢が覆土中から出土している。



第248図 第21号住居跡カマド実測図 (1/40)



第249図 第21号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第21号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体	法 量 cm ()は推定	口 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
21-1	鉢		1/2 1/3 1/4		(12.4) (7.5) 8.3	明褐色-暗褐色 小砂粒少	良好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り 内面ナデ 胴 部下端手持ちヘラ削り 底 部ヘラ削り	

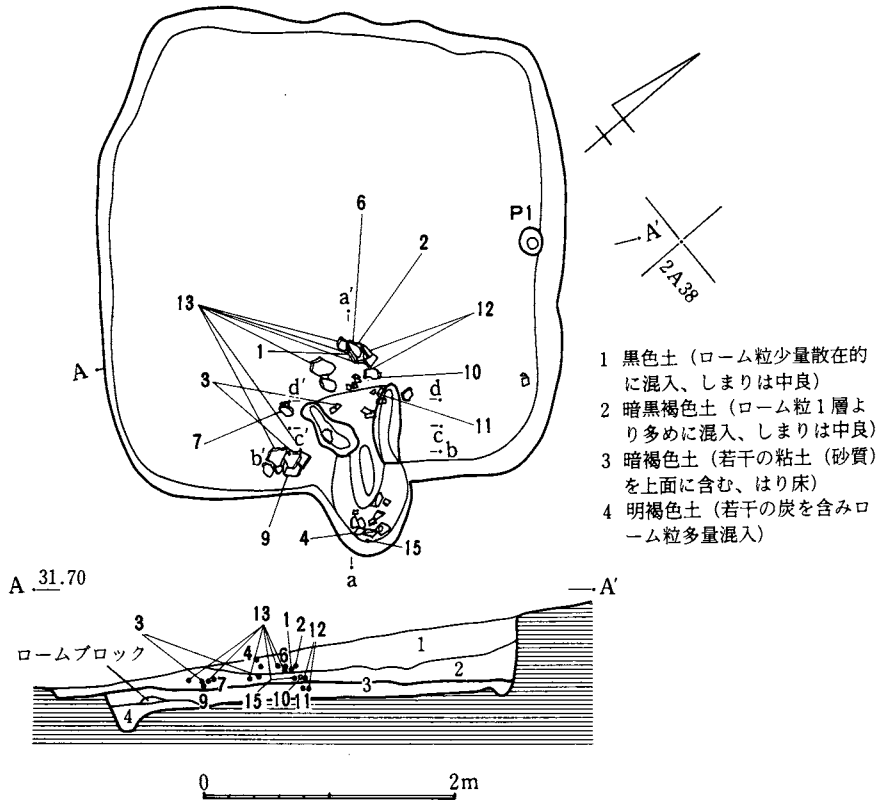
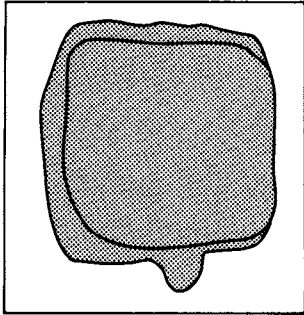
第22A号住居跡 (第250~252図 図版145・161)

台地南西端の緩傾斜面、調査区の西側に位置し、グリッドは2 A37他である。第22B号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。

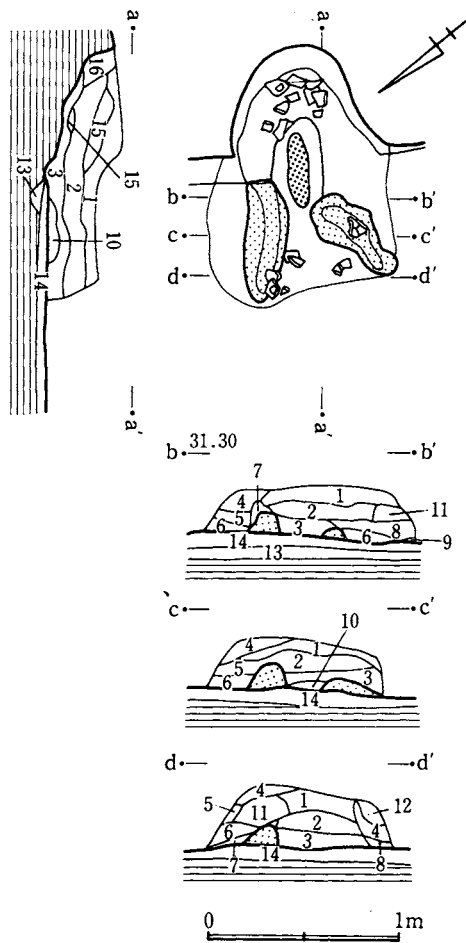
遺構 北東壁3.25m、南東壁3.25m、南西壁3.75m、北西壁2.95mあり、面積12.93㎡でやや台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは南東壁の中央に位置しS51°Eである。壁は、北東・南東の第22B号住居跡壁を再利用し、北西・南東・南西壁を拡張したものと推定される。壁はほぼ垂直をもって立ち上がると推定されるが、緩傾斜のため南西側の壁は低く約10cm、北側は約50cmを計る。壁溝はない。床面は拡張区以外貼床が施されている。柱穴は1個検出され、この柱穴は貼床面で検出されたことから、本跡に伴うものである。

カマド 南東壁中央に位置するが若干不明瞭な部分があった。カマドは貼床上に構築され、壁への掘り込みは約50cmと深い。火床部が奥まった所にあり、径40×10cmの細長い形状を呈する。カマドは砂質粘土をもって構築されている。カマド内の特に煙道部付近には遺物が多く見られ、15の丸玉も出土している。

遺物出土状況 土層は自然堆積状況を示し、貼床が明瞭であった。遺物は坏、高台付皿、高台付坏、甕、丸玉が出土している。遺物のほとんどがカマドの付近に散在し、6の高台付皿と13の甕がある程度の器形復元ができたが、他は破片であった。また、不明鉄製品の小破片も出土している。

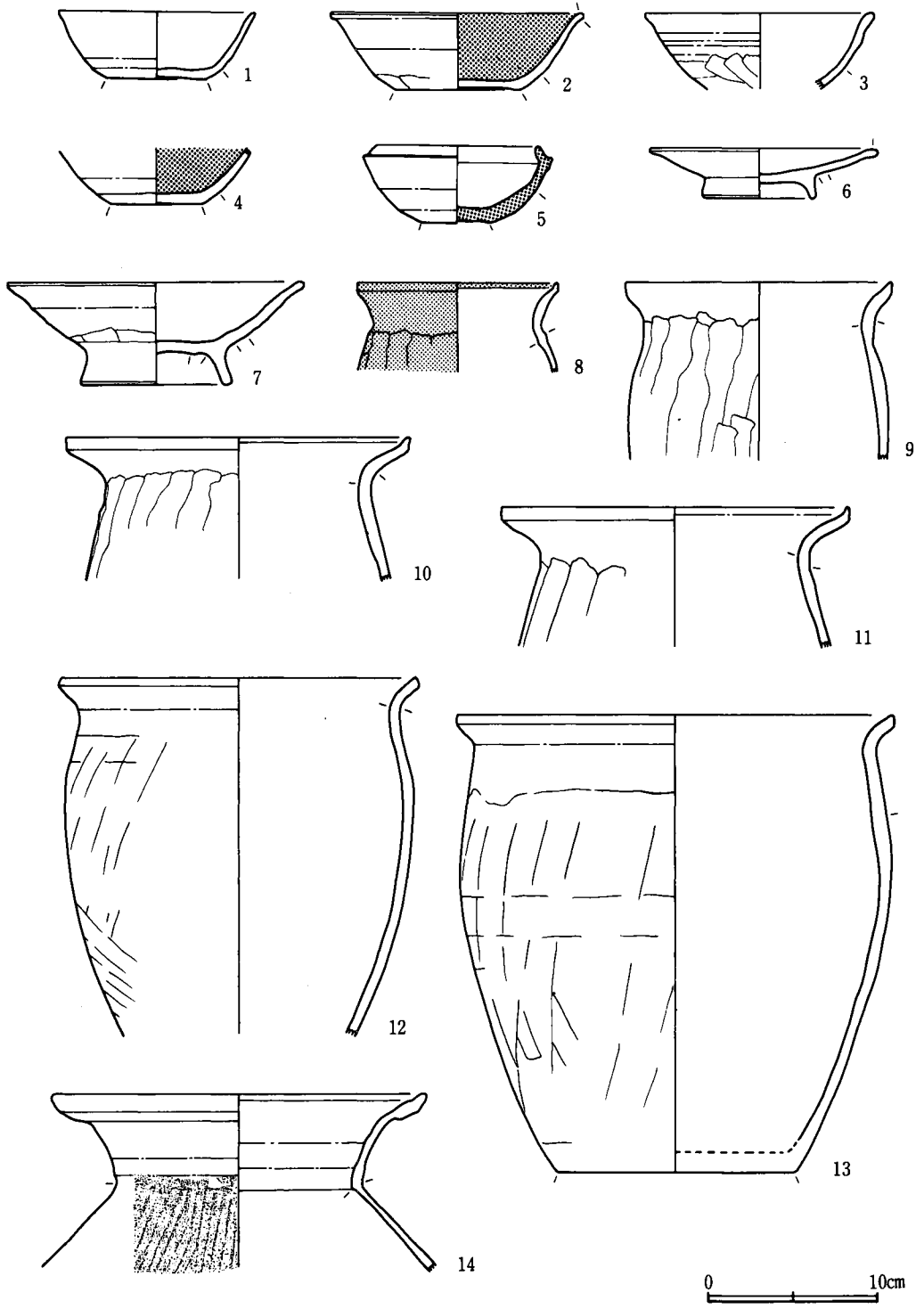


第250図 第22A号住居跡実測図 (1/60)



- 1 黒色土 (砂質粘土、焼土粒混入強い粘性を示す)
- 2 灰赤褐色土 (砂質粘土、焼土粒、焼土ブロック混入、サラサラしている)
- 3 暗黒褐色土 (砂質粘土少量混入、強い粘性を示す)
- 4 暗褐色土 (砂質粘土が部分的に集中する、粘性は中)
- 5 暗灰褐色土 (砂質粘土及び粘土ブロックを主体に構成される)
- 6 黒褐色土 (炭化粒を主体に構成されボソボソしてしまりが無い)
- 7 灰白色土 (砂質粘土)
- 8 明黒褐色土 (ロームブロック少量、砂質粘土多量混入、粘性は中)
- 9 褐色土 (ローム粒に砂質粘土を混入、強い粘性を示す)
- 10 暗褐色土 (ローム粒少量混入、炭化粒混入、しまりは無い)
- 11 灰黒褐色土 (砂質粘土多量及び焼土粒少量混入)
- 12 灰褐色土 (砂質粘土多量及び焼土塊多量混入)
- 13 明褐色土 (若干の炭を含みローム粒多量混入)
- 14 暗褐色土 (若干の粘土(砂質)を上面に含む、後行する住居の床面かと思われる) 貼床
- 15 灰褐色土 (砂質粘土を主体としローム粒、焼土粒、小岩を若干混入する)
- 16 黒色土 (ほとんど炭で構成され、砂、焼土粒を若干混入) (煙道)

第251図 第22A号住居跡カマド実測図 (1/40)



15



0 2cm

第252图 第22A号住居跡出土遺物実測図 (1~14 1/4、15 1/2)

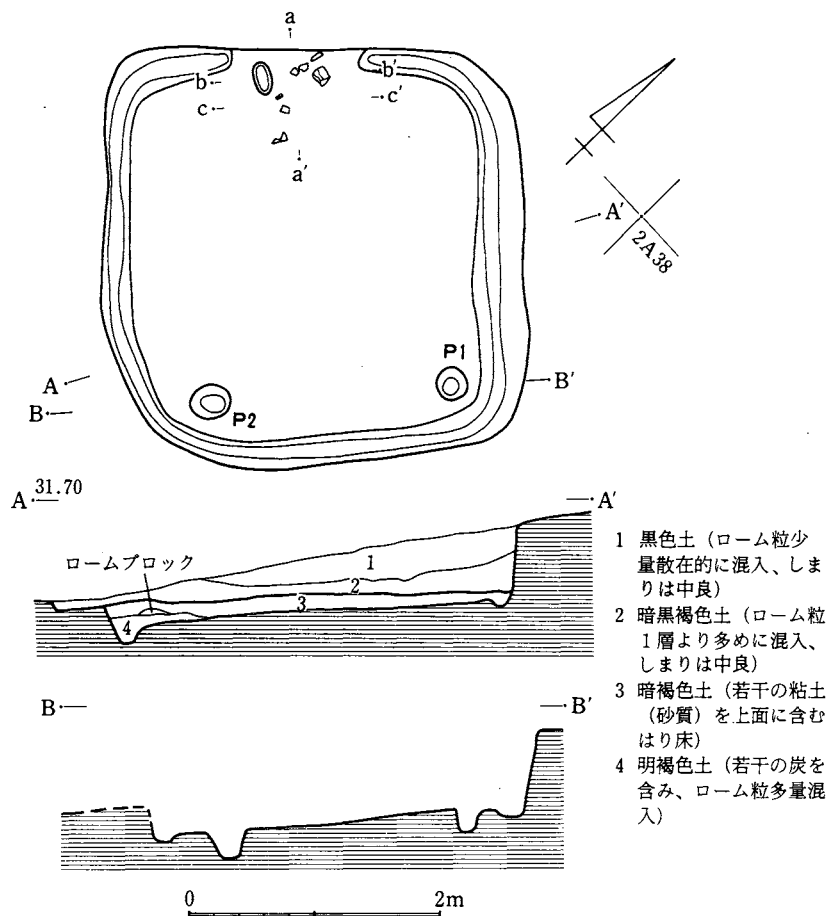
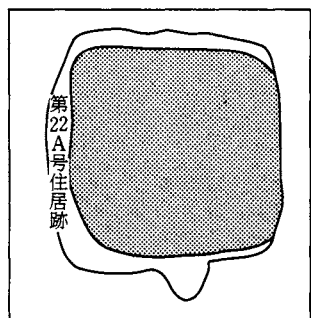
第22A号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法量 cm 底径 器高	口径 胎土 焼成	色調 内-外	成形・調整	備考
22A-1	坏		$\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$	(11.6) (5.8) 3.9		暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	器外面一部スス付着
22A-2	坏		$\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$	(15.0) (7.4) 4.5		内黒-赤褐色 小 砂粒少 良好	体部下端手持ちヘラ削り 内面ミガキ 底部ヘラ削り	内黒 口縁付近スス一部付着
22A-3	坏		$\frac{4}{8}$ — —	13.6 — (4.6)		赤褐色-暗褐色 小砂粒少 良好	体部下端手持ちヘラ削り	
22A-4	坏		— $\frac{3}{8}$ 完	— 5.3 (3.3)		内黒-茶褐色 小 砂粒少 良好	体部下端回転ヘラ削り 内面ミガキ 底部回転糸切り 後全面手持ちヘラ削り	内黒
22A-5	坏		$\frac{1}{8}$ — — 蓋受径	(9.7) — 4.5 (11.4)		灰色-灰色 小砂粒多 い 堅緻 良好	外面下半及び底部回転ヘラ削り調整 他は横ナデ	須恵器
22A-6	高台付皿		$\frac{3}{8}$ 完 完 裾径	13.5 — 2.9 6.8		明褐色-明褐色 小砂粒少 良好	体部内面ミガキ様ナデ 高台部ナデ	
22A-7	高台付坏		$\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$ 裾径	(17.4) — 6.0 9.0		暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好	内面ミガキ 坏底部回転糸切り 後周縁回転ヘラ削り 高台部横ナデ	
22A-8	甕		$\frac{4}{8}$ $\frac{1}{8}$ —	12.0 — (5.3)		暗黒褐色土-赤彩 小砂粒少 良好	口唇をつまんで口縁部横ナデ 後胴部上半縦位ヘラ削り	外面赤彩
22A-9	甕		$\frac{3}{8}$ $\frac{1}{8}$ —	(16.0) — (10.3)		暗褐色-明褐色 小砂粒微 良好	口唇を微妙につまんで口縁部 横ナデ後胴部外面縦位ヘラ削り 内面ナデ	
22A-10	甕		$\frac{1}{8}$ $\frac{1}{8}$ —	20.6 — (8.0)		明褐色-明褐色 小砂粒微 良好	口唇をつまんで横ナデ後胴部 外面縦位ヘラ削り 内面ナデ	剝離激しい
22A-11	甕	口縁部のみ	$\frac{3}{8}$ — —	20.3 — (8.1)		褐色-黒褐色 小 砂粒多 良好	口縁部横ナデ後胴部縦位ヘラ削り 内面ナデ	
22A-12	甕		$\frac{1}{8}$ — $\frac{1}{8}$	(20.9) — (20.7)		赤褐色-褐色 大 砂粒多 不良	口縁部横ナデ後胴部上面縦位 下半斜位ヘラ削り調整	内面剝離著しい 外面部分的に摩耗著しい
22A-13	甕		$\frac{1}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{5}{8}$	(25.7) 13.8 26.4		黒褐色-褐色 小 砂粒多 良好	粘土紐輪積み成形 口縁部横ナデ 胴部外面斜位ヘラ削り 胴部内面ナデ 底部ヘラ削り	
22A-14	甕	口縁部のみ	$\frac{5}{8}$ — —	22.0 — (10.2)		茶褐色-茶褐色 小砂粒少 良好	折返し口縁をもち口縁部横ナデ 胴部外面叩目 内面ナデ	
22A-15	丸玉			高さ 0.8 径 0.9 孔径 0.1		茶褐色	滑石 重量0.8g	

第22B号住居跡 (第253・254図)

台地南西端の緩傾斜面、調査区の西側に位置し、グリッドは2 A37他である。第22A号住居跡とは重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 南西壁2.90m、北西壁2.90mあり、面積10.09m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡で

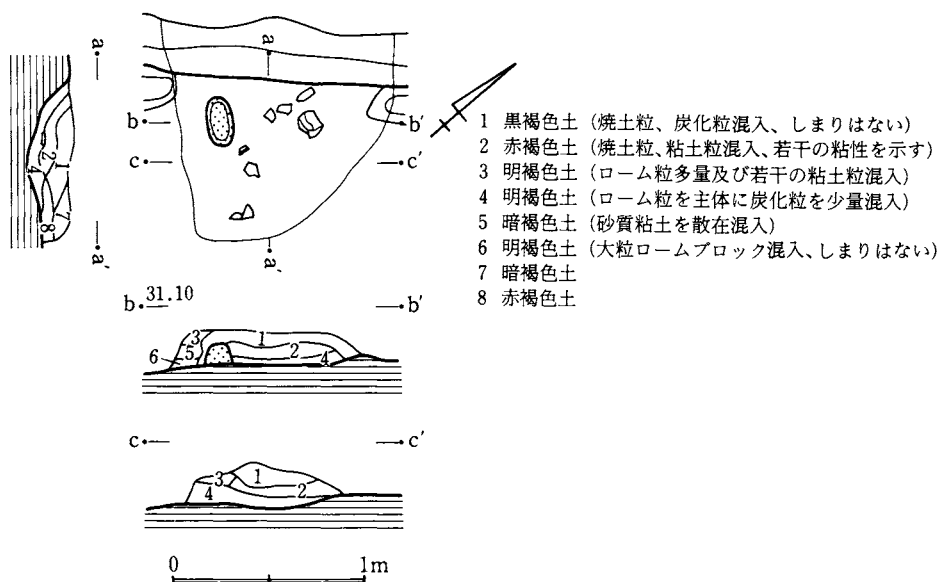


第253図 第22B号住居跡実測図 (1/60)

ある。カマドは北西壁の中央に位置しN46°Wである。壁は四辺ともほぼ垂直に立ち上がり、緩傾斜面のため南側が低い。北東壁は約60cmを計るが、他は第22A号住居跡の拡張によって高さは不明である。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は平坦である。柱穴は2個検出され、この柱穴は貼床除去後に検出されたことから本跡に伴うものである。両柱穴は南・東隅に位置し相対する様に配置されている。

カマド 第22A号住居跡にほとんど破壊されており、袖の一部が検出されたのみである。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。火床部は全体的に浅い播鉢状を呈する。遺物は小破片のみの出土である。

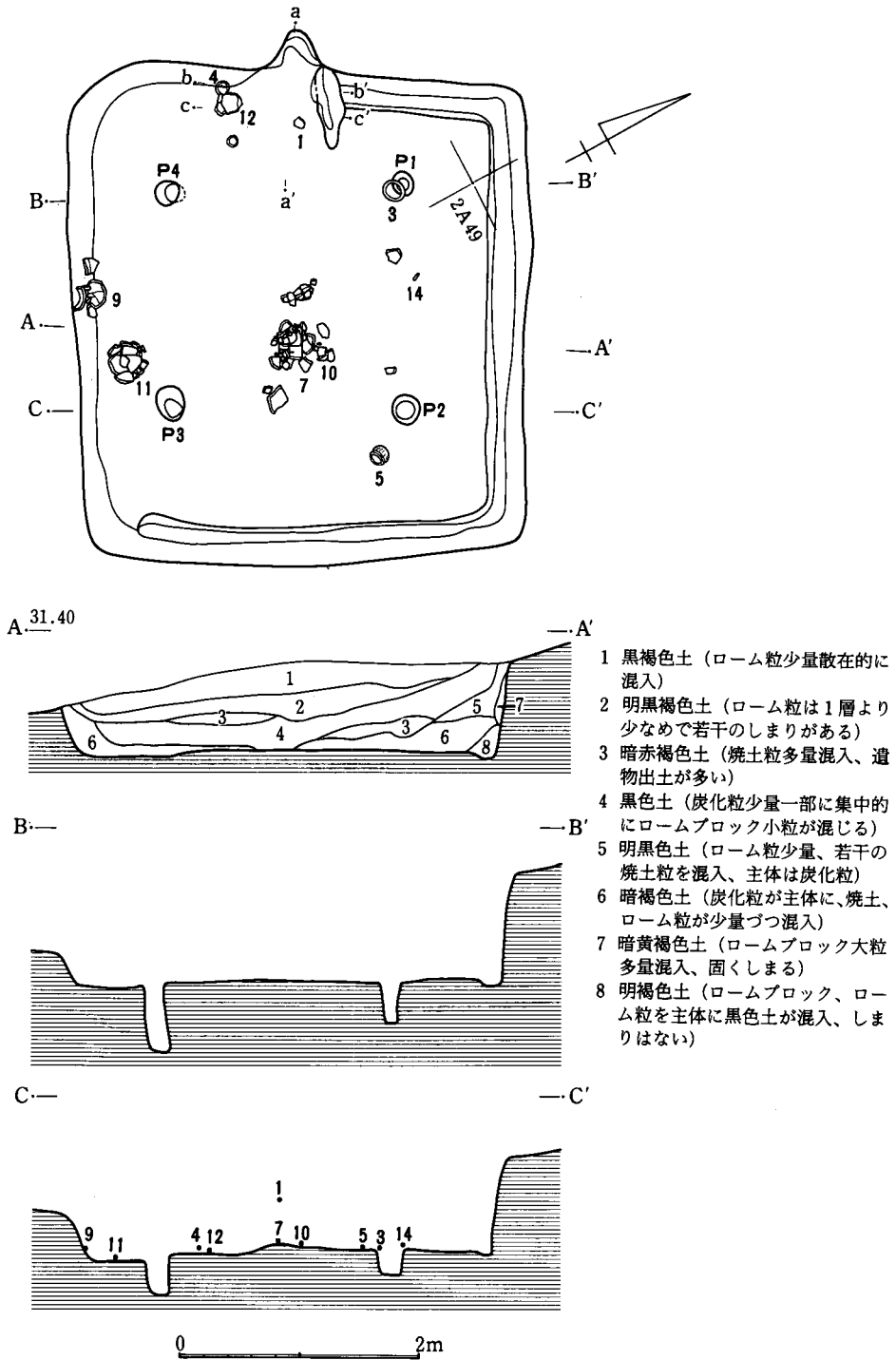
遺物出土状況 土層は自然堆積と推定されるが第22A号住居跡の貼床が施されている。遺物はカマド付近の小破片のみで図示できるものは無かった。



第254図 第22B号住居跡カマド実測図 (1/40)

第23号住居跡 (第255~258図 図版92・93・146)

台地南西斜面部、調査区西側に位置し、グリッドは2A49他である。

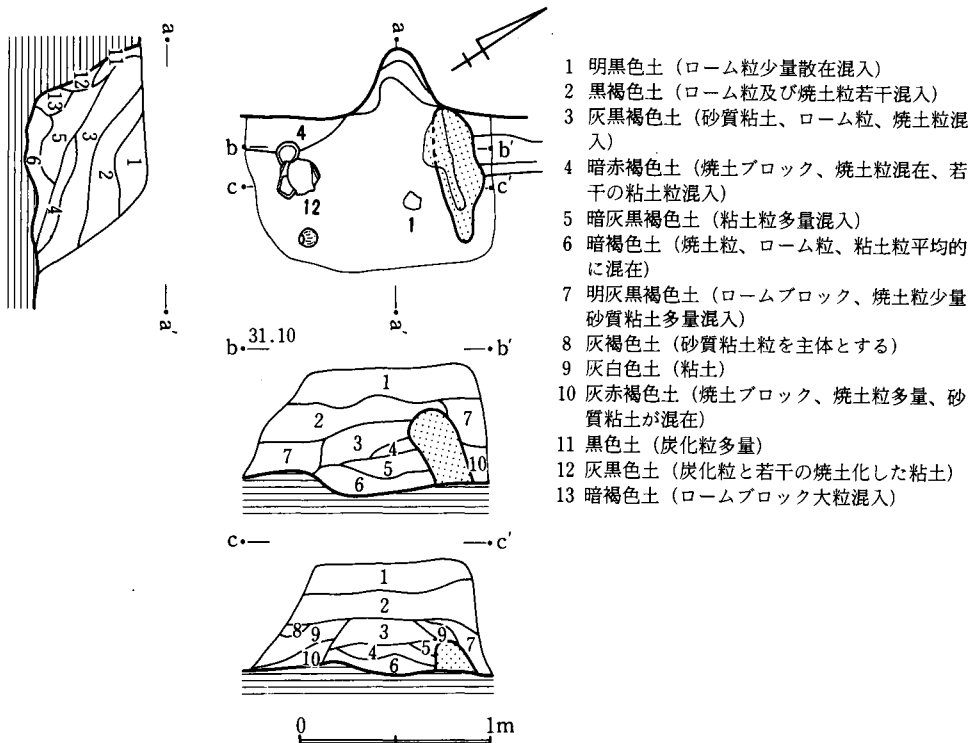


第255図 第23号住居跡実測図 (1/60)

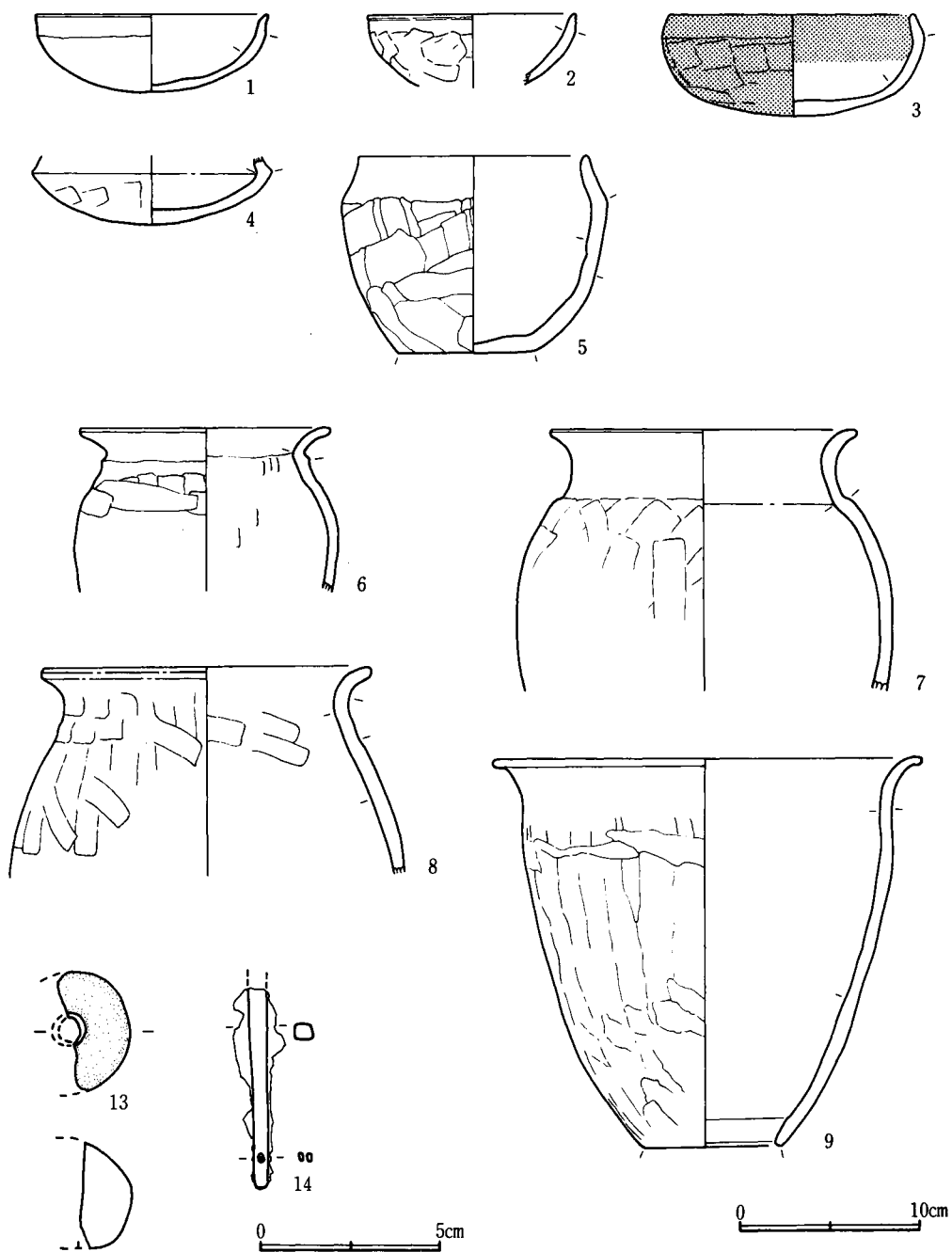
遺構 南西壁3.85m、北西壁3.65mあり、面積15.05㎡で西コーナーが隅丸ではあるが方形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN63°Wである。壁は北西・北東側がほぼ垂直に、南西・南東側がやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面から北コーナーで約90cm、南コーナーで約40cmを計り、斜面部の立地状態を表わしている。壁溝はカマド右袖部から南コーナーまでめぐり、巾約20cm、深さ約5cmを計る。斜面下方にめぐらないのは偶然でもあろうか。床面は多少の凹凸はあるがほぼ平坦である。柱穴は4個検出され、それぞれ対角線上に配置されている。

カマド 北西壁の中央に位置するが左袖が検出されず遺存状態は不良であった。壁への掘り込みは約30cm程である。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。火床部は全体的に浅い播鉢状を呈する。遺物は左袖部付近に、坏と甕が出土している。

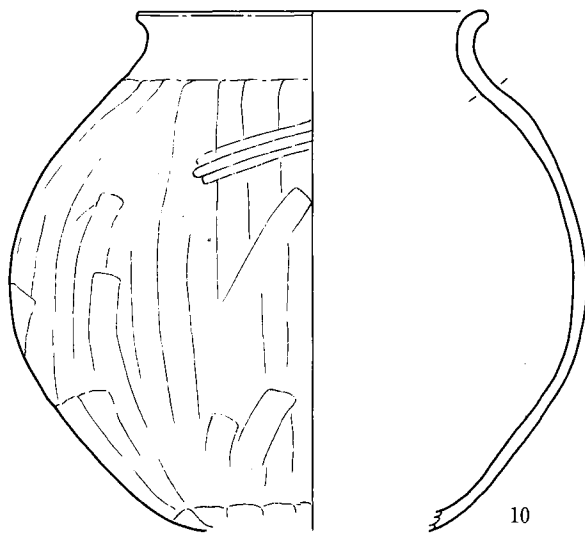
遺物出土状況 土層はレンズ状に自然堆積をしている。遺物はほとんど床直からの出土であり、3・5の埴、9の甑は完形、7・10・11の甕は一括してそれぞれ廃棄されたものと推定されるが、床面に広範囲に散在している。また、その他に土製支脚の一部も出土している。



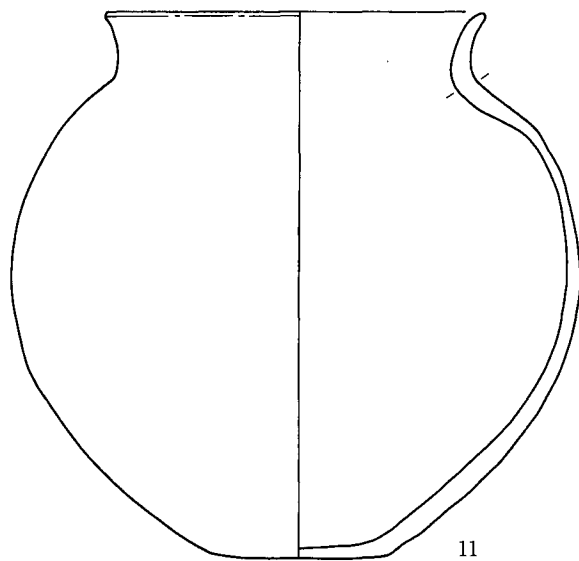
第256図 第23号住居跡カマド実測図 (1/40)



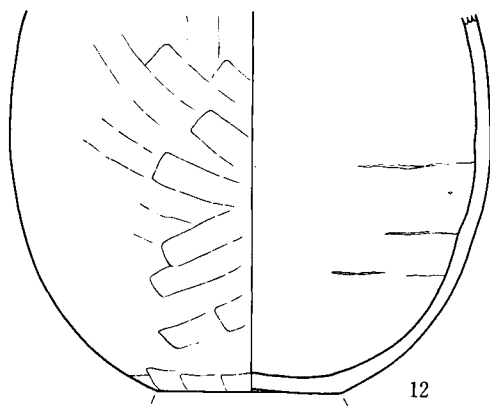
第257图 第23号住居跡出土遺物実測図 (1~9 1/4、13・14 1/2) No 1



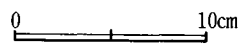
10



11



12



第258図 第23号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No. 2

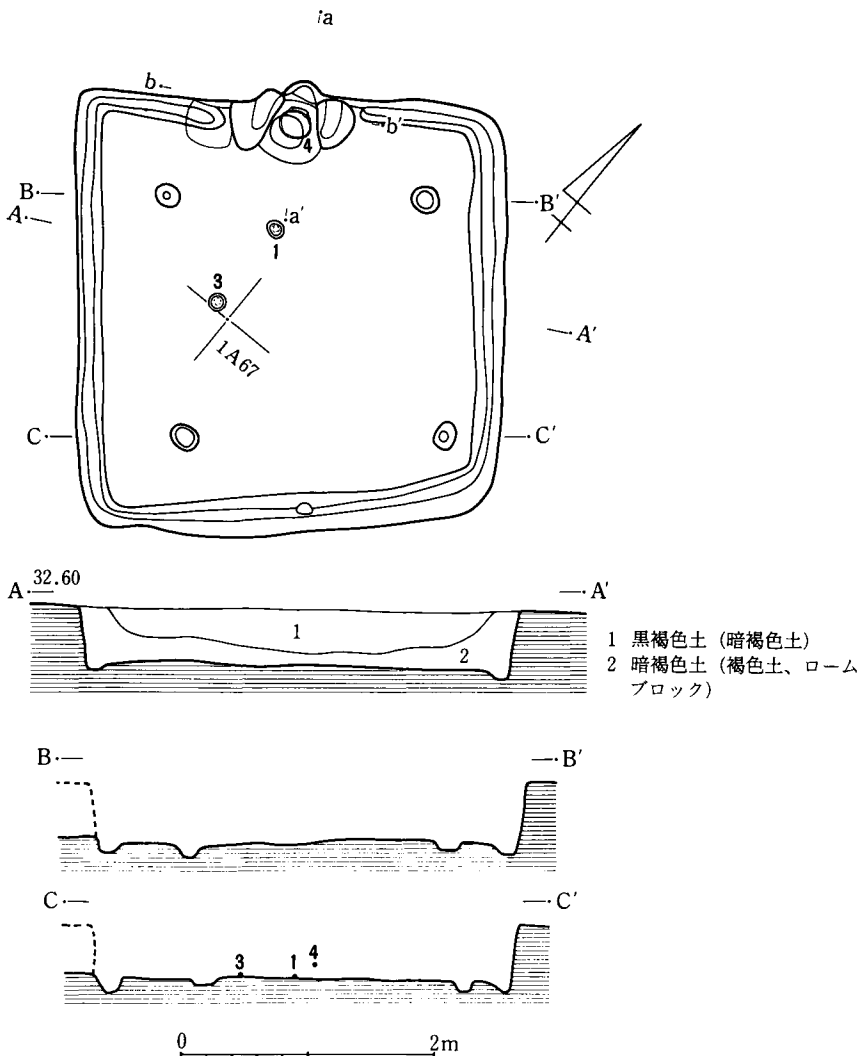
第23号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 底径 ()は推定	法量 cm 底径 器高	口径 胎土 焼成	色調 内-外	成形・調整	備考
23-1	坏		3/1 %	(13.1) — 4.3	13.8 — 4.3	灰褐色-黄褐色 小砂粒微 精選 良好	内面粗いヘラ磨き 口縁部 横ナデ 体部外面ヘラ削り 後丁寧なナデ 内面ミガキ	
23-2	坏		3/1 %	— (4.2)	11.8 — (4.2)	明褐色-茶褐色 小砂粒少 良好	口縁部横ナデ 体部外面ヘ ラ削り 内面ナデ	
23-3	埴		完 完 完	— 5.6 稜径	13.8 — 5.6 14.7	黒色-黒褐色 小 砂粒少 良好	口縁部へ体部内面上半横ナ デ 下半ミガキ様ナデ 体 部外面ヘラ削り	内外面部分的にスス付 着 口縁部内面に一部 赤彩 外面に赤彩
23-4	坏		3/1 3/1 3/1 %	— 4.0 蓋受径	12.2 — 4.0 13.4	赤褐色-茶褐色 小砂粒少 良好	口縁部横ナデ 体部内面ミ ガキ 体部外面ヘラ削り後 ナデ	口唇部上端欠損著しい
23-5	埴		完 完 完	— 7.6 10.7 胴最大径	13.0 7.6 10.7 15.0	明褐色-黒褐色 小砂粒少 良好	口縁部内外面横ナデ後胴部 外面上半右下り斜位 下半 左下り斜位ヘラ削り 底部 ヘラ削り	外面スス附着し剝離状 を呈す
23-6	甕		完 3/1 %	— (9.0)	14.1 — (9.0)	赤褐色-赤褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ 胴部外面上 半斜位ヘラ削り後ナデ	
23-7	甕		3/1 — %	— (14.4) 胴最大径	(17.0) — (14.4) 21.2	明褐色-黒褐色 小砂粗多 石英粒 含 良好	口縁部横ナデ後胴部外面斜 位ヘラ削り 内面ナデ	器外面にスス附着 外 面剝離激しい
23-8	甕		3/1 — %	— (11.5)	17.8 — (11.5)	茶褐色-明褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ後胴部外面斜 位ヘラ削り 内面上半ヘラ 削り 下半ナデ	
23-9	甕		完 完 完	— 7.6 21.0	24.4 7.6 21.0	褐色-暗黒褐色 小砂粒少 良好	口縁部内外面横ナデ後胴部 外面上半縦位ヘラ下半斜位 ヘラ削り後縦位ヘラナデ 内面ナデ後上半縦位下半斜 位横位ヘラナデ下端横位ヘ ラ削り	
23-10	甕		完 3/1 %	— (27.2) 胴最大径	18.0 — (27.2) 29.8	茶褐色-赤褐色 小砂粒多 含長石 石英 良好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り後部分的ナデ 内面ナデ	器外面部分的黒斑
23-11	甕		3/1 完 完	— 9.0 28.2 胴最大径	(19.5) 9.0 28.2 29.5	赤褐色-茶褐色 小砂粒多 含石英 良好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り後ナデ 内面ナ デ 底部ヘラ削り	器面は摩耗、剝離が著 しく調整不明瞭
23-12	甕		— 3/1 %	— 19.6 胴最大径	— 9.6 19.6 24.8	明褐色-赤褐色 砂粒多 不良	胴部外面縦位斜位ヘラ削り 内面ナデ 底部ヘラ削り	器面は摩耗、剝離が著 しく調整不明瞭
23-13	土玉	3/1		高さ 径 孔径	2.9 3.3 0.8	土製	重量16g	
23-14	不 鉄 製 品	基部のみ		長さ	5.5	鉄製		

第24号住居跡 (第259~261図 図版94・95・176)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A 67他である。第25号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。また第72号掘立柱建物跡とも重複関係にある。

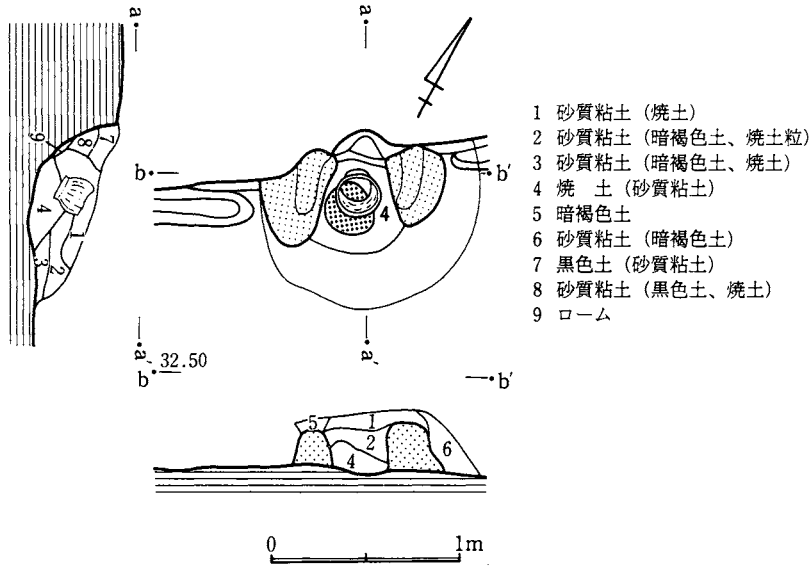
遺構 南西壁3.35m、北西壁3.25m、北東壁2.29m、南東壁3.05mあり、面積 11.08 m² で北・東コーナーが隅丸のやや台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN37°Wである。壁は四辺ともほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約45cm計る。壁溝はカマド両袖部から全周し、巾約20cm、深さ約10cmと広く深い。床面は全体的に凹凸があり、中央がやや高く、壁溝周辺がやや低い状態であった。柱穴は4個検出され、対角線上に配置が認められるが浅い。



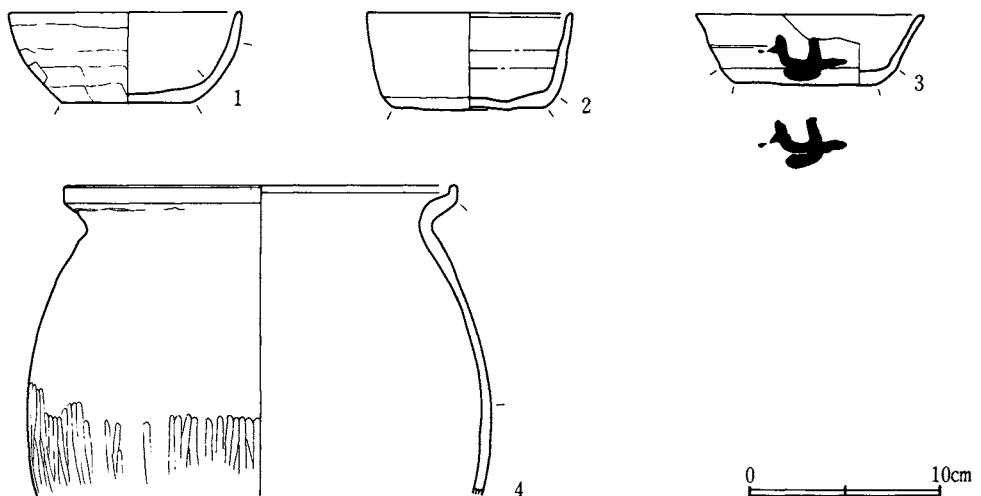
第259図 第24号住居跡実測図 (1/60)

カマド 北西壁中央に位置し両袖が僅かに遺存する状態であった。壁への掘り込みは約10cmと少ない。カマドの構築に砂質粘土を使用している。火床部は径約25cmの浅い播鉢状を呈していた。カマド内からは4の甕の上半部が倒立した状態で出土している。

遺物出土状況 土層はローム粒・ロームブロックの混入が多少みられるが自然堆積である。土層観察より第25号住居跡との新旧関係が明瞭に把握できた。遺物は坏、甕が出土しており、1・3の坏は完形で床直からの出土である。



第260図 第24号住居跡カマド実測図 (1/40)



第261図 第24号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第24号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm 底 径 器 高	口 径 底 径 器 高	色 調 内-外 胎 土 焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
24-1	坏	完 完 完			12.0 6.8 4.7	黒褐色-赤褐色 小砂粒少 良好	口縁部~体部内面横ナデ 体部下端ヘラ削り 底部ヘ ラ削り後ナデ	外器面に輪積み痕 内 面スス付着
24-2	坏	% % %			(10.8) (8.0) 5.0	暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好	体部内外面横ナデ 下端ヘ ラ削り 底部回転ヘラ削り	
24-3	坏	% 完 %			11.6 7.9 3.7	明褐色-明褐色 砂粒やや少 良好	体部下端回転ヘラ削り 底 部左回転ヘラ削り	墨書 不明
24-4	甕	完 -%			20.6 - (16.0) 胴最大径 24.4	赤褐色-赤褐色 小砂粒少 良好	口唇をつまんで口縁部横ナ デ 胴部内外面ナデ 外面 下半縦位ヘラナデ	

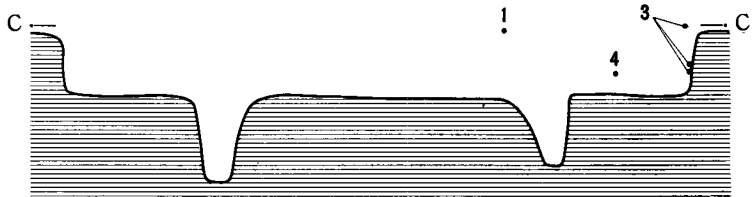
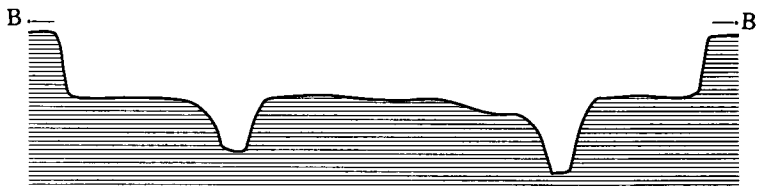
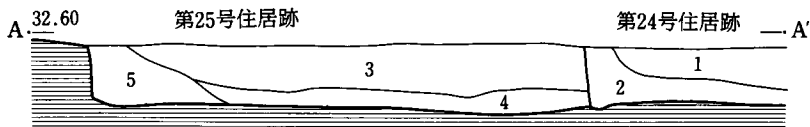
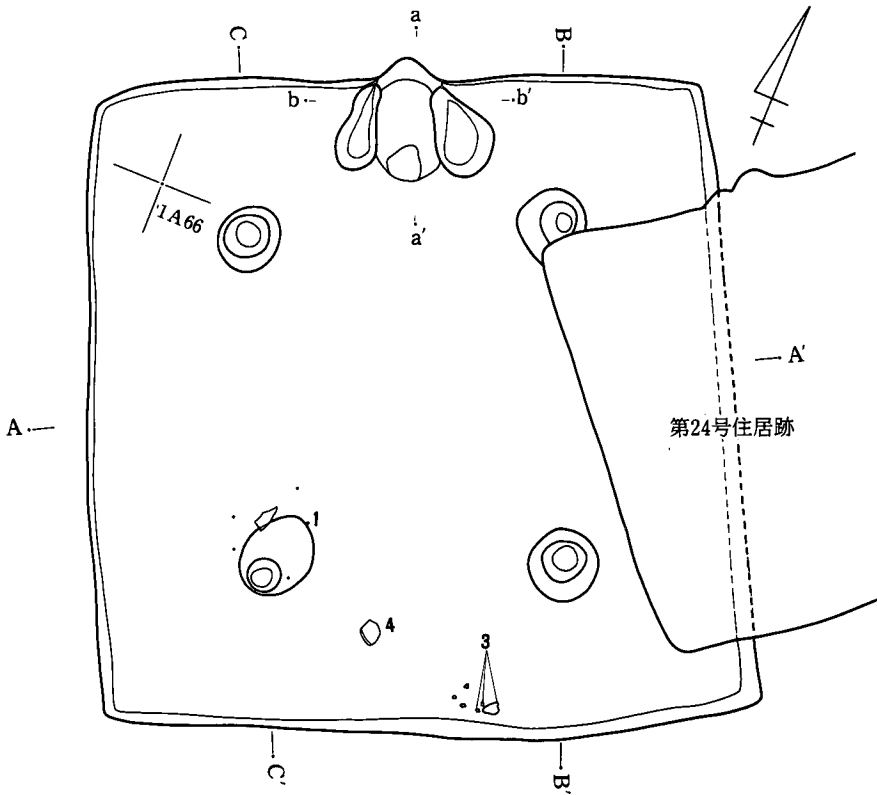
第25号住居跡 (第262~264図 図版95・161)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A66他である。第24号住居跡と重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 南西壁4.75m、北西壁4.80mあり、面積25.93㎡あり、方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN21°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり確認面より約45cmを計る。壁溝は検出されていない。床面は全体的に固く小さな凹凸が少し見られるがほぼ平坦である。柱穴は4個検出されそれぞれ対角線上に配置され、各柱穴には中程に有段が確認された。

カマド 北西壁中央に位置し比較的良好な状態で検出された。壁への掘り込みは約15cm程である。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径25×30cmの浅い播鉢状を呈していた。カマドの前が若干高くなる固い床面であった。

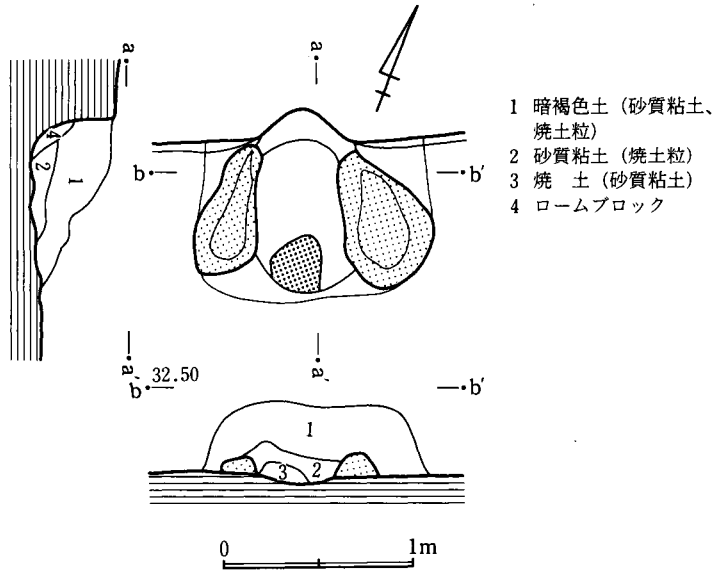
遺物出土状況 土層はローム粒・ロームブロックの混入が見られるが第24号住居跡と同様自然堆積であった。土層観察より本跡が古いことが判明した。遺物は坏・高坏・砥石が出土している。3の坏は南東壁に密着するような状態で出土した。また、その他として土製支脚の一部が覆土中から出土している。



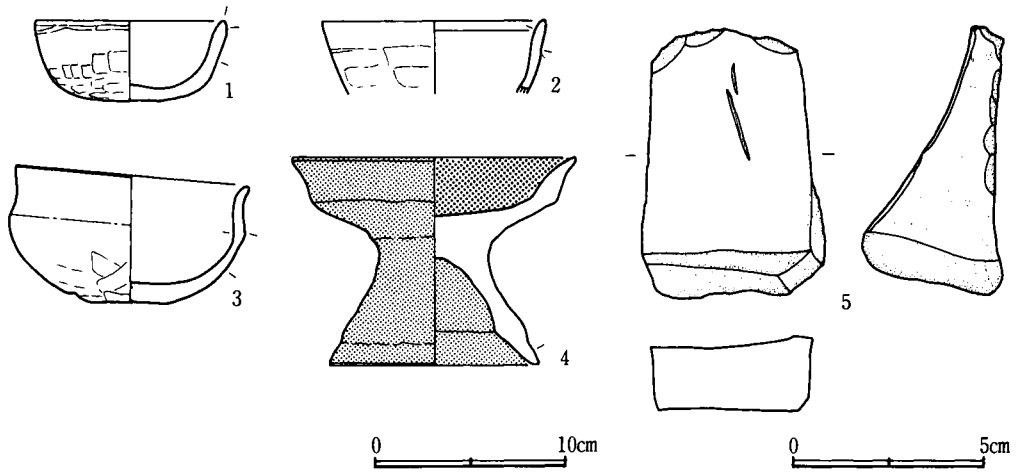
- 1 黒褐色土 (暗褐色土)
- 2 暗褐色土 (褐色土、ロームブロック)
- 3 黒褐色土 (暗褐色土、ローム粒)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒)
- 5 褐色土 (ローム粒、黄褐色土)

0 2m

第262図 第25号住居跡実測図 (1/60)



第263図 第25号住居跡カマド実測図 (1/40)



第264図 第25号住居跡出土遺物実測図 (1~4 1/4、5 1/2)

第25号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm	口 径 底 径 器 高	色 調 内-外 胎 土 焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
25-1	坏		% — —	(10.0) — 4.1	11.8 — (3.8)	黒褐色—淡褐色 小砂粒微 良好	口唇部面取り 体部外面上 半ナデ後ヘラ削り 下半ヘ ラ削り 内面ナデ	
25-2	坏		完 — %	(12.3) — 6.5	11.8 — (3.8)	茶褐色—茶褐色 小砂粒少 良好	口縁部横ナデ 体部外面ヘ ラ削り 内面ヘラナデ	
25-3	坏		% — —	(12.3) — 6.5	11.8 — (3.8)	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ 体部外面ヘ ラ削り 内面ヘラナデ	
25-4	高 坏		% — —	(15.0) — — 掘径 (11.1)	(15.0) — 10.7 (11.1)	内黒—赤褐色 小 砂粒多 やや不良	坏部内面ミガキ 口縁部外 面横ナデ 外面ヘラナデ 脚部端横ナデ 脚部奥ヘラ ナデ	外面は全面赤彩 内黒
25-5	砥 石	1/4	長さ 最大幅	(6.8) 4.5	(6.8) 4.5	凝灰岩	重さ117g	

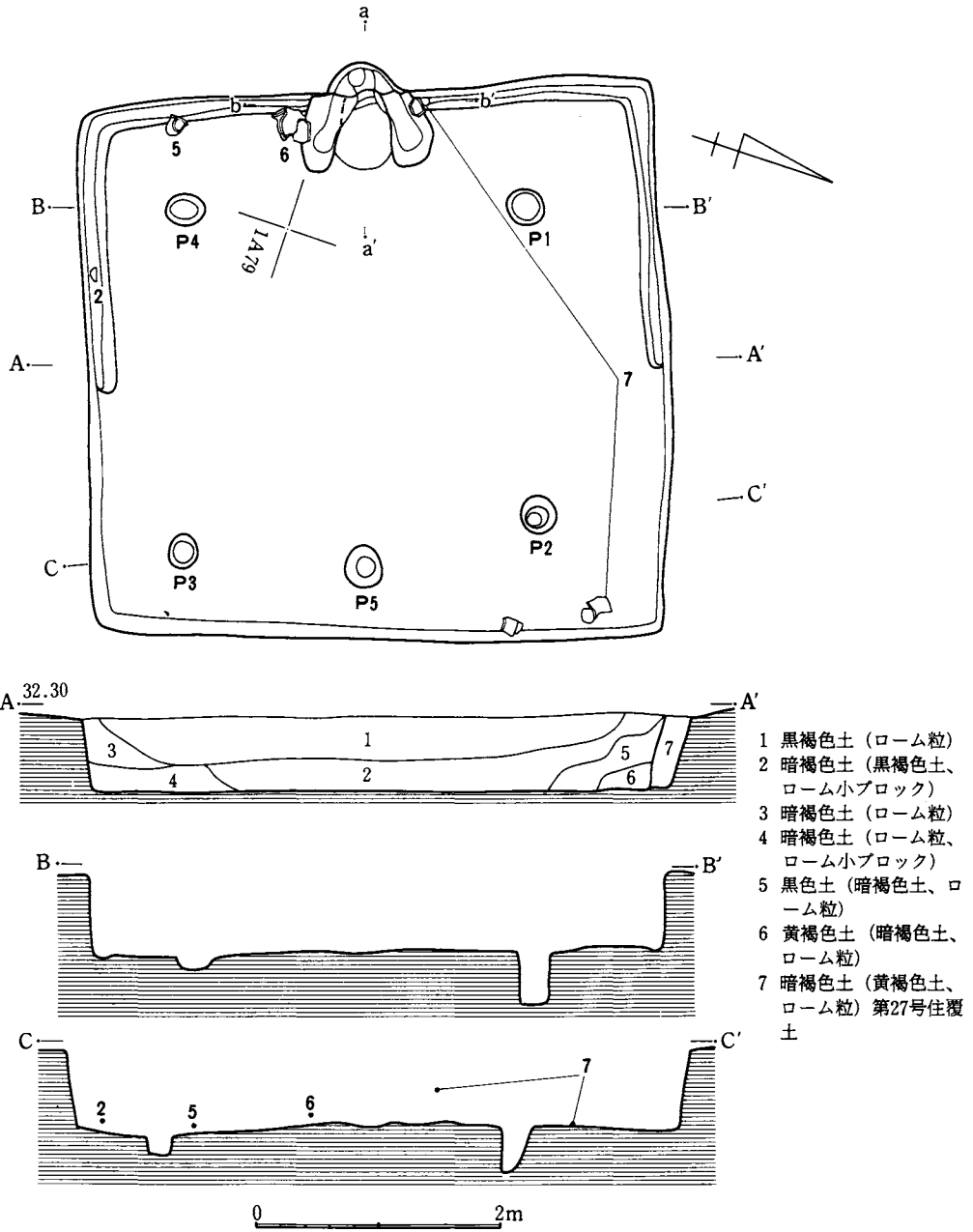
第26号住居跡 (第265～267図 図版96・147)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1A79他である。第27号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。第73号掘立柱建物跡との重複関係は不明である。

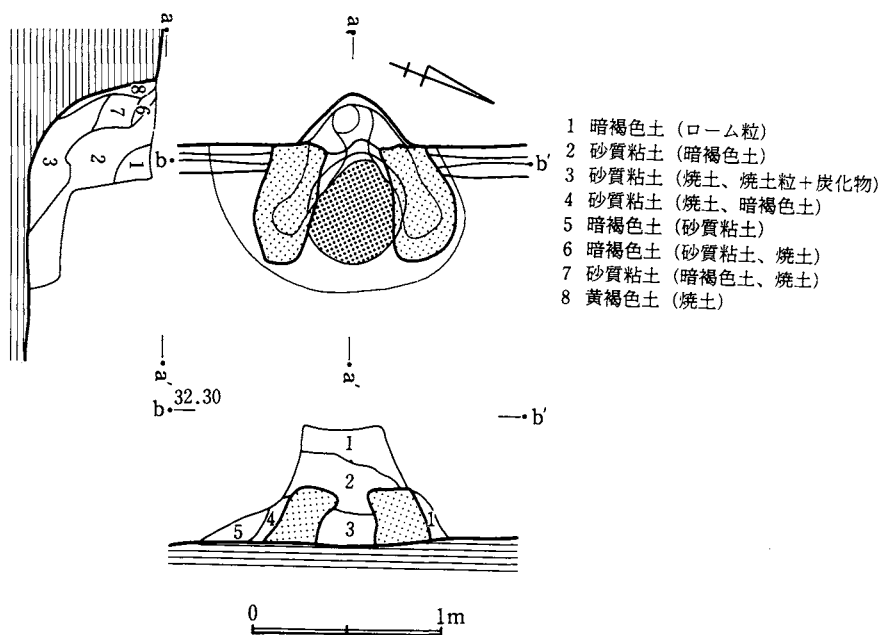
遺構 南壁4.10m、西壁4.65m、北壁4.40m、東壁4.45mあり、面積20.89m²でやや台形に近い平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは西壁中央に位置しS69°Wである。壁は四辺ともほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝は西側がカマドを除いて半周するようにめぐり、巾約15cm、深さ数cmと浅くなっており、東側については検出できなかった。床面は平坦で固く締まっているが東側半分は第27号住居跡に貼床を施している。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置されているが南側柱穴のP₃・P₄は浅い。P₅はカマドの対面にあり、深さ20cmを計る。

カマド 東壁中央に位置し良好な状態で遺存していた。壁への掘り込みは約25cmあり、煙道部が若干溝状を呈する。カマドの構築には砂質粘土を使用していた。火床部は径60×55cmあり浅い播鉢状を呈していた。

遺物出土状況 土層は第27号住居跡を切っていることが明瞭に観察され、レンズ状の自然堆積である。遺物は坏・甕が出土している。7の甕はカマド右袖部と東壁近くの床直の破片が接合している。2の坏もほぼ床直からの出土である。



第265図 第26号住居跡実測図 (1/60)

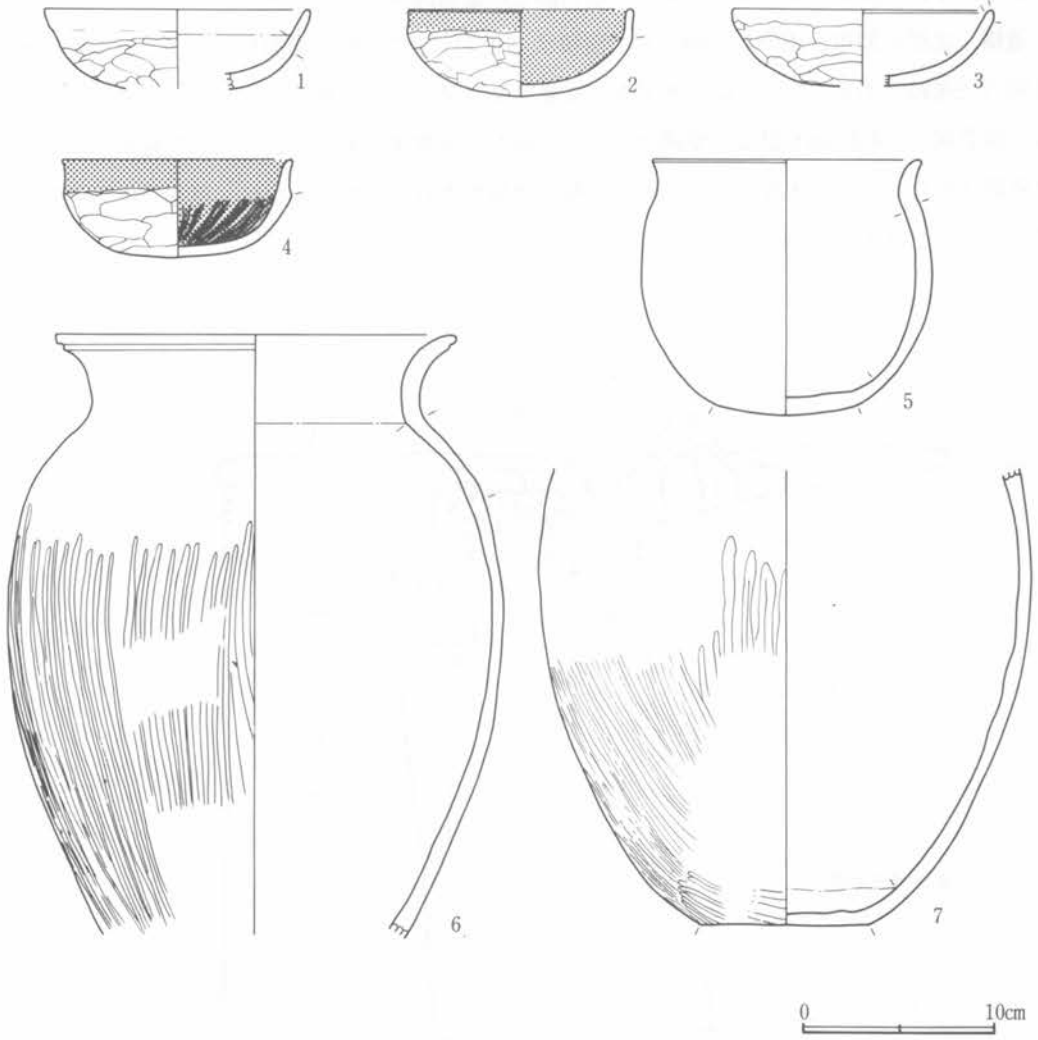


- 1 暗褐色土 (ローム粒)
- 2 砂質粘土 (暗褐色土)
- 3 砂質粘土 (焼土、焼土粒+炭化物)
- 4 砂質粘土 (焼土、暗褐色土)
- 5 暗褐色土 (砂質粘土)
- 6 暗褐色土 (砂質粘土、焼土)
- 7 砂質粘土 (暗褐色土、焼土)
- 8 黄褐色土 (焼土)

第266図 第26号住居跡カマド実測図 (1/40)

第26号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体() 法量 cm 底径 器高 は推定	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
26-1	坏	% — —	14.0 — (4.1)	赤褐色—赤褐色 小砂粒少 良好		口縁部内外面横ナデ後外面 横位ヘラ削り	内面スス付着
26-2	坏	完 完	11.8 — 4.6 稜径 12.0	内黒—暗褐色 小砂粒少 良好	小	口縁部内外面横ナデ 内面 放射状ヘラミガキ 外内面 横位ヘラ削り	口縁部外面~内面全面 黒
26-3	坏(蓋)	% — %	13.6 — (4.0)	暗黒褐色—灰褐色 小砂粒少 良好		口縁部横ナデ 体部内面ナ デ 外面横位ヘラ削り	口唇部内面摩擦痕あり 蓋として利用か?
26-4	坏	% — —	(12.0) — 4.9 稜径 11.9	暗黒褐色—暗黒褐 色 小砂粒少 良 好		口縁部内外面横ナデ後体部 外面横位ヘラ削り 内面丁 寧なナデ	内黒
26-5	甕	完 % %	13.8 7.3 13.2 胴最大径 15.0	赤褐色—赤褐色 小砂粒少 良好		口縁部横ナデ 胴部中央に 最大径をもち外面縦位ヘラ 削り後丁寧なナデ 内面ナ デ 底部ヘラナデ	底部内外面付近2次火 熱を受け剥離激しい
26-6	甕	% — %	21.0 — (30.5) 胴最大径 (26.0)	暗褐色—暗褐色 小砂粒多 金雲母 微 良好		最大径を胴部中央やや上にも もち口縁部に凹部をもち横 ナデ 胴部外面縦位ヘラナ デ	胴部上半下全面スス付 着 下半2次火熱によ り剥離激しい
26-7	甕	— % 完	— 9.0 (23.2) 胴最大径 (26.0)	赤褐色—赤褐色 小砂粒多 金雲母 微 良好		胴部中央以下ヘラナデ 内 面底部丁寧なナデ 底部ヘ ラナデ	底部と胴部の接合痕明 瞭

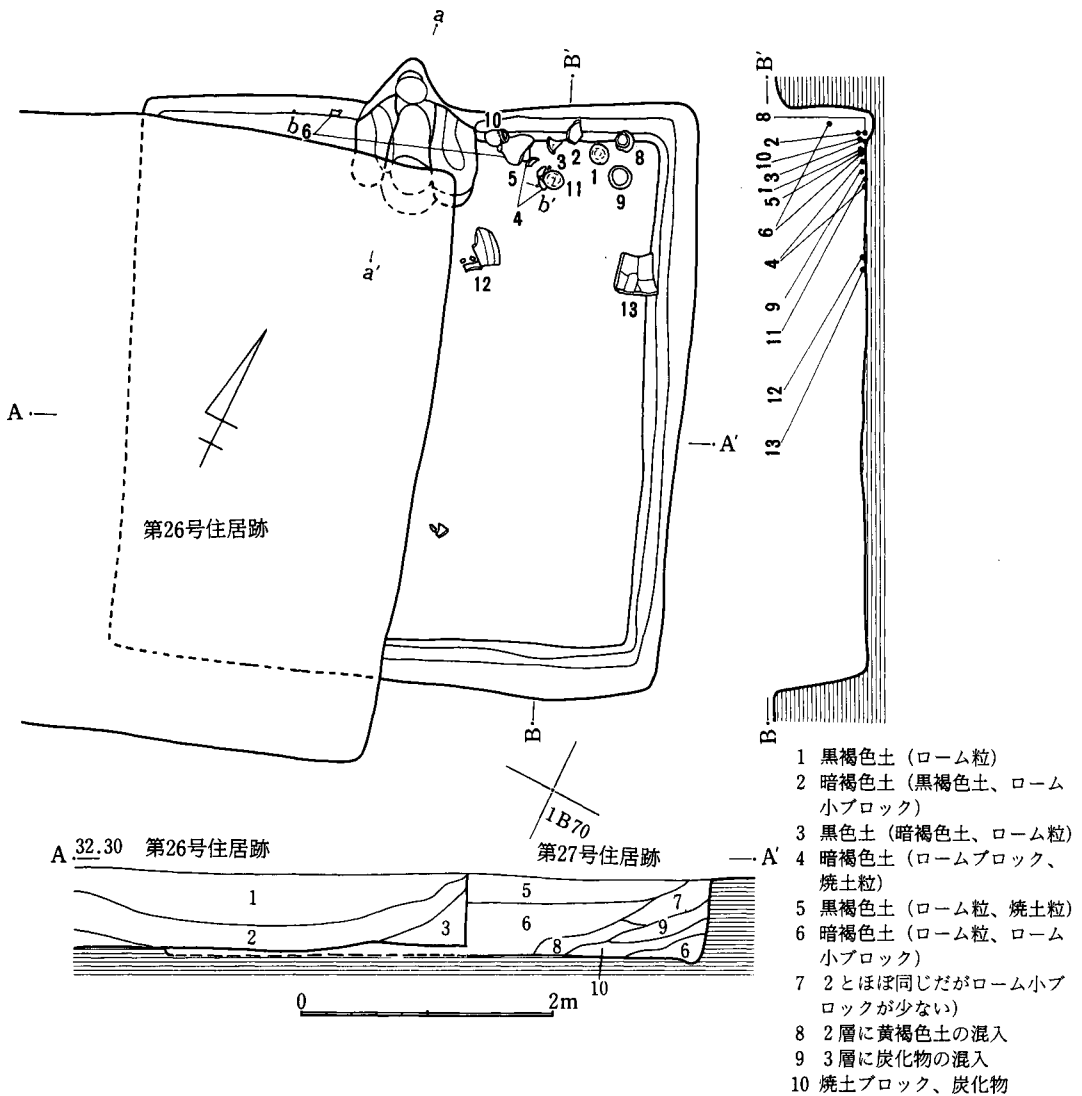


第267図 第26号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第27号住居跡 (第268~270図 図版96・97・148・149)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A 79他である。第26号住居跡とは重複関係にあり、本跡が古い。第73号掘立柱建物跡との重複関係は不明である。

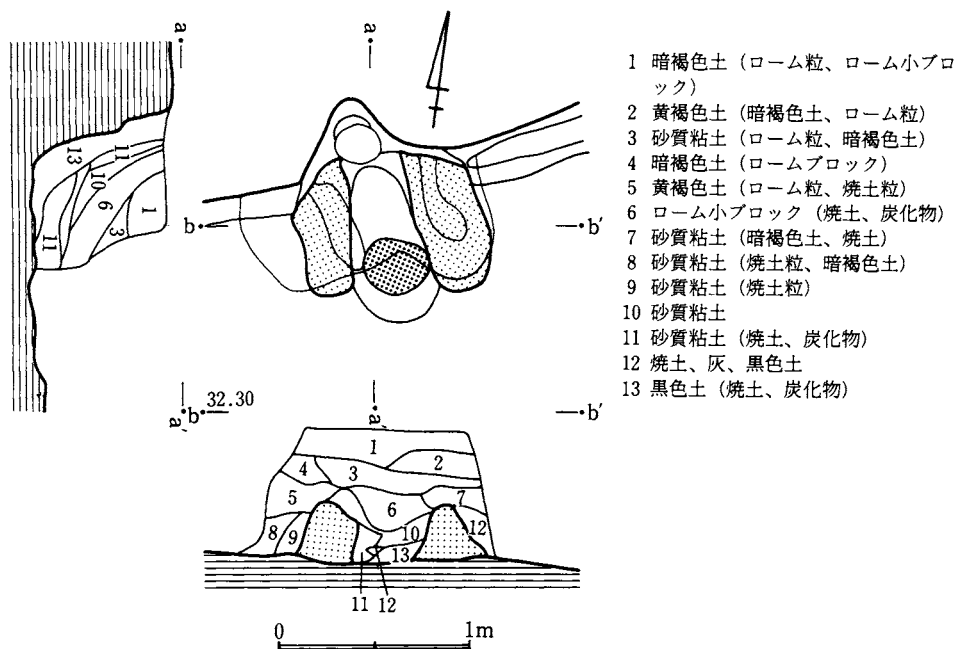
遺構 北壁4.35m、東壁4.50mあり、面積は(19.74) m²で方形の平面形を呈すると推定される竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN24°Wである。壁は残存部についてはほぼ垂直で確認面より約60cmを計る。壁溝はカマド右袖から南壁までめぐり、カマド左袖から西側には確認されなかった。床面な平坦である。柱穴は検出されていない。なお、第26号住居跡の貼床下については不明である。



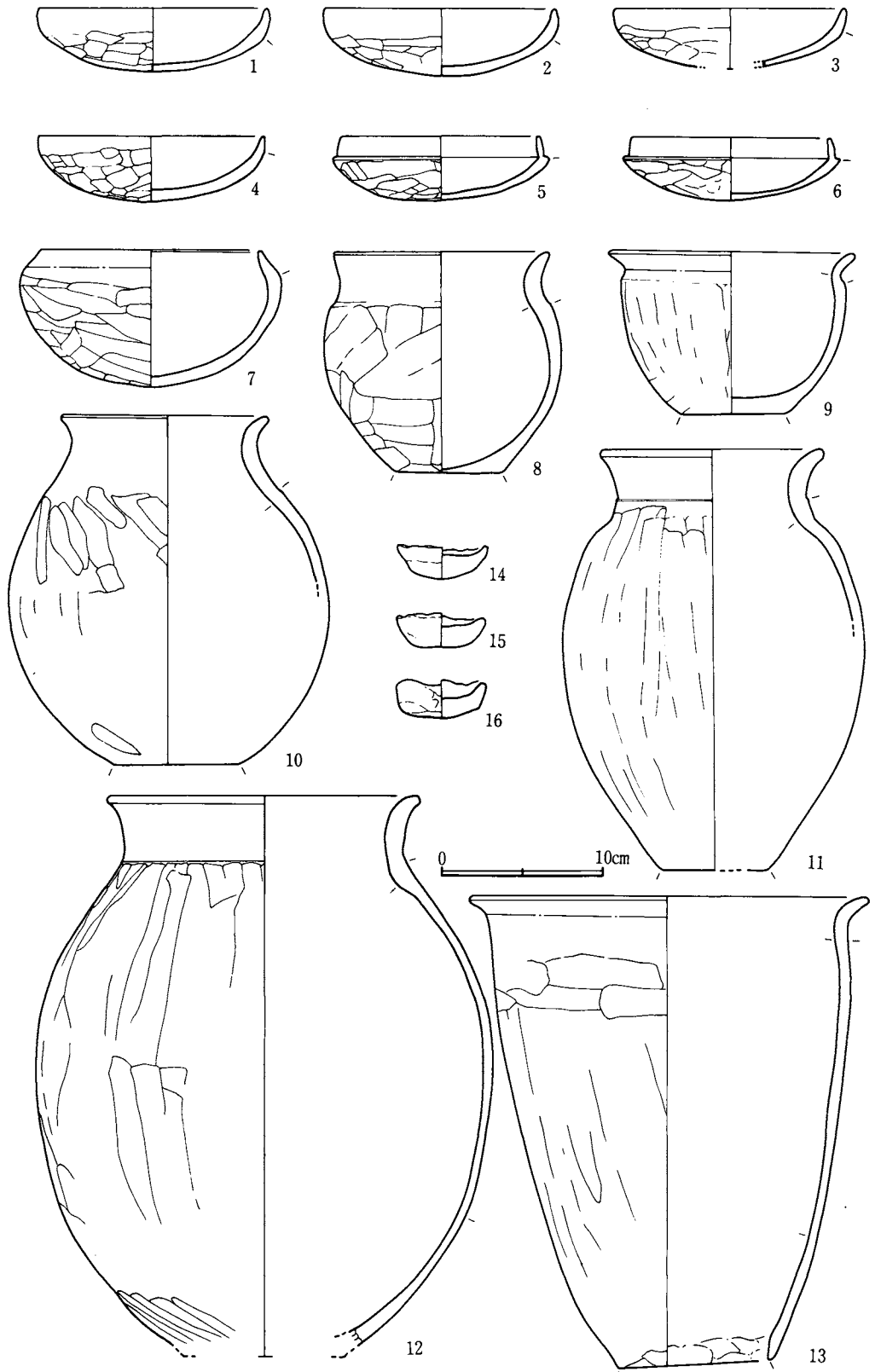
第268図 第27号住居跡実測図 (1/60)

カマド 北壁中央に位置し遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約40cm程と深くなっている。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。火床部は径30×35cm程あり擂鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層は第26号住居跡に切られていることが明瞭に観察され、レンズ状の自然堆積を示す。床直上では焼土・炭化物が多量に出土していることから火災住居の可能性がある。遺物には坏・埴・鉢・甕・甑・手捏土器と器種に富んでいる。出土状況としてはカマド右袖部と北東コーナー付近の床直上に集中して検出され、また、ほとんど完形品であり、セットとしての一括資料としても重要である。



第269図 第27号住居跡カマド実測図 (1/40)



第270图 第27号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第27号住居跡出土遺物観察表

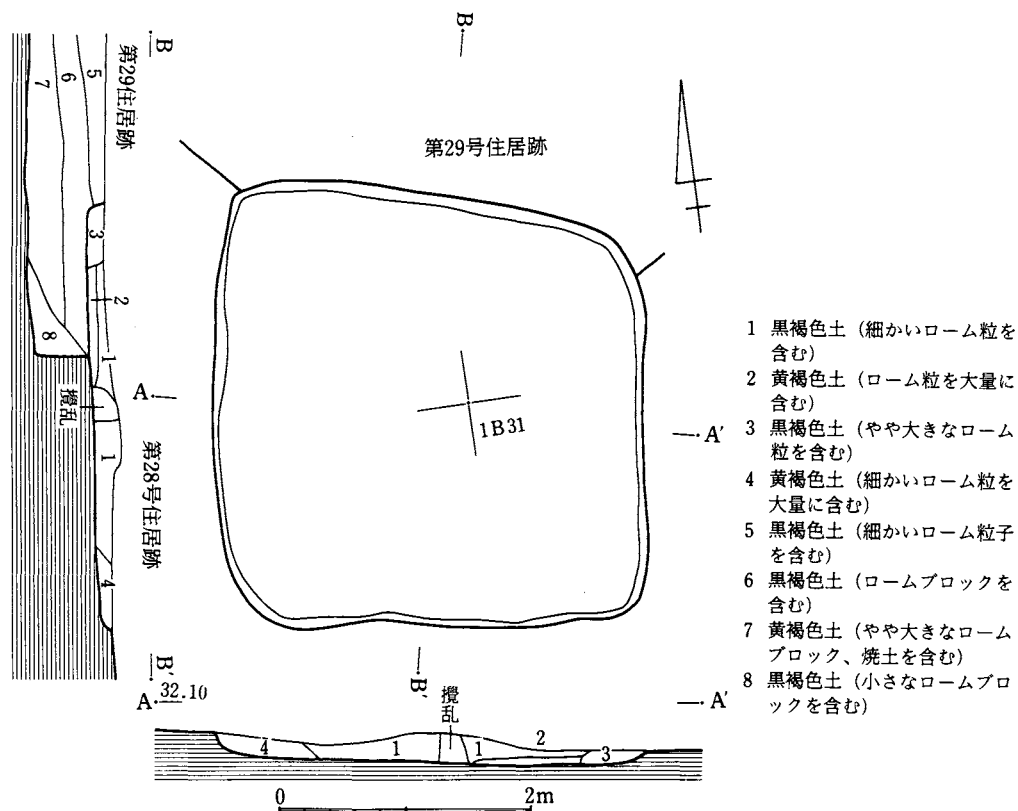
遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	法量 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
27-1	坏(蓋)	完 完 一	14.1 — 4.0	黒褐色-褐色 小砂粒多 やや不良	小	内面から口縁にかけてヘラミガキ 外面ヘラ削り後ナデ	口縁部内面摩耗 蓋として利用か?	
27-2	坏(蓋)	完 完 一	14.5 — 4.2	黒色-黒褐色 小砂粒多 やや不良	小	内面から口縁にかけてヘラミガキ 外面ヘラ削り後ナデ	口縁部内面摩耗 蓋として利用か?	
27-3	坏(蓋)	3/4 3/4 一	(14.4) — (3.7)	褐色-褐色 小砂粒多 良好	小	内面から口縁にかけてヘラミガキ 外面ヘラ削り後ナデ	口縁部内面摩耗 蓋として利用か?	
27-4	坏(蓋)	完 3/4 一	13.8 — 4.0	褐色-黒褐色 小砂粒多 やや不良	小	内面から口縁にかけてヘラミガキ 外面ヘラ削り後ナデ	口縁部内面摩耗 蓋として利用か?	
27-5	坏	3/4 完 一	12.3 — 3.9 3.6	黒褐色-褐色 小砂粒多 良好	小	内面から口縁内外面にかけてヘラミガキ 外面はヘラ削り後ナデ	口唇部上端摩耗	
27-6	坏	完 完 一	12.2 — 3.8	褐色-褐色 小砂粒多 良好	小	内面から口縁部外面にかけてヘラミガキ 外面ヘラ削り後ナデ	口唇部上端摩耗	
27-7	碗	3/4 3/4 一	13.5 — 8.3 16.2	黄褐色-黄褐色 小砂粒少 良好	小	口縁部ヘラミガキ 体部外面ヘラ削り(横方向) 内面ヘラミガキ		
27-8	甕	完 完 完	13.5 6.4 13.4 14.7	褐色-褐色 小砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ 胴部外面縦位後斜位ヘラ削り 底部ヘラ削り 内面ナデ	内面剝離激しい	
27-9	鉢	完 完 完	15.3 6.4 9.9	褐色-褐色 小砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ後外面縦位後斜位ヘラ削り 底部ヘラ削り 内面ナデ		
27-10	甕	完 完 完	12.8 7.7 21.0 19.7	褐色-黒褐色 小砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ 胴部外面ヘラ削り後ナデ	外面スス付着	
27-11	甕	完 3/4 3/4	13.9 (6.6) 25.3 18.7	黒褐色-黒褐色 小砂粒多 やや不良	小	口縁部横ナデ 胴部縦位ヘラ削り 内面ナデ	内外面剝離著しい	
27-12	甕	3/4 — 3/4	19.3 — (34.1) 28.3	褐色-黒褐色 小砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ 胴部外面縦位下端斜位ヘラ削り 内面ヘラナデ	内面剝離著しい	
27-13	甗	完 完 完	24.8 9.4 28.5	褐色-黒褐色 小砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ 胴部外面縦位ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	内面胴部中央下半以上に剝離激しい 使用痕あり	
27-14	手捏土器	完 完 完	5.6 3.8 2.0	赤褐色-赤褐色 小砂粒多 良好	小	器面全体をナデ 外面比較的丁寧なナデ		
27-15	手捏土器	完 完 完	5.6 3.6 2.0	赤褐色-赤褐色 小砂粒多 良好	小	器面全体ナデ 外面比較的丁寧なナデ		
27-16	手捏土器	完 完 完	5.6 5.0 2.4	黒褐色-赤褐色 小砂粒多 やや不良	小	器面全体ナデ 底部棒状の圧痕あり		

第28号住居跡 (第271図)

台地中央平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 B31他である。第29号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 西壁3.30m、北壁3.15m、東壁2.80m、南壁2.90mを計り、面積10.90m²であるやや台形の平面形を呈する。遺構の性格は不明であるが竪穴住居跡とした。壁は緩やかに立ち上がり、確認面より約15cmを計る。床面は十分踏み固められてはいない。壁溝、柱穴は確認されなかった。

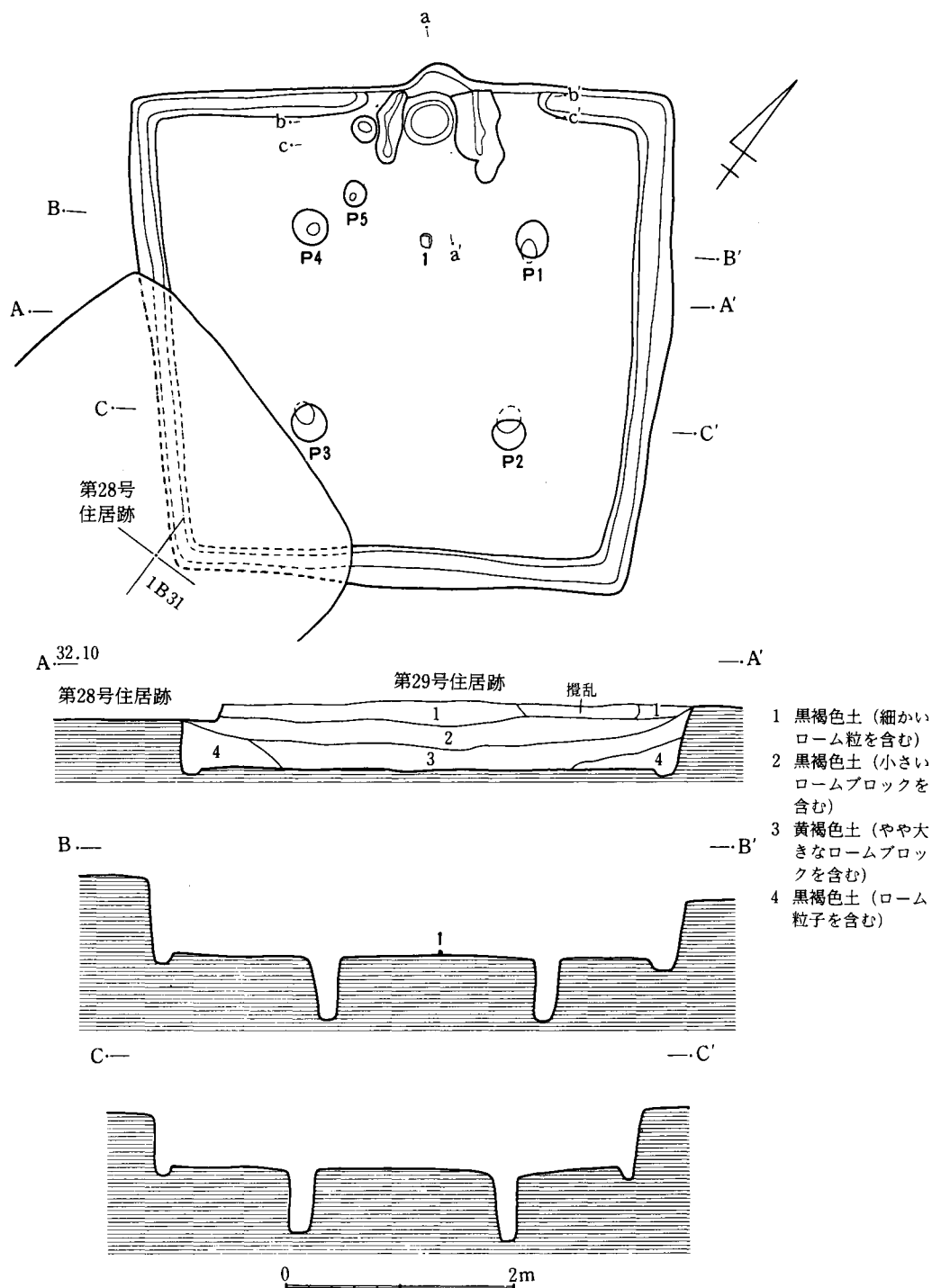
遺物出土状況 土層は一部攪乱はされているがレンズ状の自然堆積を示す。遺物は小破片のみであった。



第271図 第28号住居跡実測図 (1/60)

第29号住居跡 (第272~274図 図版98)

台地中央平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 B21他である。第28号住居跡とは重複



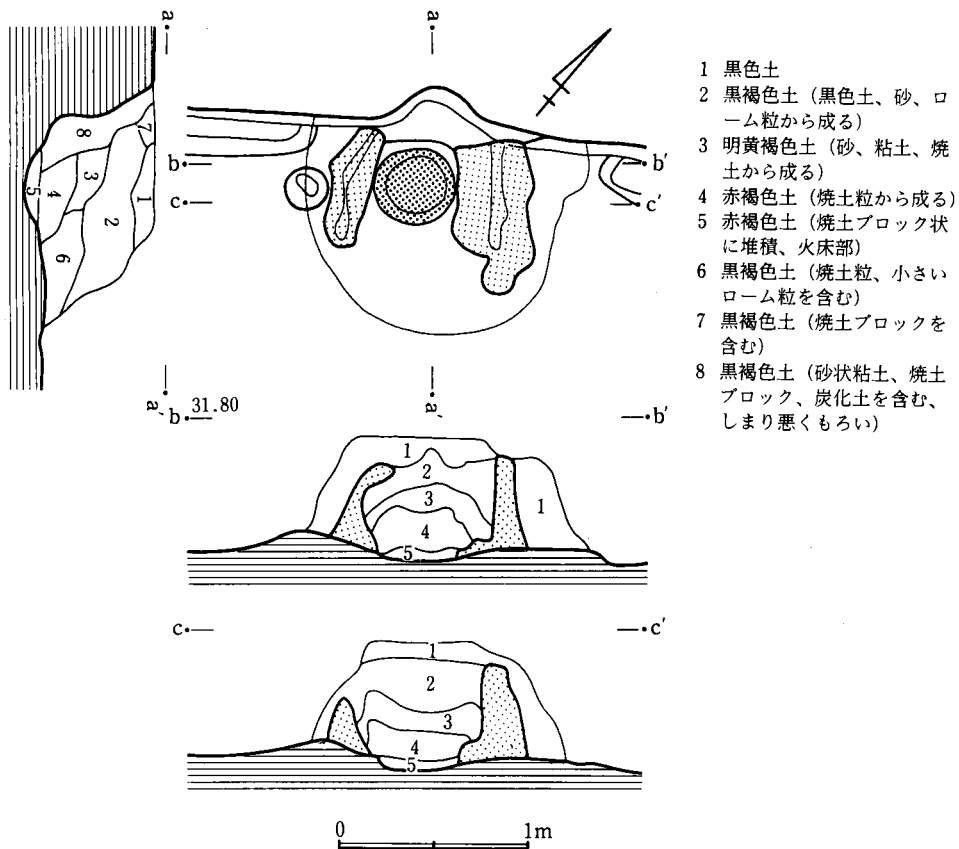
第272図 第29号住居跡実測図 (1/60)

関係にあり、本跡が古い。

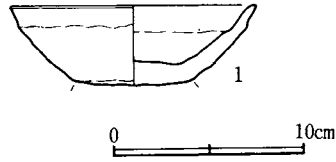
遺構 南西壁4.05m、北西壁4.70m、北東壁4.25m、南東壁3.85mあり、面積は(19.24)㎡で台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN31°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面は平坦でしっかりしている。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置され、P₅はカマド左袖部にあり、深さ50cmを計る。

カマド 北西壁中央に位置し遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約20cm程である。カマドの構築には砂質粘土を使用している。左袖部外側に粘土ブロックが、また右袖部は特に砂質粘土を多量に使用して構築していることから補強部とも推定されたので土層観察に努めたが補強とは断定できなかった。火床部は径40×45cmありやや深い楕円状を呈していた。

遺物出土状況 土層は一部小範囲の攪乱を受けているが、レンズ状の自然堆積状況を示している。遺物は坏が床直より出土している。



第273図 第29号住居跡カマド実測図(1/40)



第274図 第29号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第29号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□底 体 ()は推定	法量 cm	□径 底 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
29-1	坏		% % %	(13.0)	6.1 4.2	赤褐色-黄褐色 小砂粒多 やや不 良		□縁部横ナデ 胴部外面へ ラ削り後ナデ	内面ナデ 歪み著しい

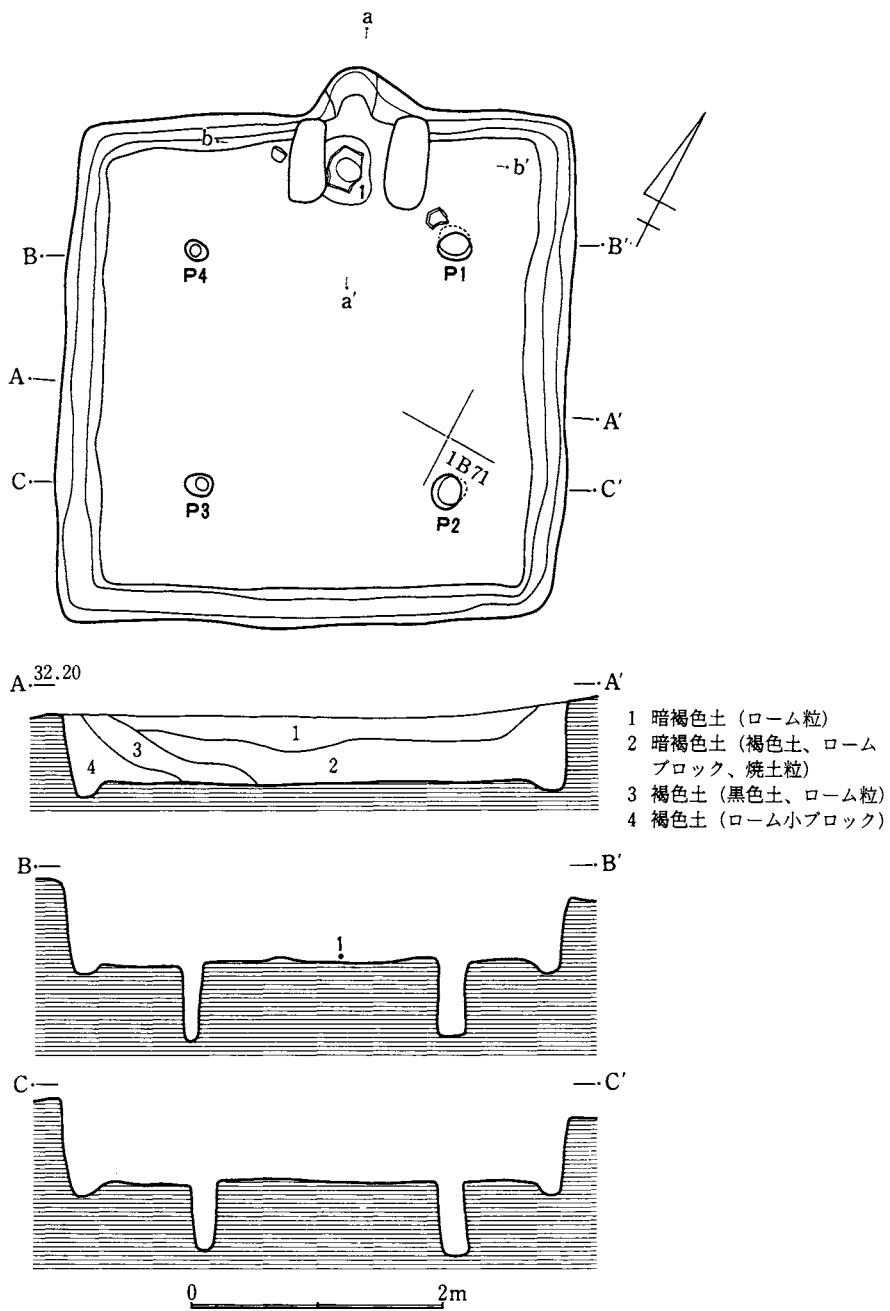
第30号住居跡 (第275~277図 図版99)

台地西側平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 B 71他である。第75号掘立柱建物跡とは重複関係にあるが新旧は不明である。

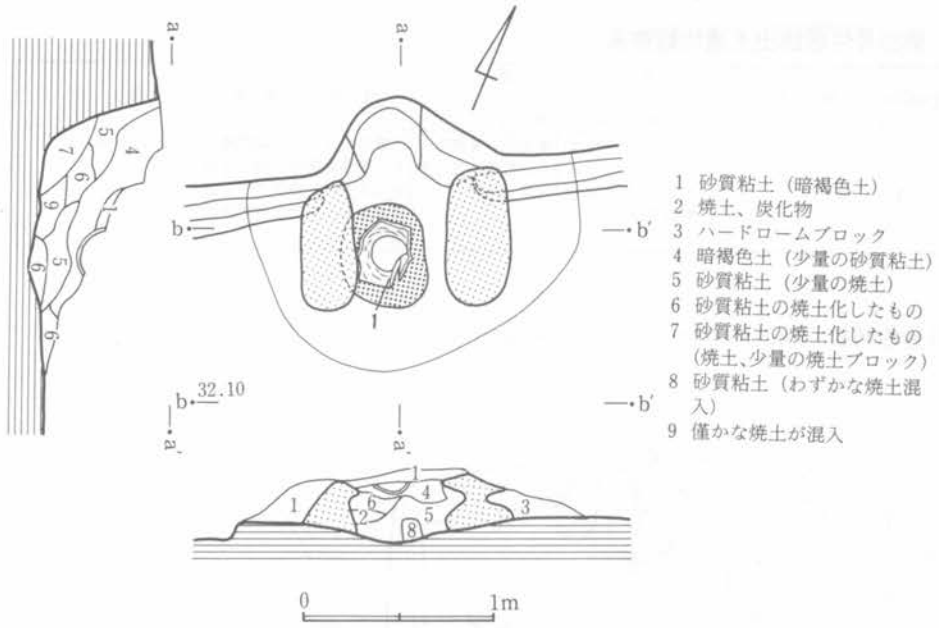
遺構 西壁3.85m、北壁3.85mあり、面積は15.96㎡で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央よりやや東側寄りに位置しN26°Wである。壁は垂直に立ち上がり確認面より約55cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約25cm、深さ約10cmと広く深い。床面は凹凸が多少あるが、ほぼ平坦で全面的に固い。柱穴は4個検出され、対角線上にそれぞれ配置されている。これらの柱穴は、深さがほぼ一定であった。

カマド 北壁中央やや東寄りに位置し遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約30cm程であり、煙道部が溝状を呈している。カマドは砂質粘土を使用して構築されている。火床部は径55×45cmありやや深めの播鉢状を呈する。

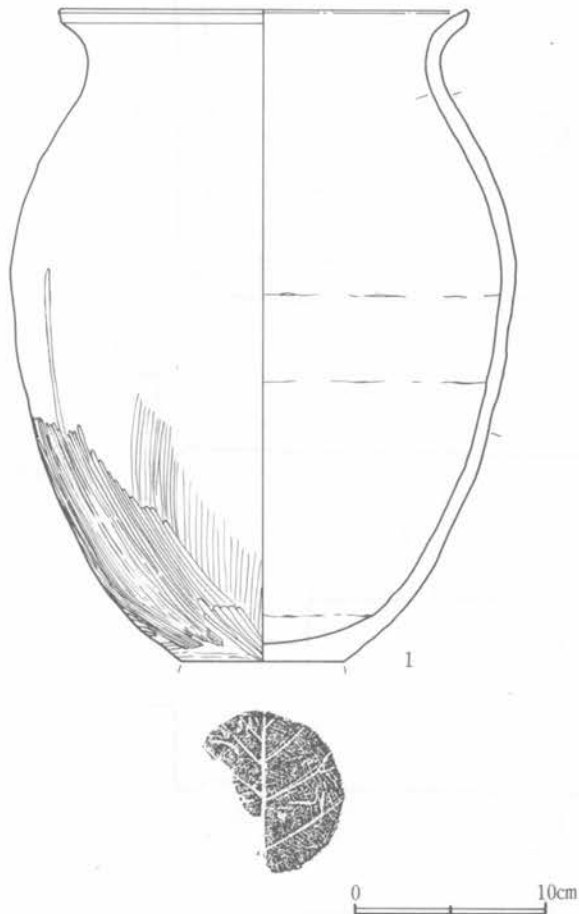
遺物出土状況 土層はレンズ状の典型的な自然堆積を示す。遺物は甕がカマド内より倒立した様な状態で出土している。



第275図 第30号住居跡実測図 (1/60)



第276図 第30号住居跡カマド実測図 (1/40)

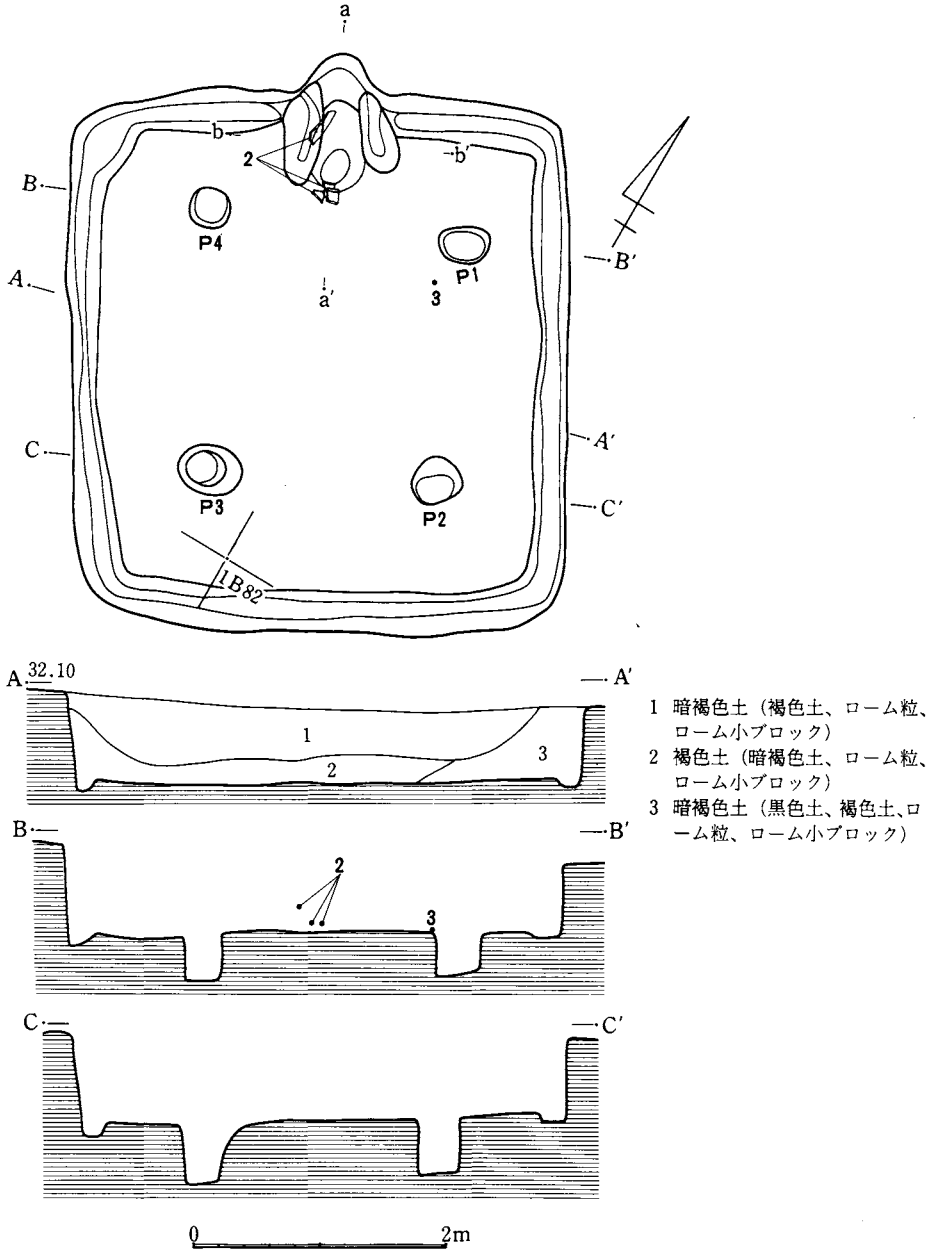


第277図 第30号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第30号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体	法 量 cm ()は推定	口 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
30-1	甕		3/4 1/4 3/4 胴最大径	(21.4) 8.4 34.0 (26.5)		黄褐色-黄褐色 小砂粒多 母微 良好		口唇をつまんで口縁部横ナ デ 胴部外面ナデ後半縦 位ヘラナデ 内面ナデ 底 部木葉痕 胴部と底部接合 痕明瞭	外面スス付着

第31号住居跡 (第278~280図 図版99・161)



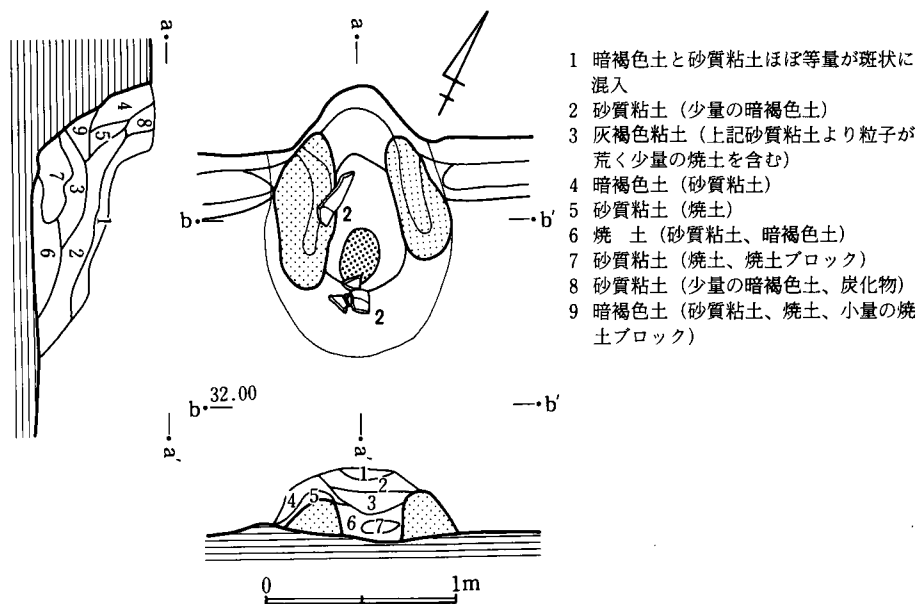
第278図 第31号住居跡実測図 (1/60)

台地ほぼ中央平坦部、調査区の中央に位置し、グリッドは1 B82他である。第80号掘立柱建物跡とは重複関係にあり、新旧関係は不明である。

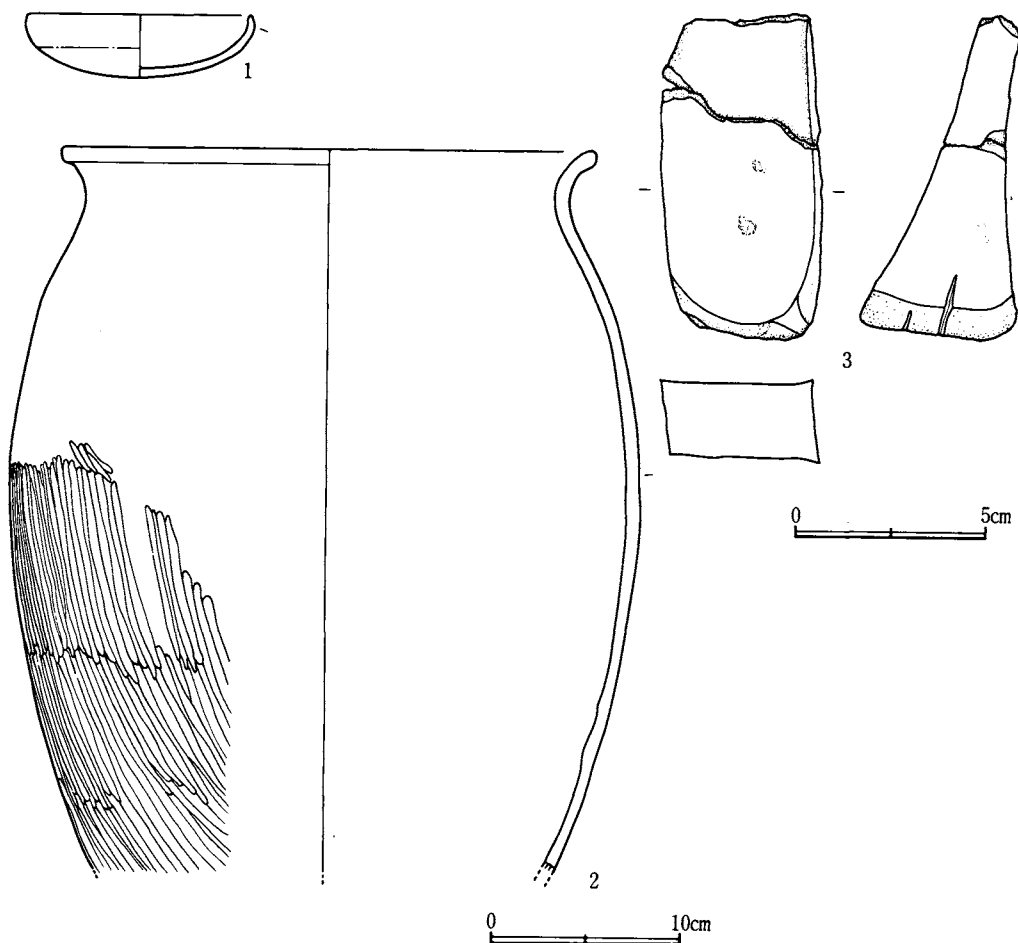
遺構 西壁3.70m、北壁3.85mあり、面積は16.11㎡で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN30°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約10cmあり、ほぼ一定の巾と深さをもってめぐる。床面は全面的に平坦で非常に固い。柱穴は4個検出され、それぞれ対角線上に配置され、径、深さ共にほぼ一定である。

カマド 北壁中央に位置し遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約30cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30×20cmあり浅い播鉢状を呈していた。カマド内からは2の甕の大形破片が出土している。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積である。遺物は坏・甕・砥石が出土し、遺物量は少なく小破片のみであり、1の坏、3の砥石は覆土中からのものである。また、その他として覆土中からスラグ1点も出土している。



第279図 第31号住居跡カマド実測図 (1/40)



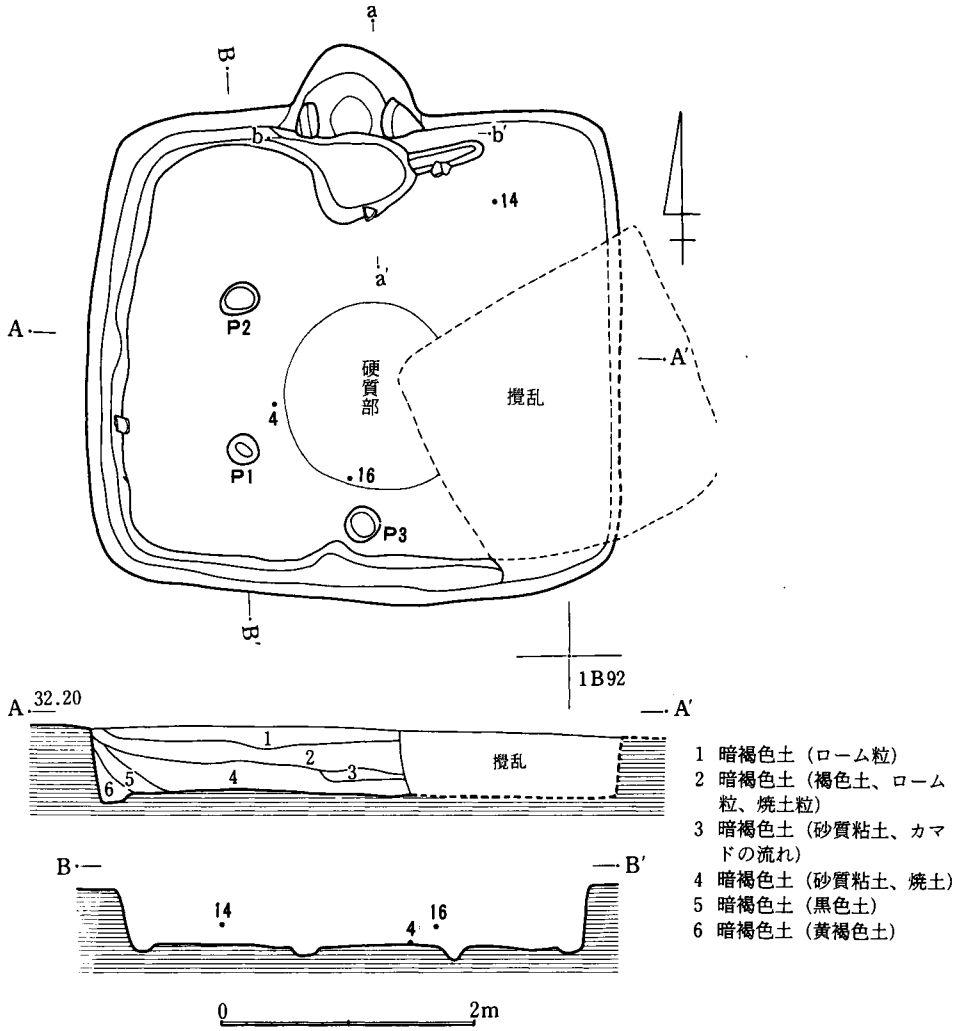
第280図 第31号住居跡出土遺物実測図 (1・2 1/4、3 1/2)

第31号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
31-1	坏	1/2	1/2	(11.5) — 3.3	赤褐色-赤褐色 小砂粒多	不良	口縁部横ナデ 底部ヘラ削 り後ナデ	外面摩耗著しい
31-2	甕	1/2	1/2	(28.0) — (37.6) (33.2)	灰褐色-灰褐色 砂粒非常に多い	きわめて不良	胴部外面下半ヘラナデ	内面剝離著しい 外面 スス付着
31-3	砥石	1/2		長さ 最大幅 最大厚	(17.0) 8.0 8.2	凝灰岩	重量141g	

第32号住居跡 (第281~283図 図版162・176)

台地ほぼ中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1B81他である。第80号掘立柱建物跡とは重複関係にあるが、新旧は不明である。

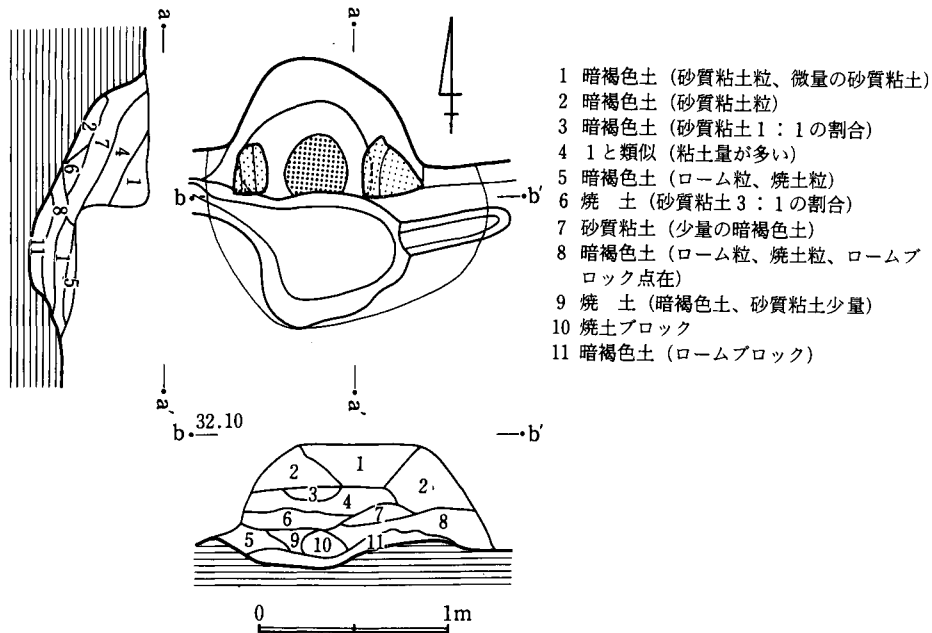


第281図 第32号住居跡実測図 (1/60)

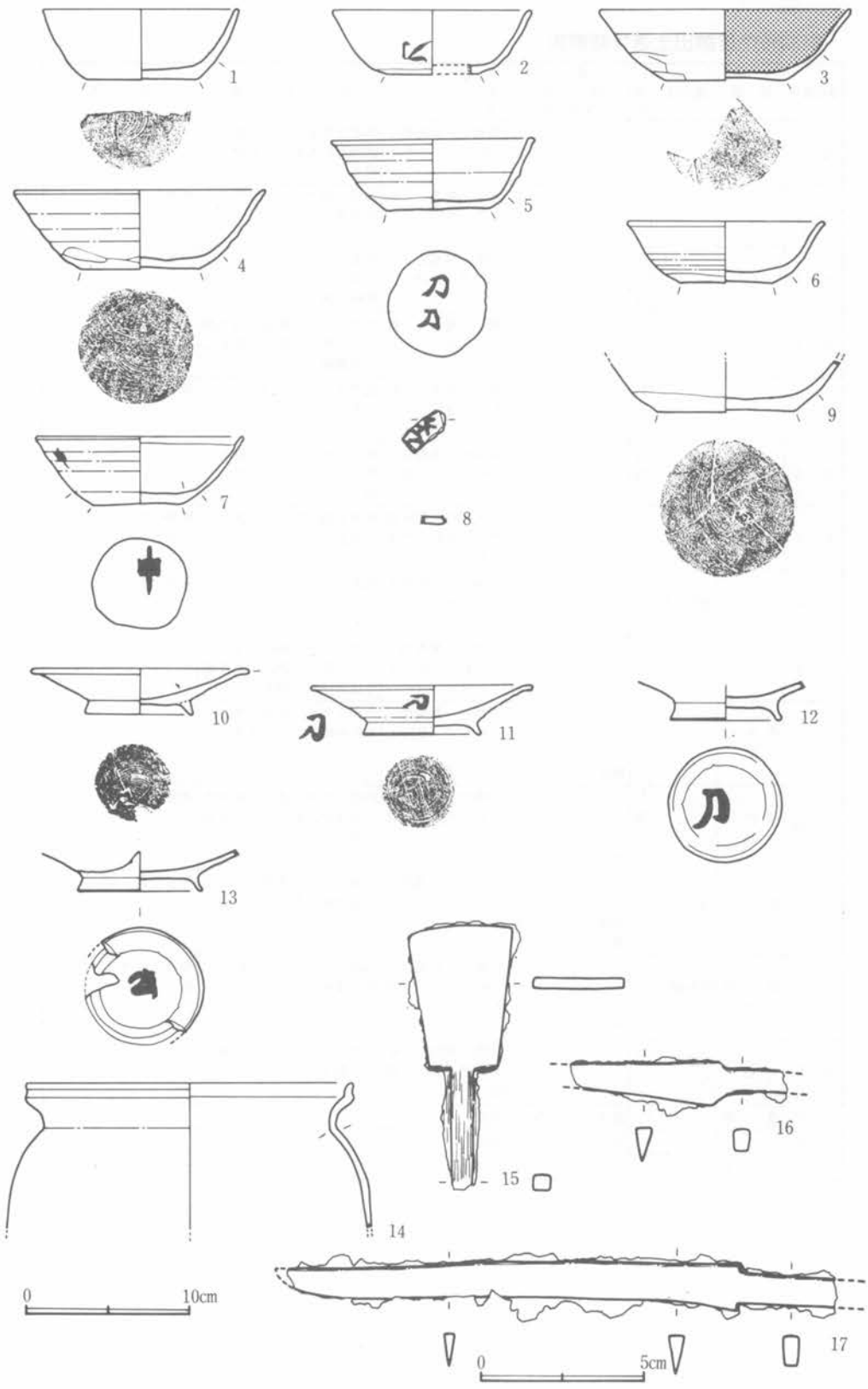
遺構 西壁3.30m、北壁3.80m、東壁3.80m、南壁3.95mのやや胴張りの台形の平面形を呈する堅穴住居跡である。面積は15.53㎡である。カマドは北壁中央に位置しN 0°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり確認面より約50cmを計り、各コーナーはやや隅丸である。壁溝はカマド袖部下もめぐり、北東コーナーと攪乱部以外は検出されている。巾約15cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は中央に硬質部があり周辺はやや軟弱であった。若干周辺部が中央より低い状態であった。柱穴は3個検出され、P₁・P₂は攪乱部にあったと推定される各ピットと対角線上に配置されていたものであろうか。P₃はカマドの対面にあり、深さは8cmと浅い。各柱穴とも浅いのが特徴である。

カマド 北壁中央にあり遺存状態は不良である。カマド前に約10cm程の浅い掘り込みが認められた。壁への掘り込みは約50cm、巾も広い。火床部も壁への掘り込み部にあり径約35cmを計り浅い楕円状を呈する。前述した様に袖部下に壁溝がめぐり、カマドの構築には砂質粘土が使用されていた。

遺物出土状況 土層は一部攪乱を受けているがレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・高台付皿・甕・鉄鏃・刀子と多種多様な器種が出土している。4の坏は床直から、5・9・10・11の坏と高台付皿はカマド内からの一括出土であり、他は覆土中のものである。



第282図 第32号住居跡カマド実測図 (1/40)



第283図 第32号住居跡出土遺物実測図 (1~14 1/4、15~17 1/2)

第32号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
32-1	坏		3/4 3/4 3/4	(12.0) (6.8) 4.4	黒褐色-黄褐色 小砂粒少 良	やや不	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後周縁ヘラ削り	
32-2	坏		3/4 3/4 3/4	12.4 5.6 (4.0)	褐色-褐色 粒多 良好	小砂	体部下端手持ちヘラ削り 底部周辺ヘラ削り	墨書土器「刀」
32-3	坏		1/4 3/4 3/4	(15.4) 7.3 4.4	内黒-黒褐色 砂粒多 良好	小	内面ミガキ 下半手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラ削り	内黒
32-4	坏		3/4 5/4 3/4	(15.4) 7.2 4.9	褐色-褐色 粒少 良好	小砂	内面ミガキ 体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後周縁ヘラ削り	
32-5	坏		3/4 完 3/4	12.6 6.3 4.3	褐色-褐色 粒少 良好	小砂	底部及び体部下端手持ちヘラ削り	墨書土器「刀 刀」
32-6	坏		3/4 5/4 3/4	12.1 5.5 3.9	茶褐色-茶褐色 小砂粒少 不良		体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後全面ヘラ削り	
32-7	坏		5/4 完 5/4	12.8 5.5 4.1	明灰褐色-明灰褐色 小砂粒やや多 良好		体部下端手持ちヘラ削り 底部手持ちヘラ削り	墨書土器 体部・底部「申」
32-8	坏	底部小片		— — —	明褐色 — —	小砂粒や やや少 良好	底部ヘラ削り	墨書土器 不明
32-9	坏		— 完 —	— 8.3 (2.9)	赤褐色-黄褐色 小砂粒少 密 やや不良		内面ミガキ 体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後周縁ヘラ削り	
32-10	高台付皿		3/4 完 3/4	13.3 — 2.8 裾径 6.6	黄褐色-黄褐色 小砂粒多 良好		内面ミガキ 底部回転糸切り後周縁ヘラ削り後高台貼付	
32-11	高台付皿		3/4 完 3/4	12.9 — 3.1 裾径 7.1	明褐色-褐色 小砂粒やや少 良好	小	内面ミガキ 底部回転糸切り後周縁回転ヘラ削り後高台貼付	墨書土器「刀」
32-12	高台付皿	高台部のみ		— — — 現高 裾径 7.0	明褐色-明褐色 小砂粒やや少 好	良	内面ミガキ 底部回転糸切り後周縁回転ヘラ削り後高台貼付	墨書土器「刀」
32-13	高台付皿	高台部のみ		— — — 現高 裾径 7.5	明褐色-明褐色 小砂粒やや少 好	良	内面ミガキ 底部回転ヘラ削り後高台貼付	墨書土器体部に墨痕底部に「刀」
32-14	甕	口縁部のみ	3/4 — —	(20.0) — (9.0)	褐色-褐色 粒非常に多い 好	小砂	口唇をつまんで口縁部横ナデ 胴部内外面ナデ	
32-15	鉄 鏃			長さ (16.0)				鉄製
32-16	刀 子			長さ (13.0)				鉄製
32-17	刀 子			長さ (33.6)				鉄製

第33A号住居跡（第284～286図 図版100・162）

台地南側のやや傾斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2 B43他である。第33B号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 西壁4.80m、北壁4.60mあり、面積24.41m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN22°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より北側が約80cm、南側が約60cmを計り、斜面の立地がこのことからもうかがえる。壁溝はカマドと北東隅を除いて全周し、東壁溝が巾約30cm、深さ10cm、西壁溝が巾約15cm、深さ10cmとやや多少の違いが認められた。床面は若干の凹凸が認められるがほぼ平坦である。柱穴は4個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置され径、深さ共に一定でしっかりしていた。

カマド 北壁中央に位置し遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約60cmと深く、カマドの構築には砂質粘土を使用していた。火床部は径30cmと浅い擂鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積状況を示し、第33B号住居跡との切り合い関係を明瞭に把握できた。遺物は坏・鉢・甕・鉄鏝が出土しているが床直のものはほとんど無く、覆土中のものが多い。また、その他にも覆土中より土製支脚の一部が出土している。

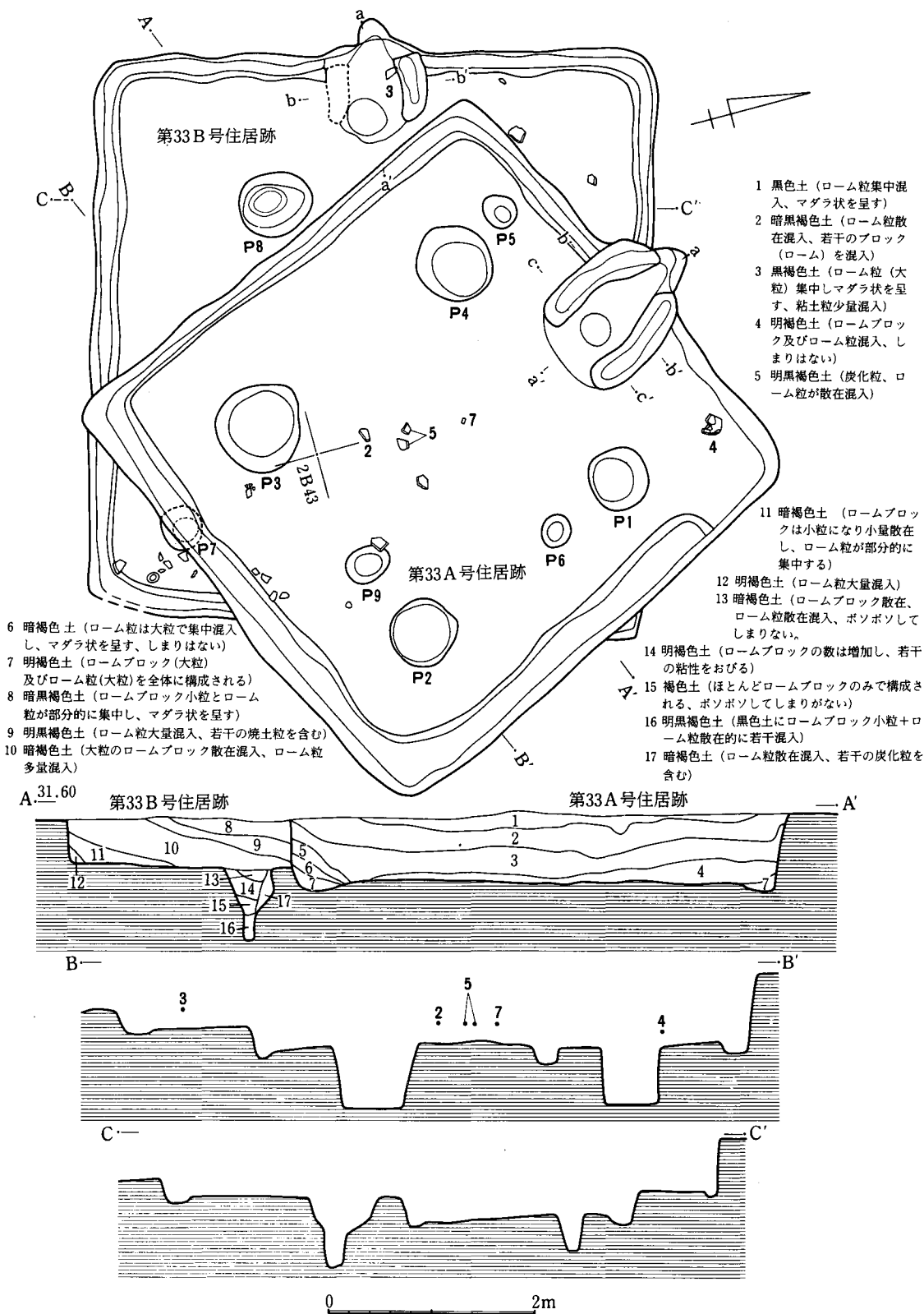
第33B号住居跡（第284・285・287図 図版100）

台地南側のやや傾斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2 B43他である。第33A・34号住居跡とは重複関係にあり第33A号よりは古く、第34号(縄文)よりは新しい。また、第37号住居跡とも一部重複しているが、切り合い関係は明確にできなかった。

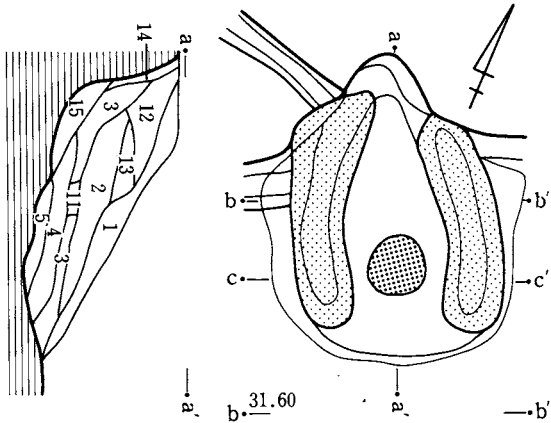
遺構 南壁5.00m、西壁5.20mあり、面積(29.25) m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは西壁中央に位置しN72°Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁で約50cm、南壁で約20cmをそれぞれ計る。壁溝はカマドを除いて全周するものと推定され、巾約25cm、深さ約5cmを計る。床は若干の凹凸が認められるがほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₅～P₉は対角線上に配置されP₉はカマドの対面にあり深さ17cmを計る。

カマド 西壁中央に位置し遺存状態は左袖部が欠損し不良であった。壁への掘り込みは約20cmあり、三角形の断面を呈する。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部の径は約40cm程あり浅い擂鉢状を呈する。

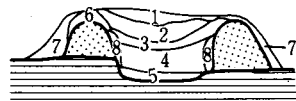
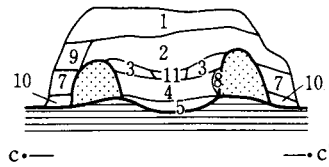
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積状況を示し、第33A号住居跡との切り合いが明瞭に把握できた。遺物は短頸壺・甕・土製支脚があり、3の土製支脚はカマド内より、他は覆土中である。



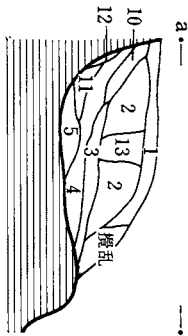
第284図 第33A・B号住居跡実測図 (1/60)



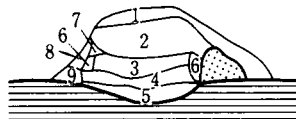
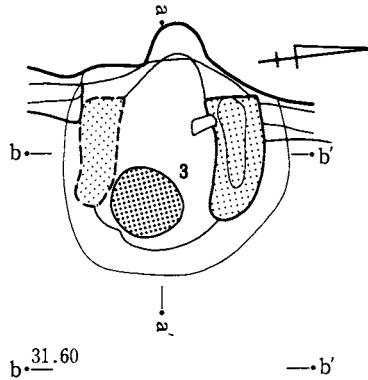
カマドA



- 1 暗灰褐色土 (砂質粘土及び若干の焼土粒混入)
- 2 暗褐色土 (砂質粘土、炭化粒、焼土粒の混入)
- 3 灰白色土 (砂質粘土に若干の焼土粒を含む) (天井部落盤)
- 4 暗赤褐色土 (多量の焼土粒及び焼土ブロックで構成される、若干の砂質含む)
- 5 黒褐色土 (炭化粒多量、若干の砂質粘土を含む)
- 6 灰白色土 (砂質粘土に多量の焼土ブロックが混入、固くしまる)
- 7 暗褐色土 (焼土粒を散在的に含み、しまりはない)
- 8 赤褐色土 (粘土が焼土化したものである)
- 9 明褐色土 (若干の砂質粘土を含む、しまりは良い)
- 10 褐色土 (ロームブロック主体構成)
- 11 明黒色土 (炭化粒を主体にし、若干の粘土粒、焼土粒を含む、掛口)
- 12 暗灰黒褐色土 (黒褐色土に若干の砂質粘土と炭化粒混入)
- 13 黒褐色土 (5層に比し炭化粒は少なめであるが、焼土粒が若干混入される)
- 14 黒色土 (ほとんど炭化粒、炭で構成される) (煙道)
- 15 褐色土 (ロームブロックを主体に若干の砂質粘土を含む)



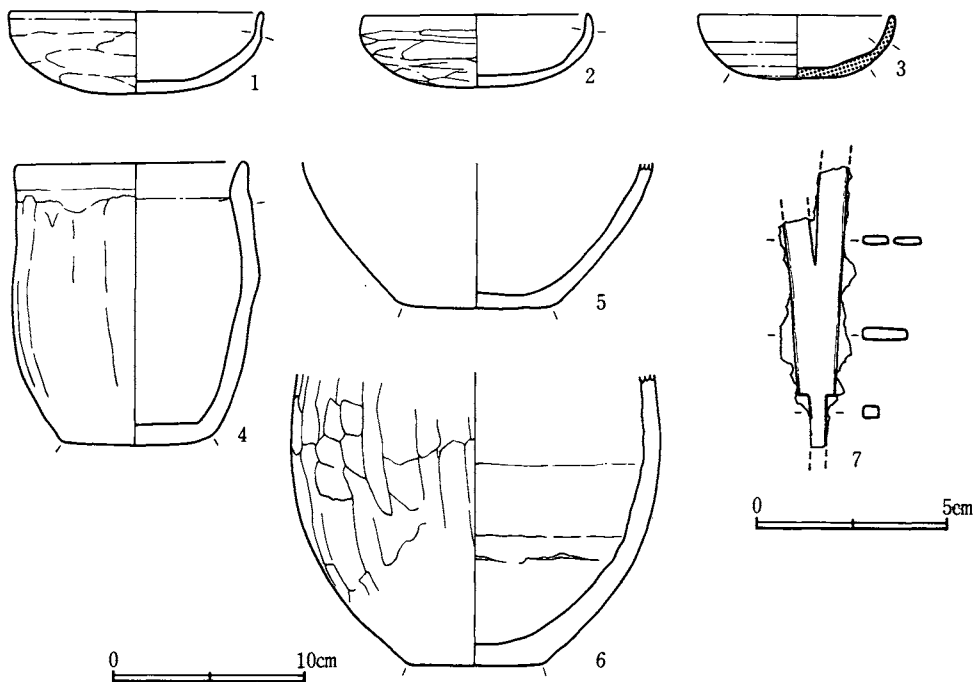
カマドB



- 1 暗灰褐色土 (砂質粘土に焼土粒少量混入)
- 2 灰白色土 (砂質粘土を主体)
- 3 暗赤褐色土 (焼土による構成)
- 4 赤褐色土 (焼土ブロックによる構成)
- 5 黒褐色土 (炭化粒による構成)
- 6 赤褐色土 (砂質粘土が焼土化したもの)
- 7 明黒褐色土
- 8 明褐色土 (焼土粒混入)
- 9 暗褐色土 (ロームブロック混入)
- 10 灰褐色土 (砂質粘土に若干の焼土粒及び炭化粒混入)
- 11 暗褐色土 (ローム粒多量混入)
- 12 黒色土 (炭化粒で主体構成) (煙道部)
- 13 暗黒褐色土 (炭化粒と砂質粘土及び焼土粒混入) (掛口)

0 1m

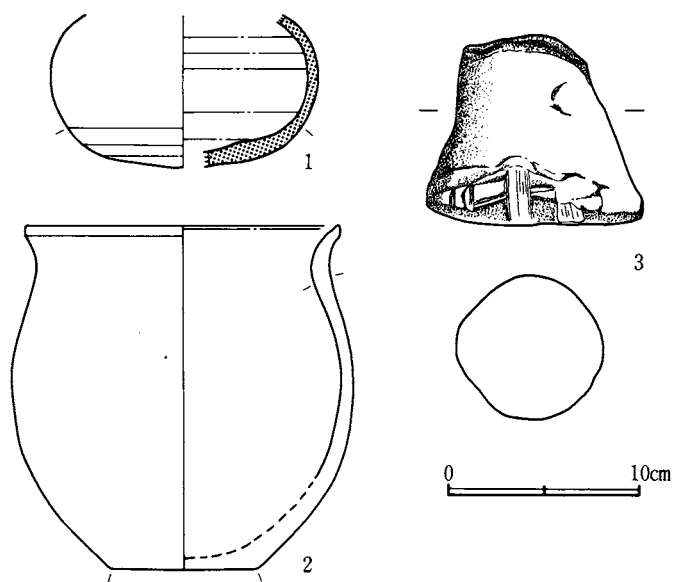
第285図 第33A・B号住居跡カマド実測図 (1/40)



第286図 第33A号住居跡出土遺物実測図(1~6 1/4、7 1/2)

第33A号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
33A-1	坏	3/4 — 3/4		(13.4)	— 4.3	灰褐色-灰褐色 — 小砂粒多 やや不良	やや不良	口縁部横ナデ 内面ナデ 体部外面ヘラ削り	
33A-2	坏	3/4 — 3/4		(11.3)	— 3.8	赤褐色-褐色 — 砂粒少 やや不良	小 やや不良	口縁部横ナデ 内面ミガキ 体部外面ヘラ削り後ナデ	
33A-3	坏(蓋)	5/6 — 5/6		10.4	— 3.4	灰色-灰白色 — 砂粒多 やや不良	小 やや不良	外面下半回転ヘラ削り	須恵器 口唇内側摩耗
33A-4	鉢	3/4 完 3/4		12.3 7.4 14.7 胴最大径 13.0	— — — —	黒褐色-灰褐色 — 小砂粒多 — —	不良	口縁部横ナデ 内面はヘラ によるナデ 胴部外面縦位 ヘラ削り	内外面ともに摩耗 壁 剝離著しい
33A-5	甕	— 3/4 1/4		— 8.2 (7.5)	— — —	赤褐色-赤褐色 — 小砂粒多 —	不良	不明	内外面とも剝離著しい
33A-6	甕	— 完 3/4		— 7.3 (15.2)	— — —	赤褐色-褐色 — 砂粒多 —	小 やや不良	内面粘土紐輪積み痕明瞭 胴部外面縦位ヘラ削り	外面摩耗著しい
33A-7	鉄 鏃		長さ		14.6				



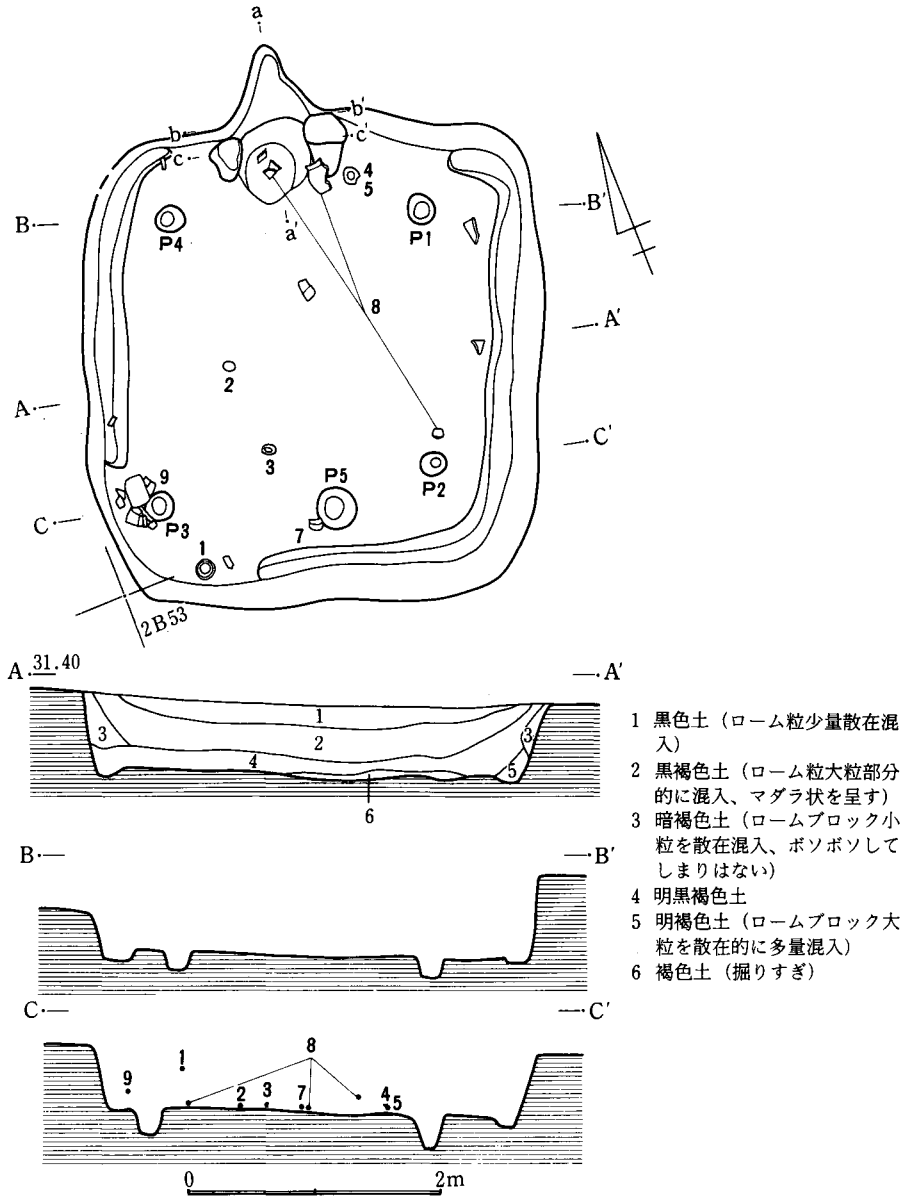
第287図 第33B号住居跡出土遺物実測図(1/4)

第33B号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	法量 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
33B-1	短頸壺	— — 2/4	—	— (8.1)	灰色-灰色 砂粒多	白色 良好	体部外面下半回転ヘラ削り	須恵器
33B-2	甕	1/4 完 3/4	16.5 7.5 17.5 胴最大径 (17.9)		黒褐色-灰褐色 白色砂粒多	不良	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 底部ヘラ削り	内外面剝離激しい
33B-3	土製支脚	1/2	長さ (11.4)		褐色 やや不良	小砂粒多		

第37号住居跡 (第288~290図 図版101・102・150)

台地南側のやや斜面部、調査区南側に位置し、グリッドは2 B53他である。第33B号住居跡とは一部重複するが切り合い関係は明確にできなかった。

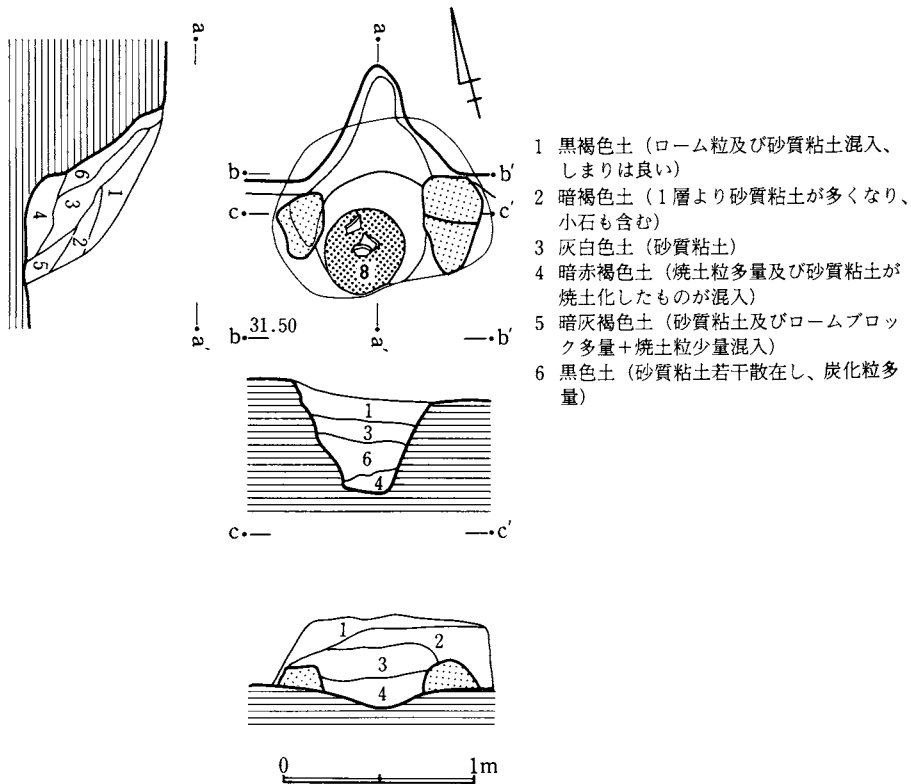


第288図 第37号住居跡実測図 (1/60)

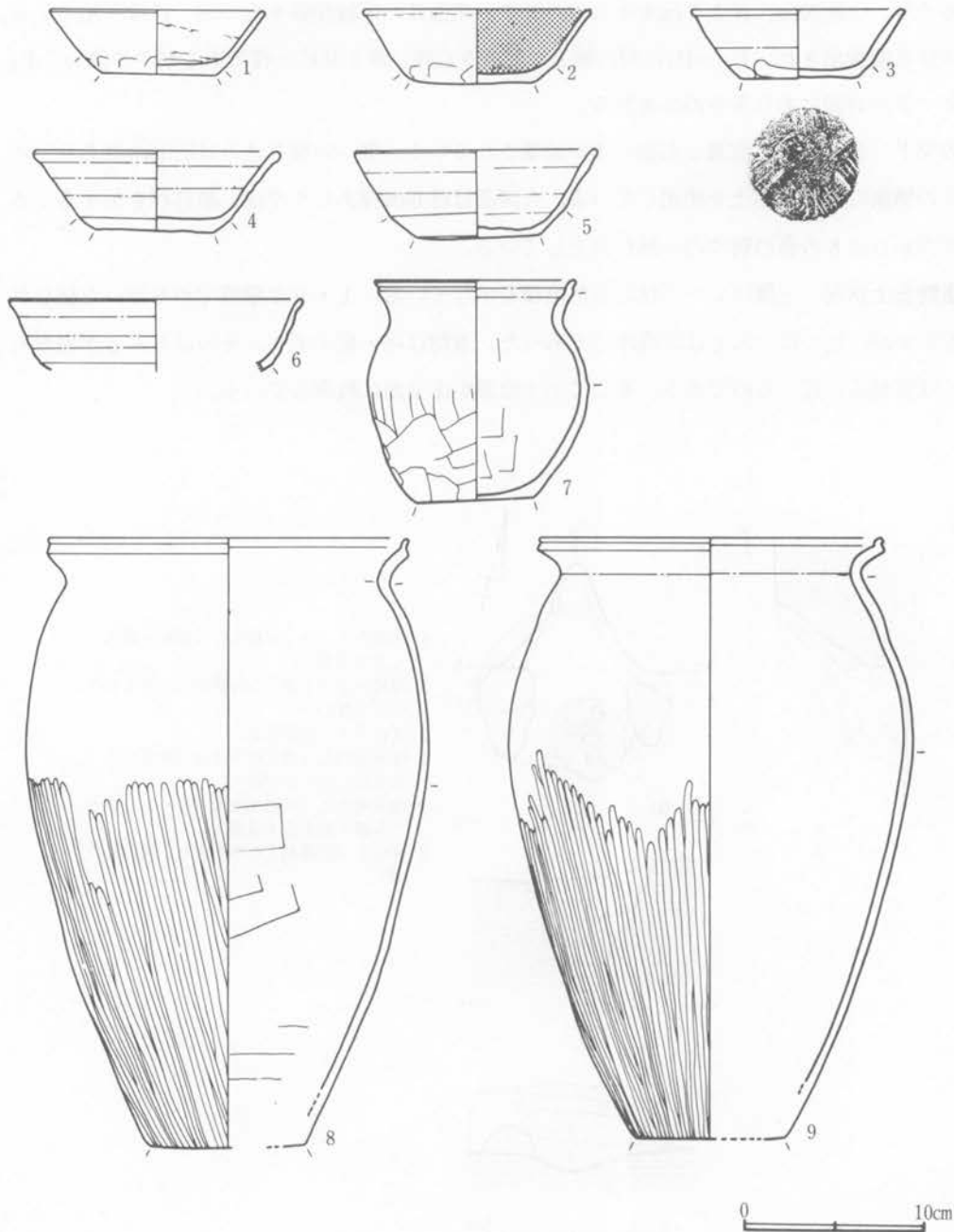
遺構 西壁3.45m、北壁3.00mあり、面積12.96m²で隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。北壁中央にカマドが位置しN18°Eである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、北壁で約70cm、南壁で約35cmを計り傾斜状況を良く示している。壁溝はカマド両脇と南西コーナーを除いてめぐり、巾約20cm、深さ5cmをそれぞれ計る。床面は一部緩傾斜をもつが、ほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置され径、深さ共に一様であるがやや浅い。P₅はカマドの対面にあり深さ25cmを計る。

カマド 北壁中央に位置し右袖一部が破壊されている。壁への掘り込みは約50cm程あり、カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径40cm程ありやや深い楕円状を呈する。カマド内からは8の甕の破片の一部が出土している。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。1・9は壁際でやや浮いた様な状態を示すが、他のほとんどは床直出土であった。遺物は坏・甕であり、そのほとんどが完形もしくは完形品に近いものである。そして出土位置が床全面に散在している。



第289図 第37号住居跡カマド実測図 (1/40)



第290图 第37号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

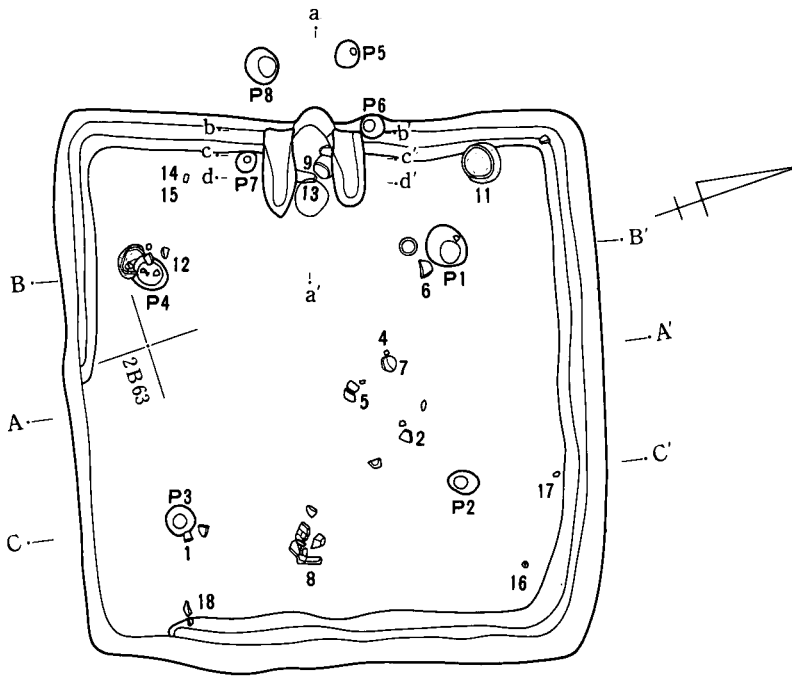
第37号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
37-1	坏	完 完 完		11.5 6.2 3.7	明褐色—明褐色 小砂粒やや少 好	良好	体部下端手持ちヘラ削り後 回転ナデ 底部外面回転ヘ ラ削り後手持ちヘラ削り後 ナデ	体部内面に粘土板接合 痕あり
37-2	坏	完 完 完		12.7 6.8 4.2	黒色—暗褐色 粒やや少 良好	砂	体部内面ミガキ 体部下端 手持ちヘラ削り 底部外面 回転ヘラ削り後ナデ	内黒 体部外面のナデ によって下端部のヘラ 削りが不明瞭となっ ている
37-3	坏	完 完 完		12.0 6.3 4.0	褐色—黒色 粒少 やや不良	小砂	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後周縁持 ちヘラ削り	外面スス付着
37-4	坏	% 完 %		13.4 3.6 4.3	暗赤褐色—暗赤褐 色 小砂粒やや多 良好		体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り	
37-5	坏	完 完 完		13.3 6.9 4.7	明赤褐色—明赤褐 色 砂粒やや多 良好		体部下端回転ヘラ削り 底 部回転ヘラ削り	内外面スス付着
37-6	坏	% 完 %		(16.4) — (4.0)	褐色—褐色 粒多 良好	小砂	体部下端ヘラ削り	歪みあり
37-7	甕	% 完 %		11.3 6.6 12.2 胴最大径 12.4	黒褐色—赤褐色 砂粒少 やや不良		口縁部は口唇をつまんで横 ナデ 胴部外面及び底部ヘ ラ削り 内面ナデ	外面肩部剥離著しい
37-8	甕	% 完 %		(19.9) (8.5) (33.4) 胴最大径 (22.4)	灰褐色—灰褐色 小砂粒多 母 不良	含金雲	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面ナデ下半縦位 ヘラナデ 底部ヘラ削り	内面剥離著しい
37-9	甕	完 % %		19.0 (8.3) 32.9 胴最大径 22.5	黄褐色—黄褐色 小砂粒多 母 良好	含金雲	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面上半ナデ下半 縦位ヘラナデ 底部ヘラ削 り	雲母含む

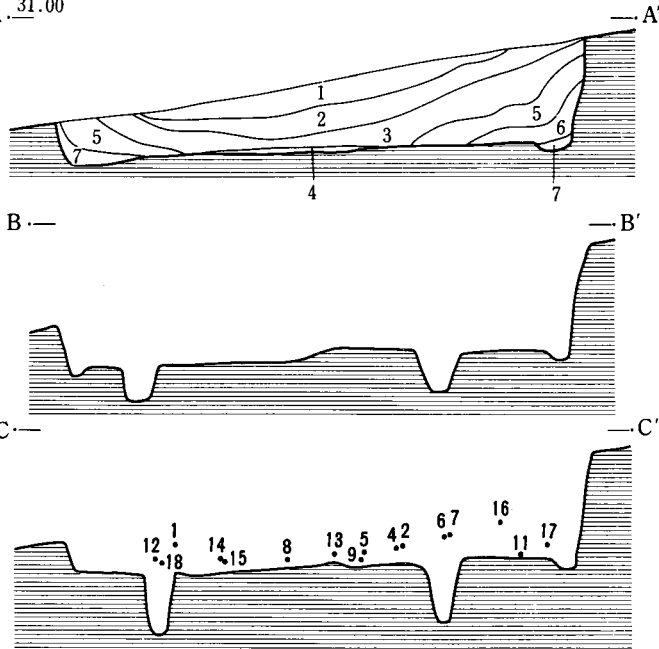
第38号住居跡 (第291~294図 図版103・104・151・161)

台地南側緩傾斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2 B63他である。

遺構 南西壁4.20m、北西壁4.00mあり、面積17.89m²の方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN74°Wであり、カマドの周囲に小柱穴4個が検出された。P₅~P₈の深さは、46cm、28cm、24cm、31cmをそれぞれ計りカマドの附属施設であったことはまちがいない。壁は四辺ともほぼ垂直に立ち上がり、北壁約85cm、南壁約30cmと傾斜が大きいことを示している。壁溝はカマドと南東コーナーを除いてめぐり巾約30cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面はほとんど平坦であるが一部緩傾斜をなすところがある。柱穴は8個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置されている。P₅・P₈は前述の通りである。



A. 31.00



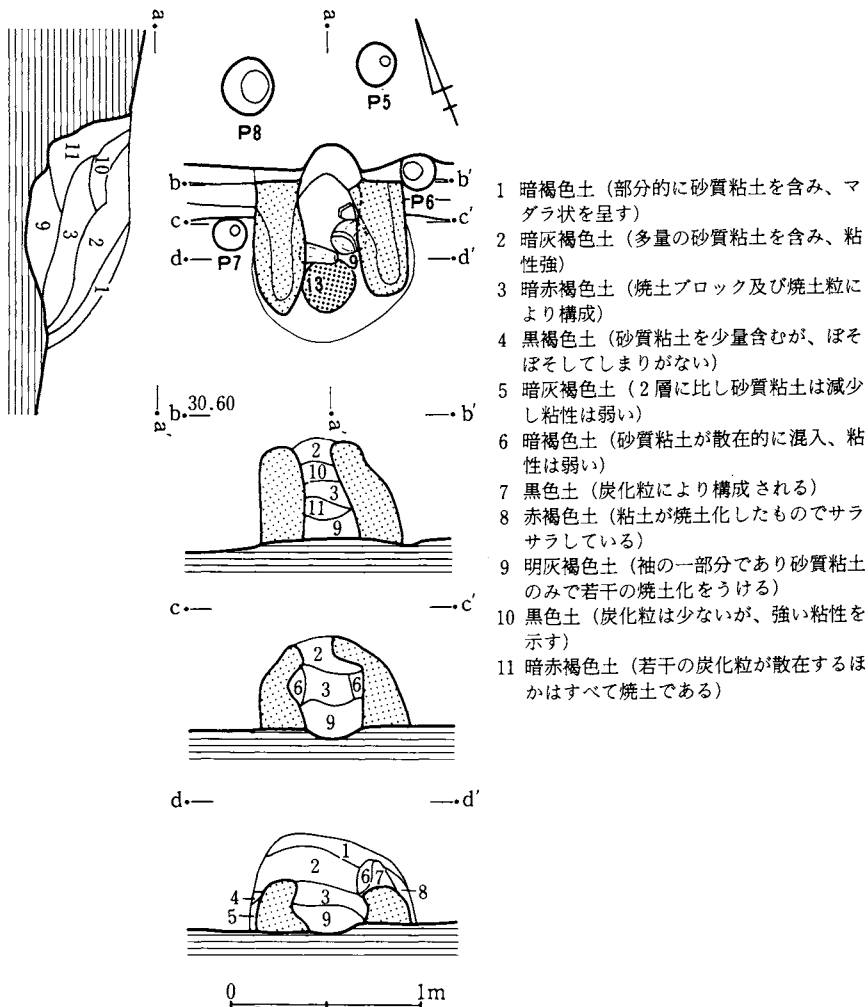
- 1 暗黒褐色土 (ローム粒が部分的に集中し、マダラ状を呈す)
- 2 明黒褐色土 (ローム粒は若干大粒になり散在する)
- 3 明黒色土 (小粒のローム粒が散在し、炭化粒も若干含む)
- 4 明褐色土 (若干の炭化粒及び焼土粒混入)
- 5 暗褐色土 (大粒のローム粒が散在し、しまりは悪い)
- 6 暗褐色土 (ローム粒は5層に比し大きくなるが、ブロック状は呈さない)
- 7 明褐色土 (ロームブロック多量混入、ボソボソしてしまりが無い)

0 2m

第291図 第38号住居跡実測図 (1/60)

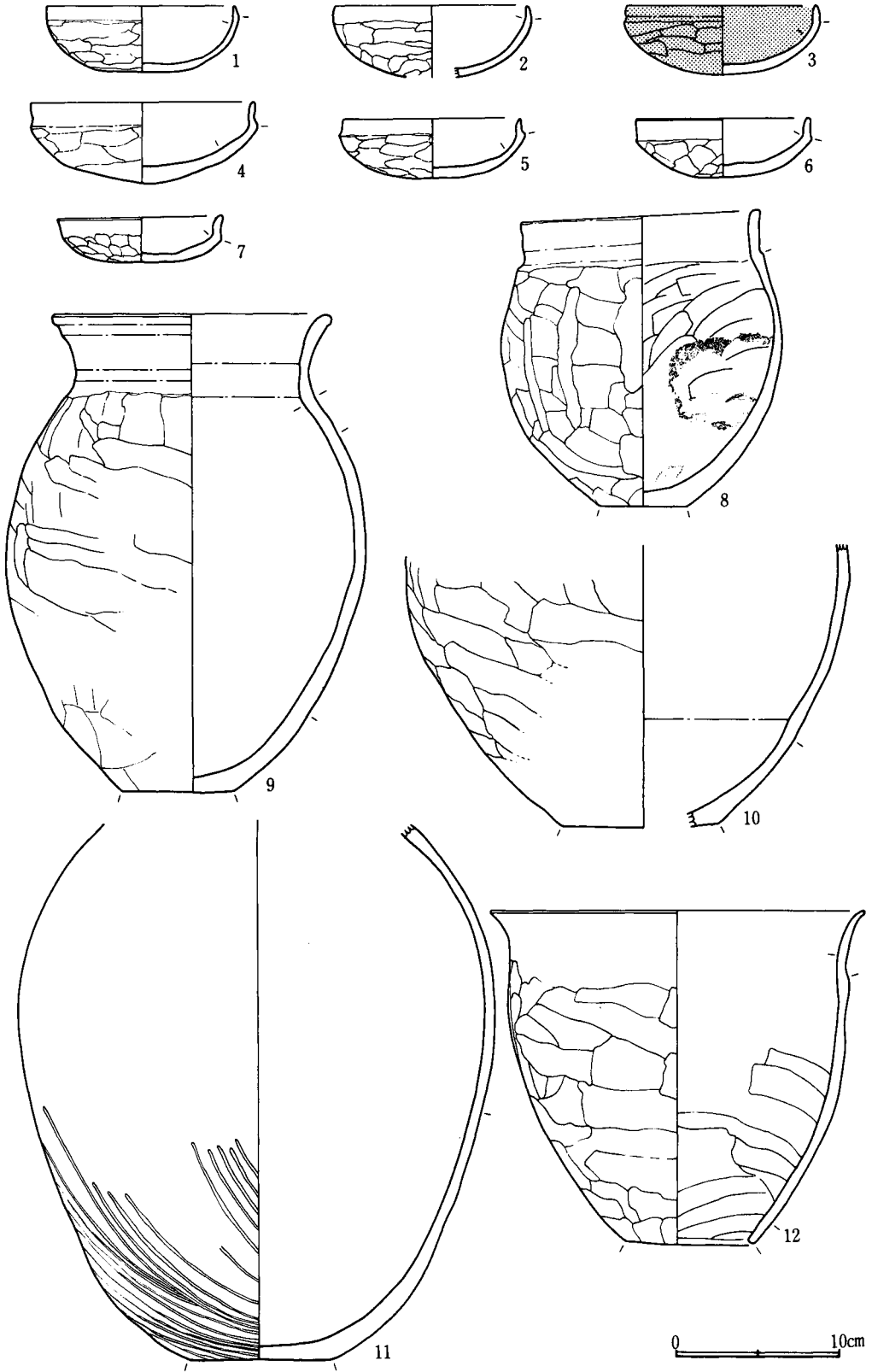
カマド 北西壁中央に位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約20cmを計る。小柱穴のP₅・P₈は壁上の煙道を挟む様に、P₆・P₇はカマド両袖を挟む様にそれぞれ配置され、構造上からカマドを構築した後に、この附属施設を設けたものと推定される。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30cm程の播鉢状を呈する。カマド内より9の甕の完形品、13の土製支脚の完形品が出土し、使用状態そのままの廃棄であろうか。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積状況を示している。遺物は坏・甕・甑・土製支脚・紡錘車・砥石と豊富である。9・13は前述の様にカマド内、8・11の甕と12の甑はほぼ床直上の一括出土の完形品であり、他の遺物も床直に近いものか、覆土中下部からの出土であるが、大形破片である。

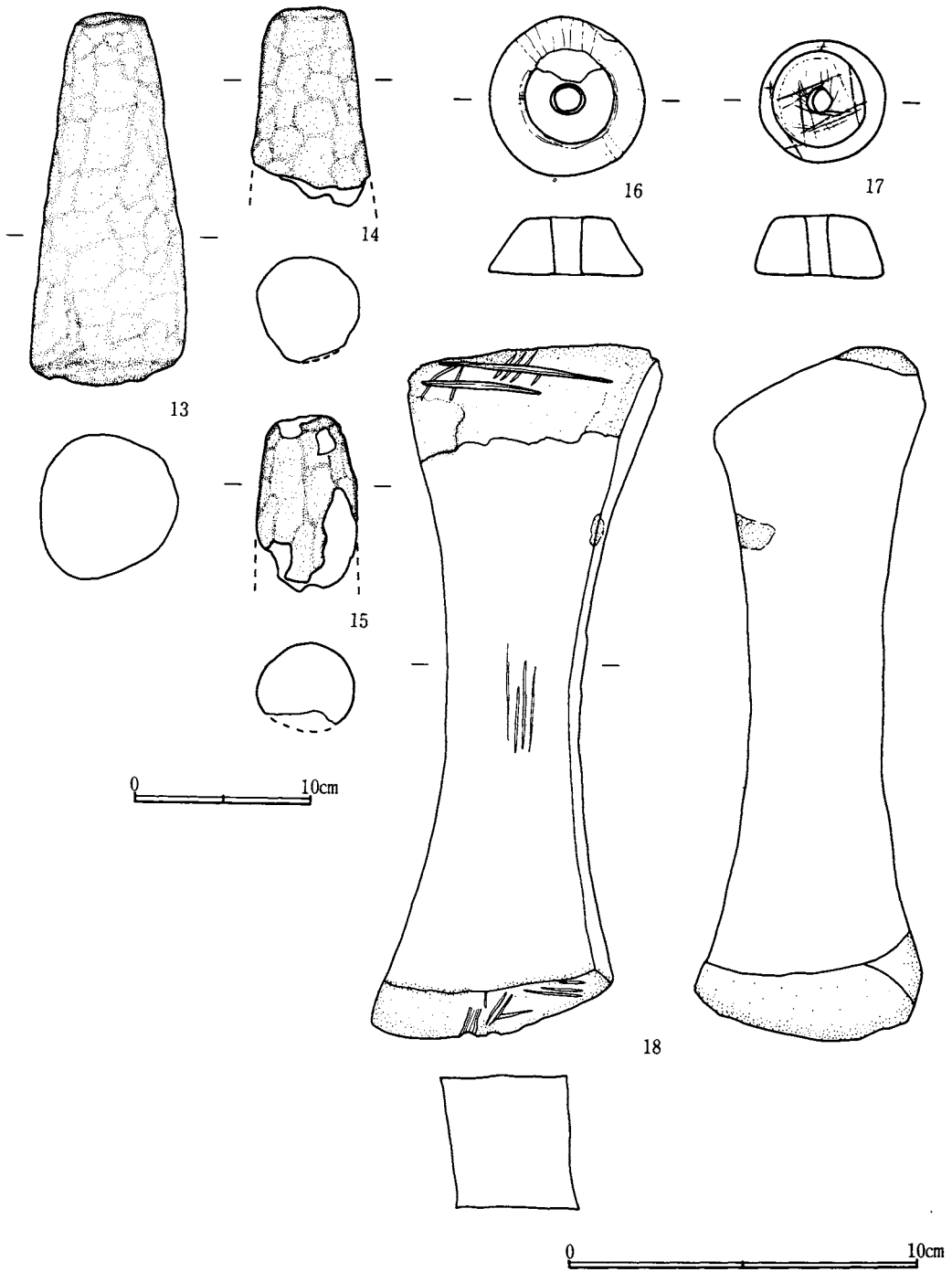


- 1 暗褐色土（部分的に砂質粘土を含み、マダラ状を呈す）
- 2 暗灰褐色土（多量の砂質粘土を含み、粘性強）
- 3 暗赤褐色土（焼土ブロック及び焼土粒により構成）
- 4 黒褐色土（砂質粘土を少量含むが、ほぼそしてしまりが無い）
- 5 暗灰褐色土（2層に比し砂質粘土は減少し粘性は弱い）
- 6 暗褐色土（砂質粘土が散在的に混入、粘性は弱い）
- 7 黒色土（炭化粒により構成される）
- 8 赤褐色土（粘土が焼土化したものでサラサラしている）
- 9 明灰褐色土（袖の一部であり砂質粘土のみで若干の焼土化をうける）
- 10 黒色土（炭化粒は少ないが、強い粘性を示す）
- 11 暗赤褐色土（若干の炭化粒が散在するほかはすべて焼土である）

第292図 第38号住居跡カマド実測図 (1/40)



第293图 第38号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1



第294图 第38号住居跡出土遺物実測図 (13~15 1/4、16~18 1/2) No 2

第38号住居跡出土遺物観察表

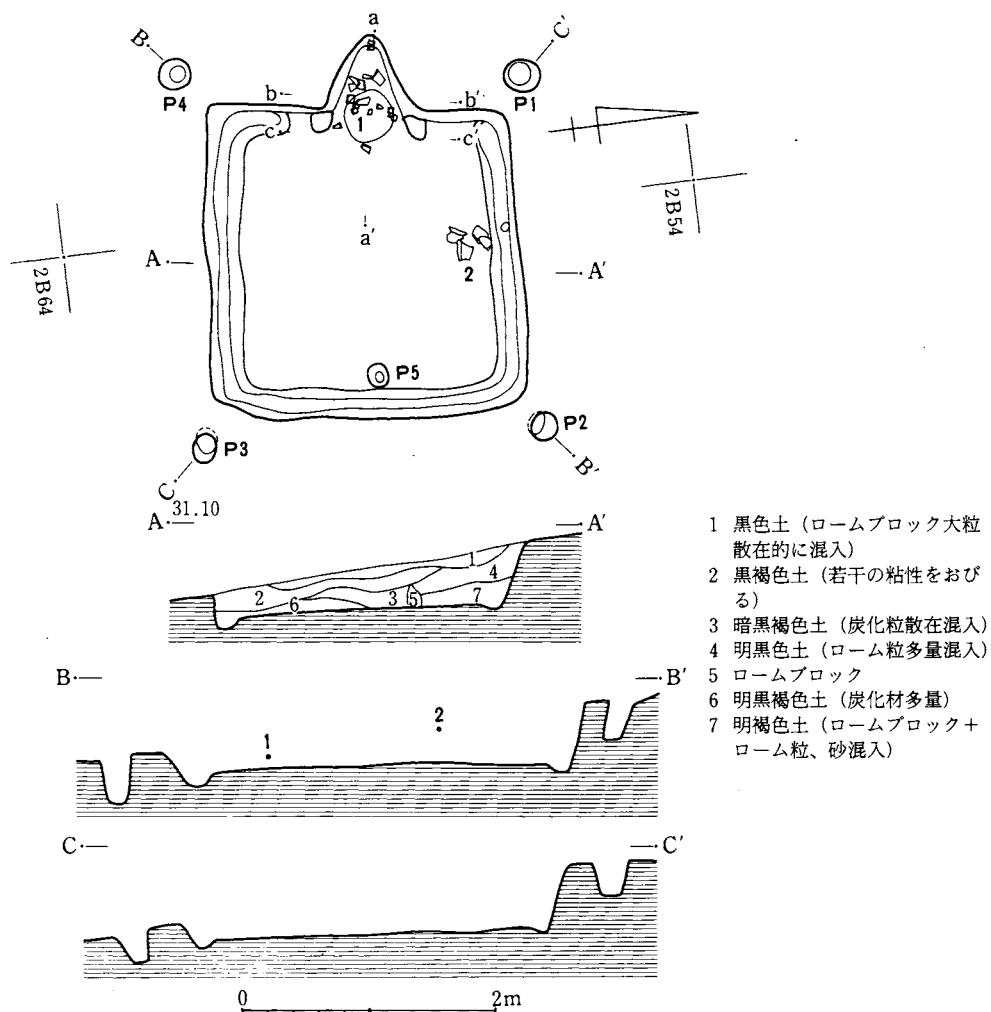
遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm 器高	口径 底径 器高	色調 内一外 胎土 焼成	成形・調整	備考
38-1	坏		1/2 1/2 1/2 稜径	(11.6) — 4.1 11.8	(11.6) — 4.1 11.8	暗褐色一暗褐色 小砂粒少 良好	口縁部横ナデ 体部内面丁寧なナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	口縁部スス付着
38-2	坏		1/2 1/2 1/2 稜径	(12.0) — (4.4) (12.4)	(12.0) — (4.4) (12.4)	暗褐色一暗黒褐色 小砂粒少 良好	口縁部横ナデ 体部内面丁寧なナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	口唇部内側欠損あり
38-3	坏		1/2 1/2 1/2 蓋受径	11.8° — 4.2 12.2	11.8° — 4.2 12.2	全面赤彩 小砂粒微 含雲母微 良好	口縁部横ナデし外面やや凹面あり 体部内面ナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	全面赤彩 口唇部上端摩耗 内側欠損あり
38-4	坏		1/2 完	13.8 — 4.9 14.0	13.8 — 4.9 14.0	暗黒褐色一暗黒褐色 小砂粒少 良好	口縁部～体部内面上半まで横ナデ 体部内面ナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	内外面全体的にスス付着 口唇部一部欠損あり
38-5	坏		1/2 1/2 1/2 蓋受径	(11.0) — 3.6 (11.6)	(11.0) — 3.6 (11.6)	黒褐色一黒褐色 小砂粒少 金雲母微 良好	口縁部横ナデ 体部内面丁寧なナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	口唇部上端摩耗 内側一部欠損あり
38-6	坏		1/2 1/2 1/2 蓋受径	10.8 — 3.5 10.8	10.8 — 3.5 10.8	暗褐色一暗褐色 小砂粒少 良好	口縁部横ナデ 体部内面ミガキ外面横位斜位ヘラ削り後ナデ	内外面部分的にスス付着 イビツ 口唇部上端摩耗 一部内側欠損あり
38-7	坏		1/2 完	10.2 — 2.7 9.8	10.2 — 2.7 9.8	暗褐色一暗褐色、黒褐色 小砂粒やや多 良好	口縁部横ナデ 体部内面ナデ外面細い横位ヘラ削り	イビツ
38-8	甕		完 完 完 胴最大径	14.8 5.3 17.4 17.4	14.8 5.3 17.4 17.4	褐色一暗褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ 胴部外面横位斜位ヘラ削り後縦位ヘラ削り 内面斜位ヘラ削り 底部ヘラ削り	内面に炭化物付着 外面スス部分的に付着
38-9	甕		完 完 % 胴最大径	17.4 6.9 28.5 22.2	17.4 6.9 28.5 22.2	褐色一暗褐色 小砂粒やや多 良好	胴部縦位ヘラ削り後口縁部横ナデ 胴部外面縦位後上半～下半横位下端斜位ヘラ削り 内面ナデ 底部ヘラ削り	底部内面剥離あり
38-10	甕 (転用甕)	胴部下半のみ		— (9.6) (17.2)	— (9.6) (17.2)	暗赤褐色一暗褐色 黒褐色 小砂粒少 良好	胴部下半斜位ヘラ削り内面ナデ 底部ヘラ削り	胴部下半のみで底部は意識的に円形に穿孔か甕？
38-11	甕		1 完 % 胴最大径	— 8.8 (32.1) 29.5	— 8.8 (32.1) 29.5	暗褐色一暗褐色 小砂粒多 良好	胴部外面上半～中央ナデ 下半斜位ヘラナデ 内面ナデ	
38-12	甕		完 完 完 長さ 径	22.9 7.8 20.1	22.9 7.8 20.1	褐色一暗黒褐色 小砂粒少 良好	口縁部横ナデ 胴部外面上半～下半まで斜位下端縦位ヘラ削り 内面一部横位下端斜位ヘラ削り	
38-13	支脚	完	長さ 径	20.8 8.0×7.7	20.8 8.0×7.7	褐色 小砂粒多 良好	基部は一部欠損しているが表面は指頭痕が明瞭に残る	
38-14	支脚	先端部のみ	長さ 径	(11.1) 5.9×5.8	(11.1) 5.9×5.8	褐色 小砂粒多 良好	表面指頭痕明瞭	
38-15	支脚	先端部のみ	長さ 径	(9.8) 5.5×?	(9.8) 5.5×?	褐色 小砂粒多 良好	表面指頭痕明瞭	
38-16	紡錘車		上径 底径 高さ 孔径	30.3 45.1 15.7 8.0	30.3 45.1 15.7 8.0	含滑石蛇紋岩	重量43.4g	
38-17	紡錘車		上径 底径 高さ 孔径	27.5 35.3 17.2 7.0	27.5 35.3 17.2 7.0	含滑石蛇紋岩	重量36.7g	
38-18	砥石		長さ 最大幅 最大厚	19.2 7.0 6.5	19.2 7.0 6.5	凝灰岩	重量985g	

第39号住居跡 (第295~297図 図版105)

台地南側緩斜面部、調査区西側に位置し、グリッドは2 B54他である。

遺構 南壁2.30m、西壁2.30mあり、面積6.07m²で方形の平面形を呈し、四隅に小柱穴をもつ竪穴住居跡である。カマドは西壁中央に位置しN84°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より北壁側で約50cm、南壁で約15cmをそれぞれ計る。壁溝はカマド両袖脇を除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面はほとんど平坦で固く締っている。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は壁上の各コーナーから対角線上に配置され、径、深さ共にほぼ一定である。P₅はカマドの対面に位置し、深さ32cmを計る。

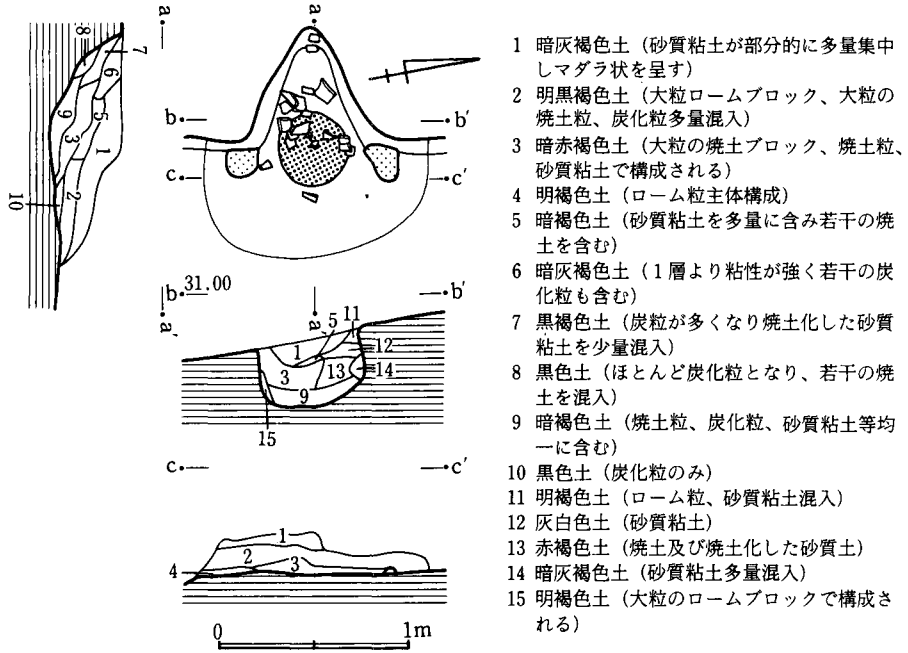
カマド 西壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約60cmと深く、やや三角形になっている。カマドの構築には砂質粘土を使用している。両袖部が短いのは掘り方



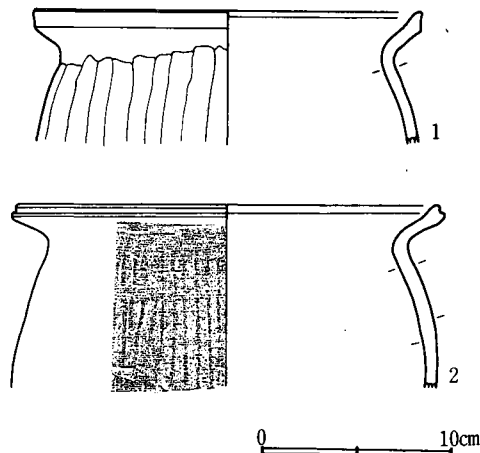
第295図 第39号住居跡実測図 (1/60)

によるものと思われる。火床部は掘り込み面にあり径35×40cmのやや浅い楕鉢状を呈する。カマド内より1の甕の破片が出土している。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は甕の破片のみで、1は前述の様にカマド内より、2は覆土中よりの出土である。



第296図 第39号住居跡カマド実測図 (1/40)



第297図 第39号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

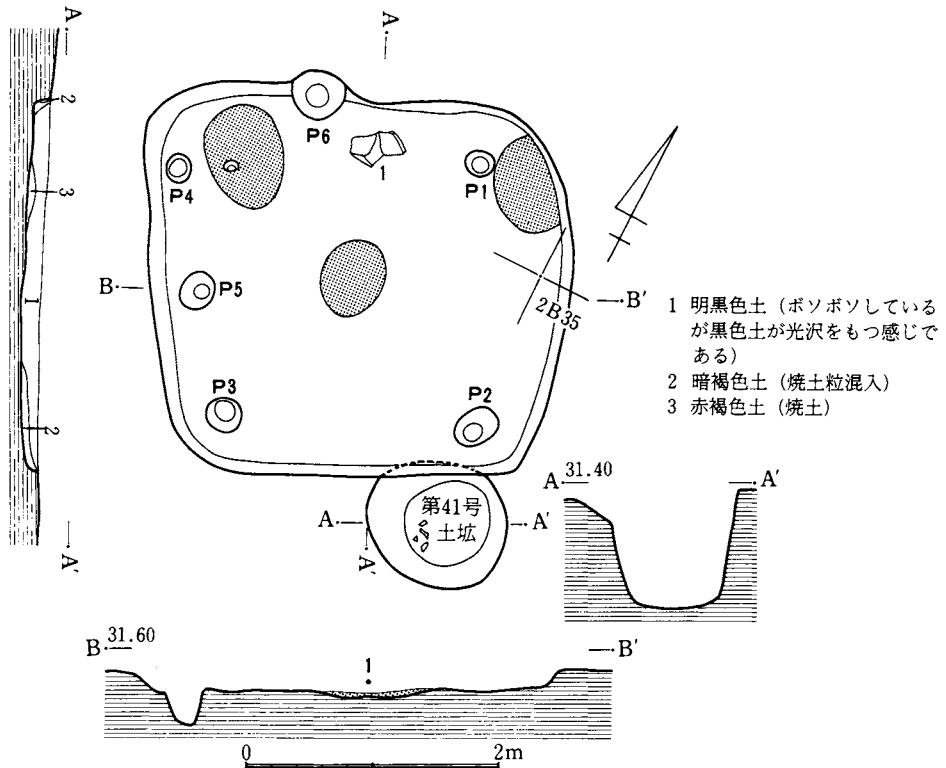
第39号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□底 体 (%) ()は推定	法量 cm 底径 器高	口径 胎土 焼成	色調 内-外	成形・調整	備考
39-1	甕	□縁部の み	% — —	20.6 — (6.6)	暗褐色—暗褐色 小砂粒微 良好	□唇をつまんで□縁部横ナ デ後胴部外面縦位ヘラ削り 内面ナデ		
39-2	甕	□縁部の み	% — —	22.0 — (9.5)	暗黒褐色—暗黒褐 色 小砂粒少 良好	□唇をつまんで□縁部横ナ デ 胴部外面叩目後上半横 ナデ 内面指頭痕後上半横 ナデ		

第40号住居跡 (第298・299図 図版105)

台地中央南側平坦部、調査区南側に位置し、グリッドは2 B35他である。第41号土壇とは重複関係にあり、本跡が古い。

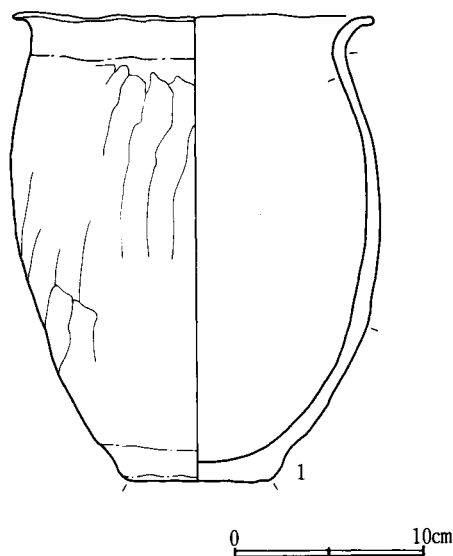
遺構 西壁2.80m、北壁2.90m、東壁2.65cm、南壁2.50cmあり、面積9.23m²で隅丸台形の平面形を呈する様な竪穴住居跡(工房跡)である。壁は緩傾斜をもって四辺とも立ち上がり、確認面より約10cmを計る。壁溝は検出されていない。床面は固く締っている。柱穴は6個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置され、床面からの深さは65cm、23cm、23cm、12cmを計り、P₅は27



第298図 第40号住居跡・第41号土壇実測図 (1/60)

cm、P₆は13cmである。P₆は壁際であり壁上からは深さ35cmを計る。焼土は3ヶ所から検出され、これらはブロック状を呈しており、火災住居のものと違い、また、炭化物もほとんど検出されていない。

遺物出土状況 調査中に若干の砂鉄と鉄滓を床面直上から検出していることから工房跡とも考えられる。覆土中から1の甕が出土している。



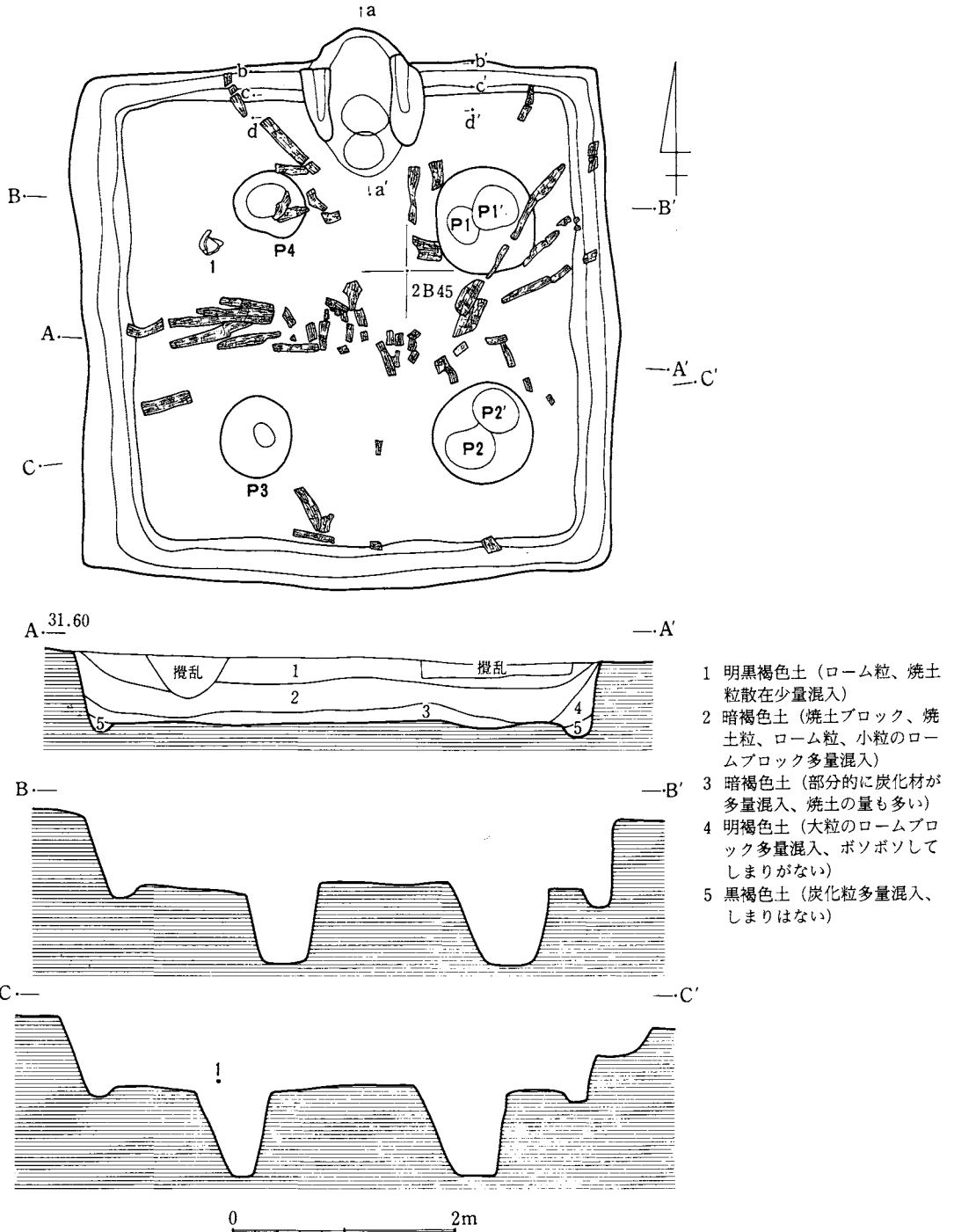
第299図 第40号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第40号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□ 底 体	法 量 cm ()は推定	口 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
40-1	甕		⅓ ⅔ ⅕		(19.2) 7.7 24.0 19.5	暗褐色-暗黒褐色 小砂粒多	良好	□縁部横ナデ後胴部外面縦 位へら削り 内面ナデ 底 部へら削り	全体的にイビツ

第42号住居跡 (第300~302図 図版106)

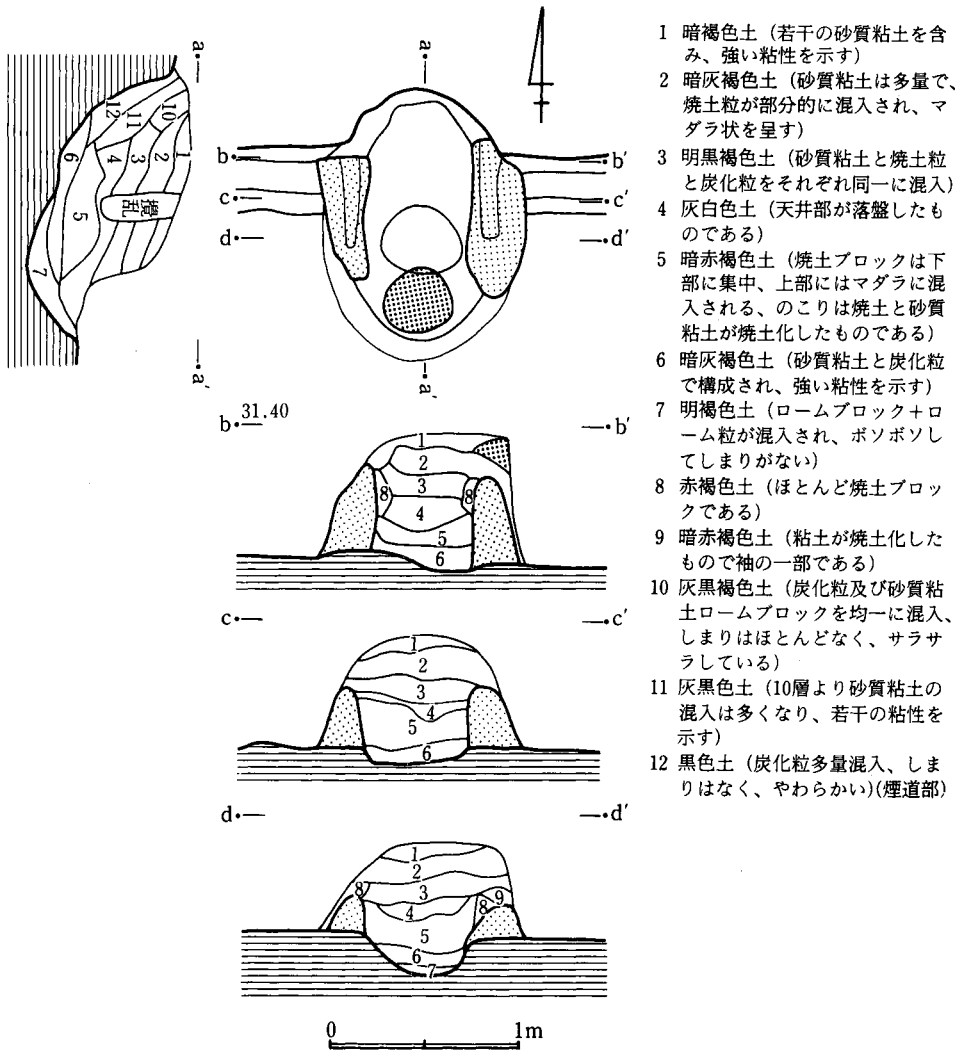
台地南側平坦部、調査区の南側に位置し、グリッドは2B45他である。第57号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しい。



第300図 第42号住居跡実測図 (1/60)

遺構 西壁4.25m、北壁4.55mあり、面積21.56㎡で各コーナーがほぼ直角を示す方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN0°Wである。壁は北・東・南の3壁がほぼ垂直、西壁が緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約25cm、深さ約15cmであるが、場所によって多少の違いが認められる。床面はほぼ平坦である。柱穴は4個検出され対角線上に配置されていて、径が非常に大きい。また、P₁の深さ50cm、P₁'の深さ70cm、P₂の深さ77cm、P₂'の深さ78cmを計り、P₁とP₂が古くP₁'とP₂'が建て替えを示している。

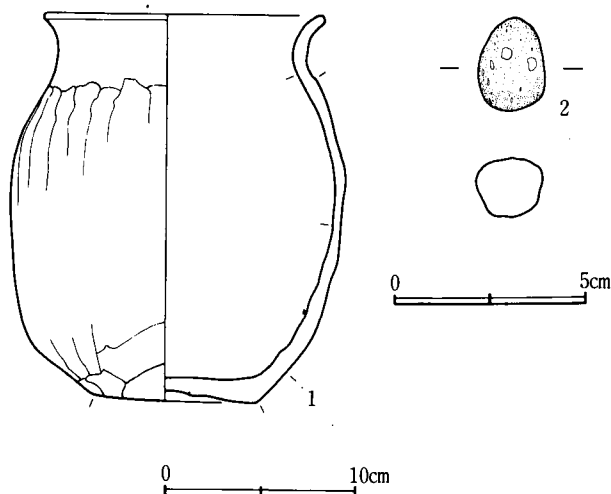
カマド 北壁中央に位置し遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約45cmを計る。カマド



第301図 第42号住居跡カマド実測図 (1/40)

の構築には砂質粘土を使用している。火床部の径40×35cmあり深い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層は一部に少し攪乱が認められるが、レンズ状の自然堆積を示す。覆土中には多量の焼土・炭化物が含まれ、床直には炭化材がある程度の形状をとどめている。炭化材は床面中央に向かって倒れていることから、屋根に使用された垂木の可能性がある。遺物は、甕と軽石が出土し、1の甕はほぼ床直上からである。



第302図 第42号住居跡出土遺物実測図 (1 1/4、2 1/2)

第42号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm 器高	口 径 底 径 器高	色 調 内—外 胎 土 焼 成	成形・調整	備考
42-1	甕		3% 3% 3%	14.9 8.7 19.8 胴最大径 17.8		褐色—暗褐色 砂粒やや多 良好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り下端横位ヘラ削 り内面ナデ 底部ヘラ削 り	胴部内外面剥離激しい
42-2	軽石		径 厚さ	2.4×1.7 1.6		浮岩	重量1.8g	

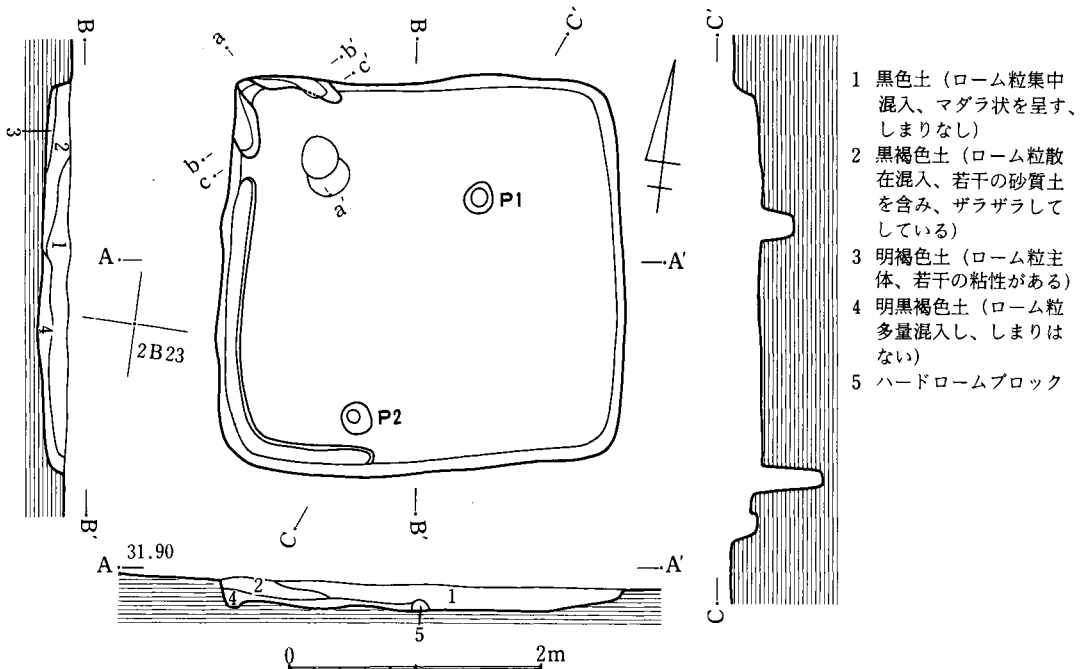
第43号住居跡（第303・304図）

台地のほぼ中央平坦部、調査区の中央南側に位置し、グリッドは2 B23他である。

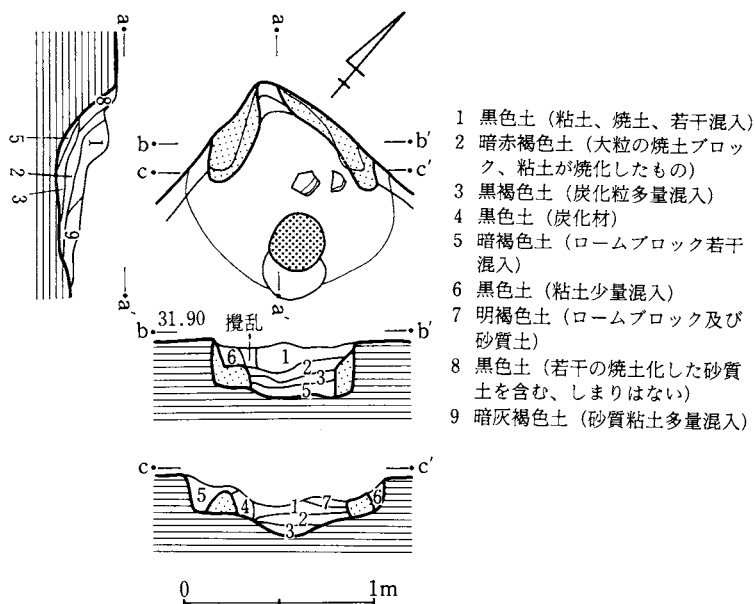
遺構 西壁2.85m、北壁2.92mあり、面積9.39㎡でやや隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西コーナーに位置しN52°Wである。壁は四辺ともに緩やかに立ち上がり、確認面より約15cmを計る。壁溝は西壁から南壁西側の一部のみがめぐり、巾約15cm、深さ約5cmである。床面は凹凸が激しいが固く締っている。柱穴は2個検出されP₁はやや床の中央付近に、P₂は壁際にあり不規則である。

カマド 北西コーナーに位置し遺存状態は良好である。コーナーのため壁への掘り込みは無く、そのまま壁を利用している。火床部が袖部から離れており、構築時の袖は相当長かったものと推定される。カマド構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30×30cmでやや深い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はほぼレンズ状の自然堆積を示す。遺物は小破片のみで図示できるものは無かった。



第303図 第43号住居跡実測図 (1/60)



第304図 第43号住居跡カマド実測図 (1/40)

第44号住居跡 (第305～307図 図版162)

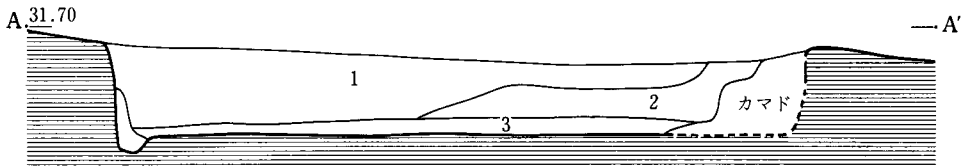
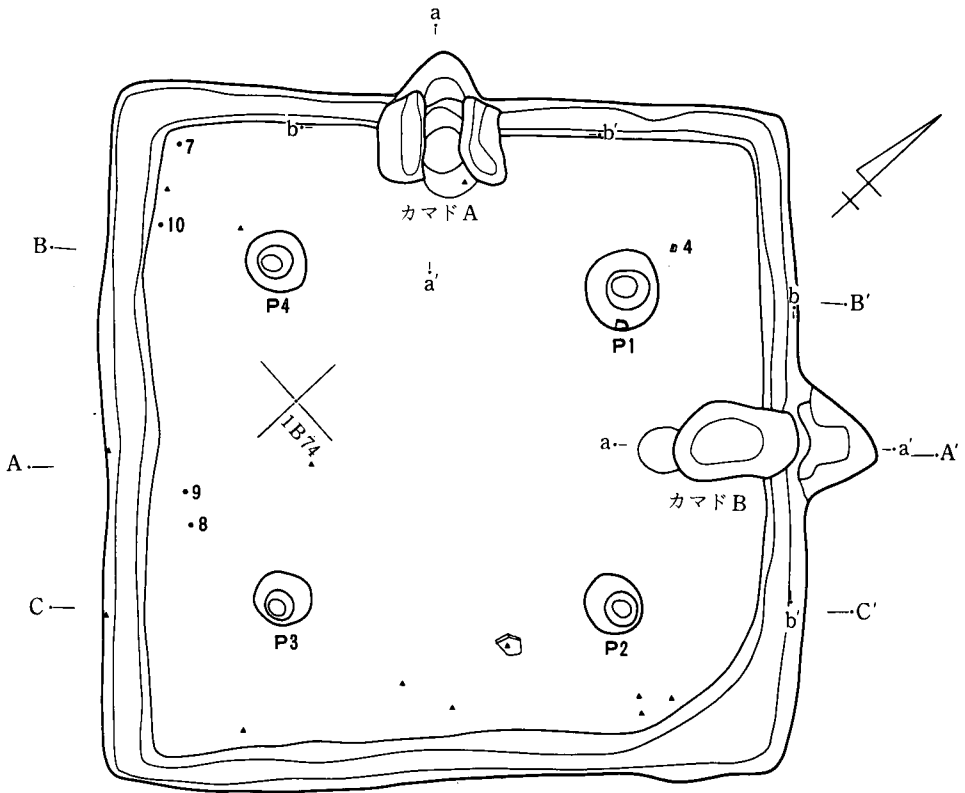
台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B74他である。

遺構 南西壁5.30m、北西壁5.20mあり、面積29.85㎡でコーナーがほぼ直角の方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドが2基検出され、カマドAは北西壁中央に位置しN48°W、カマドBは北東壁中央に位置しN45°Eであり、カマドAが検出状況から新しいことが確認された。壁は四辺ともにやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約70cmと非常に深い。壁溝はカマド構築前に全周していることが判明し、巾約25cm、深さ約5cm程である。床面はほぼ平坦である。柱穴は4個検出され、P₁～P₄ともに中段をもち、径、深さともに一定である。

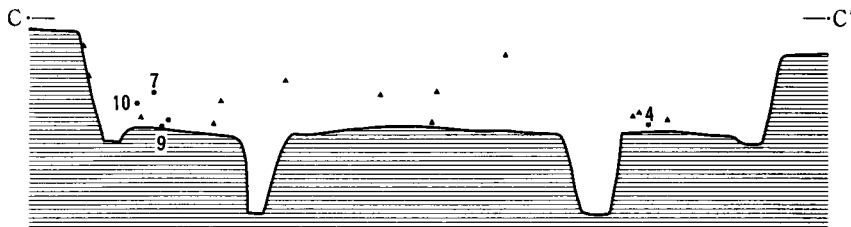
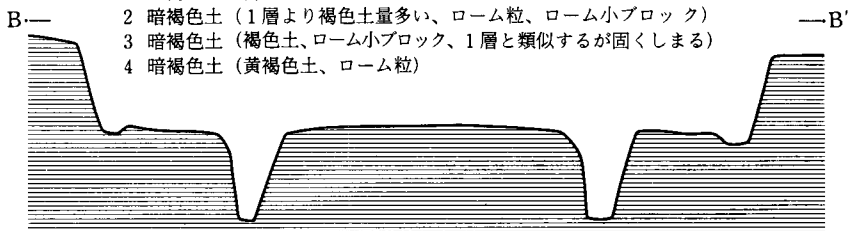
カマドA 北西壁中央に位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約35cmを計り、掘り込み部に底面が認められる。袖部の調査結果から、カマド構築前の周溝が認められた。カマドの構築には砂質粘土が使用されていた。火床部は径35×35cmの楕円状を呈する。

カマドB 北東壁中央に位置し、遺存状態は造り替えによる破壊を受けていた。壁への掘り込みは約55cmを計り、掘り込み底面は煙道部に向かって凸状を呈していた。火床部は長軸0.95m、短軸0.60mの不整楕円形の楕円状を呈する。壁への掘り込み部以外は破壊され、火床部も貼床が施されていた。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・瓶・甕・土玉・鉄鏃・刀子が出土している。7・8の鉄鏃、9・10の刀子は壁際に見られるのが特徴である。また、覆土中より15点のスラグが出土している。

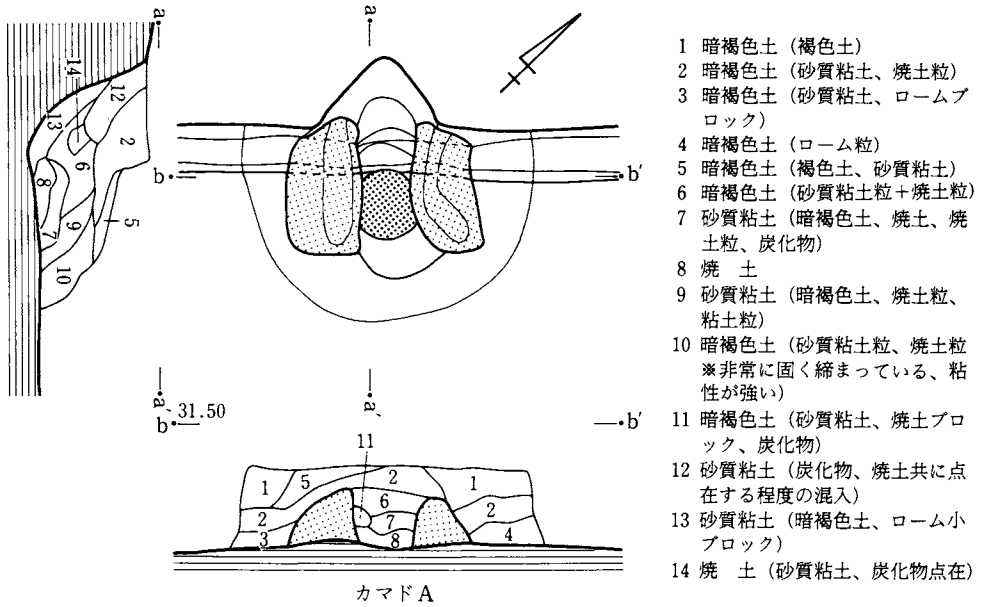


- 1 暗褐色土 (褐色土、ローム粒)
- 2 暗褐色土 (1層より褐色土量多い、ローム粒、ローム小ブロック)
- 3 暗褐色土 (褐色土、ローム小ブロック、1層と類似するが固くしまる)
- 4 暗褐色土 (黄褐色土、ローム粒)

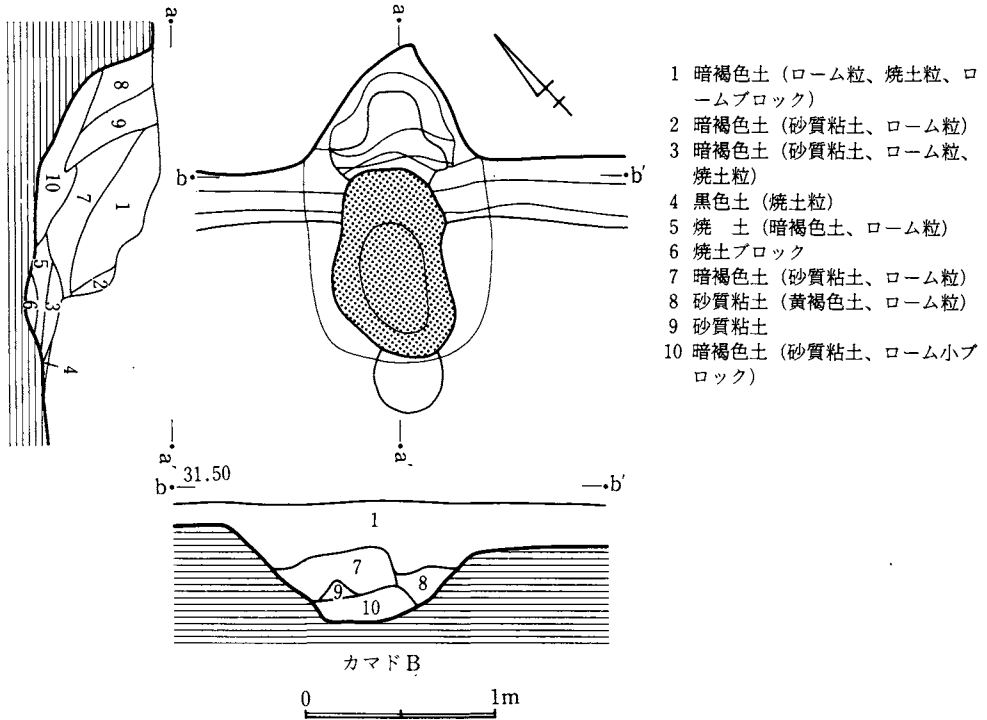


0 2m

第305図 第44号住居跡実測図 (1/60)

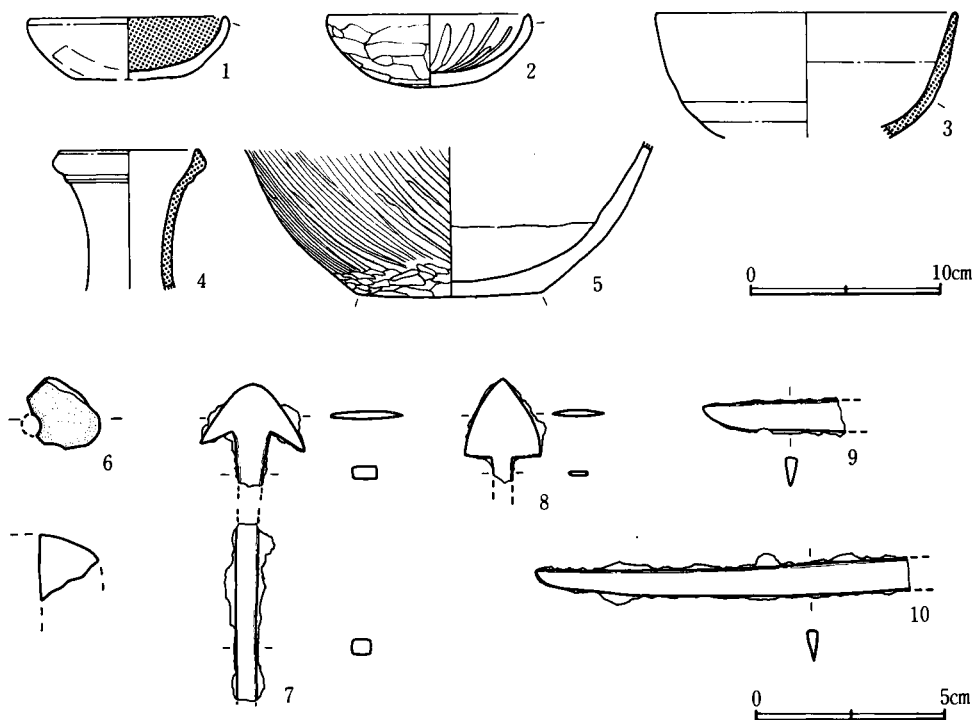


- 1 暗褐色土 (褐色土)
- 2 暗褐色土 (砂質粘土、焼土粒)
- 3 暗褐色土 (砂質粘土、ロームブロック)
- 4 暗褐色土 (ローム粒)
- 5 暗褐色土 (褐色土、砂質粘土)
- 6 暗褐色土 (砂質粘土粒+焼土粒)
- 7 砂質粘土 (暗褐色土、焼土、焼土粒、炭化物)
- 8 焼土
- 9 砂質粘土 (暗褐色土、焼土粒、粘土粒)
- 10 暗褐色土 (砂質粘土粒、焼土粒
※非常に固く締まっている、粘性が強い)
- 11 暗褐色土 (砂質粘土、焼土ブロック、炭化物)
- 12 砂質粘土 (炭化物、焼土共に点在する程度の混入)
- 13 砂質粘土 (暗褐色土、ローム小ブロック)
- 14 焼土 (砂質粘土、炭化物点在)



- 1 暗褐色土 (ローム粒、焼土粒、ロームブロック)
- 2 暗褐色土 (砂質粘土、ローム粒)
- 3 暗褐色土 (砂質粘土、ローム粒、焼土粒)
- 4 黒色土 (焼土粒)
- 5 焼土 (暗褐色土、ローム粒)
- 6 焼土ブロック
- 7 暗褐色土 (砂質粘土、ローム粒)
- 8 砂質粘土 (黄褐色土、ローム粒)
- 9 砂質粘土
- 10 暗褐色土 (砂質粘土、ローム小ブロック)

第306図 第44号住居跡カマドA・B実測図 (1/40)



第307図 第44号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6~10 1/2)

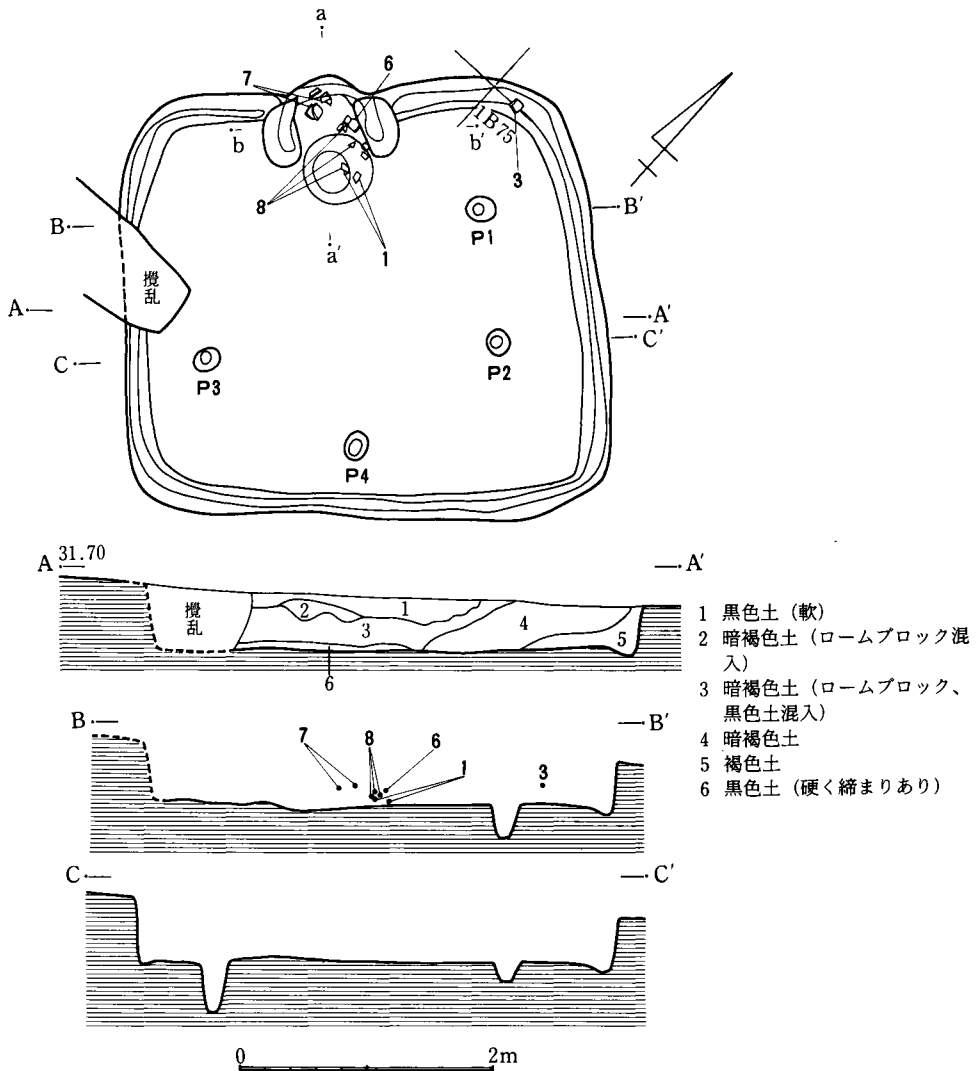
第44号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
44-1	坏		2/5 — 3/5		10.6 — 3.3	内黒-赤褐色 小砂粒多 やや不良	内面ミガキ 後ナデ	外面ヘラ削り	内黒 外面は摩耗著しい
44-2	坏		2/5 — 3/5		(10.7) — 3.9	黒褐色-黒褐色 小砂粒多 やや不良	内面丁寧なナデ 削り	外面ヘラ削り	内面スス付着
44-3	坏(蓋)		1/5 — 1/5		(16.1) — (6.6)	灰色-灰色 粒少 良好	小砂	内面一部ヘラ削り 口縁部 横ナデ 外面下半回転ヘラ削り	須恵器
44-4	瓶類		完 — —		8.1 — (7.3)	灰色-灰色 粒微 良好	小砂	ロクロ目が明瞭に残る 内外面に自然釉が付着	須恵器
44-5	甕	底部のみ	— 5/5 —		— 9.8 (8.0)	黒褐色-黒褐色 小砂粒多 含金雲母 やや不良	含金雲母	内面ナデ 胴部外面ヘラナデ	
44-6	土玉	小破片				土製		重量3.7g	
44-7	鉄鏃			長さ 長さ	(5.2) (9.1)	鉄製			
44-8	鉄鏃			長さ	(5.4)	鉄製			
44-9	刀子			長さ	(7.2)	鉄製			
44-10	刀子			長さ	(19.7)	鉄製			

第45号住居跡 (第308~310図 図版107・176)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B75他である。

遺構 南西壁3.00m、北西壁3.10m、北東壁3.00m、南東壁3.65mあり、面積12.16m²で隅丸台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央やや西寄りに位置しN48°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約45cmを計る。壁溝はカマドを除いて

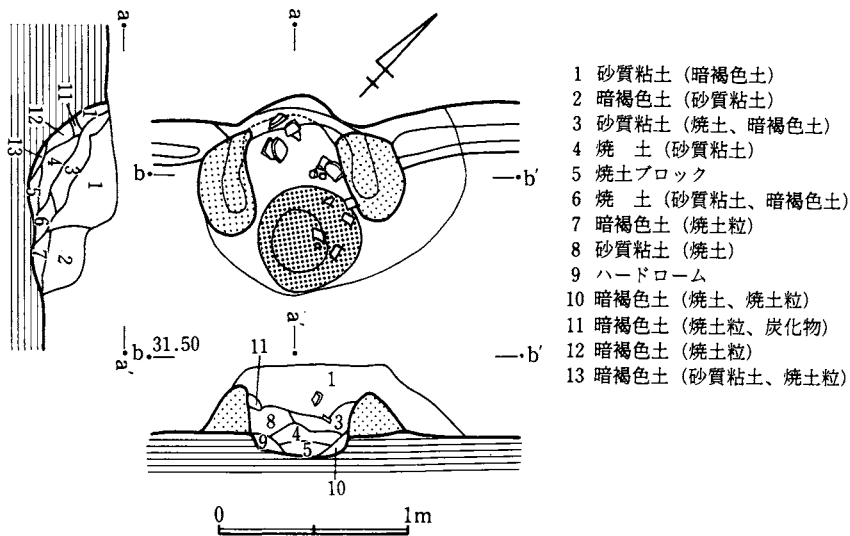


第308図 第45号住居跡実測図 (1/60)

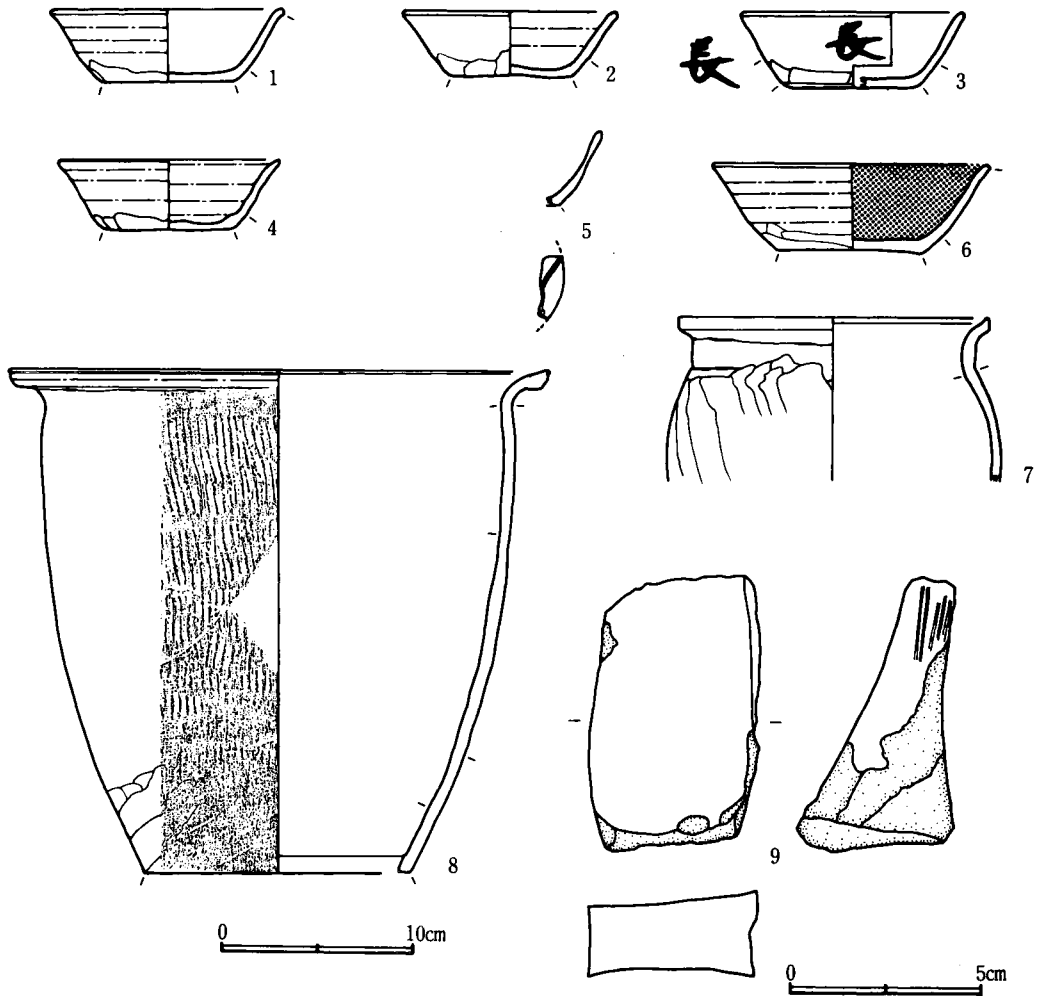
全周し、巾約20cm、深さ約5cmを計り、溝底には多数の凹があり支柱穴の可能性もある。床面は全体的に固く締っているが凹凸が著しい。柱穴は4個検出され、P₁～P₃は西コーナーに検出できなかったが対角線上に配置されたものと推定される。P₄はカマドの対面あり、深さ6cmであった。攪乱が一部南西壁に認められた。

カマド 北西壁中央に位置し遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約10cmと非常に浅かった。カマドの構築には砂質粘土を使用していた。火床部は径55×55cmを計りやや深い挿鉢状を呈する。遺物はカマド内より多量に出土している。

遺物出土状況 土層は一部攪乱を受けているものの、レンズ状の自然堆積を示している。遺物は坏・甕・甑・砥石が出土している。1・6の坏、7の甕、8の甑がカマド内からの出土である。そのほとんどが破片であり、また他は覆土中からのものである。また、その他として製錬炉の炉壁材が覆土中より出土している。



第309図 第45号住居跡カマド実測図 (1/40)



第310図 第45号住居跡出土遺物実測図 (1~8 1/4、9 1/2)

第45号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
45-1	坏		3/4 3/4 3/4		11.4 6.4 3.5	褐色-明茶褐色 小砂粒少	良好	体部下端手持ちへら削り 底部回転糸切り後周縁手持ちへら削り	
45-2	坏		3/4 3/4 3/4		12.2 6.9 4.0	褐色-褐色 粒微	小砂 良好	体部下端手持ちへら削り 底部回転糸切り後外縁手持ちへら削り	
45-3	坏		3/4 3/4 3/4		(11.4) (7.3) 4.0	茶褐色-茶褐色 小砂粒やや少 微細金雲母片やや多	良好	体部下端手持ちへら削り 底部手持ちへら削り	体部に墨書「長」あり
45-4	坏		3/4 3/4 3/4		(11.6) (6.8) 3.7	赤褐色-明赤褐色 小砂粒少	良好	体部下端手持ちへら削り 底部回転糸切り後周縁手持ちへら削り	
45-5	坏	小破片				明灰褐色-橙褐色 砂粒微量 微細雲母片やや少	良好	底部へら削り	底部に墨書あり不明

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
45-6	坏		% 完 %		14.5 7.5 4.5	内黒-暗褐色 小砂粒少	良好	体部下端手持ちヘラ削り内面丁寧なミガキ 底部ヘラ削り	内黒
45-7	壺	口縁部のみ	% — —		16.0 — (8.5) 胴最大径 (17.3)	暗褐色-暗茶褐色 小砂粒少	良好	口唇部をつまんで口縁部横ナデ 胴部外面斜位ヘラ削り 内面ナデ 口頸部に輪積み痕あり	
45-8	甗		% % %		(28.0) (13.8) 26.0	暗黒色-暗黒褐色 小砂粒少	良好	折返し口縁横ナデ外面沈線 胴部外面叩目下半斜位ヘラ削り 内面上半、下半弱い横ナデ 他ナデ 下端ヘラ削り	底部多孔?
45-9	砥石	1/2		長さ 最大幅 最大厚	6.8 4.4 4.1	凝灰岩		重量129g	

第46A号住居跡 (第311~314図 図版107~109・152・161・176・177)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B66他である。第46B号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 西壁3.15m、北壁3.30mあり、面積11.72m²でコーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN22°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約35cmを計るが、北西部分は第46B号覆土のため不明瞭な部分の一部あった。壁溝は南東部分に検出され、巾約20cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面はほぼ平坦であるが、第46B号住居跡上の面には貼床面が検出されなかったことが指摘され、土層図からもそのことがうかがえ、第46B号住居跡部分が一部近い。柱穴は3個検出され、P₁は深さ6cm、P₂は深さ7cmと非常に浅い。P₃はカマドの対面にあり深さ7cmを計りやはり浅い。

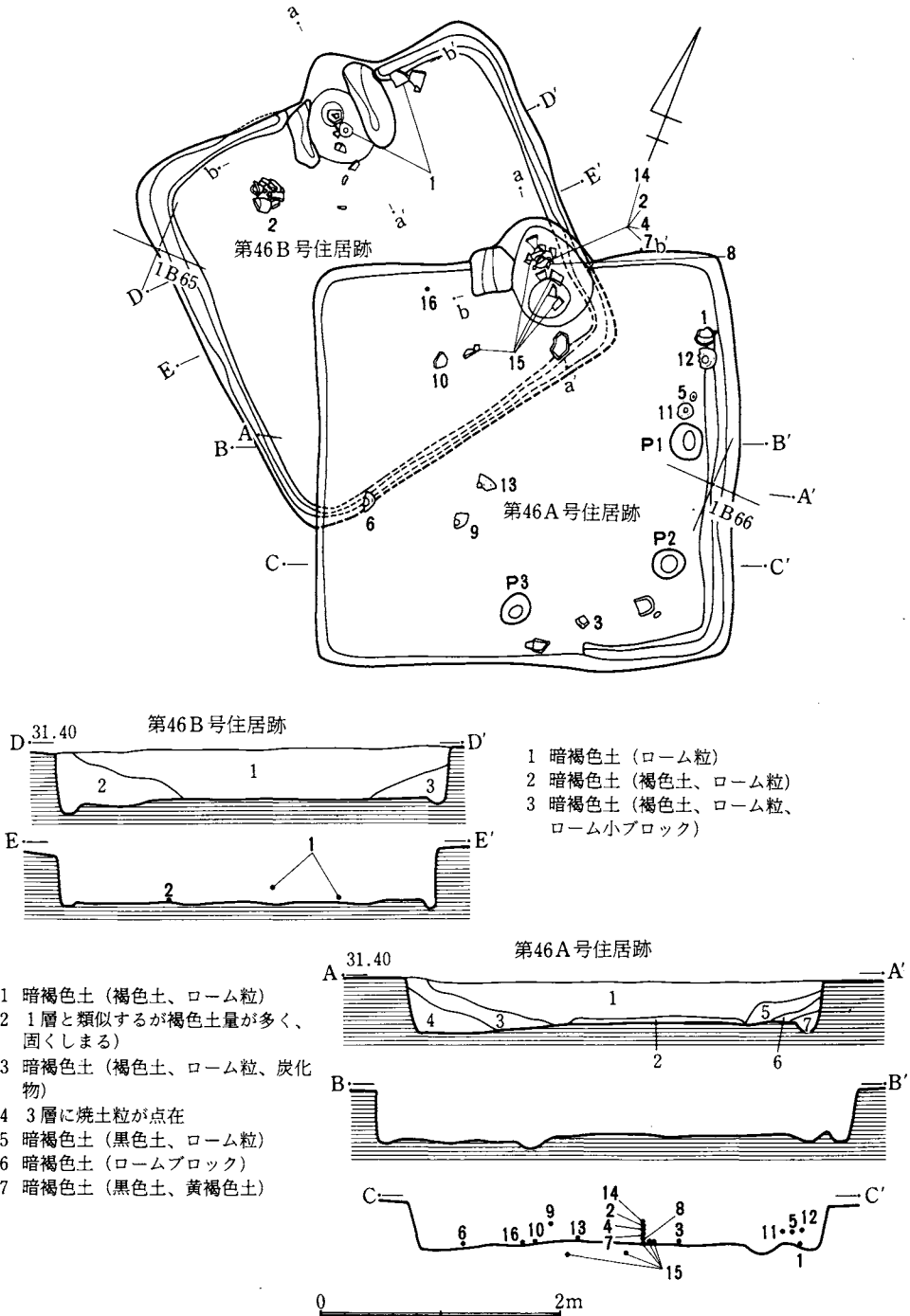
カマド 北壁中央に位置し、第46B号住居跡の覆土中に構築されていたため、一部明瞭にできなかった。左袖部の一部が検出され、カマドの構築には砂質粘土を使用していた。火床部は径35×30cmの楕円状を呈する。壁への掘り込みも明瞭にできなかったが右壁より約50cmを計る。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・高台付皿・鉢・甑・管玉が出土している。特にカマド内からの出土が多く、14・2・4・7は重なって、15の甑は破片が集中していた。東壁際には1・5・11・12が、他は17の台石と18の磨石を含めてほとんど床直上であった。また、管玉の出土と、墨書土器の出土も注目に値する。

第46B号住居跡 (第311・312・315図 図版110・111)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B65他である。第46A号住居跡と重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 南西壁3.15m、北西壁3.10m、北東壁2.80m、南東壁3.00mあり、面積(10.10)m²でやや不整形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央やや北寄りに位置しN50°Wである。壁は四辺ともに垂直に立ち上がり、確認面より約40cmを計る。壁溝はカマドを除い

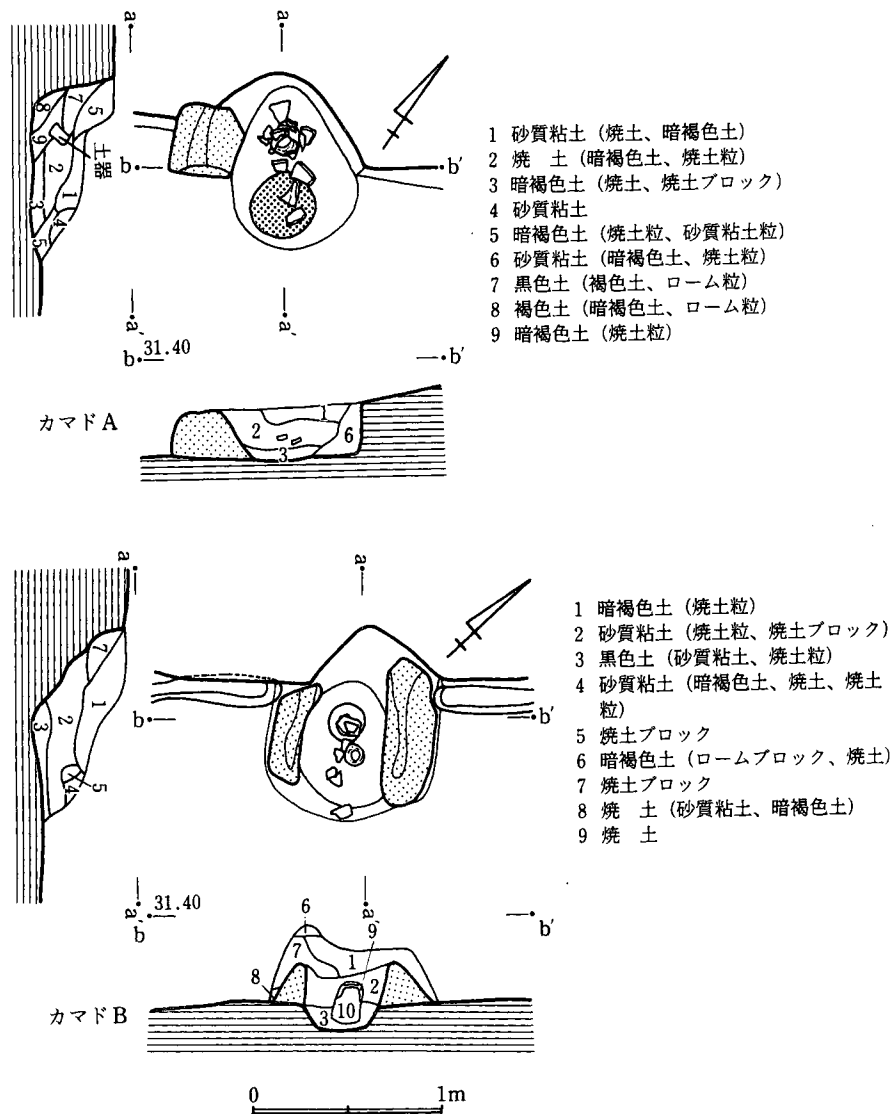


第311図 第46A・B号住居跡実測図 (1/60)

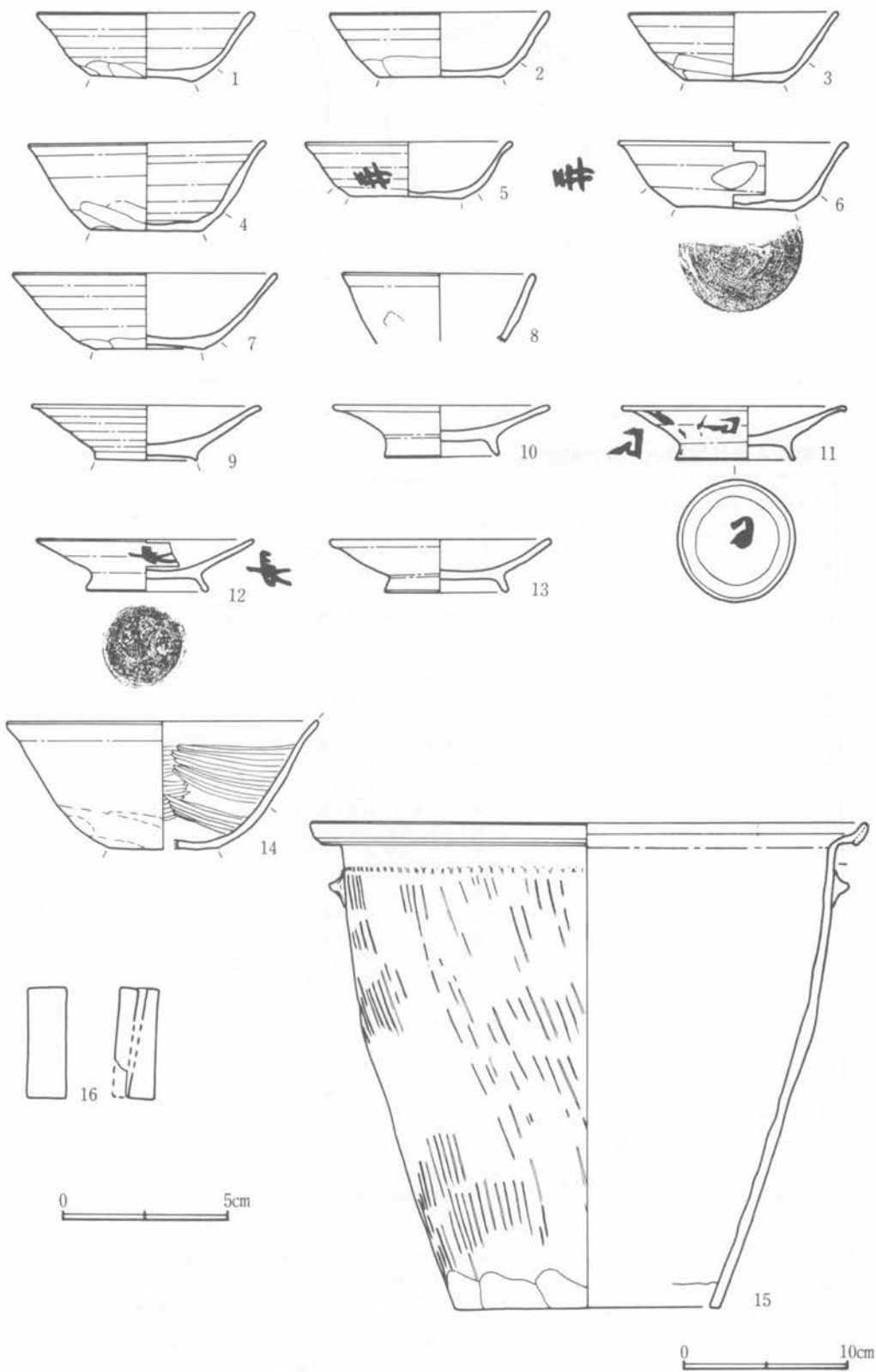
て全周し、カマド付近で一部オーバーハングをしている。巾約15cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は、小さな凹凸が認められるが、全体的に固く平坦である。

カマド 北西壁中央やや北寄りに位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約30cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部の径は大きく深い播鉢状を呈している。支脚については、粘土塊を使用して作付支脚を設置して上端には土器片を用いていた。

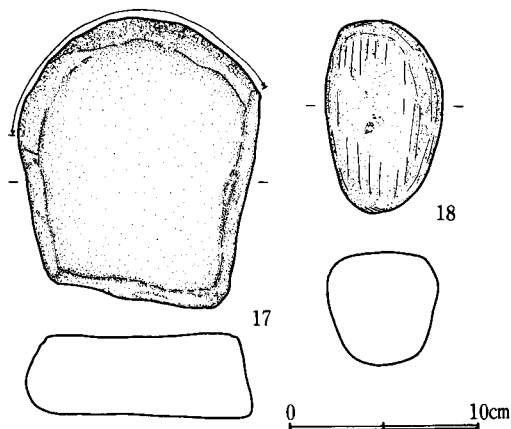
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は甕と砥石がある。1の甕はカマド内と右袖脇からのものが接合し、2の甕はほぼ完形の一括出土であった。3の砥石は覆土中からのものである。



第312図 第46A・B号住居跡カマド実測図 (1/40)



第313図 第46A号住居跡出土遺物実測図 (1~15 1/4、16 1/2) No 1

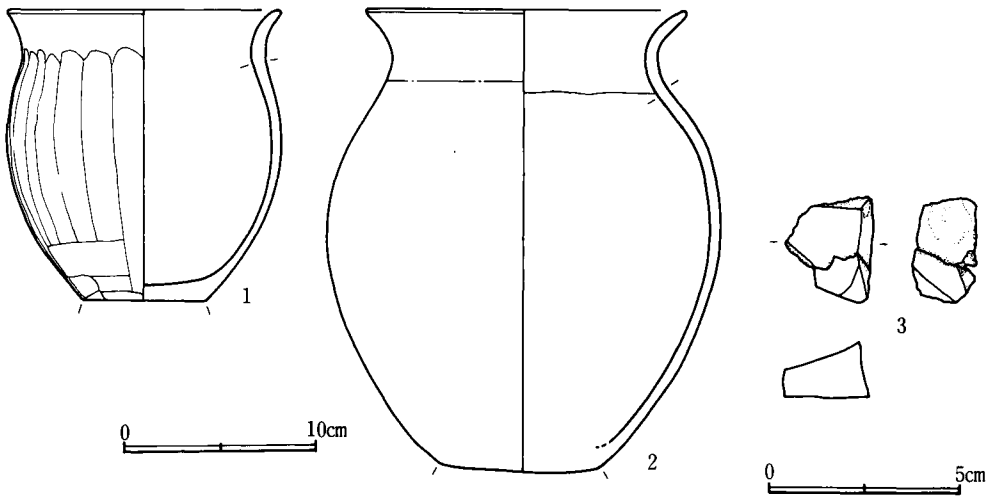


第314図 第46A号住居跡出土遺物実測図(1/4) No.2

第46A号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 内一外 胎土 焼成	成形・調整	備考
46A-1	坏	% 完 %			13.2 6.2 4.3	黄褐色—褐色 小 砂粒多 不良	体部下端手持ちへら削り 底部へら削り	
46A-2	坏	% 完 %			13.3 7.5 4.0	黒色—褐色 小砂 粒多 良好	内面丁寧なミガキ 体部下 端手持ちへら削り 底部一 方向へら削り	
46A-3	坏	% 完 %			12.9 5.9 4.3	褐色—黒褐色 小 砂粒多 非常に良 好	体部下端手持ちへら削り 底部手持ちへら削り	
46A-4	坏	% 完 %			14.5 6.8 5.6	褐色—黄褐色 胎 土精選 非常に良 好	内面丁寧なミガキ 体部下 端手持ちへら削り 底部回 転糸切り後へら削り	内面スス附着
46A-5	坏	% 完 %			12.5 7.2 3.5	明褐色—明褐色 砂粒やや多 微細 雲母やや多 良好	体部下端回転へら削り 底 部外面回転糸切り後周縁手 持ちへら削り	墨書不明が体部にあり
46A-6	坏	% 完 %			13.8 7.3 4.1	明褐色—明褐色 砂粒やや少 微細 雲母片多 良好	内面へらミガキ 体部下 端回転へら削り 底部外面回 転へら削り	
46A-7	坏	% 完 %			16.0 6.4 4.6	赤褐色—褐色 小 砂粒多 良好	内面丁寧なミガキ 体部下 端手持ちへら削り 底部回 転糸切り後周縁手持ちへら 削り	
46A-8	坏	% 完 %	口縁部の み		12.0 — (4.0)	褐色—褐色 小砂 粒多 良好	外面一部にへら削り痕あり	一部内外面剝離あり
46A-9	高台付皿	% 完 %			(14.0) — 3.2 裾径 6.2	褐色—褐色 砂粒 少 良好	内面丁寧なミガキ 底部中 央部に回転糸切り痕あり	造り出し高台
46A-10	高台付皿	% 完 %			13.4 — 3.2 裾径 7.1	黄褐色—黄褐色 砂粒少 含微細金 雲母 良好	内面丁寧なミガキ 底部中 央部に回転糸切り痕後高台 貼付	
46A-11	高台付皿	% 完 %			13.1 — 3.2 裾径 7.1	明褐色—褐色 砂 粒やや少 含微細 金雲母片 良好	内面ミガキ 底部外面回転 糸切り後周縁回転へら削り 後高台貼付	墨書「刀」が体部2ヶ 所と底部に1ヶ所あり 口縁端の一部が黒色 化している
46A-12	高台付皿	% 完 %			12.7 — 3.3 裾径 6.9	明赤褐色—褐色 砂粒やや少 微細 雲母片やや少 良 好	内面ミガキ 底部外面回転 糸切り後周縁回転へら削り 後高台貼付	墨書「長」が体部にあ り、内面上部、体外面 上部に線状の黒色化部 分あり

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm 底径 器高 ()は推定	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
46A-13	高台付皿	3/4 完 3/4	13.6 — 3.2 7.6 裾径	黒褐色—黄褐色 小砂粒多	良好	内面丁寧なミガキ 高台裏 はヘラ削り調整	歪みあり
46A-14	鉢	3/4 1/8 2/8	(19.0) (6.5) 7.6	黄褐色—黄褐色 小砂粒多	やや不 良	内面ミガキ 体部下端手持 ちヘラ削り 底部ヘラ削り	内面スス付着
46A-15	甗	2/8 1/8 2/8	(33.8) (16.2) 29.2	赤褐色—赤褐色 小砂粒多	良好	折り返し口縁を呈し胴部外 面叩目下端横位ヘラ削り内 面ナデ	底部多孔
46A-16	管玉	ほぼ完	長さ 径 孔径 0.36・1.00	3.33 1.25	碧玉	一方向穿孔	重量9.4g
46A-17	台石	完	長さ 幅 厚さ	15.3 11.7 4.4	砂岩	転石を利用 表面上端敲打 痕あり	重量1475g
46A-18	磨石	完	長さ 幅 厚さ	10.2 6.1 5.9	砂岩	表裏面に磨耗痕あり	重量189g



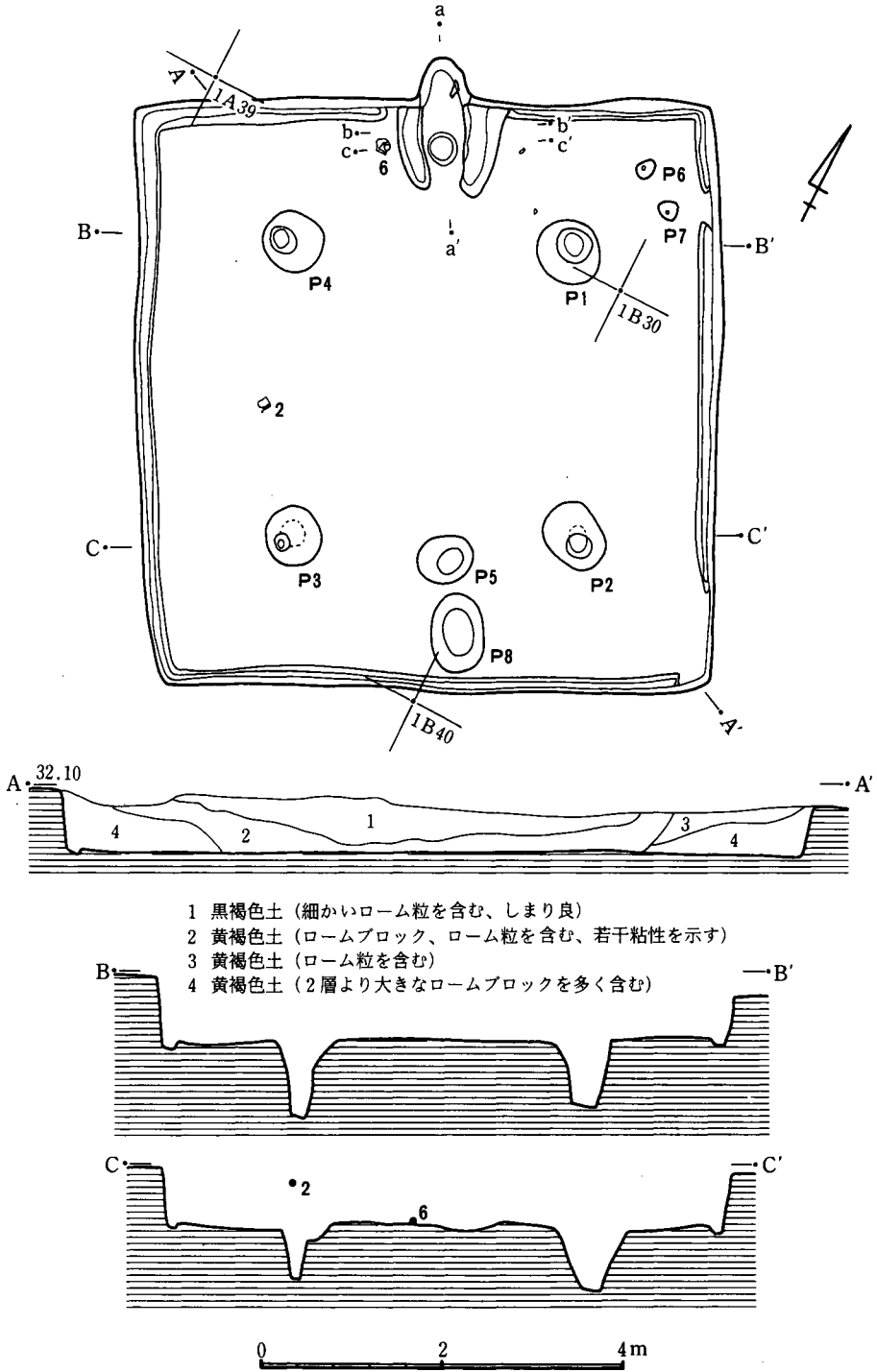
第315図 第46B号住居跡出土遺物実測図 (1・2 1/4、3 1/2)

第46B号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm 底径 器高 ()は推定	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
46B-1	甗	3/4 完 3/4	(14.4) 6.3 14.7 胴最大径 14.5	褐色—黒褐色 小砂粒多	良好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位下端横位ヘラ削り 内面 ナデ 底部ヘラ削り	内面一部剝離あり
46B-2	甗	完 完 3/4	17.0 8.4 23.9 胴最大径 20.8	黒褐色—黒褐色 小砂粒多	やや不 良	口縁部横ナデ 胴部外面ヘ ラ削り後ナデ 内面ナデ 底部ヘラ削り後ナデ	内外面下半剝離激しい
46B-3	砥石	小破片	長さ (5.3)	凝灰石			重量20g

第47号住居跡 (第316~318図)

台地中央平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 B 30他である。第157号掘立柱建物跡と重複関係にあり、新旧は不明である。



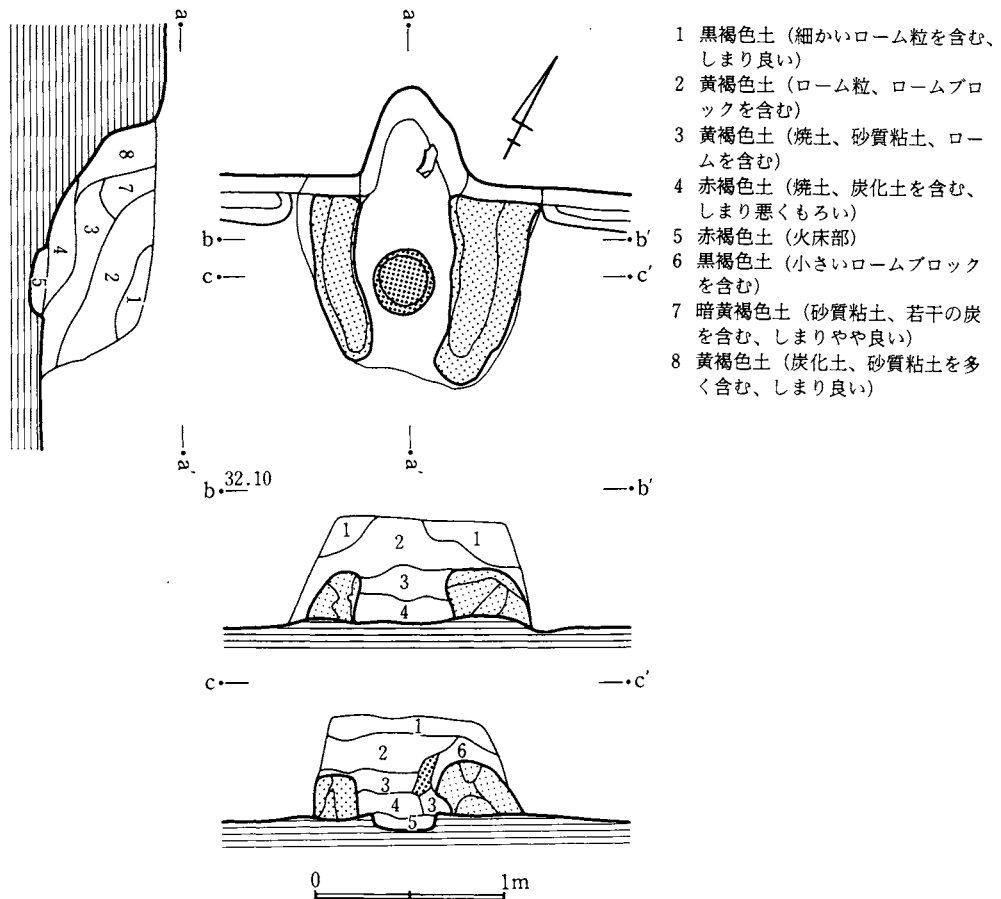
- 1 黒褐色土 (細かいローム粒を含む、しまり良)
- 2 黄褐色土 (ロームブロック、ローム粒を含む、若干粘性を示す)
- 3 黄褐色土 (ローム粒を含む)
- 4 黄褐色土 (2層より大きなロームブロックを多く含む)

第316図 第47号住居跡実測図 (1/80)

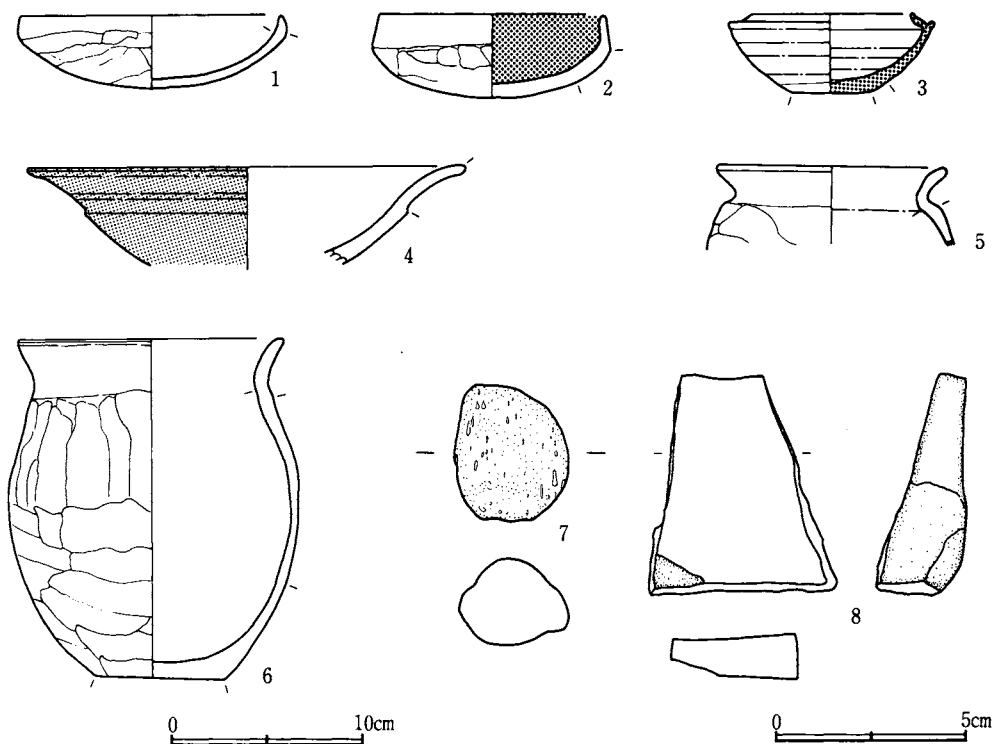
遺構 西壁6.20m、北壁6.20mあり、面積41.61m²で各コーナーが直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN26°Wである。壁は四辺ともにほぼ直角に立ち上がり、確認面より約50cmを計る。壁溝はカマドと東壁の一部を除いて全周し、巾約15cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は7個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置され、P₅は深さ26cmありカマドの対面に位置する。P₆・P₇は深さ57cm、60cmをそれぞれ計り、北東コーナーに位置する。この両柱穴の位置する北東コーナーは一部壁溝が途切れており、この施設を意識したものであろうか。P₈は貯蔵穴と思われる。長軸85cm、短軸58cmを計り、長楕円形の平面形を呈する。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、深さは18cmを計る。床面はほぼ平坦である。

カマド 北壁中央に位置し遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約45cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径35×35cmを計り深い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・高坏・甕・軽石・砥石が出土している。6は左袖脇の床直よりほぼ完形の状態で出土している。他は覆土中からのものである。



第317図 第47号住居跡カマド実測図 (1/40)



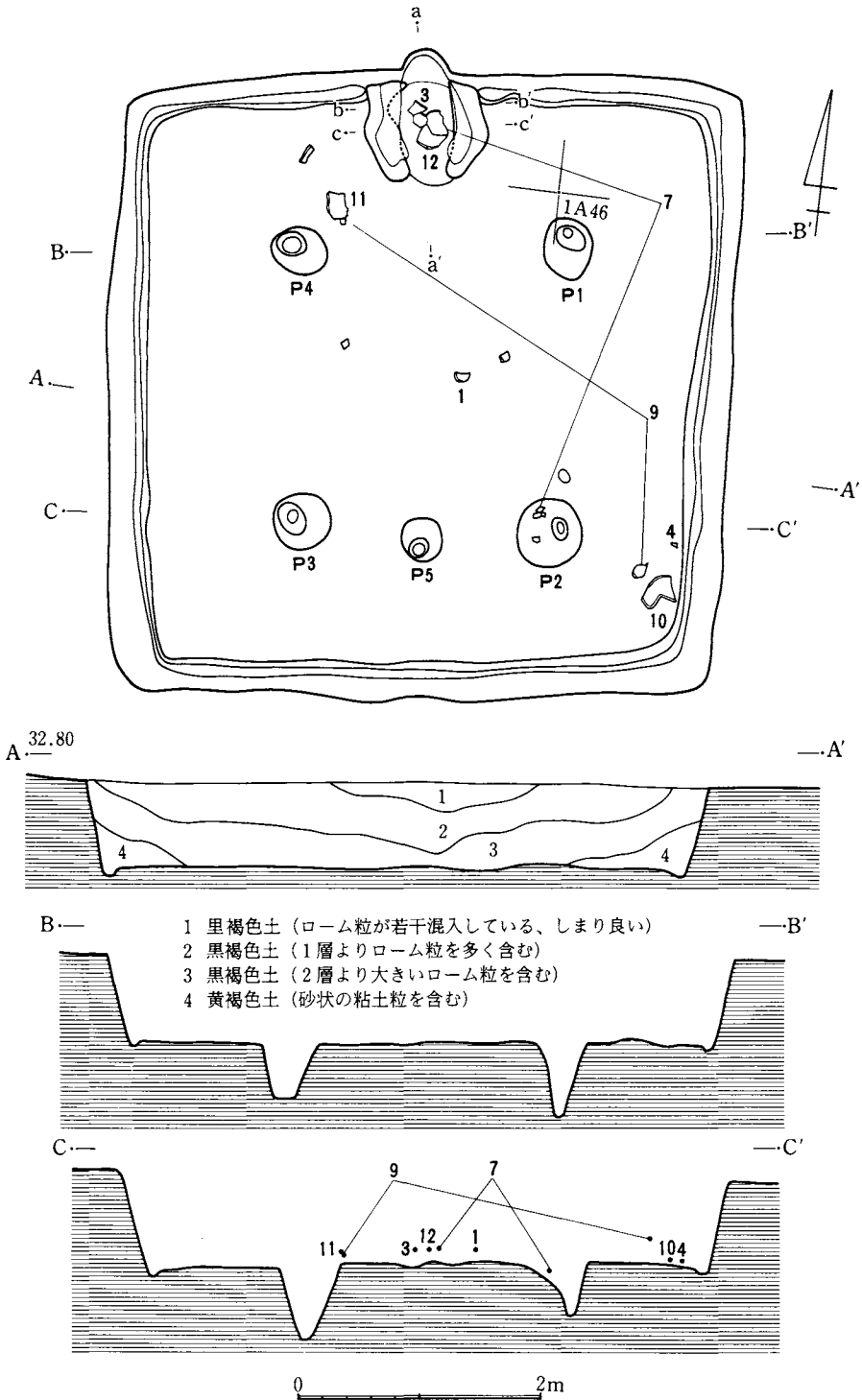
第318図 第47号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7・8 1/2)

第47号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体	法 量 cm ()は推定	口 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
47-1	坏(蓋)		% — %		13.8 — 3.8 14.2	赤褐色-赤褐色 小砂粒微	良好	口縁部横ナデ 体部内面丁寧なナデ外面横位ヘラ削り	口唇部上端内側摩耗あり
47-2	坏		% — %		(12.0) — 4.3 12.7	内黒-暗黒褐色 小砂粒少	良好	口縁部横ナデ 体部内面黒色処理後ミガキ外面一部横位ヘラ削り後ナデ	内黒 口唇部上端摩耗一部内側欠損あり
47-3	坏		1/2 完 %		(8.6) 4.2 4.2 10.9	灰色-灰色 堅緻	精選 良好	底部及び底部周辺回転ヘラ削り 他は横ナデ	須恵器
47-4	高坏	坏部のみ	% — —		(23.0) — (5.2)	赤褐色・黒褐色-赤彩 小砂粒少	良好	口縁部外面横ナデ 体部外面ナデ内面丁寧なナデ	外面赤彩
47-5	甕	口縁部のみ	% — —		12.1 — (4.1)	赤褐色・黒褐色-赤褐色・黒褐色 小砂粒少	良好	胴部外面斜位ヘラ削り後ナデ後口縁部横ナデ 胴部内面ナデ	
47-6	甕		完 完 %		12.0 6.8 17.2 15.2	暗褐色-暗赤褐色 小砂粒やや多	良好	口縁部横ナデ後胴部上半縦位中央横位下半斜位ヘラ削り 内面ナデ 底部ヘラ削り	胴部内面上半黒褐色 下半褐色に二分され使用状況の示すものかり
47-7	軽石	完		径 厚さ	3.4×3.0 2.2	浮岩		重量7.5g	
47-8	砥石	1/2		長さ 最大幅 最大厚	5.6 4.9 1.9	砂岩		重量63g	

第48号住居跡 (第319~321図 図版112・153)

台地中央平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A46他である。

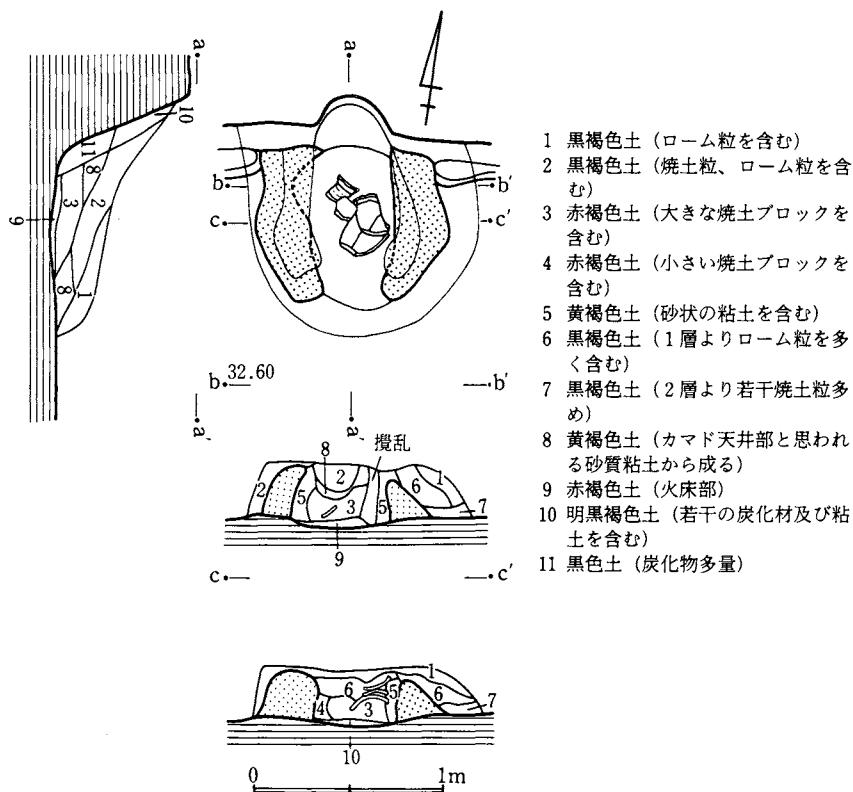


第319図 第48号住居跡実測図 (1/60)

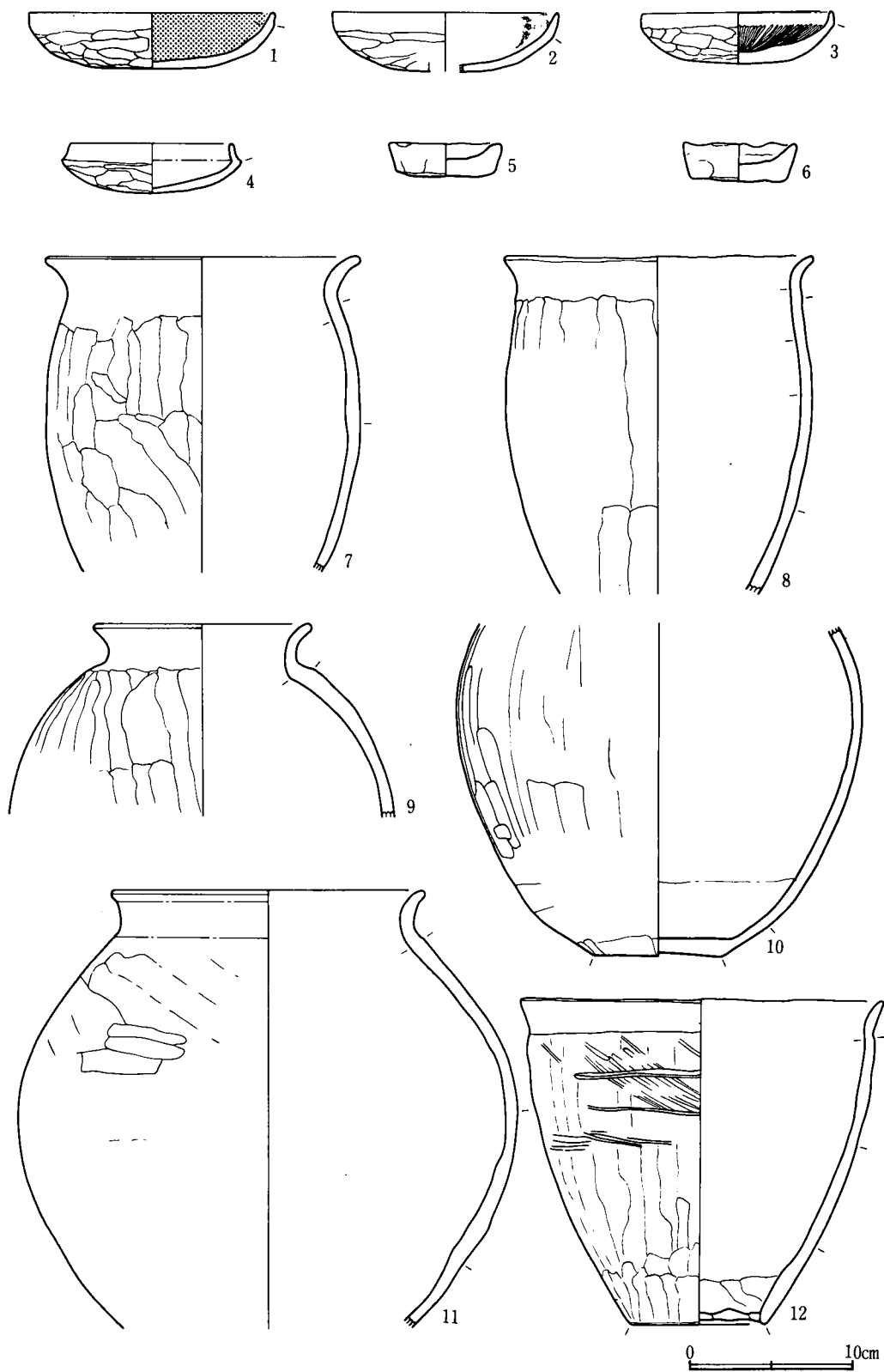
遺構 西壁4.75m、北壁5.00mあり、面積25.35m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN 5°Wである。壁は四辺ともに緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約70cmを計り非常に深い。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約15cm、深さ約5cmをそれぞれ計り、溝底が狭い。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置され、それぞれ中段を有する。P₅はカマドの対面に配置され、深さ43cmを計る。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは右壁より約25cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は全体的に浅い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・甕・甑・手捏土器が出土している。3の坏、7の甕の一部・12の甑はカマド内より出土し、7・9の甕はかなり離れて接合する。また、その他にも不明鉄製品の小破片が出土している。



第320図 第48号住居跡カマド実測図 (1/40)



第321图 第48号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

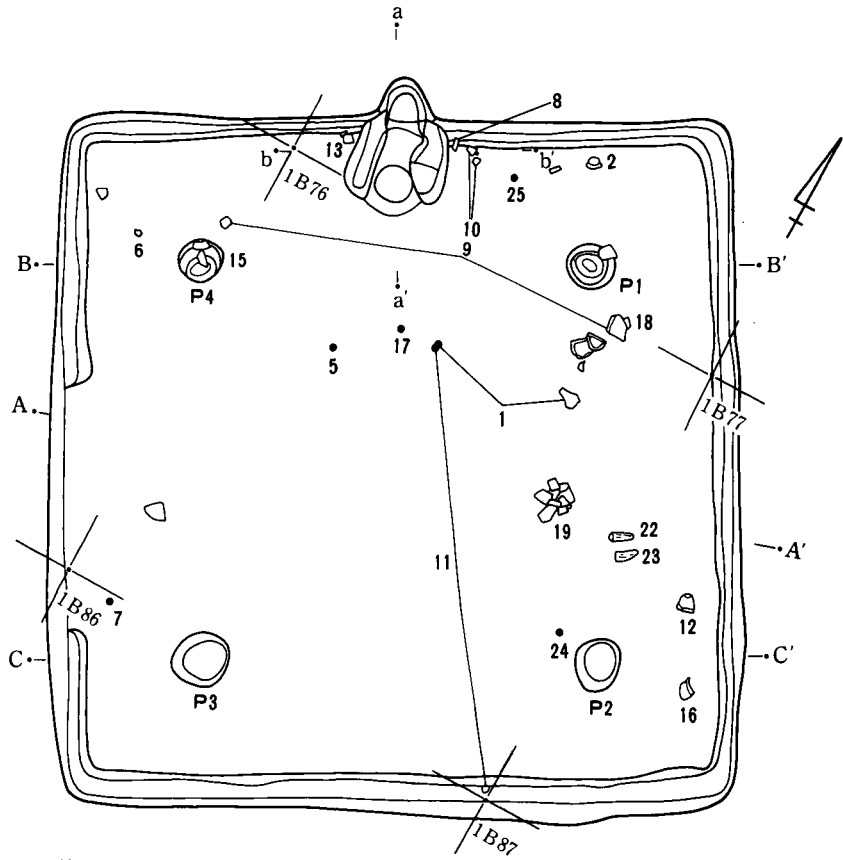
第48号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	法量 器高	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
48-1	坏(蓋)	3/4	(15.0)	—	—	内黒一暗黒褐色	—	内面丁寧なミガキ 口縁部内外面横ナデ 外面横位ヘラ削り	内黒 口唇内面に微少な摩耗痕あり
48-2	坏(蓋)	3/4	(14.0)	—	—	暗黒褐色一暗褐色	—	内面丁寧なナデ 外面横位斜位ヘラ削り後ナデ	内面に油煤痕あり
48-3	坏	完	—	11.7	—	褐色一暗褐色	小	内面横ナデ後丁寧なミガキ 外面横位斜位ヘラ削り後丁寧なナデ	口唇部上端摩耗・内側欠損著しい
48-4	坏	3/4	—	10.0	—	暗黒灰色一暗褐色	—	体部内面丁寧なナデ 外面横位斜位ヘラ削り	口唇部上端摩耗あり
		3/4	蓋受径	3.1	—	—	—	—	—
48-5	手捏土器	1/4	(7.0)	—	—	黒褐色一褐色	小	手づくね	口唇部上端一部欠損あり
		1/4	(6.1)	—	—	砂粒多	不良	—	—
		1/4	2.0	—	—	—	—	—	—
48-6	手捏土器	完	—	6.9	—	褐色一褐色	小	手づくね	—
		完	—	5.8	—	粒多	不良	—	—
		完	—	2.3	—	—	—	—	—
48-7	甕	3/4	(19.0)	—	—	褐色一褐色	小	口縁部横ナデ後胴部上半縦位中央～下半斜位ヘラ削りヘラ削り痕不明瞭	胴部下半2次火熱による剝離激しい
		3/4	(19.0)	—	—	粒少	良好	—	—
		3/4	胴最大径	(19.0)	—	—	—	—	—
48-8	甕	3/4	(19.0)	—	—	暗褐色一暗黄褐色	—	口縁部横ナデ後胴部外面縦位ヘラ削り 内面中央上半横ナデ後縦位ナデ	外面剝離激しい
		3/4	(20.0)	—	—	小砂粒少	良好	—	—
		3/4	胴最大径	(18.8)	—	—	—	—	—
48-9	甕	口縁部のみ	3/4	(13.2)	—	暗褐色一暗褐色	—	口縁部横ナデ 内面ナデ 外面縦位ヘラ削り	頸部付近まで2次火熱による剝離激しい
		3/4	(11.5)	—	—	小砂粒やや多	良好	—	—
48-10	甕	完	—	7.7	—	褐色一褐色	小	胴部中央縦位下半横位ヘラ削り 底部ヘラ削り 胴部底部接合痕明瞭	内面剝離激しい
		3/4	(20.0)	—	—	粒多	良好	—	—
48-11	甕	3/4	(19.0)	—	—	黒褐色一黒褐色	—	口縁部横ナデ 胴部外面横位斜位ヘラ削り	内外面剝離著しい
		3/4	(26.5)	—	—	小砂粒多	不良	—	—
48-12	甕	3/4	—	21.8	—	赤茶褐色一暗黒褐色	—	口縁部横ナデ 胴部外面縦位ヘラ削り後上半横位斜位ナデ 胴部内面ナデ下半横位ヘラ削り	胴部内面一部剝離あり
		3/4	—	19.7	—	色一部赤褐色	小	—	—
		3/4	孔径	7.4	—	砂粒少	良好	—	—

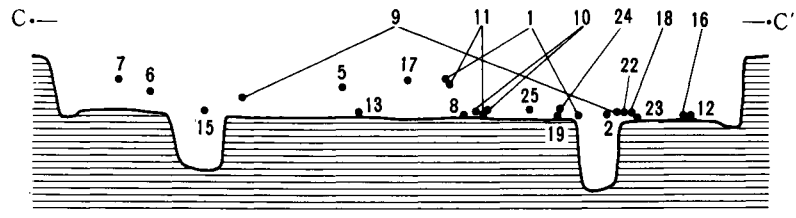
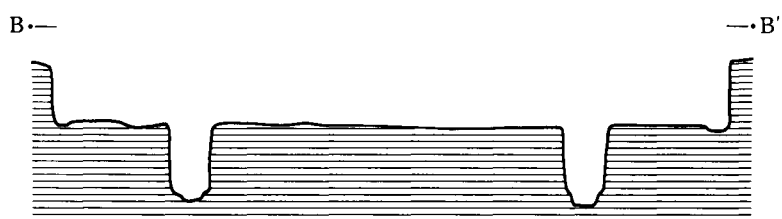
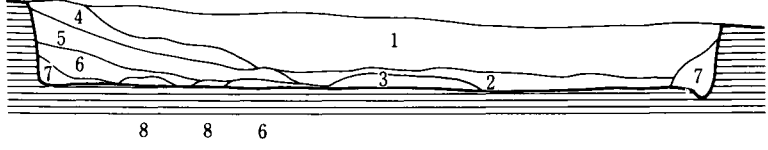
第49号住居跡 (第322~326図 図版113~116・154・161)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B76他である。

遺構 西壁7.00m、北壁6.90mあり、面積52.05㎡でコーナーがほぼ直角の方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN29°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約85cmを計る。竪穴住居跡の規模、壁の高さともに遺跡内最大である。壁溝はカマド部をもめぐるが、西壁の一部が不明瞭であった。巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ



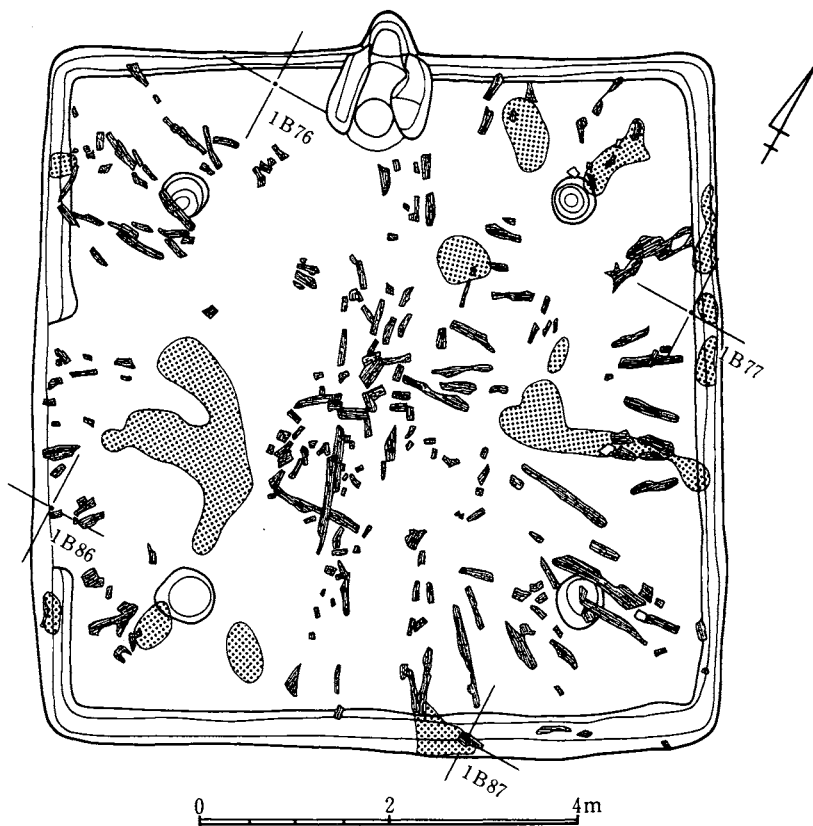
A. 31.60 —A'



0 2 4m

- 1 褐色土 (暗褐色土、焼土粒、ローム粒)
- 2 褐色土 (ローム小ブロック、ローム粒、炭化物)
- 3 暗褐色土 (褐色土、ローム粒、焼土、炭化物)
- 4 暗褐色土 (ローム粒、焼土粒、褐色土)
- 5 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック)
- 6 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒、焼土粒)
- 7 暗褐色土 (焼土、炭化物)
- 8 焼土 (黄褐色土、ローム粒)

第322図 第49号住居跡実測図 (1/80)

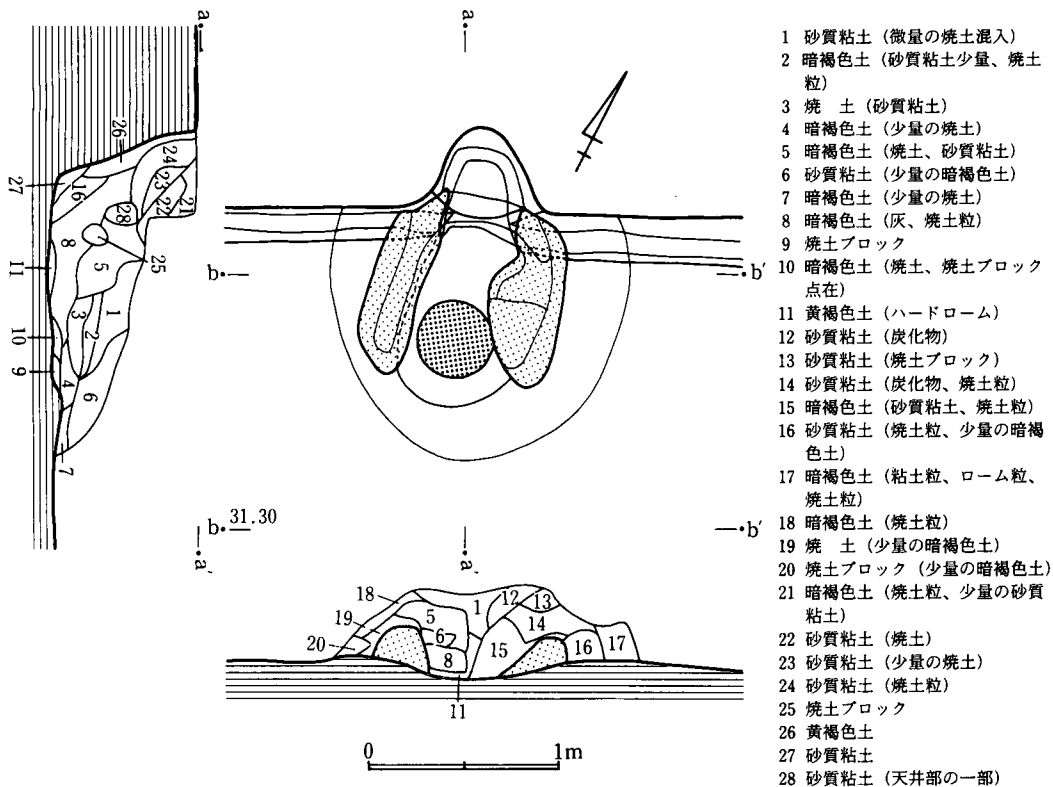


第323図 第49号住居跡炭化物出土状況図 (1/80)

計る。床面は中央部に多少凹凸が認められるが、全体的に平坦で堅緻である。柱穴は4個検出され、対角線上に配置されている。特にP₁・P₄は柱穴底面に柱痕が検出されている。

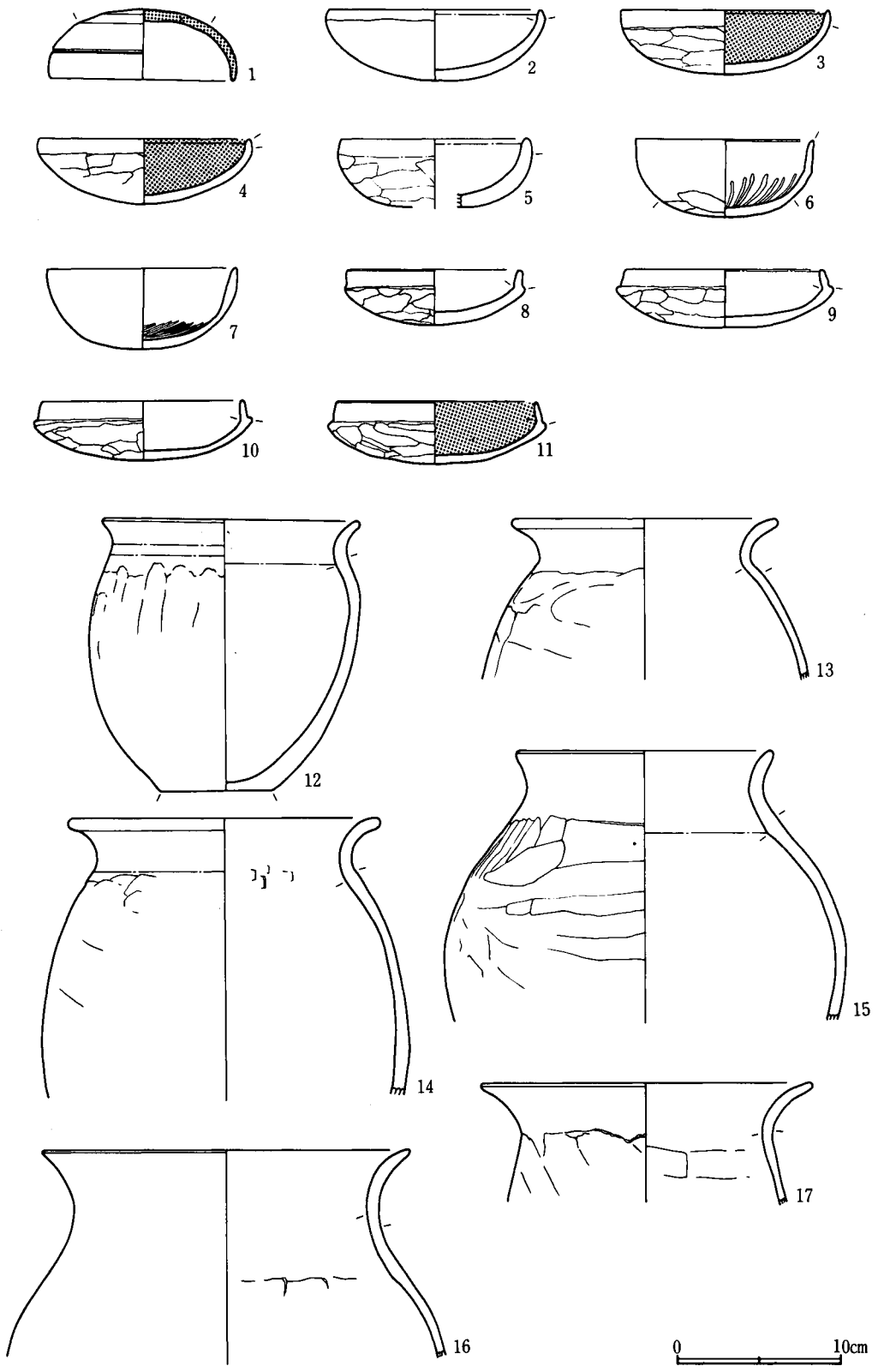
カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約40cmを計る。掘り込み部の煙道部には中段が設けられている。火床部は径40×40cmのやや深い擂鉢状を呈する。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。前述した様にカマド構築前に壁溝がめぐらされていたことが確認された。

遺物出土状況 土層のほとんどに焼土・炭化物が含まれているが、レンズ状の堆積を示している。床直上には焼土・炭化材が多量に散在していることから、本跡が火災住居であることをうかがわせる。焼土は床直上や壁に貼り付く様に検出されている。炭化材の多くは床の中央に

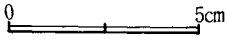
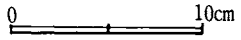
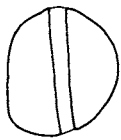
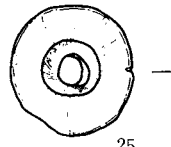
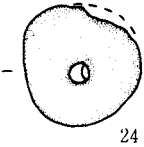
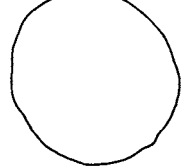
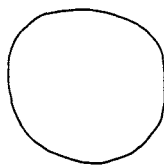
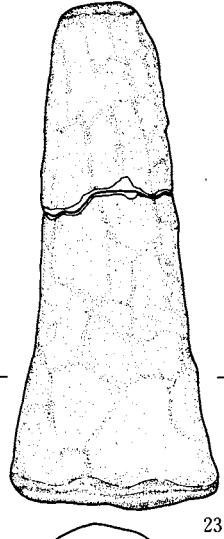
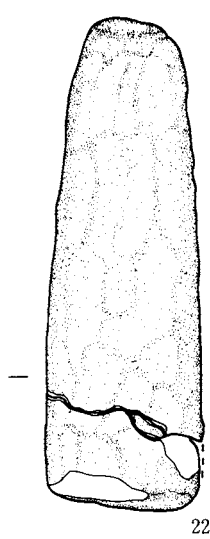
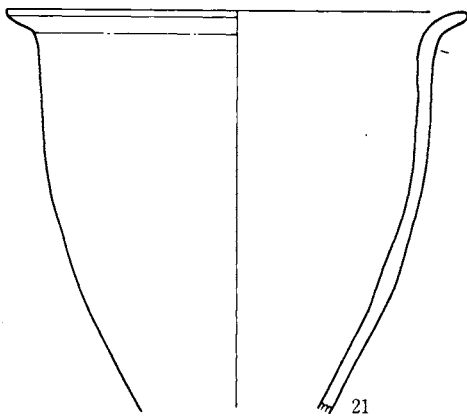
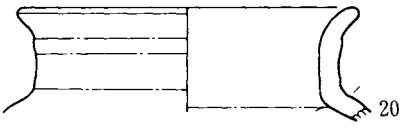
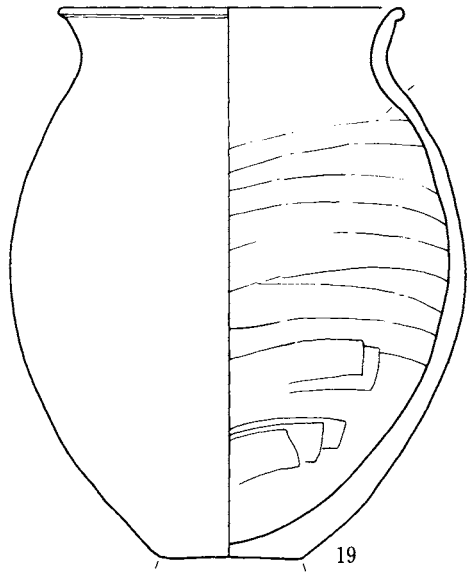
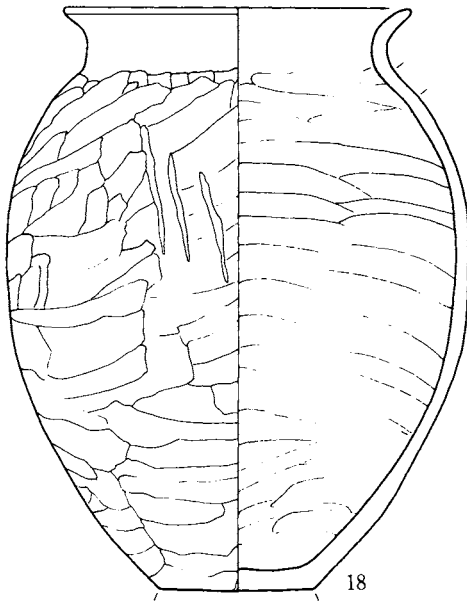


第324図 第49号住居跡カマド実測図 (1/40)

向いて倒れており、垂木材の一部と思われる。土器は蓋・坏・甕・甑と多量に出土し、そのほとんどが完形もしくは完形に近い。土製支脚・土玉・紡錘車も出土している。これら遺物の出土状況は、カマド内から無く、左袖脇から13の甕の破片が、右袖部脇から2・8・10の坏と25の紡錘車が出土している。19の甕の完形品と22・23の土製支脚が近接して出土している。他の遺物も床直上と覆土中に別れるが、11の坏の様に覆土上層と床直上のものが接合する場合もある。また、その他として不明鉄製品の小破片、スラグ1点、雲母片岩の小破片1点が出土している。



第325图 第49号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1



第326图 第49号住居跡出土遺物実測図 (18~23 1/4、24・25 1/2) No 2

第49号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm 底径 器高	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
49-1	蓋		1/2 1/2	11.1 — 4.3	11.1 — 4.3	灰色-灰褐色 砂粒 含まず緻密	良好	頂部は回転ヘラ削り	須恵器 口唇部内面摩耗
49-2	坏(蓋)		完 — 完	13.2 — 4.4 稜径 13.6	13.2 — 4.4 稜径 13.6	褐色-褐色 小砂 粒少	良好	口縁部横ナデ 体部内面丁寧なナデ 外面横位ヘラ削り後ナデ	内外面スス附着 口唇部内側一部摩耗あり
49-3	坏(蓋)		3/4 — 1/4	(12.8) — 4.0 稜径(13.0)	(12.8) — 4.0 稜径(13.0)	内黒-暗黄茶褐色 小砂粒微	良好	口縁部外面~体部内面横ナデ 体部外面横位ヘラ削り後ナデ	内黒 口唇部内面摩耗激しい
49-4	坏		3/4 — 1/4	(13.0) — 4.0 稜径 (13.2)	(13.0) — 4.0 稜径 (13.2)	内黒-暗黒褐色 小砂粒少	良好	口縁部外面横ナデ 体部内面ナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	内黒
49-5	坏		3/4 — 1/4	(11.6) — (4.3) 稜径 12.1	(11.6) — (4.3) 稜径 12.1	暗褐色土-暗褐色 土 小砂粒少	良好	口縁部外面~体部内面ナデ 体部外面横位ヘラ削り	
49-6	坏		5/8 — 3/8	11.1 — 4.8 稜径 10.9	11.1 — 4.8 稜径 10.9	暗黒褐色-暗黒褐色 小砂粒少	良好	口唇部斜に口縁部やや肥厚 体部外面ナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	口唇部内面摩耗 内側欠損著しい
49-7	坏		3/4 — 1/4	11.5 — 5.0	11.5 — 5.0	黒褐色-黒褐色 小砂粒少	良好	外面剝離激しく調整不明 内面底部丁寧なミガキ	口唇部上端摩耗 内側一部欠損あり
49-8	坏		3/4 — 1/4	10.8 — 3.4 蓋受径 11.2	10.8 — 3.4 蓋受径 11.2	暗茶褐色-暗茶褐色 小砂粒少	良好	口縁部横ナデ 体部内面ナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	
49-9	坏		3/4 — 1/4	12.2 — 3.5 蓋受径 13.4	12.2 — 3.5 蓋受径 13.4	暗茶褐色-暗茶褐色 小砂粒微	良好	口縁部内外横ナデ 体部内面丁寧なナデ 外面横位ヘラ削り後ナデ	内面一部スス附着
49-10	坏		3/4 — 1/4	12.4 — 3.5 蓋受径 13.4	12.4 — 3.5 蓋受径 13.4	暗茶褐色-暗茶褐色 小砂粒少	良好	口縁部横ナデ 体部内面丁寧なナデ外面横位ヘラ削り後ナデ	
49-11	坏		完 — 完	12.5 — 3.7 蓋受径 13.6	12.5 — 3.7 蓋受径 13.6	内黒-暗褐色 小砂粒少	良好	口縁部横ナデ 体部内面丁寧なミガキ外面横位ヘラ削り	内黒
49-12	甕		3/4 — 1/4	15.8 6.7 16.4	15.8 6.7 16.4	褐色-黒褐色 小砂粒多	やや不良	口縁部横ナデ 胴部外面から底部ヘラ削り	外面剝離あり
49-13	甕	口縁部のみ	3/4 — 1/4	(16.2) — (9.7)	(16.2) — (9.7)	褐色-褐色 小砂粒多	良好	口縁部横ナデ後胴部外面斜位ヘラ削り 内面ナデ	
49-14	甕	口縁部のみ	1/2 — 1/2	(19.2) — (17.1)	(19.2) — (17.1)	褐色-褐色 小砂粒多	良好	口縁部横ナデ後胴部外面斜位ヘラ削り 内面ナデ	外面剝離あり
49-15	甕		3/4 — 1/4	15.9 — (16.5) 胴最大径 24.8	15.9 — (16.5) 胴最大径 24.8	褐色-褐色 小砂粒多	良好	口縁部横ナデ後胴部上半縦位中央横位ヘラ削り	
49-16	甕	口縁部のみ	3/4 — 1/4	(22.5) — (13.0)	(22.5) — (13.0)	灰褐色-灰褐色 砂粒	やや不良	口縁部横ナデ 胴部内外面ナデ	
49-17	甕	口縁部のみ	3/4 — 1/4	(20.3) — (7.2)	(20.3) — (7.2)	赤褐色-褐色 小砂粒多	やや不良	口縁部横ナデ後胴部外面強い斜位ヘラ削り 内面ナデ	

遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
49-18	甕		3/4 完 3/4		18.2 8.0 30.3 胴最大径 24.1	暗黄褐色—赤褐色 小砂粒やや多 好	良	口縁部横ナデ 胴部外面上 半縦位中央横位下半斜位ヘ ラ削り 内面上半横位、下 半横位斜位ヘラナデ 底部 ヘラ削り	胴部外面中央下火熱に よる剥離 内面底部剥 離
49-19	甕	完			14.2 7.5 28.5 胴最大径 23.9	褐色—黄赤褐色 小砂粒やや多 好	良	口唇肥厚し口縁部横ナデ 胴部外面ナデ内面横位ヘラ ナデ 底部ヘラ削り	胴部外面上半以下火熱 による剥離激しい
49-20	甕	口縁部の み	3/4 — —		(18.0) — (5.3)	赤褐色—赤褐色 小砂粒多 不良		口縁部横ナデ	
49-21	甕		1/4 — 5/6		(24.2) — (20.7)	茶褐色—灰褐色 小砂粒多 良	やや不 良	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り 内面丁寧なナ デ	胴部外面剥離著しい
49-22	支脚	完		長さ 径	25.2 8.1×8.0	赤褐色		表面に指頭痕明瞭	
49-23	支脚	完		長さ 径	26.0 8.9×9.0	赤褐色		表面に指頭痕明瞭	
49-24	土玉	ほぼ完		高さ 径 孔径上 下	3.28 2.9×2.8 0.4×0.4 0.4×0.4	土製		重量32g	
49-25	紡錘車	完		高さ 径上 下 孔径上 下	1.8 1.7×1.6 3.2×3.4 0.8×0.8 0.8×0.8	含滑石蛇紋岩		上面から穿孔 重量23.3g	

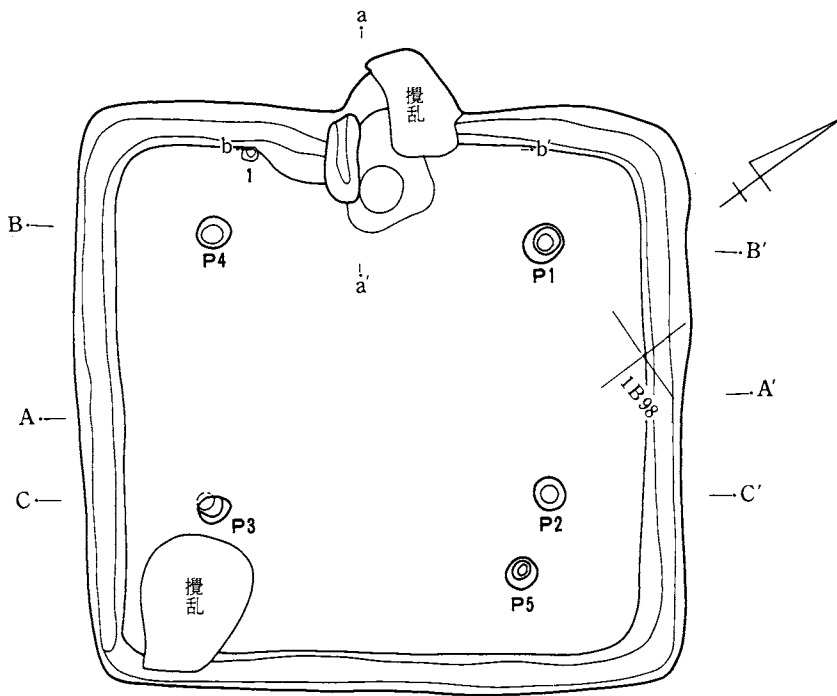
第50号住居跡（第327～329図 図版117）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B 98他である。

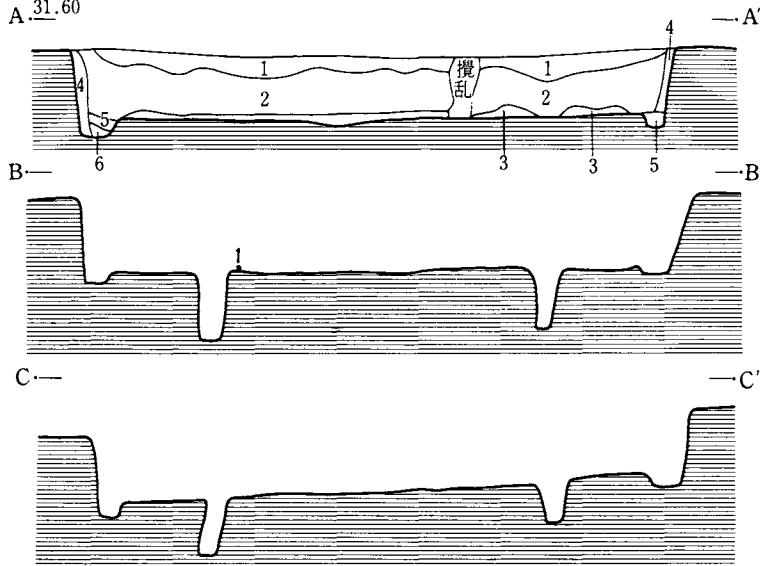
遺構 南西壁4.40m、北西壁4.60mあり、面積21.84㎡で隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドと南コーナーの一部が攪乱を受けている。カマドは北西壁中央に位置しN54°Wである。壁は四辺ともに垂直に立ち上がり、北東壁に一部緩傾斜面があった。確認面より約50cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約25cm、深さ約10cmとほぼ一定である。床面はほぼ平坦で、中央部が固く、周囲が軟弱であった。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置され、P₅は深さ22cmを計り他のものより浅い。

カマド 北西壁中央に位置し、右側が攪乱を受け遺存状態は不良であった。壁への掘り込みは確認された部分で約30cmを計る。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。火床部は径35×40cmのあり播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層は、壁際の埋土状況が特殊であるが、レンズ状の自然堆積であろう。遺物は少なく、図示できたのは1の須恵器坏のみであった。1はカマド左袖脇の床直出土である。また、刀子の小破片が1点覆土中より出土している。

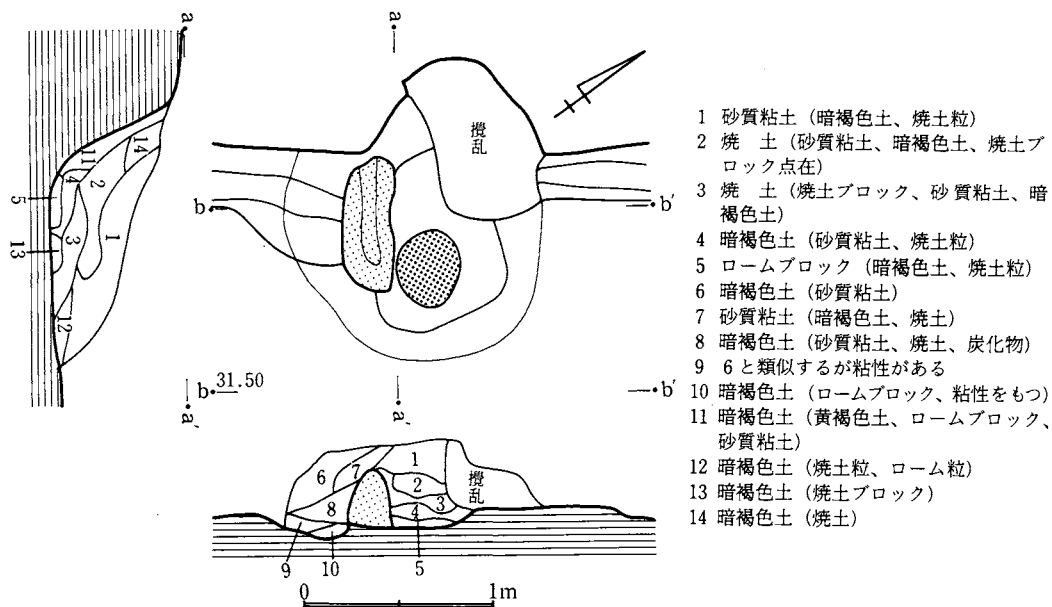


A. 31.60

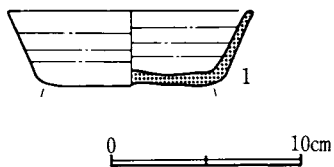


- 1 暗褐色土 (黒色土、ローム粒)
- 2 暗褐色土 (ローム粒、焼土粒)
- 3 暗褐色土 (褐色土、ローム小ブロック)
- 4 ロームブロック
- 5 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック)
- 6 黄褐色土 (ローム粒、暗褐色土)

第327図 第50号住居跡実測図 (1/60)



第328図 第50号住居跡カマド実測図 (1/40)



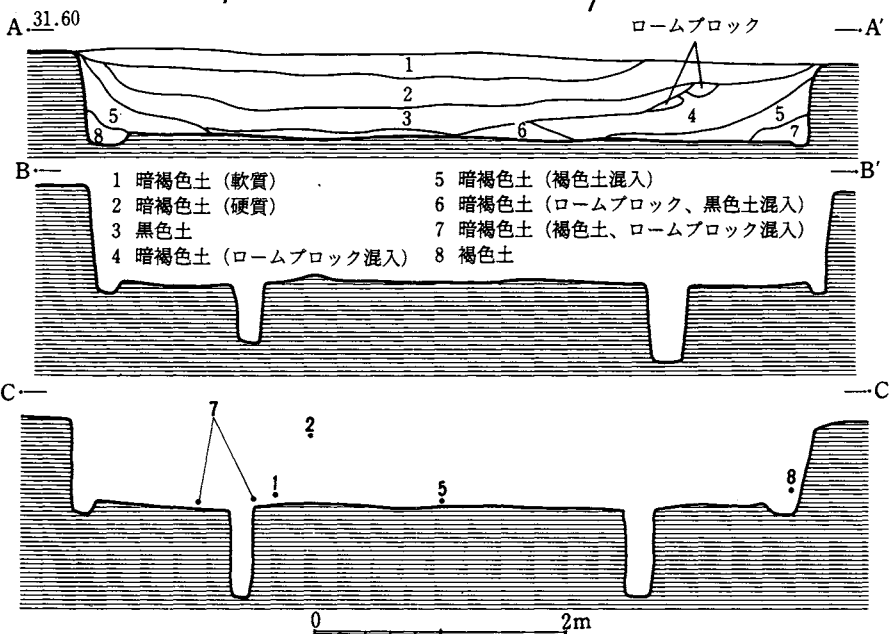
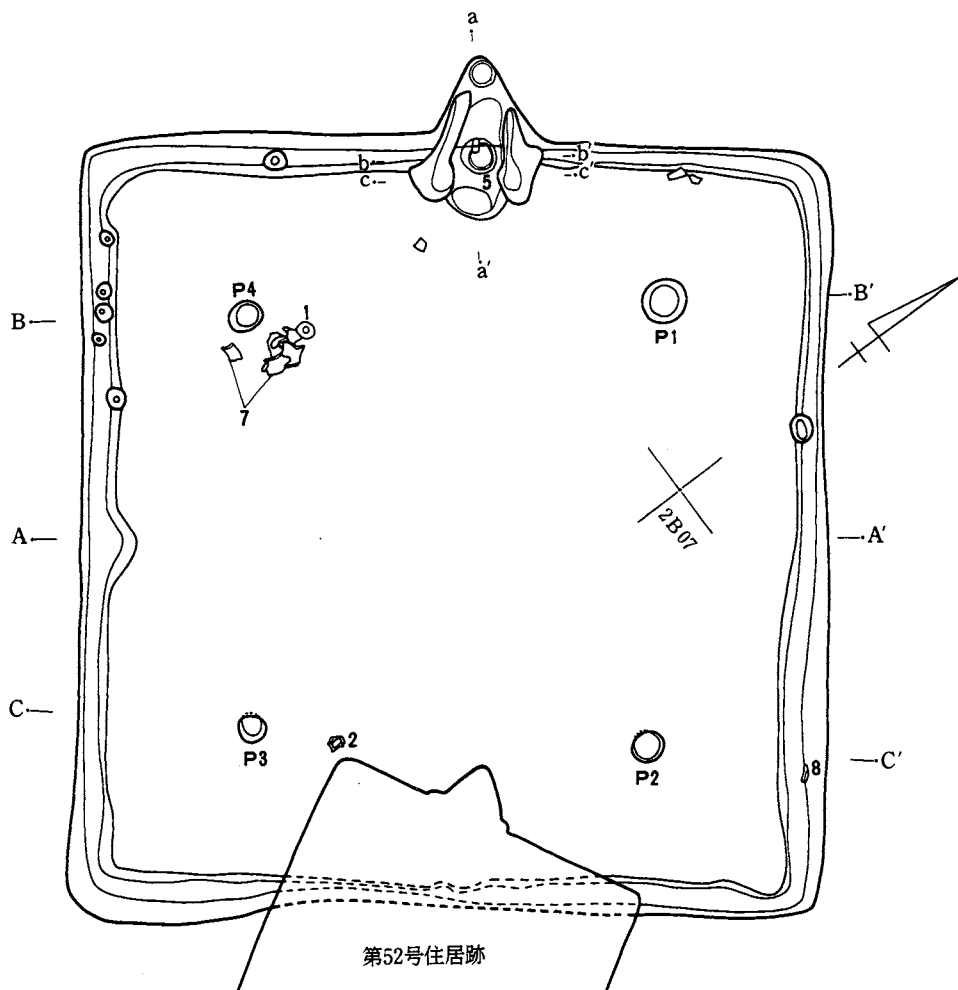
第329図 第50号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第50号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□ 底 体	法 量 cm ()は推定	□ 径 底 器 高	色 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
50-1	坏		3/6 3/6 3/6	(13.0)	8.0 3.9	灰色-灰色 粒多 やや不良	長石 焼成不良	底部回転ヘラ削り 他は横ナデ	須恵器 焼成不良のため 摩耗著しい

第51号住居跡 (第330~333図 図版118・155・161・162)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 B07他である。第52号住居跡と第78号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第52号住居跡より本跡は古い、第78号掘立柱建物跡との新

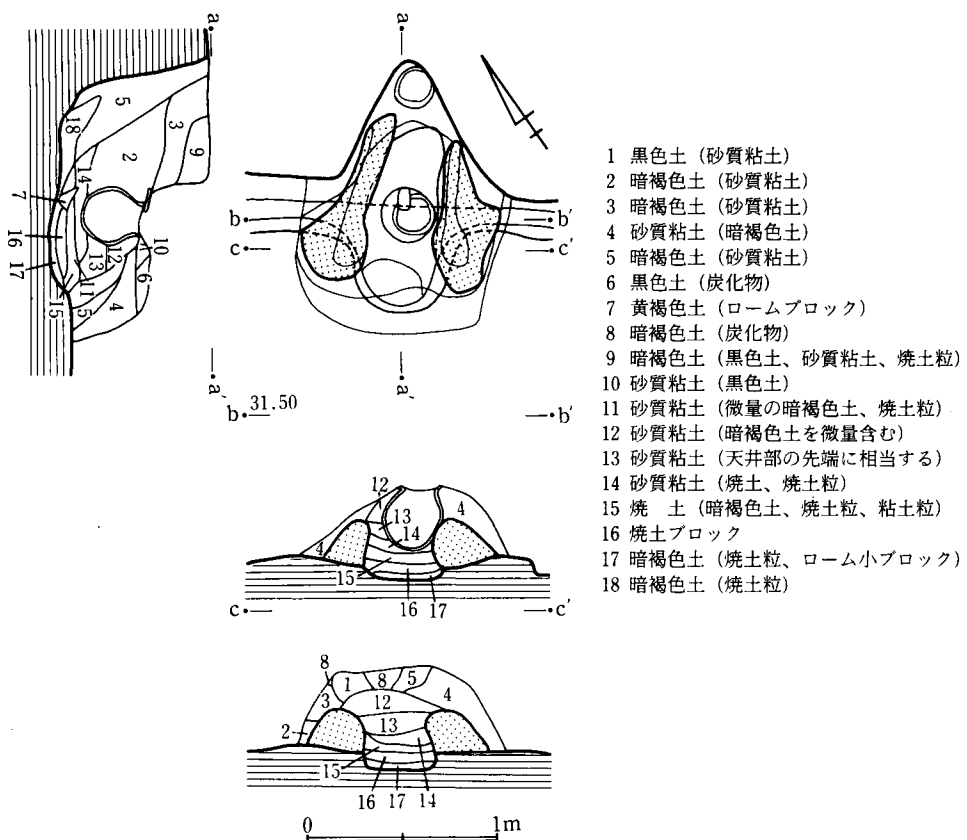


第330図 第51号住居跡実測図 (1/60)

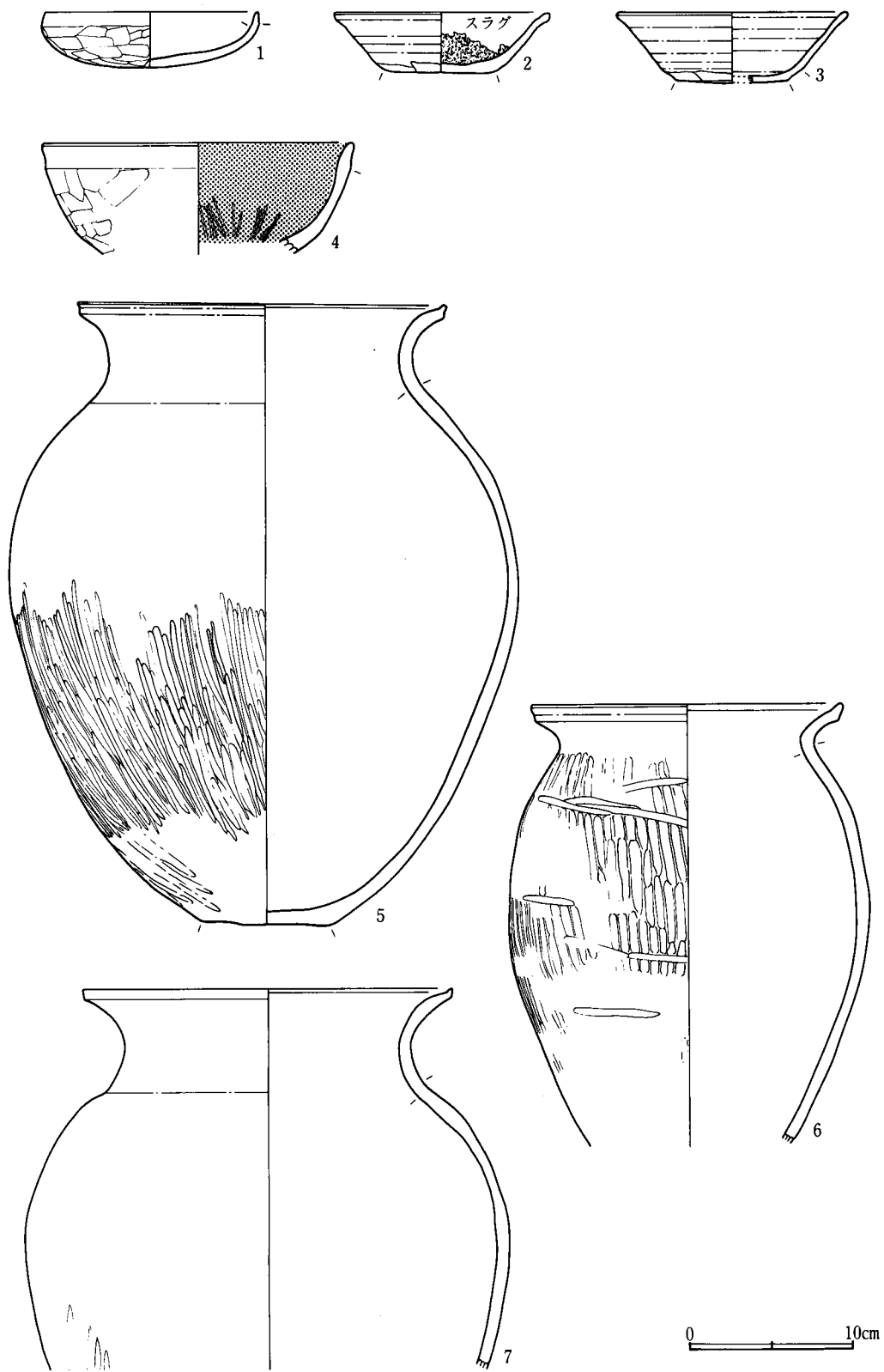
旧関係は不明である。

遺構 南西壁5.90m、北西壁5.85mあり、面積35.46m²でコーナーがやや直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN53°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約65cmを計る。壁溝はカマド袖部下をめぐり、全周する。巾約20cm、深さ約10cmをそれぞれ計り、ほぼ一定である。一部に壁柱穴があり深さは約5cm程であったが、小規模な凹が随所に見られ、図示はできなかったが壁柱穴の可能性もある。床面は平坦で、全面固い。柱穴は4個検出され、径、深さともに一様で対角線上に配置されている。

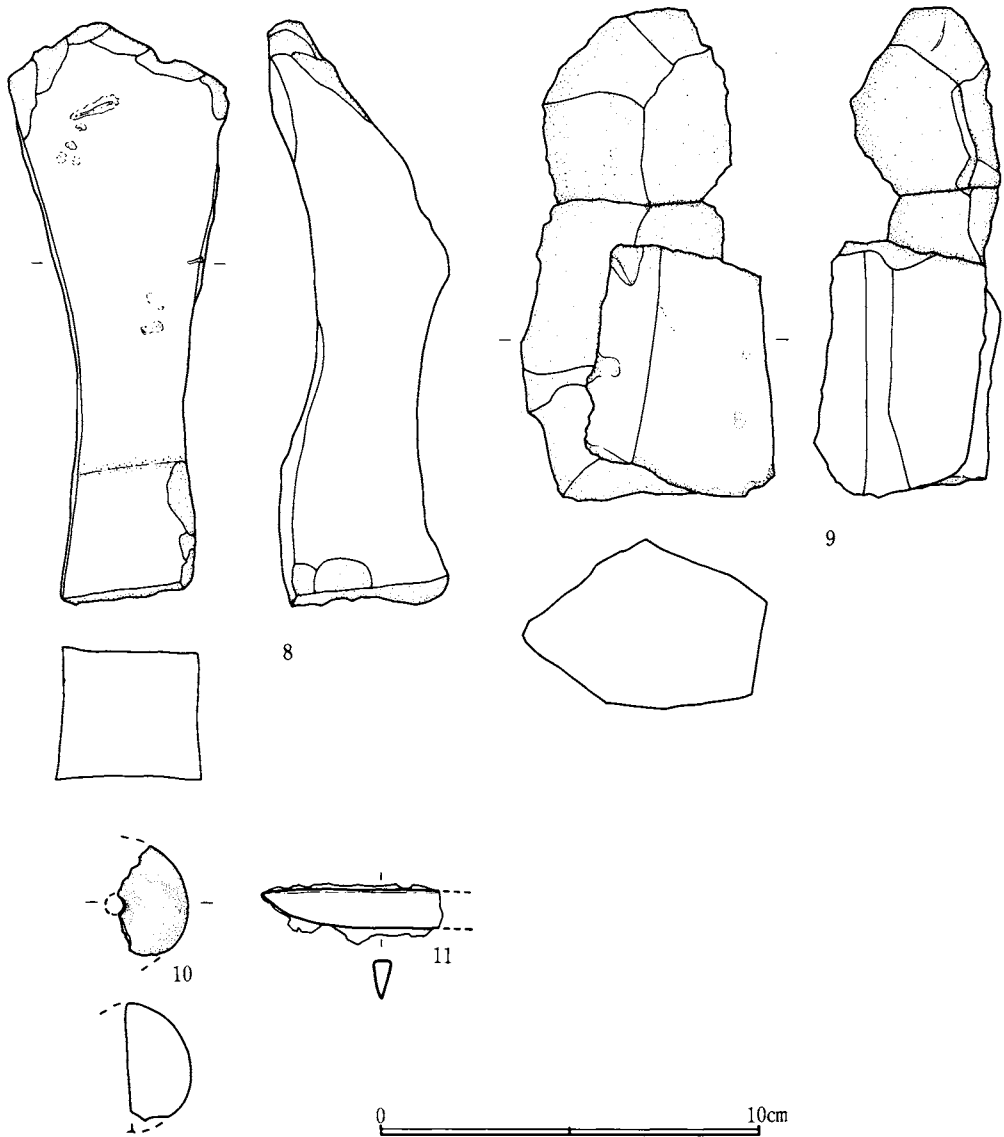
カマド 北西壁中央に位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは深く、約60cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は全体的にやや深めの播鉢状を呈する。煙道が掘り込み面最奥部で確認されている。遺物は、あたかも掛口に正置上に5の甕が完形で出土している。



第331図 第51号住居跡カマド実測図 (1/40)



第332図 第51号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1



第333図 第51号住居跡出土遺物実測図 (1/2) No 2

遺物出土状況 土層は、レンズ状の自然堆積状況を示すが、廃棄によるロームブロック層も見られた。遺物は坏・甕・砥石・土玉・刀子が出土している。1の坏は床直上より、5の甕は前述の様にカマド内から、7の甕は胴部上半以上が床直からの出土であった。2の坏内にはスラグが入っており注目されるが、本跡に伴うというよりも第52号住居跡の壁上に置かれたものか、包含層のものか判断し難いが、ここでは本跡出土の遺物中に含めた。他は覆土中のものである。

第51号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
51-1	坏(蓋)		% 完		13.2 — 3.4	黒色-黄褐色 小砂粒少 良好		口縁部横ナデ 内面丁寧なナデ 外面ヘラ削り後ナデ	内面スス付着 口唇部上端内面摩耗 一部内側欠損あり
51-2	坏		% 完 %		13.4 7.0 3.8	赤褐色-茶褐色 小砂粒少 良好		体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	スラグ排出時に坏内に入ったものと思われる 火熱により内面赤褐色化する
51-3	坏		% %		14.2 6.9 4.4	黒褐色-黒褐色 小砂粒多 良好		体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り	
51-4	鉢	口縁部のみ	% —		(19.2) — (6.8)	内黒-褐色 小砂粒少 良好		口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ミガキ	内黒
51-5	甕		完 完 完		22.5 8.0 37.5 胴最大径 31.2	淡黄褐色-淡黄褐色 小砂粒多 やや不良		口縁部口唇をつまんで横ナデ 胴部外面上半ナデ 中央へ下半縦位ヘラナデ	内面に使用痕あり(煮沸痕) 底部黒く変色
51-6	甕		完 — %		19.2 — (26.8) 胴最大径 22.2	黄褐色-黄褐色 小砂粒少 不良		口縁部口唇をつまんで横ナデ 胴部外面上半叩目、下半斜位ヘラ削り 内面ナデ	外面剝離激しい
51-7	甕		完 — %		22.7 — (23.0) 胴最大径 29.8	黄褐色-黄褐色 小砂粒多 良好		口縁部口唇をつまんで横ナデ 胴部外面ナデ下半縦位ヘラナデ 内面ナデ	内面一部剝離
51-8	砥石	ほぼ完		長さ 最大幅 最大厚	(15.1) (5.6) (4.2)	凝灰岩		重量317g	
51-9	砥石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(12.5) (6.0) (4.2)	凝灰岩		重量337g	
51-10	土玉	%		高さ 径	(3.2) —	凝灰岩		重量13g	
51-11	刀子	破片		長さ	(4.8)	鉄製			

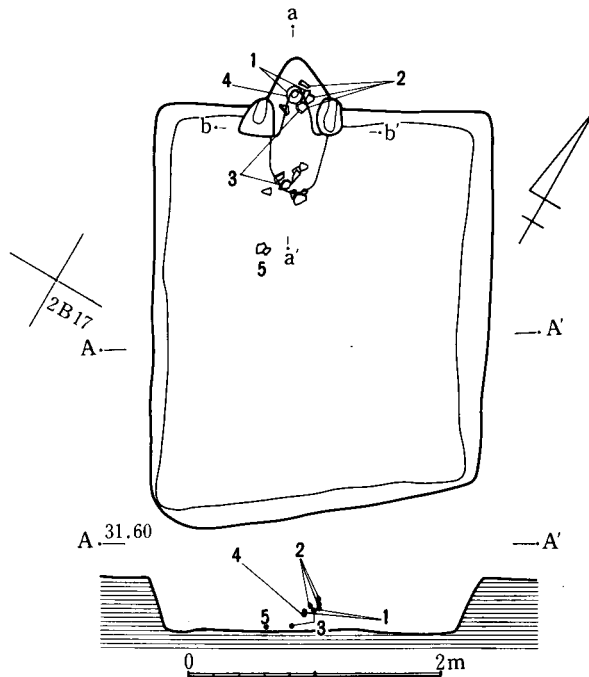
第52号住居跡 (第334~336図 図版119)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 B17他である。第51号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

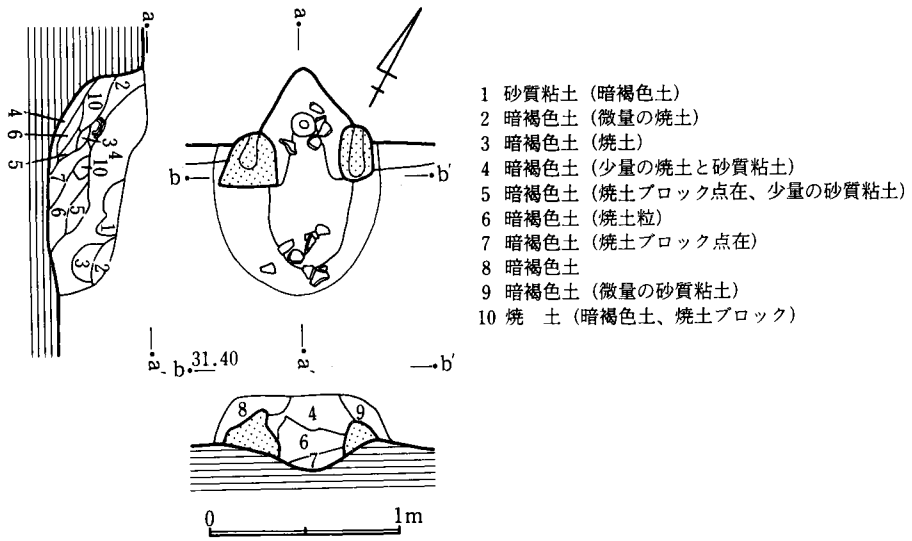
遺構 西壁3.20m、北壁2.60m、東壁2.80m、南壁2.90mあり、面積8.35㎡で北西・北東コーナーが直角をなす不整形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN27°Wである。壁は北西側が第51号住居跡覆土中に構築されているために不明瞭であったが、確認された壁は傾斜をもって立ち上がり、確認面より約40cmを計る。床面は小さな凹凸が多く軟弱であった。壁溝、柱穴は検出されていない。

カマド 北壁中央に位置し、第51号住居跡覆土中に構築されているため、全体的に不明瞭であった。壁への掘り込みは、砂質粘土・焼土の消滅で確認したところ約35cmを計った。火床部は全体的にやや深い楕円状を呈する。

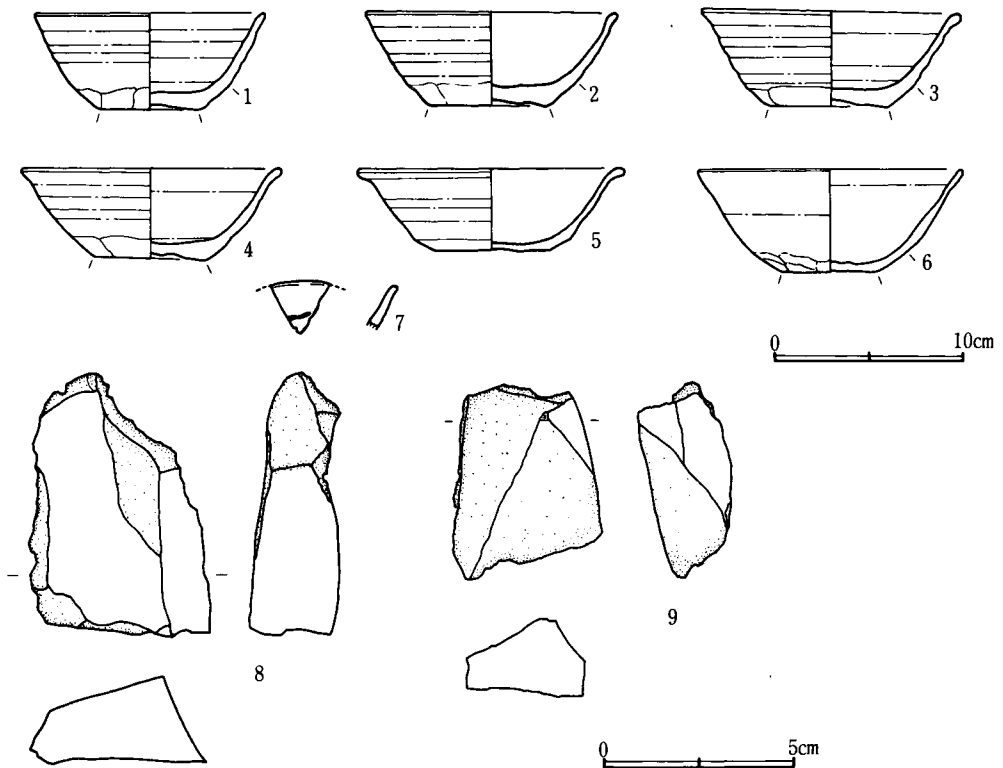
遺物出土状況 遺物はカマド内と前付近に集中して見られた。1～4の坏はカマド内からで完形もしくはそれに近いものであった。5の坏は床直上である。他は覆土中からの出土であった。なお、第51号住居跡出土遺物の2の坏は、本跡の北西壁上の可能性が十分考えられるであろう。



第334図 第52号住居跡実測図 (1/60)



第335図 第52号住居跡カマド実測図 (1/40)



第336図 第52号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7・8 1/2)

第52号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm 底径 器高	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
52-1	坏		% 完 %	(12.3)	13.7 6.0 4.9	黄褐色—黄褐色 小砂粒多	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り離し	
52-2	坏		% 完 %	13.5	13.5 6.2 4.8	黒褐色—黒褐色 小砂粒多	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り離し	
52-3	坏		完 完 完	13.7	13.7 6.3 4.9	黄褐色—黄褐色 小砂粒多	やや不 良	体部下端手持ちヘラ削り 底部周縁手持ちヘラ削り	
52-4	坏		完 完 完	13.7	13.7 5.8 4.7	赤褐色—黒褐色 小砂粒多	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り離し	底面に植物の付着痕あり 内面剝離あり
52-5	坏		% 完 %	(14.2)	14.2 6.2 4.3	黄褐色—黒褐色 小砂粒多	良好	体部下端回転ヘラ削り 底 部回転糸切り後周縁回転ヘ ラ削り	
52-6	坏		% 完 %	14.0	14.0 5.0 5.4	黒褐色—黒褐色 小砂粒多	良好	体部下端2重手持ちヘラ削 り 底部ヘラ削り	
52-7	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 小砂粒少	良好		墨書土器 不明
52-8	砥石	小破片				凝灰岩		重量66g	
52-9	砥石	小破片				凝灰岩		重量43g	

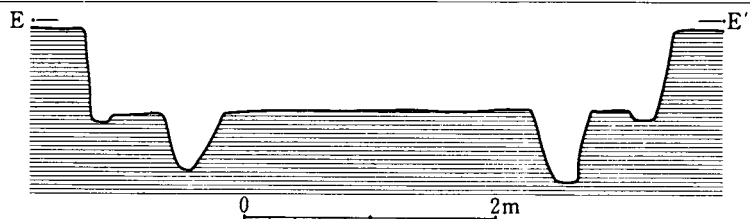
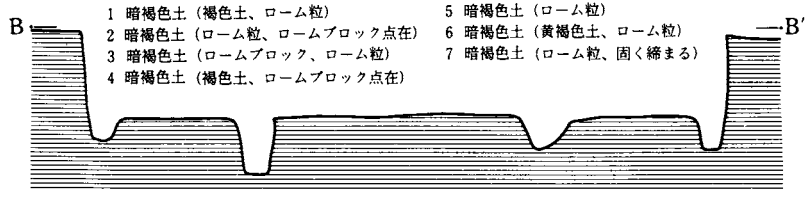
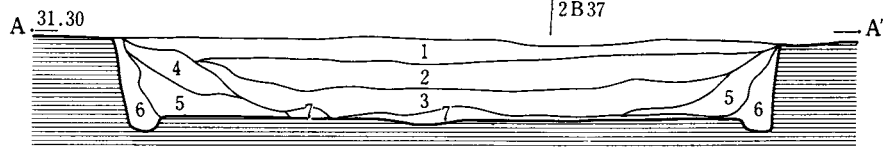
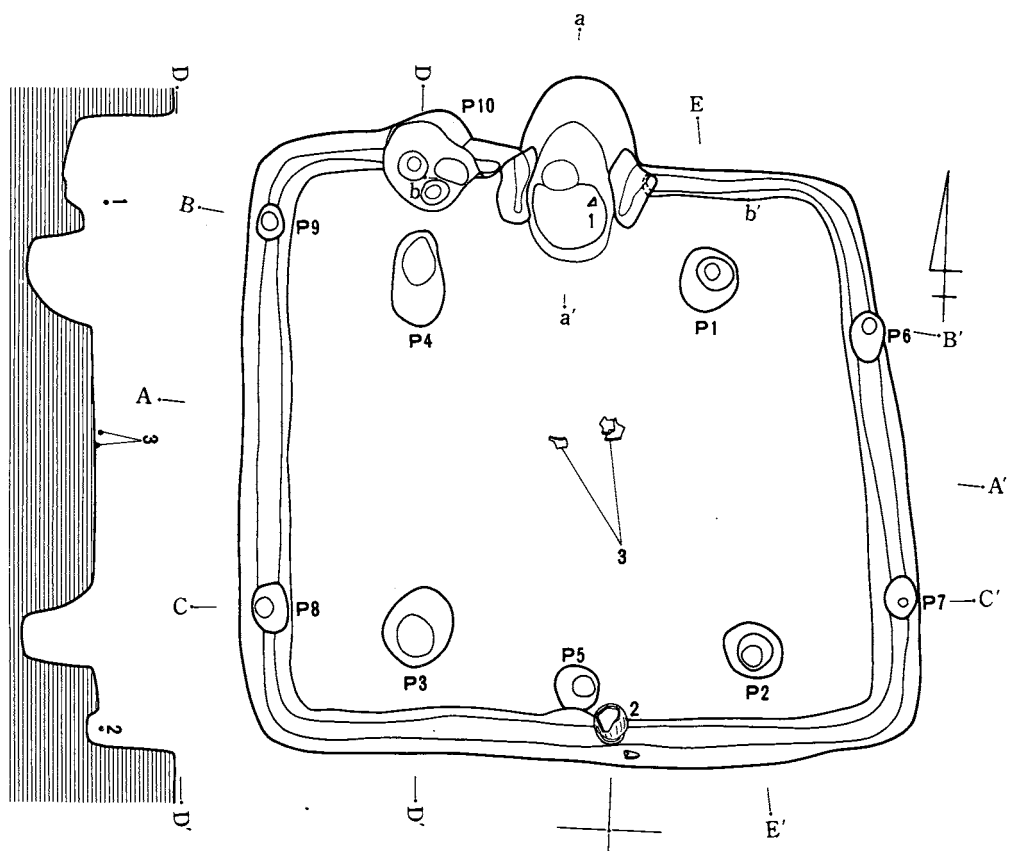
第53号住居跡（第337～339図 図版120）

台地中央平坦部、調査区南側に位置し、グリッドは2 B 27他である。第79号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 西壁4.60m、北壁4.60m、東壁4.20m、南壁5.10mあり、面積24.83m²で北西・南西コーナーがほぼ直角をなす不整形の平面形を呈する。カマドは北壁中央に位置しN 3°Wである。壁は四辺とも垂直に立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝はカマドを除き全周し、巾約20cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面は、中央部が固く周辺が軟弱であるがほぼ平坦である。柱穴は9個検出され、P₁₀は第79号掘立柱建物跡の柱穴である。P₁～P₄は対角線上に配置され、径、深さともに一様である。P₅はカマドの対面に配置され深さ18cmを計る。P₆～P₉は支柱穴で、それぞれ対面に対で配置され、壁面上に掘り込み面が確認されていることから、相当上からの掘り込みであろう。P₆の場合は壁上から掘り込まれており、壁上から深さ88cmを計り、床面からは26cmであった。

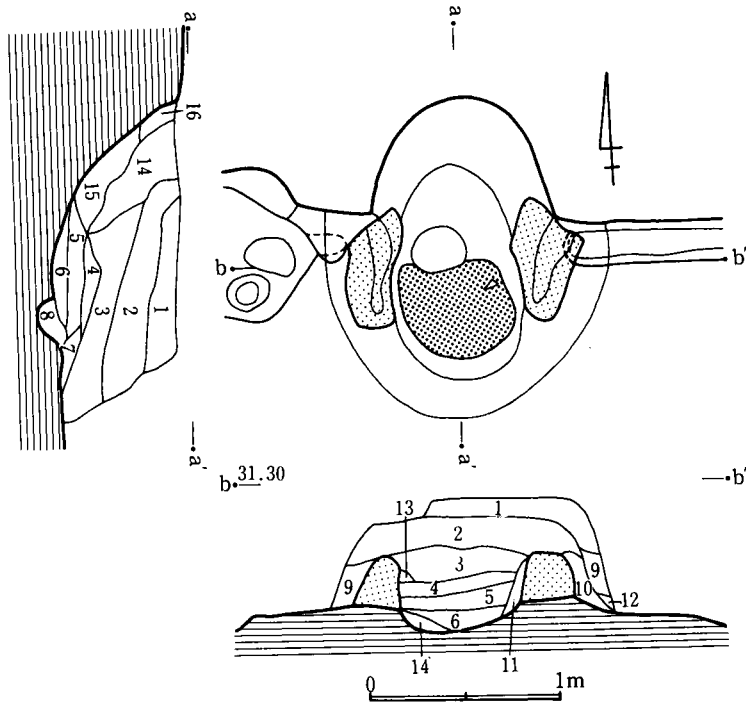
カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは深く約60cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は50×60cmの不整形の楕円状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。1の坏はカマド内より、2・3の甕は床直上の出土であり、特に2の甕は倒立した底部が欠損していた。



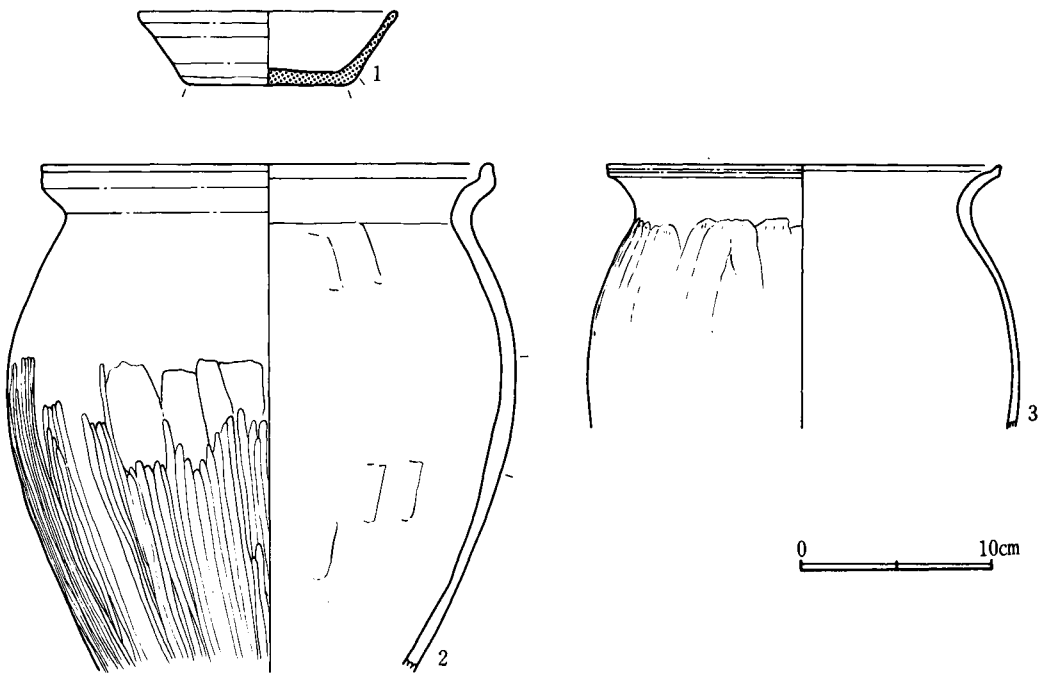
- 1 暗褐色土 (褐色土、ローム粒)
- 2 暗褐色土 (ローム粒、ロームブロック点在)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒)
- 4 暗褐色土 (褐色土、ロームブロック点在)
- 5 暗褐色土 (ローム粒)
- 6 暗褐色土 (黄褐色土、ローム粒)
- 7 暗褐色土 (ローム粒、固く締まる)

第337図 第53号住居跡実測図 (1/60)



- 1 暗褐色土 (ローム粒)
- 2 暗褐色土 (砂質粘土少量、ローム粒、焼土粒)
- 3 暗褐色土 (粘土粒、ローム粒)
- 4 暗褐色土 (砂質粘土、少量の焼土)
- 5 焼土 (砂質粘土、暗褐色土少量、焼土ブロック点在)
- 6 焼土ブロック
- 7 暗褐色土 (少量の砂質粘土、少量の焼土)
- 8 暗褐色土 (砂質粘土、少量の焼土、ロームブロック)
- 9 暗褐色土 (ローム粒、微量の粘土粒)
- 10 暗褐色土 (砂質粘土)
- 11 焼土 (砂質粘土、少量の暗褐色土、焼土ブロック点在)
- 12 暗褐色土 (砂粒、焼土粒)
- 13 砂質粘土 (暗褐色土少量)
- 14 砂質粘土に暗褐色土混入
*天井部の陥没したものと考える
- 15 暗褐色土 (焼土粒、炭化物)
- 16 15に砂質粘土混入

第338図 第53号住居跡カマド実測図 (1/40)



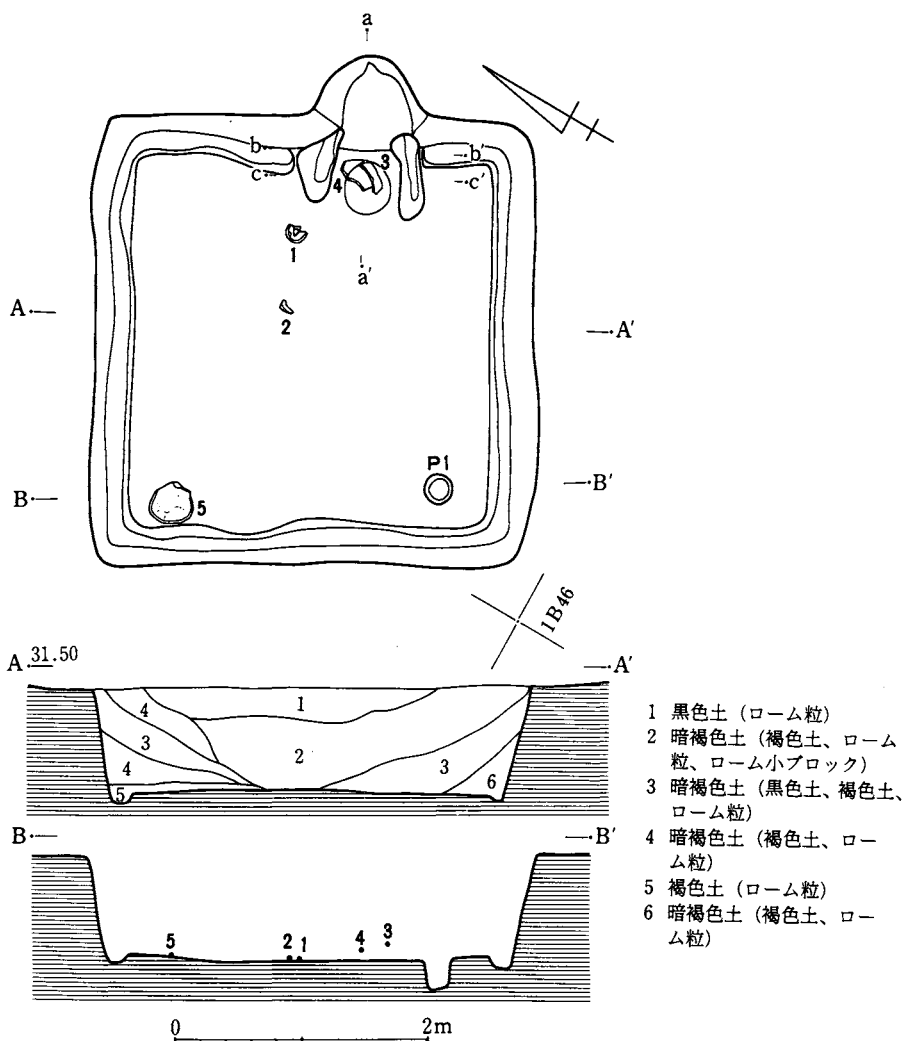
第339図 第53号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第53号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□法量 底体 ()は推定 cm	□径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
53-1	坏	3% 3% 3%	(13.6) (8.3) 3.8	13.6 8.3 3.8	灰色-灰色 砂粒含密	白色 良好	体部下端ヘラ削り 底部ヘラ削り	須恵器
53-2	甕	完 完	23.5 — (26.2)	23.5 — (26.2)	赤褐色-灰褐色 小砂粒多	良好	口縁部口唇をつまんで横ナデ 胴部外面ナデ下半縦位 ヘラナデ 内面ナデ	底部付近強い火熱を受けている
53-3	甕	□縁部の み	20.7 — (13.5)	20.7 — (13.5)	暗褐色-暗褐色 小砂粒少	良好	口唇をつまんで口縁部横ナデ 胴部縦位ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	

第54号住居跡 (第340~342図)

台地中央平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 B 36他である。

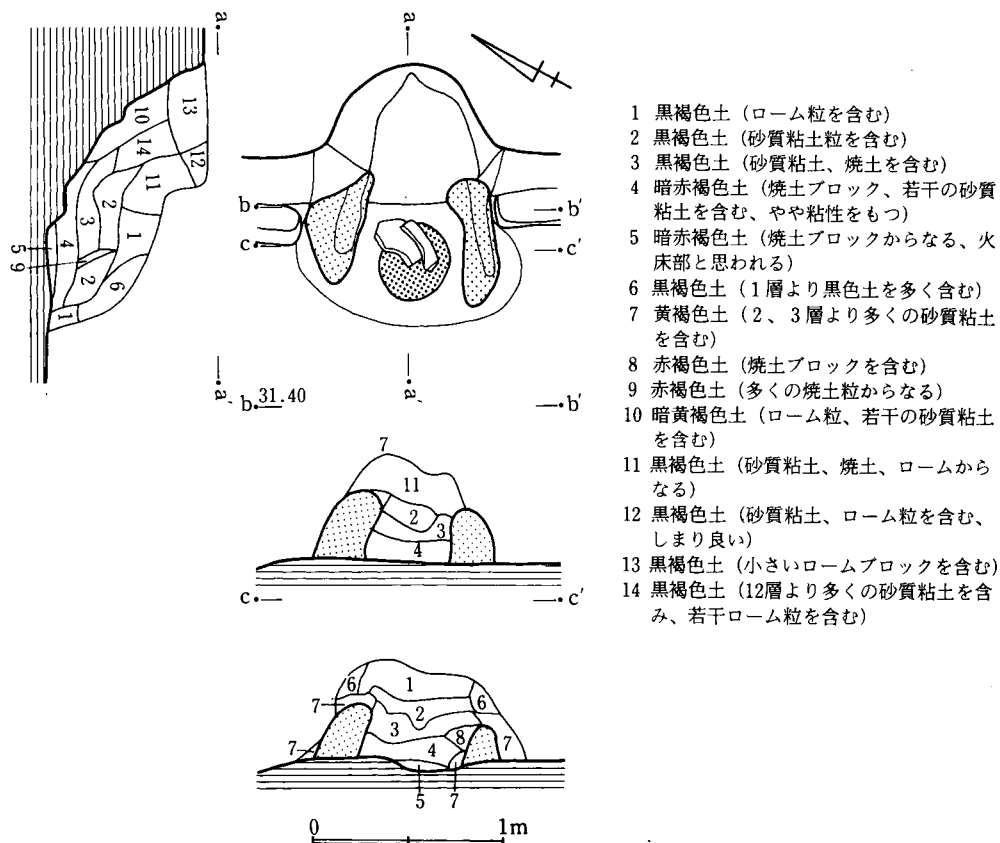


第340図 第54号住居跡実測図 (1/60)

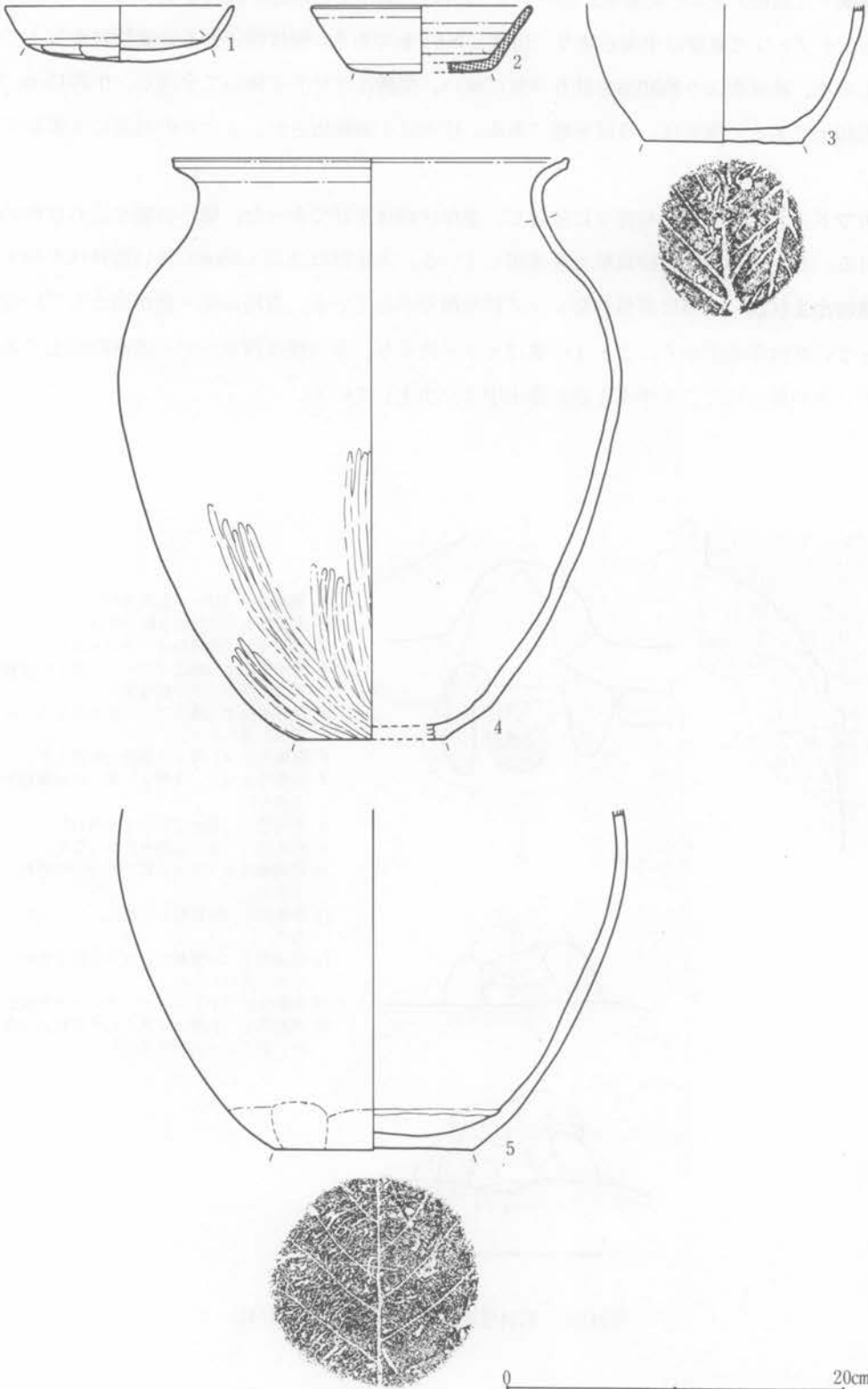
遺構 北西壁3.45m、北東壁3.35mあり、面積12.34㎡で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁の中央右寄りに位置しN61°Eである。壁は四辺ともに緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約80cmを計り非常に深い。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約15cm、深さ約10cmである。床面は、ほぼ平坦である。柱穴は1個検出され、カマドの対面に位置している。

カマド 北東壁の中央右寄りに位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約40cmを計る。カマドの構築は砂質粘土を使用している。火床部は径35×35cmの浅い楕円状を呈する。

遺物出土状況 土層は典型的なレンズ状堆積を示している。遺物は坏・甕が出土している。1・2の坏は床直上から、3・4の甕はカマド内より、5の甕は西コーナー床直の出土である。また、その他として、スラグ1点が覆土中より出土している。



第341図 第54号住居跡カマド実測図 (1/40)



第342図 第54号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

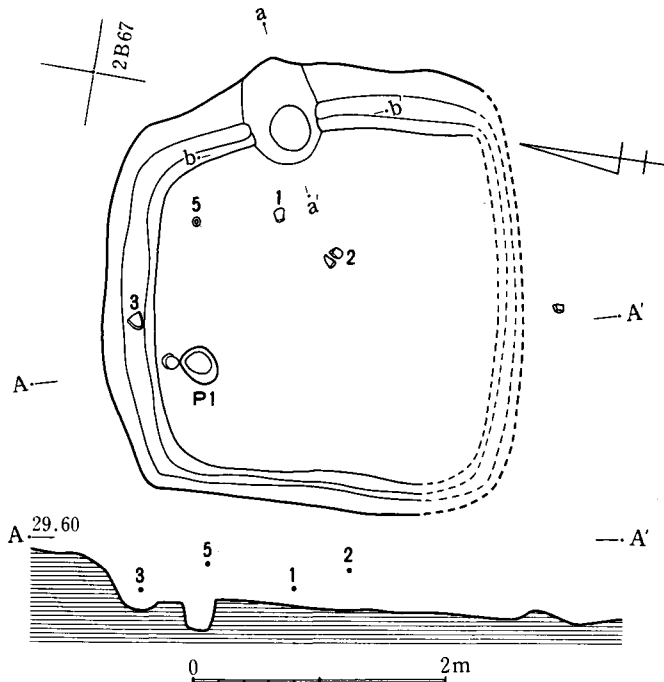
第54号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm 胎土 ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外 調整	成形・調整	備考
54-1	坏	5/6 完	13.5 11.0 3.3	赤褐色-赤褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ 内面ナデ 底部ヘラ削り	口唇部上端内側一部欠損あり		
54-2	坏	3/6 3/6 2/6	13.2 (8.3) 4.0	灰色-灰色 白色 砂粒多 良好	底部ヘラ削り	須恵器		
54-3	甕	— 完	— 9.4 (8.0)	灰褐色-灰褐色 小砂粒多 雲母含 不良	焼成不良のため摩耗著しく 調整不良 底部に木葉痕あり			
54-4	甕	3/6 1/6 3/6	23.5 (8.8) 34.0 胴最大径 29.6	黒褐色-黒褐色 小砂粒多 良好	口縁部口唇をつまんで横ナデ 胴部外面ナデ下半縦位 ヘラ削り 底部ヘラ削り	胴部内面下半剥離あり		
54-5	甕	— 完	— 11.7 (19.8) 胴最大径 (30.2)	黄褐色-黒褐色 小砂粒多 良好	胴部外面ナデ下半縦位ヘラ ナデ 底部木葉痕 胴部底 部接合痕明瞭	胴部外面スス多く付着		

第58号住居跡 (第343~345図 図版121)

台地南側斜面、調査区最南端に位置し、グリッドは2 B67他である。

遺構 北壁2.80m、東壁2.70mあり、面積(10.16)㎡で北西コーナーがやや直角をなし、北東コーナーは大きな隅丸を呈し、他は不明であるが、不整形の平面形を呈する竪穴住居跡であ

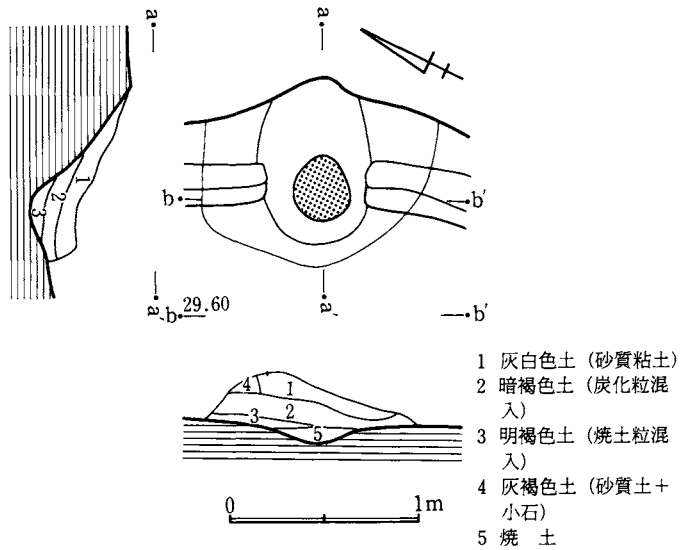


第343図 第58号住居跡実測図 (1/60)

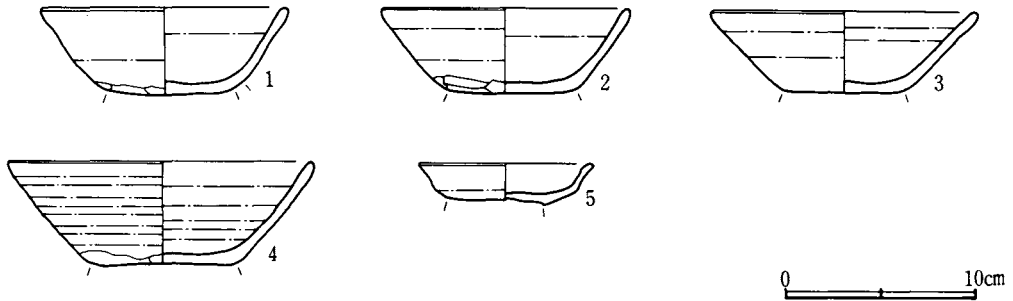
る。カマドは東壁中央よりやや左寄りに位置しN82°Eである。壁は緩傾斜をなし、確認面より北壁が約30cm、南壁はほとんど検出が不可能であった。壁溝はカマド袖部下もめぐるものと思われ、巾約25cm、深さ約5cmであるが、部分的には狭い所もある。柱穴は1個検出されている。

カマド 東壁中央よりやや左寄りに位置し、袖部など検出が困難な程不良であった。壁への掘り込みは約10cmを計る。カマドの構築には砂質粘土が使用されていることが、土層観察よりうかがえた。火床部は30×35cmの楕円状を呈する。

遺物出土状況 遺物は坏と皿が出土している。1の坏、5の皿は完形品であるが、他の遺物同様覆土出土である。



第344図 第58号住居跡カマド実測図 (1/40)



第345図 第58号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

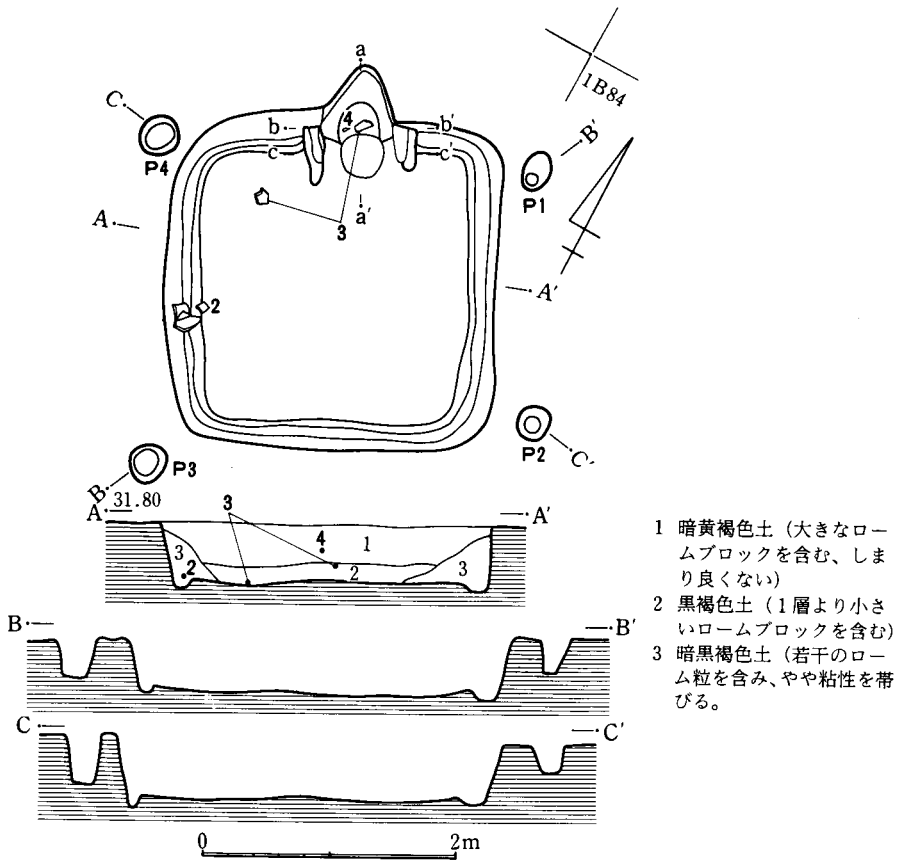
第58号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	胎土 焼成	色調 内一外	成形・調整	備考
58-1	坏	完 完 完	13.0 6.6 4.4	暗赤褐色—暗赤褐色 小砂粒少 好	体部下端手持ちへら削り 底部一方向へら削り		
58-2	坏	3/4 完 3/4	13.3 6.8 4.4	暗赤褐色—暗赤褐色 小砂粒少 好	体部下端手持ちへら削り 底部一方向へら削り		
58-3	坏	3/4 5/6 3/4	(14.1) 6.4 4.7	暗茶褐色—暗茶褐色 小砂粒多 やや良好	底部一方向へら削り		
58-4	坏	3/4 5/6 3/4	16.1 7.5 5.5	褐色—褐色 粒少 良好	体部下端手持ちへら削り 底部一方向へら削り		
58-5	皿	完 完 完	9.3 5.0 1.9	暗黄褐色—暗黄褐色 小砂粒少 好	底部回転糸切り離し	イビツ	

第62号住居跡 (第346~348図 図版121・162)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1B84他である。

遺構 南壁2.30m、東壁2.20mあり、面積6.55m²で北西コーナーが隅丸をなすが、方形の平

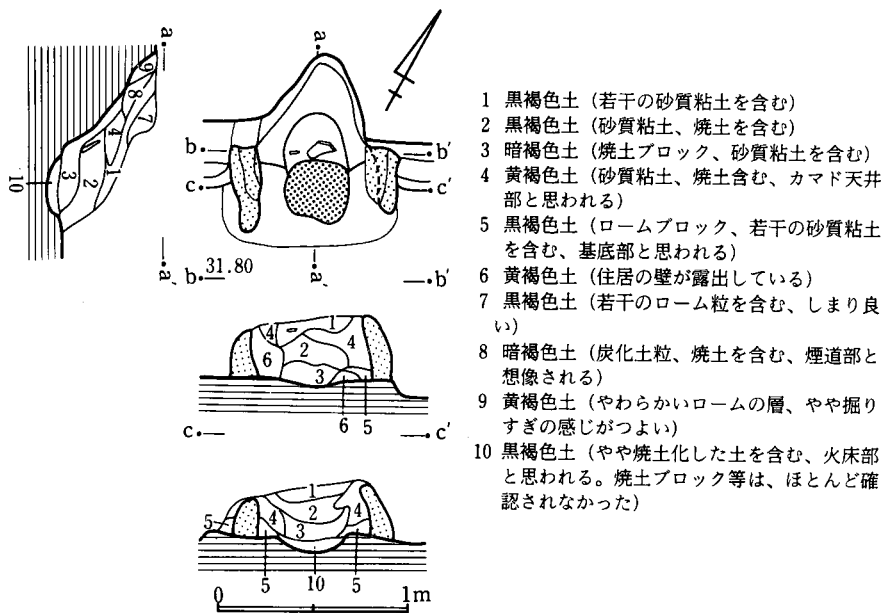


第346図 第62号住居跡実測図 (1/60)

面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央やや右寄りに位置しN26°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約45cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計るが、一部狭い部分がある。床面は中央がやや高く、壁溝に近づくにつれてやや高くなる傾向がある。柱穴は住居跡外の四隅に4個検出され、径約25cm、深さ約25cmをそれぞれ計り、配置上からも本跡に伴うものである。

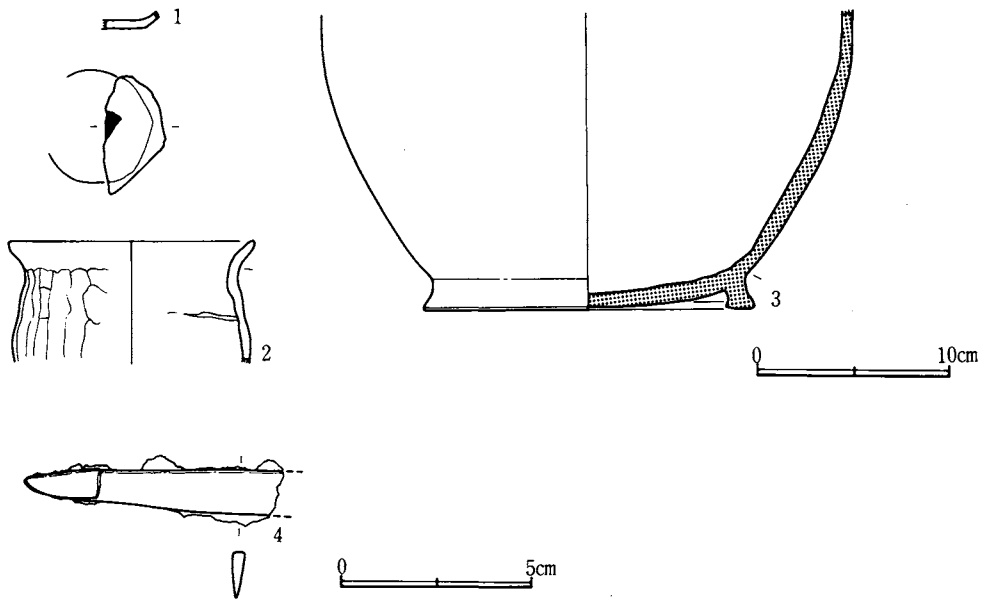
カマド 北壁中央やや右寄りであるが、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約40cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30×35cmの不整楕円形の播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・甕・長頸壺?・刀子が出土している。2の甕は西壁際から、3の長頸壺?はカマド内と覆土中の破片が接合し、4の刀子はカマド内から出土している。



- 1 黒褐色土 (若干の砂質粘土を含む)
- 2 黒褐色土 (砂質粘土、焼土を含む)
- 3 暗褐色土 (焼土ブロック、砂質粘土を含む)
- 4 黄褐色土 (砂質粘土、焼土含む、カマド天井部と思われる)
- 5 黒褐色土 (ロームブロック、若干の砂質粘土を含む、基底部と思われる)
- 6 黄褐色土 (住居の壁が露出している)
- 7 黒褐色土 (若干のローム粒を含む、しまり良い)
- 8 暗褐色土 (炭化土粒、焼土を含む、煙道部と想像される)
- 9 黄褐色土 (やわらかいロームの層、やや掘りすぎの感じがよい)
- 10 黒褐色土 (やや焼土化した土を含む、火床部と思われる。焼土ブロック等は、ほとんど確認されなかった)

第347図 第62号住居跡カマド実測図 (1/40)



第348図 第62号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)

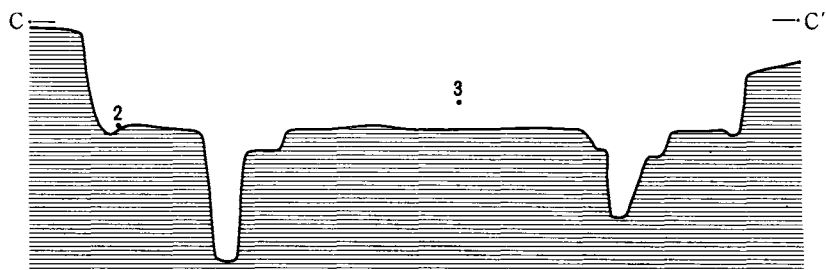
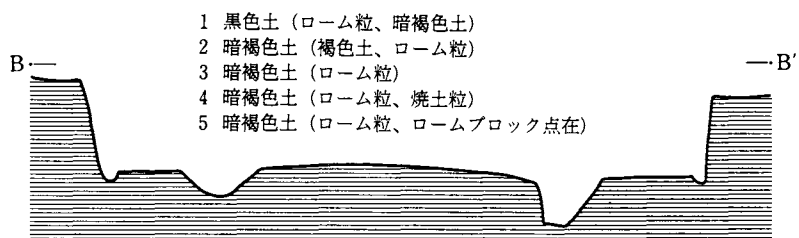
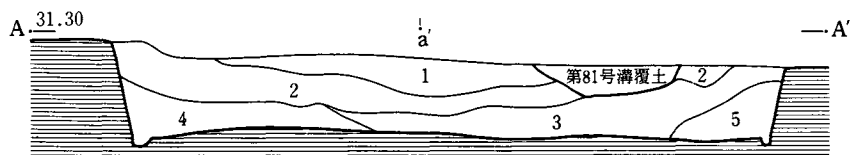
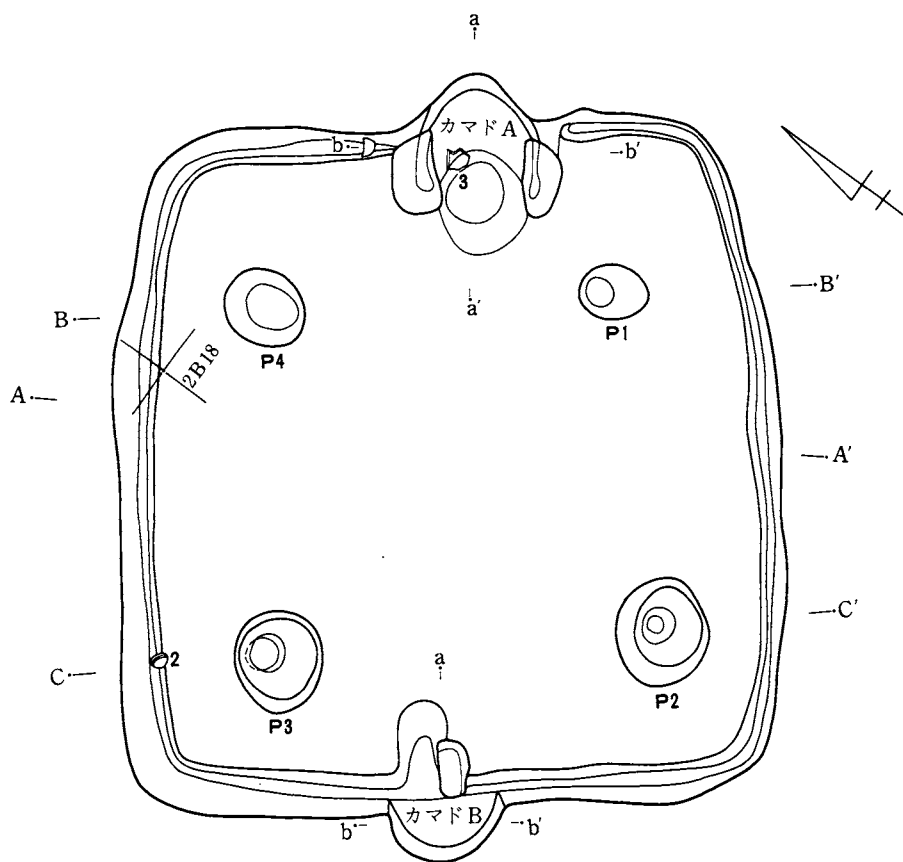
第62号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
62-1	坏	底部小片			—	明褐色—明褐色 — 砂粒やや多 微細 — 雲母片多 良好		体部下端へら削り 底部一 方向手持ちへら削り	墨書 不明
62-2	甕	口縁部の み	1/6 — —		(12.8) — (6.4)	黒褐色—褐色 小 — 砂粒多 良好		口縁部横ナデ後胴部外面縦 位へら削り 内面ナデ 口 縁・胴部接合痕明瞭	
62-3	長頸壺?		— 3/6 1/6		— (15.4) 裾径 17.5	灰色—灰色 精選 — 堅緻 良好		内面ナデ 底部ナデ 外面 へら削り 付高台	自然軸
62-4	刀子			長さ	(6.6)	鉄製			

第82号住居跡 (第349~351図 図版122)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 B18他である。第81号溝より本跡は古い。また、第120・121号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本跡は第121号掘立柱建物跡より新しく、第120号掘立柱建物跡との関係は不明である。

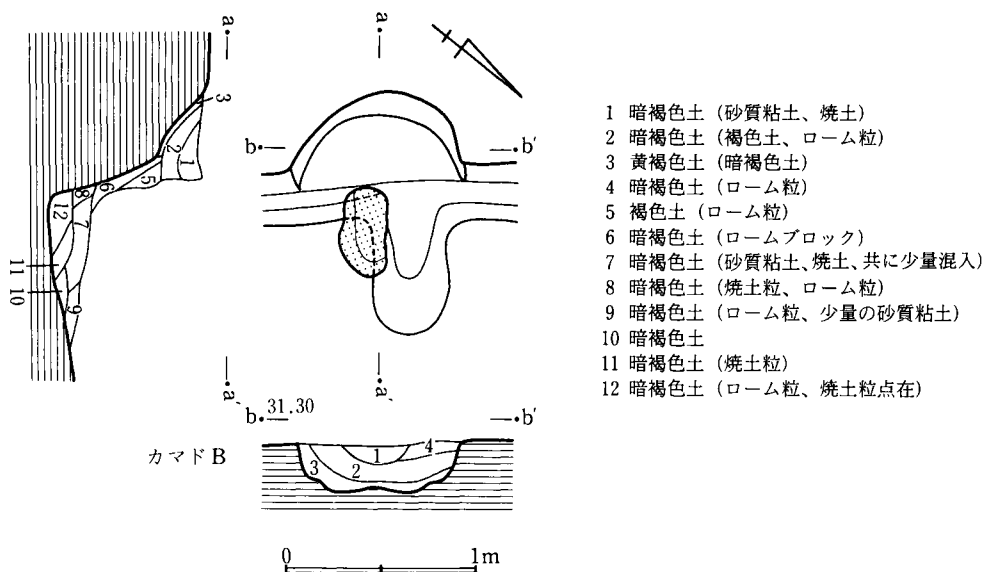
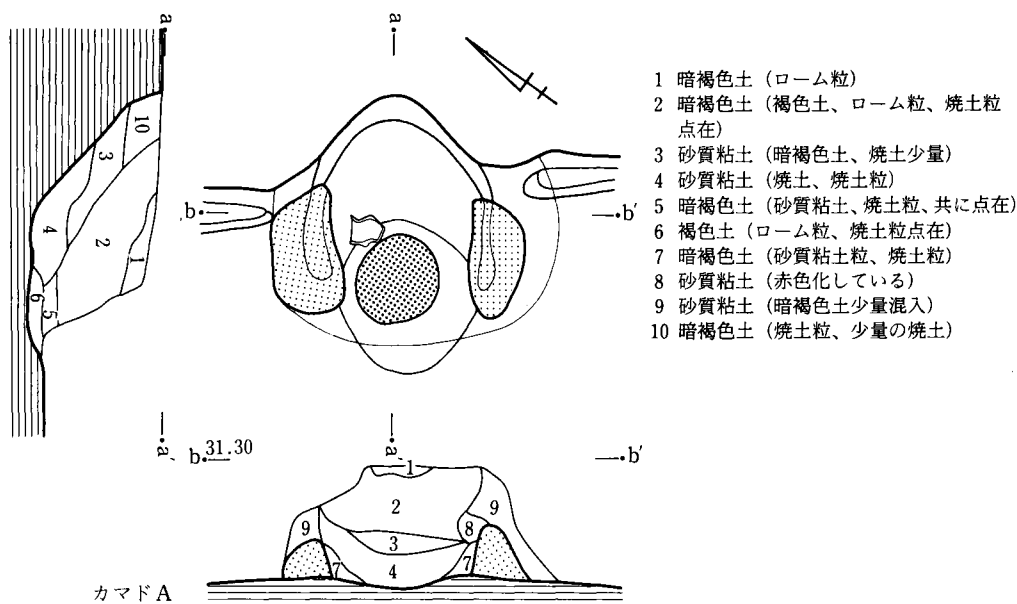
遺構 北西壁5.10m、北東壁4.20m、南東壁4.95m、南西壁4.95mあり、面積27.52㎡で北コ



0 2m

第349図 第82号住居跡実測図 (1/60)

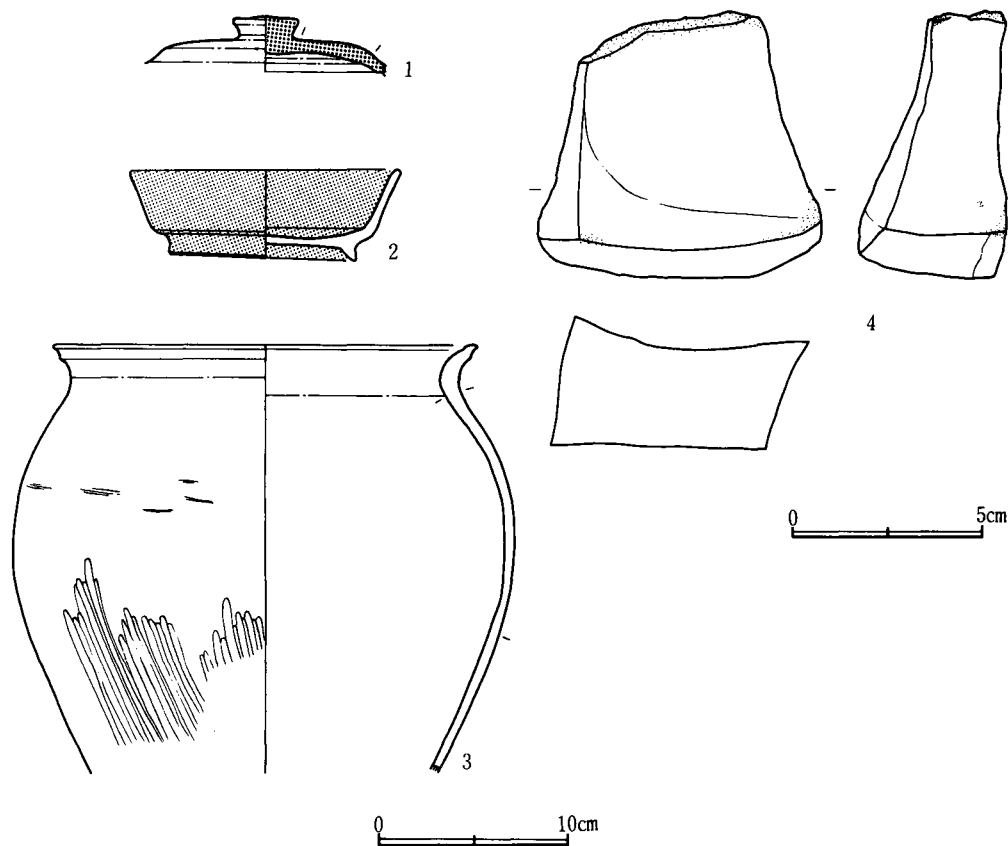
コーナーがほぼ直角をなす不整形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁中央やや右寄りのN55°EのAと南西壁中央のS55°WのBの2ヶ所があり、Bが古い。壁は西側が緩傾斜の他はほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝はカマドAを除いて全周し、巾約10cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は全体的に固く平坦である。柱穴は4個検出され、対角線上に配置されており、P₂・P₃には掘り方が確認されている。



第350図 第82号住居跡カマド実測図 (1/40)

カマド Aは北東壁中央よりやや右寄りにあるが全体的には中央に位置するものであり、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約35cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径45×45cmの浅い播鉢状を呈する。遺存状態から本カマドが新しい。Bは南西壁中央に位置し、遺存状態は非常に不良である。壁への掘り込みは約40cmあるが、上部面だけであり、中間からはほぼ垂直になる。カマドの構築に砂質粘土が使用されたであろうことが左袖の一部残存からうかがえる。火床部ではほとんど赤色化が認められていない。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は蓋・高台付坏・甕・砥石が出土している。2の坏は全面赤彩であり壁際床直から、3の甕はカマド内からの出土である。他は覆土中からである。



第351図 第82号住居跡出土遺物実測図 (1～3 1/4、4 1/2)

第82号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm 底径 器高 ()は推定	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
82-1	蓋		3/4 — — 擬宝珠径 3.4	(13.4) — (3.0) 3.4	灰青色-灰色 白 色砂粒多 やや不 良	外面頂部回転ヘラ削り 他 は内外面とも横ナデ 擬宝 珠偏平鈕 内面のかえりは 痕跡化	須恵器
82-2	高台付坏		5/8 5/8 5/8 裾径 9.9	14.2 — 4.7 9.9	赤色-赤色 精選 良好	坏底部静止糸切り後高台貼 付 高台横ナデ	全面赤彩
82-3	甕		5/4 — 3/2 (22.3)	22.3 — (22.3)	黒褐色-褐色 小 砂粒多 良好	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面ナデ下半縦位 ヘラナデ 内面ナデ	胴部内面下半剝離あり
82-4	砥石破片		長さ 最大幅 最大厚	(6.9) 7.4 5.6	凝灰岩	重量188g	

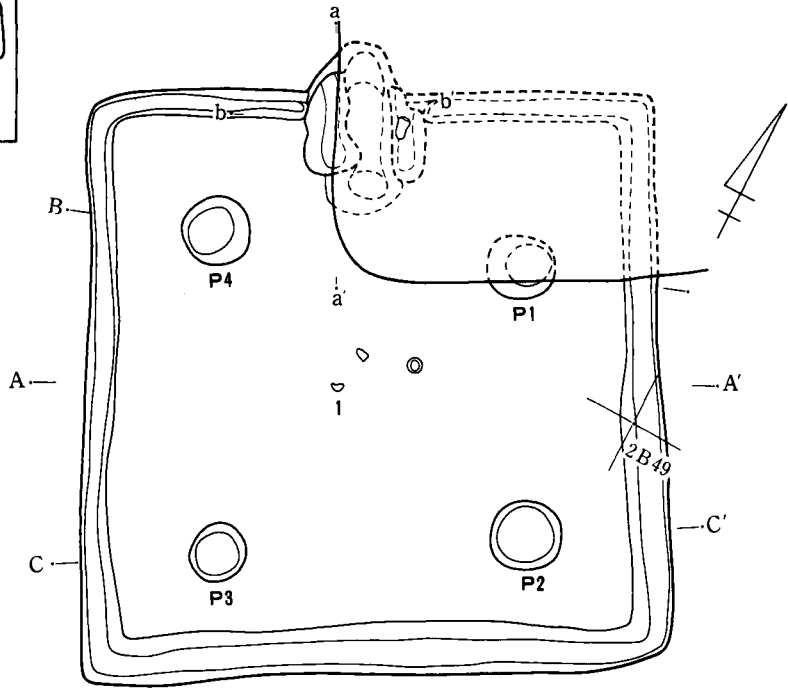
第83号住居跡 (第352~354図 図版122)

台地南側緩傾斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2 B49他である。第84号住居跡とは重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 西壁4.45m、北壁4.45mあり、面積21.15㎡で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN28°Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約40cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面は平坦である。柱穴は4個検出され、対角線上に配置されている。各柱穴は径50~55cm、深さ40~70cmとしっかりした掘り方である。

カマド 北壁中央に位置し、第84号住居跡に右袖から中央部上面が破壊されていた。壁への掘り込みは約40cmを計る。カマドの構築は砂質粘土を使用している。火床部は径20×30cmあるが、袖部確認部より前面に確認されている。

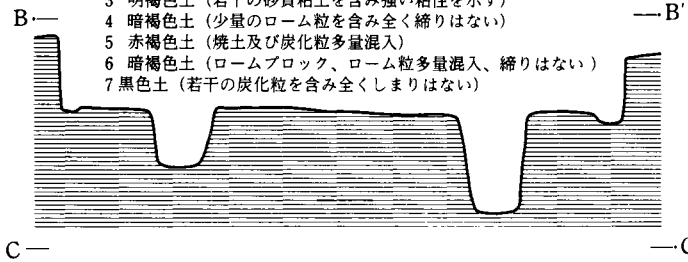
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積である。遺物は坏が出土しており、1の坏は中央部の床面よりやや上から、他は覆土中である。また、その他として土製支脚の一部が覆土中から出土している。



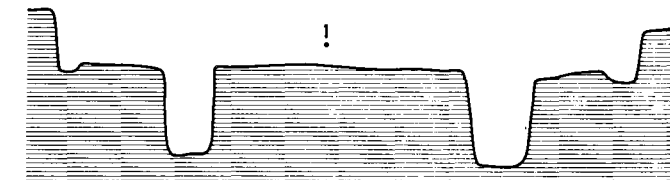
A-30.80 —A'



- 1 黒褐色土 (ローム粒、焼土粒を多量に含みボソボソして締りがない)
- 2 暗黒褐色土 (4層に若干の炭化粒が混入)
- 3 明褐色土 (若干の砂質粘土を含み強い粘性を示す)
- 4 暗褐色土 (少量のローム粒を含み全く締りはない)
- 5 赤褐色土 (焼土及び炭化粒多量混入)
- 6 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒多量混入、締りはない)
- 7 黒色土 (若干の炭化粒を含み全くしまりはない)



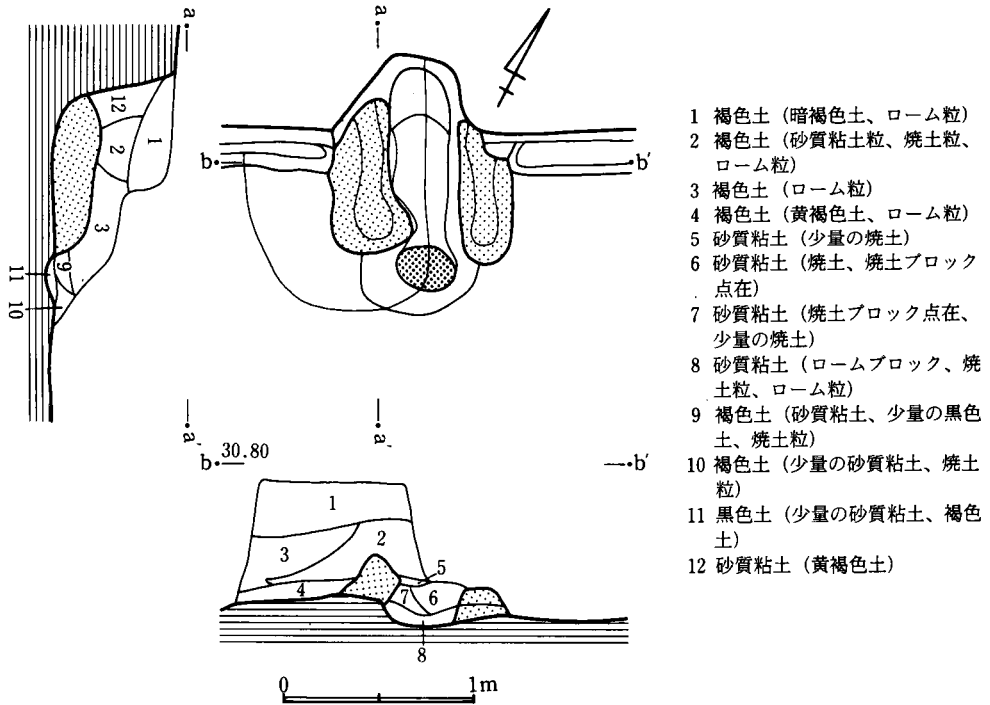
B —B'



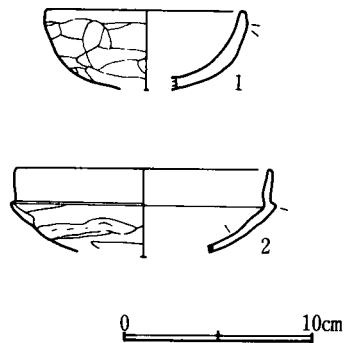
C —C'

0 2m

第352図 第83号住居跡実測図 (1/60)



第353図 第83号住居跡カマド実測図 (1/40)



第354図 第83号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第83号住居跡出土遺物観察表

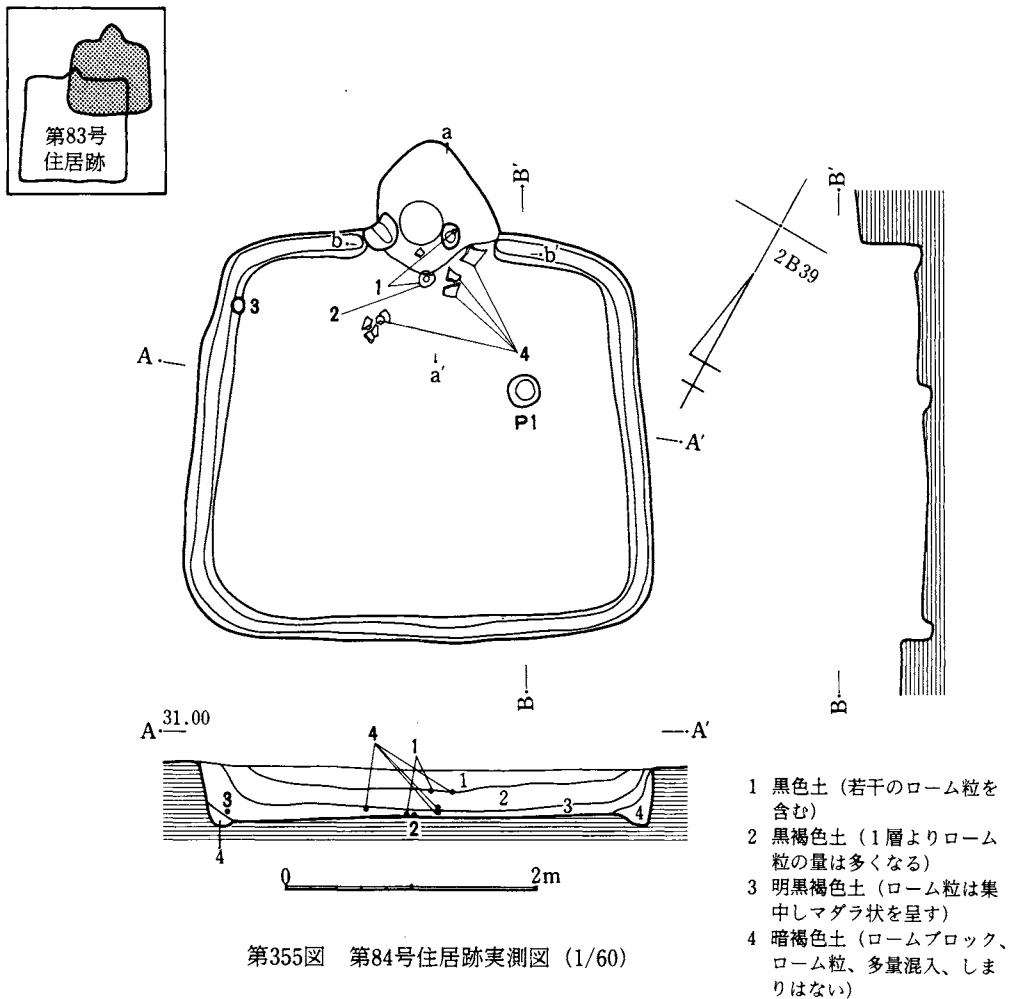
遺物番号	器種	遺存度	□底体 ()は推定	法量 cm	□径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
83-1	坏	3/4	—	—	10.8 — 4.1	赤褐色-褐色 砂粒少	小 やや不良	□縁部横ナデ ヘラ削り後ナデ	体部外面へ 内面ナデ
83-2	坏	1/2	1/2	—	13.7 — (4.6)	黒褐色-黒色 砂粒多	小 やや不良	□縁部外面へ ナデ 体部外面へ ヘラ削り後ナデ	内外面ともにスス付着 □唇部上端内側摩耗あり

第84号住居跡 (第355～357図 図版122)

台地南側緩傾斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2 B29他である。第83号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 西壁2.75m、北壁3.10m、東壁2.65m、南壁3.50mあり、面積11.34m²で隅丸台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN30°Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁で約40cm、南壁で約15cmをそれぞれ計り傾斜状況を表わしている。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面は平坦であり、南西部分が貼床である。貼床は砂質粘土を多量に含んでいることから、第83号カマドの一部を使用しているものと思われる。柱穴は1個検出され、径25cm、深さ10cmと小規模のものである。

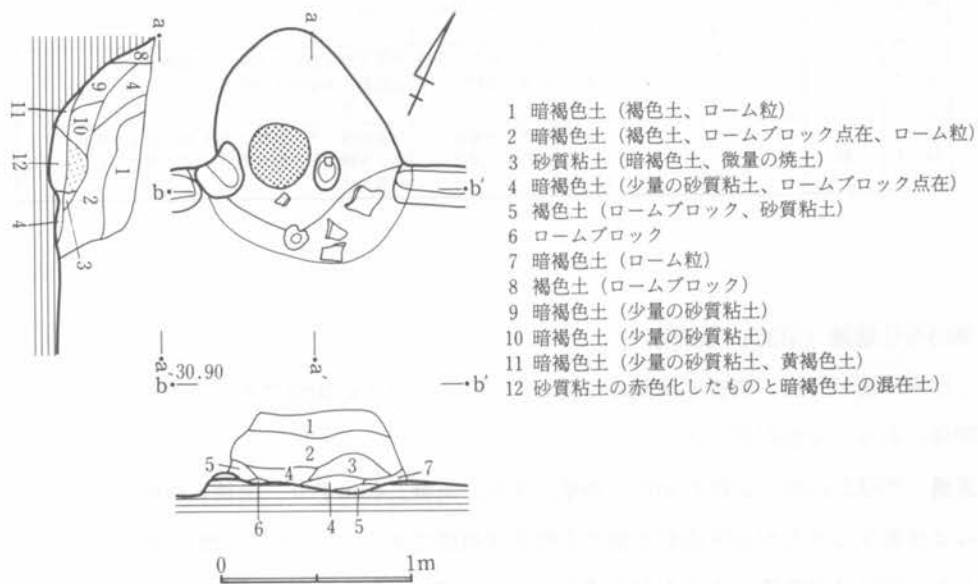
カマド 北壁中央に位置するが、遺存状態は不良であった。壁への掘り込みは約80cmを計る。



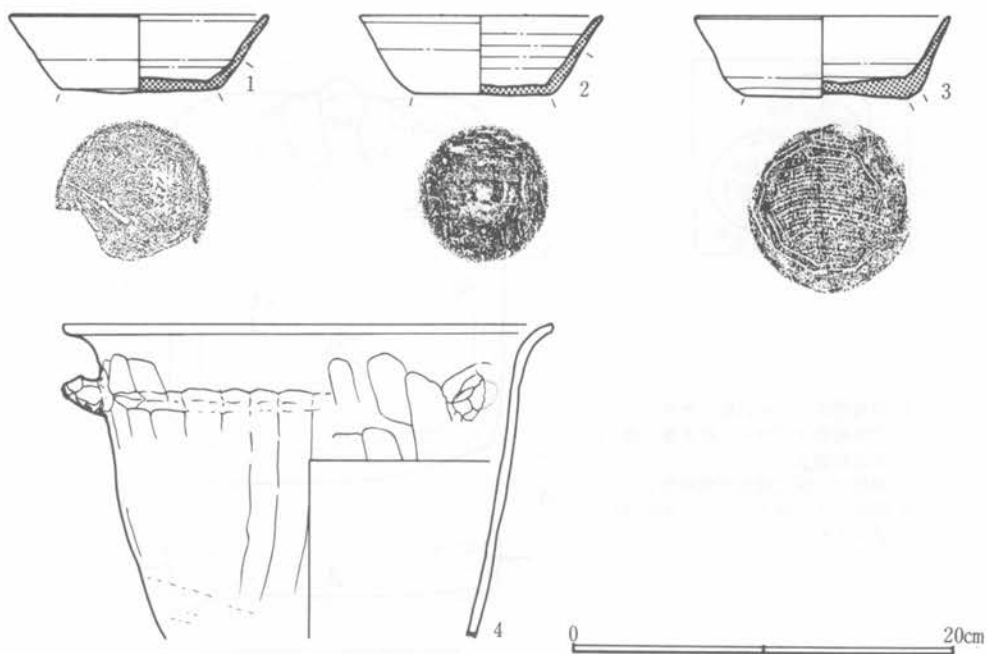
第355図 第84号住居跡実測図 (1/60)

カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は掘り込み部にあり、径35×35cmを計る。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・甑が出土し、特に坏は須恵器が多い。3の坏は壁際床面から、他はカマド内とその付近出土であった。



第356図 第84号住居跡カマド実測図 (1/40)



第357図 第84号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

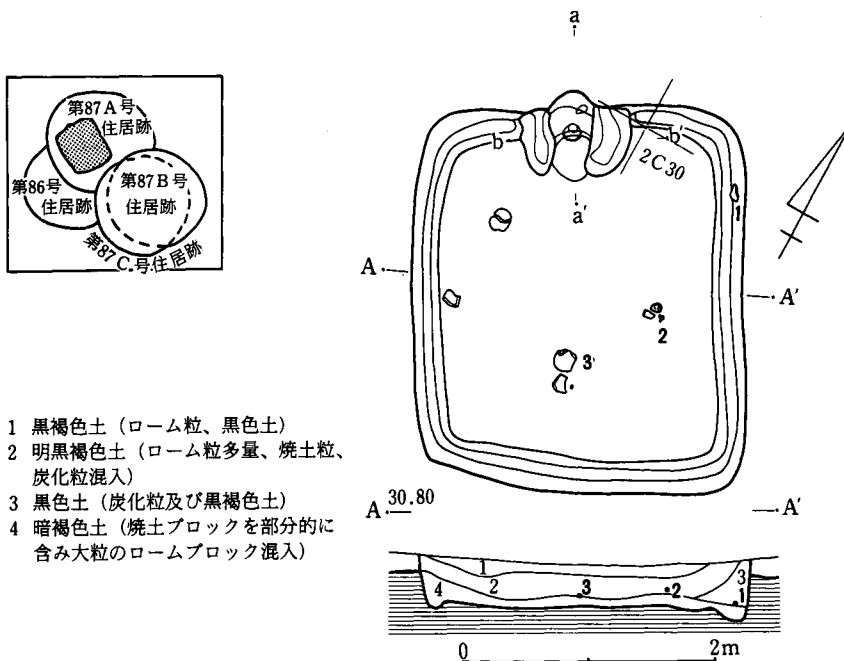
第84号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
84-1	坏	2% 5% 2%			13.6 8.1 4.1	青灰色-青灰色 白色砂粒多	良好	底部直線のヘラ削り	須恵器
84-2	坏	完 完 完			12.9 7.0 4.1	灰白色-灰白色 小砂粒多	良好	底部回転ヘラ削り後直線的 ヘラ削り	須恵器
84-3	坏	5% 完 完			13.4 8.4 4.3	灰色-灰色 粒多	小砂 良好	体部下端持ちヘラ削り 底部静止糸切り後周縁手 ちヘラ削り	須恵器
84-4	甑	5% — 5%			25.9 — (16.3)	褐色-黒褐色 砂粒多	小 良好	口縁部横ナデ 胸部上半縦 位下半横位ヘラ削り後ナ 内面ナデ	把手は2ヶ所に付くも のと考えられるが正対 しない

第85号住居跡 (第358~360図)

台地南側緩傾斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2C30他である。第87A号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

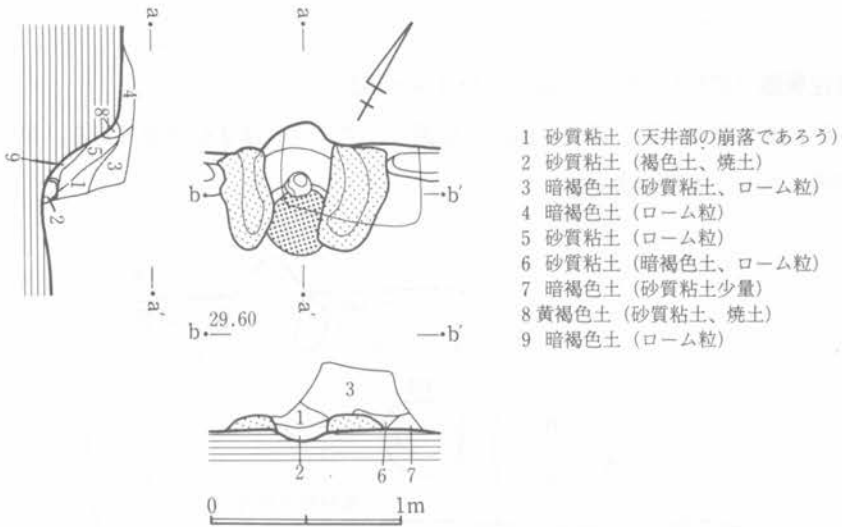
遺構 西壁2.65m、北壁2.30m、東壁2.30m、南壁2.40mあり、面積7.61㎡で北西コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN29°Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり確認面より約35cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面は平坦である。柱穴は検出されていない。



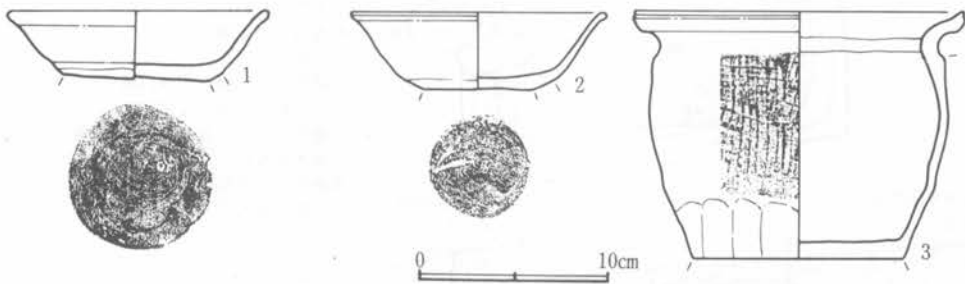
第358図 第85号住居跡実測図 (1/60)

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約15cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用しているが、袖部の砂質粘土は非常に粘性の強いものであった。火床部は径35×40cmの楕円状を呈する。

遺物出土状況 土層は第87号住居跡を切っていることが明瞭であり、覆土はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・甕が出土している。遺物は床直よりやや浮いた状態であった。



第359図 第85号住居跡カマド実測図 (1/40)



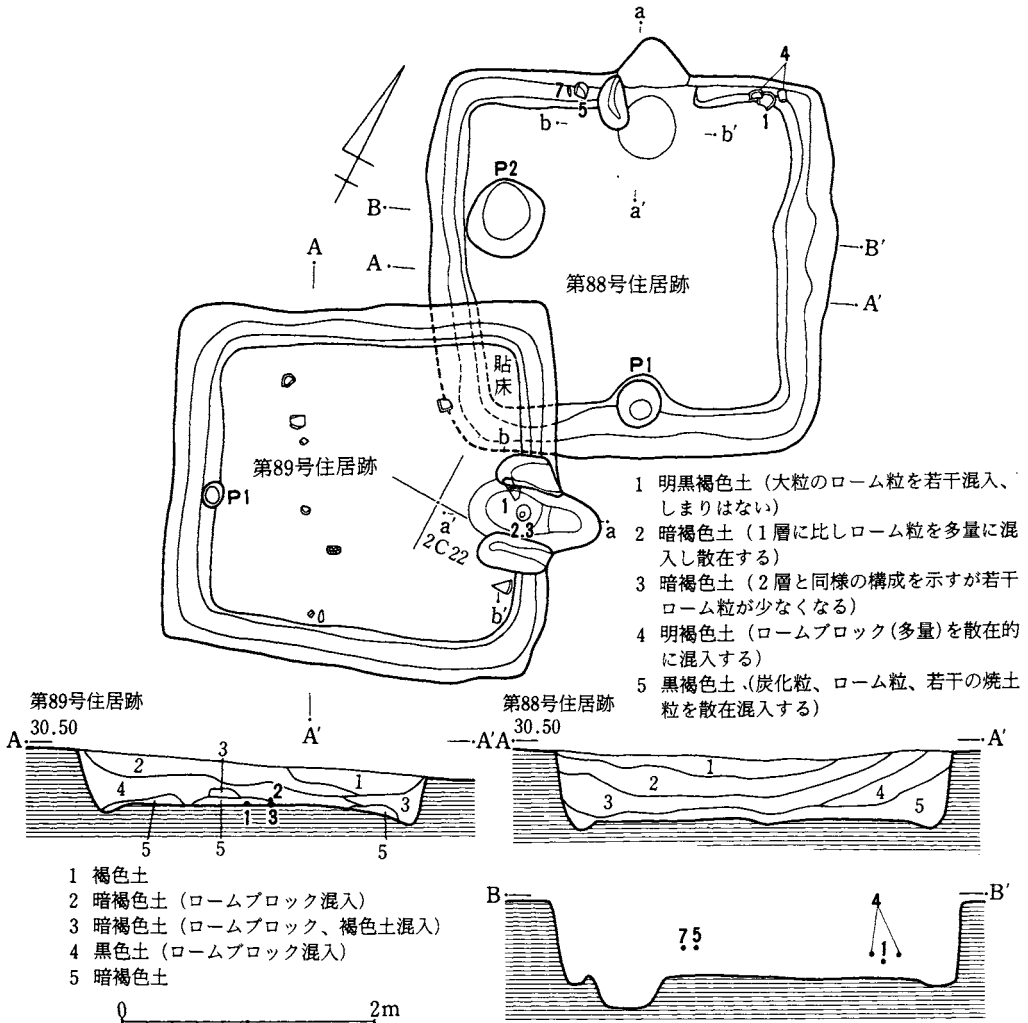
第360図 第85号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第85号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	法量 器高	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
85-1	坏	1/2 完 完			13.7 7.5 3.7	赤褐色-褐色 粒少	砂 良好	体部下端回転ヘラ削り 底部回転糸切り後周縁回転ヘラ削り	
85-2	坏	3/4 完 3/4			(13.5) 5.6 4.0	黒褐色-黒褐色 砂粒少	良好	体部下端回転ヘラ削り 底部回転糸切り	
85-3	甕	2/3 2/3 3/4			(17.4) (11.0) 12.7	黒褐色-黒褐色 小砂粒多	良好	折り返し口縁横ナデ 胴部 叩目後下端横位ヘラ削り 底部剝離激しく不明	内外面剝離あり

第88号住居跡 (第361~363図 図版123・156・162)

台地南側のやや緩傾斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2C21他である。第89号住居跡と重複関係にあり、本跡が古い。

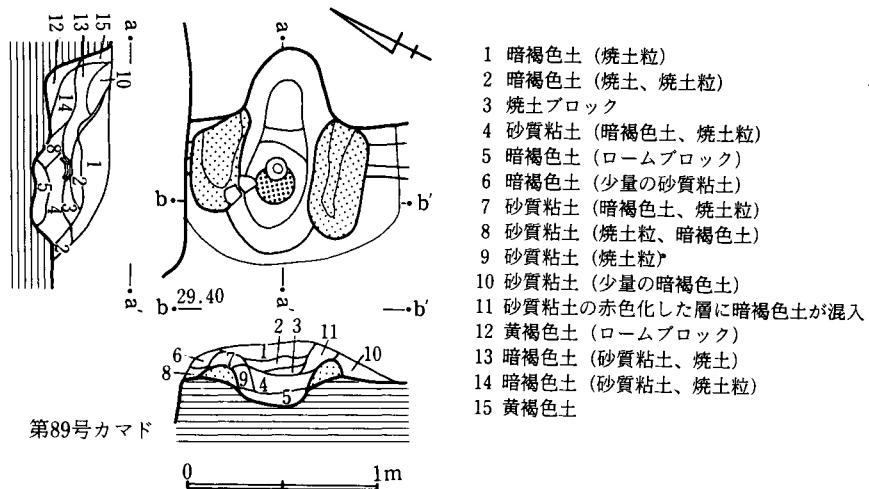
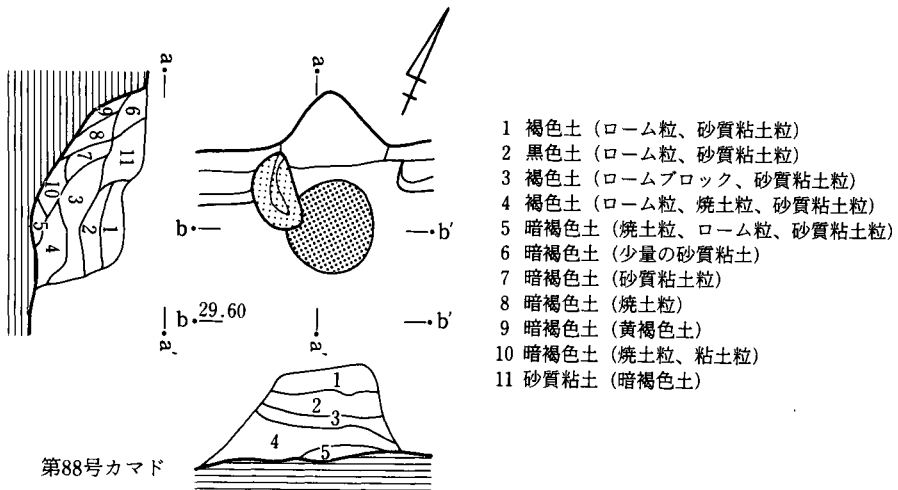


第361図 第88・89号住居跡実測図 (1/60)

遺構 西壁2.75m、北壁2.90mあり、面積(9.15)m²で各コーナーがやや直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央にありN27°Wである。壁はほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約50cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は2個検出された。P₁はカマドの対面に配置され径35cm、深さ30cmを計る。P₂は径約60cm、深さ20cmを計り、柱穴と判断するには大きすぎるが一応柱穴とした。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は不良である。壁への掘り込みは約25cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用しているが、右袖部が遺存していない。火床部は径45×50cmの浅い楕円状を呈するが、床面には赤色化が見られない。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は蓋・坏・壺・刀子・砥石が出土している。1の蓋と4の壺が右袖部付近より、5の壺と7の砥石が左袖部付近よりそれぞれ出土



第362図 第88・89号住居跡カマド実測図 (1/40)

し、他は覆土中からである。

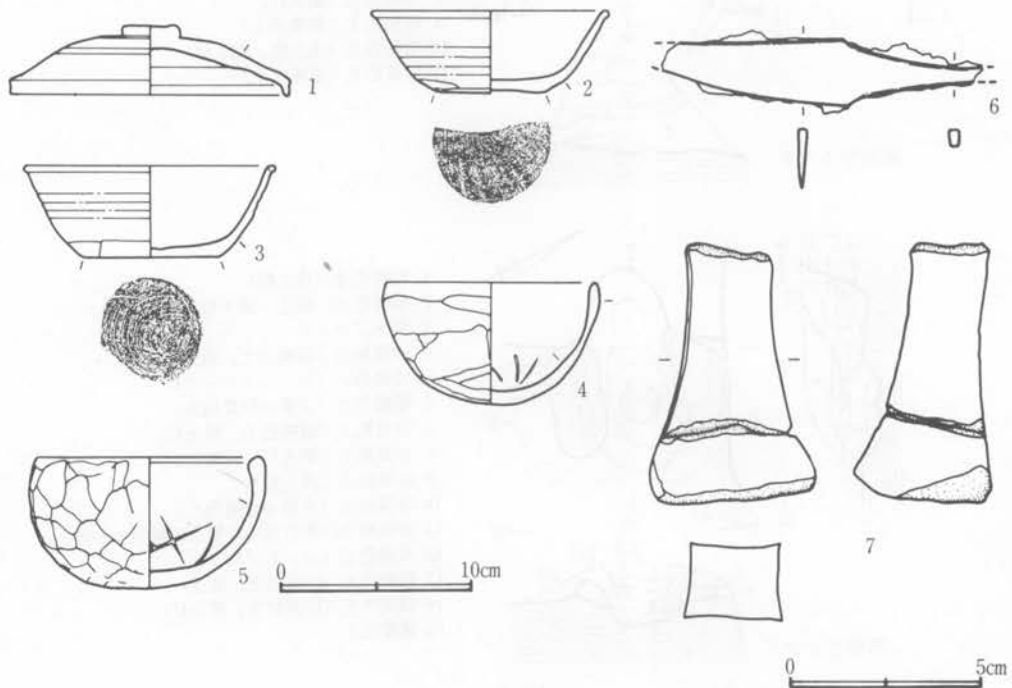
第89号住居跡 (第361・362・364図 図版123)

台地南側のやや緩傾斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2C22他である。第88号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 北壁2.80m、東壁2.85m、南壁2.85m、西壁2.50mあり、面積8.45m²で北西・北東コーナーがほぼ直角をなす台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは東壁中央やや右寄りに位置しN67°Eである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約40cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計るが、床面との境は明瞭とは言えない。床面はほぼ平坦であり、第88号住居跡覆土上に貼り床を施している。柱穴は1個検出され、P₁の径20cm、深さ10cmを計り、カマドの対面に配置されている。

カマド 東壁中央やや右寄りに位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約40cmを計り、中段を有している。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径20×20cmのやや深い挿鉢状を呈する。遺物は坏の2・3が重なって、1が単独で出土している。

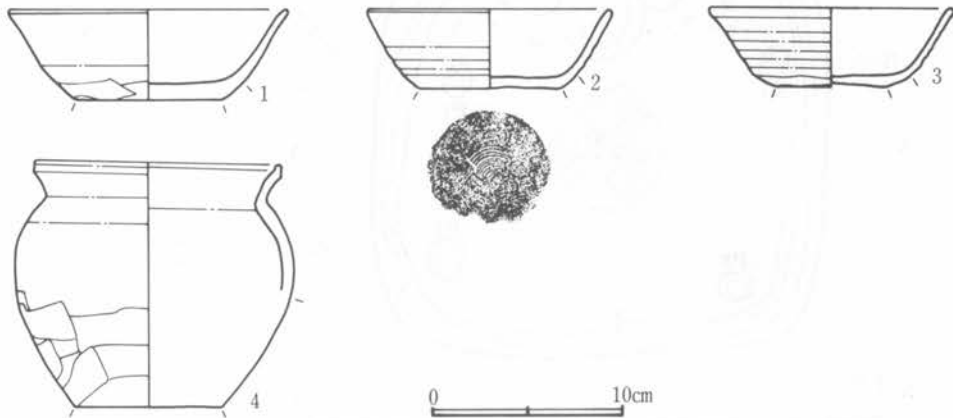
遺物出土状況 土層はロームブロックが各層に混入しており、廃棄状況がうかがえる。遺物は坏・甕が出土している。坏は前述のとおりである。甕は覆土中からである。また、その他として不明鉄製品の小破片が出土している。



第363図 第88号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6・7 1/2)

第88号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm	口 径 底 径 器 高	色 調 内-外 胎 土 焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
88-1	蓋	完 完 完			14.7 — 3.5 3.0	黄褐色-黒褐色 小砂粒多 やや不 良	外面天井部回転ヘラ削り後 つまみ貼付 口縁部から内 面にかけてナデ	天井部に擬宝珠つまみ がつく
88-2	坏	$\frac{1}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{1}{4}$			(13.2) 7.1 4.7	灰褐色-灰褐色 小砂粒多 良好	体部下端回転ヘラ削り 底 部回転糸切り後周縁ヘラ削 り	
88-3	坏	$\frac{3}{4}$ 完 $\frac{3}{4}$			(12.4) 6.0 4.2	褐色-褐色 小砂 粒多 良好	底部回転糸切り離し 底部 周縁部分的にヘラ削り	
88-4	埴	完 完 完			11.0 — 6.3	黒色-黒色 小砂 粒多 やや不良	口縁部外面~体部内面横ナ デ 体部外面横位ヘラ削り 内面ヘラ圧痕残存	
88-5	埴	$\frac{3}{4}$ 完 $\frac{3}{4}$			11.7 — 6.8	黒褐色-黒褐色 小砂粒多 やや不 良	内面横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラ圧痕残存	内面に壁の剥離あり
88-6	刀 子		長さ	(8.5)		鉄製		
88-7	砥 石 半 欠		長さ 最大幅 最大厚	(6.7) 4.4 3.6		凝灰岩	重量93g	



第364図 第89号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第89号住居跡出土遺物観察表

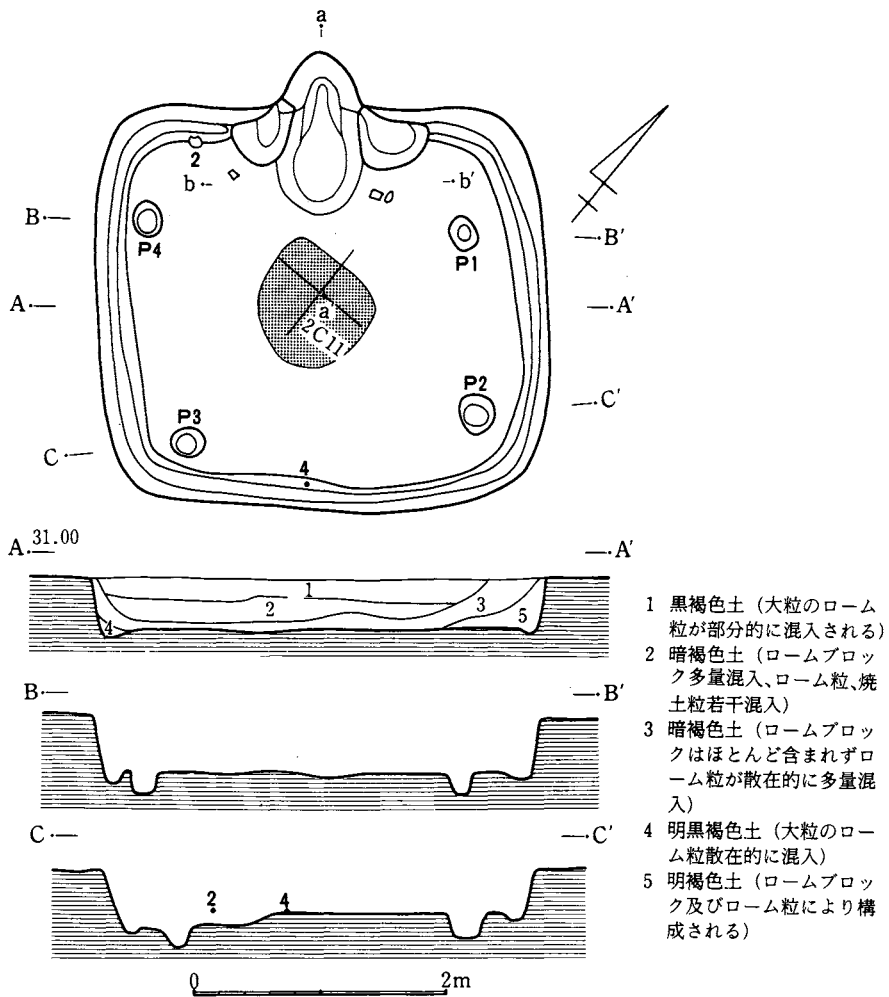
遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm	口 径 底 径 器 高	色 調 内-外 胎 土 焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
89-1	坏	$\frac{3}{4}$ 完 $\frac{3}{4}$			(14.6) 7.5 4.6	褐色-褐色 砂粒 多 不良	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り 内面丁寧な ナデ	内外面に剥離あり
89-2	坏	$\frac{3}{4}$ 完 $\frac{3}{4}$			13.0 7.5 4.1	褐色-褐色 小砂 粒多 良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後周縁手 持ちヘラ削り	
89-3	坏	完 完 完			12.9 5.6 4.0	褐色-褐色 砂粒 少 やや不良	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後周縁手 持ちヘラ削り	
89-4	壺	$\frac{3}{4}$ 完 $\frac{3}{4}$			(12.7) 7.6 12.6	褐色-褐色 小砂 粒多 良好	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面上半ナデ下半 横位ヘラ削り 内面横ナデ 底部ヘラ削り	

第90号住居跡 (第365~367図 図版123・161)

台地南側平坦部、調査区南側に位置し、グリッドは2 C11他である。

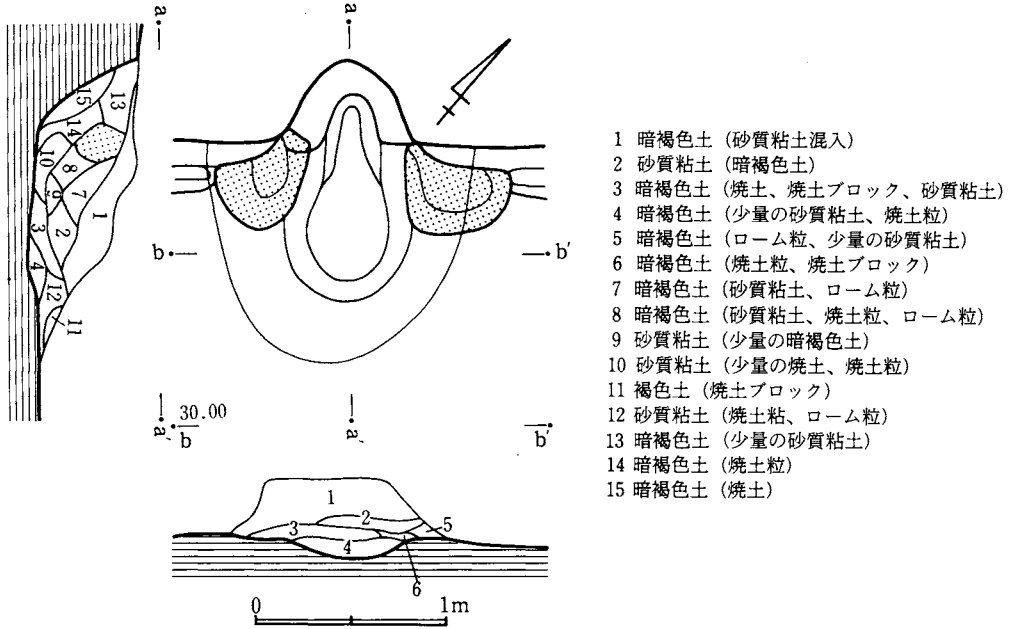
遺構 南西壁2.80m、北西壁3.00mあり、面積10.64㎡で各コーナーともに隅丸の方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN44°Wである。壁はほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約40cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約15cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面はほぼ平坦であるが一部凹凸がある。柱穴は4個検出され、それぞれ対角線上に配置されている。柱穴の深さが15~20cmと浅いのが特徴である。

カマド 北西壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約40cmを計り、溝状の煙道部中段に段をもっている。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は全体的に浅い楕円状を呈する。

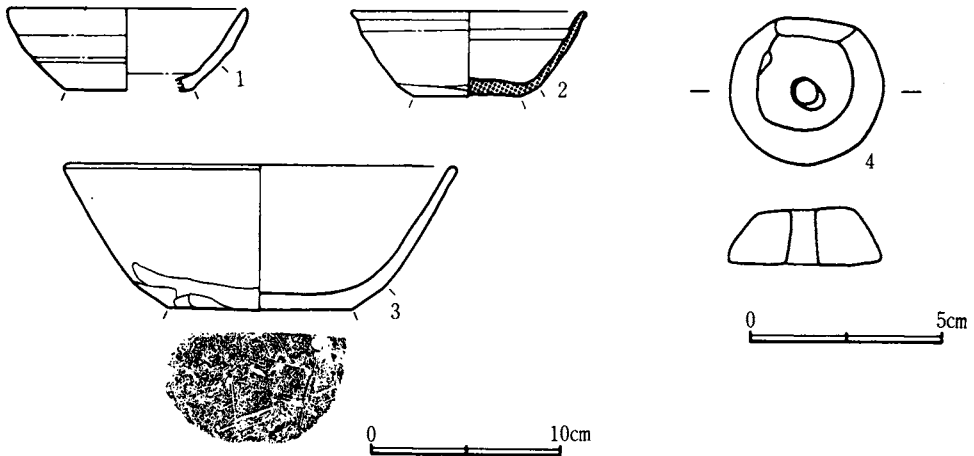


第365図 第90号住居跡実測図 (1/60)

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・浅鉢・紡錘車が出土している。2の坏は左袖部床直に、4の紡錘車は壁際床直からそれぞれ出土している。また、焼土が床面中央から出土している。



第366図 第90号住居跡カマド実測図 (1/40)

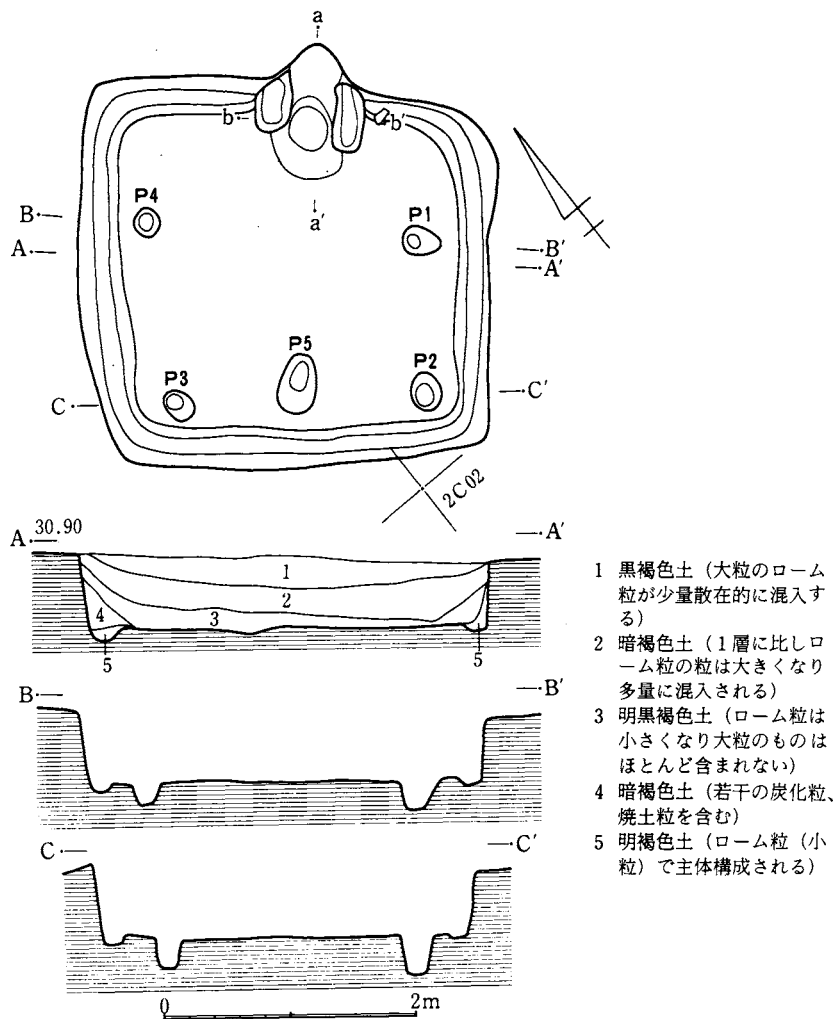


第367図 第90号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)

第90号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
90-1	坏	% % %			(12.5) (6.5) 4.2	褐色-褐色 粒多 良好	小砂	体部下端回転ヘラ削り 底部ヘラ削り	
90-2	坏	% 完 %			12.4 5.6 4.4	黒色-黒色 粒多 良好	小砂	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後周縁手持ちヘラ削り	須恵器
90-3	浅鉢	% % %			(20.6) 9.5 7.5	黒褐色-黒褐色 小砂粒多 良好		体部下端ヘラ削り 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラ削り 内面丁寧なミガキ	
90-4	紡錘車		高さ 径上 下 孔径上 下		1.4 2.5×2.4 3.9×3.9 0.65×0.90 0.72×0.88	凝灰岩		重量22.7g	

第91号住居跡 (第368~369図)



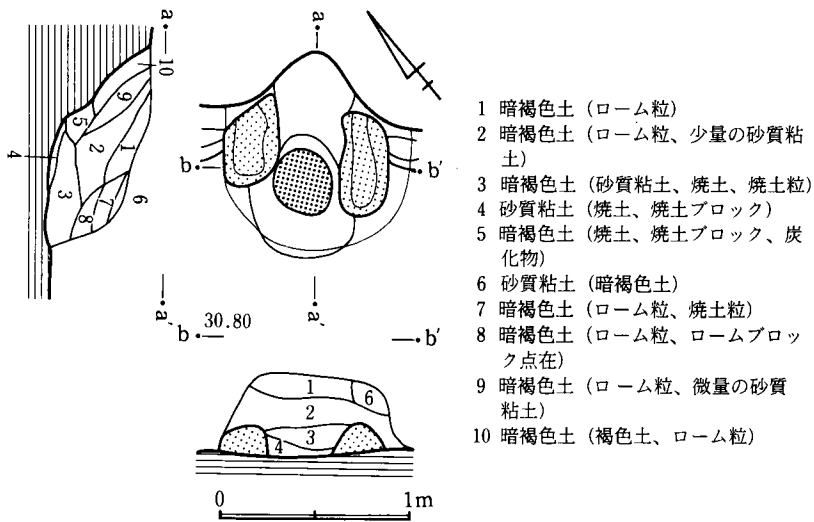
第368図 第91号住居跡実測図 (1/60)

台地南側中央平坦部、調査区南側に位置し、グリッドは2 C01他である。

遺構 北西壁2.90m、北東壁2.95m、南東壁2.50m、南西壁2.80mあり、面積9.33m²で北コーナーが直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁中央やや右寄りに位置しN42°Eである。壁は四辺ともにほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約55cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置され、P₅はカマド対面にそれぞれ配置されている。P₅は径45×30の長楕円形を呈し、深さ42cmを計り、しっかりした掘り方である。

カマド 北東壁中央やや右寄りに位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約30cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30×35cmの浅い播鉢状を呈する。

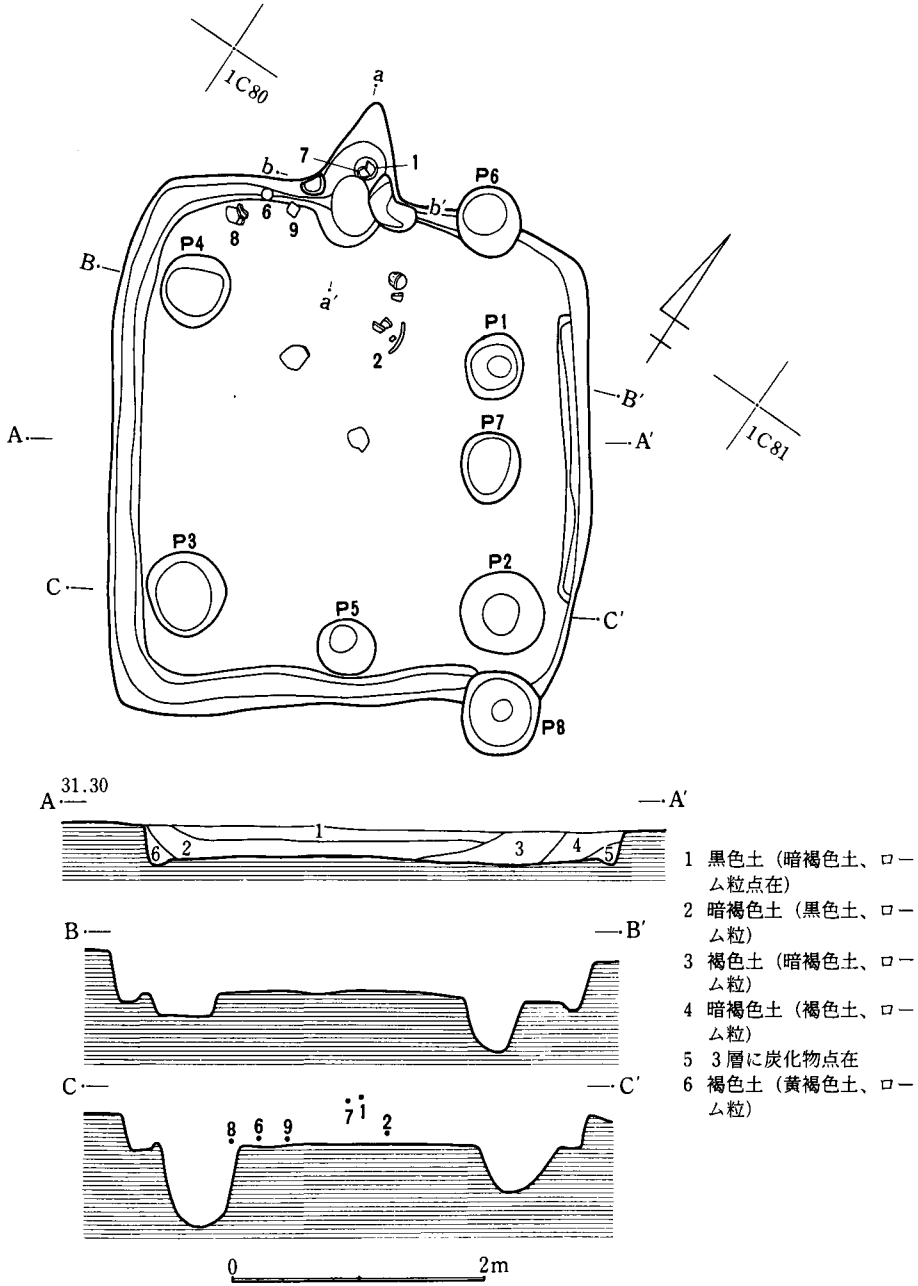
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。実測可能な遺物は出土していない。



第369図 第91号住居跡カマド実測図 (1/40)

第92号住居跡 (第370~372図 図版124・176)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1C80他である。第93号住居跡と第95号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本跡は第95号掘立柱建物跡より古く、第93号住居跡より新しい。

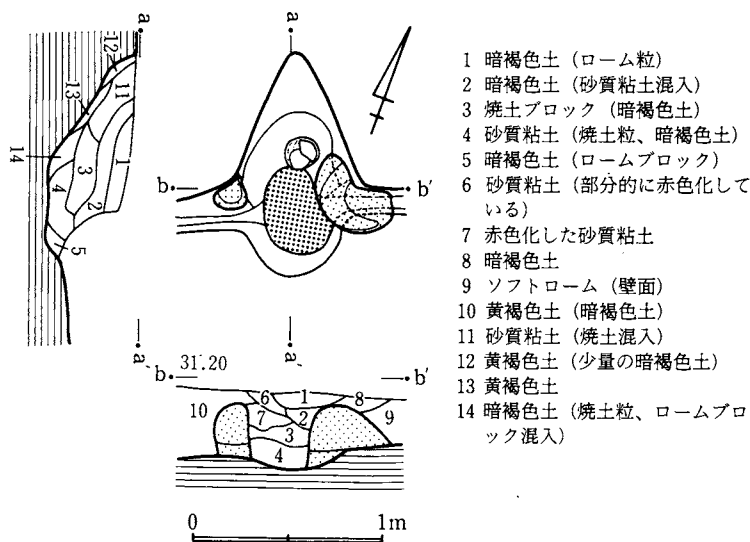


第370図 第92号住居跡実測図 (1/60)

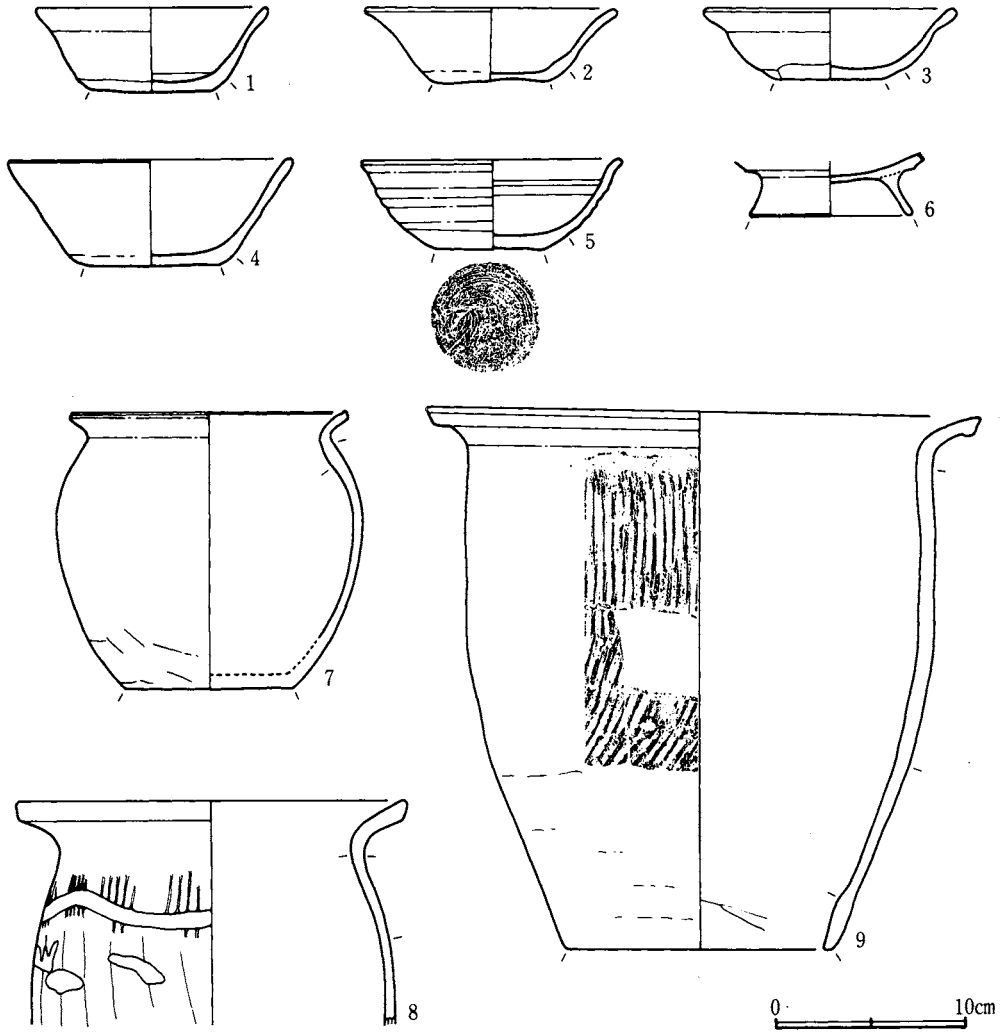
遺構 西壁4.05m、北壁3.30m、東壁3.35m、南壁3.35mあり、面積14.79㎡で南西コーナーがほぼ直角をなす不整形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN31°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約20cmを計る。壁溝は全周していたと推定されるが、北東・南東のコーナー付近では検出されず、巾約15cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面は中央部が高く、その周辺がやや低くなるが全体的に平坦である。なお、南コーナー付近の床面には明瞭な貼り床が認められなかった。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置されるが、P₄は特に浅い。P₅はカマドの対面に配置され、径45cm、深さ22cmを計る。P₆～P₈は第95号掘立柱建物跡の柱穴であり、本跡の覆土を切り込んでいた。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は不良である。壁への掘り込みは約70cmを計り非常に深く、中段に有段をもつ。カマドの構築には砂質粘土を使用しているが、袖部が非常に少ない。火床部は径40×45cmの播鉢状を呈する。カマド内より1の坏と7の甕が出土し、ほとんど完形に近い。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・高台付坏・甕・甔が出土している。6の高台付坏、8・9の甕はカマド左袖部付近床直から、1・7は前述の様にカマド内から、2の坏は床直からそれぞれ出土している。他は覆土中からである。



第371図 第92号住居跡カマド実測図 (1/40)



第372图 第92号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

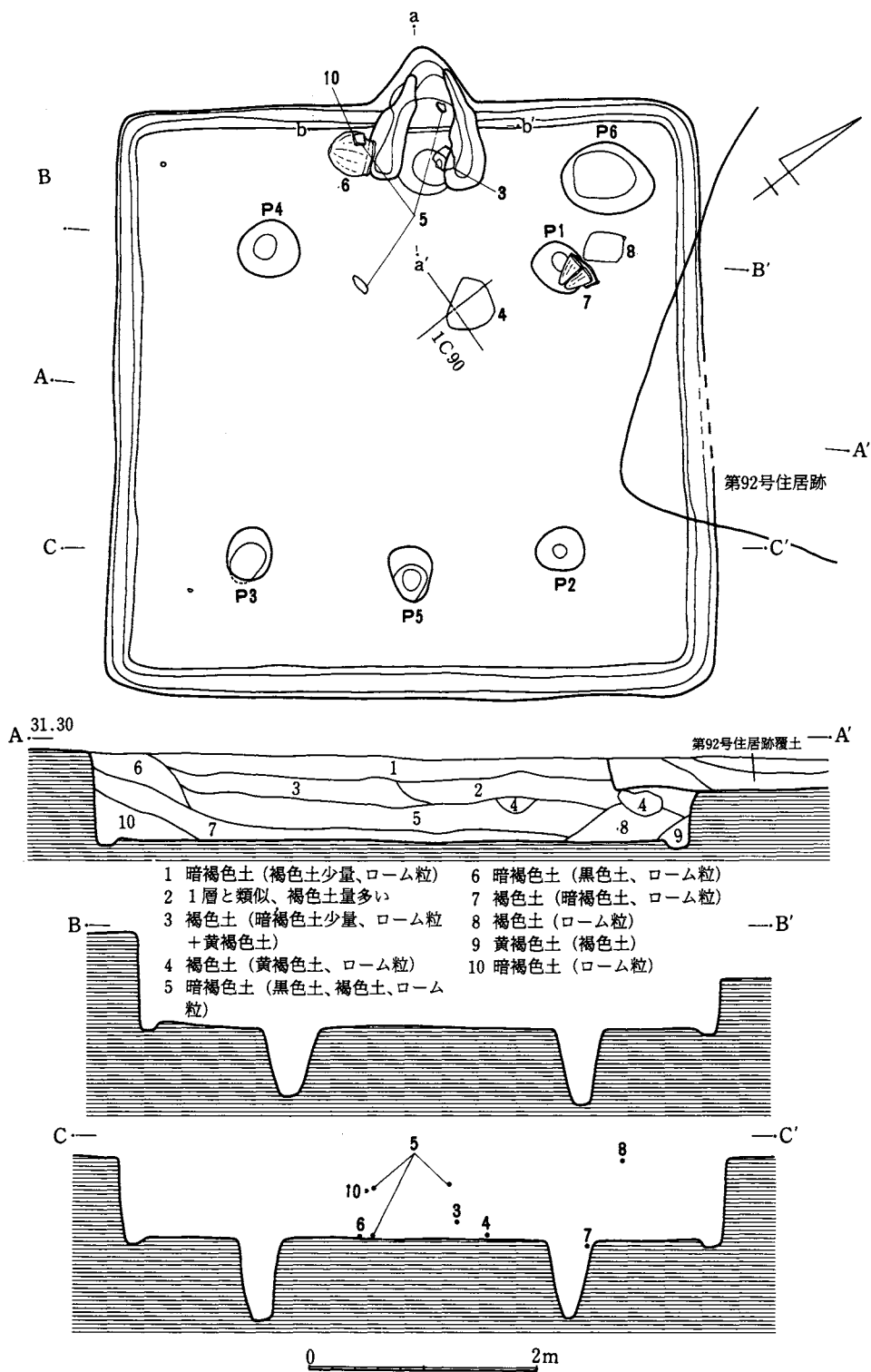
第92号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm 底径 器高	胎土 焼成	色調 内一外	成形・調整	備考
92-1	坏	% % %	12.3 6.2 4.5	灰褐色—灰褐色 小砂粒多 やや不良	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り		
92-2	坏	% % %	13.4 6.0 4.1	褐色—褐色 粒多 やや不良	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	歪みあり	
92-3	坏	% % %	13.4 5.5 3.6	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向ヘラ削り		
92-4	坏	% 完 %	(15.0) 6.6 5.5	褐色—褐色 粒多 不良	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	内外面剝離著しい	
92-5	坏	% 完 %	13.9 5.7 4.5	褐色—黒褐色 砂粒多 良好	底部回転糸切り離し 周縁手持ちヘラ削り		
92-6	高台付坏	高台部の み 完 一	— 8.6 (2.8)	黒褐色—黒褐色 砂粒少 やや不良	内面ミガキ 外面及び高台 裏ナデ	内面剝離著しい	
92-7	甕	% 完 完	(14.7) 8.8 14.2	褐色—褐色 粒多 良好	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面上半ナデ下半 横位ヘラ削り 底部ヘラ削り 内面ナデ	内面剝離あり	
92-8	甕	完 一 %	20.6 — (11.5)	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 良好	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面上半叩目下半 縦位ヘラ削り 内面ナデ	内面剝離あり	
92-9	甗	% % %	(29.3) (14.0) (27.8)	褐色—褐色 粒多 良好	折り返し口縁横ナデ 胴部 上半叩目下半横位ヘラ削り 内面ナデ	底部多孔か？	

第93号住居跡 (第373～376図 図版124・125・157・158・161)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 C 90他である。第92号住居跡とは重複関係にあり、本跡が古い。

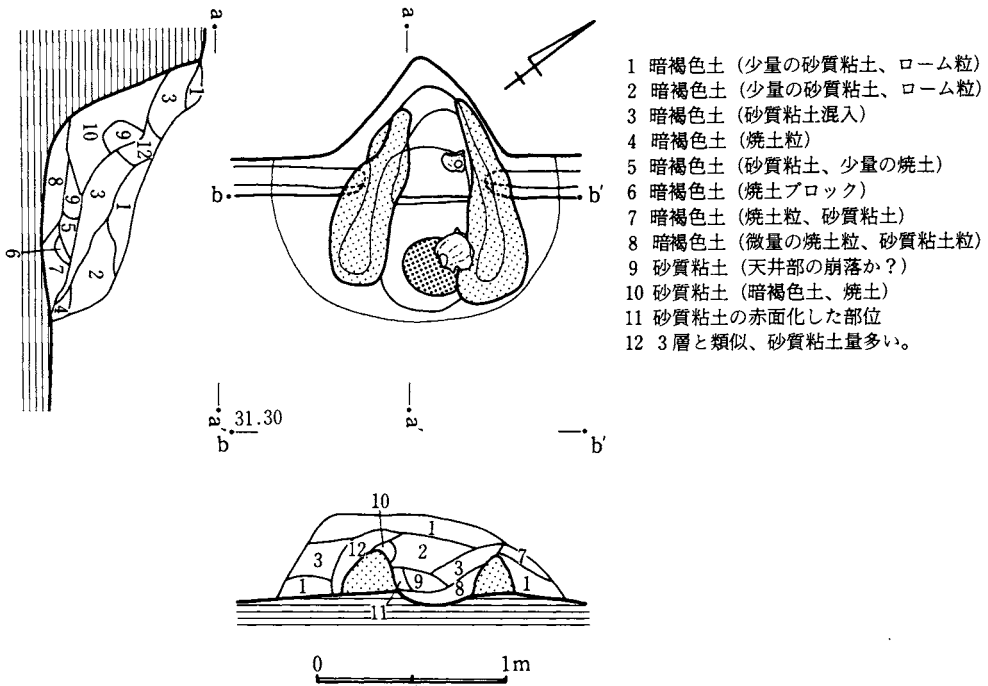
遺構 南西壁4.80m、北西壁4.90m、北東壁4.85m、南東壁5.20mあり、面積27.12m²で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN51°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約75cmを計る。壁溝はカマド下をも含めて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は全面に固く、凹凸もなく平坦である。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置されており、P₅はカマドの対面に配置され、径50×40cm、深さ45cmを計る。P₆は貯蔵穴である。径82×62cmの長楕円形の平面形を呈し、深さ44cmを計る。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、床面はほぼ平坦である。



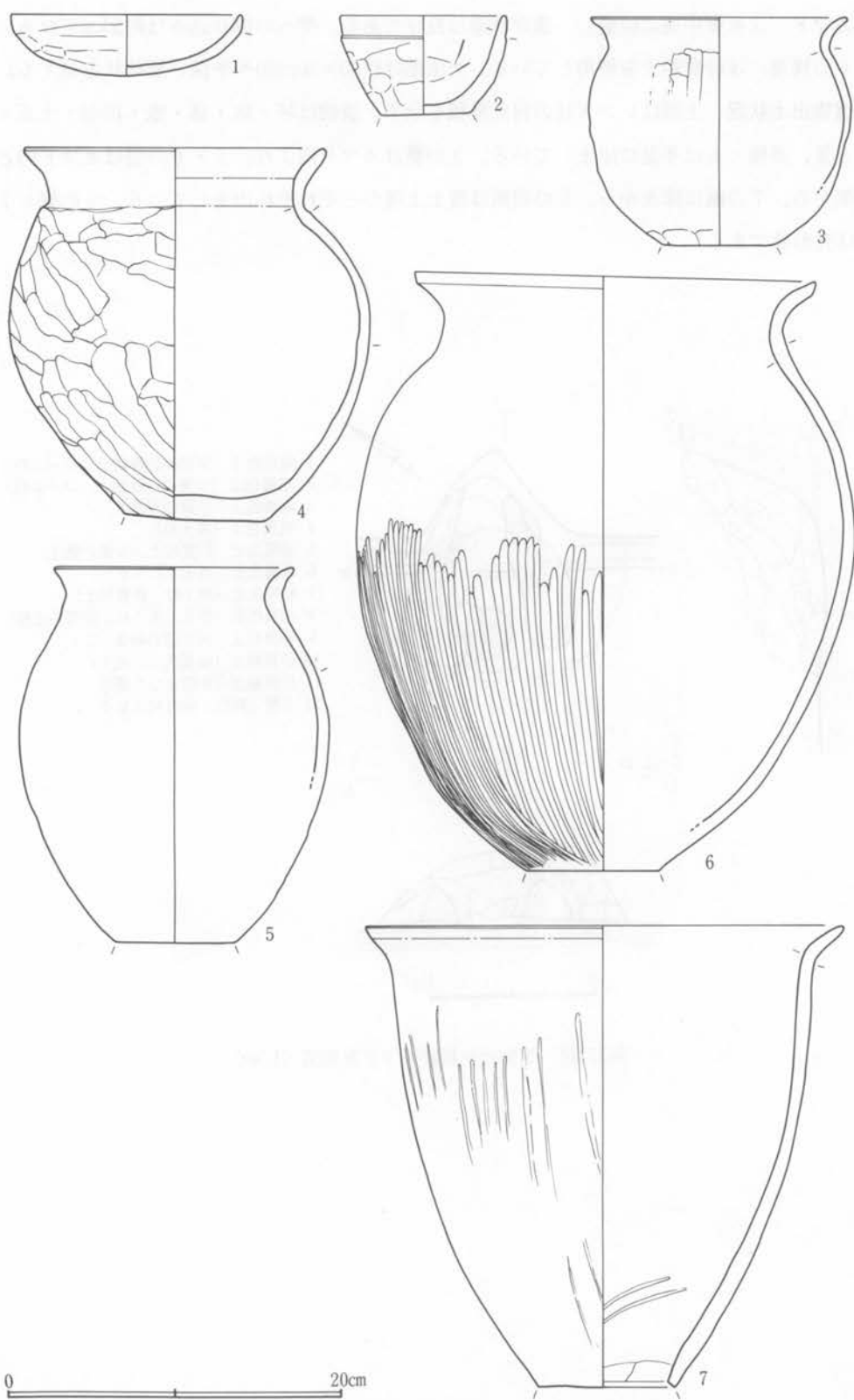
第373図 第93号住居跡実測図 (1/60)

カマド 北東壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約50cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30×30cmのやや深い掘鉢状を呈する。

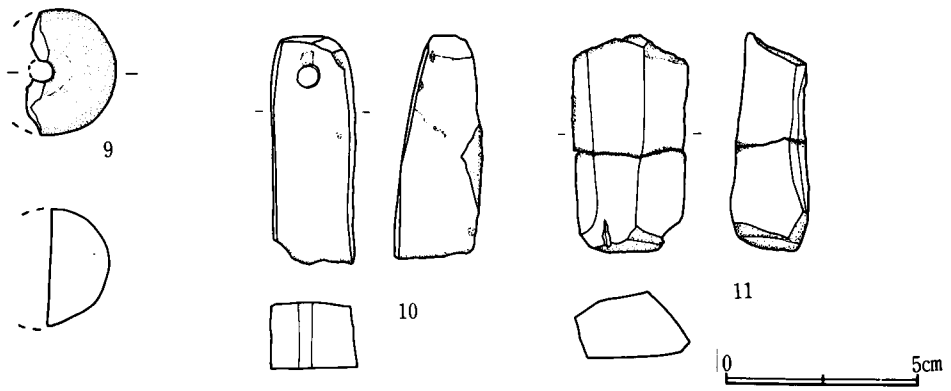
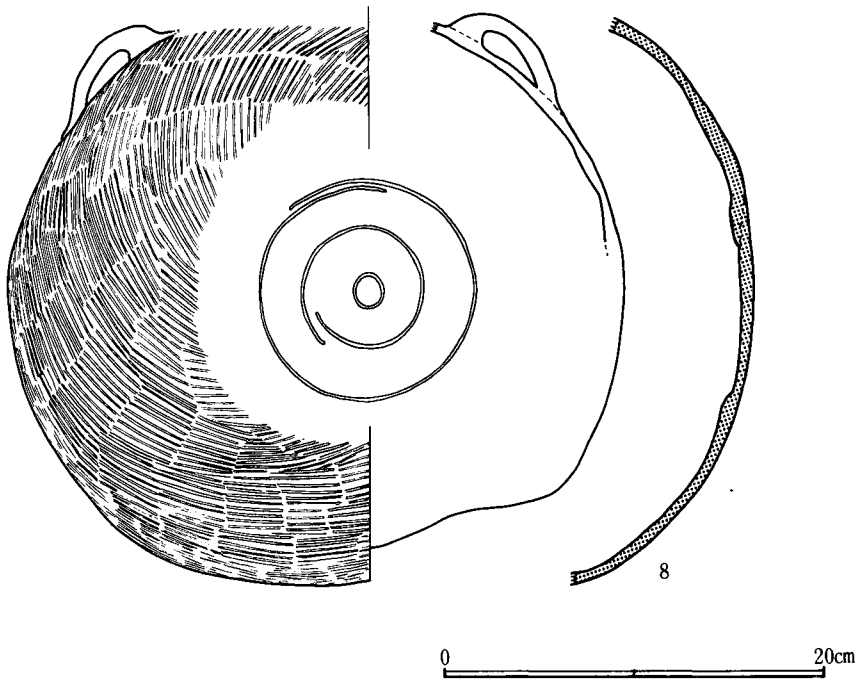
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・鉢・甕・甑・提瓶・土玉・砥石と量、器種ともに多量に出土している。3の甕はカマド内より、5・6の甕はカマド内と左袖部から、7の甑は床直から、8の提瓶は覆土上層からそれぞれ出土している。6の甕と7の甑は完形品である。



第374図 第93号住居跡カマド実測図 (1/40)



第375图 第93号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No.1



第376図 第93号住居跡出土遺物実測図 (8 1/4、9 ~11 1/2) No 2

第93号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm 器 高	口 径 底 径 器 高	色 調 内一外 胎 土 焼 成	成形・調整	備 考
93-1	坏(蓋)		2/3 2/3 2/3	(14.0) — 3.7	— — 3.7	灰褐色—黒褐色 砂粒少 やや不良	口縁部外面横ナデ 体部外面へら削り後ナデ 内面丁寧なナデ	口唇部上端内側摩耗あり
93-2	鉢		3/5 3/5 3/5	10.2 5.5 6.1	10.2 5.5 6.1	黒色—黒褐色 砂粒多 粗 良好	口縁横ナデ 内面ナデ 外面及び底部へら削り	
93-3	壺		2/5 完 5/5	(15.5) 6.7 13.7 15.8	— — — —	黒褐色—褐色 砂粒多 良好	口縁部横ナデ 外面及び底部へら削り	外面剝離著しい
93-4	壺		3/5 完 3/5	18.3 8.4 22.0 21.8	— — — —	暗褐色—暗褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ後胴部外面中央から上半へ斜位中央から下半へ斜位へら削り 内面ナデ 底部へら削り	
93-5	壺		2/5 完 3/5	(14.5) 7.1 22.0 18.7	— — — —	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 やや不良	口縁部横ナデ 底部へら削り	内外面とも剝離著しい
93-6	壺		完 完 完	24.2 8.0 35.4 30.2	— — — —	灰褐色—灰褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ 胴部上半ナデ下半縦位へらナデ 底部へら削り	胴部内外面下半剝離激しい
93-7	甌		完 完 完	29.0 8.3 27.3	— — —	暗褐色—暗褐色 小砂粒少 良好	口縁部口唇をつまんで横ナデ 胴部外面縦位へらナデ 内面ナデ下半一部へらナデあり	胴部内面上半スス付着
93-8	提瓶		— 完 完	— — (29.5)	— — —	灰色—灰色 砂粒少 堅緻 良好	内面ナデ 外面平行叩目 胴部端でフタをし、ナデ及びへら調整をする 把手を肩部に一对持つ	須恵器 歪み著しい 形態的には横瓶に同じ
93-9	土玉	1/2	高さ 径 孔径上 下	3.1 3.3 — —	— — — —	土製	重量21g	
93-10	砥石	ほぼ完	長さ 最大幅 最大厚 孔径上 下	6.0 2.1 2.1 0.5 0.5	— — — — —	穿孔は両方向あり 凝灰岩	重量84g	
93-11	砥石	破片	長さ 最大幅 最大厚	5.4 1.9 2.7	— — —	凝灰岩	重量43g	

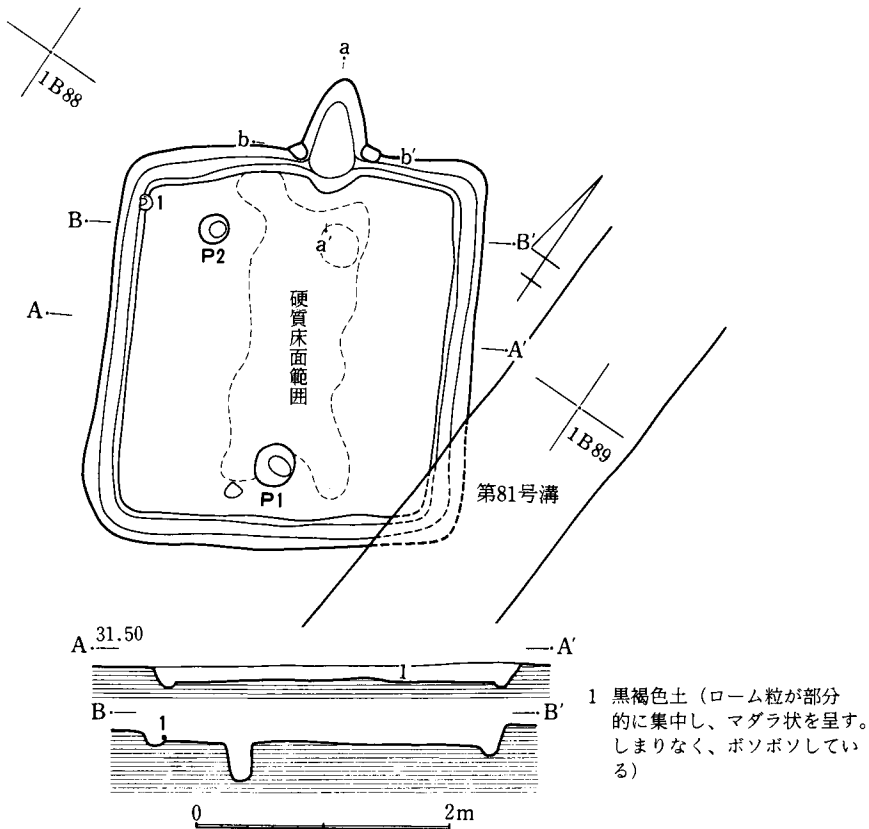
第94号住居跡 (第377~379図 図版126)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B 88他である。第81号溝と重複関係にあり、本跡が古い。

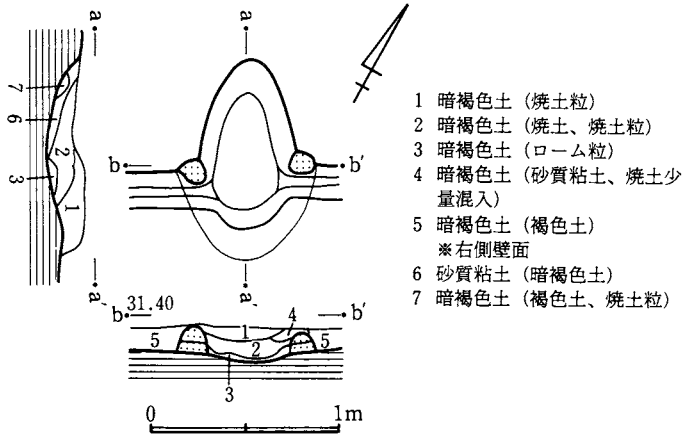
遺構 西壁2.85m、北壁2.75mあり、面積(9.07)m²でやや菱形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN25°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約10cmを計る。壁溝はカマド下をも含めて全周し、巾約15cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面は中央部分が硬質面であった。柱穴は2個検出され、P₁はカマドの対面に配置され径35×35cm、深さ30cmを計る。P₂は北西コーナーにあり径25×25cm、深さ30cmを計る。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約55cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用しているが、袖部の検出が極めて少なく、掘り込みとの関連をうかがわせる。火床部は全体的に浅く大きいが、赤色化はあまり認められない

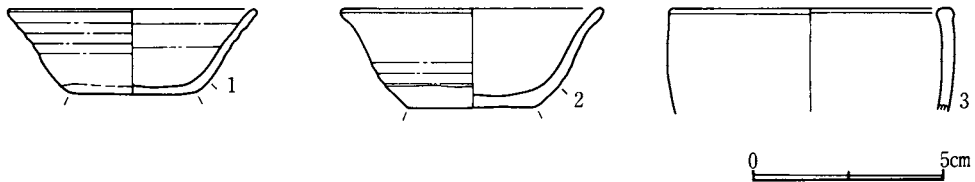
遺物出土状況 土層は1層のみであった。遺物は坏・鉢が出土している。1の坏は壁際床直からの出土である。



第377図 第94号住居跡実測図 (1/60)



第378図 第94号住居跡カマド実測図 (1/40)



第379図 第94号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第94号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体	法 量 cm ()は推定	口 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内一外	成形・調整	備考
94-1	坏		3/6 3/6 3/6		13.1 6.6 4.4	褐色-黒褐色 砂粒多	小 良好	体部下端手持ちへら削り 底部へら削り	
94-2	坏		3/6 3/6 3/6		14.0 6.8 5.1	褐色-黒褐色 砂粒多	小 やや不良	体部下端手持ちへら削り 底部へら削り	
94-3	鉢	口縁部のみ	3/6 — —		(14.7) — (5.4)	褐色-褐色 粒多	小砂 良好	内外面横ナデ	

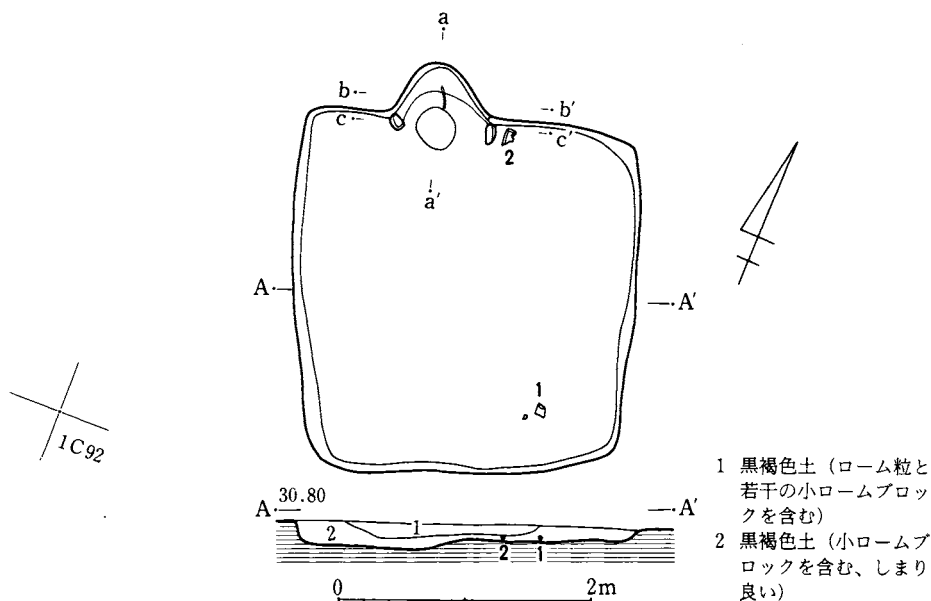
第97号住居跡 (第380～382図 図版126)

台地中央南側平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1C91他である。第96号溝と重複関係にあり、本跡が古い。

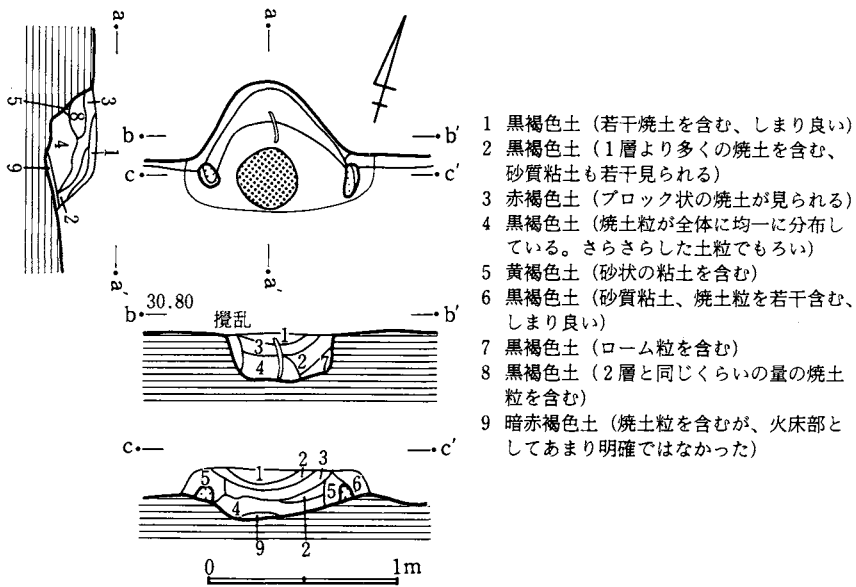
遺構 西壁2.70m、北壁2.60m、東壁2.35m、南壁2.30mあり、面積7.37㎡で北西コーナーがほぼ直角をなす不整形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央やや北寄りに位置しN17°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約10～15cmを計る。壁溝は無い。床面はやや凹凸がみられるが、これは掘り過ぎのためである。柱穴は無い。

カマド 北壁中央やや左寄りに位置し、遺存状態は不良である。壁への掘り込みは約35cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用しているが、袖部の検出はほんの少しであった。火床部は径30×30cmのやや浅い楕円状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。遺物は坏・甕が出土している。1の坏は床直から、2の甕はカマド右袖部付近床直から出土している。

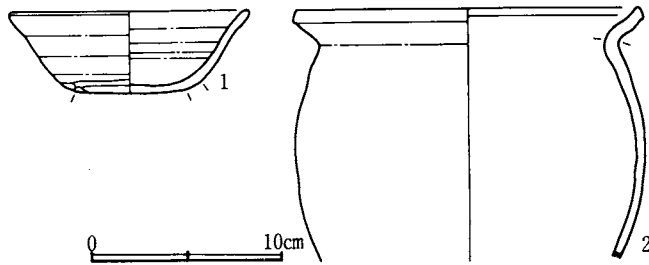


第380図 第97号住居跡実測図 (1/60)



- 1 黒褐色土 (若干焼土を含む、しまり良い)
- 2 黒褐色土 (1層より多くの焼土を含む、砂質粘土も若干見られる)
- 3 赤褐色土 (ブロック状の焼土が見られる)
- 4 黒褐色土 (焼土粒が全体に均一に分布している。さらさらした土粒でもろい)
- 5 黄褐色土 (砂状の粘土を含む)
- 6 黒褐色土 (砂質粘土、焼土粒を若干含む、しまり良い)
- 7 黒褐色土 (ローム粒を含む)
- 8 黒褐色土 (2層と同じくらいの量の焼土粒を含む)
- 9 暗赤褐色土 (焼土粒を含むが、火床部としてあまり明確ではなかった)

第381図 第97号住居跡カマド実測図 (1/40)



第382図 第97号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第97号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm 器高	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
97-1	坏	¾ 完 %		(12.5) 5.0 4.2		黒褐色-黒褐色 小砂粒多	良好	体部下端手持ちへら削り 底部へら削り	
97-2	甕	¾ - ¼		(18.0) - (13.0)		茶褐色-褐色 小砂粒多	やや不良	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部内外面ナデ	内外面剝離著しい

第98号住居跡 (第383～385図 図版127・162・177)

台地中央東側平坦部、調査区東側に位置し、グリッドは1 C 72他である。第99号住居跡とは重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 北西壁2.75m、北東壁2.50mあり、面積7.87m²で各コーナーがほぼ直角をなす長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁中央やや右寄りのN30°Eである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約10cmを計る。壁溝は北コーナーより南西壁中央までめぐり、巾約15cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は全面に凹凸があり、中央部がやや凹面状をなすが、第99号住居跡との重複部はしっかりした貼床が行なわれている。柱穴は検出されなかった。

カマド 北東壁中央やや右寄りに位置し、遺存状態は不良であった。壁への掘り込みは約65cmを計る。カマドの構築には砂質粘土が使用されていたことが土層内より砂質粘土の検出によって明らかであるが、袖部等は検出できなかった。火床部は第99号住居跡覆土上のため明確にはできなかったが、一応焼土が消滅する部分をもって火床部とした。火床部は全体的に浅い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状を呈する自然堆積でもあろうか。遺物は坏・甕・刀子が出土している。1の坏は西コーナー壁際から、7の刀子は北コーナー床直から、3・5の坏はカマド内出土であろう。

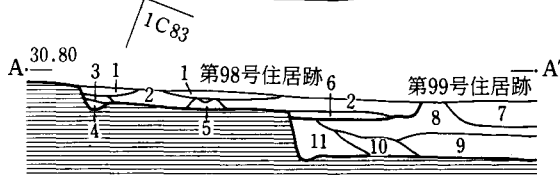
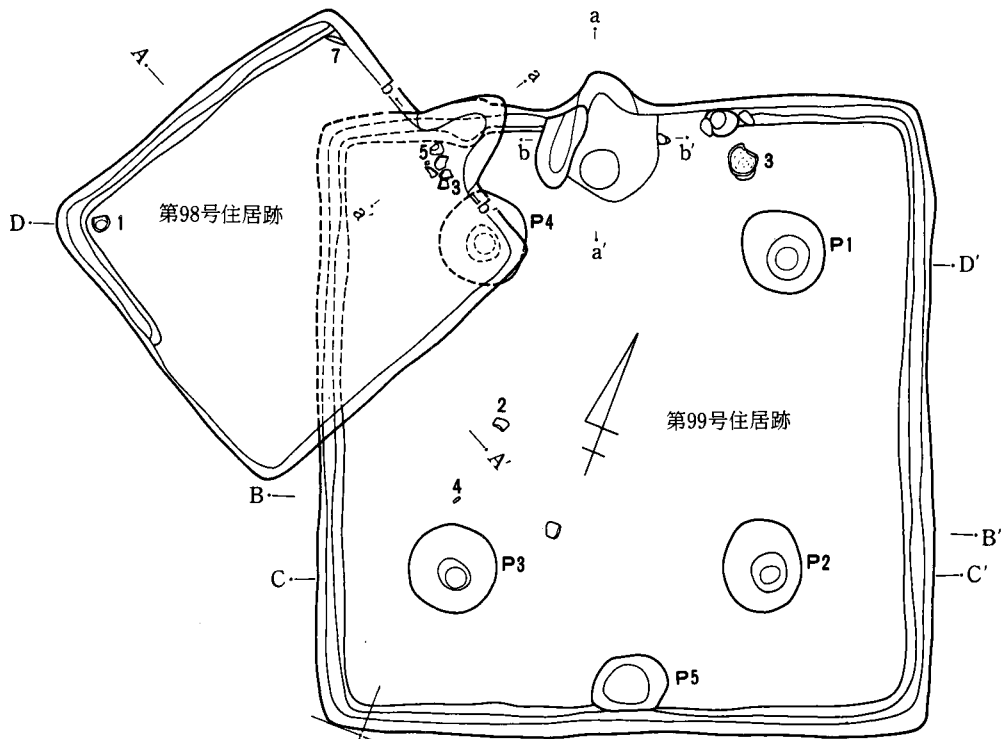
第99号住居跡 (第383・384・386図 図版162)

台地中央東側平坦部、調査区東側に位置し、グリッドは1 C 73他である。第98号住居跡と重複関係にあり、本跡が古い。

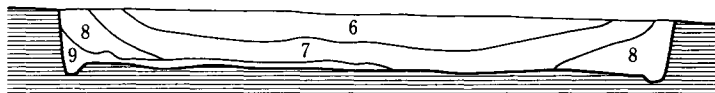
遺構 西壁4.65m、北壁4.65mあり、面積24.13m²で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN23°Wである。壁は四辺ともほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約45cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmをそれぞれ計る。床面は中央部が固く、周辺がやや軟弱を呈するが、全体的にほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁～P₄が対角線上に配置され、柱穴底面には径15cm前後の柱痕が残っている。P₅はカマドの対面に配置され、径60×45cm、深さ16cmを計る。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態はやや不良である。壁への掘り込みは約30cmであるが木根による攪乱があるために、明瞭では無い。カマドの構築には砂質粘土を使用しているが、右袖部は検出されなかった。火床部は径30×30cmありやや深い播鉢状を呈する。

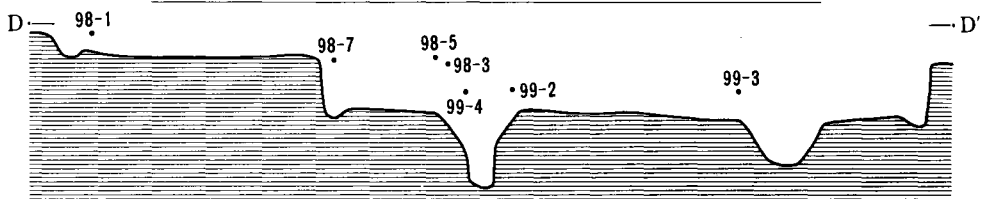
遺物出土状況 土層は典型的なレンズ状の自然堆積を示す。第98号住居跡との重複関係も明瞭であった。遺物は坏・鉢・甕・刀子が出土している。3の甕はカマド右袖部付近より、他は覆土中からの出土である。



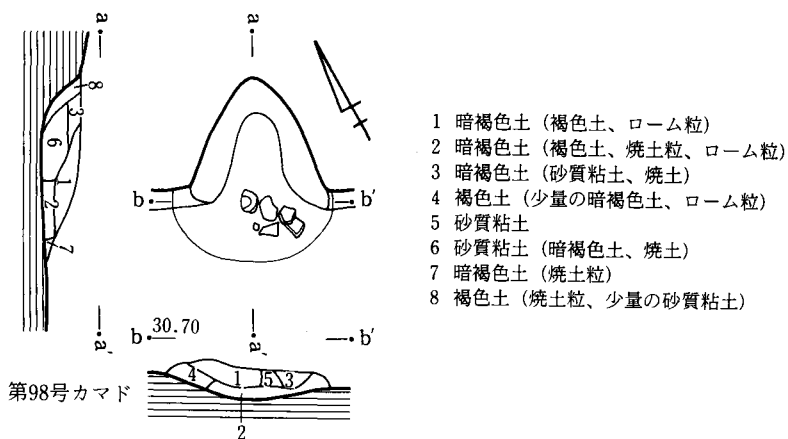
B. 30.80 第99号住居跡 —B'



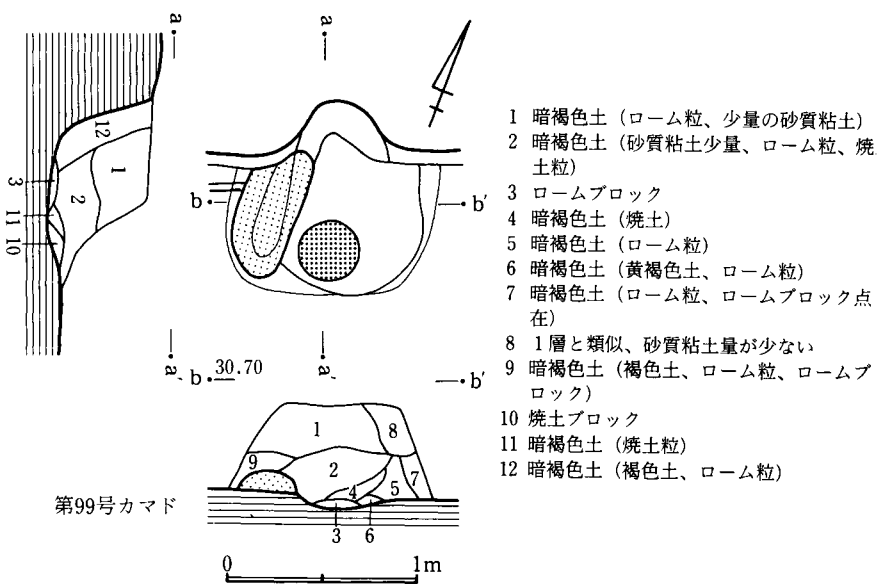
- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 (黒色土、ローム粒) | 7 暗褐色土 (黒色土、ローム粒) |
| 2 暗褐色土 (褐色土、ローム粒) | 8 暗褐色土 (ローム粒) |
| 3 暗褐色土 (褐色土、黄褐色土、ローム粒、ロームブロック) | 9 暗褐色土 (褐色土、黒色土、ローム粒 (粒子が大きい)) |
| 4 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒) | 10 褐色土 (ローム粒、ロームブロック点在) |
| 5 暗褐色土 (黄褐色土、ローム粒、炭化物) | 11 褐色土 (ローム粒、暗褐色土) |
| 6 褐色土 (ローム粒、砂質粘土粒) | |



第383図 第98・99号住居跡実測図 (1/60)

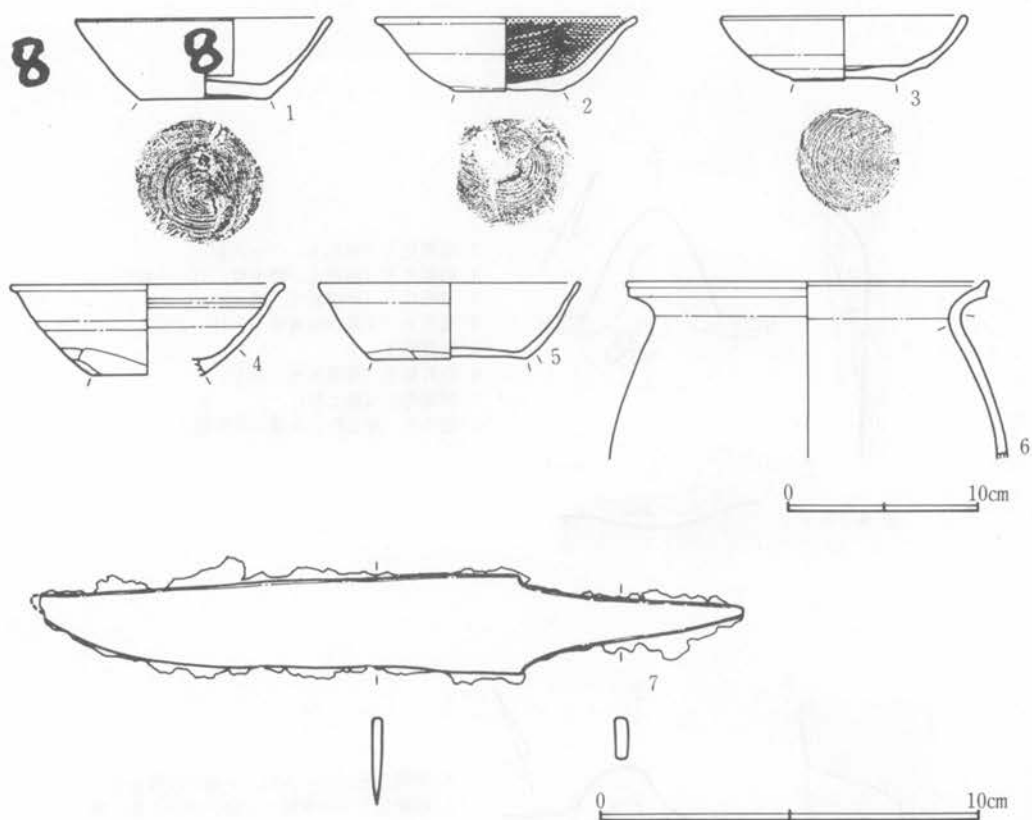


- 1 暗褐色土 (褐色土、ローム粒)
- 2 暗褐色土 (褐色土、焼土粒、ローム粒)
- 3 暗褐色土 (砂質粘土、焼土)
- 4 褐色土 (少量の暗褐色土、ローム粒)
- 5 砂質粘土
- 6 砂質粘土 (暗褐色土、焼土)
- 7 暗褐色土 (焼土粒)
- 8 褐色土 (焼土粒、少量の砂質粘土)



- 1 暗褐色土 (ローム粒、少量の砂質粘土)
- 2 暗褐色土 (砂質粘土少量、ローム粒、焼土粒)
- 3 ロームブロック
- 4 暗褐色土 (焼土)
- 5 暗褐色土 (ローム粒)
- 6 暗褐色土 (黄褐色土、ローム粒)
- 7 暗褐色土 (ローム粒、ロームブロック点在)
- 8 1層と類似、砂質粘土量が少ない
- 9 暗褐色土 (褐色土、ローム粒、ロームブロック)
- 10 焼土ブロック
- 11 暗褐色土 (焼土粒)
- 12 暗褐色土 (褐色土、ローム粒)

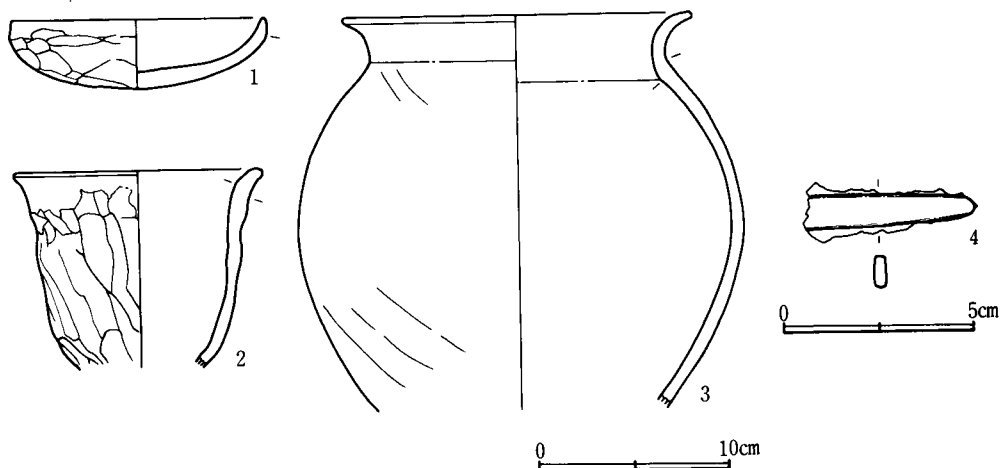
第384図 第98・99号住居跡カマド実測図 (1/40)



第385図 第98号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7 1/2)

第98号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	法量 器高	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
98-1	坏	3/4 完 3/4	(13.0)	6.8	4.2	明褐色-明褐色 砂粒やや少	良好	底部回転糸切り	墨書土器 「8」
98-2	坏	3/4 完 3/4	14.0	5.5	3.9	内黒-褐色 粒多 やや不良	小砂	内面丁寧なミガキ 底部回 転糸切り後一部周縁ヘラ削 り	内黒
98-3	坏	3/4 完 3/4	(12.8)	5.5	3.4	黒褐色-黒色 粒少	砂 良好	底部回転糸切り	外面スス付着
98-4	坏	3/4 — 3/4	(14.4)	(5.8)	4.7	黒褐色-黒褐色 小砂粒多	良好	内面ミガキ 体部下端手持 ちヘラ削り	
98-5	坏	3/4 完 3/4	(14.0)	8.1	4.0	褐色-褐色 粒多	小砂 良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り	
98-6	壺	口縁部の み	3/4 — —	(18.9)	— (9.3)	褐色-黒褐色 砂粒多	小 良好	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部内外面ナデ	
98-7	刀	子切先欠	全長	(18.6)		鉄製			



第386図 第99号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)

第99号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
99-1	坏(蓋)	3/4 — 3/4			13.2 — 3.7	黒色-褐色 粒多 良好	小砂	口縁部外面~内面ミガキ 外面ヘラ削り	口唇部上端内面摩耗 内側一部欠損あり
99-2	鉢	3/4 — 3/4			(12.7) — (10.4)	褐色-褐色 少 良好	砂粒	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位斜位ヘラ削り 内面ナデ	
99-3	甕	完 — 3/4			18.5 — (20.8)	褐色-褐色 粒多 やや不良	小砂	口縁部横ナデ 剝離激しく 調整不明	内外面剝離著しい
99-4	刀子	基部のみ		長さ	(4.6)	鉄製			

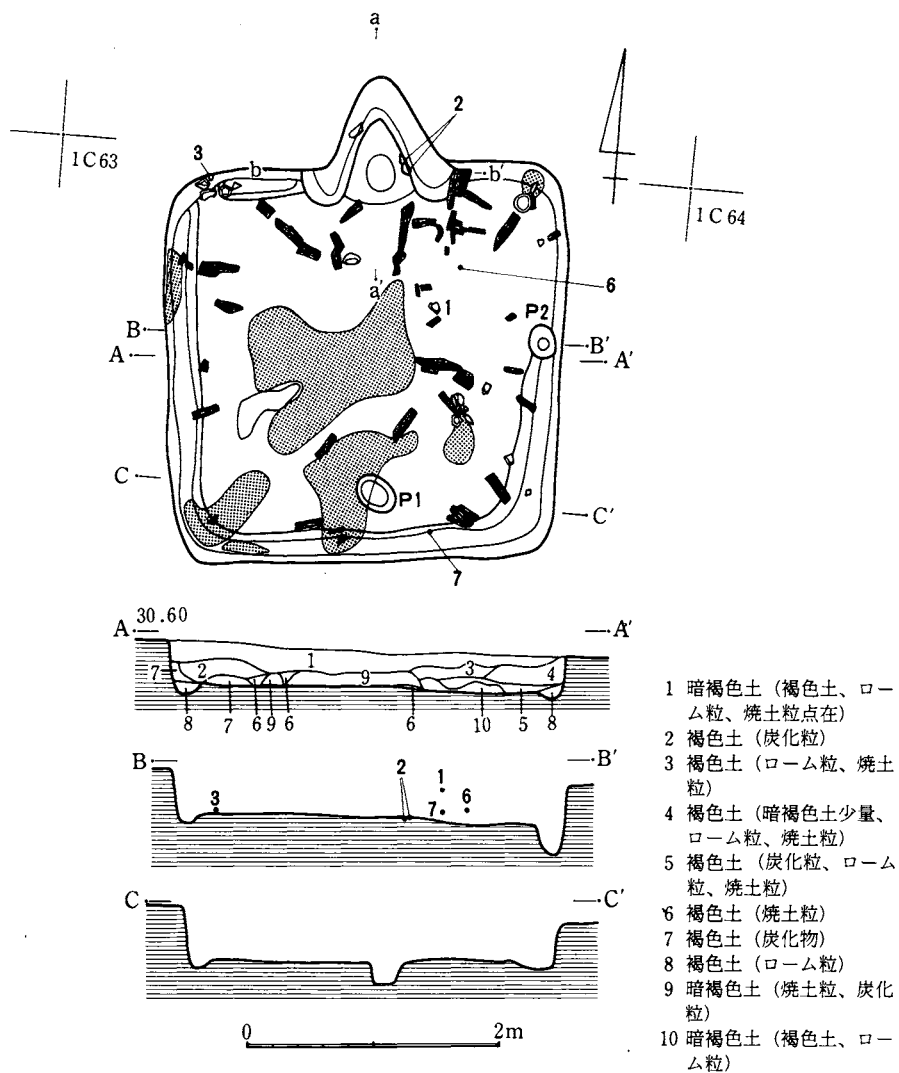
第100号住居跡 (第387~389図 図版128・159・161・162・177)

台地中央東側平坦部、調査区東側に位置し、グリッドは1 C 63である。第122号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

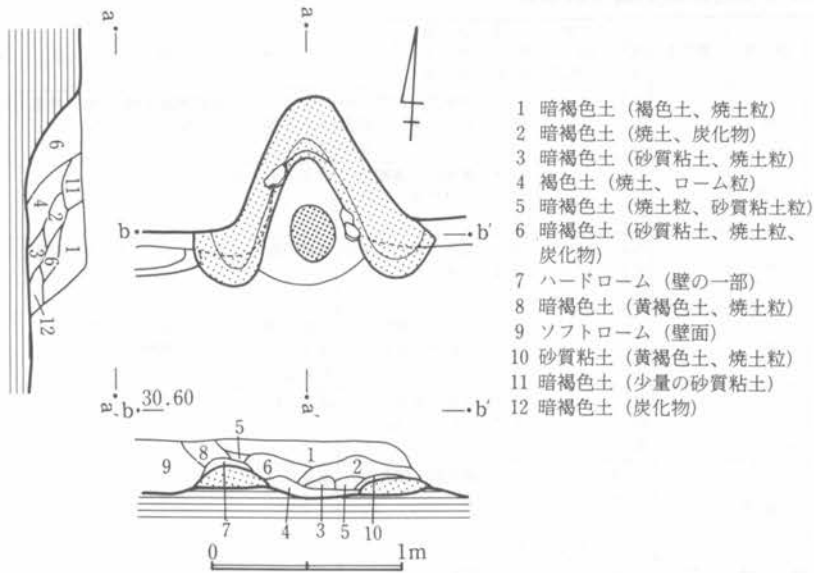
遺構 西壁2.90m、北壁2.95mあり、面積9.84m²で北西・南西コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN 5°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約30cmを計る。壁溝は北西コーナー、カマド右袖部から東壁中央までを除いてめぐる。巾約15cm、深さ約5cmあり一定はしない。床面は全体的に固く、周辺部がやや低いが、全体的には平坦である。柱穴は2個検出され、P₁はカマドの対面に配置され径35×25cm、深さ16cm、P₂は径25×20、深さ23cmある。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は天井部の一部と両袖部があり良好である。壁への掘り込みは約70cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30×25cmあり浅い挿鉢状を呈する。

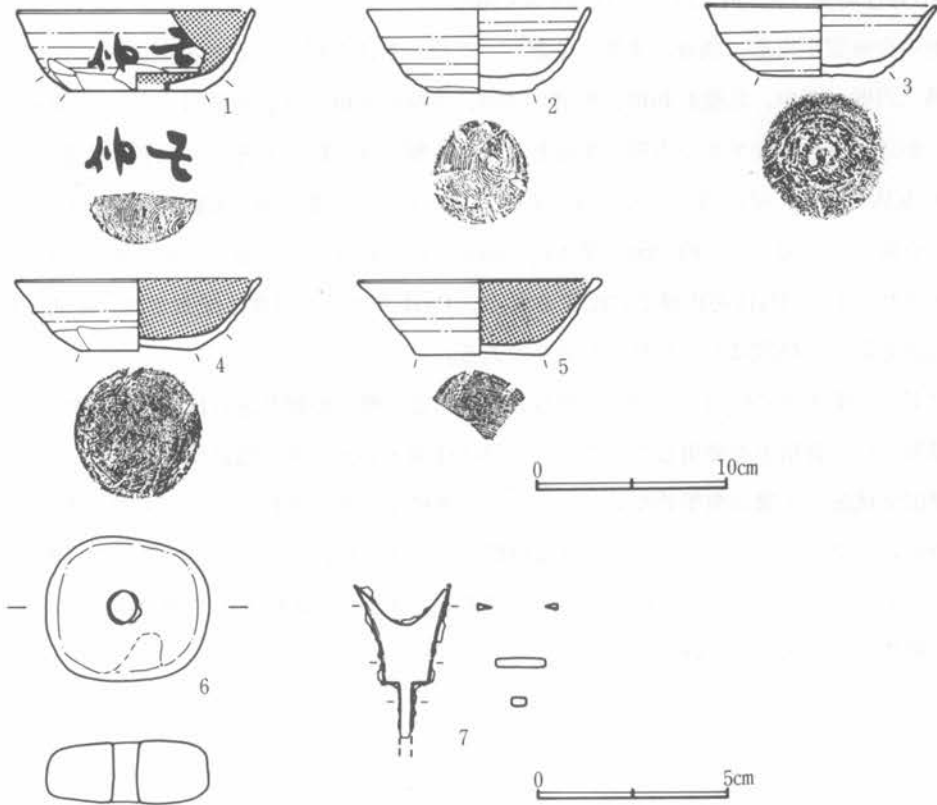
遺物出土状況 土層は焼土・炭化物等が多量に各層に含まれ、また床直からも多量に出土していることから本跡は火災住居跡である。特に炭化材は床面中央に向って倒れており、垂木の一部と思われる。遺物は坏・紡錘車・鉄鏃が出土している。2の坏はカマド内より、3の坏は北西コーナー壁際床直から、1の坏・6の紡錘車・7の鉄鏃は覆土中から、それぞれ出土している。



第387図 第100号住居跡実測図 (1/60)



第388図 第100号住居跡カマド実測図 (1/40)



第389図 第100号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6・7 1/2)

第100号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm	口 底 径 器 高	色 調 内-外 胎 土 焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
100-1	坏		% % %	(12.0) (6.9) 4.3	暗褐色-黒色 砂 粒やや多 微細雲 母片やや少 良好	内面ミガキ 体部下端手持 ちヘラ削り 底部回転系切 り	内黒 墨書土器 「佛」 不明	
100-2	坏		% 完 %	11.8 5.5 4.3	黄褐色-黄褐色 小砂粒多 良好	底部回転系切り		
100-3	坏		% 完 %	12.3 6.3 3.7	褐色-褐色 小砂 粒多 やや不良	底部回転ヘラ切り	内面剝離著しい	
100-4	坏		% % %	(12.8) (6.0) 3.7	内黒-黒褐色 小 砂粒多 良好	内面丁寧なミガキ 体部下 端手持ちヘラ削り 底部回 転系切り	内黒	
100-5	坏		完 完 完	12.9 6.7 3.9	黒色-黒褐色 小 砂粒多 良好	底部回転系切り	内黒	
100-6	紡錘車	完	高さ 径 孔径上 下	1.6 4.2×3.8 0.7×0.7 0.7×0.7	凝灰岩 穿孔両方 向	重量37.3g		
100-7	鉄 鏃	一部欠	長さ	(3.8)	鉄製			

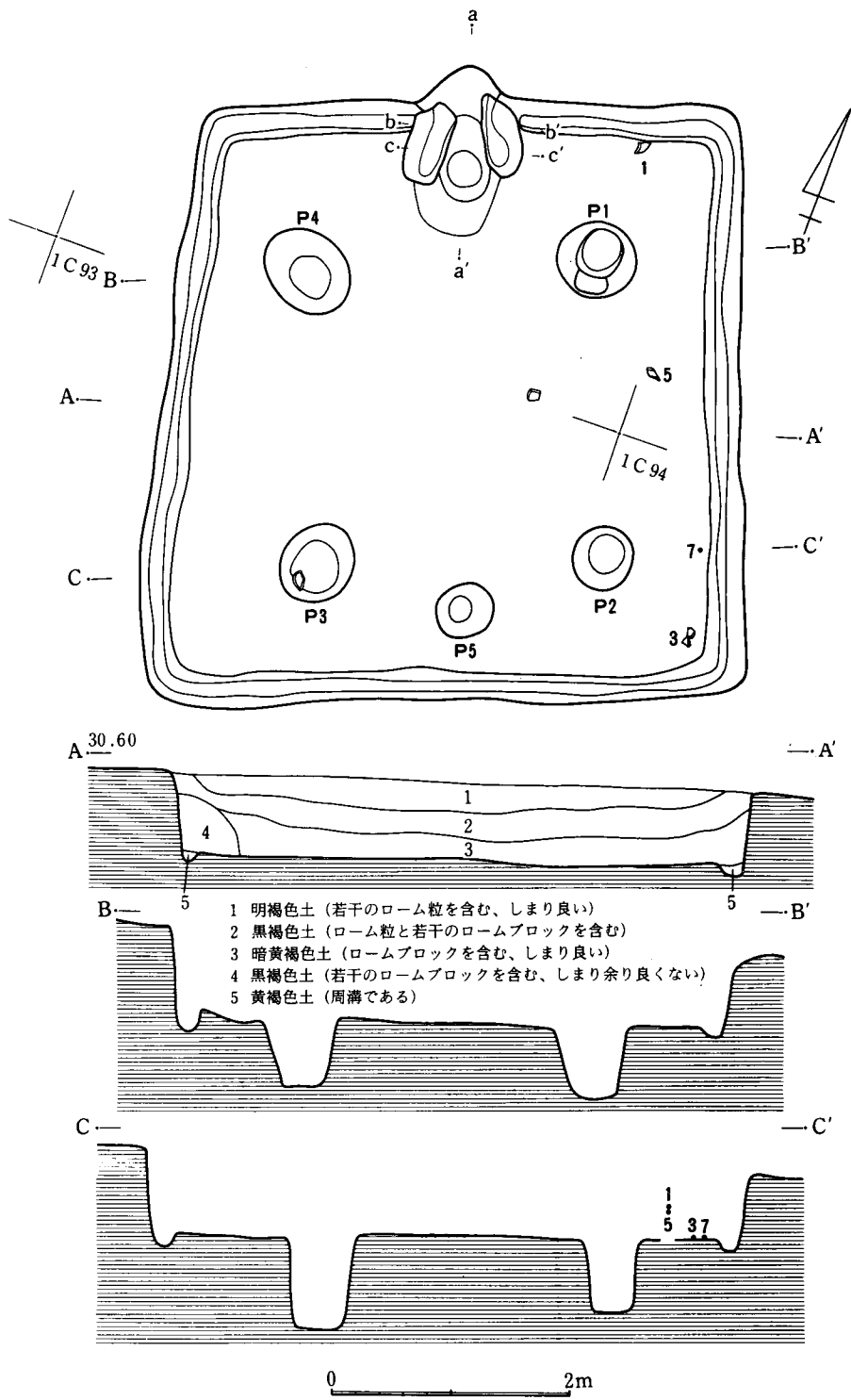
第102号住居跡 (第390~392図 図版128・162)

台地中央東側平坦部、調査区東側に位置し、グリッドは1 C94他である。

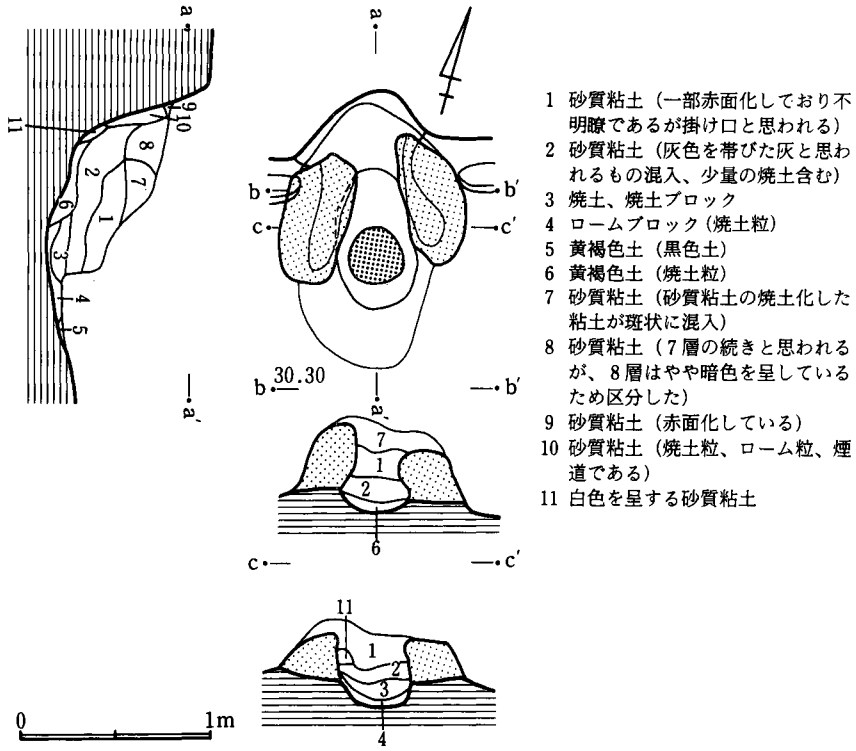
遺構 西壁4.85m、北壁4.40m、東壁4.70m、南壁4.90mあり、面積24.12m²で北東・南東コーナーがほぼ直角をなすやや方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN19°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約10cmをそれぞれ計る。床面は平坦である。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置される。P₅はカマドの対面に配置され、径50×40cm、深さ41cmを計る。柱穴はしっかりした造りである。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約35cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30×30cmの深い挿鉢状を呈する。

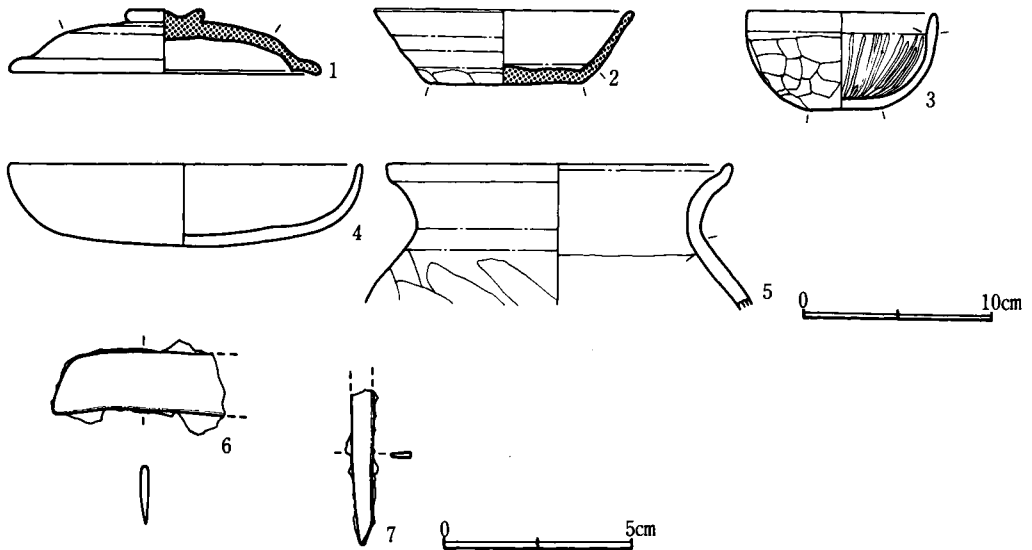
遺物出土状況 土層は典型的なレンズ状の自然堆積を示す。遺物は蓋・坏・皿・甕・鎌・不明鉄製品の一部が出土している。1の坏は壁際から、3の坏は床直から、7の不明鉄製品は床直からの出土であり、他は覆土中からのものである。また、その他として覆土中より不明鉄製品の小破片が2点出土している。



第390図 第102号住居跡実測図 (1/60)



第391図 第102号住居跡カマド実測図 (1/40)



第392図 第102号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6・7 1/2)

第102号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm 底 径 器 高	口 径 底 径 器 高	色 調 内 外 胎 土 焼 成	成 形 ・ 調 整	備 考
102-1	蓋		% - %		16.5 - 3.3 13.3	灰白色-灰白色 白色砂粒多 良好	頂部回転ヘラ削り 偏平鈕 がつく	須恵器
102-2	坏		% 完 %		13.8 8.3 3.8	灰色-灰色 小砂 粒多 良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	須恵器
102-3	坏		% 完 %		(10.1) 3.8 5.0	褐色-褐色 小砂 粒多 良好	内面ミガキ 口縁部横ナデ 外面ヘラ削り 底部ヘラ 削り後ミガキ	
102-4	盤		完 完 完		18.7 13.4 4.2	褐色-褐色 精選 やや不良	内面丁寧なミガキ 外面ヘ ラ削り後ミガキ	
102-5	甕	口縁部の み	% - -		18.4 - (7.5)	黄褐色-黄褐色 小砂粒多 やや不 良	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面ヘラ削り後ナ デ	
102-6	鎌	一 部		長さ	(8.0)	鉄製		
102-7	不明鉄製 品	一 部		長さ	(8.1)	鉄製		

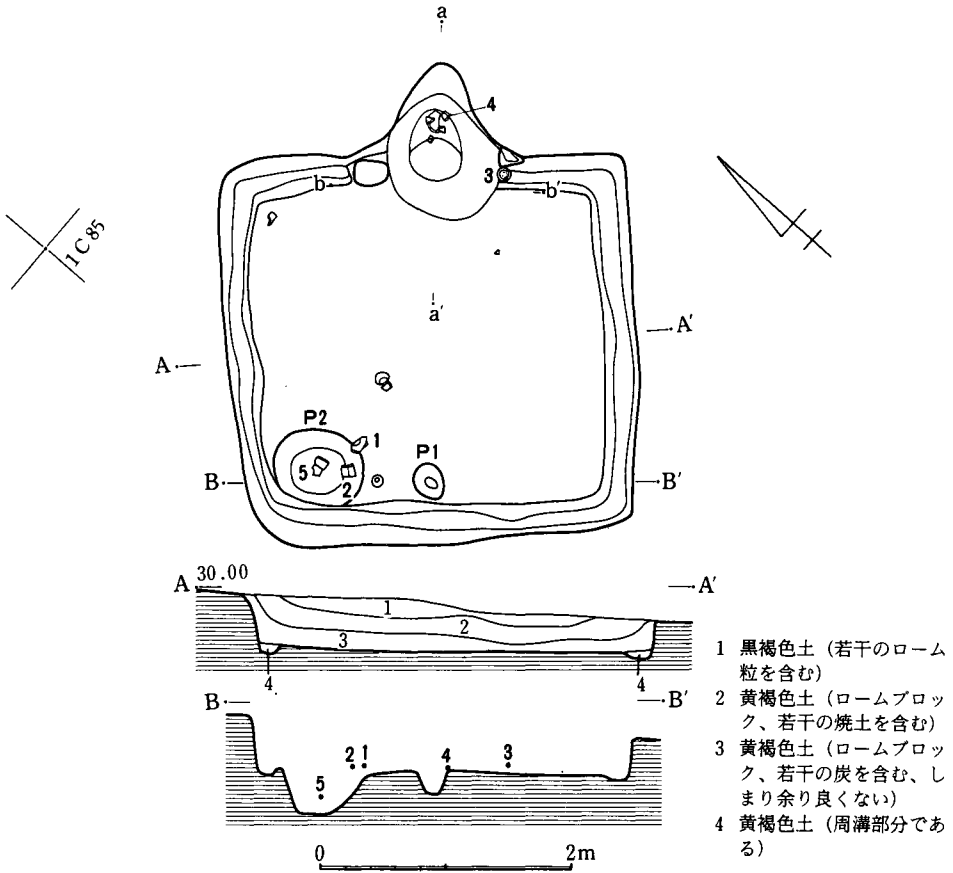
第103号住居跡 (第393~395図 図版129・159・162・176)

台地東側緩傾斜面、調査区東側に位置し、グリッドは1C85他である。

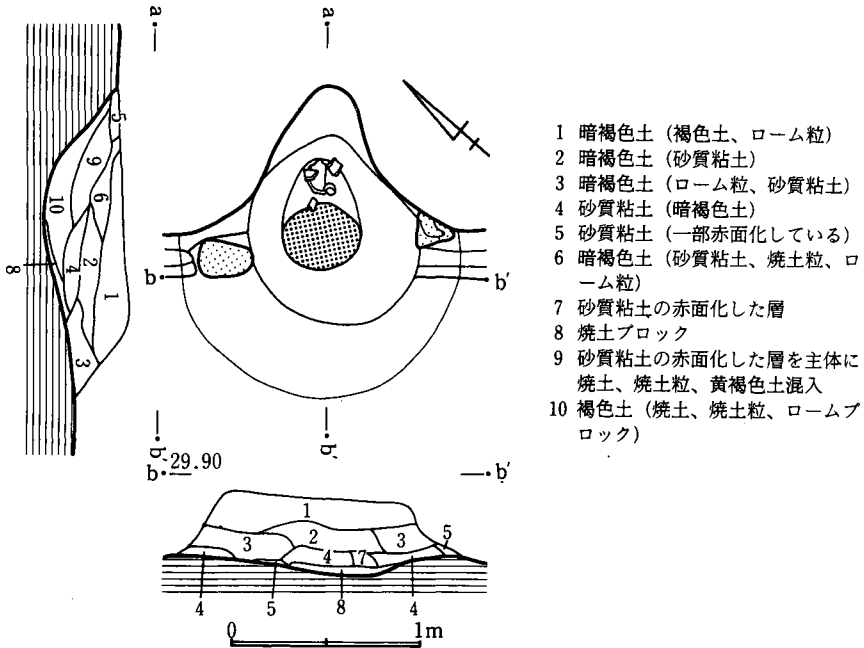
遺構 北東壁3.15m、南東壁2.80mあり、面積10.04m²で、東・南コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁中央に位置しN50°Eである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より北コーナーで約35cm、南コーナーで約25cmを計る。壁溝は左袖部下を除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面は固くしまっており、平坦である。柱穴は1個検出され径25×25cm、深さ17cmを計り、カマドの対面に配置されている。P₂は貯蔵穴で、径70×55cmの楕円の平面形を呈し、深さ32cmを計る。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、床面もほぼ平坦である。

カマド 北東壁中央に位置し、遺存状態は袖部が不良である。壁への掘り込みは約80cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用しているが、袖部の検出は僅かであった。火床部は掘り込み面にあり径40×35cmの浅い播鉢状を呈する。

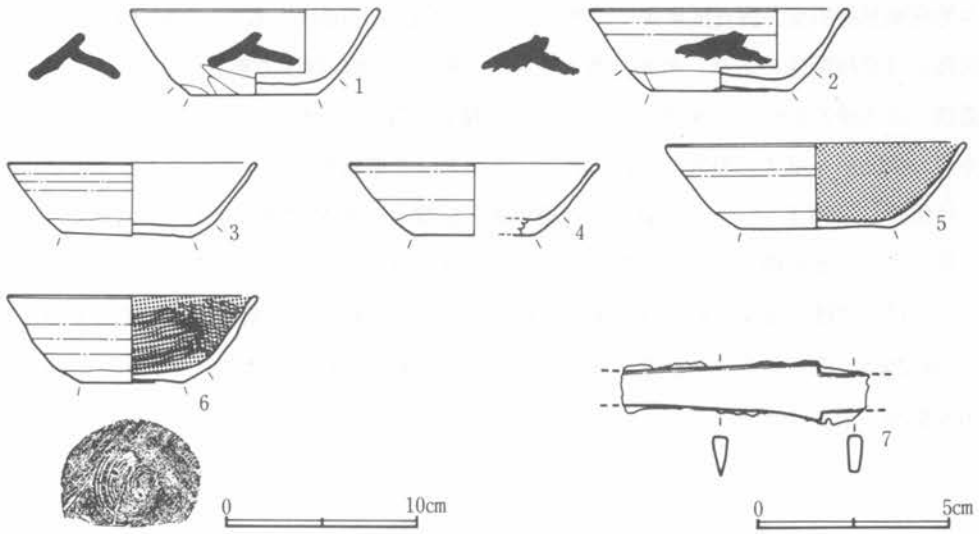
遺物出土状況 土層は典型的なレンズ状の自然堆積を示す。1・2は坏は貯蔵穴の上面から3の坏は右袖付近床面から、4の坏はカマド内から出土している。5の坏は貯蔵穴内からの出土であり、他は覆土中のものである。1・2の坏は墨書土器で「人」が書かれている。



第393図 第103号住居跡実測図 (1/60)



第394図 第103号住居跡カマド実測図 (1/40)



第395図 第103号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7 1/2)

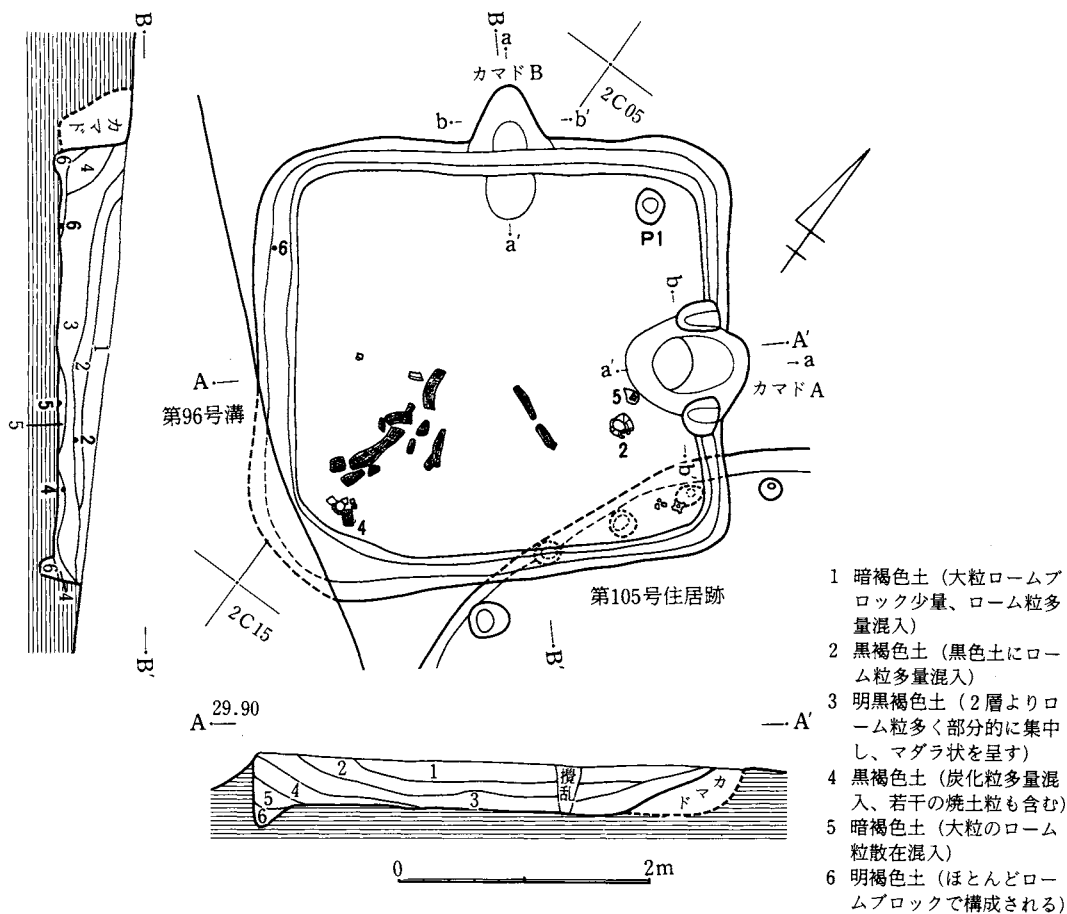
第103号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	法量 cm 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
103-1	坏	3/4完	(12.9)	6.8 4.5	明褐色 少	砂粒やや 良好	体部下端手持ちへら削り 底部直方向手持ちへら削り	墨書土器 「人」
103-2	坏	3/4完	13.2	7.2 4.2	明褐色 少	砂粒やや 良好	体部下端手持ちへら削り 底部回転糸切り後周縁手持ちへら削り	体部に「人」の墨書あり
103-3	坏	完	13.0	6.7 4.0	赤褐色-赤褐色 小砂粒多	やや不 良	体部下端回転へら削り 底部回転へら削り	外面スス付着
103-4	坏	1/4完	(13.2)	(6.4) 3.8	褐色-褐色 粒	小砂 良好	体部下端回転へら削り 底部回転へら削り	
103-5	坏	3/4完	(15.7)	7.9 4.4	黒色-褐色 粒多	小砂 良好	内面丁寧なミガキ 体部下端回転へら削り 底部回転糸切り後回転へら削り	内黒
103-6	坏	3/4完	13.2	5.4 4.4	黒色-黒褐色 砂粒多	小 良好	内面丁寧なミガキ 体部下端手持ちへら削り 底部一方方向へら削り	内黒
103-7	刀子	両端欠損	長さ	(6.5)	鉄製			

第104号住居跡 (第396~398図 図版129・159・161・176・177)

台地南東部緩斜面、調査区東側に位置し、グリッドは2C05他である。第96B号溝と第105号住居跡とは重複関係にあり、第96号溝より古く、第105号住居跡より新しい。

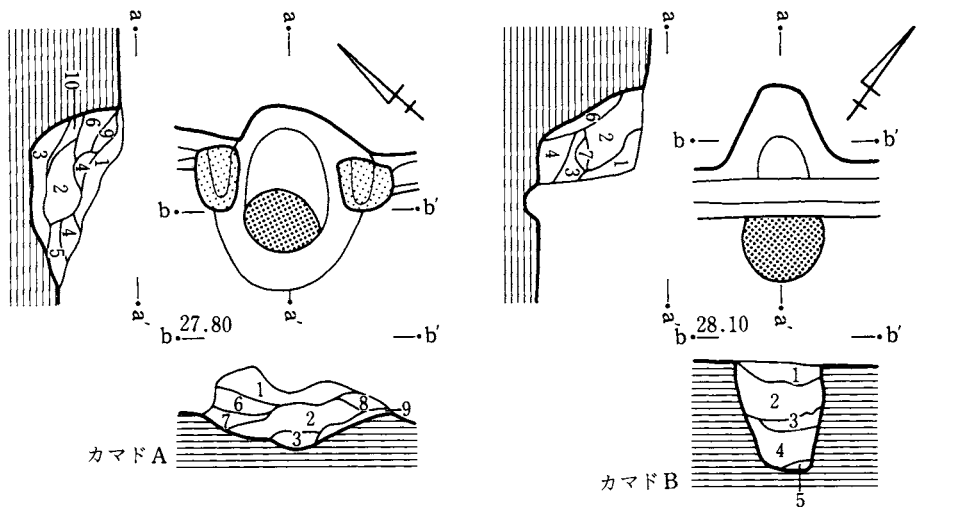
遺構 北西壁3.40m、北東壁2.95mあり、面積12.85m²で、西・北コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは2個検出され、カマドAは北東壁中央右寄りに位置しN55°Eで、カマドBは北西壁中央に位置しN38°Wである。カマドAが新しく、カマドBが古いことが検出状況より判明している。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がるが、北コーナー付近で確認面より約58cm、南側で約20cmをそれぞれ計る。壁溝は全周するものと思われ、巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は1個北コーナーで検出され、径20×25cm、深さは浅い。



第396図 第104号住居跡実測図 (1/60)

カマド カマドAは北東壁中央に位置し、袖部の遺存は不良である。壁への掘り込みは約20cmである。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径40×30cmのやや深い楕円状を呈する。カマドBは北西壁中央に位置し、カマドの作り替えによって破壊されていた。破壊された後で壁溝がめぐっている。壁への掘り込みは約40cmを計る。カマドの構築にはAと同様に砂質粘土を使用していたことが土層より確認されている。火床部は壁溝によって切られているが径40cm前後の楕円状を呈していたものと思われる。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。床面上には多量の焼土・炭化物が散乱していることから火災住居と思われる。特に炭化材は床面中央に向って倒れており垂木の一部であろうか。遺物は坏・玉が出土している。2・5の坏はカマド前から、4は南コーナー床直上から、6の玉は壁際床直上からの出土である。墨書土器もあり、「×」「俣」がある。また、覆土中より碗形滓の小破片とスラグ1点が出土している。

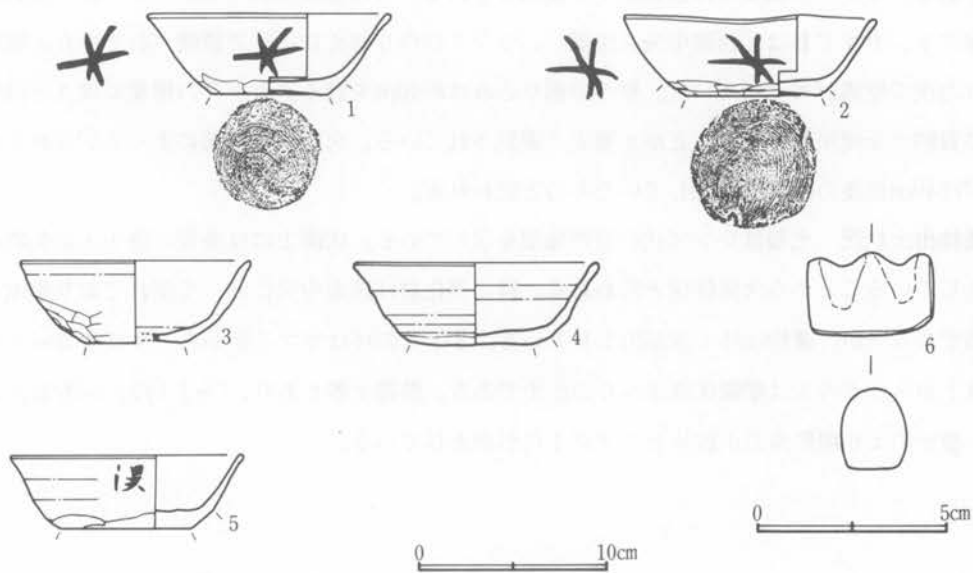


- 1 暗褐色土 (砂質粘土)
- 2 暗褐色土 (砂質粘土、焼土粒、少量の焼土)
- 3 暗褐色土 (焼土、焼土ブロック)
- 4 砂質粘土 (焼土、暗褐色土)
- 5 暗褐色土 (焼土粒、少量の砂質粘土)
- 6 暗褐色土 (砂質粘土、焼土、焼土粒)
- 7 暗褐色土 (砂質粘土、焼土粒、炭化物)
- 8 砂質粘土 (焼土)
- 9 暗褐色土 (褐色土、砂質粘土)
- 10 黄褐色土 (ローム粒、砂質粘土)

- 1 砂質粘土 (暗褐色土)
- 2 砂質粘土 (ほぼ純粋)
- 3 砂質粘土 (少量の焼土混入)
- 4 砂質粘土 (暗褐色土、焼土粒)
- 5 ロームブロック
- 6 暗褐色土 (焼土、焼土粒) 煙道である。
- 7 砂質粘土 (焼土粒)

0 1m

第397図 第104号住居跡カマド実測図 (1/40)



第398図 第104号住居跡出土遺物実測図 (1~6 1/4、7 1/2)

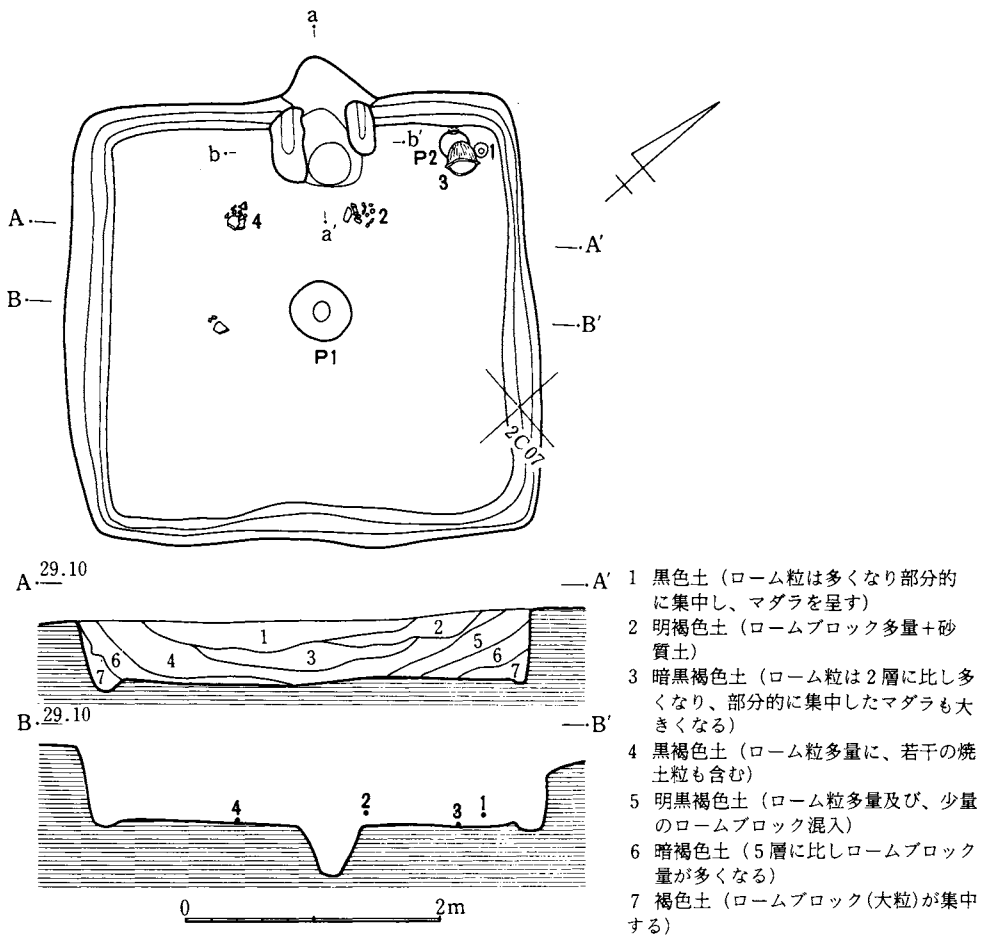
第104号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm	口 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
104-1	坏	1/2 完 1/2			12.6 6.2 4.2	明褐色 砂粒やや 多 良好		体部下端手持ちへら削り 底部回転糸切り	体部に墨書「×」あり
104-2	坏	1/2 完 1/2			13.2 6.9 4.3	明褐色 砂粒やや 少 良好		体部下端一部手持ちへら削り 底部回転糸切り	体部に墨書「×」あり
104-3	坏	1/2 1/2 1/2		(12.2) (5.0)		黒褐色-黒褐色 小砂粒多 やや不良		体部下端手持ちへら削り 底部へら削り	
104-4	坏	1/2 1/2 1/2			13.1 6.5 4.3	黒褐色-黒褐色 含金雲母片 小砂粒少 やや不良		体部下端回転へら削り 底部回転へら削り	
104-5	坏	1/2 完 1/2		(12.3)		明赤褐色 砂粒や や少 良好		体部下端手持ちへら削り 底部へら削り	墨書土器 「俣」
104-6	玉	完	高さ 長さ 幅		2.1 3.3 1.7	石英		重量21.5g	

第106号住居跡 (第399~401図 図版130)

台地東南側緩傾斜面、調査区東側に位置し、グリッドは2C06他である。

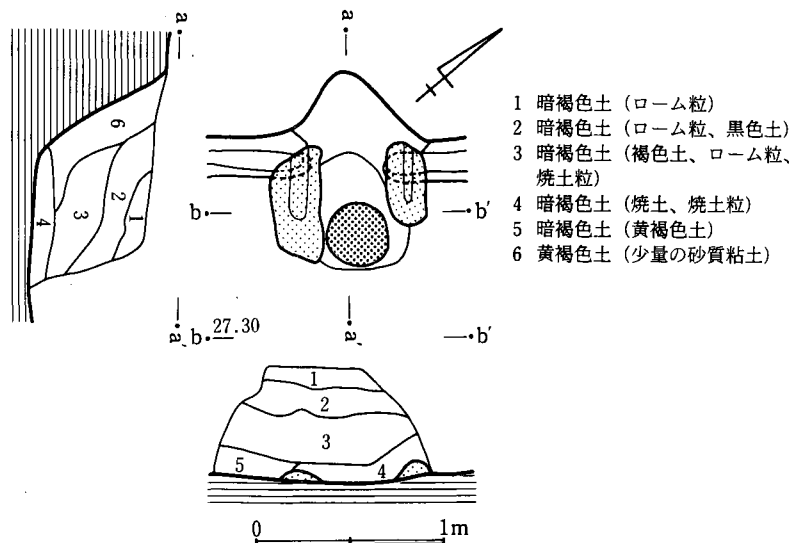
遺構 南西壁3.20m、北西壁3.25m、北東壁3.30m、南東壁3.40mあり、面積12.52m²で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央やや右寄りに位置しN47°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約50cmを計る。壁溝はカマド袖部下をもめぐり全周している。壁溝は巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面は多少の凹凸が認められるもののほとんど平坦である。柱穴は2個検出され、P₁は床面中央に配置され径50×45cm、深さ38cm、P₂は北コーナーに配置され径20×20cm、深さ26cmを計り柱穴の底が北西壁方向に傾斜している。



第399図 第106号住居跡実測図 (1/60)

カマド 北西壁中央やや右寄りに位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約30cmを計る。カマドの構築には非常に粘性の強い灰色を帯びた砂質粘土を使用している。火床部は径30×30cmの非常に浅い播鉢状を呈する。

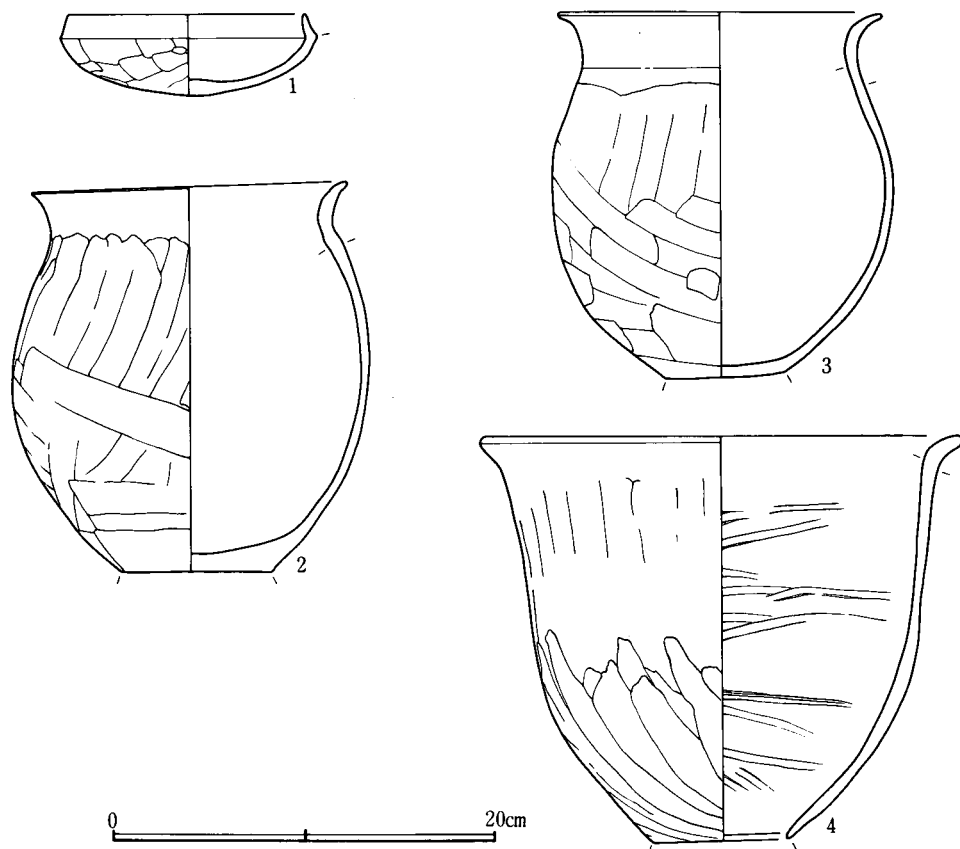
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は坏・甕・甑が出土している。1の坏と3の甕は北コーナー床直に、2の甕と4の甑は床直からの出土である。この4個体ともに完形品であり、一括出土の好資料である。



第400図 第106号住居跡カマド実測図 (1/40)

第106号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
106-1	坏	完 完	蓋受径	12.2 — 4.3 (13.5)	12.2 — 4.3 (13.5)	黒褐色-黒褐色 小砂粒多	良好	口縁部外面~内面ミガキ 体部外面へラ削り後ナデ	口唇部摩耗
106-2	甕	完 完 %		16.5 7.8 20.1	16.5 7.8 20.1	褐色-黒褐色 砂粒多	良好	口縁部横ナデ後胴部外面上 半縦位下半斜位へラ削り 底部へラ削り 内面ナデ	内面剝離著しい
106-3	甕	完 完 完		16.9 6.2 19.2	16.9 6.2 19.2	黒褐色-黒褐色 小砂粒多	良好	口縁部横ナデ後胴部外面上 半縦位下半斜位へラ削り 底部へラ削り 内面ナデ	内面スス付着
106-4	甑	% 完 完		25.4 7.2 21.0	25.4 7.2 21.0	褐色-褐色 粒多	良好	口縁部横ナデ後胴部外面上 半縦位下半斜位へラ削り後 ナデ 内面へラ横ナデ	

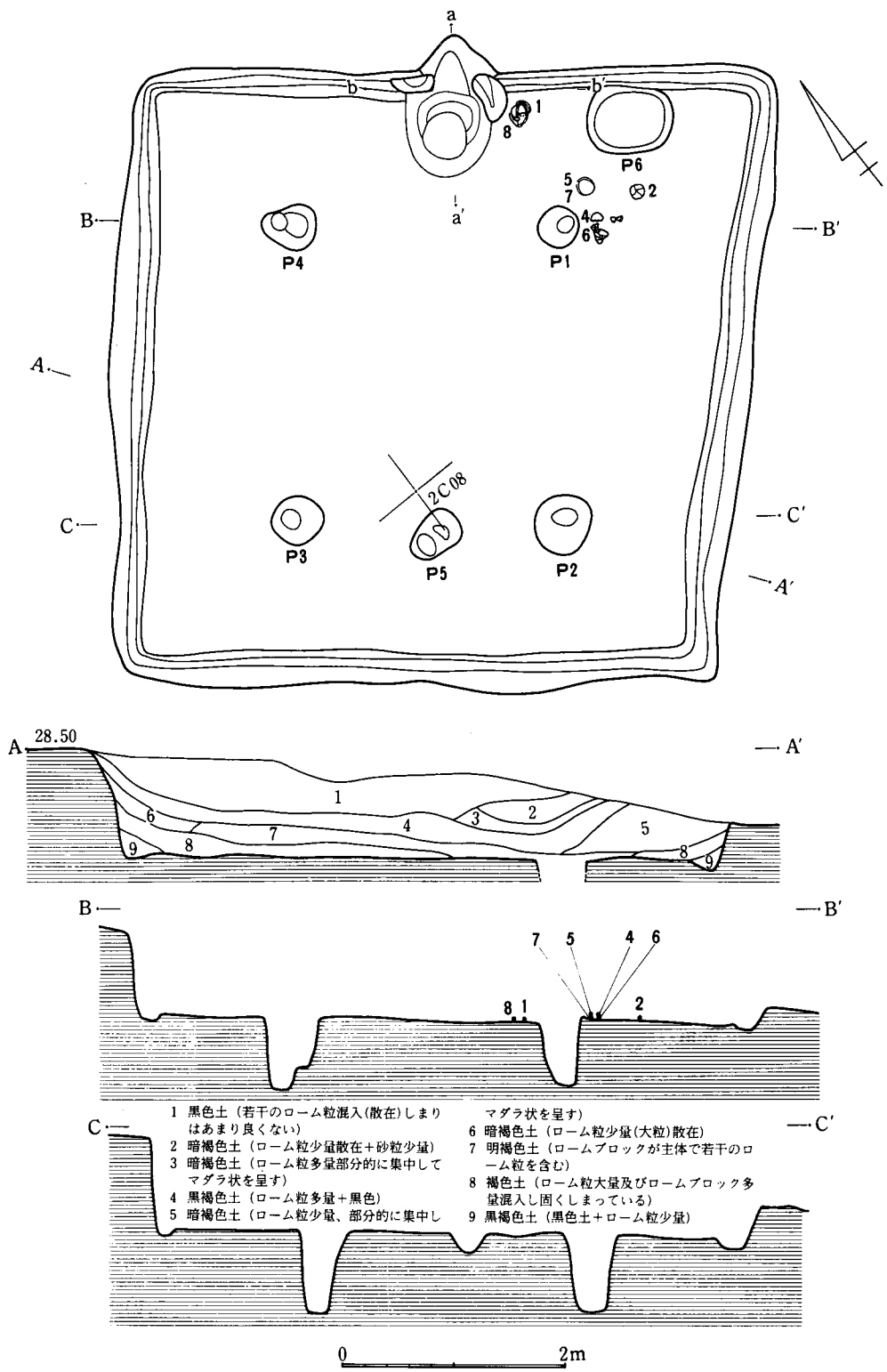


第401図 第106号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第108号住居跡 (第402~404図 図版131)

台地東側緩斜面、調査区東側に位置し、グリッドは2C08他である。

遺構 北西壁5.15m、北東壁5.60m、南東壁5.30m、南西壁5.15mあり、面積30.48m²で東コーナーを除く3コーナーが直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁中央に位置しN41°Eである。壁は北コーナー付近で確認面より66cm、南コーナーで確認面より30cmをそれぞれ計り緩傾斜状況を表わす。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5~10cmである。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個検出されP₁~P₄は対角線上に配置され、P₅はカマドの対面に配置され中段をもっている。P₆は貯蔵穴である。長軸76cm、短軸60cmあり、隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、33cmを計る。床面はほぼ平坦である。

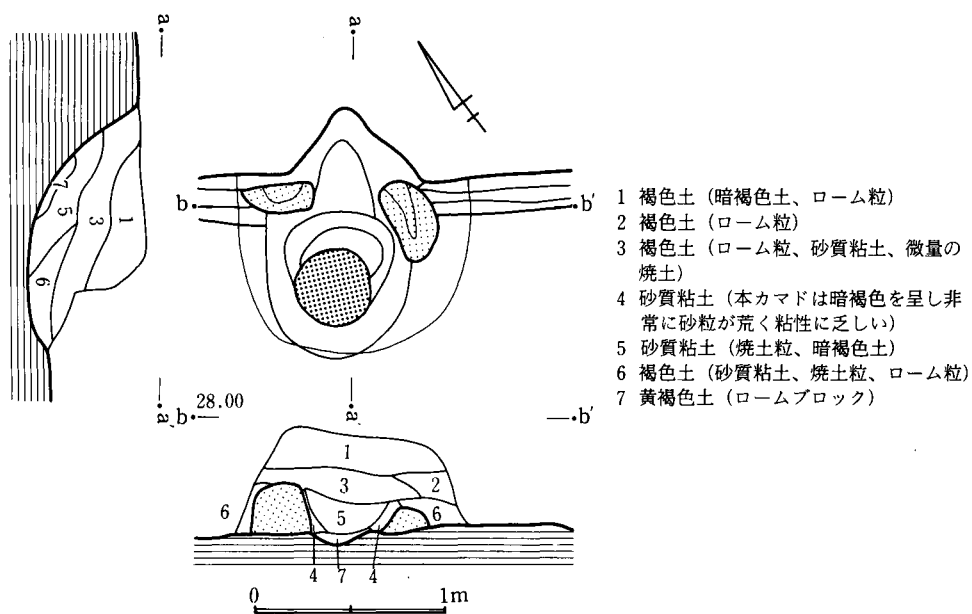


- | | |
|------------------------------------|--|
| 1 黒色土 (若干のローム粒混入(散在)し
はあまり良くない) | マダラ状を呈す |
| 2 暗褐色土 (ローム粒少量散在+砂粒少量) | 6 暗褐色土 (ローム粒少量(大粒)散在) |
| 3 暗褐色土 (ローム粒多量部分的に集中して
マダラ状を呈す) | 7 明褐色土 (ロームブロックが主体で若干のロ
ーム粒を含む) |
| 4 黒褐色土 (ローム粒多量+黒色) | 8 褐色土 (ローム粒大量及びロームブロック多
量混入し固くしまっている) |
| 5 暗褐色土 (ローム粒少量、部分的に集中し | 9 黒褐色土 (黒色土+ローム粒少量) |

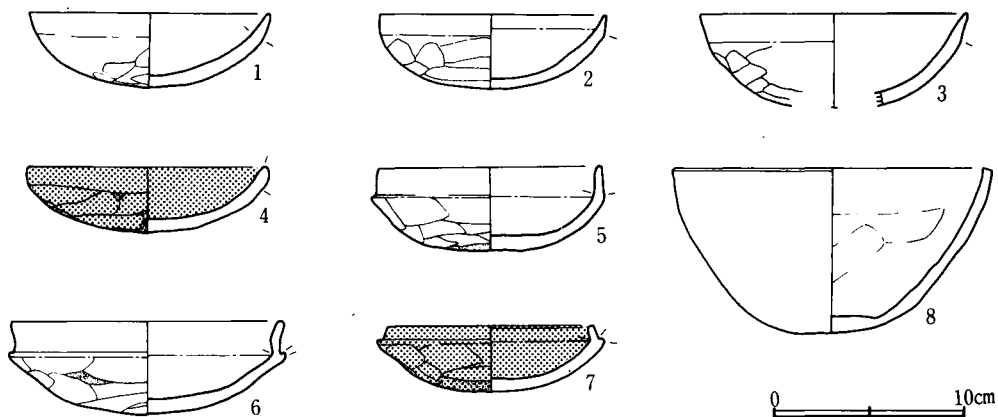
第402図 第108号住居跡実測図 (1/60)

カマド カマドは北東壁中央に位置し、遺存状態は良好であったが、左袖部の検出は一部にとどまった。壁への掘り込みは約35cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用していた。火床部の径は40×40cmのやや深い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示していた。遺物は坏・鉢が出土している。1・2・4～7の坏は、カマド右袖部付近から貯蔵穴付近の床直上からの出土であり、そのほとんどが完形品である。坏の口唇部の摩耗状況から蓋・身の使用例が判明している。8の鉢もカマド右袖部脇の床直出土である。



第403図 第108号住居跡カマド実測図 (1/40)



第404図 第108号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第108号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 内-外 焼成	成形・調整	備考
108-1	坏	完 完			12.6 — 3.8	茶褐色—茶褐色 砂粒多 良好	口縁部横ナデ 体部外面へ ラ削り後ナデ 内面ナデ	
108-2	坏	% — %			11.8 — 3.8	黒色—黒褐色 小 砂粒多 良好	内面ナデ 外面へラ削り後 ナデ	口唇部上端一部欠損あ り
108-3	坏	% — %		(14.0) — (4.8)		褐色—褐色 小砂 粒多 良好	口縁部横ナデ 体部外面へ ラ削り 内面ナデ	
108-4	坏(蓋)	完 完			14.5 — 3.4	暗褐色—暗褐色 微細雲母片多 砂 粒少 良好	口縁部外面横ナデ 体部外 面へラ削り 内面ミガキ 底部外面調整不良	内外面内黒 口唇部内 面摩擦 一部内側欠損 あり
108-5	坏	% 完 完			11.7 — 4.3	暗褐色—褐色 砂 粒やや多量 微細 雲母片やや少量 良好	口縁部外面～体部内面ミガ キ 体部外面へラ削り後ナ デ	外面調整不良 口唇部 上端摩擦あり
108-6	坏	完 完			14.2 — 4.7 蓋受径 14.6	明褐色—褐色 砂 粒少 良好	口縁部横ナデ 体部外面へ ラ削り 内面ナデ	口唇部上端欠損あり
108-7	坏	% — 完			10.9 — 3.4	暗褐色—褐色 砂 粒少 微細雲母片 多 良好	口縁部横ナデ後ミガキ 体 部外面へラ削り 内面ミガ キ 底部外面調整不良粗雑 なナデ	内外面共黒色処理 外 面は摩擦が著しい 口 唇部摩擦して稜をなす なナデ
108-8	鉢	完 完 完			16.0 — 8.5	赤褐色—茶褐色 砂粒やや多量 良 好	胴部外面横方向へラ削り後 ナデ 内面ナデ後粗雑なへ ラ削り	上半部は加熱されて赤 化し、もろくなってい る。内面上半部にはス スが附着。壘成形時に 変更か？

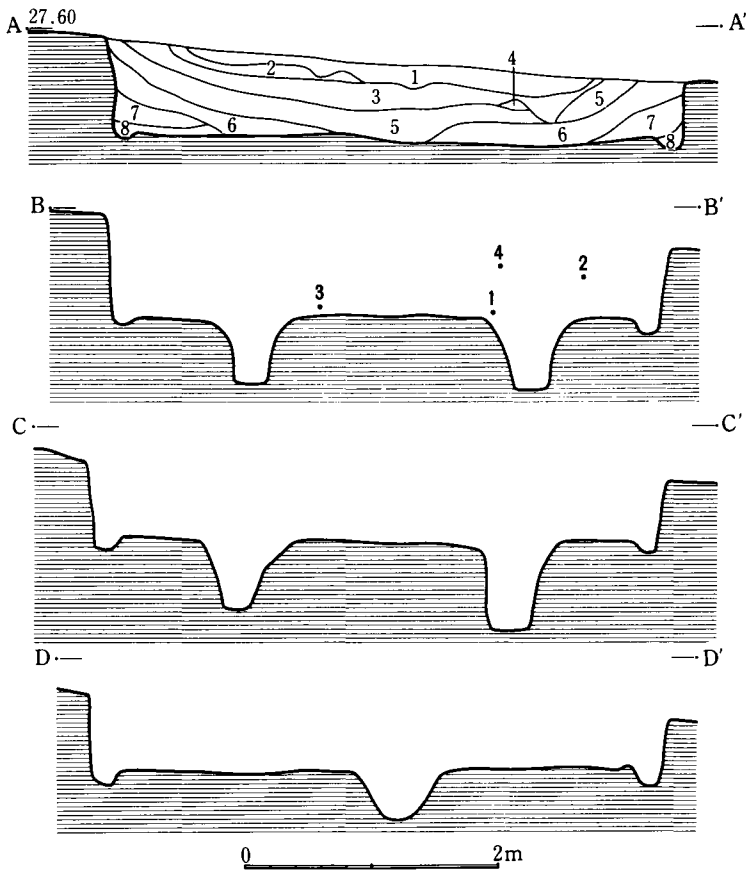
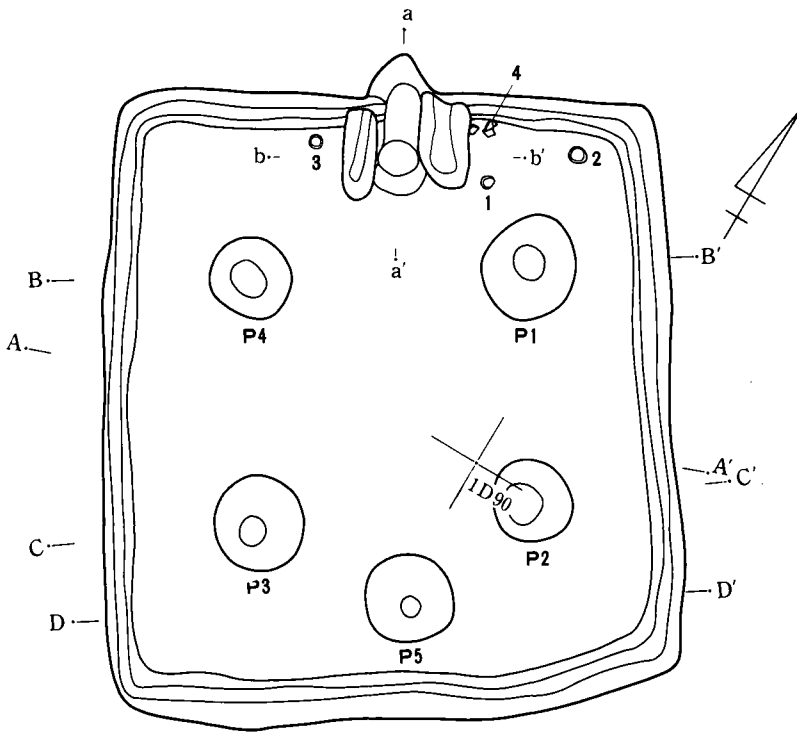
第109号住居跡 (第405～407図 図版131)

台地東側緩傾斜面、調査区東側に位置し、グリッドは1 D90他である。

遺構 西壁4.70m、北壁4.10m、東壁4.35cm、南壁4.35mあり、面積21.65m²で南西・北西コー
ナーがほぼ直角をなす不整形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位
置しN31°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より北西コーナーで86cm、
南東コーナーで約33cmをそれぞれ計る。壁溝はカマド袖部下をもめぐり、全周する。巾約20cm、
深さ約10cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個検出されP₁～P₄は対角線上に配置さ
れ、P₅はカマドの対面に配置される。柱穴の掘り方に特徴がある。

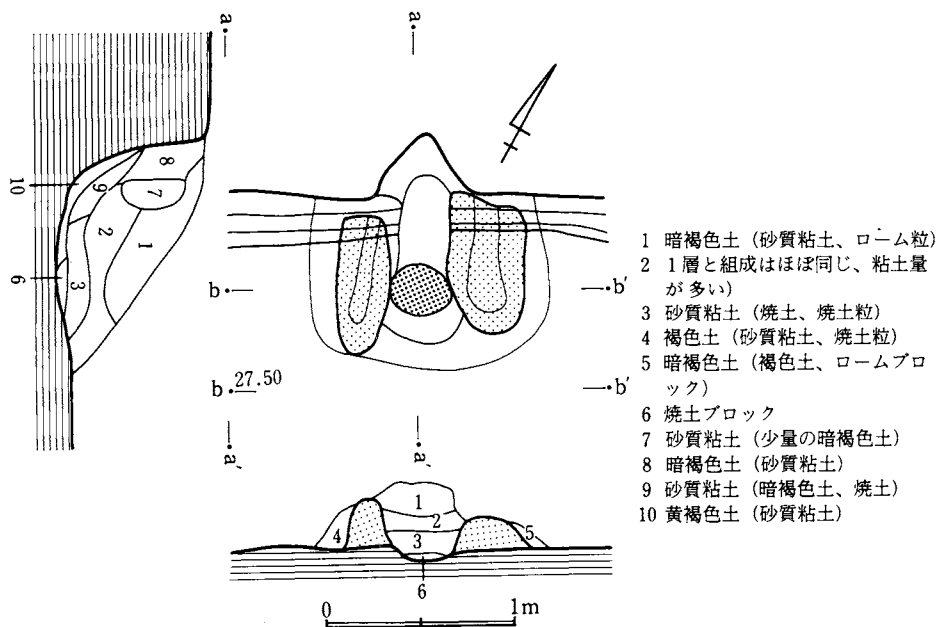
カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約30cmを計り、床
面も深く壁に掘り込まれている。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径30×
30cmのやや深い楕円状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は坏・鉢・甑が出土している。
1の坏は右袖部付近の床直、3の鉢は左袖部脇の床直からの出土で、ほぼ完形品である。2の
鉢と4の甑は北東コーナー付近の覆土中からの出土であった。

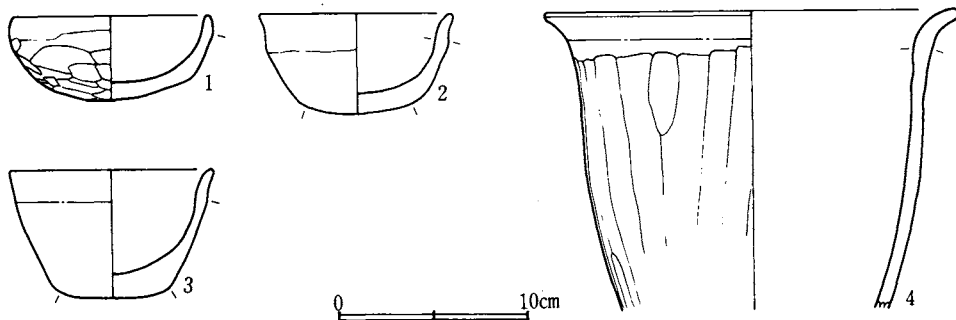


- 1 黒色土 (若干のローム粒を散在混入、しまりはあまりない)
- 2 明黒色土 (1層よりローム粒は量を増すがまだ少量である)
- 3 黒色土 (若干のローム粒及び少量のロームブロック少量づつ散在)
- 4 明褐色土 (ローム粒により構成される)
- 5 黒褐色土 (ローム粒は多量になり、部分的に集中しマダラ状を呈す)
- 6 黒色土 (若干のローム粒が散在するが弱粘性を示す)
- 7 黒色土 (8層よりローム粒は少ない)
- 8 褐色土 (ロームブロック主体構成で若干の黒色土を含む)

第405図 第109号住居跡実測図 (1/60)



第406図 第109号住居跡カマド実測図 (1/40)

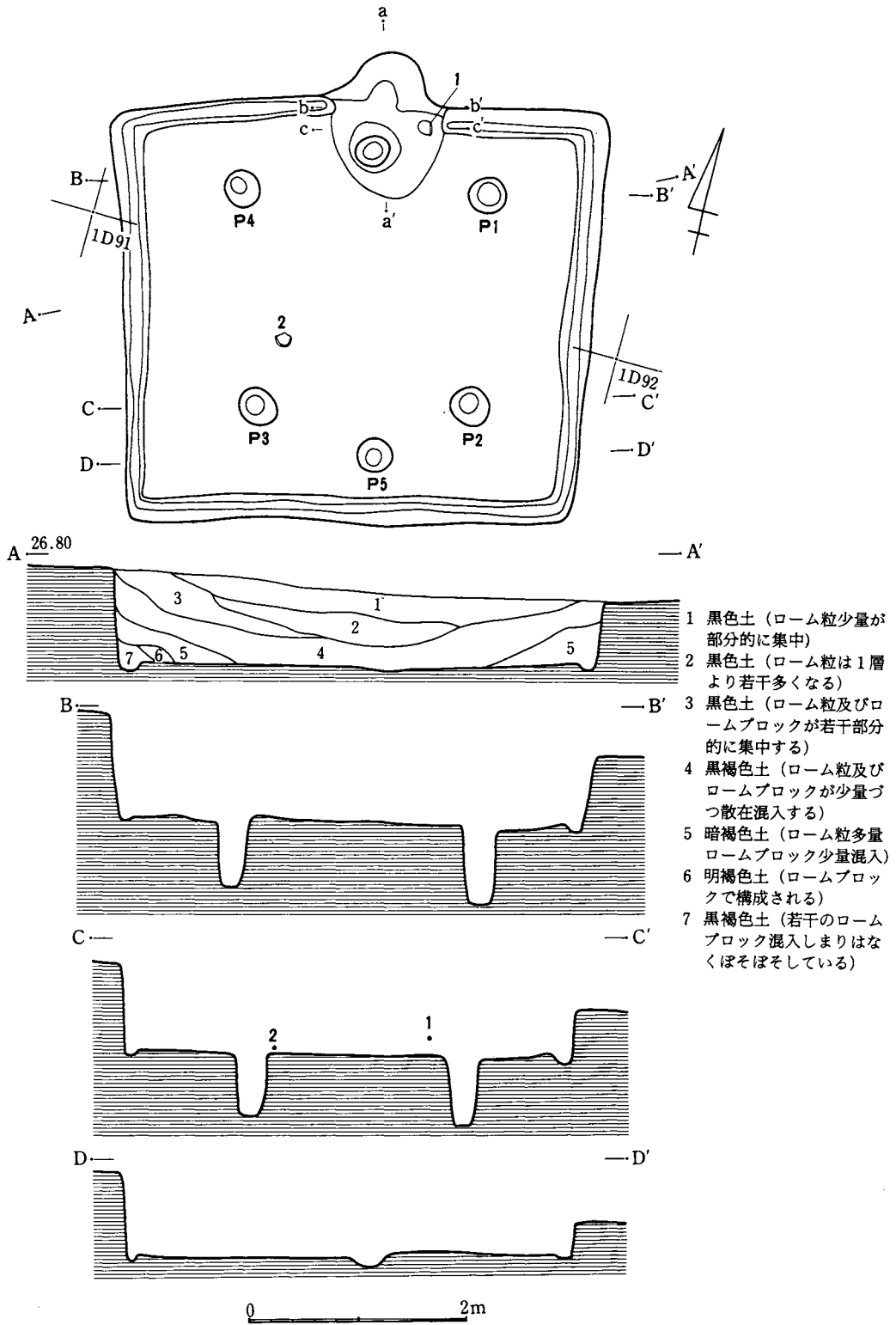


第407図 第109号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第109号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 量 cm ()は推定	口径 底 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
109-1	坏	完 完 完		10.2 — 4.3	褐色-褐色 少 良好	砂粒	□縁部外面~体部内面横ナ デ 体部外面ヘラ削り後ナ デ	
109-2	鉢	3/4 完 完		9.9 6.2 5.2	褐色-褐色 粒多 やや不良	小砂	□縁部横ナデ 体部内面丁 寧なナデ 外面ヘラ削り後 ナデ 底部ヘラ削り後丁寧 なナデ	
109-3	鉢	3/4 完 3/4		(10.5) 6.1 6.6	黒褐色-褐色 砂粒多 不良	小	□縁部外面横ナデ 体部内 面ミガキ 外面ヘラ削り後 ナデ 底部丁寧なナデ	内面スス付着
109-4	甌	3/4 — 1/4		21.8 — (15.4)	褐色-黒褐色 砂粒多 良好	小	□縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り 内面ナデ	

第110号住居跡 (第408~410図 図版159)



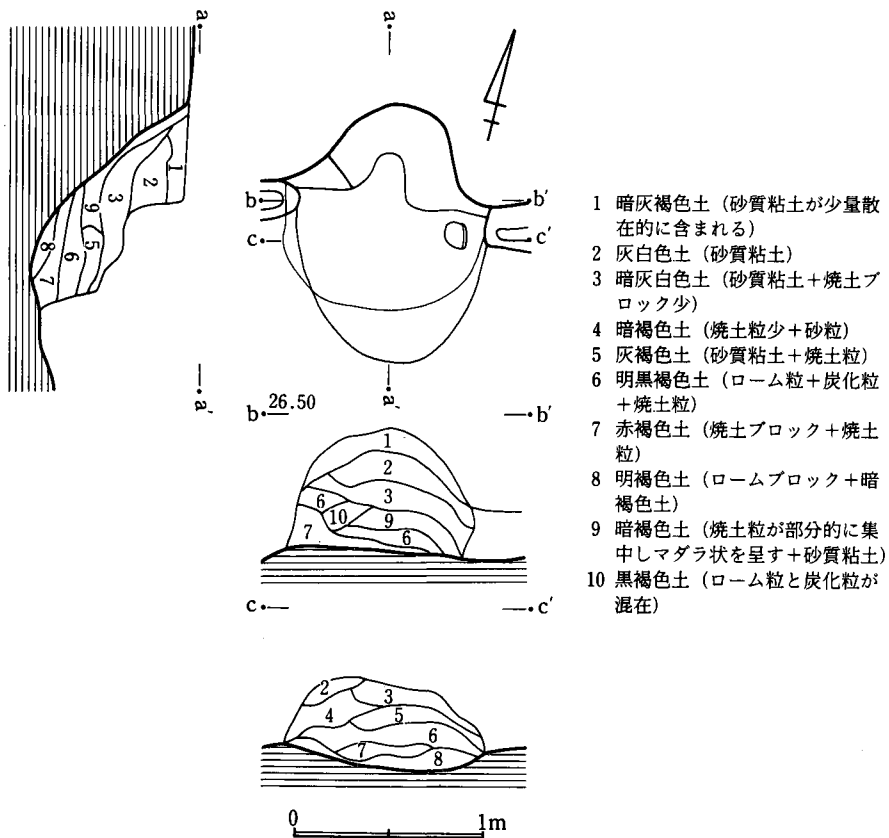
第408図 第110号住居跡実測図 (1/60)

台地東側緩傾斜面、調査区東側に位置し、グリッドは1 D91他である。

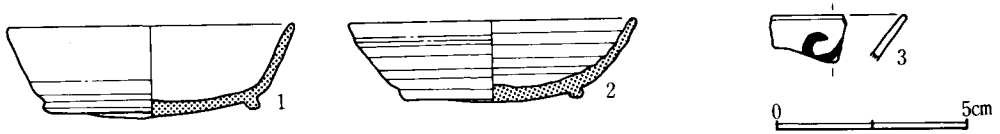
遺構 西壁3.60m、北壁4.55m、東壁3.65m、南壁4.00mあり、面積16.54m²で台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN12°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より北東側で110cm、南壁側で45cmを計り、非常に深い。壁溝はカマド袖部下もめぐり、全周する。巾約15cm、深さ10cmを計る。床面は凹凸がほとんどなく、平坦で固い。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置され、P₅はカマドの対面に配置される。P₅は深さ35cmある。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は不良である。壁への掘り込みは約35cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用していたことが土層から判明した。火床部は全体的に浅い挿鉢状を呈するようである。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は高台付坏・坏が出土している。1の高台付坏は右袖部付近より、2の高台付坏は床直よりそれぞれ出土している。なお、1・2は須恵器である。3の坏の破片は覆土中のもので、墨書が見られる。



第409図 第110号住居跡カマド実測図 (1/40)



第410図 第110号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第110号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 法量 体 ()は推定 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外 砂粒	成形・調整	備考
110-1	高台付坏		3/6	15.1	灰色-灰色	砂粒	底部回転ヘラ削り後高台貼付	須恵器
			3/6	11.4	少	良好		
			3/6	4.9				
110-2	高台付坏		3/6	15.3	灰白色-灰白色	砂粒	底部回転ヘラ削り後高台貼付	須恵器
			完	9.6	砂粒少	やや不良		
			3/6	4.3				
110-3	坏	小破片		—	褐色-褐色	砂粒		墨書土器 不明
				—	少	良好		
				—				

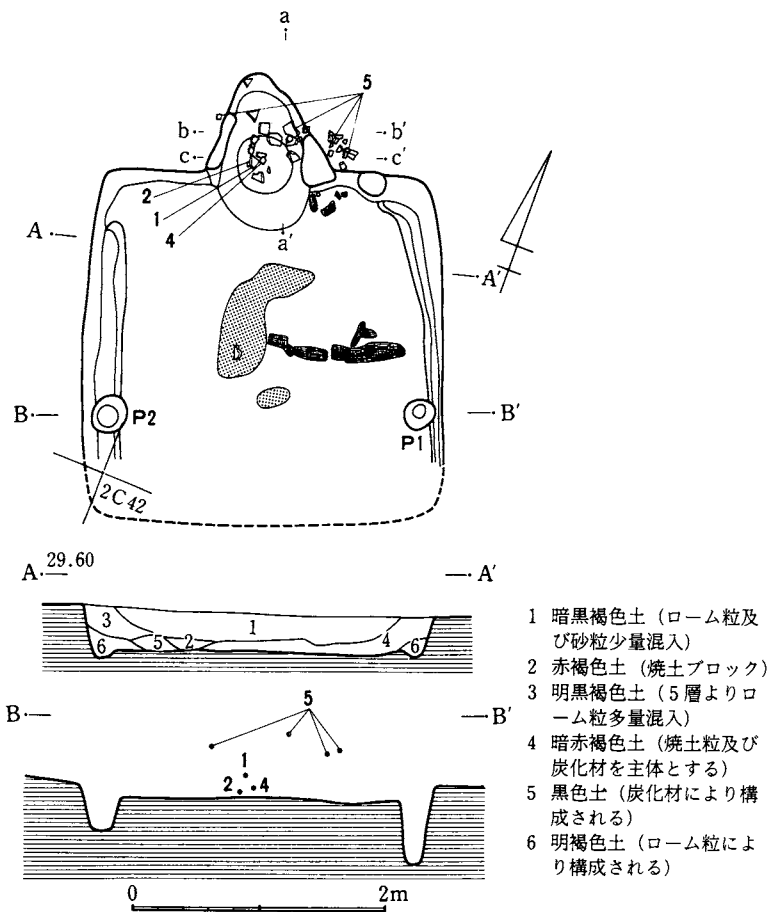
第111号住居跡 (第411~413図 図版159)

台地南側緩傾斜面、調査区南端に位置し、グリッドは2 C 34他である。

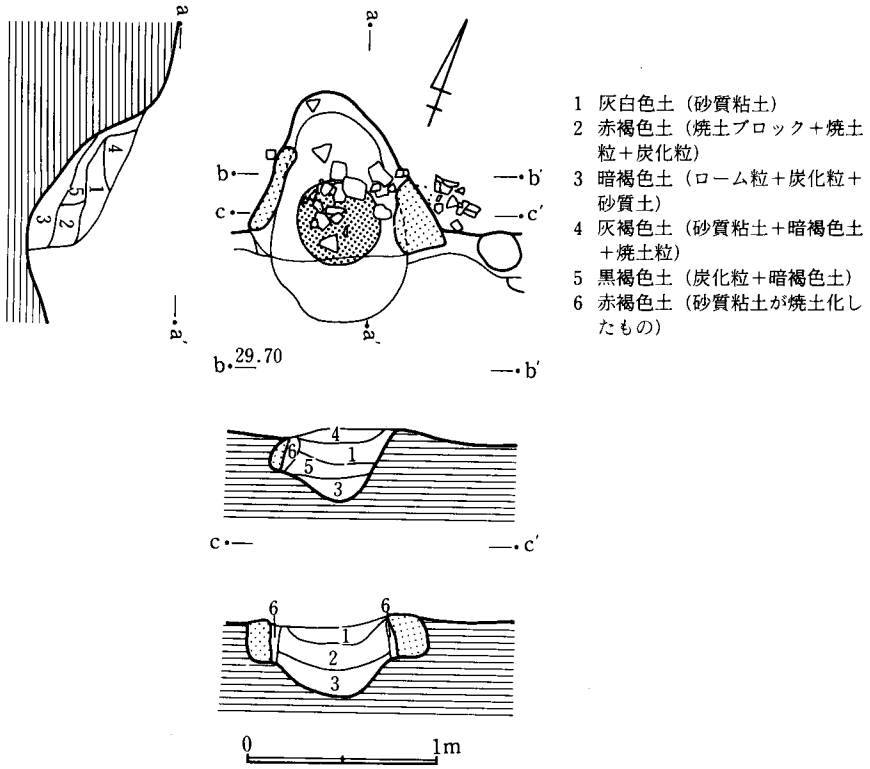
遺構 南側部分から急傾斜面になるため南壁は確認できなかった。北壁2.55m、西壁は推定2.60mあり、面積8.06㎡で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN22°Wである。壁は四辺ともに緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より北壁で35cmを計る。壁溝は西・東壁のみで確認され、巾約15cm、深さ5cmを計る。床面は中央部が硬くしまっていて平坦である。柱穴は2個検出され、P₁・P₂ともに径が約25cm、深さはP₁が50cm、P₂が25cmをそれぞれ計る。P₁・P₂ともに壁際に配置されている。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は極めて不良である。壁への掘り込みは約70cmを計り、火床部も比較的奥まで掘り込まれている。カマドの構築には砂質粘土が使用されていることが土層より判明した。火床部も比較的奥に位置し、径45×45cmの深い擂鉢状を呈している。

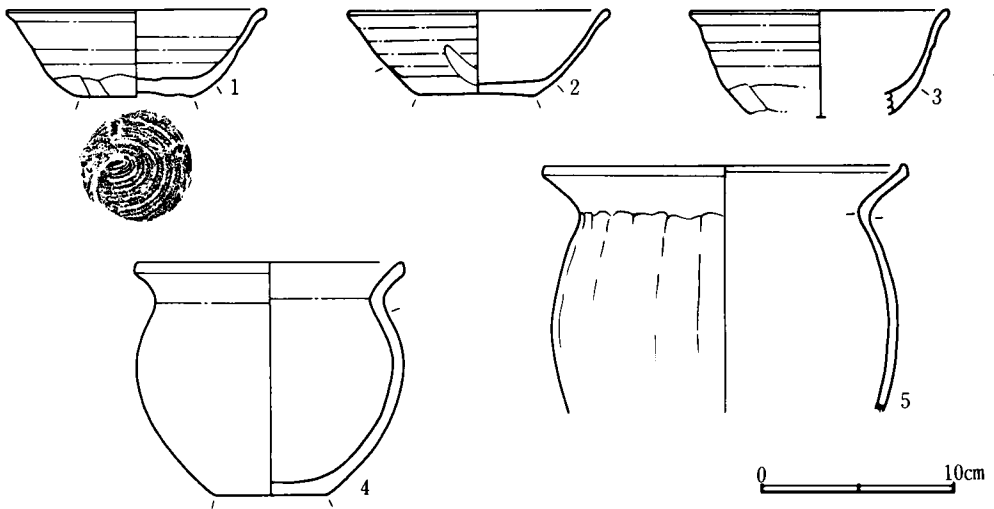
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示す。土層中から焼土粒・炭化物が多量に出土し、床直からも焼土粒・炭化粒が多量に出土している。床面中央に向って炭化材が倒れており、柱でもあろうか。本跡は以上のことから火災住居と思われる。土器は坏・甕が出土している。1・2の坏と4の甕はカマド内から、5の甕はカマド上面からの出土である。特に2の坏は完形品であり、他のカマド内出土土器も完形品に近いものであった。



第411図 第111号住居跡実測図 (1/60)



第412図 第111号住居跡カマド実測図 (1/40)



第413図 第111号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第111号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
111-1	坏	完 完 完	(13.6)	6.0 4.4	褐色-褐色 粒多 やや不良	小砂	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り	内面剝離著しい
111-2	坏	完 完 完	13.3	6.0 4.4	明褐色-褐色 粒やや多 良好	砂	底部直交する2方向の手持ちヘラ削り 体部下端手持ちヘラ削り	内面 $\frac{1}{2}$ 、外面 $\frac{1}{2}$ にスス 付着(灯明用)
111-3	坏	$\frac{1}{2}$ - $\frac{1}{2}$	13.6	- (5.5)	黒褐色-褐色 砂粒多 不良	小	体部下端手持ちヘラ削り	内外面とも剝離著しい
111-4	甕	$\frac{3}{4}$ 完 完	13.8	5.9 12.0	褐色-褐色 粒多 不良	小砂	口縁部横ナデ 胴部内外面 剝離激しく調整不明	内外面とも剝離著しい
111-5	甕	$\frac{3}{4}$ - $\frac{1}{2}$	18.7	- -	赤褐色-赤褐色 小砂粒多 不良		口縁部口唇をつまんで横ナ デ後胴部外面縦位ヘラ削り	内外面とも剝離著しい

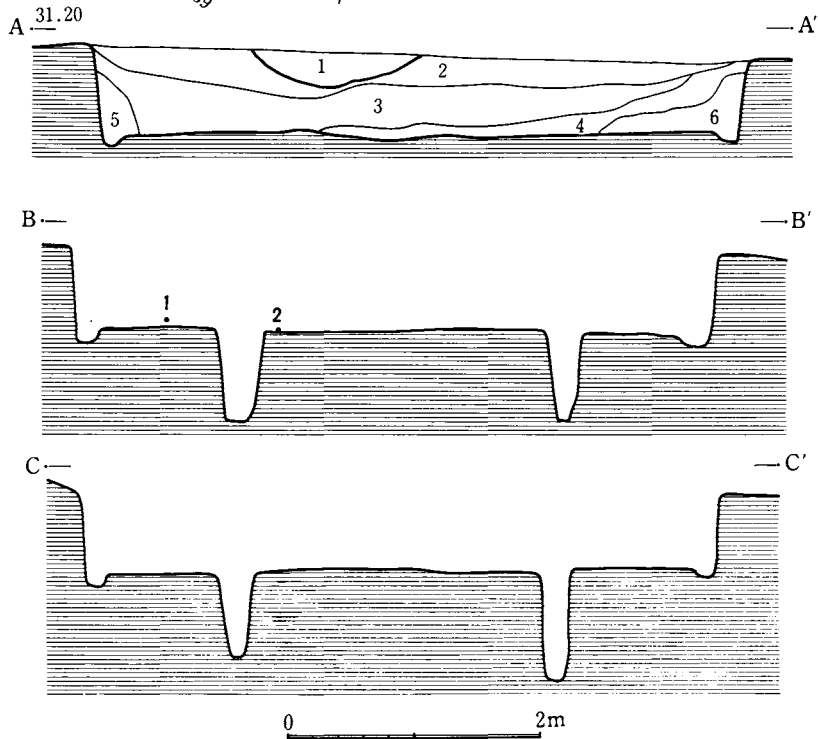
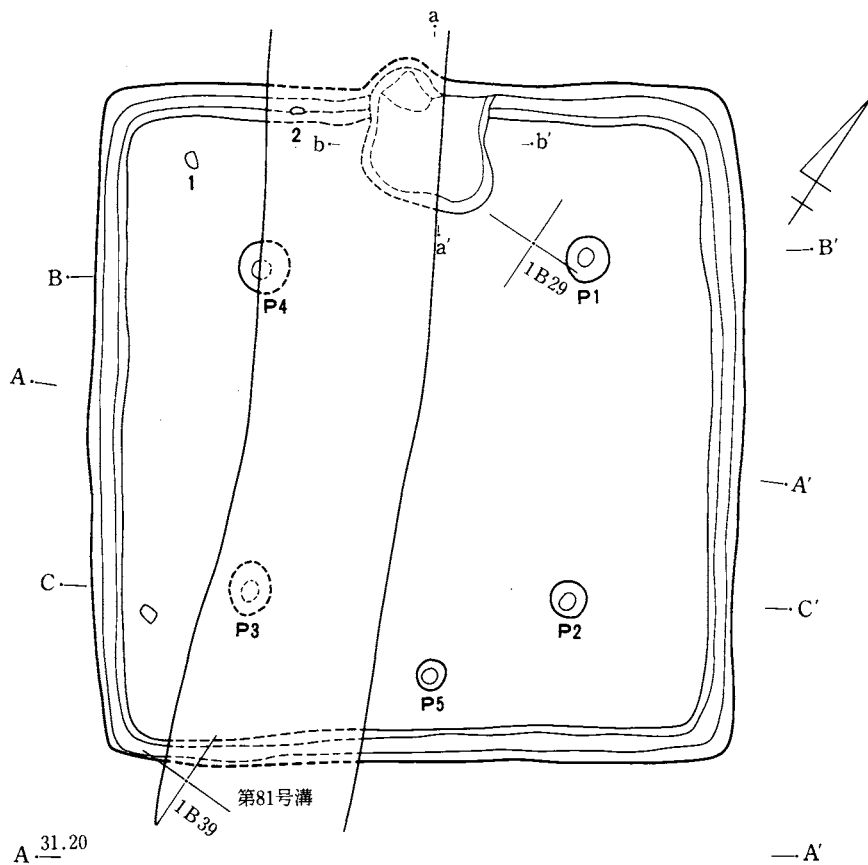
第114号住居跡 (第414~416図 図版132)

台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 B 29他である。第81号溝と重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 西壁5.10m、北壁4.80mあり、面積26.93㎡で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN34°Wである。壁は四辺ともに垂直に立ち上がり、確認面から約70cmを計る。壁溝はカマド袖部下もめぐり全周する。巾約20cm、深さ約10cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置され、P₅はカマドの対面に配置されている。P₅は径25cm、深さ8cmである。

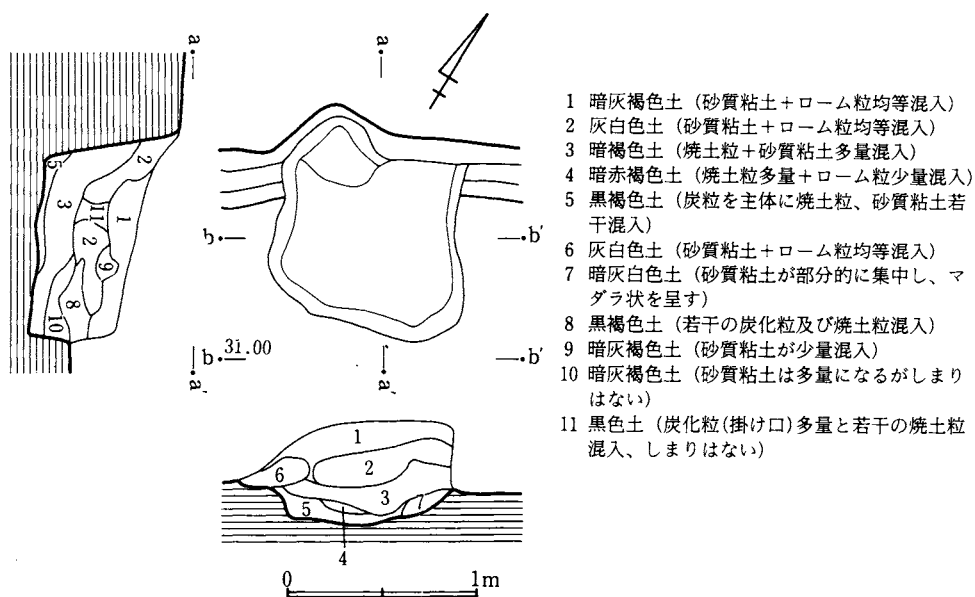
カマド 北壁中央に位置し、袖部が検出されず遺存状態は不良であった。壁への掘り込みは約40cmを計る。カマドの構築には砂質粘土が使用されていることが、土層より判明している。火床部は全面的に深い皿状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。第81号溝との重複関係は土層より明瞭であった。遺物は坏が出土している。1・2の坏はカマド左袖部付近から北西コーナー付近の床直からの出土であった。これらの坏はほぼ完形品であった。



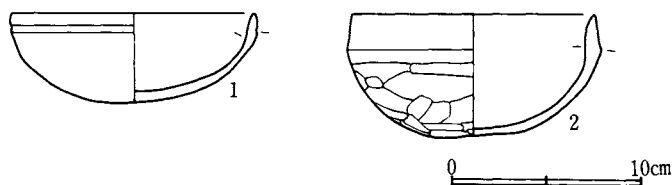
- 1 黒褐色土 (第81号溝覆土)
- 2 黒褐色土 (ローム粒を含む、しまり良い)
- 3 黄褐色土 (やや大きなロームブロックを含む)
- 4 黒褐色土 (小さいローム粒を多量に含む)
- 5 黒褐色土 (ローム粒を若干含む、しまり悪い)
- 6 黄褐色土 (やや大きなローム粒を含む)

第414図 第114号住居跡実測図 (1/60)



- 1 暗灰褐色土 (砂質粘土+ローム粒均等混入)
- 2 灰白色土 (砂質粘土+ローム粒均等混入)
- 3 暗褐色土 (焼土粒+砂質粘土多量混入)
- 4 暗赤褐色土 (焼土粒多量+ローム粒少量混入)
- 5 黒褐色土 (炭粒を主体に焼土粒、砂質粘土若干混入)
- 6 灰白色土 (砂質粘土+ローム粒均等混入)
- 7 暗灰白色土 (砂質粘土が部分的に集中し、マダラ状を呈す)
- 8 黒褐色土 (若干の炭化粒及び焼土粒混入)
- 9 暗灰褐色土 (砂質粘土が少量混入)
- 10 暗灰褐色土 (砂質粘土は多量になるがしまりは無い)
- 11 黒色土 (炭化粒(掛け口)多量と若干の焼土粒混入、しまりは無い)

第415図 第114号住居跡カマド実測図 (1/40)



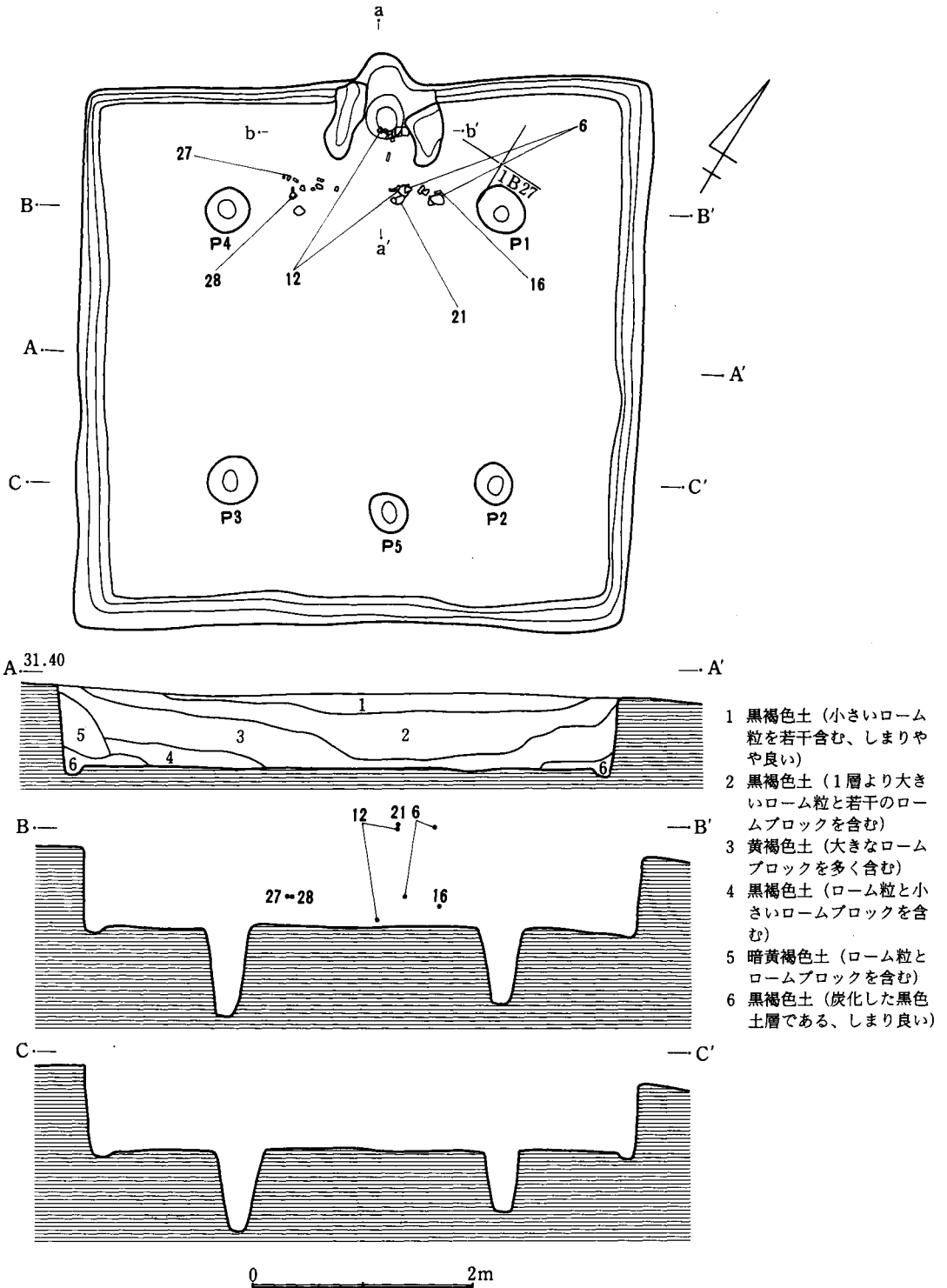
第416図 第114号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第114号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□底 体()は推定	法量 cm	□径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
114-1	坏	% 完 完			13.0 — 4.6	褐色-褐色 粒多	小砂 良好	□縁部横ナデ 内面丁寧な ナデ 外面ヘラ削り	
114-2	坏	% 完 %			13.0 — 6.4	褐色-黒褐色 砂粒多	小 良好	□縁部横ナデ 内面丁寧な ナデ 外面ヘラ削り後ナデ	

第115号住居跡 (第417~420図 図版132・160)

台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 B27他である。

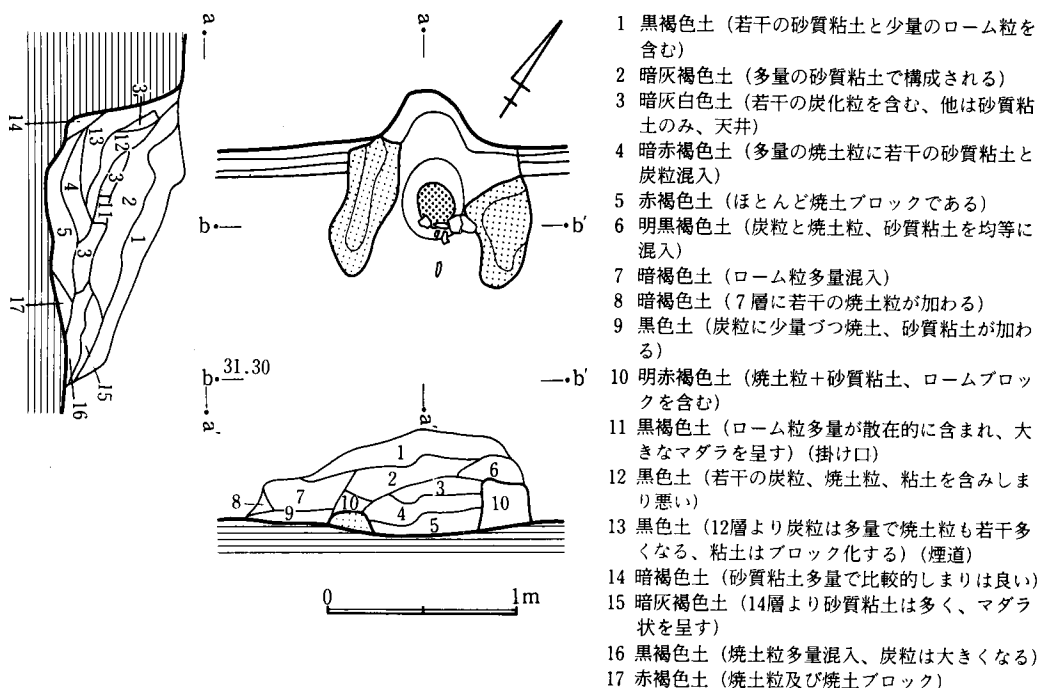


第417図 第115号住居跡実測図 (1/60)

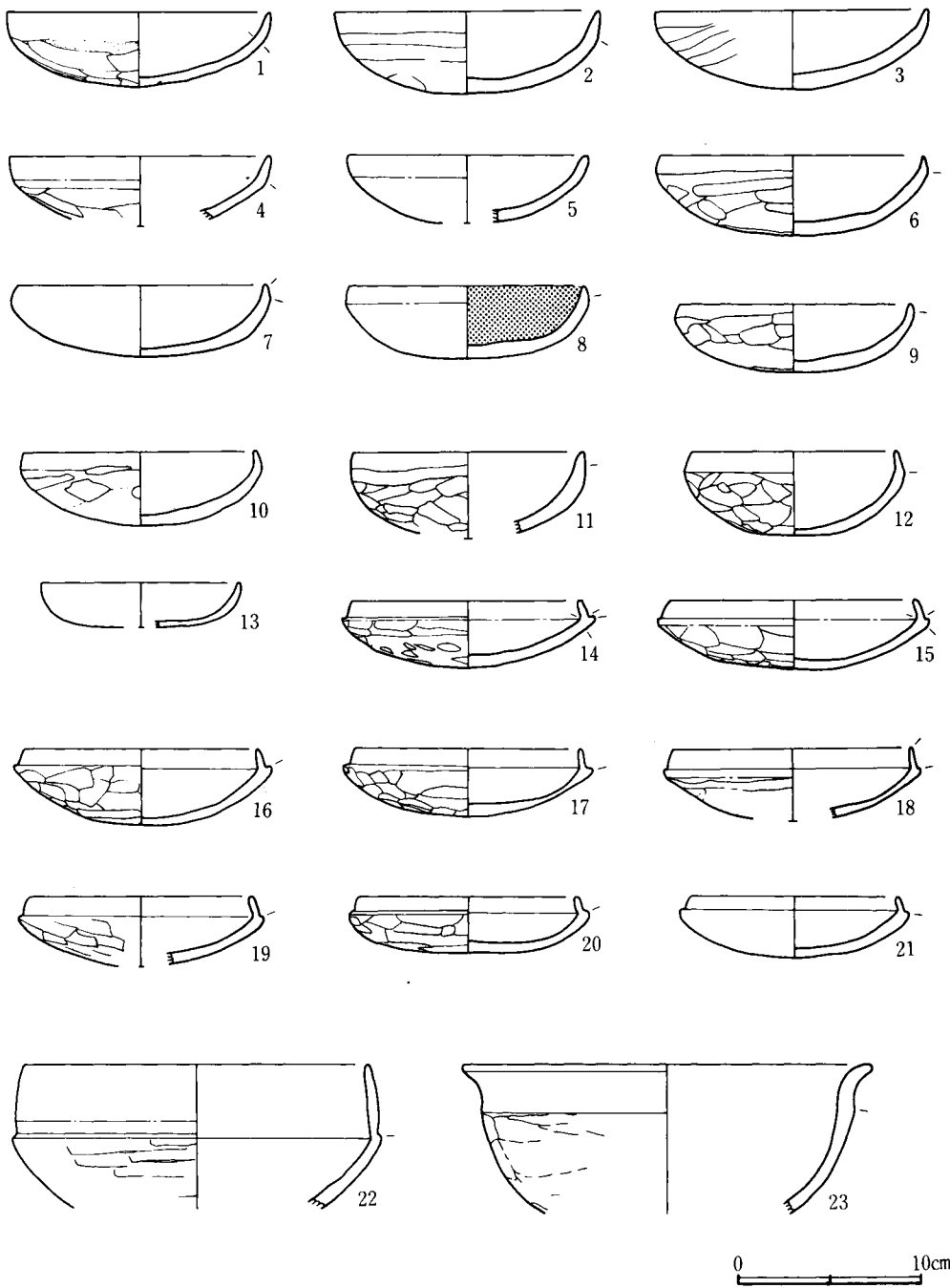
遺構 西壁4.75m、北壁5.05mあり、面積24.93m²で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN28°Wである。壁はほぼ垂直をもって立ち上がり、深さは確認面より約70cmを計る。壁溝は右袖部下をめぐることから、左袖部下めぐるものと思われる。以上のことから壁溝は全周するものと思われる。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁～P₄は対角線上に配置され、P₅はカマドの対面に配置される。P₅は径30cm、深さ60cmを計る。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは45cmあり、床面も深く掘り込まれている。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径25×20cmのやや浅い楕円状を呈する。

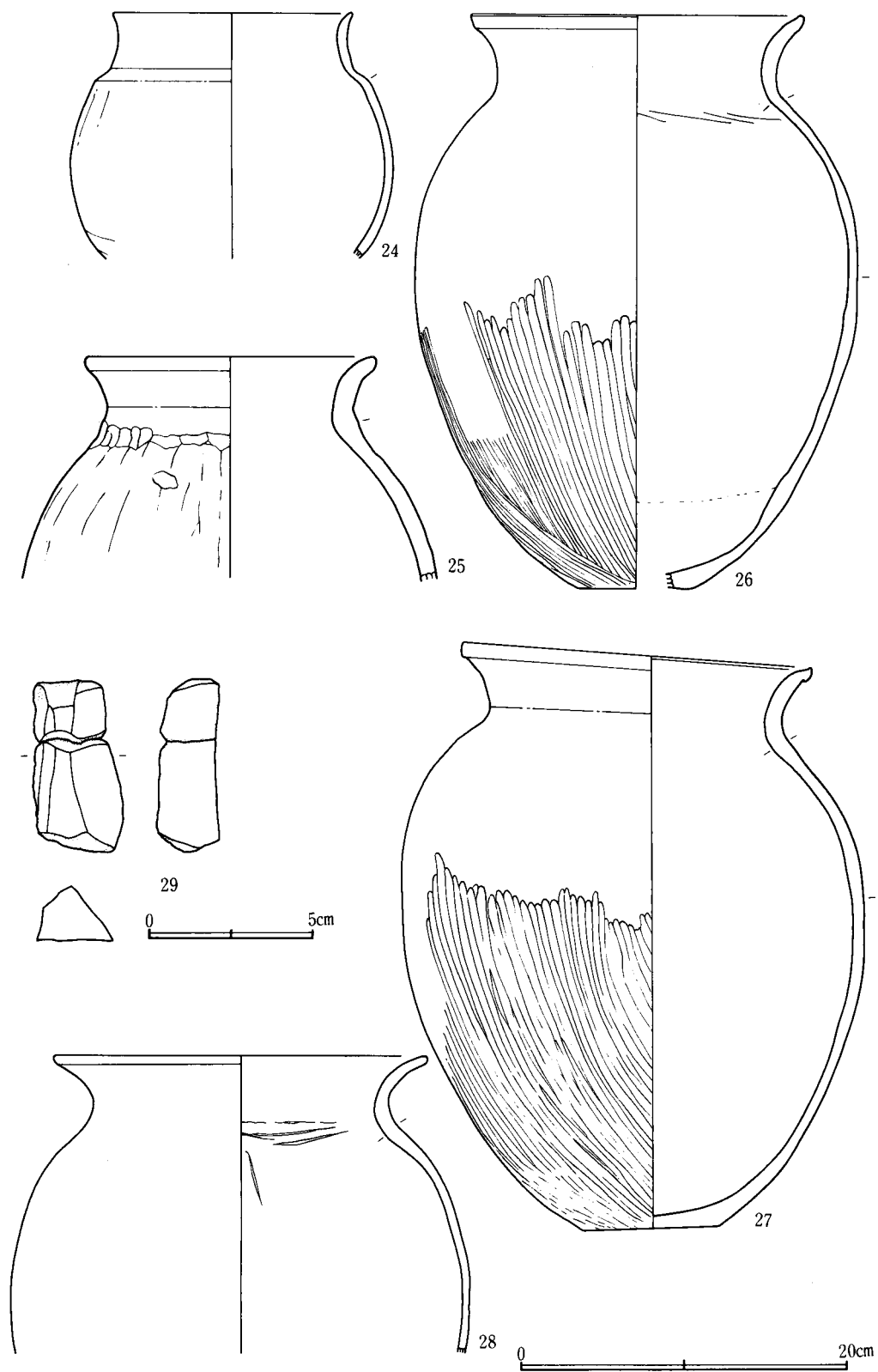
遺物出土状況 土層は複雑である。第6層は炭火した黒色土のために、本跡は火災住居であると推定されている。その後、第2～4層のロームブロックを多く含んでいることから、この層は廃棄されたものであるとされている。遺物は坏(身)、坏(蓋)、碗・浅鉢・壺・甕・砥石と多量に出土している。これらの遺物は第2～4層出土であることから、本跡に伴うものではなく、廃棄されたものと推定されるが、一括廃棄の好資料である。



第418図 第115号住居跡カマド実測図 (1/40)



第419図 第115号住居跡出土遺物実測図 (1/4) No 1



第420图 第115号住居跡出土遺物実測図 (24~28 1/4、29 1/2) Na2

第115号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□底 体	法量 cm ()は推定	□径 底 器高	色調 内一外 胎土 焼成	成形・調整	備考
115-1	坏	% — %	% — %	14.4 — 4.1	14.4 — 4.1	暗褐色 砂粒やや多 微細雲母片やや多 良好	□縁部横ナデ後ミガキ 体 外面へラ削り後粗雑なミガ キ 内面丁寧なへラミガキ 一部未調整あり	
115-2	坏(蓋)	% — %	% — %	14.7 — 4.5	14.7 — 4.5	褐色一褐色 砂粒 少 やや不良	□縁部外面～体部内面丁寧 なミガキ 外面へラ削り後 ナデ	□唇部上端内面摩耗
115-3	坏	% — %	% — %	(15.0) — 4.3	(15.0) — 4.3	黒色一黒色 砂粒 少 やや不良	内面ミガキ 外面へラ削り 後ナデ	
115-4	坏	% — %	% — %	(14.4) — 3.8	(14.4) — 3.8	黒褐色一黒褐色 砂粒少含金雲母微 良好	□縁部外面～体部内面ミガ キ 外面へラ削り後ナデ 一部未調整あり	
115-5	坏(蓋)	% — %	% — %	(13.3) — (3.7)	(13.3) — (3.7)	黒色一黒色 砂粒 少 やや不良	□縁部横ナデ 体部内面横 ナデ 外面へラ削り後ナデ	内外面ともスス附着 内外面剝離している □唇部内面摩耗
115-6	坏(蓋)	% — 完	% — 完	14.4 — 4.3	14.4 — 4.3	黒色一黒褐色 砂 粒少 やや不良	□縁部外面～体部内面横ナ デ 体部外面へラ削り後ナ デ	内外面スス附着 □唇 部内面摩耗
115-7	坏	% — %	% — %	13.2 — 3.9	13.2 — 3.9	褐色一黒褐色 砂 粒少 やや不良	内面丁寧なミガキ 外面へ ラ削り後ミガキ	内面一部スス附着
115-8	坏(蓋)	% — %	% — %	12.9 — 4.0	12.9 — 4.0	黒色一褐色 砂粒 少 やや不良	□縁部横ナデ 体部内面ミ ガキ 外面へラ削り後ナデ	内黒 □唇部内面摩耗 内側一部欠損あり
115-9	坏(蓋)	% — %	% — %	12.6 — 3.7	12.6 — 3.7	黒色一黒褐色 砂 粒少 やや不良	□縁部外面～体部内面ミガ キ 外面へラ削り後ナデ	内面スス附着 □唇部 内面摩耗
115-10	坏(蓋)	% — 完	% — 完	12.6 — 4.0	12.6 — 4.0	黒褐色一黒褐色 砂粒少 やや不良	□縁部外面～体部内面ミガ キ 外面へラ削り後ナデ	外面摩耗著しい □唇 部内面摩耗
115-11	坏(蓋)	% — %	% — %	12.6 — (4.6)	12.6 — (4.6)	黒褐色一黒褐色 小砂粒多 良好	□縁部外面～体部内面ミガ キ 外面へラ削り後ナデ	□唇部内面摩耗
115-12	坏(蓋)	% — %	% — %	11.1 — 4.5	11.1 — 4.5	黒褐色一黒褐色 小砂粒多 良好	□縁部外面～体部内面ミガ キ 外面へラ削り	□唇部内面摩耗
115-13	坏	% — %	% — %	(11.0) — (2.4)	(11.0) — (2.4)	黒色一黒褐色 砂 粒多 良好	□縁部横ナデ 体部内面ナ デ 外面へラ削り後ナデ	器壁が非常に薄い
115-14	坏(身)	% — %	% — %	12.7 — 3.6 蓋受径 14.0	12.7 — 3.6 蓋受径 14.0	暗褐色一明褐色 砂粒やや多 微細 雲母片やや多 良 好	□縁部横ナデ後ミガキ 体 部外面上端部ミガキ 以下 へラ削り後粗雑なミガキ 内面ミガキ	調整へラ幅が2mm(□ 縁部・内面)、5mm(体 部外面上端)に分かれ る □唇部摩耗
115-15	坏(身)	% — %	% — %	13.6 — 3.7 蓋受径 15.0	13.6 — 3.7 蓋受径 15.0	明褐色一褐色 砂 粒やや多 微細雲 母片やや多 良好	□縁部横ナデ 体部外面へ ラ削り後ミガキに近いナデ 内面ナデ	□唇部摩耗 内面スス 附着
115-16	坏	% — %	% — %	12.8 — 4.1 蓋受径 14.2	12.8 — 4.1 蓋受径 14.2	黒色一黒褐色 小 砂粒多 良好	□縁部外面～体部内面ミガ キ 外面へラ削り後ナデ	□唇部摩耗
115-17	坏	% — %	% — %	12.3 — 3.6 蓋受径 13.8	12.3 — 3.6 蓋受径 13.8	黒褐色一黒褐色 砂粒少 良好	□縁部外面～体部内面ミガ キ 外面へラ削り後ナデ	□唇部摩耗
115-18	坏	% — %	% — %	12.7 — 3.9 蓋受径 (14.2)	12.7 — 3.9 蓋受径 (14.2)	黒褐色一黒褐色 砂粒少 やや不良	□縁部外面～体部内面ミガ キ 外面へラ削り後ナデ	□唇部摩耗

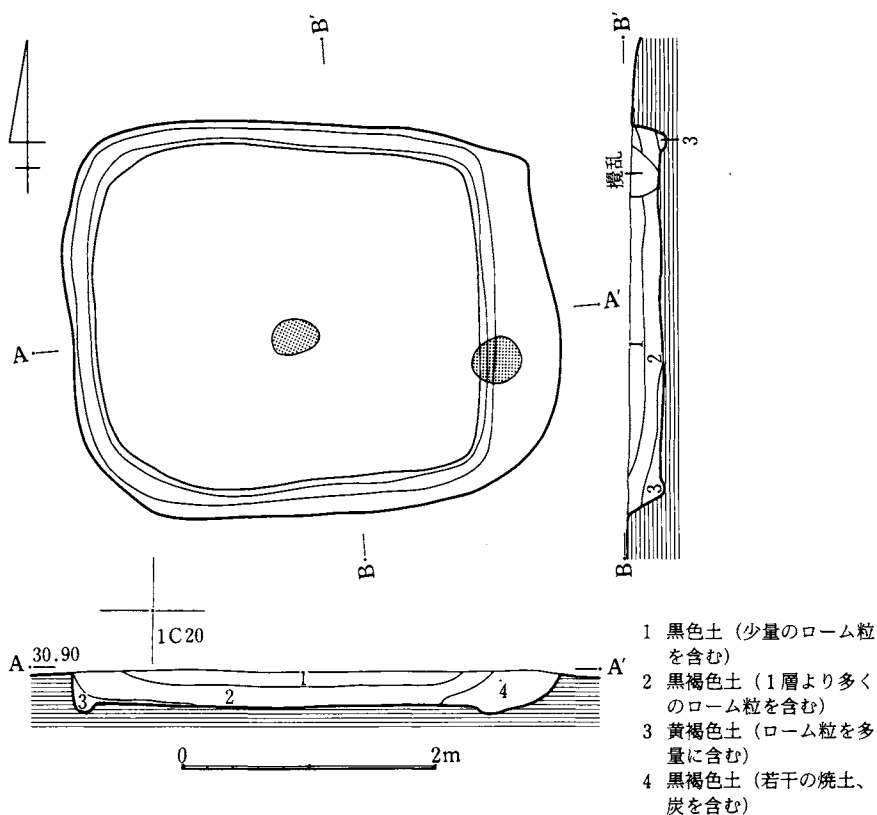
遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 内-外 胎土 焼成	成形・調整	備考
115-19	坏		1/2 1/2	蓋受径	(12.1) — 3.8 (13.5)	黒褐色-黒褐色 砂粒少 やや不良	口縁部外面~体部内面ミガキ 外面へラ削り後ナデ	口唇部摩耗 内面スス 付着
115-20	坏		1/2 1/2	蓋受径	12.0 — 3.0 13.3	黒色-褐色 小砂 粒多 やや不良	口縁部外面~体部内面ミガキ 外面へラ削り後ナデ	内面スス付着 口唇部 摩耗
115-21	坏		1/2 1/2	蓋受径	(11.3) — 3.4 12.6	黒褐色-褐色 小 砂粒多 やや不良	口縁部外面~体部内面ミガキ 外面へラ削り後ナデ	口唇部摩耗 外面剥離 激しい
115-22	埴		1/2 1/2	蓋受径	18.7 — (7.9) (20.3)	黒褐色-黒褐色 小 砂粒多 良好	口縁部外面~体部内面ミガキ 外面へラ削り後ナデ	
115-23	浅鉢		1/2 1/2		(22.5) — (8.2)	黒褐色-黒褐色 小 砂粒多 良好	口縁部外面~体部内面ミガキ 外面へラ削り後ナデ	使用痕あり
115-24	甕		1/2 1/2	胴最大径	(14.7) — (15.2) (19.9)	赤褐色-赤褐色 小 砂粒多 不良	口縁部横ナデ 胴部外面縦 位へラ削り	内外面剥離著しい
115-25	甕		1/2 1/2		17.8 — (13.4)	黒褐色-黒褐色 小 砂粒多 良好	口縁部横ナデ後胴部上半縦 位へラ削り 内面ナデ	内外面剥離著しい
115-26	甕		1/2 1/2 1/2	胴最大径	(20.4) (6.8) 34.9 27.3	灰褐色-黒褐色 小 砂粒多 含金雲 母 良好	口縁部横ナデ 胴部外面ナ デ下半縦位へラナデ 底部 へラ削り 内面ナデ 底 部・胴部接合痕明瞭	二次焼成のため外面に スス付着 内面の剥離 著しい
115-27	甕		1/2 1/2 1/2	胴最大径	21.5 (8.2) 34.8 28.5	褐色-黒褐色 小 砂粒多 良好	口縁部横ナデ 胴部ナデ後 下半縦位へラナデ 底部へ ラ削り 内面ナデ	内面に剥離見られる
115-28	甕		1/2 1/2	胴最大径	23.0 — (18.1) 28.3	黒褐色-黒褐色 小 砂粒多 含金雲 母 良好	口縁部横ナデ 胴部外面ナ デ 内面ナデ	二次焼成のため外面に スス付着
115-29	砥石破片			長さ 最大幅 最大厚	(5.1) 2.6 1.8	凝灰岩	重量29g	

第116号住居跡 (第421・422図 図版133・162)

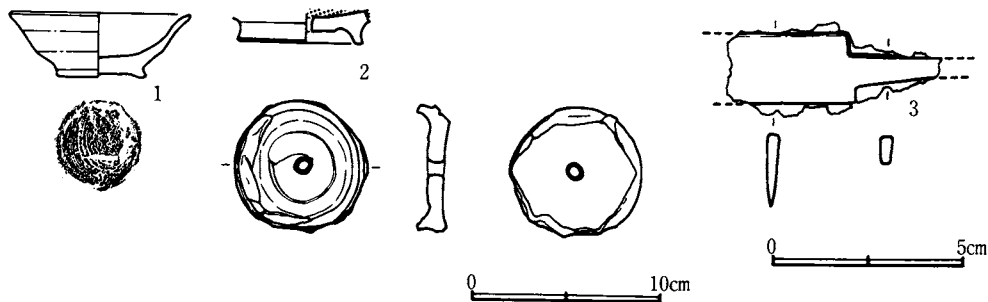
台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1C10他である。

遺構 北壁3.5m、西壁3.0m、面積10.66m²で隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡であると推定される。焼土は床面中央と東壁の2ヶ所で検出されている。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約30cmを計る。壁溝は全周するが、東壁の傾斜が極端であるために、内側をめぐっているように図面上感じる。巾約20cm、深さ約5cmである。床面は軟弱であるが平坦であった。柱穴は検出されていない。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は縄文土器片が多かったが、床直から土師器片が出土していることから、本時期とした。1は坏、2は高台付坏(皿)からの転用紡錘車、3は刀子で覆土中からの出土である。また、その他として覆土中よりスラグ1点が出土している。



第421図 第116号住居跡実測図 (1/60)



第422図 第116号住居跡出土遺物実測図 (1・2 1/4、3 1/2)

第116号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm	口 径 底 径 器 高	色 調 内-外 胎 土 焼 成	成形・調整	備 考
116-1	坏		% — %		9.5 4.7 3.4	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 やや不 良	内面丁寧なナデ 底部回転 糸切り 高台造り出し	
116-2	紡錘車		— 完 —		— 6.6 —	内黒—黒褐色 砂 粒少 不良	内面ミガキ 底部ナデ 重 量 g	内黒 高台付坏を紡錘 車に転用
116-3	刀子	両端欠損		長さ	(5.6)	鉄製		

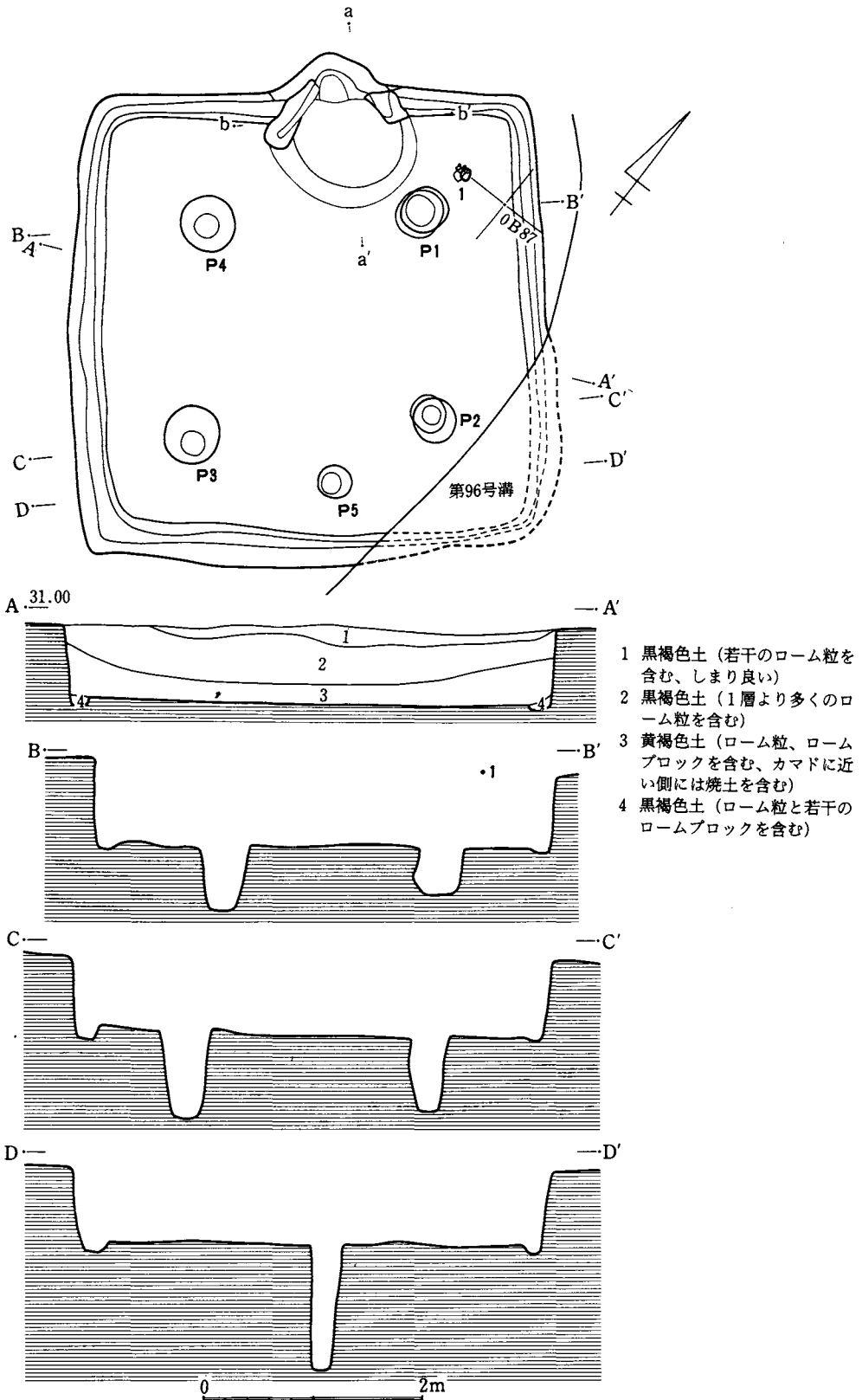
第117号住居跡 (第423~425図 図版134)

台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは0 B87他である。第96号溝と第136号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第96号溝より本跡は古く、第136号掘立柱建物跡との関係は不明である。

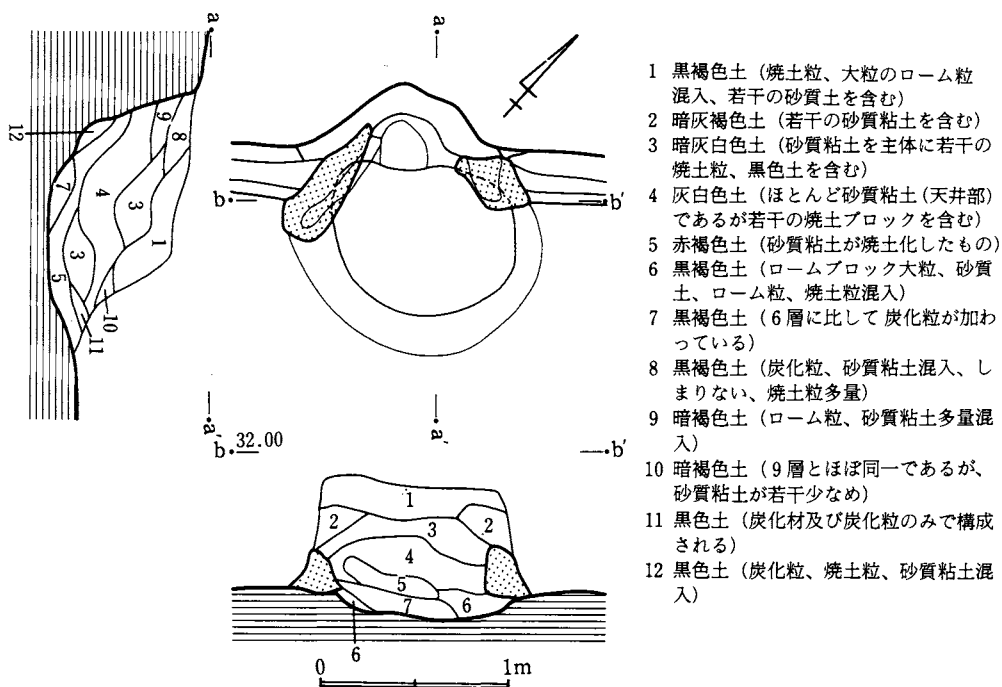
遺構 南西壁4.10m、北西壁3.90mあり、面積(18.72) m²で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形の竪穴住居跡である。カマドは北壁中央やや右寄りに位置しN39°Wである。壁は四辺ともほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約70cmを計る。壁溝はカマド右袖部下をめぐっていることから、左袖部下もめぐっているものと推定され、このことから全周するものと思われる。巾約20cm、深さ約5cmである。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置され、P₅はカマドの対面に配置されている。特にP₅は深い。

カマド 北西壁中央やや右寄りに位置し、遺存状態はやや不良である。壁への掘り込みは約30cmを計り、煙道部中ほどに段を有する。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は全体的に皿状を呈している。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は坏が1個出土しているが、覆土最上層のものである。その他、図示した遺物以外は殆ど出土していない。

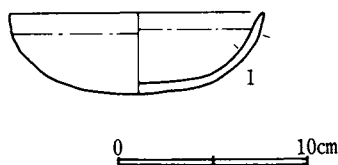


第423図 第117号住居跡実測図 (1/60)



- 1 黒褐色土 (焼土粒、大粒のローム粒混入、若干の砂質土を含む)
- 2 暗灰褐色土 (若干の砂質粘土を含む)
- 3 暗灰白色土 (砂質粘土を主体に若干の焼土粒、黒色土を含む)
- 4 灰白色土 (ほとんど砂質粘土(天井部)であるが若干の焼土ブロックを含む)
- 5 赤褐色土 (砂質粘土が焼土化したもの)
- 6 黒褐色土 (ロームブロック大粒、砂質土、ローム粒、焼土粒混入)
- 7 黒褐色土 (6層に比して炭化粒が加わっている)
- 8 黒褐色土 (炭化粒、砂質粘土混入、しまりない、焼土粒多量)
- 9 暗褐色土 (ローム粒、砂質粘土多量混入)
- 10 暗褐色土 (9層とほぼ同一であるが、砂質粘土が若干少なめ)
- 11 黒色土 (炭化材及び炭化粒のみで構成される)
- 12 黒色土 (炭化粒、焼土粒、砂質粘土混入)

第424図 第117号住居跡カマド実測図 (1/40)



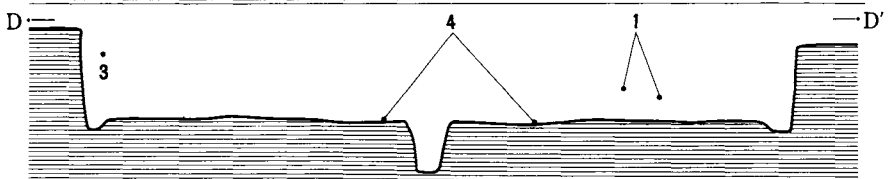
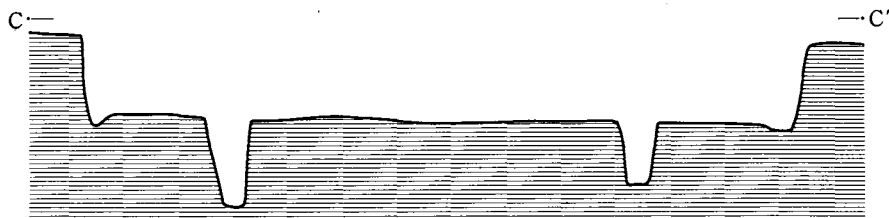
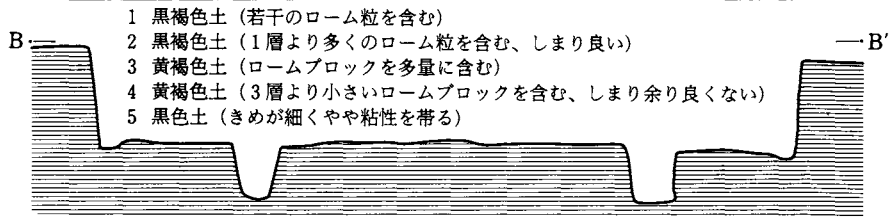
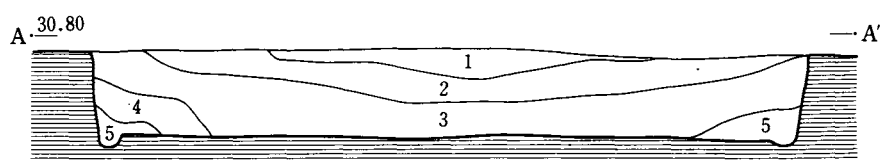
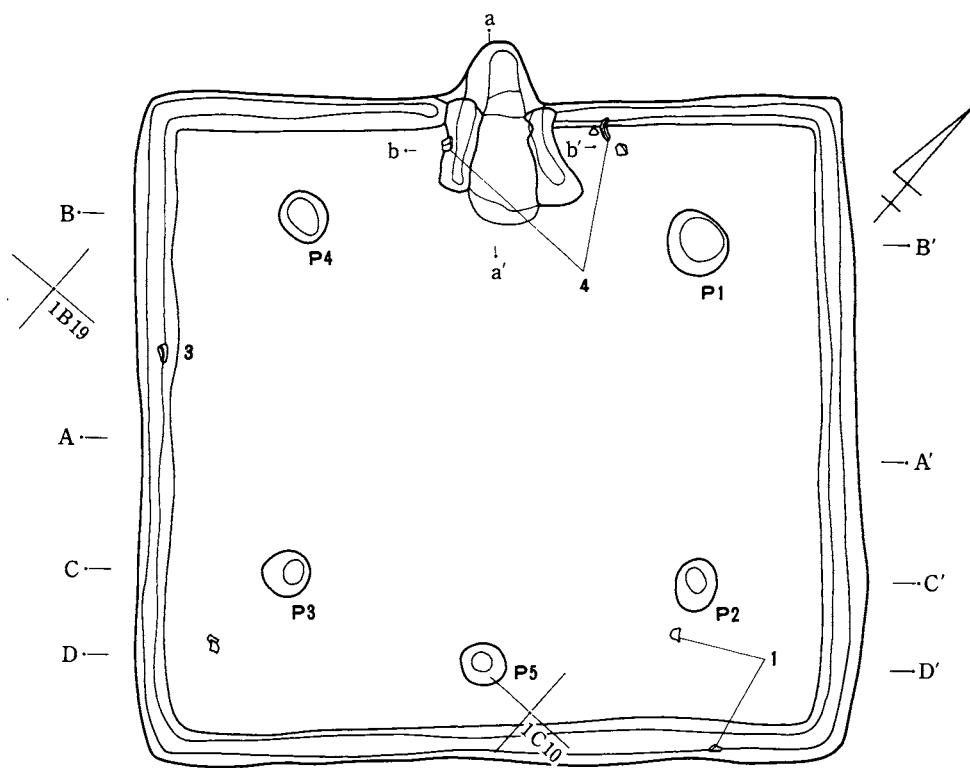
第425図 第117号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第117号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
117-1	坏		% — %		13.6 — 3.2	黒褐色-黒褐色 小砂粒少	良好	口縁部横ナデ 内外面剝離 激しく整形不明瞭	体部内外面剝離激しい

第123号住居跡 (第426~428図 図版133)

台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 B19他である。



- 1 黒褐色土 (若干のローム粒を含む)
- 2 黒褐色土 (1層より多くのローム粒を含む、しまり良い)
- 3 黄褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
- 4 黄褐色土 (3層より小さいロームブロックを含む、しまり余り良くない)
- 5 黒色土 (きめが細くやや粘性を帯る)

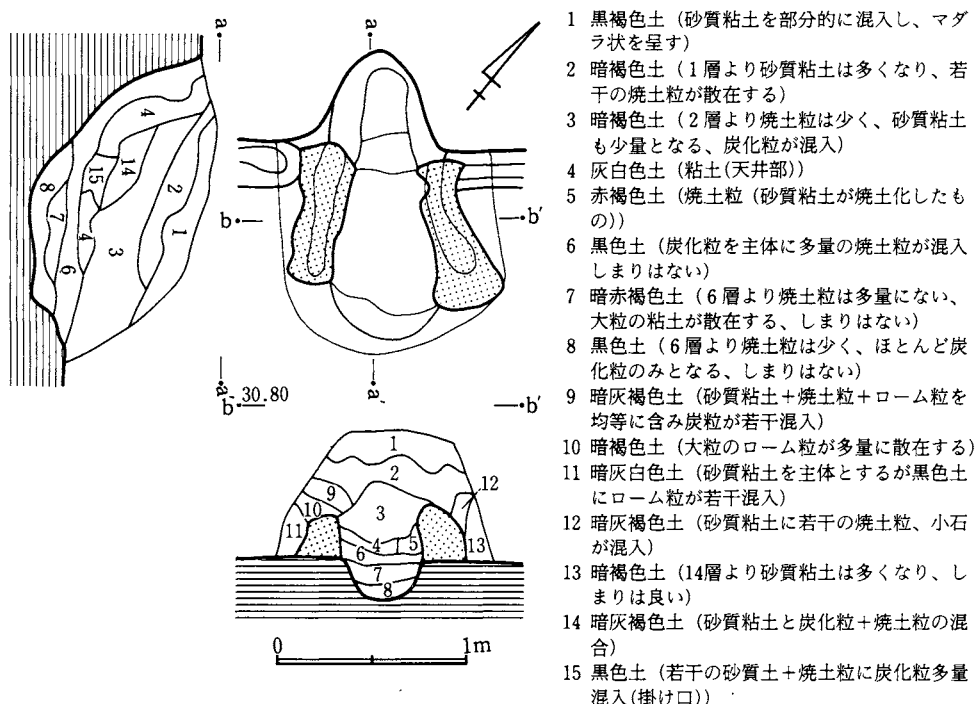


第426図 第123号住居跡実測図 (1/60)

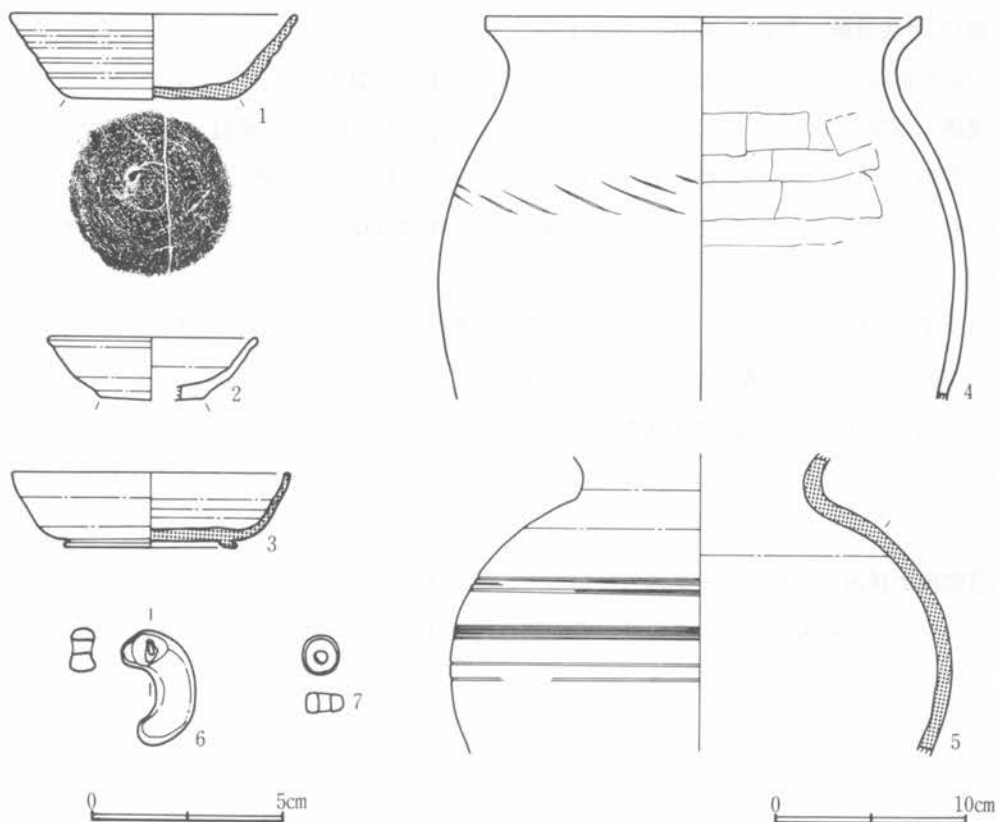
遺構 南西壁5.10m、北西壁5.45mあり、面積29.64m²で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央にありN42°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直に立ち上がり、確認面より約65cmを計る。壁溝はカマド袖部下をもめぐり全周する。巾約20cm、深さ約5cmである。床面は中央部がやや凹面状を呈するが、ほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置され、P₅はカマドの対面に配置される。

カマド 北西壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約45cmを計り、煙道部中ほどで段を有する。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。火床部は全体的に深く掘り込まれていた。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は坏・高台付坏・壺・甕・勾玉・白玉が出土している。1の坏は覆土中から、3の高台付坏は壁際から、4の甕はカマド両袖脇からの出土であった。P₅の覆土中からは、6の勾玉、7の白玉が出土している。



第427図 第123号住居跡カマド実測図 (1/40)



第428図 第123号住居跡出土遺物実測図 (1~5 1/4、6 1/2)

第123号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体	法 量 ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
123-1	坏	3/4 完 3/4			(15.0) 8.0 4.5	灰白色-灰白色 砂粒少 やや不良		底部回転ヘラ削り	須恵器 体部下端立ち上り部分摩耗著しい
123-2	坏	3/4 1/4 3/4			(11.0) (5.4) 3.2	褐色-褐色 粒多 良好	小砂	底部糸切り	
123-3	高台付坏	3/4 3/4 2/4			(14.6) (9.1) 3.8	灰色-灰黒色 粒少 良好	砂	底部回転ヘラ削り後高台貼付	須恵器
123-4	壺	3/4 — 1/4			(23.0) — (20.0) 胴最大径 (27.8)	黒褐色-黄褐色 小砂粒多 良好		口縁部口唇をつまんで横ナデ 外面ナデ 内面ナデ一部横位ヘラ削り	内面剥離あり
123-5	壺	3/4 — 2/4			(15.2) 胴最大径 (26.3)	灰白色-灰白色 白色砂粒多 やや不良		肩部から口頸部にかけて横ナデ 胴部には3ヶ所それぞれ2~4本のヘラ描き沈線が入る	須恵器
123-6	勾玉	完		長さ 2.95 孔径上0.32×0.20 下0.35×0.22		含滑石蛇紋岩		重量6.6g	
123-7	白玉	完		厚さ 0.39~0.53 径 1.01×0.97 孔径 0.34		滑石		重量2.0g	

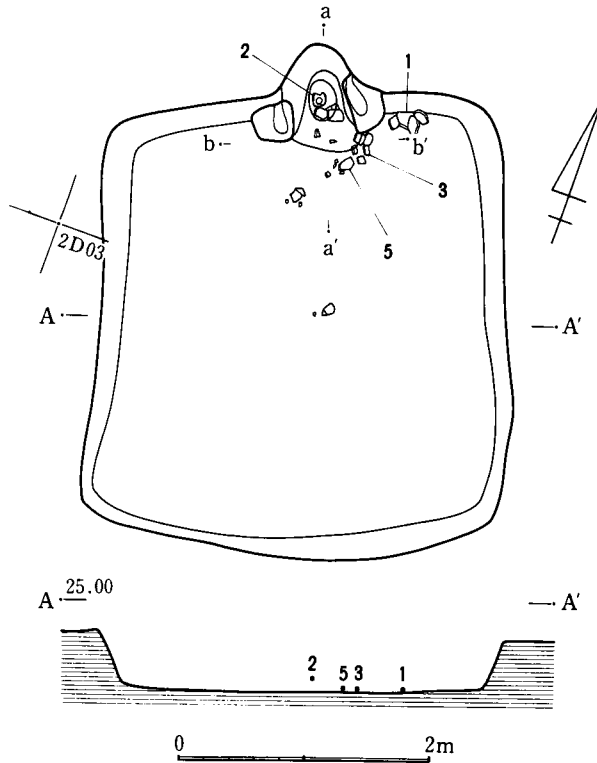
第133号住居跡 (第429～431図 図版135)

台地東端傾斜面、調査区最東端に位置し、グリッドは2 D03他である。

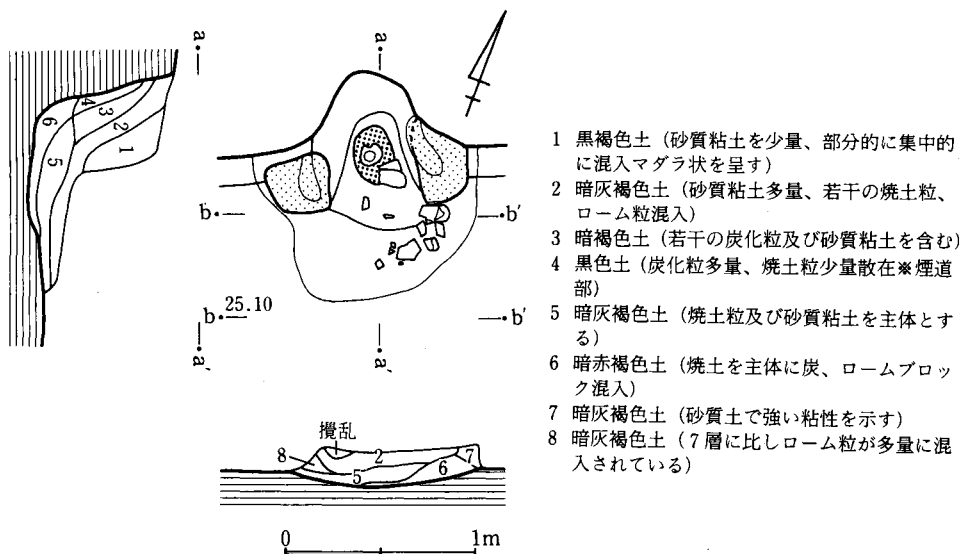
遺構 西壁2.90m、北壁3.00m、東壁3.20m、南壁3.20mあり、面積11.35㎡で隅丸不整形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁やや右寄りに位置しN20°Wである。壁は傾斜をもって立ち上がり、確認面より約40cmを計る。壁溝は検出されていない。床面は軟弱であるが、平坦であった。柱穴はない。

カマド 北壁中央右寄りに位置するが、遺存状態はやや不良であった。壁への掘り込みは約35cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用していた。火床部は壁へ掘り込まれた部分にあり、径25×20cmのやや浅い楕円状を呈する。2の坏は底部を上に向けて、焼土ブロックと砂質粘土を円筒状にした上に置かれていたことから、この坏は支脚上面として利用されたものであろう。

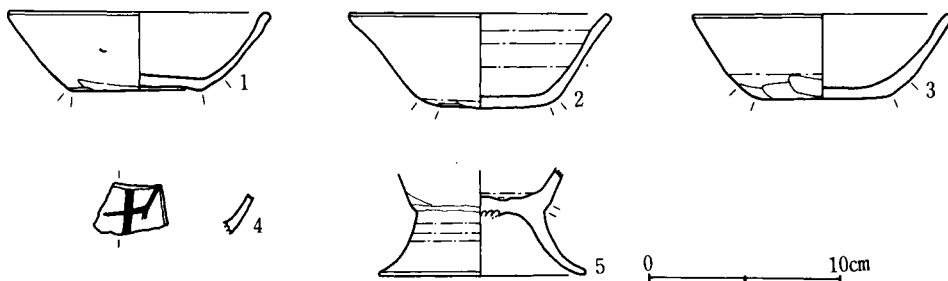
遺物出土状況 遺物は坏・高台付坏が出土している。2については前述の通りである。1の坏はカマド右袖脇床直から、3の坏、5の高台付坏はカマド前面の床直からの出土であった。4の坏の小破片は墨書土器である。



第429図 第133号住居跡実測図 (1/60)



第430図 第133号住居跡カマド実測図 (1/40)



第431図 第133号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第133号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm	法量 ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内—外	成形・調整	備考
133-1	坏	3/4 完	13.3 6.7 4.1			暗褐色—黒褐色 砂粒やや多	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り	外面全体、底部内面ス ス付着
133-2	坏	5/6 完	13.2 6.2 4.8			暗褐色—暗褐色 砂粒多	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部直交方向手持ちヘラ削 り	底部内面スス付着
133-3	坏	3/4 完	(13.2) 6.5 4.3			暗褐色—暗褐色 砂粒多	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向手持ちヘラ削り	
133-4	坏	小破片	—	—	—	褐色—暗褐色 粒少	砂 良好		墨書土器 不明
133-5	高台付坏	脚部のみ	—	—	(5.5) 10.8	暗褐色—暗褐色 小砂粒少	良好	脚部内外面横ナデ	

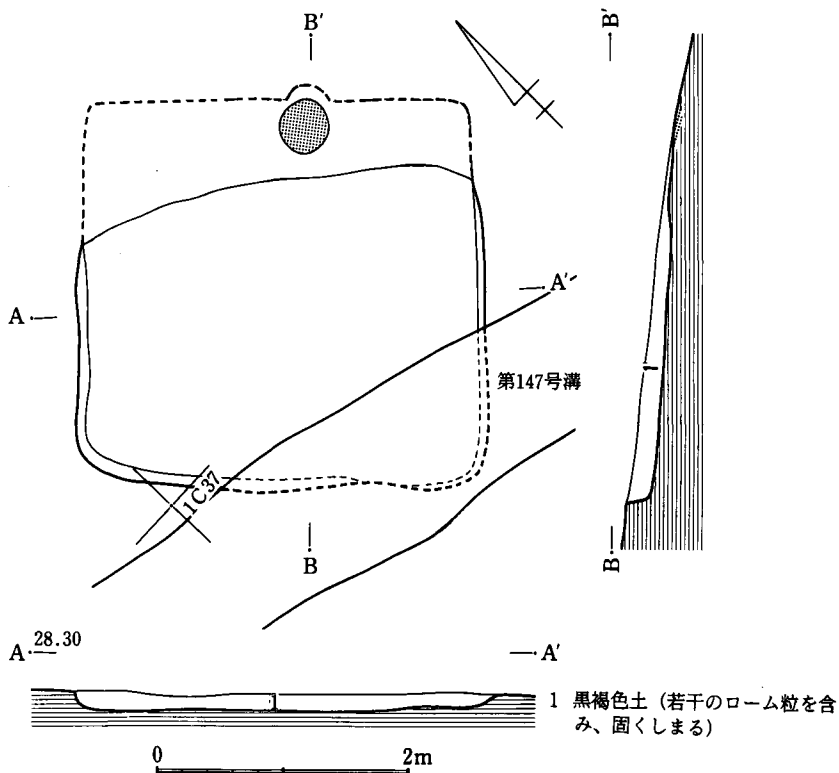
第137号住居跡 (第432図)

台地東側緩傾斜面、調査区東側に位置し、グリッドは1 C 37他である。第147号溝と重複関係にあるが、本跡が古い。

遺構 北側部分が傾斜のため検出されず、カマドの火床部のみを検出にとどまった。南西壁3.05m、北西壁推定2.80mあり、面積9.48㎡で隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北東壁中央に位置するものと推定されN46°Eである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約10cmを計る。壁溝は確認されていない。床面は東側部分が検出されず、全体的に軟弱であった。柱穴は検出されていない。

カマド 北東壁中央に位置するものと推定され、遺存状態は火床部を残すのみであった。火床部の径は40×40cmであった。

遺物出土状況 土層は1層のみであった。遺物は図示できるものがなかった。覆土中より不明鉄製品の小破片が2点出土した。



第432図 第137号住居跡実測図 (1/60)

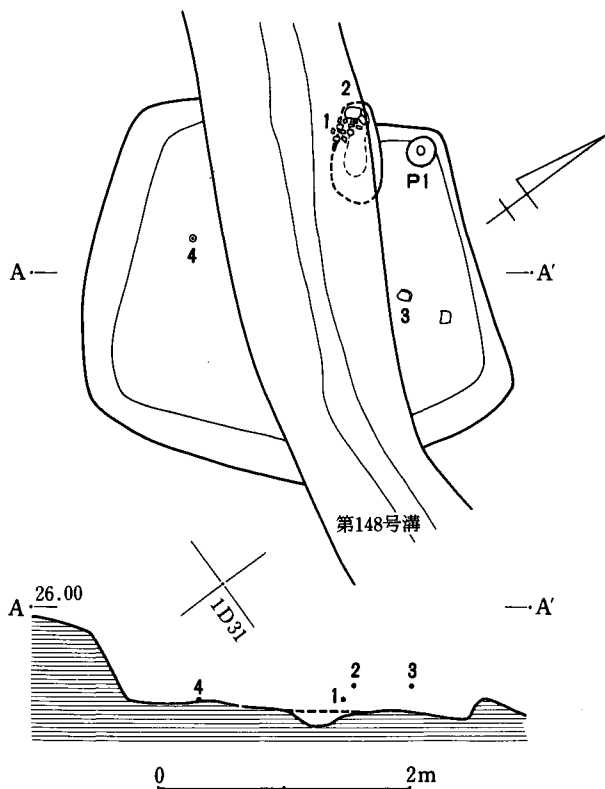
第149号住居跡 (第433・434図 図版135・161)

台地東端傾斜面、調査区東端に位置し、グリッドは1 D20他である。第148号溝と重複関係にあり、本跡が古い。

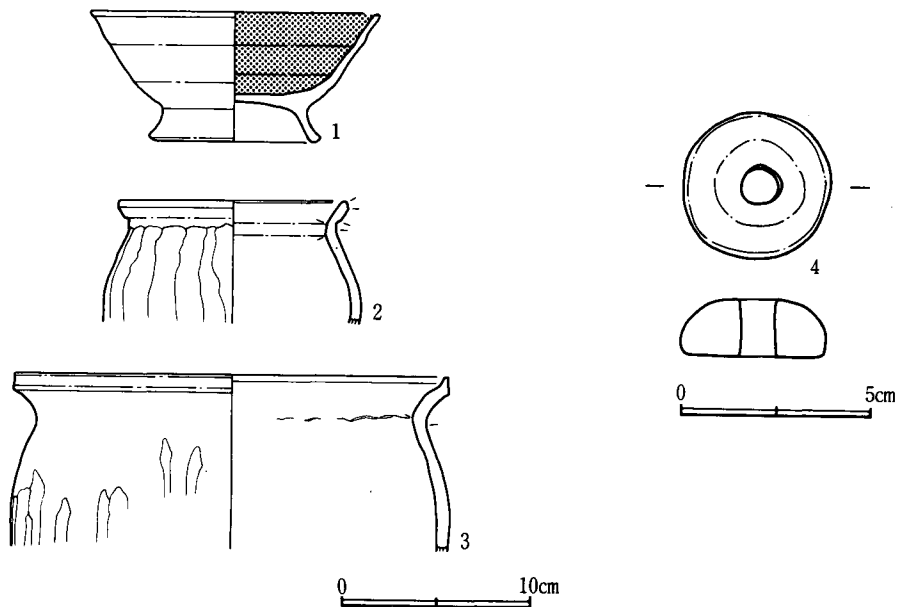
遺構 南西壁2.25m、北西壁2.35m、北東壁2.05m、南東壁3.35mあり、面積8.16㎡で南東壁が張る不整台形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁右寄りに位置しN52°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より西壁で約50cm、東壁で約10cmを計り、傾斜状況をも呈している。壁溝は検出されていない。床面はほぼ平坦である。柱穴は北コーナーで1個検出され、径30cm、深さ48cmを計る。

カマド 北西壁中央右寄りに位置し、第148号溝に切られており、遺存状態は不良であった。壁への掘り込みは約15cm程であった。カマドの構築には砂質粘土を使用していることが、調査時において確認された。火床部は播鉢状を呈するものと推定される。第148号溝による破壊のため、平面図、土層図等の作成は困難であった。

遺物出土状況 遺物は高台付坏・甕・紡錘車が出土している。1の高台付坏・2の甕はカマド内にあったものと思われ、3の甕は覆土上層から、4の紡錘車は床直からの出土であった。



第433図 第149号住居跡実測図 (1/60)



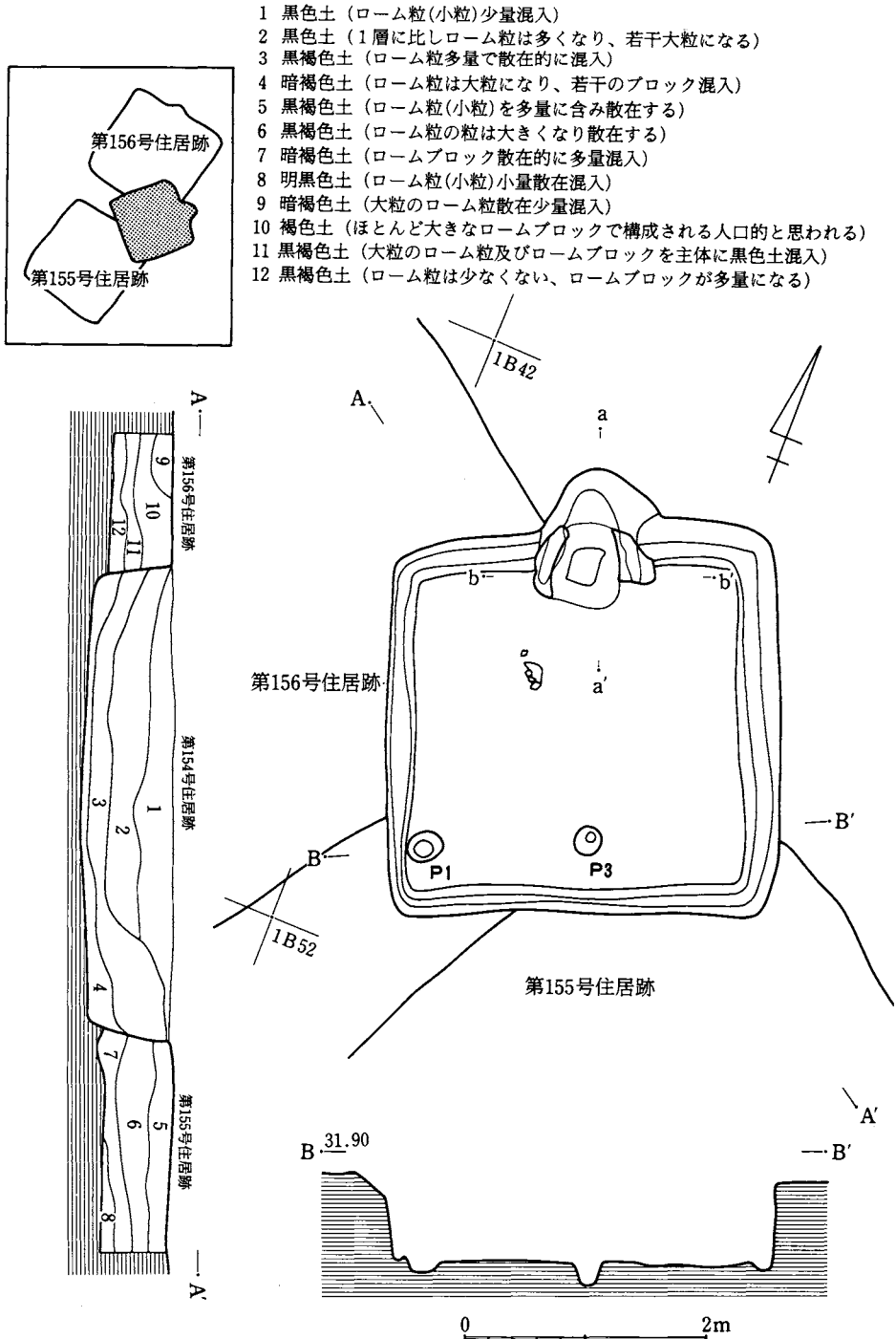
第434図 第149号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)

第149号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
149-1	高台付坏		% % % 裾径	(14.8) — 6.6 (8.2)	暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好		坏内面丁寧なミガキ 高台を坏に貼付	内黒	
149-2	甕		% — — 胴最大径	(23.0) — (9.0) (13.6)	褐色-褐色 粒少 良好	小砂	口縁部口唇をつまんで横ナ デし外面に凹面を持つ 胴部外面凹凸激しく縦位ヘラ 削りが部分的に認められる 内面ナデ	外面剝離一部あり	
149-3	甕	口縁部の み	%	(12.2) — (6.4) 胴最大径 (15.6)	赤褐色-赤褐色 小砂粒少 良好		口縁部口唇をつまんで横ナ デし胴部外面縦位ヘラ削り 内面ナデ		
149-4	紡錘車	完		高さ 1.56 径 3.9×3.9 孔径上0.80×0.75 下0.90×0.90	含滑石蛇紋岩		重量32.6g	2次火熱を受ける	

第154号住居跡 (第435～437図 図版136)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B 42他である。第155・156号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

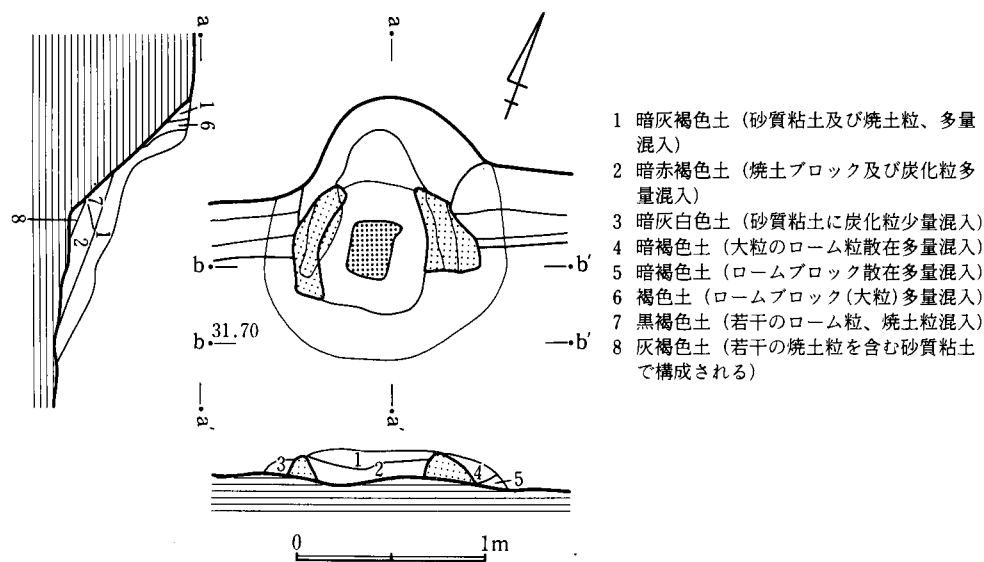


第435図 第154号住居跡実測図 (1/60)

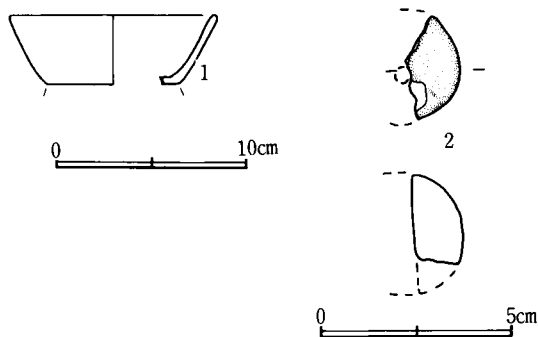
遺構 西壁2.85m、北壁3.05m、東壁3.05m、南壁2.95mあり、面積10.31m²で各コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN21°Wである。壁はほぼ垂直をもって立ち上がるが、北東側がやや緩傾斜をもっており、確認面より約70cmを計る。壁溝は袖部下をもめぐり全周し、巾約15cm、深さ約5cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は2個検出され、P₁が南西コーナーに配置され、P₂がカマドの対面に配置されている。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約50cmを計る。カマドの構築には砂質粘土が使用されていた。火床部は長軸30cm、短軸25cmと不整形形状を呈しているが、挿鉢状を呈するものと思われる。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示し、第155・156号住居跡との重複関係が明瞭にできた。遺物は坏・土玉が出土している。これらは覆土中からの出土であった。



第436図 第154号住居跡カマド実測図 (1/40)



第437図 第154号住居跡出土遺物実測図 (1 1/4、2 1/2)

第154号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	□底 体 ()は推定	法量 cm 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
154-1	坏		3/4 1/4 3/4	(10.9) (6.9) 3.6	黒褐色-黒褐色 砂粒少	良好	底部ヘラ削り	
154-2	土玉破片				土製		重量8g	

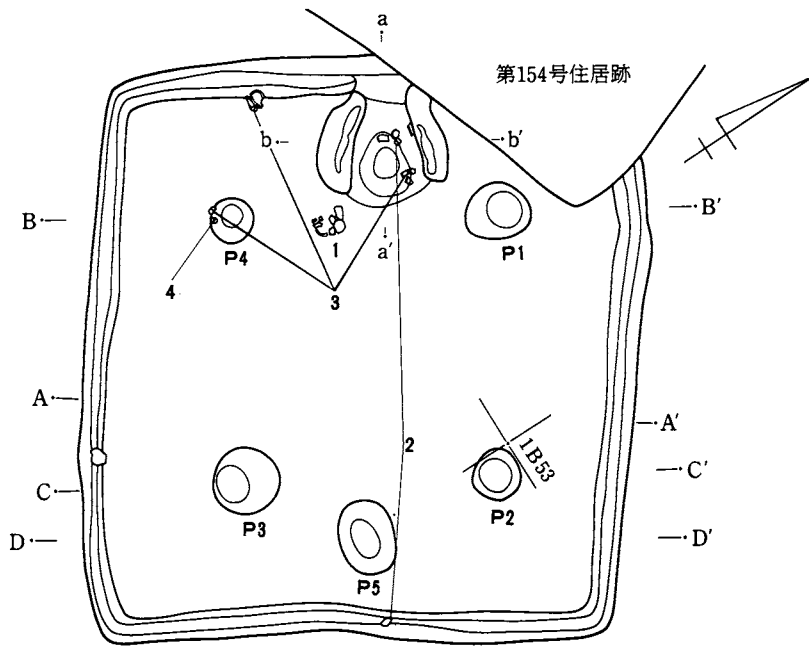
第155号住居跡 (第438~440図 図版136・161)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B53他である。第154号住居跡と重複関係にあり、本跡が古い。

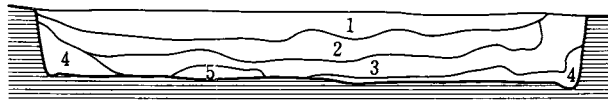
遺構 南西壁4.30m、南東壁4.00mあり、面積19.65m²で遺存している3コーナーはほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央に位置しN55°Wである。壁はほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約50cmを計る。壁溝はカマド袖部下も検出され全周する。巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面はほぼ平坦であった。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置され、P₅はカマドの対面に位置する。

カマド 北西壁中央に位置し、一部を第154号住居跡に切られている。壁への掘り込み部が切られているが、ほとんど掘り込まれていないものと推定される。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は径50×40cmあり、浅い播鉢状を呈する。

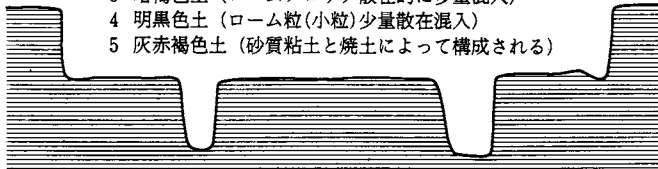
遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は甕・フラスコ形長頸壺・紡錘車・軽石が出土している。1の甕はカマド前の床直から、2の甕と3のフラスコ形長頸壺は破片の一部がカマド内から、4の紡錘車はP₄付近からそれぞれ出土している。



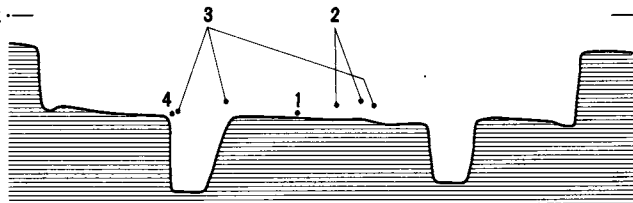
A. 31.90



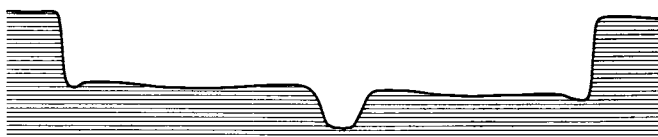
B. —



C. —



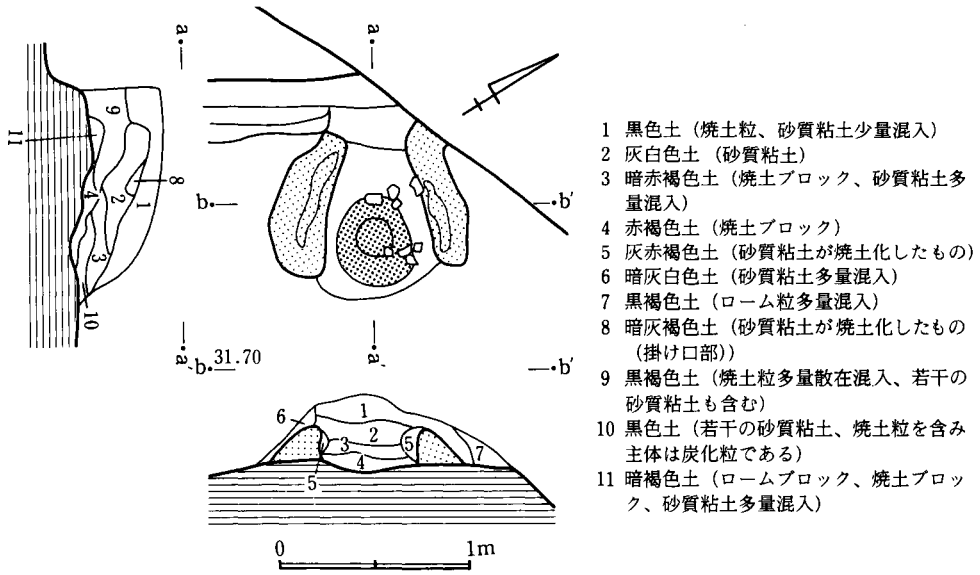
D. —



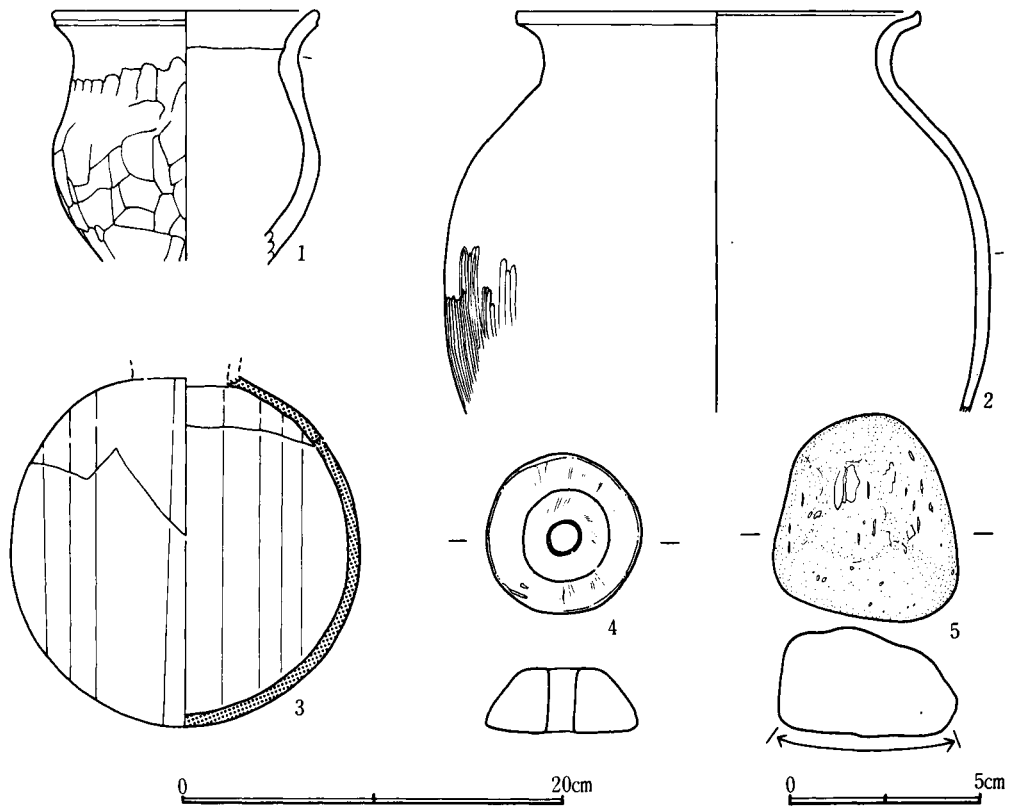
- 1 黒褐色土 (ローム粒(小粒)を多量に含み散在する)
- 2 黒褐色土 (ローム粒の粒は大きくなり散在する)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック散在的に多量混入)
- 4 明黒色土 (ローム粒(小粒)少量散在混入)
- 5 灰赤褐色土 (砂質粘土と焼土によって構成される)

0 2m

第438図 第155号住居跡実測図 (1/60)



第439図 第155号住居跡カマド実測図 (1/40)



第440図 第155号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4・5 1/2)

第155号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	法量 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
155-1	甕	完 一 %	14.0 — (12.9) 胴最大径 (14.0)	— — (12.9) — (14.0)	黒褐色-褐色 小砂粒多 良好	小	口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面上半縦位下半 斜位へラ削り	
155-2	甕	半 一 %	21.0 — (20.7) 胴最大径 (28.7)	— — (20.7) — (28.7)	黒褐色-灰褐色 小砂粒多 良好		口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面ナデ下半縦位 へラナデ 内面ナデ	内外面にスス附着剝離 あり
155-3	フラスコ 形長頸瓶	一 一 %	— — (18.0) 胴最大径 (18.2)	— — (18.0) — (18.2)	灰色-灰色 小砂粒多 堅緻 良好	小砂	体部にへラ削り調整 体部 半面に自然軸附着	須恵器 44-④と同形 の頸部をもつ
155-4	紡錘車	完	高さ 1.50 上径 2.28×2.20 下径 4.10×4.10 孔径上 0.73×0.74 下 0.75×0.78	— — — — —	含滑石蛇紋岩		重量38.8g	
155-5	軽石		53×48×27	— — — — —	浮岩		重量24g	

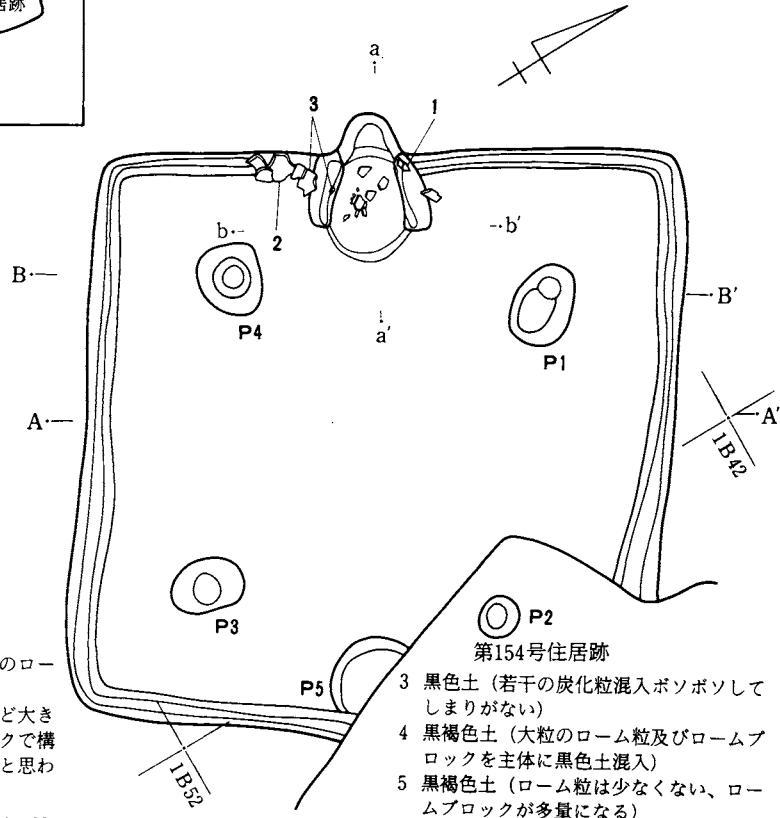
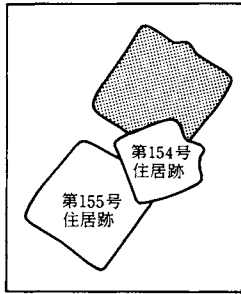
第156号住居跡 (第441~443図 図版136・162)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B42他である。第154号住居跡と重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 南西壁4.20m、北西壁4.45mあり、面積21.39㎡で破壊された東コーナーを除いてほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央左寄りに位置しN74°Eである。壁はほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約50cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は4個検出されている。P₁~P₄は対角線上に配置され、P₂は第154号住居跡に上面を切られているために、径が小さく見える。P₅も第154号住居跡に切られていて、長軸は不明であるが、短軸50cmを計るが、深さが約3cmと非常に浅く、柱穴とするには無理があると思われ、貯蔵穴か入口部施設の可能性がある。

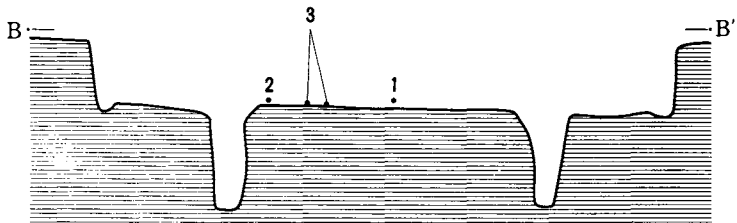
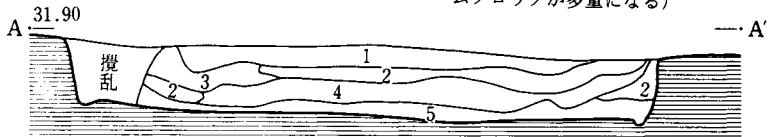
カマド 北西壁中央左寄りに位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約35cmを計る。床面と煙道部の境に段を有する。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は全体的に浅い掘鉢状を呈している。

遺物出土状況 土層は全体的にロームブロックの混入が多く、人為的に埋土されたものと推定される。遺物は坏・甕・鎌が出土している。1の坏にカマド内から、2の甕はカマド左袖部脇の床直から、3の甕はカマド内と袖部左脇床直からそれぞれ出土している。4の鎌は覆土中からであった。



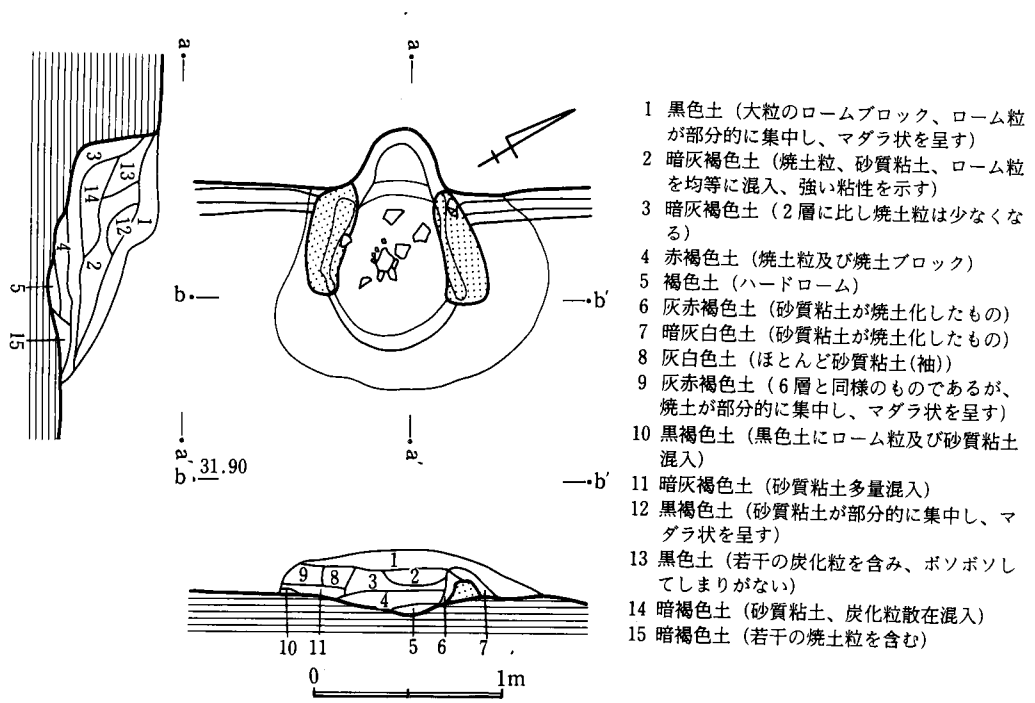
- 1 暗褐色土（大粒のローム粒散在混入）
- 2 褐色土（ほとんど大きなロームブロックで構成される人工的と思われる）

- 3 黒色土（若干の炭化粒混入ボソボソしてしまりが無い）
- 4 黒褐色土（大粒のローム粒及びロームブロックを主体に黒色土混入）
- 5 黒褐色土（ローム粒は少なくない、ロームブロックが多量になる）



0 2m

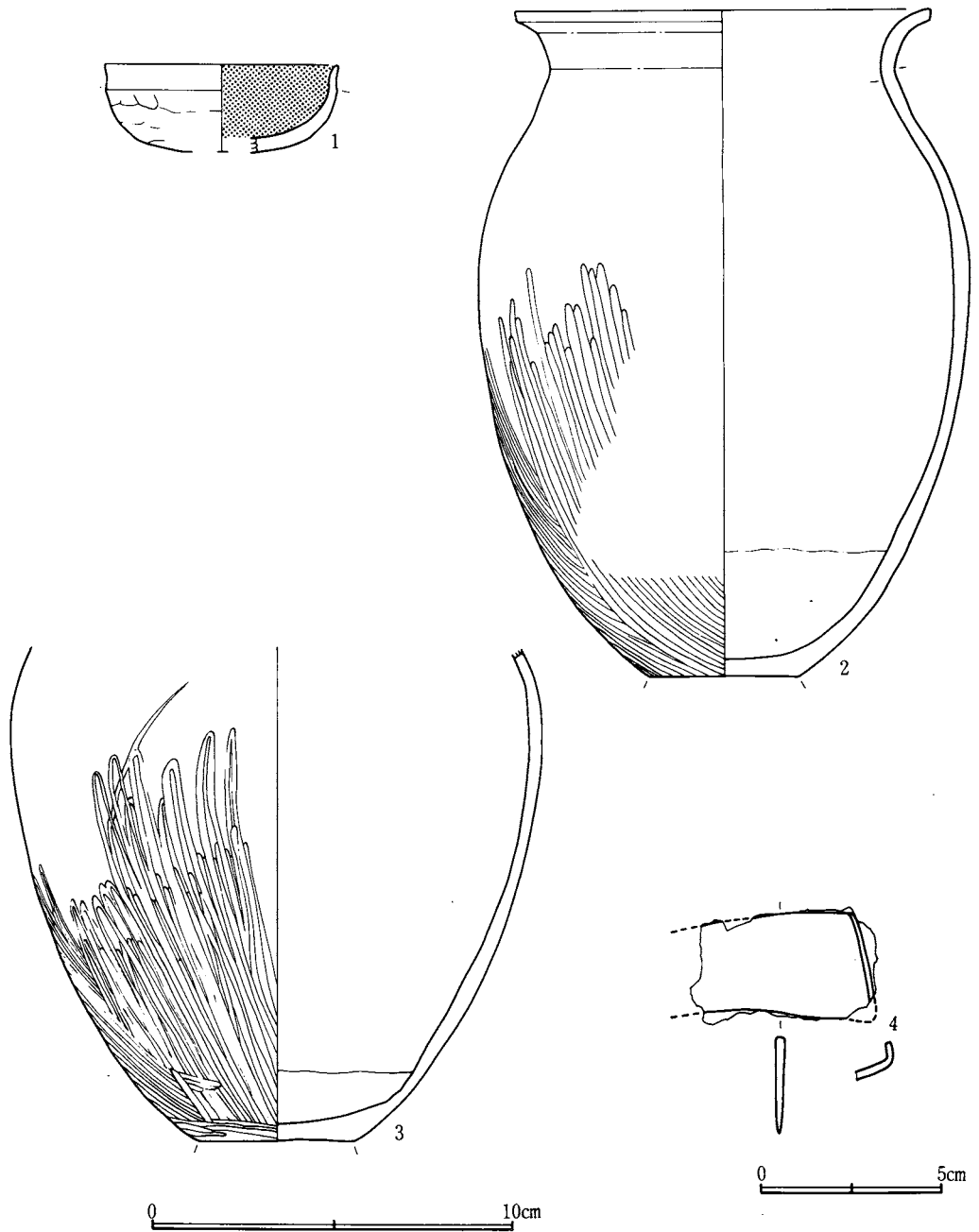
第441図 第156号住居跡実測図 (1/60)



第442図 第156号住居跡カマド実測図 (1/40)

第156号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底体()は推定	法量 cm	口径底径器高	色調胎土焼成	内一外	成形・調整	備考
156-1	坏	—	%	—	13.0 — (4.9)	黒色—黒褐色 — 砂粒多	小 良好	口縁部外面～体部内面ミガキ 外面ヘラ削り後ナデ	内黒
156-2	甕	—	% % % 胴最大径	—	23.1 8.3 (36.4) 27.3	黄褐色—黒褐色 小砂粒多 母 良好	含金雲	口縁部口唇をつまんで横ナデ 胴部ナデ下半縦位ヘラナデ 内面ナデ 底部ヘラ削り後ナデ	内外面スス付着
156-3	甕	—	% % % 胴最大径	—	— 8.4 (26.0) (29.6)	黄褐色—褐色 小砂粒多 良好	含金雲母	胴部ナデ、下半縦位ヘラナデ 底部ヘラ削り後ナデ	内外面剝離激しい
156-4	鐵	半分欠損	—	長さ	9.2	鉄製	—	—	—



第443図 第156号住居跡出土遺物実測図 (1~3 1/4、4 1/2)

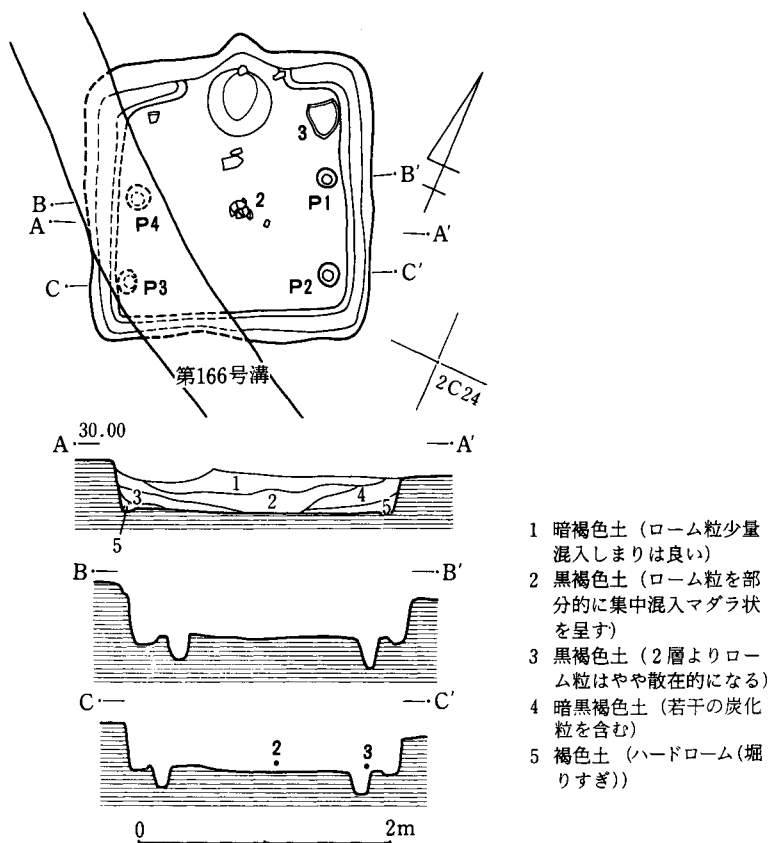
第167号住居跡 (第444・445図 図版136)

台地南東緩斜面、調査区南側に位置し、グリッドは2C23他である。第166号溝と重複関係にあり、本跡が古い。

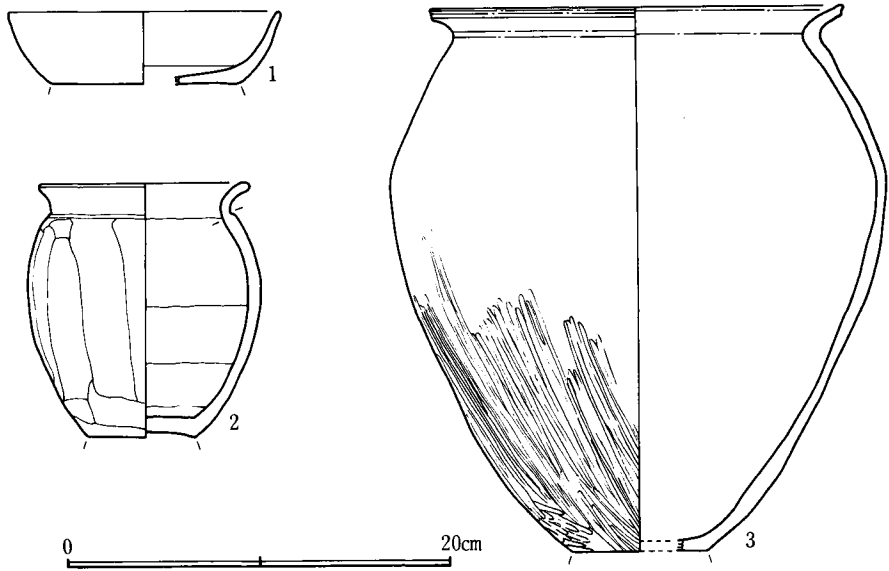
遺構 東壁2.10m、南壁2.00mあり、面積4.88㎡で、南西・南東コーナーがほぼ直角をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN21°Wである。壁は四辺ともにやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約30~40cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約15cm、深さ約5cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は4個検出されている。P₁・P₄は東・西壁際の中央に、P₂・P₃は南東・南西コーナー付近の壁際に配置され、特殊形態を示している。

カマド 北壁中央に位置し、袖部等の検出は困難を極め遺存状態は不良であった。壁への掘り込みは約15cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用していることが調査時に判明している。火床部は全体的に浅い播鉢状を呈している。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物は坏・壺・甕が出土している。2の壺は床面中央部から、3の甕は北東コーナー床直からの出土であった。1の坏は覆土中からであった。



第444図 第167号住居跡実測図 (1/60)



第445図 第167号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第167号住居跡出土遺物観察表

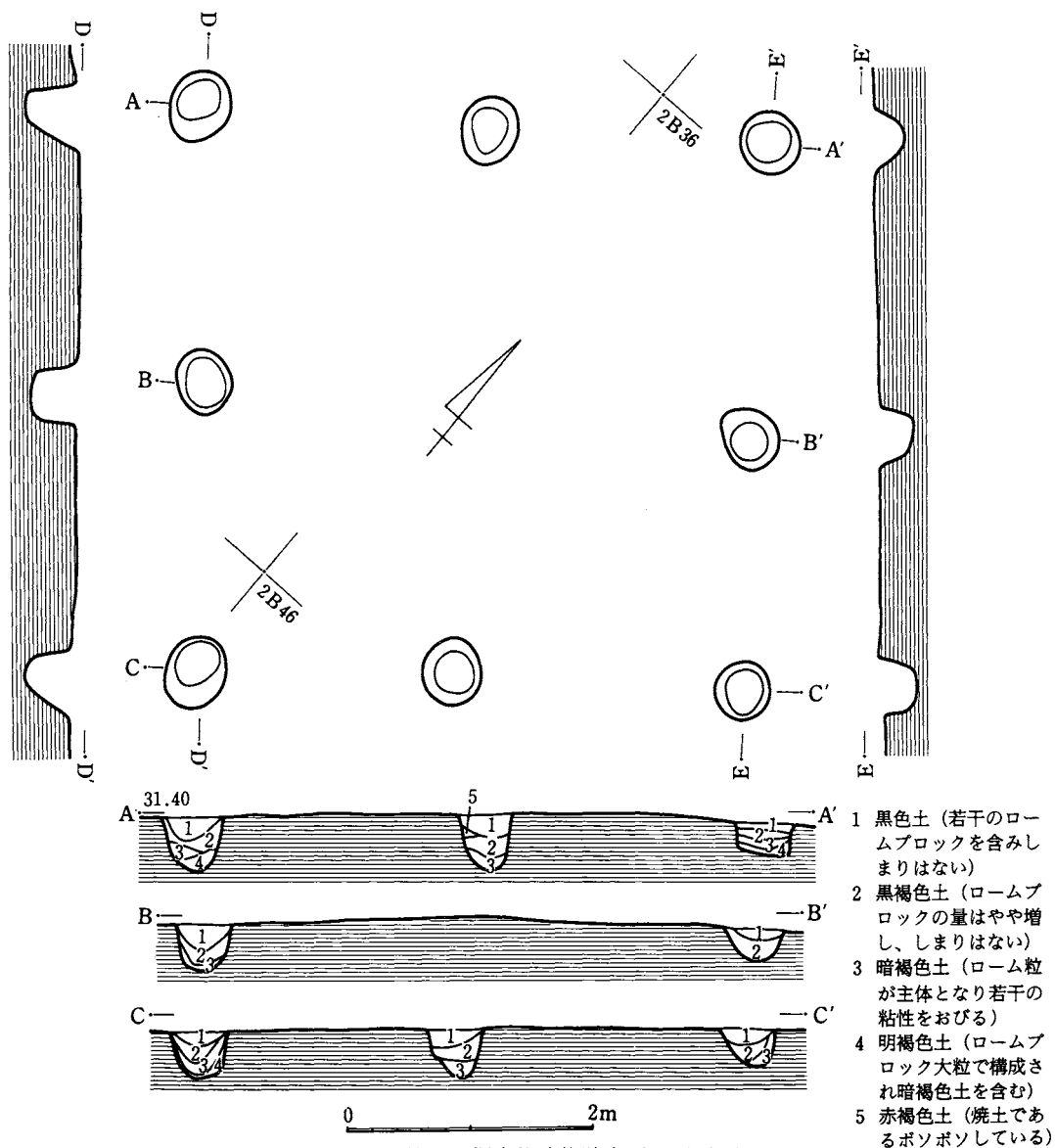
遺物番号	器種	遺存度	口径 底径 器高 ()は推定	法量 cm	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
167-1	坏	3/6 1/6 3/6	(14.0) (9.5) 3.8		黒色-黒色 少 不良	砂粒	体部内面ミガキ 外面ヘラ 削り後ナデ 底部ヘラ削り	内外面摩耗、剝離著し い スス附着
167-2	壺	3/6 完 3/6	11.1 12.3 5.6 胴最大径 12.2		黒褐色-赤褐色 小砂粒多 良好		口縁部横ナデ後胴部外面縦 位下端横位ヘラ削り 底部 ヘラ削り	内面下半赤褐色化 上 半スス附着
167-3	甕	3/6 1/6 3/6	21.8 26.2 (7.0) 胴最大径 (26.2)		黒褐色-黒褐色 小砂粒多 良好		口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面ナデ下半縦位 ヘラナデ 底部ヘラ削り	胴部内面下半赤褐色化 上半スス附着

2) 掘立柱建物跡

第60号掘立柱建物跡 (第446図 図版137)

台地南側平坦部、調査区南側に位置し、グリッドは2 B36他である。

遺構 桁行が2間、梁行が2間の掘立柱建物跡である。規模は桁行4.50m、梁行4.50mであり、主軸はどちらとも判断し難いが、N38°Wとした。掘り方は径約50cm、深さ30~50cmを計り、柱穴痕は検出されていない。掘り方の埋土は、ほとんどが版築状を呈する様であり、主にローム粒、ロームブロックを使用している。

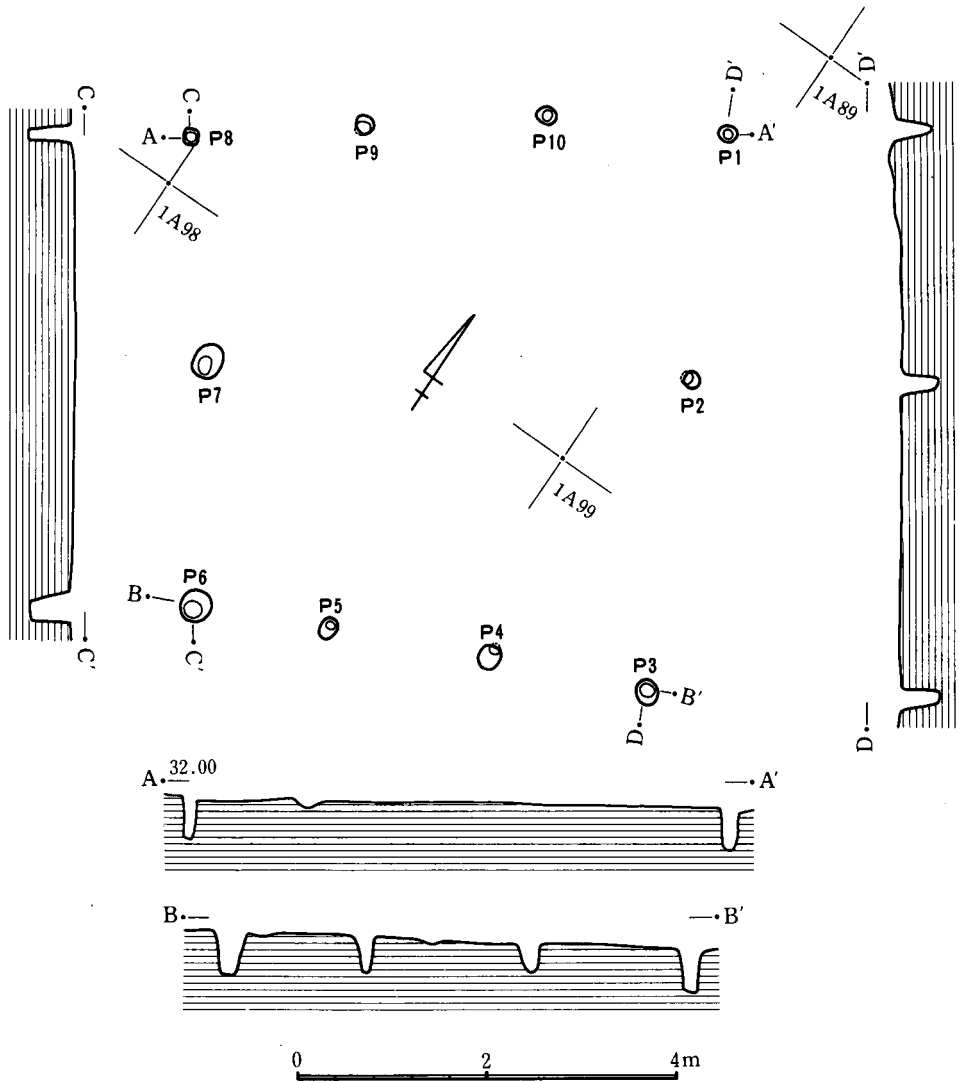


第446図 第60号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

第70号掘立柱建物跡（第447図）

台地中央平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A99他である。

遺構 桁行が3間、梁行が2間の掘立柱建物跡であると推定され、主軸はN55°Eである。規模はそれぞれ、北西列が5.70mで直線上にP₉・P₁₀が位置せず、北西列が5.80mあるが等間隔とは言えず、南東列が4.90mあるが主軸方向と約15°ほど違い、南西列が4.80mを計る。掘り方は径20~30cm、深さ確認面より40~50cmをそれぞれ計り、埋土は黒褐色土の均一性をもったものであった。遺物としてはP₆より須恵器大甕の破片が1点出土したのみであった。



第447図 第70号掘立柱建物跡実測図（1/80）

第71号掘立柱建物跡（第448図 図版137）

台地中央平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A67他である。

遺構 P₈～P₁₀の柱穴列は2間であり、主軸N5°Eである。規模は5.40mを計るが等間隔には配置されていない。掘り方は径40cm前後、深さ確認面より50cmを計り、埋土状態が均一であり、直線上に配置されていることから柱穴列とした。P₁₁・P₁₂は径40cm前後、深さ確認面より30cmを計り、配置上からは本跡との関連性については疑問が残る。遺物は出土していない。

第72号掘立柱建物跡（第448図 図版138）

台地中央平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A86他である。第24号住居跡とは重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

遺構 桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸は2間×2間のために一応N40°Wとした。柱穴はP₁～P₇である。規模は桁行3.60m、梁行3.50mであり柱穴はほとんど等間隔である。掘り方は径30～45cm、深さは確認面より30～40cmを計る。遺物は出土していない。

第73号掘立柱建物跡（第449図 図版138）

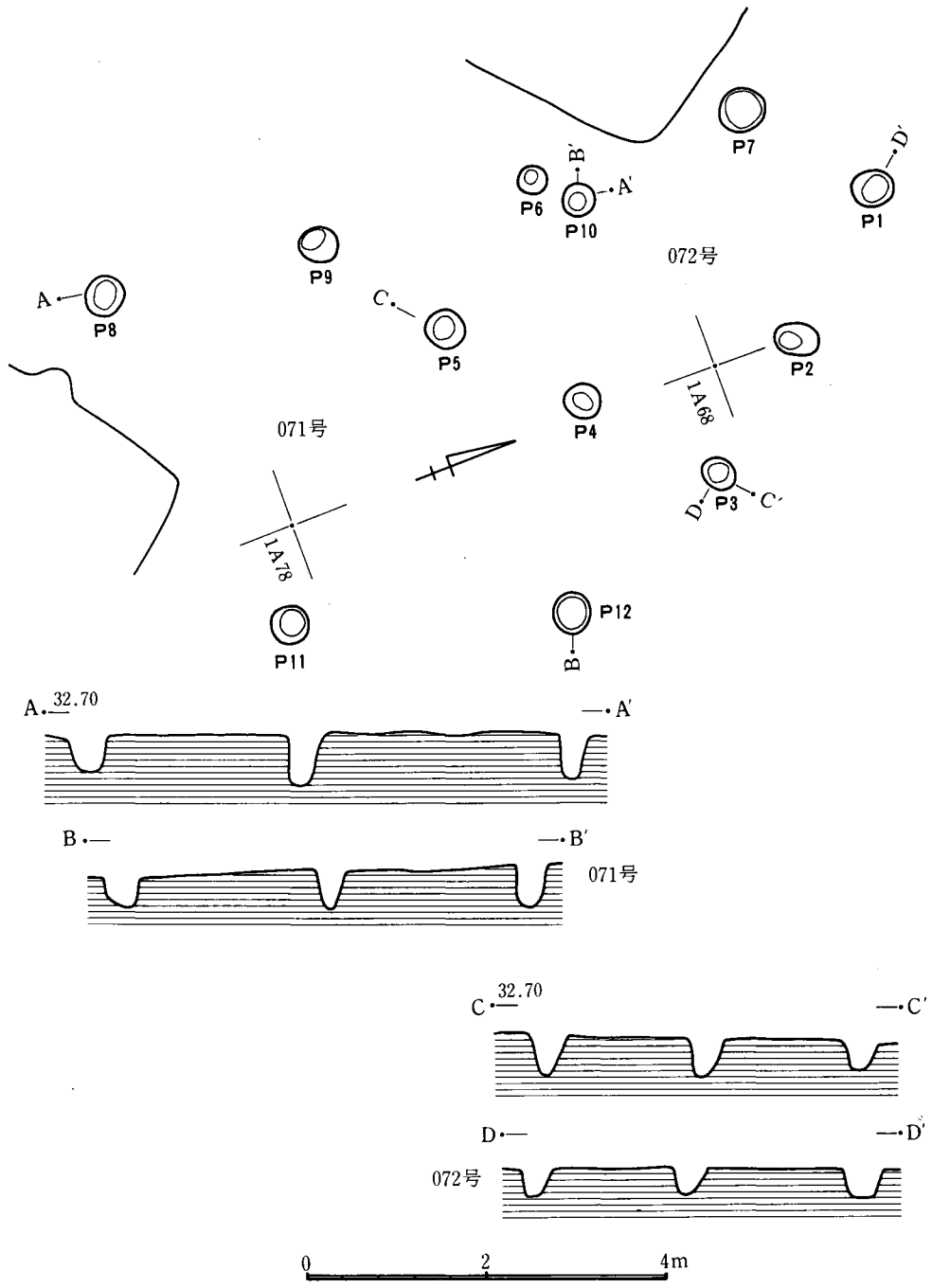
台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 A69他である。第26・27号住居跡とは重複関係にあったが、新旧関係は不明である。

遺構 桁行2間、梁行2間と推定される掘立柱建物跡である。主軸は2間×2間のため、一応N53°Eとした。規模は桁行5.00m、梁行5.00mあり、掘り方の径約25cm、深さ確認面より40cmを計る。P₁・P₂・P₃の角度が直角を呈するが、柱穴間隔は一定しない。埋土は黒褐色であり均一性をもつ。出土遺物はない。

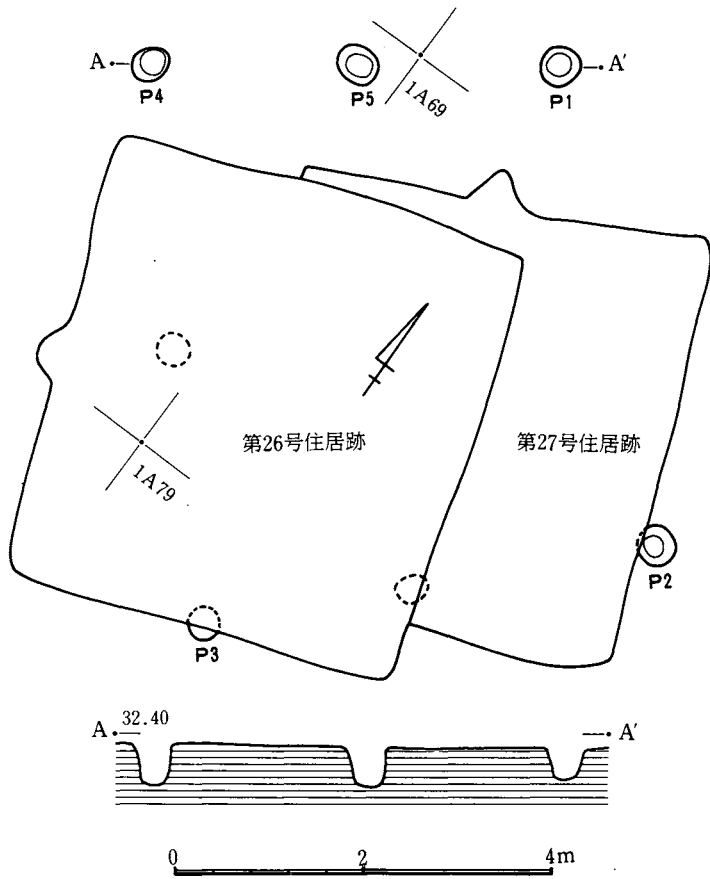
第74A号掘立柱建物跡（第450図 図版139）

台地中央平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 B61他である。

遺構 桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡である。主軸は1間のため一応N71°Eとした。規模は桁行2.00m、梁行2.00mあり、掘り方の径40～55cm、深さ確認面より30～45cmをそれぞれ計る。埋土はローム粒を含む暗褐色土である。遺物は出土していない。なお、第74B号掘立柱建物跡と同一とするならば、桁行3間、梁行1間となり規模は桁行4.80m、梁行2.00mとなる。



第448图 第71·72号掘立柱建物迹实测图 (1/80)

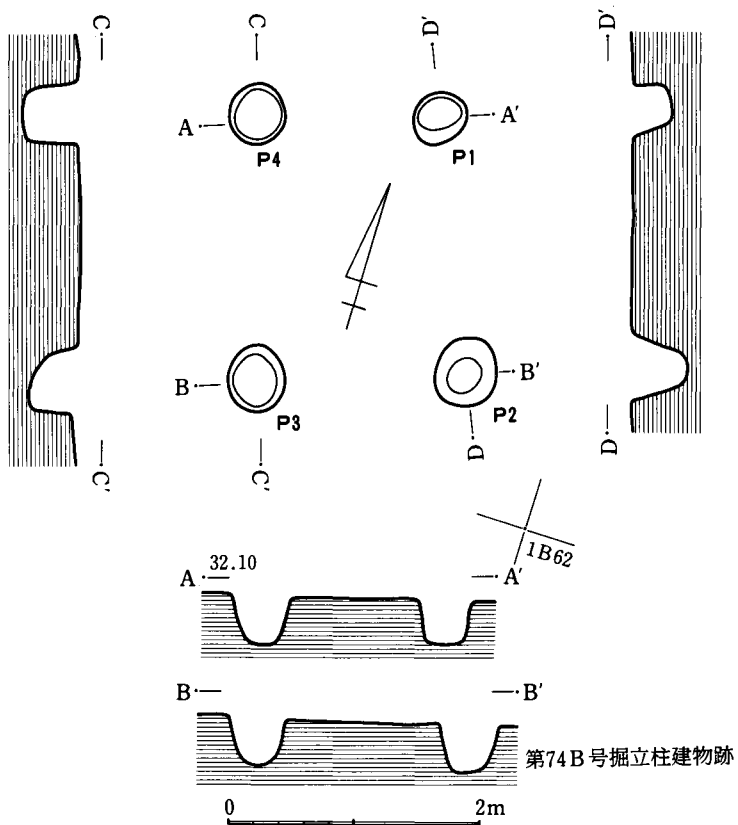
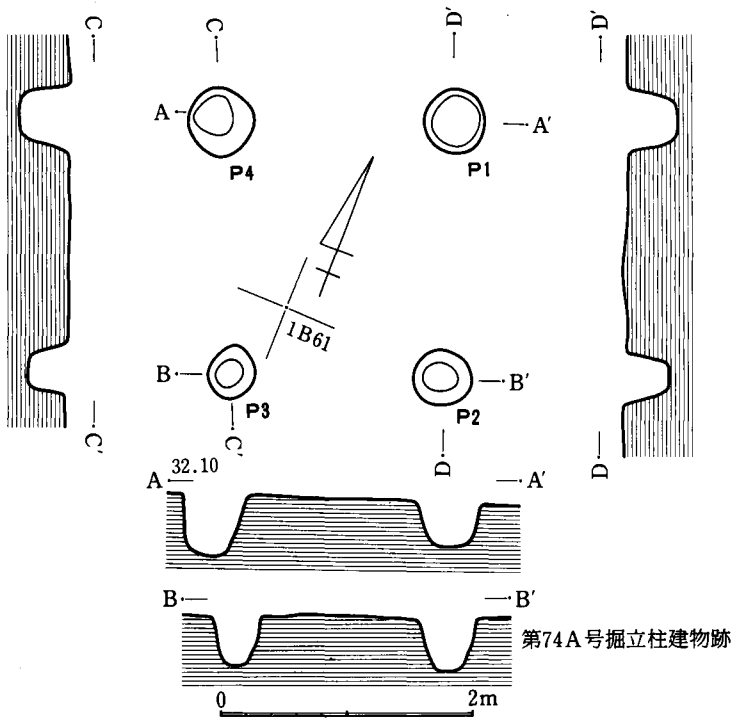


第449図 第73号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

第74B号掘立柱建物跡 (第450図 図版139)

台地中央平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 B51他である。

遺構 桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡である。主軸は1間のため一応N71°Wとした。規模は桁行1.50m、梁行2.00mあり、掘り方は径40~50cm、深さ確認面より30~35cmをそれぞれ計る。埋土はローム粒を含む暗褐色土である。遺物は出土していない。なお、第74A号掘立柱建物跡と同一とするならば、桁行3間、梁行1間となり規模は桁行4.80m、梁行2.00mとなる。調査時の判断から、当遺跡内には1間四方の掘立柱建物跡が多いことから、これらに類似するものと考えられている。

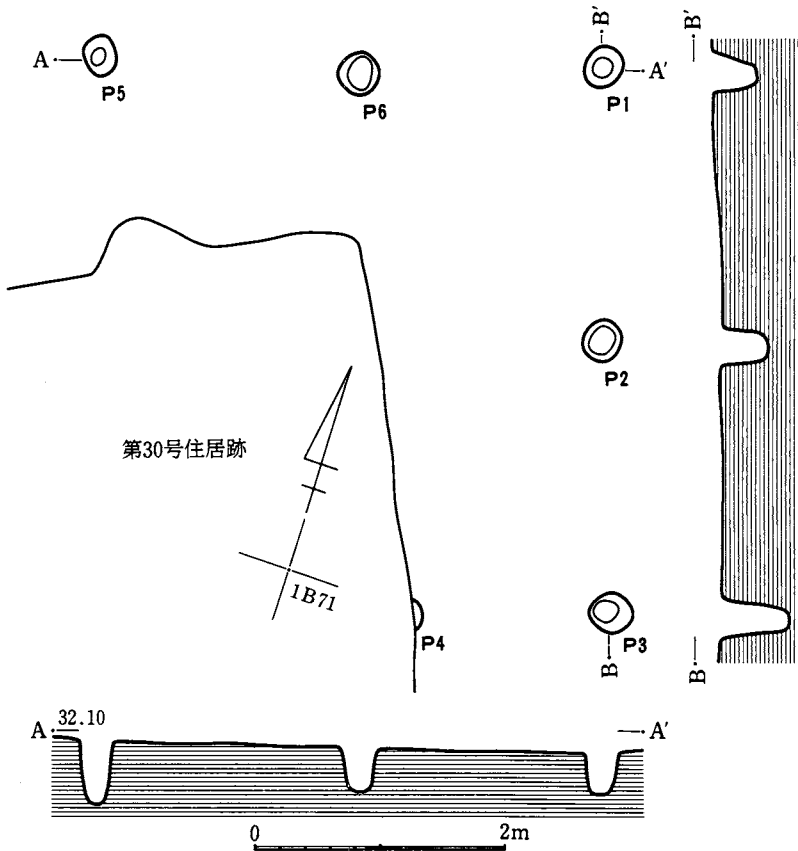


第450图 第74A·B号掘立柱建物跡実測图 (1/60)

第75号掘立柱建物跡 (第451図 図版139)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B61他である。第30号住居跡と重複関係にあるが、新旧は不明である。

遺構 桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸は2間四方のため一応N20°Wとした。規模は桁行4.30m、梁行4.00mあり、掘り方は径35cm、深さ確認面より35~50cmをそれぞれ計る。遺物は出土していない。

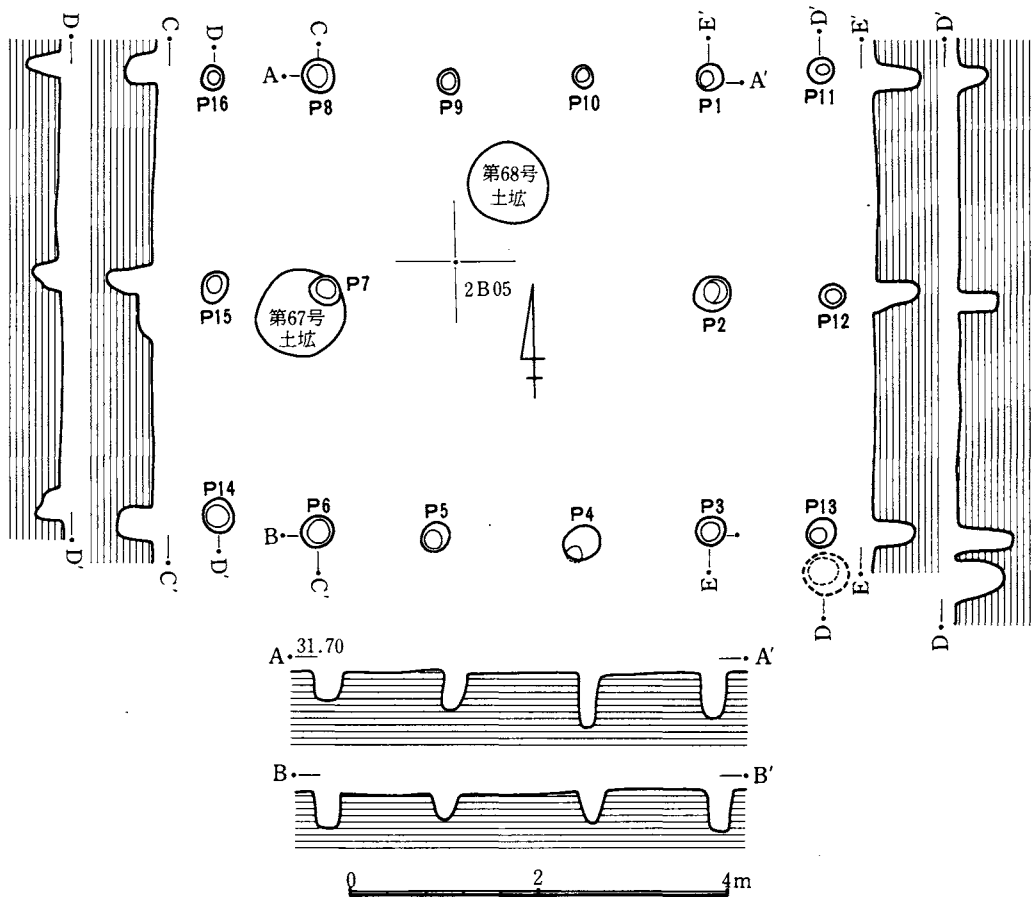


第451図 第75号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

第77号掘立柱建物跡（第452図）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 B05他である。第67号土壇とは重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 桁行3間、梁行2間で、東西に廂をもつ掘立柱建物跡である。主軸はN90°Wである。規模は桁行4.20m（1.40m等間隔）、梁行4.80m（2.40m等間隔）あり庇を入れた桁行は6.40mをそれぞれ計る。掘り方は径30cm、深さ確認面より30～40cmを計り、庇の掘り方は25cm、深さ確認面より30～40cmであり、庇の掘り方の径が若干小さいことがうかがえる。遺物は出土していない。

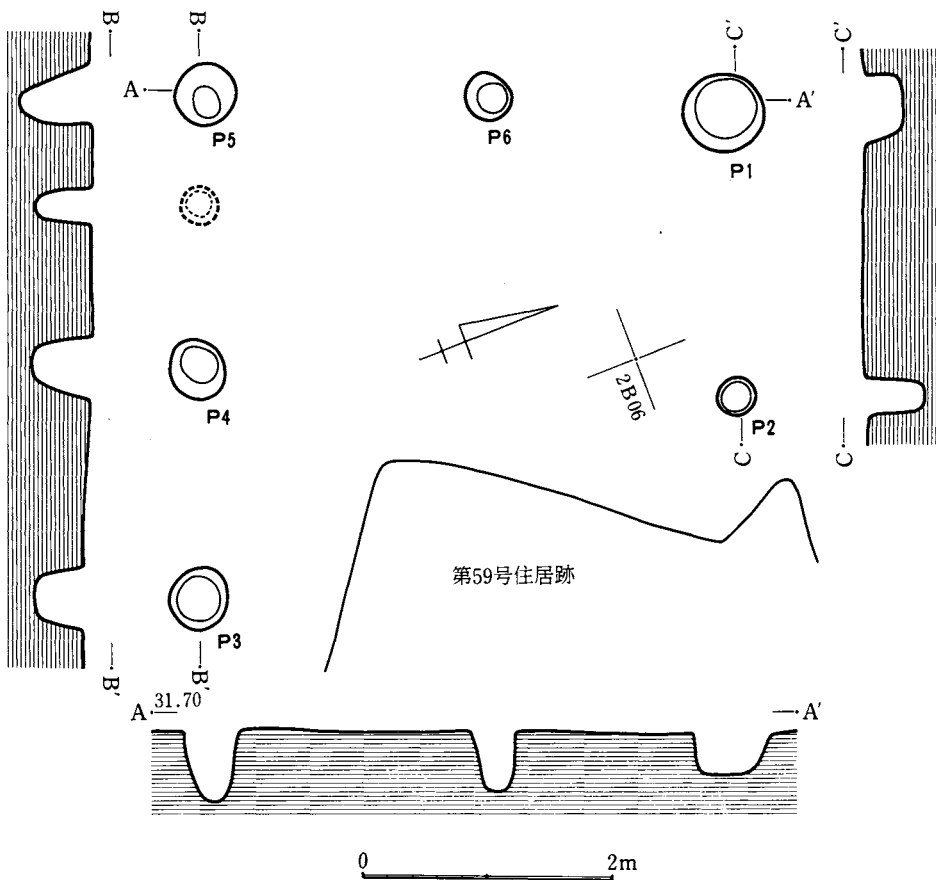


第452図 第77号掘立柱建物跡実測図（1/80）

第78号掘立柱建物跡（第453図）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 B06他である。第59号住居跡とは重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

遺構 桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸は2間四方のため一応N38°Eとした。規模は桁行4.20m、梁行4.00mあり掘り方はP₁・P₃・P₅の四隅柱穴が径約50cm、深さ確認面より40~50cm、他のP₂・P₄・P₆の径が40cm、深さ確認面より40cmと小形化している。遺物の出土はない。

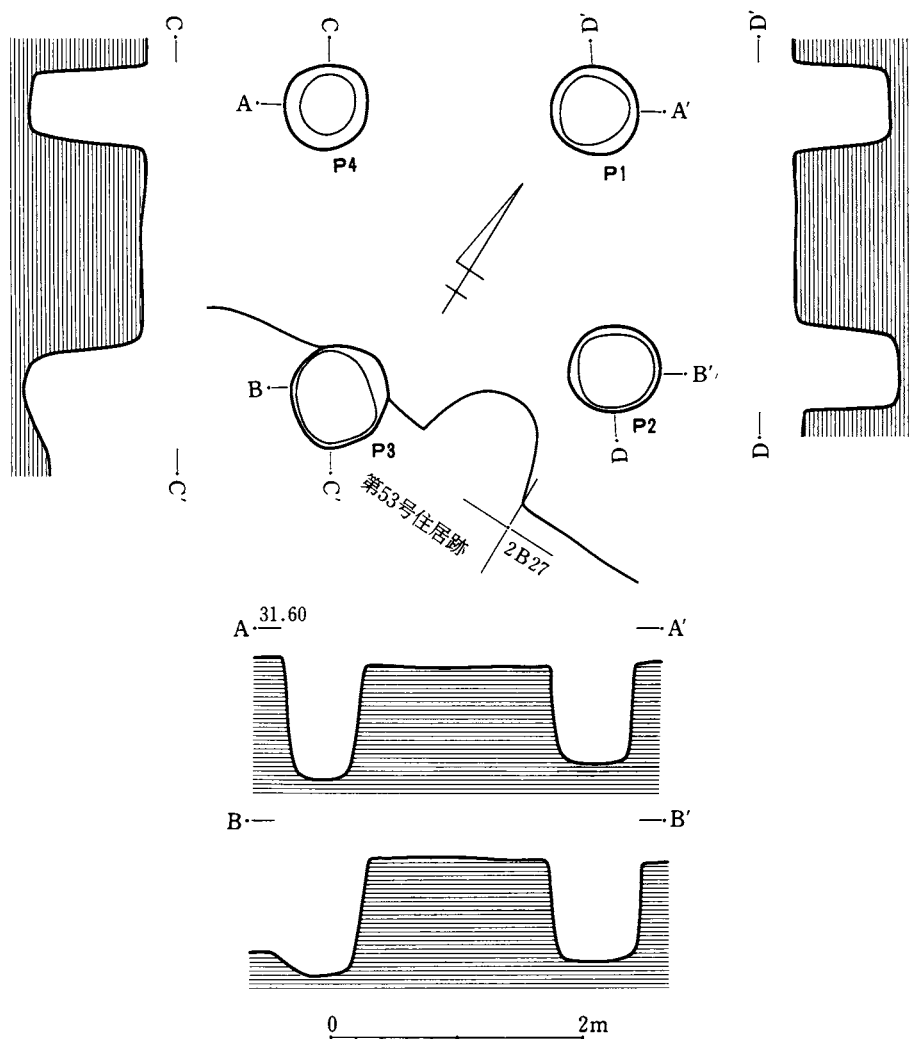


第453図 第78号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

第79号掘立柱建物跡（第454図 図版140）

台地中央平坦部、調査区南側に位置しグリッドは2 B16他である。第53号住居跡と重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡である。主軸は1間四方のため一応N38°Wとした。規模は桁行2.30m、梁行2.30mあり、掘り方は径70cm、深さ確認面より約80cmをそれぞれ計り、しっかりした作りである。埋土は、大きめのロームブロックが混入されている暗褐色土であった。出土遺物はない。

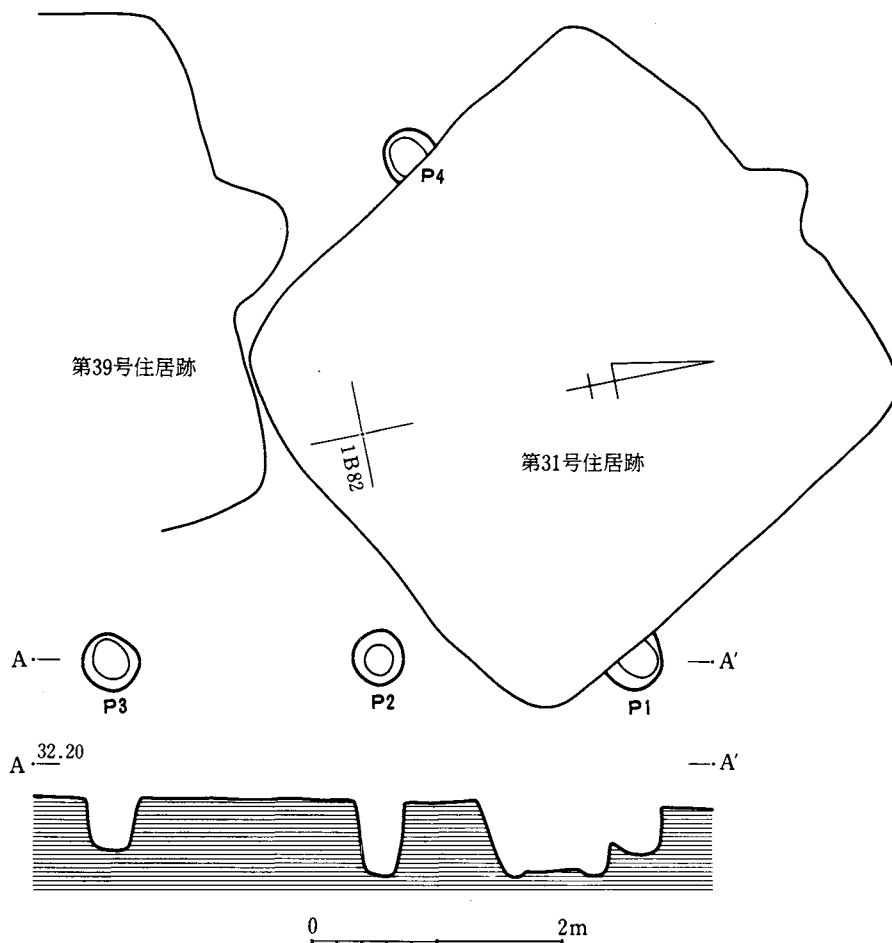


第454図 第79号掘立柱建物跡実測図（1/60）

第80号掘立柱建物跡（第455図）

台地中央平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 B82他である。第31・32号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

遺構 桁行2間、梁行2間と推定される掘立柱建物跡である。主軸は2間四方のため一応N12°Eとした。規模は桁行4.30m、梁行4.00mあり、掘り方は径約40cm、深さ確認面より約40～60cmをそれぞれ計る。出土遺物は無い。



第455図 第80号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

第95号掘立柱建物跡（第456図 図版140）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 C81他である。第92号住居跡、第113号土壇、第96号溝と重複関係にあるが、本跡が古い。

遺構 桁行4間、梁行3間の掘立柱建物跡である。主軸はN55°Eである。規模は桁行6.30m、梁行3.90mあり、掘り方は径35～50cm、深さ確認面より50～60cmをそれぞれ計る。各掘り方の床面に柱痕を明瞭に見てとれるものがある。P₁とP₂間は1.30m、P₆とP₇間は1.5m、P₇とP₈は1.70mとなり桁行間も梁行間も等間隔とは言えない。

第107号掘立柱建物跡（第457図 図版141）

台地東側緩傾斜面、調査区東側に位置し、グリッドは1 C88他である。

遺構 桁行3間、梁行3間の掘立柱建物跡である。主軸は3間四方のため一応N26°Wとした。規模は桁行3.90m、梁行3.90mあり、掘り方はP₁・P₄・P₇・P₁₁の四隅が若干径が大きく70cm前後、深さ確認面より40～60cm前後とまちまちである。他の掘り方の径は小さく径60cm前後、深さ確認面より50～60cm前後とやはりまちまちである。柱痕が各掘り方より検出されている。それによれば、桁行間が1.30m、梁行間も1.30mと同じ間隔をもっていた。掘り方の埋土は、大きめのロームブロックを多量に混入する暗褐色土であった。遺物は小破片が出土しているが図示できるものはなかった。

第119号掘立柱建物跡（第458図 図版140）

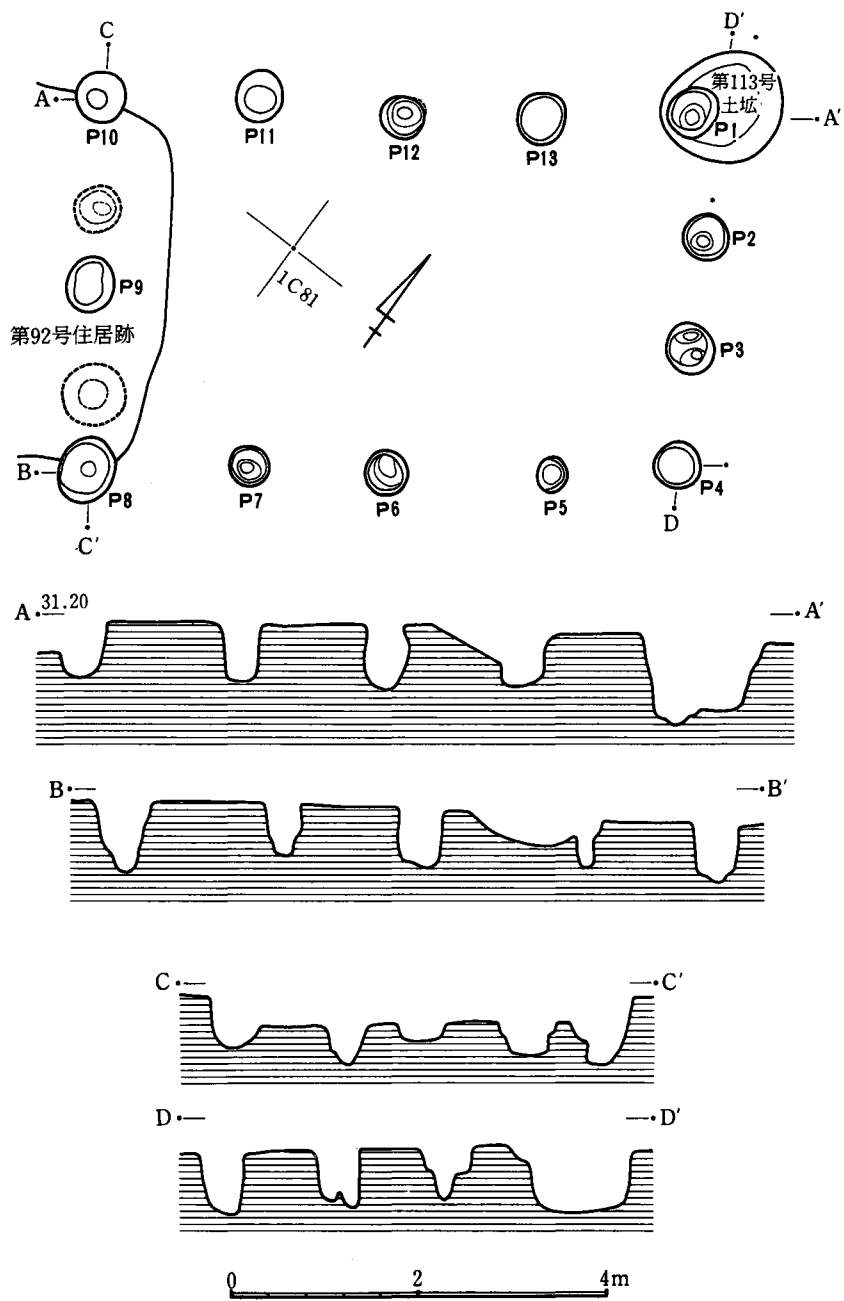
台地中央南側平坦部、調査区南側に位置し、グリッドは2 C20他である。第87号住居跡と重複関係にあるが、本跡が新しい。

遺構 桁行4間、梁行3間の掘立柱建物跡である。主軸はN52°Wである。規模は桁行5.40m、梁行5.50mあり、桁行と梁行の規模にはほとんど相違が無いが、柱穴間は桁行が1.20m、梁行が不規則で1.60m～2.00mを計る。掘り方の径は35cm前後、深さは30cm前後と比較的そろっている。埋土はローム粒を多量に混入するが、暗褐色を示している。

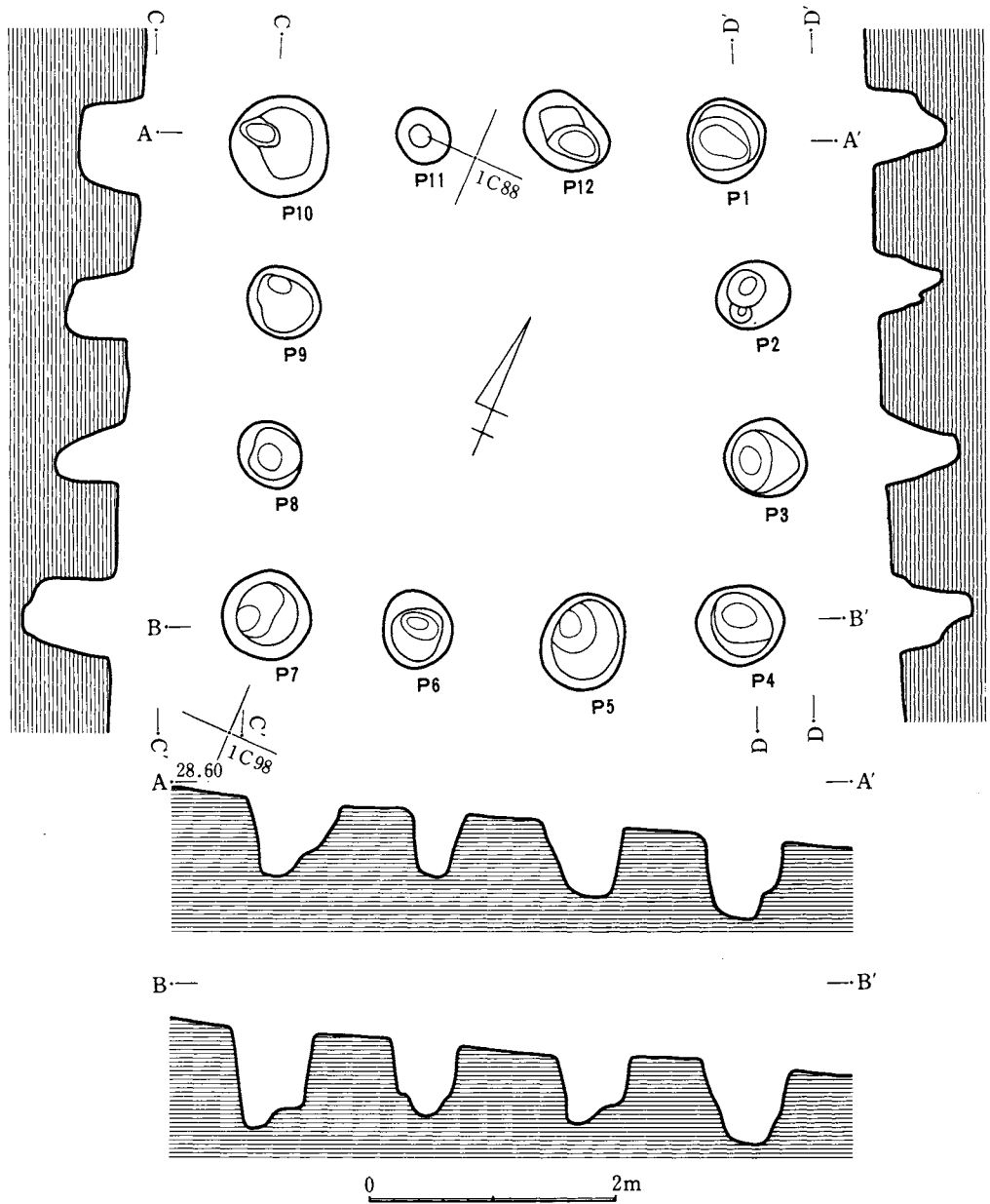
第120号掘立柱建物跡（第459・460図 図版140）

台地中央南側平坦部、調査区南側に位置し、グリッドは2 B19他である。第82号住居跡と重複関係にあり、本跡との関係は不明である。

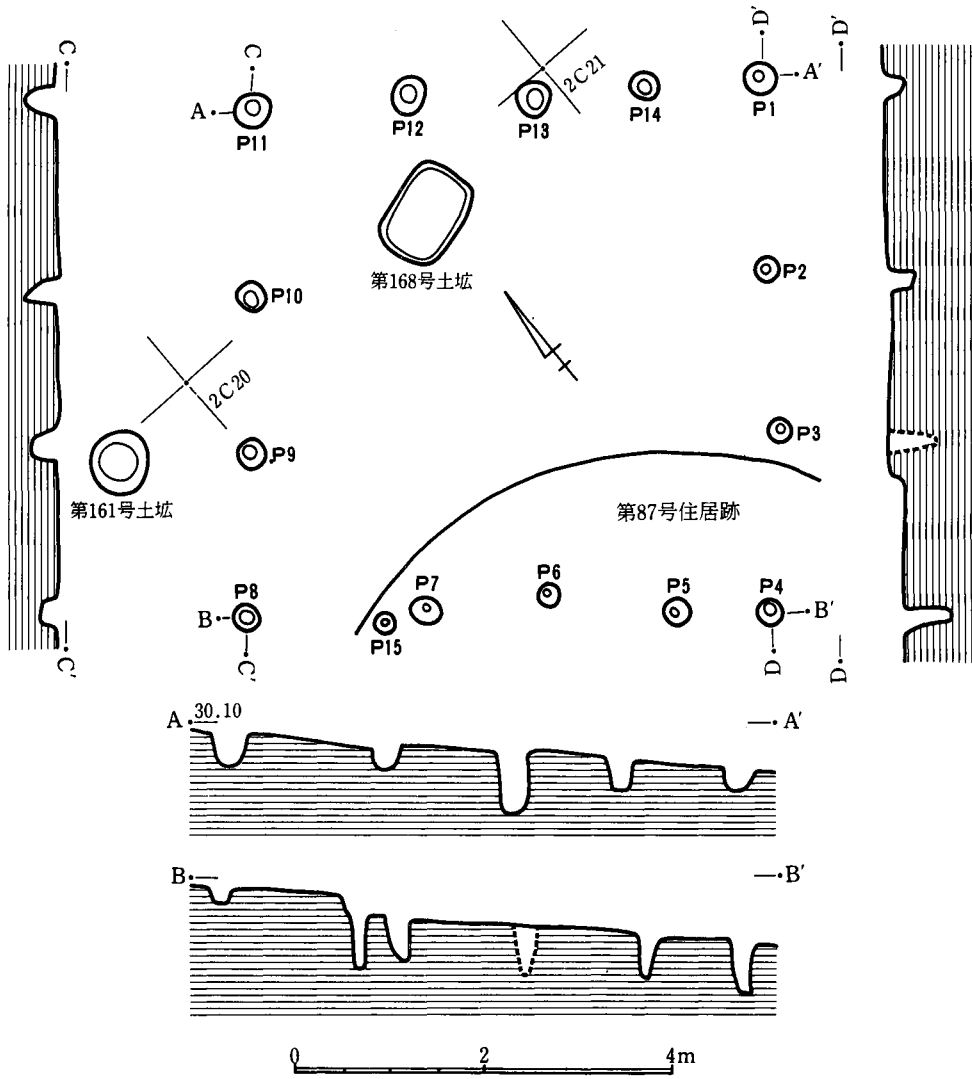
遺構 桁行4間、梁行3間の掘立柱建物跡である。主軸はN52°Wである。規模は桁行6.20m、梁行4.00mあるが、柱穴間は不規則であるが、対面柱穴間は並列状態をなし、直線上に配置されている。掘り方も径30cm前後、深さ約50cm前後と比較的そろっている。埋土は暗褐色土であった。遺物は柱穴内より坏（蓋）が1個出土している。



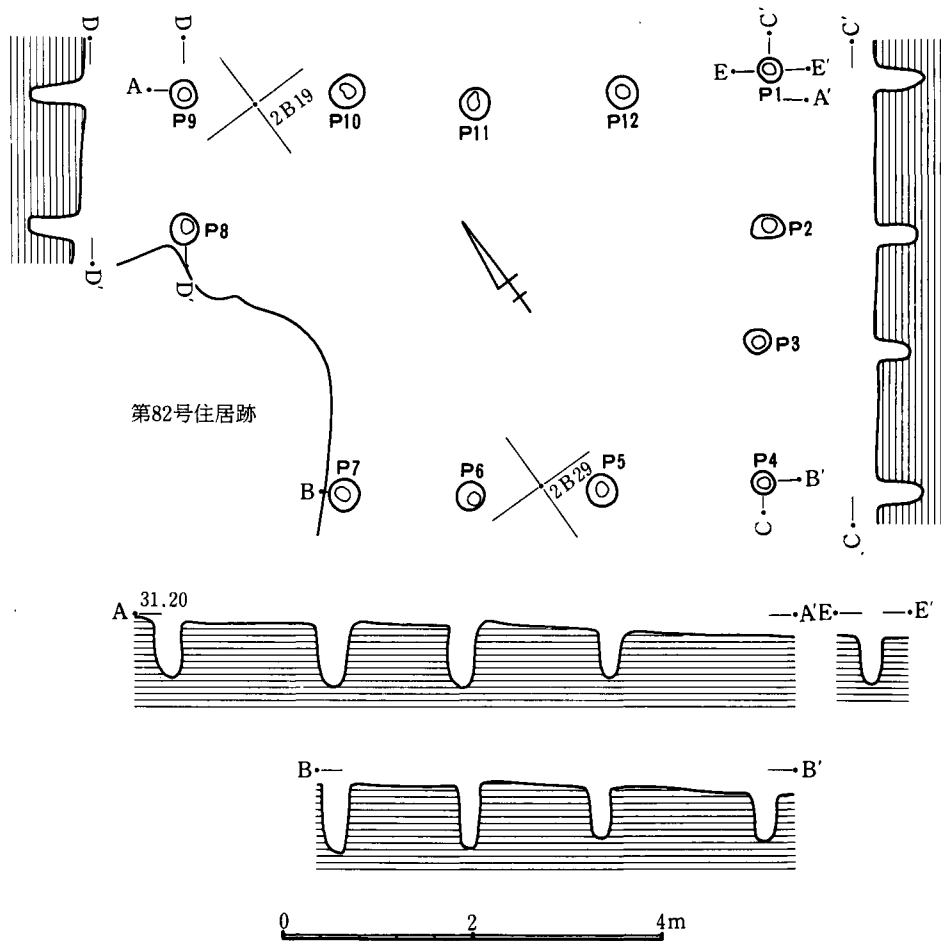
第456图 第95号掘立柱建物跡実測图 (1/80)



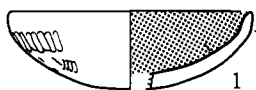
第457图 第107号掘立柱建物跡実測图 (1/60)



第458图 第119号掘立柱建物迹实测图 (1/80)



第459図 第120号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



0 10cm

第460図 第120号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/4)

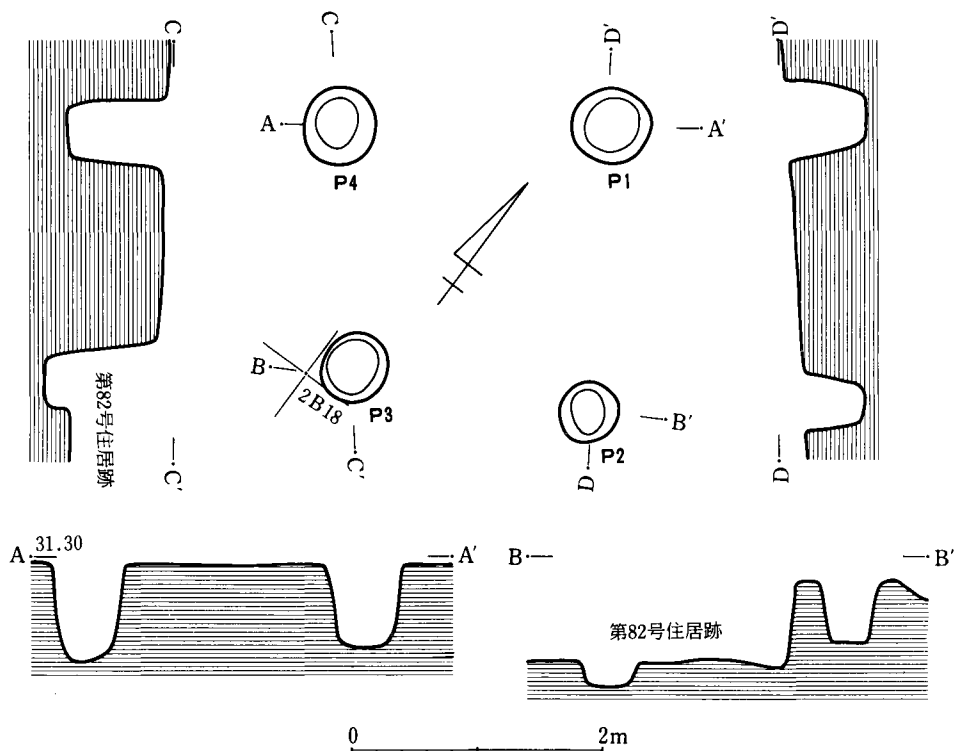
第120号掘立柱遺物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 底径 器高 ()は推定	法量 cm	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考
120-1	环(蓋)	3/4 — 3/4	(13.0) — 4.0		黑色—黑褐色 砂粒微 やや不良		口縁部外面~体部内面横ナ デ 外面ヘラ削り後ナデ	内黒 □縁部内面摩耗

第121号掘立柱遺物跡 (第461図 図版140)

台地中央平坦部、調査区中央に位置しグリッドは2 B08他である。第82号住居跡と重複関係にあるが、本跡が古い。

遺構 桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡である。主軸は1間四方のため一応N58°Eとした。規模は桁行2.20m、梁行2.00mあり、P₃・P₄・P₁がほぼ直角をなす。掘り方はP₁・P₃・P₄の径が約65cm、深さ70cmを計るが、P₂は径50cm、深さ60cmとやや小さい。埋土状態はロームブロックが多量に混入され締まっていた。

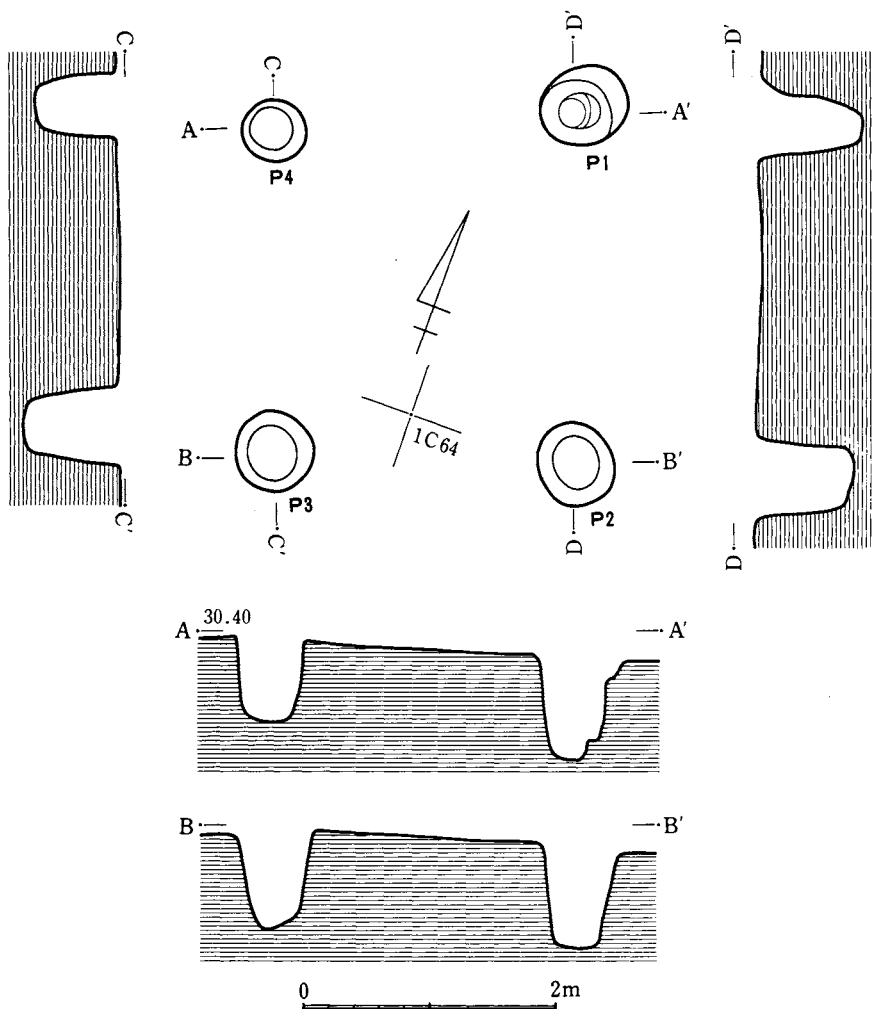


第461図 第121号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

第122号掘立柱建物跡 (第462図)

台地中央東側平坦部、調査区東側に位置し、グリッドは1C64他である。第100号住居跡とは重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡である。主軸は一間四方のため一応N22°Wである。規模は桁行2.50m、梁行2.50mありほぼ直角をなす平面形である。掘り方は径50~60cm、深さ60~70cmと比較的そろっている。埋土状態はロームブロックが多量に混入されており、比較的締まっていた。

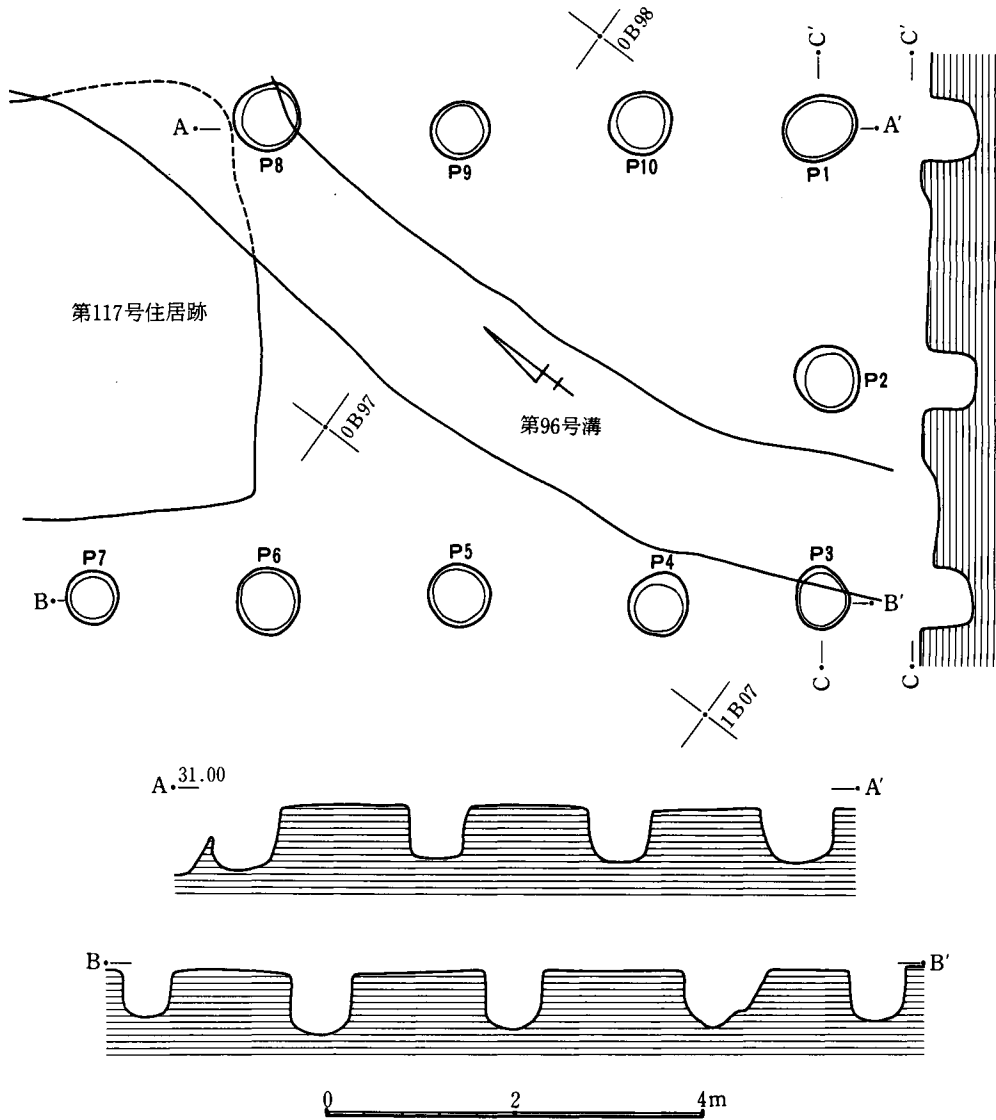


第462図 第122号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

第136号掘立柱建物跡 (第463図 図版141)

台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは0 B97他である。第96号溝と第117号住居跡と重複関係にあり、第96号溝より古く、第117号掘立柱建物跡の新旧関係は不明である。

遺構 桁行4間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸はN35°Wである。規模は桁行7.80m、梁行5.00mで、P₃～P₇、P₈～P₁の各柱穴間はほぼ2.00m間隔、P₁～P₃間は2.50mの間隔で整然とした作りである。掘り方も径60cm、深さ確認面より約50cmを計る。

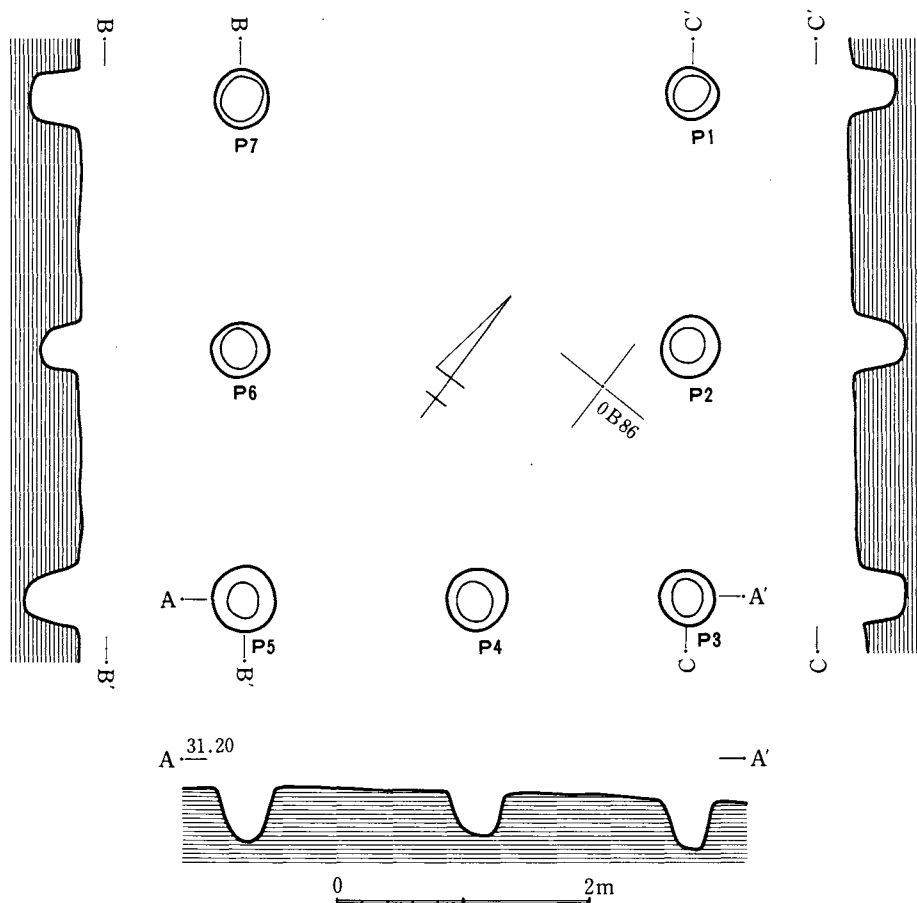


第463図 第136号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

第138号掘立柱建物跡 (第464図 図版141)

台地中央北側平坦部、調査区最北端に位置し、グリッドは 0 B 86他である。

遺構 北西側が未調査のため正確な規模は不明である。しかし桁行は不明であるが梁行が2間であるところから、主軸はN37°Wである。桁行の柱穴間はP₁~P₃、P₅~P₇が等間隔の2.00m、梁行の柱穴間がP₃~P₅が1.80mの等間隔であり整然とした作りである。掘り方も径45cm前後、深さ確認面より40cmとほぼ同じであった。

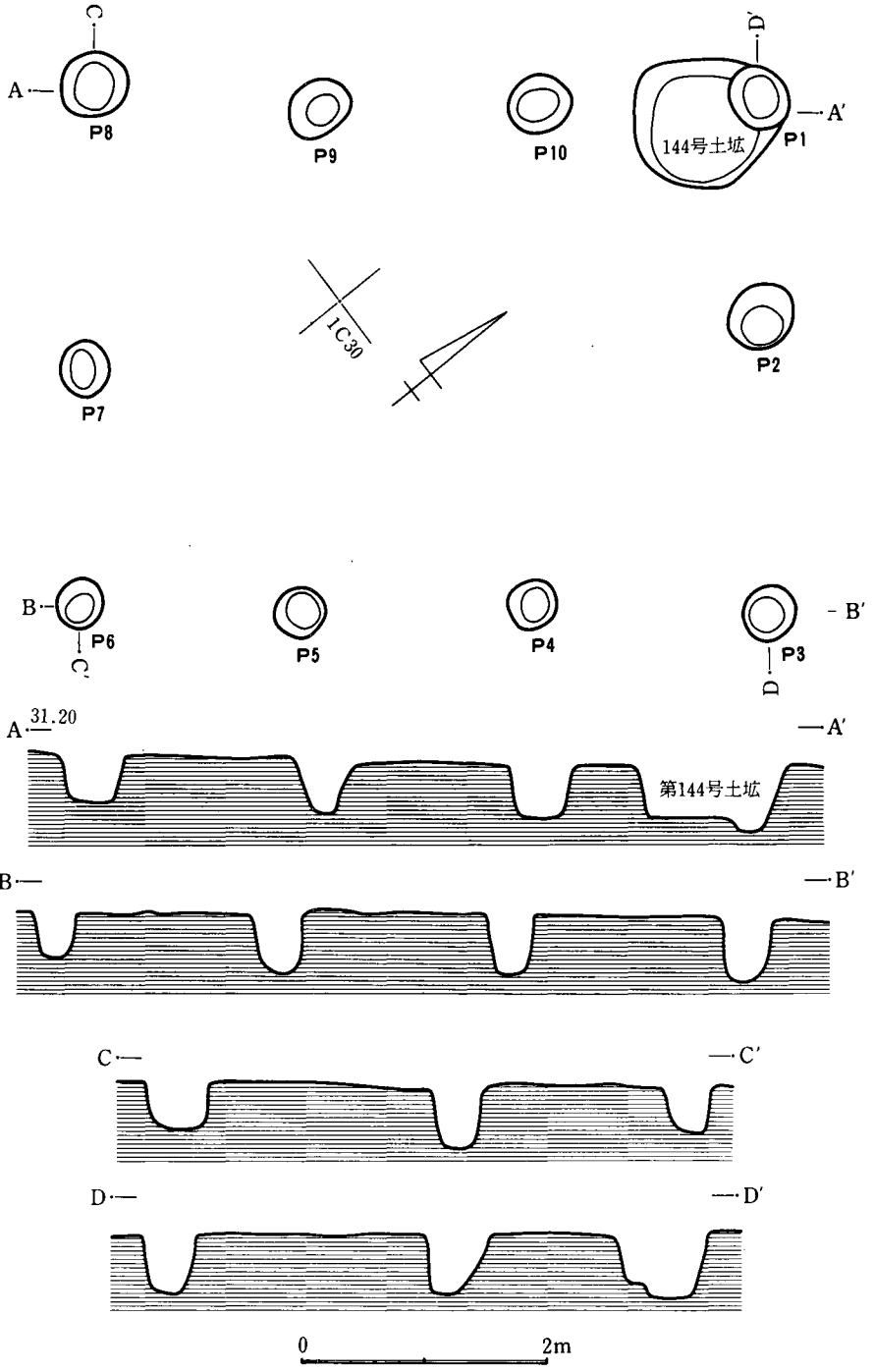


第464図 第138号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

第141号掘立柱建物跡 (第465図 図版142)

台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは 1 C 30他である。第144号土壇と重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸はN40°Eである。規模は桁行5.70m、梁行4.20mあり、桁行の柱穴間隔が1.90mの等間隔、梁行の柱穴間隔が2.10mの等間隔で整然とした作りである。掘り方の径も45cm前後、深さ確認面より50cmとほぼ同じであった。

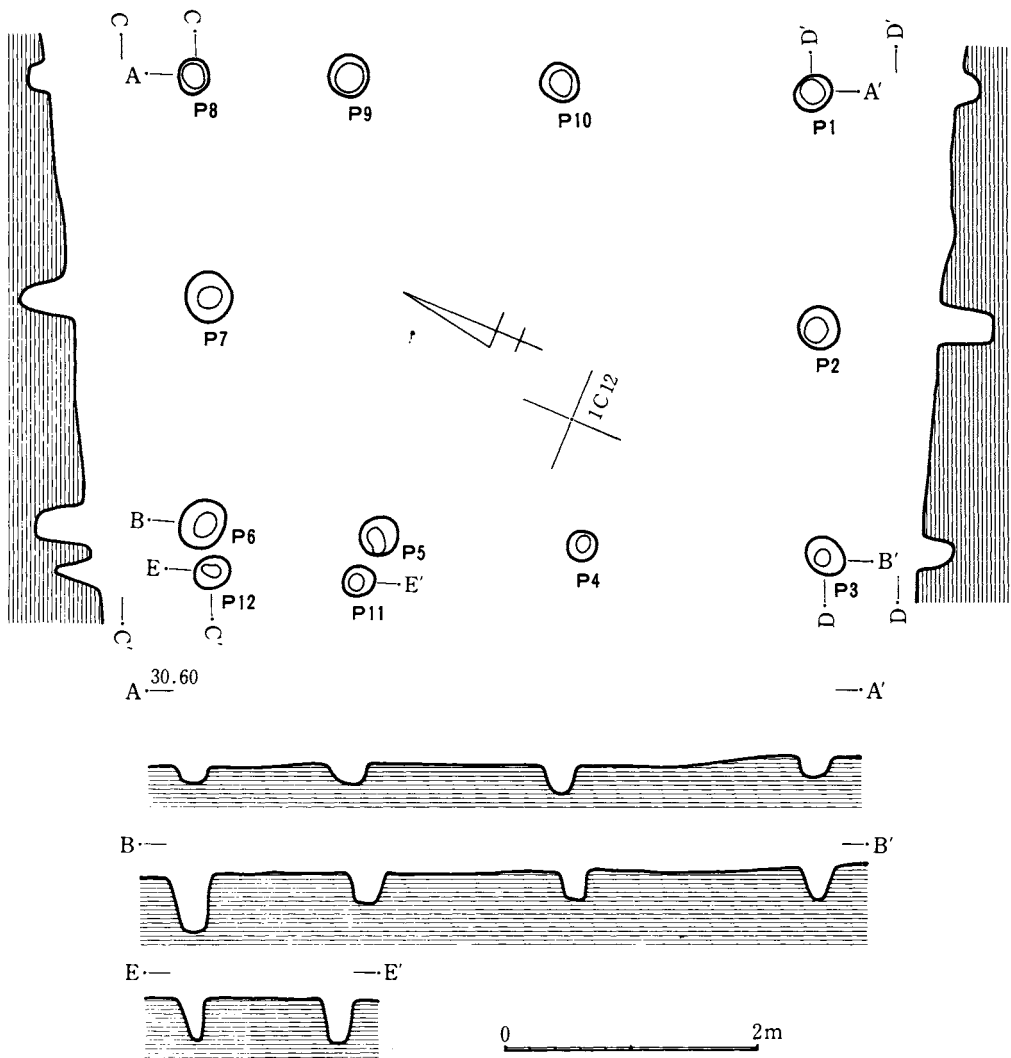


第465图 第141号掘立柱建物跡・第144号土坛実測図 (1/60)

第142号掘立柱建物跡（第466図）

台地北東緩傾斜面、調査区北側に位置しグリッドは1C12他である。第147号溝と重複関係にあるが、本跡が古い。

遺構 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸はN22°Wである。規模は桁行4.90m、梁行3.60mである。桁行の柱穴間は不規則であるが、対面柱穴間は並列状態をなし、梁行の柱穴間は1.80mの等間隔であった。掘り方の径は約30cm、深さ確認面より約20cmとほぼ同じ作りである。P₁₁・P₁₂は径25cm前後、深さ確認面より30cmを計り、出入部施設でもあろうか。

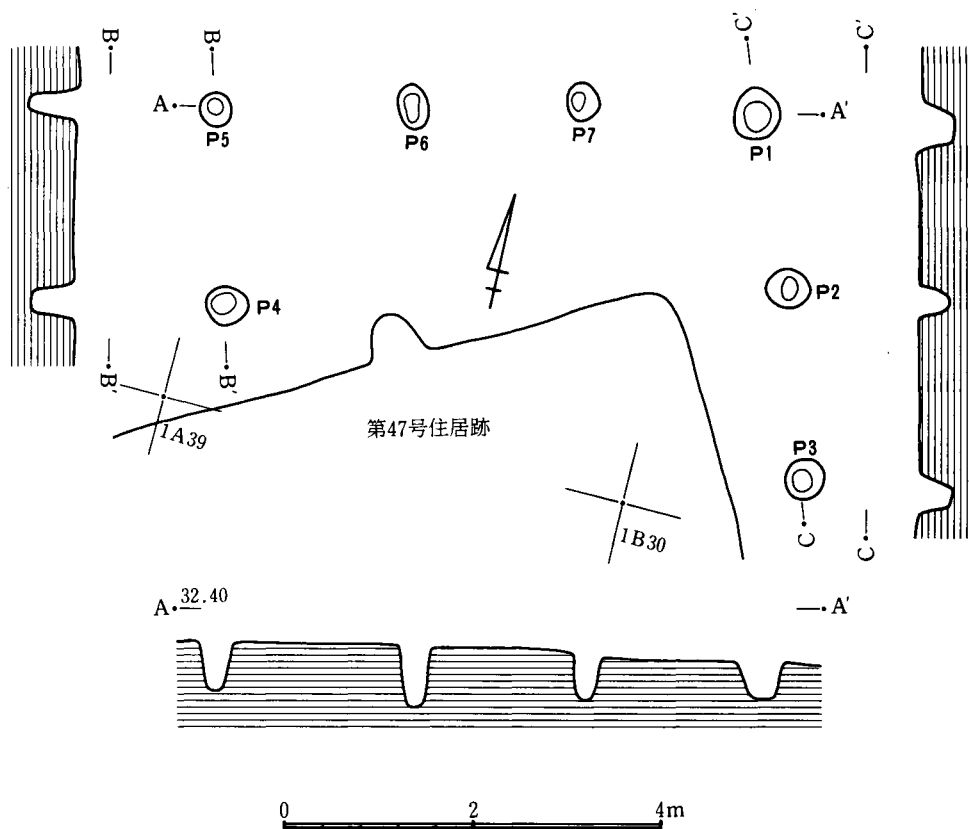


第466図 第142号掘立柱建物跡実測図（1/60）

第157号掘立柱建物跡 (第467図 図版142)

台地中央平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 A 29他である。第47号住居跡と重複関係にあり、新旧関係は不明である。

遺構 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸はN74°Eである。規模は桁行5.80m、梁行3.80mあり、掘り方は径30~50cm、確認面よりの深さ30~50cmとまちまちである。桁行の柱穴間隔は1.90mの等間隔で、梁行の柱穴間隔も1.90mの等間隔であった。しかし、桁行に梁行に直行はしない。

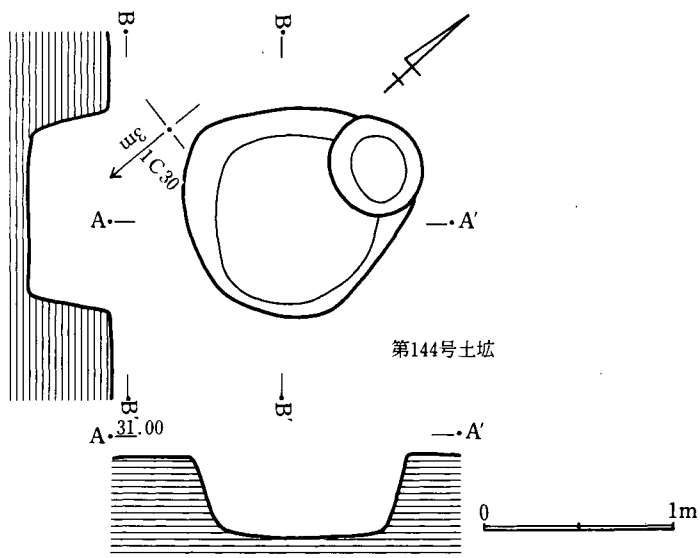
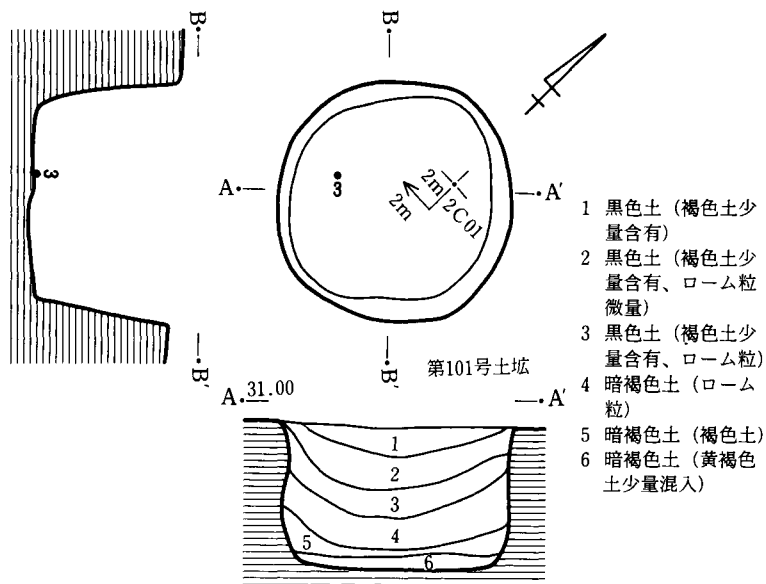


第467図 第157号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

3) 土坑

第101号土坑 (第468・469図 図版162)

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1C91である。第91号住居跡に近接している。



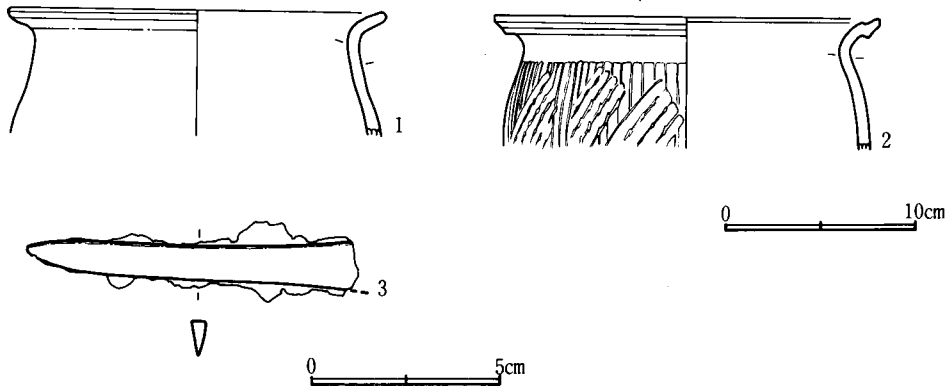
第468図 第101・144号土坑実測図 (1/40)

遺構 径1.25×1.25mの円形を呈する土壇である。面積は1.26㎡である。壁は一部オーバーハング状をしているがほぼ垂直に立ち上がり、確認面よりの深さは75cmを計る。床面は平坦である。土層はローム粒を含む層が多く、堆積状況が版築状を示すことから人為的埋土であると推定される。遺物は甕と刀子が出土している。3の刀子が床直より、他は覆土中からの出土であった。

第144号土壇 (第468・470図)

台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 C 20である。第141号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

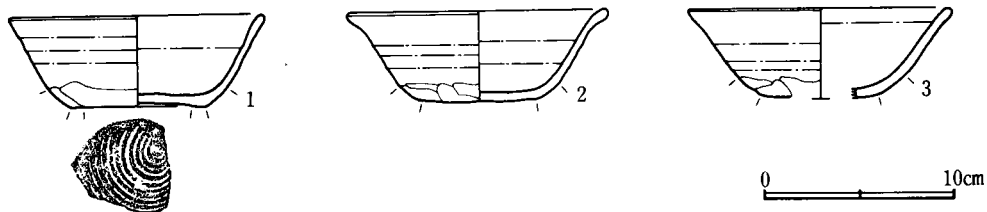
遺構 長軸1.15m、短軸1.10mの不整円形を上面では呈すが、床面では隅丸方形の平面形を呈する土壇である。面積は1.07㎡である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約40cmを計る。床はほぼ平坦である。遺物は坏が出土している。これらの坏は覆土からの出土である。



第469図 第101号土壇出土遺物実測図 (1・2 1/4、3 1/2)

第101号土壇出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 底径 器高 ()は推定	法量 cm	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
101-1	甕	□縁部のみ	3% — —	(20.0) — (6.4)	黒褐色—黒褐色 小砂粒多	良好	□縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面へラ削り後ナ デ 内面ナデ	
101-2	甕	□縁部のみ	3% — —	(20.4) — (6.8)	黒褐色—黒褐色 小砂粒多	良好	胴部叩日後口縁部口唇をつ まんで横ナデ 胴部内面ナ デ	
101-3	刀子	刀部のみ	長さ	(8.8)	鉄製			



第470図 第144号土坑出土遺物実測図 (1/4)

第144号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
144-1	坏	1/2 3/4 1/2			(13.3) (7.0) 4.8	褐色-褐色 粒少 良好	小砂	体部下端手持ちヘラ削り 底部上底状を呈し回転糸切り 後周縁手持ちヘラ削り	
144-2	坏	3/4 3/4 3/4			(13.8) (6.0) 4.7	黒褐色-暗褐色 小砂粒少 良好		体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向手持ちヘラ削り	
144-3	坏	1/2 1/2 1/2			(13.8) (6.2) 4.7	褐色-褐色 粒少 良好	小砂	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	

4) その他の遺構

i) 時期不明土坑

第4号土坑 (第208図)

台地西側平坦部、調査区西端の第1号住居跡の南西に接するように位置し、グリッドは1A63である。

遺構 長軸1.23m、短軸0.82mあり面積0.89㎡で隅丸長方形の平面形を呈する土坑である。深さは確認面より0.20mを計り、壁は緩傾斜をもって立ち上がる。土層はレンズ状の自然堆積を示している。床はほぼ平坦である。

第63号土坑 (第471図)

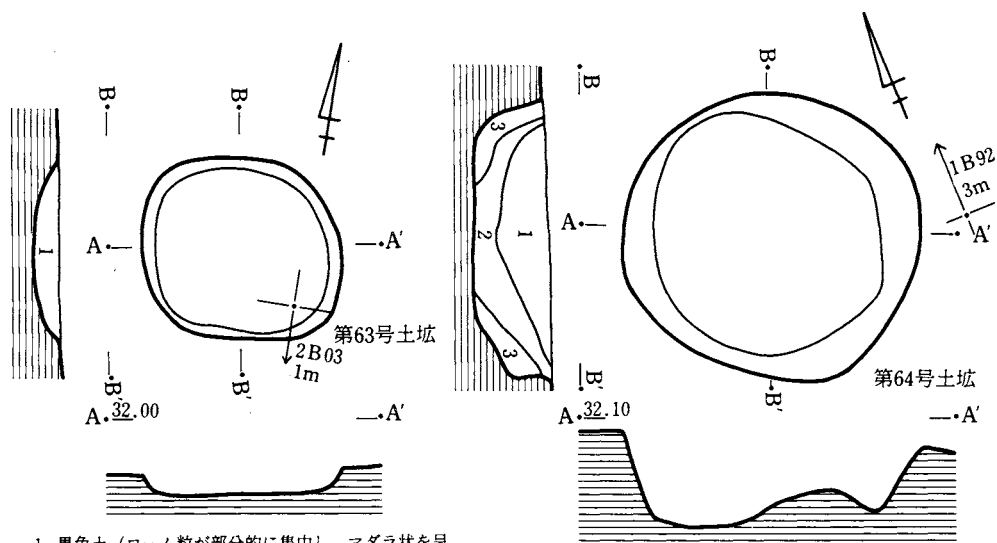
台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1B92他である。

遺構 長軸1.05m、短軸0.93mあり面積0.83㎡で隅丸長方形の平面形を呈する土坑である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面よりの深さは約10cmを計る。床面はほぼ平坦である。土層は単純な1層のみであり、遺物は出土していない。

第64号土坑 (第471図 図版143)

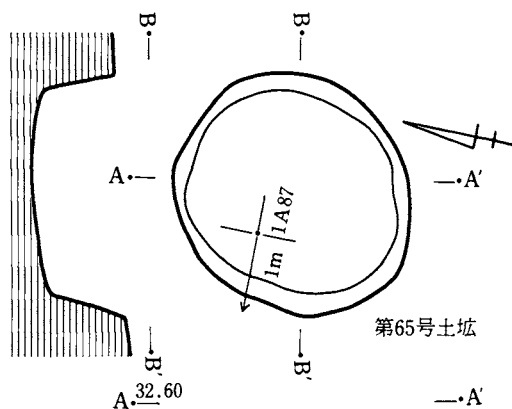
台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B91である。

遺構 径1.58×1.50mあり面積1.83㎡で円形の平面形を呈する土坑である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面よりの深さ約40cmを計る。床面は凹凸が激しい。遺物は出土していない。

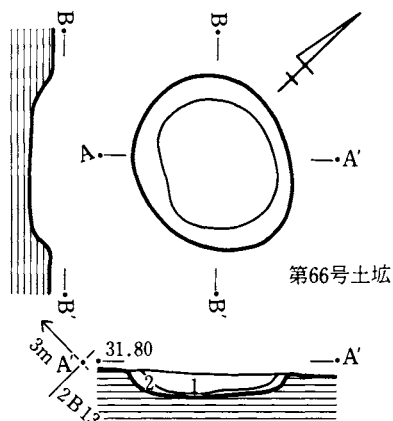


1 黒色土 (ローム粒が部分的に集中し、マダラ状を呈す。しまりがなく、やわらかい)

1 黒色土 (ローム粒が部分的に集中しマダラ状を呈す)
2 黒褐色土 (1層に比しローム粒は多量になり散在する)
3 暗褐色土 (若干の砂粒を含み粘性がある)



1 黒色土 (ローム粒少量混入)
2 黒褐色土 (ローム粒が部分的に集中してマダラ状を呈す)



1 黒色土 (ローム粒が部分的に集中しマダラ状を呈す)
2 明褐色土 (ローム粒、多量混入)
3 暗褐色土 (若干の砂粒を含み粘性がある)
4 褐色土 (掘りすぎ)



第471図 第63~66号土坑実測図 (1/40)

第65号土壇（第471図 図版143）

台地中央平坦部、調査区西側に位置し、グリッドは1 A77他である。

遺構 径1.25×1.25mあり面積1.20m²で円形の平面形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり確認面より深さ40cmを計る。床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

第66号土壇（第471図 図版143）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 B03である。

遺構 径0.85×0.90mあり面積0.62m²で円形の平面形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約10cmを計る。床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

第67号土壇（第472図）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 B05である。第77号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

遺構 径0.90×1.00mあり面積0.69m²で円形の平面形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より深さ20cmを計る。床面は凹面状を呈する。覆土は1層であり、ローム粒が部分的に集中する黒色土で締りが無かった。近接する第68号土壇と同様である。遺物の出土は無い。

第68号土壇（第472図）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは1 B95である。

遺構 径0.82×0.85mあり面積0.55m²で円形の平面形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より深さ10cmを計る。床面は凹面状を呈する。覆土は1層であり、ローム粒が部分的に集中する黒色土で締りが無かった。近接する第67号土壇と同様である。遺物の出土は無い。

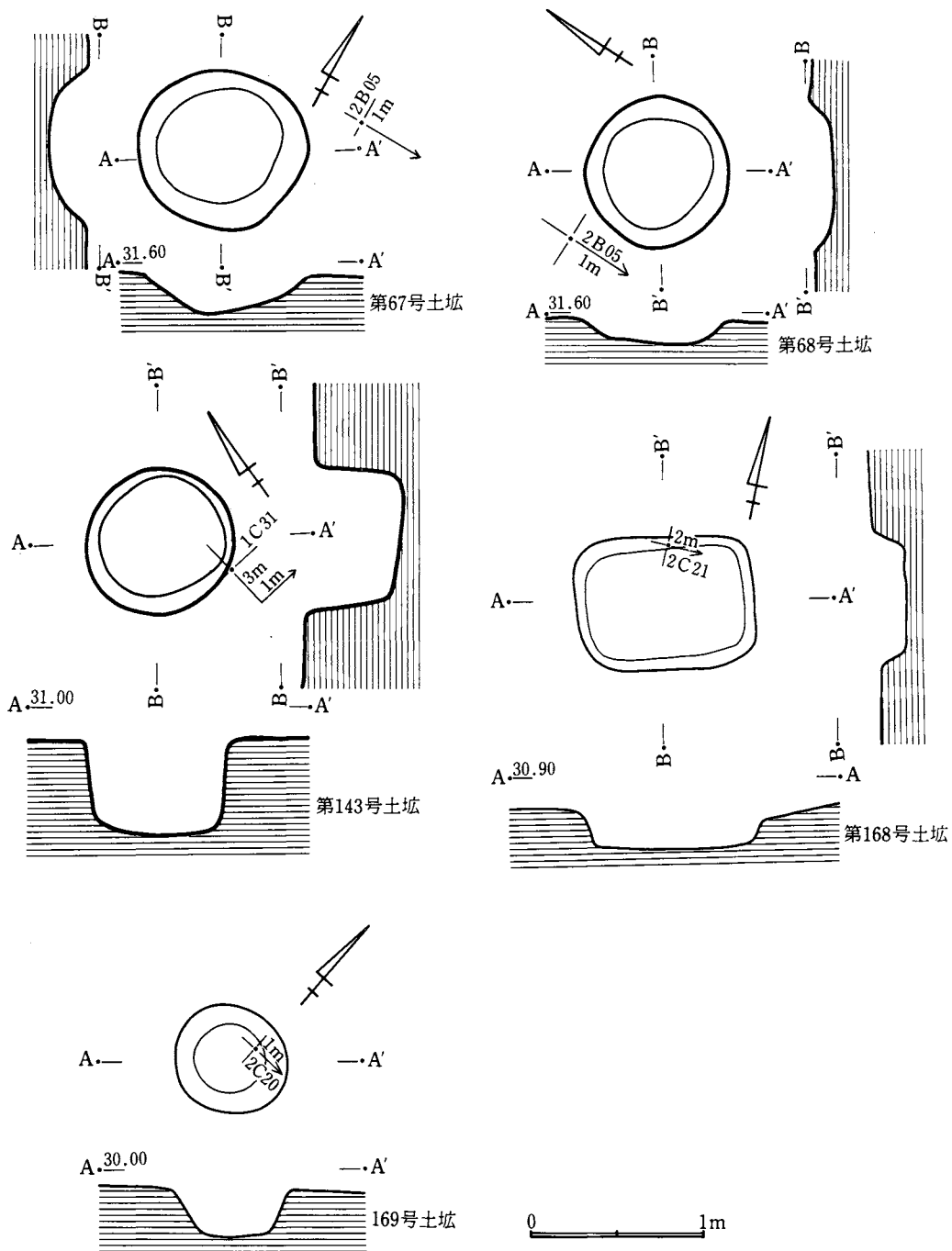
第143号土壇（第472図）

台地中央北側平坦部、調査区北側に位置し、グリッドは1 C20である。第141号掘立柱建物跡に近接する。

遺構 径0.85×0.85mあり面積0.56m²で円形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面よりの深さ約50cmを計る。床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

第168号土壇（第472図）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 C20である。第119号掘立柱建物跡内に



第472图 第67·68·143·168·169号土坑实测图 (1/40)

あるが、関係は不明である。

遺構 長軸1.05m、短軸0.75mあり面積0.74m²で隅丸長方形の平面形を呈する土壇である。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約20cmを計る。床面は平坦である。遺物の出土は無い。

第169土壇（第472図）

台地中央平坦部、調査区中央に位置し、グリッドは2 B 29他である。第120号掘立柱建物跡に近接している。

遺構 径65×60cmあり面積0.31m²で円形の平面形を呈する土壇である。壁は傾斜をもって立ち上がり、確認面より約25cmを計る。床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ii) 溝

第81号溝（第473・474図）

台地中央平坦部で台地を中央で2分する様な形で縦断する。重複する遺構も多く、北側から第94・82号住居跡を切り、第135号溝をも切っている。溝巾は約90cm、深さ確認面より25cmを計り、断面形がU字型を呈する。覆土中よりフイゴ破片2点が出土している。

第96号溝（第473・474図）

第81号溝と同様、台地中央部を2分する様な形で縦断する。重複する遺構も多く、北側から第117・114・97・104・105号住居跡、第136・95号掘立柱建物跡、第139号・135号溝を切り合っているが、本跡が新しい。巾約1.30m、確認面よりの深さ30cmを計り、断面形はU字型を呈する。覆土中よりスラグ3点が出土している。

第135号溝（第473・474図）

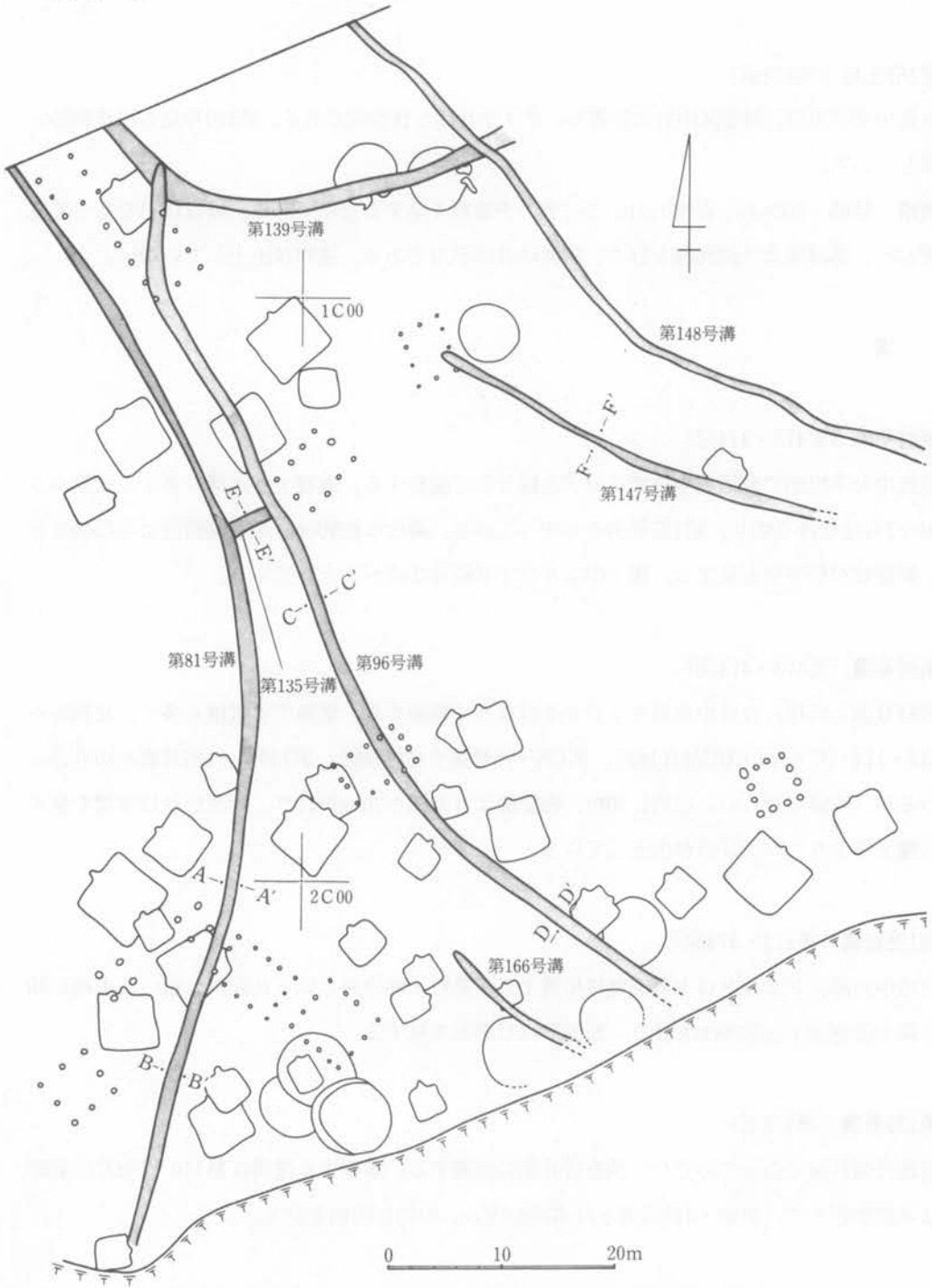
台地中央部、グリッドは1 B 38他に位置する。第81・96号溝に切られ非常に短い。巾約1.30m、深さ確認面より約30cmを計り、断面形はU字型を呈する。

第139号溝（第473図）

台地北側斜面に沿ってめぐり、調査区北側に位置する。重複する遺構は第140・152号住居跡とは本跡が新しく、第96・148号溝とは本跡が古い。巾約1.00mを計る。

第147号溝 (第473・474図)

台地北東斜面と第148号溝と並行する様にあり、重複する遺構は第142号掘立柱建物跡、第137号住居跡であるが、本跡が新しい。巾約1.00m、深さ確認面より約10cmを計り、断面形はU字型を呈する。



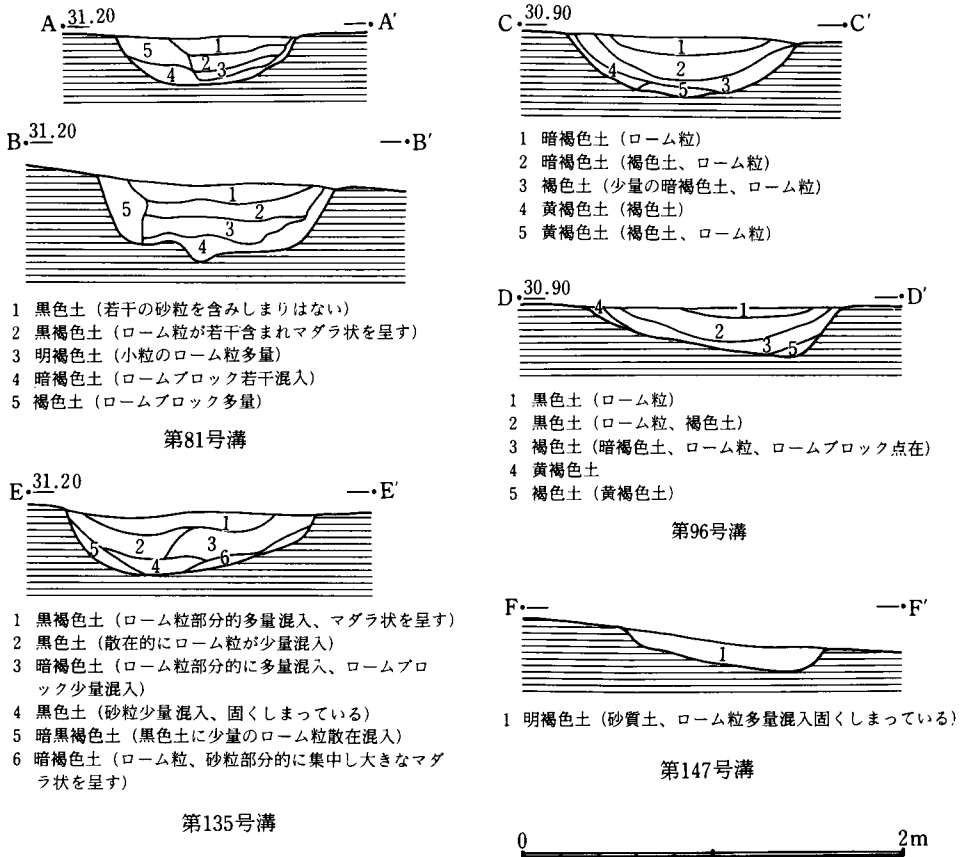
第473図 第81・96・135・139・147・148・166号溝遺構配置図 (1/600)

第148号溝 (第473図)

台地北東斜面と第147号溝と並行する様であり、重複する遺構は第139号溝であるが、本跡が古い。巾約1.00mである。

第166号溝 (第473図)

台地南東側緩傾斜面にあり、第96号溝を並行になる。重複関係にあるのは、第167・112A号住居跡であるが、本跡が新しい。巾約80cmある。

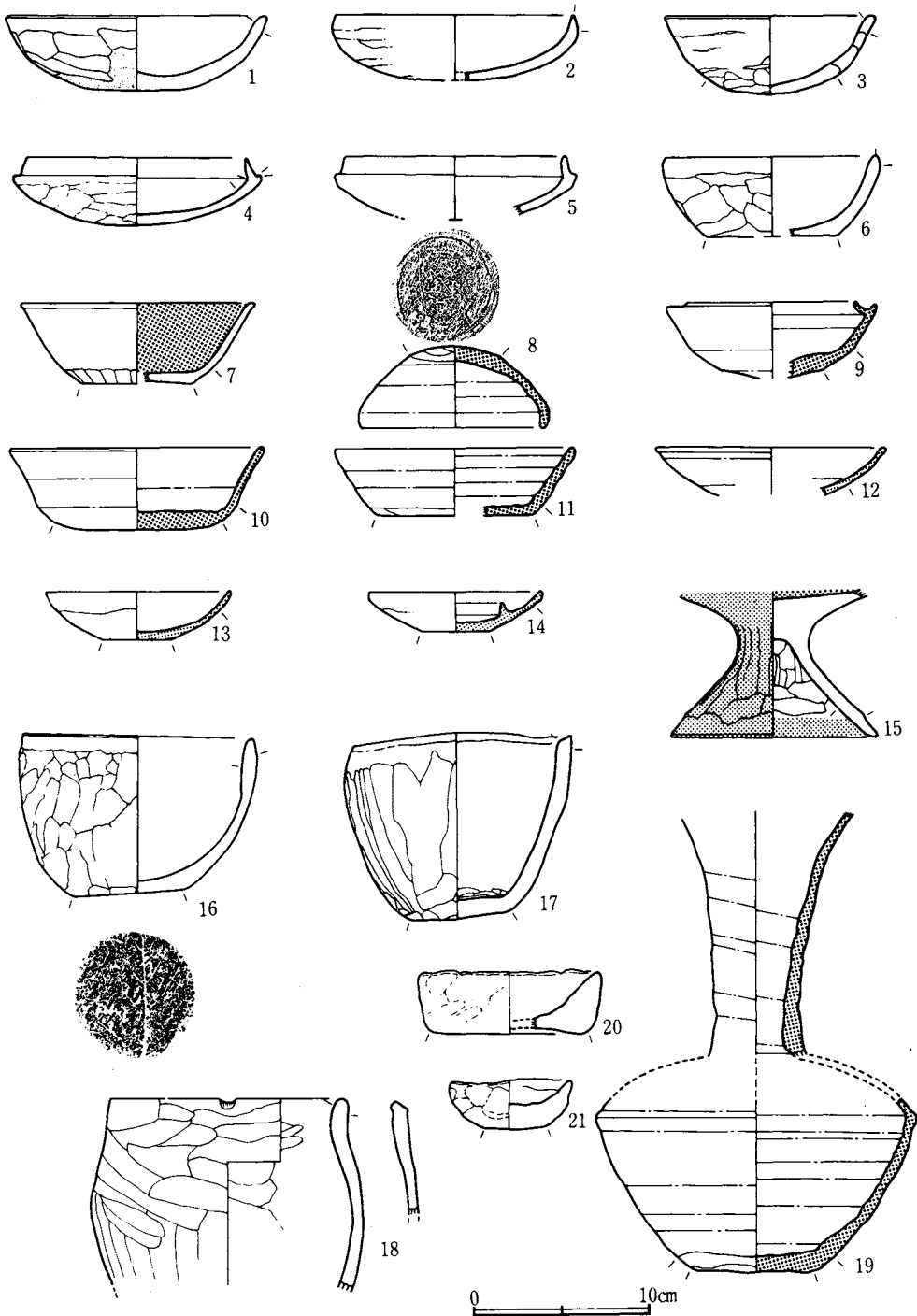


第474図 第81・96・135・147号溝状遺構土層断面図 (1/40)

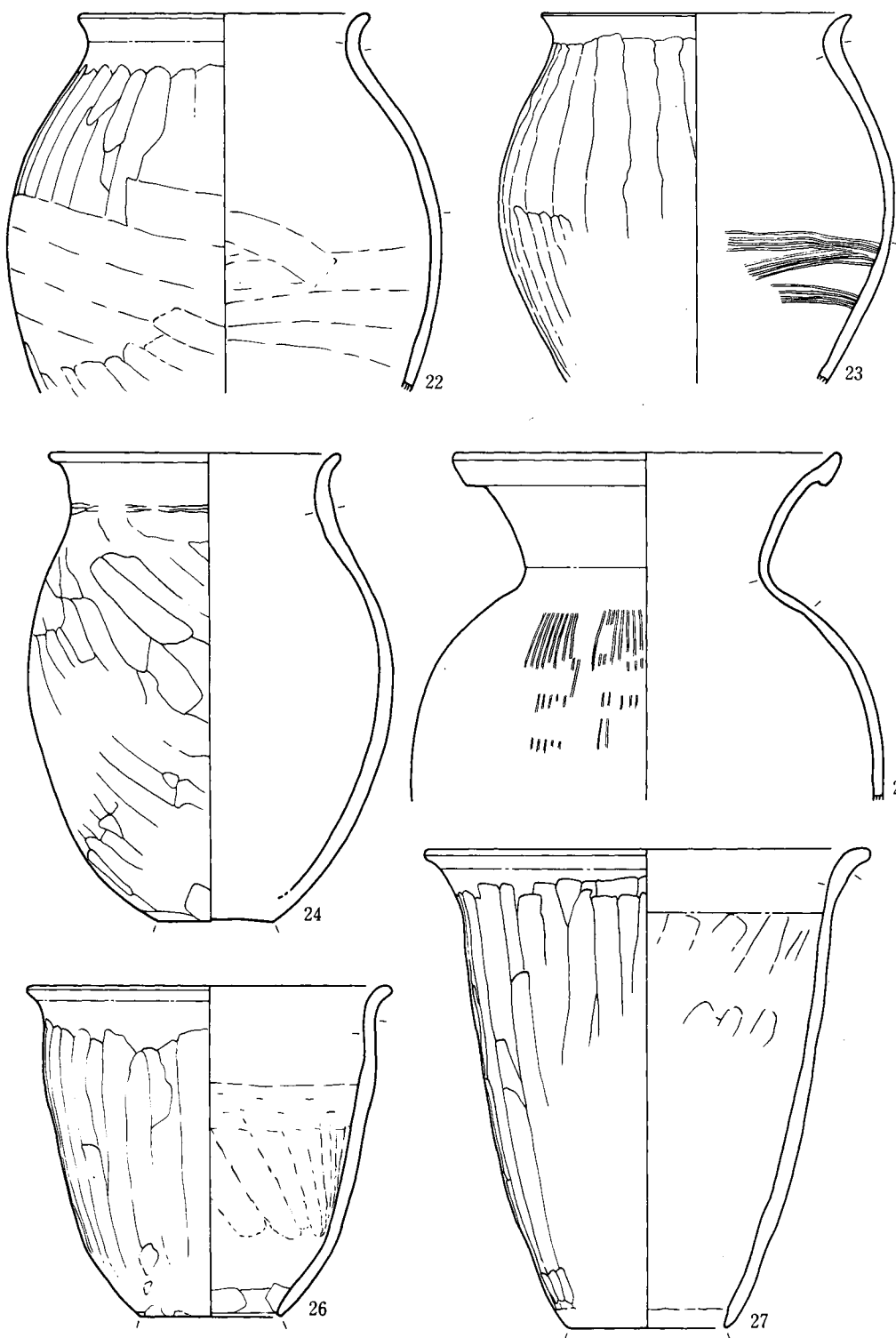
5) グリッド出土遺物 (第475~479図 図版177)

各グリッドから出土したものなかで、図示可能なものを器種ごとにまとめた。特に第112号住居跡覆土内はやや多量にまとまって出土しており、この住居跡は縄文時代に属するものであることから、検討を要する。墨書土器が28~40の13点が出土しているが、判読できたのは35の「字」のみであった。土製品としては土玉41~44の4点、土製支脚の45がそれぞれ出土して

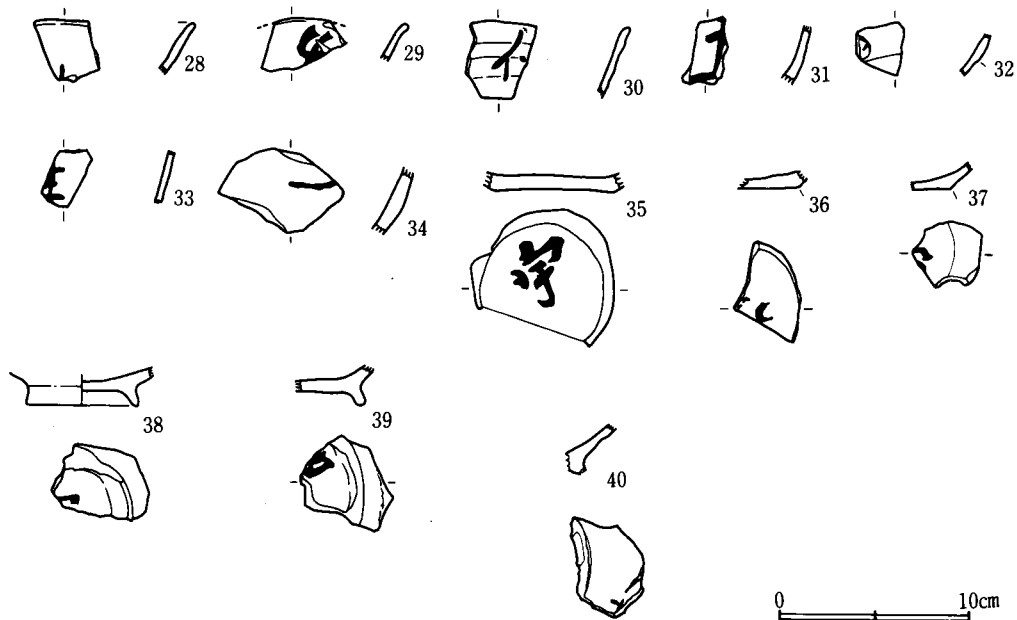
いる。玉は未製品の46が、紡錘車は47～49の3点がそれぞれ出土している。石製品として最も多量に出土しているのは砥石であり、50・51は有孔であった。鉄製品としては穂摘み貝の完形品が出土している。



第475図 グリッド出土遺物実測図 (1/4) No 1



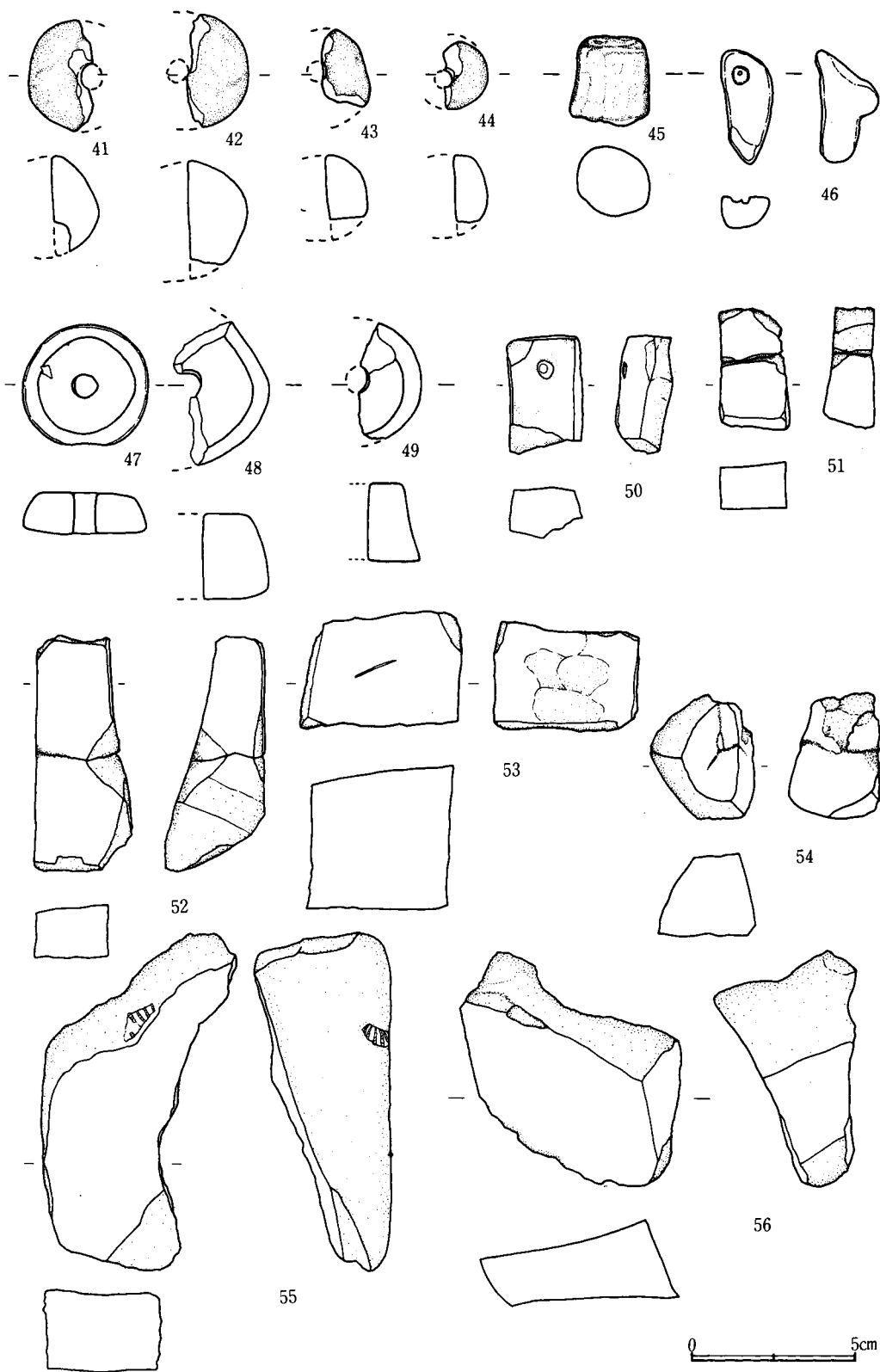
第476図 グリッド出土遺物実測図 (1/4) No 2



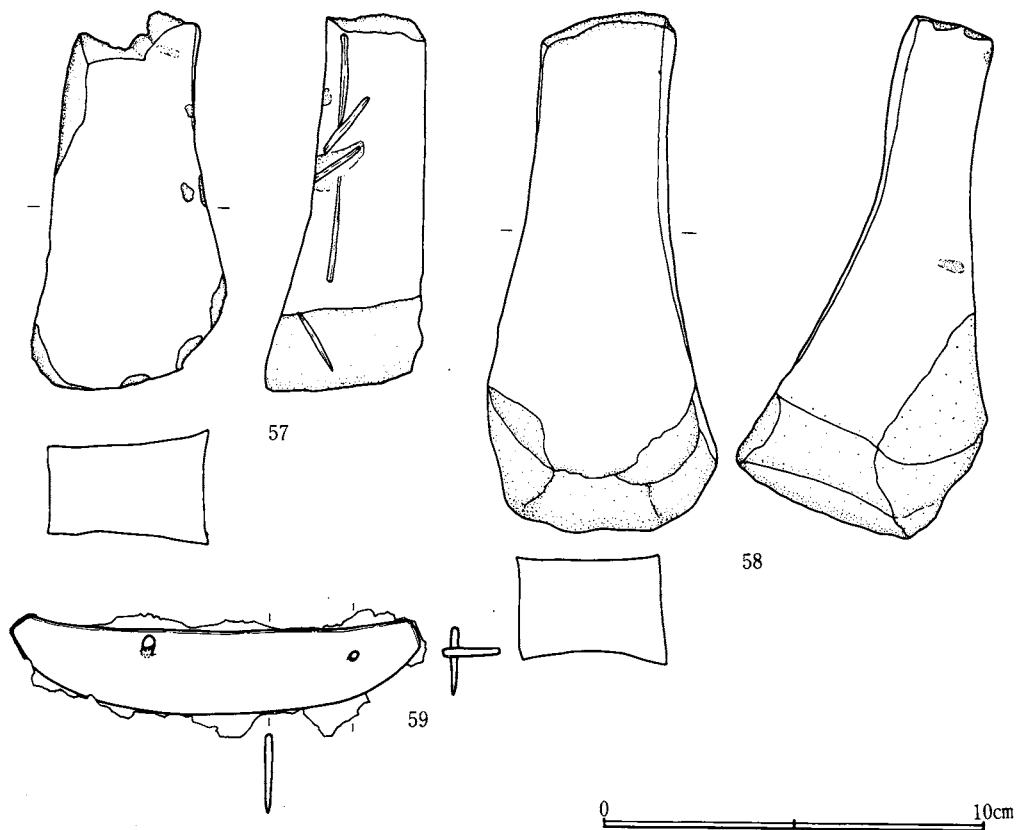
第477図 グリッド出土遺物実測図 (1/4) No 3

グリッド出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体 ()は推定	法 量 cm	口 径 底 径 器 高	色 調 内-外 胎 土 焼 成	成形・調整	備 考
グー1	坏	1/2 1/2	14.8 — 3.2	暗褐色-暗褐色 小砂粒やや多 好	良好	口縁部横ナデ 体部内面ナ デ外面上半横位ヘラ削り下 半ナデ	2C33	
グー2	坏(蓋)	1/2 1/2	(13.5) — 3.7	灰褐色-灰褐色 砂粒少 良好	良好	口縁部外面横ナデ 体部内 面丁寧なナデ 外面ヘラ削 り後ナデ	口唇部内面磨耗 36号	
グー3	坏	1/4 1/2 1/2	(12.0) — 4.3	褐色-褐色 粒少 良好	小砂 良好	口縁部横ナデ 内面丁寧な ナデ 外面輪積み痕明瞭 底部付近横位斜位ヘラ削り	輪積み痕明瞭 1A44	
グー4	坏	1/2 1/2 1/2	12.4 — 3.6 蓋受径 14.0	黒褐色-灰黒褐色 小砂粒少 母微 良好	金雲 良好	口縁部横位ミガキ 内面丁 寧なミガキ 外面横位斜位 ヘラ削り後ナデ	口唇磨耗 1B27	
グー5	坏	1/2 1/2 1/2	(12.5) — (3.5)	黒褐色-褐色 粒少 良好	砂 良好	口縁部外面~体部内面ミガ キ 外面ヘラ削り	口唇磨耗 36号	
グー6	坏	1/2 1/2 1/2	(11.8) (7.2) 4.3	赤褐色-灰褐色 小砂粒少 良好	良好	口縁部外面横ナデ 内面丁 寧なナデ 外面横位底部一 方向ヘラ削り	外面白色化 1B66	
グー7	坏	1/2 1/2 1/2	(13.2) (6.2) 4.5	内黒-褐色 粒微 良好	小砂 良好	体部内面ミガキ 体部下 端手持ちヘラ削り 底部周 縁手持ちヘラ削り	内黒 2A05	



第478図 グリッド出土遺物実測図 (1/2) No.4



第479図 グリッド出土遺物実測図 (1/2) No 5

遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 cm ()は推定	口径 底 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
グー8	坏(蓋)	1/6 1/6 1/6 完			9.8 — 4.5	明青灰色-明青灰色 砂粒微量 白色と黒色の微細粒 が包含される。この うち黒色微細粒 は軟質で、ロクロ 調整の際に破壊さ れて「一」状にス ジをひくものがある		口縁~体部~天井部内面ロ クロ調整 天井部外面ヘラ 切り後粗雑な左巻回転ヘラ 削り 頂部と外縁部に未調 整部を残す	須恵器 天井頂部に 「×」のヘラ記号あり 112号
グー9	坏	2/6 2/6 2/6		(9.5)	— 4.2	灰色-灰色 砂粒 なく非常に緻密 良好		外面下半回転ヘラ削り調整	須恵器 2A26
グー10	坏	1/6 2/6 1/6		(14.4)	8.3 4.6	灰色-灰色 砂粒 多 良好		体部下端回転ヘラ削り 底 部回転ヘラ削り	須恵器 2A29
グー11	坏	2/6 2/6 2/6		(13.8) (9.0)	— 3.7	青灰色-青灰色 小砂粒多 やや粗 良好		体部下端回転ヘラ削り 底 部回転ヘラ削り	須恵器 2B08

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	胎土 焼成	色調 内-外	成形・調整	備考
グー12	皿		13.0 — (2.7)	緑灰色—緑灰色 砂粒少なく堅緻 良好	内外面とも上半部に灰釉 内面重ね焼き痕あり	灰釉 2A03 1A82	
グー13	小皿		10.5 3.9 2.7	黄白色—灰褐色 堅緻 良好	外面高速回転ヘラ削り 内 面及び外面の一部に黄白色 のにごり釉薬	陶器 1A79	
グー14	燈明皿		9.9 3.9 2.3	黄白色—灰褐色 堅緻 良好	外面高速回転ヘラ削り 内 面及び外面の一部に黄白色 のにごり釉薬	陶器 1B80	
グー15	高坏	脚部のみ	— — (8.1) 11.4	褐色一部赤彩—赤 彩 小砂粒少 良 好	裾部横ナデ後外面縦位下半 斜位ヘラ削り 内面横位ヘ ラ削り他指頭痕あり	赤彩 坏内黒 1 A 63・64 2 A13	
グー16	鉢		13.1 6.1 8.7	褐色—褐色 小砂 粒多 良好	口縁部横ナデ 胴部内面ナ デ外面細い斜位ヘラ削り 底部木葉痕あり	全体的にイビツ 2B03	
グー17	鉢		12.6 5.7 10.3	黒褐色—黒褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ 胴部外面、 底部ヘラ削り 内面ナデ— 部ヘラ削り	イビツ 112号	
グー18	鉢		13.4 — (10.3)	黒褐色—赤褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ 胴部外面上 半横位下半縦位ヘラ削り 内面ナデ	口縁に1個所丸い棒状 のものによる押圧痕あり 、注口ではない 1 12号	
グー19	長頸瓶		11.0 6.5 (25.7)	灰色—灰色 砂粒 少なく緻密 良好	ロクロ目が顕著 底部及び 底部周辺ヘラ削り調整	須恵器 10号 2 A 14・15・16・25・06	
グー20	手捏土器		10.4 (9.0) 3.4	茶褐色—茶褐色 小砂粒多 良好	指頭痕明瞭	2B62	
グー21	手捏土器		7.0 3.5 2.7	茶褐色—茶褐色 小砂粒多 良好	指頭痕明瞭	1A45	
グー22	甕		17.3 — (22.5) (25.6)	黄褐色—黄褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ後胴部外面上 半縦位下半横位ヘラ削り 内面上半ナデ下半横位ナデ	48号	
グー23	甕		18.0 — (22.0) (23.0)	褐色—黒褐色 小 砂粒多 良好	口縁部横ナデ後外面上半縦 位ヘラ削り 内面ナデ中央 に櫛歯状の横位ナデ	1B45	
グー24	甕		17.2 6.6 27.2 21.6	黒褐色—灰褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ後胴部外面上 半縦位下半横位ヘラ削り 底部ヘラ削り 内面ナデ	底部剥離あり 36号	
グー25	甕		23.2 — (20.4)	黒褐色—黒色 砂 粒少 やや不良	折返し口縁 胴部叩目後口 頸部横ナデ 内面ナデ	全面黒色化 2B26	
グー26	甕		21.6 (8.3) 19.2	赤褐色—黄褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り 内面上半横位 下半縦位ナデ	112号	
グー27	甕		26.5 (9.3) 27.9	黄褐色—黒褐色 小砂粒多 良好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り 内面ナデ	112号	
グー28	坏	小破片	— — —	黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明 2 B 13	
グー29	坏	小破片	— — —	明褐色—明褐色 砂粒やや少 良好		墨書土器 不明 1 B 80	
グー30	坏	小破片	— — —	黒色—黒褐色 砂 粒少 良好		墨書土器 不明 内面 厚くスス付着 1A86	

遺物番号	器種	遺存度	□底 体	法量 cm ()は推定	□径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内一外	成形・調整	備考	
グー31	坏	小破片			— — —	明褐色—明褐色 砂粒やや少	良好		墨書土器 不明 1 C 81	
グー32	坏	小破片			— — —	黄褐色—黄褐色 砂粒少	良好		墨書土器 不明 1 B 73	
グー33	坏	小破片			— — —	黄褐色—黄褐色 砂粒少	良好		墨書土器 不明 2 B 31	
グー34	坏	小破片			— — —	明褐色—褐色 砂 粒やや少	良好		墨書土器 不明 1 B 80	
グー35	坏	底部のみ	— %		— 6.8 —	明褐色—黒色 砂 粒やや少	良好	底部内面ミガキ 外面一定 方向手持ちへら削り	墨書土器 「字」 内 黒 1 B40	
グー36	坏	小破片			— — —	黄褐色—黄褐色 砂粒少	良好	底部回転糸切り後周縁手持 ちへら削り	墨書土器 不明 1 B 96	
グー37	坏	小破片			— — —	黒色—黄褐色 砂 粒少	良好	底部内面ミガキ 体部下端 手持ちへら削り 底部手持 ちへら削り	墨書土器 不明 内黒 2 B27	
グー38	高台付皿	小破片			— — — 幅径	(1.6) (5.8)	黄褐色—黄褐色 砂粒少	良好	内面ナデ 高台貼付	墨書土器 不明 1 B 73
グー39	高台付皿	小破片			— — —	明褐色—明褐色 砂粒多	良好	内面ミガキ 高台貼付	墨書土器 不明 内黒 1 B85	
グー40	高台付坏	小破片			— — —	黒褐色—褐色 砂 粒少	良好	内面ミガキ 高台貼付	墨書土器 不明 2 B 62	
グー41	土 玉	破片		高さ	(2.8)	褐色 小砂粒多 良好		重量17g	不明	
グー42	土 玉	破片		高さ	(3.3)	暗褐色 小砂粒多 良好		重量19g	1B09	
グー43	土 玉	破片		高さ	(2.0)	褐色 小砂粒多 良好		重量7g	1B84	
グー44	土 玉	破片		高さ	(2.4)	暗褐色 小砂粒多 良好		重量5g	1B83	
グー45	土製支脚	小破片		高さ	(7.1)	褐色 小砂粒多 良好		支脚上端部	1A66	
グー46	玉未製品			長さ	(3.5)	凝灰岩		孔径0.34を計り、筒状工具 による穿孔方法か、重量11 g	未製品 2B33	
グー47	紡錘車	完		高さ 上径 下径	1.24 3.08×3.06 3.82×3.84	含滑石蛇紋岩 孔径上0.70×0.70 孔径下0.68×0.68		上方向により穿孔 重量 31.2g	不明	
グー48	紡錘車	破片	1/2	高さ	2.6	凝灰岩		重量32.1g	2B14	
グー49	紡錘車	破片	1/2	高さ	2.4	土製		重量13.3g	1B11	
グー50	砥 石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(3.5) 2.2 1.6	凝灰岩 孔径上 0.45× 下 0.43×0.60		穿孔は両方向より 四面利 用 重量20g	1B64	
グー51	砥 石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(3.6) 2.1 1.5	凝灰岩		四面利用 重量19g	1B91	
グー52	砥 石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(7.1) 2.8 2.7	凝灰岩		四面を利用 重量65g	2A0?	

遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 土 焼 成	内-外	成形・調整	備考
グー53	砥石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(3.3) (4.9) (4.3)	凝灰岩		三面利用 重量121g	2A0?
グー54	砥石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(4.0) (3.1) (2.5)	凝灰岩		一面利用 重量31g	2B00
グー55	砥石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(9.5) (6.6) (6.0)	凝灰岩		二面を利用 重量169g	0C70
グー56	砥石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(8.2) 5.2 (4.8)	凝灰岩		四面を利用 重量127g	1A28
グー57	砥石	破片		長さ 最大幅 最大厚	(13.3) 6.0 5.9	凝灰岩		四面を利用 重量221g	36号
グー58	砥石	破片		長さ 最大幅 最大厚	13.6 6.0 5.8	凝灰岩		四面を利用 重量441g	112号
グー59	穂つみ具	完		長さ	10.7	鉄製		釘を両端に二本柄の固定に使用	2B44

第4節 小 結

本地点の詳細な内容検討については「第5章 調査の成果」で述べているので、ここでは概要にとどめたい。

先土器時代ではブロックが1ヶ所検出されている。検出された層序はII_c~III層(ソフトローム)であり、削器3点、剥片40点、折断剥片3点などである。また、表採及び単独出土石器としてはナイフ形石器1点、尖頭器2点などであった。

縄文時代の遺構・遺物は本地点を特徴づけるひとつであろう。出土した遺物の時期は、早期(田戸下層式・田戸上層式・子母口式・条痕文系土器)、前期(黒浜式・諸磯式・浮島式・興津式)、中期(五領ヶ台式・阿玉台式・勝坂式・中峠式・加曾利E式)、後期(堀之内式・加曾利B式・安行式)である。中でも堀之内I式の遺物量が最も多く99%以上を占めていた。各時期の土器分布状況については「第5章第1節」を参照されたい。遺構としては、住居跡20軒(第140号住居跡の拡張住居跡をも含む)、埋甕6基、土壇12基、焼土跡2基であり、これらは、堀之内I期に属するものである。住居跡の20軒の中で重複関係にあるものは、第20A・B号住居跡の2軒、第86・87A・B・C号住居跡の4軒、第140号新・古の2軒である。遺構の切り合い関係で前後関係を明確にできたのは、第86→87A→87B・C号住居跡と新しくなることが確認できたのみであった。第87B・Cについては明確にできなかったが、遺構の重複関係からは堀之内I式を4期に分類が可能かもしれないが、今回はこの事実を踏まえながら土器編年から3

期に区分してある。住居跡の形態は、炉跡、出入口施設、柱穴の配置などから5種類に分類されている。特に注目されるのは、炉跡がドーナツ状に焼土が認められ第140号新住居跡の炉跡はドーナツ状に粘土を貼り付けていた点である。柱穴については、殆どの住居跡が壁柱穴をもつが、一部の住居跡の中央に柱穴がみられることが指摘されている。第140・152号住居跡は所謂柄鏡形住居であった。これらの住居跡は台地の縁辺をめぐる様に配置され、所謂中央広場と言われる空間をもち、尾根に対しては配置が見られず、集落の出入口部の可能性も若干推定されるかもしれない。また、柄鏡形住居跡の配置と埋甕の配置が非常に良く類似していることから、遺跡の北東部は呪術的領域をもつものと推定される。その他として、生産用具である石器の多量の出土を見ている。石器の種類も豊富で石鏃、楔形石器、石核、磨製石斧、打製石斧、尖頭器、石皿、凹石、浮子、石棒、石剣、台石、砥石、磨石、礫である。これらについては、詳細な器種の分類を行った後に、分布と照し合せて検討している。特に礫についても従来の考え方を改めて、分布図を作成して堀之内期に殆どのが搬入されたものであることを実証することができ、その用途については、これからの検討課題としたい。

古墳時代の住居跡は34軒検出された。これらの住居跡は3期に分類され、住居跡の台地に対する配置状況として、第I期が南西縁辺部に、第II期も台地中央部に位置する第49号住居跡を除いて台地南西縁辺部に、第III期は台地全域に分布するのが判明した。これらの住居跡構造の特徴としては支柱穴が対角線上に4本配置され、その多くの住居跡ではカマドの対面壁付近に小ピットの存在が指摘された。カマドの位置は北西方向が優位を占め、壁のほぼ中央にあることが指摘され、北西方向でも若干角度に相違が認められた。住居跡の面積は約20～30㎡前後が最も多く、第49号住居跡の52.05㎡が最大規模であった。この時期の住居跡の施設として多く見られる貯蔵穴は3軒のみに検出されただけであった。

歴史時代の住居跡は44軒検出された。これらの住居跡は6期に分類され、これらの住居跡は各期によって特徴的な分布を示している。第I・II期は東西に細長く分布し、第III期は西側に、第IV・V期は南東部に、第VI期は中央部より東側にそれぞれ分布していた。これらの住居跡構造としての特徴は、古墳時代にみられた支柱穴の対角線上の4本柱が、非常に少くなり、不規則な小ピットが多く見られるようになる。カマドも全体的には北西方向が優位を占めるものの、北東方向も若干見られるようになる。住居跡の面積は第I～III期では約15～20㎡前後と約30㎡前後のものが多く見られるが、第IV～VI期では小形化が顕著で約10～15㎡前後に集中して見られることが指摘される。

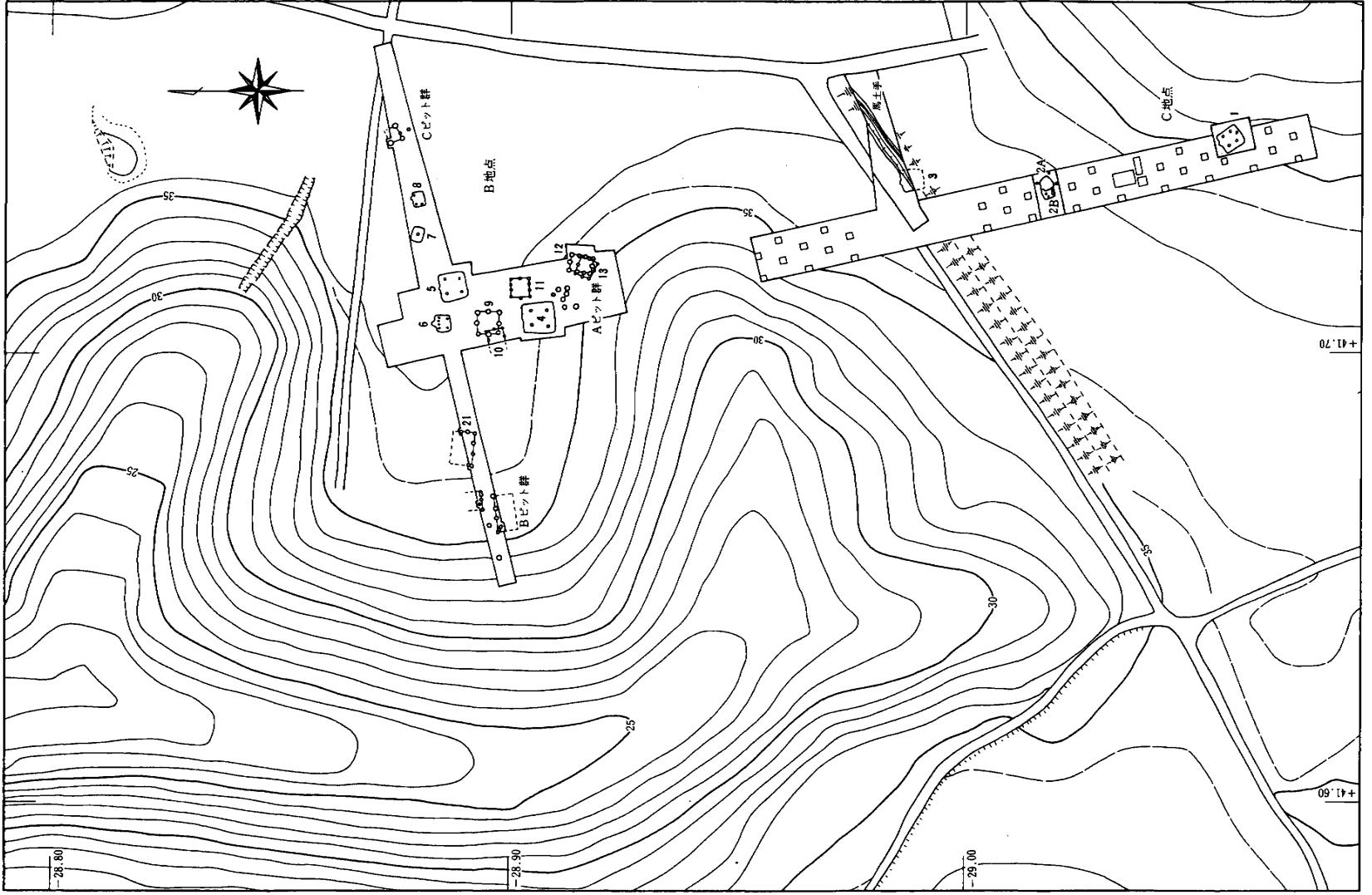
遺物としては多量の土器の他に、石製品、鉄製品、土製品等が見られた。石製品としては砥石が多く鉄器の利用が盛んであったことが裏付けられている。図示できたもの以外でも鉄製品の小破片が多く出土している。石としては雲母片岩が比較的多く見られている。この雲母片岩の分布状況を検討した結果、縄文時代特に堀之内期の他の石器との分布が明瞭に別れ、また、

古墳時代から歴史時代の各住居跡から多く出土していることから、古墳時代以降にA地点に搬入されたことが明確である。用途としては、土製支脚の代用が想定される。古墳時代から歴史時代にわたってスラグが少量出土している。時期的に明確にできるのは、古墳時代の第40号住居跡と第51号住居跡出土のスラグ流入坯である。このスラグ流入坯は第51号住居跡に伴うものではなく、歴史時代第Ⅴ期に所属するものであった。スラグは鍛冶滓のものが多く、本A地点は数期にわたって鍛冶が行われたものであろう。

その他としては掘立柱建物跡が検出されているが、各住居跡との重複関係が明瞭で無く、時期決定が困難を極めている。これらの掘立柱建物跡は、重複関係、規模、方位等を検討した結果5類まで分類された。土壇は時期決定できるものが少く、第101・144号土壇は歴史時代に所属するものであった。溝については、A地点で最も新しい遺構である。

第2章

伊篠白幡遺跡B地点の調査



第480図 伊藤白崎遺跡B・C地点全測図 (1/1,000)

第2章 伊篠白幡遺跡B地点の調査

第1節 遺跡の位置及び立地 (第480図)

今回調査が実施された伊篠白幡遺跡は、「酒々井町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書」(酒々井町教委 1984)によれば「遺跡番号22、伊篠白幡遺跡 酒々井町伊篠字白幡」と記載されている。この報告書に記載されている伊篠白幡遺跡は、標高約35m、東西450m、南北600mの広大な台地を一遺跡として把握されている。調査されたA～C地点はこの遺跡分布範囲に含まれ、D地点は谷を隔てた別の台地に立地している。

B地点は、印旛郡酒々井町伊篠字野田330—8他に位置し、伊篠白幡遺跡の広大な台地の西側に所在する。この遺跡の所在する台地は、印旛沼に注ぐ江川によって樹枝状に開析された広大な台地であるが、詳細に検討するならば、江川の小支流によって更に樹枝状に開析されている。B地点は、この様な小支流によって開析された西側の一台地に所在し、標高約35m、東西80m、南北50m、水田面との比高差約15mであった。B地点の所在するこの台地は南・北に小支谷が認められることから、地形的にも一遺跡として把握できるものと考えられた。C地点とは前述した様に南側の小支谷により明瞭に区分できるものであった。

第2節 遺跡の概要及び調査の方法

伊篠白幡遺跡B地点において検出された遺構と遺物は次のとおりである。先土器時代から古墳時代までの遺構・遺物は検出されなかった。歴史時代の遺構としては、住居跡5軒、掘立柱建物跡6軒、ピット群が3ヶ所であった。特にピット群については調査範囲が狭いので掘立柱建物跡になる可能性がある。遺物としては各住居跡内より多数出土しているが第6号住居跡より香炉蓋が出土し、墨書土器片が7点の出土をみた、グリッド出土遺物でもみるべきものがあり、特に墨書土器の「俣」「檜前」と緑釉陶器及び土塔の一部が出土している。

調査の方法は、調査予定地内の中軸線に沿ってグリッドを設定し、確認調査を実施した。本遺跡の確認調査結果から、予定地内全域の本調査を実施した。特に南側地区においては小グリッドを設定して遺物を取り上げた。

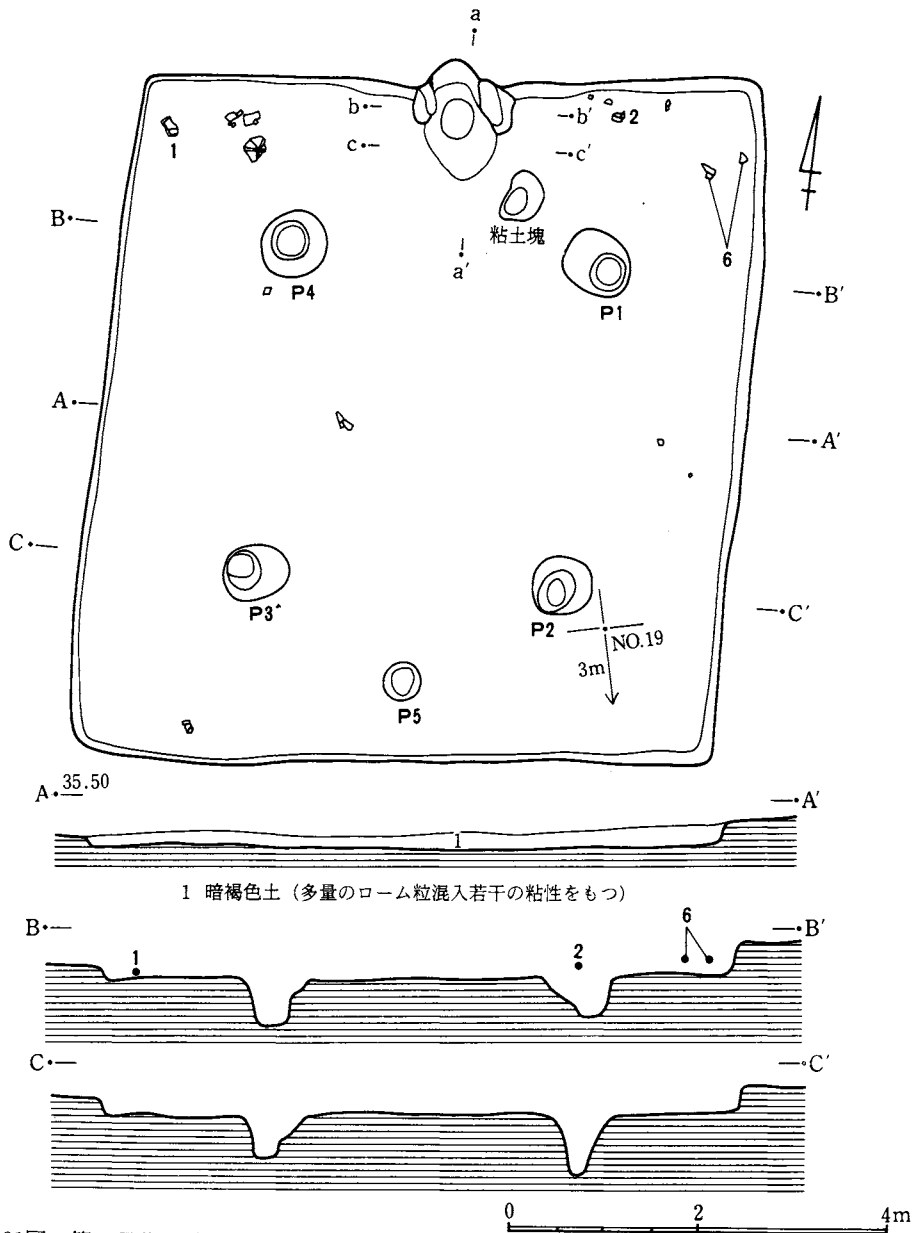
第3節 検出された遺構と遺物

1. 歴史時代

1) 住居跡

第4号住居跡 (第481~483図、図版164・170)

台地南側平坦部に位置し、第10・11号掘立柱建物跡に近接する。

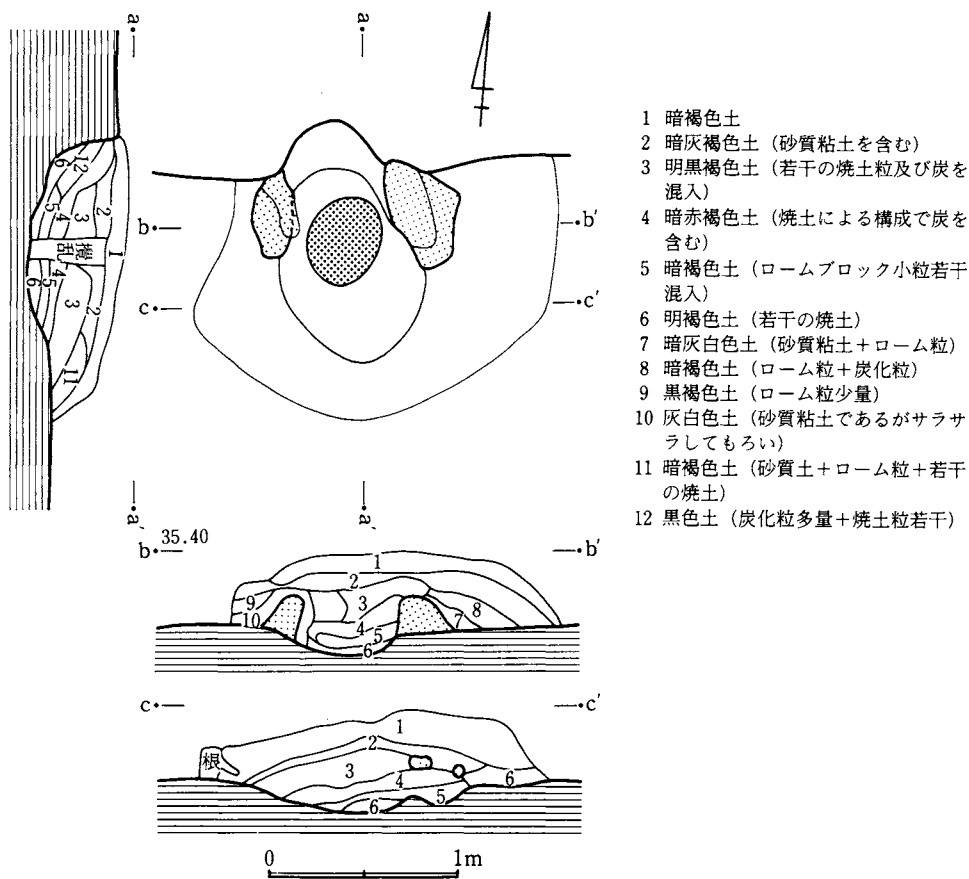


第481図 第4号住居跡実測図 (1/80)

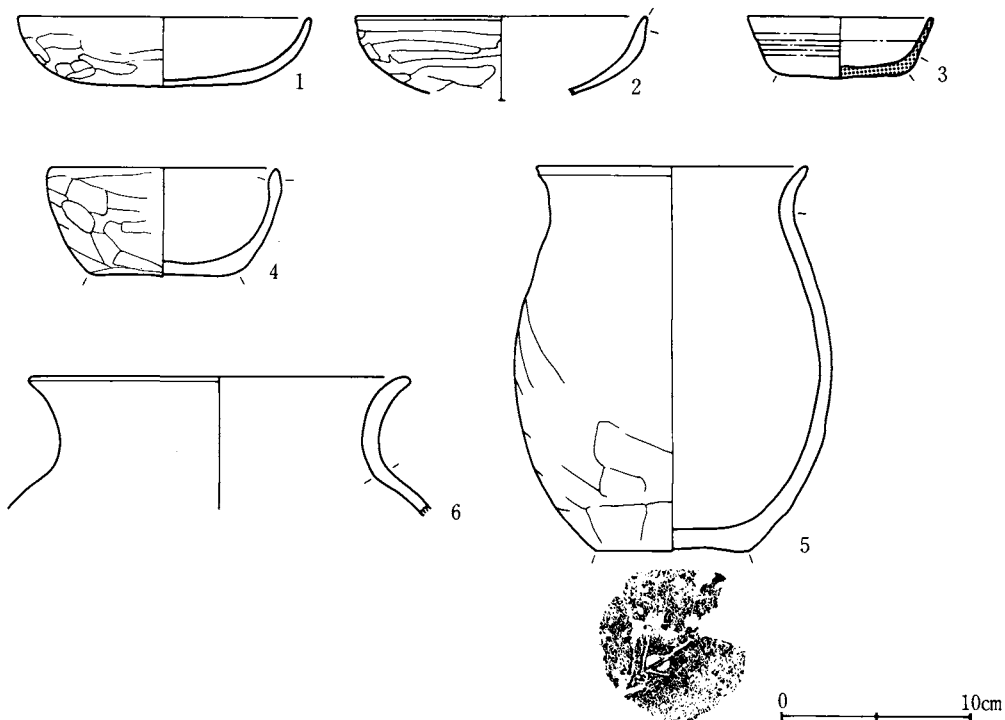
遺構 西壁6.90m、北壁6.50mあり面積32.80㎡で菱形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN 8°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約10cmを計る。壁溝は検出されていない。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個検出され、P₁~P₄が対角線上に対置され、P₅はカマドの対面に位置する。P₁~P₄の柱穴底には柱痕がみられ、径40cmを計る。壁溝は検出されていない。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約30cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用していた。火床部は径45×40cmのやや深い楕円状を呈している。

遺物出土状況 土層は1層のみの区分であった。遺物は坏・甕が出土している。1の坏は北西コーナー床直から、2の坏・6の甕は北東コーナーのほぼ床直上から出土している。他は覆土中からである。



第482図 第4号住居跡カマド実測図 (1/40)



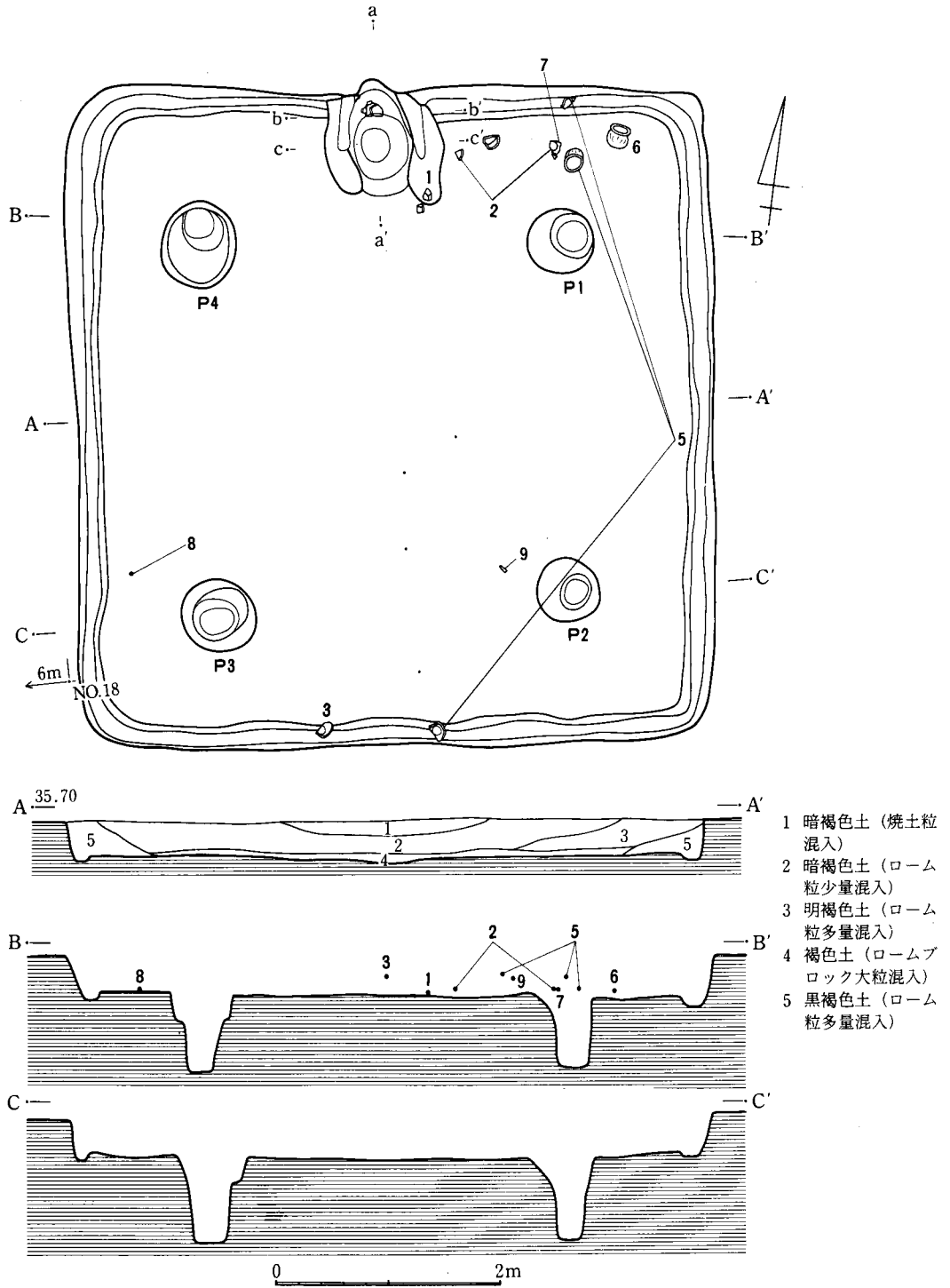
第483図 第4号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第4号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
4-1	坏		3/4 - 5/8		15.5 - 3.7	黒褐色-黒褐色 砂粒少 良好		内面丁寧なナデ 外面へラ 削り後ナデ	口唇部磨耗
4-2	坏		3/4 - 3/8		(15.6) - (4.4)	黒褐色-黒褐色 小砂粒多 良好		口縁部外面横ナデ 体部内 面丁寧なナデ 外面へラ削 り	
4-3	坏		1/2 完 3/8		(9.8) 6.5 3.3	灰色-灰色 小砂 粒多 不良		体部下端へラ削り 底部へ ラ削り	全体に磨耗著しい 須 恵器
4-4	坏		3/4 5/8 3/8		(11.9) 8.0 5.8	黒褐色-褐色 砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ 体部外面へ ラ削り 内面ナデ 底部へ ラ削り	内外面剥離激しい
4-5	甕		1/2 5/8 3/8		(14.4) 8.0 20.1	黒褐色-褐色 砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ 胴部外面斜 位へラ削り 底部木葉痕	内外面剥離著しい
4-6	甕	口縁部の み	3/4 - -		19.8 - (7.0)	黒褐色-褐色 砂粒多 良好	小	口縁部横ナデ 胴部外面へ ラ削り後ナデ	

第5号住居跡 (第484~486図、図版161・162・164・170)

台地中央平坦部に位置し、第6号住居跡に近接する。

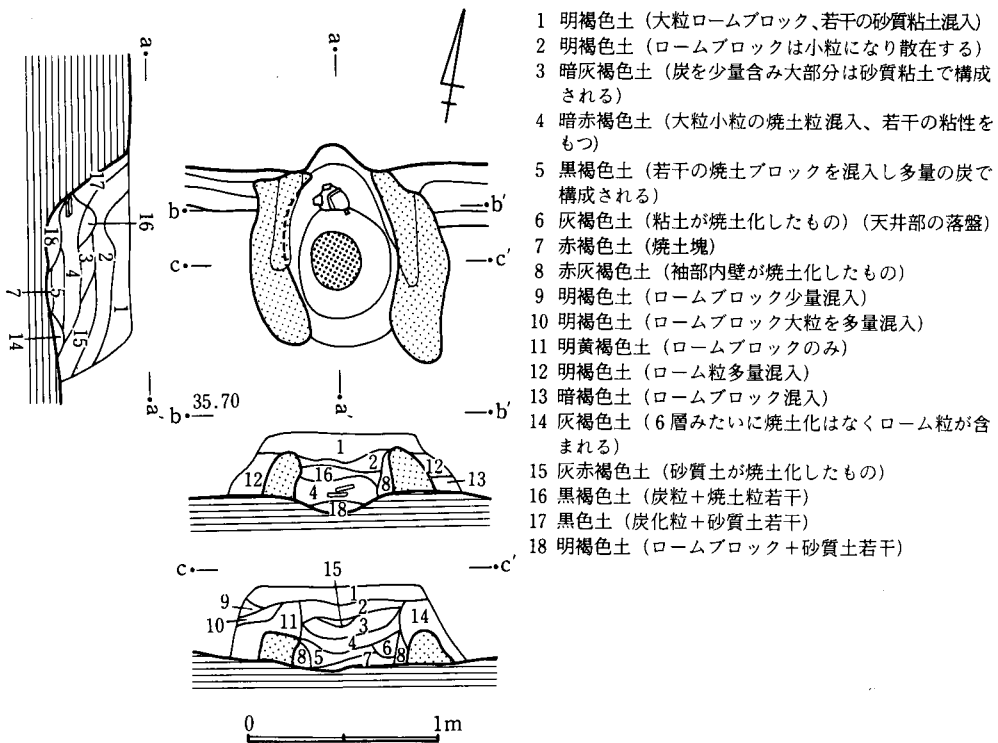


第484図 第5号住居跡実測図 (1/60)

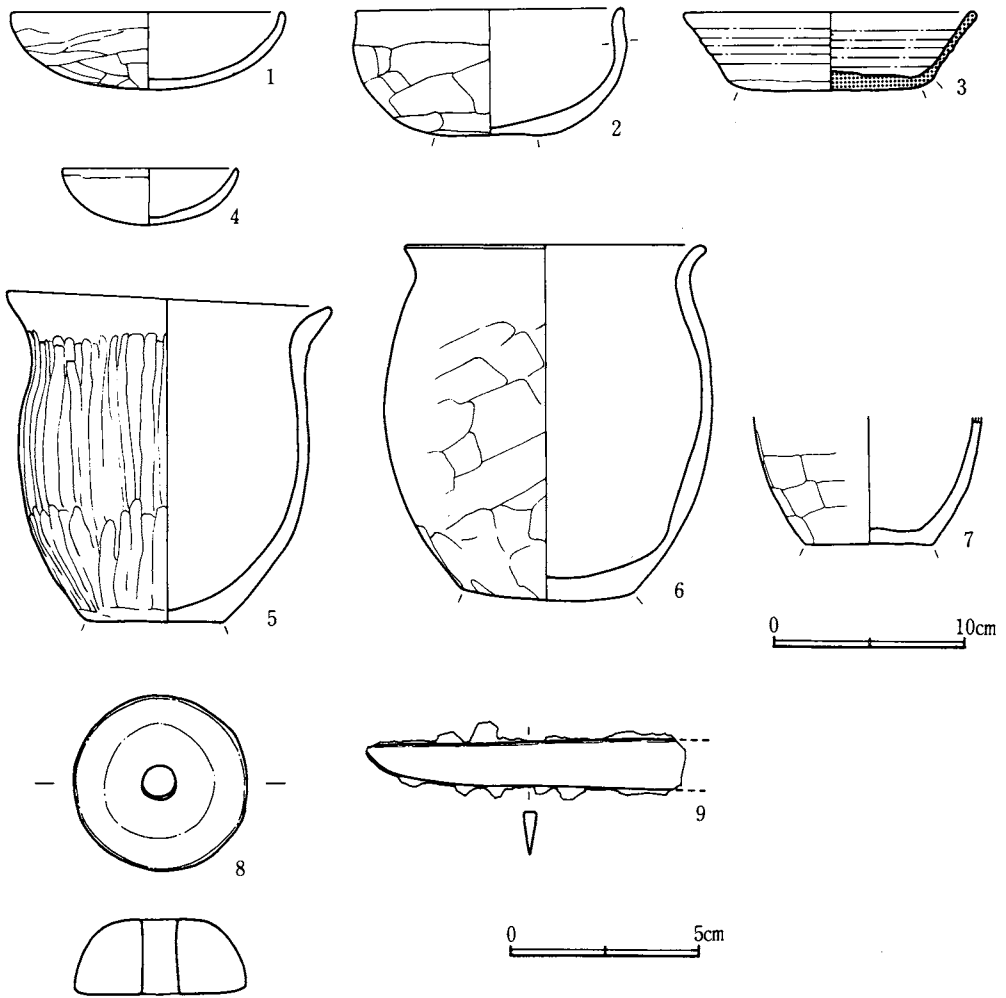
遺構 西壁5.60m、北壁5.35mあり面積32.73㎡で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN 9°Wである。壁は四辺ともにほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約30cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は4個検出され、対角線上に配置される。柱穴底には柱痕が認められ、径約30cmを計る。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約5cmを計る。カマドの構築には砂質粘土が使用されている。火床部は径30×25cmありやや深い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層は3～5層中にローム粒・ロームブロックが多量に混入されていることから、ロームブロック等が廃棄されたものと推定される。遺物は坏・甕・紡錘車・刀子が出土している。1・2の坏はカマド右袖部付近床直から、3の坏は南壁際から、5の甕は北東コーナー床直と南壁際の破片が接合し、6・7の甕は北東コーナー床直からそれぞれ出土している。他は覆土中からである。



第485図 第5号住居跡カマド実測図 (1/40)



第486图 第5号住居跡出土遺物実測図 (1~7 1/4、8・9 1/2)

第5号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 法量 ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
5-1	坏		3/10 完	(14.4) — (4.0)	黄褐色-褐色 砂粒多	小 良好	体部内面ミガキ 外面ヘラ 削り後ナデ	口唇部磨耗
5-2	坏		3/10 完 4/10	14.2 5.5 6.5	黒色-黒褐色 砂粒多	小 良好	口縁部横ナデ 体部内面ナ デ 外面ヘラ削り 底部ヘ ラ削り	底部を小範囲のヘラ削 りで作る
5-3	坏		3/10 完 2/10	(15.4) 9.4 4.0	灰白色-灰白色 小砂粒多	やや不 良	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	須恵器
5-4	坏		3/10 完 3/10	9.3 — 3.0	黄褐色-褐色 砂粒多	小 良好	内面丁寧なミガキ 外面ヘ ラ削り後丁寧なナデ	
5-5	甕		完 完 5/10	17.1 7.1 17.0 胴最大径 15.3	褐色-褐色 粒多	小砂 良好	口縁部横ナデ後胴部外面縦 位ヘラ削り後ナデ 内面ナ デ 底部ヘラ削り	
5-6	甕		完 完 完	16.0 9.0 18.6 胴最大径 17.3	黒色-褐色 粒多	小砂 良好	口縁部横ナデ 胴部外面斜 位ヘラ削り 底部ヘラ削り	外面の一部剝離あり
5-7	甕	底部のみ	— 完 —	— 6.7 (6.5)	黒色-褐色 粒多	小砂 良好	胴部内面ナデ 外面横位ヘ ラ削り 底部ヘラ削り	
5-8	紡錘車	完	高さ 径上 径下 孔径上 孔径下	1.96 2.98×2.95 4.52×4.56 0.89×0.91 0.96×0.96	含滑石蛇紋岩		下方より穿孔 重量57.5g	2次火熱を受ける
5-9	刀子	破損	長さ	(8.4)	鉄製			

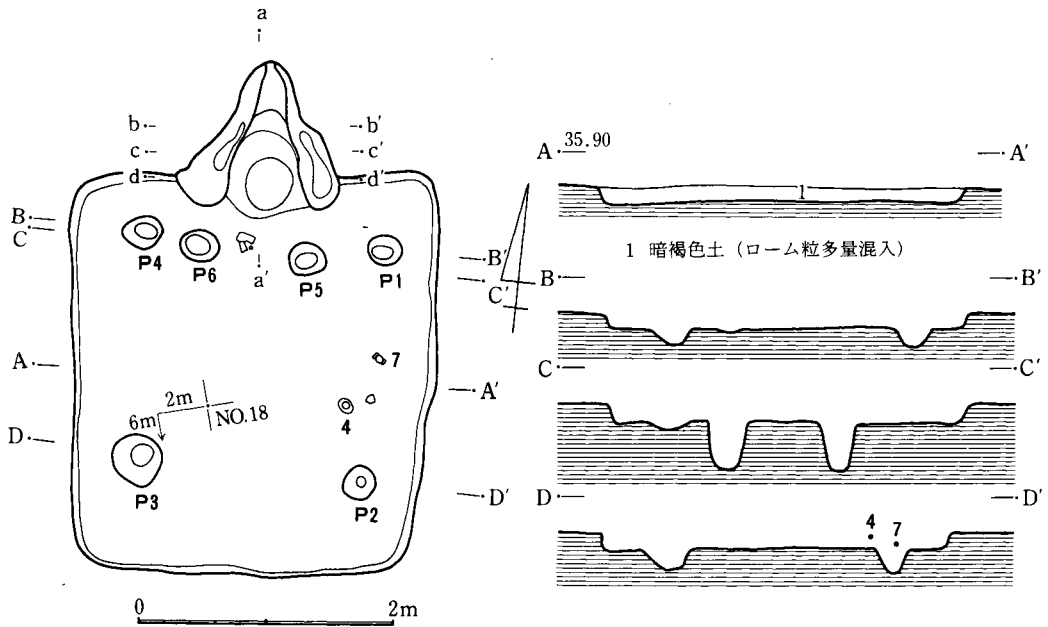
第6号住居跡 (第487~489図、図版165・170)

台地中央平坦部に位置し、第5号住居跡に近接する。

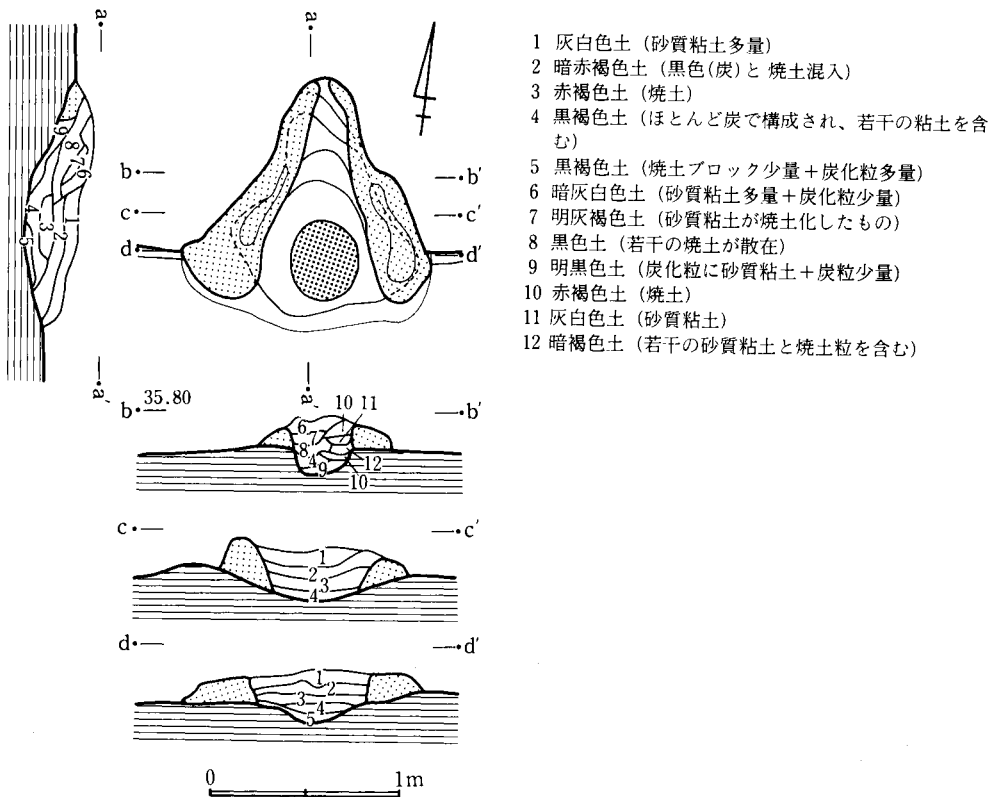
遺構 西壁2.90m、北壁2.75mあり面積9.23m²で各コーナーが隅丸をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN7°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約15cmを計る。壁溝は無い。床は平坦である。柱穴は6個検出され、P₁~P₄が対角線上に配置され、P₅・P₆はカマド前面に位置する。P₅・P₆は径30cm、深さ17cmを計る。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。壁への掘り込みは約90cmと深く、火床部も壁より外側に設けられている。火床部の径は45×35cmのやや深い播鉢状を呈している。煙道部に段を有する。

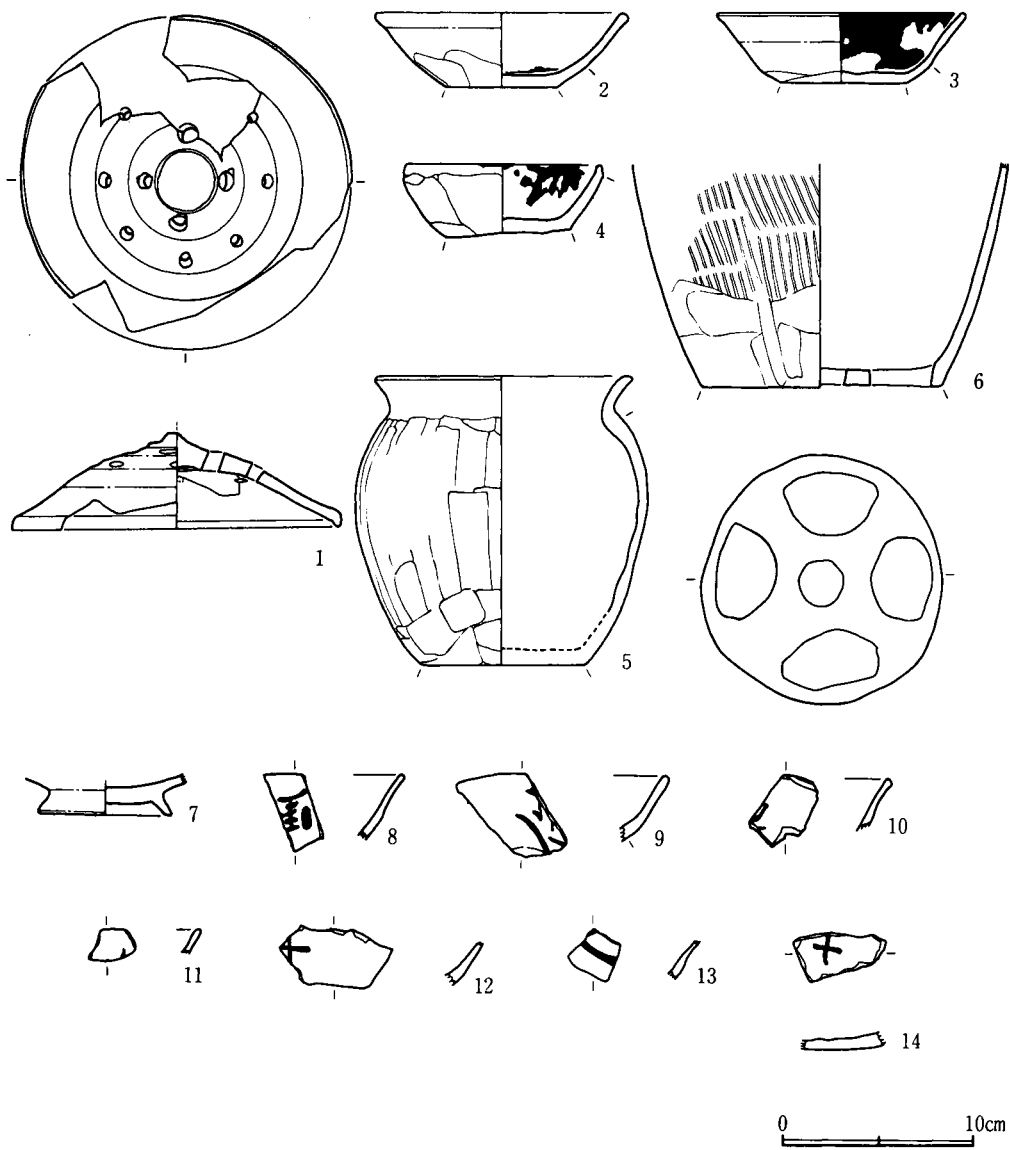
遺物出土状況 土層は1層のみに区分された。遺物は蓋・坏・甕・甗・高台坏皿が出土している。4の坏と7の高台付皿の底部が床面よりやや浮いた状態で出土している。他は覆土中からの出土である。特に坏の小破片の中に墨書が多く7点を数えるが、判読は困難であった。



第487図 第6号住居跡実測図 (1/60)



第488図 第6号住居跡カマド実測図 (1/40)



第489图 第6号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第6号住居跡出土遺物観察表

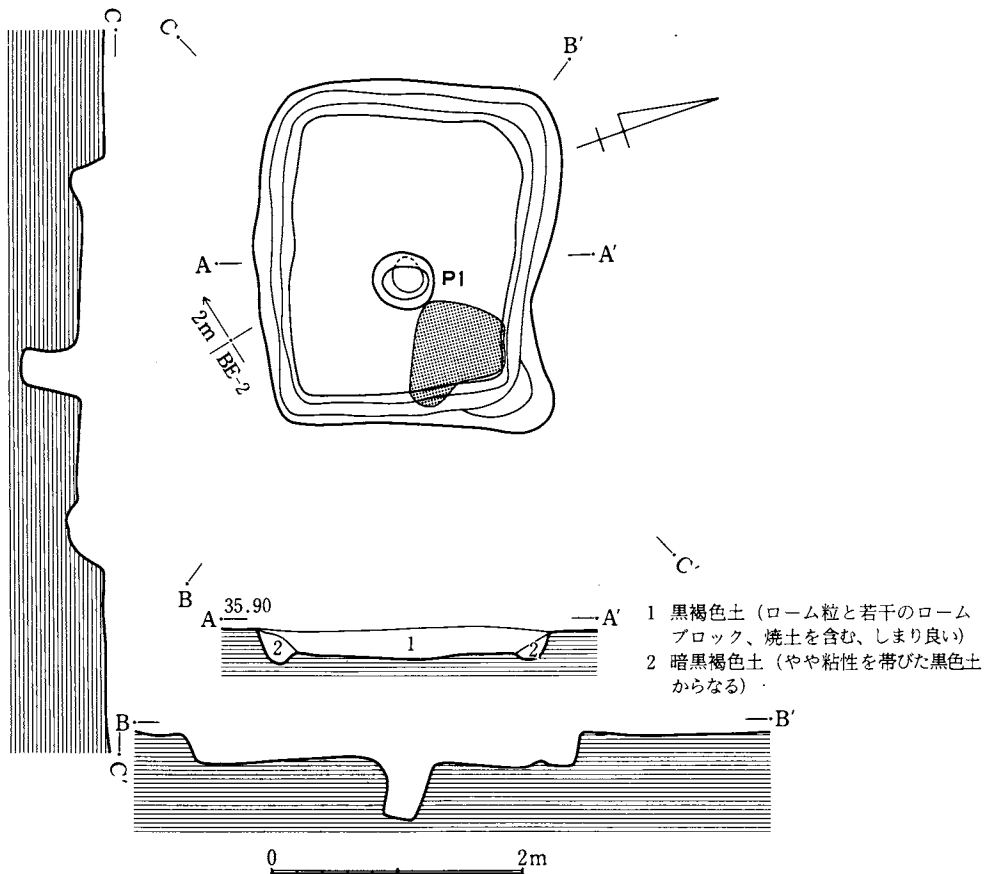
遺物番号	器種	遺存度	口底 体 ()は推定	法量 cm 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
6-1	蓋	% — %	17.3 — (6.0)	茶褐色—茶褐色 砂粒少 良好	内面ナデ 外面は部分的に へら削り以外ナデ 孔数推 定12	頂部に宝珠形鈕貼付か 香炉蓋か		
6-2	坏	% 完 %	13.5 6.0 3.9	褐色—褐色 砂粒 少 良好	体部下端手持ちへら削り 底部回転糸切り後周縁手 持ちへら削り	内面スス附着		
6-3	坏	完 完 完	13.1 6.6 3.7	黒色—黒色 小砂 粒多 良好	体部下端手持ちへら削り 底部一方向へら削り	内面スス附着		
6-4	坏	完 完 完	10.3 6.6 3.8	褐色—褐色 小砂 粒多 良好	口縁部横ナデ 体部内面ナ デ 外面横位へら削り 底 部一方向へら削り後周縁手 持ちへら削り	内面スス附着		
6-5	甕	% 完 %	13.7 8.6 14.9 胸最大径	褐色—褐色 小砂 粒多 良好	口縁部横ナデ 胴部外面上 半縦位下半横位へら削り 内面ナデ 底部一方向へら 削り後周縁手持ちへら削り			
6-6	甌	— 完 %	— 12.6 (11.5)	褐色—褐色 小砂 粒多 良好	内面ナデ 外面叩目後下半 横位へら削り 底部孔5			
6-7	高台付皿	高台付近 のみ	— 7.0 (1.7)	赤褐色—赤褐色 砂粒少 良好	内面ミガキ 坏底部回転糸 切り後高台貼付後ナデ			
6-8	坏	小破片		黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好	内外面ともナデ	墨書土器 不明		
6-9	坏	小破片		黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明		
6-10	坏	小破片		黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明		
6-11	坏	小破片		黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明		
6-12	坏	小破片		黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明		
6-13	坏	小破片		黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明		
6-14	坏	小破片		黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明 坏内 面に墨書		

第7号住居跡（第490図、図版165）

台地中央平坦部に位置し、第8号住居跡と近接する。

遺構 南壁2.50m、西壁2.05mあり面積5.93㎡で各コーナーが隅丸をなし、方形の平面形を呈する竪穴住居跡と推定される。北東コーナー付近の床面に焼土が、また北東コーナーが掘り込まれていることなどを考えると隅カマドの可能性もあるが、調査時には検出できなかった。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約25cmを計る。壁溝は全周し、巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面はほぼ平坦である。柱穴は1個検出されている。P₁は径50×45cm、深さ約50cmを計り、東側に傾斜を呈する特徴を示している。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示している。遺物はほとんど出土していない。



第490図 第7号住居跡実測図（1/60）

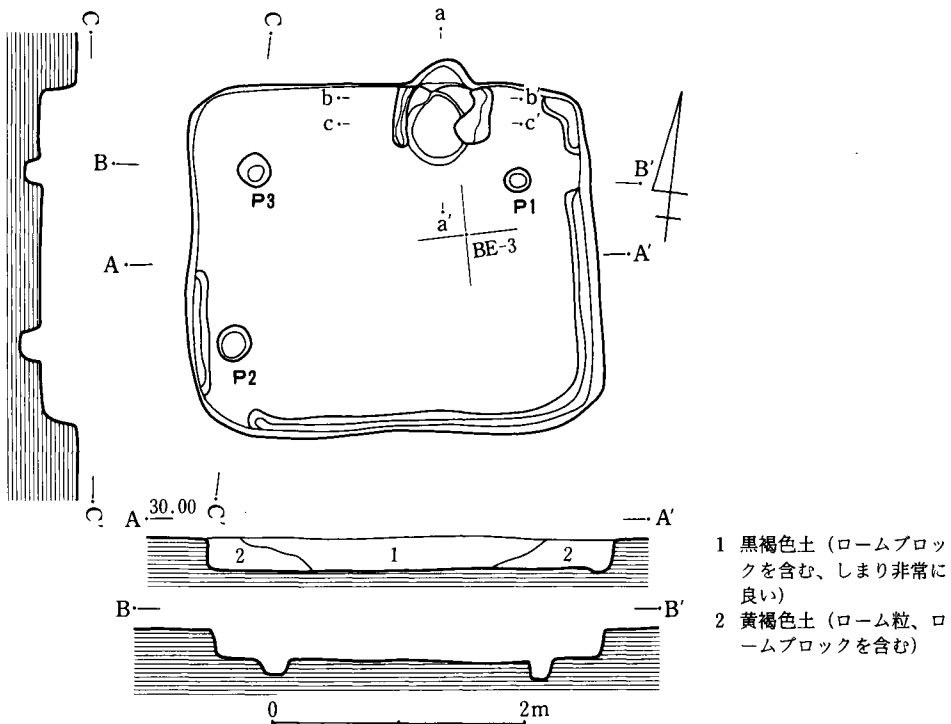
第8号住居跡 (第491・492図、図版166)

台地中央平坦部に位置し、第8号住居跡に近接する。

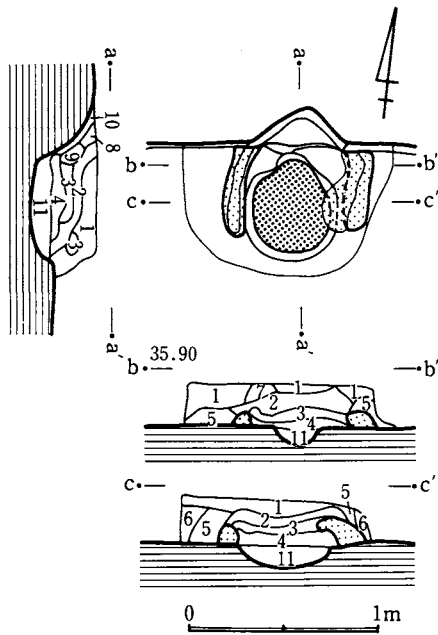
遺構 西壁2.45m、北壁2.95mあり面積8.65m²で各コーナー隅丸をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央右寄りに位置しN 6°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり確認面より約25cmを計る。壁溝は南東側と西側の一部として北東コーナーだけめぐっている。巾は約15cm、深さ約5cmである。床面はハードローム面まで達しておらず軟弱である。柱穴は3個検出され、それぞれ南東コーナーを除いて配置されている。P₁~P₃の径は約25cm前後深さ15cm前後であった。

カマド 北壁中央右寄りに位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約15cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用していた。火床部は径50×40cmあり擂鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層は覆土中にロームブロックを含んでおり、人為的な廃棄が行なわれていることも考えられる。遺物は皆無であった。



第491図 第8号住居跡実測図 (1/60)



- 1 黒褐色土 (ローム粒及び焼けたローム粒を含む)
- 2 黒褐色土 (焼土と黄色の砂質粘土を含む)
- 3 灰白色土 (やや粘性を有する灰白色の粘土より成る)
- 4 黄褐色土 (2層より多くの焼土、砂質粘土を含む)
- 5 黄褐色土 (砂質粘土を含む)
- 6 黒褐色土 (少量の砂質粘土を含む)
- 7 黄褐色土 (砂質粘土と若干の焼土から成る)
- 8 暗黄褐色土 (ローム粒、炭を含む)
- 9 黒褐色土 (炭、焼土粒を含む)
- 10 黄褐色土 (若干の炭を含む)
- 11 暗黒褐色土 (焼土、炭化粒、ローム粒から成る)

第492図 第8号住居跡カマド実測図 (1/40)

2) 掘立柱建物跡

第9号掘立柱建物跡 (第493図、図版166)

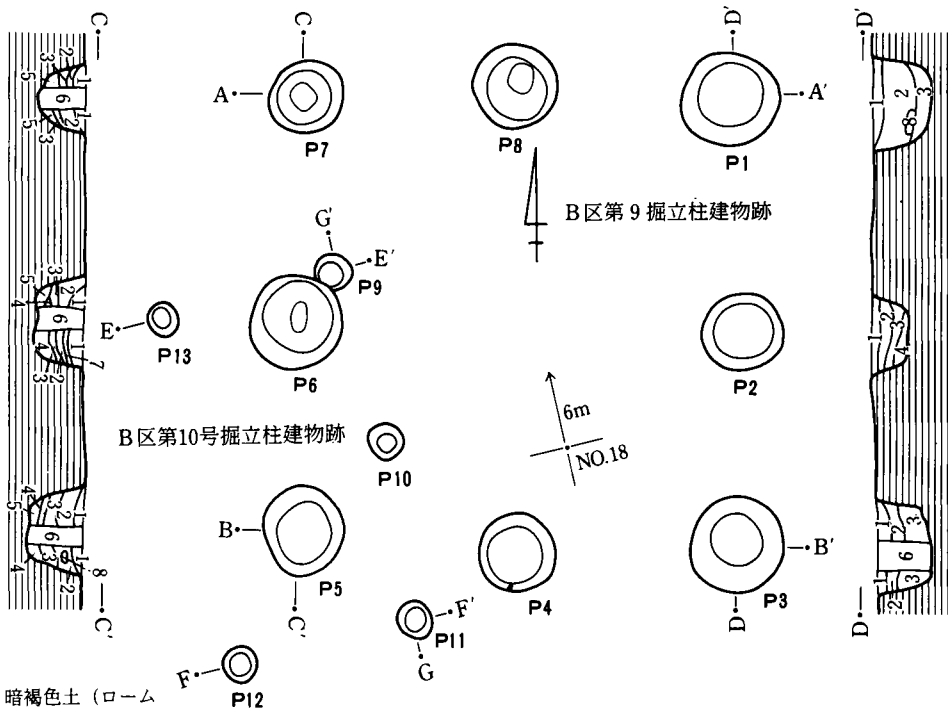
台地中央平坦部に位置し、第10号掘立柱建物跡とは重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

遺構 桁行2間、深行2間の掘立柱建物跡である。主軸は2間四方のため一応N1°Eとした。規模は桁行2.30m、深行2.30mあり各柱穴間は1.15mの等間隔である。掘り方は径50cm前後、深さ30cm前後あり、四隅がやや深めである。埋土状況は柱痕が明瞭に見てとれ、版築状になっていて、ローム粒・ロームブロックが多い。

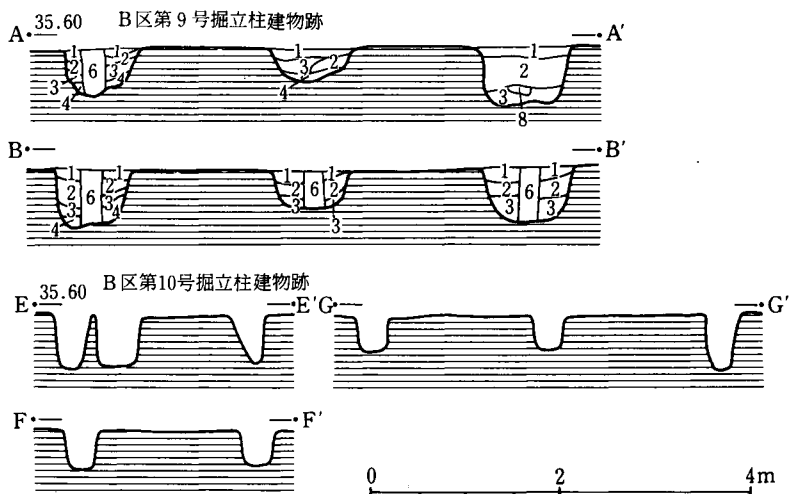
第10号掘立柱建物跡 (第493図、図版166)

台地中央平坦部に位置し、一部未調査である。第9号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。

遺構 未調査部があるため規模は確認できなかった。P₉~P₁₁は2間で1.80m、柱穴間は0.90mの等間隔である。



- 1 暗褐色土 (ロームブロック大粒混入、しまりない)
- 2 明褐色土 (ロームブロック大粒多量混入、しまりは中良)
- 3 明褐色土 (ロームブロックは少なく、ローム粒が多量混入される)
- 4 褐色土 (ほとんどロームブロック小粒で構成される、しまりはない)
- 5 黒褐色土 (炭を多量混入、しまりはない)
- 6 黒色土 ※柱痕
- 7 黒色土 (炭化物層)
- 8 ロームブロック



第493図 第9・10号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

第11号掘立柱建物跡（第494図、図版167）

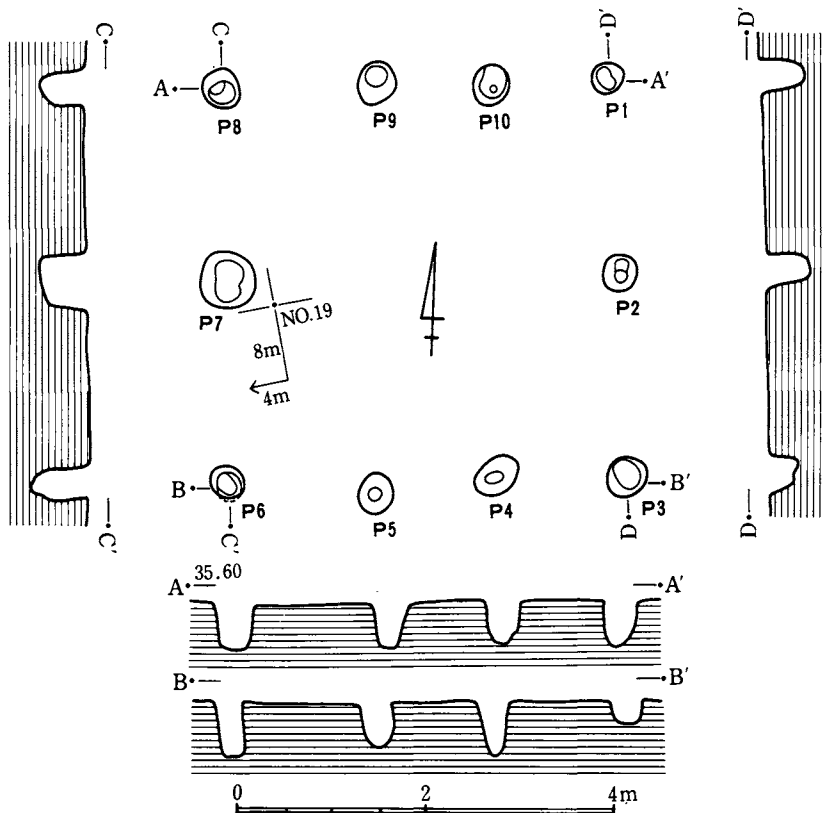
台地中央南側平坦部に位置し、第4号住居跡と近接する。

遺構 桁行3間、深行2間の掘立柱建物跡である。主軸はN87°Eである。規模は桁行4.10m、深行4.10mある。桁行の柱穴間隔は不規則であるが対面柱穴列とは並列し、深行の柱穴間隔は2.05mの等間隔である。掘り方は径40cm前後、深さ40cm前後と比較的同じ規模をもっている。

第12号掘立柱建物跡（第495図、図版167）

台地南側緩傾斜面に位置し、第13号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明であった。

遺構 桁行3間、深行2間の掘立柱建物跡である。主軸はN10°Eである。規模は桁行4.80m、深行3.60mである。桁行の柱穴間隔は約1.60m等間隔の柱痕が認められる。深行の柱穴間隔は1.80m等間隔の柱痕が認められる。埋土状況は柱痕が明瞭に認められ、版築状になっていて、ローム粒・ロームブロックなどが多量に混入されていた。

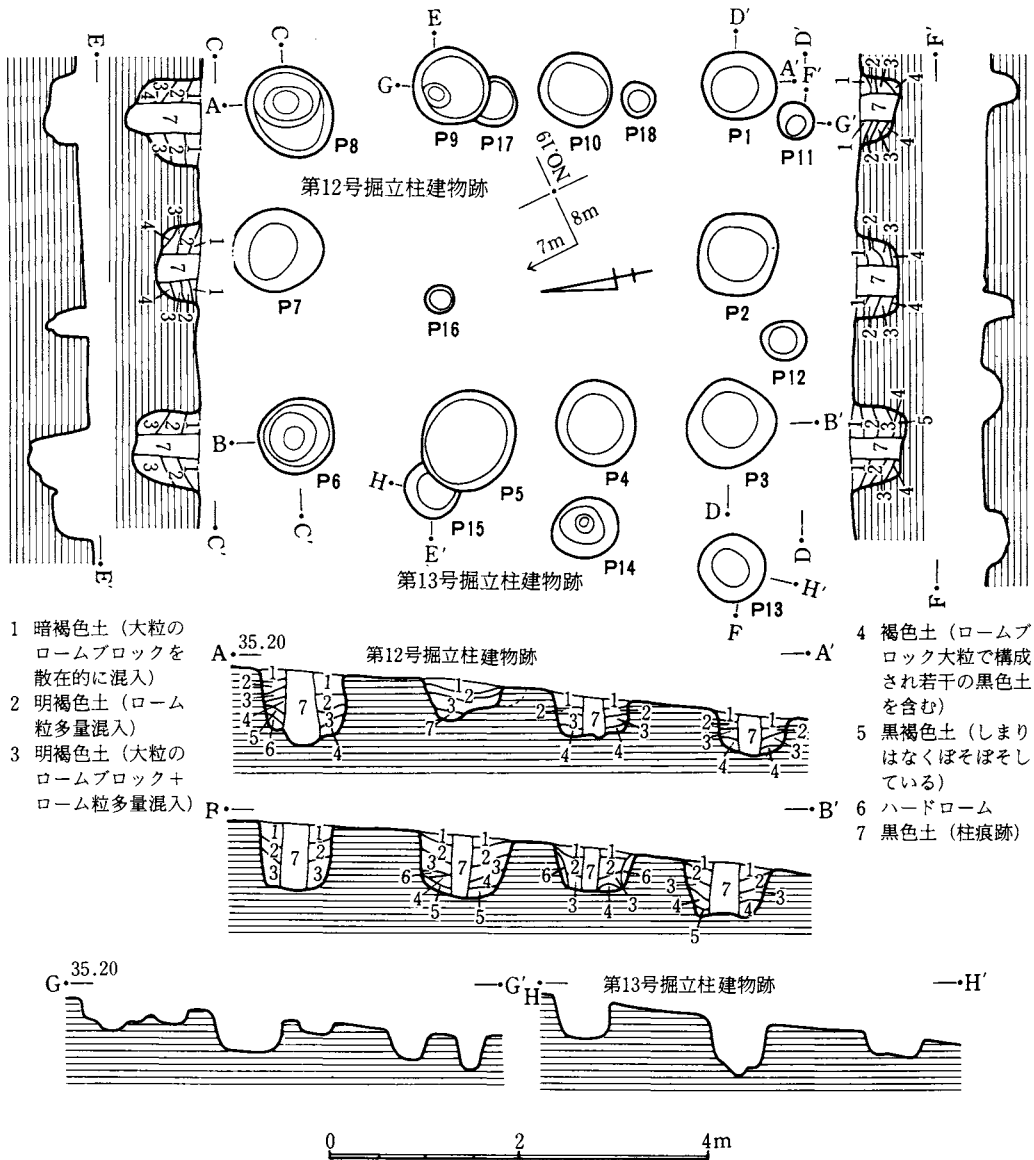


第494図 第11号掘立柱建物跡実測図（1/80）

第13号掘立柱建物跡（第495図、図版167）

台地南側緩傾斜面に位置し、第12号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明であった。

遺構 桁行2間、深行2間の掘立柱建物跡である。主軸は2間四方のため一応N69°Wとした。規模は桁行P₁₁～P₁₃が4.70m、P₁₅～P₁₇が4.20m、深行P₁₃～P₁₅が3.30m、P₁₇～P₁₁が3.30mを計る。桁行の柱穴間隔は不規則であるが、深行の柱穴間隔は1.15mの等間隔であった。

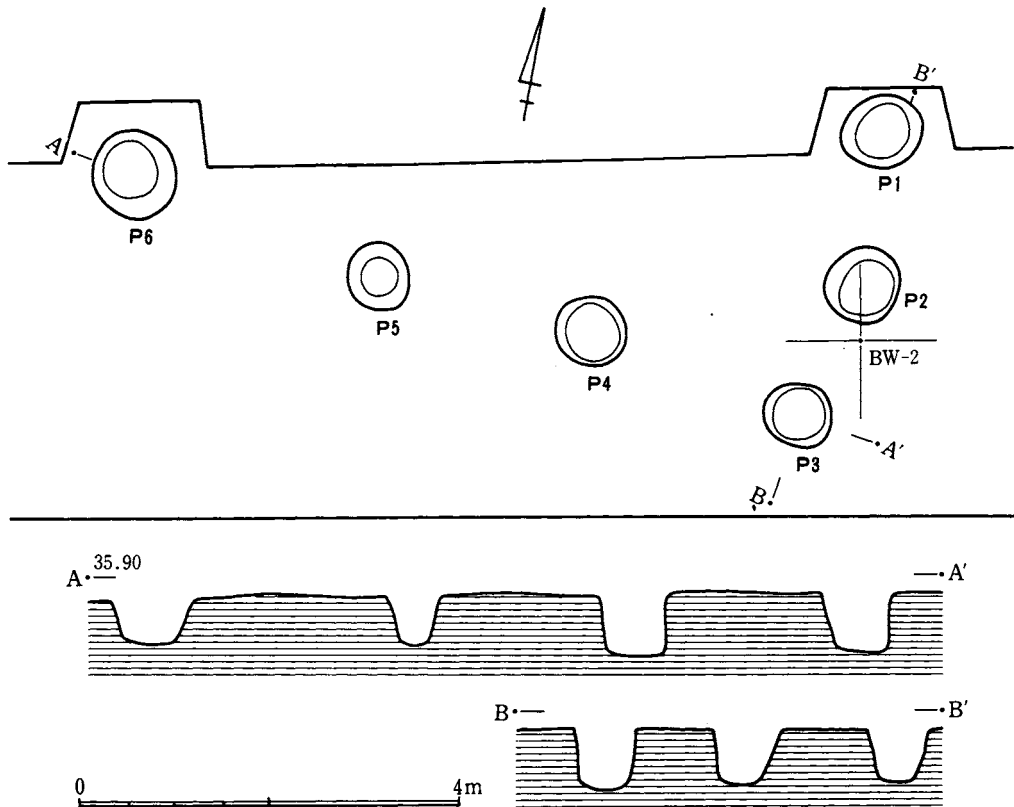


第495図 第12・13号掘立柱建物跡実測図（1/80）

第21号掘立柱建物跡（第496図）

台地西側平坦部に位置し、中央平坦部の遺構群とは少し離れている。

遺構 未調査地があるため規模は確認できなかったが、掘立柱建物跡である。規模は $P_1 \sim P_3$ の柱穴間が3.20m、 $P_3 \sim P_6$ の柱穴間が7.60mである。 $P_1 \sim P_3$ の柱穴間は1.60mの等間隔である。 $P_3 \sim P_6$ の柱穴間は約2.50mの等間隔である。柱穴の径は70~80cm前後、深さは確認面より約40~60cm前後であった。

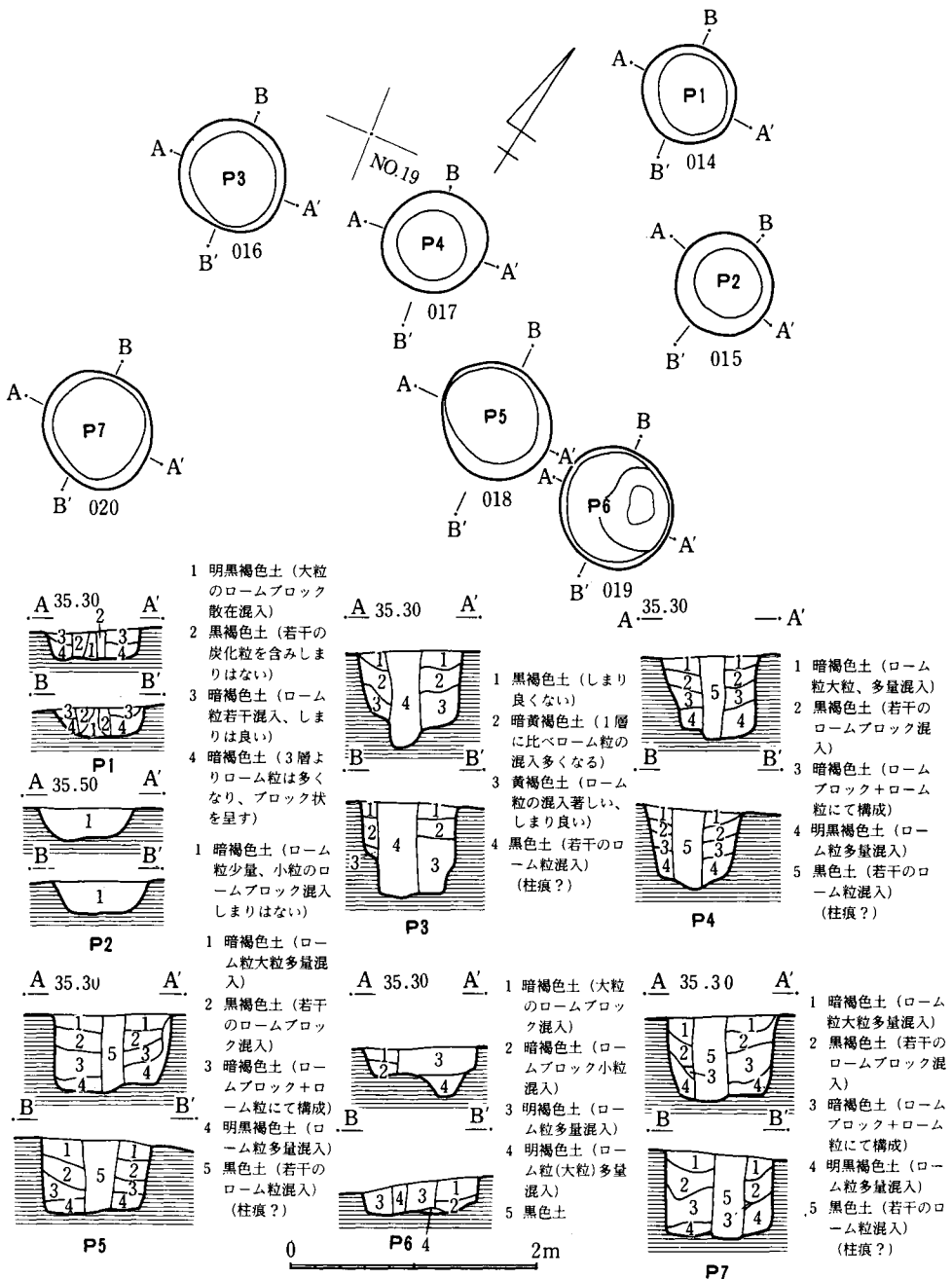


第496図 第21号掘立柱建物跡実測図（1/80）

3) ピット群

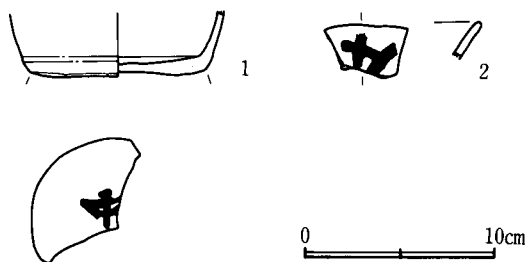
Aピット群 (第497・498図、図版168)

台地南側緩傾斜面に位置し、第4号住居跡と第12・13号掘立柱建物跡の中間にある。



第497図 Aピット群実測図 (1/60)

遺構 これらのピットは不規則な配列のため一括してAピット群とした。P₁～P₇は径約90cm、深さ確認面よりP₁・P₂・P₆が約20cm、P₃～P₅・P₇が約60cmを計る。柱痕はP₂を除いて確認されている。P₁の覆土中より坏が出土し、1・2の坏は墨書土器であった。



第498図 Aピット群P₁出土遺物実測図 (1/4)

A群ピットP₁出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口 底 体	法 量 cm ()は推定	口 径 底 径 器 高	色 調 胎 土 焼 成	内 外	成形・調整	備 考
11-1	坏		— 1/4 3/4		— 9.2 (3.2)	褐色—褐色 粒微 良好	小砂	体部内面ナデ 底部回転糸 切り後周縁手持ちへラ削り	墨書土器 「中」
11-2	坏	小破片				褐色—褐色 粒微 良好	小砂		墨書土器 不明

Bピット群 (第499図)

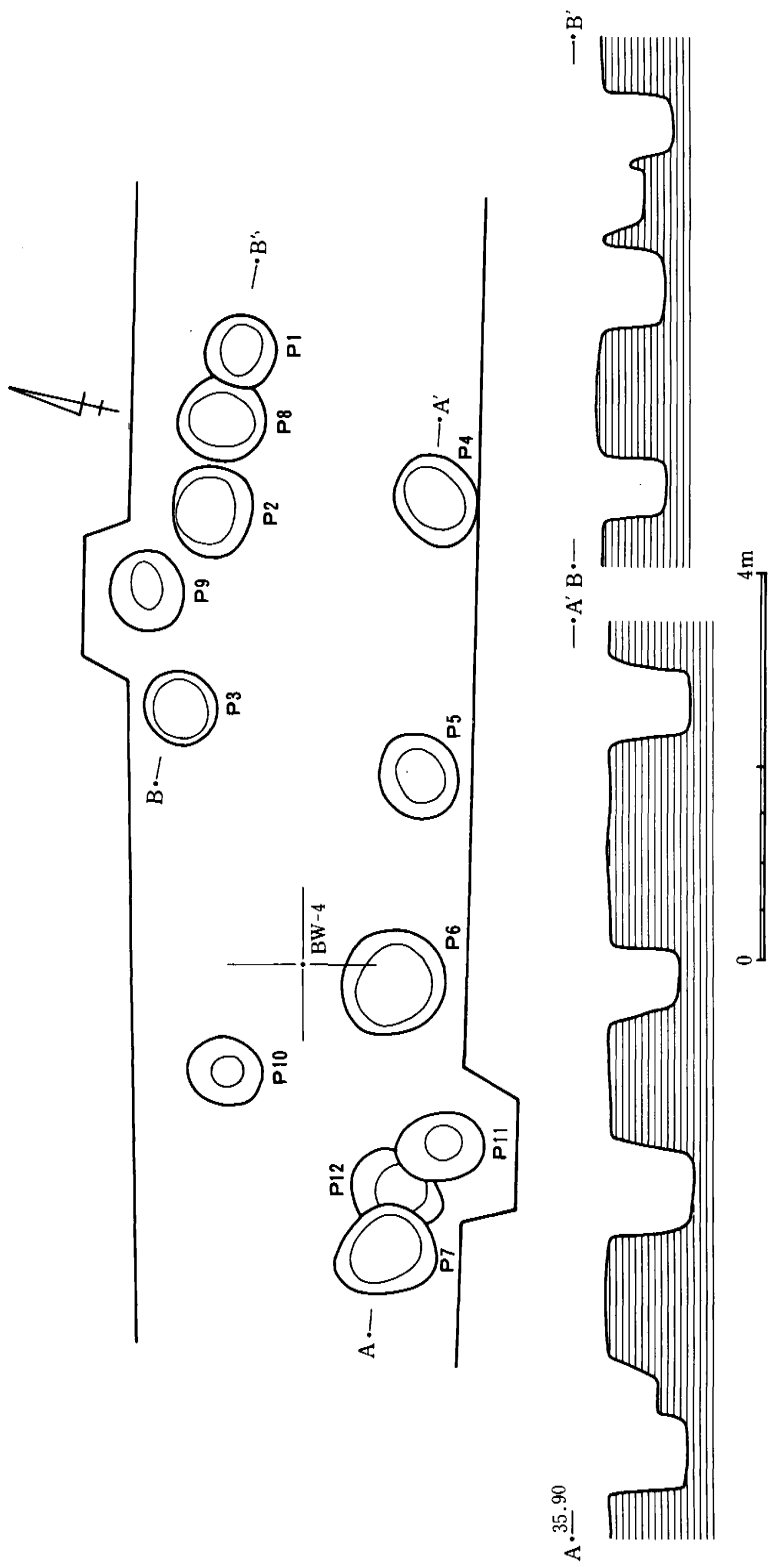
台地西側緩傾斜面に位置し、第21号掘立柱建物跡に近接する。

遺構 ピットがこの地域から12個検出された。規模・配列・調査時の所見からこれらのピットの一部は掘立柱建物跡と柱穴であることが推定された。P₁～P₃は径35～40cm、深さ確認面より約30cmを計り、柱穴間が1.80mの等間隔であることが指摘され、第22号掘立柱建物跡と推定される。P₄～P₇は径0.90～1.10m前後、深さが確認面より約70cm前後あり、また、P₄とP₅、P₆とP₇の柱穴間が約3.00m、P₅とP₆が2.00mであるが、調査時の所見より同一遺構であることが指摘され第23号掘立柱建物跡と推定される。P₈～P₁₂は他との関係が不明である。

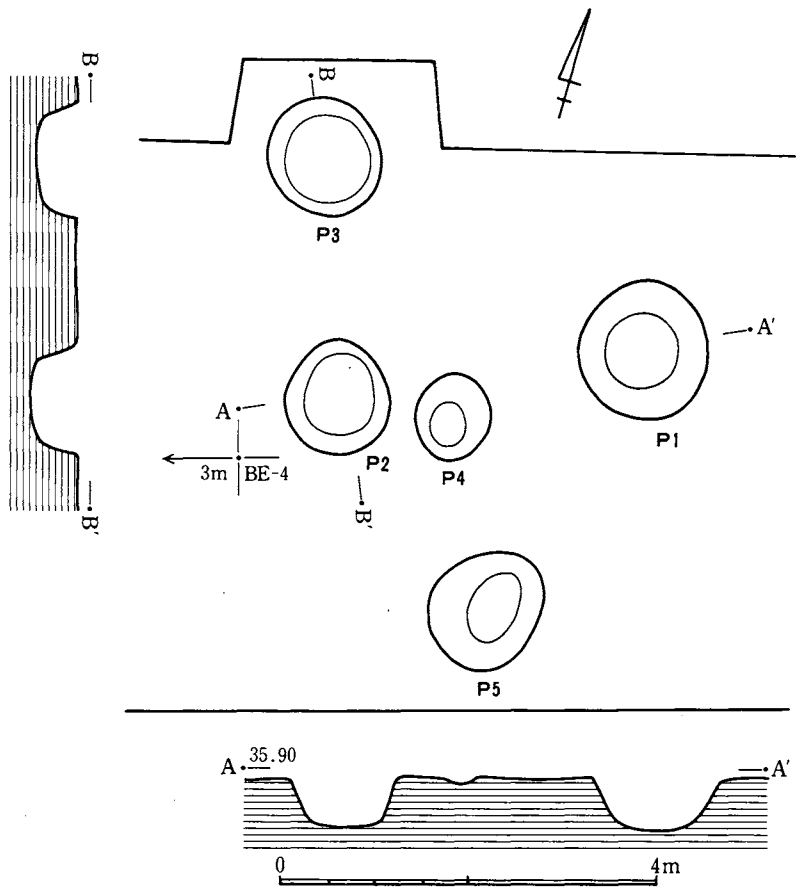
Cピット群 (第500図)

台地中央平坦部に位置し、第8号住居跡と近接している。

遺構 これらのピット群は調査時の所見から一部のピットが掘立柱建物跡の可能性が指摘された。P₁～P₃は径が約1.10～1.30m前後、深さが確認面より約50cmあり、壁の立ち上がり等などの調査時の所見から第24号掘立柱建物跡と推定された。P₄・P₅との関係は不明である。



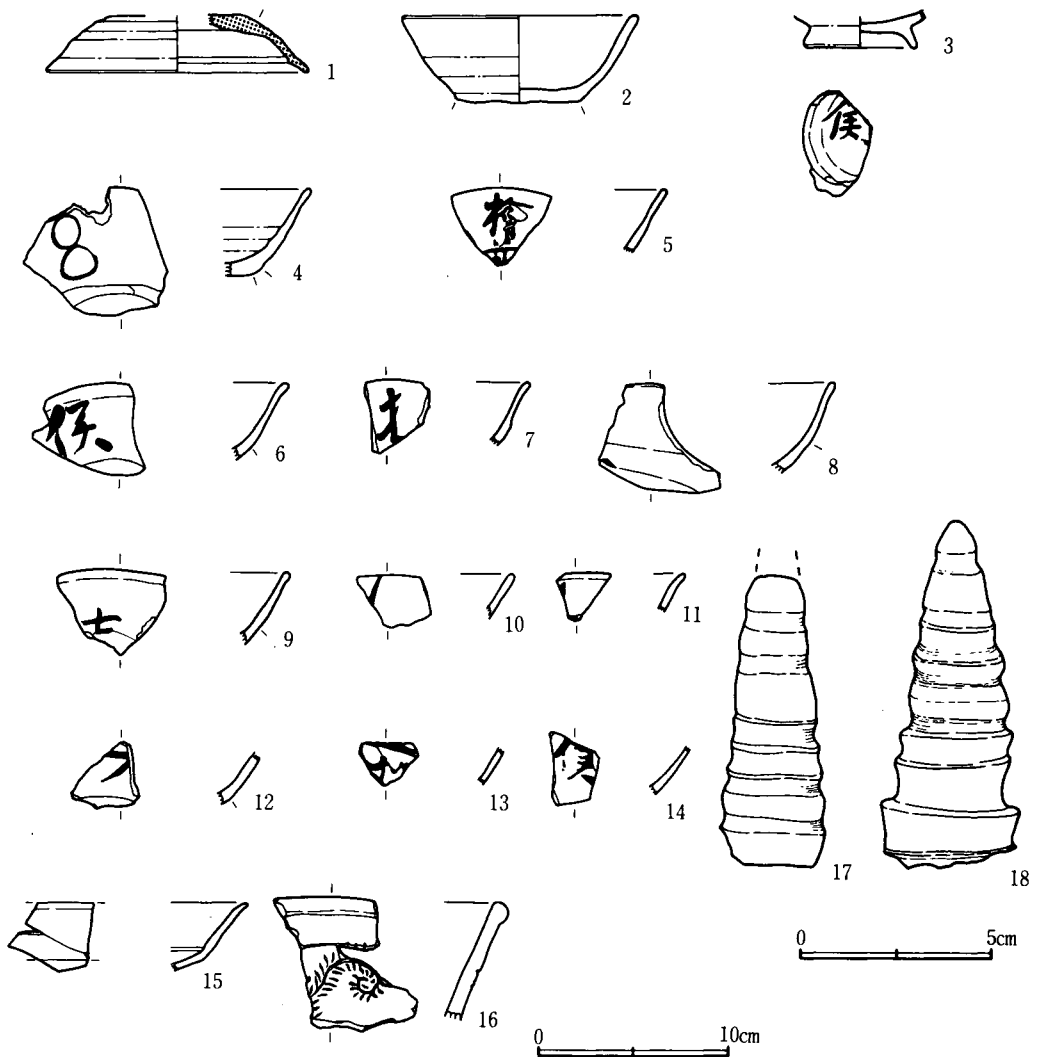
第499図 Bピット群実測図 (1/80)



第500図 Cピット群実測図 (1/80)

4) グリッド出土遺物 (第501図、図版177)

各グリッドから出土したもののなかで、図示可能なものを器種ごとに、また、墨書土器については、全て掲載した。1は須恵器蓋である。2は土師器坏である。3～14の12点は墨書土器である。3・6・14は「俣」、5は「檜前」、4は「8」であり、他は不明である。3は高台付坏の底に、4～7・9・12・14は口縁部を上として書かれたものであり、他は不明である。15は緑釉陶器、16は中世陶器である。17・18は土塔の一部である。



第501図 グリッド出土遺物実測図 (1～17 1/4、18・19 1/2)

グリット出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm 器高	口径 底径 器高	色調 内一外 胎土 焼成	成形・調整	備考
グー1	蓋		% -% -%		(13.8) — (3.0) (11.6)	灰色—灰色 小砂粒多 良好	頂部回転ヘラ削り	須恵器 頂部には宝珠形鈕か d ₃ 2
グー2	坏		% 完 -%		12.5 6.5 4.5	黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好	底部回転ヘラ切り後周縁ナデ	d ₄ 2
グー3	高台付皿	底部のみ	% -% -%		— (6.0) (1.6)	黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好	内面ミガキ 坏に高台貼付	墨書土器 「俣」 c ₀₁
グー4	坏	小破片				褐色—褐色 小砂粒多 良好	底部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り	墨書土器 「∞」 c ₂ 1
グー5	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 「檜前」 f ₂ 2
グー6	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 「俣」 f ₂ 2
グー7	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明 b ₄ 1
グー8	坏	小破片				内黒—灰褐色 砂粒少 良好	内面ミガキ 体部下端手持ちヘラ削り	墨書土器 不明 内黒 c ₂ 2
グー9	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好	体部下端手持ちヘラ削り	墨書土器 「不明」 f ₂ 3
グー10	坏	小破片				黒褐色—黒褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明 b ₄ 1
グー11	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明 f ₁ 2
グー12	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好	体部下端手持ちヘラ削り	墨書土器 不明 f ₁ 2
グー13	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 不明 f ₁ 2
グー14	坏	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 良好		墨書土器 「俣」 c ₂ 2
グー15	高台付坏	小破片				緑色—緑色 灰白色 精選堅緻 良好	内外面とも緑釉がかかる	緑釉 d ₃ 1 c ₁ 2
グー16	壺	小破片				黄褐色—黄褐色 砂粒少 精選 良好	内面及び口縁部ナデ 外面下半ヘラ削り後ヘラによる線刻	秋草文の線刻 中世かわらけ f ₂ 3 d ₂ 2
グー17	土塔	破片		高さ	(7.3)	褐色		5区東側1
グー18	土塔	破片		高さ	(9.0)	褐色		f ₁ 3

第4節 小結

本遺跡の調査範囲は狭く、全容を把握するまでには至らなかったが多大な成果を上げることができた。ここではその概要を述べたい。

先土器時代から古墳時代の遺構・遺物は検出されなかった。歴史時代の遺構としては、住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟、ピット群3ヶ所であった。住居跡構造としては、第6号住居跡のP₅・P₆がカマド前に位置し、第7号住居跡はカマドも無く床面中央に柱穴P₁が1個のみあり、特殊な性格を推定させる。掘立柱建物跡は、2間×2間が1棟、2間×3間が2棟などがあり台地のほぼ全域に存在する様な配置である。ピット群については、調査範囲が狭く断定で

きないが、掘立柱建物跡になる可能性が指摘される。特にBピット群のP₁～P₃、P₄～P₇、Cピット群のP₁～P₃は掘立柱建物跡になる可能性を残している。調査範囲に比して掘立柱建物跡の多さが注目される。遺物としては香炉蓋が第6号住居跡内より出土し、判断は不可能であったが、墨書土器片も7点と数多く出土し、坏も油煙痕をもっており、他の住居跡とは違うものであった。墨書土器は、前述した様に第6号住居跡から7点、Aピット群から2点、グリッドの包含層から12点の計21点が出土している。その中で判読できたものは「俣」が3点、「檜前」が1点、「8」が1点、「中」が1点であった。特に「檜前」の出土が注目される。また、土塔の破片が2点出土していることから、遺跡の性格としては仏教に密接に関係しているものであろう。

第3章

伊篠白幡遺跡C地点の調査

第3章 伊篠白幡遺跡C地点の調査

第1節 遺跡の位置及び立地 (第480図)

今回調査が実施された伊篠白幡遺跡は、「酒々井町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書」(酒々井町教委 1984)によれば「遺跡番号22 伊篠白幡遺跡 酒々井町伊篠字白幡」と記載されている。この報告書に記載されている伊篠白幡遺跡は、標高約35m、東西450m、南北600mの広大な台地を一遺跡として把握されている。調査されたA～C地点はこの遺跡分布範囲に含まれ、D地点は谷を隔てた別の台地に立地している。

C地点は、印旛郡酒々井町上岩橋字新掘作2,266—1他に位置し、伊篠白幡遺跡の広大な台地の西側に所在する。この遺跡の所在する台地は、印旛沼に注ぐ江川によって樹枝状に開析された広大な台地であるが、詳細に検討するならば、江川の小支流によって更に樹枝状に開析されている。C地点はこの様な小支流によって開析された南側の一台地に所在し、伊篠野田遺跡・上岩橋下小山作遺跡とを結ぶ尾根状の位置でもある。この台地は、標高約35m、東西50m、南北150m、谷底面との比高差約6mであり、南北に非常に長い。B地点とは、北側に小支谷が認められることから明瞭に区分できるものであった。

第2節 遺跡の概要及び調査の方法

伊篠白幡遺跡C地点において検出された遺構と遺物は次のとおりである。先土器時代から古墳時代までの遺構・遺物は検出されなかった。歴史時代の遺構としては、住居跡3軒、馬土手が検出されている。特に第2A号住居跡の柱穴は、住居跡の竪穴外の各コーナーから検出され特徴的な住居跡構造であった。馬土手は土手が2条並走している中を溝が一条確認された。

調査の方法は、B地点同様に調査予定地内の中軸線に沿ってグリッドを設定して確認調査を実施した。遺構が検出された部分を拡張して、その部分を本調査を実施した。ただし、馬土手については、調査予定地内のほぼ全域の調査を実施した。

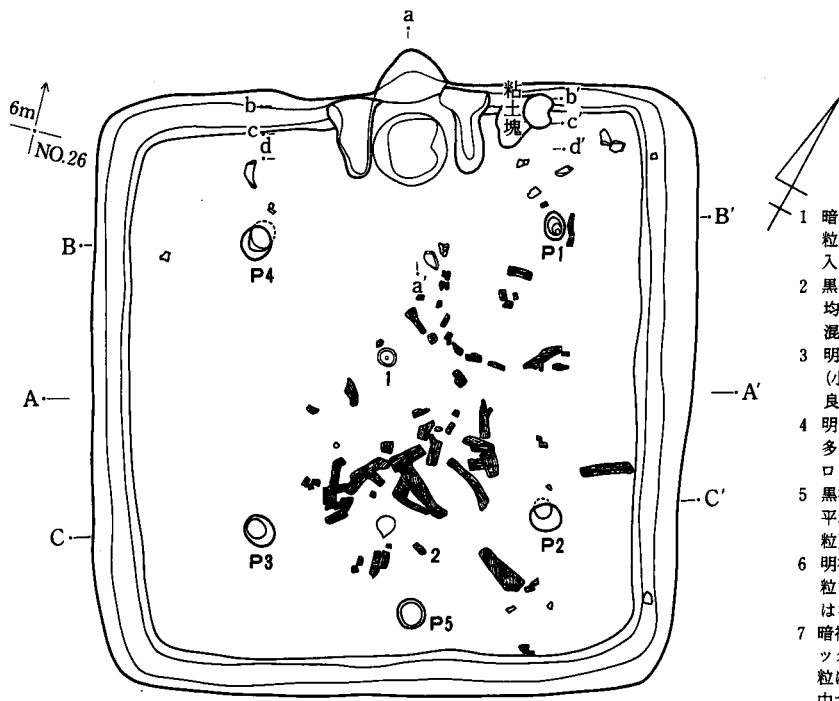
第3節 検出された遺構と遺物

1. 歴史時代

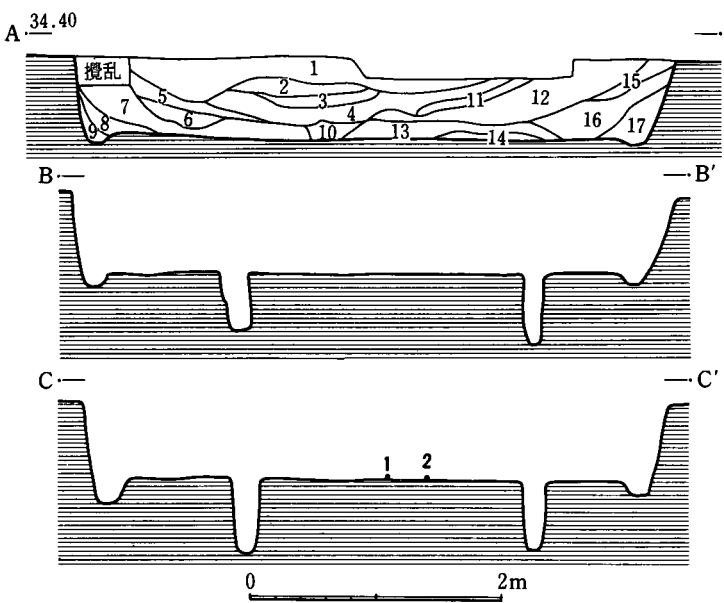
1) 住居跡

第1号住居跡 (第502～504図、図版171・173)

台地東側緩傾斜面に位置している。



- 1 暗褐色土 (ロームブロック(大粒)混入及びローム粒散在混入、しまりは中良)
- 2 黒色土 (ローム粒(小粒)が平均的に含有、若干の焼土粒を混入、しまりは中良)
- 3 明黒褐色土 (ロームブロック(小粒)若干混入、しまりは中良)
- 4 明黒褐色土 (ローム粒(大粒)多量混入、部分的にロームブロックが集中する)
- 5 黒褐色土 (ローム粒多量混入平均的にロームブロック(小粒)混入)
- 6 明褐色土 (若干大粒のローム粒で構成されている、しまりはなくボソボソしている)
- 7 暗褐色土 (小粒のロームブロックを平均的に混入、ローム粒は若干であるが部分的に集中する)

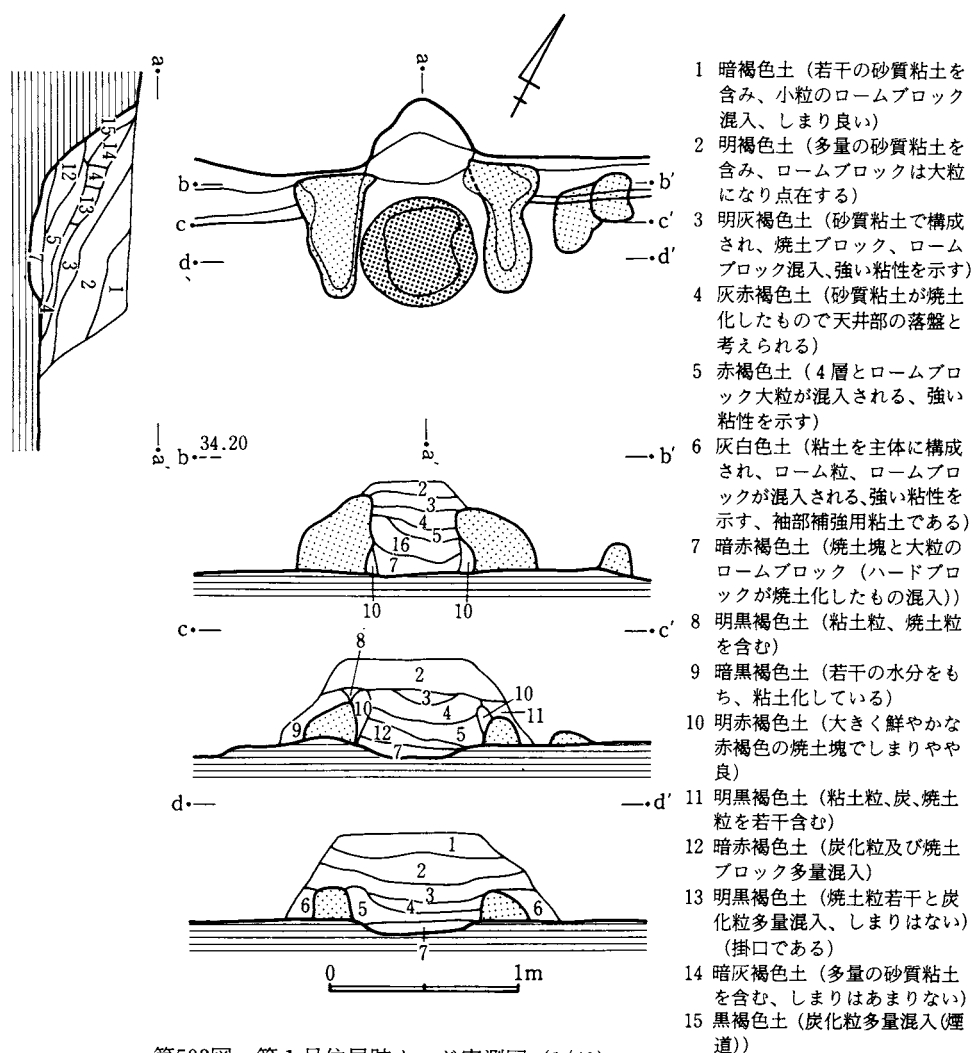


- 8 明褐色土 (6層に比較して粒は小さく平均的に混入される)
- 9 明黒褐色土 (ローム粒少量混入しまりはない)
- 10 黒色土 (炭を多量に含みしまりはなくボソボソしている)
- 11 黒色土 (炭を多量に含み小粒のロームブロックを平均的に多量混入、しまりはない)
- 12 明褐色土 (大粒のロームブロックを平均的に多量混入※人工的に埋められたものと考えられる)
- 13 明黒褐色土 (炭粒(小粒)を多量混入)
- 14 赤褐色土 (焼土によって構成される)
- 15 暗褐色土 (焼土を部分的に含みローム粒少量混入しまりは中良)
- 16 明褐色土 (若干の炭粒を含みローム粒多量混入、しまりは良)
- 17 明黒褐色土 (部分的に炭が集中、若干のローム粒混入、しまりはない)

第502図 第1号住居跡実測図 (1/60)

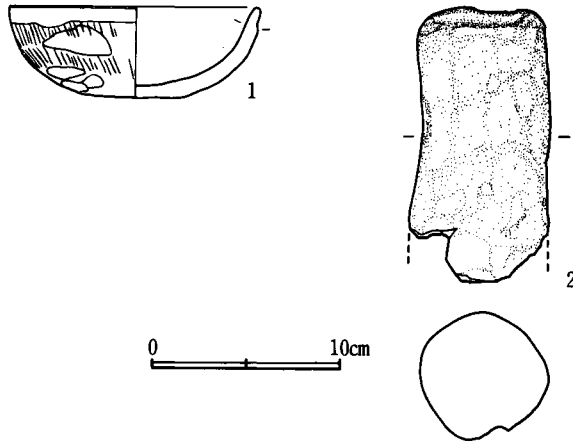
遺構 西壁4.40m、北壁4.40mあり面積は22.01㎡で各コーナーが隅丸をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN30°Wである。壁はほぼ垂直をもって立ち上がるが、東壁はやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約60cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約20cm、深さ約5cmを計る。床面はほとんど凹凸が無く固く締っていて平坦である。柱穴は5個検出され、P₁~P₄は対角線上に配置され、P₅はカマドの対面に配置され、径25cm、深さ25cmを計る。

カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約30cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。右袖部脇の壁際に粘土塊が見られた。火床部は径60×55cmの浅い楕円状を呈する。



第503図 第1号住居跡カマド実測図 (1/40)

遺物出土状況 土層は覆土中に多量のローム粒・ロームブロックが含まれていることから、人為的に埋土された可能性がある。床面からは多量の焼土粒・炭化物が出土し、また、炭化材が床面中央に向って倒れており垂木でもあろうか。このような状態から本跡は火災住居であると思われる。遺物は坏・土製支脚が出土している。1の坏と2の土製支脚は床直から出土しており、また、坏は完形品であった。



第504図 第1号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第1号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm	法量 ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
1-1	坏	完 完 完	13.3	—	4.7	黒褐色—黒褐色 小砂粒多	良好	□縁部横ナデ 体部内面ナ デ 外面ヘラ削り後ナデ	外面ヘラ削りは乾燥し た時点での調整のため ヘラが刻目状になる
1-2	土 支 脚	3/4	長さ 径	(14.1) 6.5×6.7	—	褐色 小砂粒多 良好	—	整形のための指頭痕あり	2次火熱による剝離激 しい

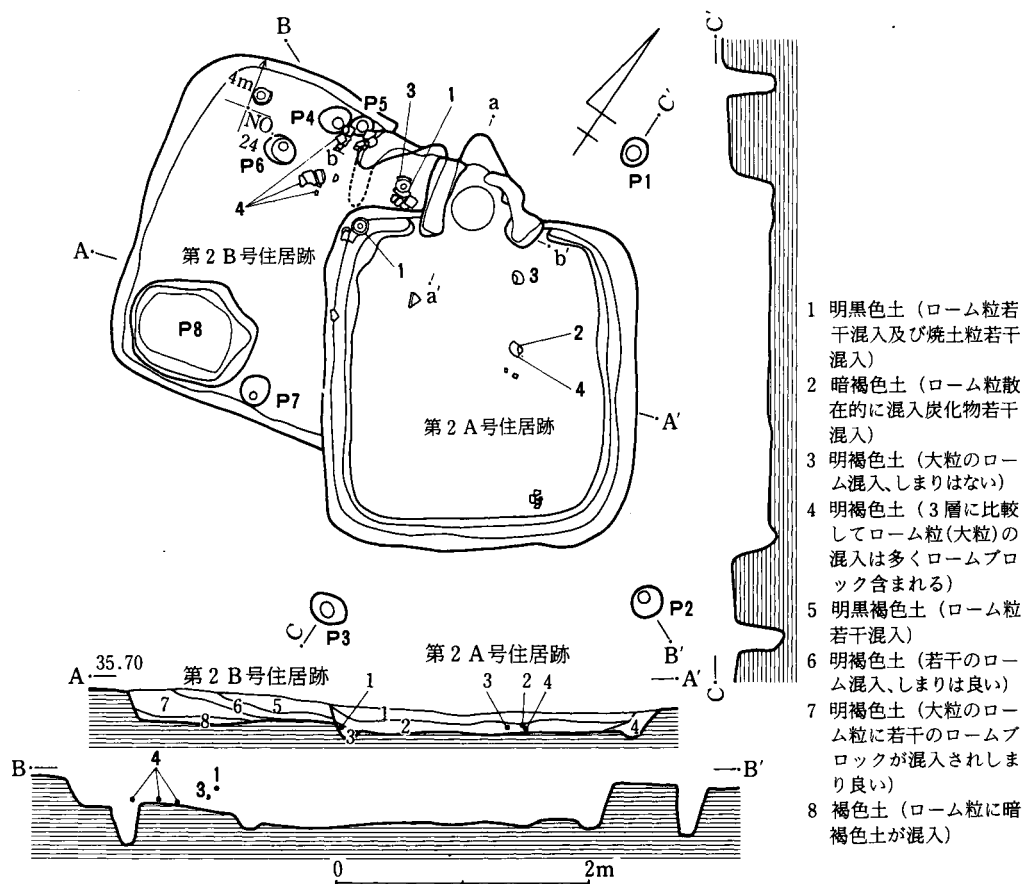
第2A号住居跡 (第505~507図、図版171・173・177)

台地中央平坦部、第2B号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しい。

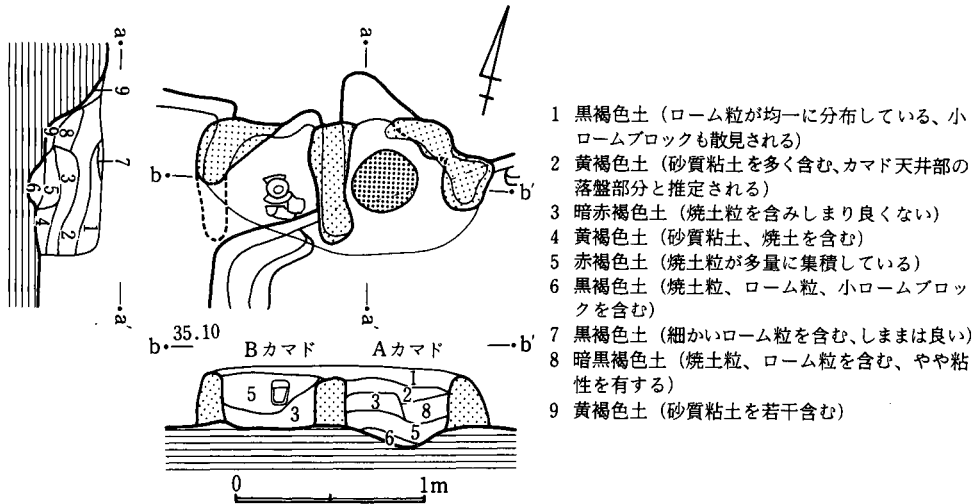
遺構 西壁2.40m、北壁2.10mあり面積6.42㎡で各コーナー隅丸をなす方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN32°Wである。壁はやや緩傾斜をもって立ち上がるが、東壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約20cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約15cm、深さ約5cmであった。床面はほぼ平坦である。柱穴は4個検出された。P₁~P₄は壁外にあり、それぞれ対角線上に配置されていた。

カマド カマドは北壁中央に位置し、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約70cmを計る。カマドの構築には砂質粘土が使用されていた。カマドの左袖部は第2 B号住居跡カマド右袖部の一部を共有していることが、左袖部外側に多量の焼土が付着していたことから推定された。また、左袖部の基底には第2 B号住居跡の埋土と思われるものが利用されており、本カマドは第2 B号住居跡のカマドを十分意識して作られていることが、うかがえた。火床部は掘り込み部に設けられ、径35×35cmの播鉢状を呈する。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示していた。また、土層より第2 B号住居跡との切り合い関係が明瞭に見てとれた。遺物は坏・甕が出土している。1の坏は北西コーナーの壁際から、2～4の坏は床直からの出土であった。他は覆土中からの出土である。墨書は2・3の坏が「俣」、4の坏が「粘」であった。

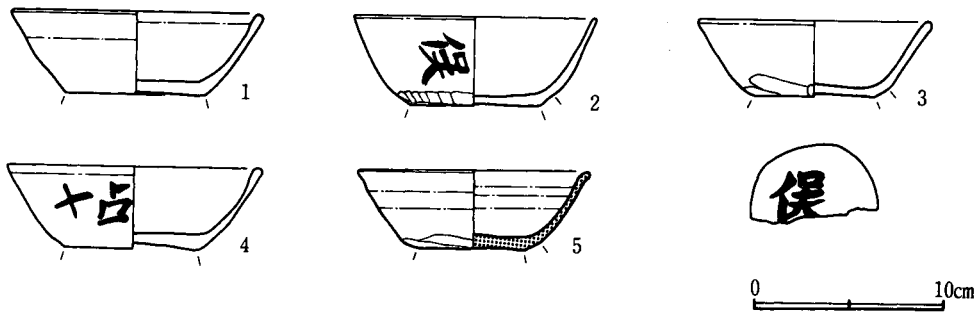


第505図 第2 A・B号住居跡実測図 (1/60)



- 1 黒褐色土（ローム粒が均一に分布している、小ロームブロックも散見される）
- 2 黄褐色土（砂質粘土を多く含む、カマド天井部の落盤部分と推定される）
- 3 暗赤褐色土（焼土粒を含みしまり良くない）
- 4 黄褐色土（砂質粘土、焼土を含む）
- 5 赤褐色土（焼土粒が多量に集積している）
- 6 黒褐色土（焼土粒、ローム粒、小ロームブロックを含む）
- 7 黒褐色土（細かいローム粒を含む、しままは良い）
- 8 暗黒褐色土（焼土粒、ローム粒を含む、やや粘性を有する）
- 9 黄褐色土（砂質粘土を若干含む）

第506図 第2 A・B号住居跡カマド実測図 (1/40)



第507図 第2 A号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第2 A号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 底体 ()は推定	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
2 A-1	坏	完 完 完			13.2 7.3 4.2	暗褐色-暗褐色 小砂粒少	良好	底部回転糸切り	スス付着 若干剝離あり
2 A-2	坏	$\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$		(13.0)	7.0 4.6	黄褐色-黄褐色 砂粒少	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り	墨書土器 「俣」
2 A-3	坏	$\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{3}{8}$		(12.4)	6.4 3.9	黄褐色-黄褐色 砂粒少	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後周縁手持ちヘラ削り	墨書土器 「俣」
2 A-4	坏	$\frac{3}{8}$ 完 $\frac{3}{8}$			13.5 7.1 4.3	黄褐色-褐色 粒少	砂 良好	底部回転糸切り	墨書土器 「十占」か「怙」
2 A-5	坏	$\frac{5}{8}$ 完 $\frac{5}{8}$			12.4 5.7 4.1	暗黒褐色-暗茶褐色 小砂粒多	不 良	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後周縁手持ちヘラ削り	須恵器

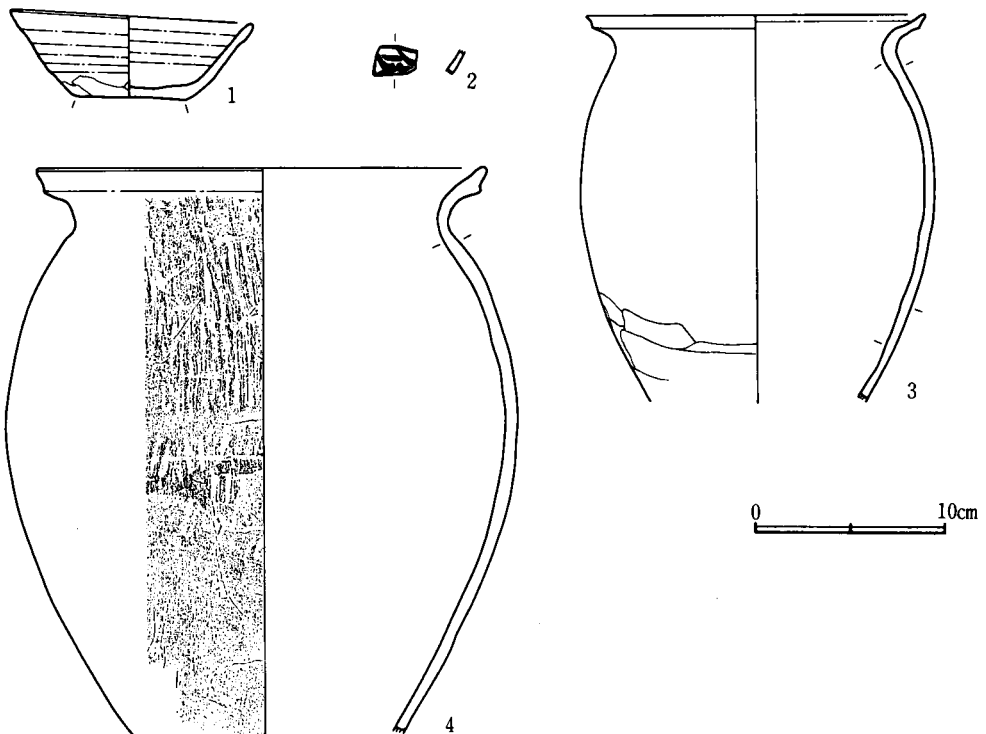
第2 B号住居跡 (第505・506・508図、図版171・173)

台地中央平坦部、第2 A号住居跡と重複関係にあり、本跡が古い。

遺構 西壁2.55mあり、東側が第2 A号住居跡に切られており、正確な規模は不明であるが、面積約6.97㎡前後の隅丸方形の平面形を呈すると推定される竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置しN1°Wである。壁はやや緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約20cmある。壁溝は無い。床面はほぼ平坦である。柱穴は3個検出された。P₅は径15cm、深さ8cmあり、中から焼土ブロックが検出された。P₆は径20cm、深さ40cmを計る。P₇はカマドの対面に位置し径25cm、深さ32cmを計る。P₈は貯蔵穴と思われ、長軸95cm、短軸75cmの隅丸長方形を呈し、壁はやや緩傾斜をもって立ち上がり、深さ38cmを計る。床面は平坦である。

カマド 北壁に位置し、第2 A号住居跡にはほぼ半分破壊されていた。壁への掘り込みは約5cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は全体的に浅い擂鉢状を呈していた。また、火床部には支脚を立てたと思われる凹が認められた。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示していた。遺物は坏・甕が出土している。1の坏と3の甕はカマド前から、4の甕は左袖部脇と床直からの出土であった。2は覆土中からの出土の墨書土器で「俣」であった。



第508図 第2 B号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第2B号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口径 cm ()は推定	法量 cm 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
2B-1	坏		完 完 完	12.8 5.7 4.2	褐色-褐色 粒少	小砂 良好	体部下端手持へラ削り 底部一方向へラ削り	
2B-2	坏	小破片		— — —	黒色-灰褐色 粒少	砂 良好		墨書土器「俣」内黒
2B-3	甕		% — % 胴最大径	(17.8) — (20.0) (18.6)	褐色-褐色 粒少	小砂 良好	口唇をつまんで口縁部横ナ デ 胴部内面上半~中央指 頭痕明瞭下半横ナデ 外面 上半~中央ナデ下半横位へ ラ削り	内外面部分的にスス付着
2B-4	甕		% — % 胴最大径	23.7 — (29.2) 27.0	暗褐色-褐色 砂粒少	小 良好	口唇をつまんで口縁部横ナ デ 胴部叩目後下半横位へ ラ削り 内面ナデ	内面下半剝離激しい

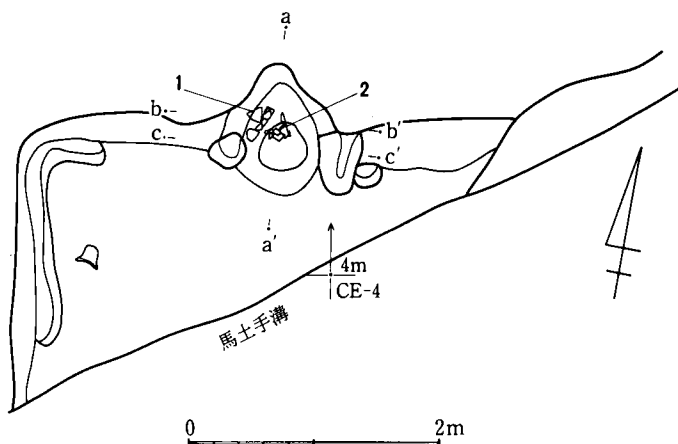
第3号住居跡 (第509~511図、図版171・173)

台地中央平坦部に位置し、馬土手溝に切られている。

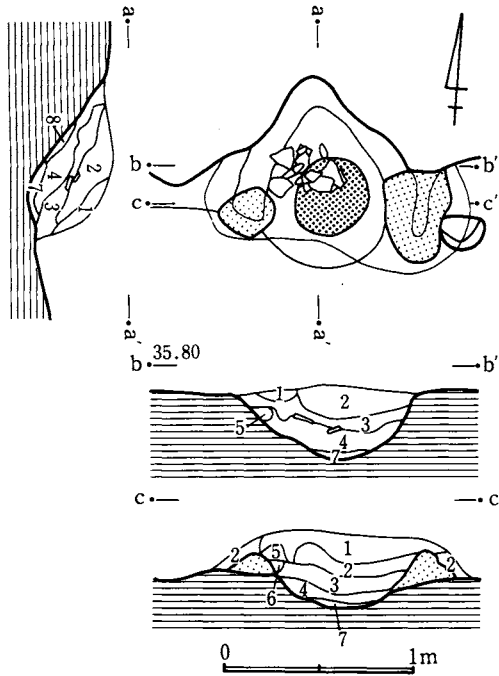
遺構 馬土手との重複関係と未調査部分があるため、正確な規模等は不明であるが確認面積5.39㎡を計る。カマドは北壁に位置しN12°Wである。壁は緩傾斜をもって立ち上がり、確認面より約35cmを計る。壁溝は北西コーナー部分に検出され、巾約15cm、深さ約5cmを計る。床面は多少の凹凸があるものの全体的に固く、ほぼ平坦であった。柱穴は検出されていない。

カマド 北壁に位置し遺存状態はやや良好であった。壁への掘り込みは約50cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用している。火床部は掘り込み面に位置し、径40×40cmの深い播鉢状を呈する。

遺物出土状況 遺物は甕が出土し、1・2はカマド内からであった。

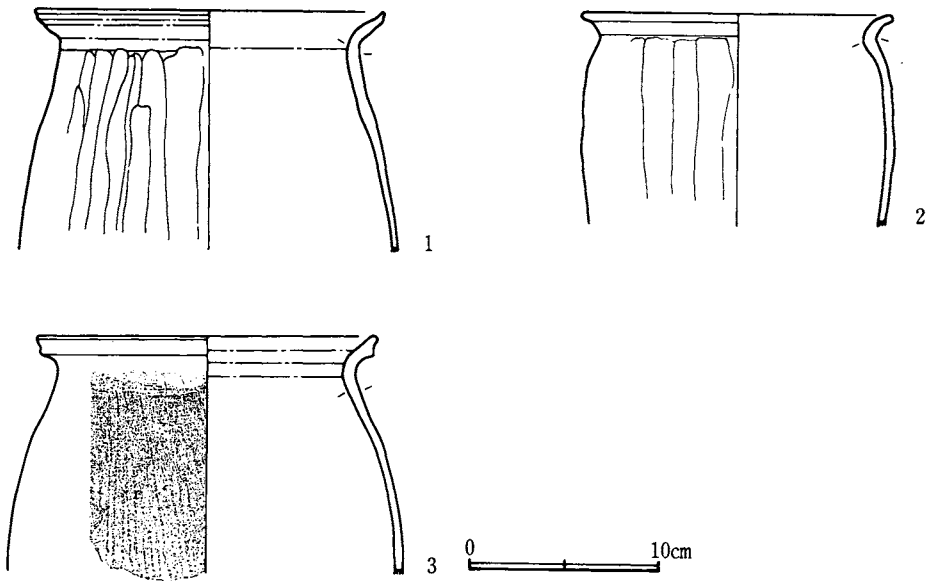


第509図 第3号住居跡実測図 (1/60)



- 1 黒褐色土 (細かい粘土粒、ローム粒、砂を含む)
- 2 黄褐色土 (砂状の粘土から成る)
- 3 暗赤褐色土 (焼土と炭化粒から成る、しまり良くない)
- 4 暗赤褐色土 (3層より多くの焼土を含む)
- 5 赤褐色土 (焼土と砂状の粘土を含む)
- 6 黄褐色土 (ロームと若干の焼土から成る)
- 7 暗赤褐色土 (焼土、炭化粒、ローム粒を含む)
- 8 黄褐色土 (ローム粒と若干の炭化粒から成る)

第510図 第3号住居跡カマド実測図 (1/40)



第511図 第3号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

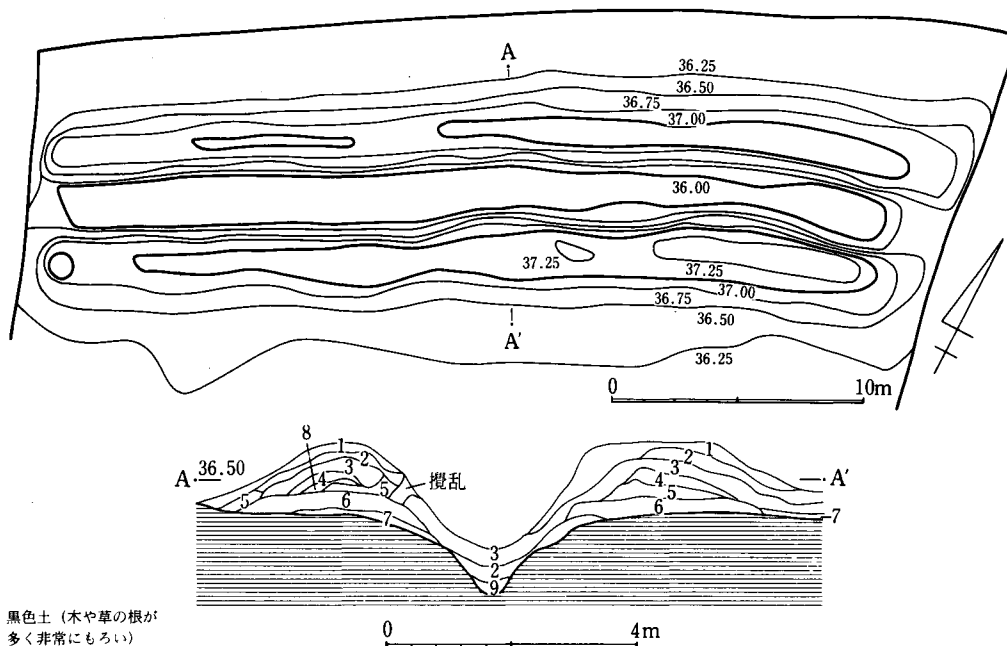
第3号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	遺存度	口底 体()は推定	法量 cm	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
3-1	甕	□縁部のみ	1/6	(18.4)	— (12.5)	褐色-褐色 粒多 良好	小砂	□縁部口唇をつまんで横ナデ後胴部外面縦位へラ削り内面ナデ	内外面剝離激しい
3-2	甕	□縁部のみ	1/6	(16.4)	— (11.0)	灰褐色-灰褐色 小砂粒多 良好		□縁部横ナデ後胴部外面縦位へラ削り内面ナデ	
3-3	甕	□縁部のみ	3/6	(18.0)	— (12.1)	暗褐色-暗褐色 小砂粒少 良好		□縁部口唇をつまんで横ナデ後胴部外面叩目内面ナデ	内面剝離激しい

2) 馬土手

馬土手 (第512図、図版171)

台地平坦部中央を縦走し、土手は2条が並走している。土手2条の中を溝が1条認められた。馬土手の土層断面からは、構築方法に特別の特徴的なものは認められなかった。溝は断面形がU字型を呈し、覆土は土手盛土の流入であった。



第512図 馬土手実測図 (平面図 1/300、土層図 1/120)

- 1 黒色土 (木や草の根が多く非常にろい)
- 2 黒色土 (1層よりしまり良い)
- 3 黒褐色土 (若干のロームを含む)
- 4 黄褐色土 (小豆大のロームブロックを含む)
- 5 黒褐色土 (3層より多くのロームブロックを含む)

- 6 黒褐色土 (細かいローム粒子を含む、しまり非常に良い、旧表土と思われる)
- 7 暗黄褐色土 (黒色化しかけたローム粒子を含む、しまり良い)
- 8 黄褐色土 (やや粘土化したロームを含む、しまり良い)
- 9 黒色土 (細かいローム粒を含む、しまり良い)

第4節 小 結

本遺跡の調査範囲は狭く、全容を把握するまでは至らなかったが多大な成果を上げることができた。ここではその概要を述べたい。

先土器時代から古墳時代にかけての遺構・遺物は検出されなかった。歴史時代の遺構としては、住居跡が4軒、馬土手が1である。住居跡構造としては、第2A号住居跡の屋外の四隅に柱穴が検出され、住居跡内には検出されなかったことから、この住居跡に配置上からも伴うものであることが確認された。遺物としては、第2A・2B号住居跡より墨書が計4点出土している。これらの墨書は判読が可能であり「俣」が3点、「怙」が1点であった。この墨書土器の第2B号住居跡出土のものは流入したものであり、本跡に伴うものではないであろう。

第2A号住居跡が第2B号住居跡のカマド右袖を利用して構築されていること、及び出土土器から第2B号住居跡が廃棄されてまもなく第2A号住居跡が構築されたことが推定される。そしてこの2軒の住居跡の面積は非常に小さく、構造も特殊なことから、他の住居跡とはやや性格を異にするのかもしれない。

第4章

伊篠白幡遺跡D地点の調査



第513図 伊藤白幡遺跡D地点全測図 (1/1,000)

第4章 伊篠白幡遺跡D地点の調査

第1節 遺跡の位置及び立地 (第513図)

今回調査が実施された伊篠白幡遺跡は、「酒々井町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書」(酒々井町教委 1984)によれば「遺跡番号22 伊篠白幡遺跡 酒々井町伊篠字白幡」と記載されている。D地点は、この伊篠白幡遺跡の谷を隔てた台地上にあり、新発見の遺跡であり、他のA～C地点とは立地上も明瞭に異なる。

D地点は、印旛郡酒々井町伊篠字越徳148-1他に位置し、所在調査報告書の伊篠大日遺跡と伊篠越徳遺跡のほぼ中程に所在する。このD地点の所在する台地は、A～C地点と同様に、印旛沼に注ぐ江川によって樹枝状に開析されている。この台地は、伊篠白幡遺跡と同様に広大であり、標高約35m、東西300m、南北900m、水田面との比高差約15mである。この広大な台地も江川の小支流によって更に樹枝状に開析され、伊篠大日遺跡、伊篠越徳遺跡、上岩橋天神原北遺跡が位置する小台地に別れ、D地点も東側の小台地に位置する。D地点の小台地は、標高約35m、東西100m、南北250mあり、水田面との比高差約15mである。

第2節 遺跡の概要及び調査の方法

伊篠白幡遺跡D地点において検出された遺構を遺物は次のとおりである。先土器時代から弥生時代までの遺構・遺物は検出されなかった。歴史時代の遺構としては、住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟が検出されている。

調査の方法は、B・C地点と同様に調査予定地内の中軸線に沿ってグリッドを設定して確認調査を実施した。確認調査の結果をもとに本調査を実施した。先土器の確認調査もグリッドを設定して実施したが、遺物は検出されなかった。

第3節 検出された遺構と遺物

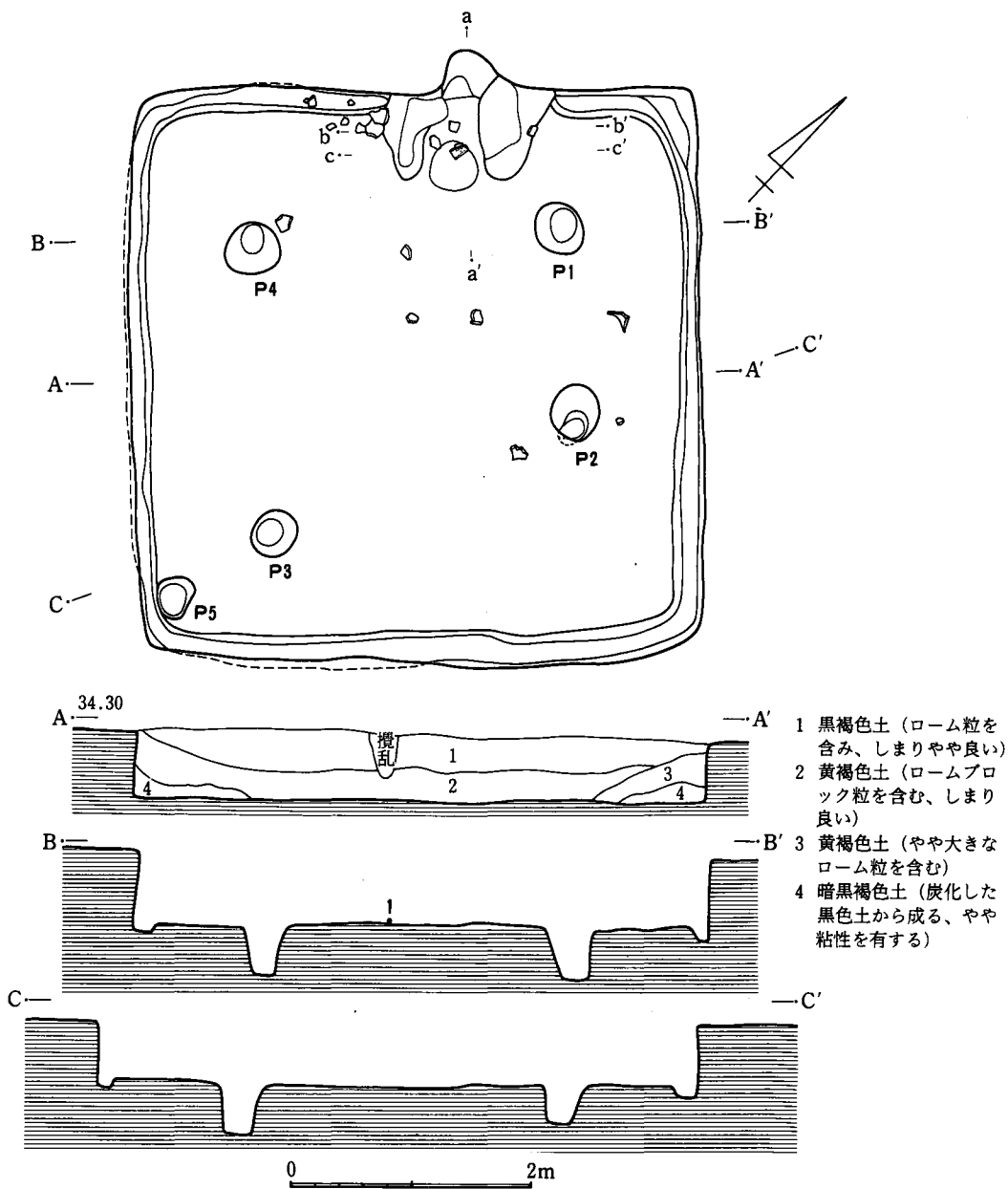
1. 歴史時代

1) 住居跡

第1号住居跡 (第514～516図、図版175)

台地東側平坦部に位置し、第2号掘立柱建物跡に近接している。

遺構 南西壁4.45m、北西壁4.55mあり面積22.43m²で方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北西壁中央やや右寄りに位置しN45°Wである。壁は北西壁の一部・南西壁・南東

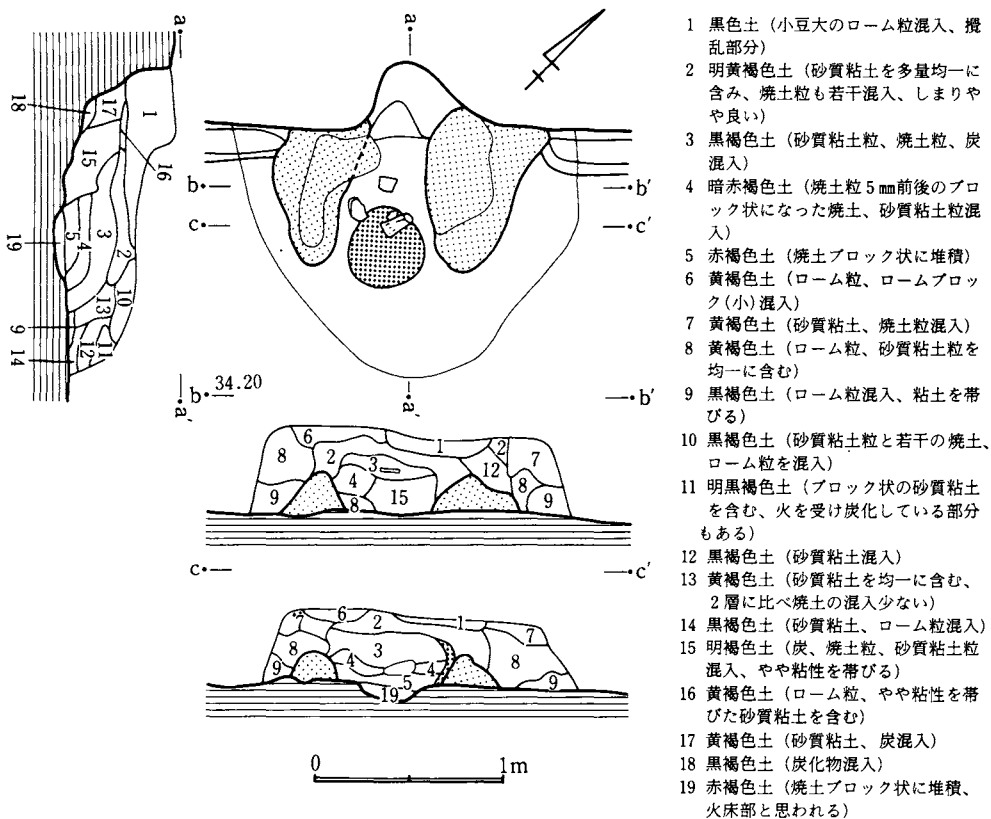


第514図 第1号住居跡実測図 (1/60)

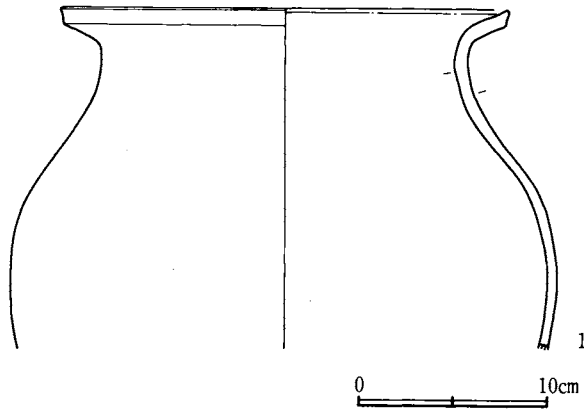
壁の一部にオーバーハングが認められ、他はほぼ垂直をもって立ち上がり、確認面より約50cmを計る。壁溝はカマドを除いて全周し、巾約15cm、深さ約10cmを計る。床面は多少の凹凸が認められるが、固くほぼ平坦であった。柱穴は5個検出された。P₁~P₄はP₂を除いて対角線上に配置されているが、P₂はやや北向きに柱穴が傾斜していた。P₅は南コーナー壁際に配置され、径30×30cm、深さ13cmを計る。

カマド 北西壁中央やや右寄りに位置し、一部上面が攪乱を受けていたが、遺存状態は良好であった。壁への掘り込みは約30cmを計る。カマドの構築には砂質粘土を使用し、左袖の中に黒色土の混入が見られた。この黒色土と砂質粘土の境に土師器片が認められた。

遺物出土状況 土層はレンズ状の自然堆積を示していた。遺物は甕が出土している。1の甕はカマド左袖部脇の床直からの出土であった。



第515図 第1号住居跡カマド実測図



第516図 第1号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

第1号住居跡出土遺物観察表

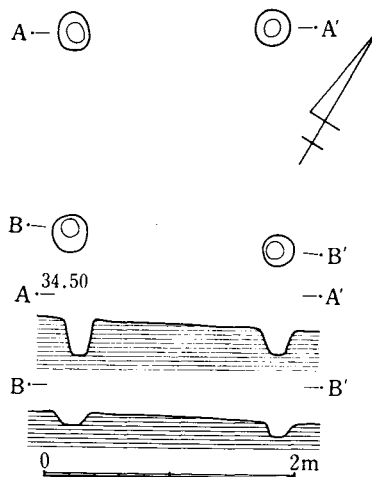
遺物番号	器種	遺存度	口底 体	法量 cm ()は推定	口径 底径 器高	色調 胎土 焼成	内-外	成形・調整	備考
1-1	壺		1/2 1/2		23.8 — (17.1)	暗褐色-暗褐色 小砂粒多		口縁部口唇をつまんで横ナ デ 胴部外面ナデ 内面ナ デ	口縁部内面剥離あり

2) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第517図、図版175)

台地東側平坦部に位置し、第1号住居跡に近接している。

遺物 桁行1間、深行1間の掘立柱建物跡である。主軸は1間四方のため一応N33°Wとした。規模は桁行1.80m、深行1.70mで、柱穴の径25cm、深さ10~16cmであった。



第517図 第2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

第4節 小 結

本遺跡の調査範囲は狭く、全容を把握するまでには至らなかった。台地としては伊篠越徳遺跡と同じである。

歴史時代の住居跡1軒、同時期と推定される1間×1間の掘立柱建物跡が1棟検出されている。住居跡の遺物は少なく甕の胴上半部の大形破片が出土したのみであった。

伊篠越徳遺跡（永瀬 1983）では、古墳時代の住居跡1軒、歴史時代の住居跡3軒が検出されている。このことから、本遺跡は広範囲に遺構があるものと推定されるが、前述した様に調査範囲が狭く、把握するには至らなかったが、掘立柱建物跡からも今回の調査で1棟、1983年の調査でもその存在が指摘されており、大規模な遺跡と考えられる。

第5章

調査の成果

第5章 調査の成果

第1節 縄文時代

1. 土器について

1. 各期の土器の分布状況

グリッドから出土した縄文時代各期の土器の分布状況について概観してみたい。

出土した各期の土器のうち、その99%以上が堀之内式土器で占められ、それ以外の土器は極めて微量であったことはすでに述べた。また、遺構の面でも、濃厚な生活の痕跡を残すのは堀之内式期に限られ、他の時期はまったくその痕跡を残していない。しかし、わずかな土器の分布状況からでも各時期ごとの占地性の違いを認めることはでき、この地を訪れた人間の何らかの行動を反映していると考えられる。以下その分布についてみていくが、堀之内式土器はあまりに多量であるため、 $\frac{1}{2}$ 以上遺存する底部のみを抽出して分布をみることにした。なお、縄文時代以外の遺構から出土した縄文土器はすべてグリッド出土土器として取り扱っている。

1) 早期 (第I群土器)

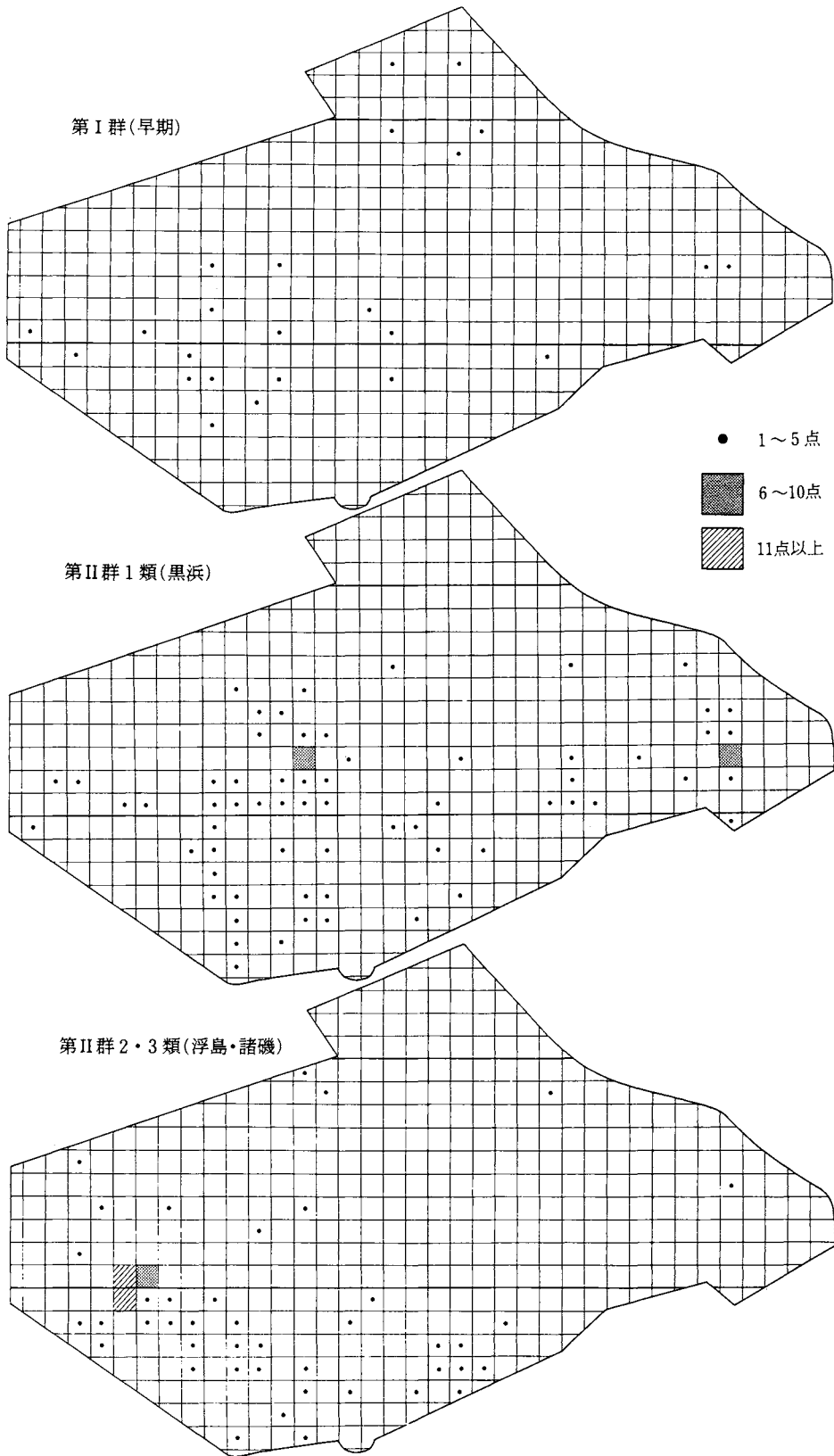
田戸下層式土器、田戸上層式土器、子母口式土器、条痕文系土器などが出土しているが、みな微量であり、各期の関連遺構も検出されていない。分布は出土量が少ないこともあって一定の傾向を認めることは難しい。調査区の南西部に若干まとまった出土をみているが、時期別では極めて散発的である。縄文時代早期の人間の占地は断続的であり、それも極めて短期間であったものと考えられる。

2) 前期黒浜式期 (第II群第1類土器)

遺構は検出されていないが、破片点数は145点を数える。調査区中央のやや南西寄りに若干の集中区域があり、調査区の東端にもわずかな集中箇所がある。全体的には、台地平坦部での出土は少なく、斜面中段に比較的まとまって出土している。

3) 前期後半 (第II群第2・3類土器)

諸磯式土器と浮島式土器の分布はほぼ重なり合う。出土点数はともに少ない。おもに調査区の南側斜面に分布するが、黒浜式土器の分布域に比べて、一段低い斜面に分布域があり、占地場所に若干の相違がある。調査区の南西部にわずかな集中箇所が認められ、ここからは諸磯式



第518図 時期別土器出土分布図 No 1

土器がまとまって出土している。興津式土器は点数が少なく、散発的な出土にとどまる。

4) 中期 (第Ⅲ群土器)

下小野式土器、五領ヶ台式土器、阿玉台式土器、中峠・勝坂式土器、加曾利E式土器などが出土し、ほぼ中期全般にわたり連続的に人間が訪れている。遺構の検出がないことから、占地のあり方は極めて短期間であり、定住性に欠けるものであったと推測される。第Ⅲ群中最も出土点数の多かった阿玉台式土器は調査区中央からやや南西寄りに集中している。

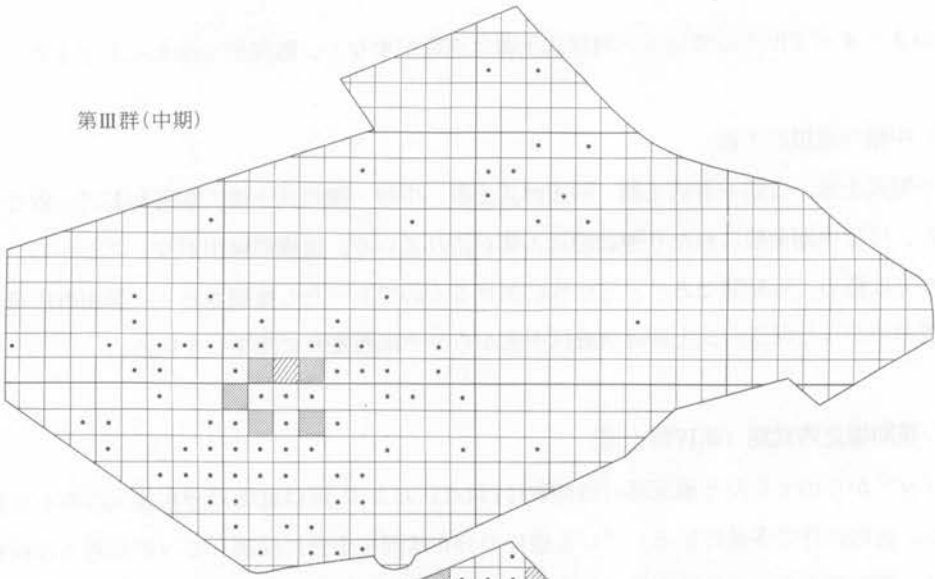
5) 後期堀之内式期 (第Ⅳ群土器)

グリッドから出土した土器底部の個体数は734点におよぶ。図は底部の分布状況のみを示しているが、底部以外で多量に出土している破片の分布状況を十分に反映していると考えられる。分布は、調査区中央と東側で極端に薄く、南西に位置する住居跡群の区域と北東の柄鏡形住居及び埋甕の区域で濃いという状況を示している。南西区域と北東区域の対局的な区域から土器が集中して出土している点は興味深い。また、各住居跡内から出土した土器点数に比べ、住居跡周辺のグリッドから出土した土器点数の方がはるかに多く、住居跡である竪穴内に限って多量に土器が廃棄されているわけではない。調査区中央は、堀之内式期の集落における中央広場と考えられ、広場には土器廃棄を行わない強い規制がはたらいていたと思われる。また、南西及び北東の区域には逆に土器廃棄の場としての強い意識がはたらいていたのではないかと思われる。しかし、その場が住居跡群の隣接する場所であったり、埋甕の集中する場所であったりする点で、単なる土器捨て場とはその意識が異なるのではないかと推測される。特に埋甕の周辺に集中する土器については、人為的な埋設の状態が見い出されなかったという理由でグリッド出土土器としたものも含まれており、埋甕周辺から出土した多くの土器が明確な埋設状況を示さない埋甕であった可能性もあろう。

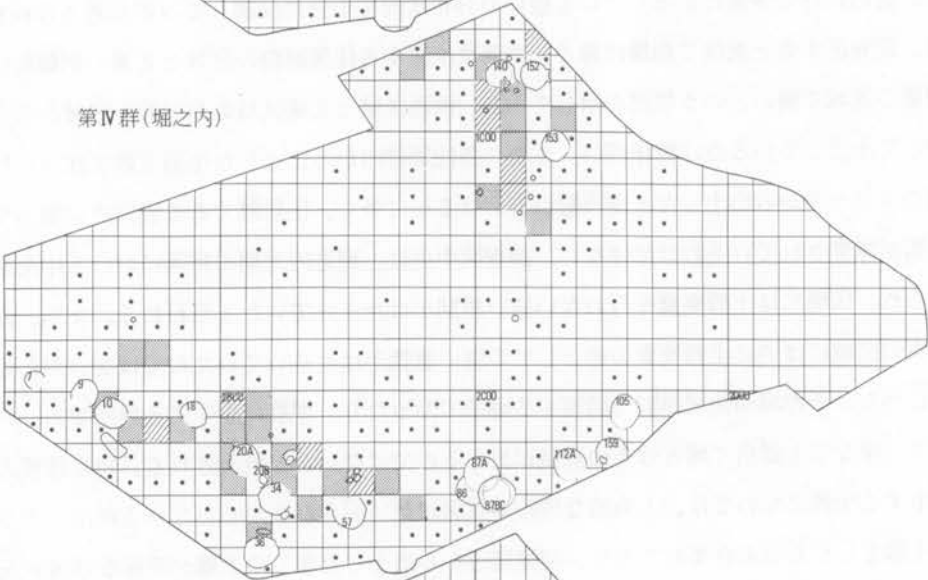
6) 後期加曾利B式期 (第Ⅴ群第1類土器)

堀之内式期に俄かに活況を呈したこの地も加曾利B式期以降、人間の足跡をほとんど辿ることはできなくなる。加曾利B式土器の出土は極めて少ない。分布は台地平坦部近くに近づく傾向を示しており、この時期になると生活領域が台地縁辺から台地奥部へ移動していくのではないかと考えられる。

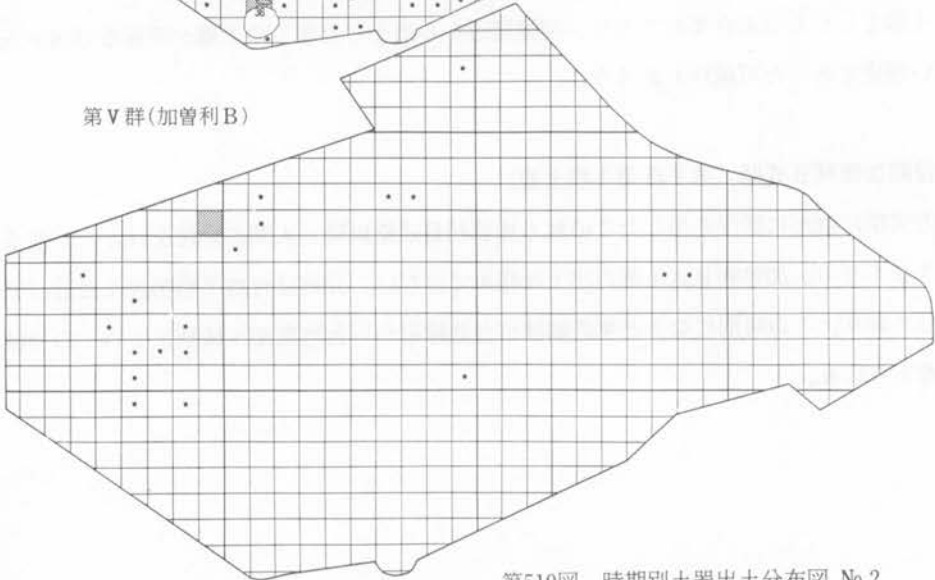
第Ⅲ群(中期)



第Ⅳ群(堀之内)



第Ⅴ群(加曾利B)



第519図 時期別土器出土分布図 No 2

2. 第IV群土器について

本文で述べたように発掘調査によって出土した縄文土器の99%以上の圧倒的な量が堀之内式土器であった。このうち主体を占めるのは堀之内I式であり、同II式は極めて少量であった。このような堀之内I式とII式の量的な関係は、他の多くの遺跡で認められるところであり、逆にII式が主体となる遺跡はほとんどないといってもよからう。

千葉県内で堀之内式土器を出土しているおもな遺跡としては市川市堀之内貝塚（清水 1957ほか）、松戸市貝の花貝塚（関根 1973）、千葉市加曽利貝塚（後藤 1976・1977）、同市矢作貝塚（清藤 1981）、同市木戸作貝塚（郷田 1979）、同市小金沢貝塚（郷田 1982）などが挙げられるが、これら沿岸部の遺跡の調査例に比べ、内陸部での調査例は相対して少ないようである。また、本遺跡のように堀之内式期集落のほぼ全容を調査した例も極めて少ないであろう。本遺跡の位置する印旛沼周辺の小地域に目を移すと、現在までにまとまった土器の出土をみた調査報告例は少なく、住居跡からの良好な資料も決して多いわけではない。そういった意味では、印旛沼に面した本遺跡の出土資料は、印旛沼周辺地域に限らず、沿岸部諸遺跡との対比やさらに広く、関東南西部との対比には極めて貴重な資料といえるであろう。

堀之内式土器の研究は古く、その研究史は斉藤弘道ほか（斉藤 1978、庄司 1981、小川 1984）によって詳しく紹介されているので、ここではふれない。近年、堀之内式土器の細分について活発な論議がかわされており、堀之内I式については市川市考古博物館で行われたシンポジウムにおいて3細分の目安が示され、基本的な文様の変遷に対しての意見の一致をみている。本遺跡から出土した堀之内I式の細分は上記の3細分案に一応沿うかたちで行ってみたが、細部においては今後十分な検討を要するであろう。本遺跡の堀之内I式の内要は豊富であり、器形・文様ともに複雑で多様なあり方を示している。

堀之内II式は前述したように量的には少ないが、文様の系統的な変化を比較的良好に示している。

ここでは第IV群の堀之内式土器について若干の考察を加え、まとめとしたい。

1) 器種及び器形

堀之内式土器の器種は深鉢、鉢、浅鉢、注口土器などから構成され、それぞれに多様な器形が存在している。逆に、その器形の複雑さこそが堀之内式土器の特徴的な一面であるともいえる。注口土器を除いて、実測個体総数に占める各器種の割合は、深鉢82%、鉢10%、浅鉢8%であった。このうち深鉢の割合は、実際にはさらに上回るのではないかとと思われる。

深鉢 深鉢の器形は頸部をもつA形ともたないB形の2種に大別される。深鉢の実測個体総数に占めるA形の割合は33%、B形は67%を示し、B形がA形の約2倍の量に達している。A形深鉢は頸部に施される横走沈線によって上下に文様帯が分かれる場合が多いが、口縁から胴

部にかけて連続的に文様が施されるものも少なくない。文様帯が2分される割合はくびれ方の顕著なAⅠ形で高く、AⅡ形とAⅢ形はそれほどでもない。また、口縁から頸部にかけての上部文様帯が無文研磨されるものと地文縄文を施すものの2者があり、本遺跡においてはほぼ同じ割合であろうと思われる。両者はともに堀之内Ⅰ式全般にわたって認められ、時期的な片寄りを認めることはできない。

A形で量的に最も多い器形は、口縁が最大径となるAⅢ形である。AⅠ形とAⅡ形はそれほど多くない。AⅣ形とAⅤ形は稀な器形といえよう。

B形のうちBⅠ形とBⅡ形は堀之内Ⅰ式前葉の古い段階に特定される器形である。本遺跡の場合、口縁部の無文帯と胴部文様とを沈線によって区画する土器の出土に限られており、千葉県木戸作貝塚出土例(第1貝塚20層出土土器)(郷田 1979)などよりは1段階新しい様相を示している。口縁部の無文帯は、外傾乃至は内傾するが、ほぼ直立するものもある。

BⅢ形とBⅣ形は深鉢の器形の中では量的に最も多い器形である。BⅢ形は堀之内Ⅰ式全般にわたって認められ、堀之内Ⅱ式及び加曽利B式に至っても継続的に作られる器形である。BⅣ形はBⅢ形よりも若干量的に多いが、堀之内Ⅰ式前葉には稀な器形である。第35号土壇から出土した蕨手文を伴うBⅣ形の深鉢は例外的な存在であろう。少なくともこの器形は堀之内Ⅰ式中葉以降に多く作られ、堀之内Ⅱ式以降まで続くと考えられる。BⅤ形は量的に少なく、堀之内Ⅰ式中葉に現れる器形で、顕著になるのは、堀之内Ⅰ式後葉からである。胴部の文様帯下端が隆帯及び沈線で区画される器形は、BⅣ形とBⅤ形、BⅥ形に限られる。BⅥ形は第20B号住居跡の1点しかなく、関東においても、深鉢ではあまりみられない器形であろう。堀之内Ⅰ式末に位置付けられる。深鉢の口縁部形態は平縁と3単位波状口縁が多く、4単位波状口縁は両者に比べやや少ない。

鉢 鉢の割合は全器種のわずか10%であるが、住居跡伴出例は比較的多く認められる。器形は十分な定形化を示しているわけではなく、大きさもまちまちで、深鉢に比べてもかなり流動的である。関東西部に多い鉢で、頸部が強くくびれるものは、本遺跡ではまったく出土していない。文様はほぼ全面に施されるが、D形は内傾する口縁部に沈線文が施される。また、胴部中段でいったん内折するF形は、全面に文様が施されずに内折部位から口縁にかけてのみ文様が施されるものもある。時期的にはA形からE形がおもに堀之内Ⅰ式で認められ、F形は堀之内Ⅰ式末から堀之内Ⅱ式に位置付けられよう。鉢の口縁部形態は、平縁となるものが圧倒的に多く、波状を呈するものはほとんどない。

浅鉢 浅鉢は全器種の8%である。鉢と同じく住居跡伴出例は少なくない。5器形のうち、皿形に近いB形はほとんどないといってよい。主としてA形とC形が多く認められる。時期的にはA形・B形・C形・D形が堀之内Ⅰ式、外反する器形のE形は堀之内Ⅰ式末から堀之内Ⅱ式であろう。

第IV群土器深鉢分類表

器形		AI	AII	AIII	AIV	AV	BI	BII	BIII	BIV	BV	BVI
1 類	a 種	1		1			1	1	3	1		
	b 種	1	2	5				3	11	5		
2 類	a 種		2	3					1	1	1	
	b 種		1	1						1		
	c 種			1						1	1	
3 類	a 種	1	1	4				1	2	2		
	b 種		1	4		1			2	4		
	c 種	3	1	1						3		
	d 種									1		
	e 種		1	1					6	4	2	
	f 種	1		1					1	2		
	g 種	1		2					1			
	h 種			1		1						
4 類			1							1	2	
5 類	a 種							1				
	b 種								2			
6 類	a 種								1		3	
	b 種											
	c 種											1
	d 種									2		
7 類	a 種	1	1							2		
	b 種		1	3					2	4		
	c 種		1						1	1		
	d 種			1								
8 類	a 種	2		7				2	15	18		
	b 種		2	2						3	1	
	c 種							2				
9 類									2	2	1	
10 類				1						2	1	
11 類			1	2	1				1	4		
12 類	a 種										1	
	b 種										1	
	c 種										1	
	d 種									1	1	
	e 種											

第IV群土器鉢・浅鉢分類表

分 類		器 形		鉢A	鉢B	鉢C	鉢D	鉢E	鉢F	浅鉢A	浅鉢B	浅鉢C	浅鉢D	浅鉢E
1 類	a 種													
	b 種													
2 類	a 種											1		
	b 種													
	c 種													
3 類	a 種													
	b 種													
	c 種													
	d 種													
	e 種													
	f 種													
	g 種													
	h 種													
4 類														
5 類	a 種													
	b 種											3		
6 類	a 種													
	b 種													
	c 種													
	d 種													
7 類	a 種													
	b 種	1												
	c 種		1								1			
	d 種													
8 類	a 種	3	2	2		1	1	5				2		
	b 種		2	1	1									
	c 種													
9 類		2	3	1					3	1	2			
10 類														
11 類				1						1				
12 類	a 種							2						
	b 種							1						
	c 種									1				
	d 種													
	e 種							1						1

口縁部形態は平縁が圧倒的に多く、2単位・3単位・4単位の波状口縁を呈するものはわずかである。

2) 文 様

① 堀之内Ⅰ式

本遺跡の堀之内Ⅰ式は、縄文を地文として施したのち、沈線で文様を描出する土器が圧倒的に多い。沈線のみによって文様を描出する関東南西部的な土器の出土は極端に少なく、いわゆる「下北原式」と呼ばれる土器は、本遺跡ではまったく検出されていない。

従来から指摘されているように千葉・埼玉・茨城などの関東東部における堀之内Ⅰ式の文様施文過程と関東南西部のそれとは大きな相違がある(安孫子 1971)。神奈川県帷子峯遺跡では、深鉢において沈線によって文様が施されるものと縄文を地文として沈線が施されるものの割合が約9対5の関係にあるという(佐々木 1984)。また、同県東正院遺跡(鈴木 1972)や同県下北原遺跡(鈴木 1977)では約10対1の割合であることが指摘されており、関東南西部では、縄文地文の割合が極端に低いことが理解できる。本遺跡の割合を実測個体からみると、縄文を地文とする個体は234個体を数える。これに対して縄文を地文としない第4類、第5類b種、第7類b種及びc種、第9類は41個体にすぎず、2者の割合は約6対1と圧倒的に縄文地文の割合が高い。このあり方は関東南西部とは極めて対照的であり、関東東部における堀之内Ⅰ式の地域性をよく反映していると考えられる。また逆に、東北南部の綱取系土器との関連を認めることもできるが、綱取Ⅱ式前葉に盛行する磨消し縄文手法は、関東東部においては極めて限定されており、一時期を画するほどの盛行は認められない。この点では東北南部の影響が強いとはいえ、関東東部独自のあり方を看取することができる。

本遺跡の堀之内Ⅰ式は、住居跡の豊富な一括資料のほかにグリッドからも多量の出土をみていることから、文様の変化を比較的容易に認めることができる。

以下、堀之内Ⅰ式を前葉・中葉・後葉の3段階に分け、その変遷をみていくことにする。

前 葉

蕨手文を代表とする単純な単位文様で器面が構成される段階である。本遺跡からは千葉県木戸作貝塚出土例(第1貝塚20層出土土器)(郷田 1979)のように口縁部の無文帯と胴部文様とを隆帯によって区画する深鉢は1点も出土しておらず、綱取Ⅰ式末から綱取Ⅱ式初頭に並行する時期の土器は認められない。

第9号住居跡、第10号住居跡、第105号住居跡、第112号住居跡からは、綱取Ⅱ式の影響と考えられる磨消し縄文手法を伴う第1類a種の土器がわずかに出土しているが、これらの住居跡から出土した土器の主体は、第1類b種の磨消し縄文手法を伴わない土器である。第1類a種と同類b種の関係は、関東東部の他の遺跡においても普遍性をもつと考えられ、a種は客体的

な存在でしかなく、前葉の古い段階に限られるのではないと思われる。a種に認められるJ字状文、U字状文、弧線文などの単位文様はb種にはほとんど認められない。第123図2・4は第3類a種に分類される深鉢であるが、蕨手文は付属文様として使われており、東北地方で認められる初期の蕨手文のあり方とよく似た文様構成を示している。蕨手文は前葉の古い段階にはJ字状文やU字状文などの付属文様として使われるが、磨消し縄文手法の消失とともに前葉の主要な単位文様として多用されはじめる。第1類b種の単位文様は圧倒的に蕨手文が多く、堀之内I式前葉はこの蕨手文によって特徴付けられる。

口縁から頸部にかけての無文帯に垂下隆帯を伴う第124図8のような土器は前葉の古い段階にはすでに現れており、系統的には堀之内I式後葉の新しい段階まで続くと思われる。

第105号住居跡の深鉢(第66図1)はH字状懸垂文の唯一の例である。千葉方面においてはあまりみられない要素である。貝の花貝塚(関根 1973)に類例が認められる。また、そのH字状懸垂文をもつ深鉢にはクランク状文が施されているが、このクランク状文は堀之内I式中葉以降に多用され、後葉には著しく多条化し、付属文様のモチーフとして重要な役割をはたしている。

中 葉

中葉になると前葉で多用された蕨手文の存在はうすれ、蕨手文本来の形が崩れはじめる。蕨手類似文様とでも言うべき単位文様が多くなる。また、第146図39~50のような垂下沈線を基調とする単位文様も、中葉になってから顕著となる。第3類b種・d種・e種・f種の各付属文様は中葉に現われ、以後、文様構成上の主要な要素となる。

第86号住居跡や第152号住居跡から出土した深鉢は中葉の文様構成をよく示している。第86号住居跡の深鉢(第55図1)はX字状文を付属文様とする典型例である。第152号住居跡の深鉢(第87図1)は内部に楕円文を伴う垂下沈線を単位文様とし、単位文様間に単純な付属文様を施している。同住居跡第87図4の付属文様は、単沈線によるジグザグ文である。第128図39の単位文様は単純な垂下沈線からなり、中葉の初めにはすでにこのような単位文様が現れている。同図40は39よりも変化の過程をよく示していると思われ、単位文様は蕨手類似文様である。39とほぼ同じ、中葉の初めに位置付けられようか。第126図29・30のように単位文様と付属文様が独立して施される第3類a種は、中葉の特徴的な土器といってもよい。

中葉の新しい段階になると、やや多条化の傾向が現れるが、どの段階を多条化とみるかには十分な検討が必要であろう。第126図24は蕨手類似文様の左右に弧線が加わり、やや複雑さを加えているが、単沈線を集合させているため、あまり多条化を意識させない。半截竹管状工具は前葉からわずかながら使われているが、中葉の新しい段階から次第に多く使われはじめ、後葉になるとほとんどがこの工具による施文にかわってくる。工具の違いによって施文効果も大きく異なり、工具の選択性においても時期的な変化が認められる。

後 葉

後葉は単位文様や付属文様が中葉よりもさらに多条化し、地文縄文の存在が薄れる段階である。器面に施される単位文様と付属文様の比重は、後葉になると逆転し、単位文様は胴部文様を縦に分割するだけの単純なものとなり、かわって付属文様の占める器面の割合が高くなる。第2類、第3類g種、同類h種、第4類、第6類は後葉に位置付けられ、第3類b種・c種・d種・e種・f種の一部も後葉に含まれる。

第20A号住居跡、第20B号住居跡、第140号住居跡などからの出土土器は、後葉の文様構成を示す良好な一括資料である。これらの住居跡から出土した土器の多くが半截竹管状工具によって文様が描出されており、本遺跡における後葉の大きな特徴といえるであろう。

第20A号住居跡から出土した第32図1・2は半截竹管状工具を使用して、器面全体を繊細な沈線文によって満たしている。同図3は単位文様のみによって文様が構成されるものである。棒状工具によって沈線が施されているため、著しい多条化を示していないかにも見えるが、工具による施文効果の違いにすぎず、かえって沈線の施文回数は、半截竹管状工具を用いた場合よりも多くなっている。

第20B号住居跡から出土した第39図1・4などは、半截竹管状工具の使用により、著しく多条化している。第140号住居跡の出土土器は、実測個体よりも拓影図に多条化の傾向がよく現れている。9割以上が半截竹管状工具使用の文様であり、棒状工具乃至は竹管状工具使用の文様は極端に少ない。

第2類は、住居跡出土例が少なく、グリッド出土土器にその好例をみる。第2類b種の第125図23や第126図25の、垂下する沈線の左右に連弧状の沈線文が重層的に施されるもので、25には8の字浮文が貼付けられている。これらは後葉の新しい段階であろう。第2類a種の第126図26は、口縁から頸部にかけて隆帯が貼付けられている。胴部には著しく重層化した弧線が施されており、後葉の新しい段階に位置付けられ、隆帯を伴う系統は前葉の古い段階からたどることができる。

第3類g種は曲線的な付属文様が施されるもので、第132図59・60のように単位文様と付属文様の区分がやや不明瞭となるものが多い。このように文様を縦に分割する単位文様の存在が明らかにうすれてくるのは後葉の最も新しい段階になってからであろう。第3類h種のいわゆる集合沈線文を施した土器は量的には少なく、後葉末に位置付けられよう。第132図61・62のように単位文様と付属文様の区分は不明瞭で、器面全体が沈線で満たされ、地文縄文の存在はほとんどないに等しくなる。

第4類は極めて少なく、本遺跡の堀之内I式には関東南西部の影響がわずかに認められるにすぎない。第155図140は、いわゆる「下北原式」と呼んでもよいかもしれないが、器形にやや問題があろう。この土器だけは中葉に含まれるかもしれない。第6類は、第20B号住居跡や第

140号住居跡などで出土していることから、後葉に位置付けられよう。垂下隆帯の間に施される付属文様は著しく集密化したものが多く、地文縄文はほとんど意味を成さない場合が多い。

第20B号住居跡の第38図2や第87B・C号住居跡の第62図12~14、グリッド出土の第159図200~209は、第6類c種に分類した磨消し縄文手法を伴う例である。関東南西部以西の充填縄文手法の影響によるものとも考えられ、極めて容体的な存在でしかない。この手法は堀之内II式には認められないことから、関東東部においては堀之内I式末に再び現れる特異な手法であると言えるかもしれない。

② 堀之内II式

堀之内II式は第12類に一括したが、第10類と第11類の一部は堀之内II式に比定される。第12類の深鉢で遺構に伴うものは皆無であり、すべてグリッドの包含層から出土している。第12類のうちa種は堀之内I式からII式への過渡的な文様構成を示している。文様を縦に分割する単位文様はすでに失われ、横位の連続的な沈線文に変化している。口縁部の内面に施される横走沈線はやや明確さを欠き、堀之内II式の初期的な様相を示している。第141図116・120などに見られる内面の横走沈線は指によるナゾリに近い。

第12類b種・c種・d種はいわゆる充填縄文手法を伴う土器群である。器形は小型で、底部から直線的に開くBIII形と外反し開くBIV形の深鉢に限られている。内外面ともに器面の調整はよく、器厚は比較的薄い。口縁部内面の横走沈線がa種に比べて顕在化してくる。第141図118のように、「く」の字形に内折する口縁をもつ例もある。また、第167図312・313のように棒状工具による深い横走沈線を施した例も認められ、しだいに口縁部内面の沈線は明確なものとなる。312に認められる8の字浮文を伴う土器はb種・c種では少なく、d種の隆帯貼付の土器にはほとんどの場合認められる。d種の隆帯には第141図119のように竹管状工具による連続刺突文の施されるものや第168図321のように斜位の刻目が施されるものなどがある。第168図326・327・329は隆帯が二段に貼付けられ、上下の隆帯を垂下隆帯で連結している。隆帯の下方に縄文を充填した横帯文が認められ、堀之内II式の新しい要素と考えられる。千葉県宮本台貝塚(八幡 1974)や埼玉県高井東遺跡(城近 1974)などから類例が出土している。第140図110は第11類に分類したが、堀之内II式であろう。刻目を伴う太目の隆帯が口縁部にめぐり、「8」の字浮文と思われる突起が貼付けられている。胴部には櫛状工具による雑な曲線文が施されており、堀之内II式にはめずらしい文様である。

第12類e種の第168図331~334は同一個体であるが、波状口縁の波頂部内面に刺突と沈線を施している。胴部文様は沈線で上下を区画していると思われ、間に羽状の沈線文を施している。類例に乏しく、本遺跡においてはこのような文様構成をとるものは他に出土していない。第169図336~345は内外面の調整がよく行われ、口縁部内面に棒状工具による深い沈線が施されている。加曾利B1式の精製土器に極めて近似しているが、堀之内II式末に比定されるのではないかと

思われる。

第10類は紐線文を伴う土器群である。従来紐線文を伴う場合、ほとんどが加曾利B 1式の粗製深鉢として扱われることが多かったが、第10類は明らかに加曾利B 1式の粗製深鉢とは分離される土器群である。庄司克によって堀之内II式に粗製深鉢が伴っていないことが指摘されている（庄司 1970・1981）が、この第10類の紐線文の土器が堀之内II式の粗製深鉢にあたりと考えられる。第139図105～107は口縁部内面に横走沈線を伴っていることから堀之内II式の様相を示している。しかし、105においては半截竹管状工具を使用して著しく多条化しているとはいえ、単位文様は依然明確であることから、精製小型深鉢におけるII式の小概念一文様帯の上下を沈線によって区画する段階をもってII式とする一をそのまま粗製深鉢にあてはめることは難しいではなかろうか。すなわち、II式のいわゆる粗製深鉢には、精製小型深鉢のような明確な上下の文様帯区画を伴う場合の方がかえって少なく、堀之内I式の単位文様をII式段階にも残存させるのではないかと考えられる。千葉県中野僧御堂遺跡（斎木 1976）から出土した紐線文を伴う土器で、第V群に分類された第187図1・2・3や第188図1、第201図の各土器は堀之内II式と考えられる。また、『縄文土器大成3』（野口 1981）に掲載されている千葉県曾谷貝塚出土の深鉢（223）なども堀之内II式と考えられる。

ところで、第140号住居跡からは完形に近い注口土器が出土しているが、この注口土器は普通堀之内II式とされるものである。同心円文や重菱形文などの沈線文が施され、これら沈線文の間に縄文が充填されている。第140号住居跡は堀之内I式後葉の最も新しい段階の土器を出土しているが、堀之内II式と考えられる土器は1点もなかった。従って、この注口土器のみ堀之内II式とし、第140号住居跡には伴わないと判断するには問題があろう。堀之内I式末には、このような文様構成の注口土器がすでに伴っているとすれば、従来II式とされてきた注口土器についての時期的な問題について、十分な検討が必要であるかもしれない。

3) 縄文原体

表は縄文を伴う234個体の縄文原体の種類とその割合を示したものである。最も多く使われる縄文はLR単節縄文で、全体の78%を占めている。施文の仕方は横位乃至斜位の施文が多く、縦位施文は極めて少ない。次いでL無節縄文の10%、残る原体はみな5%以下である。L無節縄文を施文した土器には第128図40のような大型の深鉢があり、原体のかなり太い例もある。少量だが反撚縄文のLL、RRがあり、第112号住居跡からはLL反撚縄文が特徴的に出土している。複節縄文は破片の中に多少とも認められたが、実測個体におけるその割合がほぼ実体を反映していると考えられ、複節縄文はほとんど使われていないと言ってもよさそう。

縄文原体の種類別構成

縄文原体	L	R	LR	RL	LRL	RLR	LL	RR	合計
個体数	23	4	183	11	2	5	5	1	234
比率	9.8%	1.7%	78.2%	4.7%	0.9%	2.1%	2.2%	0.4%	100%

4) 施文工具

本遺跡から出土した堀之内I式土器の施文工具には、棒状工具、竹管状工具、半截竹管状工具、櫛状工具、へら状工具の5種類が認められた(註1)。

実測個体の中で、沈線及び条線によって文様が描出される個体は194個体にのぼる。これらの中には1個体中に2種類の工具が使われているものもわずかに認められるが、一般には1個体の土器の文様は1つの工具によって描出される。194個体中、2種類の工具が使われた土器は2個体あり、使用された工具の総数を196として割合をみると、棒状工具45(23%)、竹管状工具70(36%)、半截竹管状工具53(27%)、櫛状工具20(10%)、へら状工具8(4%)となっている。

棒状工具と竹管状工具は施文された沈線にきわだった差異はなく、2種類の工具が使い分けられていた可能性は少ない。

半截竹管状工具は堀之内I式の初頭からわずかながら使われているが、多用されるのは堀之内I式中葉以降である。棒状工具乃至は竹管状工具を使って沈線を集合させる方法に比べ、半截竹管状工具は沈線を多条化させるには極めて有効な工具であると考えられる。特に堀之内I式の後葉に著しい多条化の傾向が現れるが、本遺跡の場合、半截竹管状工具を使用した土器の量は多く、地域的な特徴が現れているものと考えられる。この工具の多用をもって後葉の画期とし得るかもしれない。

櫛状工具の割合は10%であるが、堀之内I式全般にわたって用いられている。この工具を使

施文工具	時期	堀之内I式			堀之内II式
		前葉	中葉	後葉	
棒状工具					
竹管状工具					
半截竹管状工具					
櫛状工具					?
へら状工具					?

第520図 施文工具の時期変遷

用した条線文の土器は、他の工具を使用した土器群とは系統を異にしていると思われる。

へら状工具は堀之内 I 式においてはほとんど使用されない工具といってもよく、その使用は偶発的なものと考えられる。

5) 容 量

第IV群土器の出土量は多く、実測個体も相当数に達するが、ほぼ完形で容量を測定することができるものはそれほど多くない。全器種合わせて容量の測定可能な個体は60個体、全実測個体の23%にすぎない。このため器種別の容量を詳しく分析することは難しく、ここでは全体的な傾向をみるだけにとどめておきたい。

第521図及び第522図に掲げた土器が測定した個体のほとんどである。器種にかかわらず容量によって以下のように区分することができる。

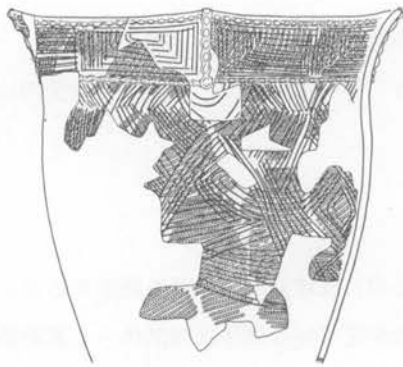
- A群 30ℓ以上 (①)
- B群 30ℓ～15ℓ前後 (②～④)
- C群 15ℓ前後～10ℓ前後 (⑤～⑩・⑳・㉔)
- D群 10ℓ前後～4ℓ前後 (⑪～⑮・㉑・㉕)
- E群 4ℓ前後～1ℓ (⑯～㉓・㉖～㉘・㉙)
- F群 1ℓ以下 (㉚～㉜・㉗～㉚)

A群は57ℓを計る①のみである。①に匹敵する個体は他に1点も出土していない。①の57ℓという測定値は遺存部分のみの測定値であるため、実際に底部が残存していれば60ℓを越える容量である。一般の土器と同じく煮沸に使われたとは考え難く、貯蔵などの用途に使用されたと考えるべきであろう。

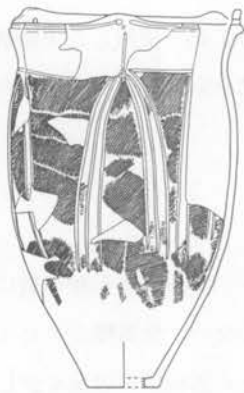
B群は使用痕を明瞭に残すものが多く、煮沸に用いられた土器の中では大型の部類に属し、約20ℓ前後のものを主体としている。

C群は10ℓ前後のものが主体を占め、一般的な煮沸用の土器を代表する一群である。堀之内 I 式においては精製と粗製の区分が不分明であるが、C群にみられる文様には縄文を主体とするものが多いことから、これらをいわゆる「粗製土器」の範疇で捉えることもできるであろう。第IV群8類のほとんどがC群に含まれると思われる。C群にはまた大型の鉢が含まれているが、深鉢と同じく煮沸に使用されたとはいえない。短期間の貯蔵などの用途が考えられようか。

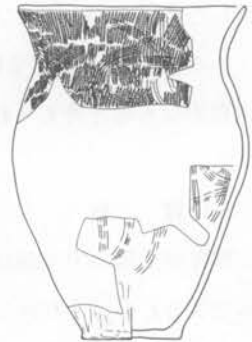
D群は6ℓ～4ℓのものが主体を占め、やや小型の深鉢や一般的な鉢などが含まれている。この群に含まれる深鉢には胴部下半に明瞭な二次焼成痕をとどめるものがあって、やはりB群、C群の深鉢と同様に煮沸用として使われていたものと思われるが、C群の深鉢容量の約半分であることから、言うまでもなく、煮沸された食物の量に大きな違いがあることがわかる。この違いは、単に煮沸される食物の多寡にとどまらず、煮沸される食物の種類に違いがあったので



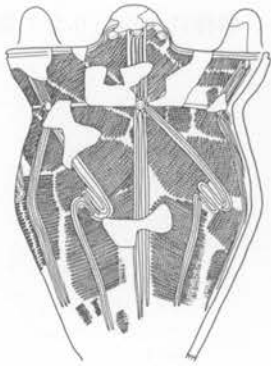
① 57.0 l (グ-105)



② 22.2 l (グ-3)



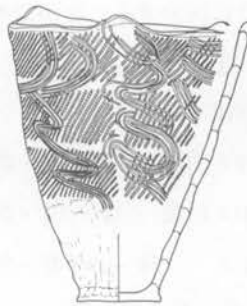
③ 21.0 l (グ-77)



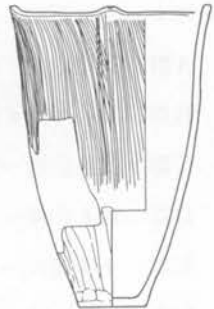
④ 19.8 l (グ-37)



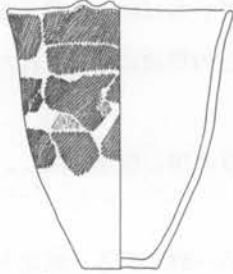
⑤ 13.7 l (140号-5)



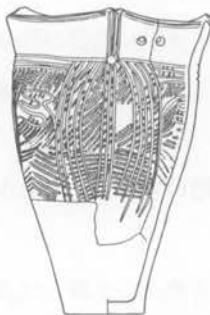
⑥ 12.7 l (20B-1)



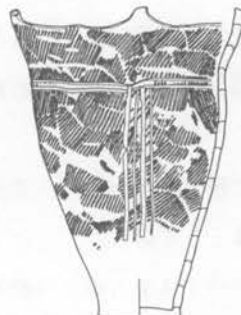
⑦ 10.0 l (140号-9)



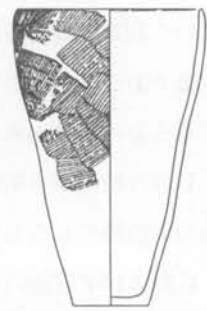
⑧ 11.2 l (グ-84)



⑨ 9.7 l (87B・C-4)



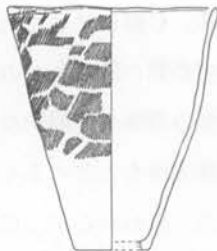
⑩ 9.7 l (130号埋甕(1))



⑪ 9.2 l (140号-10)



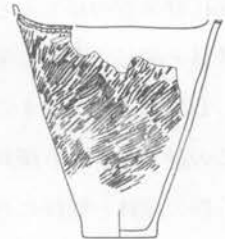
⑫ 9.1 l (グ-95)



⑬ 9.4 l (グ-82)



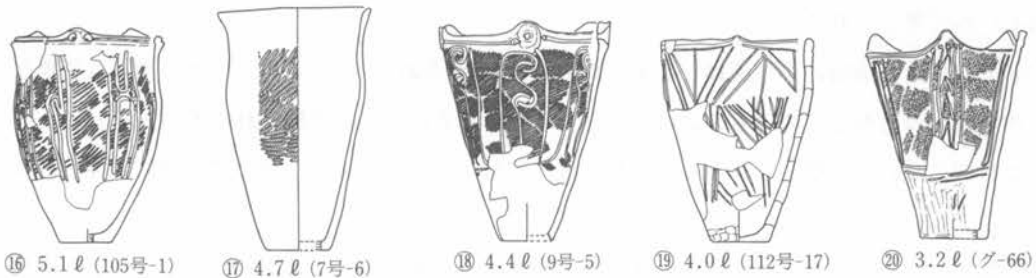
⑭ 7.5 l (152号-2)



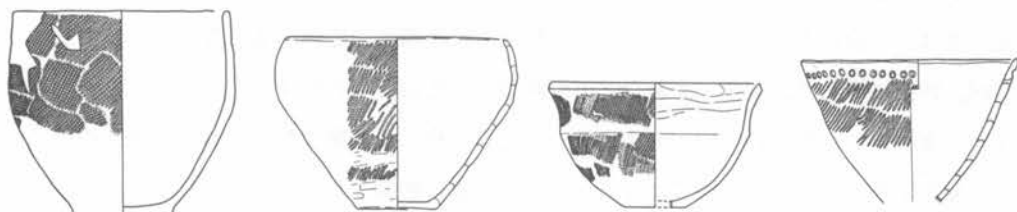
⑮ 6.3 l (76号埋甕)

第521図 第Ⅳ群土器法量模式図 (1/10) No 1

() 内は遺構番号及び個体番号 グはグリッドを示す



26 0.6 l (87A号-1)

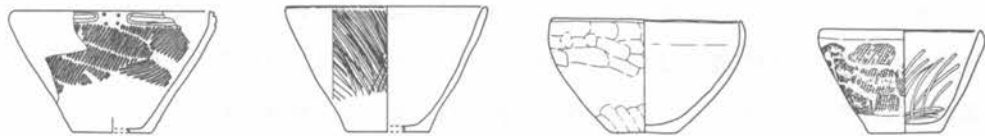


27 11.0 l (112号-21)

28 9.9 l (グ-124)

29 5.3 l (グ-137)

30 5.2 l (158号-9)



31 4.4 l (グ-125)

32 4.2 l (グ-130)

33 3.8 l (10号-4)

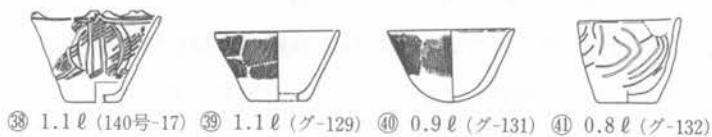
34 2.2 l (7号-5)



35 1.9 l (112号-23)

36 1.8 l (112号-24)

37 1.5 l (36号-3)

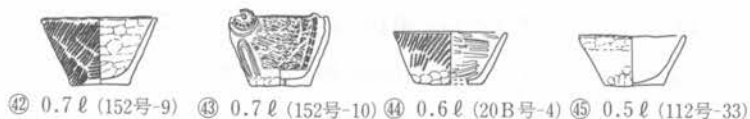


38 1.1 l (140号-17)

39 1.1 l (グ-129)

40 0.9 l (グ-131)

41 0.8 l (グ-132)

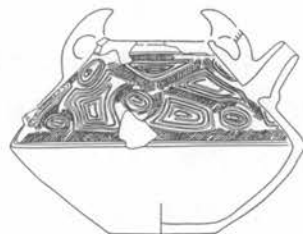


42 0.7 l (152号-9)

43 0.7 l (152号-10)

44 0.6 l (20B号-4)

45 0.5 l (112号-33)



46 1.5 l (140号-21)

第522図 第IV群土器量法模式図 (1/10、46のみ1/5) No.2

はないかと考えられる。

E群には3ℓ前後の小型深鉢と2ℓ～1.5ℓの鉢が含まれている。このクラスの深鉢は明瞭な二次焼成の痕跡をとどめるものはほとんどなく、単なる用器として使われたものと思われる。鉢はD群において一般的な鉢とした一群に比べ容量が $\frac{1}{2}$ 以下であることから、D群の鉢とはまた別のグループを構成すると考えられる。

F群にはカップ状の小型深鉢と浅鉢全部が含まれる。器形としては深鉢だが、㉔～㉖を貯蔵や煮沸といった用途に使用したとは思われない。手に持って液体などを入れる容器として使われたのではなかろうか。浅鉢は器形分類にあたって便宜的に口径20cm未満としたものであるが、この一群は容量においても一つのグループを構成している。F群の小型深鉢と同じく手に持って使う土器、あるいは少量の食物などを盛るために使われた土器と考えられよう。

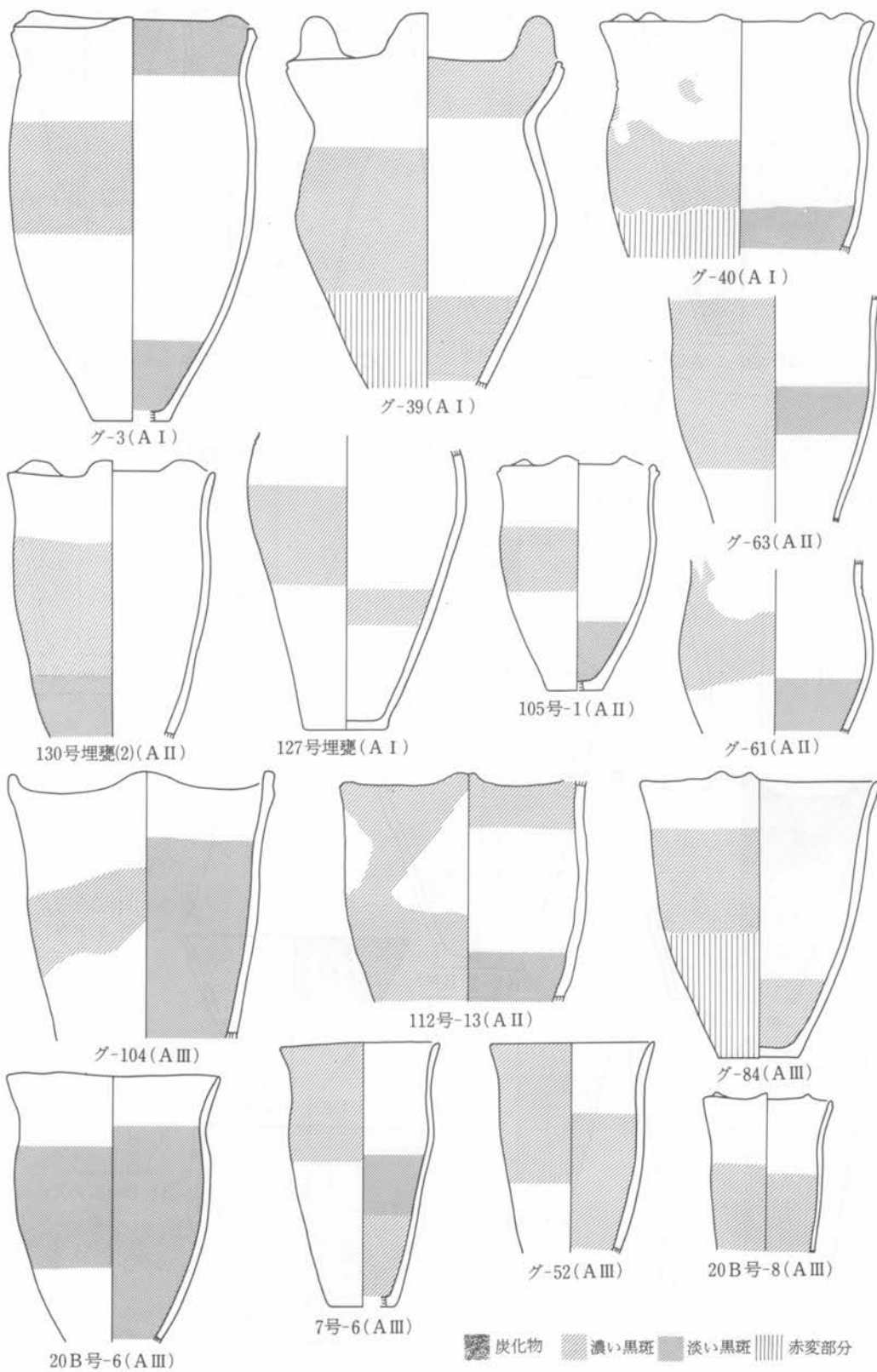
6) 使用痕

使用痕は、一般に土器の表面に付着した炭化物や特定箇所の変色・変質などによって認められるが、器面に現われた変色・変質などの痕跡のすべてが使用の結果生じた変化であるとは限らない。廃棄された後、長い間土の中であって土質の様々な影響によって器面の状態や色調が著しく変化することも決して稀ではない。たとえ土質に影響されなかったとしても、器面に現われたこれらの変化が、何に起因するものなのかを判別することもなかなか容易ではない。例えば、土器の内外面に見られる黒変が、土器の焼成時に炭素が付着したものか、あるいは煮炊きに使用された際ススが付着したものか判断に苦しむこともしばしばである。接合し復元された土器の中には割れ目を境にして器面の黒変が跡切れ、まったく色調が変わってしまうものもすくなくない。土質の影響のほかにも我々自らが貴重な情報を失わせているとも考えられる。掘り出したばかりの土器にはしばしば炭素や炭化物の付着が認められるが、整理の過程で最初に行う水洗作業によってその多くを土と共に洗い流してしまうことも、使用痕を観察する上で大きな障害となっているのではないと思われる。

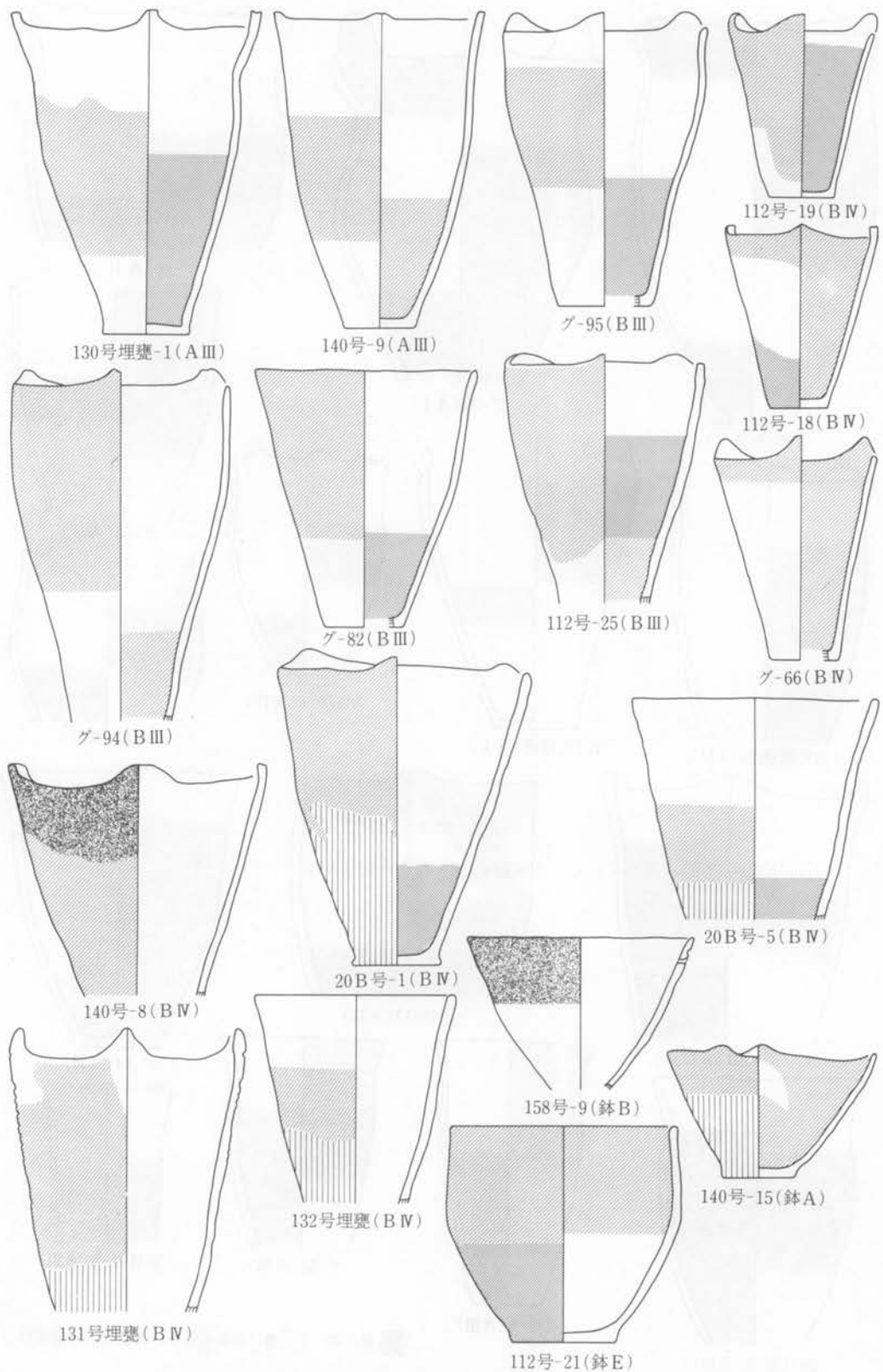
伊篠白幡遺跡から出土した堀之内式土器のうち、完形または完形に近い個体で明らかな使用痕として認定し得るものは多くない。第523図と第524図に示した土器がそのほとんどである。ここでの使用痕の観際は、水洗などの過程を経てもなお器面に残る痕跡で、炭化物の付着や器面の著しい赤変、炭素の吸着による黒変などを観際している。図示した黒変の濃淡は見た目の濃淡を二段階に分けたにすぎず、器面に認められる状態の相違を示すものではない。

炭化物の付着が認められたのはわずか2点にすぎない。第140号住居跡出土の深鉢と第158号土壇出土の鉢である。2点とも口縁から胴部上半にかけて10cm前後の幅で帯状に炭化物が付着している。炭化物といっても著しい付着ではなく、器面に薄く付着するわずかなものである。

黒変と赤変の部分は深鉢においては器形の大小を問わず、おおよそ一定のパターンが認めら



第523図 土器使用痕模式図 (1/8) No 1 ()内は分類器形



第524図 土器使用痕模式図 (1/8) No 2 ()内は分類器形

れる。赤変は、外面の底部から胴部 $\frac{1}{3}$ にかけて認められる。黒変は赤変の上端から口縁部下端にかけての胴部に認められる。また、内面には外面の赤変部分とほぼ同じ位置に黒変が現われている。深鉢の胴部下半の赤変は、煮炊きに使用された時に最も高温となる部分にあたり、著しい二次焼成を受けた部分と考えられる。

赤変から上の部分に認められる黒変は燃料の燃焼に伴うススが吸着したものと考えられる。内面の黒変部分は、外面の赤変部分にほぼ対応しており、熱せられ高温となる部分であるため食物が焦げて炭化し、器面に付着したものと考えられる。炭化物が内面に残存した土器は一点もないが、認められる黒変は炭化物の残留と考えられる。

以上に見てきたような使用痕のあり方は、長野県諏訪郡原村居沢尾根遺跡から出土した中期中葉の深鉢において観察された使用痕とほぼ同様なあり方を示しており(青沼 1981)、深鉢の使用方法については、時期や地域による相違は基本的にはないものと思われる。

鉢については、個体数が少ないこともあって詳らかにし得ないが、第140号住居跡出土の鉢には二次焼成の痕跡が認められ、煮炊きに使用された可能性もあろう。また、第112号住居跡出土の鉢には黒変が上下に二分して認められ特別な使用法を思わせる。

図示した深鉢の中には5個体の埋甕が含まれている。みな明らかな使用痕が認められ、埋甕として使われる以前に一般の深鉢と同じく煮炊きに使用されていたものと思われる。

註

註1 それぞれの工具を特定する方法は、器面に施された刺突の形状、沈線の起点と終点の形状、沈線の断面形などによった。棒状工具としたものは、沈線の断面形などから竹管状工具とは思われないもの、という消極的な判断によっている。本遺跡の堀之内式土器を観察した限りにおいては、単沈線による文様描出には竹管状工具が大部分を占めるのではないかと考えられる。しかし、実際には竹管状工具であっても先端が潰れていた場合には、棒状工具と判断せざるを得ないこともある。竹管状工具は竹乃至は中空の莖を使用していると判断されるものである。半截竹管状工具は2条1組の沈線を施せるもので、竹乃至は中空の莖を縦截し、内面を使用しているものに限られる。外面を使用しているものは竹管状工具とした。櫛状工具は3本以上の沈線を一度にひくことができるものである。へら状工具は工具の先端が板状を呈すると判断されるものである。

2. 石器（石鏃・磨製石斧・打製石斧）について

縄文時代の石器の分布 本稿では、グリッド一括及び住居跡出土の遺物の中で特に石鏃・磨製石斧・打製石斧の分布についてどのような傾向がみられるのか概観してみたい。

なお、本遺跡では5m×5mのグリッドを最小単位としており遺物のとりあげも各小グリッド毎に行っている。また、遺物の分析については、石鏃ではそれぞれを類型化した後、各類型と最終的な調整痕（以下仕上げ痕とする）との間に関連がみられるかどうか確認し、さらにこれらの類型がどのような分布を示すのかをみる。磨製石斧・打製石斧では各形態と破損のあり方との関係を把握し、形態別・破損のあり方別の分布をみることにする。

ここで、本遺跡の遺物の分析に先立っていくつかの前提を確認しておきたい。まず、各石器群の視覚的なまとまりを廃棄領域として限定することと各住居跡群に居住していた集団が住居跡の近くに廃棄していたということである（註1）。逆に言えば、このような前提にのっとりうえでの分析の結果、各廃棄領域間になんらかの差異が生じた場合、これらの前提の蓋然性は高くなるといえよう。また、本来、数量分析もこのような分析方法をとる以上行わなければならないのであるが、本稿では数量的な過少さからとらず、基本的に定性的な分析を行ないたい。

次に個々の遺物についてみることにする。

1) 石 鏃

石鏃については、各類型は挟りの大きさ・全体的形状・基部形状によりまとめる。

I-A型は、挟りが小さく、二等辺三角形を呈すもので、グー1・グー2・グー3・グー4・グー5が該当する。

I-B型は、挟りが小さく、正三角形を呈すもので、グー6・グー7が該当する。

I-C型は、挟りがほとんどなく、正三角形を呈すもので、側縁形状はゆるやかな弧状を呈す。グー18が該当する。

I-D型は、挟りが小さく、正三角形を呈し、基部の先端が丸くなるもので、グー14・グー17が該当する。

II-A型は、挟りが大きく、二等辺三角形を呈すもので、グー8・グー9・グー10・グー11・グー12が該当する。

II-B型は、挟りが大きく、正三角形を呈すもので、グー13・グー16が該当する。

II-C型は、挟りが大きく、五角形を呈すもので、グー15が該当する。

III型は未製品及び全体形状の不明な欠損品でグー19～グー25が該当する。

次に各類型と仕上げ痕の関係についてみてみよう。なお、仕上げ痕については、左側縁に集中するものをL型、右側縁に集中するものをR型、両側縁に集中するものをO型とする（これ

類型・仕上げ痕相関関係表

		類				型			
		I A	I B	I C	I D	II A	II B	II C	III
仕 上	L	グー3	グー6	グー18	グー14	グー8 グー9 グー10 グー11	グー13 グー16	グー15	
	R					グー12			
げ 痕	O	グー1 グー2 グー4 グー5			グー17				
	不明		グー7						グー19 } グー25

らの分類は阿部祥人氏（阿部 1982）の分類に準ずる。これらをまとめたものが類型・仕上げ痕相関関係表である。この表からはI-A型については仕上げ痕はほとんどO型に限定され、逆にII-A型ではL型に限定されるという傾向が看取される。また、I-A型を除き、本遺跡出土の石鏃に関して全体的な傾向としてL型に限定されるといえよう。ここで興味深いのは、全体形状として二等辺三角形を呈すという形態的な共通性をもつ両者が、挟りの大きさ、仕上げ痕においては差異性をもつということである。しかも、この差異は分布上でも偏在性をもって現われる。そこで次に各類型の分布をみてみよう（第526図）。

このことから①のグループではII-A型のみで構成され、②・③のグループでは少数となり、④のグループ・グループ外では全くみられず、さらにI-A型はグループ外において遺跡の中央部付近に集中する傾向がみられる。さらにI-B型は②とグループ外のみにもみられ、I-D型は②・④のみにもみられる。また、III型は①のグループにはみられず、②・③・④のグループにそれぞれ1～2点ずつみられることがわかる。

I-C・II-B・II-Cはグループ外のみにもみられる。従って大体の傾向として石鏃の分布からは①のグループとグループ外の特異性が比較的顕著にうきばりにされてくる。また、比較的均質な要素をもつ②・③・④のグループ内では④が異質なものである。この場合①のグループとグループ外の特異性はI-A型・II-A型の分布上の差異に起因する。さらにII-A型については②・③・④のグループから④のグループを除くのものにも存在しないという点で関与している。では、このような分布上の差異を生じさせたI-A型・II-A型の差異は何に起因したのであろうか。いくつかの解釈が考えられよう。

廃棄領域内類型別出土分布表

	類				型			
	I A	I B	I C	I D	II A	II B	II C	III
①のグループ					グー9 グー11 グー12			
②のグループ		グー7		グー14	グー10			グー23 グー24
③のグループ					グー8	グー16		グー25
④のグループ				グー17				グー19
グループ外	グー1 グー2 グー3 グー4 グー5	グー6	グー18			グー13	グー15	グー20

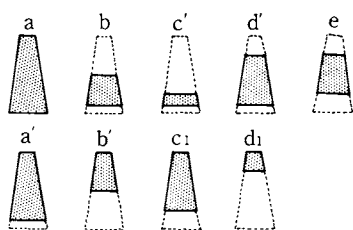
- ① 土器型式上の大きな時間差
- ② 1型式内の小さな時間差
- ③ 廃棄ないし遺棄のパターンの違い

などが考えられる。本遺跡の場合、集落については掘之内I式期に限定され、全体としてもこの時期以外の土器の出土量が少ないことを考えると①の解釈はとりにくいと思われる。また、②・③については、判断しがたいが、両者の要因が複雑に絡み合っているものと思われる。本遺跡の場合1型式内である程度細分されうる可能性が示されており、②の可能性は否定し難い。さらに③についても、分布上の偏在性（空間的差異）は時間差によらなければ種々の人間の行動のパターンの差により生じるものである。従って、ここでは②・③両者の解釈の可能性を考えておきたい。

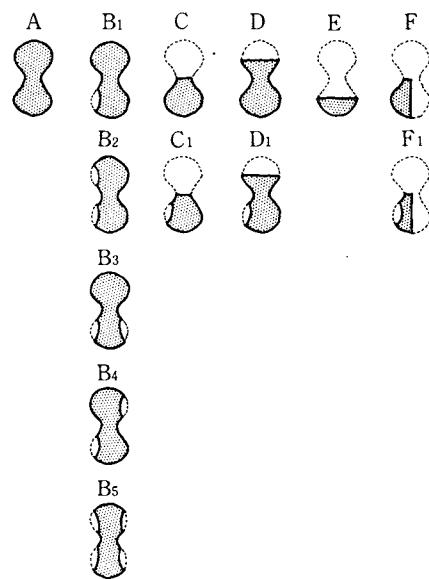
2) 磨製石斧

次に磨製石斧についてみてみよう。磨製石斧については形態的に不定形・乳棒状・定角式・局部磨製の4つに大別され、さらに遺存状態は第525図のように識別される。また、各廃棄領域内における遺存状態・形態の相関関係は遺存状態・形態相関関係表（磨製石斧）のようになる。

遺存状態の特徴は、不定形・乳棒状の石斧の場合 a あるいは a' に集中する傾向がある。また定角式については b' と c₁ に集中するが、d' 以外すべてのバラエティをもつ。このことは本遺跡の定角式の場合中形の製品が主体であることから、装着等の差による破損の違いはそれほど考慮しなくてもよいと思われる。ただし、比較的小形の一群（グー66～グー74、グー77～グー81）については a ないし a' に集中する傾向がみられる。さらに、これらの一群の中で刃部を残すものは中形のように斜めに欠損する例より、刃部にほとんど欠損がみられないか、刃部に対し垂直方向の衝撃による剝離痕を残す例が多い。このことは、比較的小形の一群と中形の一群の間には、機能差による破損の差が生じたと考えられる。つまり、前者は手斧等の刃部に対し垂直方向に力の加わる機能であり、後者はいわゆる通常の斧としての機能である。従って、定角式については形態内の細分も可能であるが、本稿ではあえて細分しないことにする。

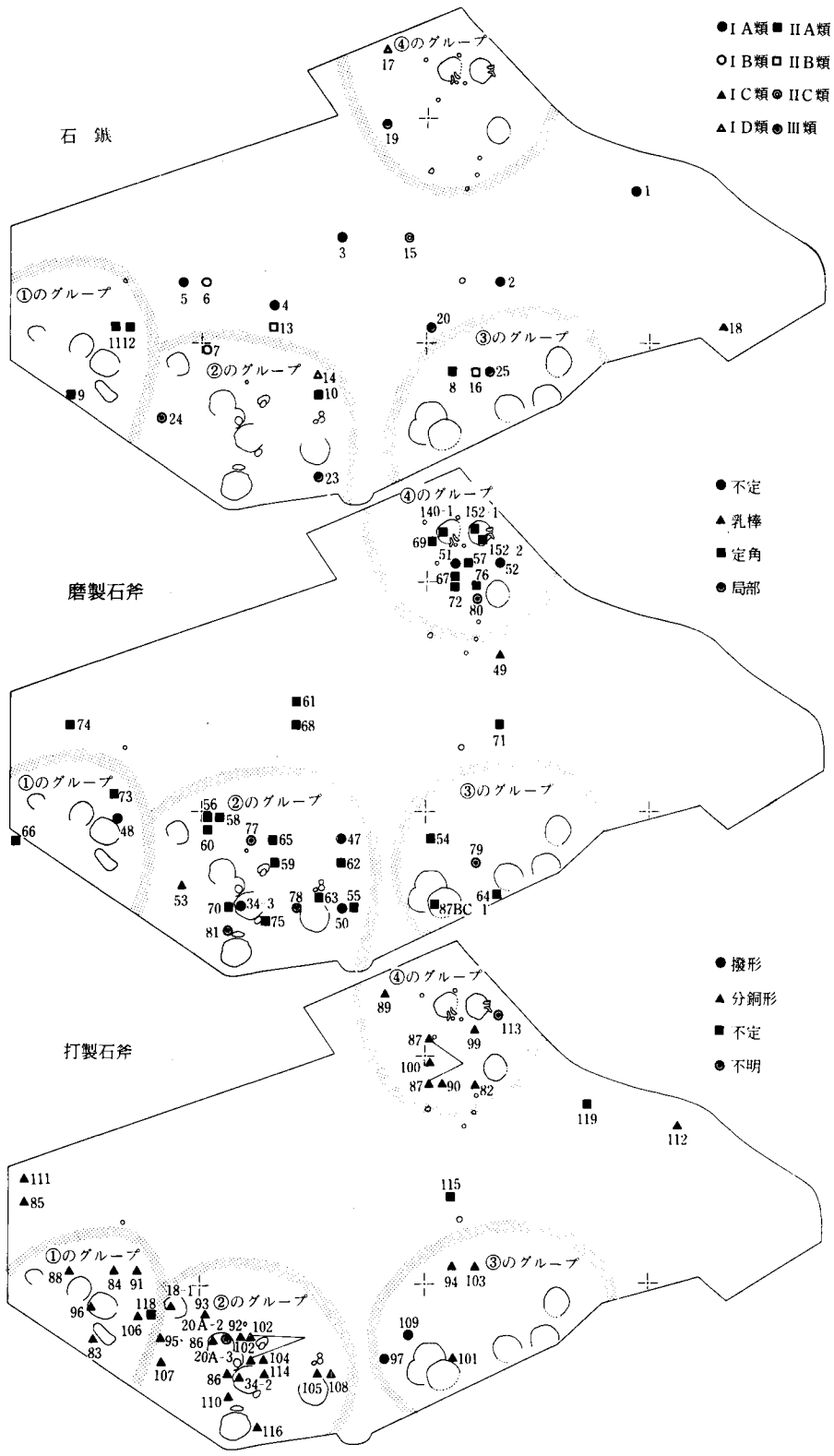


磨製石斧遺存状態模式図



打製石斧遺存状態模式図

第525図 磨製石斧及び打製石斧遺存状態模式図



第526図 器種別廃棄領域概念図

遺存状態・形態相関関係表（磨製石斧）

		遺 存 状 態									
		a	a'	b'	b ₁	c'	c ₁	d'	d ₁	e	
形	不 定		グ-48								① の グ ル ー プ
	乳 棒										
	定 角		グ-73				グ-66				
	局 部										
	不 定	グ-50	34-3				グ-47				② の グ ル ー プ
	乳 棒								グ-53		
	定 角			グ-55 グ-60 グ-70	グ-62	グ-58	グ-56 グ-59 グ-63 グ-65			グ-75	
	局 部	グ-77	グ-81			グ-78					
態	不 定										③ の グ ル ー プ
	乳 棒										
	定 角		87BC-1	グ-54			グ-64				
	局 部		グ-79								
	不 定		グ-51							グ-52	④ の グ ル ー プ
	乳 棒										
	定 角	152-1		グ-67 グ-72 152-2	140-1	グ-76	グ-69		グ-57		
	局 部		グ-80								
外	不 定										グ ル ー プ 外
	乳 棒						グ-49				
	定 角		グ-71	グ-68			グ-61		グ-74		
	局 部										

さて、各廃棄領域内における遺存状態・形態を簡単にまとめてみると次のようになる。(第526図)

①のグループ () は定角式。以下同じ

不定 1点 a' 2点 (1)

定角 2点 c₁ 1点 (1)

出土率 1点/軒 (註2)

②のグループ

不定 3点 a 2点 (0)

乳棒 1点 a' 2点 (0)

定角 10点 b' 3点 (3)

局部 3点 b₁ 1点 (1)

c' 2点 (1)

c₁ 5点 (4)

e 2点 (1)

出土率 2.7点/軒

③のグループ

定角 3点 a' 2点 (1)

局部 1点 b' 1点 (1)

c₁ 1点 (1)

出土率 0.6点/軒

④のグループ

不定 2点 a 1点 (1)

定角 8点 a' 2点 (0)

局部 1点 b' 3点 (3)

b₁ 1点 (1)

c' 1点 (1)

c₁ 1点 (1)

d₁ 1点 (1)

e 1点 (0)

出土率 3.7点/軒

グループ外

乳棒	1点	a'	1点	(1)
定角	4点	b'	1点	(1)
		c ₁	1点	(1)
		d'	1点	(0)
		d ₁	1点	(1)

これからは、次のような傾向がうかがわれよう。②と④のグループ間に形態的な組成・遺存状態に共通性がみられること。また、①と③のグループ間では、形態組成では差異をもつが、遺存状態では共通性をもっている。特にa'についてみると、本来aあるいはa'は乳棒状ないし、不定形なものが主体であり、②と④のグループにおいてもa'は定角式の場合1点もみられないにもかかわらず、①と③のグループでは、出土率も低いにもかかわらずそれぞれ1点ずつみられるのである。さらに②・④と①・③の間には出土率において顕著な差がみられる。また、グループ内とグループ外を比較してみると、グループ外には1点も完形ないしは完形にちかいa・a'がみられないかわりに、頭部に関する遺存状態を示すd'・d₁については④を除き逆のことがいえる。

さて、これらのことはどのようなことを意味するのだろうか。①と③のグループの磨製石斧の出土率の低さと②と④のグループにおける出土率の高さは、前者から後者に持ち込まれ、その後廃棄されたことによるものと考えられないだろうか。また、①と③のグループの絶対的な数量の少なさは問題であるが、基本的な形態組成・遺存状態としては①と③は②と④のいくつかの要素の欠落したものとして捉えることは可能ではなかろうか。この場合、グループ内の共通性に比較してグループ外の特異性は興味深いものである。少なくとも石鏃の場合と同様、磨製石斧についても各グループ間・グループ内外間に共通性と差異性はみられるようである。

3) 打製石斧

そこで、最後に打製石斧についてみてみよう。形態的には分銅形・撥形・不定形・不明の4つに大別され、これも遺存状態(註3)は第525図のように識別される。また、各廃棄領域内における遺存状態・形態の相関関係は遺存状態・形態相関関係表(打製石斧)のようになる。まず、遺存状態をみると磨製石斧に比べ完形品の占める割合が比較的高いことがいえる。また、前述したが、グー103は側縁部破損後、再度中央部で破損していること(註4)、さらに破損品の中に占める側縁部破損品ないしそれと同等の破損のあり方を示す製品の割合の高さは、側縁

遺存状態・形態相関関係表（打製石斧）

		遺 存 状 態														
		A	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	C	C ₁	D	D ₁	E	F	F ₁		
形	撥形															① の グ ル ー プ
	分銅形	(グ-83) グ-96		(グ-84) (グ-91)			(グ-88)	グ-106								
	不定	グ-118														
	不明															
形	撥形															② の グ ル ー プ
	分銅形	グ-86 グ-92 (18-1) (20A-2)	(グ-93) グ-116			34-2		グ-104 グ-107 (グ-108) グ-110	グ-114	グ-102	(グ-95)		(グ-105)			
	不定															
	不明											20A-3				
態	撥形	グ-97								グ-109						③ の グ ル ー プ
	分銅形						(グ-94)	(グ-101)						(グ-103)		
	不定															
	不明															
態	撥形															④ の グ ル ー プ
	分銅形	グ-82 (グ-87) (グ-89)	(グ-90)					(グ-99) (グ-100)								
	不定															
	不明											(グ-113)				
態	撥形															グ ル ー プ 外
	分銅形							グ-111		(グ-85) (グ-112)						
	不定	グ-119		グ-115												
	不明															

不定（不定・礫器・直刃式），（ ）は磨耗痕のみられるもの

部破損のみの場合ひきつづき使用していることを想定させよう。つまり、打製石斧の場合、完全に使用不可能な遺存状態を示すもの以外はひきつづき使用している可能性があり、このことは、石鏃や磨製石斧と異なり各グループ間を頻繁に移動する可能性もある(註5)。つまり、分布状態としてはあるまとまりをもつというよりもある程度拡散した状態が想定される。その意味で、①と②のグループ間に明瞭な区分がしがたいことは特筆すべき点かもしれない。逆にいえば①と②のグループについては多少恣意的な区分を行っていることは避けがたい。

さて、各廃棄領域内における遺存状態・形態を簡単にまとめると次のようになる。(第526図)

①のグループ () は分銅形。以下同じ

分銅	6点	A	3点	(2)
不定	1点	B ₂	1点	(1)
		B ₃	1点	(1)
		B ₅	1点	(1)
		C	1点	(1)

出土率 2.3点/軒

②のグループ

分銅	15点	A	4点	(4)
不明	1点	B ₁	2点	(2)
		B ₄	1点	(1)
		C	4点	(4)
		C ₁	1点	(1)
		D	1点	(1)
		D ₁	1点	(1)
		E	1点	(0)
		F	1点	(1)

出土率 2.7点/軒

③のグループ

分銅	3点	A	1点	(0)
撥形	2点	B ₅	1点	(1)
		C	1点	(1)
		D	1点	(0)

F₁ 1点 (1)

出土率 0.7点/軒

④のグループ

分銅 6点 A 3点 (3)

不明 1点 B₁ 1点 (1)

C 2点 (2)

E 1点 (0)

出土率 2.3点/軒

グループ外

分銅 3点 A 1点 (0)

不定 2点 B₂ 1点 (0)

C 1点 (1)

D 2点 (2)

このことから、次のようなことが看取される。撥形は③のグループにのみみられ、明らかに他のグループとは性格を異にする。さらに③のグループは出土率も他のグループに比べ低い数値を示している。③の特異性が顕著であるといえよう。次に、遺存状態別の分布をみると、刃部のみという特異な遺存状態を示すEが②と④のグループにのみみられる。さらにB₁が②と④のグループに、B₂が①と③のグループにのみみられる。また、①のグループにはC₁~F₁の遺存状態を示す打製石斧がみられない。

さて、このことから少なくとも②と④のグループ間のより強い共通性を見出すことは可能である。さらに①と③のグループにも少なからず共通性がみられるとともにそれぞれ独自性も有している。また、打製石斧の場合、磨製石斧とは異なり、どのグループも遺存状態は比較的バラエティに富んでおり、それぞれがほぼ独立の領域を形成しているように思われる。

さて、最後に磨製石斧と打製石斧の各廃棄領域内における出土率（註2に同じ）と各廃棄領域内における全出土量における完形品の占める割合をみることで各グループ間の共通性と差異性を概観してみることにしよう。

	磨製石斧	打製石斧
①のグループ	1点/軒	2.3点/軒
②のグループ	2.7点/軒	2.7点/軒
③のグループ	0.6点/軒	0.7点/軒

④のグループ 3.7点/軒 2.3点/軒

これが出土率であるが、必ずしも住居跡の数が多いから廃棄された遺物の出土量も多いとはいえないことが分る。つまり、各廃棄領域には各グループ間に強い共通性を示す一群がある一方で、それぞれが独自の領域を形成している可能性もうかがえるのである。次に完形品の占める割合をみてみよう。

	磨製石斧	打製石斧
①のグループ	0% (67%)	43%
②のグループ	13% (25%)	25%
③のグループ	0% (50%)	20%
④のグループ	9% (27%)	43%
グループ外	0% (0%)	25%

磨製石斧の()はa'を含めたもの。

この数値からも各廃棄領域間の共通性と差異性はうかがわれよう。

さて、以上みてきたように各廃棄領域間に存在するこの共通性と差異性をどのように考えたらよいのであろうか。大きくは石鏃の分布で考えたように2つに分けられよう。1つはそれぞれの住居跡グループに居住する集団が時間差をもって移動したと考えること。つまり、1型式内における集団のより大幅な移動の結果によると考えること。2つは各廃棄領域内において世代の交代が行われたと考えることである。つまり、1型式内においてより小規模な移動(あるいは移築)が行われたと考えることである。そして、前者においては、それぞれの廃棄領域に含まれる住居跡グループはほぼ同時存在と考えることで各グループ間の差異は、より時間差によるものと説明されるのに対し、後者では時間差以上に各廃棄領域内の集団の行動パターンの差によって差異を説明することになる。この点の判断については石器のみならず土器のあり方の検討も必要としており、本稿では廃棄領域の認定のみにとどめたいと思う。

以上、非常に大雑把ではあるが、石器群の分布をみてきたが、今後縄文時代の石器群の研究についても分布論的な視点が必要になるように思われる。そして大量に出土するグリッド一括の石器群・土器群に対する発掘方法・研究法の検討も避けることのできない問題ではなからうか。たとえグリッド一括であっても資料として生かす方法を発掘・整理の両面において模索してゆかなければならない。

註

註1 ただし、後者については破損後、再利用の為別の場所へ移動する可能性があり、現に磨石の場合北と南で接合関係がみられる。さらに打製石斧においても側縁のみの破損品の場合ひきつづき使用して

いる可能性が高い。従って単純に形態別・遺存状態別の分布上の差異のみでは判断は下すことはできないが、逆に移動しているとすればそれなりに各廃棄領域間に差が生じる可能性が高まる。また、前者についてもその廃棄領域の区分は多分に恣意的な面もあるが、逆に有意な共通性や差異性を有する区分が成立した場合、その区分の妥当性が検証されたことになる。ただし、旧石器時代のブロックの設定と同様あるいはそれ以上の区分は困難であり、本稿では基本的に3器種の分布傾向から廃棄領域を設定している。

註2 この出土率は各廃棄領域内の磨製石斧の出土量を各廃棄領域内の住居跡数で割ったものである。

註3 打製石斧の場合、接合したものも多いため、遺存状態は接合により復元されたものを基準にしている。この基準によると、接合により完形に復元された場合、Cの状態で破損し廃棄されたもの(同一個体が上下2つに破損したもの)もAとして認識されるが、1遺跡内で結果的にAという状態で発見されるものとCという状態で発見されるものとは何らかの差があるはずである。つまり、1遺跡内において接合しうるものとされざるものとは差があると考えている為、あえて接合の結果Aという状態になったものも完形としてのAとして識別した。

註4 ただし、この製品の場合1回の衝撃により側縁・中央部の順で破損した可能性もある。使用による磨耗痕が側縁の破損面にみられればよいのだが、確認できなかった。

註5 ただし、磨製石斧についても破損品の再利用あるいは再加工の痕跡のみられるものがある。たとえば前者の例としてグー70があげられる。また、後者については擦切り溝のみられるグー54が相当する。なお、擦切り技法は従来縄文時代早期～前期にかけて北海道～東北地方に盛行するといわれているが、いわゆる擦切り技法とは別に破損品の再加工(小形の定角式石斧の製作等)に伴う折断技法の1種として擦切りの技術が各地域に存在していた可能性はある。

3. 石器(石皿、磨石、凹石、石棒・石剣、砥石、礫)について

1) 石 皿

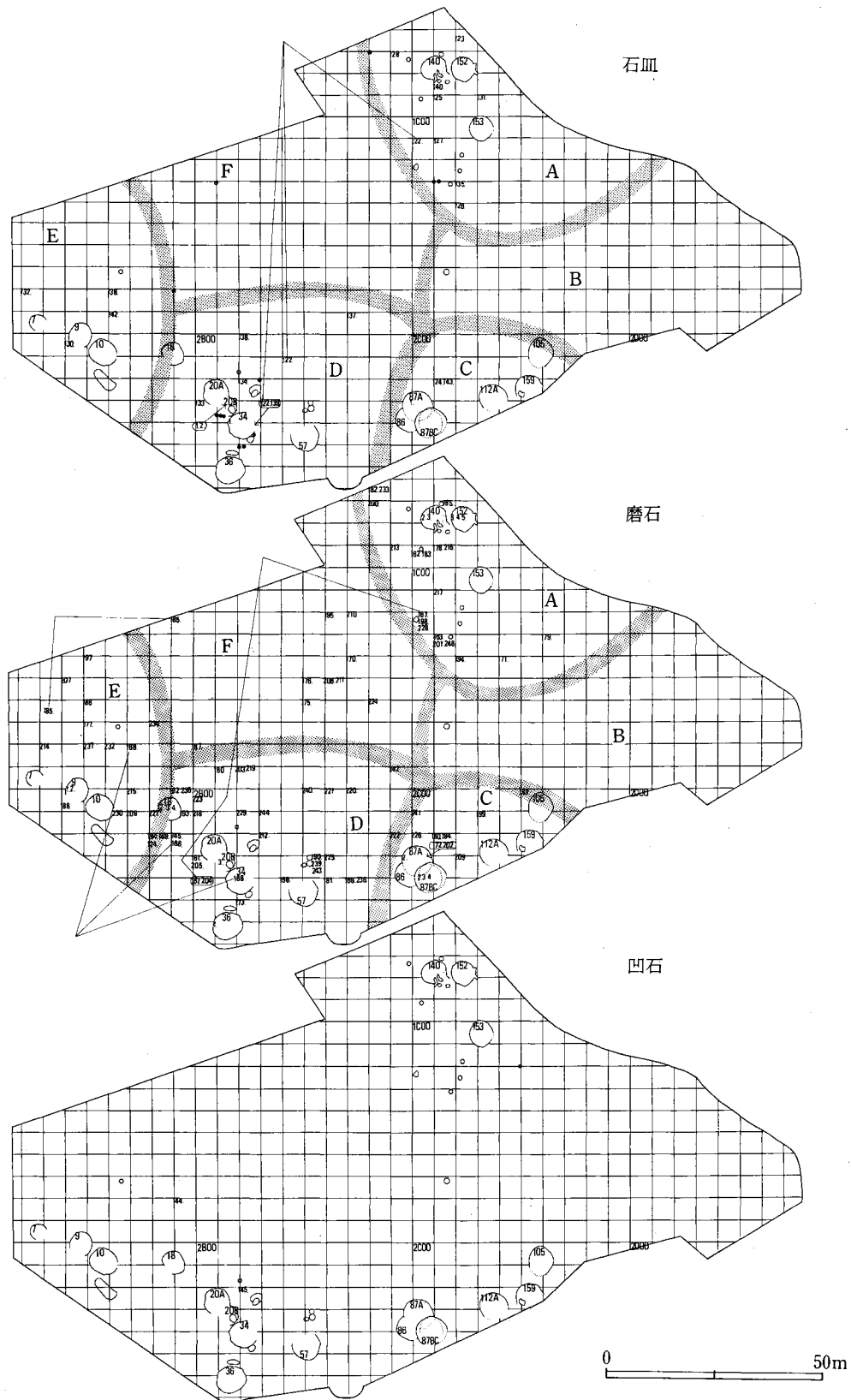
石皿の形状を判断できるものは26点出土している。これらは型態的に下記のように分類できる。

A類(円形もしくは楕円形) (A I類(整形されたもの)
A II類(自然の形を利用し、平坦で磨面の発達していないもの))

B類(方形)

B I類(整形されたもの)

A類は15点出土し、A I類10点(20B-1、グー122~129、グー141)、A II類5点(34-1、グー130~133)である。A I類は磨面上面の稜がやや弱く、底面の稜は非常に弱く、安定感が若干欠ける様である。A II類は磨面・底面共に平坦であり、側面の稜は殆ど無く、グー130の上面に



第527図 石皿・磨石・凹石分布状況図

少し認められる程度である。B I 類は11点(20B-2、87A-1、グ-134~140、グ-142、グ-143)出土している。磨面上面に明瞭な稜が認められ、特にグ-135、グ-143は稜を明確に作り出すための意識的な溝が認められる。A・B類も利用された磨面は楕円形を呈する様であり、B I 類が方形に意識的に形状を整えられてはいるが、利用面が楕円形の部分であったことが、グ-143からも窺える。また、これらの石皿には深い凹があり、磨石に認められる浅い凹とは明らかに違うことが指摘できる。そして、これらの凹が側縁と、底面に集中してみられることは、磨る・潰す・割るの用途がほぼ同じ調理工程の中で行われていることは、従来指摘されているとおりである。石皿の石質も安山岩であり、他遺跡のものと同様である。

分布については、住居跡配置状況と非常に良く似ていることが指摘できることから、北東部をA、東部をB、南東部をC、南部をD、南西部をE、中央部をFとして各地点に分類した。その結果、A I・A II・B I 類の分布が次の様に指摘できる。なお、グ-122は破片の接合であるため、3点として計算してある。

地点	形態	A I	A II	B
A		グ-122、グ-123、グ-125、グ-126、グ-127、グ-128、グ-141	グ-131	グ-135、グ-140
B				
C		グ-124		87A 1、グ-143
D		20B-1、グ-122、グ-122	34-1、グ-133	20B-2、グ-134、グ-136、グ-137、グ-139
E			グ-130、グ-132	グ-138、グ-142
F				

※表採A I 類グ-129

各遺構・各地点からの出土状態は次のとおりである。

遺構内より出土したものは、住居跡20B-1のA I 類と20B-2のB I 類が共伴して出土している。住居跡34-1のA II 類と87A-1は他の形態の石皿とは共伴していない。A地点にA I 類は7点出土し、グ-122はD地点出土の他の2点と接合している。A II 類1点、B I 類2点とA I 類が圧倒的優位を占める地点である。B地点は出土していない。C地点は3点と少なく、A I 類1点、B I 類2点であるが、B I 類の87A-1は住居跡内よりの出土である。D地点は10点と多くA I 類3点、A II 類2点、B I 類5点と、B I 類が優位を占める地点である。E地点は4点出土し、A II 類2点、B I 類2点である。

各形態の出土の特徴としては、A I 類がA地点より7点、C地点より1点、D地点より3点となり、A地点に多くみられる。A II 類はA地点より1点、D地点より2点、E地点より2点出土しているが多くはない。B I 類はA地点より2点、C地点より2点、D地点より5点、E地点より2点出土し、D地点より多く出土していることが指摘できる。

各遺物において、接合したものは、グー122である。これは3点からなり、1 C10、2 B14、2 B42の中で、2 B14は破損した後に敲石として再利用されていた。この石皿の凹は、石皿として機能していた段階のものであることが配列状態から窺われる。これらの石皿の破片の中でも比較的大きなものは、グー123、グー143でA地点からの出土であった。

以上、各地点・型態別に出土状態を述べてきたが、石皿の型態から詳細な時期的区分を指摘するのは非常に困難である。ここでは住居跡の重複関係及び、土器との共伴関係から石皿の型態変化を述べたい。伊篠白幡遺跡A地点は前述した様に縄文時代後期堀之内I式の単純遺跡として把握できるものであるが、若干の他時期の土器が見られる。特に、後期堀之内II式、加曾利B式、安行式が石皿を多く出土する時期であり、この時期の石皿の混入も十分想定せざるを得ないと思われる。しかし、これらの石皿が住居跡の配置状況と密接な分布を占めていることは、疑いの余地が殆ど無いと思われる。また、遺構内、特に住居跡内より、A I類が20B-1、B I類が20B-2、87A-1として出土し、第20B号住居跡からは共伴して出土していることから、堀之内I期に両型態が同時に存在していたことが指摘できる。ここでは、住居跡の重複関係と土器の変遷から堀之内I期が更に3期に分類されることが指摘されていることから、この分類を基本として、石皿の変遷を述べてみたい。各時期の住居跡は各地点に下記の様に配置されている。

地点 \ 形態	1 期	2 期	3 期
A		152住、153住	140住
B			
C	105住、112A住	86住、87A住、159住	87B住、87C住
D	36住	34住	18住、20A住、20B住、57住
E	7住、9住、10住		
F			

※A地点に埋甕出土地点を多く含む。

各地点の石皿型態と住居跡の時期を比較検討すれば次のとおりである。A地点においては、住居跡は2・3期であるが、石皿はA I類が圧倒的に多い。A I類の石皿は住居跡より若干離れている様である。B地点は住居跡、石皿も出土しておらず、住居跡と石皿の関係を指摘できる空間領域でもある。C地点は住居跡の検出軒数が多いにもかかわらず、石皿の出土点数は少ない。A I類が1点、B I類が2点で、これらは、2期の86・87A住と3期の87B・C住に近接して出土している。D地点は1期が1軒、2期が1軒、3期が4軒と比較的新しい時期の住居跡が多い。ここからは、A I類3点、A II類2点、B I類5点となり、2・3期とB I類の密接な関係が指摘できよう。E地点では1期の住居跡が3軒検出され、A II類2点、B I類2

点が出土しているが、B I類については、3期の18住が近接しており、注意をする必要がある。

この様に石皿の型態、各地点の出土状態、各地点検出の住居跡の時期、そして遺構内出土の石皿の型態変化を有機的な関連で検討すれば、次のことが言える。堀之内I期の1期の住居跡周辺には、比較的石皿の出土点数が少なくA I類、A II類が若干みられる程度である。2期には34住にA II類が、87A住にはB I類が出土し、A I類が多く、B I類が若干みられた。3期には、20B住にA I類、B I類が共伴し、B I類がA・C・D地点に多くみられた。このことから堀之内I期の2期から3期にかけて、石皿のA類からB I類へと比重の変化が指摘されよう。また、1期の住居跡内及び周辺からの石皿出土点数が少ないことは、石皿の使用期間として相当の年数が考えられ、2期になり破損が多くなり、除々にB I類へと移り、3期にはB I類の比重が大きかったことが言えるのではなかろうか。また、B・F地点から住居跡が検出されておらず、未調査地の完掘をまたねばならないが、B地点の空間は尾根状になりながら水田面へと続くものであり、意識的に空間を設けたものと推定されるかもしれない。F地点は所謂広場的な空間として把握できるものであるが、この地点から形状不明の1点が出土しているだけであった。日常生活空間では無かったものであろう。A地点は柄鏡形住居と埋甕が検出されているが、石皿はやや多く出土しており、特に他の住居周辺とは大差が無かったことが指摘される。台地縁辺に古い段階の住居が他地点では検出されていることから、この地点の北東側未調査部分にも検出される可能性も若干あるが、やはり他の住居周辺と同様の出土状況であり、石皿の出土状況からは柄鏡形住居も他の住居と同様、日常的調理用具である石皿を必要としたものであったと推定される。

2) 磨石

ここで扱う磨石は従来から言われている磨石、敲石、凹石を一括して検討することにした。この磨石、敲石、凹石は植物採集活動用具の間接的生産用具に分類されているが(野口 1985)多面的な機能を有していることが度々指摘されており、伊篠白幡遺跡A地点出土遺物を通して形態的な分類・分布の相違・接合関係についての検討を行い、この問題についての機能面について述べてみたい。

観察した結果により、石皿、台石、砥石、円錐状のくぼみをもつ凹石を除いた磨耗面をもつものに限定した。

- I類 a種 石鱗状の楕円形を呈し表裏全面が磨耗、上下側面に敲打痕あり、表裏面(人工調整)に浅いくぼみがある。
- b種 石鱗状の長楕円形を呈し表裏全面が磨耗、上下側面に敲打痕があるが特に上下端が顕著、表裏面に浅いくぼみがある。
- c種 石鱗状の不整楕円及び不整形を呈し表裏全面磨耗、上下側面に敲打痕

あり、表裏側面に浅いくぼみがある。

- II類 a種 不整楕円形を呈し表裏面が磨耗、上下側面の一部に敲打痕あり、表裏面
(転石利用) に浅いくぼみがある。
- b種 不整楕円形を呈し表裏面が磨耗、上下側面の一部に敲打痕がある。
- c種 不整長楕円形を呈し表裏面が一部磨耗、上下側面の一部に敲打痕あり特に上下端が顕著である。

本遺跡から出土した磨石の形態は2類6種に分類が可能であった。ただ、I類a種において、やや大形のもの、くぼみがやや深いものも若干あるが一応にここに含めた。この分類に属するのは下記の磨石である。

I類a種	9-1・2、87B、C-2・3、152-4、グ-160~171、グ-175~177、グ-194・195、*グ-167は2点接合、グ-168は3点接合	計25個
I類b種	グ-182~189、*グ-185は2点接合	計9個
I類c種	グ-172~174、	計3個
II類a種	152-3、グ-196~204、	計10個
II類b種	18-2・3、152-5、35-1、グ-205~220、	計20個
II類c種	35-1、36-1、87A-2、グ-221~246、	計29個
破片	18-4、20B-3、87B・C-4、グ-178~181、グ-190~193、 *これらはI類a種の可能性有り	計11個

また、I類a種の9-2、グ-160、161、163、165、166、I類b種のグ-187、そして、破片グ-180の側面に一部磨耗が顕著に認められ、側面利用が明瞭に観察できた。

これらの遺跡内における分布について検討したい。各住居跡は前述した様に堀之内I期が更に3時期に細別されている。1期にはI類a種の9-1・2が出土している。2期にはI類a種152-4、II類a種152-3、II類b種18-2・3、152-5、II類c種36-1、そして破片でI類a種と推定される18-4、20B-3、87B・C-4が出土している。3期にはI類a種87B・C-2・3、II類c種87A-2が出土している。住居跡内からI類b・c種を除いて他の種は出土していることから、これらの磨石は堀之内I期に属することは明らかであろう。

では、これらの各種の分布について述べてみたい。I類a種は1期の第9号住居跡、2期の第152号住居跡、3期の第87B・C号住居跡の各時期の住居跡内より出土している。また、遺跡内のB地点を除いた各地点より出土しているが、遺跡中央のF地点から4点出土しているのが特徴として指摘できる。この他にI類a種の破片と推定される分布をも重ね合せると同様なことが指摘でき、I類a種は各時期全般にわたって分布することが指摘可能である。I類b種はA・C~E地点から出土しており、特徴的な分布は示していない。I類c種はC・D地点から出土しているが3個と少ない。II類a種は2期の第152号住居跡から出土し、A・C~E地点からも

出土しているが、特徴的な分布はない。II類b種は2期の第152号住居跡と3期の第18号住居跡から出土し、A・C～F地点まで広く分布がみられ、B地点からの出土が無かったのはI類a種と同様であった。II類c種は1期の第36号住居跡と2期の第87A号住居跡から出土し、B地点を除いて全ての地点にあるがF地点では1点のみ出土している。そして、分布の特徴としては全体的に遺跡の若干中央内側に分布することが指摘できるものと思われる。この様に各種の磨石は、住居跡とその周辺から出土しており、特に時期的、形態的な分布の特徴を明確に指摘できなかつた。このことは、各種の磨石が密接な関係にあることを裏づけているものと思われる。

接合関係にあるのはグー167、グー168、グー185の3点である。グー167は1 C20と2 B31から出土し、その距離は約70mある。A（1 C-20）とB（2 B-31）は、破損した時点でAが廃棄されたものである。Bは破損の後に再利用され廃棄されている。破損前の形態はI類a種と推定され、表裏面の中央に浅いくぼみがあり、中央部から破損したことがAの状態から判明した。Bは破損の後に再利用され、破損部は敲打したことにより若干磨耗してはいるが、Aとの接合については支障はなかつた。また、表裏面が破損時より磨耗が約3mm程進んでおり、破損時にAに見られた表裏面の浅いくぼみは磨耗によって既に認められず、新たに破損後のBの表裏面中央に浅いくぼみが認められた。グー168は第34号住居跡、1 A87、2 A29から出土し、その距離は約40mであった。この磨石は少なくとも5点以上に破損しており、破損した時点で周辺に廃棄したものであろう。グー185は1 A29と1 A63から出土しており、その距離は約40mである。この磨石は最初の破損時に小破片の方が廃棄され、大形片である本破片が再利用されたものであろう。破損の後に表裏面の中央に浅いくぼみが再度つくられ、破損部は敲打面として利用されたものである。その後、再度破損し、接合時に破損部を詳細に観察したところ、破損部に再利用が認められなかつたことから、この時点で廃棄されたものであろう。

以上、形態分類・分布の相違・接合関係について述べてきたが、ここで機能面について検討したい。形態分類ではI類の人工調整・II類の転石利用をもって石材から大きく2分類した。これらに共通することは、前提条件として「磨る」ための磨耗面をもっていることであるが、他に敲打面と浅いくぼみをもっていることである。敲打面の多くは、上・下端と転石の場合突端部にみられ、I類でも若干側面にも見られ、明らかに「潰す・叩く」に利用した面であることは疑いの余地は無い。浅いくぼみはI類とII類a種に共通して表裏面に見られる。この形態については、従来から各説がある。

磨石説

敲打石説（小林 1959）（樋口 1959）（吉田 1965）

凹石説（永峯 1962）（鷹野 1979）

伊篠白幡遺跡A地点出土の磨石I類は全て、石鱗状の楕円形を呈していることから、磨石と

して利用する場合、側面が指がかりの役目を果たすことが指摘できる。浅いくぼみについて詳細に観察した所、視覚的にくぼみと判断できたものと、表裏面の磨耗面に直に指で触れて初めて指がかり面を確認できたものがあった。この様にI類の完形品の全てを観察したところ、I類b種のグー182に一面のみにあっただけで、他の全ての表裏面中央に浅いくぼみの指がかりを確認できた。グー182は長楕円形の筒状を呈していることから、両面を指で支える必要がなくとも利用が可能と考えられ、特に他には例を見ない一面に4ヶ所の浅いくぼみがあった。この4ヶ所はグー182を握り持つ場合、人指指から小指までしっかりとした指がかりが認められた。これらの浅いくぼみを有する磨石は拇指と中指の指がかりを基本として、上下側面を利用した「潰す・叩く」ための機能を有するものであることが、実際に握ったことにより明確に指摘することが可能である。側面利用については、I類a種の9-2, グー160, 161, 163, 165, 166, I類b種のグー187, 破片のグー180の側面の一部磨耗が顕著であったことから指摘できる。同時に、この側面の一部磨耗が顕著であったことは、所謂使用者の「クセ」として残されたものであり、磨石の使用者が一個人に限定されていたことを物語るものであろう。指がかりの浅いくぼみは、表裏面が「磨る」ことにより磨耗が進み消えかかった場合、再度指がかりが作られることを、グー167が証明している。II類a種については、数量的にも少なく、転石利用の磨石の中では特殊的な例となる。これらもI類と同様に表裏に浅いくぼみの指がかりをもち、形状もI類と非常に良く類似していることから、I類と同様の機能が考えられる。

磨石は基本的絶対条件として「磨る」痕跡である磨耗面をもっていることであり、付随的条件として「潰す・叩く」機能を備えていたことが指摘できた。本遺跡では、敲石だけの機能をもっているものではなく、全て磨耗面があることから、磨石を基本とするものであった。磨石と石皿の関係であるが、石皿の時期的形態変化と、磨石の形態変化との相互関連は、本遺跡では明確にすることができなかった。しかし、石皿破片も一部敲打面をもつものもあり、破損の後に再利用されていたことが指摘できた。そして、石皿の磨耗面と磨石の磨耗面の面積が最大に接するのは、I類の人工調整された磨石であり、表裏面の凸面状は、石皿の凹面状と非常に良く一致することから、セットとして把握する場合はI類が妥当と考えられる。そして磨石は片手でもって使用することが改めて指摘されるが、ただグー181については両手使用が十分に考えられる。

3) 凹石

ここで扱う凹石は、磨石に一般的に見られる浅い凹では無く、深く抉られたものを凹石とした。ただし、石皿に深く凹を抉ったものはここでは凹石として取り扱っていない。伊篠白幡遺跡A地点からは、単なる凹石はグー144のみであり、20A-1とグー145は一部の面が磨耗により凹面状を呈している。この3点に共通する点は、形状が六面体で安定が非常に良く、重量が

最も重い20A-1が4,720gあり、石質が石皿特有の安山岩以外であることである。

この3点の分布は、前述の様に堀之内I期の3期の20A住から1点、他はD地点からである。グー144は3期の18住の北側、グー145は20A住の東側からの出土である。このことは偶然でもあろうか、全て3期の住居跡およびその周辺であり、この集落が廃棄された段階で、十分使用に耐える凹石をも同時に廃棄したことが想定される。なお、A地点でも小破片が出土している。

4) 石棒・石剣

石棒・石剣は実測できなかった小片を含めて6点(グー147~151)出土している。グー147・148は断面形がやや楕円形を呈しており、石棒とするよりも石剣に近いものである。グー149~151は断面形が円形を呈し、グー151は頭部が丁寧に作られておりこれらは石棒と考えられる。他に1点出土しているが、断面形は円形を呈するものと推定される。

これらの分布としては、他の石器同様に住居跡との配置と良く一致することである。A地点の柄鏡形住居跡と埋甕の領域との分布は一致せず、石棒・石剣については特に分布についての特徴的ものは無い。グー152・153は同一個体であり、特に大形のものであった。

5) 砥石

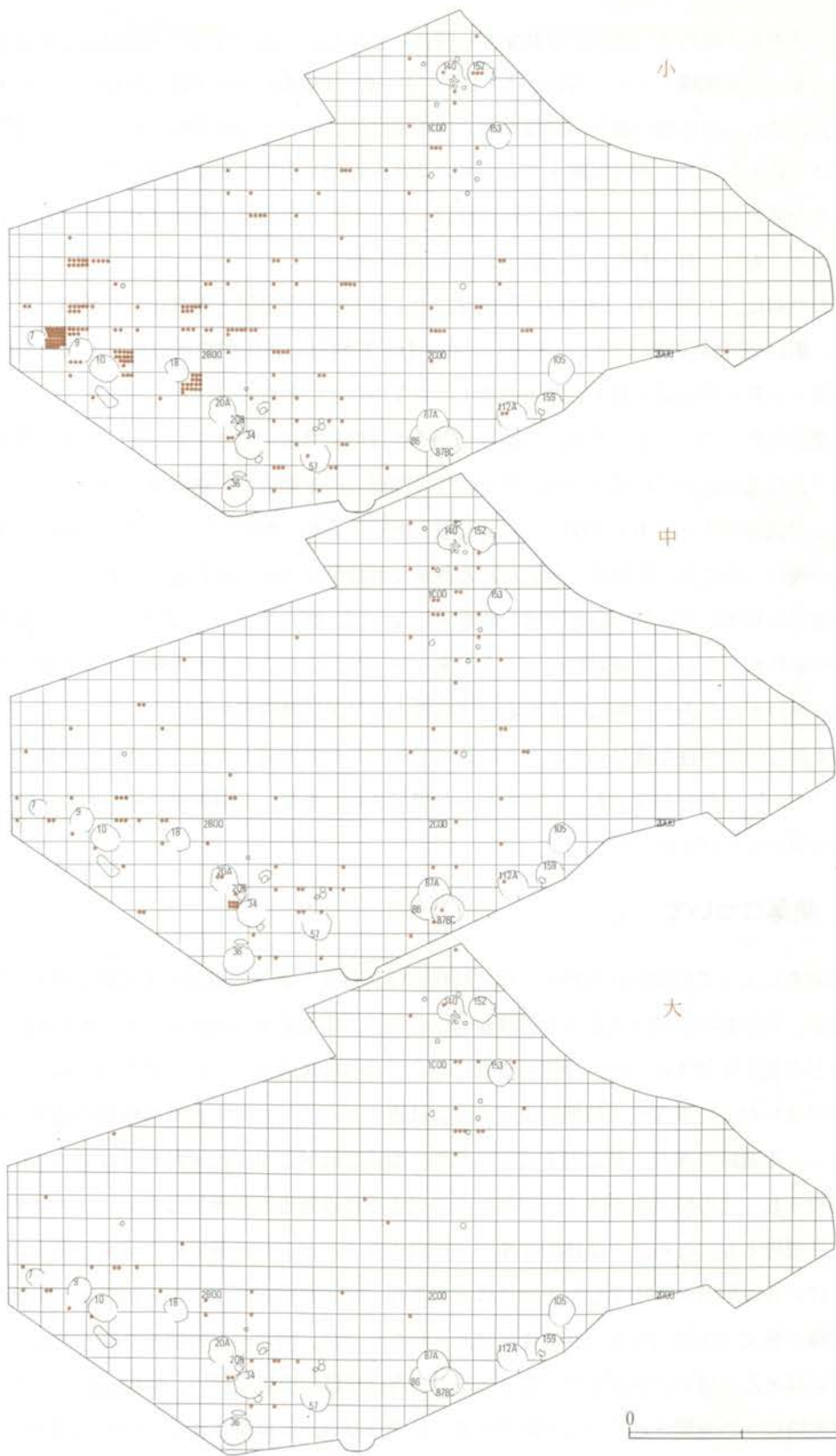
砥石は4点(グー156~159)出土している。グー156は表裏に1条縦に、グー157は表に3条、裏に2条縦に、グー158は表に3条縦に、グー159は表に2条、裏に2条縦にそれぞれ溝が認められる。この溝は比較的浅くて広く、U字形を呈する。グー156・159には敲打痕も認められる。これらの石質は軟質砂岩であることが特徴的である。

分布としては、住居跡の配置と良く似ていることが指摘できる。グー156は3点の破片が接合したものであるが、位置的にはほぼ10m範囲内のものが接合している。

6) 礫

礫はここにおいて、3種類に分類した。小礫は約2cm前後以下のもの、大礫は拳大(約8cm)以上とし、中礫はその中間のものとした。礫の形の種類としては、転石が殆どであり、石質の種類は多く、特にどの種類が多かったとは言えない。

小礫の分布は遺跡全体にみられ、特徴としては古墳~歴史時代の住居跡からの出土が目立った。この特徴を検討したところ、多く出土しているのは特定の住居跡であり、調査時の遺物の取り上げ方法による違いであることが判明した。このことから、小礫に関しては、特に調査当初から問題意識をもって取り上げることにより、初めて小礫の性格が把握できるものと推定され、今回は小礫について明確な性格を把握できなかったが、ローム中から出土する小礫に非常に良く類似している。



第528図 礫分布状況図

中礫の分布を古墳時代以降の住居跡配置と照合してみたが、縄文時代住居跡配置と非常に良く類似することが指摘できた。特に20A・B、87B・C、112Aの各住居跡内の覆土からも出土しており、これらの中礫は縄文時代後期堀之内I期に殆ど伴うものと判断した。また、遺物の取り上げ方法としては、各住居跡・グリッドの遺跡内の殆ど全ての石を採取してきており、分布に大きな変化は無い。この分布を詳細に検討したところ、住居跡の検出されたA・C～E地点の周辺とともに、B・F地点にも若干の出土が見られた。

大礫の分布は、中礫同様に縄文時代後期堀之内I期の住居跡配置と非常に良く類似している。そして、第120号住居跡覆土内より出土し、A・D・E地点の各住居跡周辺からも出土している。中礫との若干の相違はB・C地点の出土が少ないことである。

以上礫の分布について述べたが、小礫については性格を明確にできなかった。中・大礫は分布に若干の相違が認められるものの、縄文時代後期堀之内I期の住居跡配置と殆ど同じ分布を示すことが指摘できた。中・大礫の分布は石皿と磨石の分布と類似していることが指摘できる。これらの礫の一部には、使用痕と考えられる微妙な磨耗痕が認められるものもあり、全ての礫を顕微鏡等を利用して、使用痕を丁寧に観察するならば、磨石等として使用されたことを実証できる可能性もあるが、時間の制約もあり出来なかった。これらの中・大礫は元来下総台地の上層には無いものであり、堀之内I期の住居跡覆土及び住居跡周辺から出土していることから、堀之内I期に殆どが持ち運び込まれたのは確実である。その用途も前述した様に一部磨耗がみられることから、磨石の役目もしていたものと想定され、また、一部の礫に焼石がみられたが、これらは集中していなかった。

3. 集落について

発掘調査によって検出された19軒の縄文時代の住居跡は、すべて堀之内I式期に属すると考えられる。住居跡の時期を決定する直接資料としては、床面直上から出土した土器や炉の埋設土器などの検出が望まれるが、今回の調査においては各住居跡からこれらの直接資料となる土器の検出はいたって少なく、時期を決定するには覆土から出土した土器を積極的に活用せねばならない。本遺跡の場合、堀之内I式という単一型式ではあるが、住居跡間には明らかな時期差が認められ、この時期差をさらに明確なものとするには覆土から多量に出土した土器を住居跡の一括遺物としてとらえ、全体的な傾向を把握することがより重要ではないかと考えられる。

幸いにも各住居跡から出土した土器にはそれぞれ一定した傾向を伺うことが出来、住居跡ごとに文様や施文方法にかなりの共通性が認められた。逆に、明らかな時期差を伴う土器が混在する例はほとんど見い出されなかったことから、各住居跡の廃絶に伴い、使用されていた土器もほぼ同時に一括廃棄されている可能性が高いのではないかと推測される。しかし、第112号住居跡(以下第112号住と略記)からは約50個体もの土器を確認することができることから、すべ

てが住居廃絶に伴う一括廃棄であるとは言い切れない。後にも住居跡の凹地に土器が廃棄されていると考えられ、各住居跡に共通した廃棄のパターンを認めることは難しい。

19軒の住居跡は数時期に分けられる集落の累積と考えられるが、各住居跡から出土した土器を比較検討した結果では、土器の文様や施文方法に極端な変化や断絶を認めることができないことから、集落の休止期を伴わない、継続性の強い集落の累積ではないかと考えられる。集落の分析を行うにあたって、まずはじめに、住居跡の構造を分析して集落を構成する住居跡の種類を明らかにし、その上で集落の変遷をみていくことにしたい。住居跡の構造分析には時間軸は含めないことにする。

1) 住居跡の構造

集落を構成する住居跡群には、炉を伴わない住居跡や特別に出入口施設を設けたいわゆる柄鏡形住居などが含まれ、構造的に多様なあり方を示している。この構造上の違いは、竪穴に居住する成員の相違や集団における機能的な使い分け、あるいは住み分けなどのさまざまな要因によってあらわれたものと推測され、特に炉の有無は竪穴成員の相違を強く反映しているのではないかと考えられる。

以下に住居跡の分類を行うが、第140号住は小規模な円形住居から出入口施設を伴う柄鏡形住居に建て直されていることから、小円形住居を古第140号住と呼び、柄鏡形住居を新第140号住と呼んで、都合20軒として構造上の分類を行うことにする。20軒の住居跡は炉や出入口施設の有無、柱穴と考えられるピットの配置などから5種類に分けられる。

1型 円形プランで、炉を伴うが、壁柱穴のないもの。

第7号住のみである。住居規模は小さく、中央に浅い炉が位置する。炉に近接して深いピットが検出されており、柱穴と考えられる。

2型 円形プランで、炉を伴わず、壁柱穴のあるもの。

第36号住のみである。壁柱穴の径は小さく、間隔も疎であり、壁柱穴と呼び得るか疑問の残るところである。

3型 円形プランで、2型と同じく炉を伴わないが、壁柱穴のほかにプラン中央に柱穴のあるもの。

第57号住・第153号住の2軒である。2軒とも不規則な壁柱穴配置である。第153号住は中央に寄った位置に壁柱穴がめぐる。中央の柱穴は壁柱穴規模と極端な違いはない。

4型 円形プランで、炉を伴い、壁柱穴のほかにプラン中央に柱穴のあるもの。

第9号住・第10号住・第18号住・第20A号住、第20B号住・第34号住・第86号住・第87A号住・第87B号住・第87C号住・第105号住・第112号住・古第140号住・第159号住の計14軒である。第20B号住と第87A号住は他の住居跡に切られ、炉の痕跡すら見い出せないが、とりあえ

ず、炉があったものと推定し、本型にふくめた。

本型は検出された住居跡の過半数を占め、本遺跡の住居構造としては一般的な構造と言えるであろう。大きな特徴は、プラン中央に柱穴をもつ点である。柱穴規模は壁柱穴とほとんど違いはない。炉は、この中央の柱穴にかなり接近した位置に設けられている。壁柱穴の規模はほぼ一定しているが、その間隔は住居跡ごとにまちまちである。第159号住の壁柱穴の間には小ピットが検出されており、壁を保持するための杭の痕跡ではないかと考えられる。

5 型 円形プランに出入口施設を伴うもの。円形プランの構造は4型と同じである。

新第140号住と第152号住の2軒である。一般的な4型の住居跡に特別に出入口施設を設けており、この施設は屋内の空間をも間仕切る構造であると考えられる。2軒の出入口施設の形態は、下総地域で一般的な短柄型である（村田 1975）。

4型と同じく、円形プランの中央に柱穴が位置し、出入口施設との間に炉がはさまれるという配置である。この出入口→炉→中央の柱穴という配置は、一般的な堀之内式期住居には普遍的な配置構造ではないかと考えられる。仮りに出入口施設がなくても、炉が壁に寄った方向に出入口が存在した可能性は極めて高いと考えられる。これについては別項で取扱うことにする。

以上、住居跡をその構造から5型に分類してみた。次に住居跡の屋内構造の各要素について考察を加えたい。

① 炉

炉は、20軒中、15軒で検出され、第20B号住や第87A号住でも炉が存在したのではないかと推定される。15軒中、第7号住と第86号住には若干の焼土が認められるにすぎなかったが、他の13軒には共通する特徴が認められた。その特徴とは、炉内の焼土がドーナツ状の堆積を示している点で、ドーナツ状に焼土が認められなかった場合でも、炉壁がドーナツ状に焼土化していた。中央にはほとんど焼土の堆積はない。炉底はピット状に深いものが多く、底が著しく焼土化した例がないことから、炉の中央には土器が恒常的に埋設されていた可能性が高い。特に新第140号住の炉はドーナツ状に粘土を貼付けた特殊な例である。使用した結果、貼付けられた粘土は焼土化し、著しく硬化している。これは炉に設置する土器を安定させるための設備と考えられる。検出された炉からは設置した状態の土器がまったく検出されていないことから、住居の廃絶に伴って炉内の土器は取り外されたのではないかと考えられる。

② 柱穴

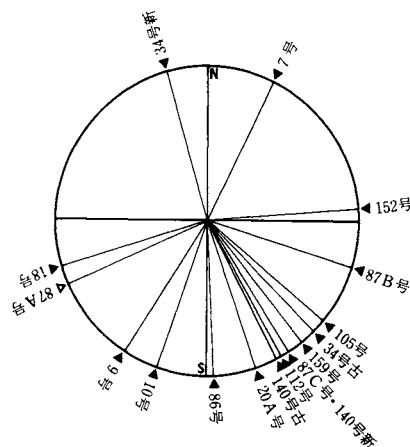
第7号住居を除けば、おもに壁柱によって上屋を支持する構造であると思われるが、検出された住居跡の14軒には壁柱穴の他に極めて特徴的なピットが確認された。すでに3型・4型・5型で指摘したように住居プランのちょうど中央にピットが位置しており、住居構造上見逃すことはできない。このピットについては屋内の何らかの施設に関連したピットであるのか、あるいは柱穴として機能したものか、他の遺跡例からも十分に検討すべきであろうが、ここでは

上屋をある程度支持する柱穴と判断し、この柱穴を伴う住居を仮りに「伊篠型住居」と呼ぶことにしたい。この柱穴規模は共存する壁柱穴の規模と差したる違いはなく、主として上屋を支持する「主柱穴」と安易に呼んでしまうわけにはゆかないであろう。しかし、この柱穴の有無による上屋構造の違いは大きなものであったと推測される。伊篠型住居の家屋形態は、ある程度の高さをもった円形の壁の上に円錐形の屋根をもつのではないかと考えられ、プランの中央に立つ柱から放射状に垂木が壁の上にかけてわたされる構造と推定される。

伊篠型住居は本遺跡に限られた特殊な例ではない。千葉県内では、木戸作貝塚28号址（郷田1979）、小金沢貝塚9号跡、同貝塚10号跡（郷田1982）、祇園原貝塚第38号住居跡（米田 1979）などで同様のピットが検出されており、柱穴ではないかと考えられる。堀之内式期の住居跡の検出例は決して少なくなく、その中には中央の柱穴が存在するのではないかとと思われる例もある。今後、この時期の住居跡の調査に際しては特に注意を払う必要があるのではなからうか。

③ 出入口施設と方位

出入口施設をもつ住居跡は、わずか2軒であった。新第140号住と第152号住は、いわゆる短柄型の柄鏡形住居であり、千葉県下では一般的な形態である。出入口施設は溝状を呈するピット例からなり、竪穴内部から外に向って「く」の字形に大きく開いている。前述したように出入口→炉→中央の柱穴という並び方は屋内施設の位置関係として極めて重要な意味をもっている。すなわち、出入口施設をもたない3型・4型の住居跡においても炉と中央の柱穴との位置関係から、出入口を明確に推定できると考えられる。第529図は各住居跡の出入口方位（人間が屋内に入る方位）を示している。第34号住は炉と中央の柱穴とが途中でつくりかえられており、出入口方向がまったく逆になっている。全体的には集落の外から中央広場に向う方向に出入口が設けられているようだが、斜面に位置するものが多いことから、見方によっては「斜面下方向に出入口部を向けるのが極めて自然の成り行き」（米田 1980）であるとも考えられる。本遺



第529図 住居跡出入口方位
（白ヌキは推定）

跡の場合、広場に対する出入口方位の規制がどれほど強くはたらいっていたかは疑問の残るところである。縄文時代中期後半の大規模な環状集落に認められる広場の強い規制に比べれば、後期集落のそれは比較的弱いものであったといえよう。

2) 埋 甕

本遺跡からは6ヶ所で埋甕が検出された。住居跡内からの検出例はなく、すべて屋外に単独で埋設されたものに限られている。埋設状況は正位かやや傾いた状態で、逆位の埋設例は検出されていない。6個体中5個体が大型の深鉢である。第127号・第130号・第131号・第132号の土器には明らかな使用痕が認められ、埋甕に転用される以前に煮沸用として使われていたと考えられる。遺存率は第127号・第130号が最もよく、ほぼ完存している。他も比較的遺存がよいことから、破損をきっかけとして埋甕に転用されているわけではないようである。第124号・第131号・第132号の土器は胴部下半を欠損しているが、この欠損は故意によるものである可能性が高い。

埋甕の用途については諸説（山本 1980、木下 1981、金子 1984）があり、定まっているわけではない。ここではある儀礼的行為の結果生じた遺構であろうという判断にとどめておくが、少なくとも、生活の直接的遺構である住居跡などとはまったくその性格を異にしている。

本遺跡の埋甕は調査区の北東側で集中して検出されており、明らかに特殊な空間を形成している。この空間を「埋甕空間」と呼ぶことも可能であろう。

3) 集落の変遷

堀之内式期の住居跡群に限ってみるならば、発掘調査によって、ほぼ集落の全容を明らかにすることができたと考えられる。しかし、調査区の北西側にも当該期の住居跡や関連遺構が存在する可能性は高く、集落の構造を分析するにあたっては十分に考慮されねばならない地区である。

検出された住居跡群は台地縁辺の緩斜面に沿って展開し、その配置は、一見、3軒前後が小グループを形成して、大きな環状を呈しているかに見える。調査区中央には当該期の遺構は検出されておらず、集落の営まれた全期間を通じて中央はいわゆる「広場」として規制されていたと考えられる。

集落は、およそ3期に分けられる。各期には6軒程度の住居群の存在が推測されるが、重複する住居跡を伴うことから、さらに幾つかの小期に分けられる可能性がある。各期には最低でも3軒の住居跡が共存していると考えられ、3軒～6軒の住居跡によって構成される集落が、継続的に営まれたと推測される。前述したように住居跡群配置の上では、隣接する3軒前後が小グループを形成しているようだが、同時性を有する住居跡からなるグループは少ないといえ

る。以下各期についてみていくことにする。

① 堀之内第1期（第7・9・10・36・105・112号住）

第1期は主として第IV群第1類の土器を伴う住居跡群によって占められる。すなわち、蕨手文などの古手の文様要素からなる土器を伴う住居跡群である。

住居跡は台地南側の緩斜面に偏在し、弧状を呈している。第7号住・第9号住・第10号住が隣接し、残る第36号住・第105号住・第112号住が点在している。6軒中、第36号住のみ炉をもたない。

第1期集落はさらに2つの小期に分かれる可能性をもつ。第9号住・第10号住・第112号住には第IV群第1類a種の土器が特徴的に出土していることから、集落の最も初期に営まれた住居跡群と考えられる。第9号住と第10号住はかなり近接しているものの、同時性の強い住居跡である。第7号住・第36号住・第105号住はやや後出的な土器の様相を示すが、第36号住は土器の出土量が少ないこともあり、第7号住や第105号住との同時性を伴うかは明確でない。第105号住は第IV群第1類a種の土器をわずかに伴っており、第9号住などとの同時性が考えられるかもしれない。

第1期には第131号埋甕が含まれる。最も近い第1期住居跡から60m以上離れた位置にあり、住居跡群の占める空間領域とは明らかに分けられる特別な空間領域を形成している。

② 堀之内第2期（第34・86・87A・152・153・159号住）

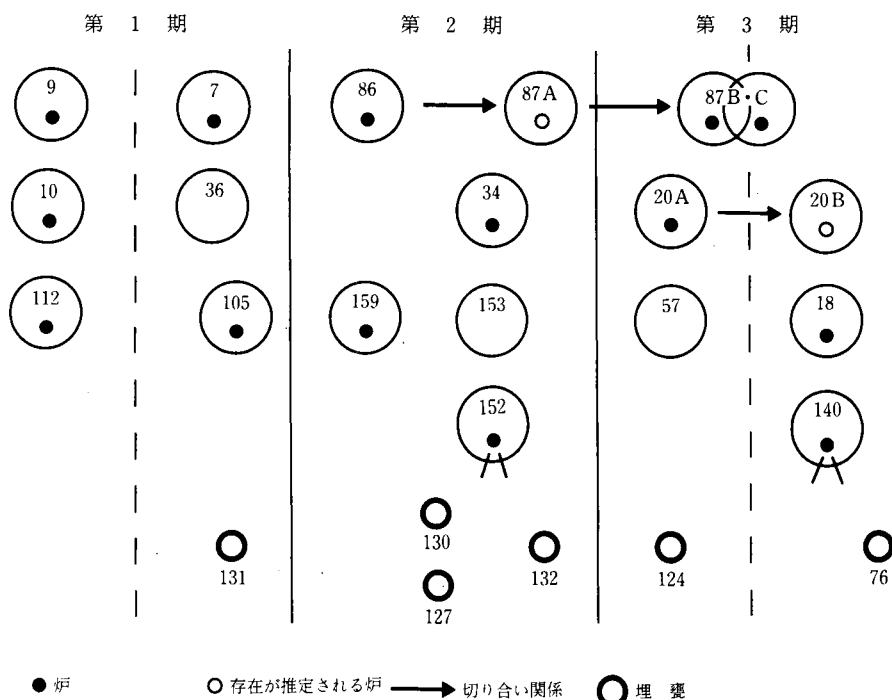
第2期は第IV群第2類及び第3類の土器を伴う住居跡群によって占められる。第1期にみられる磨消し縄文手法を施した土器はなく、蕨手文などもほとんど認められない。単位文様自体が大きく変化する時期である。

住居跡は南側に点在し、それとは反対の北側にも新たに住居跡が展開するようになる。該期には、炉をもつ住居跡や炉をもたない住居跡、出入口施設を伴う柄鏡形住居跡が集落を構成している。どの住居跡も全体に土器の出土量が少なく、決め手を欠いているが、第86号住と第87A号住の重複から2つの小期に分かれる可能性が高い。

第152号住と第153号住は南側に展開する住居跡群と広場をはさんで対峙した位置にある。しかも、第152号住は柄鏡形住居、第153号住は炉をもたない住居跡であることから、南側の一般的な構造の住居跡群とは集落内の機能が異なるのではないかと考えられる。さらに第152号住や第153号住に隣接して第127号・第130号・第132号の各埋甕が検出されており、これらの埋甕とともに特殊な空間領域を形成していると考えられる。

③ 堀之内第3期（第18・20A・20B・57・87B・87C・古、新140号住）

第3期は第IV群第3類のうち多条化の傾向を強く示す土器を主体的に伴う住居跡群によって占められる。当該期も住居跡の重複や土器の様相から2つの小期に分かれる可能性が高い。最も新しい要素の土器を伴う住居跡は第18号住・第20B号住・新第140号住の3軒である。堀之内



第530図 集落変遷模式図 No 1

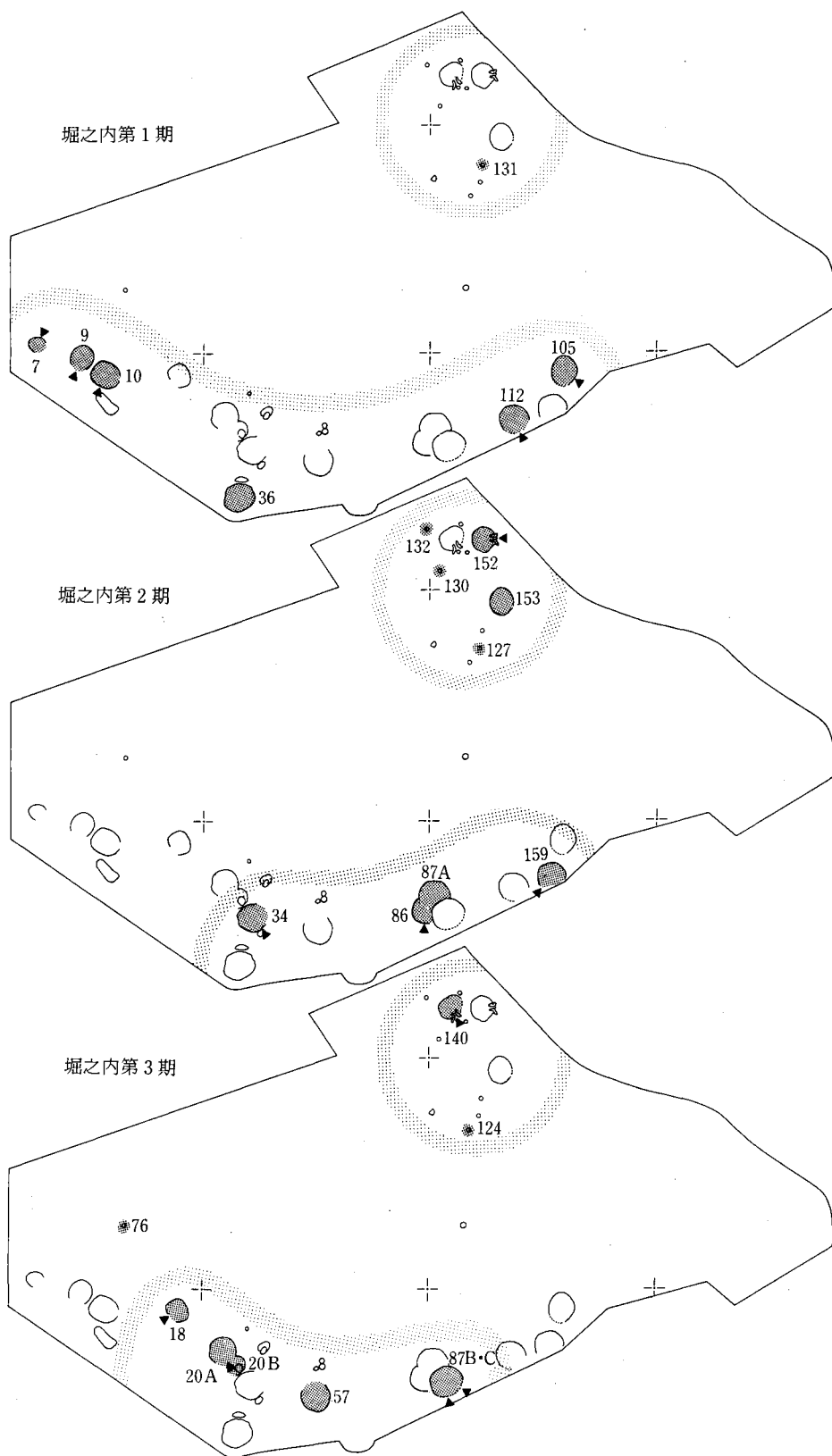
式期集落の終焉にあたる住居跡群と考えられる。

集落を構成する住居跡群は第2期と同様に構造の異なる3種類の住居跡からなる。古第140号住及び柄鏡形住居の新第140号住は、南側の住居跡群と対峙した北東側に位置し、第1期から継続的に特殊な空間領域を形成している場に構築されている。

当該期には第76号と第124号の埋葬が含まれるが、第76号埋葬は第3期以降であるかもしれない。第76号埋葬のみ他の埋葬とはまったく離れた場所に位置している。とりあえず第3期最終末の埋葬と考えておきたい。第124号埋葬は第1期・第2期と同じく埋葬の空間領域に位置しており、第1期から第3期にわたり、埋葬の空間領域が強く意識されているものと考えられる。

以上、集落の時間的推移と空間的な展開について概観してみた。最後に若干のまとめを行いたい。

集落が形成された第1期の住居群は台地の縁辺に構築されたものが多く、地形的に制約された台地空間の最大規模を示している。第2期、第3期へと移るにしたがって集落規模は縮小の傾向を示し、中央広場の空間をしだいに狭めていく。南側には弧状に展開する住居群、北東側には埋葬群という2つの空間領域が存在し、全期を通じて、集落を大きく二分している。住居群の位置する南側を居住空間、埋葬群の位置する北東側を儀礼空間と呼んでもよからう。別の言い方をすれば、南側は日常的空間、北側は非日常的空間とも言え、第2期以降北東に構築さ



第531図 集落変遷模式図 No 2

れる住居群は、南側の住居群とは異なった機能をはたしていたのではないかと考えられる。しかも、北東の住居群が、柄鏡形住居や炉を伴わない住居で占められていることは、一層このことを強調していることはいえないであろうか。柄鏡形住居については、一般的な住居であるとする意見（山本 1980）や逆にその形態の特異性から一般的な住居とは区別されるとする意見（村田 1975・1979）など極めて対照的な見解の相違がある。本遺跡のように構造的に異なる住居が共存し、集落を構成している場合、その構造的な違いは、集落における住居機能の違いを強く反映していると考えられ、それは直接的に、竪穴成員の違いを表わしているのではないと思われる。従って、柄鏡形住居には儀礼空間にふさわしい竪穴成員の居住が推測できる。また、炉をもたない住居跡が各期に1軒ずつ存在しているが、この住居跡には炉を必要としない成員の居住が推測でき、例えば「男の家」などの機能が考えられるかもしれない。

参考文献

- 青沼博之 1981 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一原付その4 昭和51・52年度』長野県教育委員会
- 麻生 優 1957 「千葉縣市川市堀之内貝塚」『日本考古学年報』7
- 安達厚三 1983 「石皿」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 安孫子昭二 1971 『平尾遺跡調査報告I』平尾遺跡調査会
- 阿部祥人 1982 「剝離痕による石鏃の分析一試論一」東京都埋蔵文化財センター研究論集1
- 市川市考古博物館 1982 「シンポジウム堀之内式土器資料集一各地の堀之内式土器とその変遷」
- 市川市考古博物館 1983 「シンポジウム堀之内式土器の記録」
- 大熊町史編纂委員会 1984『大熊町史』第二巻
- 小川和博 1984 「堀之内II式土器編年の課題」『奈和』15周年記念論文集
- 金子義樹 1984 「縄文時代における埋甕についての一試論」『神奈川考古』第19号
- 木下 忠 1981 『埋甕一古代の出産習俗』雄山閣
- 郷田良一 1979 『千葉東南部ニュータウン一木戸作遺跡（第2次）一』（財）千葉県文化財センター
- 郷田良一 1982 『千葉東南部ニュータウン一小金沢貝塚一』（財）千葉県文化財センター
- 後藤和民他 1976 『加曾利南貝塚』
- 後藤和民他 1977 『加曾利北貝塚』
- 小林康男 1974・1975 「縄文時代生産活動の在り方（1）～（4）」『信濃』26-12、27-2、4、5、
- 小林行雄 1959 『図解考古学辞典』東京創元社

- 斎藤弘道 1978 「堀之内式土器研究のあゆみ」『茨城県歴史館報』5
- 佐々木藤雄 1984 『帷子峯遺跡』横浜新道三ッ沢ジャンクション遺跡調査団
- 清水潤三 1957 「千葉県市川市堀之内貝塚」『日本考古学年報』7
- 清水潤三 1957 「堀之内貝塚シーⅠ・シーⅡ地点発掘報告」『人類学雑誌』65—5
- 庄司 克 1970 「市川市堀之内貝塚発見の縄文土器」『貝塚博物館紀要』第3号 千葉市加曽利貝塚博物館
- 庄司 克 1981 「堀之内Ⅱ式土器小考—(1)」『貝塚博物館紀要』第7号 千葉市加曽利貝塚博物館
- 城近憲市 1974 『高井東遺跡調査報告書』埼玉県遺跡調査会
- 杉原壮介他 1965 「千葉県堀之内貝塚B地点の調査」『考古学集刊』3—1
- 鈴木道之助1981 『図録石器の基礎知識Ⅲ』 柏書房
- 鈴木保彦 1972 『東正院遺跡』神奈川県教育委員会
- 鈴木保彦 1977 『下北原遺跡』神奈川県教育委員会
- 清藤一順 1981 『千葉市矢作貝塚』(財)千葉県文化財センター
- 関根孝夫 1973 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会
- 鷹野光行 1979 『世界考古学辞典』平凡社
- 種田斎吾 1977 「房総における縄文中期末の石器群について」『研究紀要』2 千葉県文化財センター
- 永峯光一 1962 『日本考古学辞典』東京堂出版
- 西村正衛 1957 「千葉県市川市堀之内貝塚」『日本考古学年報』7
- 野口行雄 1985 「房総半島における縄文時代生産活動の様相」『研究紀要』8 千葉県文化財センター
- 野口義麿編 1981 『縄文土器大成3—後期』講談社
- 樋口隆康 1959 『図解考古学辞典』東京創元社
- 宮下健二 1983 「有溝砥石」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 村田文夫 1975 「柄鏡形住居址考」『古代文化』第27巻11号
- 村田文夫 1979 「続・柄鏡形住居址考」『考古学ジャーナル』170
- 山岸良二 1983 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市遺跡調査会
- 山本暉久 1980 「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考古』第9号
- 吉田 格 1965 『日本の考古学Ⅱ』河出書房
- 米田耕之助 1979 『祇園原貝塚Ⅱ』上総国分寺台遺跡調査団
- 米田耕之助 1980 「縄文時代後期における住居形態の一樣相」『伊知波良』3
- 渡辺 誠 1975 『縄文時代の植物食』雄山閣

第2節 古墳・歴史時代

1 土器について

伊篠白幡遺跡A～D地点からは、多数の住居跡に伴って各種の遺物が多量に出土している。これらの遺物の中でも特に土器の出土量が圧倒的に多い。わけてもA地点の出土土器は、量、器種の豊富さでは他地点を凌いでいることから、ここではA地点出土土器を中心にまとめてみたい。

1) 古墳時代

この時期の遺構は数多く検出され、特に住居跡は34軒をかぞえることができる。これらの住居跡から出土した土器を、重複関係および各器種の共伴関係から述べてみたい。特に第11・12、26・27号住居跡は重複関係にあり、土器の変遷過程を看守できる良好な資料を出土している。また、第12・23・27・38・49・93・115号住居跡等は、土器の出土量と器種の豊富なことにより共伴関係を知る上に貴重なものであった。これらの住居跡から出土した土器を主に基準として分類することにする。なお、これらの土器を分類するにあたっては、「房総における鬼高期の研究（研究編）」（柿沼 1982）を援用している。

器種としては、坏、埴、高坏、鉢、小形甕、大形甕、甑の7種類に分類し、それぞれの器形の特徴から、更にA、B、C…等の類型に分類した。この結果、A地点では各器種の特徴から第Ⅰ期～第Ⅲ期までの3段階の変遷をたどることができた。これらを各期ごとの様相を器種毎に述べることにする。ただし、個体数の少ないものについては敢て分類はしなかった。須恵器については、共伴土器と同時期に廃棄されたものとして理解した。挿図番号は各住居跡出土土器番号と一致している。

第Ⅰ期

この時期に、A地点において古墳時代集落の営みが開始される。鬼高式の古い方は見られない。第25・83号住居跡出土土器が代表的なものである。器種としては、坏、高坏、鉢、小形甕がある。

①坏

A～Dの4種が認められる。A種は球体を半截したような形状ではあるが、器高が浅くなっており、どちらかと言えば、丸みの強い坏で口縁部は若干内弯みである。B種は、明確な外稜を有し、口辺部が直立して高く蓋受部を作り出し、底が若干深く、やや大形である。C種は口辺部が外反し、D種は外稜を有して口辺部が外反し、非常に底が深く埴形に近い。

②高坏

1個体のみ出土である。坏部に明瞭な外稜を有して口辺部はやや強く外反をする。脚部は「ハの字」形に開くが、脚内部に明瞭な稜を残す。赤彩されている。

③鉢

1個体のみであり、口縁部径よりも器高が高い筒形を呈している。

④小形甕

C種が認められる。C種は小形甕でも大形に属し、胴部はやや丸みをもつが長胴で口辺部が外反する。胴部のほぼ中央に最大径をもつ。

第II期

この時期には、A地点の集落内における住居跡数が増加の傾向を顕著に示している。この時期の遺物を多量に出土するものに第12・23・27・48・49号住居跡等がある。器種としては、坏、碗、鉢、小形甕、大形甕、甑がある。

①坏

A～Dの4種が認められる。A種はI期よりも器高が浅くなり、口辺部が若干内弯みか、もしくはやや直立ぎみになる。B種は外稜を有し、口辺部が内傾してやや低くなり、全体的に浅くなる。C種はやや外稜を残して口縁部が直立する。D種は外稜が若干認められる程度であり、口辺部が微妙に外反するものとやや直立ぎみのものがあり深い。

②碗

A種のみである。A種は器高が高く口辺部が内弯を呈する。一部に底部がやや球形をなすものもある。

③鉢

個体数は少ない。口径が大きく、口辺部が外反する。底部はやや平底である。

④小形甕

A～C種がある。A種は鉢形に近く、胴部が球形を呈して口辺部が外反する。B種は胴部がやや丸みをもち、口縁部径が胴部最大径より相当小さく、やや強く外反する。C種は胴部がやや丸みをもつが長胴化の傾向を示している。口辺部がやや強く外反する。

⑤大形甕

A・B種の2種類がある。A種は胴部の球形が強いもので、口辺部が若干強く外反し、口縁部径がやや大きいものと、比較的小きなものがある。B種は胴部がやや丸みをもち、最大径が胴部中央にあるが、長胴化の傾向を示している。

⑥甑

個体数が少ない。鉢形を呈して口辺部がやや強く外反するものと、胴部が若干丸みをもつもの

の口辺部が同様にやや強く外反するものがある。底部は底の無い単孔のものである。

第Ⅲ期

この時期は、Ⅱ期のA地点における集落内の住居跡数の増加を受けついで安定期とも言える。特にⅡ期の第12・27号住居跡とⅢ期の第11・26号住居跡とは重複関係が明瞭に把握されており、古墳時代の数少ない重複例であった。そして、Ⅱ期同様に住居跡内より出土した土器の量と器種の豊富さは、比較検討する上で貴重な資料となるものであった。器種としては、坏、埴、高坏、鉢、小形甕、大形甕、甑がある。

①坏

A～D種の4種類が認められる。A種はⅡ期と殆ど器高は同じであるが、口辺部がほぼ直立するか、若干外反する様になり、内弯するものは非常に少ない。B種は外稜を有し、口辺部が内傾してⅡ期よりもかなり低くなり、浅くなる。C種は若干外稜が認められる程度で、口辺部が若干外反するものとやや直立ぎみのものがあり、底がやや深い。D種は外稜が若干認められ口辺部が開きぎみになる。

②埴

1個体のみ出土している。外稜が明瞭に認められ、口辺部がやや内傾する。非常に深く、底はやや丸底を呈するかもしれない。器形的には坏B種を大形化したものであり、今回は坏とするよりも埴として把握した。また、鉢とも考えられないこともない。

③高坏

1個体の出土である。坏部に明瞭な稜を残し口辺部は強く外反する。脚部は欠損のため不明である。

④鉢

1個体の出土である。口径が大きく口辺部がやや強く外反し、底部は丸底ででもあろうか。

⑤小形甕

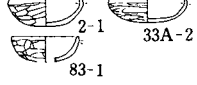
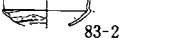


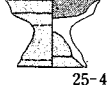
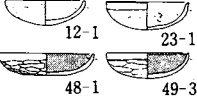
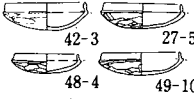


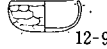


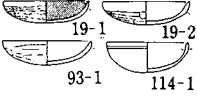
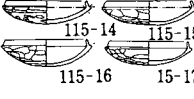





A～C種がある。A種は胴部が球形状を呈し口径部が外反をする。B種は胴部がやや丸みを持ち、口径がⅡ期よりも若干広くなっている。C種は胴部がやや丸みをもつものと、Ⅱ期以上に長胴化するものもあり、胴部最大径が若干肩部に近づいている。口辺部はⅡ期同様外反するものと、少し口辺部が立ち上がった後に外反するものがある。

⑦大形甕

B種のみがある。B種は胴部に丸みを持ち、最大径が胴部中央よりやや肩部寄りになり、口辺部が外反する。この甕の特徴は口縁部に微妙なつまみが見られ、胴部中央外面にヘラナデが施されていることである。

⑧甑

A・B種が認められる。A種は胴部が若干の丸みをもつが長胴化しており、口辺部が外反し

器種 期別	坏				碗	高 坏	須恵器・蓋
	A	B	C	D			
I 期							
II 期					 		
III 期					 		

第532図 古墳時代出土土器集成図 No 1

底部は底の無い単孔である。B種は底部付近で急にすぼまり、口辺がやや強い外反を示している。

以上、第I～III期にわたって、各器種ごとに分類し説明を述べてきた。須恵器については各期別に一括して挿図を作成してある。ここでは各器種別に特徴を抽出してみたい。













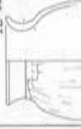
















坏はA～D種の4種に分類したが、各期全てに見られるわけではない。坏でも基本的には形状の変遷を明確にできたのはA・B種のみであった。A種については、口縁部の変化により更に細分されるものと考えられるが、ここでは敢て細分はしなかった。ただ第I期からIII期にかけての変遷で言えることは、底が深いものから浅いものへと、口縁部が内湾するものから直立ぎみへ、そして若干外反ぎみへと変化することが指摘できた。B種は口辺部と外稜の変遷が明瞭であり、特に口辺部が高く直立するものから低く内傾するものへと変化するのが把握できた。

小形甕はA～C種の3種があり、大きさからA種として鉢形に近い小形のもの、B種として胴部が球形状をなすもの、C種として胴部がやや丸みをもつもので長胴化の傾向を示すものに分類したが、非常にバラエティーに富む器種であることが指摘できる。

大形甕はA・B種の2種が認められたが、A種の胴部が球形状を呈し口縁部がやや強く外反するものはII期のみ認められ、B種の胴部がやや丸みをもち、胴部の最大径が中央からやや上半に移動するのがII期からIII期への変遷で認められ、III期では更に口縁部が微妙なつまみが認められ、胴部中央から下半にかけてヘラナデが認められるのが最大の特徴である。

これらを「房総における鬼高期の研究」と対比するならば、第I期が第II期に、第II期が第III期に、第III期が第IV期と第V期の一部に対応するものと考えられる。

各住居跡の所属期は下記の通りである。

器種 期別	鉢			小形甕			大形甕			瓶
	A	B	C							
I 期	 33A-4		 6-3							
II 期	 27-9	 12-13	 12-12	 23-11	 49-18	 12-15	 23-9	 48-12		
	 27-8	 27-10	 27-11	 12-14	 48-11	 27-12				
III 期	 115-23	 11-6	 11-5	 26-6	 93-6	 115-27	 93-7	 106-4		
		 26-5	 93-4	 93-5	 106-3					
	 93-3									

第533図 古墳時代出土土器集成図 No.2

第Ⅰ期 2、6、25、33A、33B、83の各住居跡

第Ⅱ期 12、14、23、27、48、49の各住居跡

第Ⅲ期 11、19、26、30、38、47、51、93、99、106、108、114、115、156の各住居跡

不明 1、21、29、31、40、42、46B、109の各住居跡

2) 歴史時代

この時期の遺構も多く検出され、住居跡数は44軒をかぞえることができた。これらの住居跡から出土した土器を共伴関係と「下総東部における奈良・平安時代の土器編年表」(越川・長内 1983)を援用して各期に分類して器種ごとに述べてみたい。須恵器については、共伴土師器と同時期に廃棄されたものとして理解した。挿図番号は住居跡出土土器番号と一致している。土師器の器種としては、蓋、坏、高台付坏、盤、小形甕、大形甕、甗等があり、須恵器の器種として蓋、坏、高台付坏、壺、フラスコ形長頸瓶、壺、甗等がある。これらの中で代表的なものを主に取り上げて述べたい。

第Ⅰ期

土師器は坏、盤、小形甕、大形甕が出土している。坏は体部と口縁部の境に稜を残すもの、稜を微妙に留めるものがあり、底部が丸底を呈するものと平底に近いものがある。盤は底部が僅かに丸みをもち内外面が丁寧にミガキを施されている。小形甕は口唇部が僅かに折れ外反する。大形甕は胴部最大径が肩部にあり、この肩は強く張る。口辺部も強く外反し口唇部が僅かに折れている。胴部下半はヘラナデが施されている。

須恵器は蓋、坏、高台坏、壺が出土している。蓋は口縁端部内側にかえりを有し、つまみは回転の押えによって中央部と端部の高さがほぼ同じであり、天井部が回転ヘラ削りである。坏は底部と体部の境が明瞭ではなく底部がやや丸みをもつものもあり、底部調整はヘラ削りと回転ヘラ削りのものがある。高台付坏は、丸底の底部が高台より突出したものと、突出しないものがある。壺は胴部3ヶ所で2～4本のヘラ描き沈線が入っている。

第Ⅱ期

土師器は坏、小形甕、大形甕が出土している。坏は底部がやや丸底をなして、口辺部に微妙な稜をもつものと、ロクロを使用した平底で底部ヘラ削りが施されているものがある。小形甕は、胴部がやや丸みをもち、口辺部がやや強く外反して口縁部素縁のものと折り返しのものがある。大形甕は肩部が若干第Ⅰ期よりも丸みをもつものと「くの字」に張るものがあり、口辺部が強く外反して口唇部が直立ぎみに折り返されるものがある。

須恵器は坏、フラスコ形長頸瓶、甕が出土している。坏は平底で境がやや不明瞭で、体部下

端へら削りが施され、底部もへら削りである。フラスコ形長頸瓶は体部にへら削りが施されている。甕は口辺部破片のみで全容を知り得ないが、体部内面青海波文、外面平行叩き目文が施され、口辺部外面に櫛描波状文がある。

第Ⅲ期

土師器は、坏、大形甕が出土している。坏はロクロ未使用で体部が緩やかに円彎して立ち上がり、底部が平底でへら削りが施されるものと、ロクロ使用で底部が回転へら削りを施されて体部の外反が大きいものがある。口径に対して底径が大きく、所謂箱状を呈するものがあり、底部回転へら削りが施されるものもある。また、底部から体部下半にかけて屈曲ぎみに立ち上がり、底部糸切りの後に周縁へら削りを施したものもある。大形甕は口辺部が外反して口唇部が折り返され、肩部の張りが第Ⅱ期よりもやや弱くなり、胴部下半がほぼ直線になる。

第Ⅳ期

土師器は坏、小形甕、甗が出土している。坏は底部から若干彎曲して立ち上がる体部が直線ぎみに口縁部に至り、口端部が若干外反するものと、体部下半に弱い腰部をもって立ち上がり、口縁部で外反するものがある。これらの坏は、口径と底径の比が $1/1.5 \sim 1/2.0$ の間に分布する傾向が指摘できる。調整としては、体部下端手持ちへら削り、底部回転糸切り後外縁手持ちへら削りが施される。内黒坏も出土し、前述の坏より一回り大形化し、底部から若干彎曲して立ち上がり口縁部で外反する。調整は体部下端手持ちへら削り、底部へら削りである。小形甕は、胴部上半に最大径をもち口辺部は外反して、口縁部外面に凹面をもっている。甗はくすべ焼成であり、口頸部はやや強く外反して肥厚する。胴部はやや丸い緩やかな張りをもち、外面は叩目文をもち、特に下半はへら削りが施される。

第Ⅴ期

土師器は坏、高台付皿、小形甕、大形甕、甗が出土している。坏は、底部から若干彎曲して立ち上がる体部が口辺部付近で外反する。口唇部がやや肥厚するものもある。底部と口径の比が $1/2$ 付近に分布するようである。坏も内黒処理が施されているものは、やや大形化の傾向を示している。調整は、体部下端手持ちへら削り、回転へら削りが施され、底部は、回転糸切り後周縁へら削りがなされている。高台付皿は、体部が微妙な彎曲をなすが口辺部で外反する。高台も僅かに外反する。底部は回転糸切りがなされ、高台が貼付されている。小形甕は口辺部が強く外反するものがある。大形甕は胴部の張りが弱くなり、口辺部が外反して、口唇部の折り返しが肥厚する。甗はくすべ焼成であり、口頸部がやや強く外反して肥厚する。胴部はほぼ直線的で把手が付される。

第VI期

土師器は坏、高台付坏、小形甕、大形甕、甗が出土している。坏は小かな底部から体部が内湾ぎみに立ち上がるものとやや直線的に立ち上がり口辺部が外反するものがある。調整としては、体部下端に手持ちヘラ削りと回転ヘラ削りが見られ、底部は回転糸切りの後に周縁ヘラ削りのものと無調整のものがある。高台付坏は高台が高台付皿より長く、「ハの字」形にひらき、体部は内湾しつつ立ち上がる。小形甕はくすべ焼成もみられ、口辺部が外反して口唇部の折り返しも微妙に認められる程度である。大形甕は胴部の張りが弱くなり、口辺部が外反して口唇部の折り返しが肥厚する。甗はくすべ焼成のものが認められ、胴部は大形甕とほぼ同じ器形を呈するが、外面に叩目文が施され、口唇部が折り返されている。

以上、第I～VI期にわたって、各器種ごとの特徴を述べてきた。本遺構では、歴史時代の住居跡の重複関係は殆ど無く、前後関係を明確にする為、「下総東部における奈良・平安時代の土器編年表」(越川・長内 1983)を援用したことは前述した通りである。ここで編年表と対比するならば、第I期が第I期、第II期が第II期、第III期が第IV期、第IV期が第VI期、第V期が第VII期、第VI期が第VIII期にほぼ対応するものと考えられる。

各住居跡の所属期は下記の通りである。

第I期 3、15、54、102、110、123、C地点1、D地点1の各住居跡

第II期 8、44、50、82、117、155、167、B地点4、5の各住居跡

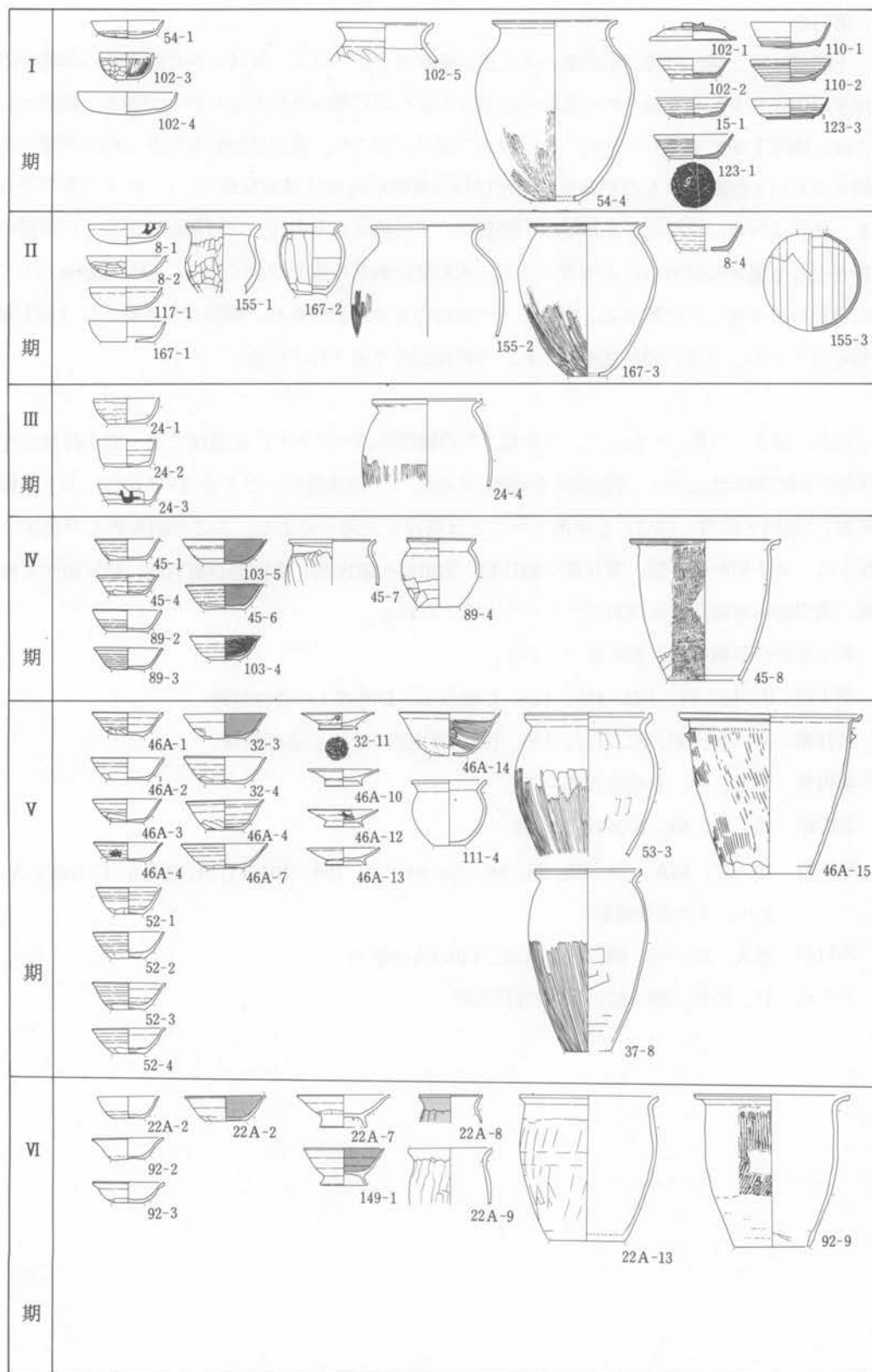
第III期 13B、24、B地点A群P₁

第IV期 45、84、89、103の各住居跡

第V期 32、37、46A、52、53、58、88、90、94、97、100、104、111、B地点6、C地点2A、
2B、3の各住居跡

第VI期 22A、85、92、98、116、133、149の各住居跡

その他 17、22B、39、62、154の各住居跡



第534图 历史时代出土土器集成图

2 住居跡構造

1) 古墳時代

この時代は3期に分類され、第Ⅰ期が6軒、第Ⅱ期が6軒、第Ⅲ期が14軒、その他が8軒と計34軒が検出されている。各期の台地における占地状況としては、第Ⅰ期が南西縁辺に、第Ⅱ期が第49号住居跡が中央に位置して他は第Ⅰ期同様南西縁辺に、第Ⅲ期が台地全域にそれぞれ検出されている。

カマドの住居跡内の位置の特徴としては、次の通りである。第Ⅰ期は北西方向N30°W前後が4軒、西方向N72°Wが1軒、北東方向N34°Eが1軒であり、北西方向が優位を占め、第2号住居跡以外は壁の中央に位置している。第Ⅱ期は北方向N5°Wの第48号住居跡以外全て北西方向でN20°W前後が3軒、N60°W前後が2軒であり、第12号住居跡以外は壁中央に位置している。第Ⅲ期は北東方向の第19・108号住居跡、南西方向の第26号住居跡以外は北西方向で、N30°W前後が6軒、N50°W前後が3軒、N70°W前後が2軒であり、カマドの位置は壁のほぼ中央に位置している。この様に、各期においては北西方向が圧倒的に多く、若干方位的に分類が可能ではあるが、時期的特徴、台地の占地における影響は顕著には認められない。カマドの構築材の特徴としては、他の遺跡同様砂質粘土を使用している。また、施設としては、第Ⅲ期の第38号住居跡にカマドを囲む様に柱穴が4ヶ検出されている。

住居跡の面積としては、第Ⅰ期の第2号住居跡が5.61㎡と最も狭く、他は約20～30㎡前後である。第Ⅱ期は、第49号住居跡が52.05㎡と本遺跡内で最大規模をもち、台地の中央に位置し、他の住居跡は約15～25㎡前後である。第Ⅲ期は、第47号住居跡が41.61㎡、第51号住居跡が41.61㎡、第51号住居跡が35.46㎡と大きく、この両住居跡は若干南北に離れて位置し、他の住居跡約25㎡前後が最も多い。

柱穴は、基本的には各期ともに支柱穴4本が対角線上に配置され、第Ⅰ期の第2号住居跡が遺構外の四隅に4本柱が検出され、第Ⅱ期の第12・27号住居跡と第Ⅲ期の第106号住居跡では支柱穴が検出されなかった。柱穴で特徴的なのは、カマドの対面壁付近に対峙して小ピットが検出されていることである。第Ⅱ期に第12・48号住居跡に検出され、第Ⅲ期には第19・26・47・93・99・108・114・115号住居跡に検出され、第Ⅲ期の住居跡の約60%から検出されるようになることである。

貯蔵穴は第Ⅲ期の第47・93・108号住居跡に検出されており、第47号住居跡がカマドの対面壁と小ピット間に、第93・108号住居跡がカマド右側コーナーにそれぞれ検出されている。

2) 歴史時代

この時代は6期に分類され、A地点では第Ⅰ期6軒、第Ⅱ期7軒、第Ⅲ期2軒、第Ⅳ期4軒、

第Ⅴ期13軒、第Ⅵ期7軒、その他5軒の計44軒が検出されている。各時期の台地の占地状況は次のとおりである。第Ⅰ期は北側に位置する第117号住居跡を除いて他が東西に細長く分布する。第Ⅱ期も第Ⅰ期同様に北側に第127号住居跡が位置し、他が東西に細長く分布する。第Ⅲ期は西側に分布する。第Ⅳ期はやや南東側に第45号住居跡を除いて分布している。第Ⅴ期は台地中央部から南東部に集中して分布している。第Ⅵ期は台地中央部より東側に広範囲に分布状況を示している。

カマドの住居跡内の位置の特徴としては次の通りである。第Ⅰ期では、第54号住居跡の北東方向N61°E以外全て北方向でN40°W前後が3軒、N15°W前後が2軒であり、第54号住居跡がやや壁中央より右側に位置するが、他は壁中央に位置している。第Ⅱ期は第82号住居跡カマドBがS55°Wで本遺跡唯一の例であり、北西方向N21°Wが1軒、N50°W前後が5軒、北東方向N28°Eが1軒あり、北西方向が優位を占める。第Ⅲ期は北西方向N40°W前後が2軒であった。第Ⅳ期は北東方向N60°E前後が2軒、北西方向N40°W前後が3軒となり、各期を通じて、北西方向が最も低い率を示している。第Ⅴ期は北西方向N20°W前後6軒、N40°W前後2軒、北方向N5°W前後3軒、北東方向2軒なり、北方向がやや他の時期より多いことが指摘できる。第Ⅵ期は北西方向が4軒、南東方向S51°Eがあり本遺跡唯一の例であった。

住居跡の面積は各期の特徴が比較的良好に把握できた。第Ⅰ期は約15～16m²が3軒、約24～29m²が3軒と2分類されている。第Ⅱ期は第167号住居跡が最も小さく推定4.88m²であり、約15～20m²前後が4軒、約30m²前後が2軒となり3分類される。第Ⅲ期では約15m²が2軒である。第Ⅳ期は約10m²が4軒と住居跡が小形化の傾向を示す時期である。第Ⅴ期は第53号住居跡が約25m²と最も大きいのだが1軒のみで、他は約10m²前後が12軒となり第Ⅳ期同様の傾向を示す。第Ⅵ期も約10m²前後が7軒全てであり第Ⅳ期からの傾向が窺われる。

柱穴は支柱穴の4本柱を基本とするものは少なく、若干第Ⅰ・Ⅱ期に多く、以後は割合が少なくなる。古墳時代にみられた、カマド対面壁付近の小ピットは少なくなり、各期に若干見られる程度であるが、第Ⅴ期に比較的多く約50%を占るだけである。歴史時代には、不規則な柱穴が見られる様になり、本遺跡でも約30%程度の住居跡で検出されている。

その他の歴史時代の住居跡として特徴的なものとして、住居跡外の四隅に柱穴が配置された第39・62号住居跡がある。この住居跡は面積約6m²と非常に小さいが、カマド施設を備えている。ただ、第2号住居跡が古墳時代の遺物を出土しており、時期的な変遷は現在のところ不明である。

3) その他

遺物の出土が無く時期決定できなかった住居跡として第13A、28、43、91、137号住居跡があった。

3 掘立柱建物跡

A地点からは23棟が検出されている。これらの掘立柱建物跡は、重複関係、規模、桁行・梁行の方位によって下記の通りに分類が可能である。

I類（桁行・梁行がN19°W及びN71°E前後）

I-A 3×2間 142、157

I-B 2×2間 75

I-C 1×1間 74A、74B、122 ※74A・74Bは3×1間の可能性もあり

II類（桁行・梁行がN38°W及びN52°E前後）

II-A 4×3間 95

II-B 4×2間 136

II-C 3×2間 70

II-D 2×2間 60、72、73

II-E 1×1間 79 ※138の規模不明

III類（桁行・梁行がN52°W及びN38°E前後）

III-A 4×3間 119、120

III-B 3×2間 141

IV類（桁行・梁行がN85°W及びN5°E前後）

IV-A 3×2間 77 ※71は規模不明

V類（その他）

V-A（桁行・梁行がN26°W及びN64°E） 3×3間 107

V-B（桁行・梁行がN32°W及びN58°E） 1×1間 121

V-C（桁行・梁行がN68°W及びN22°E） 2×2間 78

V-D（桁行・梁行がN78°W及びN12°E） 2×2間 80

以上、方位を基準として大きく5分類し、更に規模によって細別した。これらの掘立柱建物跡は各住居跡と重複関係が指摘されているが、残念ながら新旧関係を調査時に明確にできなかったものが多い。ここでは、数少い重複関係の判明した遺構より、次のことが指摘できる。第79号掘立柱建物跡は第53号住居跡（歴史時代V期）より古く、第95号掘立柱建物跡は第92号住居跡（歴史時代VI期）より古く、第121号掘立柱建物跡は第82号住居跡（歴史時代II期）より古く、第122号掘立柱建物跡は第100号住居跡（歴史時代V期）より古いことが判明している。これらのことから、I類は歴史時代V期より古く、V-B類は歴史時代II期より古いことが指摘される。第120号掘立柱建物跡のピットからは古墳時代II期以降の坏が出土しており、III-Aの上限を知る手掛りとなるものである。これらの各類の配置状況には次の特徴がみられる。I類

は、第74A・74B・75・157号掘立柱建物跡が台地西側に近接して、第122・142号掘立柱建物跡が東側に対峙するようになっている。II類は7棟と最も多く、第70・72・73号掘立柱建物跡が西側に、第136・138号掘立柱建物跡が北側に、第60・79号掘立柱建物跡が南側に、第95掘立柱建物跡が東側にそれぞれ配置され、台地中央を囲んで方形に配置されていた。そして、各掘立柱建物跡の規模も大きくなることが指摘できる。III類は、第119・120号掘立柱建物跡が南側に、第141号掘立柱建物跡が北側に見られる。IV類の第77号掘立柱建物跡はやや南側に位置して東西に庇をもち、他の構造と違うことが指摘できる。V類は各々方位、位置が違い、類似性は見られない。ここで指摘されるのは、各類において群を構成していることである。これらが時期的にどのような展開を示すのかは、残念ながら重複関係からは判断できず、以後の検討課題とした。

4 墨書土器

墨書土器はA～C地点からそれぞれ出土している。A地点からは37点、B地点から21点、C地点からは4点である。これらの墨書は坏と高台付皿に見られ、墨書された位置を分類すると下記の通りである。

I類 体部外面で口唇部を上にも書したのもの

II類 体部外面で口唇部を左にも書したのもの

III類 体部外面で口唇部を下にも書したのもの

IV類 底部外面にも書したのもの

V類 底部内面にも書したのもの

以上の様に分類した。これらを各地点ごとに述べたい。A地点で最も早く墨書が表われるのは第III期の第24号住居跡である。坏にI類がみられ意味は不明である。第IV期には第45・103号住居跡があり、第45号住居跡の「長」はI類、第103号住居跡の「人」が2点ともにI類で各住居跡出土墨書土器は全て坏に見られた。第V期には第32・46A・52・100・104号住居跡があり、第32号住居跡は「刀」が5点、「申」が1点あり、「刀」の中でI類が1点、III類が1点、IV類が2点、「申」がIV類であった。第46A号住居跡は不明「刀」「長」が各1点ずつ出土し、不明がI類?、「刀」がI・IV類、「長」がI類であった。第52号住居跡は不明であった。第100号住居跡は「佛」と不明のものであるがI類である。第104号住居跡の「×」が2点と「俣」1点がI類であった。各住居跡出土墨書土器は坏と高台付皿に見られ、第32・46A号住居跡には「刀」が共通してみられた。第VI期では第98・133号住居跡から出土しており、第98号住居跡からは「8」がI類、第133号住居跡からのものは不明であった。墨書土器は坏にみられた。グリッドからは「字」が見られIV類であり、他は不明であった。

B地点からは第III期にAピット群P₁より2点出土し「中」がIV類、不明がI類である。第V

期の第6号住居跡出土の7点は不明であった。グリッドは「俣」が3点でI類が2点、IV類が1点、「檜前」が1点でI類であった。

C地点からは第V期の第2A・2B号住居跡から出土し、第2A号住居跡からは、「俣」が2点でII類が1点、IV類が1点、「怙」が1点でI類であった。第2B号住居跡は「俣」が1点でII類であった。

この様にA地点では第III期より、B地点でも第III期から、C地点では第V期にそれぞれ表われ、各地点に共通するのは「俣」である。A地点では第V期の第104号住居跡より、B地点ではグリッドより、C地点では第V期の第2A・2B号住居跡から出土しており、時期的に、地域的に相当近い有機的な関係が推定される。

墨書土器については、性格の研究がなされている(鈴木 1978)(佐藤 1982)。また、千葉県立房総風土記の丘では墨書土器の集成がされた(風土記 1977)。それによれば、A地点第100号住居跡の「佛」は寺に関係の深いものとして、B地点の「檜前」が氏の名の人の名として、また、他は集落に関係があるものとして分類されている。特に、「檜前」は、成田市L0c14より2点出土している(天野 1981)。この「檜前」については既に報告されている(根本 1984)のでここでは省略したい。

5 スラグについて(図版178・179)

A地点からは、スラグが遺構内及び各グリッドから少いながら出土している。また、羽口の小破片が数点グリッドから出土している。遺構内からの出土としては第13B・31・40・44・45・49・51・54・104・116号住居跡がある。これらの遺構で古墳時代に属するのは、第31・40・49号住居跡である。第31・49号住居跡からは覆土中からの出土であるが、第40号住居跡からは床面直上から若干の砂鉄とスラグが出土している。第40号住居跡は他の住居跡と違い、平面形は隅丸台形を呈し、焼土が3ヶ所から発見されていることから、工房跡の可能性が推定されている。歴史時代第I期の第54号住居跡、第II期のスラグ15点を出土している第44号住居跡、第III期の第13B号住居跡、第IV期の製錬炉のササ入り炉壁材を出土した第45号住居跡とスラグ1点のみ覆土中から出土した第104号住居跡、第V期の坏内からスラグが出土した第51号住居跡(住居跡は古墳時代第II期であるが、覆土最上層から出土したスラグ入坏は歴史時代第V期である)、第VI期の第116号住居跡があり、スラグ出土住居跡の時期は広範囲に及ぶ。これらの遺構で、確実に製鉄が実施されていた証拠となるのは、第40・51号住居跡のものである。第40号住居跡出土の甕は全体的にイビツであり古墳時代のものであるが覆土下層からの出土であった。最も信頼性のあるものは、第51号住居跡出土スラグ入り坏であり歴史時代第V期である。スラグも鍛冶滓であり、また、羽口も出土していることから、鍛冶が本遺跡で数期にわたって行われていたことが窺われる。科学分析としてスラグ分析を実施し、「研究紀要7」と同じ方法を用いた。

分析試験結果報告書

RECEPTION No. = 14769

(%)

様式	A1B2	コード	DZ456	受付日	85/12/19	報告日	86/01/10	納期日	85/12/27		
依頼者	(勸千葉県文化財センター)										
品名	遺跡出土鉄滓										
試料番号	項目	TFe	FeO	MFe	SiO2	Al2O3	CaO	MgO	P2O5	S	Cu
7865	322002-44-30	78.0	15.5	45.4	1.70	0.58	0.33	0.24	0.156	0.058	0.010
7866	51-2	53.4	8.42	0.11	6.50	2.19	0.86	0.37	0.297	0.051	0.008
7867	104-1	56.1	50.9	0.09	15.6	3.73	1.10	0.32	0.116	0.040	0.007
7868	1A-58	9.60	0.86	0.04	61.3	15.7	2.43	1.47	0.138	0.004	0.005
7869	1A-90	6.79	0.46	0.03	67.5	15.5	1.41	1.03	0.078	0.005	0.005
7870	2B-35	54.2	45.0	0.18	11.1	3.57	1.97	0.83	0.329	0.035	0.004
7871	2B-46	55.7	44.6	0.18	13.8	4.16	1.76	0.64	0.381	0.033	0.007
試料番号	項目	Cr	TiO2	Mn	C	V	C.W				
7865	322002-44-30	0.057	2.35	0.06	0.789	0.038	2.82				
7866	51-2	0.020	1.34	0.09	1.67	0.047	7.59				
7867	104-1	0.006	0.41	0.07	0.258	0.014	1.54				
7868	1A-58	0.014	1.95	0.16	0.061	0.036	0.18				
7869	1A-90	0.009	1.16	0.15	0.258	0.020	0.38				
7870	2B-35	0.018	3.17	0.13	0.425	0.056	1.13				
7871	2B-46	0.021	0.76	0.11	0.235	0.071	1.35				

川鉄テクノリサーチ株式会社
総合検査・分析センター 千葉営業所

参考文献

- 天野努 1974 「村上込の内遺跡の調査」『八千代村上遺跡群』 房総資料刊行会
- 天野努 1981 「L o c 14」『公津原』II (助千葉県文化財センター
- 柿沼修平他 1973 「大森第2遺跡」『京葉』 千葉県都市公社
- 柿沼修平他 1982 「房総における鬼高期の研究」『日本考古学研究所集報』IV 日本考古学研究所
- 窪田蔵郎 1983 『製鉄遺跡』 ニューサイエンス社
- 桑原護他 1977 『間野台・古屋敷』 間野台・古屋敷遺跡調査団
- 越川敏夫・長内美知枝 1983 「下総東部における奈良・平安時代の土器編年試案」『房総における奈良・平安時代の土器』
- 阪田正一 1984 『八千代市権現後遺跡』 (助千葉県文化財センター
- 阪田正一 1985 『八千代市北海道遺跡』 (助千葉県文化財センター
- 鈴木定明他 1982 『研究紀要』7 (助千葉県文化財センター
- 佐藤武雄 1982 『墨書土器』 船橋市郷土資料館
- 鈴木仲秋 1978 「墨書土器について」『千葉県の歴史』第16号
- 高田博他 1980 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書』II (助千葉県文化財センター
- 高野博光他 1981 『布佐・余間戸遺跡』 我孫子市布佐・余間戸遺跡調査会
- 田坂浩 1979 「ムコアラク遺跡」『千葉東南部ニュータウン』8 (助千葉県文化財センター
- 種田斉吾他 1975 「有吉遺跡(第1次)」『千葉東南部ニュータウン』3 (助千葉県文化財センター
- 種田斉吾 1978 「有吉遺跡(第2次)」『千葉東南部ニュータウン』5 (助千葉県文化財センター
- 千葉県立房総風土記の丘 1977 『文字は語る』
- 根本弘 1984 「墨書土器を考える」『研究連絡誌』第9号 (助千葉県文化財センター
- 服部哲則 1985 『佐倉市タルカ作遺跡』 (助千葉県文化財センター
- 三浦和信 1976 『吉高家老地遺跡』 吉高家老地遺跡調査会
- 矢戸三男他 1979 『千葉市西屋敷遺跡』 (助千葉県文化財センター

第3節 結語

本報告書は、印旛郡酒々井町伊篠に所在する、A～D地点の発掘調査報告書である。

本遺跡群の立地は、印旛沼に注ぐ江川によって樹枝状に開析されており、A～C地点は同一台地上に、D地点は谷を隔てた隣りの台地であった。調査の成果を時代順に要約しておきたい。

先土器時代

A地点からブロックが1ヶ所検出されている。このブロックは削器3点、剥片40点、折断剥片3点からなり母岩である砂岩・玄武岩の接合資料が多く5例が認められている。

縄文時代

早期から後期まで多くの遺構・遺物が認められるが、その殆どは堀之内I式であった。所謂単純遺跡と言って良い程である。堀之内I式に属する住居跡が20軒検出されている。このことは、印旛沼周辺遺跡はもとより、県内でもこの時期の集落構成を知る上で貴重な遺跡であることが指摘できる。この住居跡は更に3期に分類されている。住居跡形態としては柄鏡形住居跡が2軒検出され、他は円形の平面形を呈し、柱穴は壁に沿って円形状に配列されている。炉は地床炉であり、中央やや北側に位置し、炉内の焼土がドーナツ状を呈して炉底は深いピット状をなしていた。特に新第140号住居跡の炉はドーナツ状に粘土を貼付けた特殊な形態であった。その他の施設として住居跡中央に柱穴が認められ、住居跡上屋構造を解明する上で貴重な資料となるものであった。遺物も土器、石器、土製品等が豊富に出土しており、特に土器は堀之内I式を3分類し、各期の特徴が指摘され、石器については、各器種の詳細な観察と分布について検討することができた。

古墳時代

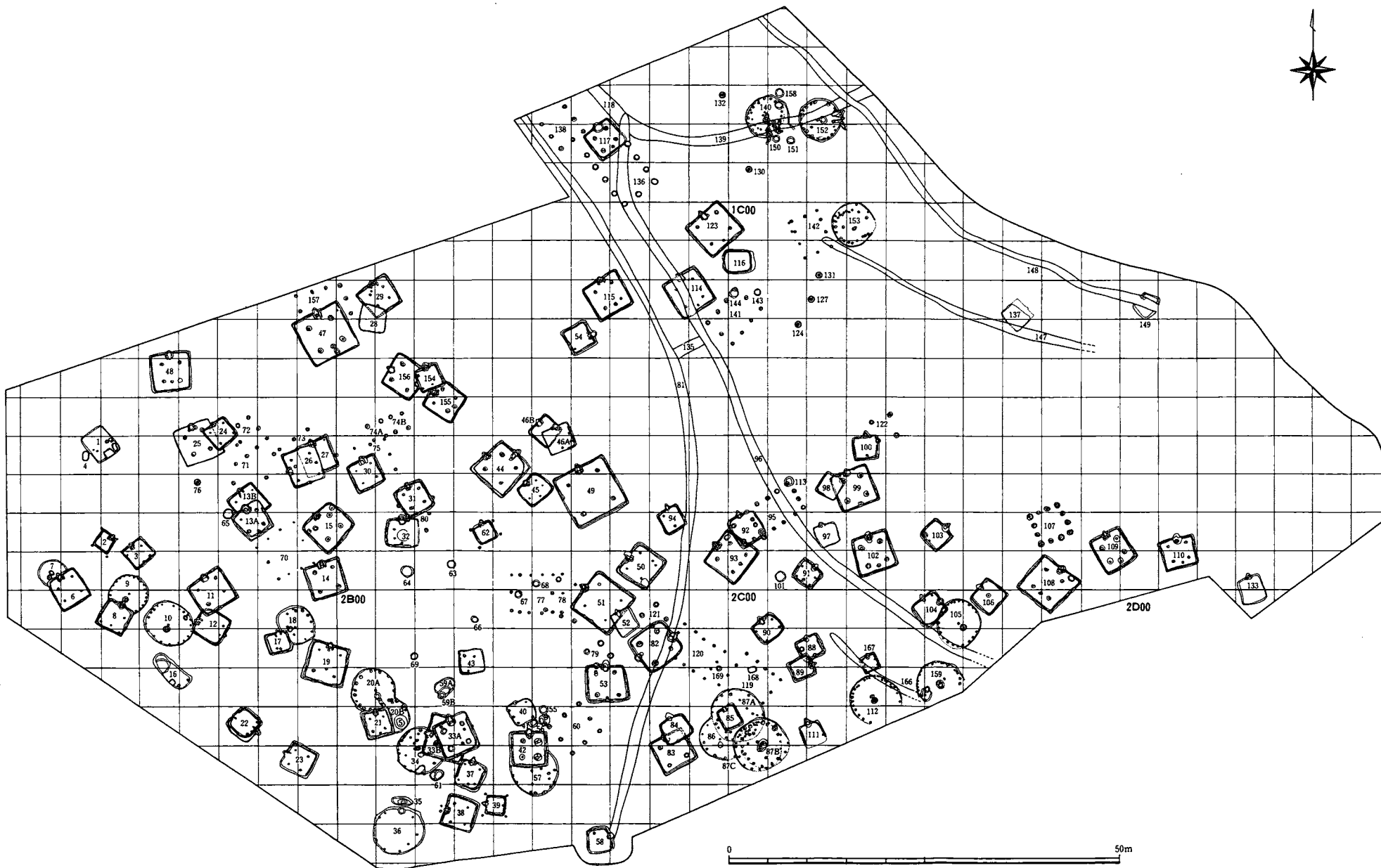
古墳時代後期の鬼高期に属する住居跡が34軒検出された。これらは3期に分類され、住居跡の台地に対する占地は、第I・II期が南西縁辺部に、第III期には台地全域に分布することが判明している。住居跡構造も4本柱を基本として小ピットがカマド対面壁付近に1ヶあるのが主体を占め、面積も約20～30㎡前後が大多数で最も大きな第49号住居跡は52.05㎡であった。遺物としては土器、石器、鉄器等も豊富に出土し、第40号住居跡は鍛冶工房跡の可能性も指摘されている。

歴史時代

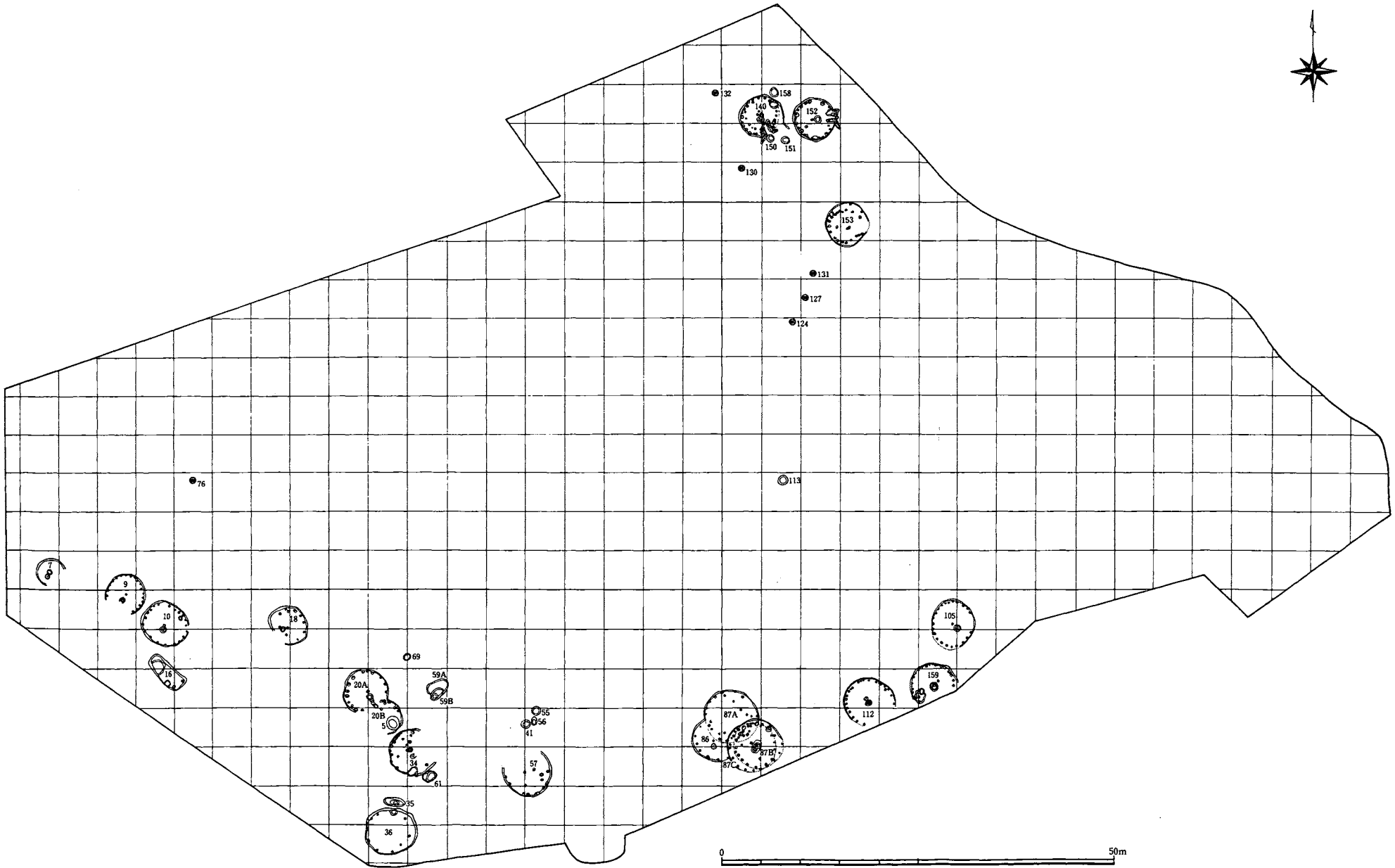
この時期の住居跡はA地点44軒、B地点3軒、C地点4軒、D地点1軒であった。これらは6期に分類され、住居跡構造として4本柱を伴うものは少なく不規則な柱穴配列になることが指摘されている。面積も第I～II期までは約15～20㎡であるが、第IV～VI期には約10～15㎡前後になることが判明した。遺物としては墨書土器の「檜前」が注目され、鍛冶を想定させる第51号住居跡出土のスラグ流入坏が見られた。



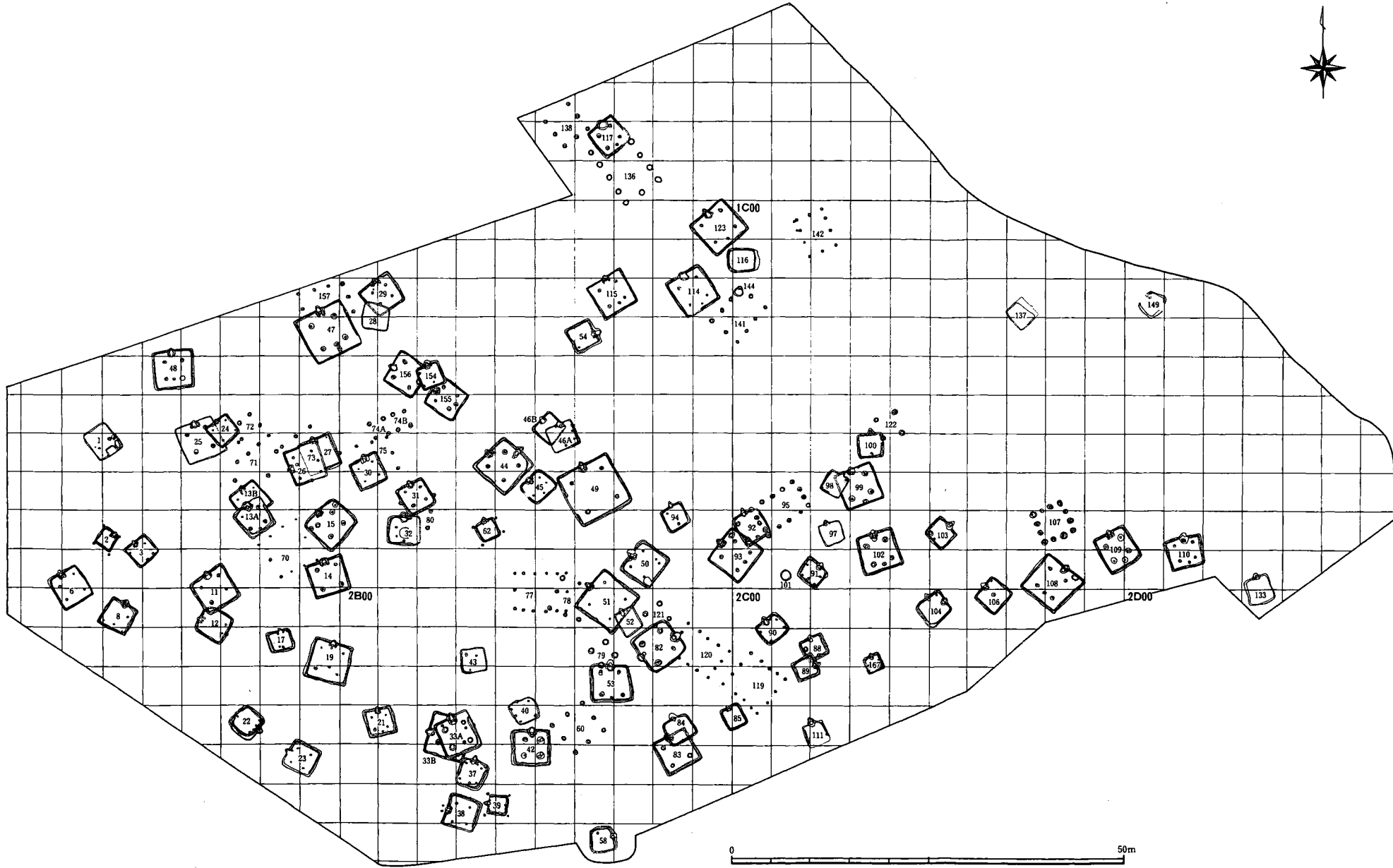
付图1 伊篠白幡遺跡周辺地形图 (1/2,500)



付図2 伊藤白幡遺跡A地点遺構配置図(1/400)



付図3 伊藤白幡遺跡A地点縄文時代遺構配置図 (1/400)



付圖 4 伊藤白幡遺跡A地点古墳・歴史時代遺構配置図 (1/400)

	掘之内式 I			掘之内 II 式
	前葉	中葉	後葉	
1 類				
2 類				
3 類				
4 類				
5 類				
6 類				
7 類				
8 類				
9 類				
10 類				
11 類				
12 類				
注口土器				

付図 5 掘之内式土器集成図 図中の略号は遺構及びグリッドの別と個体番号を示す
 112-6 ……第112号住居跡-6
 グ-1 ……グリッド出土-1

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月29日 発行

酒々井町伊篠白幡遺跡

発行 社団法人 千葉県農業開発公社
千葉県千葉市中央4-13-28 新都市ビル内
財団法人 千葉県文化財センター
千葉県千葉市葛城2-10-1
電話 0472(25)6478

印刷 株式会社 弘文社
千葉県市川市市川南2-7-2

酒々井町伊篠白幡遺跡

1986

社団法人 千葉県農業開発公社
財団法人 千葉県文化財センター

し す い まち い じの しら はた い せき
酒々井町伊篠白幡遺跡

— 図版編 —

1986

社団法人 千葉県農業開発公社
財団法人 千葉県文化財センター

写真図版

A地点



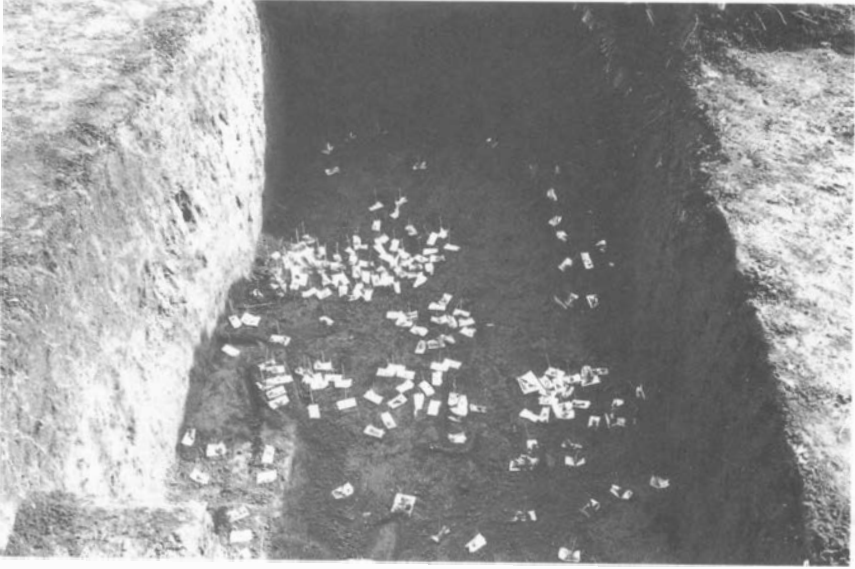
航空写真 (北から)

A地点

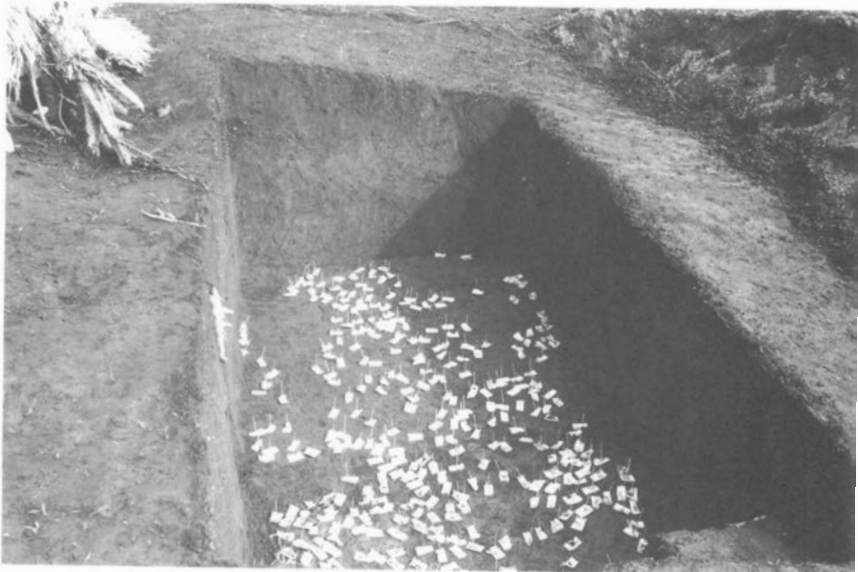


航空写真 (西から)

A地点

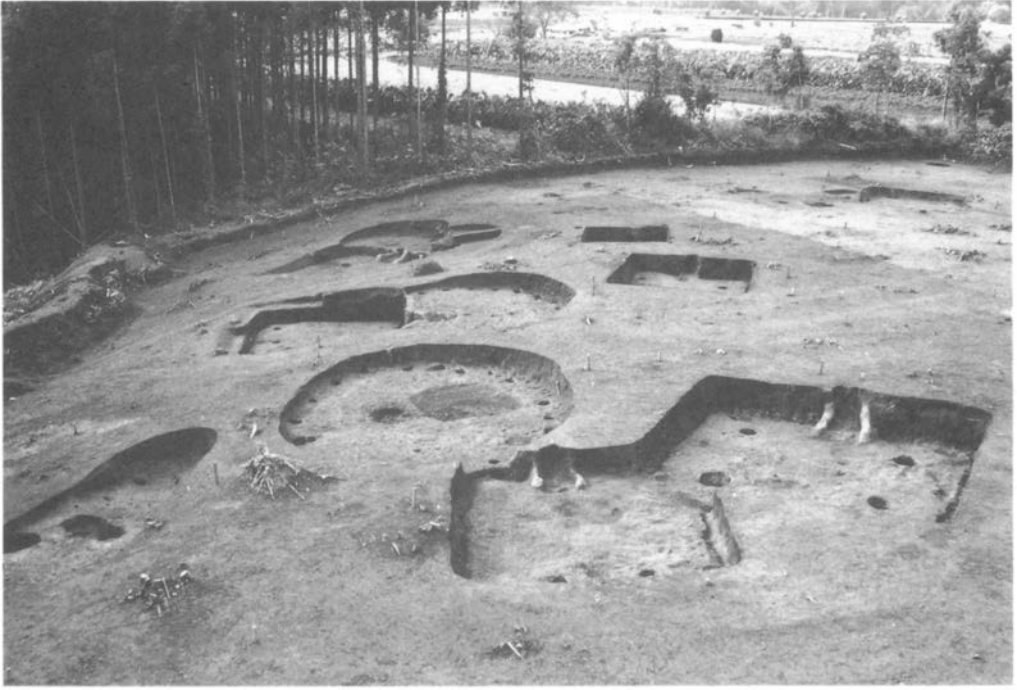


1. 東側斜面小礫群出土状況



2. 同上

A地点



1. 遺跡近景 (東から)



2. 同上 (東から)

A地点



1. 第7号住居跡全景

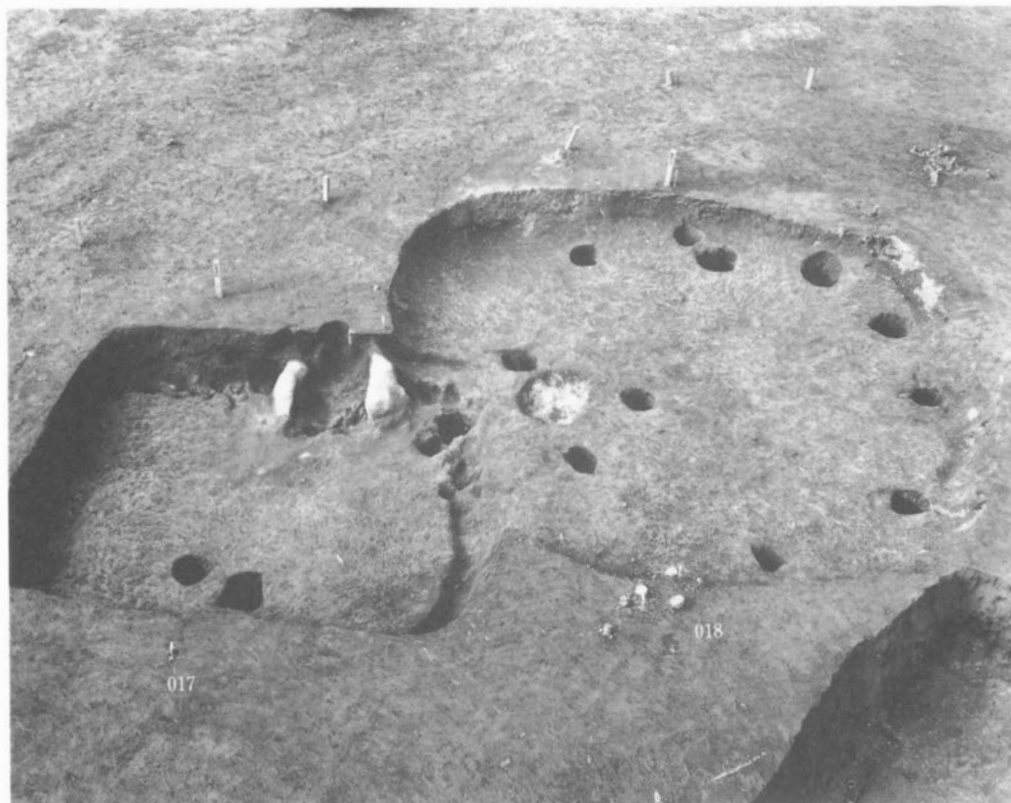


2. 第9号住居跡全景

A地点

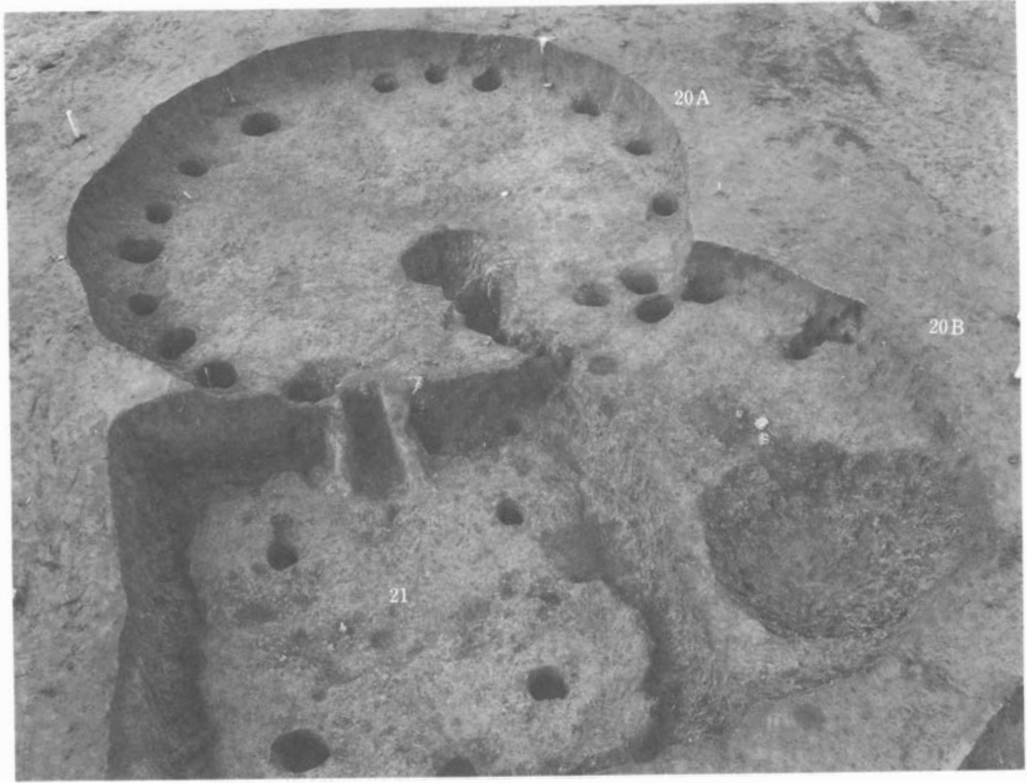


1. 第10号住居跡全景

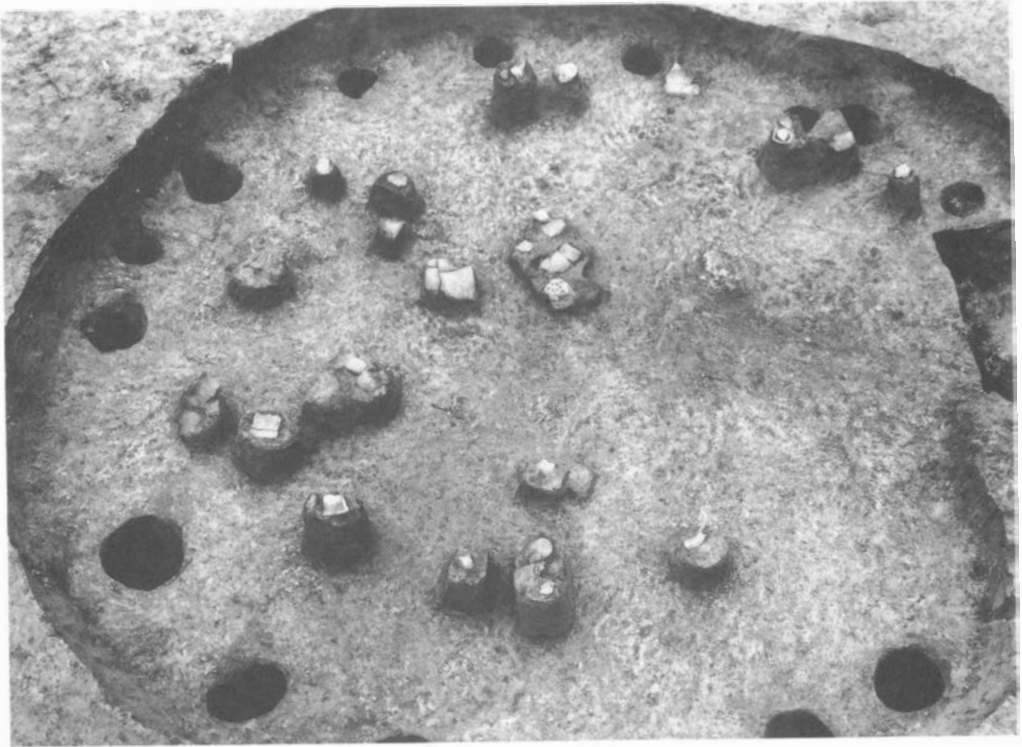


2. 第18号住居跡全景

A地点



1. 第20A・B号住居跡全景



2. 第20A号住居跡遺物出土状況

A地点

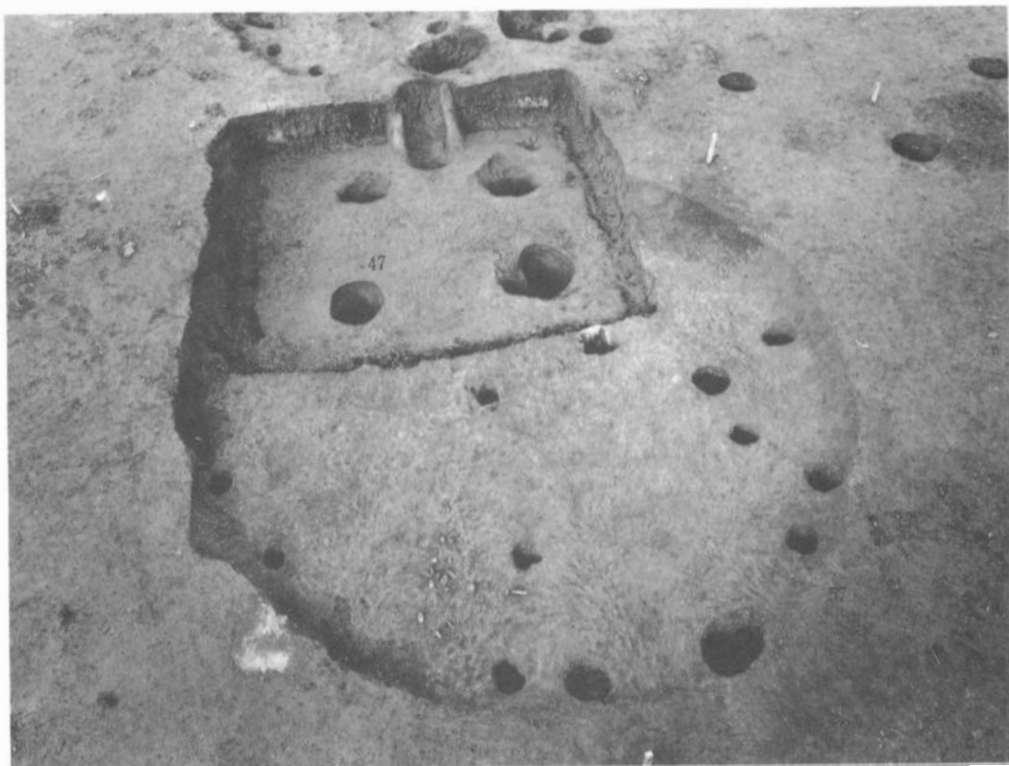


1. 第34号住居跡全景



2. 第36号住居跡全景

A地点

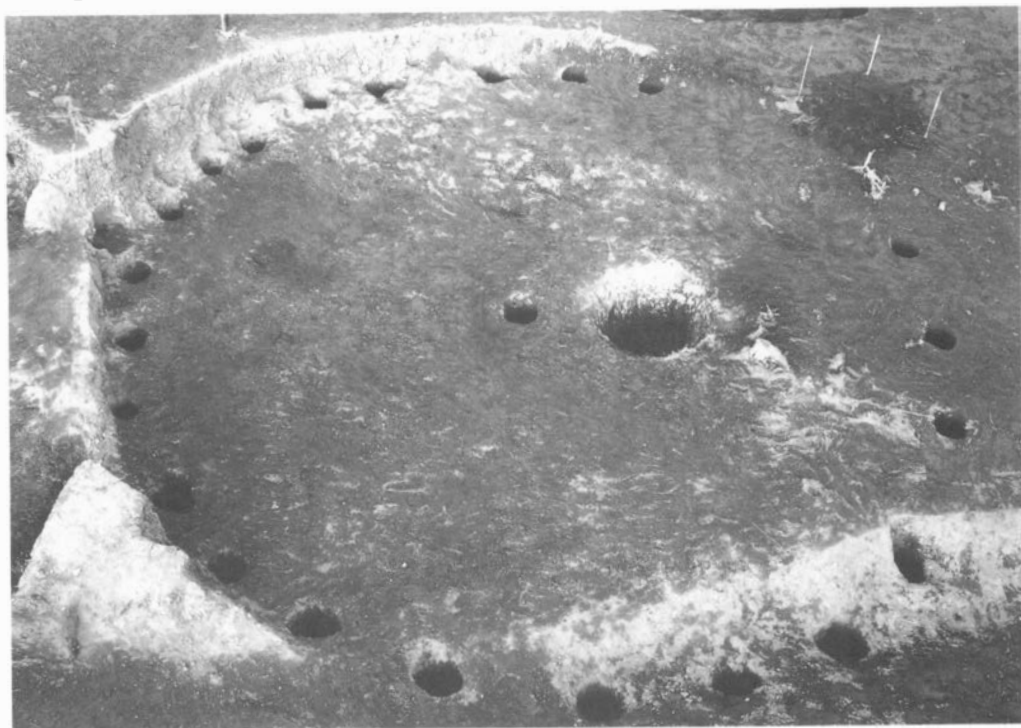


1. 第57号住居跡全景

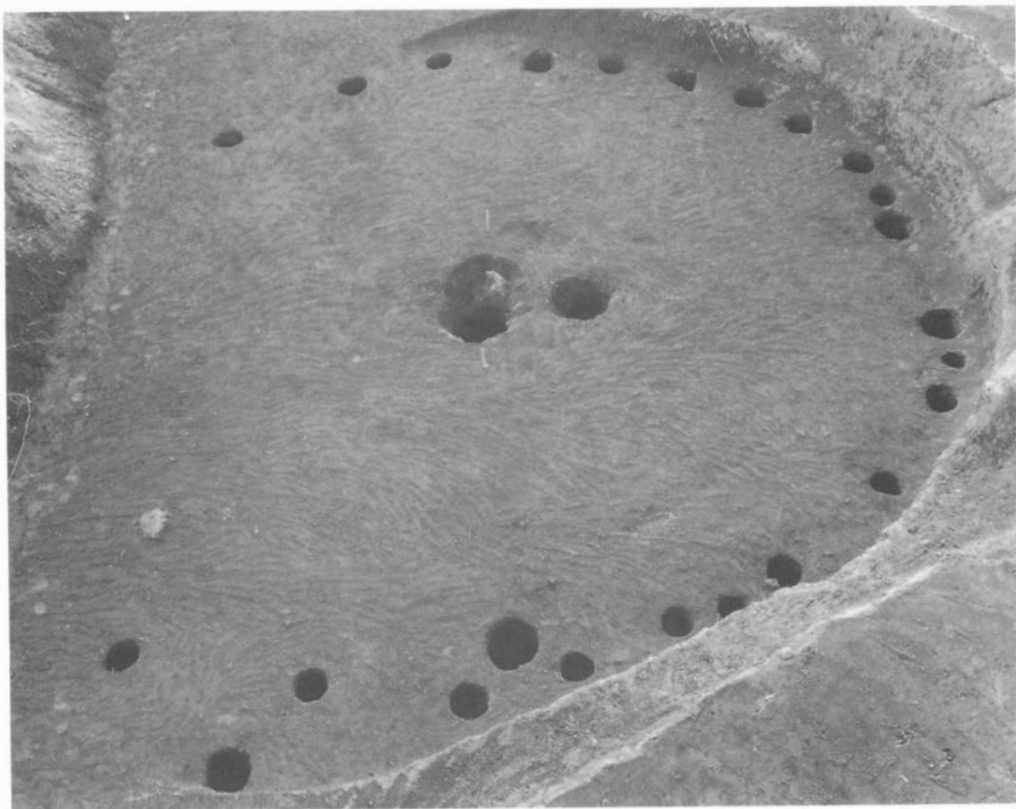


2. 第86、87A・B・C号住居跡全景

A地点

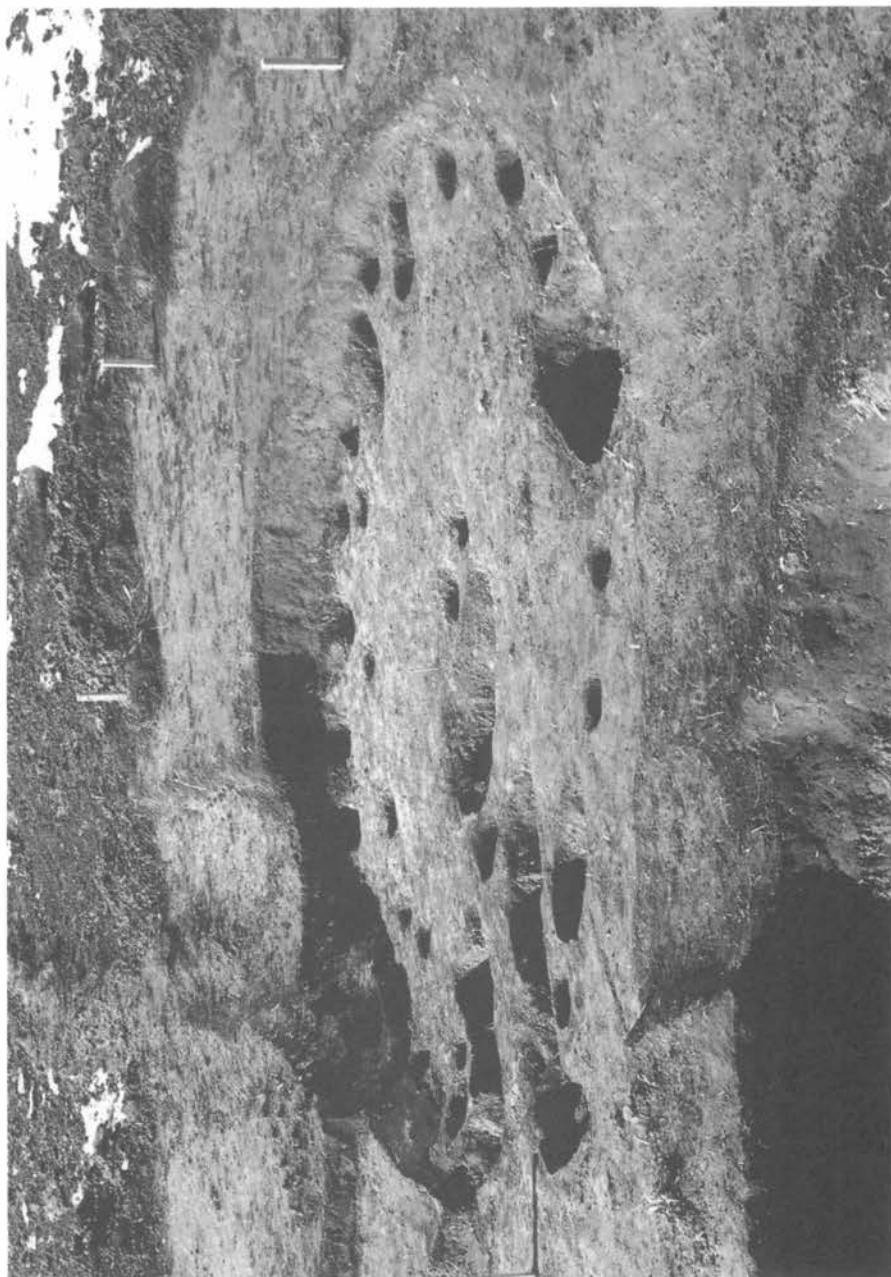


1. 第105号住居迹全景



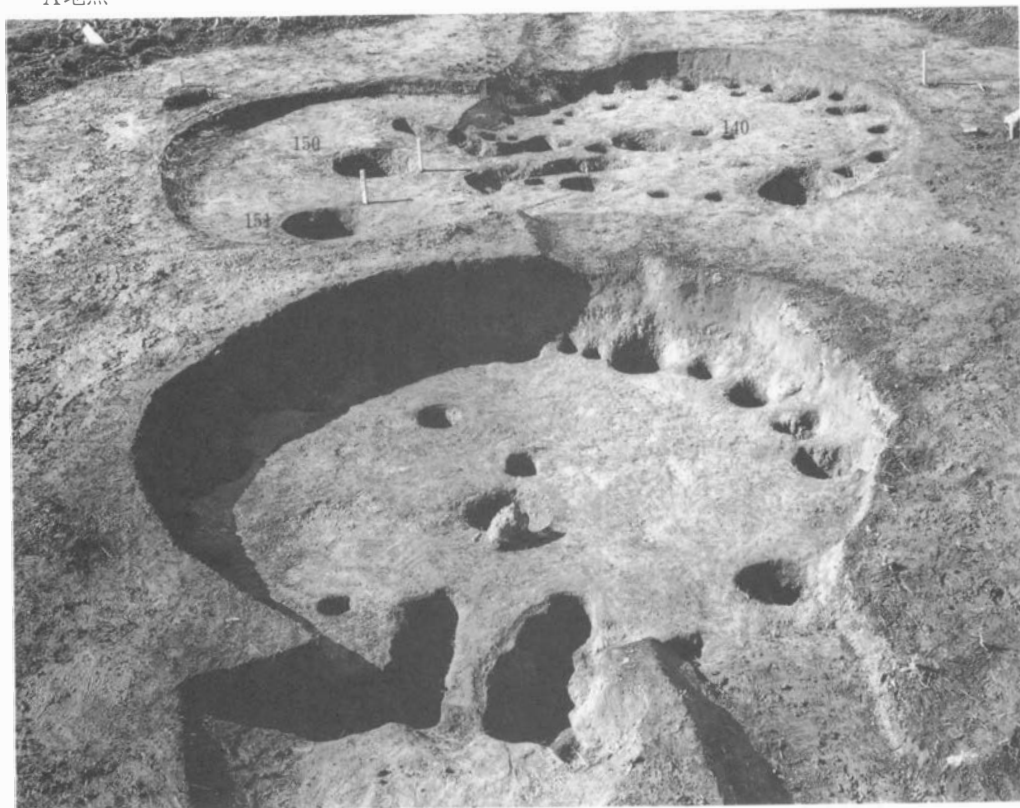
2. 第112号住居迹全景

A地点

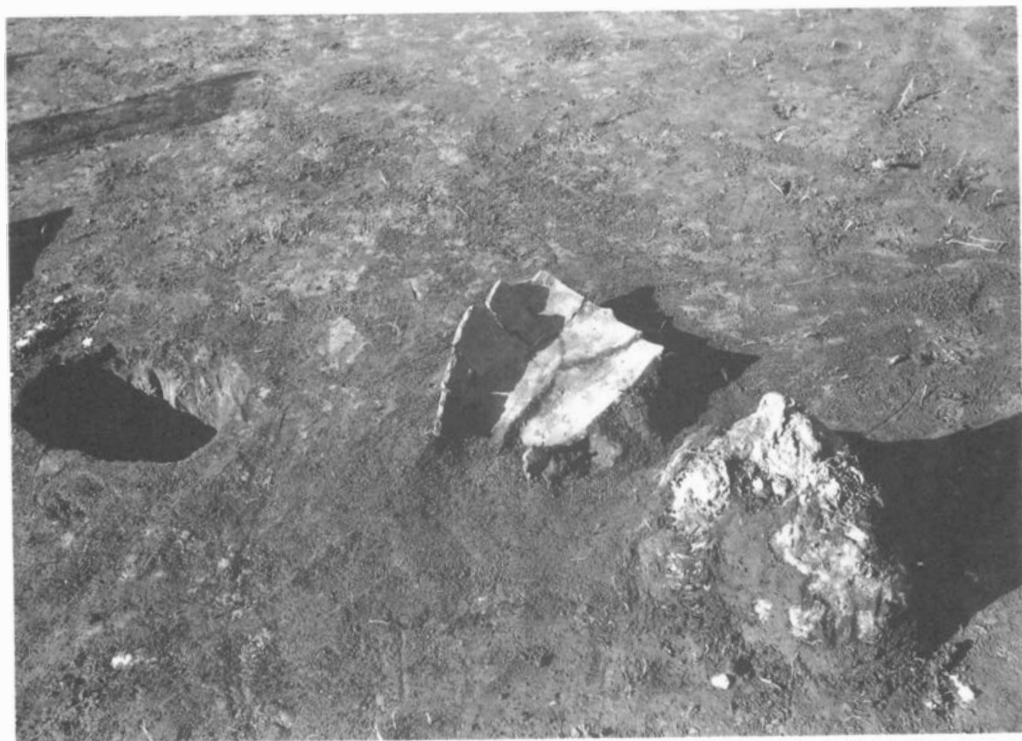


第140号住居跡全景

A地点



1. 第152号住居跡全景

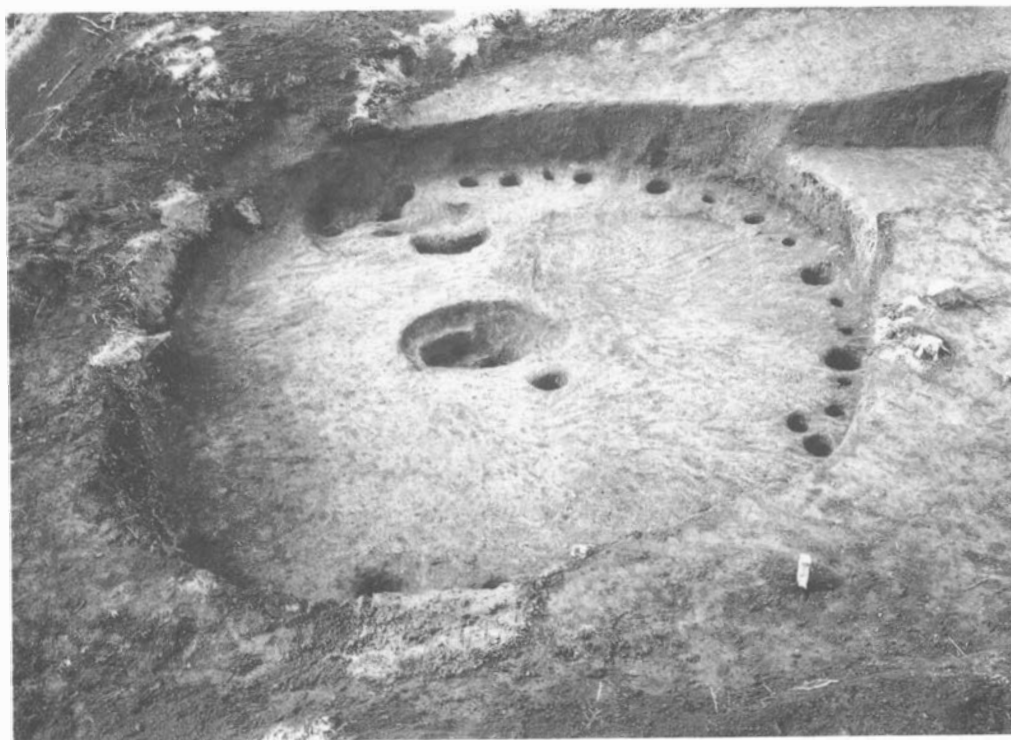


2. 第152号住居跡遺物出土狀況

A地点



1. 第153号住居跡全景



2. 第159号住居跡全景

A地点



1. 第76号埋甕



2. 第124号埋甕

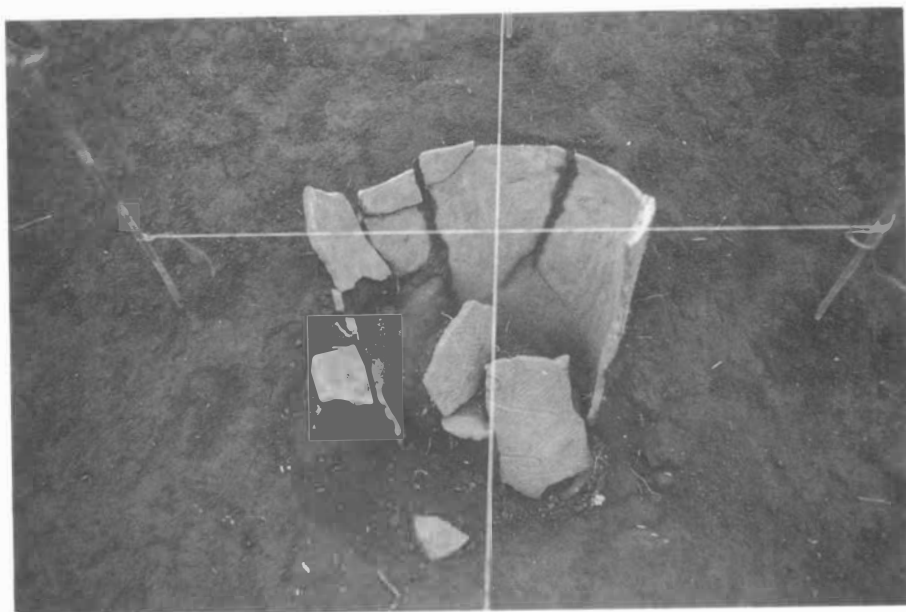


3. 第127号埋甕

A地点



1. 第130号埋甕



2. 第131号埋甕

A地点

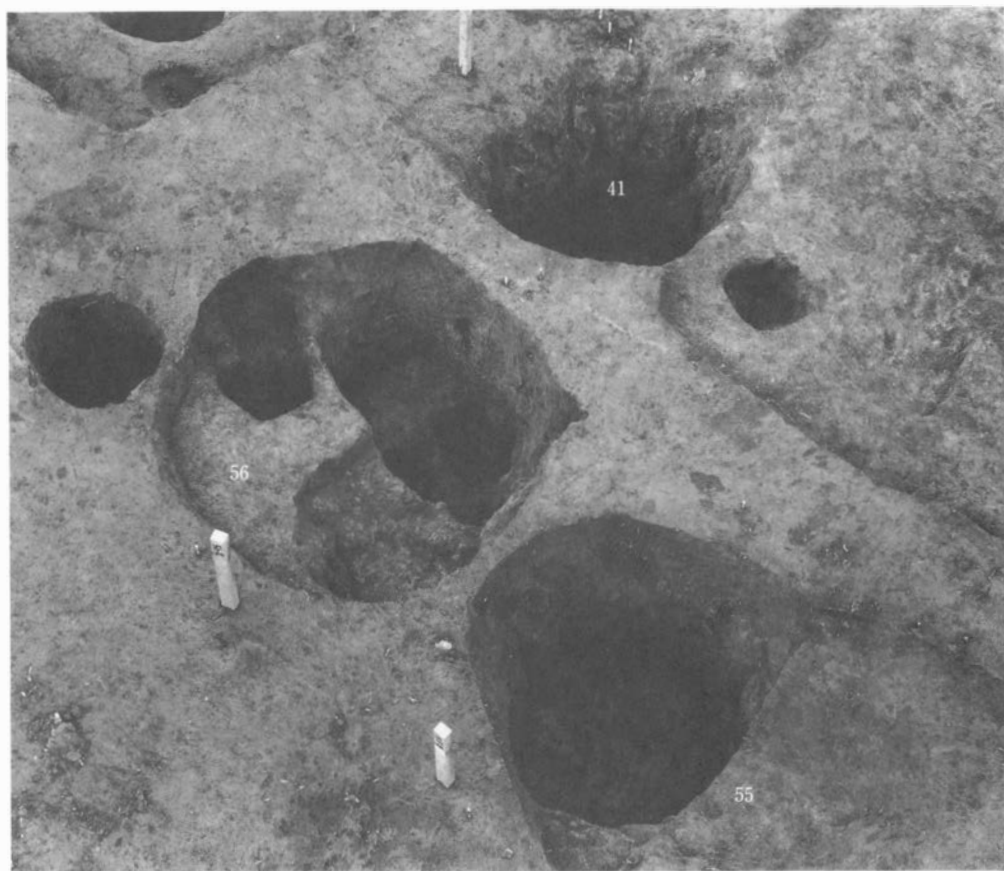


1. 第16号土坛全景



2. 第35号土坛全景

A地点



第41、55、56号土坑全景

A地点



7-1



7-5



7-6



7-3



9-1



9-5



9-2



10-1



10-2



10-3



10-4

第7、9、10号住居跡出土土器

A地点



18-2



18-3



18-4



20A-1



20A-2



20A-3



20A-5



20A-6



20A-10

第18、20A号住居跡出土土器

A地点



20B-1



20B-5



20B-3



36-1



34-2



34-1



36-3



57-1



87A-1

第20B、34、36、57、87A号住居跡出土土器

A地点



86-1



87B·C-1



87B·C-2



105-1



105-2



105-3



105-4



105-5

第86、87B·C、105号住居跡出土土器

A地点



112-1



112-4



112-5



112-6



112-2



112-16



112-7



112-8

第112号住居跡出土土器

A地点



112-13



112-25



112-14



112-15



112-17



112-18



112-19



112-21



112-23



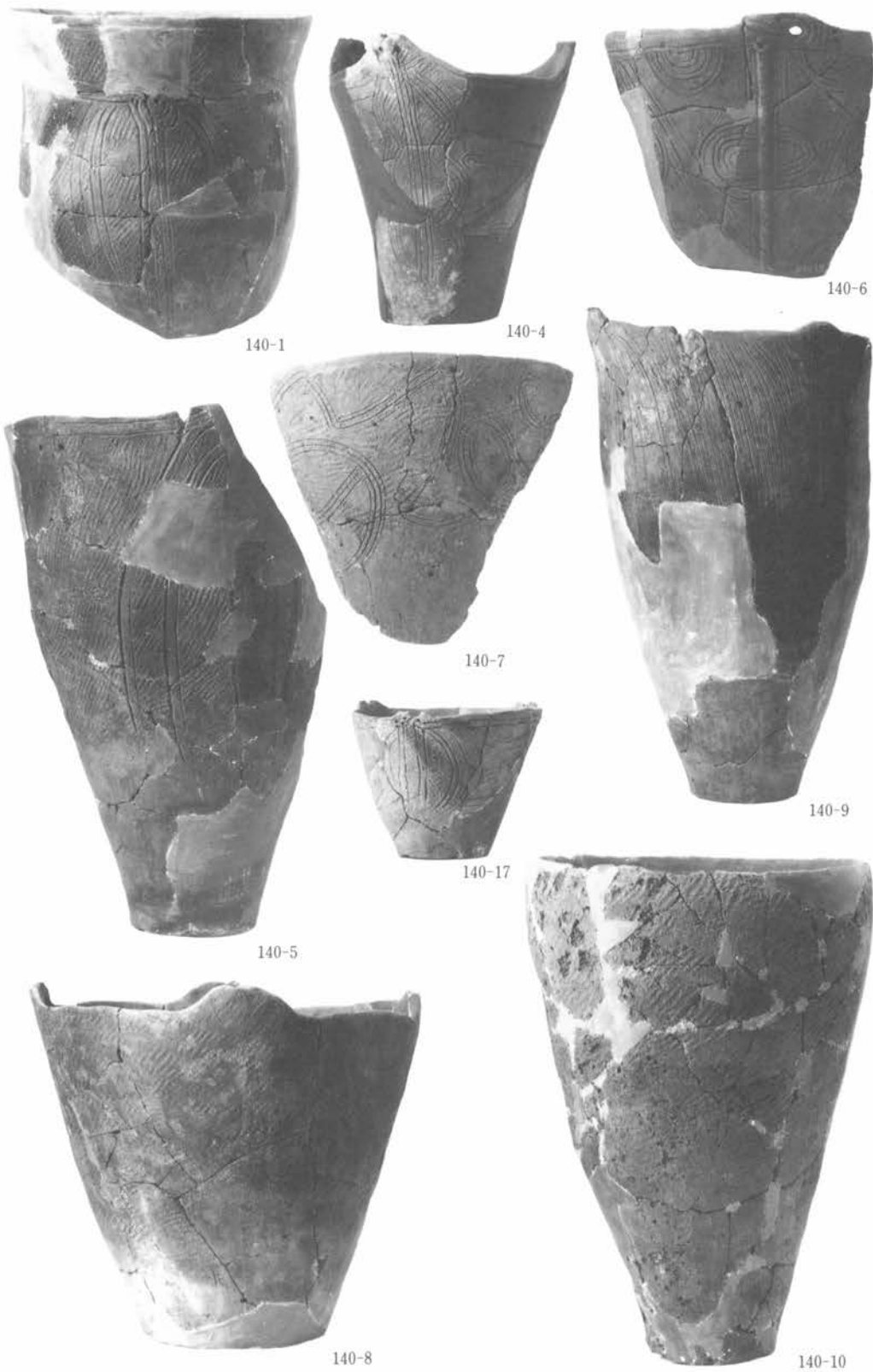
112-24



112-33

第112号住居跡出土土器

A地点



第140号住居跡出土土器

A地点



140-12



140-19



140-21



140-14



140-15



152-1



152-5



152-4



152-6



152-2



152-9



152-15



152-10



152-16

第140、152号住居跡出土土器

A地点



153-1



159-1



76



124



127



130-1

第153、159号住居跡、第76、124、127、130号埋甕出土土器

A地点



130-2



131



132

A地点



35-1



55-3



158-9



59B-7



158-10



5-2



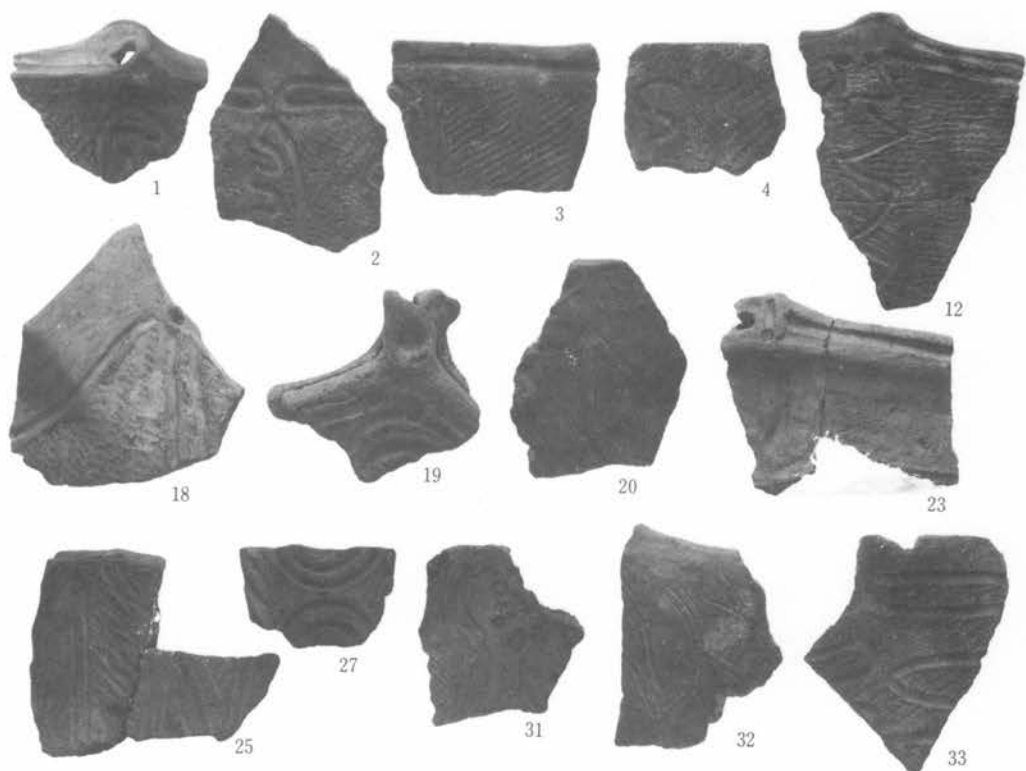
5-1



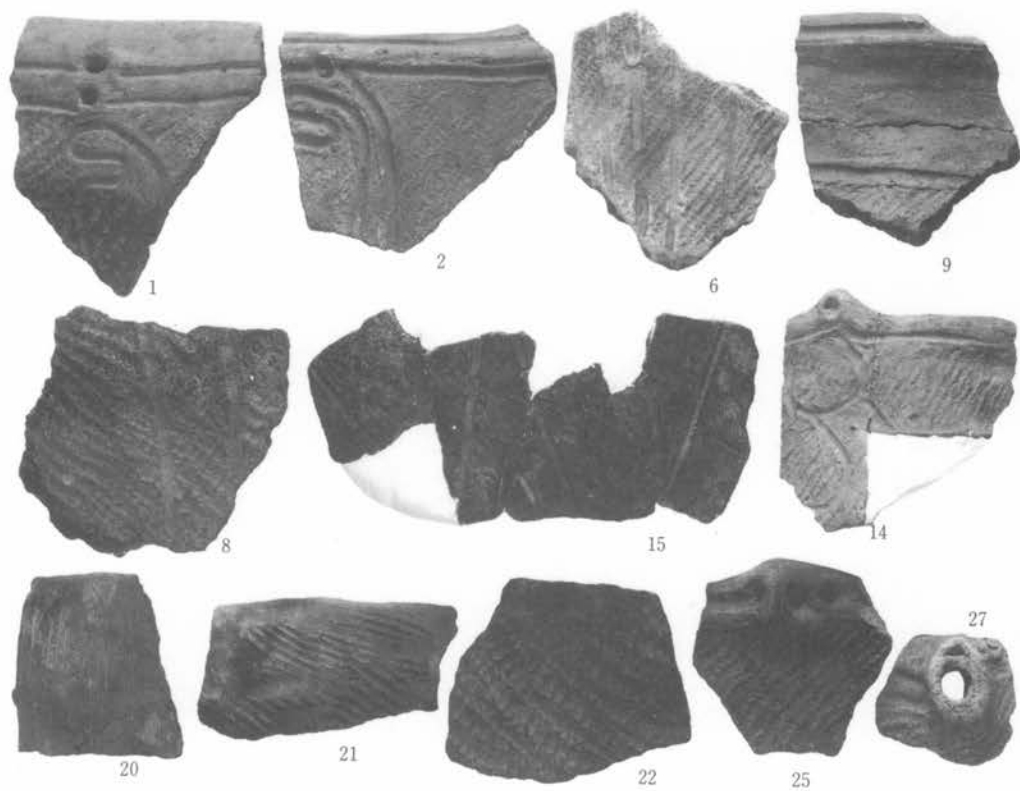
5-3

第 5、35、55、59B、158号土坛出土土器

A地点

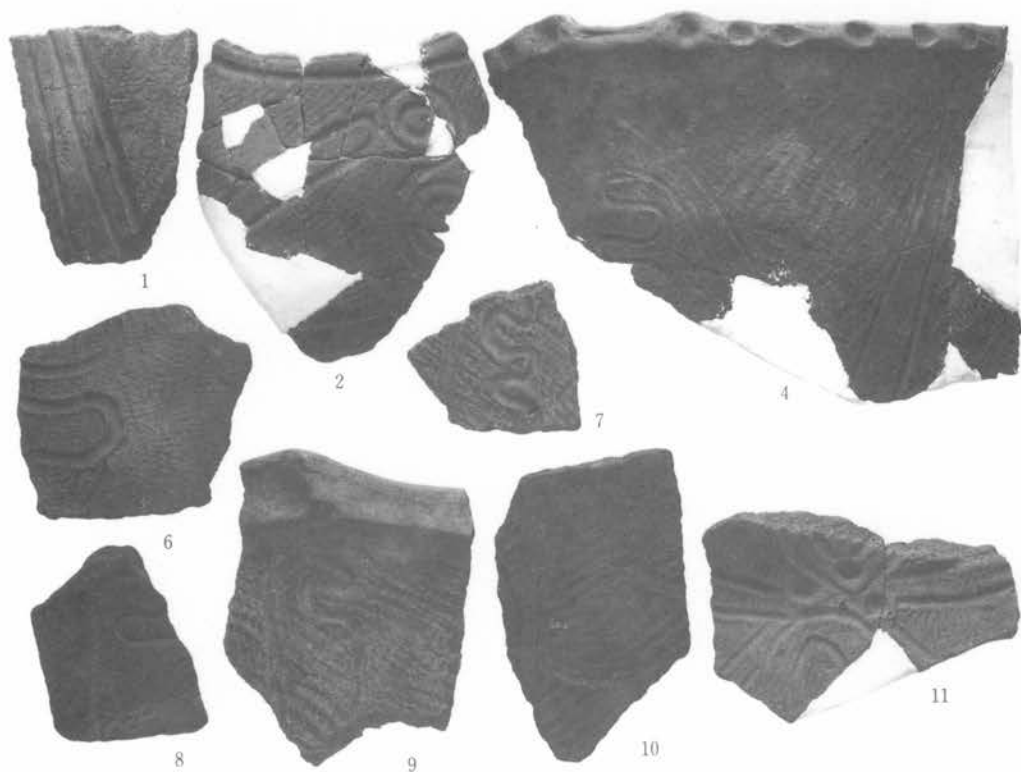


第7号住居跡出土土器

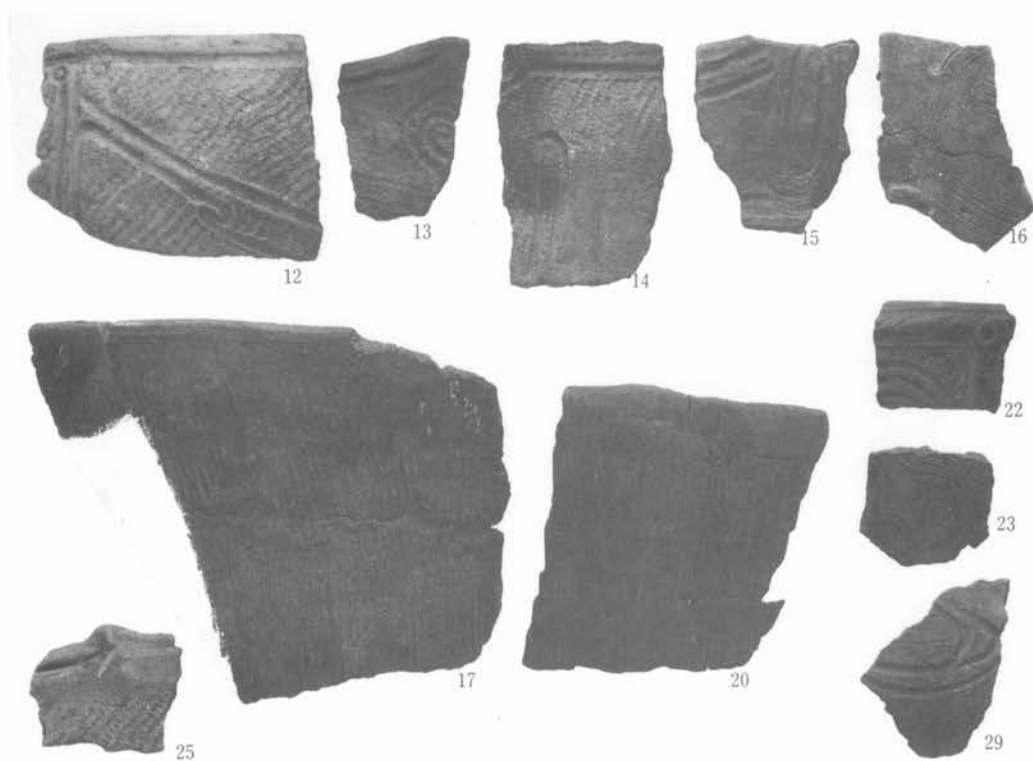


第9号住居跡出土土器

A地点

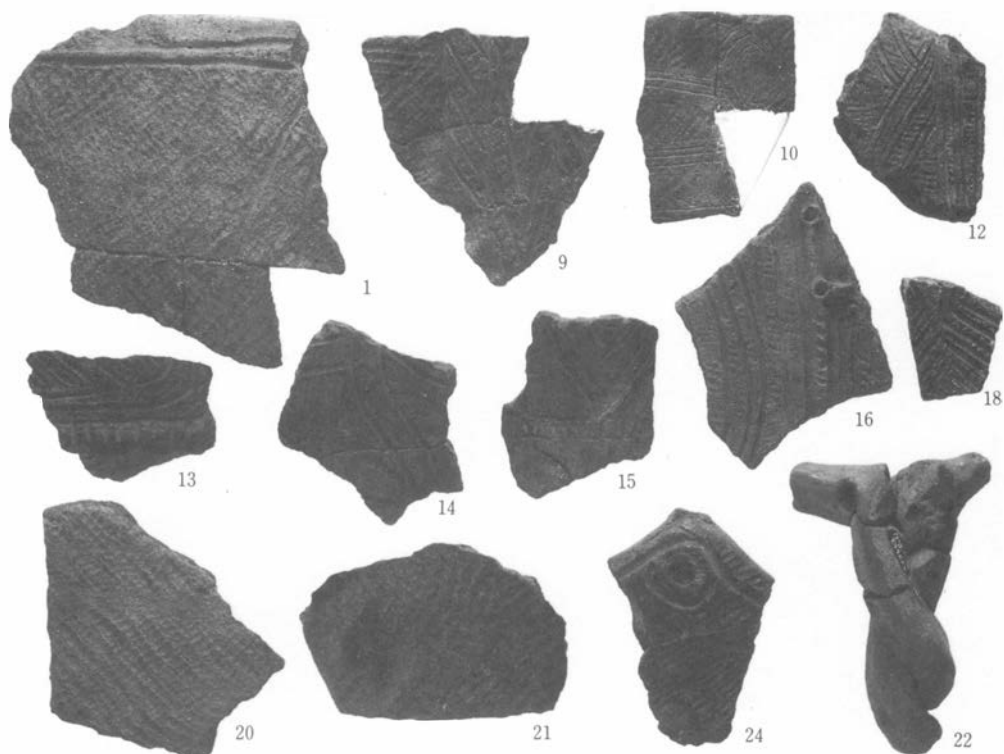


第10号住居跡出土土器(1)

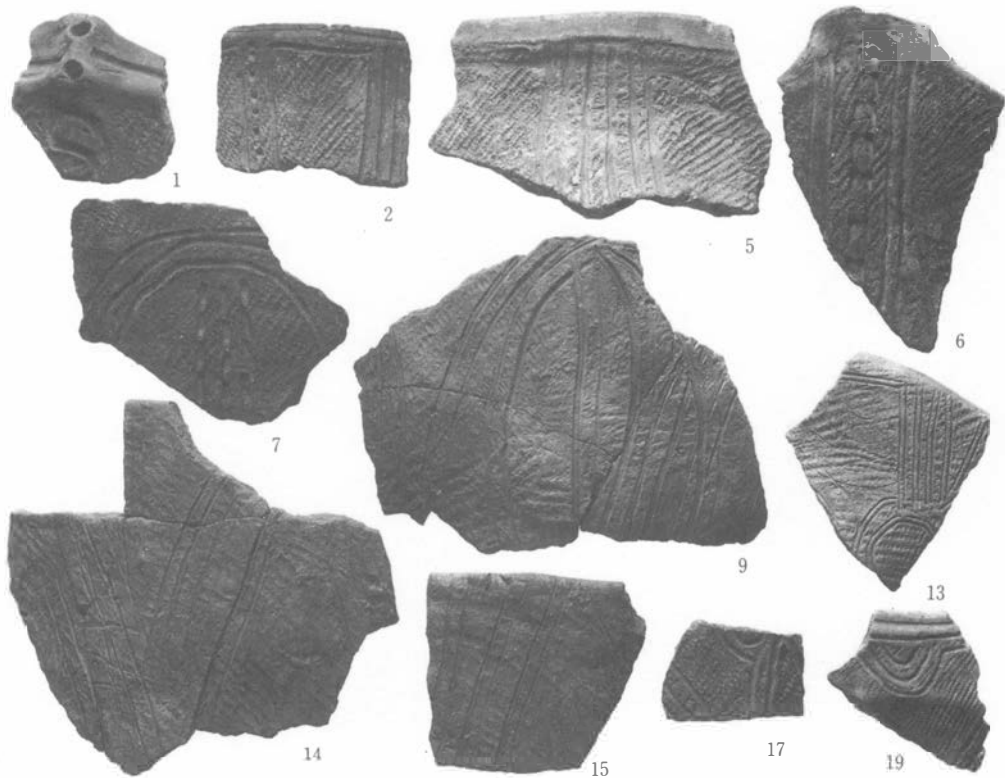


第10号住居跡出土土器(2)

A地点

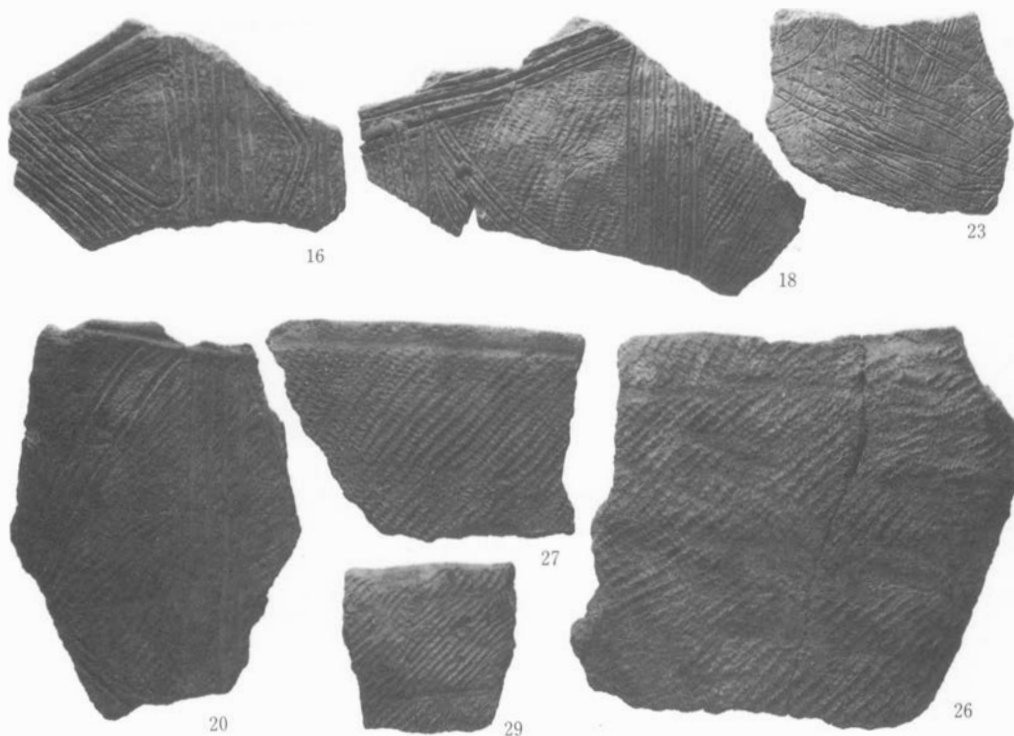


第18号住居跡出土土器



第20A号住居跡出土土器(1)

A地点

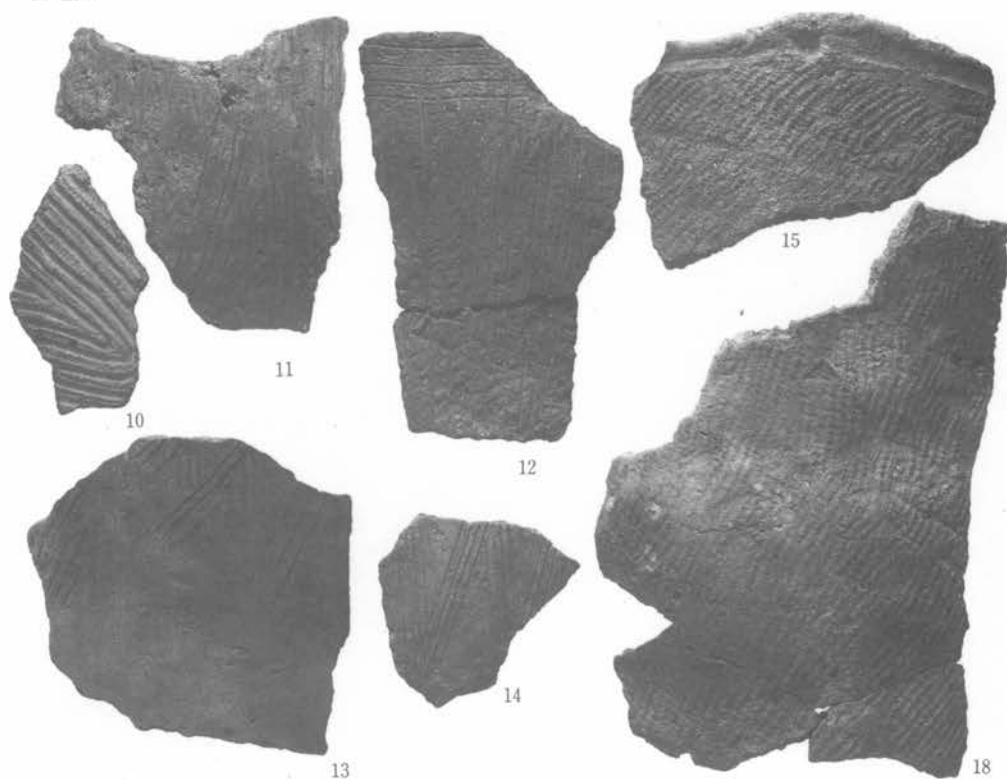


第20A号住居跡出土土器(2)

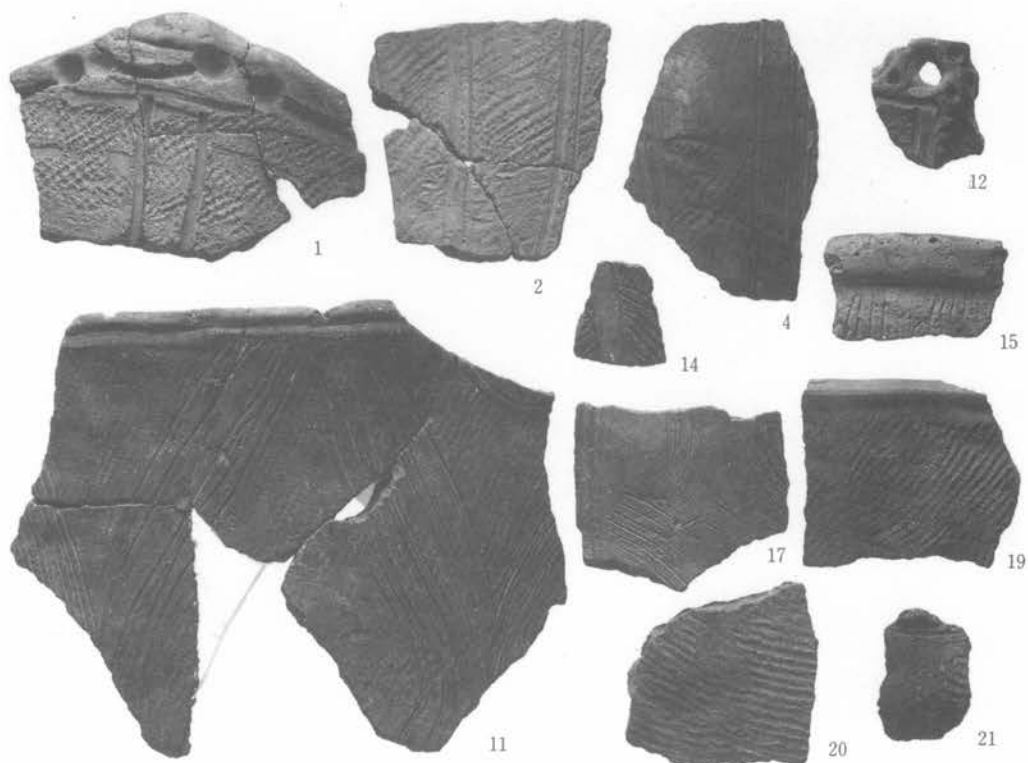


第20B号住居跡出土土器(1)

A地点



第20B号住居跡出土土器(2)



第34号住居跡出土土器

A地点

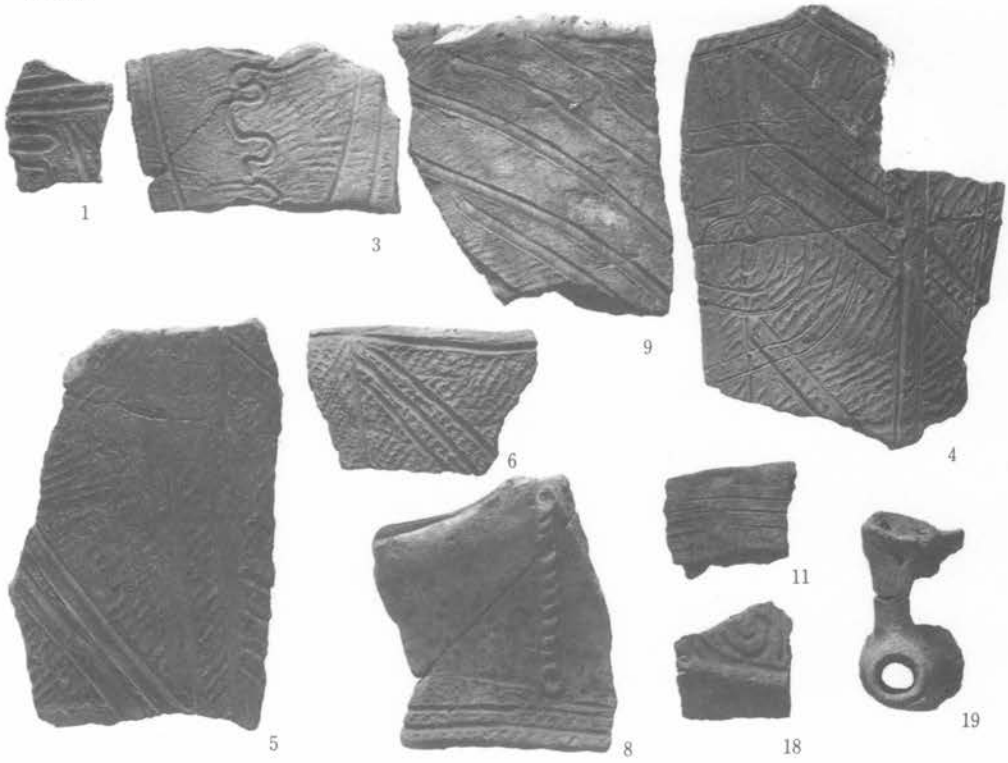


第36号住居跡出土土器(1)

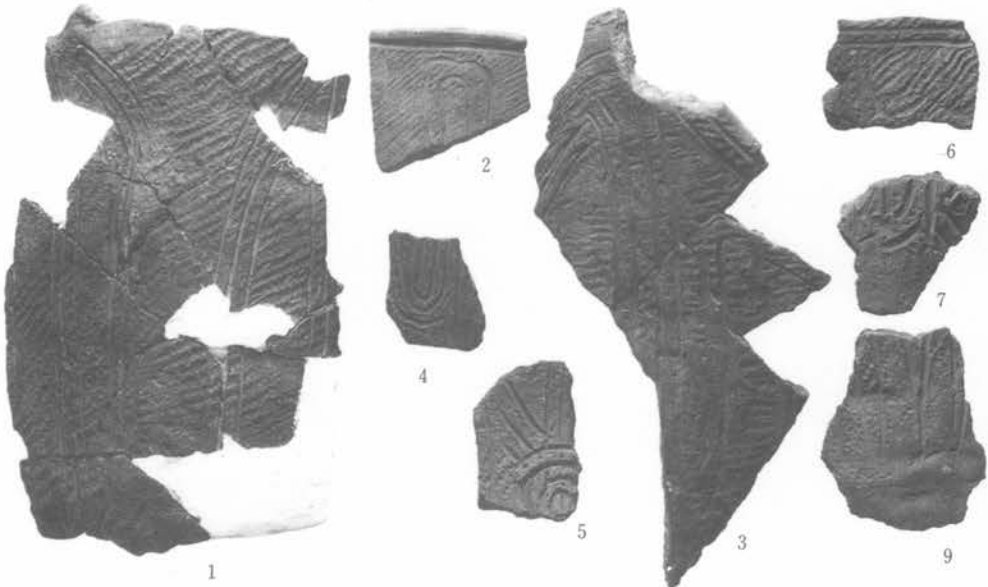


第36号住居跡出土土器(2)

A地点



第57号住居跡出土土器

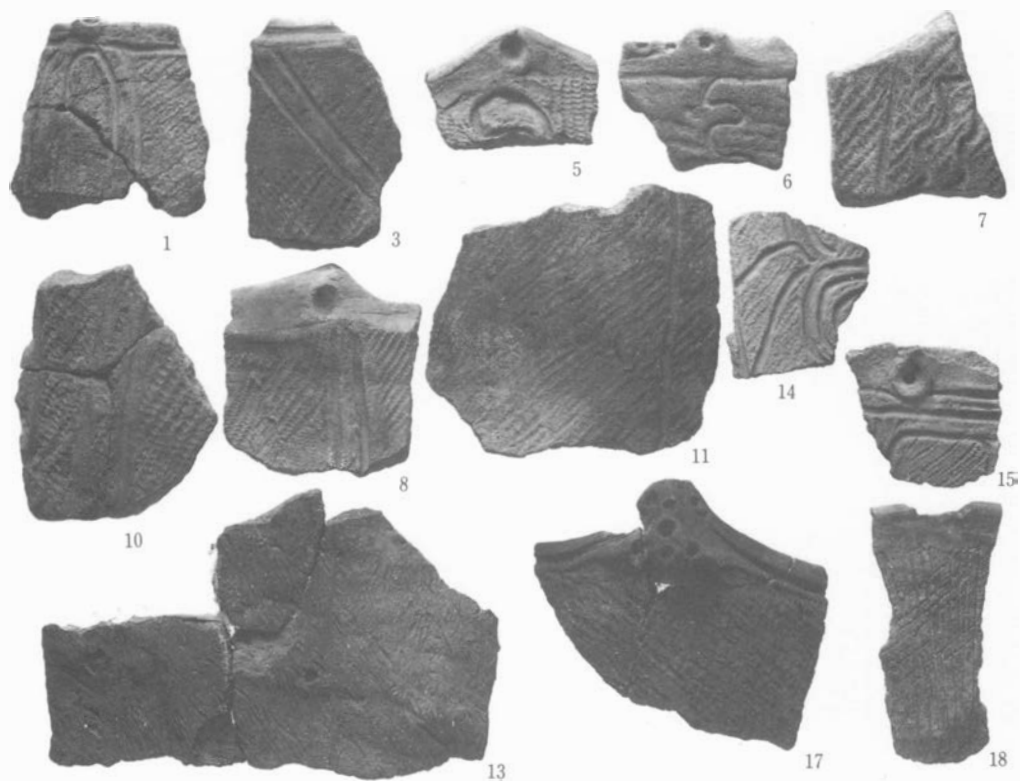


第87A号住居跡出土土器

A地点



第87B·C号住居迹出土土器

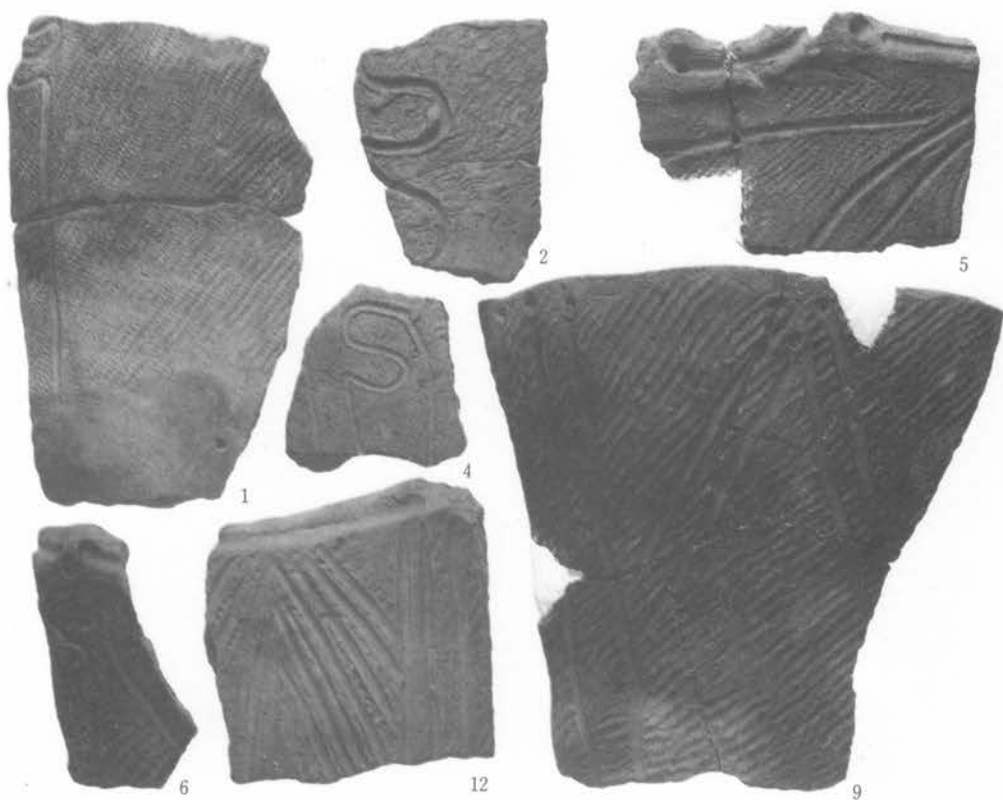


第105号住居迹出土土器(1)

A地点

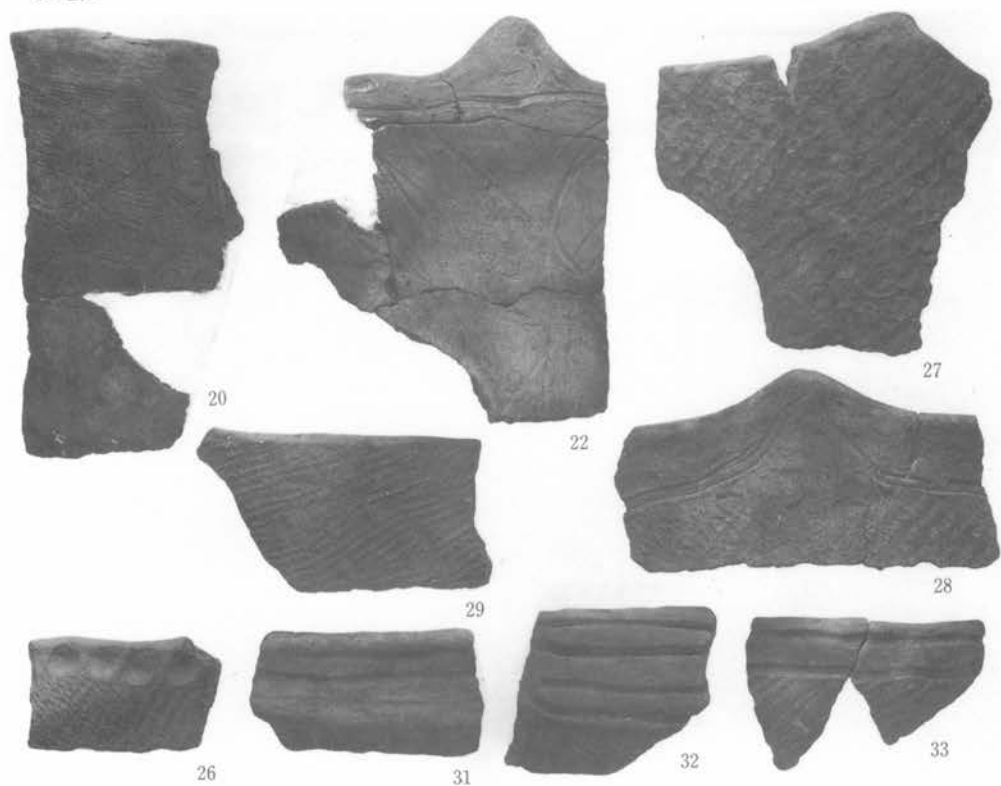


第105号住居跡出土土器(2)

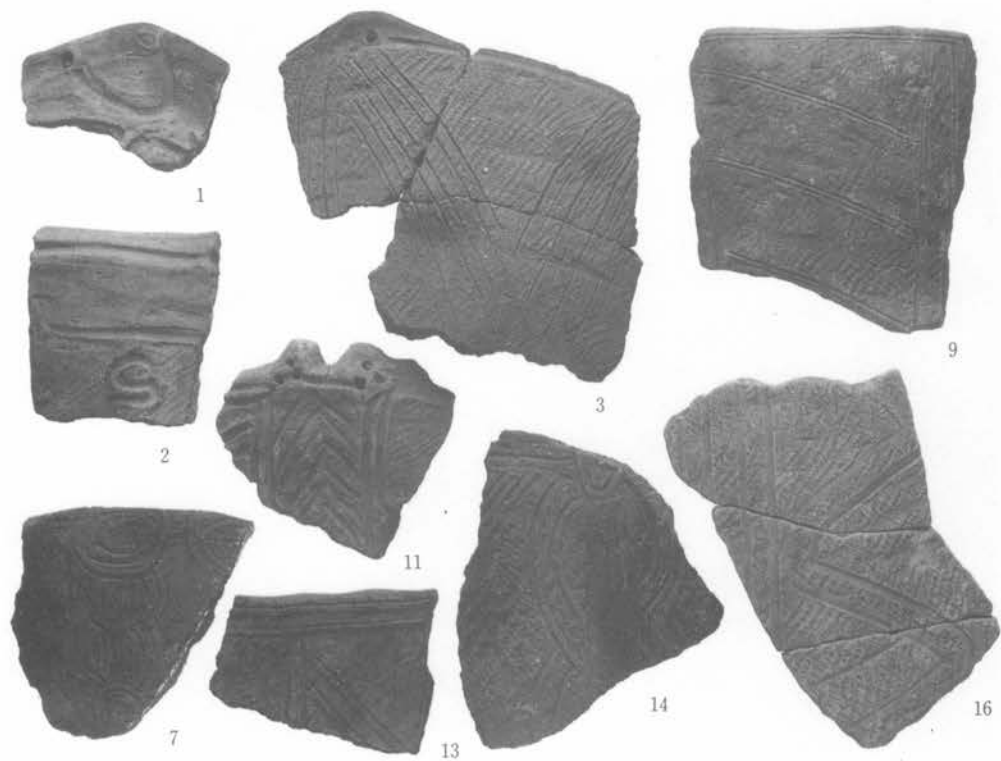


第112号住居跡出土土器(1)

A地点

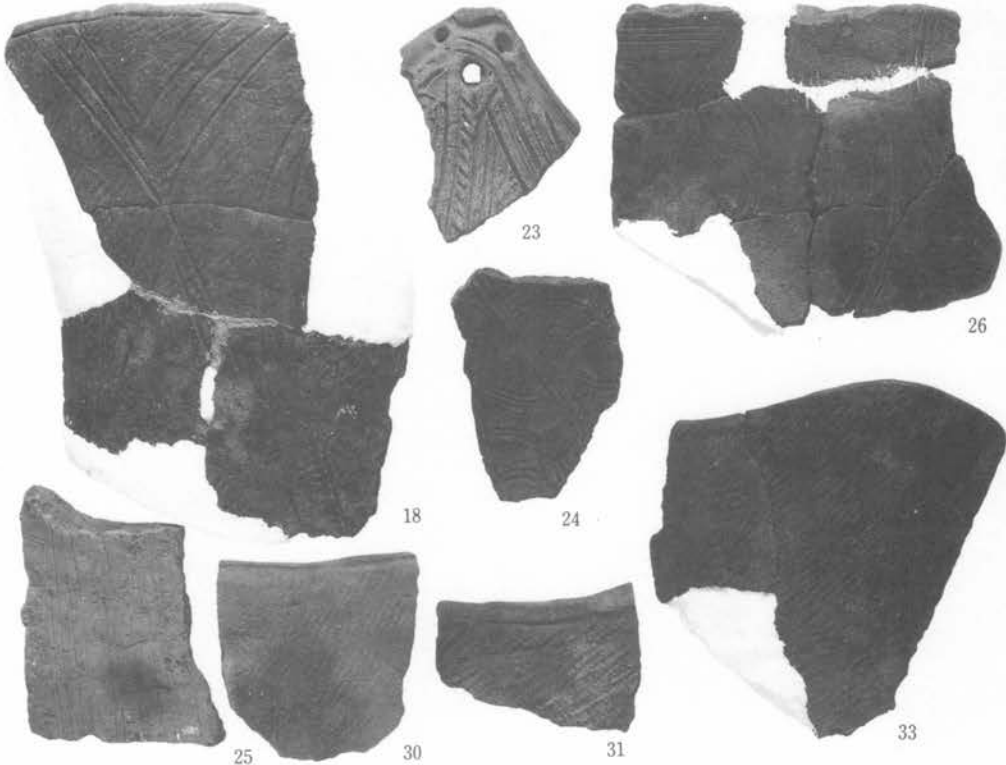


第112号住居跡出土土器(2)



第140号住居跡出土土器(1)

A地点

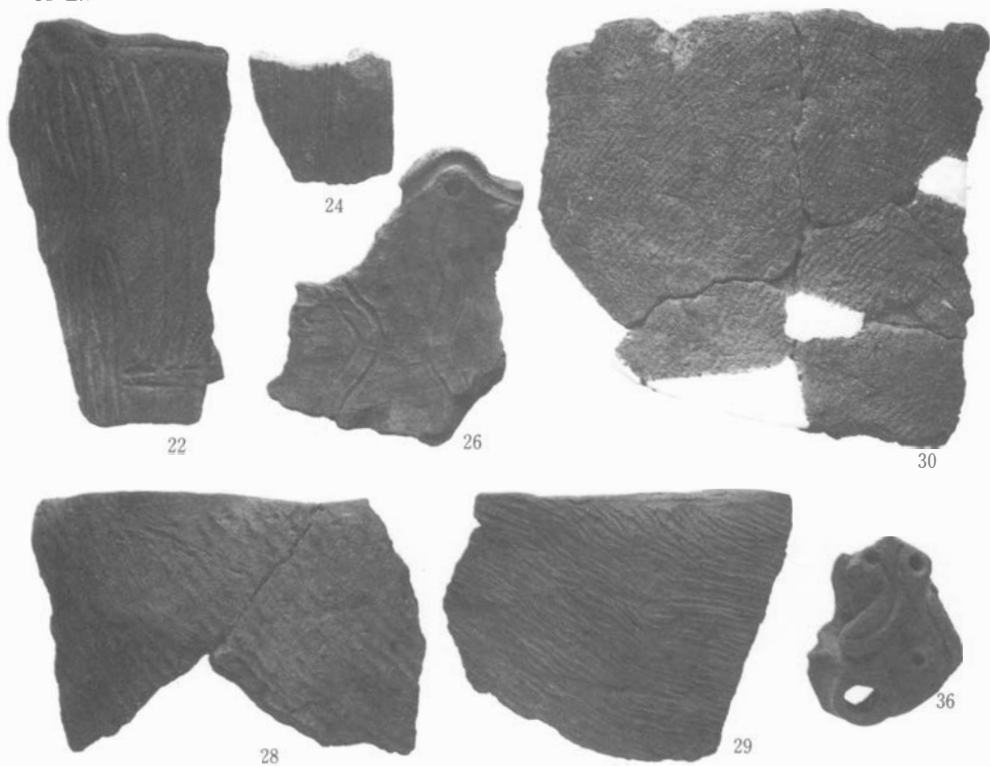


第140号住居跡出土土器(2)

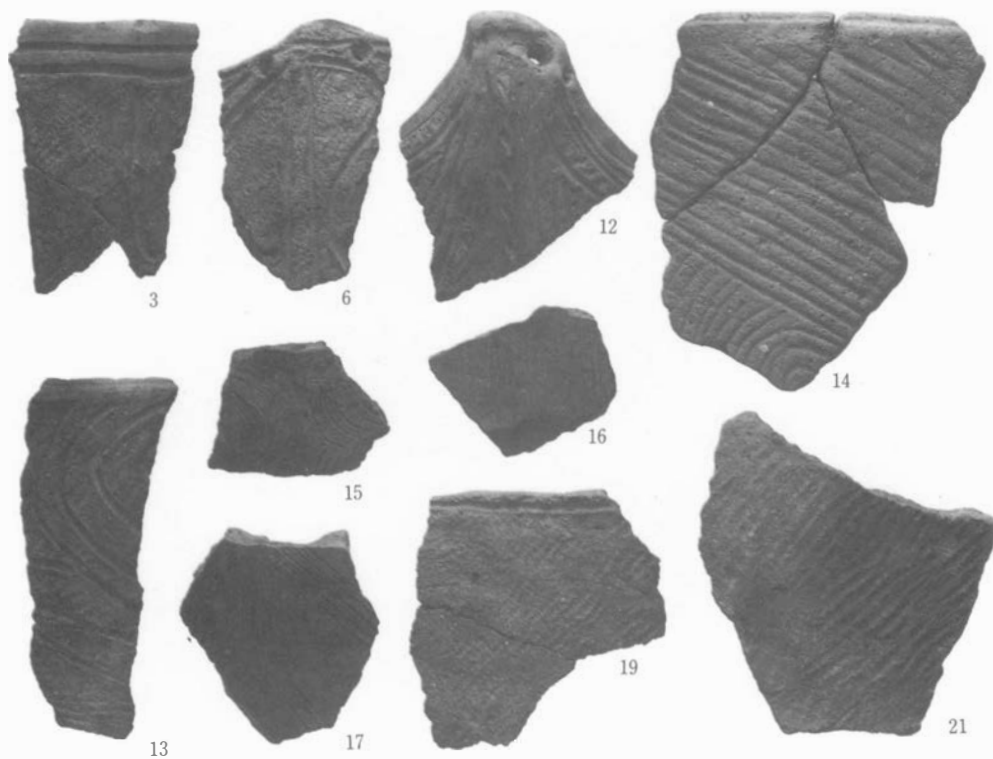


第152号住居跡出土土器(1)

A地点

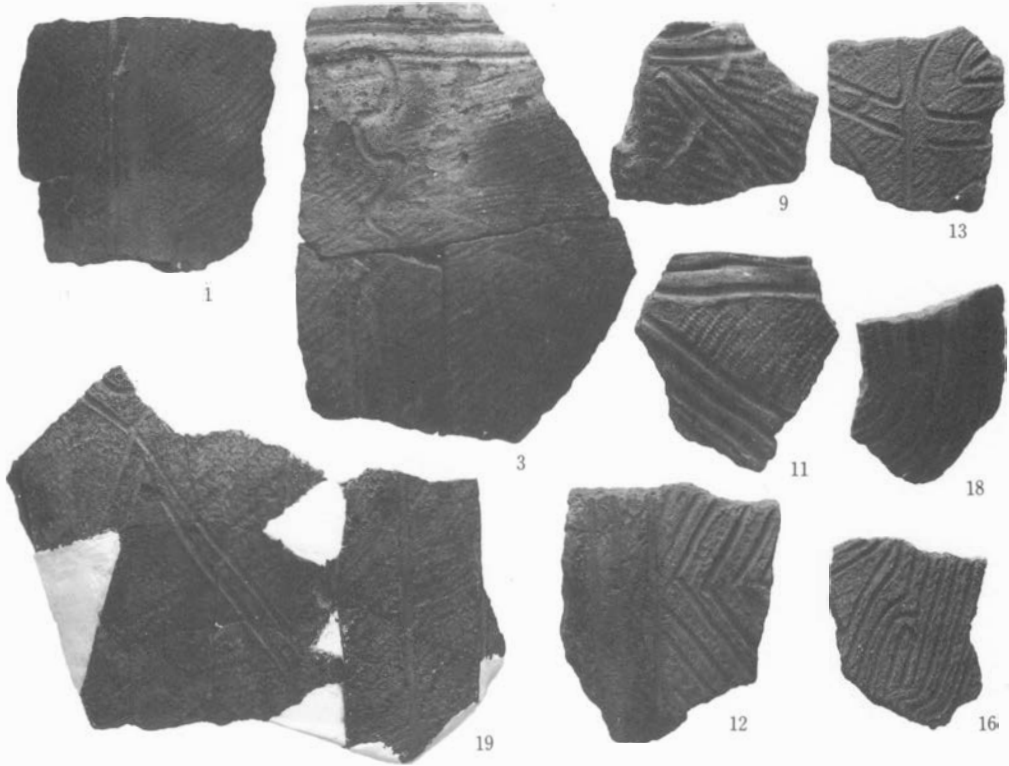


第152号住居跡出土土器(2)

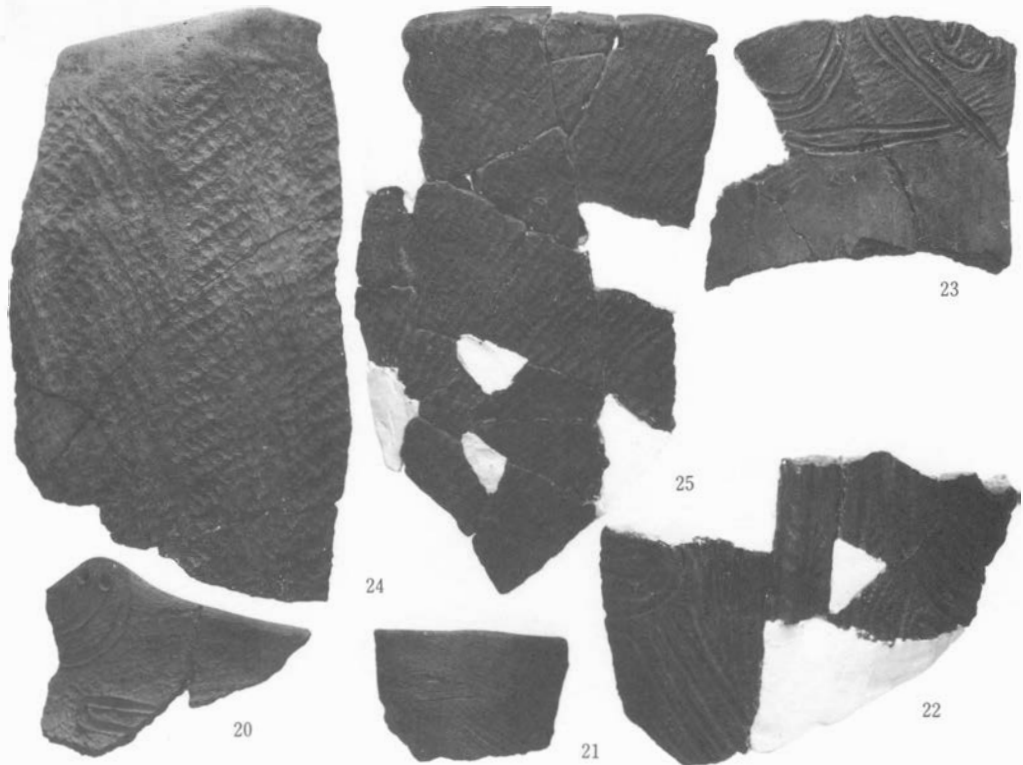


第153号住居跡出土土器

A地点



第159号住居跡出土土器(1)



第159号住居跡出土土器(2)

A地点



グリッド出土土器(1)第IV群

A地点



12



23



25



38



33



36



30



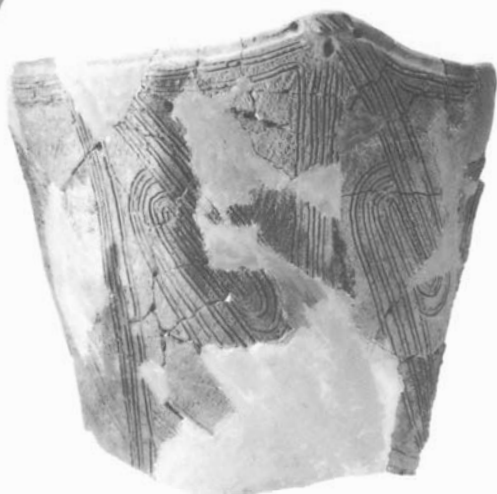
39

グリッド出土土器(2)第IV群

A地点



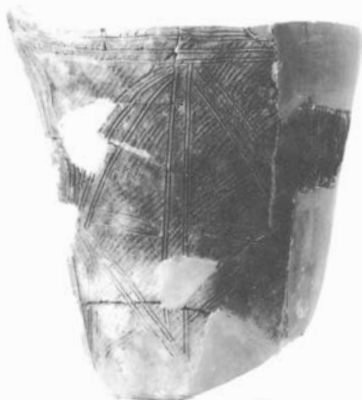
40



42



46



47



52



48



54

グリッド出土土器(3)第IV群

A地点



57



59



61



63



64



68



66



70

グリッド出土土器(4)第IV群

A地点



82



84



85



86



94



95

グリッド出土土器(5)第IV群

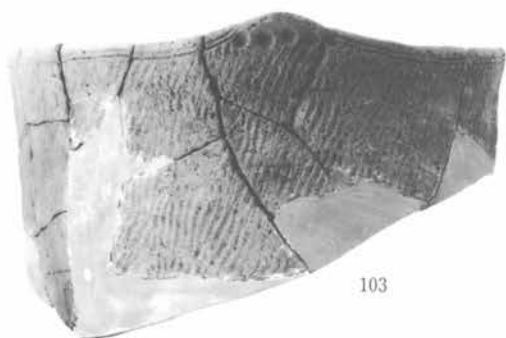
A地点



102



104



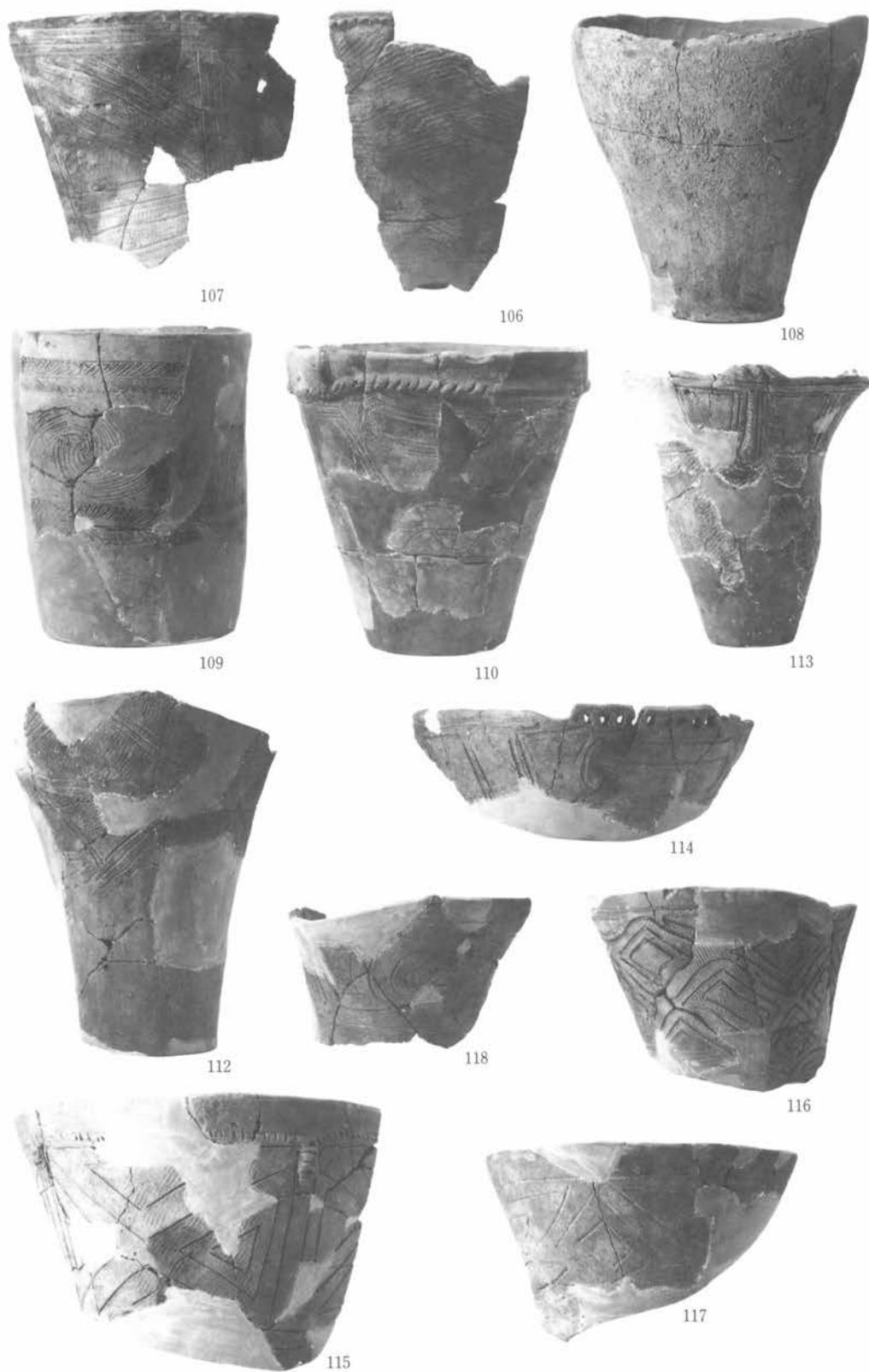
103



105

グリッド出土土器(6)第IV群

A地点



グリッド出土土器(7)第IV群

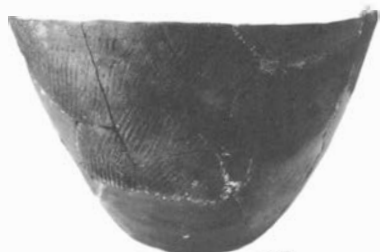
A地点



124



126



127



129



140



136



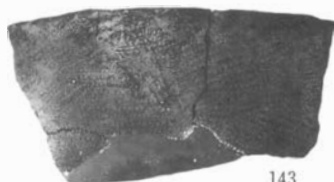
132



137

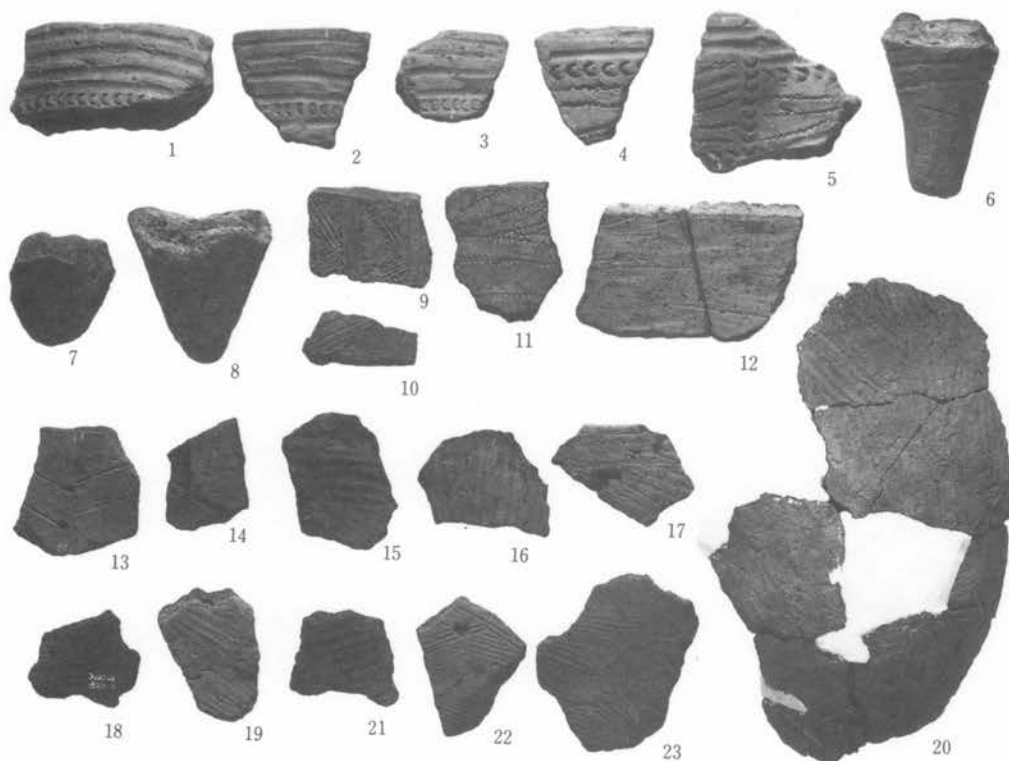


2

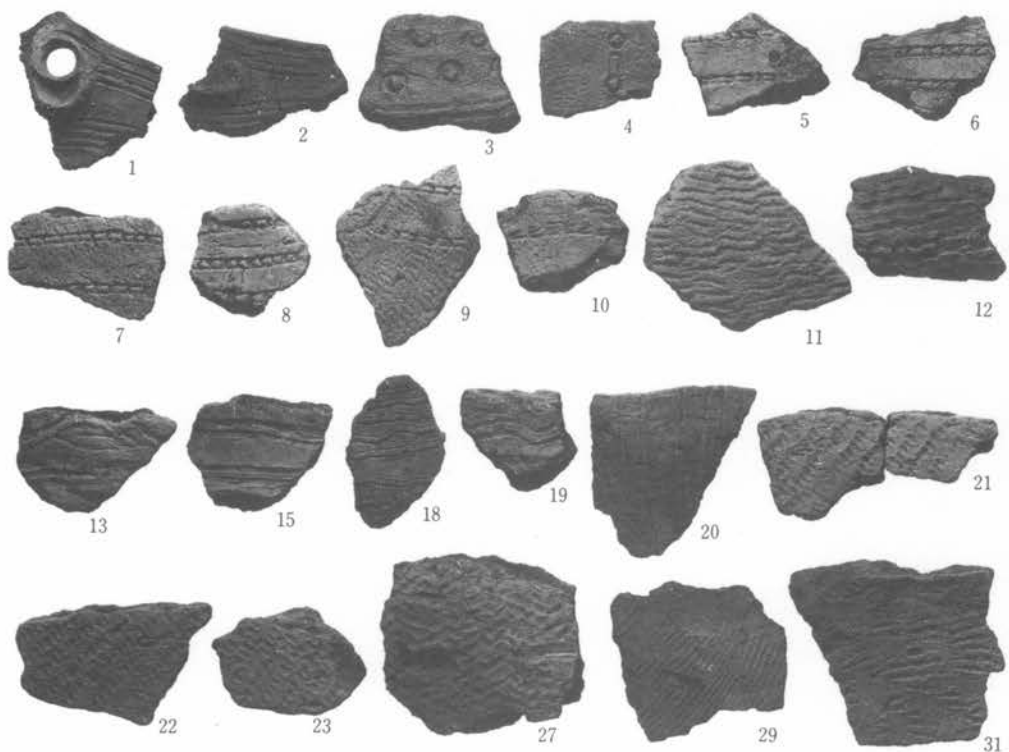


143

A地点

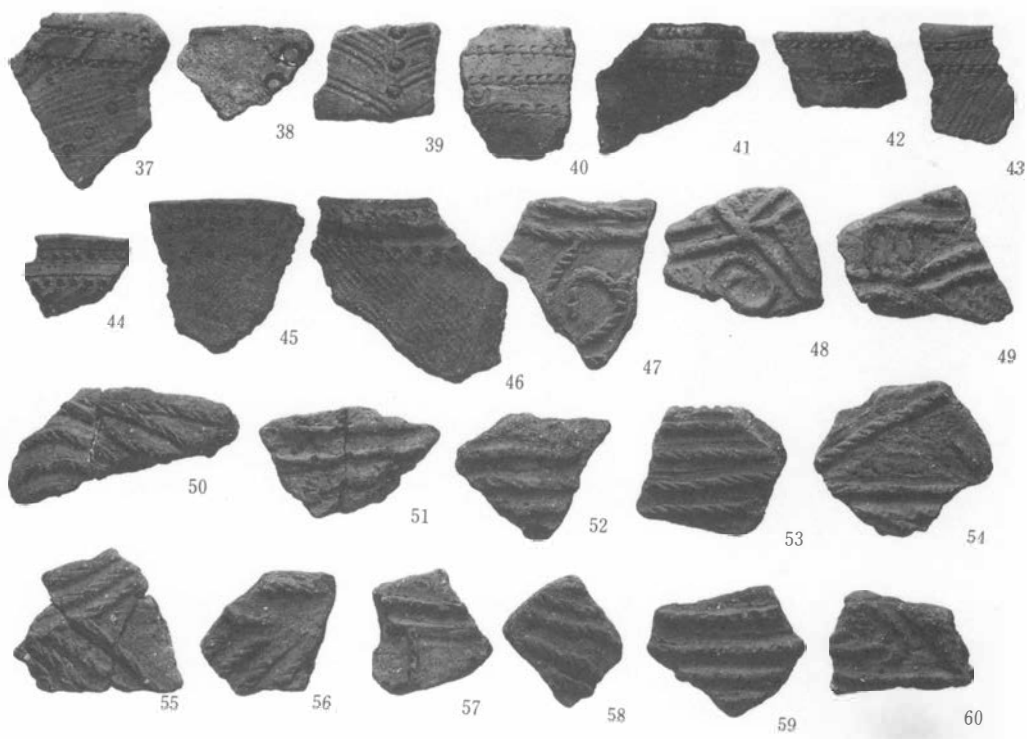


グリッド出土土器(9)第I群

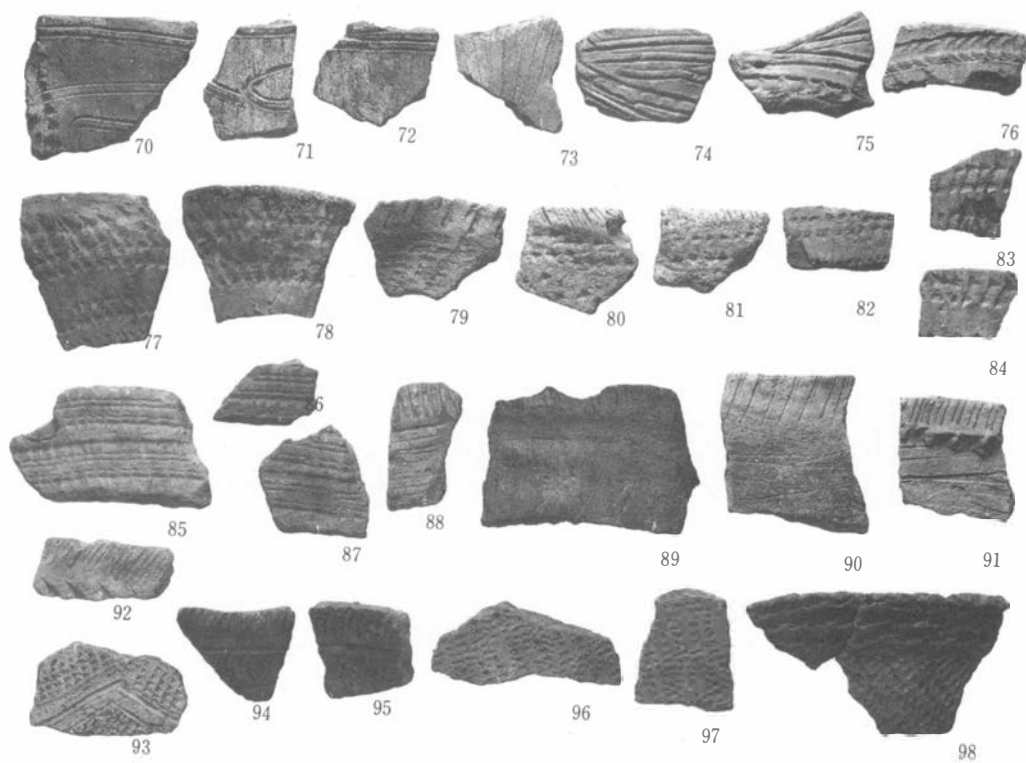


グリッド出土土器(10)第II群

A地点

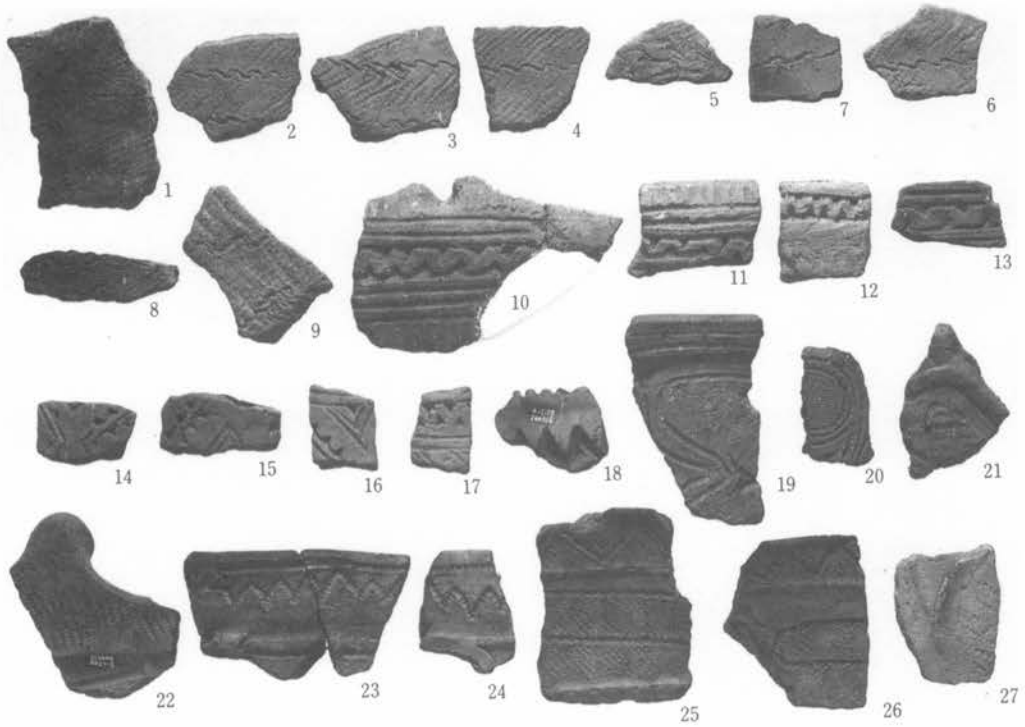


グリッド出土土器(1)第II群

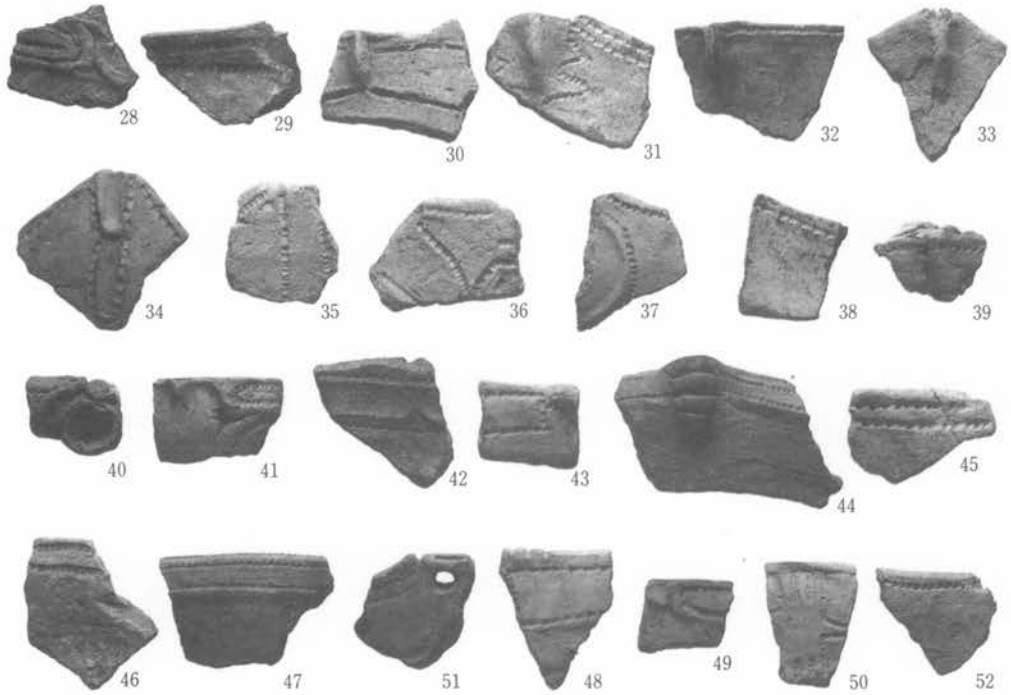


グリッド出土土器(2)第II群

A地点

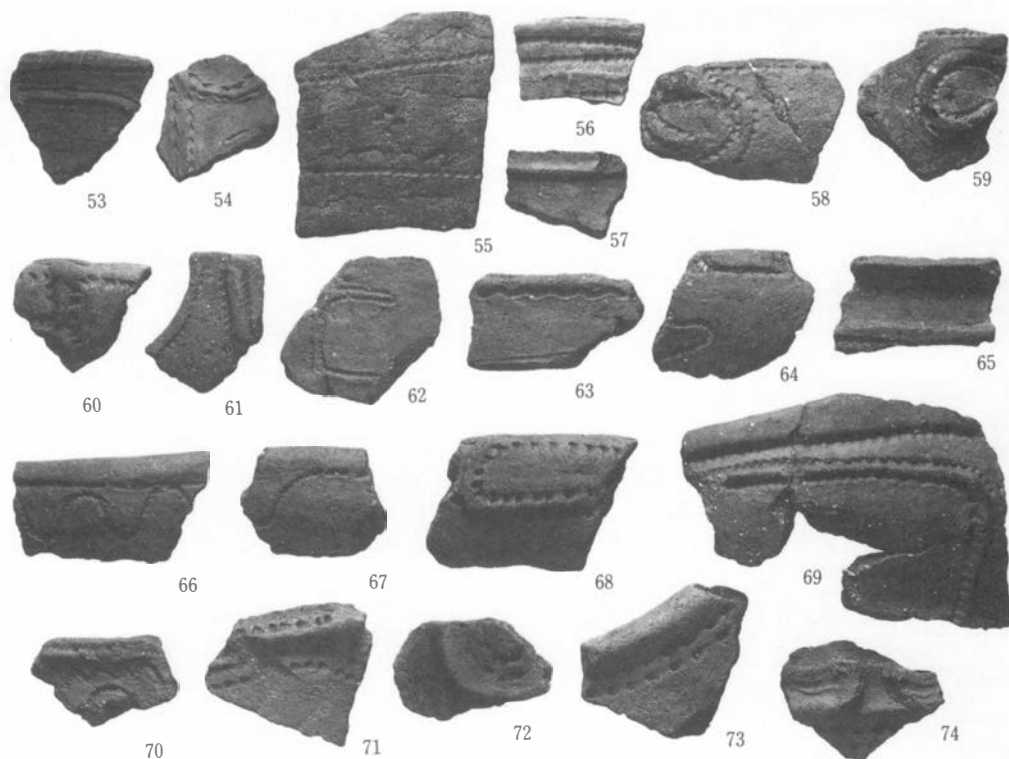


グリッド出土土器(13)第III群

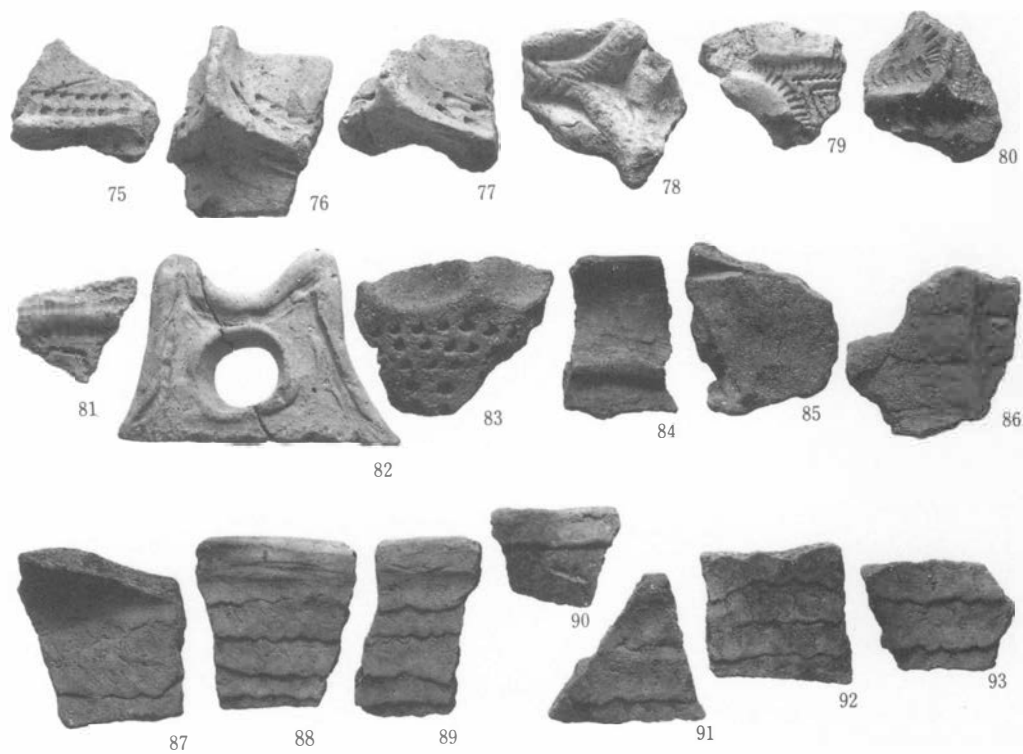


グリッド出土土器(14)第III群

A地点

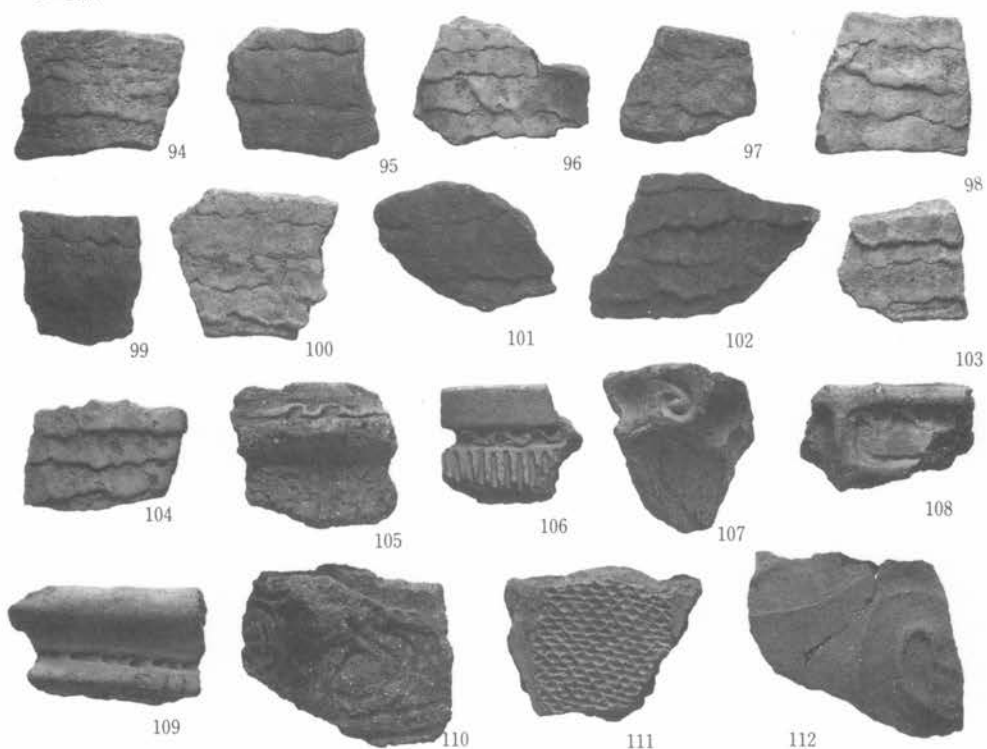


グリッド出土土器(15)第III群

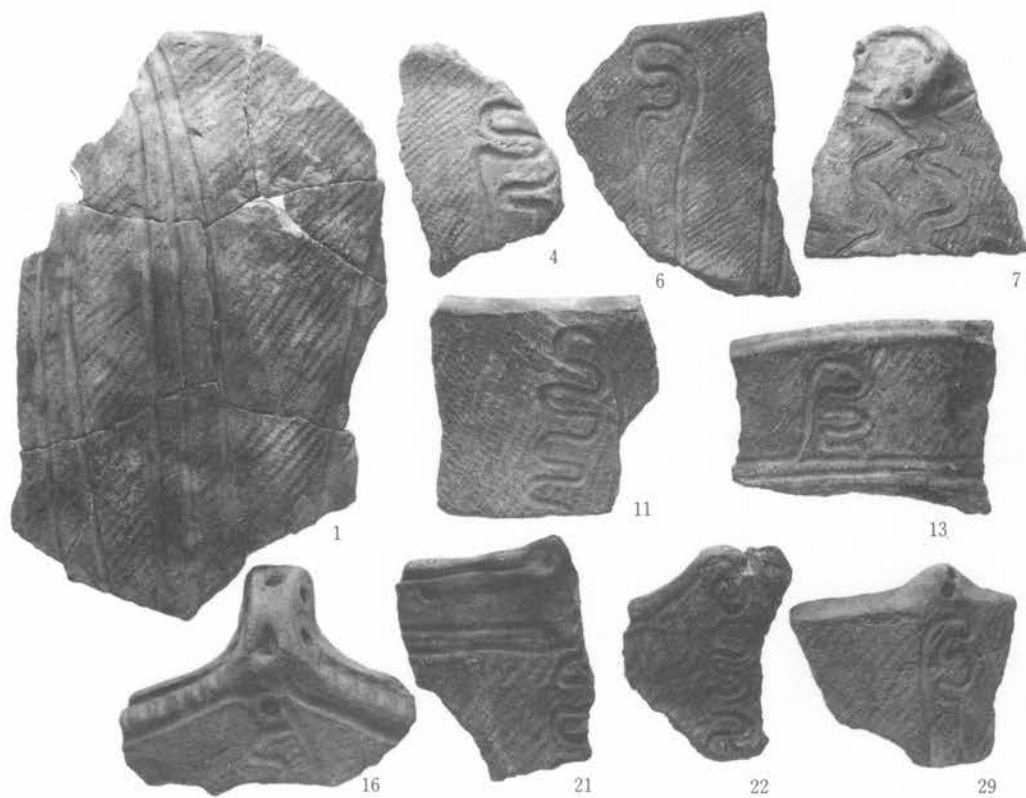


グリッド出土土器(16)第III群

A地点

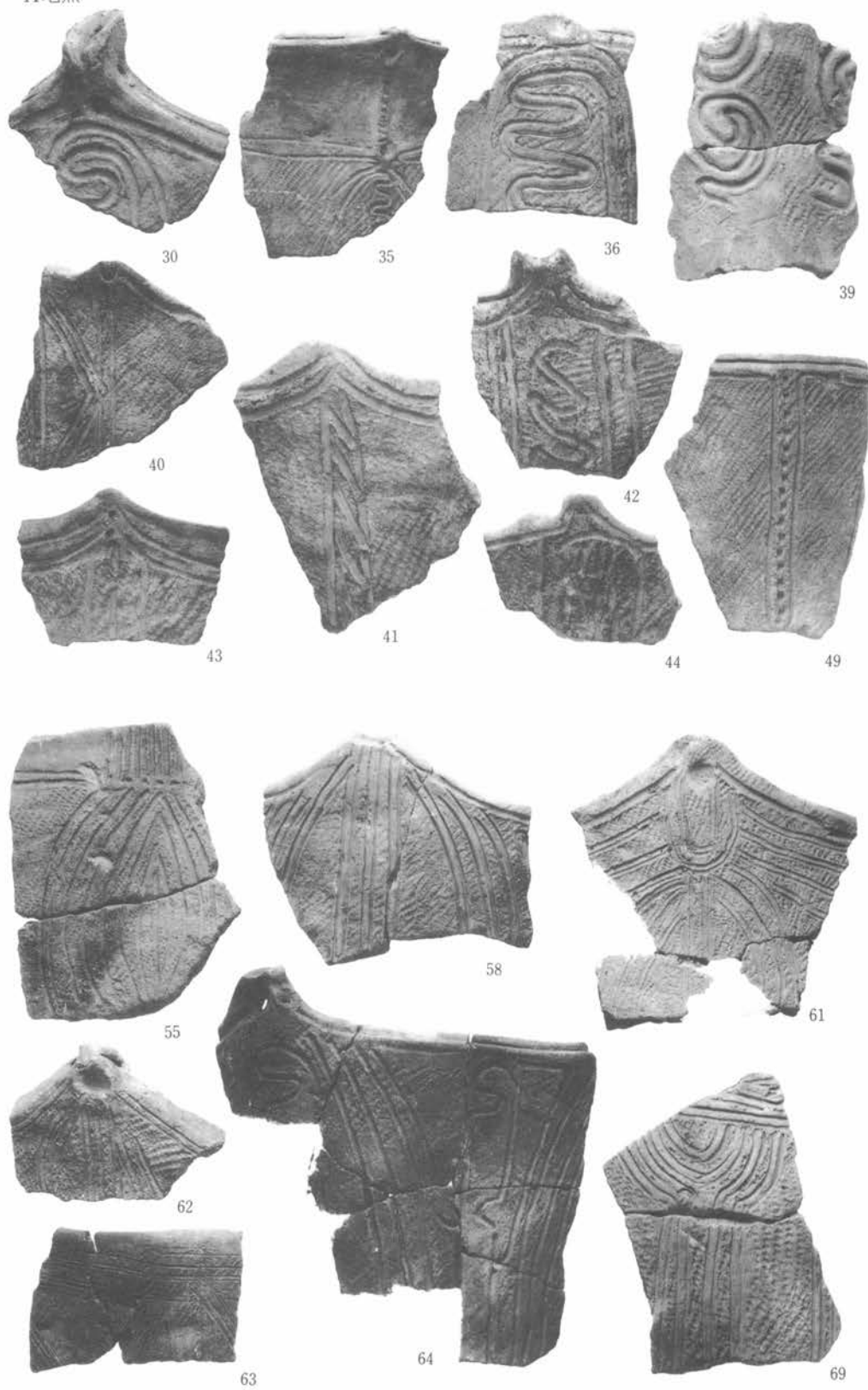


グリッド出土土器(17)第III群



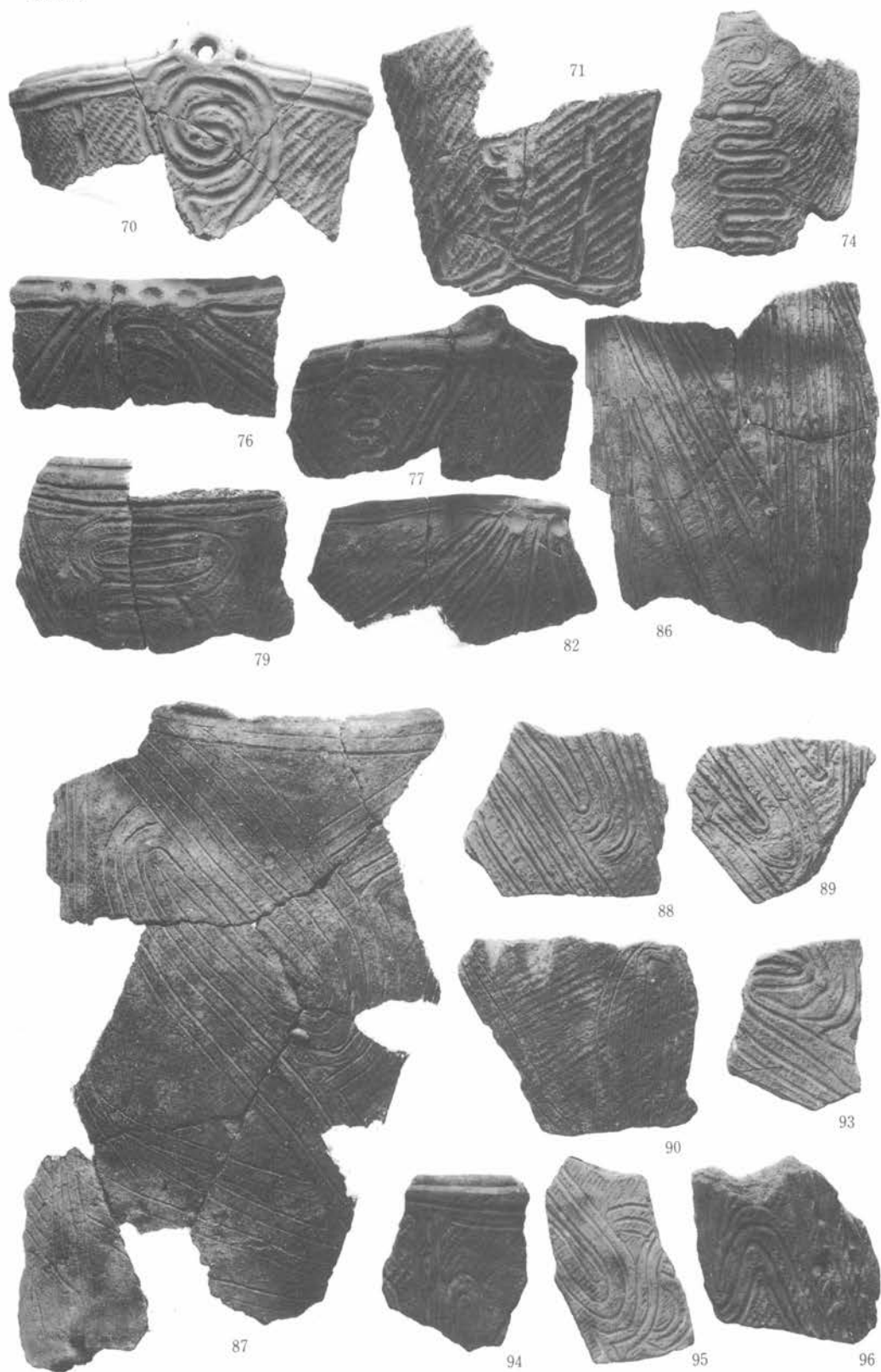
グリッド出土土器(18)第IV群

A地点



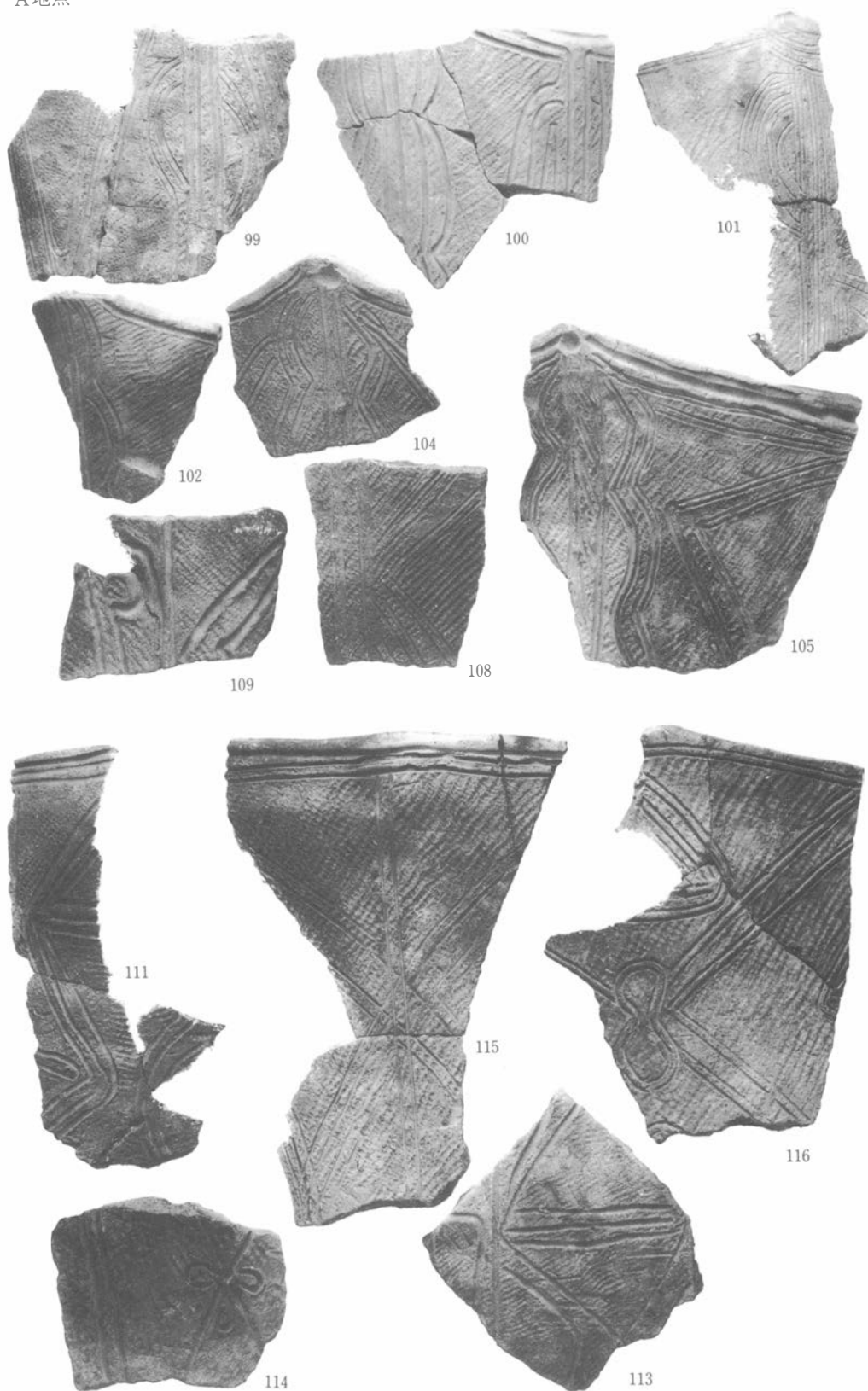
グリッド出土土器(9)第IV群

A地点



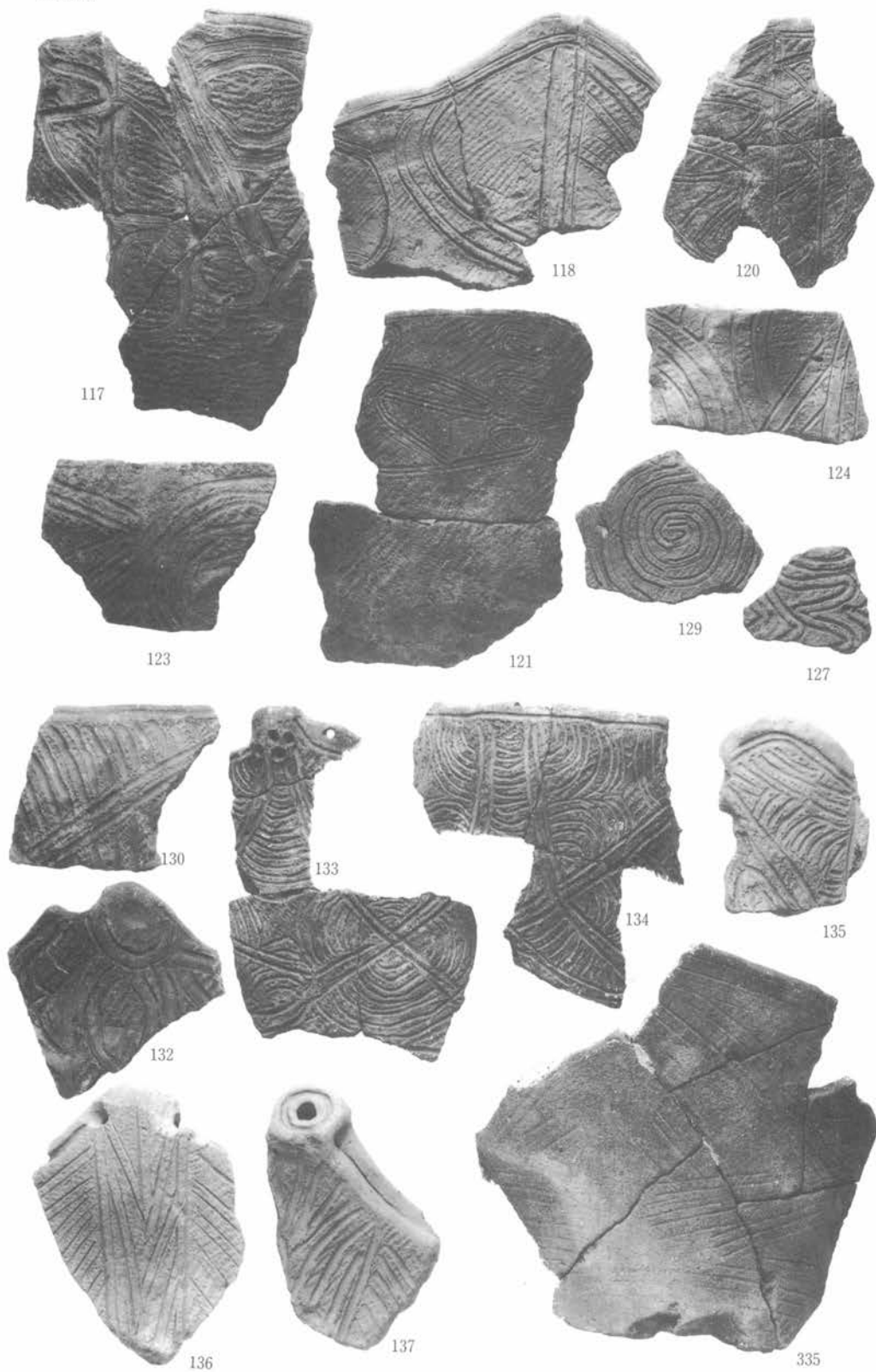
グリッド出土土器(20)第IV群

A地点



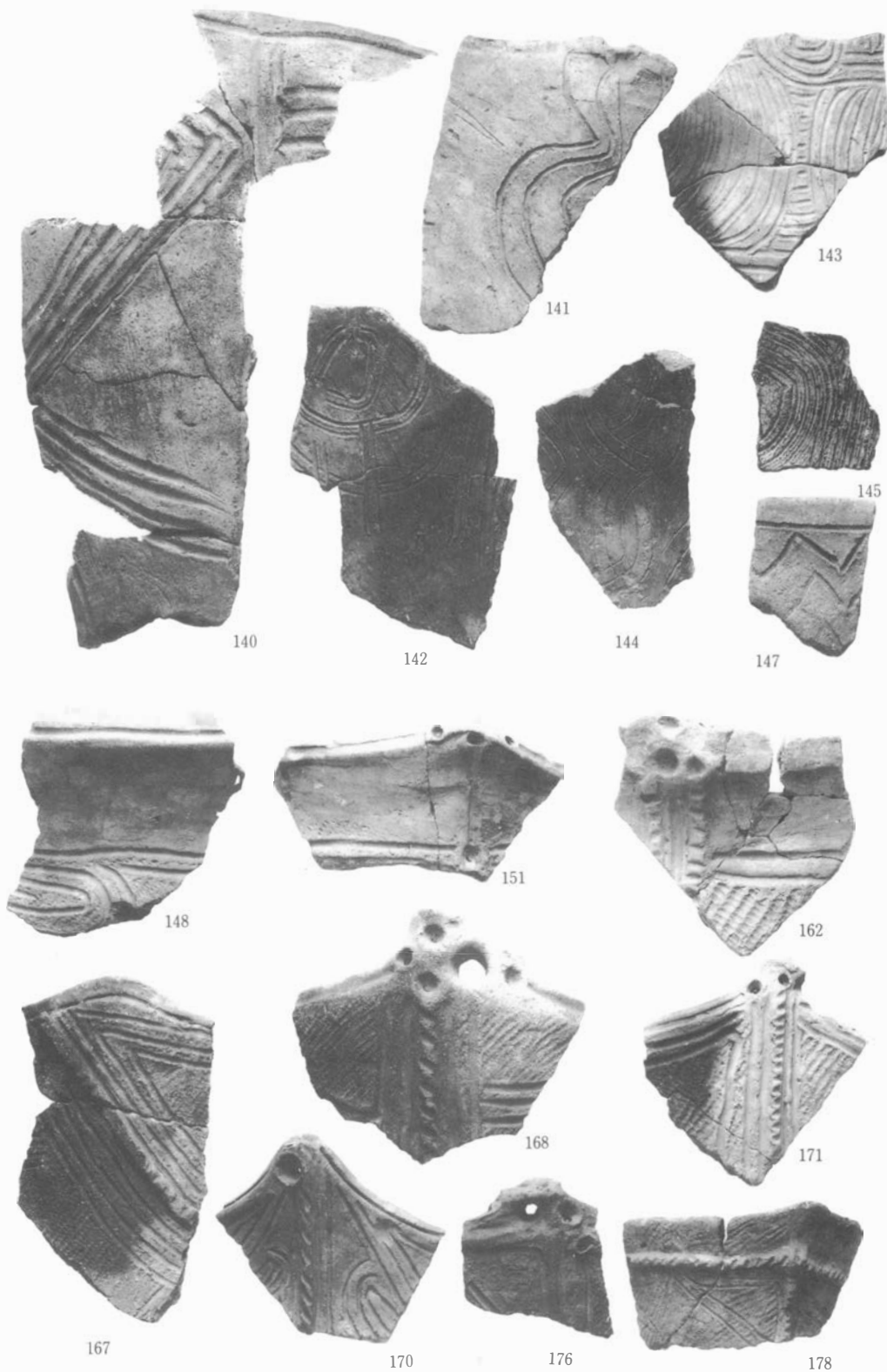
グリッド出土土器(2)第IV群

A地点



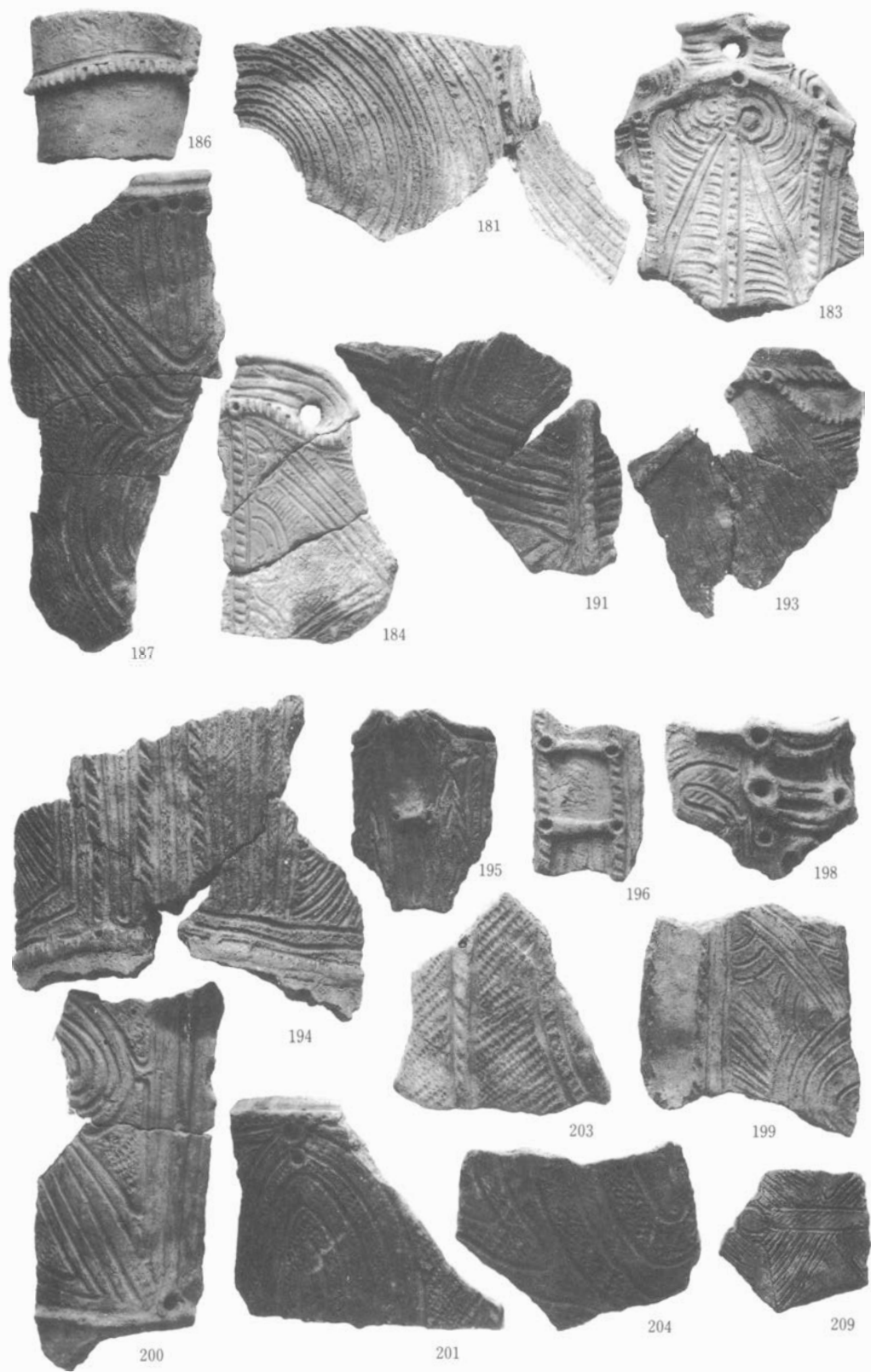
グリッド出土土器(2)第IV群

A地点



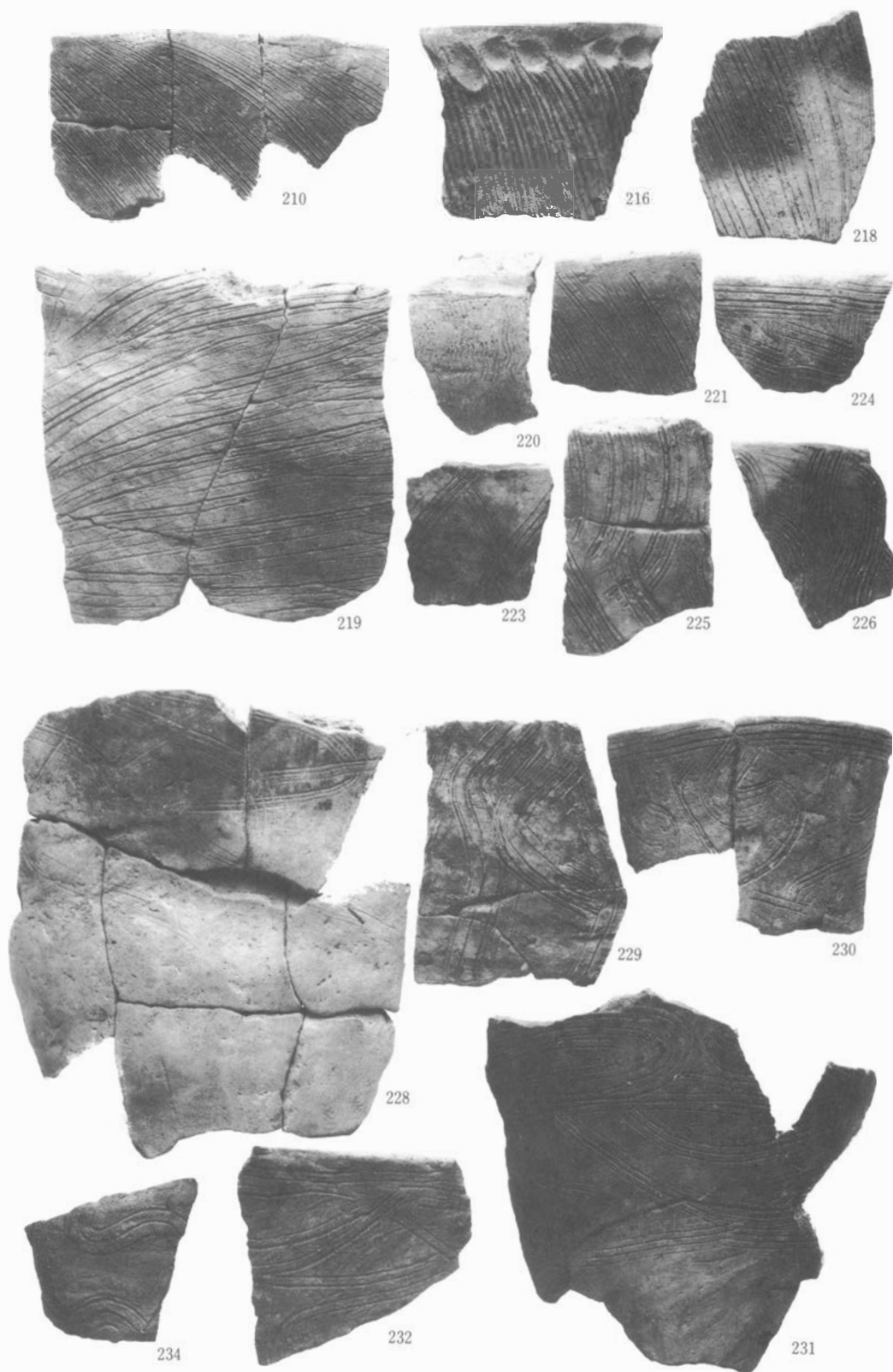
グリッド出土土器(2)第IV群

A地点



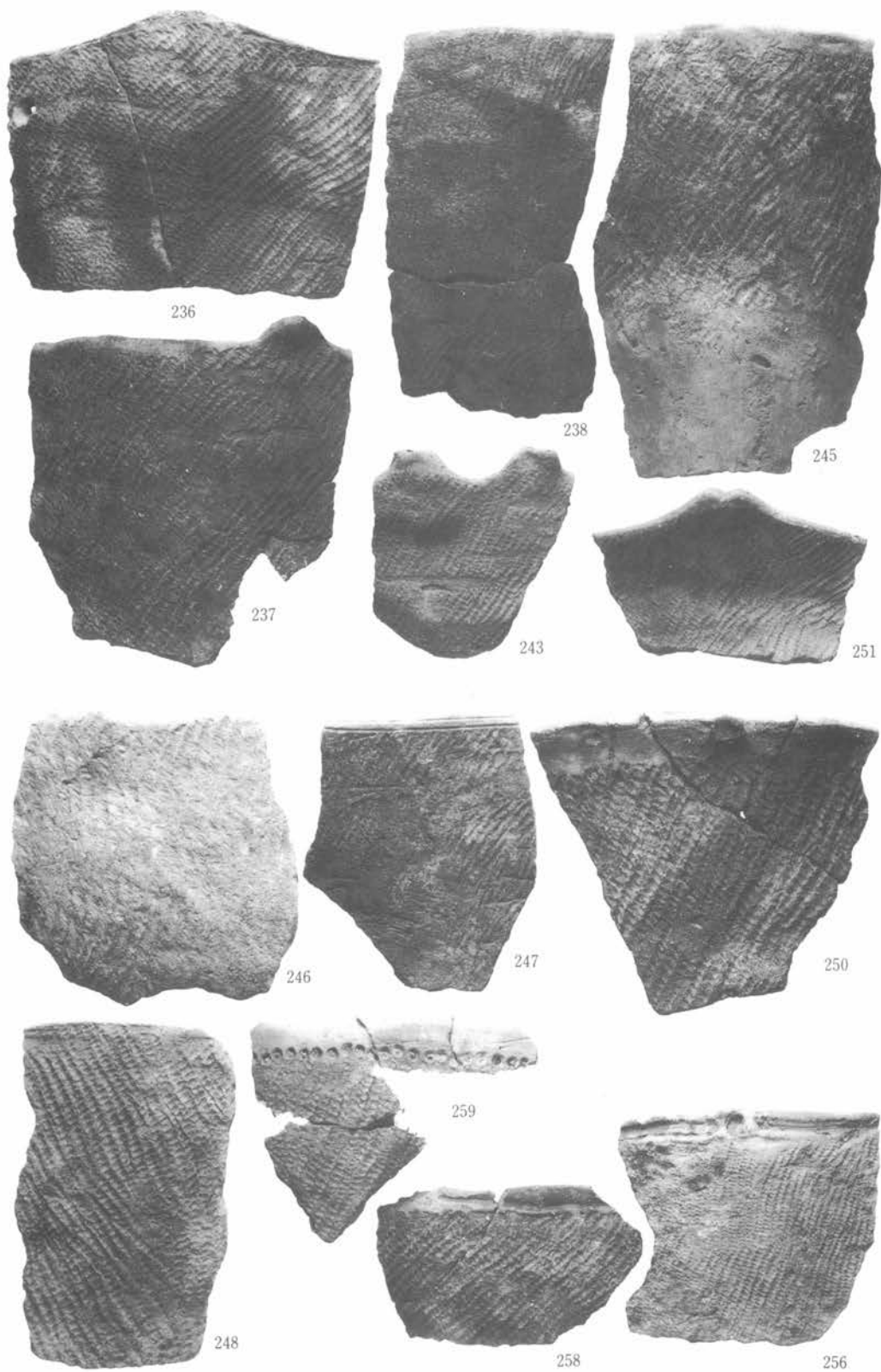
グリッド出土土器(24)第IV群

A地点



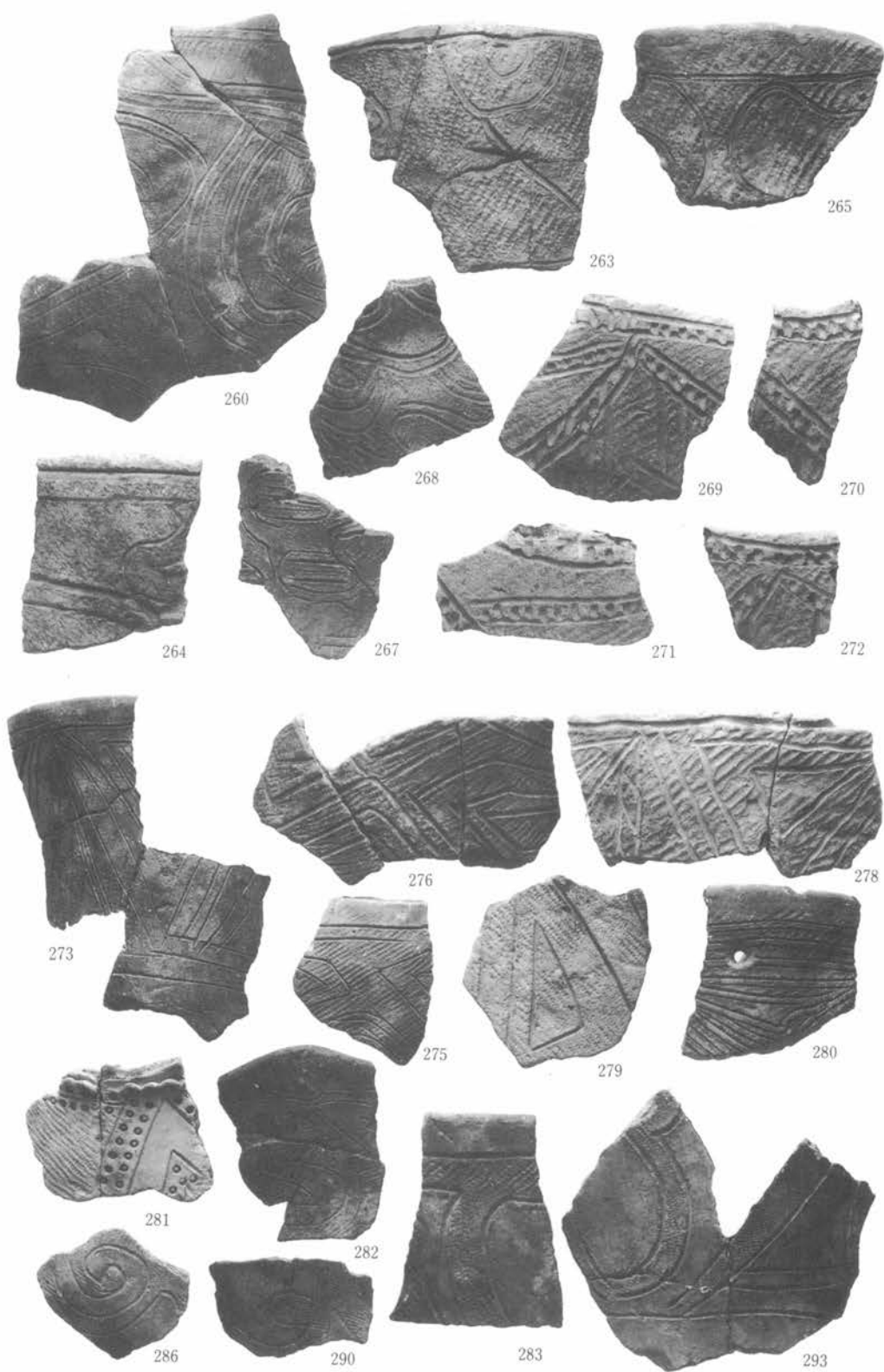
グリッド出土土器(25)第IV群

A地点



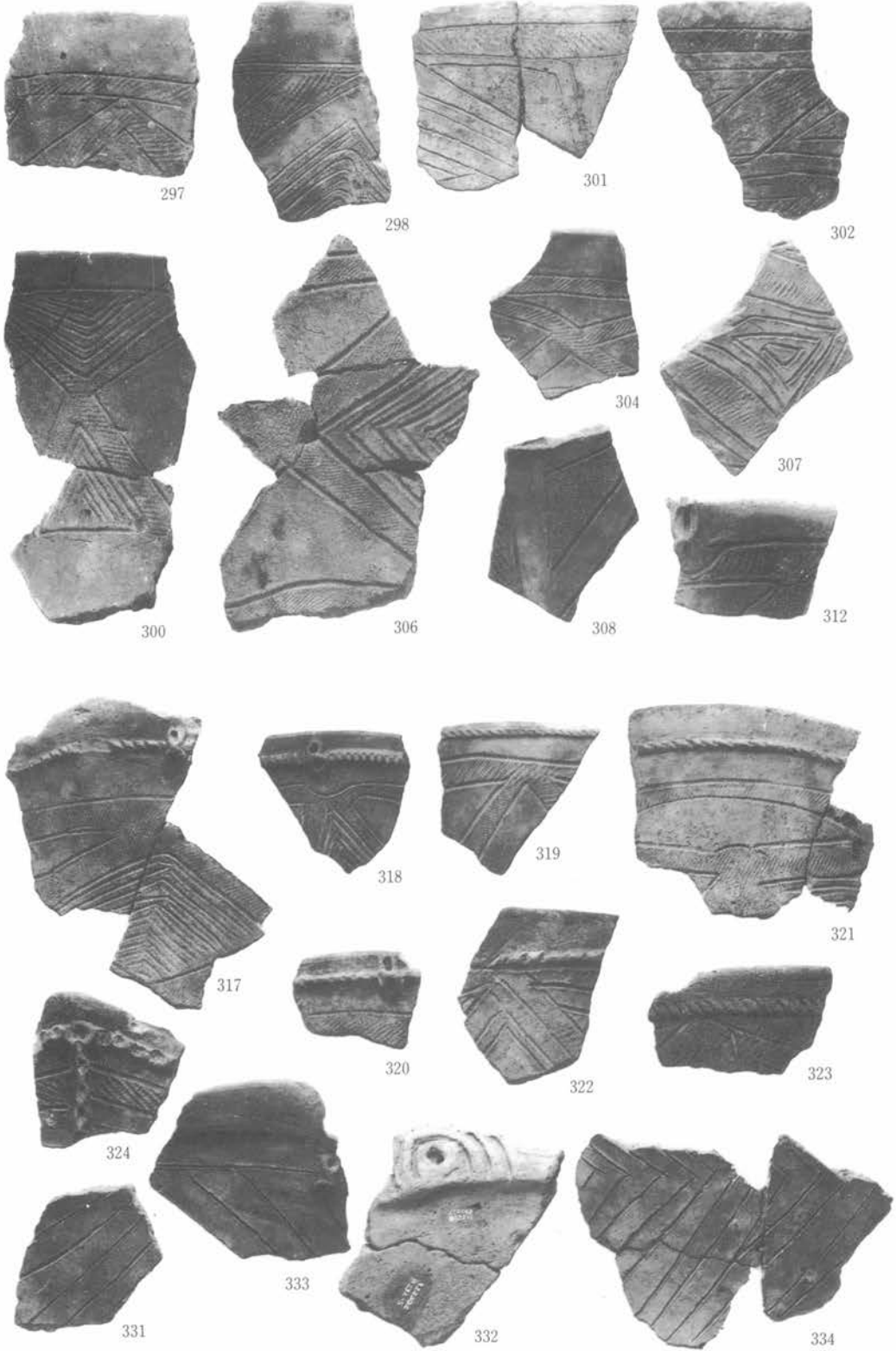
グリッド出土土器(26)第IV群

A地点



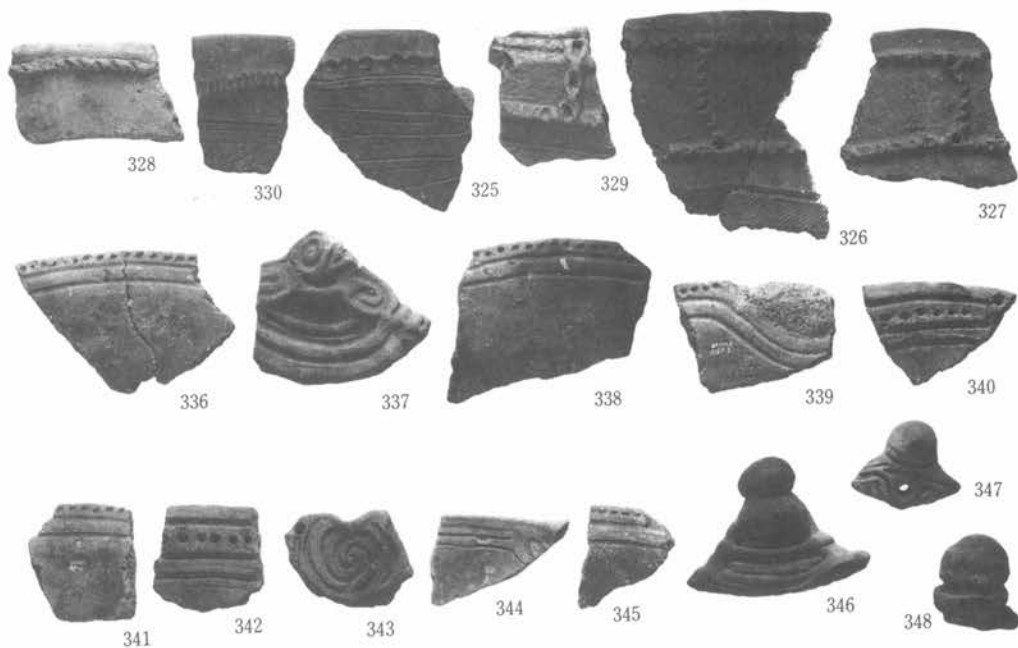
グリッド出土土器(2)第IV群

A地点

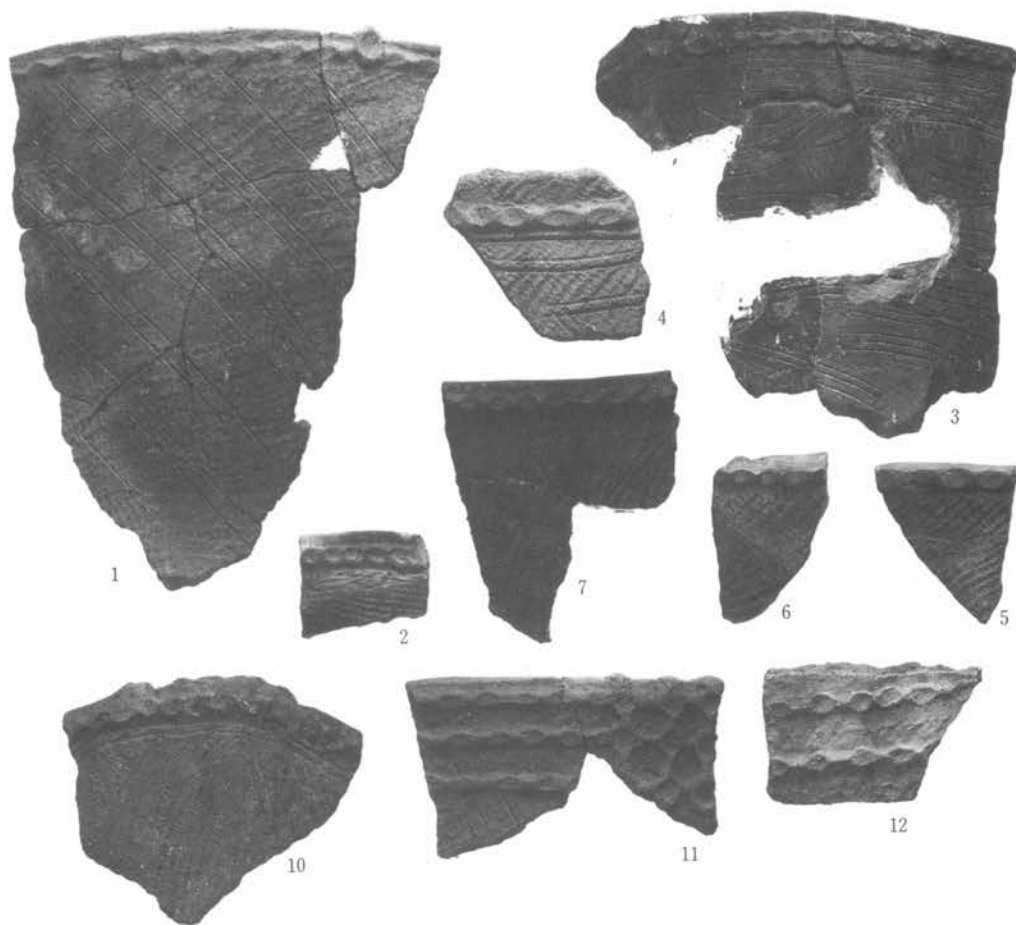


グリッド出土土器(28)第IV群

A地点

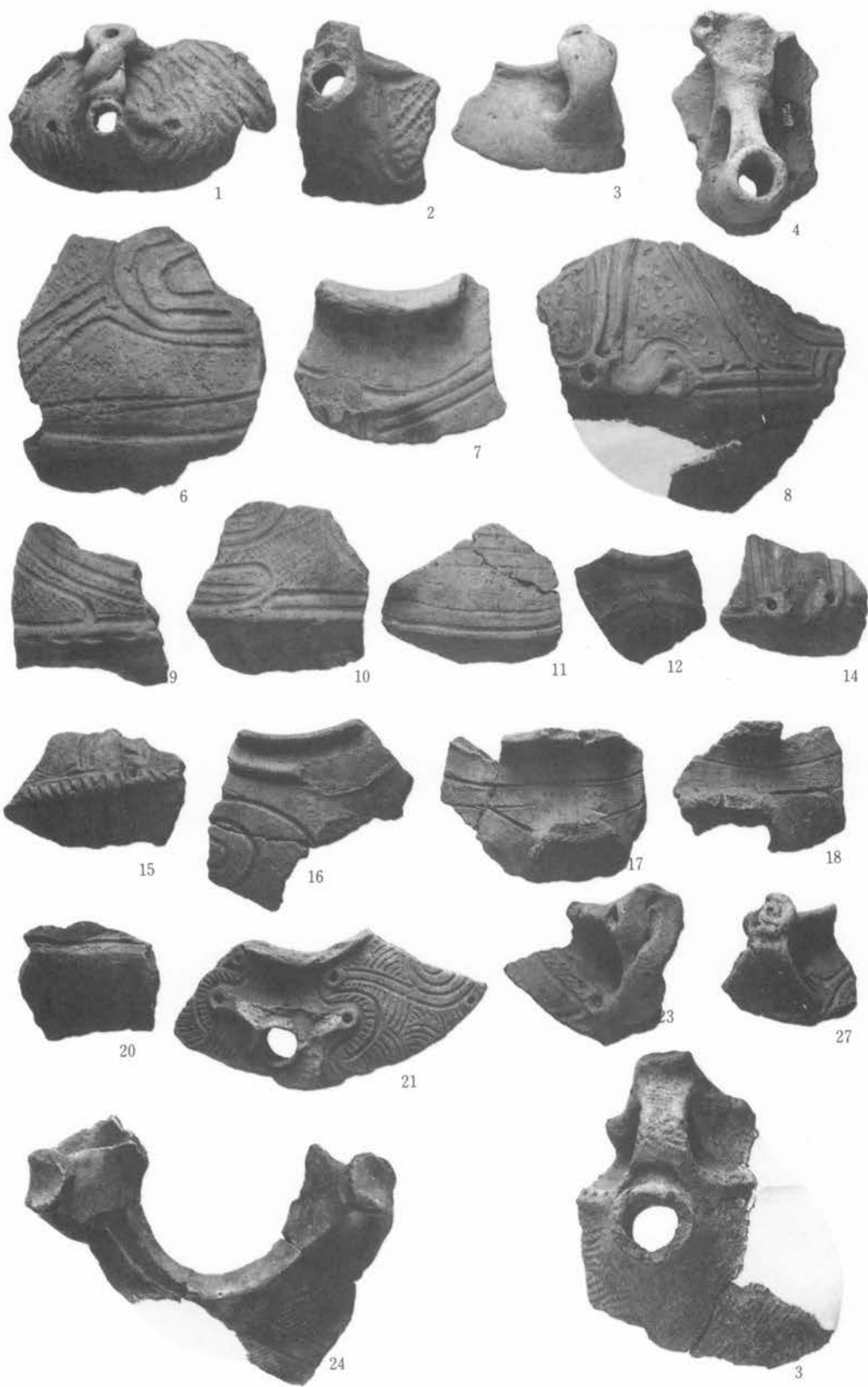


グリッド出土土器(29)第IV群



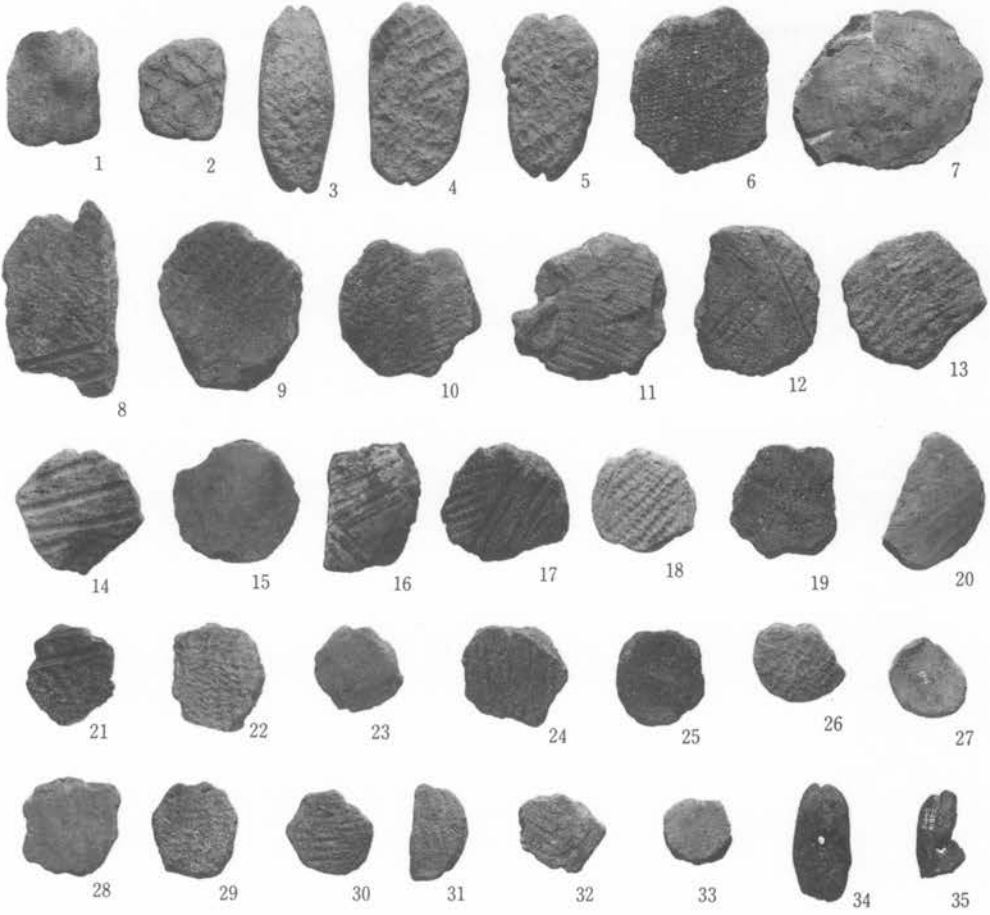
グリッド出土土器(30)第V群

A地点

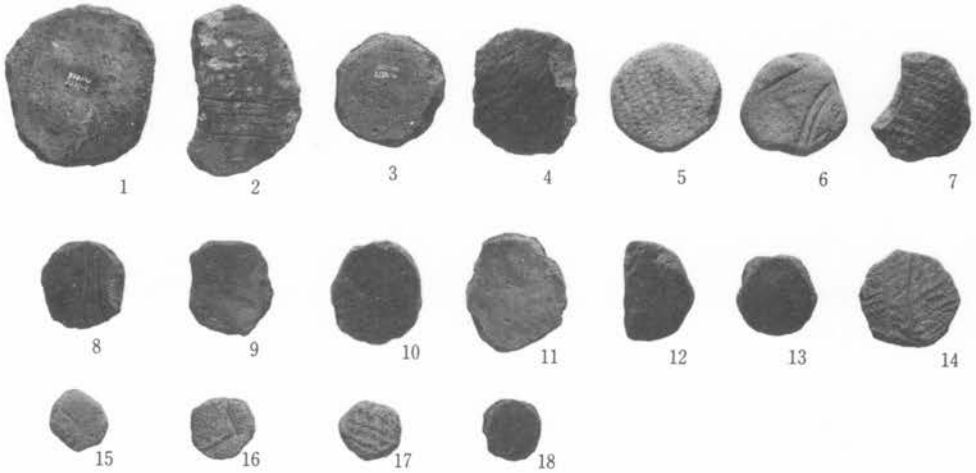


グリッド出土注口土器

A地点

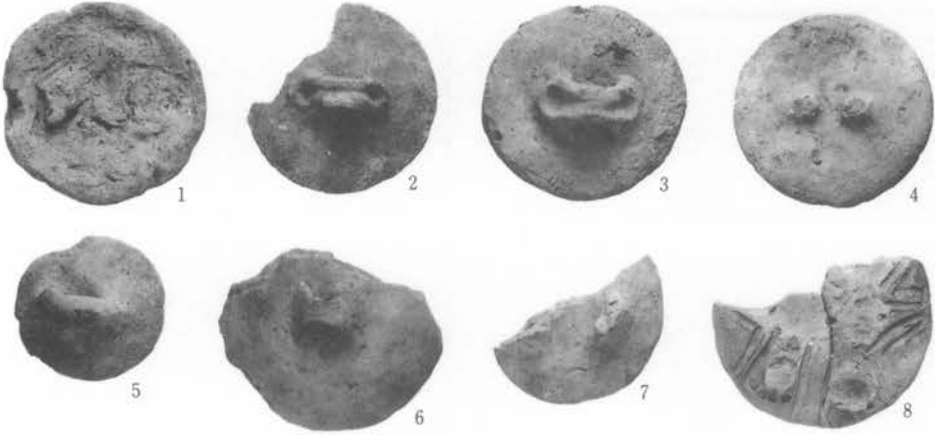


土錘



土器片円盤

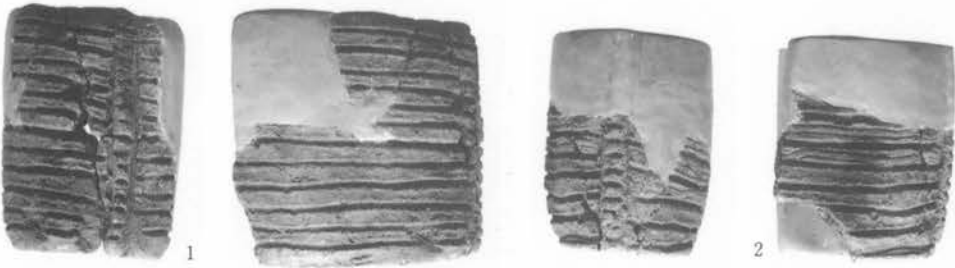
A地点



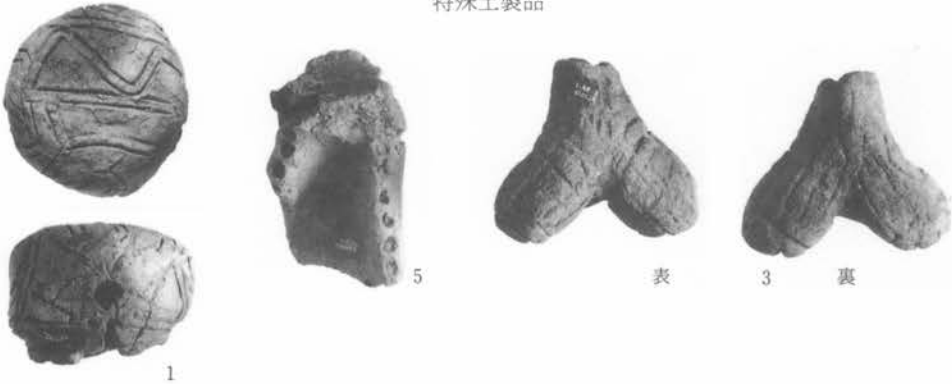
土製蓋



土偶

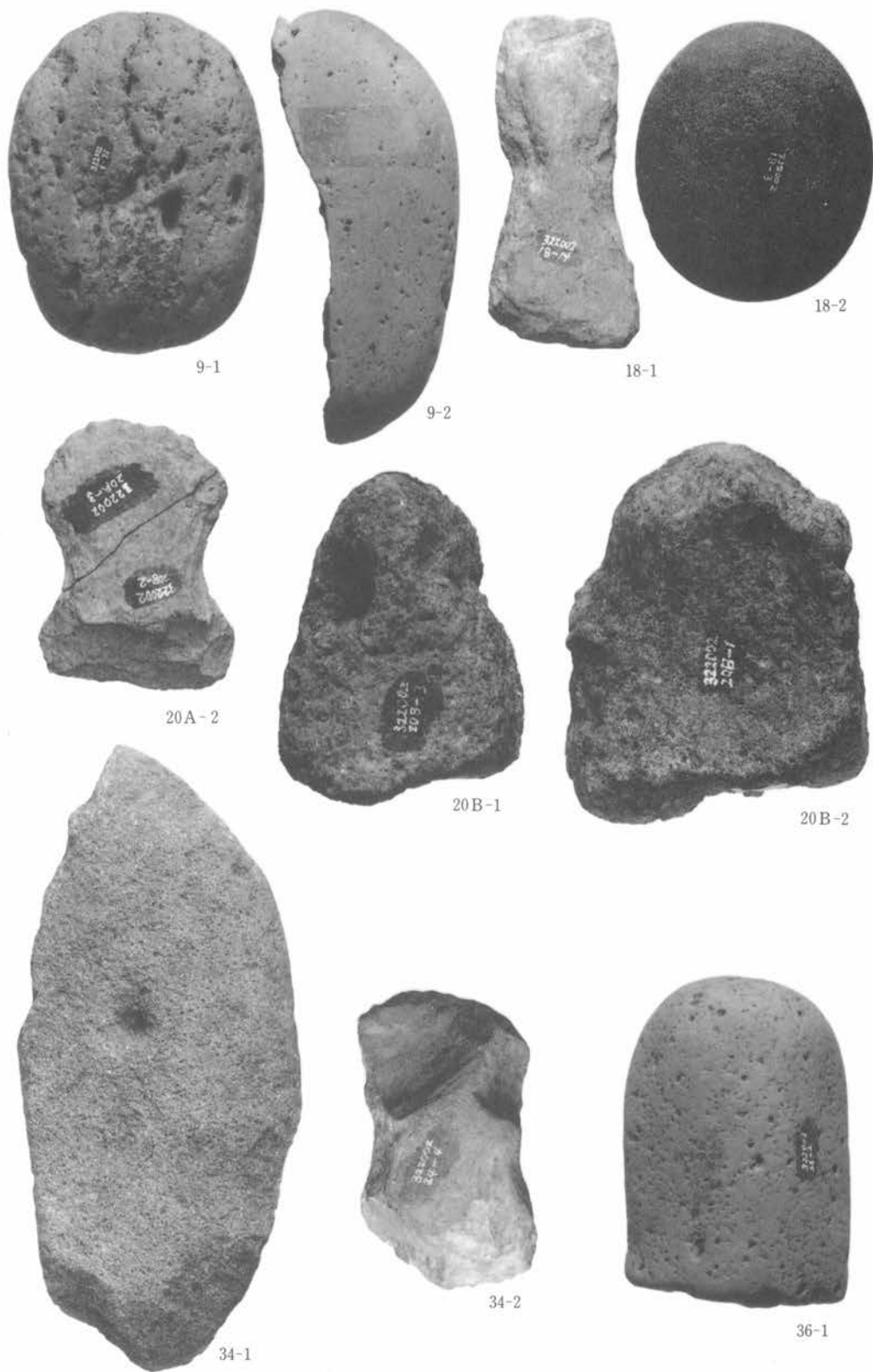


特殊土製品



その他の土製品

A地点



遺構出土石器 (第 9, 18, 20A, 20B, 34, 36号住居跡出土)

A地点



87A-1



87B·C-2



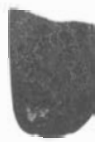
87B·C-3



87B·C-1



152-1



152-2



152-3



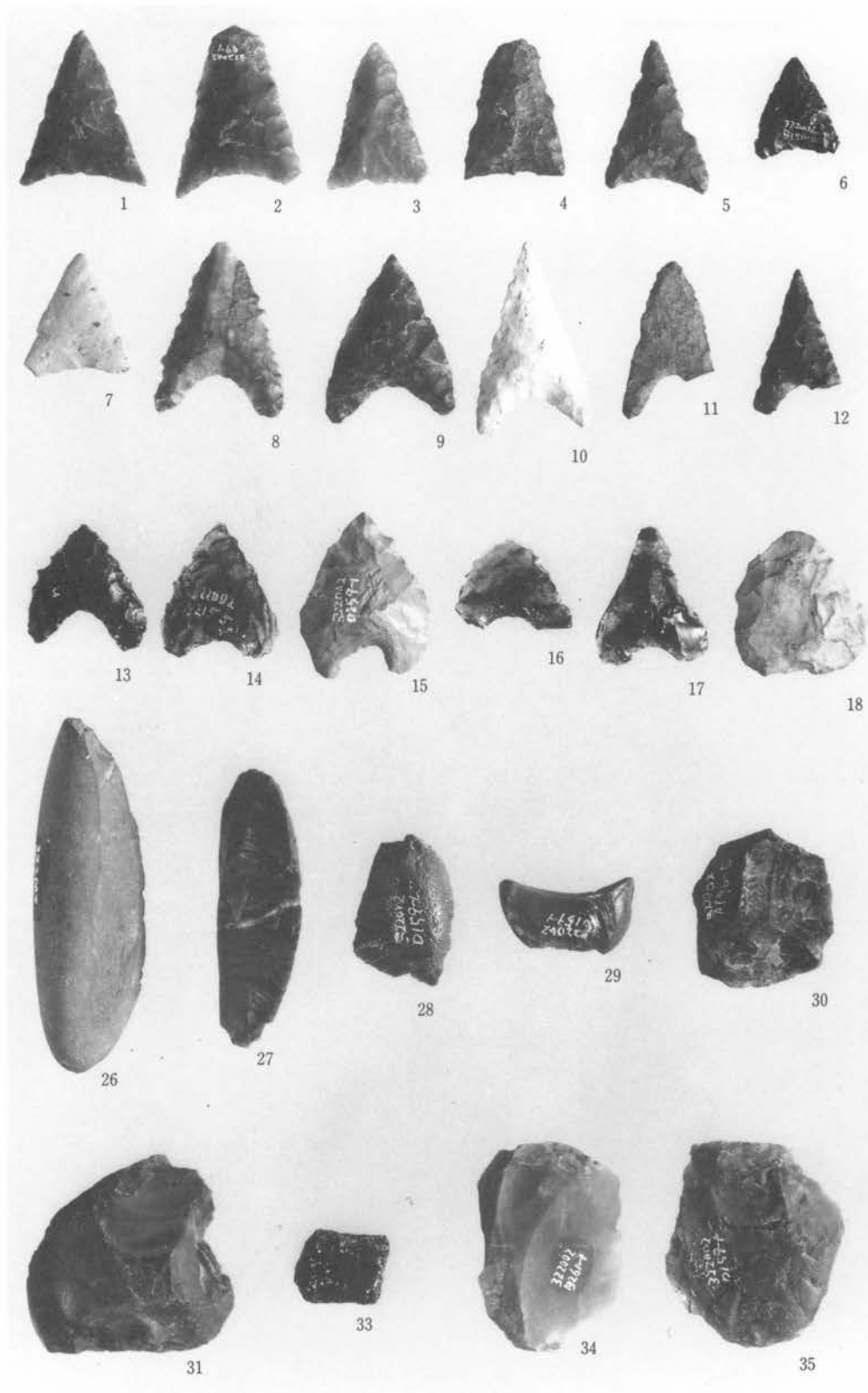
152-4



152-5

遺構出土石器 (第87B·C, 152号住居跡出土)

A地点



グリッド出土石器（石鏃，楔形石器）

A地点



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



59



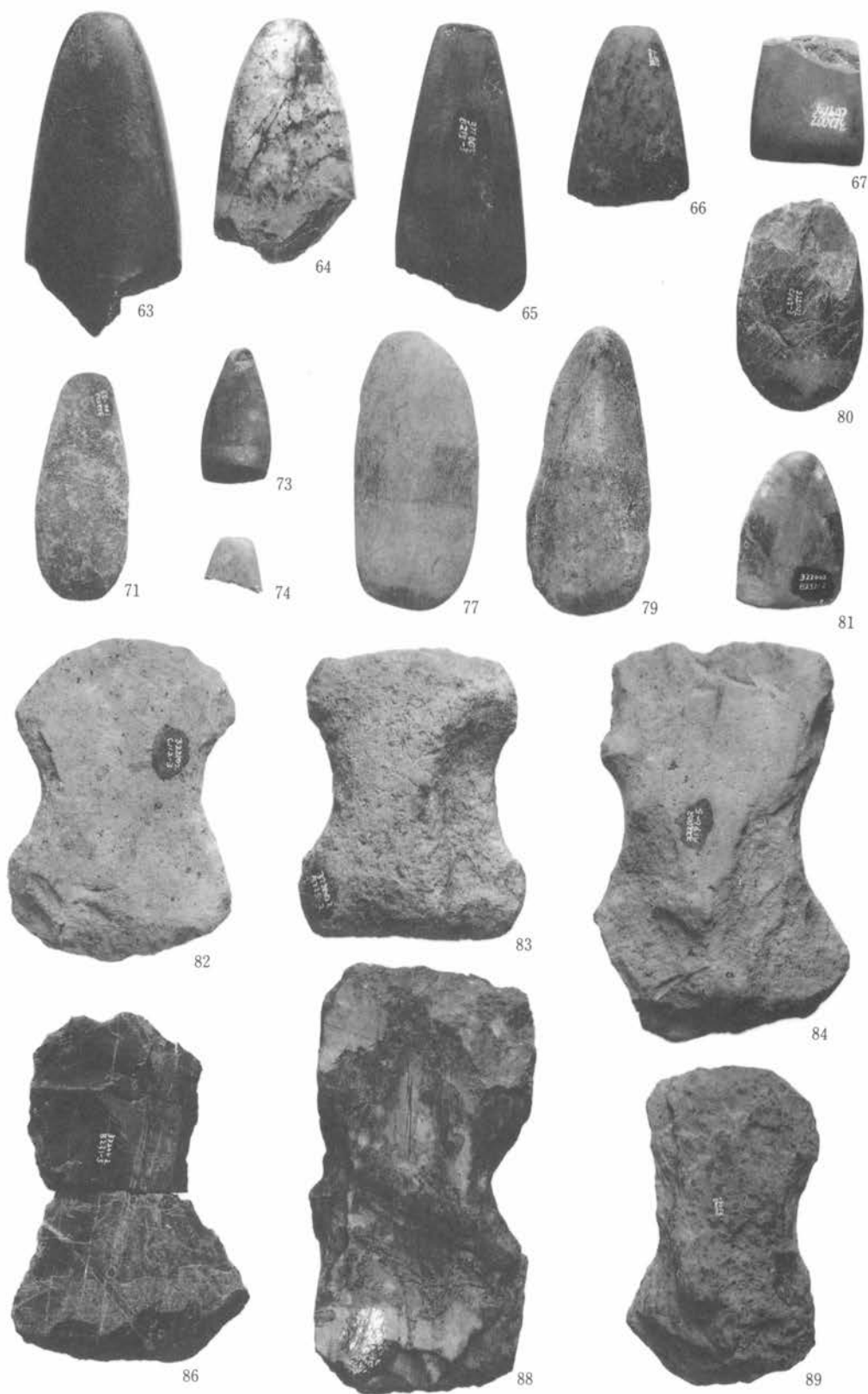
61



60

グリッド出土石器（磨製石斧）

A地点



グリッド出土石器（磨製石斧，打製石斧）

A地点



96



92



93



116



95



98



99



100



101



102



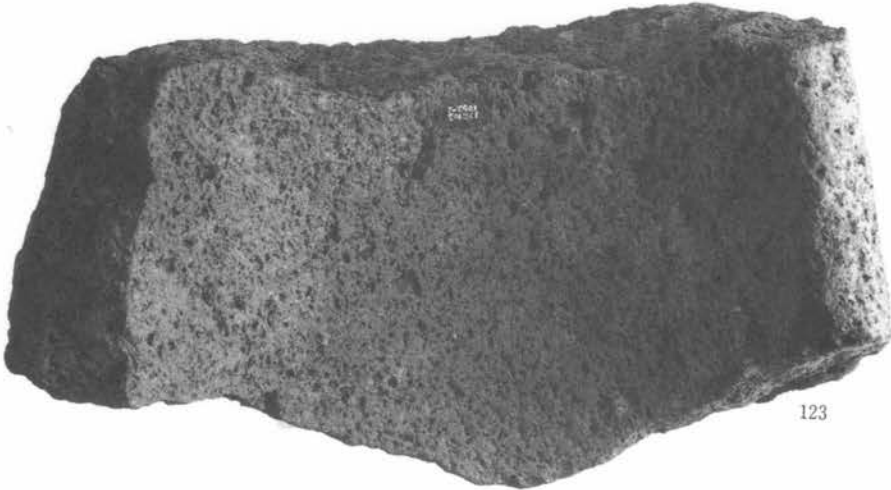
103

グリッド出土石器 (打製石斧)

A地点



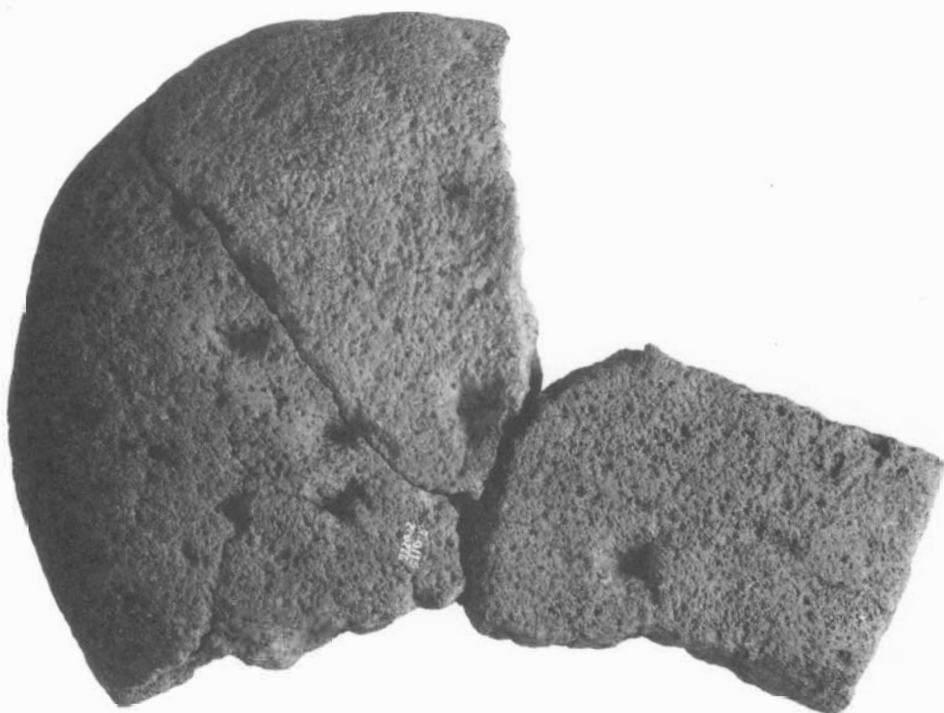
122



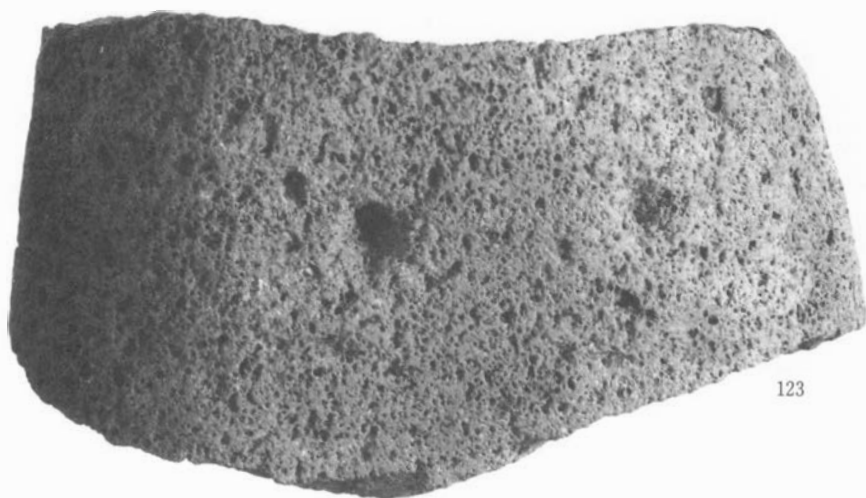
123

グリッド出土石器（石皿の表）

A地点



122



123

グリッド出土石器（石皿の裏）

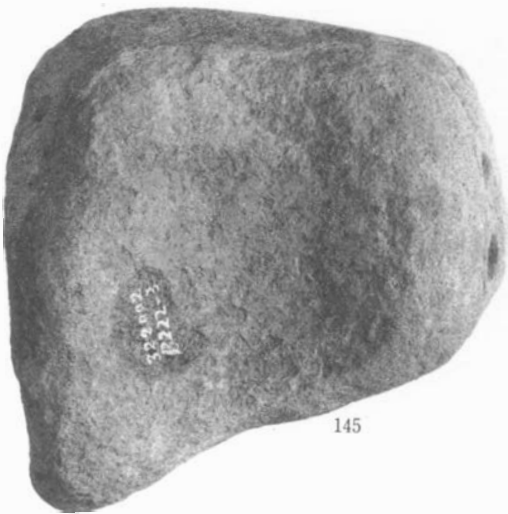
A地点



143



144



145

グリッド出土石器 (石皿・凹石の表)

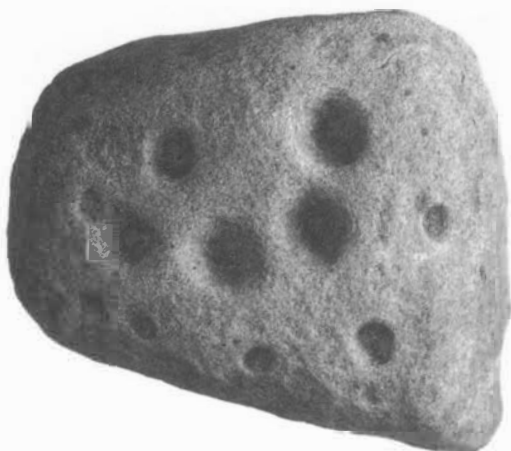
A地点



143



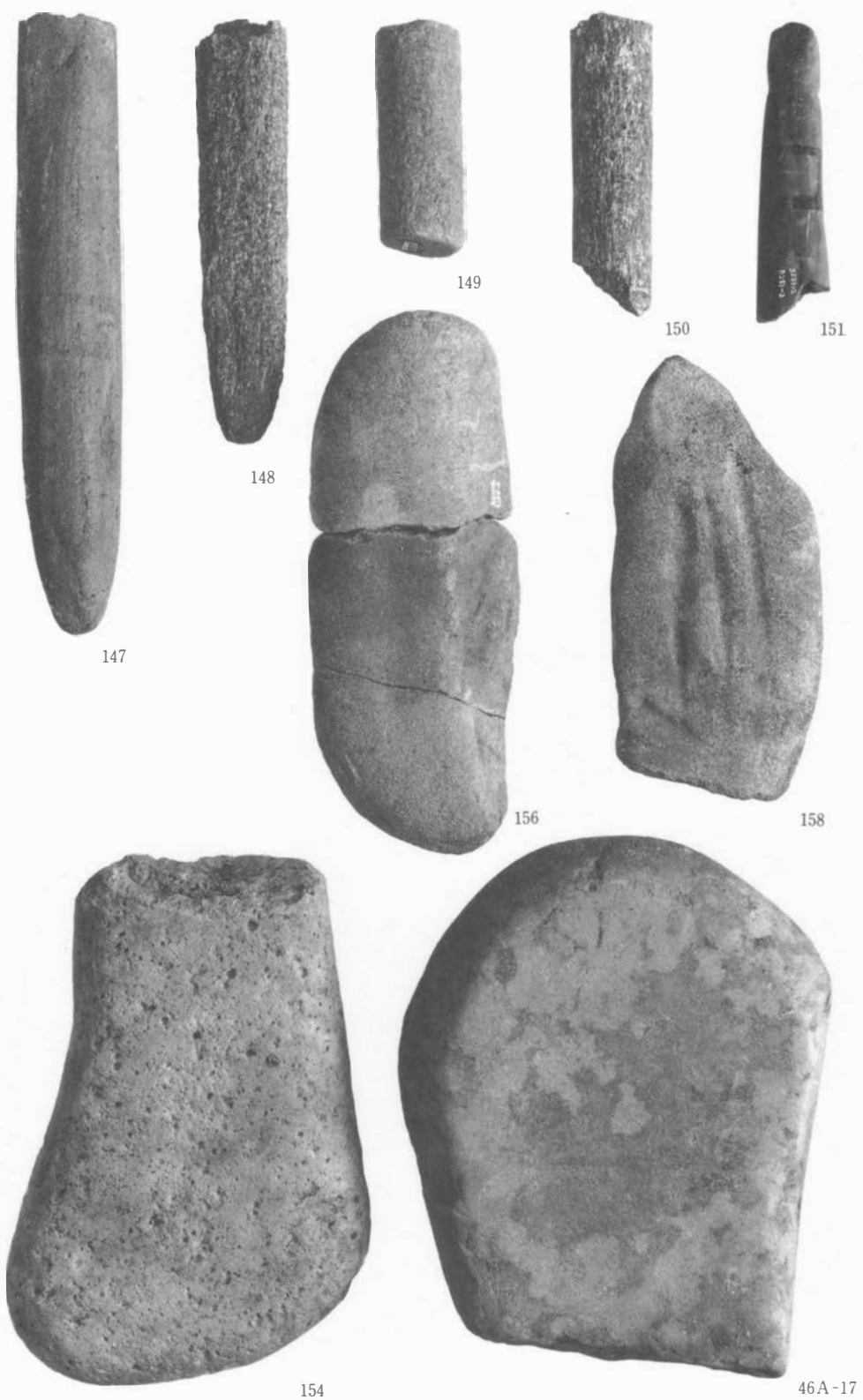
144



145

グリッド出土石器 (石皿・凹石の裏)

A地点



グリッド出土石器 (石剣・石棒・砥石・台石)

A地点



160



161



162



163



164



165

グリッド出土石器（磨石）

A地点



166



167



168



169



170



171



172



173



174

グリッド出土石器（磨石）

A地点



182



183



184



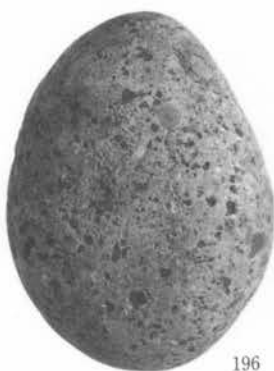
185



186



187



196



197



198

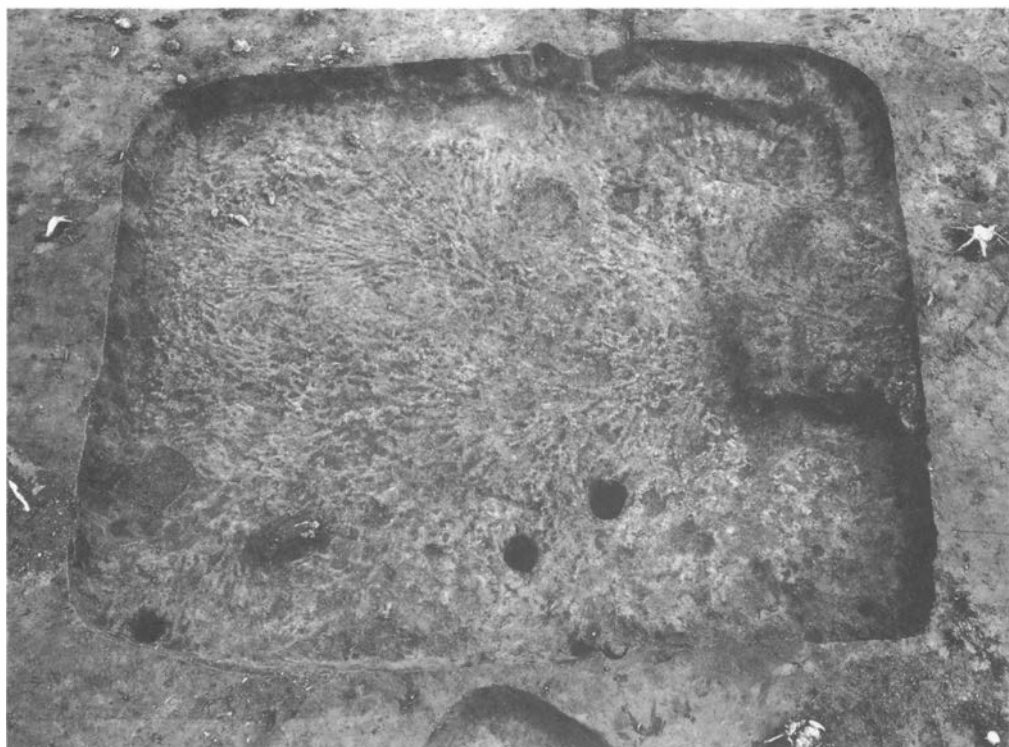
グリッド出土石器 (磨石)

A地点



遺跡近景

A地点



1. 第1号住居跡全景



2. 第1号住居跡遺物出土狀況

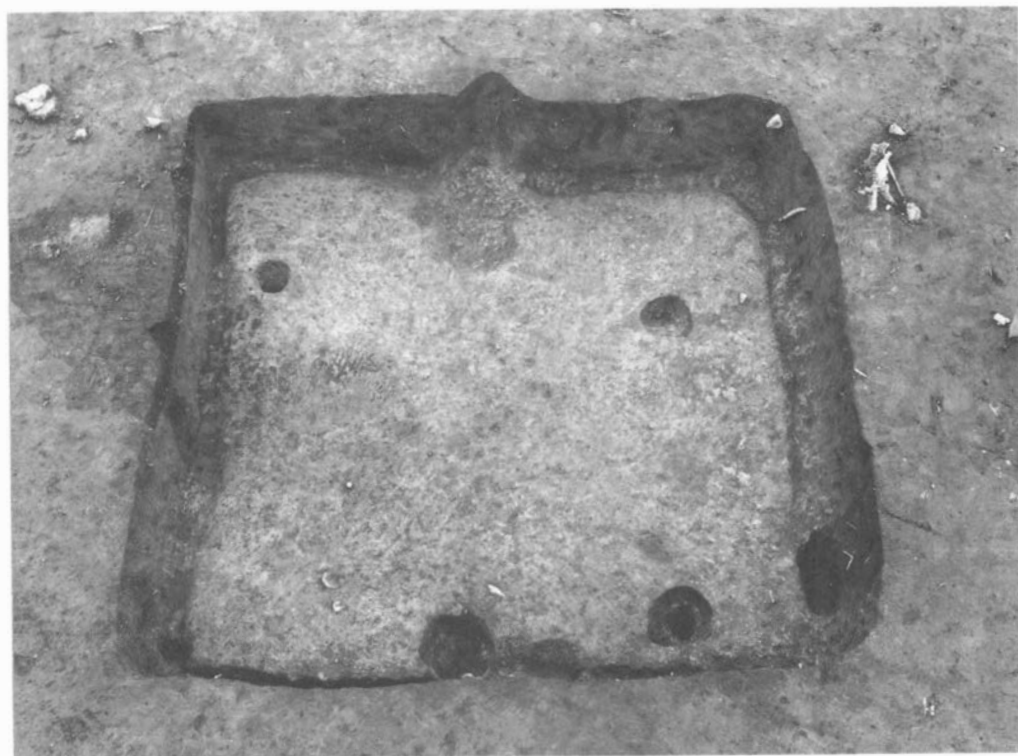


3. 同左

A地点



1. 第2号住居迹全景

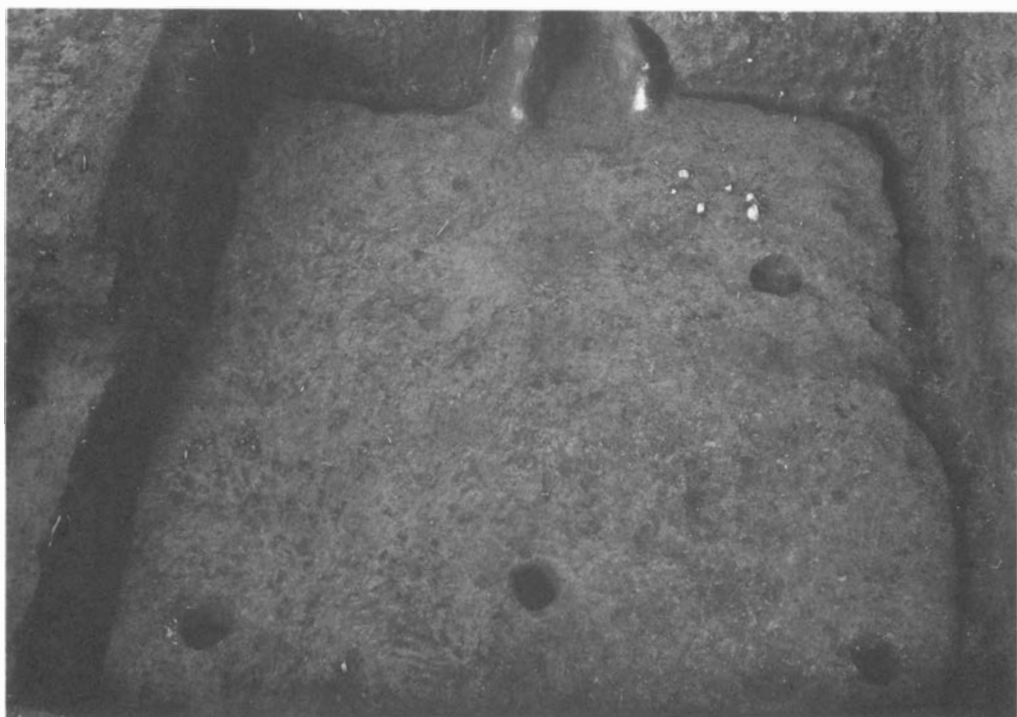


2. 第3号住居迹全景

A地点

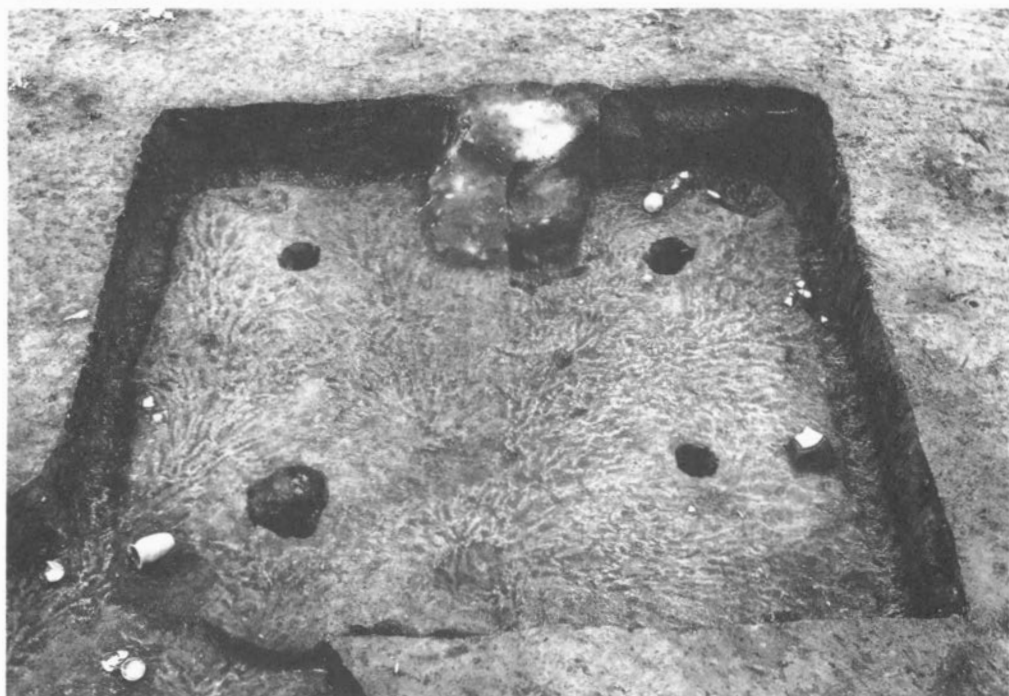


1. 第6号住居迹全景



2. 第8号住居迹全景

A地点

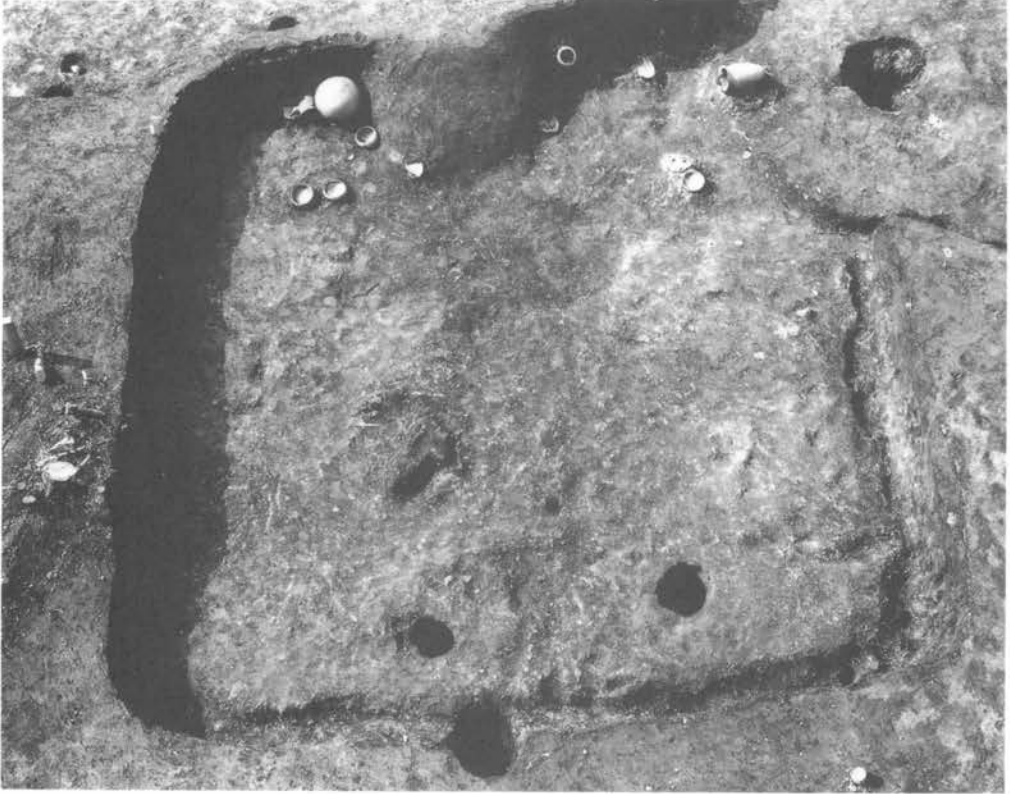


1. 第11号住居跡全景



2. 第11号住居跡カマド

A地点

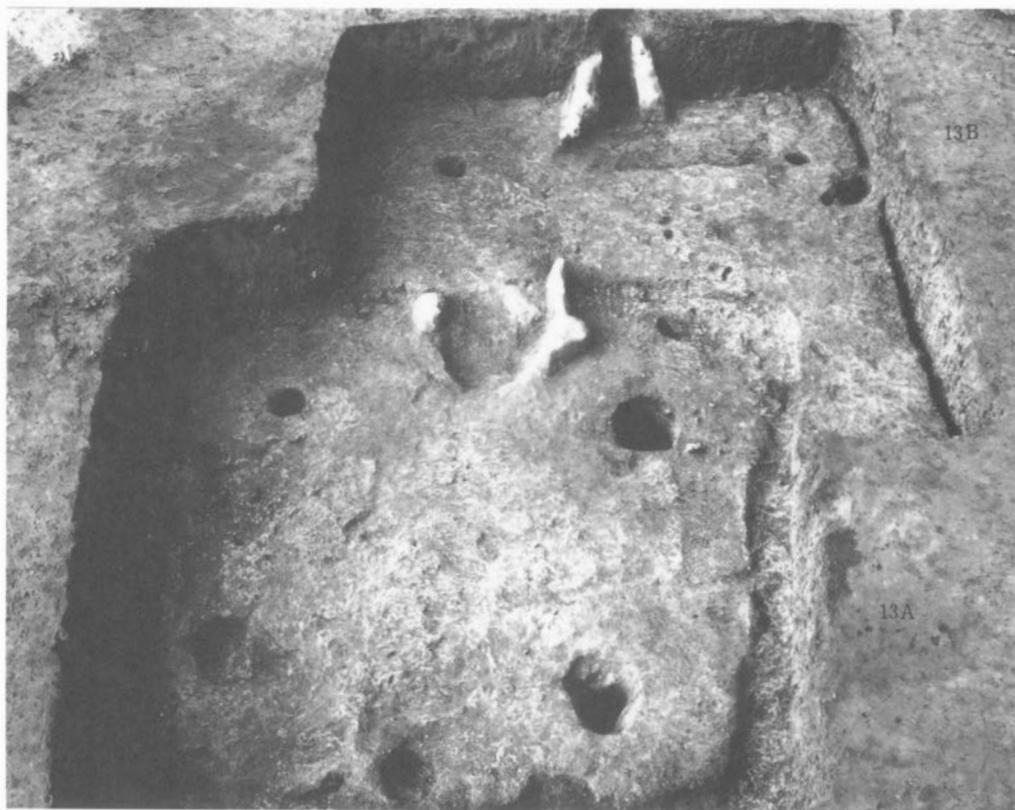


1. 第12号住居跡全景

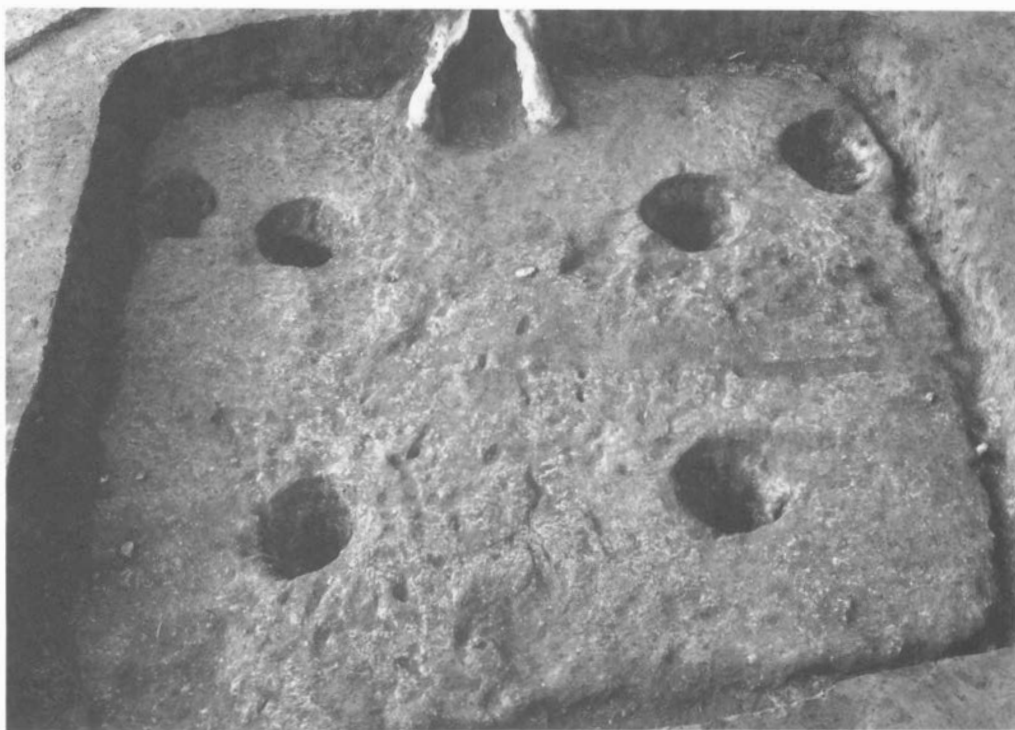


2. 第12号住居跡遺物出土状況

A地点



1. 第13A·B号住居迹全景

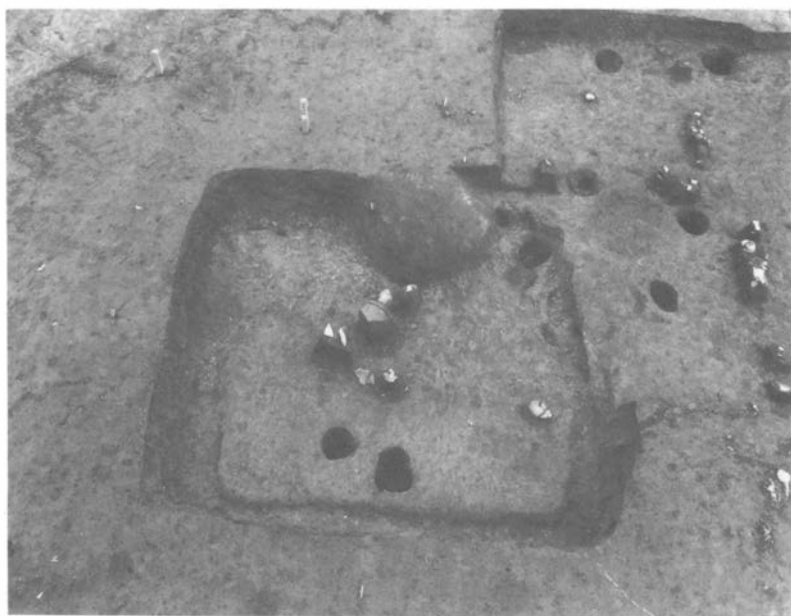


2. 第15号住居迹全景

A地点



1. 第17号住居跡全景

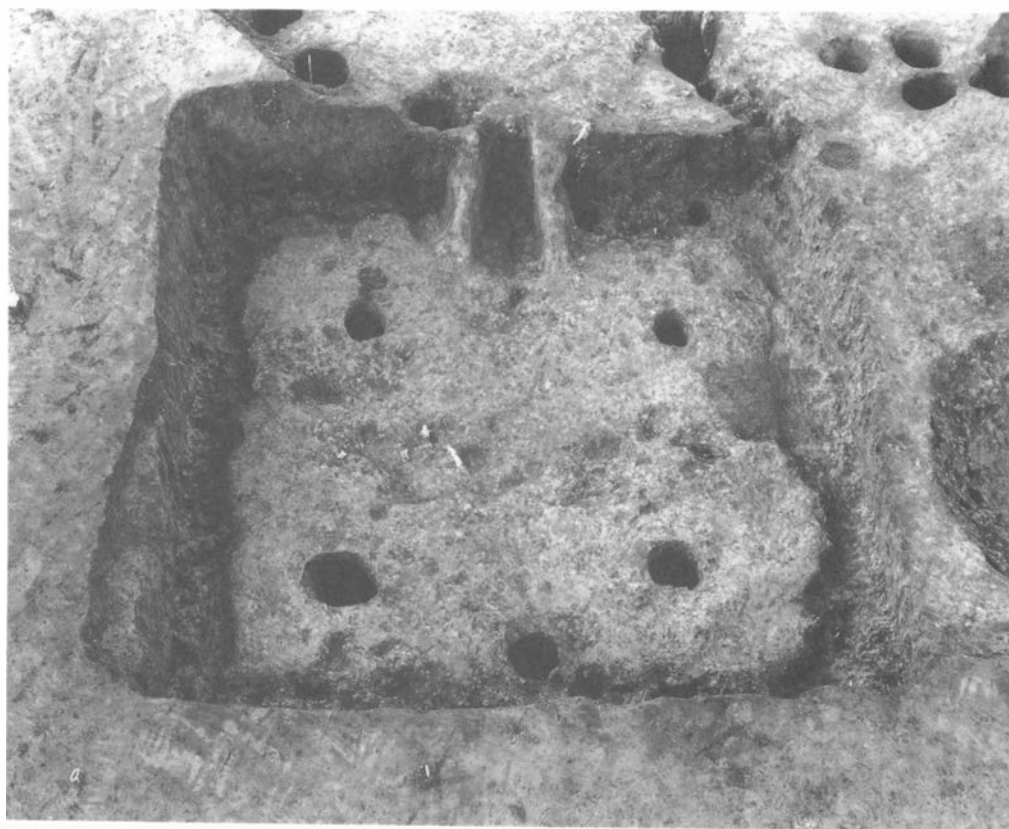


2. 第17号住居跡遺物出土狀況

A地点

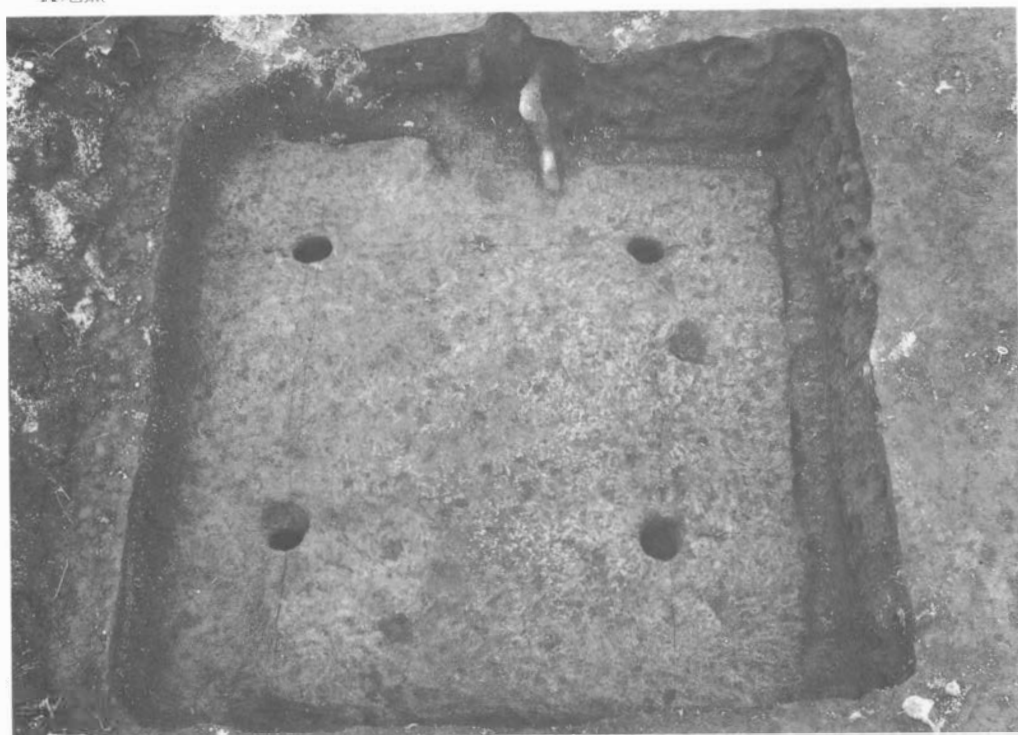


1. 第19号住居迹全景

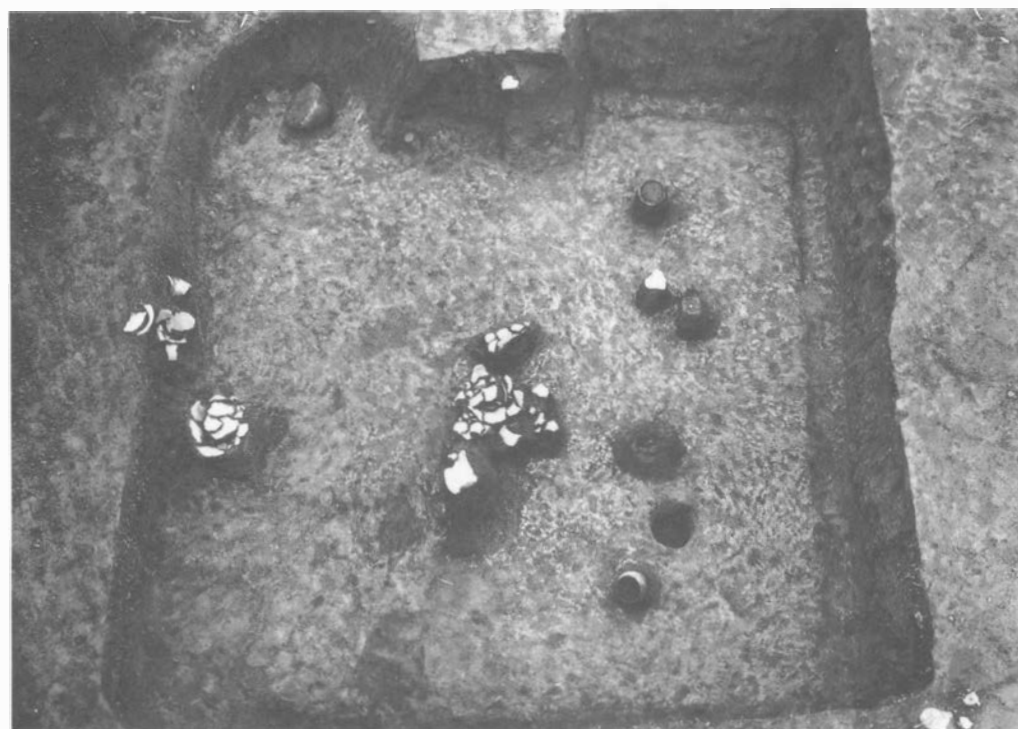


2. 第21号住居迹全景

A地点



1. 第23号住居跡全景



2. 第23号住居跡遺物出土狀況

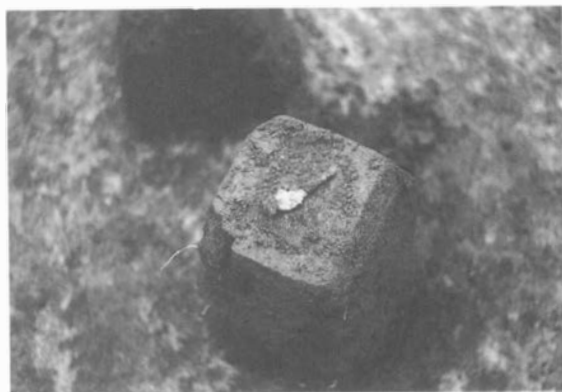
A地点



1



2



3



4

1 ~ 4 第23号住居跡遺物出土状況

A地点



1. 第24号住居跡全景



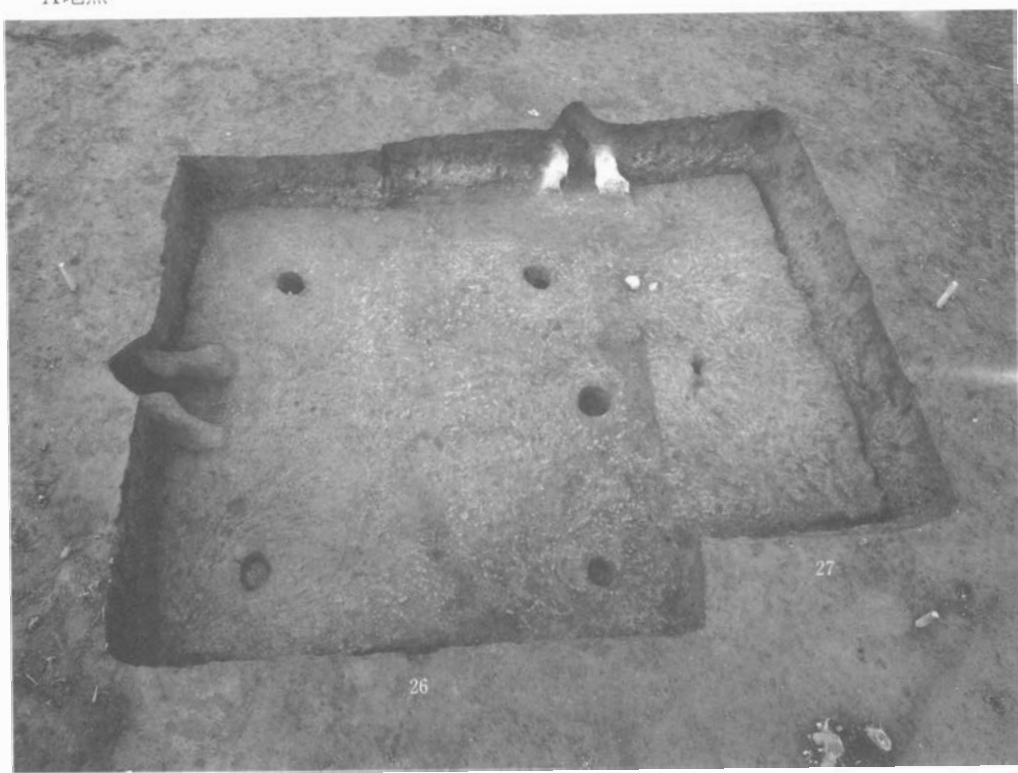
2. 第24号住居跡遺物出土状況

A地点

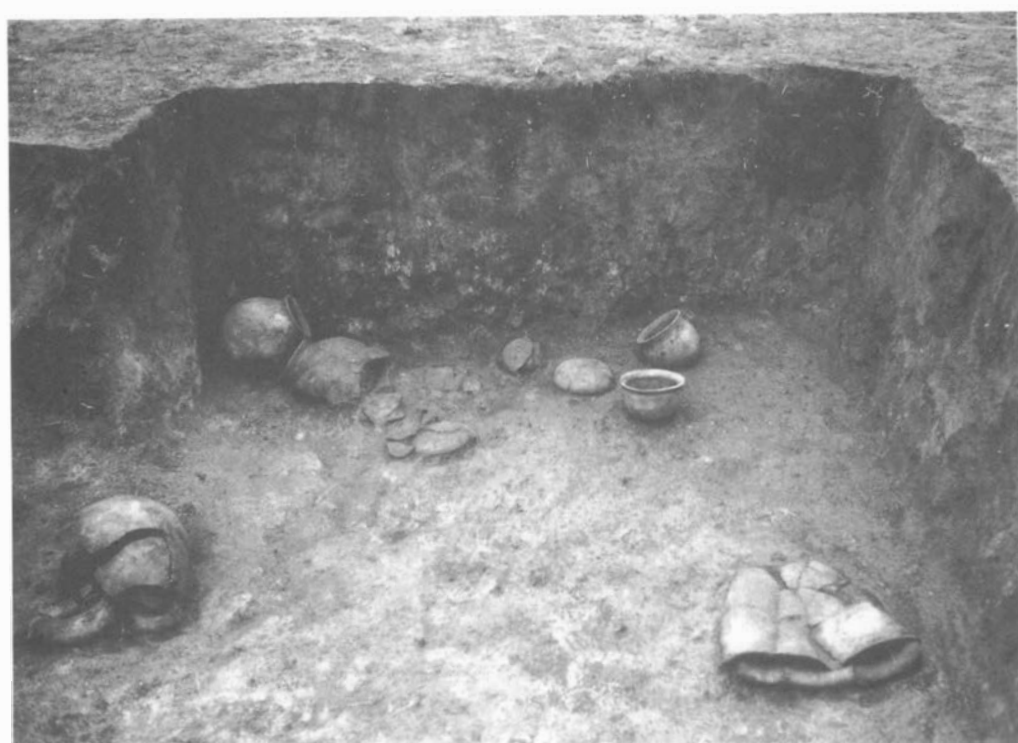


第24, 25号住居跡全景

A地点



1. 第26, 27号住居跡全景



2. 第27号住居跡遺物出土狀況

A地点



1. 第27号住居跡遺物出土状況



2. 同上

A地点

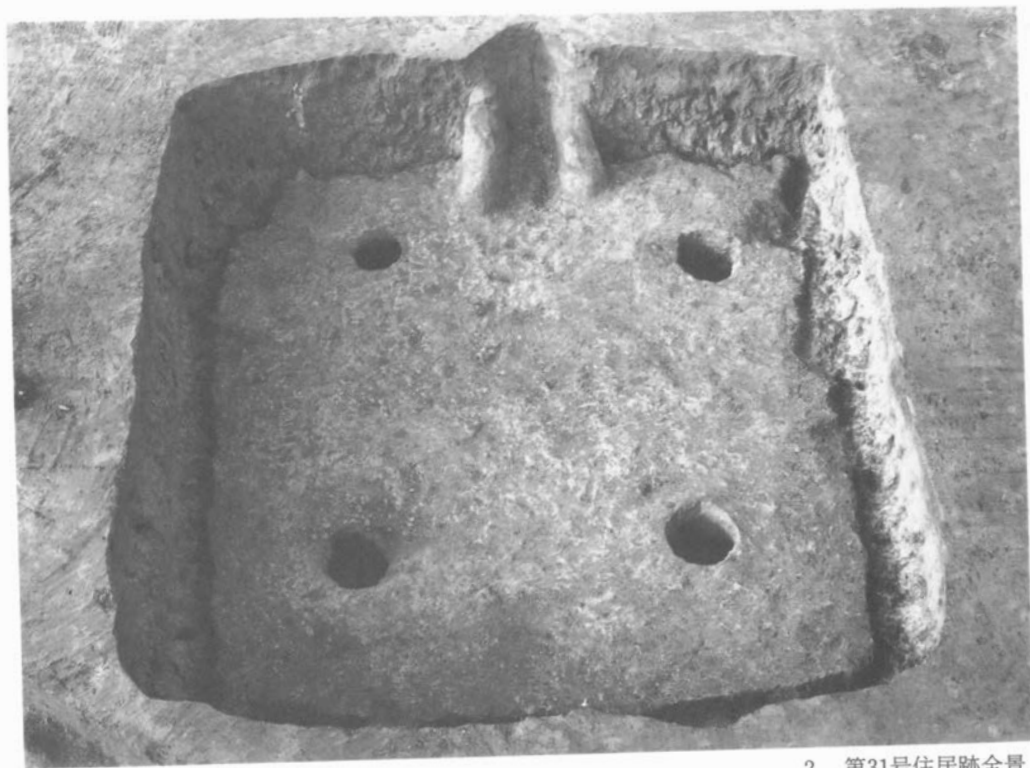


第29号住居迹全景

A地点



1. 第30号住居迹全景

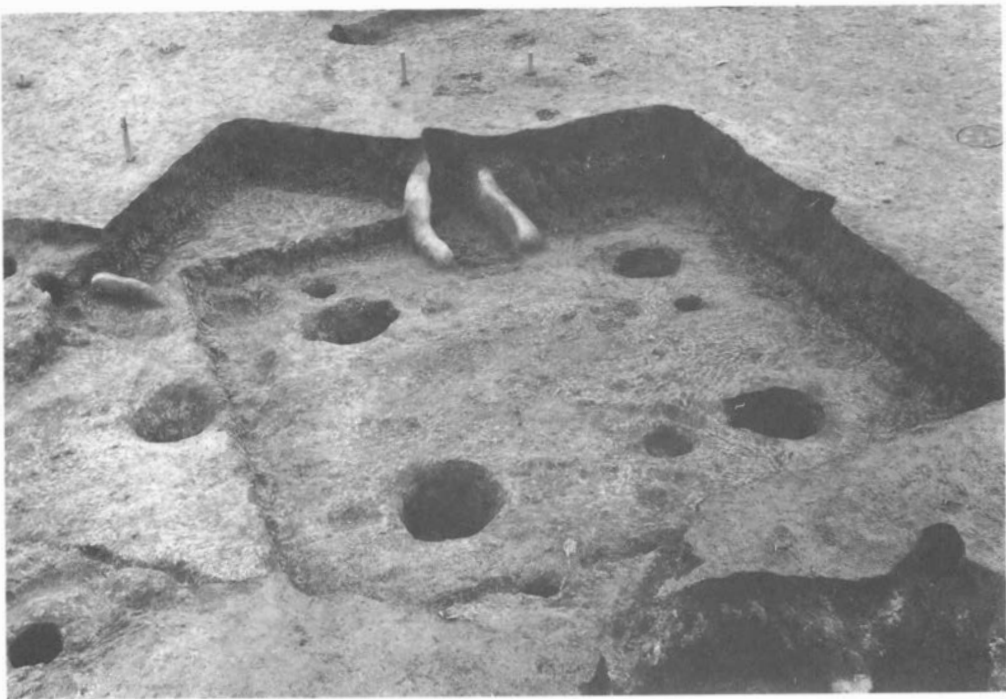


2. 第31号住居迹全景

A地点



1. 第33A・B号住居跡付近遺構検出状況

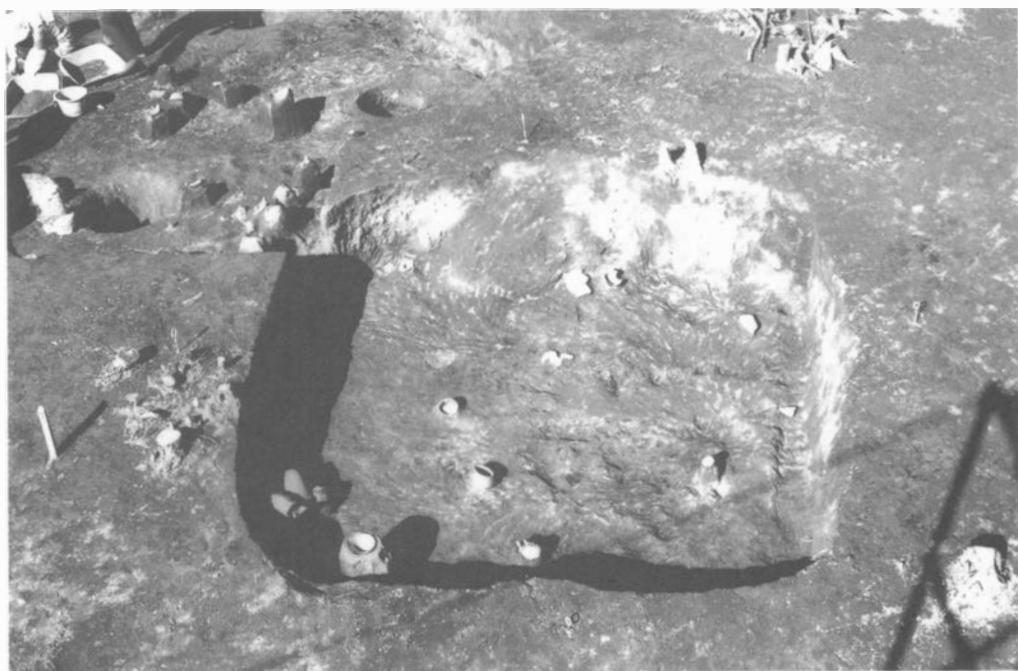


2. 第33A号住居跡全景

A地点



1. 第37号住居跡全景



2. 第37号住居跡遺物出土狀況

A地点



1. 第37号住居跡遺物出土状況

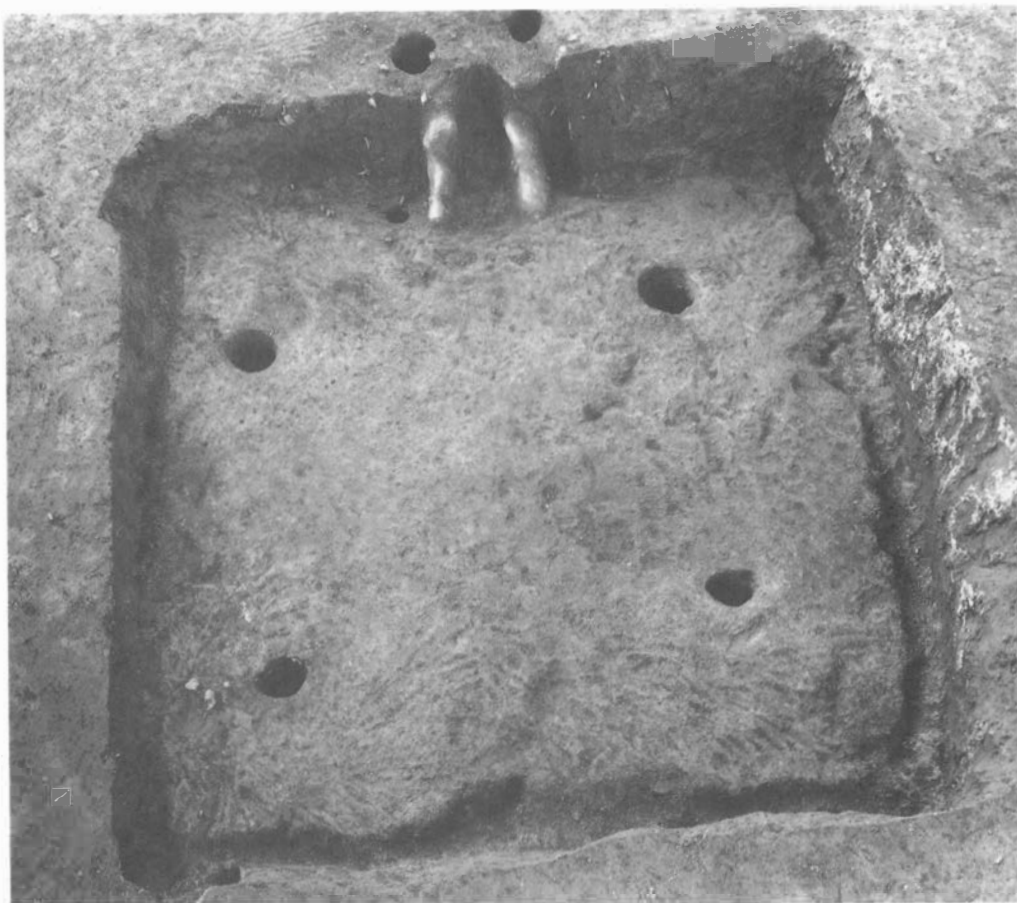


2. 同上

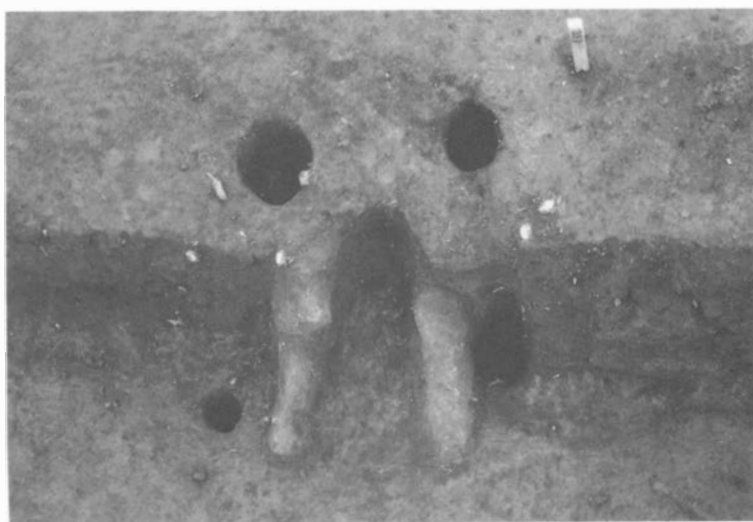


3. 同上

A地点

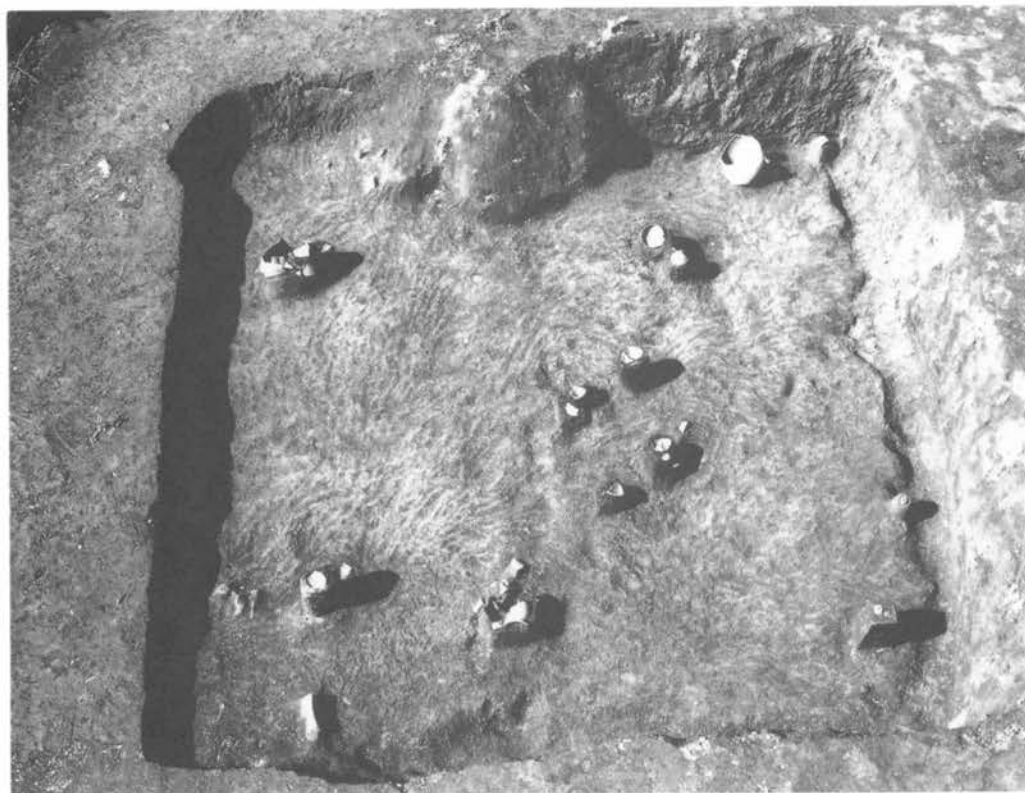


1. 第38号住居跡全景



2. 第38号住居跡カマド近景

A地点



1. 第38号住居跡遺物出土状況

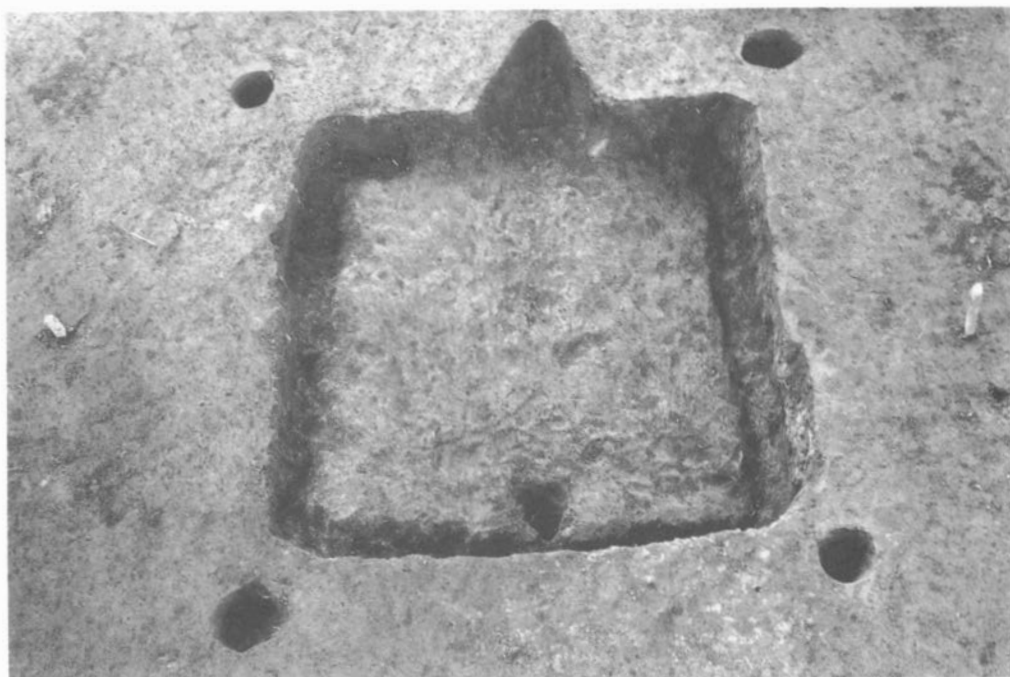


2. 同上

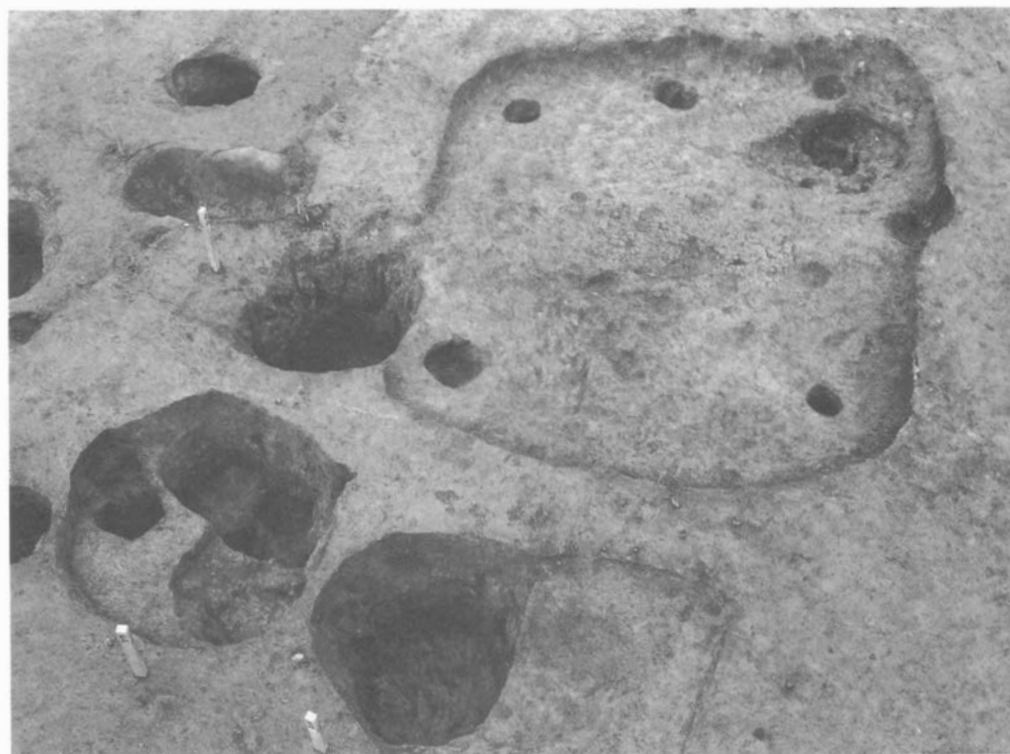


3. 同上

A地点

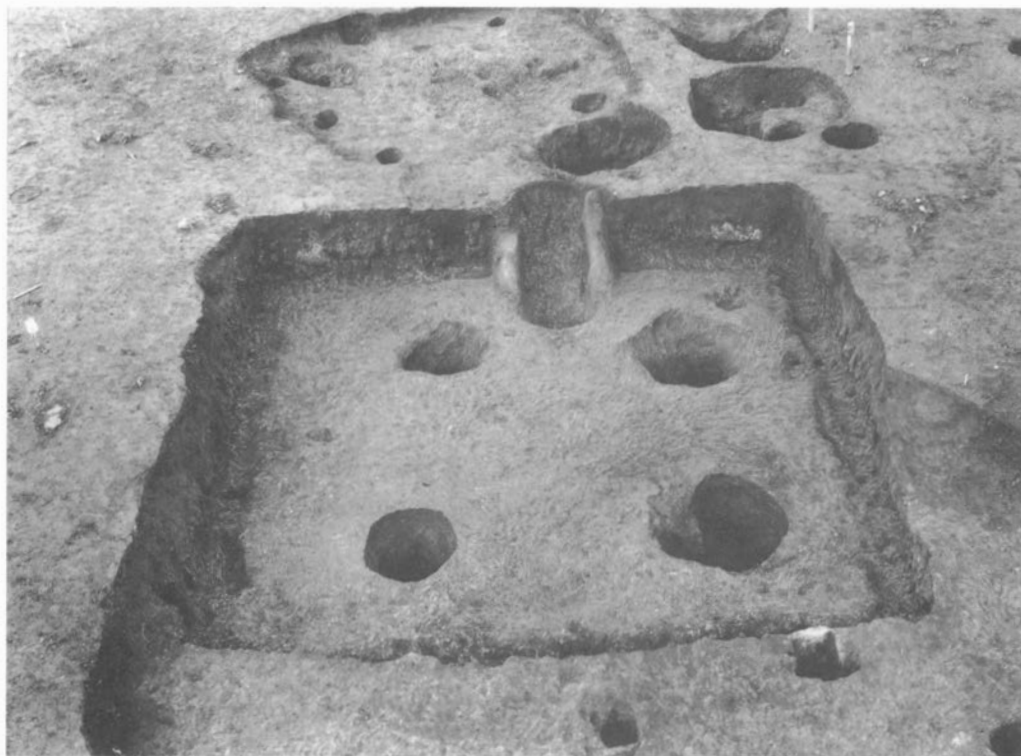


1. 第39号住居迹全景



2. 第40号住居迹全景

A地点

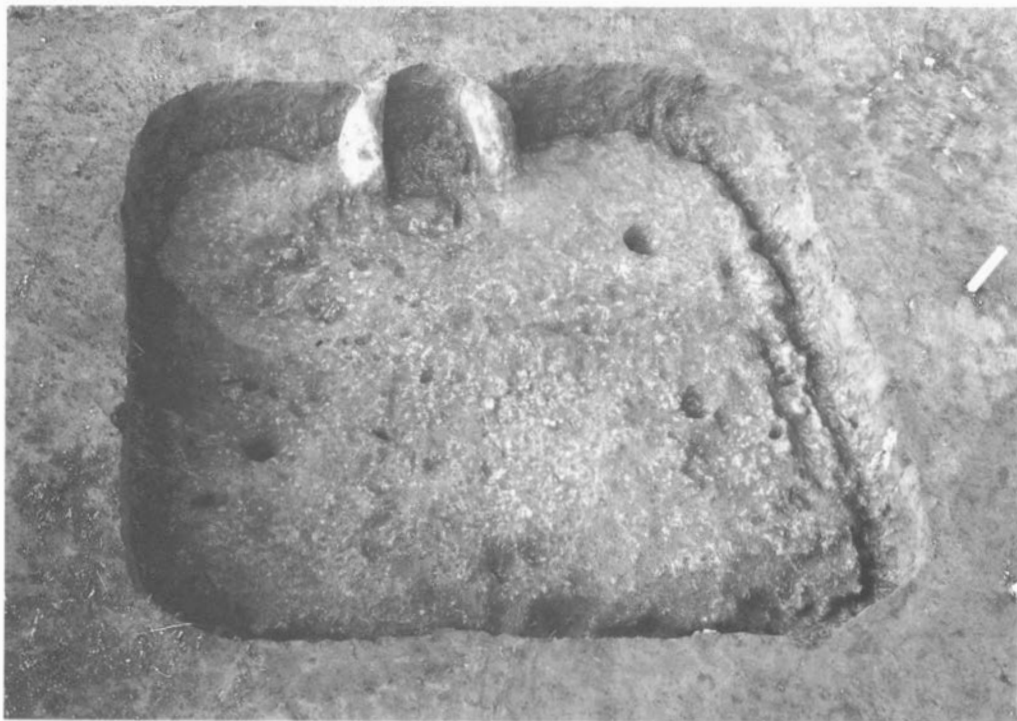


1. 第42号住居跡全景

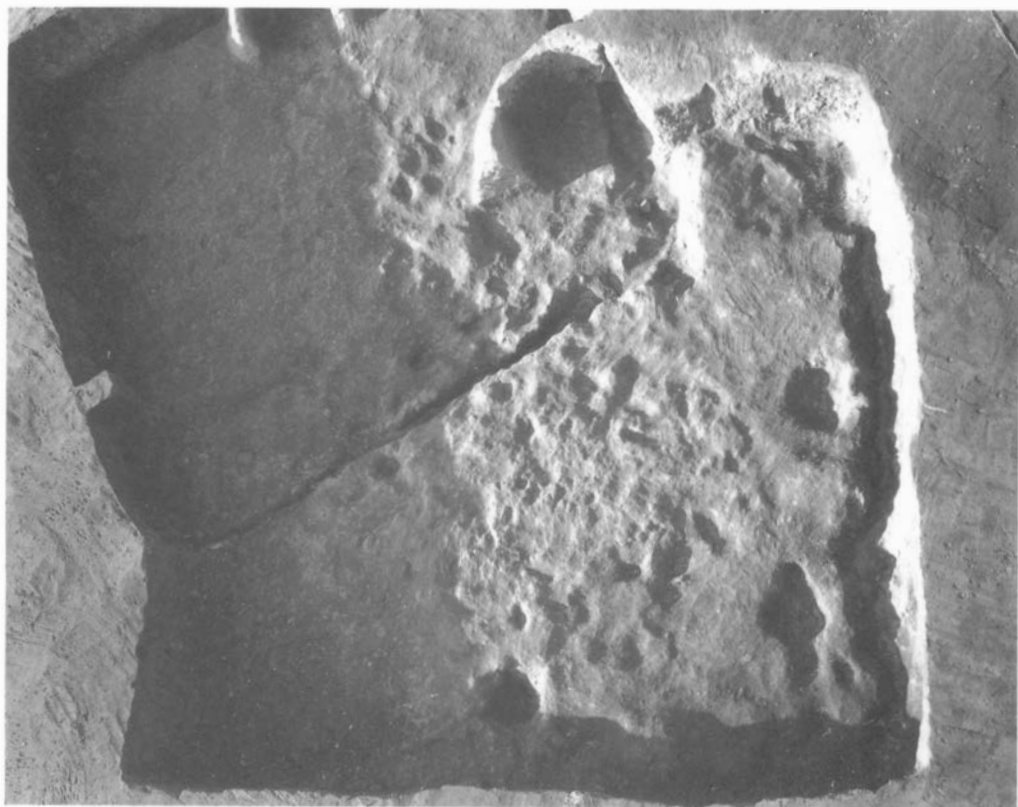


2. 第42号住居跡炭化物出土状況

A地点



1. 第45号住居迹全景



2. 第46A号住居迹全景

A地点

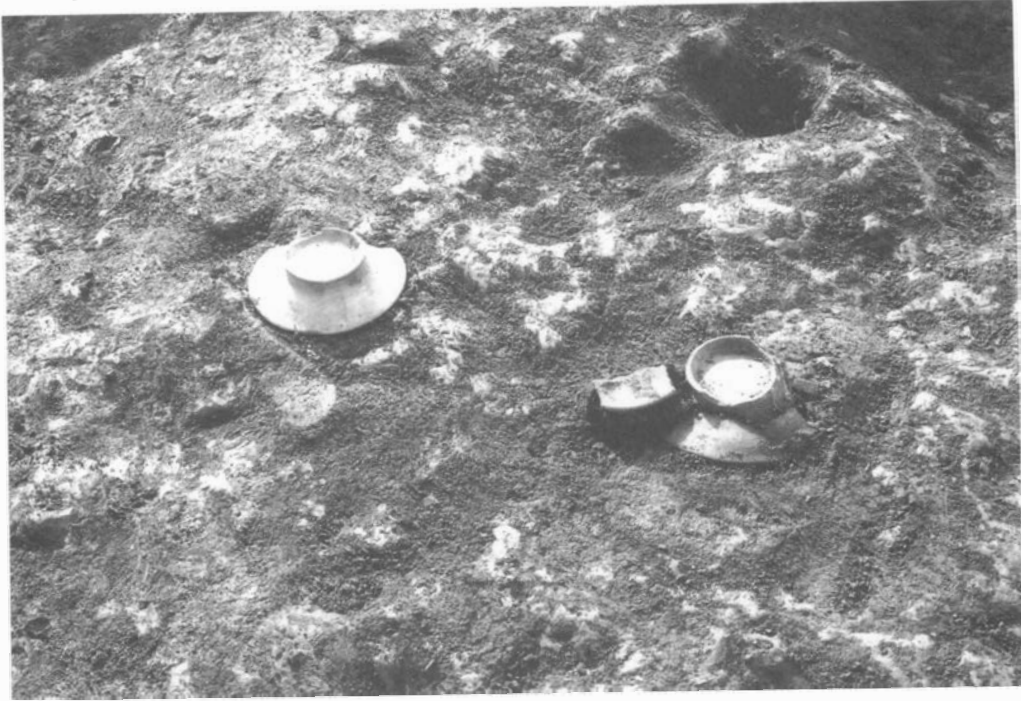


1. 第46A号住居跡遺物出土状況

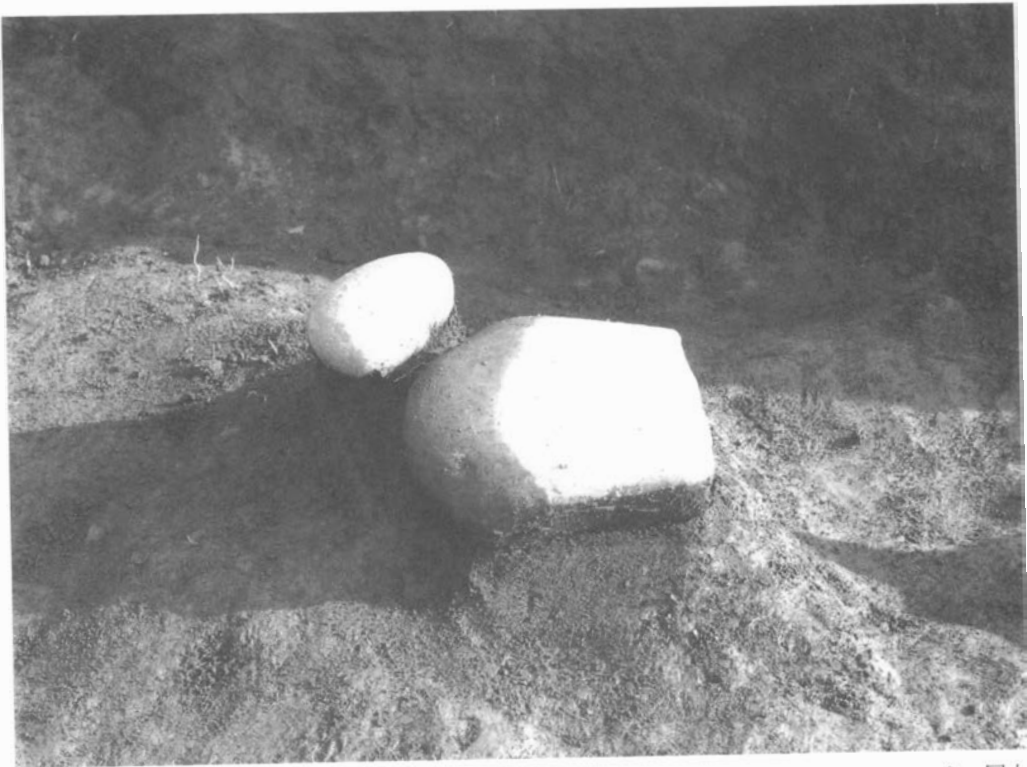


2. 同上

A地点

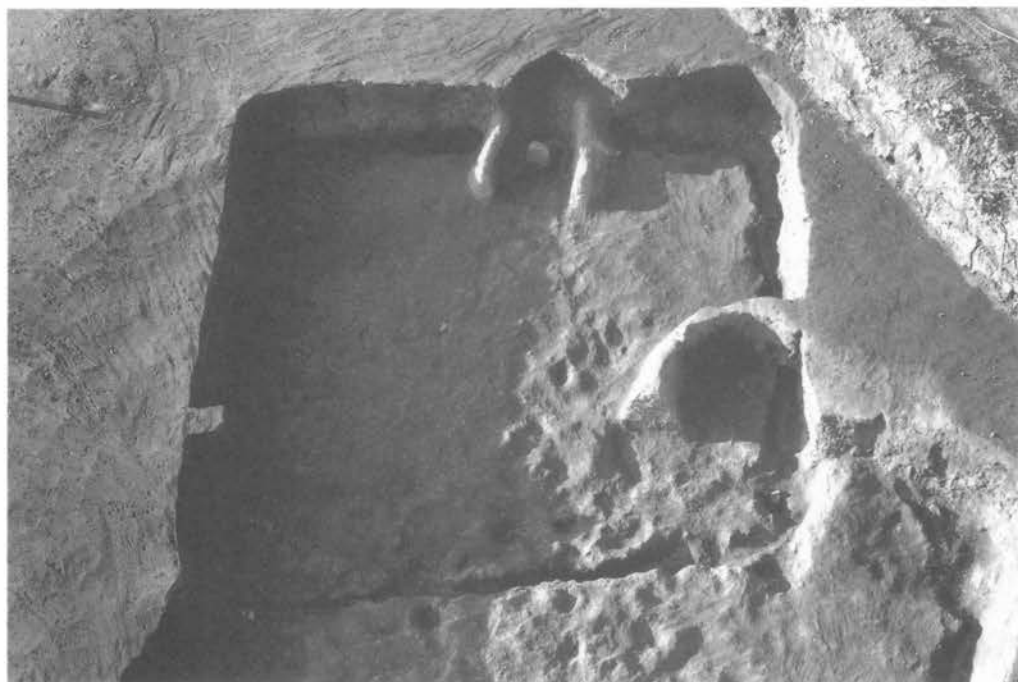


1. 第46A号住居跡遺物出土状況



2. 同上

A地点



1. 第46B号住居跡全景



2. 第46B号住居跡カマド土層断面

A地点



1. 第46B号住居跡遺物出土状況



2. 同上

A地点



1. 第48号住居跡全景



2. 第48号住居跡遺物出土狀況

A地点



第49号住居跡全景

A地点



第49号住居跡遺物出土状況

A地点



1. 第49号住居跡炭化物出土状況



2. 同上

A地点

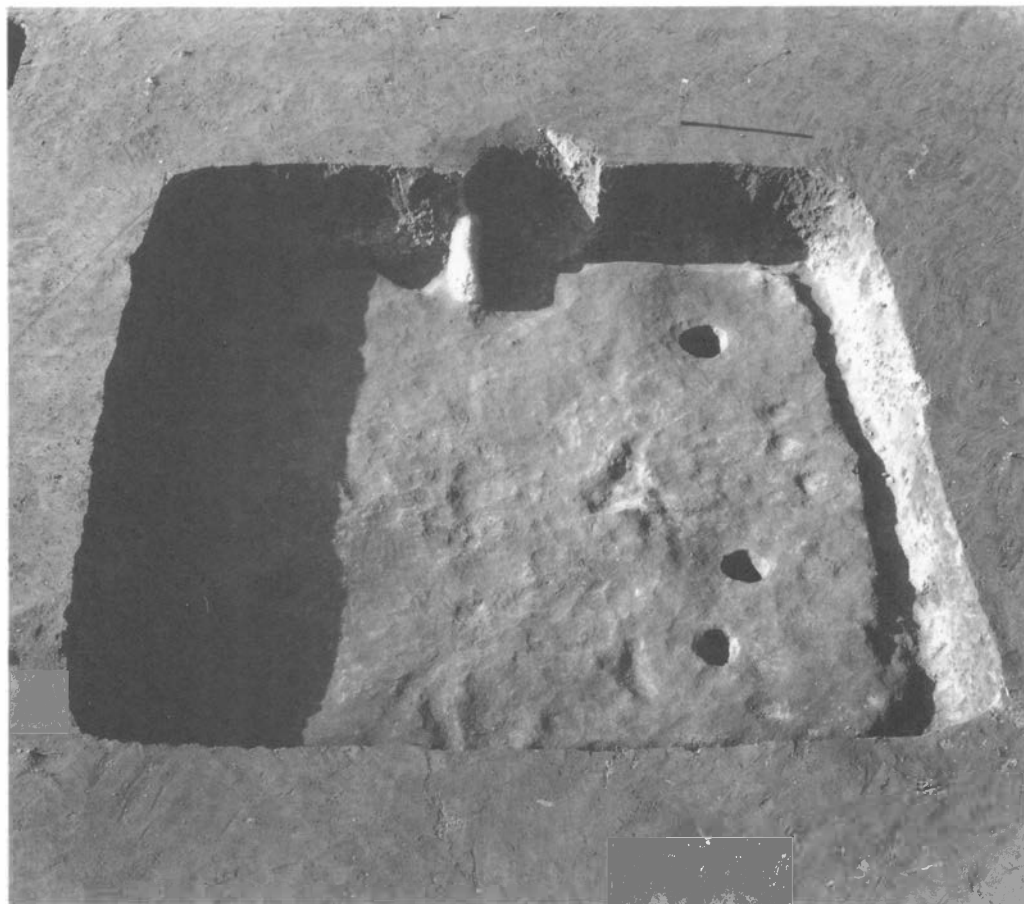


1. 第49号住居跡炭化物出土状況



2. 同上

A地点



第50号住居跡全景

A地点



1. 第51号住居跡全景

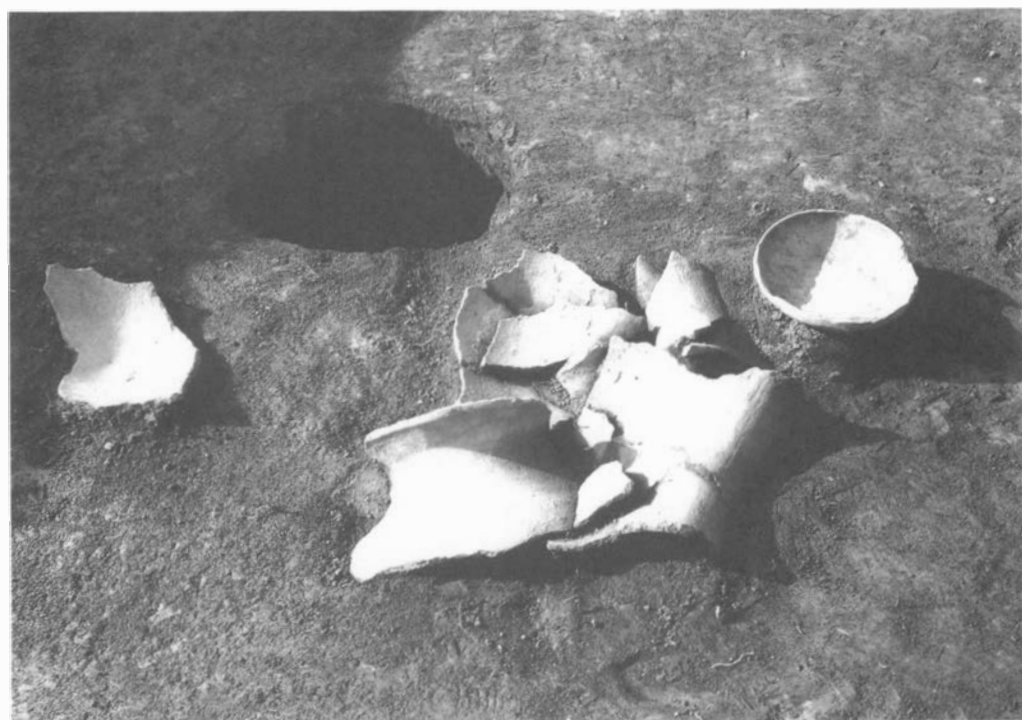


2. 第51号住居跡遺物出土状況

A地点



1. 第52号住居跡遺物出土状況



2. 同上

A地点



1. 第53号住居跡全景

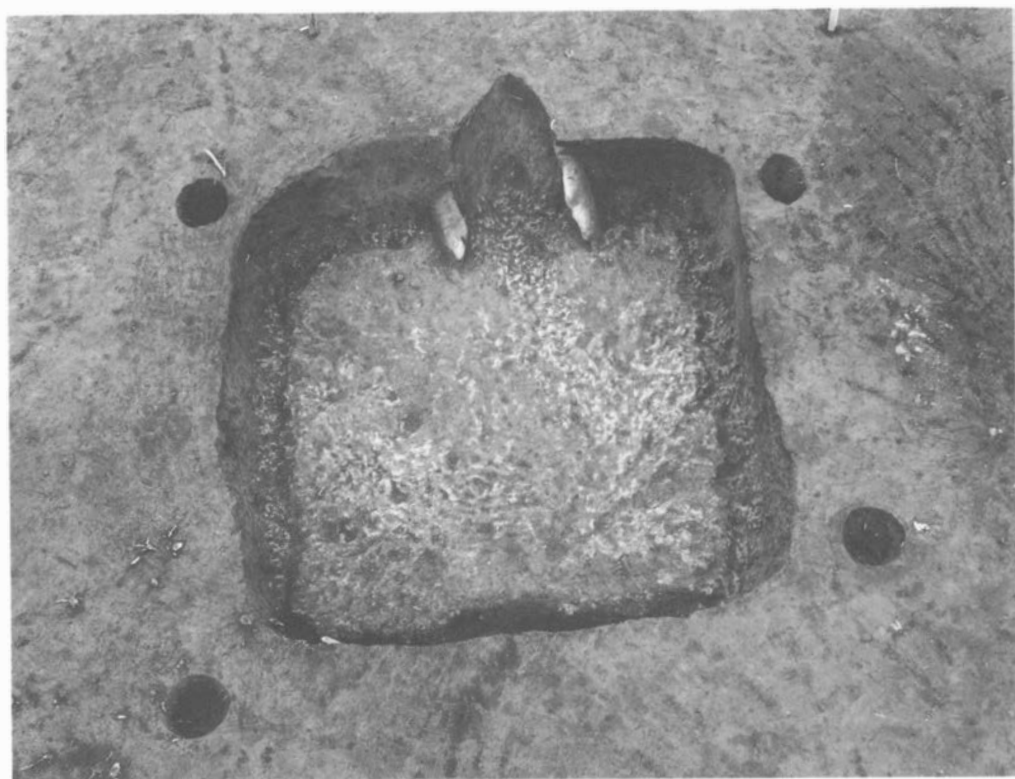


2. 第53号住居跡遺物出土狀況

A地点

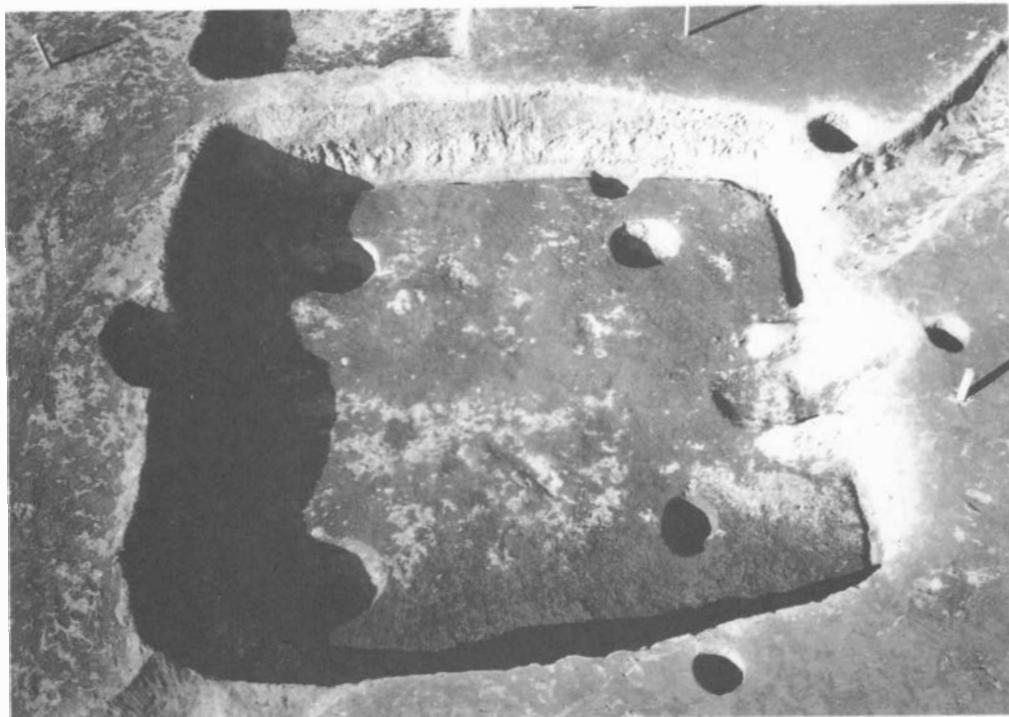


1. 第58号住居迹全景



2. 第62号住居迹全景

A地点



1. 第82号住居迹全景

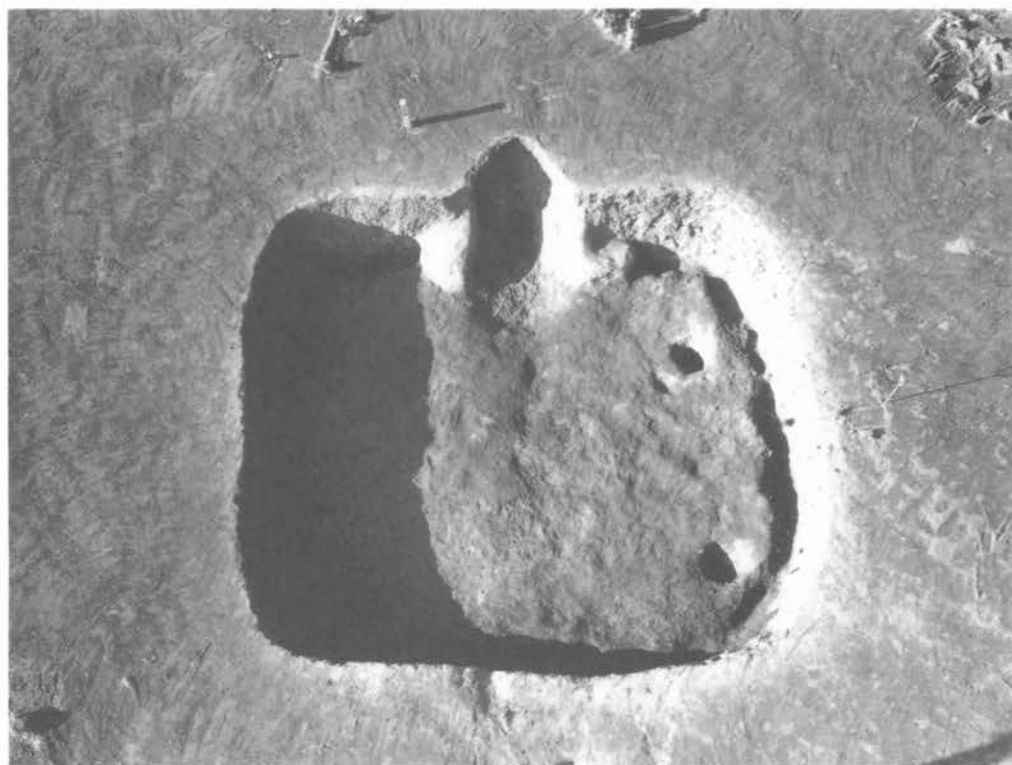


2. 第83, 84号住居迹全景

A地点

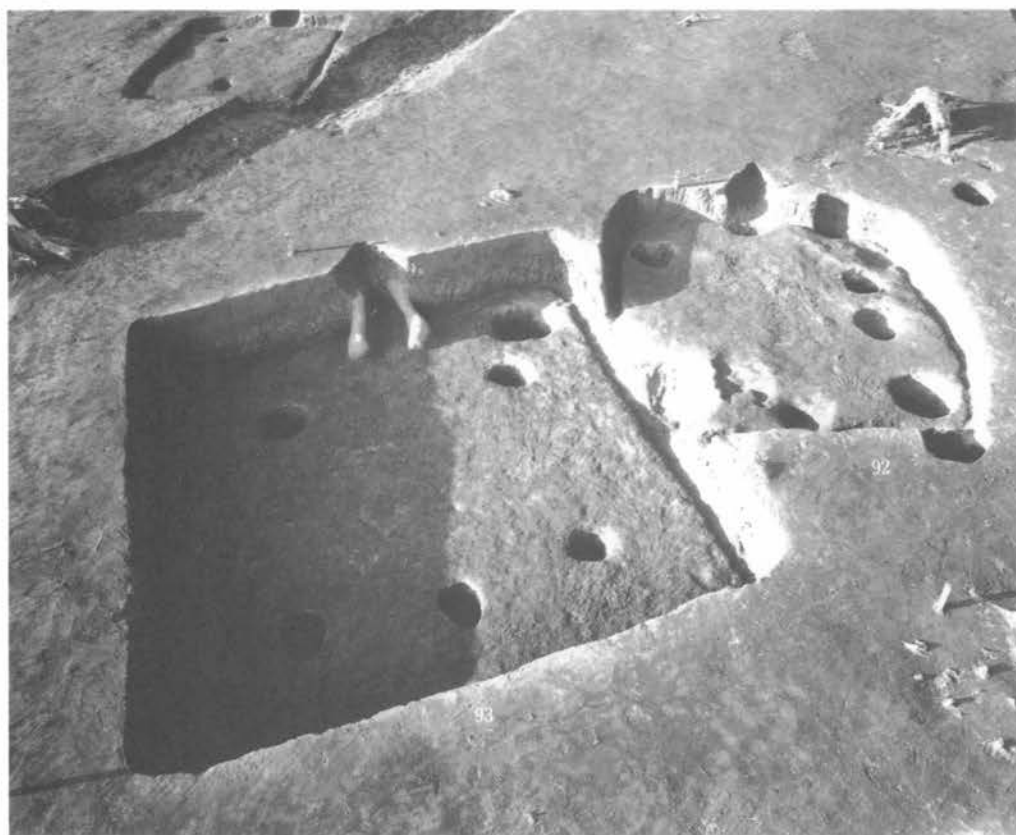


1. 第88, 89号住居迹全景



2. 第90号住居迹全景

A地点

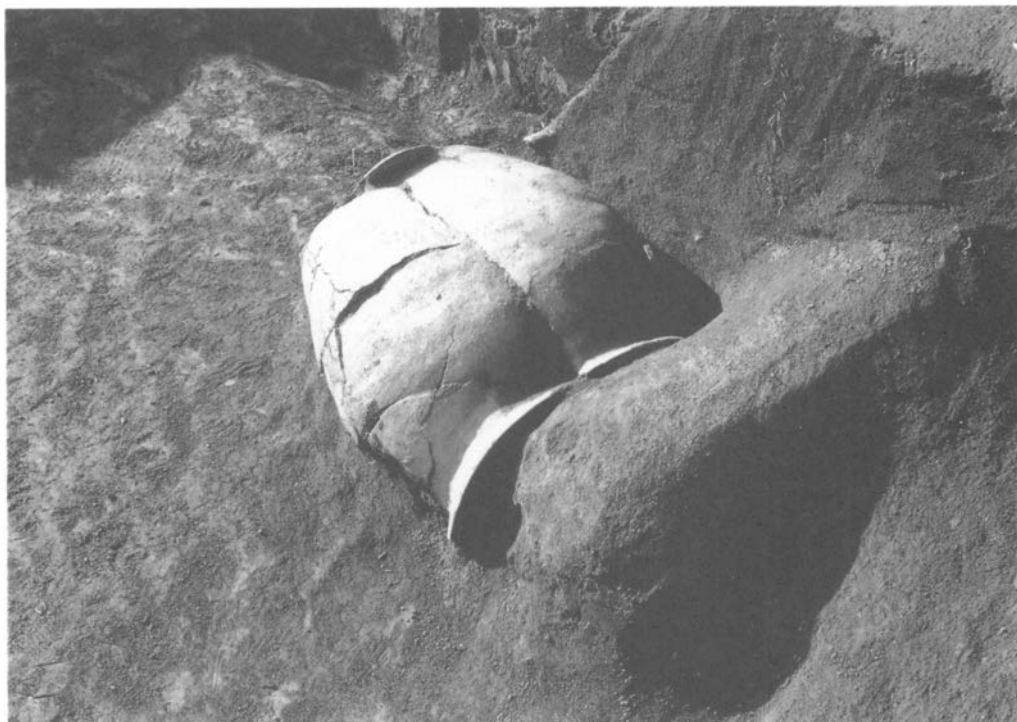


1. 第92, 93号住居跡全景



2. 第93号住居跡遺物出土狀況

A地点



1. 第93号住居跡遺物出土状況



2. 同上

A地点

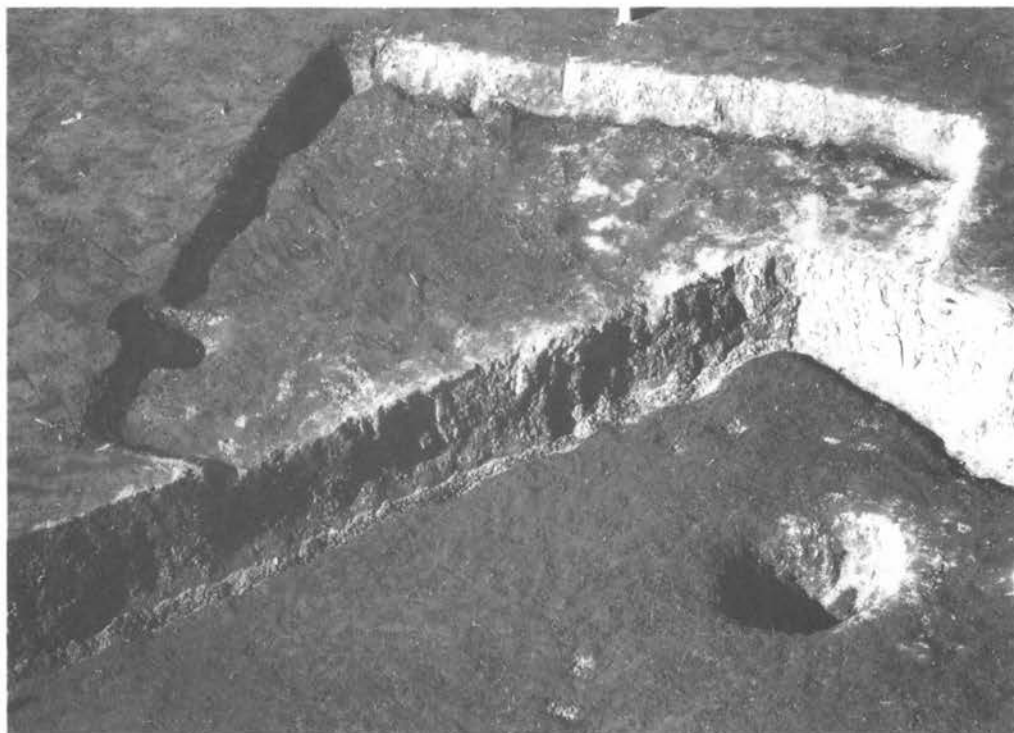


1. 第94号住居跡全景



2. 第97号住居跡全景

A地点



1. 第98号住居跡全景

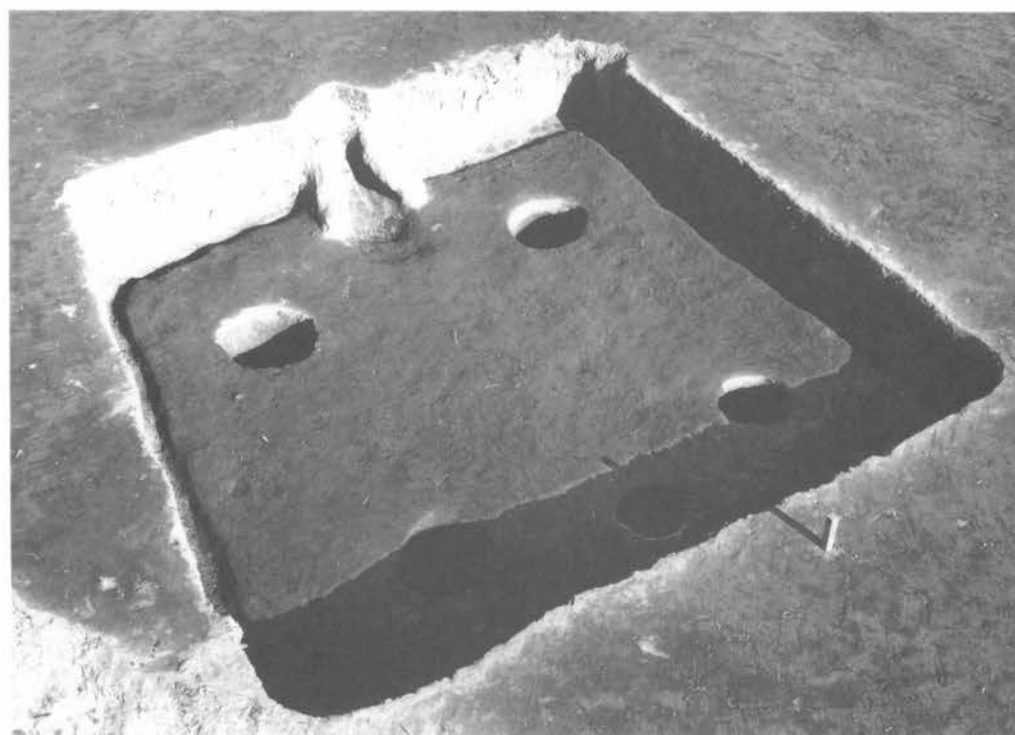


2. 第98号住居跡遺物出土狀況

A地点

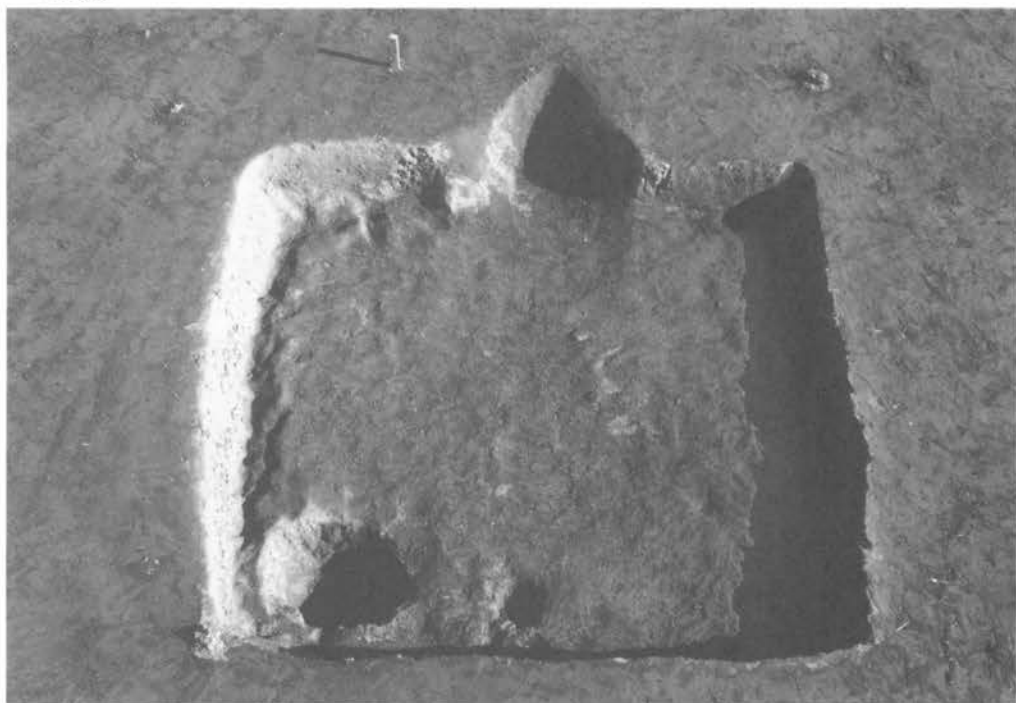


1. 第100号住居跡全景



2. 第102号住居跡全景

A地点



1. 第103号住居跡全景

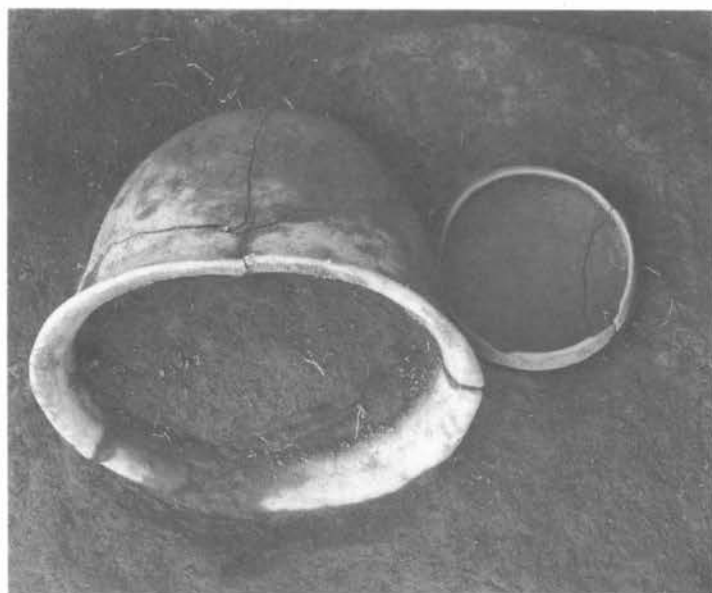


2. 第104号住居跡全景

A地点



1. 第106号住居跡全景



2. 第106号住居跡遺物出土狀況

A地点

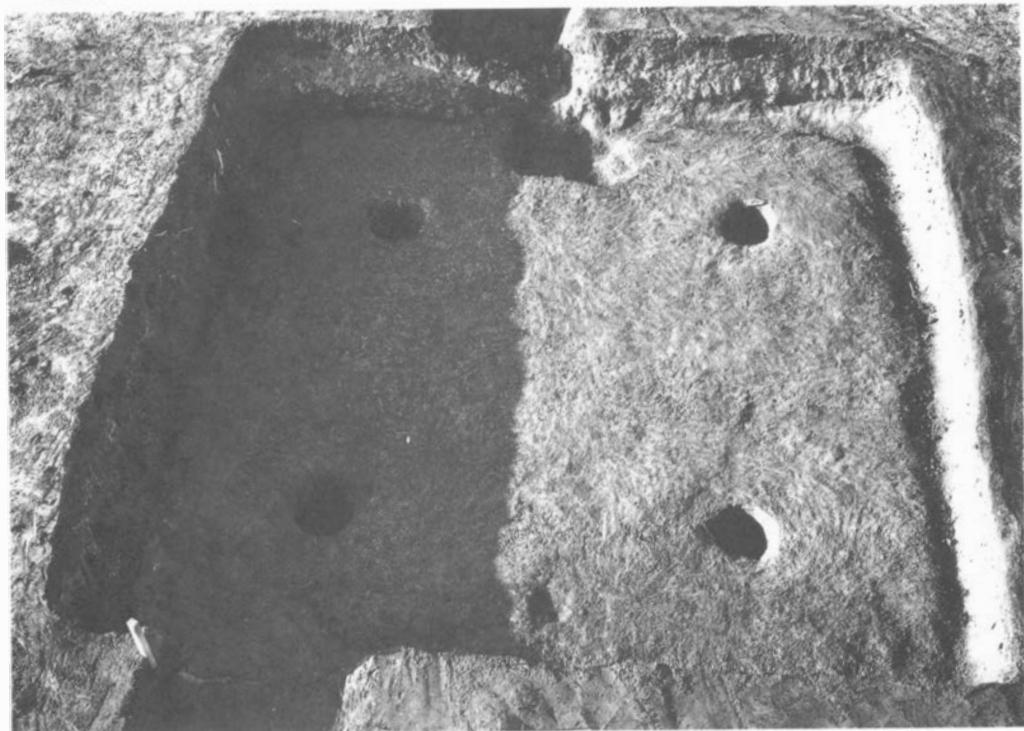


1. 第108号住居跡全景

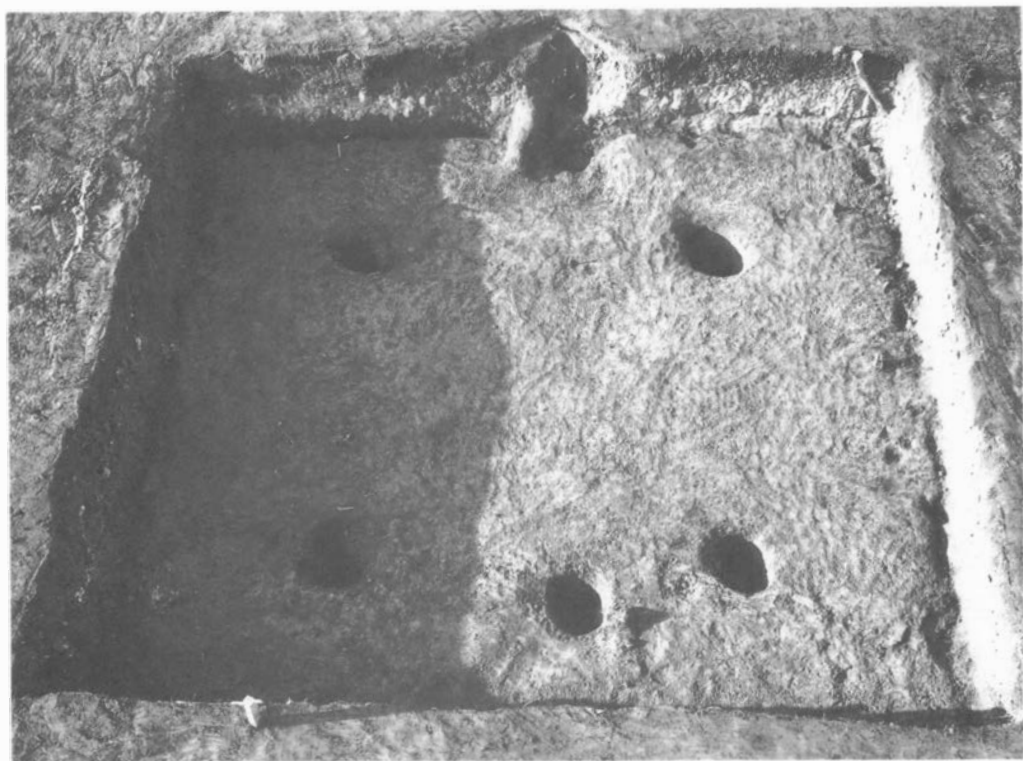


2. 第109号住居跡全景

A地点



1. 第114号住居迹全景



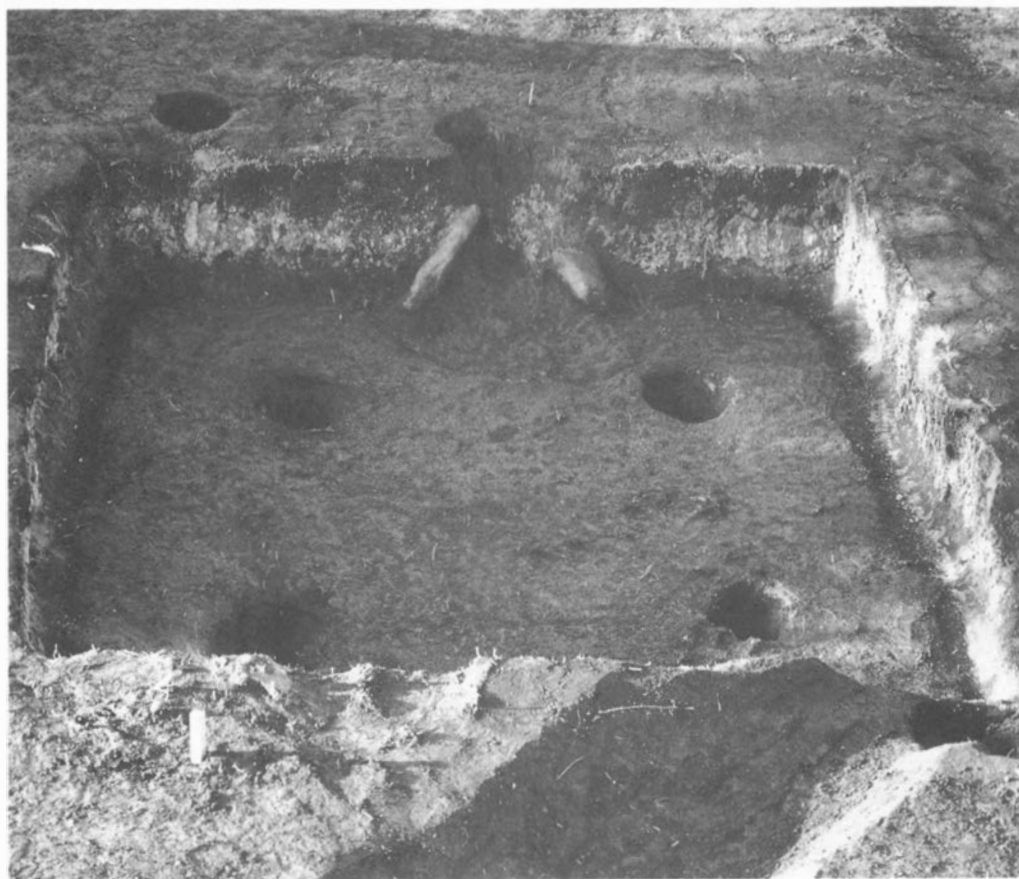
2. 第115号住居迹全景

A地点



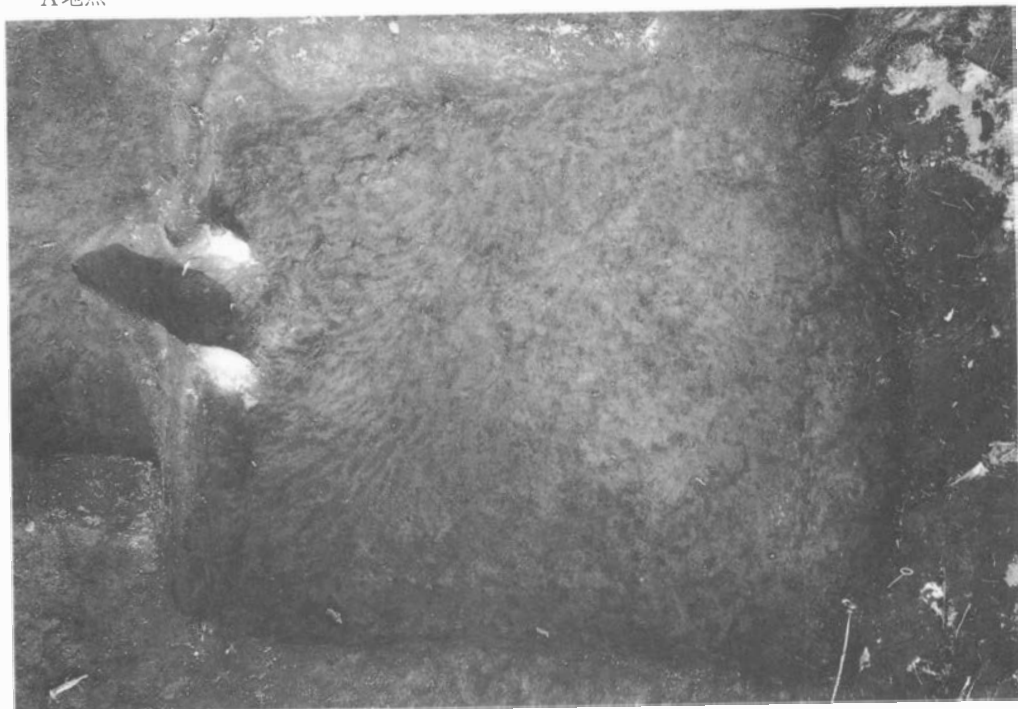
第116, 123号住居跡全景

A地点

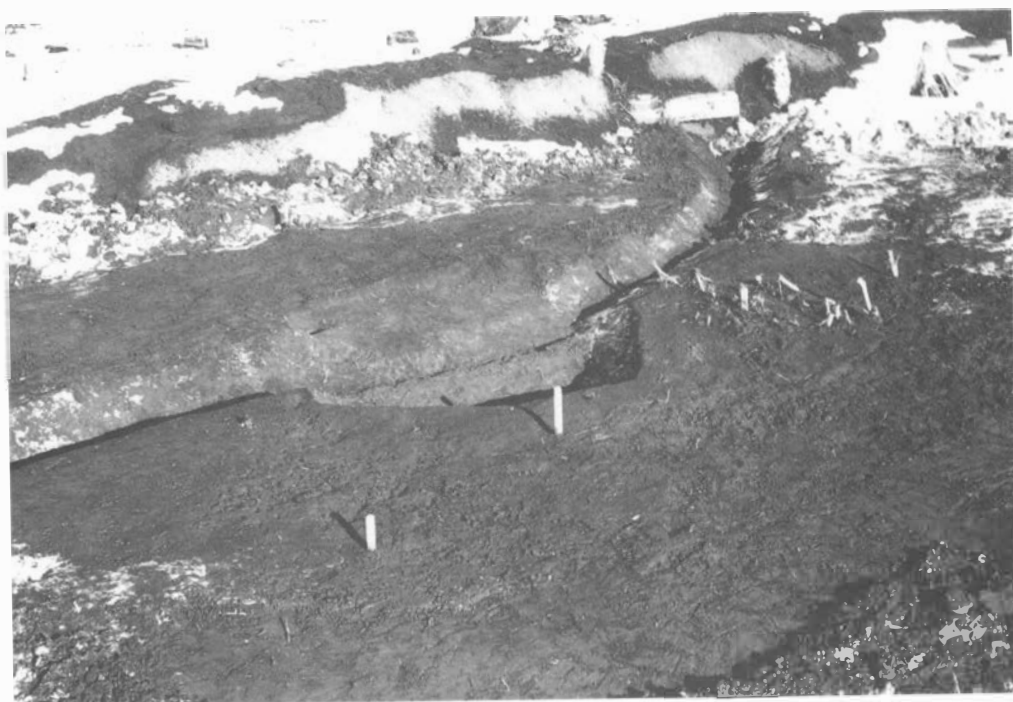


第117号住居跡全景

A地点



1. 第133号住居跡全景

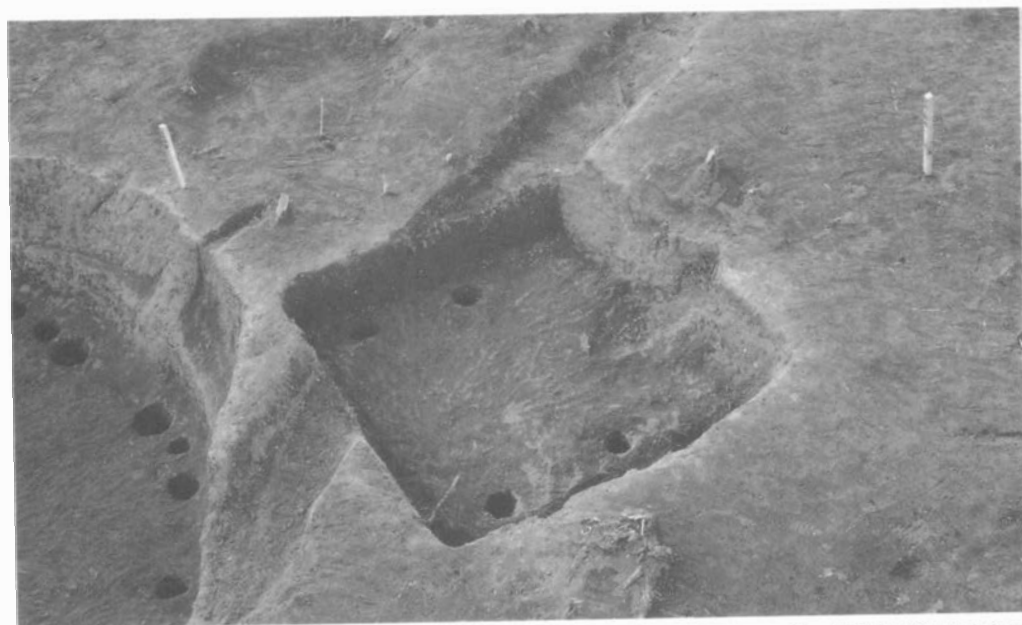


2. 第149号住居跡全景

A地点

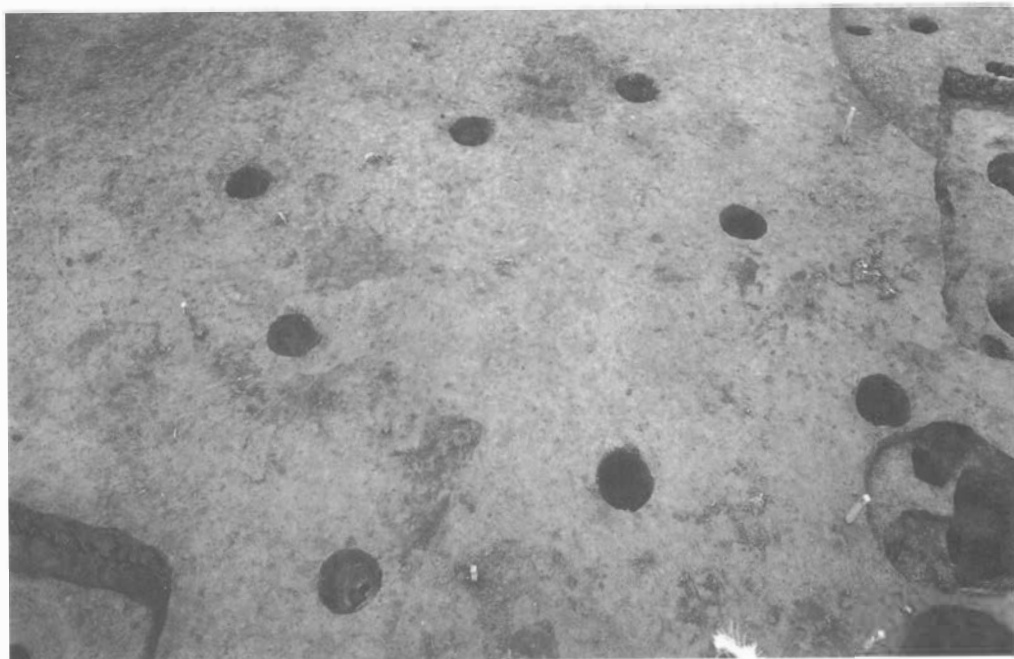


1. 第154~156号住居跡全景

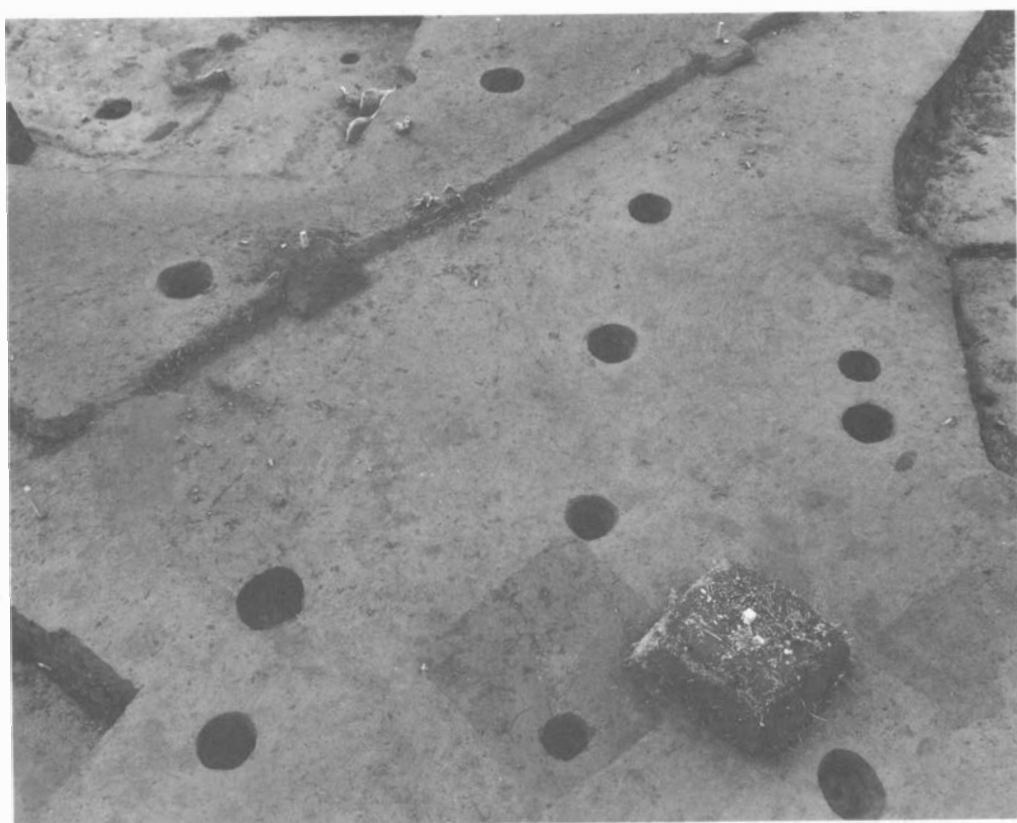


2. 第167号住居跡全景

A地点



1. 第60号掘立柱建物跡全景



2. 第71号掘立柱建物跡全景

A地点

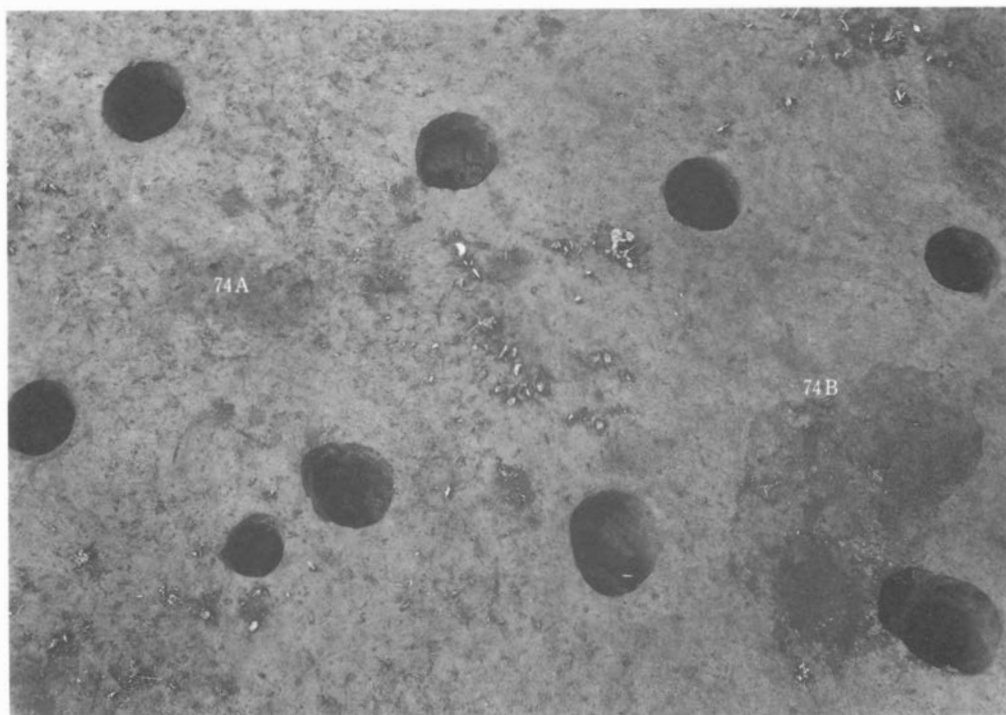


1. 第72号掘立柱建物跡全景

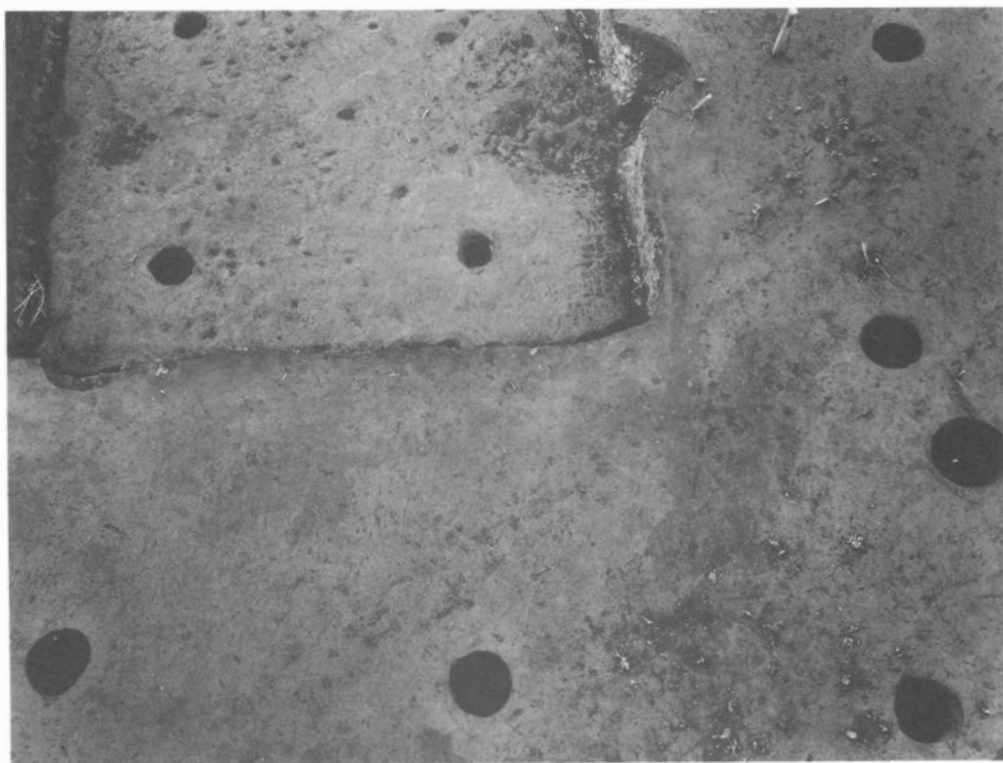


2. 第73号掘立柱建物跡全景

A地点



1. 第74A·B号掘立柱建物跡全景

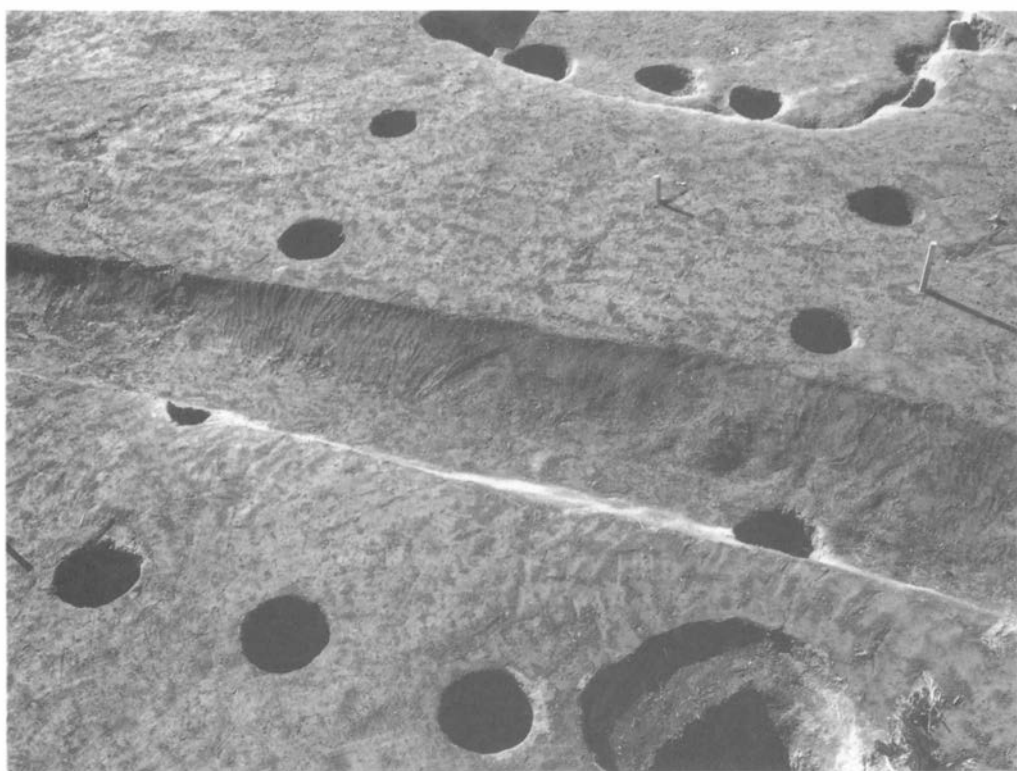


2. 第75号掘立柱建物跡全景

A地点

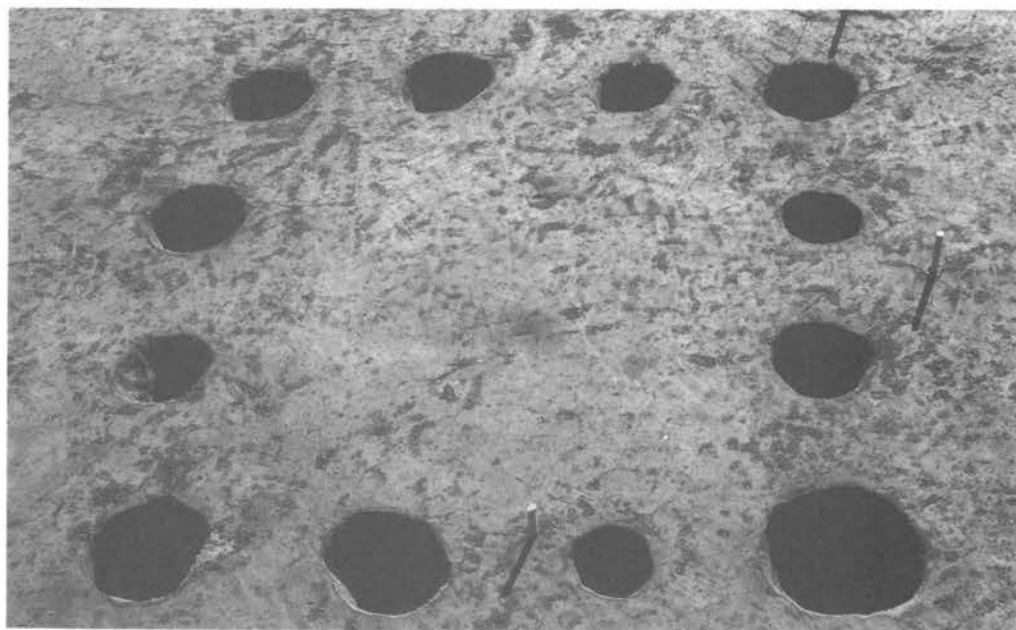


1. 第79, 119, 120, 121号掘立柱建物跡全景

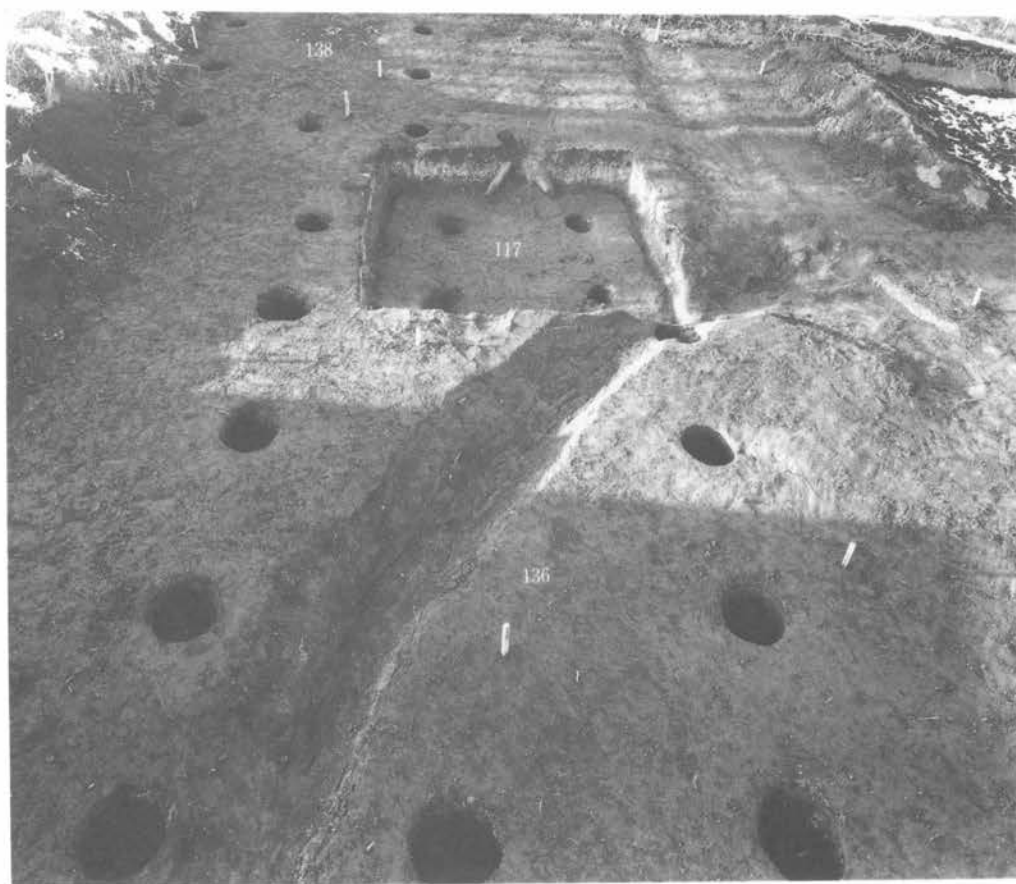


2. 第95号掘立柱建物跡全景

A地点

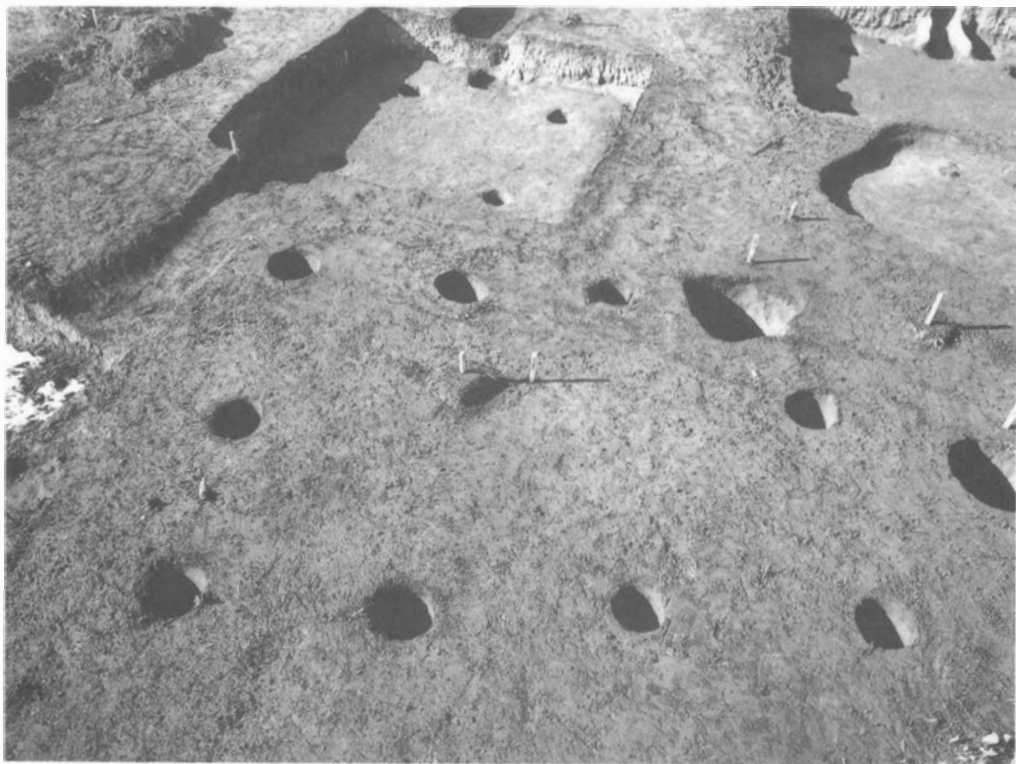


1. 第107号掘立柱建物跡全景

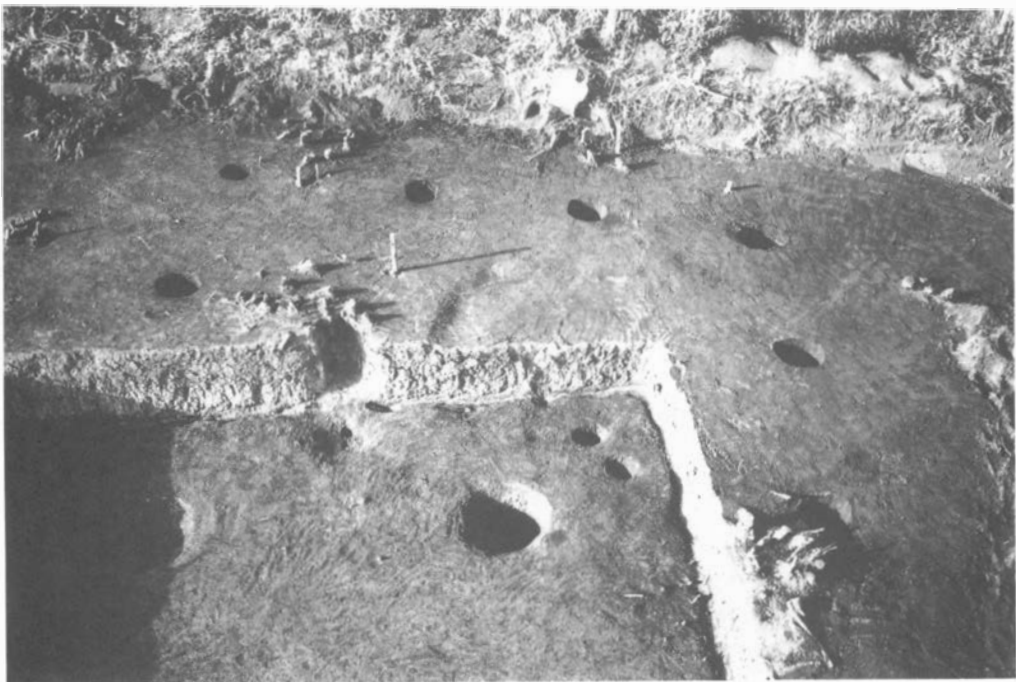


2. 第136, 138号掘立柱建物跡全景

A地点

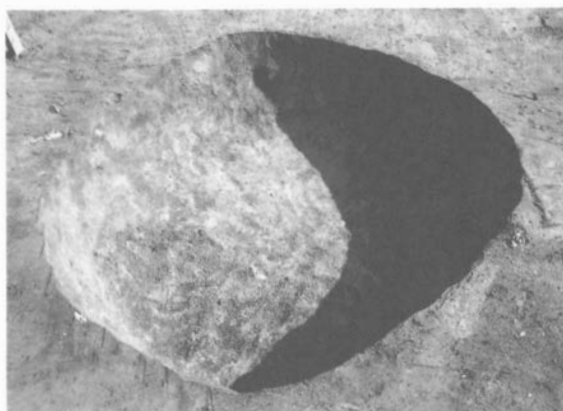


1. 第141号掘立柱建物跡全景



2. 第157号掘立柱建物跡全景

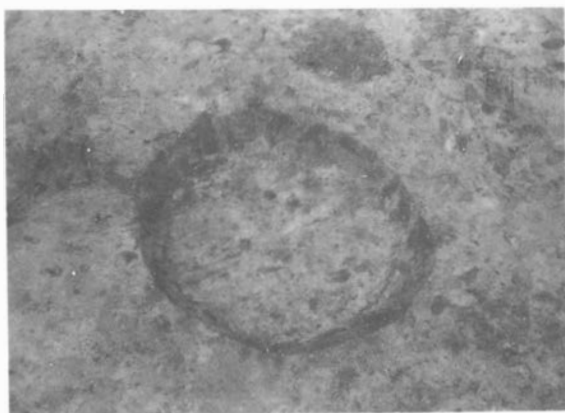
A地点



1. 第64号土坛全景



2. 第65号土坛全景



3. 第66号土坛全景

A地点



12-1



12-2



12-3



12-4



12-5



12-7



12-8



12-9



12-10



12-12



12-13



12-14



12-15

第12号住居跡出土土器

A地点



22A-1



22A-3



22A-4



22A-5



22A-6



22A-7



22A-11



22A-14



22A-13

第22A号住居跡出土土器

A地点



23-1



23-2



23-3



23-4



23-5



23-9



23-7



23-10



23-11

第23号住居跡出土土器

A地点



26-1



26-2



26-3



26-4



26-7



26-5



26-6

第26号住居跡出土土器

A地点



27-1



27-2



27-3



27-4



27-5



27-6



27-7



27-8



27-9



27-10



27-11

A地点



A地点



A地点



38-1



38-2



38-3



38-5



38-6



38-7



38-8



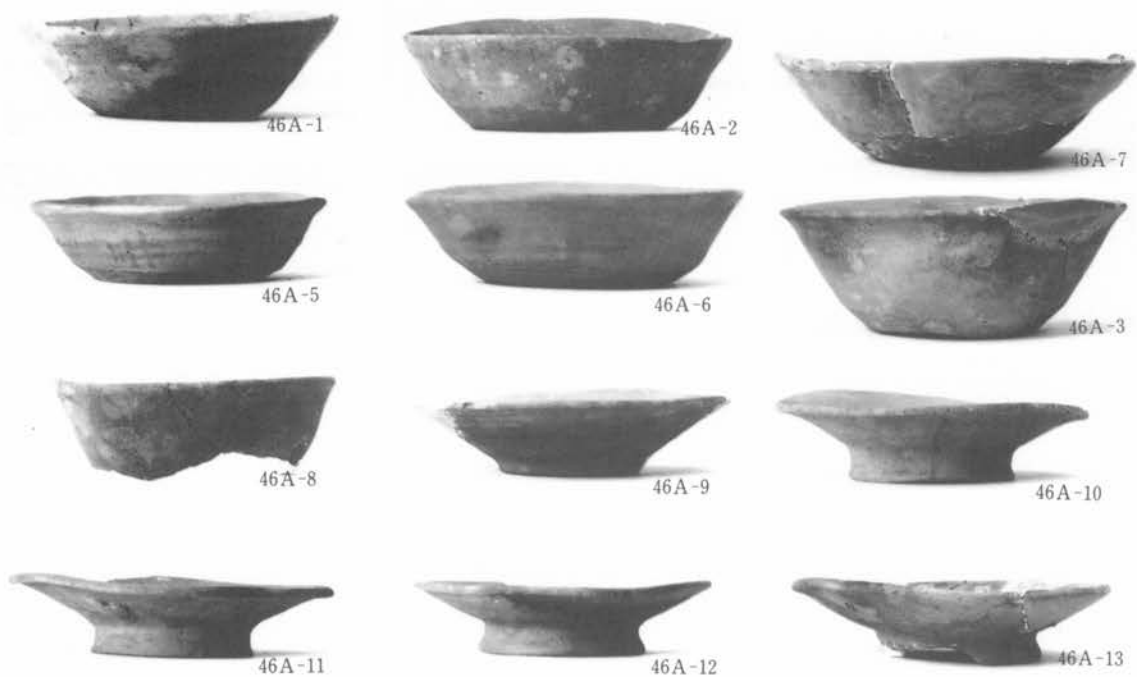
38-12



38-9



38-11



A地点



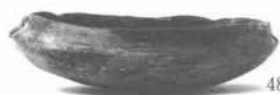
48-1



48-2



48-3



48-4



48-5



48-6



48-7



48-8



48-9



48-10

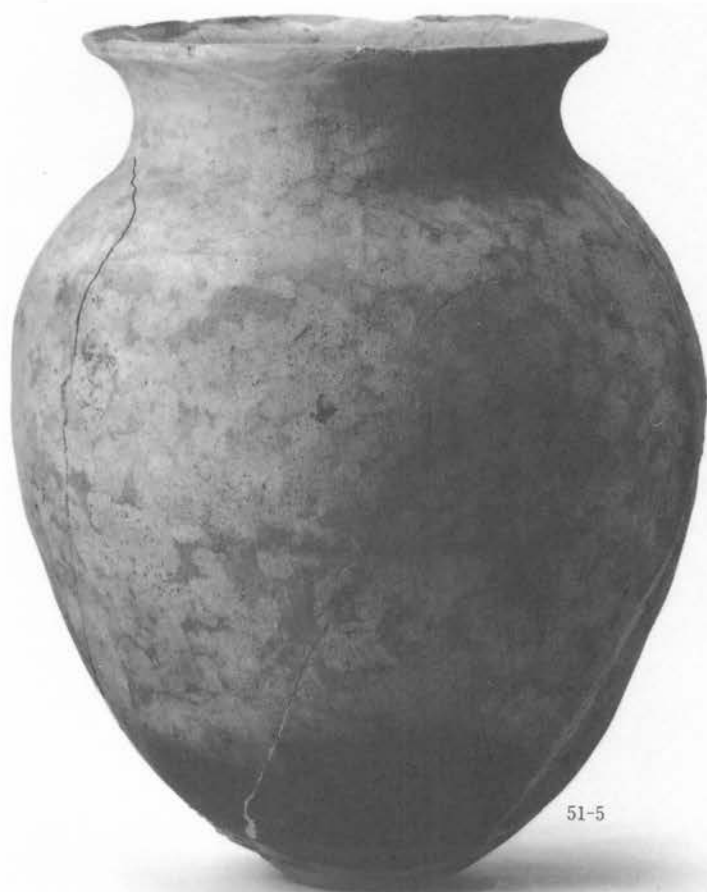


48-12

A地点



A地点





84-1



84-2



84-3



84-4



85-1



85-2



85-3



88-1



88-2



88-3



88-4



88-5



89-1



89-2



89-3



89-4

第84、85、88、89号住居跡出土土器

A地点



93-1



93-2



93-4



93-3



93-5



93-7

A地点



93-6



93-8

A地点



100-1



100-2



100-3



100-4



100-5



103-1



103-2



103-3



103-5



103-6



104-1



104-2



104-5



110-1



110-2



111-1



111-2



111-3



111-4



111-5

A地点



115-1



115-2



115-3



115-11



115-16



115-17



115-19



115-22



115-23



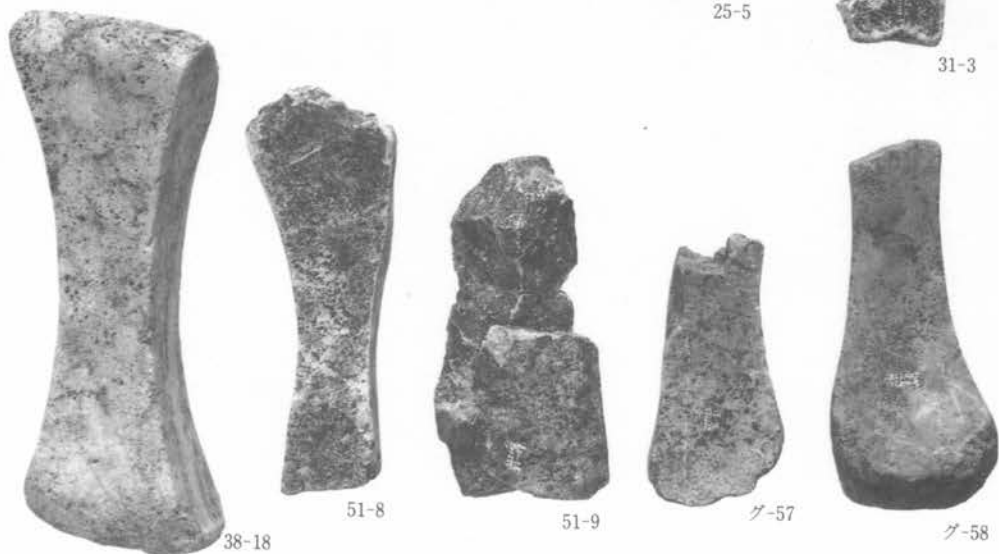
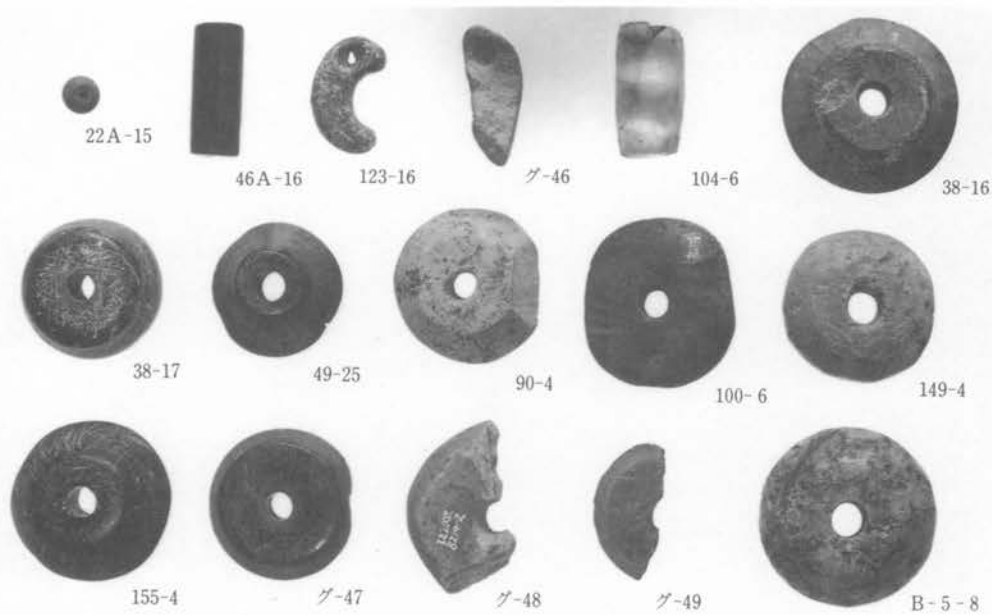
115-26



115-27

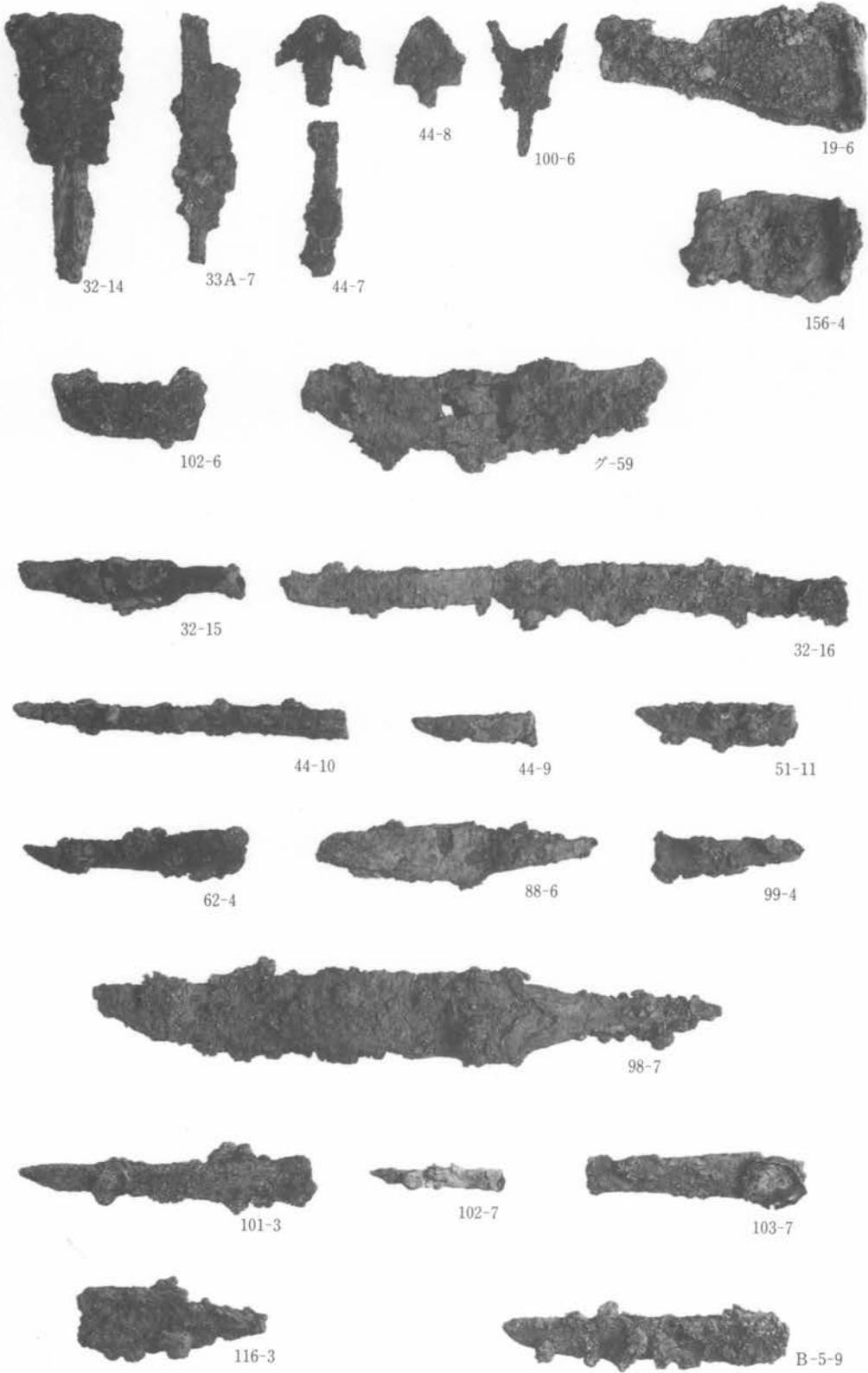
第115号住居跡出土土器

A地点



石製品

A・B地点



鉄製品

B地点



1. 調査区近景（北から）

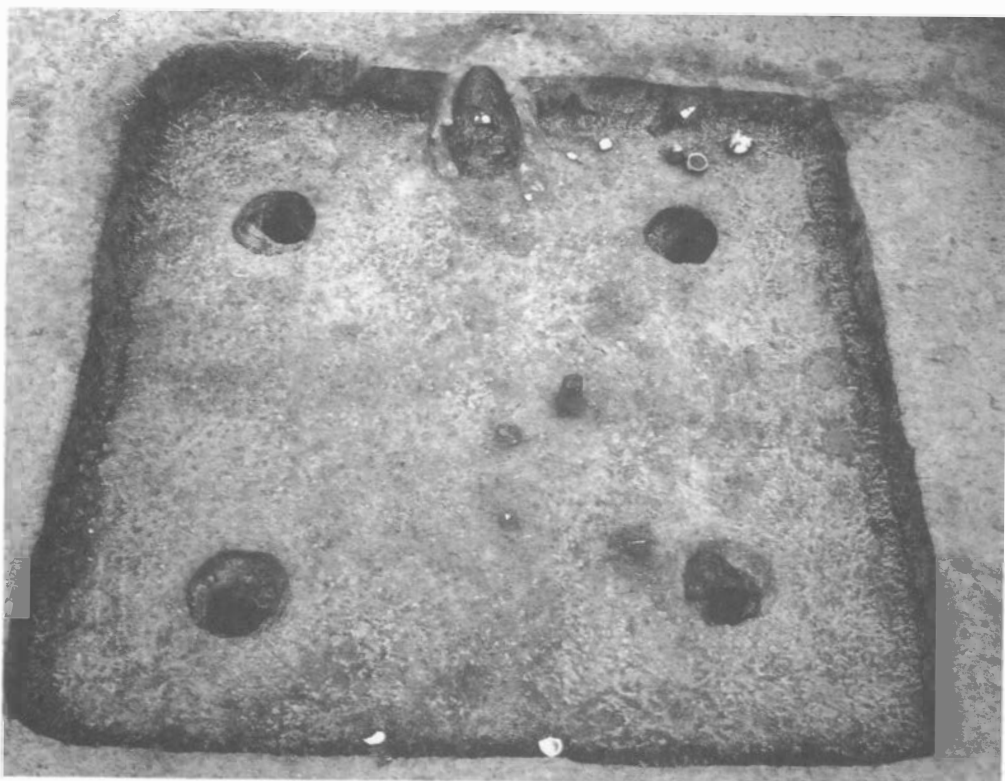


2. 同上（南から）

B地点

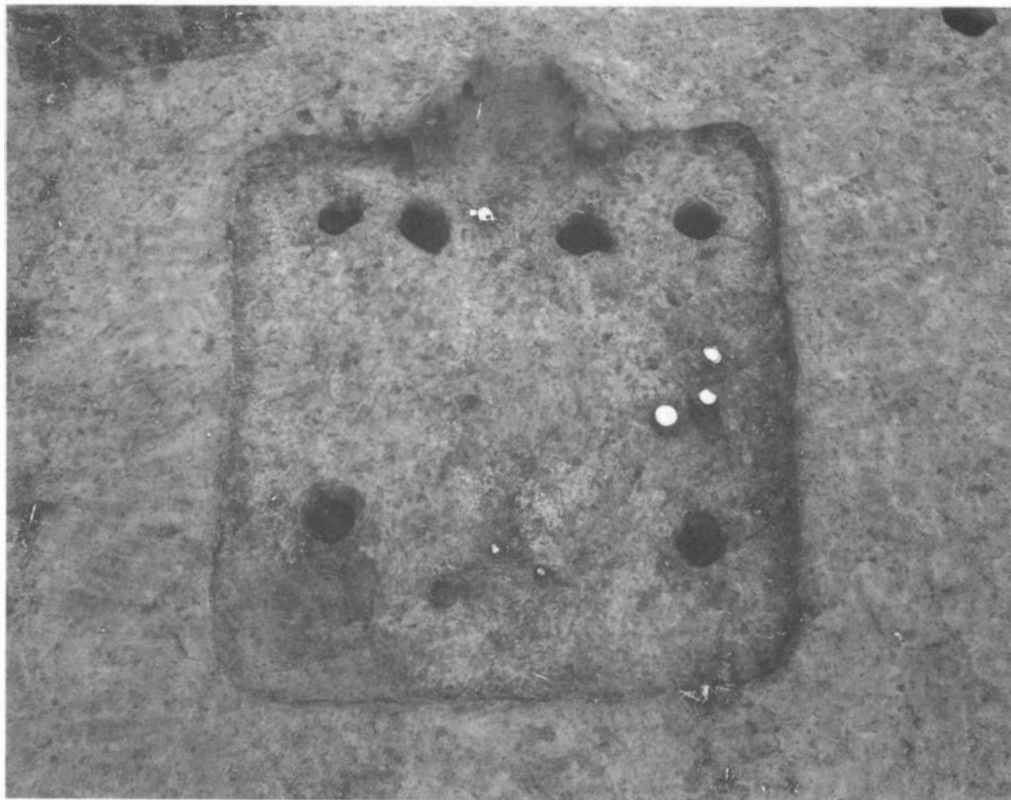


1. 第4号住居迹全景

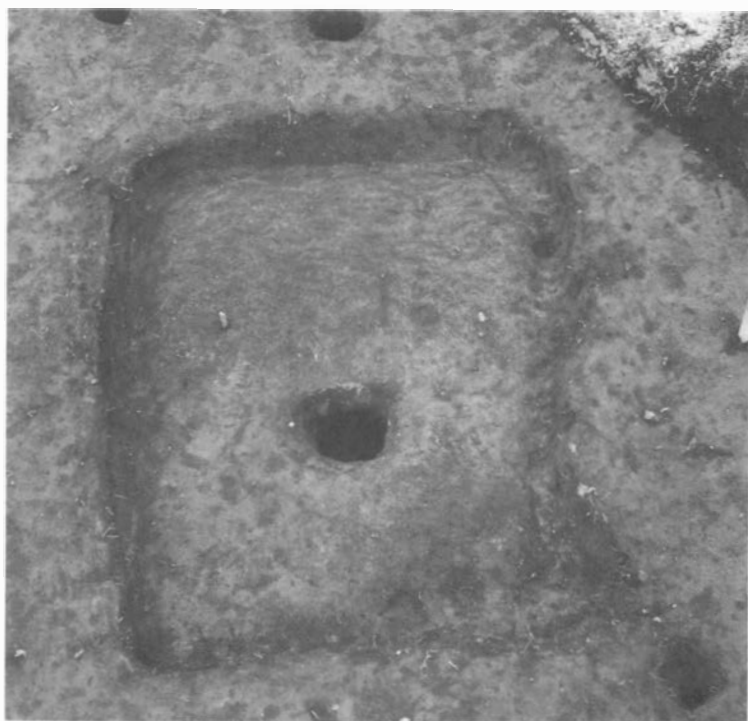


2. 第5号住居迹全景

B地点

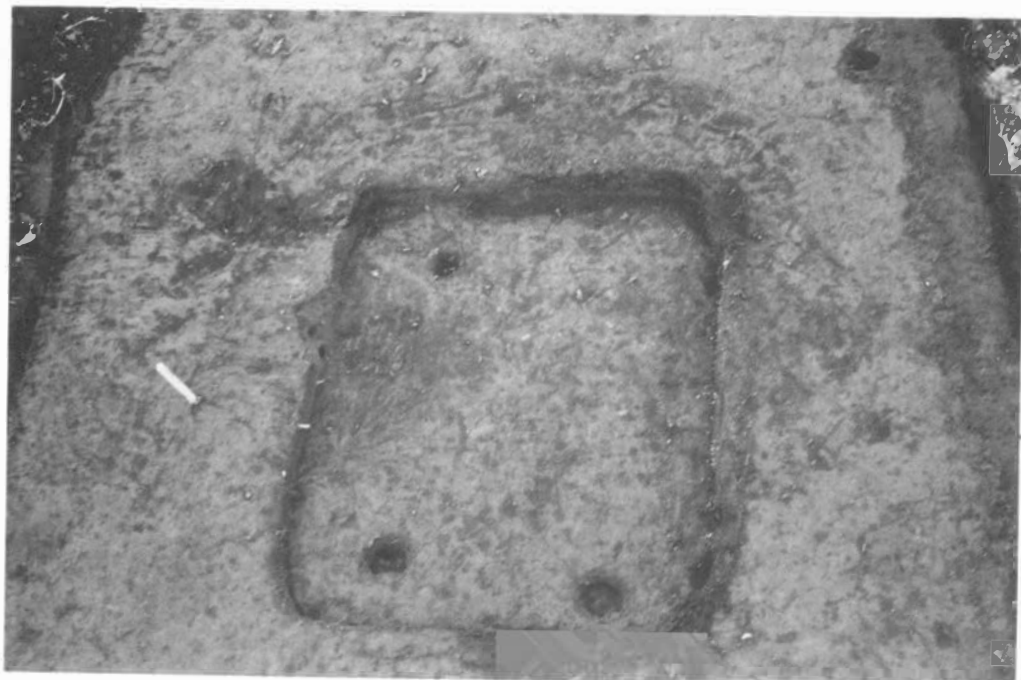


1. 第6号住居跡全景

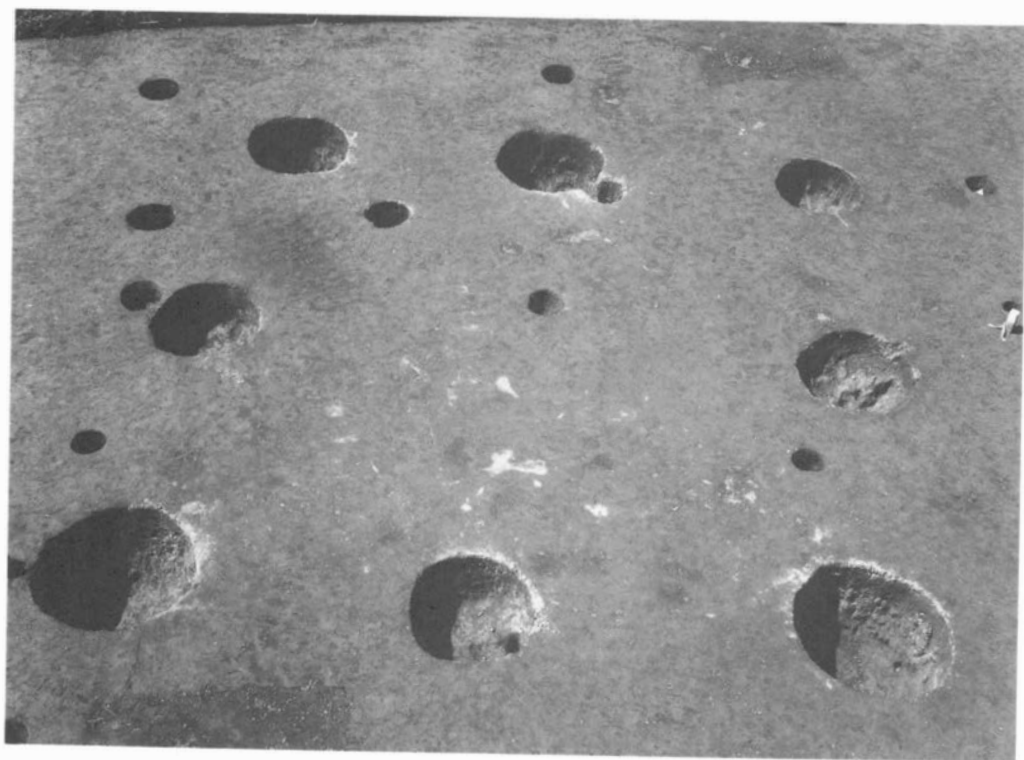


2. 第7号住居跡全景

B地点

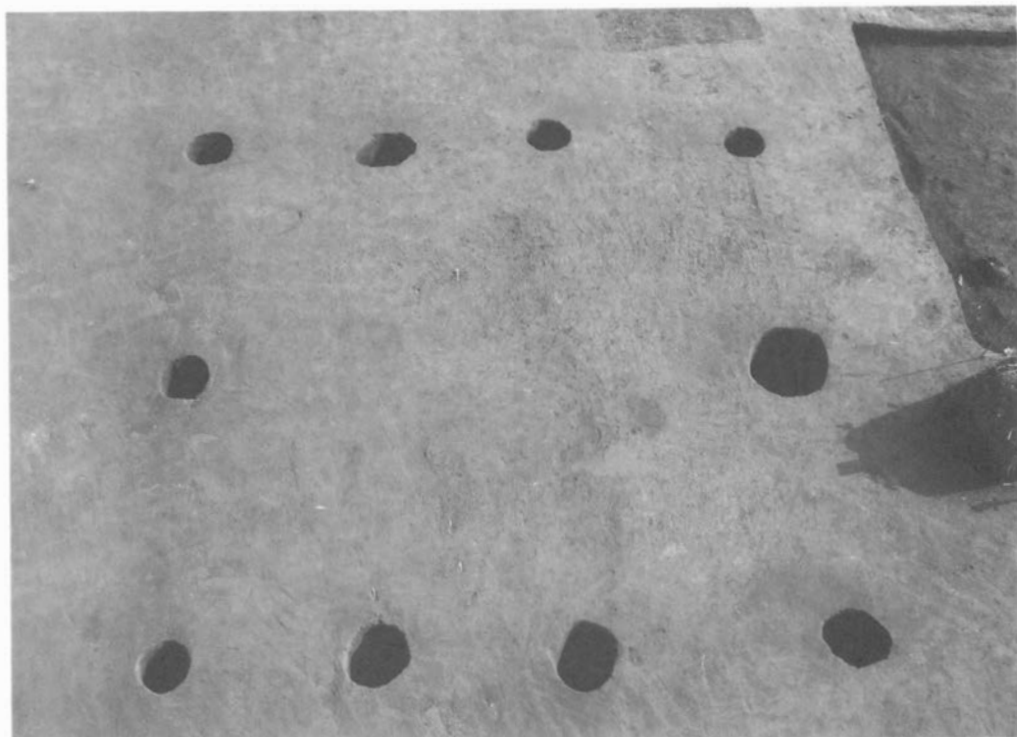


1. 第8号住居迹全景

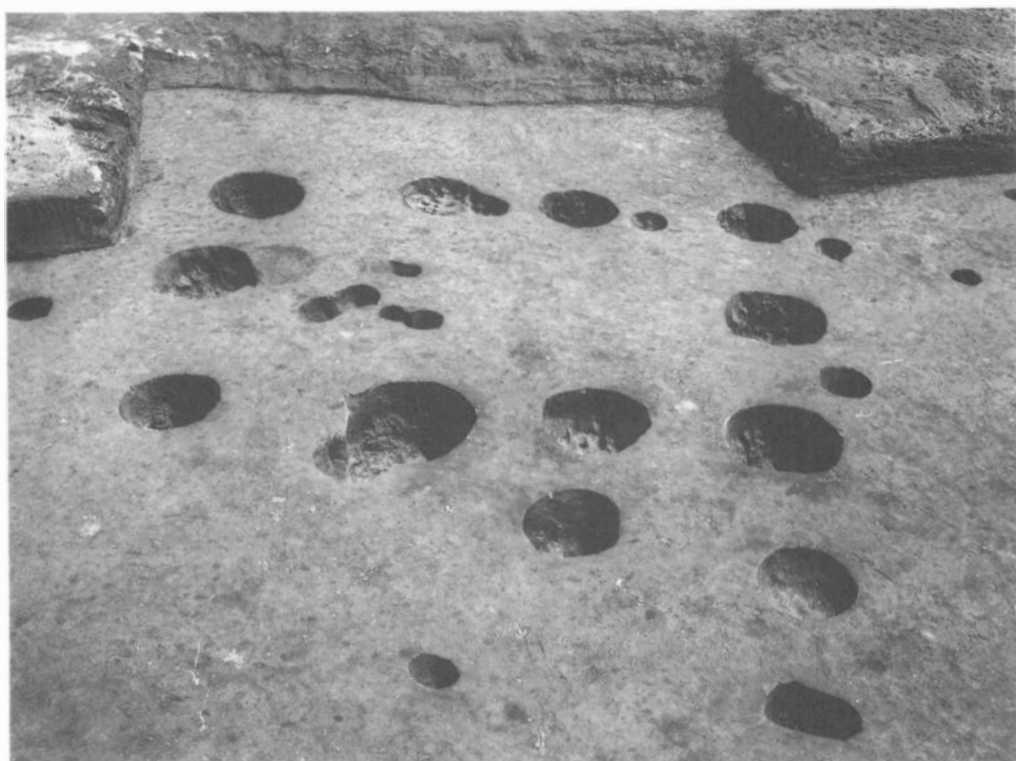


2. 第9, 10号掘立柱建物迹全景

B地点



1. 第11号掘立柱建物跡全景



2. 第12, 13号掘立柱建物跡全景

B地点



1. ピット群A全景



2. 調査風景

B地点



1. 西側拡張区 (東から)



2. 東側拡張区 (西から)

B地点



4-1



4-2



4-3



4-4



5-1



5-2



5-3



5-4



5-6



6-1



6-6



6-2



6-3



6-4



C地点



1. 第1号住居迹全景



2. 第2 A·B号住居迹全景

C 地点



1. 馬土手全景



2. 第3号住居跡全景

C地点



1-1



1-2



2A-1



2A-5



2B-1



2B-3



2B-4



3-3

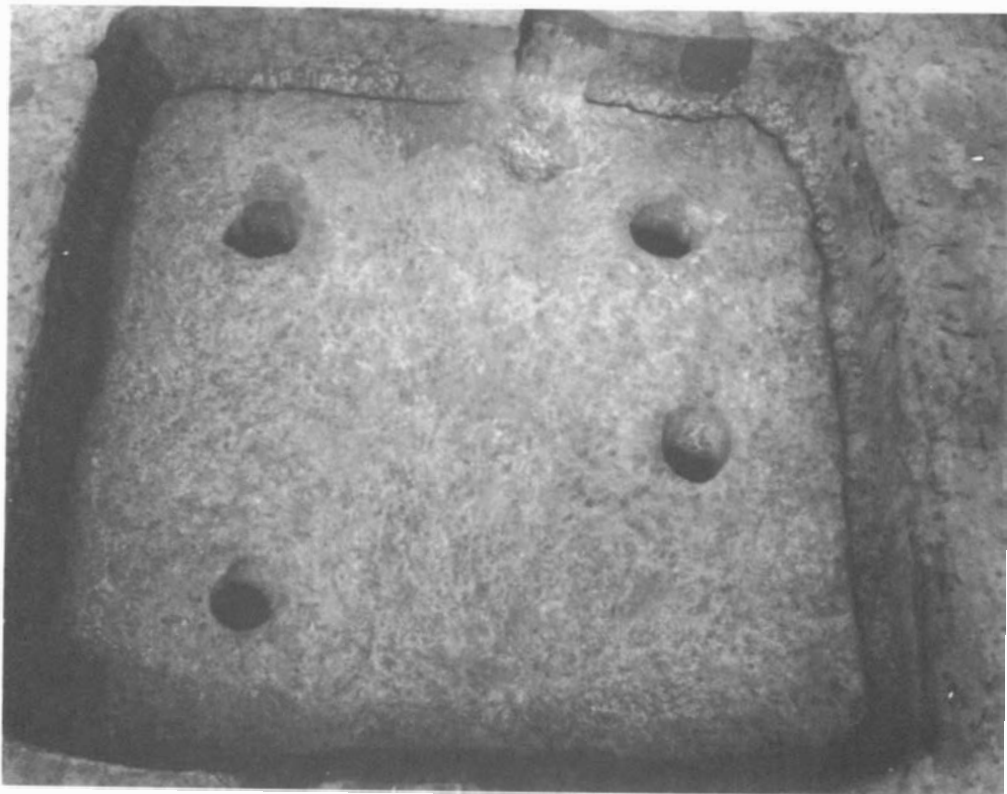
第1、2A·B、3号住居跡出土土器

D地点



遺跡全景

D地点



1. 第1号住居迹全景

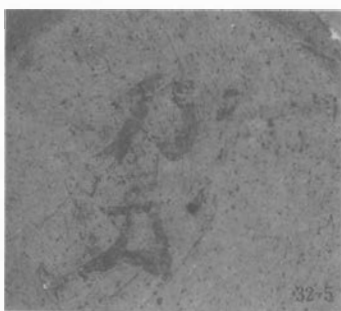


2. 第2号住居迹全景

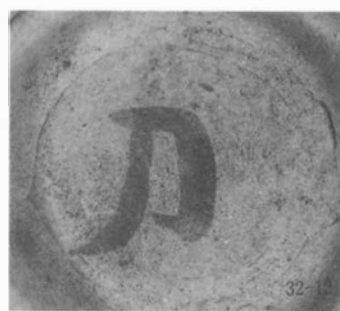
A地点



32-2



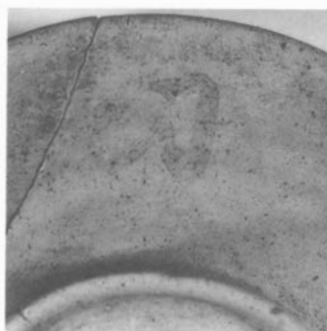
32-5



32-11



46A-11



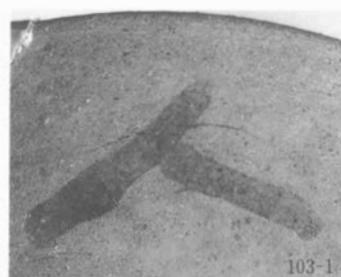
92-11



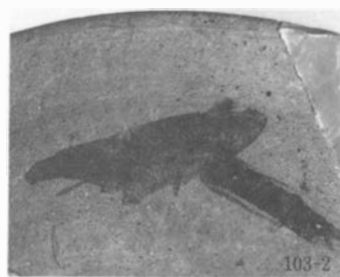
45-3



46A-12



103-1



103-2



104-1



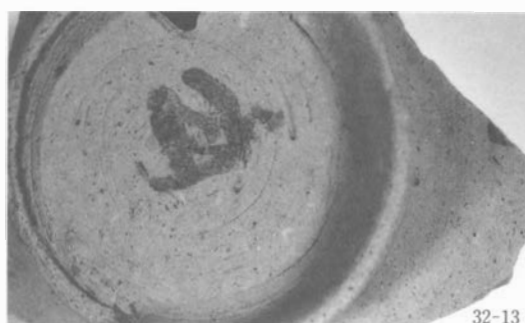
104-2



24-7



32-7



32-13

A地点出土墨書土器

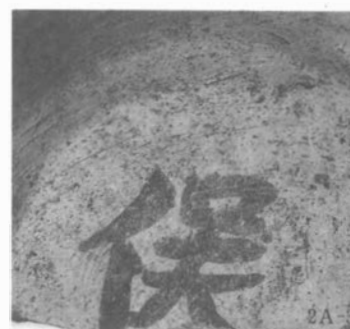
A地点

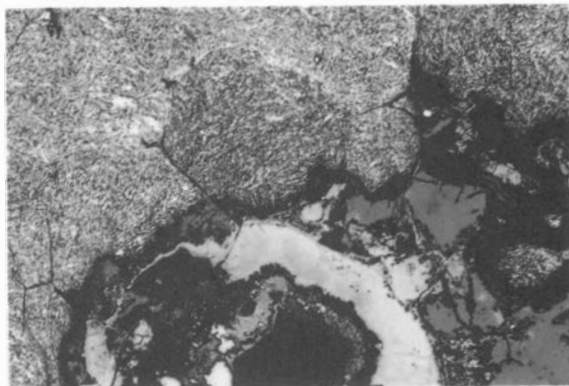


B地点

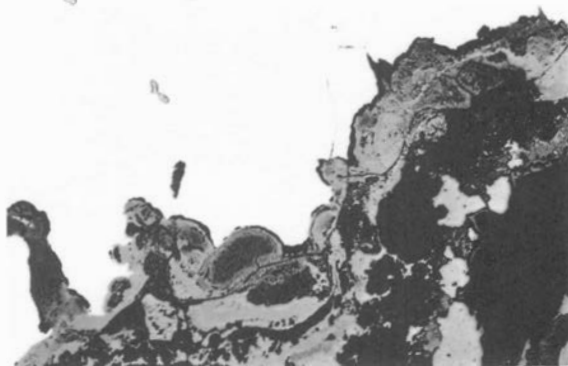


C地点

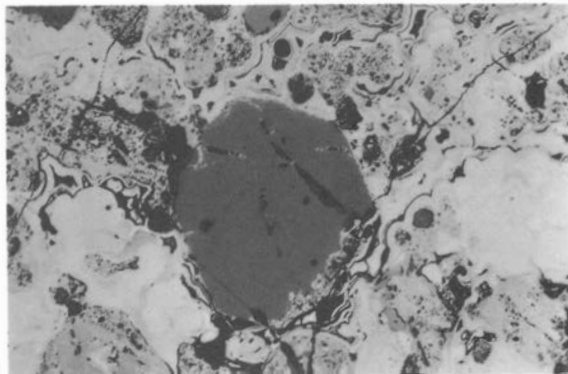




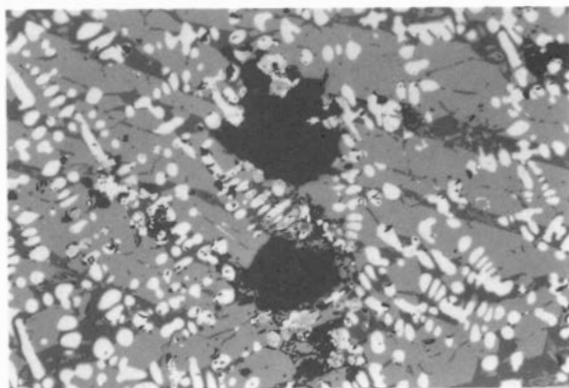
44-30 (エッチング)



44-30 (研磨のみ)

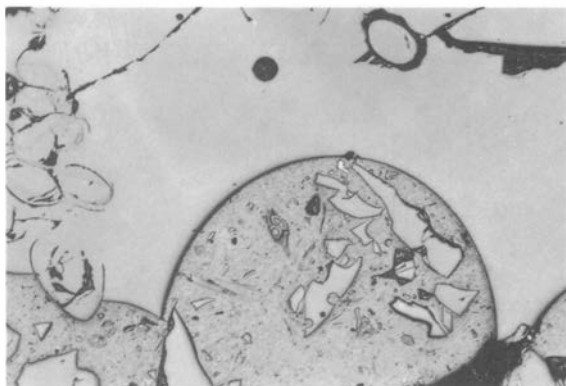


51-2 (研磨のみ)

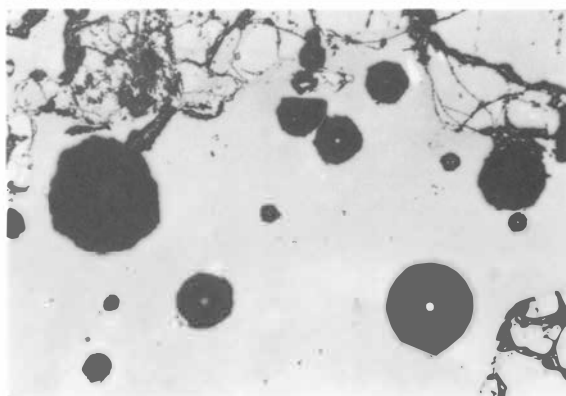


104-1 (研磨のみ)

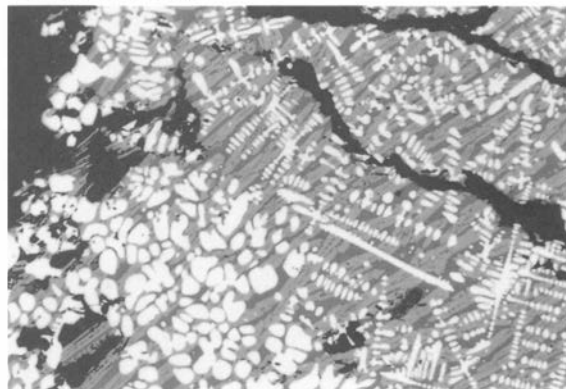
(倍率×100)



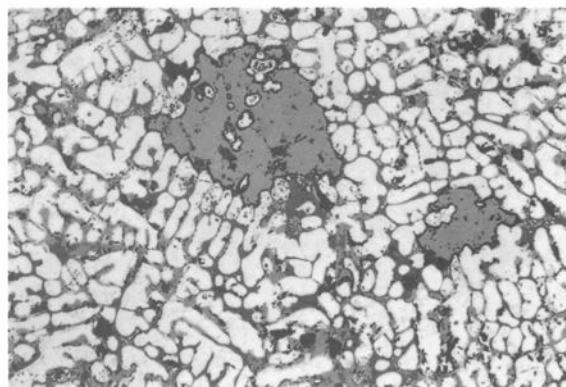
1 A58 (研摩のみ)



1 A90 (研摩のみ)



2 B35 (研摩のみ)



2 B46 (研摩のみ)

(倍率×100)

酒々井町伊篠白幡遺跡正誤表

頁	行	誤	正
例言	30	昭和59年度	昭和60年度
7	1	昭和59年度	昭和58年度
25	17	第10図	第8図
35	1	類以	類似
40	11	疑以的	疑似的
40	12	堀之内 I 式	堀之内 I 式
41	11	類以	類似
107	8	してゐてる。	している。
114	6	L R 単位縄文	L R 単節縄文
133	1	施されいわゆる	施されたいわゆる
168	15	加えらる。	加えられる。
254	表	グー1211	グー121
538	表	116-2 重量 g	重量20.0 g
582	6	桁行に梁行に	桁行と梁行が
630	表	グー9 「不明」	不明
651	15	遺構を遺物	遺構と遺物
676	26	観際	観察
679	10	観際	観察
695	表	C地点 112A住	112住
712	10	看守	看取
717	11	壺、甗等がある。	甗等がある。
717	19	高台坏	高台付坏
719	10	本遺構では	本遺跡では